

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡 十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡

-渋川市・北群馬郡吉岡町の調査-

一般国道 17 号（前橋渋川バイパス）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集

2011年2月

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡周辺遠景（南から）



万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居出土遺物集合

序

一般国道17号は、関東と北陸を結ぶ大動脈であり、本県においては県北部と南部を結ぶ地域の主要道路であります。前橋渋川バイパスは、前橋市と渋川市における交通渋滞解消と県中央部の道路ネットワーク強化を目的として、前橋市田口町から渋川市半田に至る延長5.7kmが計画されました。

前橋渋川バイパスの埋蔵文化財調査は、一般国道17号（前橋渋川バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成15年10月に国土交通省関東地方整備局長・群馬県教育委員会教育長・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者で協定書を締結し、平成15年度から平成19年度までの5カ年にわたり渋川市半田および北群馬郡吉岡町漆原地内の発掘調査が行われました。平成18年度から整理事業を開始し、阿久津遺跡、万蔵寺廻り遺跡、桑原田遺跡、十二廻り遺跡、中町遺跡、半田常法院遺跡の6遺跡について、本報告書にその成果をまとめることができました。

阿久津遺跡、桑原田遺跡、十二廻り遺跡、中町遺跡、半田常法院遺跡では、天明三（1783）年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した水田や畠、水路などが調査され、当時の被害状況が明らかになりました。また、万蔵寺廻り遺跡では平安時代の集落が調査され、竪穴住居から出土例の少ない糸の発見がありました。今回の報告では、これら地域の歴史解明に貴重な資料となる遺構・遺物を報告させていただきます。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会、吉岡町教育委員会、地元関係者の皆様には、格別の御尽力を賜りました。銘記して心から感謝申し上げます。本報告書が基本的な歴史資料として広く活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成23年 2月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 栄 一

例言

1. 本報告書は、一般国道17号（前橋渋川バイパス）改築工事に伴って発掘調査を行った阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡の発掘調査報告である。
2. 遺跡の所在地は以下のとおりである。

阿久津遺跡

北群馬郡吉岡町大字漆原1995、1999-2、1999-4、2008、2011-1、2012、2021、2022、2023、2024、2025、2027、2028-1、2028-2、2028-3、2029、2036、2037、2038、2039、2040、2041、2055、2058、2059、2063、2064

万蔵寺廻り遺跡

北群馬郡吉岡町大字漆原2013-1、2013-2、2016、2019、2020、1925、1926、411、412、413-1、400-1、400-2、404、405、399

桑原田遺跡

北群馬郡吉岡町大字漆原2072-1、2072-2、2073、2074、2084、2085-2、2086、2089-1、2089-2、2089-3、2092、2113、2114、2130、2131、2132、2133、2135、2144、2145、2156、2157、2158-1

十二廻り遺跡

北群馬郡吉岡町大字漆原298-1、298-4、298-6、298-7、299-1、299-3、299-4、301、295-1

中町遺跡

北群馬郡吉岡町大字漆原2180-1、2180-2、2180-3、2181-1、2181-2、2182-2、2189、2190-1、2190-2、2190-3、2190-4、2190-5、2191、2192

半田常法院遺跡

渋川市半田1476-1

3. 事業主体 国土交通省関東地方整備局
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査体制および期間

【平成15年度】

阿久津遺跡・桑原田遺跡・中町遺跡

期 間 平成15年11月1日～平成16年3月31日

調査担当 関俊明（専門員）、原信行（専門員）、渡会未央（調査研究員）、小林正（調査研究員）

【平成16年度】

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡

期 間 平成16年4月1日～平成17年3月31日

調査担当 洞口正史（専門員）、坪川雅彦（専門員）、渡会未央（調査研究員）、藍澤友美（調査研究員）

【平成17年度】

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡

期 間 平成17年4月1日～平成17年10月31日

調査担当 石守晃（専門員）、渡会未央（調査研究員）

【平成18年度】

阿久津遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡

期 間 平成18年4月1日～平成18年6月30日

平成19年2月1日～平成19年3月31日

調査担当 石守晃（専門員（総括））、新井仁（主任調査研究員）、長澤典子（調査研究員）

【平成19年度】

半田常法院遺跡

期 間 平成19年4月1日～平成19年5月15日

調査担当 関晴彦（上席専門員）、新井仁（主任調査研究員）

桑原田遺跡

期 間 平成20年1月1日～平成20年2月29日

調査担当 洞口正史（主任専門員（総括））、宮下寛（主任調査研究員）

6. 整理体制および期間

【平成17年度】（基礎整理）

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡

期 間 平成17年12月1日～平成18年3月31日

整理担当 石守晃（専門員）、渡辺弘幸（専門員）、渡会未央（調査研究員）、藍澤友美（調査研究員）

【平成18年度】

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡

期 間 平成18年4月1日～平成19年3月31日

整理担当 藍澤友美（専門員（主任））

【平成19年度】

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡

期 間 平成19年4月1日～平成20年3月31日

整理担当 洞口正史（主任専門員（総括））

【平成22年度】

阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡

半田常法院遺跡

期 間 平成22年4月1日～平成22年12月31日

整理担当 大西雅広（主席専門員）

7. 本書作成の担当は次のとおりである。

編 集 大西雅広

執 筆 第1章第1節 関晴彦（上席専門員）

第1章第2・3節 洞口正史（主任専門員（総括））、藍澤友美（専門員（主任））、桜岡正信（上席専門員）

第2章 藍澤友美、桜岡正信 第3章 洞口正史、藍澤友美

第4章 洞口正史、藍澤友美、安生泰明（専門嘱託員）、桜岡正信

第7章第1節 安生泰明 第7章第2～4節 石守晃（専門員（主任））

遺物観察 古代 安生泰明、笹沢泰史（主任調査研究員）、中近世 大西雅広

遺構写真撮影 調査担当 関晴彦、洞口正史、石守晃、坪川雅弘、関俊明、原信行、新井仁、渡辺弘幸、

宮下寛、渡会未央、小林正、藍澤友美、長澤典子

木器保存処理 関邦一（補佐）

遺物写真撮影 佐藤元彦（補佐）

8. 報告書の作成に際して、以下の方々に鑑定・同定を依頼した。

石造物等の石材同定 飯島静男氏

骨・歯鑑定 宮崎重雄氏

9. 報告書の作成に際して、以下の分析を委託した。

テフラ・プラントオパール分析 株式会社古環境研究所

花粉・プラントオパール分析 パリノ・サーヴェイ株式会社

炭化材樹種同定・漆器塗膜分析・炭化種実同定 株式会社パレオ・ラボ

炭化糸分析 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

10. 本遺跡の出土遺物および図面・写真等の資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表するしだいである。

国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、吉岡町教育委員会、渋川市教育委員会、高妻洋成（奈良文化財研究所）、三浦京子、大塚昌彦（渋川市教育委員会）

凡例

1. 座標値は平面直角座標系（日本測地系）第IX系による。また挿図中に使用した方位は、方眼北を表しており、真北方位角は $0^{\circ} 28' 29''$ である。

2. 本報告で使用したテフラの記号は以下のとおりである。

As-A:浅間Aテフラ、As-B:浅間Bテフラ、As-kk:浅間粕川テフラ

3. 挿図中の遺構図縮尺は、原則下記のとおりである。この他の縮尺を使用したときは個々に明示した。

竪穴住居、井戸、土坑、ピット:1/60、竪穴住居竈:1/30、掘立柱建物:1/80、水田・畑平面:1/100

4. 挿図中の遺物図の縮尺は原則1/3であるが、大形品については、1/4・1/6、陶磁器の小形品・石器・金属製品・銭貨などの小形品については、1/1・1/2で掲載したものがあつた。原則以外の縮尺を使用した場合は図中に縮尺を示した。

5. 挿図中の遺構名称は、全体図を除いて調査区名称を省略した。

6. 挿図中のスクリーン表示は下記による。

 焼土  炭化物  灰  天明泥流  As-B混  石

 骨片  攪乱  灰釉  植物痕  焼石  硬化面

7. 本報告書で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院 地形図「渋川」(1/25000)、都市計画図「渋川市」(1/5000)、「吉岡町」(1/5000)

8. 写真図版の縮尺は任意である。

9. 遺物観察表の計測値単位はcm、gである。これ以外の単位については、それぞれ単位を記載した。

10. 水田の面積計測は、技研測量設計株式会社に依頼した。畦幅の計測値は、幅は畦の下端から下端までを計測した。ただし、溝の土手を兼ねている畦の幅については、水田側の畦の下端から溝側の畦の上端までを計測した。高さは、畦の両側の水田面から畦頂部までの標高差を算出した。いずれも、最小値と最大値を計測した。

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第1章 調査の経過	1	第6章 科学分析	414
第1節 調査に至る経過	1	第1節 万蔵寺廻り遺跡出土糸の材質分析	414
第2節 調査の経過	1	第2節 桑原田遺跡・万蔵寺廻り遺跡の自然科学分析	418
第3節 整理事業の経過と方法	5	第3節 桑原田遺跡IV区の自然科学分析	428
第2章 調査の方法と基本土層	6	第4節 樹種同定	439
第1節 調査区の設定	6	第5節 漆器の塗膜分析	454
第2節 調査の方法	6	第6節 炭化種実の同定	455
第3節 基本土層	6	第7節 人骨・獣歯骨同定	483
第3章 遺跡地の環境	8	第7章 考察	490
第1節 地理的環境	8	第1節 万蔵寺廻り遺跡出土土器の編年的位置づけ	490
第2節 歴史的環境	8	第2節 阿久津遺跡I区に見られる利根川の堤防について	500
第4章 遺構と遺物	14	第3節 阿久津遺跡VI区の土坑群について	502
第1節 古代・中世の遺構と遺物	14	第4節 天明三年以前の耕作について	503
第1項 概要	14	写真図版	
第2項 阿久津遺跡	18	抄録	
第3項 万蔵寺廻り遺跡	20		
第4項 十二廻り遺跡	161		
第2節 近世の遺構と遺物	170		
第1項 天明泥流下の遺構	170		
第2項 阿久津遺跡	171		
第3項 万蔵寺廻り遺跡	225		
第4項 桑原田遺跡	229		
第5項 中町遺跡	309		
第6項 半田常法院遺跡	349		
第3節 出土遺物	362		
第5章 遺物観察表	387		

挿図目次

第1図	前橋洪川バイパスと吉岡地区の遺跡……………2	第62図	万蔵寺廻り遺跡	IV区2号住居竈……………50
第2図	前橋洪川バイパスと吉岡地区の遺跡と調査区……………4	第63図	万蔵寺廻り遺跡	IV区2号住居竈掘り方……………50
第3図	遺跡内基本土層模式図……………7	第64図	万蔵寺廻り遺跡	IV区3号住居……………51
第4図	遺跡の位置と地形……………9	第65図	万蔵寺廻り遺跡	IV区3号住居竈……………52
第5図	吉岡町の地形面区分図……………9	第66図	万蔵寺廻り遺跡	IV区3号住居出土遺物……………52
第6図	周辺の主要遺跡……………13	第67図	万蔵寺廻り遺跡	IV区3号住居掘り方……………53
第7図	古代・中世遺構分布図……………15・16	第68図	万蔵寺廻り遺跡	IV区3号住居竈掘り方……………53
第8図	竪穴住居の時期別分布図……………17	第69図	万蔵寺廻り遺跡	IV区4号住居覆土中の礫分布……………54
第9図	阿久津遺跡 I区1号住居……………18	第70図	万蔵寺廻り遺跡	IV区4号住居……………54
第10図	阿久津遺跡 I区1号住居竈……………19	第71図	万蔵寺廻り遺跡	IV区4号住居掘り方……………55
第11図	阿久津遺跡 I区1号住居出土遺物……………19	第72図	万蔵寺廻り遺跡	IV区4号住居竈・同掘り方……………55
第12図	阿久津遺跡 I区土坑……………19	第73図	万蔵寺廻り遺跡	IV区4号住居出土遺物……………56
第13図	阿久津遺跡 III区遺構外出土遺物……………19	第74図	万蔵寺廻り遺跡	IV区5号住居……………57
第14図	万蔵寺廻り遺跡 I区1号住居……………20	第75図	万蔵寺廻り遺跡	IV区5号住居竈……………57
第15図	万蔵寺廻り遺跡 I区1号住居竈……………20	第76図	万蔵寺廻り遺跡	IV区6号住居・出土遺物……………58
第16図	万蔵寺廻り遺跡 I区1号住居出土遺物……………20	第77図	万蔵寺廻り遺跡	IV区6号住居竈・同掘り方……………59
第17図	万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居・出土遺物(1)……………21	第78図	万蔵寺廻り遺跡	IV区7号住居・出土遺物(1)……………60
第18図	万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居掘り方・ピット・土坑……………22	第79図	万蔵寺廻り遺跡	IV区7号住居掘り方・ 出土遺物(2)……………61
第19図	万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居竈……………22	第80図	万蔵寺廻り遺跡	IV区7号住居竈・同掘り方……………62
第20図	万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居竈掘り方・ 出土遺物(2)……………23	第81図	万蔵寺廻り遺跡	IV区8号住居……………63
第21図	万蔵寺廻り遺跡 II区2～5号住居……………25	第82図	万蔵寺廻り遺跡	IV区8号住居竈・同掘り方……………63
第22図	万蔵寺廻り遺跡 II区2～5号住居掘り方……………25	第83図	万蔵寺廻り遺跡	IV区8号住居掘り方・出土遺物……………64
第23図	万蔵寺廻り遺跡 II区2号住居土坑・3号住居竈……………26	第84図	万蔵寺廻り遺跡	IV区9号住居・同掘り方……………65
第24図	万蔵寺廻り遺跡 II区2号住居出土遺物……………27	第85図	万蔵寺廻り遺跡	IV区9号住居竈・同掘り方……………65
第25図	万蔵寺廻り遺跡 II区3号住居出土遺物……………27	第86図	万蔵寺廻り遺跡	IV区9号住居出土遺物……………66
第26図	万蔵寺廻り遺跡 II区6号住居……………28	第87図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居遺物分布……………67
第27図	万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居……………29	第88図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居・同掘り方……………68
第28図	万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居掘り方・ 出土遺物(1)……………29	第89図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居土坑土層断面……………69
第29図	万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居竈……………30	第90図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居竈・同掘り方……………69
第30図	万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居竈掘り方・ 出土遺物(2)……………30	第91図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居出土遺物(1)……………71
第31図	万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居……………31	第92図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居出土遺物(2)……………72
第32図	万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居掘り方……………31	第93図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居出土遺物(3)……………73
第33図	万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居出土遺物……………31	第94図	万蔵寺廻り遺跡	IV区10号住居出土遺物(4)……………74
第34図	万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居竈……………31	第95図	万蔵寺廻り遺跡	IV区11号住居……………75
第35図	万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居……………32	第96図	万蔵寺廻り遺跡	IV区11号住居竈・同掘り方・ 出土遺物(1)……………76
第36図	万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居竈……………33	第97図	万蔵寺廻り遺跡	IV区11号住居出土遺物(2)……………77
第37図	万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居竈掘り方……………33	第98図	万蔵寺廻り遺跡	IV区12号住居・出土遺物……………78
第38図	万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居掘り方……………33	第99図	万蔵寺廻り遺跡	IV区13号住居……………79
第39図	万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居出土遺物……………34	第100図	万蔵寺廻り遺跡	IV区13号住居掘り方……………80
第40図	万蔵寺廻り遺跡 II区10号住居・竈掘り方・出土遺物……………35	第101図	万蔵寺廻り遺跡	IV区13号住居竈・出土遺物(1)……………81
第41図	万蔵寺廻り遺跡 II区11号住居……………35	第102図	万蔵寺廻り遺跡	IV区13号住居竈掘り方・ 出土遺物(2)……………82
第42図	万蔵寺廻り遺跡 II区11号住居内土坑断面図・ 出土遺物……………36	第103図	万蔵寺廻り遺跡	IV区13号住居竈出土遺物(3)……………83
第43図	万蔵寺廻り遺跡 II区12号住居……………36	第104図	万蔵寺廻り遺跡	IV区14号住居・同掘り方……………84
第44図	万蔵寺廻り遺跡 II区12号住居掘り方・竈……………37	第105図	万蔵寺廻り遺跡	IV区14号住居竈・同掘り方……………84
第45図	万蔵寺廻り遺跡 III区1号住居……………38	第106図	万蔵寺廻り遺跡	IV区14号住居出土遺物……………85
第46図	万蔵寺廻り遺跡 III区1号住居竈……………38	第107図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号住居……………86
第47図	万蔵寺廻り遺跡 III区1号住居掘り方・竈掘り方……………39	第108図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号住居竈掘り方……………86
第48図	万蔵寺廻り遺跡 III区1号住居出土遺物(1)……………39	第109図	万蔵寺廻り遺跡	V区2号住居・同掘り方……………87
第49図	万蔵寺廻り遺跡 III区1号住居出土遺物(2)……………40	第110図	万蔵寺廻り遺跡	V区2号住居竈・同掘り方・ 出土遺物……………88
第50図	万蔵寺廻り遺跡 III区2号住居……………41	第111図	万蔵寺廻り遺跡	V区3号住居……………89
第51図	万蔵寺廻り遺跡 III区2号住居竈遺物出土状況詳細……………41	第112図	万蔵寺廻り遺跡	V区3号住居掘り方……………90
第52図	万蔵寺廻り遺跡 III区2号住居竈……………41	第113図	万蔵寺廻り遺跡	V区3号住居竈・同掘り方・ 出土遺物(1)……………91
第53図	万蔵寺廻り遺跡 III区2号住居竈掘り方・出土遺物……………42	第114図	万蔵寺廻り遺跡	V区3号住居出土遺物(2)……………92
第54図	万蔵寺廻り遺跡 III区3号住居・同掘り方……………43	第115図	万蔵寺廻り遺跡	V区4号住居……………93
第55図	万蔵寺廻り遺跡 III区3号住居竈掘り方・出土遺物……………44	第116図	万蔵寺廻り遺跡	V区4号住居出土遺物……………93
第56図	万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居……………45	第117図	万蔵寺廻り遺跡	V区4号住居竈……………94
第57図	万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居掘り方……………46	第118図	万蔵寺廻り遺跡	V区5号住居・同掘り方……………95
第58図	万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居竈・同掘り方……………46	第119図	万蔵寺廻り遺跡	V区5号住居竈・同掘り方……………96
第59図	万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居出土遺物……………47	第120図	万蔵寺廻り遺跡	V区5号住居遺物分布・ 出土遺物(1)……………97
第60図	万蔵寺廻り遺跡 IV区2号住居……………48	第121図	万蔵寺廻り遺跡	V区5号住居出土遺物(2)……………98
第61図	万蔵寺廻り遺跡 IV区2号住居掘り方・遺物分布・ 出土遺物……………49	第122図	万蔵寺廻り遺跡	V区6号住居・礫の分布・竈……………99
		第123図	万蔵寺廻り遺跡	V区6号住居竈掘り方・ 出土遺物……………100

第124図	万蔵寺廻り遺跡	V区7号住居	101	第179図	十二廻り遺跡	I区1号井戸	166
第125図	万蔵寺廻り遺跡	V区7号住居掘り方・出土遺物	102	第180図	十二廻り遺跡	I区2・3号井戸、 2号井戸出土遺物	167
第126図	万蔵寺廻り遺跡	V区8号住居	103	第181図	十二廻り遺跡	I区1号谷	168
第127図	万蔵寺廻り遺跡	V区8号住居掘り方・出土遺物	104	第182図	十二廻り遺跡	I区2号谷	169
第128図	万蔵寺廻り遺跡	V区8号住居竈・同掘り方	105	第183図	近世遺構調査区概念図		170
第129図	万蔵寺廻り遺跡	V区9号住居	106	第184図	阿久津遺跡	I区全体図	172
第130図	万蔵寺廻り遺跡	V区9号住居竈	107	第185図	阿久津遺跡	I区高低図・土層断面図	173
第131図	万蔵寺廻り遺跡	V区10号住居・同掘り方・ 出土遺物(1)	108	第186図	阿久津遺跡	I区詳細図1	174
第132図	万蔵寺廻り遺跡	V区10号住居竈・出土遺物(2)	109	第187図	阿久津遺跡	I区詳細図1 土層断面図・高低図・ 立面図	175
第133図	万蔵寺廻り遺跡	V区11号住居・同掘り方	110	第188図	阿久津遺跡	I区詳細図2	176
第134図	万蔵寺廻り遺跡	V区11号住居竈・同掘り方 ・出土遺物(1)	111	第189図	阿久津遺跡	I区詳細図2 土層断面図・高低図 ・立面図	177
第135図	万蔵寺廻り遺跡	V区11号住居出土遺物(2)	112	第190図	阿久津遺跡	I区詳細図3	178
第136図	万蔵寺廻り遺跡	V区12号住居・同掘り方	113	第191図	阿久津遺跡	I区詳細図3 高低図・立面図	179
第137図	万蔵寺廻り遺跡	V区12号住居竈・同掘り方	114	第192図	阿久津遺跡	III区全体図	183
第138図	万蔵寺廻り遺跡	V区12号住居出土遺物	115	第193図	阿久津遺跡	III区高低図1	184
第139図	万蔵寺廻り遺跡	V区13号住居・同竈	116	第194図	阿久津遺跡	III区土層断面図・高低図2	185
第140図	万蔵寺廻り遺跡	V区13号住居出土遺物	117	第195図	阿久津遺跡	III区詳細図1・2	186
第141図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号掘立柱建物跡・ 重複模式図	118	第196図	阿久津遺跡	III区詳細図3	187
第142図	万蔵寺廻り遺跡	V区2号掘立柱建物跡	119	第197図	阿久津遺跡	III区詳細図4	188
第143図	万蔵寺廻り遺跡	II区土坑(1) 1～8号土坑	122	第198図	阿久津遺跡	IV区全体図	190
第144図	万蔵寺廻り遺跡	II区土坑(2) 9～28号土坑	123	第199図	阿久津遺跡	IV区詳細図1・2	191
第145図	万蔵寺廻り遺跡	II区土坑(3) 29～48号土坑	124	第200図	阿久津遺跡	IV区詳細図3・4	192
第146図	万蔵寺廻り遺跡	II区土坑(4) 49～55号土坑	126	第201図	阿久津遺跡	IV区高低図1・土層断面図1	193
第147図	万蔵寺廻り遺跡	II区54号土坑出土遺物	126	第202図	阿久津遺跡	IV区高低図2	194
第148図	万蔵寺廻り遺跡	III区土坑(1) 1～11号土坑	127	第203図	阿久津遺跡	IV区土層断面図2	195
第149図	万蔵寺廻り遺跡	III区土坑(2) 12～32号土坑	128	第204図	阿久津遺跡	IV区・V区遺構配置模式図	196
第150図	万蔵寺廻り遺跡	III区土坑(3) 33～39号土坑	130	第205図	阿久津遺跡	V区全体図	197
第151図	万蔵寺廻り遺跡	III区土坑(4) 40～48号土坑	131	第206図	阿久津遺跡	V区高低図	198
第152図	万蔵寺廻り遺跡	IV区土坑(1) 1～8号土坑	132	第207図	阿久津遺跡	V区土層断面図	199
第153図	万蔵寺廻り遺跡	IV区土坑(2) 9～24号土坑、 9号土坑出土遺物	133	第208図	阿久津遺跡	V区詳細図1・2	203
第154図	万蔵寺廻り遺跡	IV区土坑(3) 25～41号土坑	135	第209図	阿久津遺跡	V区詳細図3	204
第155図	万蔵寺廻り遺跡	IV区土坑(4) 42～58・ 60号土坑	137	第210図	阿久津遺跡	V区詳細図4～6	205
第156図	万蔵寺廻り遺跡	IV区土坑(5) 59・ 61～79号土坑	139	第211図	阿久津遺跡	VI区全体図 詳細図1・2	207・208
第157図	万蔵寺廻り遺跡	IV区土坑(6) 80号土坑・V区土坑(1) 1～22号土坑	141	第212図	阿久津遺跡	VI区高低図1	209
第158図	万蔵寺廻り遺跡	V区土坑(2) 23～42号土坑、 31号土坑出土遺物	143	第213図	阿久津遺跡	VI区高低図2	210
第159図	万蔵寺廻り遺跡	V区土坑(3) 43～55号土坑、 45・46・52号土坑出土遺物	145	第214図	阿久津遺跡	VI区土層断面図	212
第160図	万蔵寺廻り遺跡	V区土坑(4) 56～60号土坑、 60号土坑出土遺物	146	第215図	阿久津遺跡	VI区高低図3	213
第161図	万蔵寺廻り遺跡	V区土坑(5) 61～69号土坑、 61・65～67・69号土坑出土遺物	147	第216図	阿久津遺跡	VI区詳細図3	215・216
第162図	万蔵寺廻り遺跡	V区土坑(6) 70～89号土坑、 83号土坑出土遺物	149	第217図	阿久津遺跡	VI区詳細図3 土層断面図・高低図	217
第163図	万蔵寺廻り遺跡	V区ピット(1) 1～25号ピット	150	第218図	阿久津遺跡	VI区詳細図3 部分図①	218
第164図	万蔵寺廻り遺跡	V区ピット(2) 26～37号ピット	153	第219図	阿久津遺跡	VI区詳細図4・5	222
第165図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号竪穴状遺構	153	第220図	阿久津遺跡	VI区詳細図4 高低図・土層断面図	223
第166図	万蔵寺廻り遺跡	I区1号溝・出土遺物	154	第221図	阿久津遺跡	V区・VI区遺構配置模式図	224
第167図	万蔵寺廻り遺跡	V区1～6号溝	155	第222図	万蔵寺廻り遺跡	VI区全体図	225
第168図	万蔵寺廻り遺跡	V区1・3号溝出土遺物	156	第223図	万蔵寺廻り遺跡	VI区土層断面図1	226
第169図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号井戸	158	第224図	万蔵寺廻り遺跡	VI区土層断面図2	227
第170図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号井戸断面図・ 出土遺物(1)	159	第225図	桑原田遺跡	I区全体図・詳細図1～4	231・232
第171図	万蔵寺廻り遺跡	V区1号井戸出土遺物(2)	160	第226図	桑原田遺跡	I区高低図1	234
第172図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物	161	第227図	桑原田遺跡	I区土層断面図1	235
第173図	十二廻り遺跡	I区土坑(1) 1～7号土坑、 1号土坑出土遺物	162	第228図	桑原田遺跡	I区土層断面図2	236
第174図	十二廻り遺跡	I区土坑(2) 8～16号土坑	163	第229図	桑原田遺跡	I区詳細図5	239・240
第175図	十二廻り遺跡	I区ピット(1) 1～11号ピット	164	第230図	桑原田遺跡	I区詳細図5 土層断面図	241
第176図	十二廻り遺跡	I区ピット(2) 12～24号ピット	165	第231図	桑原田遺跡	I区詳細図6 土層断面図1	242
第177図	十二廻り遺跡	I区1号溝	165	第232図	桑原田遺跡	I区詳細図6 高低図・土層断面図2	243
第178図	十二廻り遺跡	I区2・3号溝	166	第233図	桑原田遺跡	I区詳細図7・8 高低図・土層断面図	244
				第234図	桑原田遺跡	II区全体図	246
				第235図	桑原田遺跡	II区高低図	247
				第236図	桑原田遺跡	II区詳細図1	248
				第237図	桑原田遺跡	II区詳細図2・3	249
				第238図	桑原田遺跡	II区詳細図1～3 高低図	250
				第239図	桑原田遺跡	II区詳細図4・5	251
				第240図	桑原田遺跡	II区詳細図	252
				第241図	桑原田遺跡	II区土層断面図1	254
				第242図	桑原田遺跡	II区土層断面図2	255
				第243図	桑原田遺跡	III区全体図	258

第244図	桑原田遺跡	Ⅲ区高低図	259
第245図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図1	260
第246図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図2	261
第247図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図2 部分図①・②	262
第248図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図2 高低図・土層断面図・立面図	263
第249図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図3	264
第250図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図4 土層断面図	265
第251図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図4 高低図・立面図	266
第252図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図5	267・268
第253図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図5 部分図①～③ 立面図	269・270
第254図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図5 部分図④・⑤ 平面図・立面図	271・272
第255図	桑原田遺跡	Ⅲ区詳細図5 高低図	273
第256図	桑原田遺跡	Ⅳ区高低図	274
第257図	桑原田遺跡	Ⅳ区全体図	275
第258図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図1・2	276
第259図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図3	277・278
第260図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図1～3 高低図・土層断面図	279
第261図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図4	281・282
第262図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図4 部分図①	283
第263図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図4 根茎部詳細高低図	284
第264図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図4 根茎部石膏キャスト実測図	284
第265図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図5 高低図1	285・286
第266図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図5 高低図2・土層断面図	287
第267図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図6 高低図1・土層断面図1	288
第268図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図6 高低図2	289・290
第269図	桑原田遺跡	Ⅳ区詳細図3 (3号水田部分) 土層断面図	291
第270図	桑原田遺跡	V区高低図1	294
第271図	桑原田遺跡	V区全体図	295・296
第272図	桑原田遺跡	V区高低図2	297
第273図	桑原田遺跡	V区詳細図1 高低図・土層断面図	299
第274図	桑原田遺跡	V区詳細図2・3	300
第275図	桑原田遺跡	V区詳細図2・3 土層断面図・高低図	301
第276図	桑原田遺跡	V区詳細図4 土層断面図1・高低図	302
第277図	桑原田遺跡	V区詳細図4 土層断面図2	303
第278図	桑原田遺跡	V区詳細図5	305
第279図	桑原田遺跡	V区詳細図5 土層断面図・高低図	306
第280図	桑原田遺跡	V区詳細図5 部分図①・詳細図6	306
第281図	中町遺跡	I区全体図 高低図1	307・308
第282図	中町遺跡	I区高低図2	310
第283図	中町遺跡	I区詳細図1 高低図	311
第284図	中町遺跡	I区詳細図1 土層断面図	312
第285図	中町遺跡	I区詳細図1 部分図①	312
第286図	中町遺跡	I区詳細図1 部分図②	313
第287図	中町遺跡	I区詳細図2	314
第288図	中町遺跡	I区詳細図2 高低図	315
第289図	中町遺跡	I区詳細図3 土層断面図・高低図	316
第290図	中町遺跡	I区詳細図4	317
第291図	中町遺跡	I区詳細図4 土層断面図・高低図	318
第292図	中町遺跡	I区詳細図4 部分図①	319
第293図	中町遺跡	I区詳細図5 部分図①	321・322
第294図	中町遺跡	I区詳細図5 部分図②～⑦	323・324
第295図	中町遺跡	I区詳細図6 土層断面図・高低図	325
第296図	中町遺跡	Ⅱ区高低図1	334
第297図	中町遺跡	Ⅱ区全体図	335・336
第298図	中町遺跡	Ⅱ区高低図2・土層断面図	337
第299図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図1 高低図	338
第300図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図1 土層断面図・立面図	339
第301図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図2	340
第302図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図3	341
第303図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図4 土層断面図	342

第304図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図4 高低図	343
第305図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図5 土層断面図	343
第306図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図6・7	344
第307図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図6 土層断面図・高低図	345
第308図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図8	346
第309図	中町遺跡	Ⅱ区詳細図8 土層断面図・高低図	347
第310図	半田常法院遺跡	調査区概念図	349
第311図	半田常法院遺跡	全体図	350
第312図	半田常法院遺跡	1号溝 詳細図1・2	351
第313図	半田常法院遺跡	1号溝 土層断面図1・高低図1	352
第314図	半田常法院遺跡	1号溝 土層断面図2・高低図2	353
第315図	半田常法院遺跡	4～6号土坑 土層断面図	354
第316図	半田常法院遺跡	7・8・13・14号土坑土層断面図	355
第317図	半田常法院遺跡	1号溝 石積み立面図	356
第318図	半田常法院遺跡	1～3号土坑	358
第319図	半田常法院遺跡	9～12号土坑	359
第320図	半田常法院遺跡	15・16号土坑	360
第321図	半田常法院遺跡	東壁土層断面図	361
第322図	阿久津遺跡	遺構外出土遺物(1)	364
第323図	阿久津遺跡	遺構外出土遺物(2)	365
第324図	阿久津遺跡	遺構外出土遺物(3)	366
第325図	阿久津遺跡	遺構外出土遺物(4)	367
第326図	阿久津遺跡	遺構外出土遺物(5)	368
第327図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(1)	369
第328図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(2)	370
第329図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(3)	371
第330図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(4)	372
第331図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(5)	373
第332図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(6)	374
第333図	万蔵寺廻り遺跡	遺構外出土遺物(7)	375
第334図	桑原田遺跡	溝・水田出土遺物	376
第335図	桑原田遺跡	遺構外出土遺物(1)	377
第336図	桑原田遺跡	遺構外出土遺物(2)	378
第337図	桑原田遺跡	遺構外出土遺物(3)	379
第338図	桑原田遺跡	遺構外出土遺物(4)	380
第339図	桑原田遺跡	遺構外出土遺物(5)	381
第340図	桑原田遺跡	遺構外出土遺物(6)	382
第341図	十二廻り遺跡	遺構外出土遺物	383
第342図	中町遺跡	遺構外出土遺物	383
第343図	半田常法院遺跡	土坑・溝出土遺物(1)	384
第344図	半田常法院遺跡	土坑・溝出土遺物(2)	385
第345図	半田常法院遺跡	1号溝出土遺物	386
第346図	万蔵寺廻り遺跡	I期土器群(1)	495
第347図	万蔵寺廻り遺跡	I期土器群(2)	496
第348図	万蔵寺廻り遺跡	Ⅱ期土器群	497
第349図	万蔵寺廻り遺跡	Ⅲ期土器群	497
第350図	万蔵寺廻り遺跡	出土灰釉陶器	498
第351図	阿久津遺跡	I区概要	500
第352図	明治時代の本遺跡付近の利根川流路		501

第6章	科学分析	414
第1節	万蔵寺廻り遺跡出土糸の材質分析	414
図1	炭化糸巻(No. 1)	415
図2	炭化糸巻(No. 2)	415
図3	炭化糸巻(No. 3)	415
図4	炭化糸巻(No. 4)	415
図5	No. 1のXCR	415
図6	No. 2のXCR	415
図7	No. 3のXCR	415
図8	No. 4のXCR	415
図9	No. 1のXCR画像1	416
図10	No. 1のXCR画像2	416
図11	No. 1のXCR画像3	416
図12	顕微測光法により測定したFT-IRスペクトル	416
図13	ATR法により測定したFT-IRスペクトル	417

第2節	桑原田遺跡・万蔵寺廻り遺跡の自然科学分析	418
図1	13号水田深堀トレンチの土層柱状図	421
図2	万蔵寺廻り遺跡 I区の土層断面柱状図	422
図3	万蔵寺廻り遺跡 II区第1地点の土層柱状図	422
図4	万蔵寺廻り遺跡 II区第2地点の土層柱状図	422
図5	万蔵寺廻り遺跡 1号溝セクションの土層柱状図	422
図6	桑原田遺跡におけるプラント・オパール分析結果	425
第3節	桑原田遺跡IV区の自然科学分析	428
図1	試料採取地点の模式柱状図および分析層位	429
図2	火山ガラスの屈折率測定結果	431
図3	1号畑および2号畑の植物珪酸体含量	435
図4	3号水田の植物珪酸体含量	435

表目次

第1表	遺跡一覧	11・12
第2表	掘立柱建物跡柱穴計測表	117
第3表	阿久津遺跡IV区1号水田足跡計測表	219
第4表	桑原田遺跡I区2号水田足跡計測表	233
第5表	桑原田遺跡II区3号水田足跡計測表	252
第6表	桑原田遺跡II区12号水田足跡計測表	262
第7表	桑原田遺跡IV区畑計測表	291
第8表	中町遺跡I区10号水田足跡計測表	326-332
第9表	中町遺跡I区11号水田足跡計測表	332
第10表	中町遺跡I区21号水田足跡計測表	332
第11表	中町遺跡II区2号水田足跡計測表	340
第12表	中町遺跡II区3号水田足跡計測表	341
第13表	中町遺跡II区13号水田足跡計測表	344
第14表	万蔵寺廻り遺跡住居出土土器共伴関係	493
第6章	科学分析	414
第1節	万蔵寺廻り遺跡出土糸の材質分析	414
第2節	桑原田遺跡・万蔵寺廻り遺跡の自然科学分析	418
表1	桑原田遺跡におけるテフラ検出分析・屈折率測定結果	421
表2	桑原田遺跡におけるプラント・オパール分析結果	426
第3節	桑原田遺跡IV区の自然科学分析	428
表1	花粉分析結果	432
表2	植物珪酸体分析結果	433
表3	植物珪酸体含量	434
第4節	樹種同定	439
表1	万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の樹種同定結果(1)	444
	万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の樹種同定結果(2)	445
表2	万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の遺構別樹種構成	445
第5節	漆器の塗膜分析	454
表1	漆器の塗膜の元素分析結果	454
表2	生漆の赤外線吸収位置とその強度	454
第6節	炭化種実の同定	455
表1	I～IV区の炭化種実出土一覧表(その1)	468
	I～IV区の炭化種実出土一覧表(その2)	469
表2	V区の炭化種実出土一覧表(その1)	470
	V区の炭化種実出土一覧表(その2)	471
表3	遺構別炭化種実集計表(その1)	472
	遺構別炭化種実集計表(その2)	473
表4	各遺構の主要分類群の占める割合(その1)	474
表5	イネ炭化胚乳計測値一覧	475
表6	遺構別イネ炭化胚乳計測値集計	476
表7	イネ炭化胚乳計測値一覧	477
表8	マメ類計測値比較一覧	478

写真図版目次

遺跡周辺概観	
阿久津・万蔵寺廻り・十二廻り遺跡 古代・中世遺構概観	PL. 1～PL. 2
阿久津・万蔵寺廻り・桑原田・中町遺跡 近世遺構概観	PL. 2～PL. 5
古代・中世の遺構と遺物	
阿久津遺跡 竪穴住居	PL. 6
阿久津遺跡 土坑・遺構外出土遺物	PL. 6～PL. 7
万蔵寺廻り遺跡 竪穴住居	PL. 7～PL.53
万蔵寺廻り遺跡 掘立柱建物跡	PL.54
万蔵寺廻り遺跡 土坑	PL.55～PL.69
万蔵寺廻り遺跡 ビット	PL.69～PL.70
万蔵寺廻り遺跡 溝	PL.71～PL.72
万蔵寺廻り遺跡 井戸	PL.73
万蔵寺廻り遺跡 谷・遺構外出土遺物・古代遺構出土鉄滓	PL.74
十二廻り遺跡 土坑	PL.75
十二廻り遺跡 ビット	PL.76
十二廻り遺跡 溝・井戸・谷	PL.77～PL.79
近世以降の遺構と遺物	
阿久津遺跡 水田・溝・土坑	PL.80～PL.97
阿久津遺跡 遺構外出土遺物	PL.98～PL.99
近世以降の遺物出土地点	
万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物	PL.100～PL.103
近世以降の遺構と遺物	
桑原田遺跡 水田・溝・畑	PL.104～PL.133
桑原田遺跡 出土遺物	PL.134～PL.136
十二廻り遺跡 遺構外出土遺物	PL.136
近世以降の遺構と遺物	
中町遺跡 水田・溝	PL.137～PL.147
中町遺跡 遺構外出土遺物	PL.147
近世以降の遺構と遺物	
半田常法院遺跡 溝・土坑	PL.148～PL.151
半田常法院遺跡 出土遺物	PL.151～PL.152

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

前橋渋川バイパスは、前橋市と渋川市における「交通渋滞の解消、及び群馬県中央部における道路ネットワークを強化する地域高規格道路として位置づけられた」（国土交通省パンフレット）、前橋市田口町から渋川市半田に至る延長5.7kmの一般国道17号バイパスである。

群馬県教育委員会文化財保護課（当時）は、平成13年度に国土交通省関東地方整備局高崎工事事務所から事業の照会を受け、事業予定地内の埋蔵文化財の有無について協議を行なった。その後、平成14年10月及び平成15年3月に県教育委員会文化財保護課により試掘調査が実施され、事業予定地の一部に古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡及び近世の埋没水田・畑跡群が広く分布していることが明らかにされた。

平成14年度の事前調査の結果を受けて、群馬県教育委員会と吉岡町教育委員会は、事業地内の埋蔵文化財包蔵地を把握、認定した。また、近世遺構群の埋蔵文化財の取り扱いを協議し、本格的な発掘調査を行なう必要があることを事業者へ通知した。

国土交通省関東地方整備局長は、平成14年度に文化財保護法第57条3（当時）に基づき群馬県教育委員会教育長にあて、周知の埋蔵文化財包蔵地における事業を通知し、同教育委員会は平成14年11月25日付けで発掘調査を行なう必要があることを勧告した。

国土交通省関東地方整備局長渡辺和足（当時）と群馬県教育委員会教育長高井健二（当時）及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長小野宇三郎（当時）は、平成15年10月1日付けで、「一般国道17号（前橋渋川バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定」を締結し、北群馬郡吉岡町漆原地内を対象区域とする発掘調査が計画された。

これに伴い、一般国道17号（前橋渋川バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する平成15年度の委託契約を締結し、総面積69,305m²を対象とする本格的な発掘調査が実施されることとなった。

第2節 調査の経過

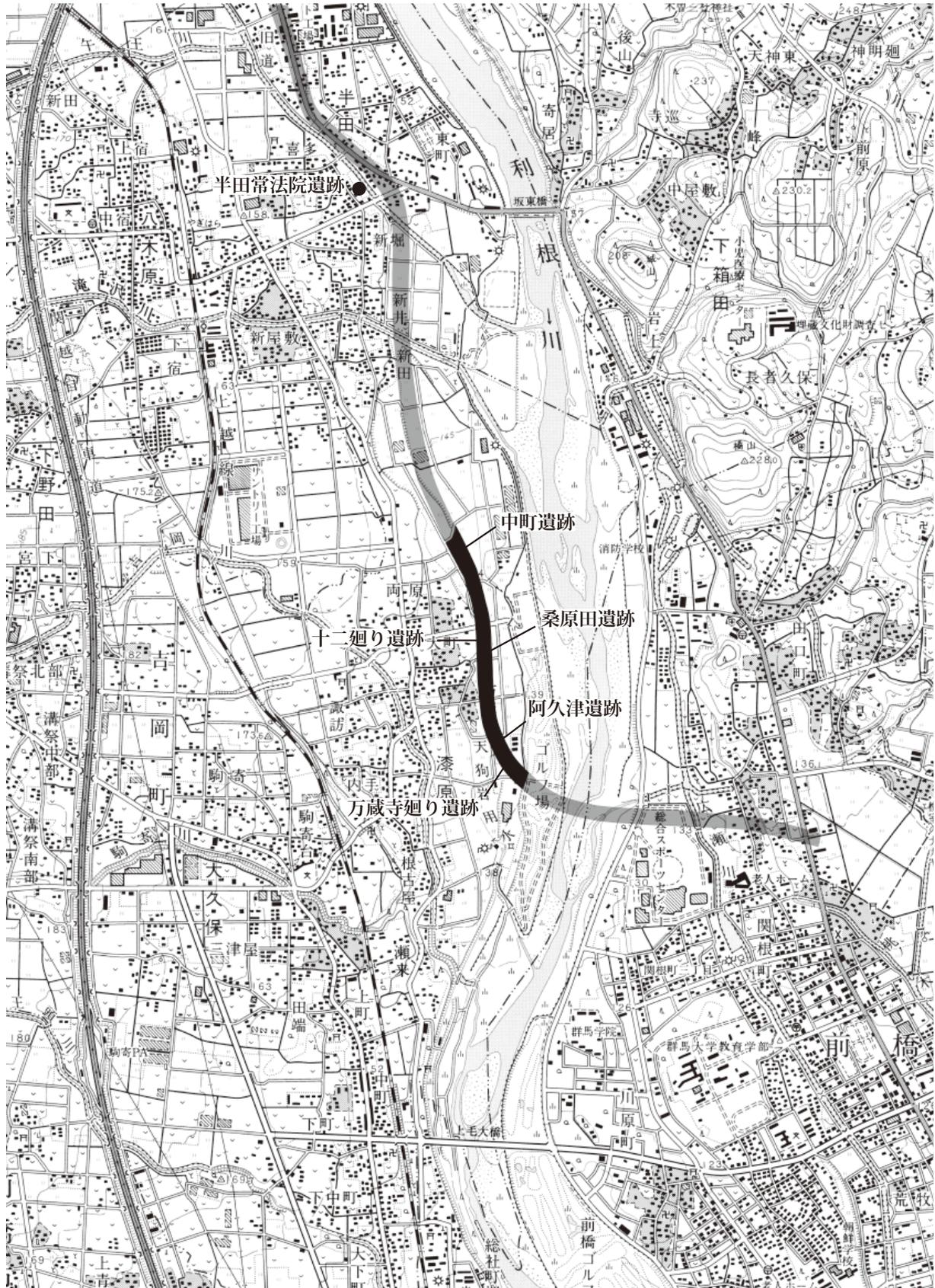
阿久津遺跡、万蔵寺廻り遺跡、桑原田遺跡、十二廻り遺跡、中町遺跡、半田常法院遺跡は、平成15年度から平成19年度にかけて調査を行った。調査を開始した時点では、調査区の一部が未買地となっており、調査区から順次調査を行っていった。

平成15年度は平成15年11月から平成16年3月にかけて阿久津遺跡Ⅳ区、Ⅴ区、桑原田遺跡Ⅳ区、Ⅴ区、中町遺跡Ⅱ区を調査した。

平成16年度は、平成16年4月から平成17年3月にかけて阿久津遺跡未買地を除くⅢ区とⅥ区、万蔵寺廻り遺跡Ⅰ～Ⅳ区、桑原田遺跡未買地を除くⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、十二廻り遺跡未買地を除くⅠ区、Ⅱ区、中町遺跡Ⅰ区を調査した。

平成17年度は、平成17年4月から10月にかけて阿久津遺跡Ⅰ区、Ⅴ区の残地、未買地を除くⅥ区の一部、万蔵寺廻り遺跡Ⅴ区、Ⅵ区を調査した。当初は1年間の事業計画であったが、用地買収が解決しなかったため、調査期間が5ヶ月短縮された。平成17年12月から平成18年3月にかけて基礎整理を行った。なお、阿久津遺跡Ⅱ・Ⅲ区の残地は、調査面積が狭い上に泥流が厚いことから、危険であるとして群馬県教育委員会文化課立ち会いのもと発掘調査から除外した。

平成18年度は、平成18年4月から6月にかけて桑原田遺跡Ⅲ区、及び十二廻り遺跡Ⅰ区の残地を、平成19年2月から3月にかけて阿久津遺跡Ⅵ区の残地を調査し、平成19年4月から5月に渋川地区の半田常法院遺跡、平成20年1月から2月に桑原田遺跡の残地をそれぞれ調査した。



第1図 前橋渋川バイパスと吉岡地区の遺跡 (1/25000 「渋川」使用)

調査を進める中で困難だったのは、遺構に溜まった水の処理である。各遺跡で検出された遺構の大部分がAs-A下の水田であり、シルト質土壌であることから、降雨により溜まった水が浸透しにくく、調査前には人力で水を汲み出さなければならず、排水作業に少なからぬ時間を割かれた。

調査日誌抄

平成15年度

平成15年11月1日桑原田遺跡V区調査開始。

平成16年1月 桑原田遺跡IV区調査開始。桑原田遺跡IV区、V区調査終了。阿久津遺跡IV区、未買地を除くV区調査開始。

平成16年2月 桑原田遺跡IV-2区調査の開始。中町遺跡II区調査を開始。桑原田遺跡IV区-2調査終了。阿久津遺跡IV区、未買地を除くV区調査終了。

平成16年3月 中町遺跡II区調査終了。

平成16年度

平成16年4月1日桑原田遺跡II区調査開始。万蔵寺廻り遺跡II区調査開始。

5月 桑原田遺跡I区調査開始。万蔵寺廻り遺跡III区調査開始。

6月 桑原田遺跡I区、II区調査継続。万蔵寺廻り遺跡I区調査開始。6月20日現地説明会を実施。

7月 万蔵寺廻り遺跡IV区調査開始。

8月 未買地を除く十二廻り遺跡I区調査開始。桑原田遺跡I区調査終了。万蔵寺廻り遺跡I区、II区、III区調査終了。

9月 桑原田遺跡II区調査終了。

10月 阿久津遺跡VI区調査開始。未買地を除く十二廻り遺跡I区調査終了。阿久津遺跡VI区調査終了。未買地を除く阿久津遺跡III区調査開始。万蔵寺廻り遺跡IV区調査終了。

12月 阿久津遺跡III区調査終了。中町遺跡I区調査開始。

平成17年1月 未買地を除く桑原田遺跡III区調査開始。十二廻り遺跡II区調査開始。

2月 中町遺跡I区調査終了。十二廻り遺跡II区調査終了。

3月 未買地を除く桑原田遺跡III区調査終了。

平成17年度

平成17年4月 万蔵寺廻り遺跡V区2面調査開始。万蔵寺廻り遺跡VI区1・2面調査開始。

6月 万蔵寺廻り遺跡VI区1・2面調査終了。阿久津遺跡I区調査開始。

9月 阿久津遺跡V区調査開始。

10月 阿久津遺跡V区調査終了。阿久津遺跡I区、VI区、万蔵寺廻り遺跡V区2面調査終了。

12月～平成18年3月 基礎整理。

平成18年度

平成18年4月 桑原田遺跡III区調査開始。十二廻り遺跡I区調査開始。

5月 桑原田遺跡III区、十二廻り遺跡I区調査継続。

6月 桑原田遺跡III区、十二廻り遺跡I区調査終了。

平成19年2月 阿久津遺跡VI区調査開始。

3月 阿久津遺跡VI区調査終了。

平成19年度

平成19年4月 半田常法院遺跡調査開始。

5月 半田常法院遺跡調査終了。

平成20年2月 桑原田遺跡I区調査開始。

3月 桑原田遺跡I区調査終了。これにより、前橋渋川バイパス吉岡・渋川地区の遺跡発掘調査を全て終了した。

第1章 調査の経過



第2図 前橋渋川バイパスと吉岡地区の遺跡と調査区 (1/5000 吉岡町都市計画図)

第3節 整理事業の経過と方法

整理事業は、発掘調査時及び平成17年12月から平成18年3月にかけて集中的に行った基礎整理、平成18年度、19年度に行った桑原田遺跡Ⅰ区を除く部分についての整理事業及び平成19年度に行った桑原田遺跡Ⅰ区部分の整理事業と報告書の刊行という各段階に分けられる。

用地買収状況により、一つの調査区が複数年度に分割されて調査せざるを得ない状況があり、かつ発掘調査と整理の両事業が平行して行われるという、変則的な工程となった。特に平成18年度、19年度においては、発掘調査現場での基礎整理が、整理事業と重複して、別個に行われた。

発掘調査現場及び基礎整理期間においては、採取図面及び写真の照合、修正及びこれらについての仮台帳の作成を行なった。また、出土遺物については台帳を作成し、洗浄、注記を委託した。

住居内埋没土壌内の炭化種実等微少遺物の抽出は調査現場で実施したほか、万蔵寺廻り遺跡Ⅴ区11号住居内土壌の一部については株式会社パレオ・ラボに委託して水洗選別法による遺物抽出を行った。併せて、炭化材、炭化種実の同定を株式会社パレオ・ラボに委託している。

平成18年度の整理事業は、藍沢が阿久津遺跡、桑原田遺跡、中町遺跡の天明泥流下田畑遺構を担当し、安生が万蔵寺廻り遺跡、十二廻り遺跡及び阿久津遺跡の一部を含む古代から中世にかけての遺構と泥流下田畑出土のものを含む全ての出土遺物を担当して整理作業を行った。

天明泥流下の田畑遺構について、採取図面の仮編集を行い、写真図版及び記載本文原稿を作成した。各遺構の平面図についてはデジタルデータに基づく図版とし、発掘調査現場において採取した土層断面図や高低図、稲株、足跡等の詳細図については一部をデジタルデータに変換したほかは人手によるトレース図を図版とした。

古代・中世の遺構についても、採取図面の修正、編集及びトレースを行い、挿図及び写真の仮図版及び記載本文原稿を作成した。

出土遺物については接合、復元、実測、採拓、トレース及び写真撮影を行った。

また、桑原田遺跡の天明泥流下の溝中から出土した漆器と思われる椀について、漆の分析を行った。

万蔵寺廻り遺跡Ⅳ区10号住居出土炭化繊維については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所高妻洋成氏に指導を依頼した。

平成19年度の整理事業は洞口が担当し、平成18年度に発掘調査を行った桑原田遺跡Ⅲ区、十二廻り遺跡Ⅰ区、阿久津遺跡Ⅵ区の残地に関わる遺物の接合、復元、実測等を行った。

また、年度初の時点で未調査であった桑原田遺跡Ⅰ区を除く各調査区について、採取図面及び写真の確認と修正、編集にかかわる諸作業を行って、挿図、写真図版原稿を作成した。なお、記載本文原稿については明らかな誤りを訂正し、一部補足を行ったにとどめた。

遺物観察は安生が継続して担当し、遺物写真図版及び遺物観察表を作成した。

これらに、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所高妻洋成氏による万蔵寺廻り遺跡Ⅳ区10号住居出土炭化繊維についての分析及び専門業者に委託した自然科学分析等の報告と、調査成果に関わる論考を併せて、全体的なレイアウト、編集を行った。

平成22年度は平成19年度末に発掘調査を行った桑原田遺跡Ⅰ区の残地、及び渋川地区の半田常法院遺跡に関わる遺物の接合、復元、実測等を行い、採取図面、写真の確認と修正、編集にかかわる作業を行って、平成18・19年度作成の挿図、写真図版及び本文記載原稿及び宮崎重雄氏による出土人骨・動物骨資料に関する分析を補い、完成稿とした。最終的には報告書原稿はすべてデジタル出稿し、入稿後1回の校正を行い、平成23年2月に完成した。

第2章 調査の方法と基本土層

第1節 調査区の設定

- (1) 調査区の設定は遺跡ごとに南から北に向かってI区から名称を付した。
阿久津遺跡 I区・Ⅲ区～Ⅵ区
万蔵寺廻り遺跡 I区～Ⅵ区
桑原田遺跡 I区～Ⅴ区
十二廻り遺跡 I・Ⅱ区
中町遺跡 I・Ⅱ区
- (2) グリッドの設定には、国家座標第Ⅸ系（日本測地系）を使用した。

第2節 調査の方法

- (1) 表土掘削には、調査の効率化を図るため、掘削機械を利用した。
- (2) 遺構名称は、調査面ごとに、種別ごとに通し番号を付した。遺物の取り上げは、遺構単位、グリッド単位を基本とした。
- (3) 遺物の注記は遺跡略・調査面・遺構名またはグリッド名を書き込んだ。
- (4) 遺構の測量は、空中写真測量と地上測量を併用し、1/20・1/40・1/100・1/200縮尺図を作成した。
- (5) 作成された遺構実測図には、遺跡名・実測図名・縮尺・実測者名・レベル高・ベンチマークの高さ・実測年月日を記入し、1枚ごとに通し番号を付し、台帳を作成した。
- (6) 写真撮影には、6×6によるモノクロネガと、カラーライドの空中写真撮影を業者に委託した。また、個別の遺構に関しては6×7と35mmのカメラを併用し、平成17年度調査まではモノクロとカラーライドフィルムを使用し、平成18年度調査以後は6×7版モノクロームフィルムと660万画素デジタルカメラを用いて、調査研究員が撮影した。撮影対象に応じて、高所作業車を使用した。
- (7) 撮影したフィルムは現像処理し、モノクロはベタ焼きを行い、ネガ検索台帳に調査面、遺構ごと

に貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記録した。カラーライドフィルムは、コマごとに遺跡名・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、通し番号を付した。デジタル画像についてはRAWデータをハードディスク上に保管し、予備データとしてRAWデータ及びJPEG圧縮したデータをDVDとして残している。

第3節 基本土層

調査区は、吉岡地区だけでも全長が1.2kmに及ぶため、地点による層相の相違が大きく、調査時の土層断面の記録をもとに検討を行ったが、全体を通しての基本土層の作成ができなかったため、複数調査区において共通と思われる層についてローマ数字でI～VII層を付し、基本土層とした。各調査区で対応関係の特定できない層については、それぞれの調査区の基本土層として、①～nとして個別に土層説明をした。

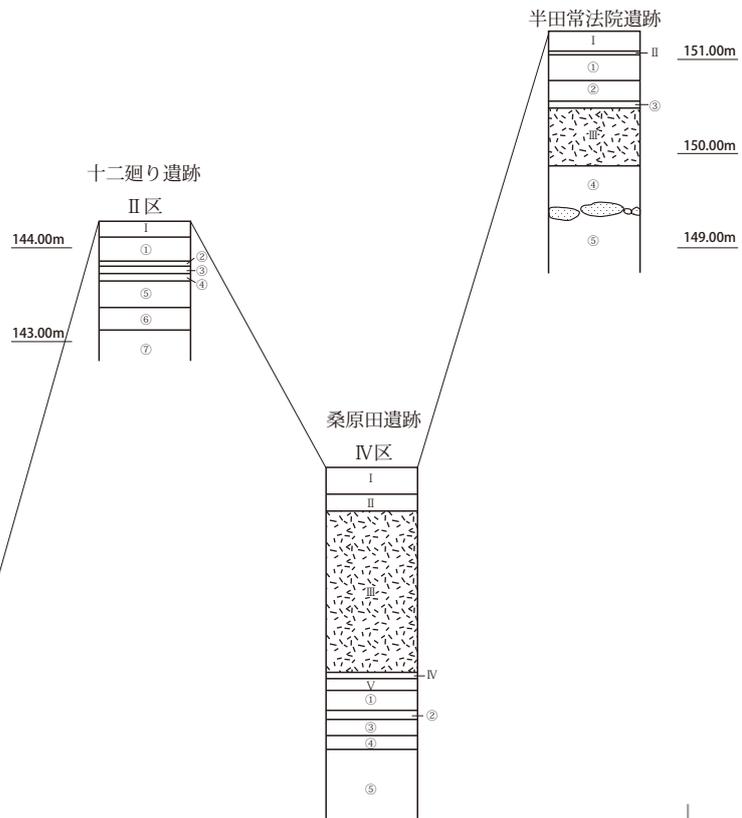
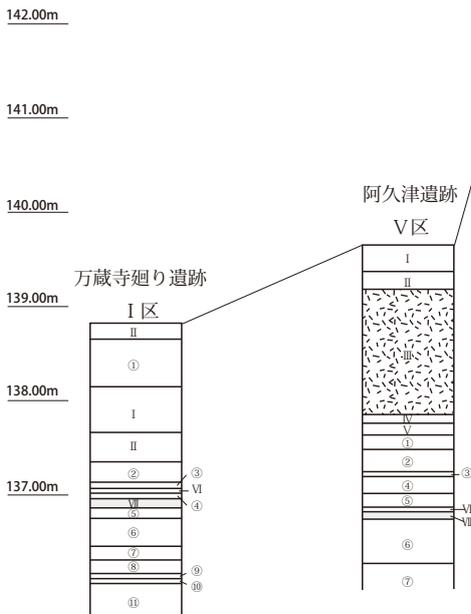
調査対象となる遺跡地は、天明三（1783）年の浅間山噴火に伴う泥流の被害を受けた地域で、調査の結果、泥流が厚く堆積していることが判明した。圃場整備により、削平されている箇所もあると考えられるが、近世の水田・畑遺構が発見された阿久津遺跡、桑原田遺跡、中町遺跡では、平均1.5～2mのAs-A泥流層が当時の耕作面を覆っていた。厚いところでは、3m以上になる。また、奈良・平安時代以降の遺構が発見された万蔵寺廻り遺跡、十二廻り遺跡は段丘上に位置するため、泥流はほとんど届いていない。

阿久津遺跡、桑原田遺跡、中町遺跡では、砂質性シルト質土が基盤となり、榛名山二ツ岳起源の白色軽石粒が混入し、鉄分の凝集も多く見られた。下層では川砂や礫が確認された。万蔵寺廻り遺跡、十二廻り遺跡では、砂質土が基盤となっている。

半田常法院遺跡は、地点は異なるものの地形的に近似した場所であり、天明三年の泥流によって埋没した状況も類似している。

複数場所で共通する基本土層

- I 褐灰色土 現代表土(耕作土)
- II 褐灰色土 現代耕作土(床土)
- III 黒褐色土 As-A泥流
- IV 褐灰色土 近世耕作土
- V 褐灰色土 近世耕作土(床土) 酸化鉄
- VI 黄灰色土 As-Kk
- VII 暗褐色土 As-B
- 石



基本土層

- I 褐灰色土 現代・表土(耕作土)
- II 褐灰色土 耕作土(床土)
- III 黒褐色土 As-A泥流
- IV 褐灰色土 近世耕作土
- V 褐灰色土 近世耕作土(床土) 酸化鉄
- VI 黄灰色土 As-Kk
- VII 暗褐色土 As-B

万蔵寺廻り遺跡 I 区

- ① にぶい黄褐色土 客土
- ② にぶい黄褐色土 シルト質土で径10mm以下の白色軽石を含む。
- ③ 褐色土 軽埴土で酸化鉄を含む
- ④ 黒褐色土 砂質で酸化鉄が多く固い。
- ⑤ にぶい黄褐色土 シルト質土で酸化鉄が多い。
- ⑥ にぶい黄褐色土 シルト質土で酸化鉄の含有が多く、炭化物の薄層を含む。
- ⑦ 褐色土 微粒のシルト質土。
- ⑧ 褐色土 微粒のシルト質土で炭化物の薄層を含む。
- ⑨ 褐色土 シルト質土。
- ⑩ 明褐色土 軽埴土。
- ⑪ 明褐色土 シルト質土及び砂質土主体で、径20mm以下のHr-Fpを多量に含み、酸化鉄の含有が多い。

阿久津遺跡 V 区

- ① 褐灰色土 V層に比して径10mm大の磨滅した白色軽石を多量に含み、酸化鉄を斑状に含む。
- ② 褐灰色土 ①層より軽石がやや少なく、酸化鉄を含まない。
- ③ 褐灰色土 ②層に類似するが、白色軽石粒は最大で径50mmのものが確認できる。
- ④ 褐灰色土 白色軽石を含まず、酸化鉄が多い。
- ⑤ 灰色土 明黄褐色土 VI・VII層の再堆積層。
- ⑥ 明黄褐色土 粘性の強い粘土層。明褐灰色土層と黒色土層の互層で客層は均質な堆積を示す。
- ⑦ 褐灰色土 細い砂層で径20mm程の円礫を少なく含む。

十二廻り遺跡 II 区

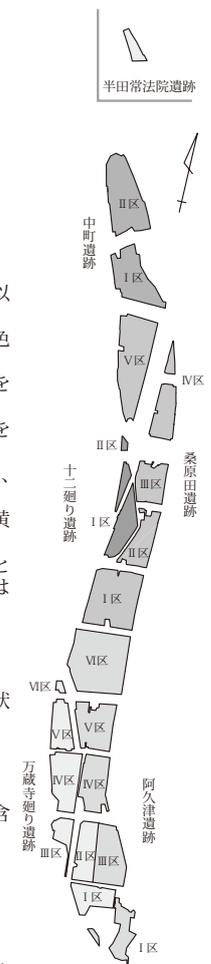
- ① 灰黄褐色土 粗い砂質土で黄褐色化した部分がある。径30mm以下の白色軽石を少量含み、やや締まりがあり粘性は弱い。
- ② 灰白色土 シルト質土で、黒褐色シルトブロック及び明黄褐色シルトブロックを含み、やや締まりがあり、粘性は弱い。
- ③ 黄褐色土 細い砂質土で灰白色及び明黄褐色シルトブロックを含み、締まり、粘性が弱い。
- ④ にぶい黄褐色土 やや粗い砂質土で、径15mm以下の白色軽石を含み、締まりがやや強く、粘性は極めて弱い。
- ⑤ にぶい黄褐色土 細い砂質土で、灰白色の砂を含み、締まり、粘性共に弱い。
- ⑥ 灰黄褐色土 細い砂質土で、径30mm以下の白色軽石を少量と黄褐色砂質土ブロックを含み、締まりがやや強く、粘性は弱い。
- ⑦ にぶい黄褐色土 細い砂質土で径50mm以下の白色軽石を少量とにぶい黄褐色シルトが層状に含み、やや締まりがあり、粘性は弱い。

桑原田遺跡 IV 区

- ① 褐灰色土 酸化鉄を斑状に含み、IV層土よりも締まりが強い。
- ② 灰黄褐色土 ①層よりもシルト質が強く、酸化マンガンを斑状に含む。
- ③ 灰黄褐色土 ②層に類似し、砂質。
- ④ 褐灰色土 ③層に類似し、締まりが弱い。
- ※②～④層は一連の堆積。
- ⑤ 灰黄褐色土 細粒の砂質で、径20～30mmの円礫を不規則に含む。

半田常法院遺跡

- ① 灰褐色土 砂質土。
- ② 灰褐色土 やや粘性の強いシルト質土(旧耕作土)。
- ③ 黄褐色土 やや粘性のあるシルト質土で酸化鉄が多い。
- ④ 黄褐色土 径50～150mm大の礫を含み、締まりがある。(基盤層)
- ⑤ 砂礫層



第3図 遺跡内基本土層模式図

第3章 遺跡地の環境

第1節 地理的環境

阿久津遺跡、万蔵寺廻り遺跡、桑原田遺跡、十二廻り遺跡、中町遺跡は、群馬県の中央部、北群馬郡吉岡町大字漆原に所在する。北は子持山、西は榛名山、東は赤城山が眺望でき、すぐ東に利根川が流れる、視界の開けた土地である。

吉岡町は前橋市の北西、渋川市の南にあり、榛名山の東麓に位置している。東部を関越自動車道が走り、南東部から北西部へ県道前橋伊香保線が走り、これと交差して町のほぼ中央を通る県道高崎渋川線が南北を貫いて渋川市で国道17号と合流する。周辺都市への交通の便もよく、近年人口は増加傾向にある。基幹産業は農業で、かつては養蚕を中心とした米麦複合経営が行われていたが、近年は野菜のハウス栽培や酪農・養豚・養鶏などに転換、またブドウ栽培も行われ、観光農園も開かれている。

吉岡町の地形は、大きく分けると、北西部は標高400～900mの山岳地、中間地帯は標高200～400mの扇状地、東部は標高100～200mの丘陵性の台地と低地帯が広がる。

山岳地は榛名山噴火の際の火山岩類や軽石に覆われ、ごつごつして険しい。

扇状地は火砕流堆積物や岩屑流堆積物で形成されている。4万年以上前に形成された北端部の古期火山麓扇状地面、約1万5千年前の榛名山噴火の際の山体崩壊に伴う地滑りでできた中部の陣馬岩屑流堆積面、火山灰の堆積状況から縄文時代に形成されたと考えられる北部の新期火山麓扇状地面（有馬扇状地）、As-C以上のテフラが覆っていることから6世紀の二ッ岳火砕流堆積面より形成が古いと推定される西部の上野平火山山麓の山麓緩斜面、6世紀初頭と中葉に形成された北部の二ッ岳火砕流堆積面の5つに区分することができる。

台地は関東ローム層で形成され、低地帯は利根川や滝沢川などの河川が土砂を堆積してできた沖積層から成り、2段の河岸段丘面が発達している。万蔵寺廻り遺跡、十二廻り遺跡は高位の面、その他が低位の面に当たる。

河川は榛名山のある北西から東の利根川に向かって流れている。主な河川に町の北部を流れる滝沢川があり、榛名山に源を発する船尾滝を源流とする川で、やがて漆原に入り利根川に注ぐ。北西部には自害沢川、南東部には駒寄川が流れ、町の中央を流れる吉岡川と合流して、利根川に注ぐ。

遺跡地は利根川右岸の低地帯に立地し、古来より利根川の氾濫を何度も受けている土地で、天明三（1783）年の浅間山の噴火に伴って発生した泥流堆積物が認められる。調査の結果平均約1.5m、厚いところでは3m以上も堆積した泥流の下から被災前の水田や畑が発見された。現在は圃場整備された水田が広がっている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

現在のところ確認できていないが、南下や大久保地区には地形的に条件のよいところがあるので、今後の調査に期待したい。

縄文時代

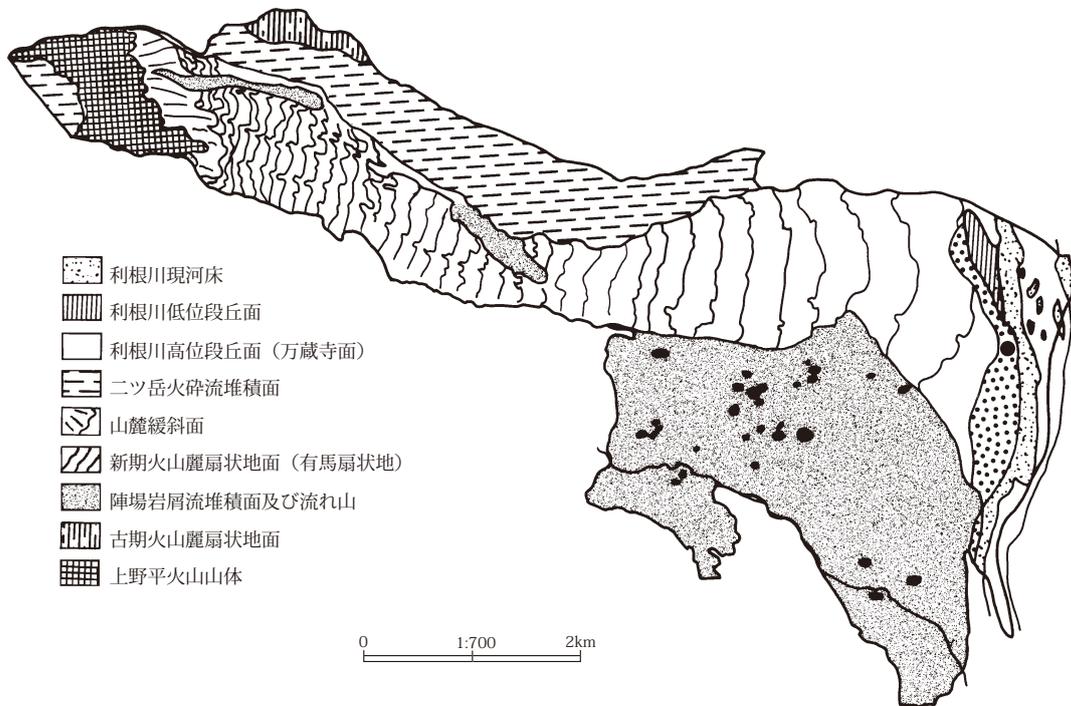
地理的には東南傾斜の舌状台地先端部分に多く、後の時代との複合遺跡である場合が多い。七日市遺跡では前期の住居跡、清里・長久保遺跡では中期の住居跡、大下遺跡では中期の土坑群、平石遺跡では中期の包含層と落ち込み跡、半田中原・南原遺跡では早期の陥穴遺構、前期の集落、中期の住居跡、後期の土坑が発見されている。

弥生時代

半田中原・南原遺跡では中期から後期にかけての遺物包含層が見られる。吉岡町では、後期の土器片



第4図 遺跡の位置と地形



第5図 吉岡町の地形面区分図

第3章 遺跡地の環境

がいくつか採集されているが、これらに伴う遺構は確認できない。

古墳時代

1935（昭和10）年の上毛古墳総覧には424基の古墳が記録され、群馬県内でも古墳の多い地域である。分布状況を見てみると、上野田、小倉、南下、大久保地域に集中し、河岸段丘下の漆原地域には存在していない。いずれも7世紀を中心とする小形の円墳である。主な古墳として、6世紀後半から7世紀後半にかけて築かれた南下古墳群があり、岩屑流丘南斜面に集中して築かれ、それぞれ石材の取り扱い方や石室の形状に違いが見られる。三津屋古墳は、榛名山東南麓から利根川に向けて延びる台地先端近くの南斜面にあり、7世紀中葉頃の築造と推定され、山寄せ式に造られた2段構築の八角形墳で、周囲は浅い堀が伴っている。これら周辺の大久保A遺跡、金竹西遺跡では古墳時代後半の集落が見つまっている。半田中原・南原遺跡では古墳群が確認された。5世紀後半の円墳の竪穴式石室から、直刀、鉄剣、鉄鏃が出土した。また7世紀後半の円墳が26基確認された。埋葬施設は横穴式石室であるが、破壊が進んで残りが悪く、出土遺物も少ない。

奈良・平安時代

「倭名類聚抄」によると律令制下には群馬郡十三郷のうちに桃井郷が含まれている。桃井は吉岡と榛東を含む地域と推定される。国府周辺の地域として重要な位置にあり、集落跡が多数発見されている。これらの集落は古墳時代から継続している場合と奈良・平安時代になって新たに形成される場合がある。主な遺跡に大久保A遺跡、大久保B遺跡、七日市遺跡、清里・陣場遺跡、金竹西遺跡、熊野遺跡、半田中原・南原遺跡等がある。

相馬ヶ原扇状地上に立地する清里・陣場遺跡では大集落跡が確認でき、膨大な量の灰釉陶器と緑釉陶器、また金銅製や石製の帯飾具、海老錠、製鉄関連遺物が出土している。熊野遺跡で発見された住居には土錘を出土するものが比較的多く、特色を見せている。町指定重要文化財の三宮神社の東に立地する

大久保A遺跡では多くの鉄製品や、「神」などと書かれた墨書土器や瓦塔片などが出土し、神社との関係がうかがえる。金竹西遺跡では、竪穴住居の半数近くが鉄製品を出土している。この時期の榛名山東南麓の集落跡からは鉄製品を多く出土する傾向がある。半田中原・南原遺跡では、奈良時代の大集落跡が発見され、大型竪穴住居や大型の掘立柱建物跡などが検出された。一部の住居に鉄塊が含まれており、周辺で鍛冶を行っていた可能性が考えられる。また土器が多数出土し、特に須恵器の高盤は、1遺跡で出土した量が多い。平安時代になっても、生活の中心を変えて集落は続き、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土している。河岸段丘下の漆原地域にも包蔵地があり、集落跡が推定される。

中世

12世紀に入り、源頼朝が全国に守護・地頭を置き、武家社会が発展していった。吉岡町と榛東村の地域には桃井荘を拠点する桃井氏が活躍した。桃井氏の祖は足利義兼の子義胤といわれ、嘉禄年中（1225～）年に義胤が桃井荘を領してから尚義まで約150年間経営が続いたと思われる。吉岡町南下には桃井氏の築城とされる桃井城跡があり、陣場岩屑流丘とみられる自然地形を利用している。南北朝時代になると桃井尚義の跡を新田一族の岩松直国が賜り、上野国の守護となった上杉氏の勢力下に入っていった。鎌倉時代中頃、桃井氏が桃井荘の地頭であった時、漆原は漆原氏の所領であった。永仁4（1296）年12月18日の関東下知状で藤原兼郷は、祖父漆原兼敦の讓状により漆原の領知を認められている。新田開発など農業経営を行いながら、次第に在地武士化していった。室町時代に入って白井長尾氏が上杉氏の上野国守護代を勤める頃、最も勢力を伸ばした。その後箕輪城を基点とした長野氏の配下に入り、長野氏が武田信玄に攻め落とされると、武田氏の支配下に入った。

主な遺跡には、城跡・館跡があり、ほとんどが戦国時代のものと推測される。漆原地域には、漆原城跡があり、砦跡であったと思われるが、遺構はほと

んど残されていない。また長塩屋敷とよばれる居館跡があり、土塁と濠跡が比較的によく残っている。他に小倉寺跡、野田内出城跡、瀬来城跡、桃井館跡等がある。

近世

三国街道・佐渡奉行街道をはじめ伊香保温泉や板東三十三観音の十六番札所である水沢寺に通じる伊香保道が走り、大久保宿や上野田宿などの宿場が発達し、交通の要衝として栄えた。現在も三国街道には一里塚、佐渡奉行街道には道標が残っている。大久保村は佐渡奉行街道の宿場であり、延享四（1747）年『西上州群馬郡大久保村村絵図』に示されるように、大久保村は街道筋に密集した家並みがあるが、漆原村は耕地を主としている。史料によると漆原村は大久保村へ助郷を出していたことがわかる。また

漆原地域は利根川の度重なる氾濫により被害を受けた歴史をもつ。天明三（1783）年の浅間山噴火の際も泥流によって、膨大な面積の耕地が流失した。この際漆原用水が大破し、その後親堰が開削されるまで、水田耕作に多大な影響を及ぼした。

参考文献

『吉岡村誌』吉岡村誌編纂室 1980
 早田勉 「群馬県其自然と風土」『群馬県史通史編1 原始古代1』群馬県史編さん委員会 1990
 『群馬県の地名』日本歴史地名体系10 平凡社 1987
 『角川日本地名大辞典』10群馬県 角川書店 1988
 『平石遺跡群発掘調査報告書』吉岡村教育委員会 1988
 『吉岡町の遺跡』吉岡町教育委員会 1993
 『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社 1999
 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1988

第1表 遺跡一覧

(遺跡名、所在地、時代及び遺構の順で記す。冒頭の番号は第6図の中の番号と一致する。文献は下記文献一覧表の番号を示す。)

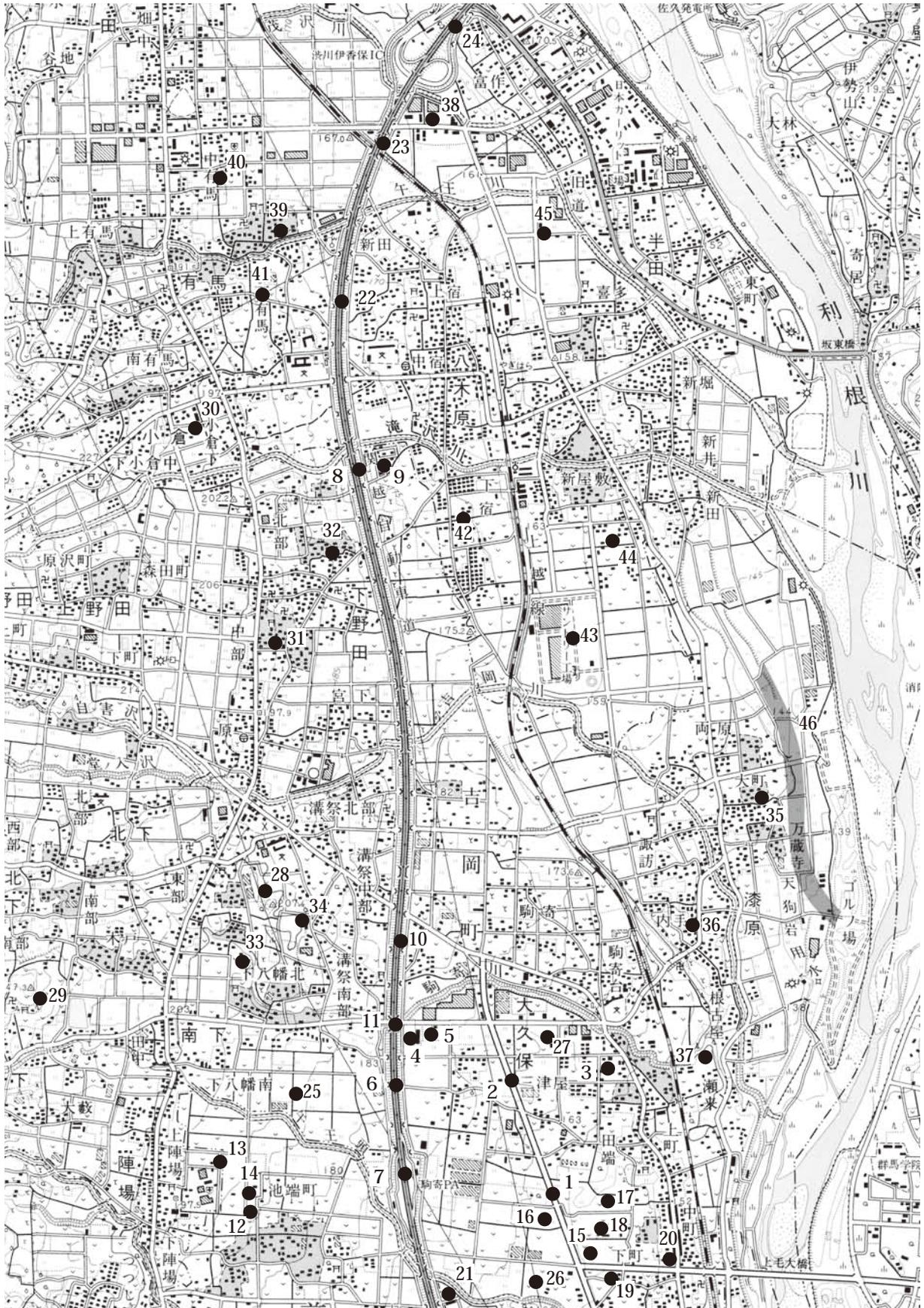
1 熊野遺跡 吉岡町大久保 縄文時代：土坑 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：1	19 金竹西A遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：17
2 辺玉遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：1	20 中町遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 近世：集石溝、井戸 文献：17
3 三津屋古墳 吉岡町大久保 古墳時代：古墳 文献：3	21 清里・長久保遺跡 吉岡町大久保、前橋市池端町 縄文時代：集落/住居 古墳時代：古墳 平安時代：住居、墓坑 文献：18
4 道城遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：4	22 有馬遺跡 渋川市八木原 弥生時代：集落/住居、礫床墓 古墳時代：集落/住居、畠 文献：19・20
5 道城Ⅱ遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：5	23 有馬条里遺跡 渋川市八木原 弥生時代：集落/住居、礫床墓 古墳時代：集落/住居、水田・畠 奈良・平安時代：集落/住居、鍛冶遺構、中・近世：井戸、溝 文献：21・22・23
6 女塚遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：6	24 中村遺跡 渋川市中村 弥生時代：集落/住居、墓地 古墳時代：住居、水田・畠、古墳 奈良・平安時代：集落/住居 中世：集落/住居、墓地 近世：水田・畑 文献：24
7 七日市遺跡 吉岡町大久保 縄文時代：住居、土坑 古墳時代：住居 奈良・平安時代：集落/住居 中世：古道 文献：6	25 下八幡南遺跡 吉岡町南下 奈良・平安時代：集落/住居 文献：25
8 滝沢古墳 吉岡町下野田 古墳時代：古墳 文献：6	26 片貝Ⅱ遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：26
9 滝沢遺跡 吉岡町下野田 平安時代：集落/住居 文献：7	27 本宿遺跡 吉岡町大久保 古墳時代：古墳 奈良・平安時代：住居 文献：27
10 大久保A遺跡 吉岡町大久保 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：8・9	28 南下古墳群 吉岡町南下 古墳時代：古墳 文献：28・29
11 大久保B遺跡 吉岡町大久保 奈良・平安時代：集落/住居 文献：10	29 桃井東城 吉岡町南下 中世：堀・堀切・土居・戸口・腰郭・のろし台 文献：30
12 清里・陣場遺跡 吉岡町陣場、前橋市池端町 平安時代：集落/住居 文献：11	30 小倉屋敷 吉岡町小倉 中世：堀、土居 文献：30
13 中御所遺跡 吉岡町陣場 平安時代：集落/住居 文献：12	31 野田の内出 吉岡町下野田 中世：堀 文献：30
14 中御所Ⅱ遺跡 吉岡町陣場 古墳時代：道路状遺構・畝状遺構 平安時代：集落/住居 中世：土坑群、溝 文献：13	32 見城 吉岡町下野田 中世：城館址 文献：30
15 金竹西Ⅰ遺跡 吉岡町大久保 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：14	33 桃井館 吉岡町南下 中世：城館址 文献：30
16 金竹西Ⅱ遺跡 吉岡町大久保 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：14	34 大林山城 吉岡町南下 中世：城館址 文献：30
17 金竹西Ⅳ遺跡 吉岡町大久保 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：15	35 長塩屋敷 吉岡町漆原 中世：堀、土居 文献：30
18 金竹西Ⅴ遺跡 吉岡町大久保 縄文時代：集落/住居 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：16	36 漆原城 吉岡町漆原 中世：堀、土居 文献：30

第3章 遺跡地の環境

- 37 瀬来城 吉岡町漆原 中世：堀、堀切、土居、戸口 文献：30
- 38 八木原沖田遺跡 渋川市八木原 古墳時代：水田 文献：31-38
- 39 後田遺跡 渋川市有馬 旧石器：遺物包含層 縄文時代：住居、土坑 古墳時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：49・50
- 40 中井遺跡 渋川市有馬 平安時代：集落/住居 文献：51
- 41 有馬廃寺跡 渋川市有馬寺 弥生時代：集落/住居 奈良・平安時代：集落/住居 文献：52
- 42 半田剣城遺跡 渋川市半田 奈良・平安時代：集落/住居 中世：城館跡 文献：53-56
- 43 半田中原・南原遺跡 渋川市半田 縄文時代：集落/住居 弥生時代：遺物包含層 古墳時代：古墳 奈良・平安時代：集落/住居 文献：57
- 44 半田薬師遺跡 渋川市半田 奈良・平安時代：集落/住居、水田、土坑 文献：58・59
- 45 若宮遺跡 渋川市半田 奈良・平安時代：集落/住居 近世：水田 文献：62
- 46 前橋渋川バイパス吉岡地区（本書）

文献一覧表

- 1：『熊野・辺玉遺跡』吉岡町教委1995
- 2：『三津屋古墳』吉岡町教委1996
- 3：『道城遺跡』吉岡町教委1998
- 4：『道城Ⅱ遺跡』吉岡町教委2005
- 5：『七日市遺跡・滝沢古墳・女塚遺跡』吉岡町教委1986
- 6：『滝沢遺跡』吉岡町教委1997
- 7：『大久保A遺跡Ⅰ』吉岡町教委1986
- 8：『大久保A遺跡Ⅱ』1986
- 9：『有馬遺跡Ⅰ・大久保B遺跡』群馬県教委1989
- 10：『清里・陣場遺跡』群埋文1981
- 11：『中御所遺跡』吉岡町教委2001
- 12：『中御所Ⅱ遺跡』吉岡町教委2005
- 13：『金竹西遺跡』吉岡町教委1994
- 14：『金竹西Ⅳ遺跡』吉岡町教委2004
- 15：『金竹西遺跡Ⅴ』吉岡町遺跡調査会2005
- 16：『金竹西A遺跡・中町遺跡』吉岡町教委1996
- 17：『清里・長久保遺跡』群埋文1986
- 18：『有馬遺跡Ⅰ・大久保B遺跡』群馬県教委1989
- 19：『有馬遺跡Ⅱ』群馬県教委1990
- 20：『有馬条里遺跡Ⅰ』群馬県教委1989
- 21：『有馬条里遺跡Ⅱ』群馬県教委1991
- 22：『有馬条里遺跡沖田地区』渋川市教委1983
- 23：『中村遺跡』渋川市教委1986
- 24：『下八幡南遺跡』吉岡町教委2002
- 25：『片貝Ⅱ遺跡』吉岡町遺跡調査会2001
- 26：『本宿遺跡』吉岡町教委1991
- 27：『群馬県史研究第11号』群馬県1980
- 28：『群馬県史研究第13号』群馬県1981
- 29：『群馬県の中世城館跡』群馬県教委1988
- 30：『市内遺跡Ⅲ』渋川市教委1990
- 31：『市内遺跡Ⅳ』渋川市教委1991
- 32：『八木原・沖田Ⅲ遺跡』渋川市教委1993
- 33：『八木原・沖田Ⅳ・Ⅴ遺跡』渋川市教委1994
- 34：『八木原・沖田Ⅵ遺跡』渋川市教委1995
- 35：『八木原・沖田Ⅶ遺跡』渋川市教委1996
- 36：『八木原・沖田Ⅷ・Ⅸ遺跡』渋川市教委1996
- 37：『八木原・沖田Ⅹ遺跡』渋川市教委1998
- 38：『後田遺跡（旧石器編）』群馬県教委1987
- 39：『後田遺跡Ⅱ』群馬県教委1988
- 40：『市内遺跡ⅩⅣ』渋川市教委2001
- 41：『有馬廃寺跡』渋川市教委1986
- 42：『市内遺跡Ⅶ』渋川市教委1994
- 43：『市内遺跡Ⅸ』渋川市教委1996
- 44：『市内遺跡Ⅹ』渋川市教委1997
- 45：『市内遺跡ⅩⅥ』渋川市教委2003
- 46：『半田中原・南原遺跡』渋川市教委1994
- 47：『半田薬師遺跡』渋川市教委1995
- 48：『市内遺跡Ⅵ』渋川市教委1993
- 49：『若宮遺跡』渋川市教委1998



第6図 周辺の主要遺跡 (1/25000 「渋川」使用)

第4章 遺構と遺物

第1節 古代・中世の遺構と遺物

第1項 概要

前橋渋川バイパス関連遺跡の古代・中世における遺跡は、調査区域南端に位置する万蔵寺廻り遺跡と、中央に位置する十二廻り遺跡からなる。万蔵寺廻り遺跡は南からⅠ～Ⅵに分割された調査区から、十二廻り遺跡はⅠ・Ⅱ区から構成されており、両遺跡とも利根川の河岸段丘縁辺部に位置している。

万蔵寺廻り遺跡では平安時代中期の集落が検出された。集落を構成する遺構は竪穴住居42軒、掘立柱建物跡2棟になるが、この他に時期不明も含めて272基の土坑、井戸1基、溝10条、ピット37基、竪穴状遺構1基が検出されている。集落は台地縁辺に沿って南北に広がりを見せており、遺構の検出はⅣ区・Ⅴ区が他区に比べてやや密度が濃い。検出された遺構と遺物から判断すると、Ⅳ区中程を境目として北側の住居群が若干古い時期の、南側が新しいものと思われる。集落の変遷については後述するが、万蔵寺廻り遺跡における人々の生活は、10世紀後半から11世紀前半にかけて、北から南に移り変わっていったものと考えられる。

Ⅵ区はもっとも範囲の狭い調査区となる。調査区の大部分を、台地縁辺部の急傾斜地が占めており、集落が位置する台地平坦面よりも若干低い地形となる。全体的には、南北に延びる谷状地形となっている。谷上層には近代から現代にいたる客土が分厚く堆積しており、客土下には天明三（1783）年の浅間山噴火に伴う泥流が確認された。泥流は、標高の低い調査区南側に集中的に堆積しており、泥流内からは流出中に巻き込んだと思われる陶磁器類などの遺物が出土している。遺構は検出されていない。

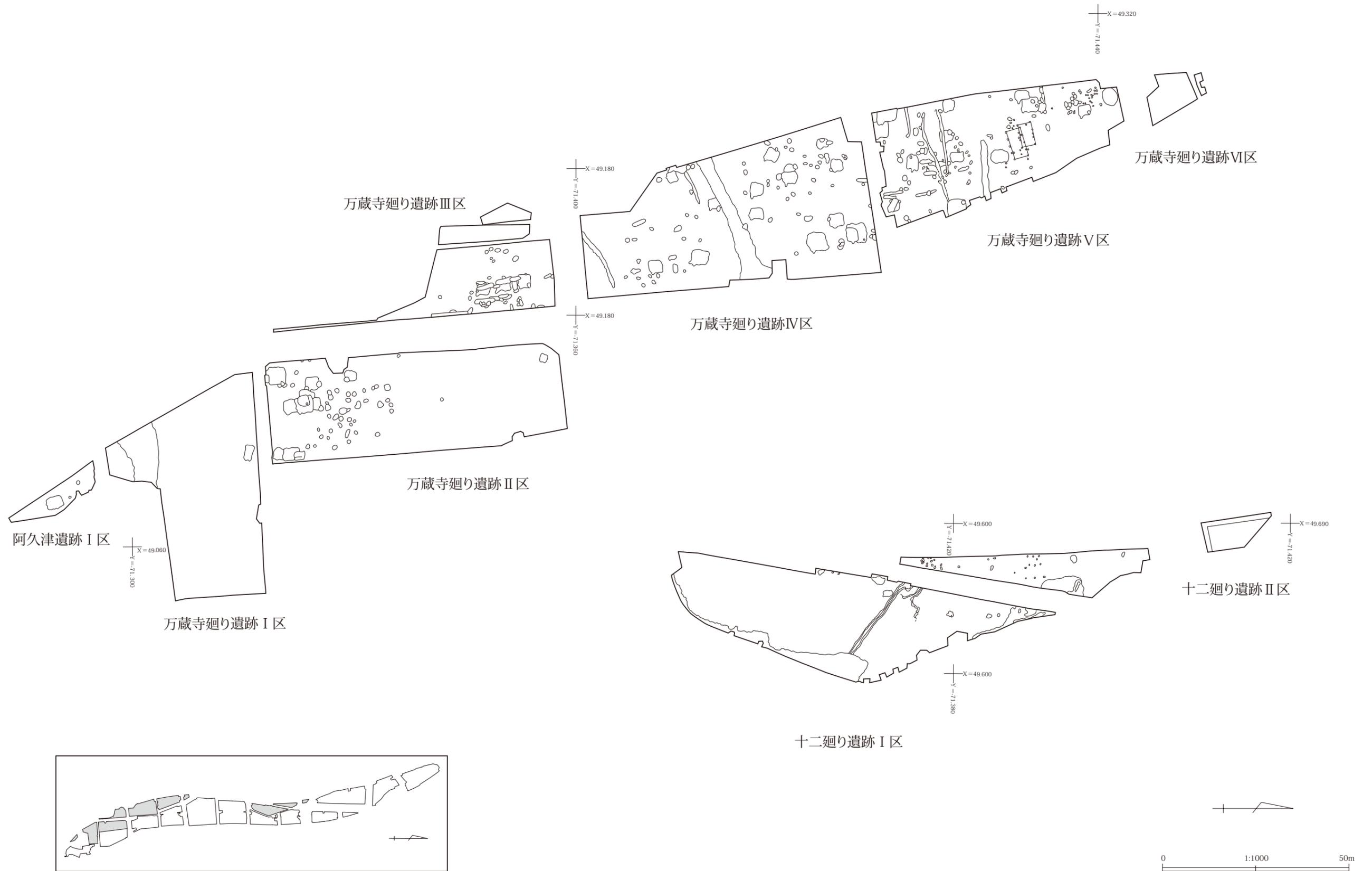
十二廻り遺跡は万蔵寺廻り遺跡と同様に、南北へと延びる台地縁辺部にあたる。調査区はⅠ区とⅡ区から構成されており、Ⅱ区からは調査面積が狭いこともあって遺構は検出されていない。十二廻り遺跡における遺構、遺物は、全てⅠ区から検出されたも

のである。

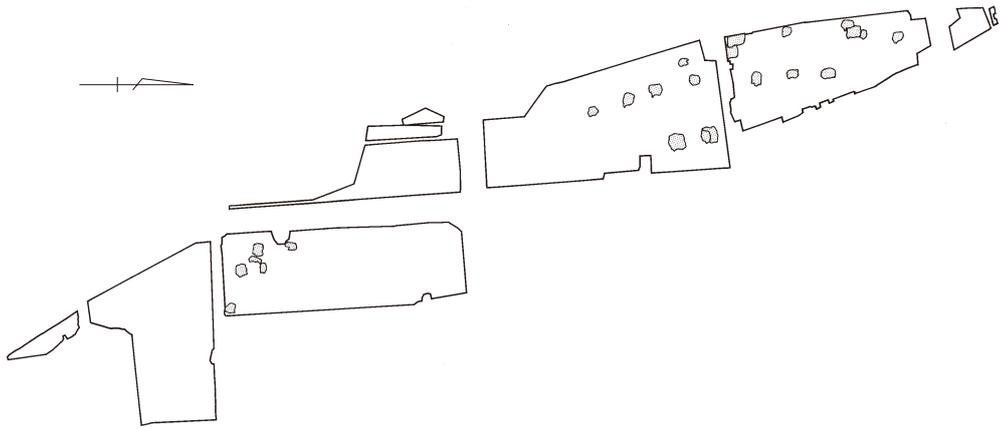
Ⅰ区において検出された遺構は、土坑16基、井戸3基、溝2条、ピット24基である。ただし、Ⅰ区は用水路によって南北に分断されており、用水路南側で検出された遺構は、土坑3基、井戸2基、溝2条、ピット5基である。用水路に面した調査区北端では、谷が検出されている。南側は遺構の検出状況もまばらな状態で、東側調査区域に沿って大規模な攪乱も見られる。用水路北側においては、土坑13基、井戸1基、ピット19基が検出された。また、谷においては東に向かう斜面に沿うような形で、道路状の硬化面が数条検出されている。

十二廻り遺跡における明確な古代の遺構は確認されておらず、時期不明の遺構が大部分を占める。Ⅰ区北側において検出されたピット群には若干の規則性が認められ、中世以降にみられる小規模なピットによる掘立柱建物跡の可能性も考えられたが、確認には至っていない。Ⅰ区では火葬墓と思われる土坑が1基検出され、中世以降に土坑墓として転用された井戸が確認されている。住居など生活遺構が検出されず、明確な遺構が墓のみであるという点から、中世以降は生活圏から距離を置いた墓域であったことも考えられる。万蔵寺廻り遺跡とは同じ台地上に位置するが、万蔵寺廻り遺跡において検出された古代集落との関わりは、本調査では認められなかった。Ⅱ区は現在の道路を挟んでⅠ区の北側に位置し、約289m²ほどの調査区からは遺構は検出されなかった。

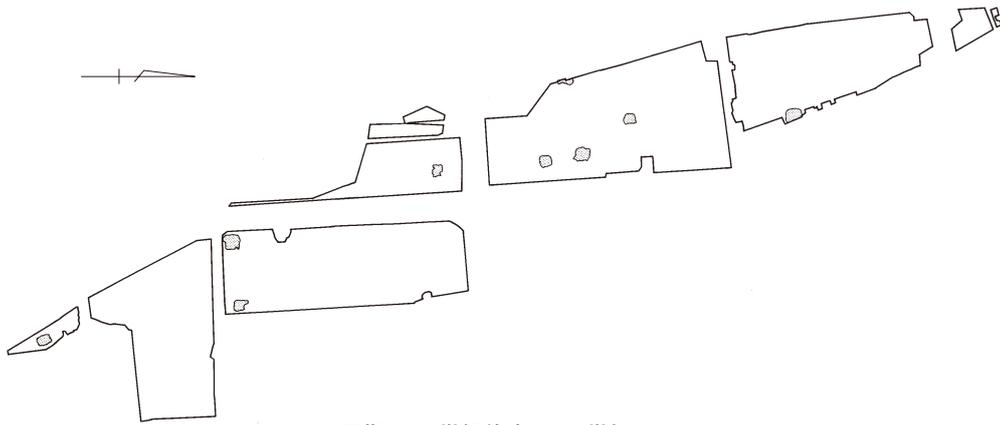
また、万蔵寺廻り遺跡Ⅰ・Ⅱ区の東側に隣接する阿久津Ⅰ区において、竪穴住居が1軒検出されている。阿久津Ⅰ区は大半が低地であり、検出された遺構についても水田が大半を占めるが、万蔵寺廻り遺跡の位置する台地縁辺の一部が調査範囲に入っている。竪穴住居が検出されたのは、阿久津遺跡にわずかに含まれた台地上であり、平安時代中期の遺物が出土している点からも万蔵寺廻り遺跡において検出された集落の一部である可能性が高い。



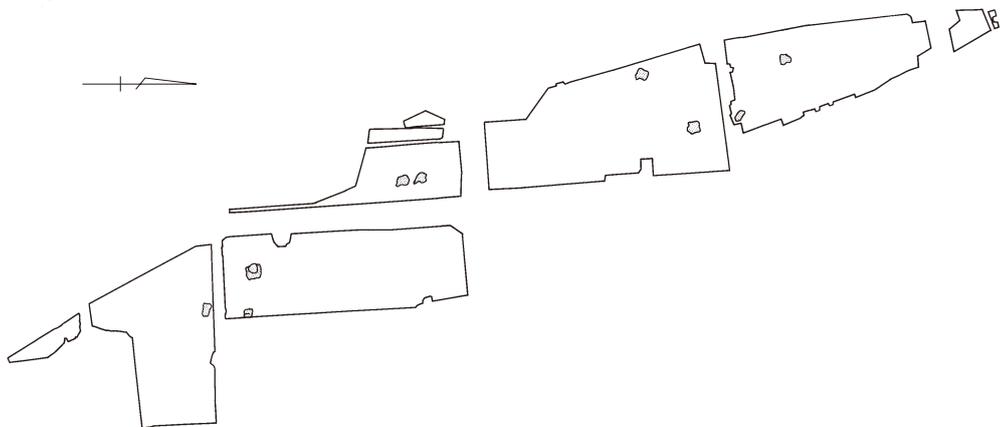
第7図 古代・中世遺構分布図



I期 10世紀後半



II期 10世紀後半～11世紀



II期 11世紀前半～中葉

第8図 竪穴住居の時期別分布図

第2項 阿久津遺跡

(1) 竪穴住居

I区1号住居 (第9～11図 PL. 6)

後世の削平によるものか、遺構上部の大半が失われており、東壁と南東隅、竈の一部のみの調査となった。主軸方位はN-5°-E、長軸長4.35m、短軸長2.9m、最大壁高25cm。竈を南東隅に設けるが、周辺には構造材と思われる礫が多数あり、天井、袖などは損壊している。煙道は、東側に広がる攪乱によって一部壊されているが、比較的良好な状態で検出されている。

竈燃焼部の周辺から、土釜(1)が出土しており、竈周辺の覆土中からは炭化したイネが検出されている。万蔵寺廻り遺跡において検出された集落とは高低差があるものの、同じ台地の縁辺部に位置するものと思われる。出土遺物からも10世紀後半から11世紀の住居と考えられ、万蔵寺廻り遺跡において検出された、台地上に展開する集落の一部であろう。

(2) 土坑

I区1号土坑 (第12図 PL. 6・7)

水田の西側にあたる台地部分にある。平面形は円形、長軸方位はN-63°-Eを示す。長軸長1.00m、

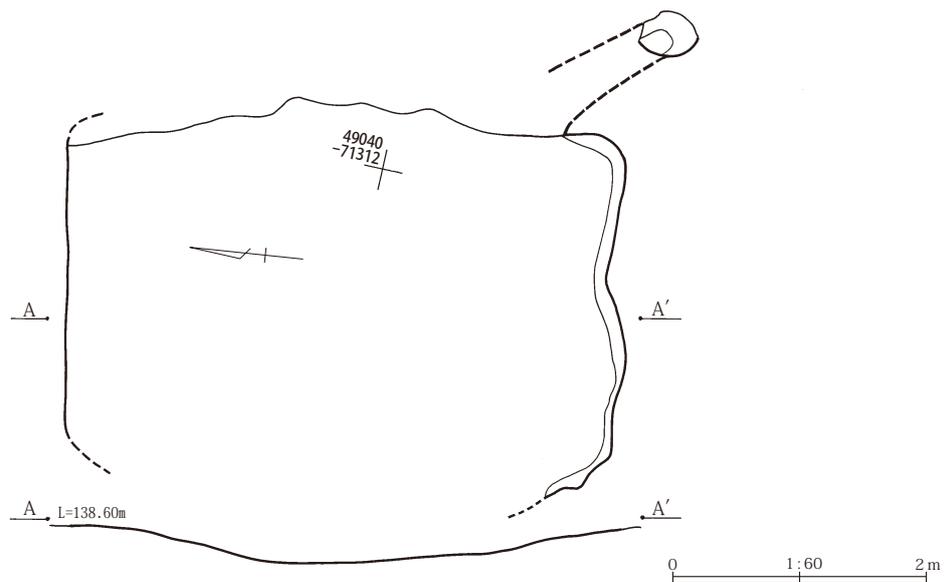
短軸長0.90m、深さ40cm。覆土は少量の二ツ岳軽石を混入する粘質土で、出土遺物はない。時期、性格は不明である。

I区2号土坑 (第12図)

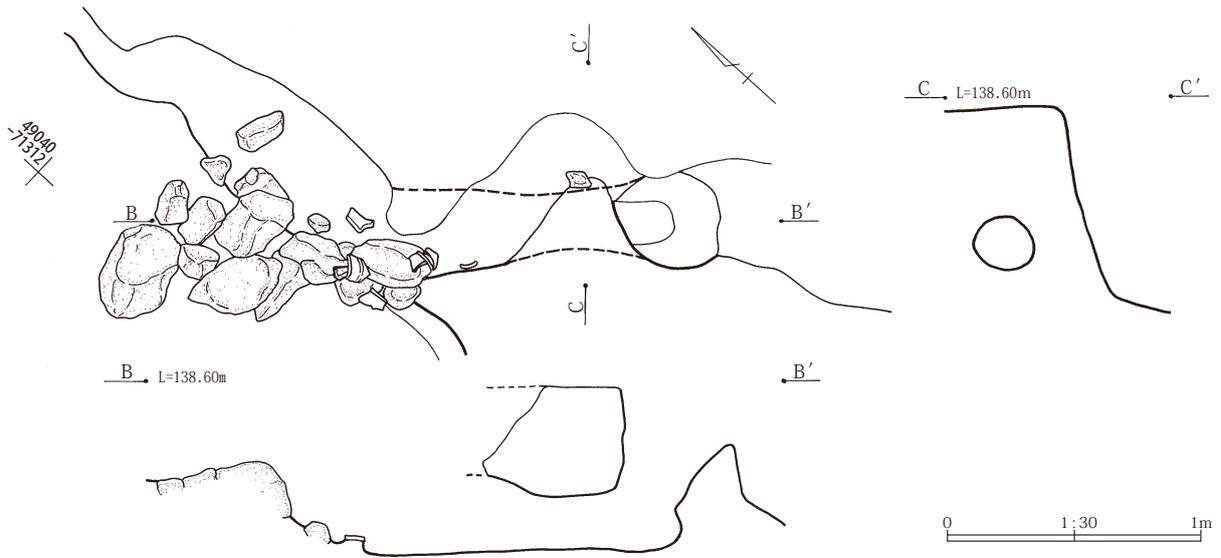
1号住居北側にある。平面形は円形、長軸方位はN-70°-E。長軸長64cm、短軸長60cm、深さ9cm。浅く小規模な土坑で、覆土には二ツ岳軽石とAs-Bを混入する。出土遺物はない。12世紀以降の土坑と考えられる。

III区遺構外出土遺物 (第13図 PL. 7)

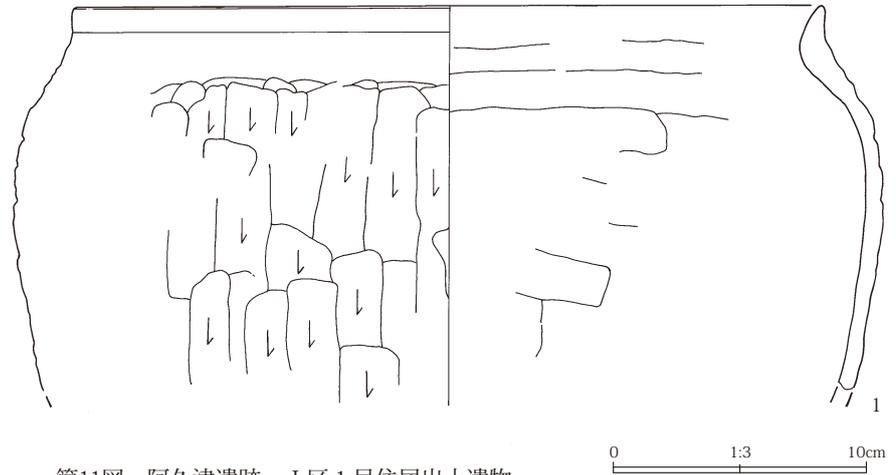
III区は万蔵寺廻り遺跡II区の東に接する調査区で、天明泥流下の水田が見つまっている。ここから酸化焰焼成の須恵器の坏底部破片が出土している。左回転の轆轤成形で、底部外面に墨書があるが判読できない。



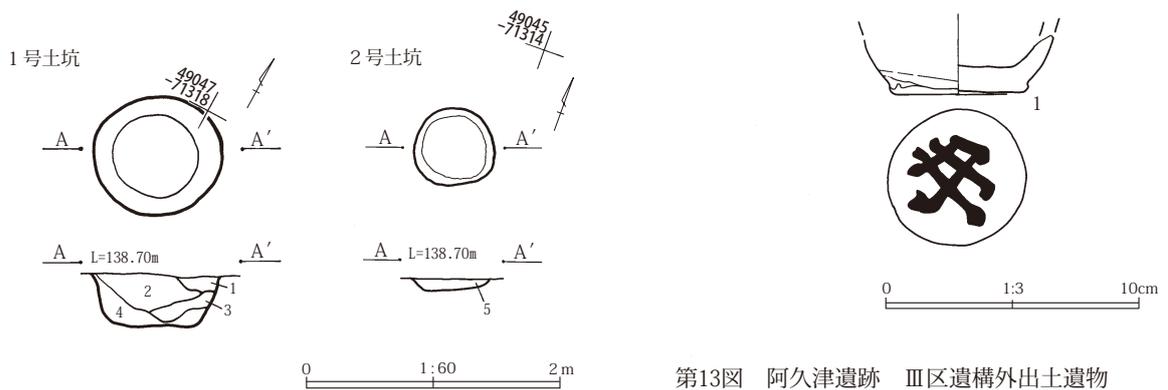
第9図 阿久津遺跡 I区1号住居



第10図 阿久津遺跡 I区 1号住居竈



第11図 阿久津遺跡 I区 1号住居出土遺物



第13図 阿久津遺跡 III区遺構外出土遺物

I区土坑土層観察所見

- 1 オリーブ褐色粘質土 若干のニツ岳軽石と棒状の黒褐色土小ブロック含む。
- 2 黄褐色粘質土 若干のニツ岳軽石粒、1層小ブロック含む。
- 3 黄褐色粘質土 若干のニツ岳軽石粒、2層小ブロック含む。
- 4 にぶい黄褐色粘質土 若干のニツ岳軽石粒、2・3層土小ブロック含む。
- 5 にぶい黄褐色粘質土とAs-B混土黒褐色の小ブロック混土。少量のニツ岳軽石粒含む。

第12図 阿久津遺跡 I区土坑

第3項 万蔵寺廻り遺跡

(1) 竪穴住居

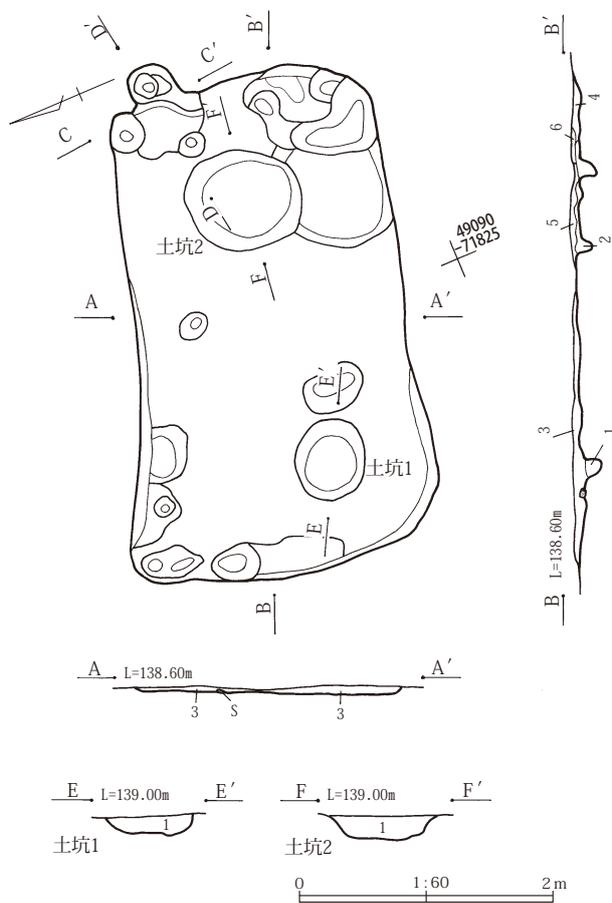
I区1号住居 (第14～16図 PL. 7・8)

位置 X=49.089/Y=-71.325グリッド 調査区北端に

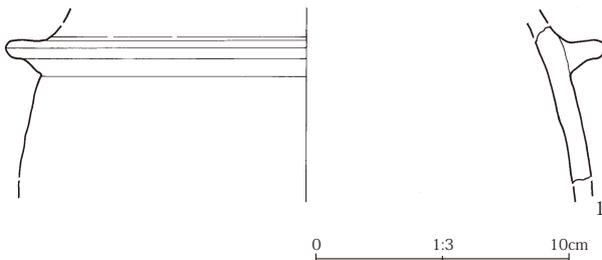
位置し標高138.50mの南東向き緩斜面に立地する。

形態 東西に長軸をおく長方形に近い形状が、北壁西端が僅かに北へ曲がっているため、全体に歪む。長軸方位はN-75°-W。

規模 長軸長3.94m、短軸長2.14m。



第14図 万蔵寺廻り遺跡 I区1号住居

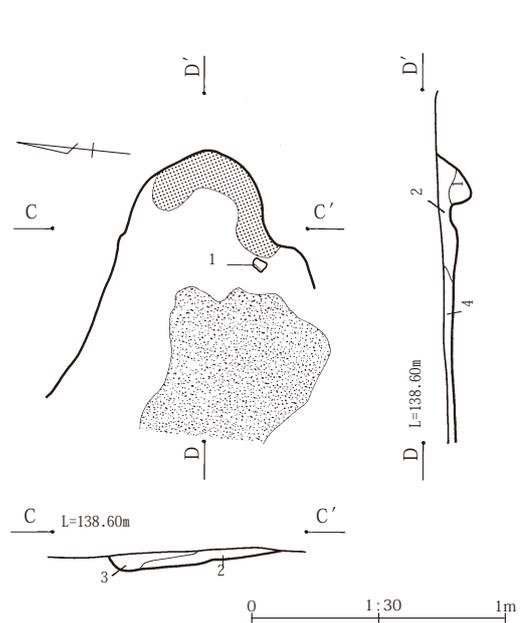


第16図 万蔵寺廻り遺跡 I区1号住居出土遺物

床・壁 削平のため部分的にしか確認されていないが、Hr-FP、炭質物を含む暗褐色土によって掘り方を埋め、床面を構成する。床構成土には焼土ブロックも含まれる。壁はほぼ失われ、南北壁のみ5～10cmほどの立ち上がりを残している。

掘り方 南東、北西隅に不定形の掘り込みが見られる。東と南西隅には楕円形の土坑がある。南西隅の土坑1は長径65cm、短径55cm、深さ20cm。東の土坑2は長径90cm、短径80cm、深さ20cm。

竈 北東隅を掘り込んで構築されている。燃焼部は



第15図 万蔵寺廻り遺跡 I区1号住居竈

I区1号住居土層観察所見

- 1 黒褐色 地山砂層中心。締まり弱い。シルトブロック混。
- 2 黒褐色 地山砂層多い。締まり弱い。シルトブロック混。
- 3 暗褐色土 ニツ岳軽石粒含む。やや締まる。
- 4 暗褐色土 ニツ岳軽石粒極少量含む。締まっている。
- 5 ニツ岳軽石粒・焼土ブロック含む。炭化物多く含む。締まっている。床面構成土。
- 6 暗褐色土 炭化物多く含む。やや締まる。

I区1号住居内土坑1土層観察所見

- 1 暗褐色土 上位にニツ岳軽石粒集中。下位やや少ない。締まっている。

I区1号住居内土坑2土層観察所見

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石粒含む。やや締まる。炭化物、焼土の混入はない。

I区1号住居竈土層観察所見

- 1 褐色土 焼土斑含む。ニツ岳軽石粒少量含む。やや締まる。
- 2 褐色土 焼土ブロック、炭化物多く含む。締まっている。
- 3 褐色土 全体が焼土化し、赤変する。締まり弱い。
- 4 黒色の灰主体。固く締まっている。焼土ブロック少量含む。

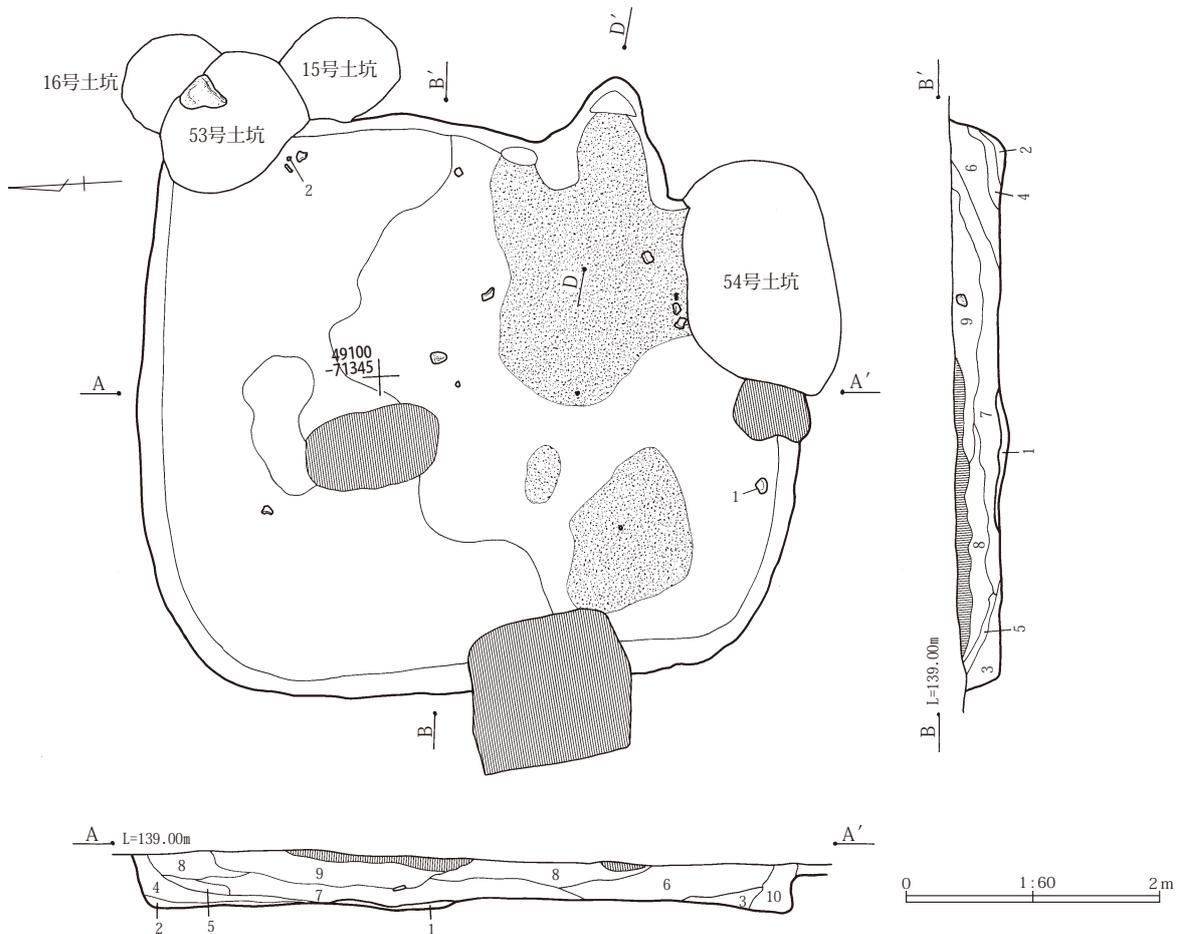
壁外にあり、住居壁から30cmほど張り出す。主軸方位はN-105°-E。燃烧部を一段深く掘り込んで煙道に接続していたものと思われる。支脚の据え方と思われる小ピットが、燃烧部中央からやや左に寄った位置にあり、住居北東隅に当たる竈脇と焚き口前にも同様の小ピットがあるが、支脚や袖石は見つかっていない。

遺物 竈燃烧部から羽釜（1）の破片が出土している。竈から炭化したイネとコムギが僅かに得られた。

所見 出土遺物が乏しいが、11世紀代の羽釜が出土していることと、規模や竈主軸方位などから、11世紀前半から中葉の住居と考えられる。長軸方位を東西におく点、北東隅に竈を構築している点に形態的な特徴がある。いずれも本遺跡における他の住居には見られない特徴である。

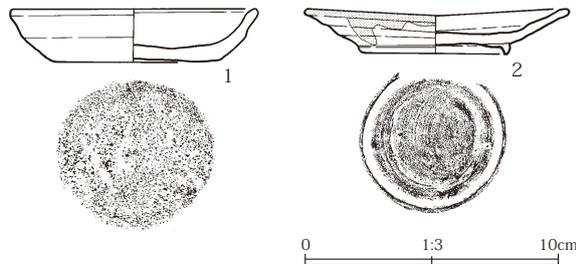
II区1号住居（第17～20図 PL. 8～10）

位置 X=49.190/Y=-71.345 調査区南西隅の、標高



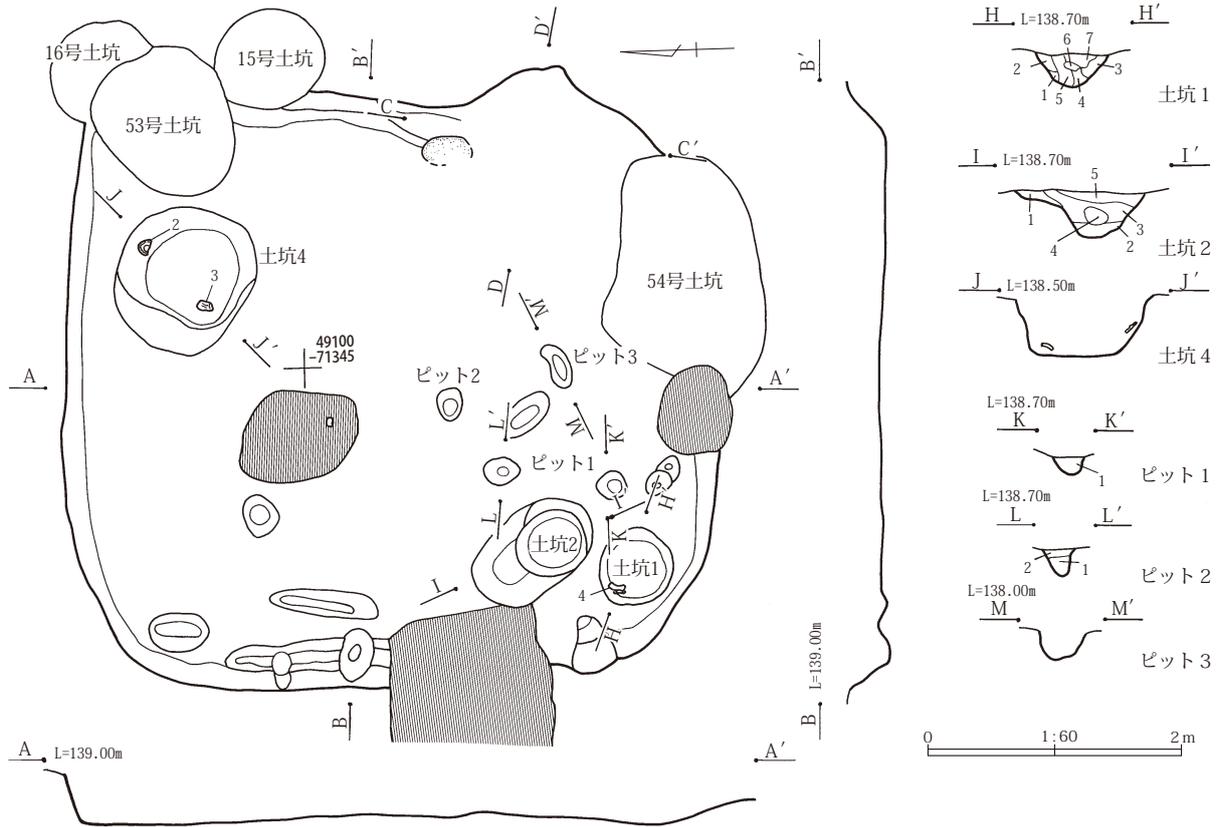
II区1号住居土層観察所見

- 1 極固く締まった中～細砂。床面はこの上面。
- 2 中砂中心。径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。3層の土粒で汚れる。壁面崩落土。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒3%。炭化物少量含む。
- 4 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石粒1%。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石粒1%。鉄分10%。
- 6 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒3%。
- 7 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒5%。炭化物少量含む。
- 8 暗褐色壤土 ニツ岳軽石粒7%。締まっている。
- 9 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒3%。炭化物片含む。
- 10 暗褐色砂壤土砂質土 ニツ岳軽石粒10%。



第17図 万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居・出土遺物（1）

第4章 遺構と遺物



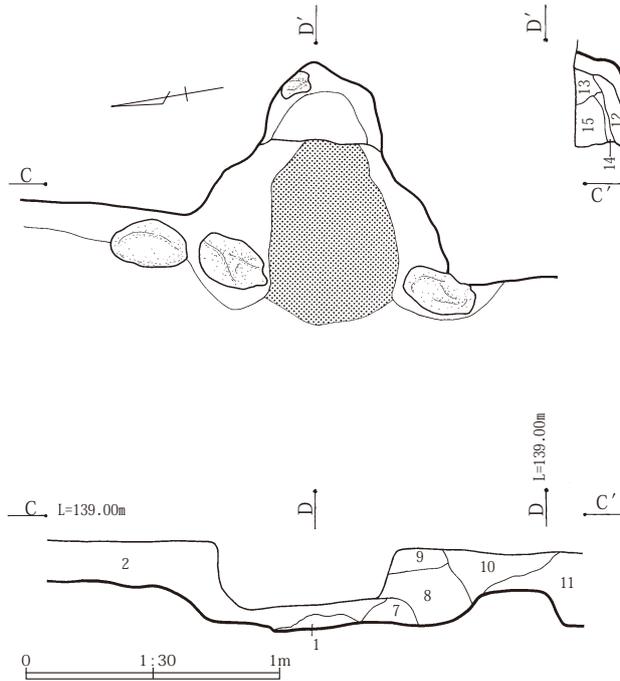
第18図 万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居掘り方・ピット・土坑

II区1号住居内土坑1土層観察所見

- 1 暗褐色土 砂壤土 炭化物粒少量含む。
- 2 褐色シルト質壤土 焼土粒、炭化物粒少量。
- 3 褐色砂壤土 ニツ岳軽石粒少量含む。
- 4 黒褐色シルト質埴壤土 ニツ岳軽石少量含む。
- 5 黒褐色砂壤土 径10mmのニツ岳軽石粒含む。締まる。
- 6 褐色土 壤質砂土。径15mm大のニツ岳軽石粒含む。
- 7 褐色壤土 径5mmのニツ岳軽石、炭化物、焼土粒混。

II区1号住居内土坑2土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 炭化物、黒色灰、径10mm大のニツ岳軽石粒少量。
- 2 オリーブ褐色土 砂壤土 締まっている。
- 3 暗褐色壤土 径5mmのニツ岳軽石粒、焼土少量、炭化物含む。
- 4 褐色壤土 ブロック状。径10mmのニツ岳軽石粒多い。
- 5 褐色壤土 炭化物。黒色灰。焼土粒小ブロック。径10mm大のニツ岳軽石粒多く含む。やや締まる。



II区1号住居内ピット1土層観察所見

- 1 暗褐色土 壤土～砂壤土 炭化物粒。

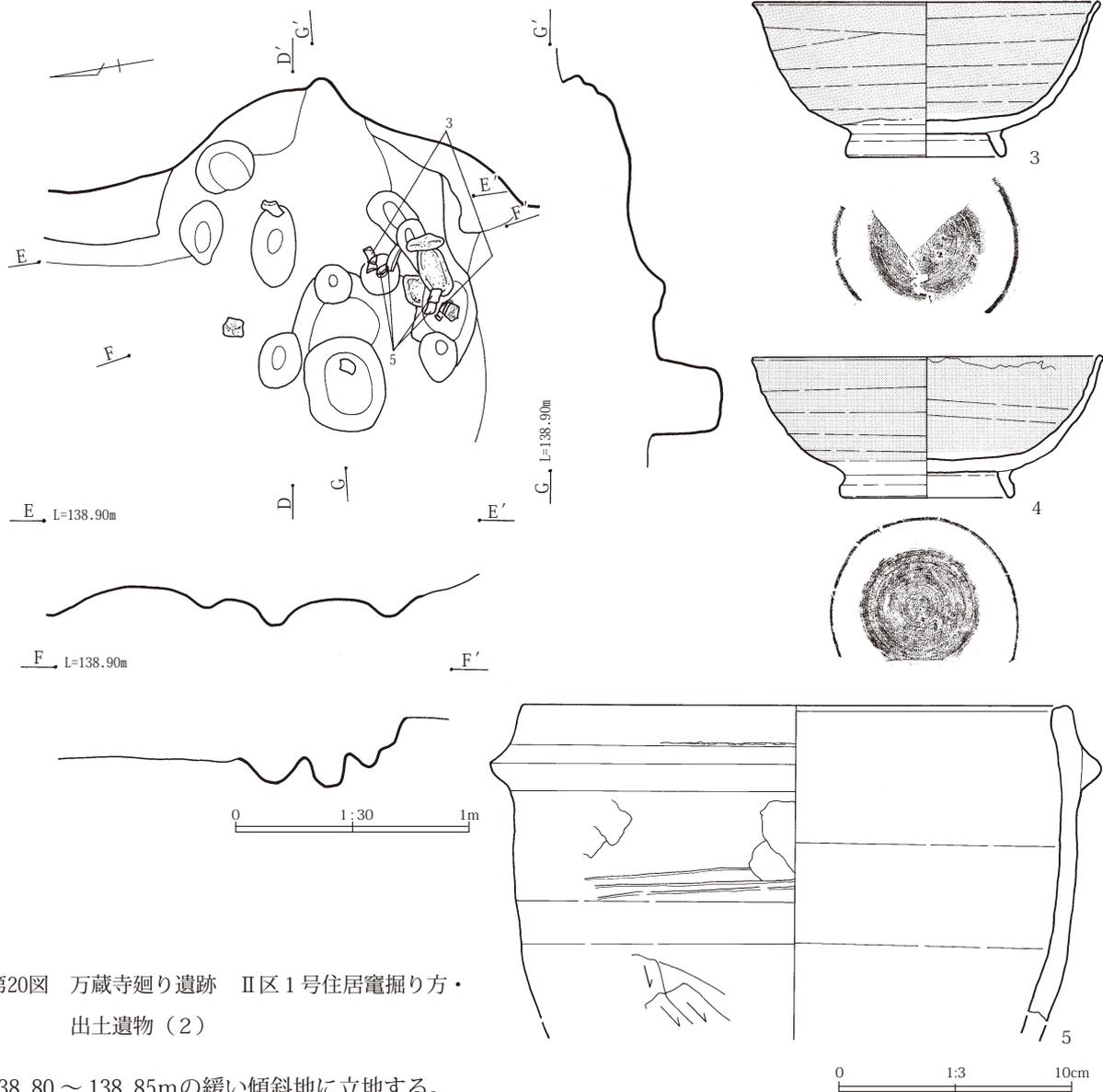
II区1号住居内ピット2土層観察所見

- 1 暗褐色土 壤質砂土。
- 2 褐色壤土 焼土斑7%。炭化物粒。

II区1号住居竈土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 炭化物粒、黒色灰、焼土。
- 2 褐色壤土 炭化物粒、黒色灰、焼土小ブロック多く含む。粘質がやや強い。竈構築土の崩落。
- 3 褐色シルト質壤土 床構成。やや焼化。
- 4 褐色シルト質壤土 床構成土。
- 5 黒色の灰層。締まり弱い。竈前ピットの縁部分。
- 6 黒色の締まった灰層。シルト質土が焼土化した層形成。
- 7 暗褐色壤土 径10mm大のニツ岳軽石含む。焼土粒含む。
- 8 褐色壤土 径10mm大のニツ岳軽石粒含む。粘性有り。土を貼って2層を塗る。
- 9 暗褐色壤土 径15mmのニツ岳軽石粒少量。炭化物、焼土粒含む。
- 10 細砂と円磨された径30mm大のニツ岳軽石粒。
- 11 細砂、シルト。
- 12 暗褐色土 焼土。
- 13 暗褐色砂壤土 焼土不定形斑3%。径5mm大のニツ岳軽石粒を含む。
- 14 黒褐色壤土 径5mmのニツ岳軽石粒含む。
- 15 黒褐色壤土 径10mmのニツ岳軽石粒含む、炭化物少量含む。

第19図 万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居竈



第20図 万蔵寺廻り遺跡 II区1号住居竈掘り方・出土遺物(2)

138.80～138.85mの緩い傾斜地に立地する。

形態 南壁が短い隅丸の台形を示し、南北に長軸をおく。長軸方位はN-2°-E。北東隅を15・16・53号土坑に、南東隅を54号土坑に、西壁の一部を攪乱に切られる。

規模 長軸長5.12m、短軸長4.61m。

床 緩やかな起伏があり、住居中央部が僅かに窪むが、上に中～細砂があり、ほぼ平坦に作られる。南壁に幅15～25cmの壁周溝が掘られるが、周回せず北西隅の手前で途切れている。南西隅には炭質物の集積が見られる。

壁 上方に開き気味に立ち上がる。壁高約40cm。

掘り方 南西、北東両隅に土坑、ピットが集中す

る。南西隅の土坑1は長径60cm、深さ25cm、土坑2は長径105cm、深さ35cm。土坑2覆土には炭質物と焼土ブロック、黒色灰が目立つ。北東の土坑は長径120cm、深さ45cm。

竈 燃焼部上層を49号土坑に切られる。東壁の中央南寄りを掘り込んで構築する。主軸はN-103°-E。地山を掘り込んでから粘質の褐色土を貼り、焚き口両側に袖石を立てる。さらに2層土を上塗りして全体を構築する。燃焼部は壁外にあり、壁から約60cm張り出す。底面は焼土化している。支脚は見つっていない。焚き口前には長径80cm、深さ60cmのピットが掘られ、内部からササゲ属とマメ科の炭化子葉

第4章 遺構と遺物

が得られた。灰層以下からはイネ、コムギ、キビ、マメ類、ナス属の炭化種実も見つかっている。

遺物 南壁際の床面からやや浮いて須恵器坏（1）、竈焼成面に密着して灰釉陶器の碗（3）、焚き口部近くから羽釜の破片（5）が出土している。4号土坑からは灰釉陶器の皿（2）、1号土坑から同じく灰釉陶器の碗（4）が出土している。

所見 灰釉陶器や羽釜から見て、10世紀後半から11世紀にかけての住居であろう。長軸方位や規模、竈のあり方からも同時期の特徴を示している。

II区2号住居（第21～24図 PL.10・11）

位置 X=49.100/Y=-71.325 II区南東隅に位置し、標高138.90mの緩い傾斜地に立地する。北東部を4・5号住居に切られており、南側では3号住居を切っている。

形態 東壁は調査区外だが、南北に長軸をおく隅丸長方形と推定される。長軸方位は、N-5°-W。

規模 長軸長4.50m、残存短軸長3.50m。

床・壁 北側に緩やかな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られる。西壁から北西隅にかけて幅10～30cmの壁周溝が巡り、壁はやや開き気味に上方へ立ち上がる。最大壁高は36cm。

掘り方 南西隅と中央に土坑がある。南西隅の土坑1は長径80cm、深さ45cm。中央の土坑2は長径60cm、深さ30cm、土坑3は長径90cm、深さ15cmの規模である。南東隅にも土坑状の落ち込みがある。

竈 調査範囲内では明確に確認できなかったが、調査区外と接する南東隅周辺に石が散乱しており、南東隅に構築されていた可能性がある。

遺物 中央部の床面に密着した状態で羽釜の破片（2）が出土している。平瓦破片（1）は、南壁際の床面からやや浮いた状態で出土したものである。

所見 覆土最上層がAs-Bを含むことから、12世紀初頭の時点で既に住居は廃絶し、埋没段階にあったと考えられる。2号住居に切られる3号住居ではAs-Bは見られないが、10世紀後半の遺物が出土している。2号住居出土遺物も同様であり、10世紀後半から11

世紀にかけての住居と考えられる。

II区3号住居（第21～23・25図 PL.10～12）

位置 X=49.100/Y=-71.325 北壁をII区2号住居に切られる。

形態 南北に長軸をおく長方形と推定され、長軸方位はN-18°-E。東壁は中ほどで、やや西に曲がり、全体に歪む。

規模 2.83m、南北軸の残存長2.44m。

床・壁 僅かな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られる。壁はやや開き気味に上方へ立ち上がる。最大壁高24cm。

竈 東壁中央付近に構築される。地山を掘り込み、燃烧部脇には構築材の据え方と思われるピットを掘り込んでいる。他の住居とは異なり、燃烧部は壁外に張り出していない。焚き口相当部分の両脇からは石が多数出土しており、これらの石とロームを用いて構築していたものと考えられる。竈の覆土中からはタデ科、マメ科の炭化種実が僅かに得られた。

遺物 須恵器の坏4個体（1～4）、内面に研磨痕の残る碗（5）、足高高台碗（6・7）、灰釉陶器の皿（8）、羽釜の底部破片（9）が出土している。灰釉陶器は虎溪山1号窯式期の特徴を備える。5・7・9は竈燃烧部からの出土、2・3・6は竈袖部からの出土である。1は南部の床面よりやや浮き、4も南部の床面近くから出土している。8は西壁際の床面近くからの出土である。

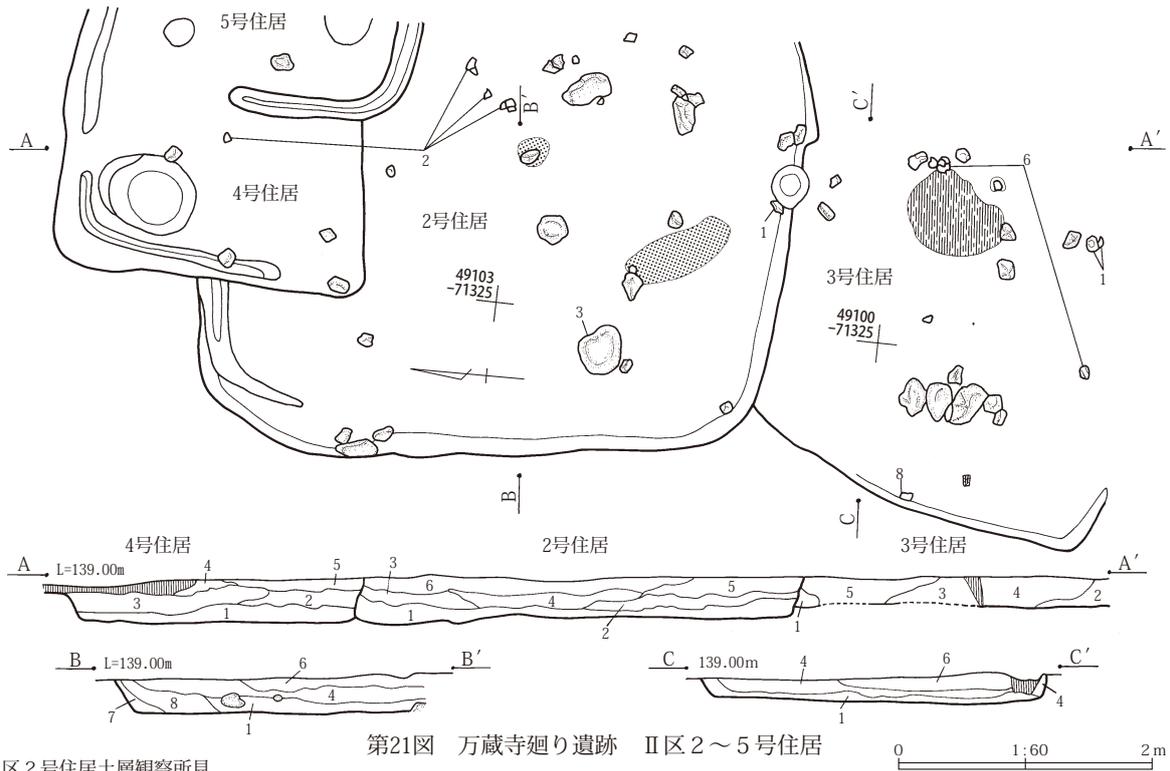
所見 3号住居覆土にはAs-Bは含まれないため、12世紀初頭までには完全に埋没していたと考えられる。床面から出土している足高高台碗の特徴から、10世紀後半の住居と考えられる。

II区4号住居（第21・22図 PL.10・13）

位置 X=49.100/Y=-71.325 2号住居の北壁を切り、南東隅では5号住居に切られる。住居東側は調査区外にあたり、東壁は未調査となっている。

形態 方形もしくは長方形と思われるが東側が未調査のため正確な平面形、長軸方位は把握できない。

規模 南北軸2.46m、残存東西軸2.1m。



第21図 万蔵寺廻り遺跡 II区2～5号住居

II区2号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石含む。粘性強い。縮まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石1%、炭化物片含む。やや縮まる。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石5%。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石含む。縮まりやや弱い。炭化物少量含む。
- 5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石10%。縮まっている。
- 6 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石3%。As-B多く含む。固く縮まっている。
- 7 暗褐色土 壤質砂土。壁面砂層の崩落土中心。
- 8 黒褐色壤土 ニツ岳軽石1%。暗褐色土の円形斑含む。縮まりやや弱い。

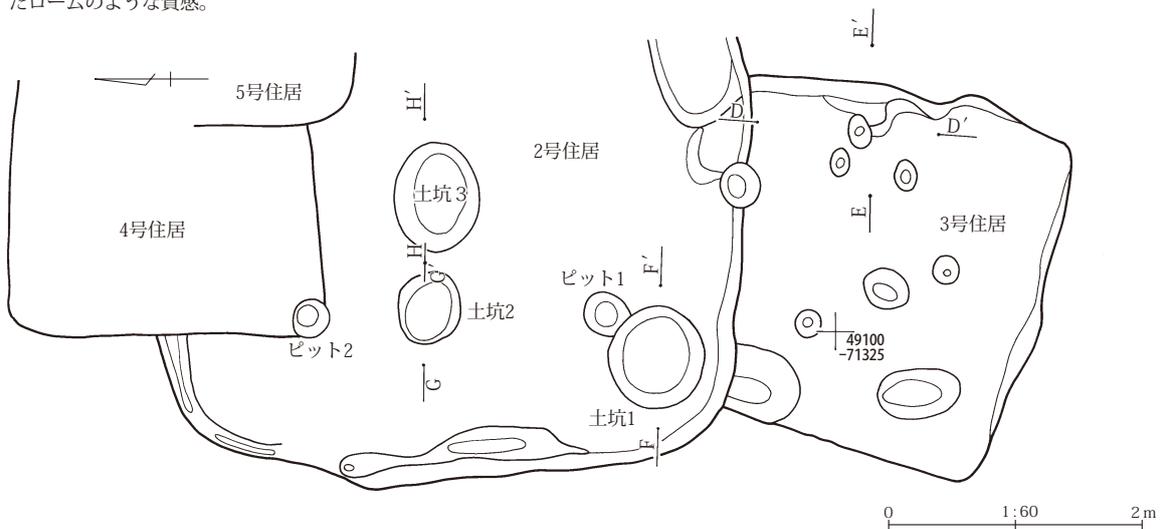
II区3号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径5mmのニツ岳軽石、炭化物含む。縮まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 径5mm大のニツ岳軽石少量含む。粘性有り。崩れたロームのような質感。

- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石10%。炭化物粒多く含む。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石5%。縮まっている。
- 5 黒褐色壤土 径5mm大のニツ岳軽石多く含む。径50mmのニツ岳軽石有り。炭化物多く含む。縮まっている。
- 6 縮まりやや弱い。炭化物、焼土少量含む。

II区4号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石1%。縮まり弱い。炭化物含む。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石3%。縮まっている。炭化物少量含む。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石10%。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石3%。固く縮まっている
- 5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石5%。固く縮まっている。As-B含む。



第22図 万蔵寺廻り遺跡 II区2～5号住居掘り方

第4章 遺構と遺物

床 地山と2号住居の覆土を掘り込んで、そのまま床面としており、本住居の床面が2号住居の床面とほとんど同じ高さとなっている。西壁から北壁にかけて、壁から5～25cm離れた位置に壁周溝を巡らす。壁周溝は幅10cmほど、深さ0.5～3cmほどあり、北西隅を回った地点で一端途切れるが、北壁に沿って調査区外へと続く。2号住居と同じく、最上層にAs-Bを含む、固くしまった黒褐色土層を覆土としている。

壁 開き気味に上方へ立ち上がる。壁高最大36cm。

遺物 遺物は出土していない。

所見 出土遺物がないため、明確な住居の時期は決定できないが、覆土の上層にAs-Bが多く含まれる点から見て、12世紀初頭までには廃絶し、埋没する過程にあったと推測できる。10世紀後半から11世紀にかけてのものと思われる2号住居を切っていることから、11世紀代の住居と考えられる。

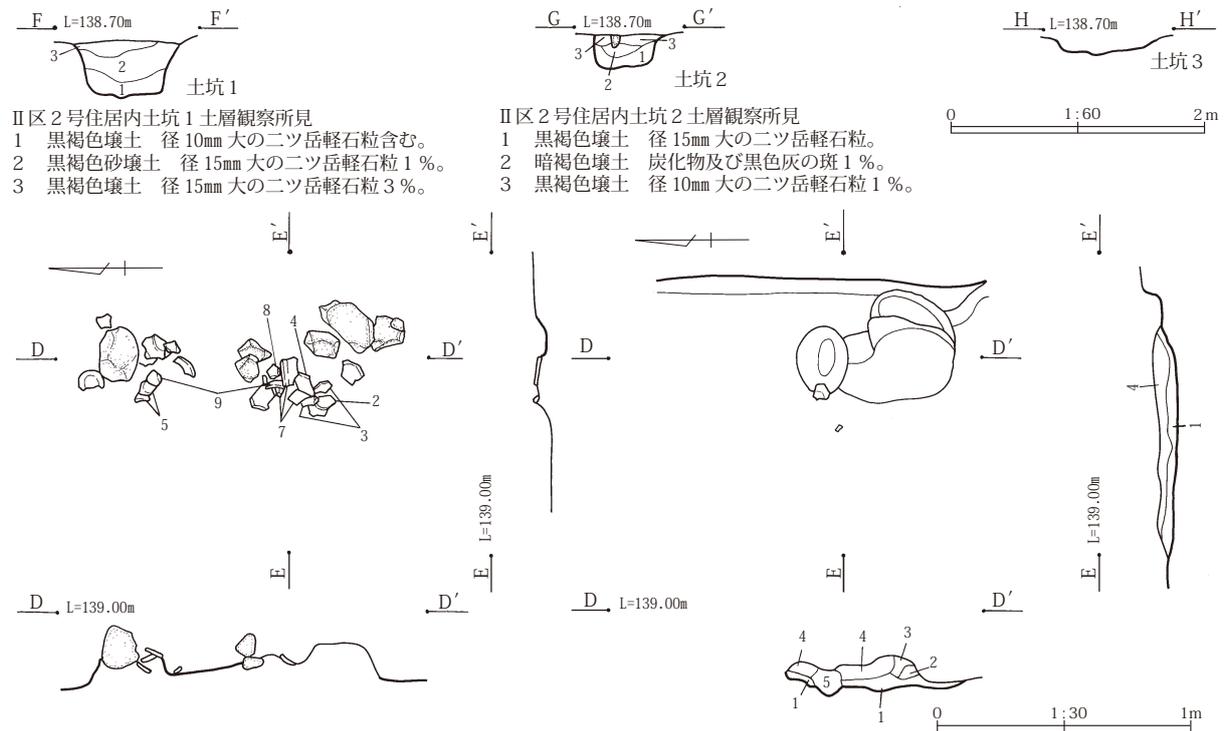
II区5号住居 (第21・22図 PL.10・13)

位置 X=49.100/Y=-71.325 2・4号住居を切っている。遺構のほとんどは調査区外のため未調査となっている。

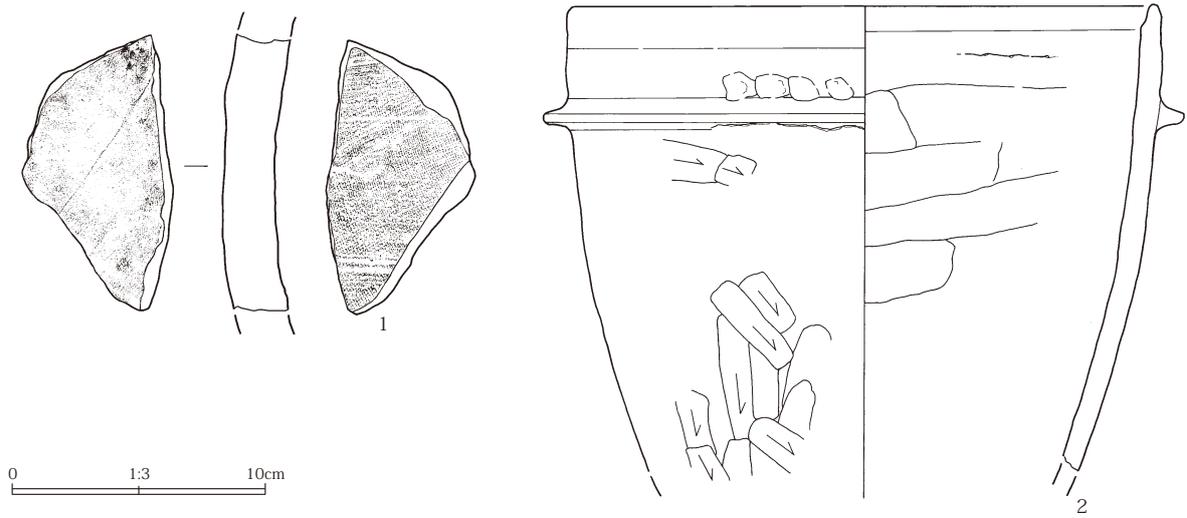
形態 遺構としては南西隅の壁周溝しか確認されていない。壁周溝は幅14～20cmほど、深さ1～3cmの浅いもので、南壁から南西隅を回った地点で途切れている。

遺物 遺物は出土していない。

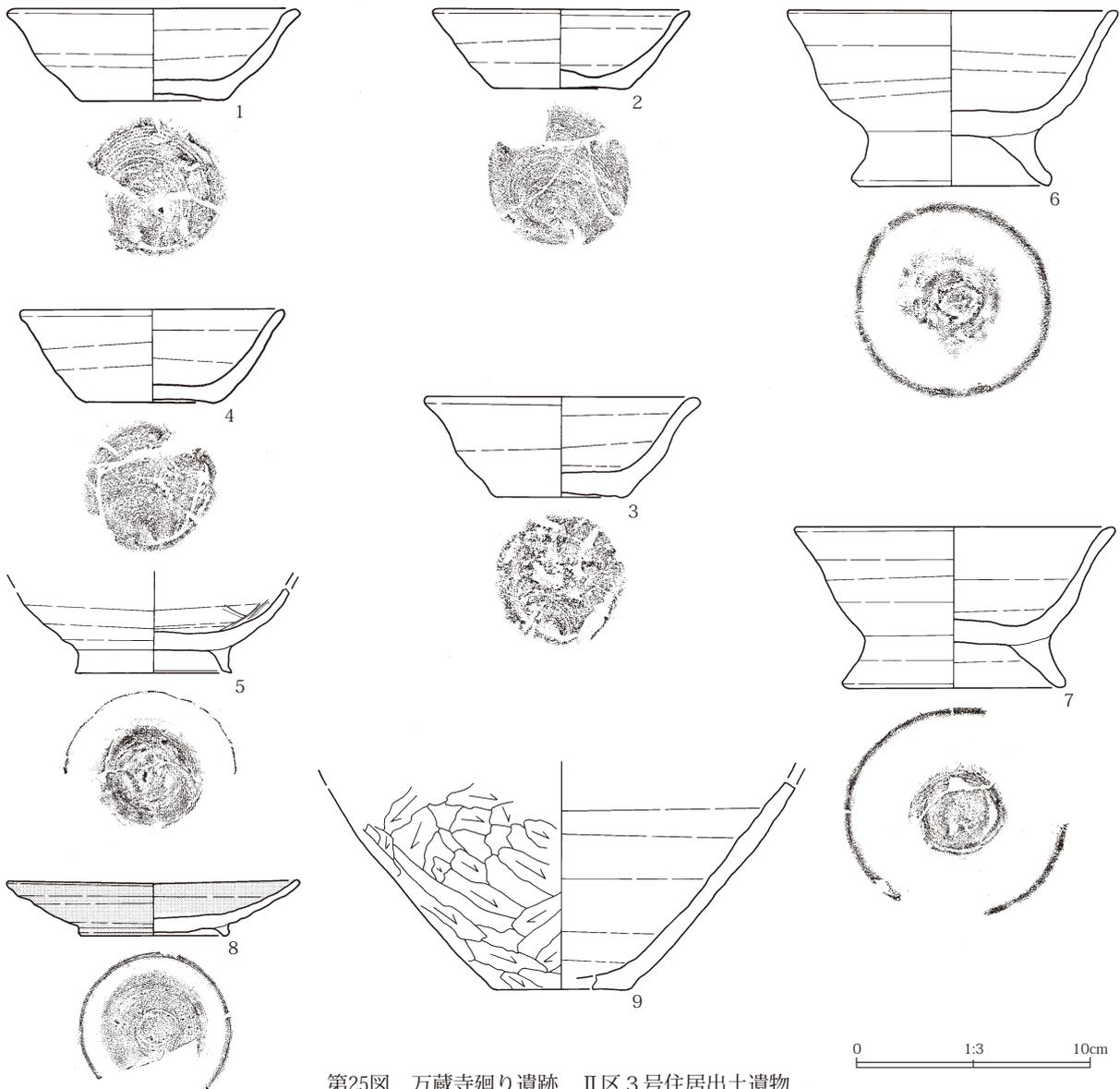
所見 住居の平面形、規模などはわからない。出土遺物はなく、住居の時期も決定できないがAs-Bを覆土中に含む、10世紀後半から11世紀代の2号住居、11世紀代の住居と考えられる4号住居を切っている点から見て、11世紀代の住居である可能性が高いと思われる。



第23図 万蔵寺廻り遺跡 II区2号住居土坑・3号住居竈



第24図 万蔵寺廻り遺跡 II区2号住居出土遺物



第25図 万蔵寺廻り遺跡 II区3号住居出土遺物

第4章 遺構と遺物

II区6号住居 (第26図 PL.13)

位置 X=49.120/Y=-71.345 II区南西部に位置し、標高138.90mの緩い傾斜地に立地する。

形態 南北に長軸をおく長方形に近い形状を呈するが、全体的に歪みが見られ、西壁から南西隅にかけて丸みを帯びる。南東隅を51号土坑に切られる。長軸方位はN-11°-W。

規模 長軸長3.50m、短軸長2.73m。

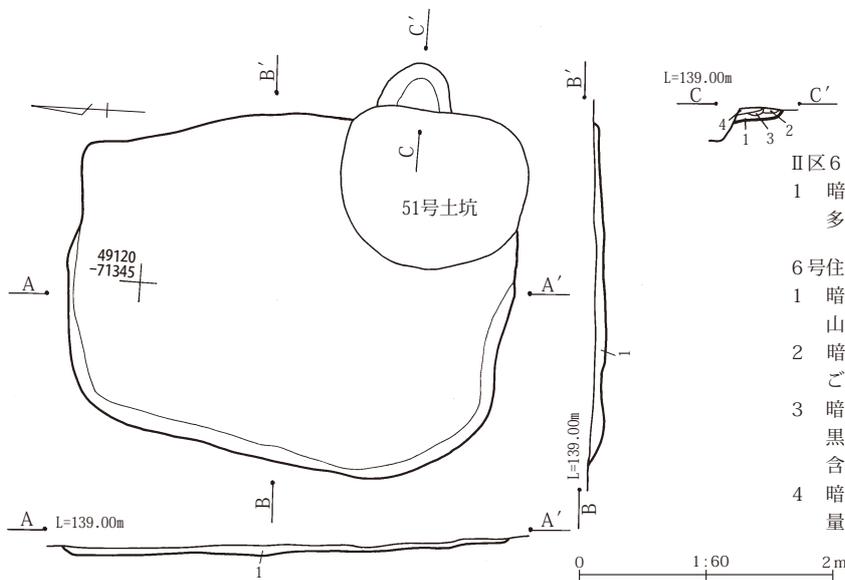
床・壁 削平によって住居の大半が失われ、かろうじて掘り方底面が残っている。底面は西側及び南側

で波打つが、ほぼ平坦に作られる。固くしまった暗褐色土が床構成土と思われる。残存する壁の立ち上がりは最大8cm。

竈 東壁南端を掘り込んで構築するが、焚き口から燃烧部にかけて51号土坑に切られる。燃烧部は壁外に40cm張り出しており、やや赤変した地山の上に、シルト、焼土を含む黒色灰が堆積している。

遺物 出土遺物はない。

所見 遺物はないが、住居の形態は本遺跡における10世紀後半頃の住居と共通する。



II区6号住居土層観察所見

1 暗褐色土 壤質砂土。径10mmの二ツ岳軽石粒多く含む。固く締まっている。

6号住居竈土層観察所見

1 暗褐色壤土 径15mmの二ツ岳軽石粒10%。地山。やや赤変。

2 暗褐色土 壤質砂土。径5mmの二ツ岳軽石粒ごく少量含む。炭化物粒含む。

3 暗褐色砂壤土 焼土ブロック含む。炭化物及び黒色灰多く含む。径7mmの二ツ岳軽石粒少量含む。

4 暗褐色壤土 シルトブロック含む。炭化物粒少量含む。焼土粒少量含む。締まっている。

第26図 万蔵寺廻り遺跡 II区6号住居

II区7号住居 (第27～30図 PL.13・14)

位置 X=49.106/Y=-71.340 II区南端に位置し、標高138.80～138.85mの緩い傾斜地に立地する。

形態 南北に長軸をおく長方形で、長軸方位はN-10°-W。北壁を9号住居に切られる。

規模 長軸長4.50m、短軸長3.47m。

床 緩やかな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られる。住居中央には長径80cm、深さ8cm、楕円形の土坑状落ち込みがあり、このような起伏を褐色粘土や砂質の暗褐色土で埋め床面とする。東壁中央に幅5～10cm、深さ1～3cmの壁周溝が掘られる。壁周溝は壁中央付近から北東隅手前まで1.9m走り、北東隅に至る前に途切れている。南西隅には長径70cm、深さ20cm、楕円形の土坑が1基あり、底部か

ら30cm大の石が1点出土している。

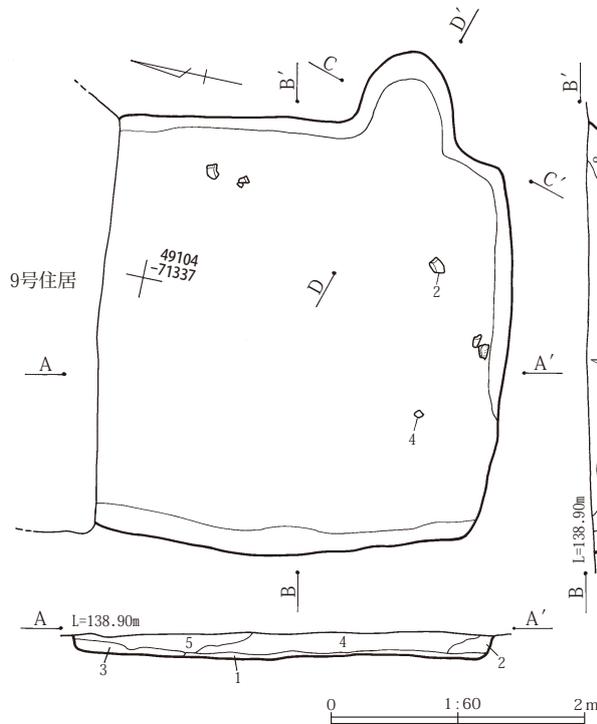
壁 開き気味に上方へ立ち上がる。壁高最大20cm。

竈 東壁南端を掘り込み、暗褐色のシルト質土を敷いて竈を構築する。燃烧部は上半が壁外にあり、壁から70cm張り出している。住居壁内への張り出しは無く、両袖は認められない。掘り方の焚き口中央部には長径40cm、深さ25cmのピットがあり、灰が充填されていた。壁際には構築材の据え方と思われる小ピットが並び、中央やや北寄りの位置には支脚の据え方と思われる小ピットが掘られるが構築材や支脚は認められなかった。主軸方位はN-90°-E。

遺物 住居南部の床面からやや浮いて須恵器壺(2)が、竈燃烧部内から須恵器の坏(1)と羽釜(4)が、竈前のピットからは壺形鍛冶滓(3)が出土し

ている。竈焚き口のピット内から炭化種実が得られた。アワ、イネ、マメ科、ヒエ、キビ族、コムギ、ヒエ-アワ、オオムギ、ブドウ属、マメ類があった。竈灰層以下からもマメ科が1点得られている。

所見 埴形鍛冶滓が出土しているが、住居内及び周辺に鍛冶施設は認められない。遺物は床面出土ではないが10世紀後半頃の特徴を示すもので、住居形態の示す年代観とも合致する。



II区7号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径5~7mmの二ツ岳軽石粒含む。粘性有り。縮まりやや弱い。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒多く含む。やや砂質。縮まりやや弱い。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒含む。やや粘性有り。縮まっている。
- 4 暗褐色壤土 径5~15mmの二ツ岳軽石粒1%。やや砂質。炭化物含む。縮まっている。
- 5 砂、シルト、二ツ岳軽石粒の混層。水性堆積層。
- 6 暗褐色土 シルト質壤土。シルトブロックが汚れたもの。壁崩落土。
- 7 シルト~微砂のブロック。
- 8 黒褐色壤土 径5~15mmの二ツ岳軽石粒含む。炭化物、焼土粒含む。縮まりやや弱い。
- 9 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒、鉄分の凝集斑含む。シルト小ブロック含む。

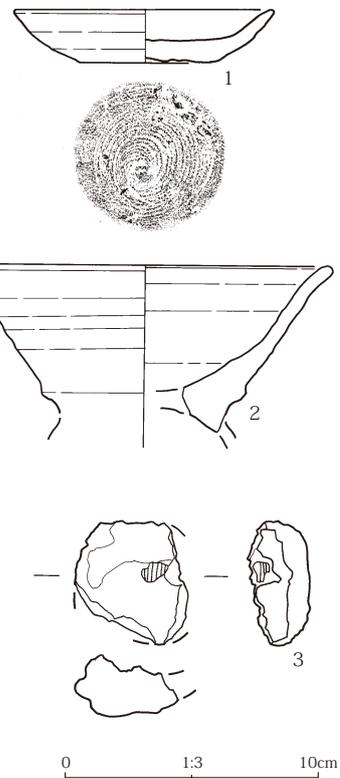
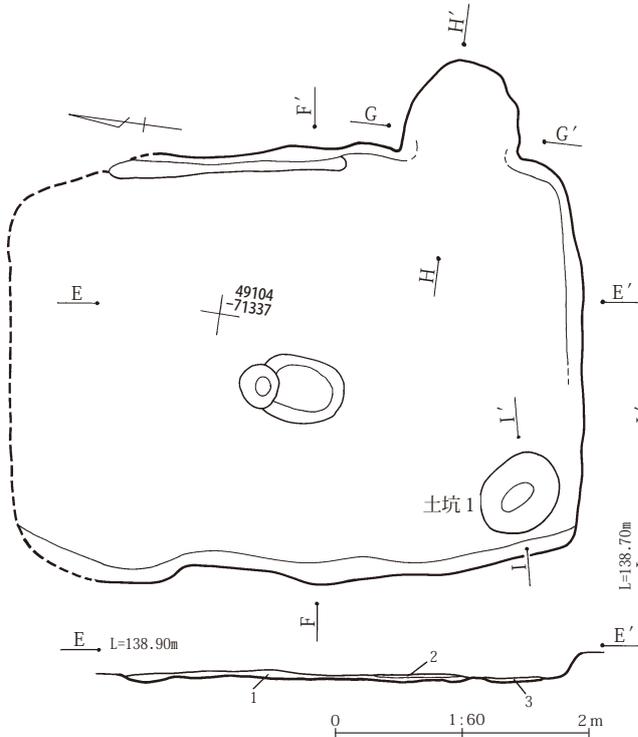
II区7号住居掘り方土層観察所見

- 1 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石粒と砂の混層。
- 2 暗褐色土 砂に近いが、縮まりはある。二ツ岳軽石粒を含まない。
- 3 褐色土 粘質の土。二ツ岳軽石粒は含まない。

II区7号住居土坑1土層観察所見

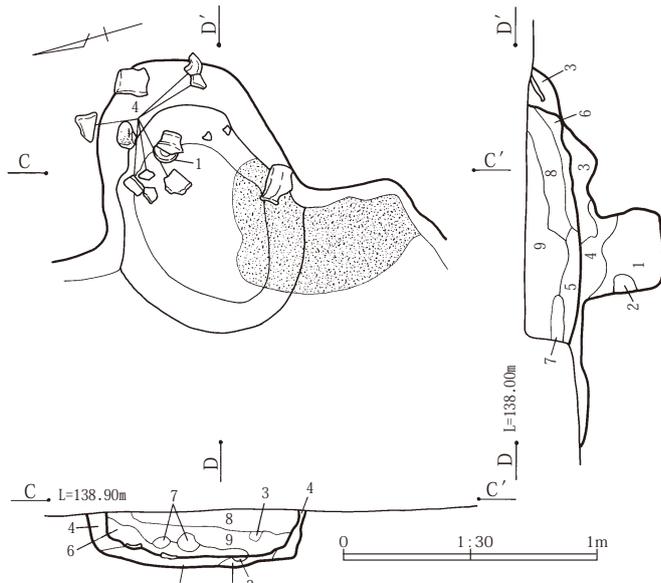
- 1 褐色土 砂壤土。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。砂粒多い。やや縮まる。

第27図 万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居



第28図 万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居掘り方・出土遺物(1)

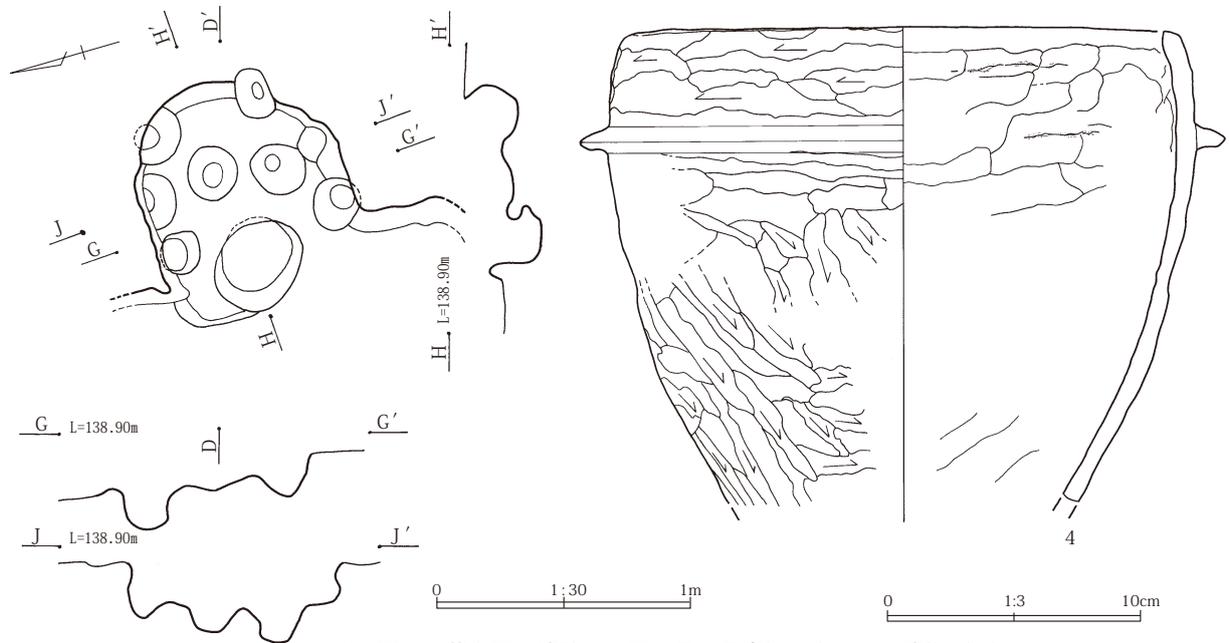
第4章 遺構と遺物



II区7号住居竈土層観察所見

- 1 灰層
- 2 褐色土 締まりの弱い粘質土。拳大ブロック。
- 3 暗褐色土 締まりの弱いシルト質。
- 4 暗褐色土 締まりのあるシルト質。
- 5 にぶい黄褐色土 比較的粘性のある黄褐色土。所々に米粒大の二ツ岳軽石粒を含む。中央下部に20mm大の二ツ岳軽石粒が1個見られる。
- 6 暗褐色土 比較的粘性のある土。炭、焼土を含む。二ツ岳軽石粒はほとんど見られない。
- 7 褐色土 比較的粘性のある土。拳大ブロック。
- 8 暗褐色土 シルト質。締まっている。二ツ岳軽石粒の量は1より少ないが、粒は大きくなる(径15mm)。
- 9 褐色土 砂質に近いシルト質。固く締まっている。米粒大の二ツ岳軽石粒を全体に含む。

第29図 万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居竈



第30図 万蔵寺廻り遺跡 II区7号住居竈掘り方・出土遺物(2)

II区8号住居 (第31～34図 PL.14～16)

位置 X=49.105/Y=-71.340 標高138.80mの緩い傾斜地上に立地する。7号住居の北側にあり、9・11号住居を切る。

形態 北東隅を52号土坑に切られる。北壁を長辺とする台形に近い形状で、四辺それぞれが平行しない。南北に長軸をおき、長軸方位はN-19°-W。

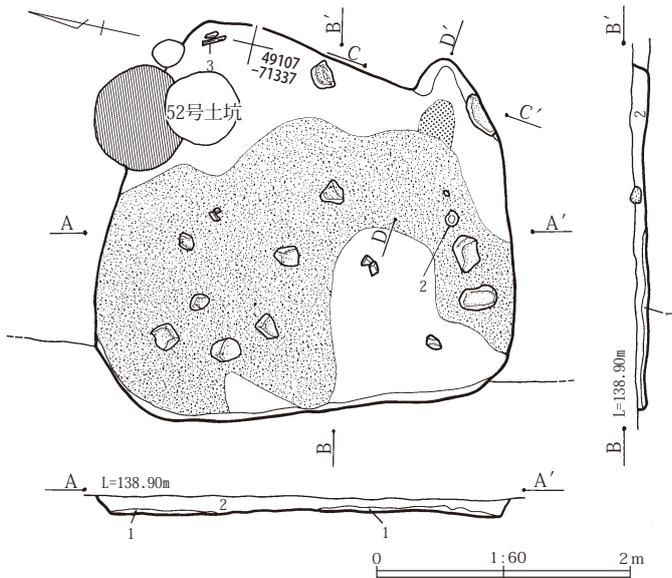
規模 長軸長3.30m、短軸長3.08m。

床 緩やかな起伏が見られ、南東に向けて僅かに傾斜する。底面には炭質物と黒色灰が薄く堆積している。

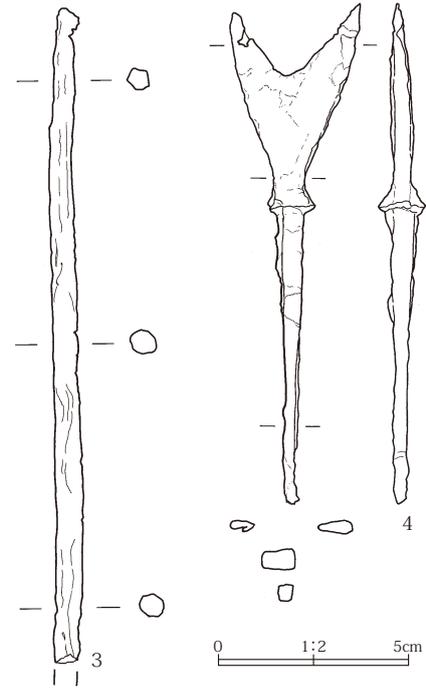
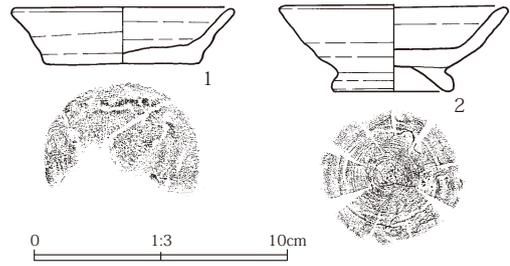
壁 西壁上部の削平が著しいが、やや開き気味に上方に立ち上がる。壁高は8～20cm。

掘り方 南北両壁際を、東から西へと土坑状に数回掘り込んでいる。北東隅は狭い範囲で1～3cm程度高く掘り残し、中央付近と南東、竈前付近には小ピットが不規則に並んでいる。南西隅には長径80cm、深さ50cmの楕円形の土坑がある。南西隅に土坑を掘る住居は本遺跡内でも数棟確認されており、10世紀後半から11世紀の竪穴住居構造において、共通する特徴とも考えられる。

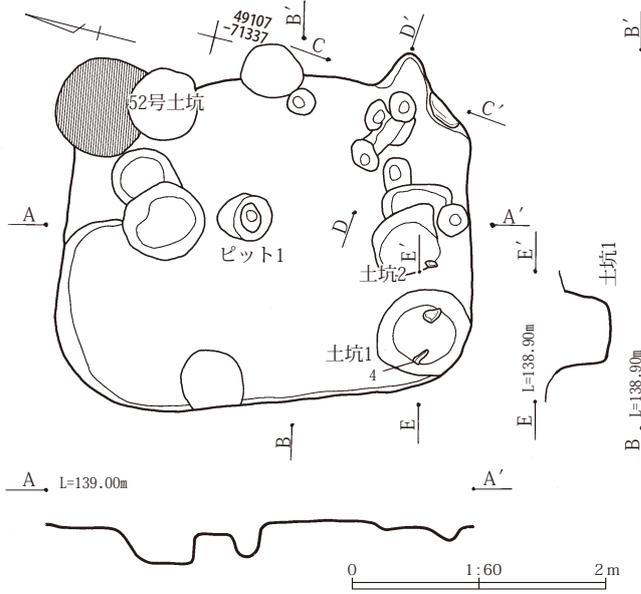
竈 南東隅の壁を三角形に掘り込んで構築する。燃



第31図 万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居



第33図 万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居出土遺物



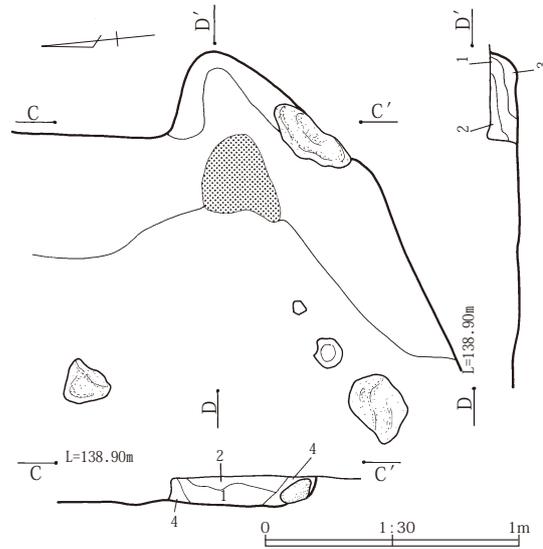
第32図 万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居掘り方

II区8号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒含む。やや砂質。この直下に炭化物、黒色灰の薄層がある。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石3%、炭化物・焼土粒を含む。縮まっている。

II区8号住居竈土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 焼土粒多く含む。径10mm大のニツ岳軽石粒少量含む。炭化物片含む。
- 2 暗褐色壤土 焼土斑30%。径15mm大のニツ岳軽石粒、炭化物粒含む。
- 3 黒褐色壤土 径10mm大のニツ岳軽石粒含む。縮まっている。
- 4 ニツ岳軽石粒1~3%。縮まりやや強い。



第34図 万蔵寺廻り遺跡 II区8号住居竈

第4章 遺構と遺物

焼部は大半が壁内にあるが、住居壁内への張り出しは無く、袖はない。壁外への張り出し口右側に、壁面に沿って石が据えられており、構築材と思われる。焼部底面は焼土化し、中央付近に支脚の据え方と思われるピットがある。主軸はN-85°-E。

遺物 南壁際の覆土中から須恵器の小型埴(2)が、住居内土坑の埋没土中から小型埴(1)が、北東隅の床面からは鉄製紡錘車の紡莖(3)が出土している。また、南西住居内土坑底面から鉄鎌(4)が出土した。鍛造品で鎌身部は雁股形。関部は台形関、莖部が長く断面方形である。床面付近の覆土からイネやムギ類、ヒエ、マメ類、シソ類の炭化種実が得られた。

所見 11世紀前半から中葉の住居と考えられる。

II区9号住居 (第35～39図 PL.14～17)

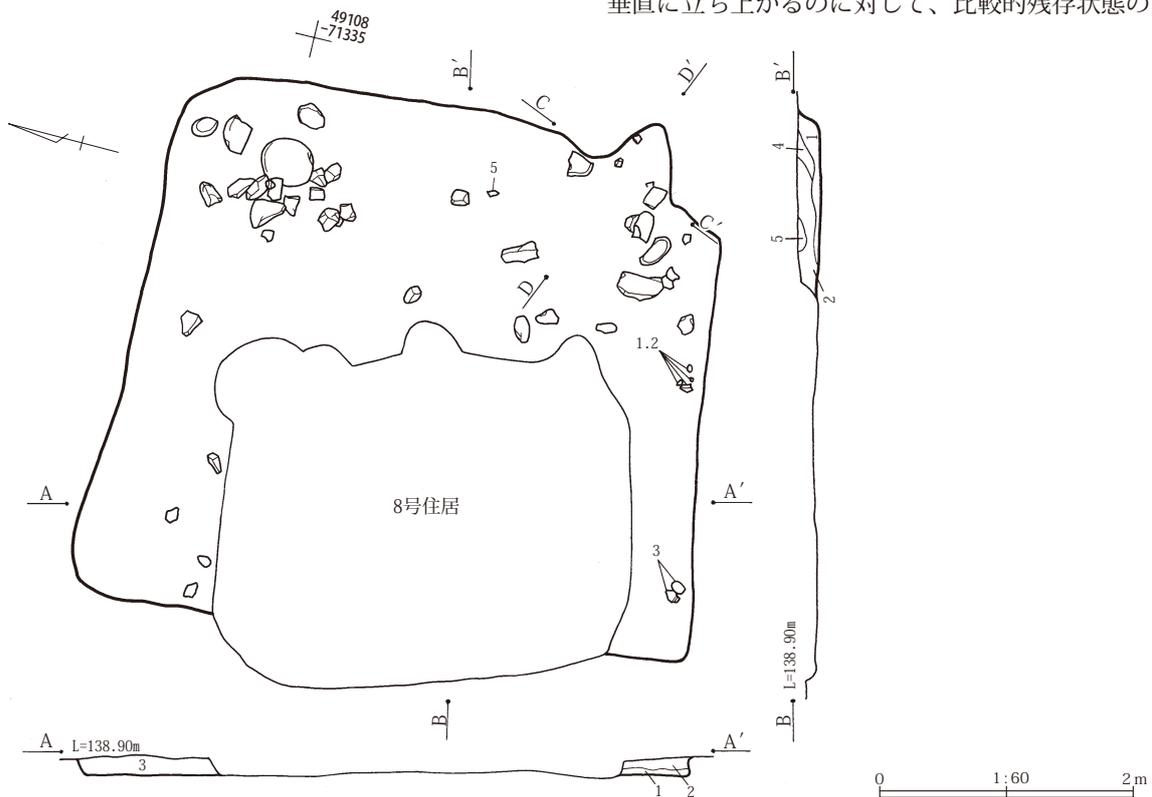
位置 X=49.105/Y=-71.340 II区南側の住居密集地点に位置し、標高138.80mの緩傾斜部に立地する。

形態 8号住居に西半を切られ、7・10・11号住居を切る。南北に長軸をおく長方形に近いが、北壁がやや北に振れ、住居の北西隅が若干迫り出す。長軸方位はN-7°-W。

規模 長軸長4.60m、短軸長4.18m。

床 攪乱により全体像を把握することは困難だが、僅かに起伏が見られる程度でほぼ平坦に作られる。地山を掘り込み、そのまま床面としたものと思われる。柱穴、壁周溝は認められない。切り合っている8号住居、10号住居の床面は、ほぼ同じ高さであり、9号住居北側で10号住居南側を切っているため10号住居の竈が9号住居北東隅で確認された。

壁 削平のため上部は失われているが、南壁がほぼ垂直に立ち上がるのに対して、比較的残存状態の良



II区9号住居土層観察所見

- | | |
|---|--|
| <p>1 黒褐色壤土 径5～7mmの二ツ岳軽石粒含む。やや砂質。鉄分で汚れる。</p> <p>2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石多く含む。炭化物片少量含む。縮まっている。</p> <p>3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒含む。炭化物片少量含む。縮まりやや弱い。</p> | <p>4 黒褐色壤土 二ツ岳軽石含む。鉄分で汚れた砂斑含む。縮まっている。</p> <p>5 黒褐色壤土 二ツ岳軽石含む。鉄分で汚れたシルト斑含む。縮まり弱い。</p> |
|---|--|

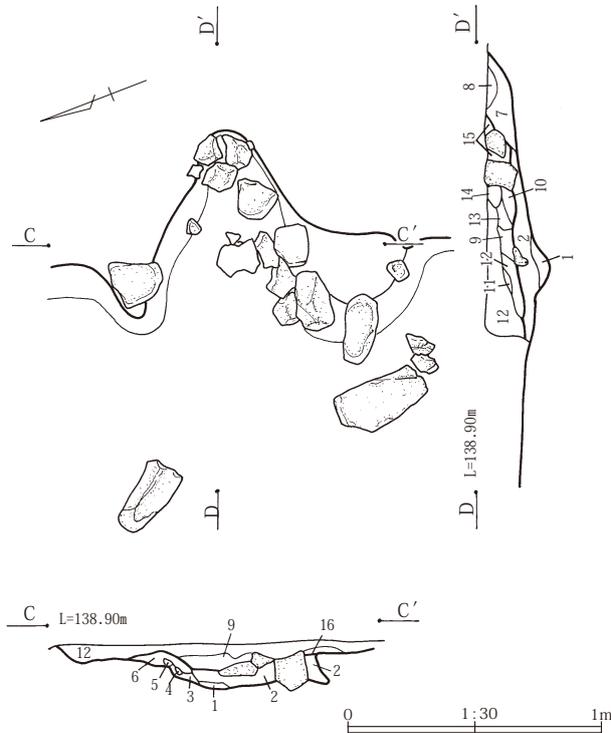
第35図 万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居

第1節 古代・中世の遺構と遺物

い東、北両壁はやや開き気味に立ち上がる。残存壁高は15～20cm。

竈 東壁南端を掘り込み、地山の砂粒を多く含む暗褐色土を貼って構築する。主軸方位はN-111°-E。燃烧部はほぼ壁外にあり、焚き口両側の壁は僅かに

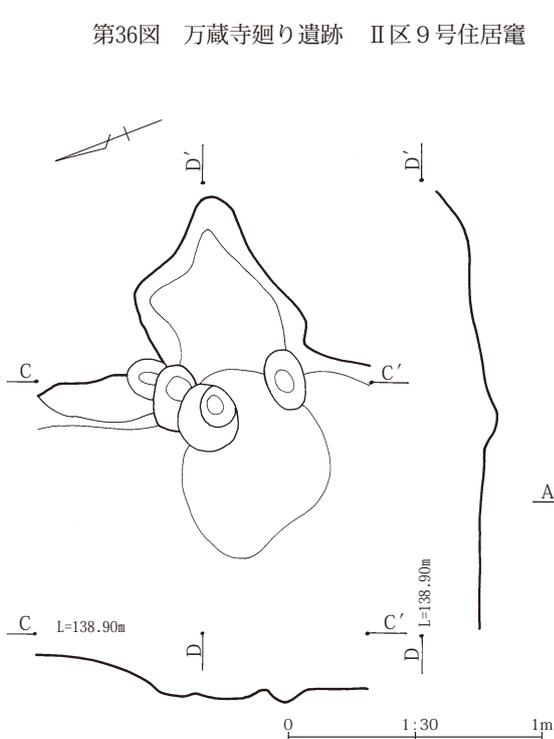
壁内に張り出している。張り出し先端には粗粒輝石安山岩の袖石が据えられていた。焚き口周辺からは粗粒輝石安山岩片が多数見つかり、これらの石としまりの良い暗褐色土によって竈を構築していたと考えられる。



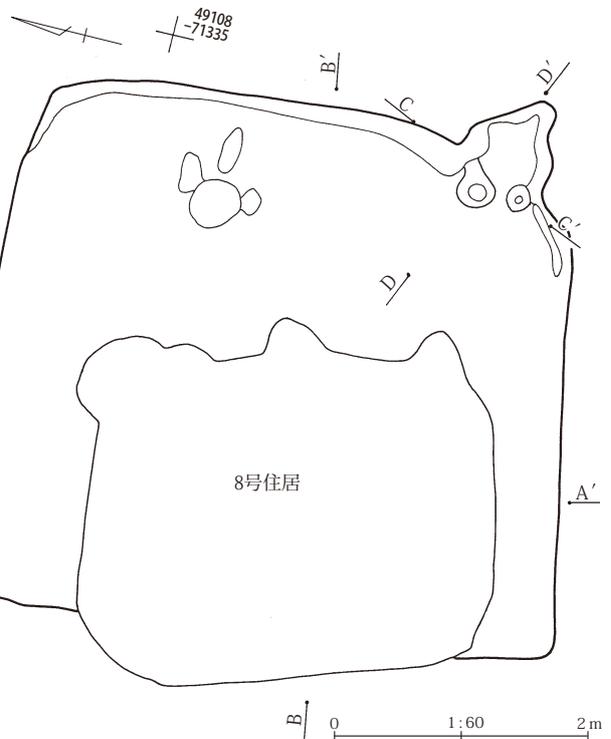
第36図 万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居竈

II区9号住居竈土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 地山砂、径7mmの二ツ岳軽石粒多く含む。やや締まる。
- 2 灰、焼土ブロックの集中層。
- 3 暗褐色壤土 全体に赤変している。径5mmの二ツ岳軽石粒含む。炭化物含む。締まりやや弱い。
- 4 砂のブロック。やや火を受けている。
- 5 暗褐色軽粘土 ロームブロック。やや赤変。
- 6 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。ローム小ブロック含む。炭化物粒含む。
- 7 暗褐色シルト質砂壤土 全体に赤変。焼土粒多く含む。締まり弱い。
- 8 暗褐色砂壤土 焼土粒含む。やや締まる。
- 9 暗褐色壤土 やや砂質。締まり弱い。
- 10 極暗褐色壤土 焼土斑が上位に集中。黒色の灰を多く含む。
- 11 黒褐色壤土 混入物少ない。締まり弱い。攪乱か？
- 12 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石粒、砂粒に1層が混じっている。
- 13 褐色シルト質壤土 二ツ岳軽石粒、極少量含む。下位焼化しやや赤変。焼土ブロックを含む
- 14 極暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物粒含む。
- 15 黒褐色砂壤土 焼土ブロック含む。締まり弱い。
- 16 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。黒色の灰が下位にある。袖崩落土。



第37図 万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居竈掘り方



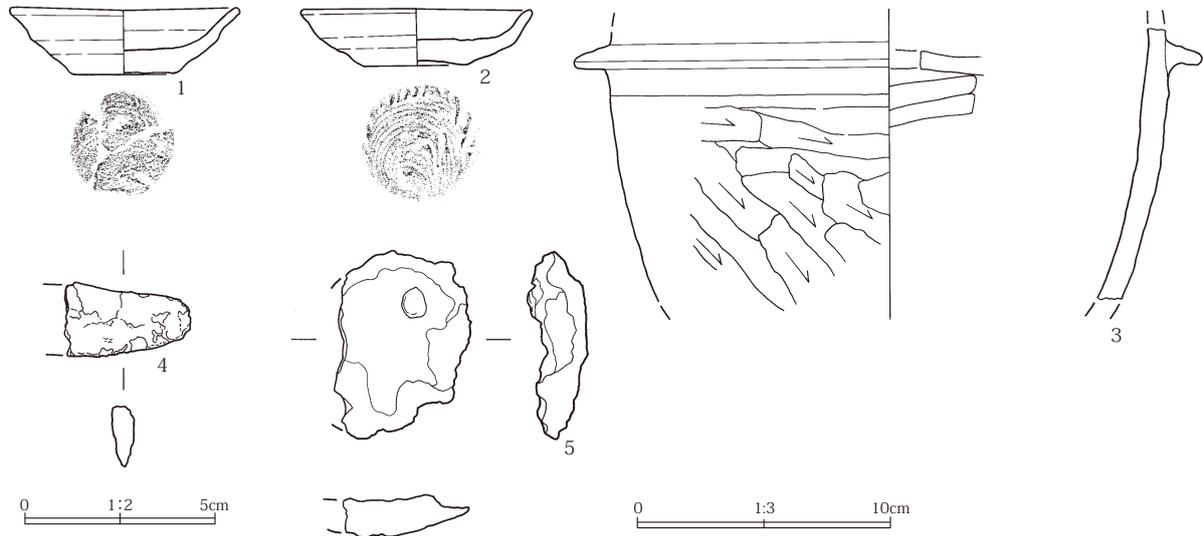
第38図 万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居掘り方

第4章 遺構と遺物

遺物 南壁際の覆土下位から須恵器の小型坏2個体（1・2）、南西隅から羽釜片（3）、覆土中から刀子の切先（4）が出土した。東側床面からは埴形鍛冶滓（5）が出土している。竈と住居内土坑中から

イネ、ムギ類、ヒエ、アワの炭化種実が見つかった。土坑からはマメ科も得られた。

所見 11世紀前半から中葉の住居と考えられる。



第39図 万蔵寺廻り遺跡 II区9号住居出土遺物

II区10号住居（第40図 PL.17）

位置 X=49.110/Y=-71.340 標高138.80mの緩い傾斜地上に立地する。II区南側の住居が密集する部分にあたる。

形態 住居南半を9号住居に、北東隅を50号土坑に切られる。南北に長軸をおく長方形と思われ、長軸方位はN-2°-W。

規模 残存長軸長3.68m、短軸長3.26m。

床 地山を掘り込んで、そのまま床面としたものと思われ、緩やかな起伏は見られるものの、ほぼ平坦に作られている。北壁中央から西壁中央にかけて、幅15～20cmほど、深さ3cmほどの浅い壁周溝が巡っている。

壁 やや開き気味に立ち上がる。確認面から床面までの最大深は18cmある。

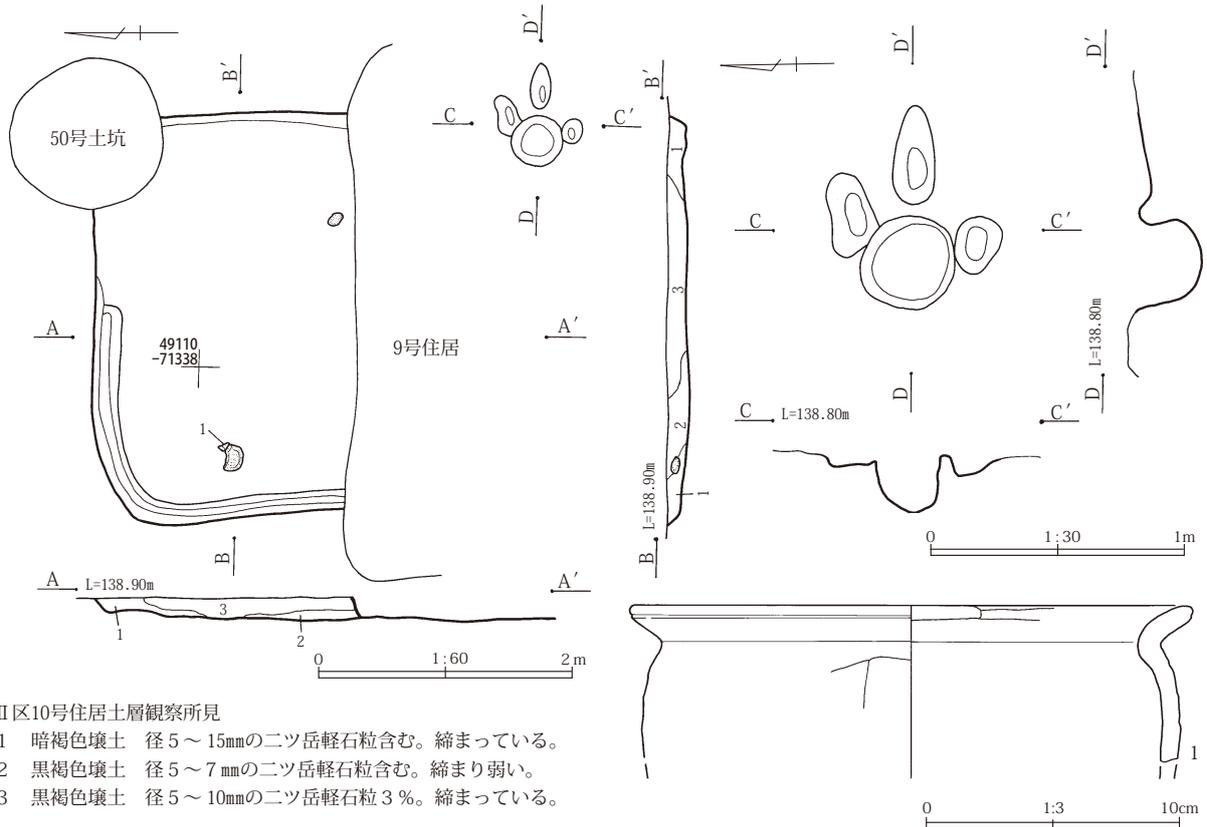
竈 9号住居北東隅で粗粒輝石安山岩と二ツ岳石からなる10～40cm大の礫が集中する部分が見つかった。この礫集中下から見つかったピットが10号住居の竈の残痕と考えられる。

住居東壁南端の壁を掘り込んで構築していたと思われる、東壁の延長線上に袖石据え方と思われるピットが並んでいて、この間が焚き口に当たると思われる。この小ピットに挟まれるように径40cm、深さ55cmの円形ピットが掘られている。

竈の焚き口前に比較的深いピットを設けるのは1号住居、7号住居でも見られる構造である。円形ピットの東にも小ピット状の窪みがあって、燃烧部底面の残痕と思われる。袖石の位置から推測すると、燃烧部はほぼ壁外にあったものと思われる。推定される主軸方位はN-94°-Eである。

遺物 住居北西床面に密着して、土釜の口縁部破片（1）が出土している。復元口径21.5cmほどの大きさで、紐作りの後、胴部外面には篋削りを施している。

所見 遺物から10世紀後半頃の住居と考えられる。



II区10号住居土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径5～15mmの二ツ岳軽石粒含む。締まっている。
- 2 黒褐色壤土 径5～7mmの二ツ岳軽石粒含む。締まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 径5～10mmの二ツ岳軽石粒3%。締まっている。

第40図 万蔵寺廻り遺跡 II区10号住居・竈掘り方・出土遺物

II区11号住居 (第41・42図 PL.17)

位置 X=49.110/Y=-71.340 住居密集部に位置し、標高138.80mの緩傾斜部に立地する。

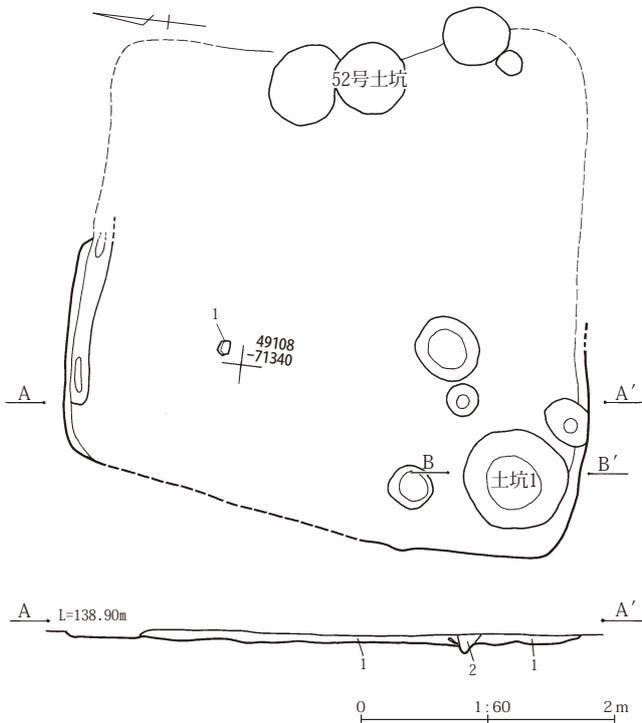
形態 東半を8～10号住居に切られる。南北に長軸をおく長方形を呈するものと思われ、長軸方位はN-3°-Eを示す。

規模 長軸長4.16m、残存短軸長3.92m。

床 僅かに波打つが、ほぼ平坦に掘り込まれている。二ツ岳軽石を含む固くしまった黒褐色土を床面構成土とする。北壁中央部から西よりにかけて幅15cmの浅い壁周溝があるが、北東隅の手前で途切れており、連続しない。

壁 残存壁高は最大で4cmほどで、立ち上がりは殆ど残っていない。やや開き気味に立ち上がるものと思われる。

掘り方 南西隅に長径85cm、深さ40cmの楕円形土坑があり、これを囲むようにピットが並ぶが、住居構造と関連するか否か判断できない。



II区11号住居土層観察所見

- 1 黒褐色砂壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒1%。締まっている。
- 2 黒褐色砂壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まりやや弱い。

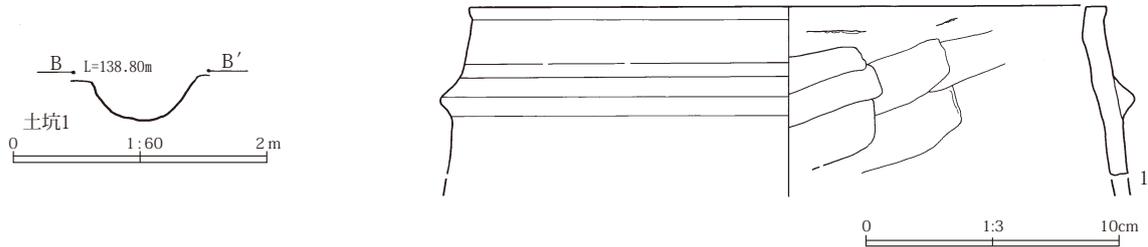
第41図 万蔵寺廻り遺跡 II区11号住居

第4章 遺構と遺物

竈 8～10号住居に切られた部分にあったものと思われるが、認められない。

遺物 覆土から羽釜の口縁部破片（1）が出土している。

所見 遺物から10世紀後半頃の住居と考えられる。



第42図 万蔵寺廻り遺跡 II区11号住居内土坑断面図・出土遺物

II区12号住居（第43・44図 PL.17・18）

位置 X=49.110/Y=-71.345 標高138.80mの緩い傾斜地上に立地する。7～11号住居が重複する住居集中地点の西側にあり、11号住居と隣接する。

形態 北壁中央を55号土坑に、南東隅を48号土坑に切られる。南北に長軸をおく長方形を、長軸方位はN-3°-W。

規模 長軸長3.75m、短軸長3.29m。

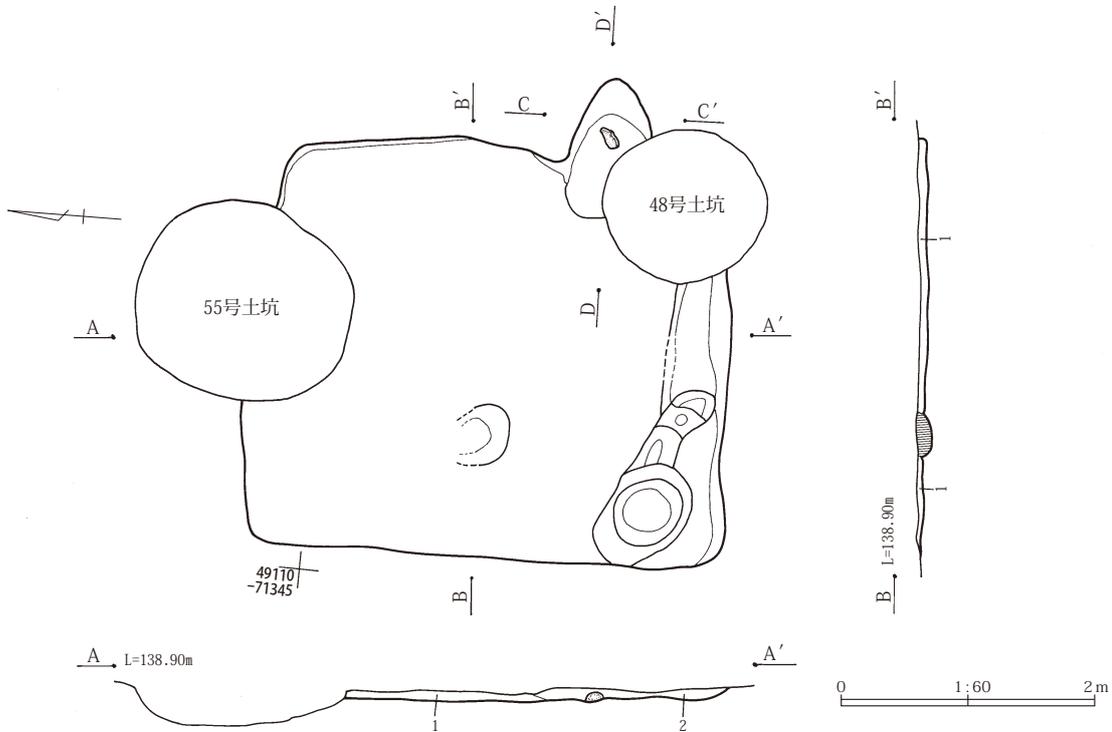
床 僅かに波打つが、ほぼ平坦に作られる。壁周溝は認められないが、炭質物粒を含む暗褐色土と黒褐

色土を踏み固め、床面としたものと思われる。

壁 削平によって立ち上がりは殆ど失われているが、東壁はほぼ垂直に、南壁はやや開き気味に立ち上がるものと思われる。残存壁高は最大10cm。

掘り方 中央やや西寄りの地点と、南西隅に土坑状の不明瞭な掘り込みが見られる。

竈 東壁南端を掘り込んで構築する。主軸方位はN-94°-Eを示し、燃焼部はほぼ壁外にある。中央から支脚と思われる石が倒れた状態で見つかるが、据え方は認められなかった。焚き口両側は壁



II区12号住居土層観察所見

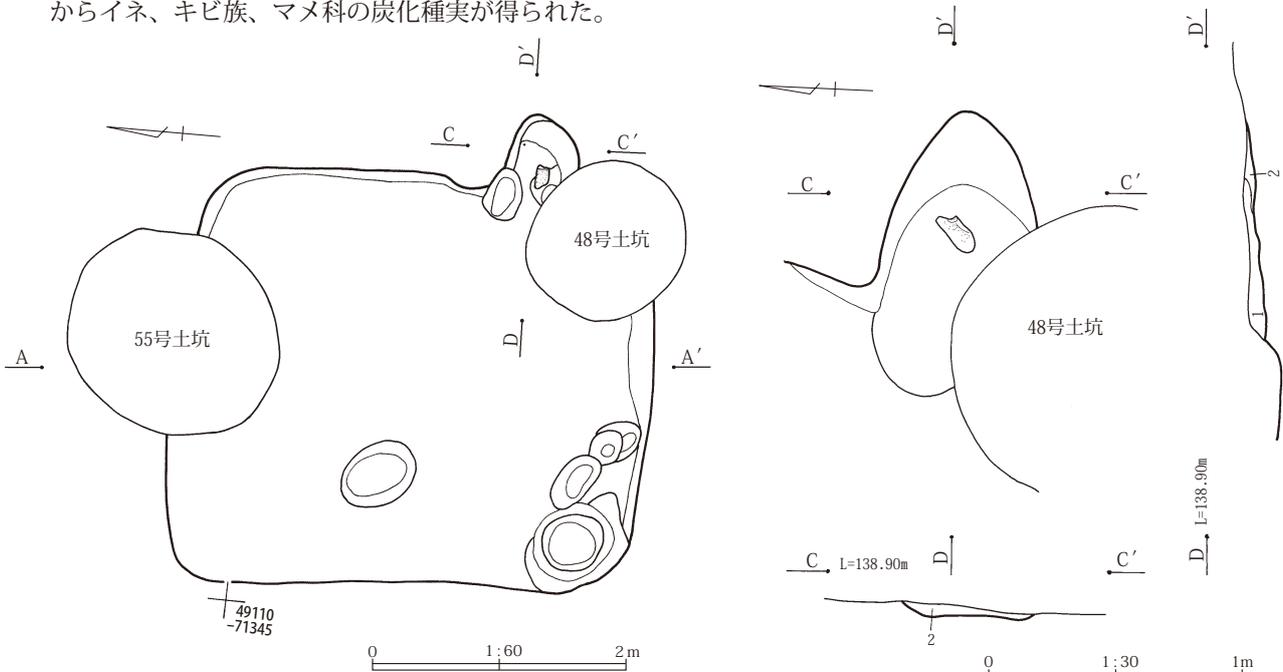
- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石粒含む。締まっている。炭化物粒含む。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒含む。締まっている。炭化物粒多く含む。

第43図 万蔵寺廻り遺跡 II区12号住居

内に僅かに張り出すものと思われるが、右袖は48号土坑に切られている。焚き口左側には袖石据え方と思われる小ピットがある。壁外に張り出した燃烧部は途中から緩やかに煙道底面へと連続している。

遺物 住居に伴う遺物は出土していないが、竈覆土からイネ、キビ族、マメ科の炭化種実が得られた。

所見 出土遺物がないために住居の時期を確定することができないが、長軸方位や規模は近接する7号住居や10号住居とほぼ同じであり、10世紀後半頃と推定される。



Ⅱ区12号住居竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒、焼土ブロック、炭化物、黒色灰小斑含む。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒含む。焼土斑、炭化物多く含む。

第44図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅱ区12号住居掘り方・竈

Ⅲ区1号住居 (第45～49図 PL.18・19)

位置 X=49.155/Y=-71.370 Ⅲ区中央付近に位置し、標高139.40～139.50mの微高地上に立地する。

形態 住居西半は土坑によって壊されている。中央付近を12～14号土坑に、西壁中央を21号土坑に、南西隅を22・23号土坑に、南東隅を27号土坑に切られる。平面形は南北に長軸をおく長方形が、残存する西壁北半が丸みを帯び、外側へ迫り出すため長方形に歪みが生じる。長軸方位はN-2°-E。

規模 長軸長3.16m、短軸長2.85m。

床 中央が若干高く、南に向かって僅かに傾斜が見られるが、ほぼ平坦に作られる。掘り方北半をシルト質の黒褐色土によって埋めて床面としたものと思われるが、南側では認められない。

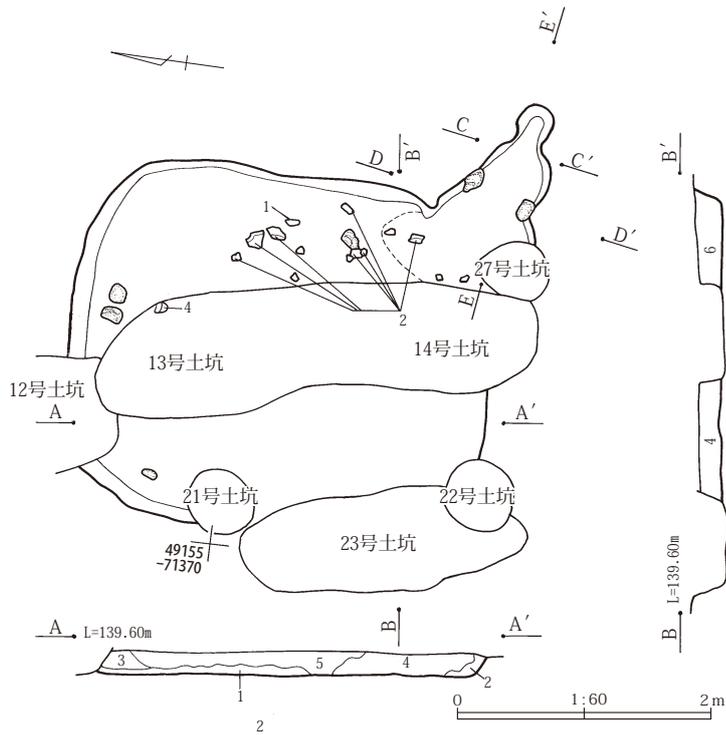
壁 やや開き気味に立ち上がる。壁高最大20cm。

掘り方 北東隅から長径90cm、深さ5cm、楕円形の住居内土坑が1基見つかっている。

竈 南西隅を壁外に掘り込み、黒褐色、灰褐色粘土を貼って構築する。燃烧部はほぼ壁外にあり、一段深く掘り込んでから煙道へと連続する。中央には支脚石が据えられ、焚き口両脇は僅かに壁内へと張り出し、袖石が据えられる。主軸方位はN-112°-E。

遺物 羽釜(3・5)、土釜(1・2・4)と鉄釘片(6・7)が出土している。竈燃烧部の支脚周辺に遺物が集中している。竈覆土中からオオムギを主とするムギ類、竈掘り方覆土中からイネ、オオムギ、ヒエ、マメ科の炭化種実が得られている。

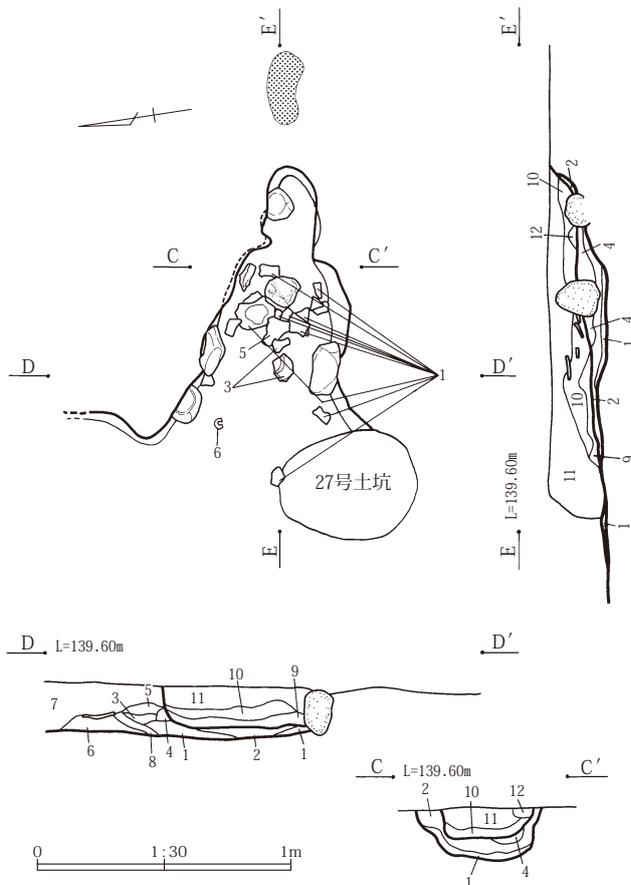
所見 11世紀前半から中葉の住居と考えられる。



第45図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区1号住居

Ⅲ区1号住居土層観察所見

- 1 黒褐色シルト質壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を含む。地山シルトを多く含む。固く締まっている。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒を僅かに含む。炭化物粒を僅かに含む。締まりやや弱い。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒を含む。炭化物粒を少量含む。締まっている。
- 4 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物粒含む。焼土粒を僅かに含む。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を2%含む。炭化物粒を含む。焼土粒を僅かに含む。締まっている。
- 6 暗褐色壤土 暗褐色土の不定形斑を30%含む。二ツ岳軽石粒を2%含む。炭化物を含む。締まっている。



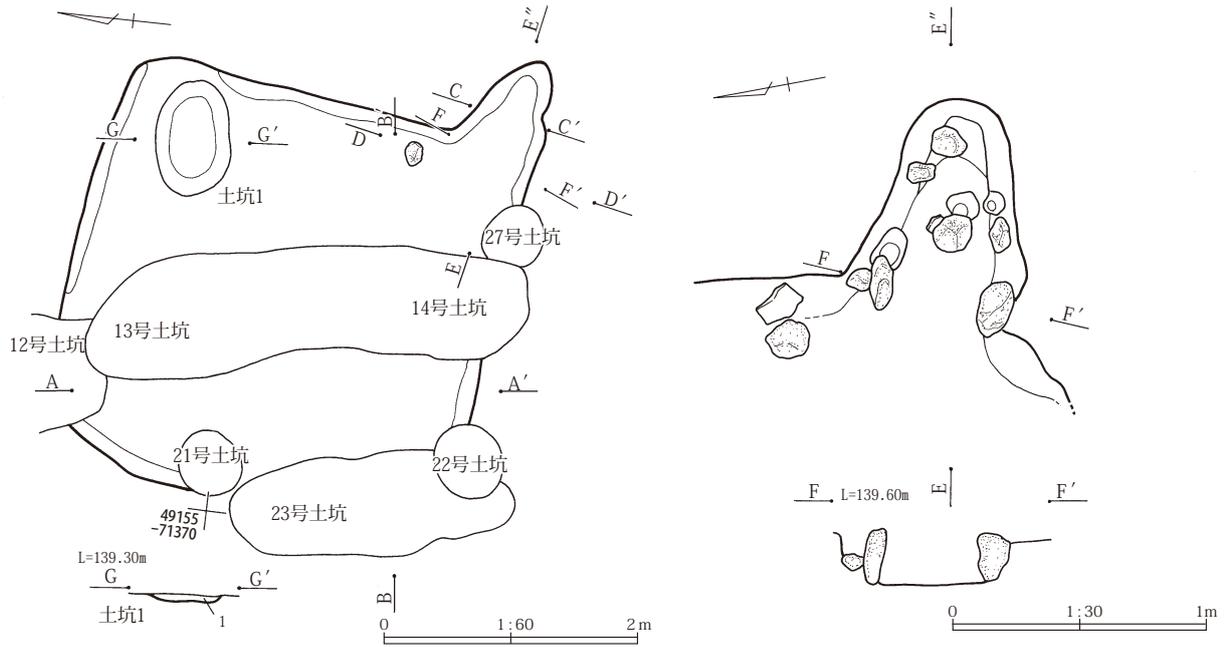
第46図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区1号住居竈

Ⅲ区1号住居竈土層観察所見

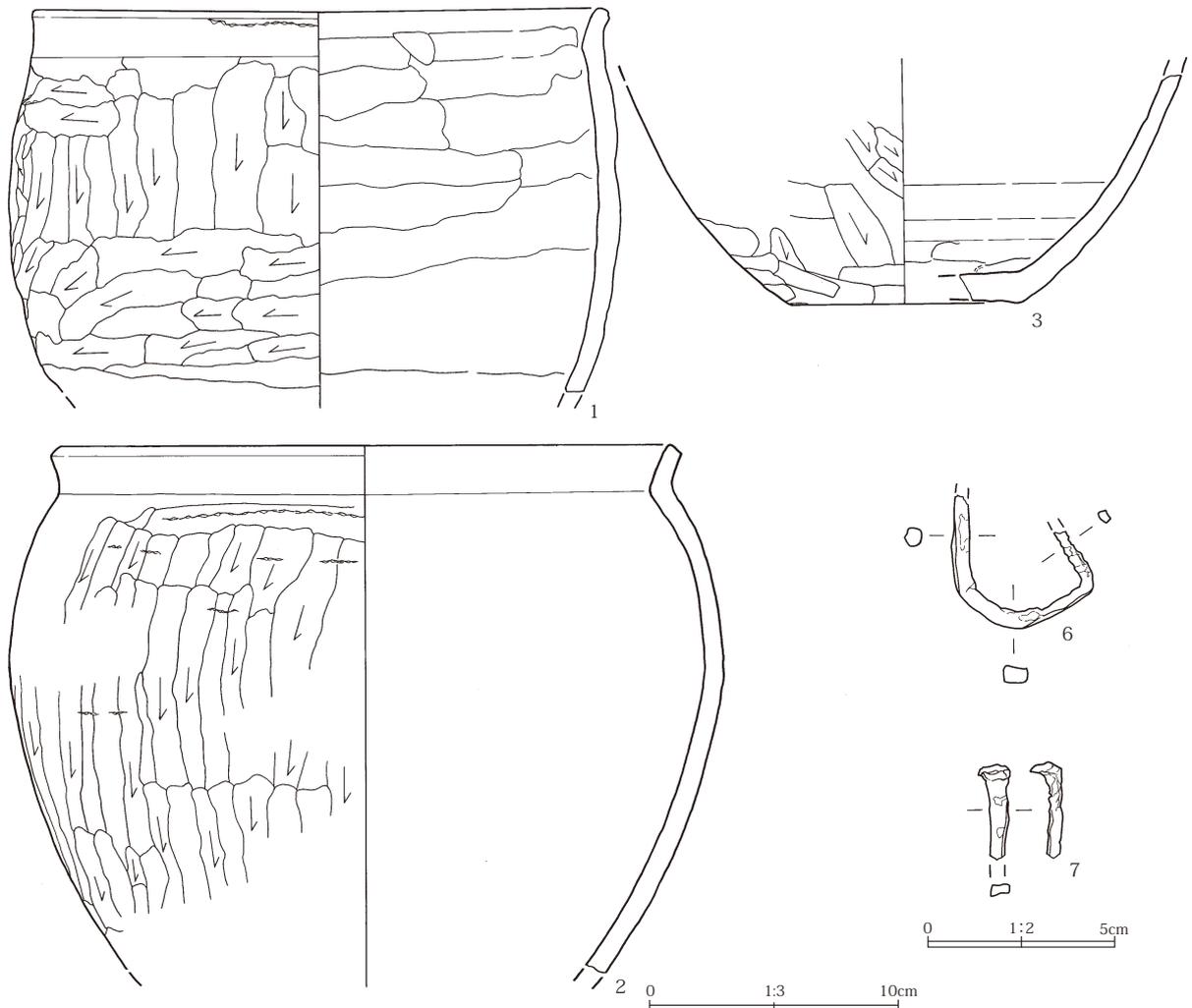
- 1 褐色土 焼土斑及び黒色灰の小斑を含む。径3mm大の二ツ岳軽石粒の細片を含む。締まっている。
- 2 暗褐色土 焼土のブロック及び小斑を2%含む。黒色灰の薄層をラミナ状に含む。炭化物片を含む。径10mm大の二ツ岳軽石粒を含む。
- 3 黒色灰の集中層。
- 4 褐色軽埴土60%と黒色灰、焼土斑40%の混土。
- 5 褐色土 径15mm大の二ツ岳軽石粒を多く含む。締まっている。
- 6 褐色土 径15mm大の二ツ岳軽石粒を多く含む。炭化物を含む。焼土粒を含む。締まっている。
- 7 褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒を2%含む。固く締まっている。
- 8 暗褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒を少量含む。炭化物粒を含む。3層と5層の混土だが、締まりは弱い。攪乱された層か。
- 9 黒褐色土 焼土の小粒を7%含む。炭化物片を含む。竈構築土。焼けている。
- 10 灰褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒を少量含む。焼土の小ブロックを少量含む。炭化物粒を少量含む。黒色灰の斑を含む。粘性有り。
- 11 暗褐色土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を含む。黒色灰の斑を含む。
- 12 焼土。煙道壁の崩落土か。

Ⅲ区1号住居内土坑1土層観察所見

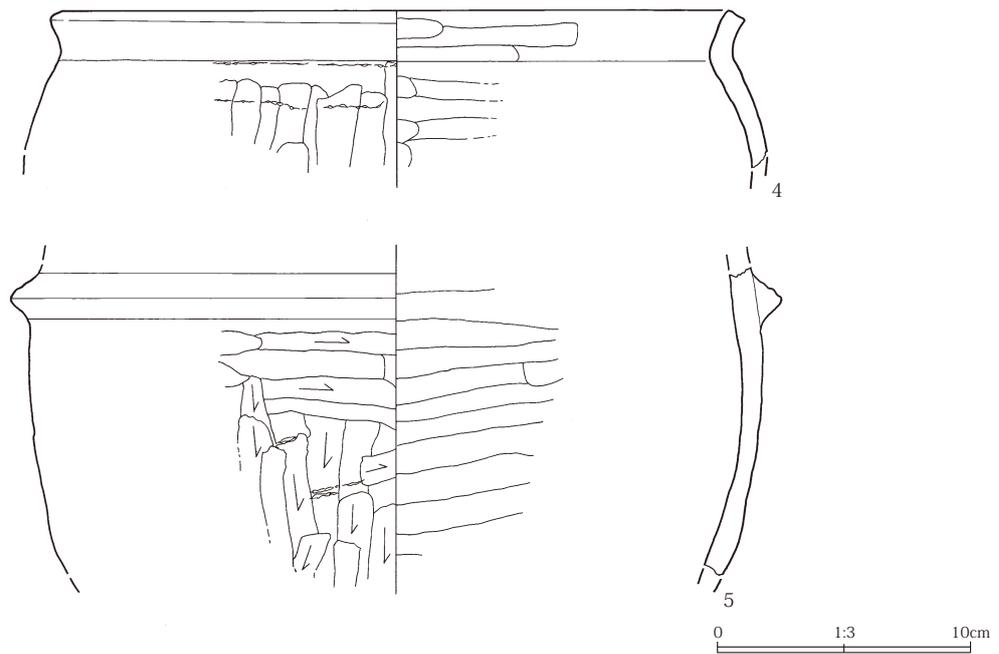
- 1 暗褐色土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を5%含む。固く締まっている。床面構成土と地山ブロックが混じっている。



第47図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区1号住居掘り方・竈掘り方



第48図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区1号住居出土遺物(1)



第49図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区1号住居出土遺物(2)

Ⅲ区2号住居(第50～53図 PL.19～21)

位置 X=49.160/Y=-71.370 Ⅲ区中央付近に位置し、標高139.40～139.50mの微高地上に立地する。南側に1号住居、北側に3号住居が隣接する。

形態 西側の大半を11・15・37号土坑に切られる。削平によって遺構上部が失われているため、遺構の範囲を明確に捉えられたのは西壁の一部と竈のみとなっている。平面形は不明瞭だが、南北に長軸をおく長方形と推定され、長軸方位はN-13°-E。

規模 長軸長3.60m、短軸長は不明。

床 掘り方は底面は全体的に波打っており、炭質物粒子を含む黒褐色土を床面構成土とするが、削平のため、面としての床は認められなかった。また、竈右袖付近から西壁中ほどまで小ピットが4基、壁に沿って並ぶ。壁周溝と類似するものか。

壁 残存する壁高は最大14cmを測り、やや開き気味に上方へ立ち上がると推定されるが不明瞭。

竈 南西隅を掘り込み、粘質の黒褐色土、暗褐色土を貼り構築する。燃焼部上半は壁外にあり、一段深く掘り込んでから煙道へと連続する。主軸方位はN-122°-E。燃焼部上半から煙道にかけては壁外に1.5m延びる。燃焼部中央には支脚据え方と思わ

れるピットがあり、その両脇に袖石据え方が縦に2つずつ並ぶ。支脚も袖石も認められないが、袖は暗褐色土、黒褐色土を袖石に貼り付け、構築していたと思われる。袖、燃焼部から煙道にかけての構築土は、焼土化が著しい。

遺物 竈焚き口前に相当する位置から、小型の須恵器坏が20個体、重なった状態で出土している。19個体は正位置で、20個体目の坏(1)は伏せた状態で(2)と口縁を合わせる状態で重なる。口径は8.3～9.7cm、底径4～6.5cm、器高は1.8～2.55cmまでと、やや大小はあるものの、ほぼ揃った大きさである。基本的にはすべて完形であるが、(8)は本来高台のついた塊状品であり、これが高台を欠いた状態で重ねられている。高台を欠いて、器形を変更することにより全体の器形を整え、数を揃えようという意識があったものと思われる。これらが紐などで括られていた可能性もあるが、繊維の付着痕跡等は認められなかった。また、二次的に火を受けた痕跡も認められない。

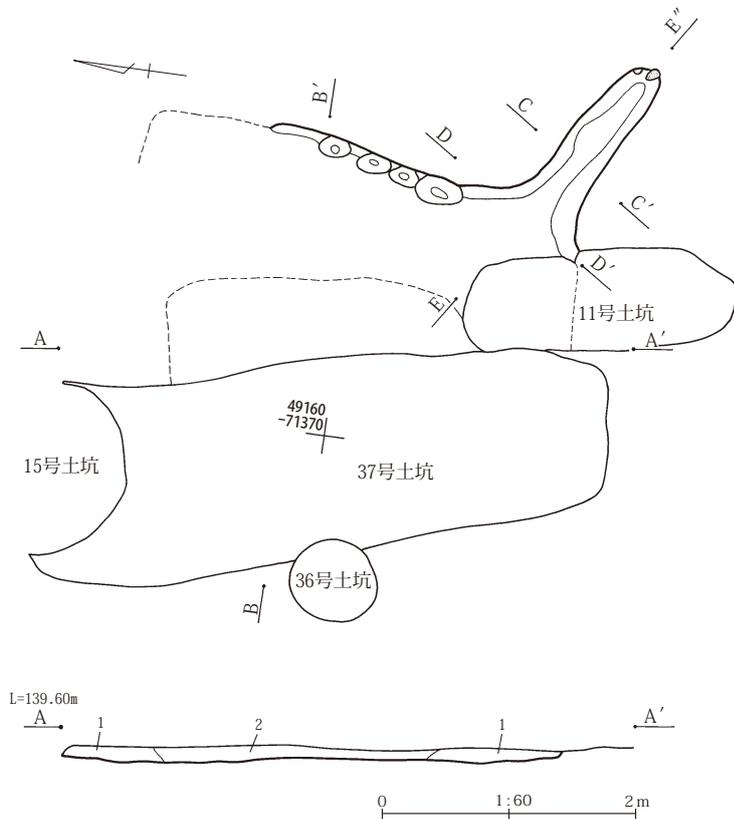
11世紀代のものと思われ、出土位置から竈の構造に伴うもの、あるいは住居内の施設から竈内に落ち込んだものとも考えることもできるが、調査時の所見

では竈を切る土坑の存在を想定している。

この他、竈からはイネ、ムギ類、キビ、ヒエ、マメ類、シソ属が少量、灰層から掘り方にかけての土壌から微量のオオムギ、マメ科の炭化種実が得られ

ている。

所見 遺物が住居に伴わない可能性もあるが、竈の位置から見ると11世紀前半から中葉の住居と考えられる。



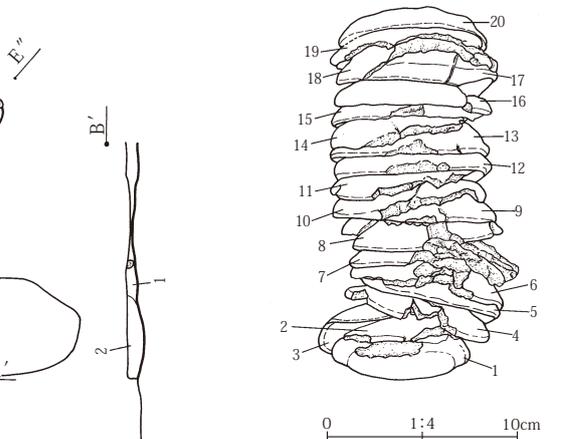
第50図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区2号住居

Ⅲ区2号住居土層観察所見

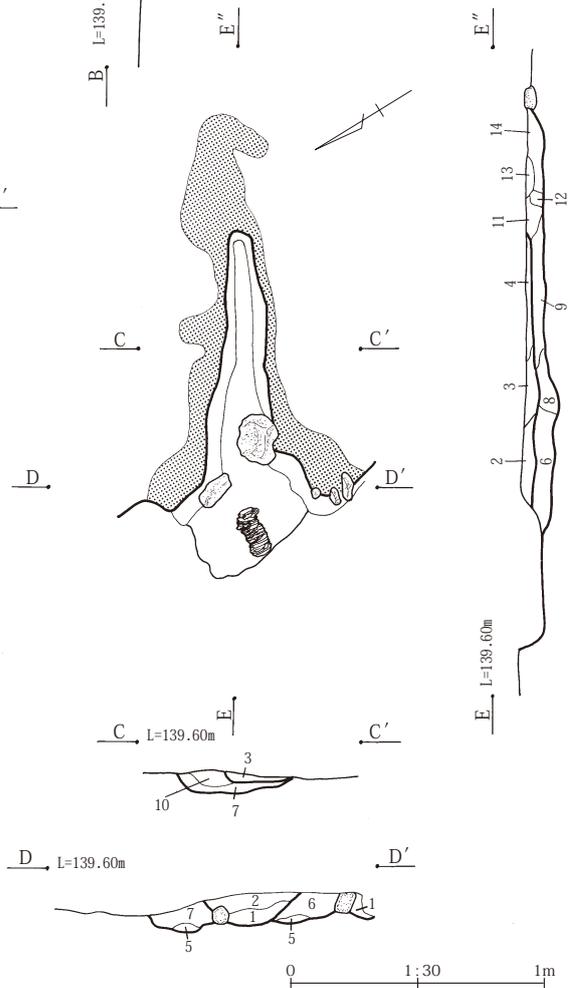
- 1 黒褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物粒含む。締まっている。住居掘り方埋土。
- 2 黒褐色土 径7mm大の二ツ岳軽石粒1%。やや締まる。住居を切る土坑底部だろう。

Ⅲ区2号住居竈土層観察所見

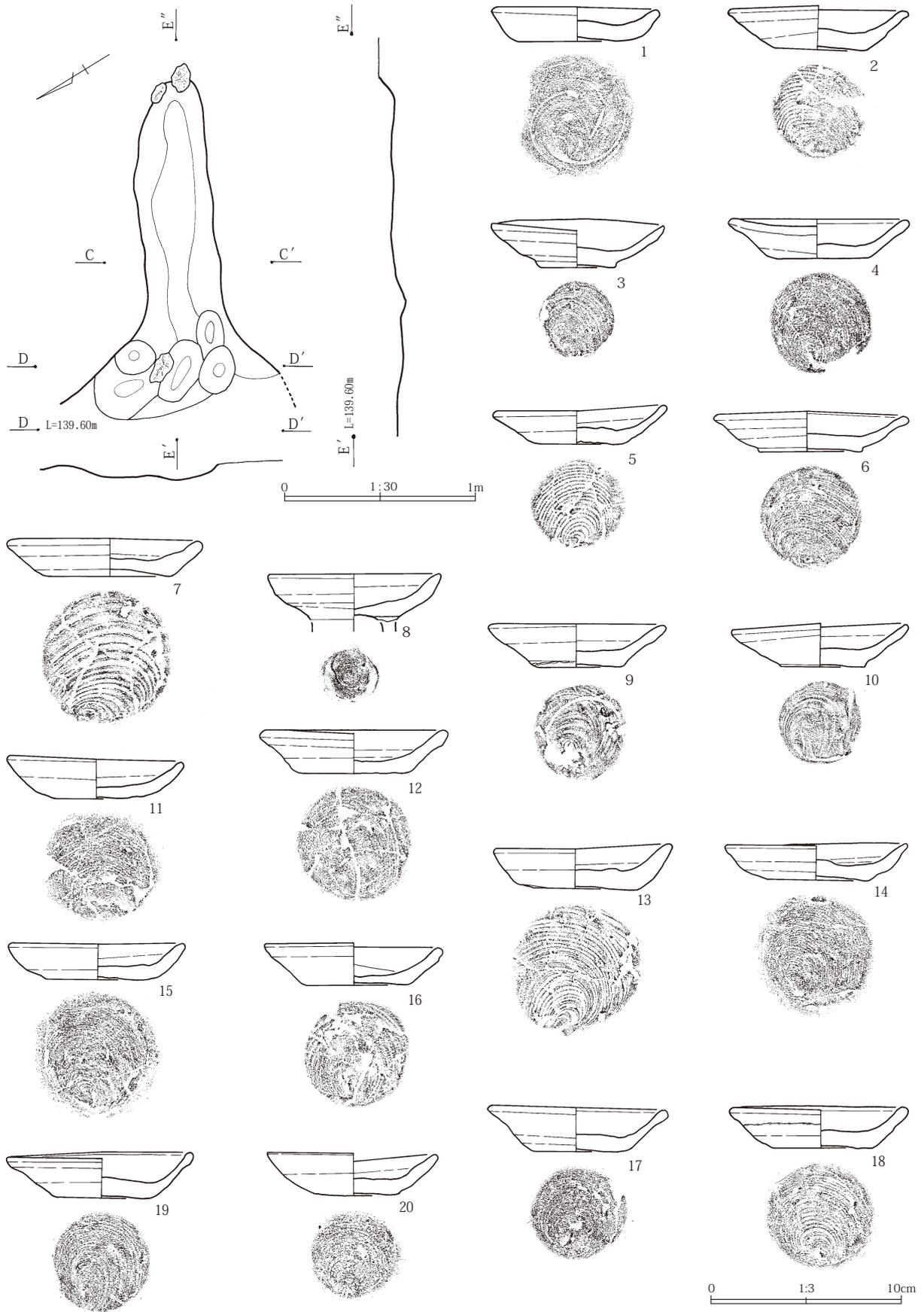
- 1 暗褐色土 焼土小ブロック含む。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まっている。やや粘質。この下は砂層。
- 2 黒褐色土 二ツ岳軽石粒3%。炭化物片含む。締まっている。やや粘質。
- 3 極暗褐色土 二ツ岳軽石粒微量含む。黒色灰、焼土斑含む。締まりやや弱い。
- 4 黒褐色土 二ツ岳軽石含まない。黒色灰斑、地山砂の崩れた小斑含む。
- 5 黒褐色土 二ツ岳軽石粒含む。締まっている。
- 6 黒褐色土 二ツ岳軽石粒1%、炭化物粒、黒色灰斑、焼土小ブロック含む。締まりやや弱い。
- 7 暗褐色土 二ツ岳軽石粒の砕けた細粒を多く含む。固く締まっている。
- 8 極暗褐色土 二ツ岳軽石粒少量含む。焼土ブロック3%。
- 9 極暗褐色土 焼土ブロック5%。粘性有り。炭化物、黒色灰を含む。
- 10 暗褐色土 焼土ブロック40%。全体に赤変、締まっている。竈本体。
- 11 暗褐色土 焼土の細粒及び斑を5%。炭化物斑含む。やや締まる。
- 12 3層のブロック
- 13 暗褐色土 黒色の灰、焼土小斑を含む。締まりやや弱い。
- 14 黒褐色土 黒色灰を含む。暗褐色土円形小斑3%。締まりやや弱い。



第51図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区2号住居竈 遺物出土状況詳細



第52図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区2号住居竈



第53図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区2号住居竈掘り方・出土遺物

Ⅲ区3号住居 (第54・55図 PL.21・22)

位置 X=49.165/Y=-71.370 2号住居の北に位置し、標高139.40～139.50mの微高地上に立地する。

形態 西壁中央付近で40号土坑、北東隅で41号土坑、南西隅で15号土坑に切られる。南北に長軸をおく長方形を基本とするが、北壁に対して南壁が長く、台形状。長軸方位はN-3°-E。

規模 長軸長3.52m、短軸長3.38m。

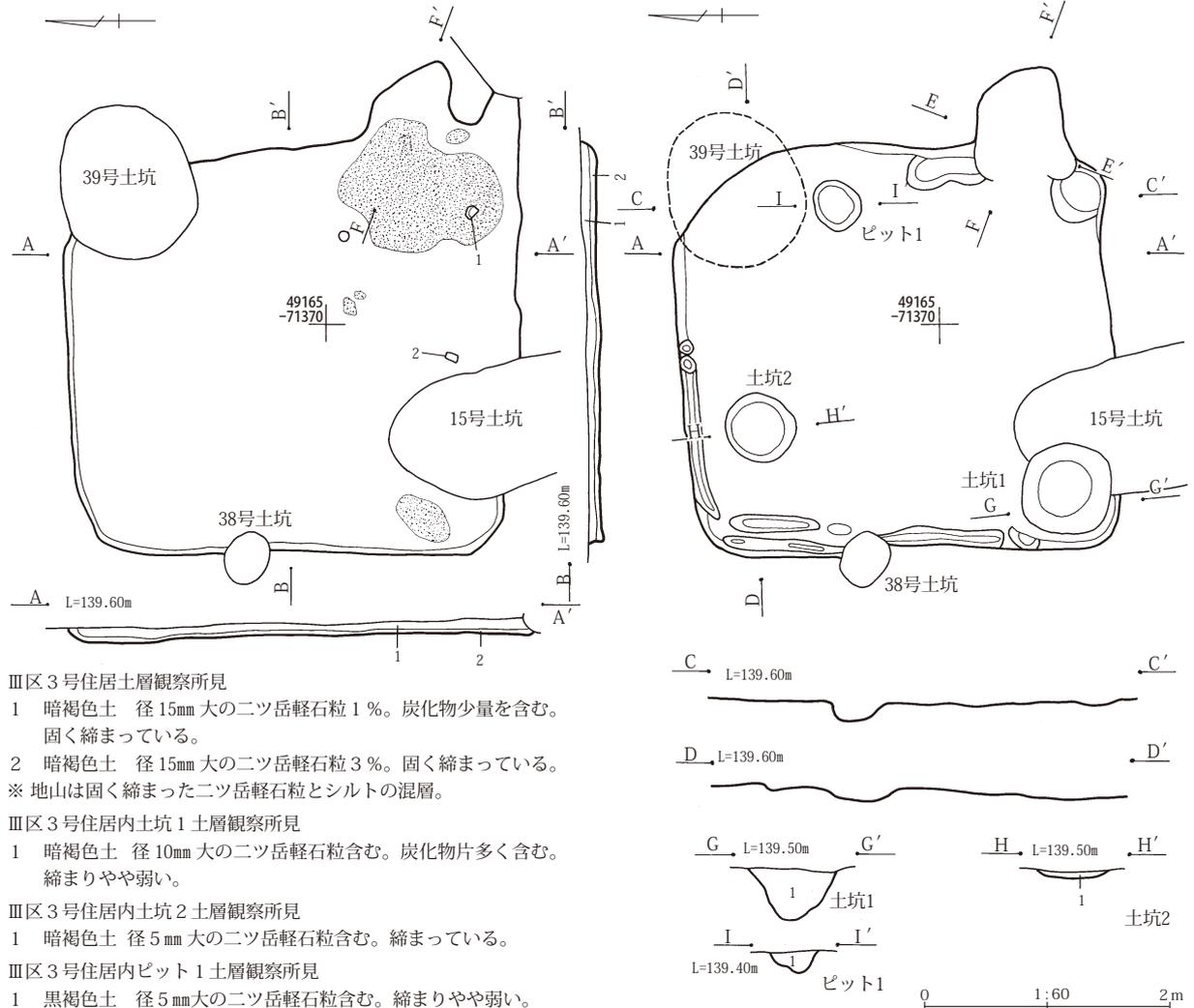
床 Hr-FPとシルトから成る地山を掘り込んで構築する。底面には緩やかな起伏が見られ、北西側がやや窪んだ状態だが、暗褐色土で埋め、床面とする。北壁から西壁にかけて、壁周溝が掘り込まれる。北壁の壁周溝は中央付近でピット状に落ち込んで途切れ、東西に分断されている。北西隅で再び途切れるが、僅かに間隔を空けて西壁へと続く。西壁北端の

壁周溝は2条が並行して走るが、中央付近では1条となり、南西隅で途切れる。壁周溝は幅10～15cm、深さ2～3cm。

壁 西壁はほぼ垂直に立ち上がるのに対して、西壁以外はやや開き気味に立ち上がる。壁高は最大12cm。

掘り方 北西と南西の隅に住居内土坑が、東壁際にはピットが掘られる。南西隅の土坑1は長径75cm、深さ45cmの楕円形、北西隅の土坑2は長径60cm、深さ40cmの楕円形土坑である。ピットは長径42cm、深さ6cmの楕円形である。

竈 東壁南端を掘り込んで竈を構築する。燃烧部はほぼ壁外にあり、一段深く掘り込んでから煙道へと連続する。焚き口両脇と中央、燃烧部壁際には袖石、構築材の据え方が並ぶが、構築材に用いられた石な



Ⅲ区3号住居土層観察所見

- 1 暗褐色土 径15mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物少量を含む。固く締まっている。
- 2 暗褐色土 径15mm大の二ツ岳軽石粒3%。固く締まっている。
- ※ 地山は固く締まった二ツ岳軽石粒とシルトの混層。

Ⅲ区3号住居内土坑1土層観察所見

- 1 暗褐色土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片多く含む。締まりやや弱い。

Ⅲ区3号住居内土坑2土層観察所見

- 1 暗褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まっている。

Ⅲ区3号住居内ピット1土層観察所見

- 1 黒褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まりやや弱い。

第54図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区3号住居・同掘り方

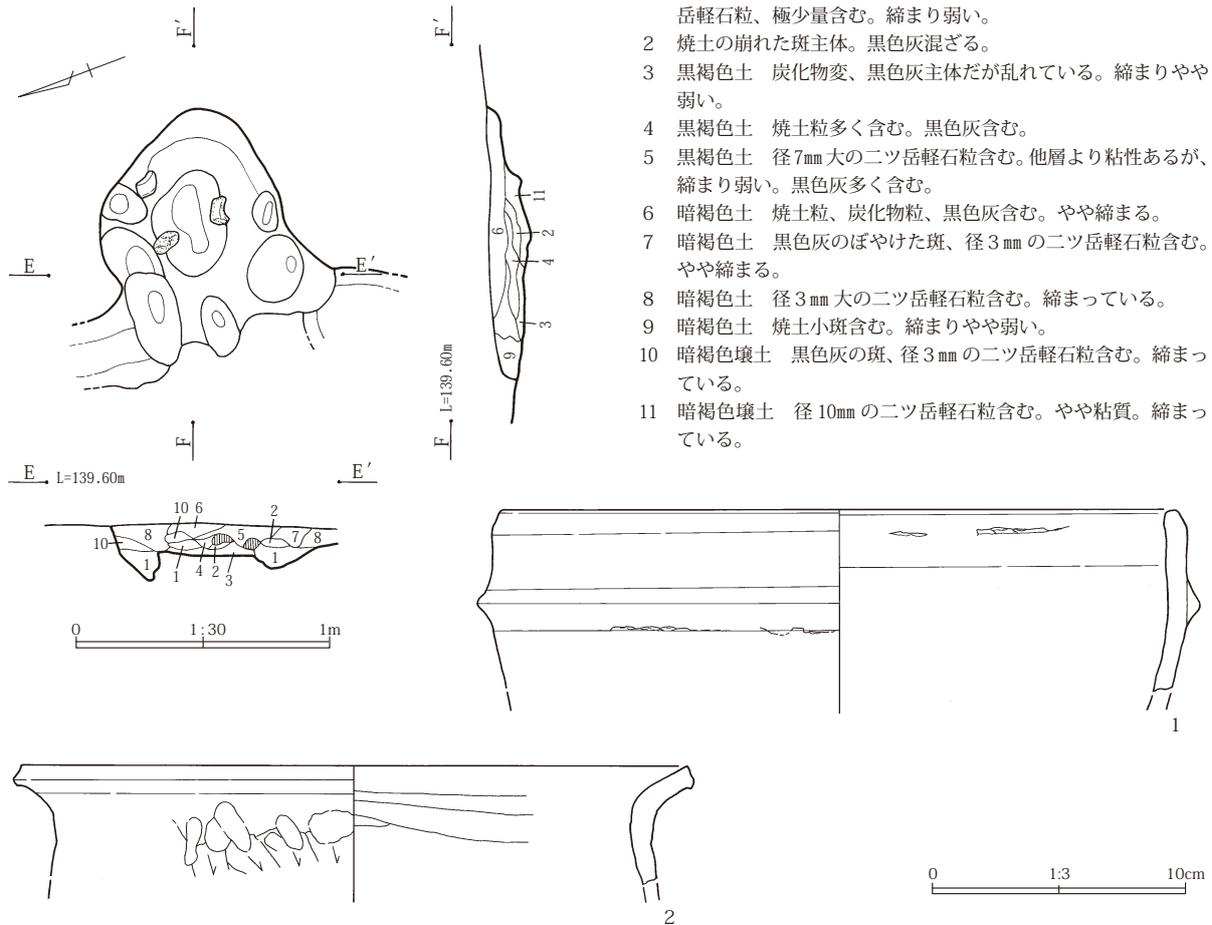
第4章 遺構と遺物

どは認められない。主軸方位はN-93°-E。

遺物 覆土中から羽釜（1）、土釜（2）の破片が出土している。土器以外には、床面から微量のイネ、オオムギ、竈から少量のブドウ属、イネ、ムギ類、ヒエ、マメ科、シソ属の炭化種実が得られた。

所見 床面からの出土遺物はないが、他2棟の住居

と長軸方位、規模がほぼ同じである。竈の構築箇所も南東隅とほぼ同じであるが、1・2号住居は壁の隅に構築しているのに対し、3号住居は東壁南端に壁に対して直行するかたちで構築されている点が異なる。以上の特徴から、10世紀後半から11世紀前半にかけての住居と考えたい。



Ⅲ区3号住居竈掘り方土層観察所見

- 1 暗褐色土 炭化物粒を少量含む。砂粒含む。径10mm大の二ツ岳軽石粒、極少量含む。縮まり弱い。
- 2 焼土の崩れた斑主体。黒色灰混ざる。
- 3 黒褐色土 炭化物変、黒色灰主体だが乱れている。縮まりやや弱い。
- 4 黒褐色土 焼土粒多く含む。黒色灰含む。
- 5 黒褐色土 径7mm大の二ツ岳軽石粒含む。他層より粘性があるが、縮まり弱い。黒色灰多く含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒、黒色灰含む。やや縮まる。
- 7 暗褐色土 黒色灰のぼやけた斑、径3mmの二ツ岳軽石粒含む。やや縮まる。
- 8 暗褐色土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。縮まっている。
- 9 暗褐色土 焼土小斑含む。縮まりやや弱い。
- 10 暗褐色壤土 黒色灰の斑、径3mmの二ツ岳軽石粒含む。縮まっている。
- 11 暗褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒含む。やや粘質。縮まっている。

第55図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区3号住居竈掘り方・出土遺物

Ⅳ区1号住居（第56～59図 PL.22～24）

位置 X=49.165/Y=-71.370 標高139.90～140.00mの緩斜面上に立地する。Ⅳ区の住居中では最南端に位置し、周囲に時期不明の土坑群があるものの、Ⅲ区の住居を含めて、他の住居からはやや距離を置いた位置にある。

形態 南北に長軸をおく長方形を基本とするが、北東隅がやや東に張り出すのと竈両脇の壁内張り出し

によって台形に近い形状となっている。長軸方位はN-6°-W。

規模 長軸長3.34m、短軸長3.28m。

床 全体的には平坦だが、北東側が一段深く掘り込まれている。この起伏を粘質の暗褐色土で埋め、踏み固めて床面としている。東壁を除く壁際には、部分的に壁周溝が認められる。北壁部及び西壁部では壁中央付近に、南壁部では壁際西端に、幅5～

15cm、深さ1cm内外で掘られた浅いものである。柱穴や貯蔵穴は認められないが、掘り方調査時に確認された北東隅部の土坑2は土器や礫を出土しており、貯蔵穴に当たる可能性がある。竈手前の床面には40cm大の扁平な礫が見られる。

壁 やや開き気味に、斜め立ち上がる。壁高は最大30cm。

掘り方 底面全体にピット状の落ち込みが認められる。北東と南西の隅に土坑が掘られている。南西の土坑1は長径70cm、深さ30cmの楕円形、北東の土坑2は長径90cm、深さ35cm、楕円形で断面箱形を呈する。底面からは礫と土器が出土している。

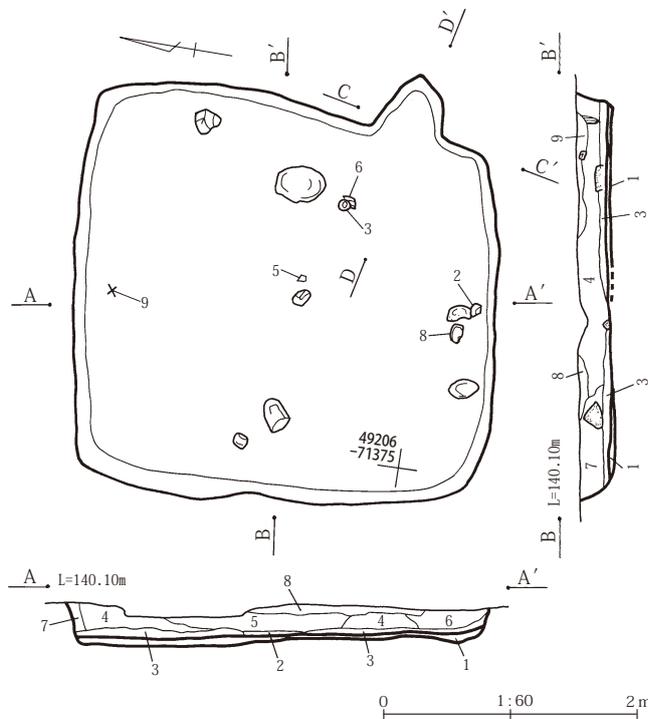
竈 東壁南端近くの壁面を東側に掘り込んで、粘質の黒褐色土を貼り付けて構築している。主軸方位はN-92°-Eを示す。燃烧部は南側の壁が一部壊れているが比較的残りはよい。焚き口両脇に地山を掘り残して小さな袖状部を形成する、焚き口両脇と燃烧部中央やや北寄りに袖石と支脚石の据え方があるが、石材は残っていない。燃烧部は一段深く掘り込まれてから、煙道へと連続する。煙道は一部に天井

が残っている。壁から1.7mの地点に煙道口が開く。

遺物 覆土中からは須恵器の坏(2・3)がある。ともに底部回転糸切りでやや小型の3は完形品である。南壁際の床面から須恵器甕破片(8)、中央部床面からやや浮いた状態で完形の須恵器高台碗(5)が出土している。須恵器坏(1)も床からの出土である。竈燃烧部と竈前からは土釜破片(6・7)が出土している。土釜はともに復元口径23cmほどで、頸部がややくびれるものとくびれずに外反するものの2個体がある。北東隅の住居内土坑2からは、須恵器の足高高台皿(4)が出土している。北壁際の覆土中からは釘と思われる鉄製品の断片(9)が1点出土している。

竈からはイネ、ムギ類、マメ科、ササゲ属の炭化種実が得られた。

所見 南西隅に掘られた住居内土坑は、本遺跡内の住居に共通する特徴である。出土遺物からみて、10世紀後半から11世紀の住居と考えられる。

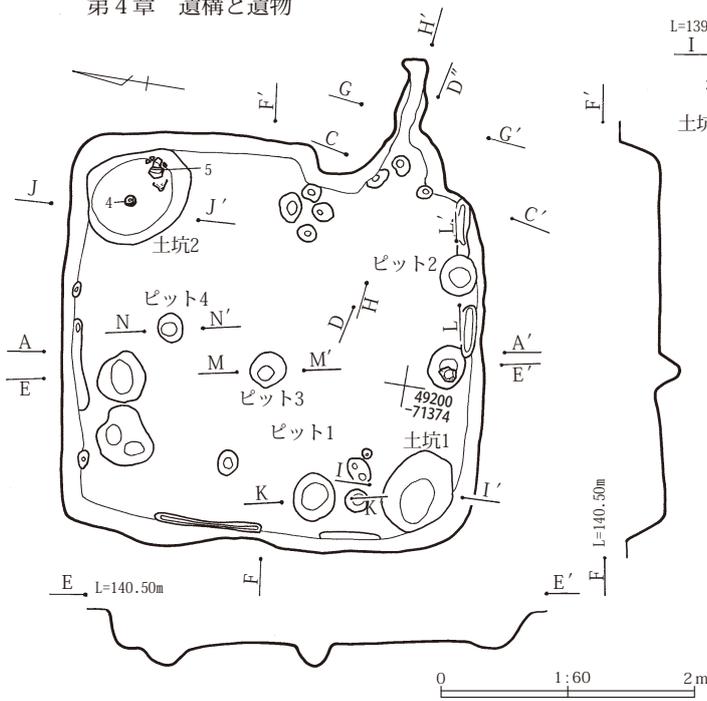


IV区1号住居土層観察所見

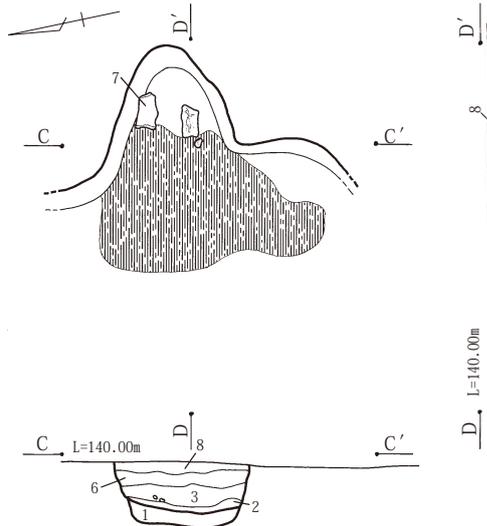
- 1 3と同層と思われるが二ツ岳軽石粒はほとんど含まない。やや黄色味を帯びる。
- 2 3と同層と思われるが、砂が多く混じる。
- 3 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を1%程度含む。やや粘質。やや締まる。
- 4 暗褐色壤土 径20mm大の二ツ岳軽石粒を3%程度含む。1層に比べると粘りがやや弱い。やや締まる。
- 5 4と同層と思われるが、全体にやや黄色味を帯びている。
- 6 4と同層と思われるが、径30mm大の二ツ岳軽石粒を5%程度含む。所々にやや粘質の土(褐色土)が混じる。
- 7 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を極少量含む。
- 8 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を2%程度含む。締まりやや弱い。所々にやや粘質の土(褐色土)が混じる。
- 9 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石粒ほとんど含まない。締まり弱い。

第56図 万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居

第4章 遺構と遺物



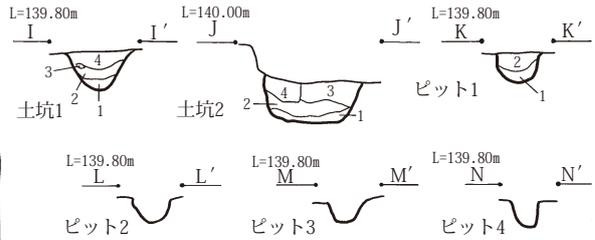
第57図 万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居掘り方



IV区1号住居竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 やや粘質でやや締まる。二ツ岳軽石ほとんど含まない。灰と炭化物を含む。
- 2 黒褐色壤土 やや粘質。やや締まる。二ツ岳軽石ほとんど含まない。灰と炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 シルト質埴壤土 粘質でやや締まる。径10mm大の二ツ岳軽石を1%程度含む。炭化物を少量含む。
- 4 2層と同層と思われるが、炭化物をより多く含む。
- 5 2層と同層と思われるが、二ツ岳軽石ほとんど含まない。所々に焼土が見られる。
- 6 暗褐色土 シルト質埴壤土 粘質でやや締まる。径10mm大の二ツ岳軽石1%程度含む。炭化物を極少量含む。
- 7 3層と同層と思われるが、二ツ岳軽石量さらに少ない。締まりやや弱い。
- 8 暗褐色壤土 締まりやや弱い。径10mm大の二ツ岳軽石3%程度含む。
- 9 暗褐色土 シルト質埴壤土。粘質でやや締まる。径10mm大の二ツ岳軽石2%程度含む。所々に炭化物が見られる。
- 10 5層と同層と思われるが、5層に比べ粘り気がやや弱い。炭化物は5層に比べやや多い。

第58図 万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居竈・同掘り方



IV区1号住居内土坑1土層観察所見

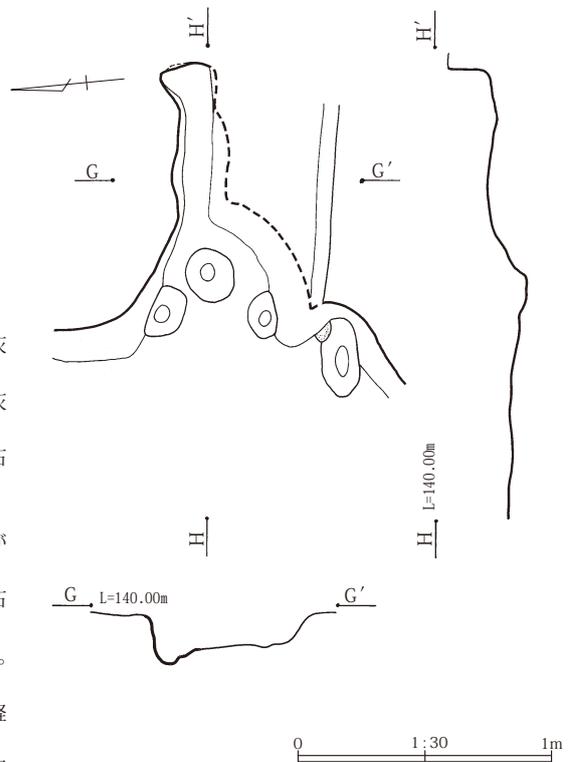
- 1 暗褐色壤土 径2mm大の二ツ岳軽石粒を少量含む。やや締まる。
- 2 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を1%程度含む。やや粘質で締まっている。
- 3 褐色土 シルト質埴壤土。二ツ岳軽石粒は含まない。粘質で締まっている。
- 4 2層と同層と思われるが、2層よりやや黄色味を帯びている。

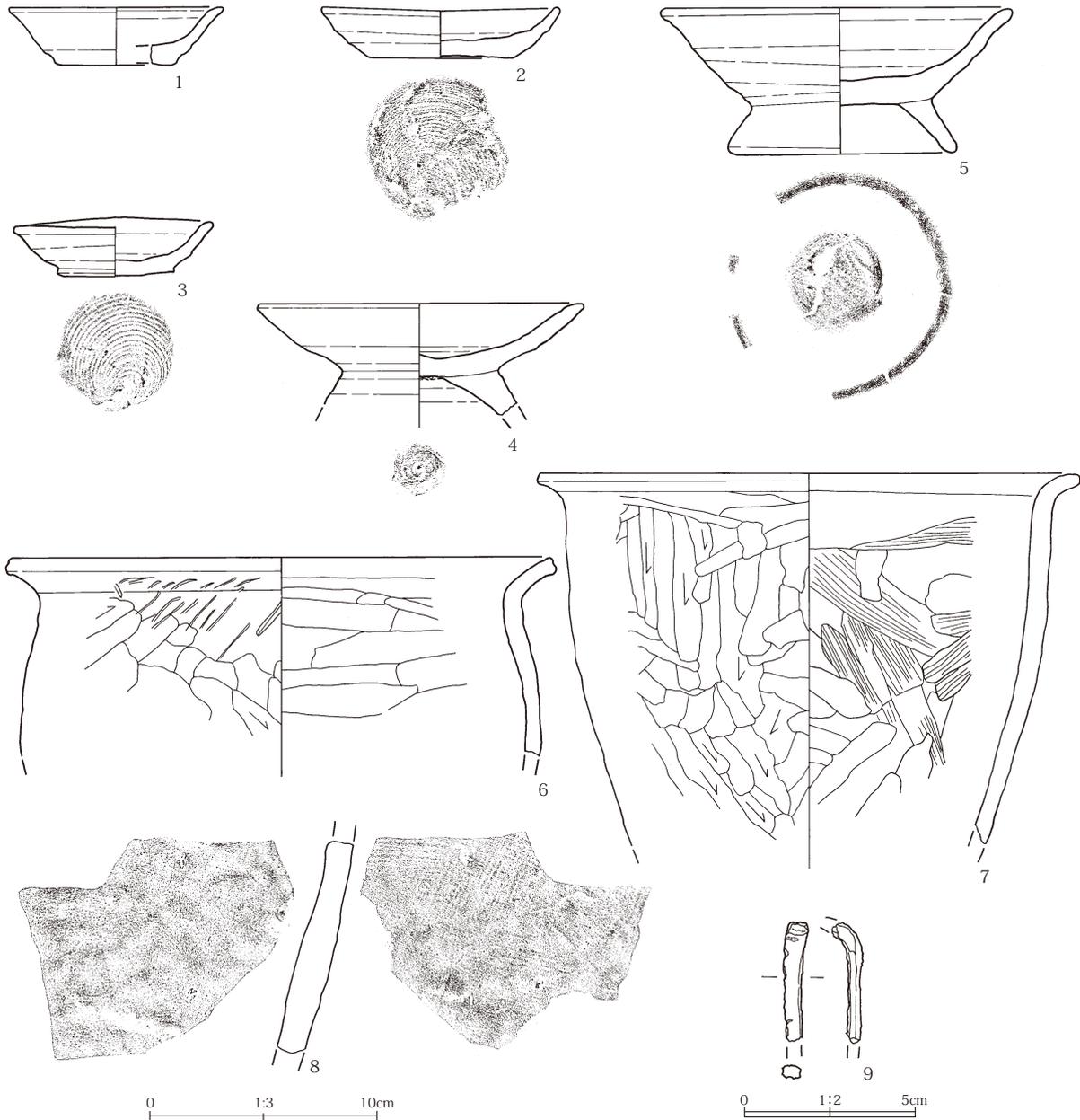
IV区1号住居内土坑2土層観察所見

- 1 暗褐色土 砂土。二ツ岳軽石粒ほとんど含まない。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を1%程度含む。やや粘質。やや締まる。
- 3 暗褐色壤土 径20mm大の二ツ岳軽石粒を2%程度含む。やや粘質。やや締まる。
- 4 褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を3%程度含む。やや粘質のブロック。

IV区1号住居内ピット1土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を1%程度含む。やや粘質で締まっている。
- 2 1層と同層と思われるが、2層よりやや黄色味を帯びている。





第59図 万蔵寺廻り遺跡 IV区1号住居出土遺物

IV区2号住居 (第60～63図 PL.24～27)

位置 X=49.210/Y=-71.375 標高140.00mの微高地に立地する。北側には調査区を東西に横断する3号溝が、南側には土坑群と1号住居がある。

形態 南北に長い長方形、長軸方位はN-8°-E。

規模 長軸長は4.38m、短軸長3.62m。

床 北及び西側がやや深く掘り込まれ、中央は僅かに波打つ。東壁を除き壁周溝がある。北壁の周溝は北東隅から中央にかけて掘られ、次第に掘り込みが不明瞭になる。西壁においても北西隅から中央へ走

り、中央から次第に不明瞭になる。南壁では中央で途切れている。幅は7～25cm、深さ最大5cm。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高20cm。

掘り方 南西隅に長径90cm、深さ25cmの楕円形土坑がある。北東の土坑2は、中世の埋納銭である天聖元宝が出土しており、住居に伴うものではない。南西にある土坑3は長径55cm、深さ20cm、楕円形を呈する。西側には長径20～30cm、深さ20cmの円形もしくは楕円形のピットが不規則に並ぶ。

竈 2基の竈がある。東壁南端と南壁東端を掘り込

第4章 遺構と遺物

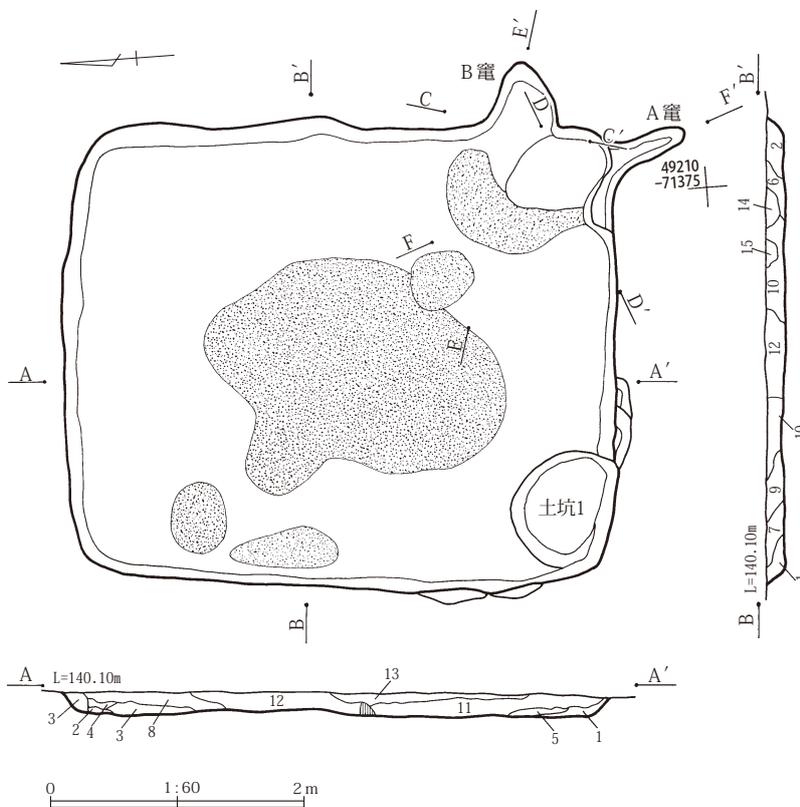
んで構築されており、南壁東端のA竈はN-160°-E、南壁東端のB竈がN-101°-Eの主軸方向を示す。A竈は地山を掘り込み、暗褐色、黄褐色のロームを貼り構築する。燃烧部はほぼ壁内にあり、一段深く掘り込んでから煙道へと連続する。中央付近には支脚と思われる石が据えられていた。支脚両脇からも石が見つかった。煙道底面には2~6cm大の石が敷き詰められており、壁から65cmほど延びて立ち上がっている。B竈の煙道は残っていない。燃烧部はほぼ壁外にあり、一段深く掘り込んでから煙道へと連続すると思われる。

土層観察から判断するとA竈がB竈を切る。竈の位置関係から見ると、B竈は東壁において住居の長軸にはほぼ直交するように構築される。これに対し、A竈は南壁東端から、住居の主軸に関係なく南東方向へ煙道を延ばすA竈の特徴は本遺跡における11世紀代の住居に共通する特徴で、B竈はこれより古い段階の住居と共通する。

遺物 竈周辺から須恵器の坏底部(1)、羽釜口縁部(3)、灰釉陶器の皿底部(2)の各破片が1個体ずつ出土した。南東の床面からは鉄鏃(4)が1点出土している。鏃身は三角形、頸部は斜行形、関部は角関、有茎で茎部断面は方形である。切先を欠損するが、残存状態は良好である。

また、炭化材や炭質物に混じって、床面土壌を中心にイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、マメ類など、多種多量の炭化種実が検出されている。

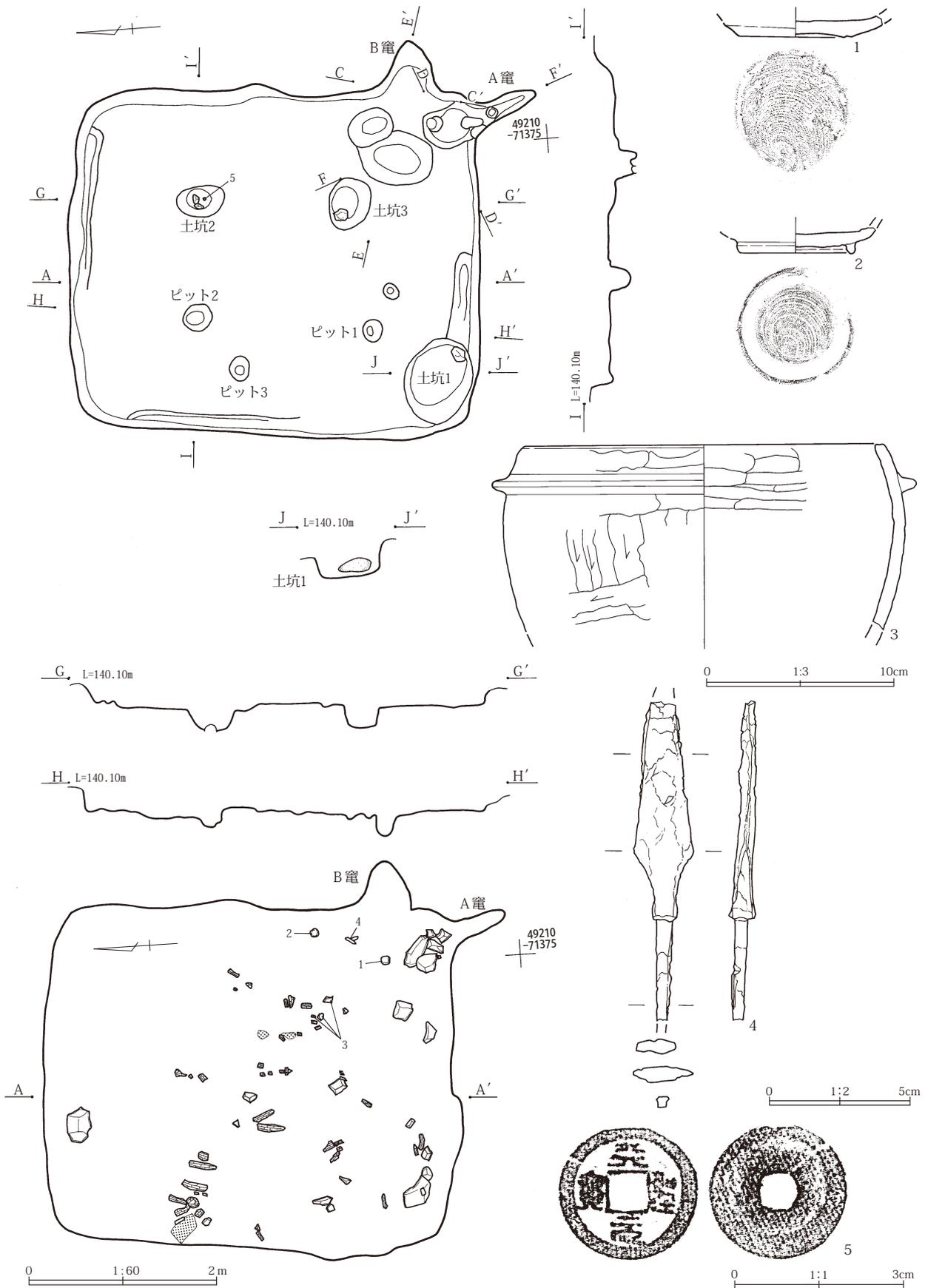
所見 長軸方位とB竈を見る限りでは10世紀後半の住居に見られる特徴を備えている。覆土中であるが、羽釜や灰釉陶器皿は10世紀後半頃の遺物と思われる。ところがA竈は前述の通り11世紀代の特徴を示すものである。出土遺物とA、B両竈の新旧関係からみると、10世紀後半から11世紀にかけて存続した住居であったものと考えるのが妥当であるように思われる。



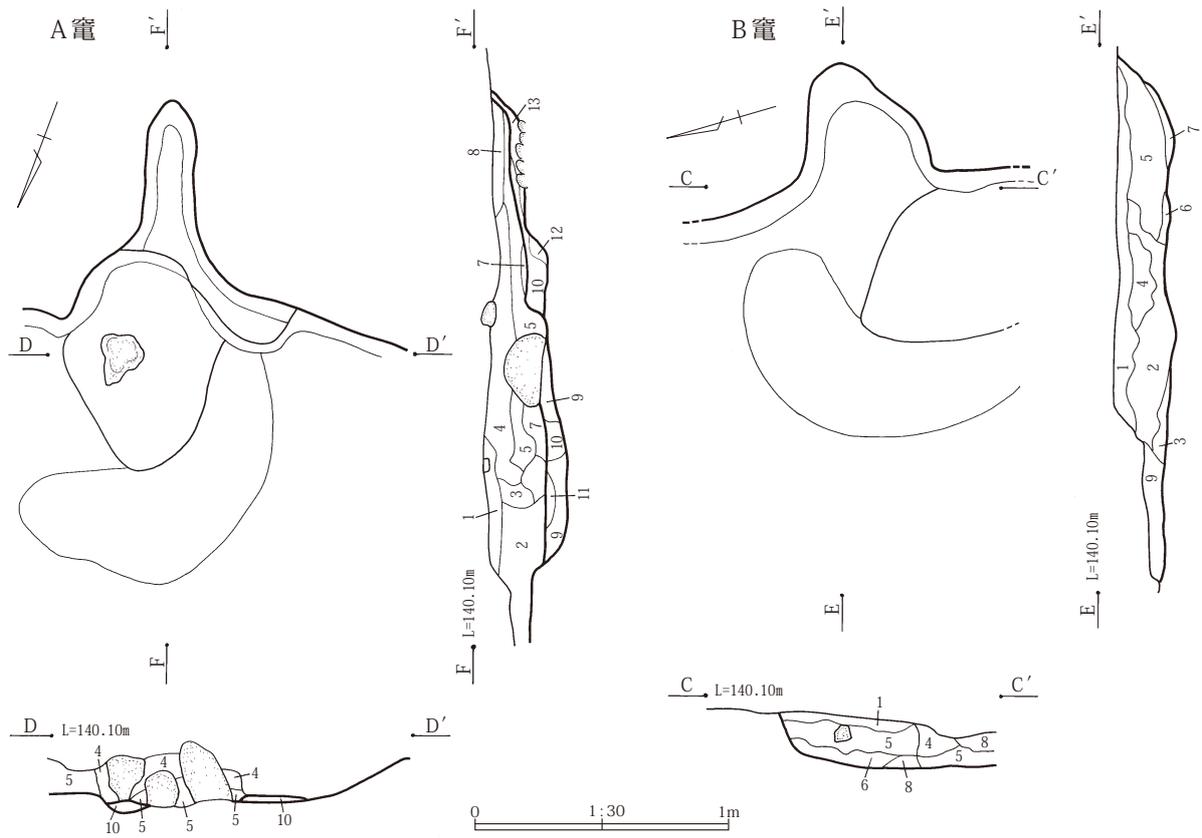
IV区2号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 炭化物、黒色灰多量に含む。焼土粒含む。
- 2 褐色砂壤土 炭化物粒少量含む。
- 3 黒褐色壤土 炭化物粒多く含む。焼土、二ツ岳軽石細粒含む。やや締まる。
- 4 黒褐色壤土 炭化物片含む。径5mm大の二ツ岳軽石細粒の碎片含む。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 砂粒多い。二ツ岳軽石粒含む。締まっている。
- 6 黒褐色壤土 炭化物含む。二ツ岳軽石細粒1%。やや締まる。
- 7 黒褐色壤土 炭化物多く含む。径5mm大の二ツ岳軽石細粒1%。
- 8 黒褐色壤土 炭化物粒含む。径5mm大の二ツ岳軽石細粒3%。30mm大のもの有り。締まっている。
- 9 暗褐色壤土 炭化物粒含む。径5mm大の二ツ岳軽石細粒1%。20mm大のもの有り。締まっている。
- 10 暗褐色壤土 炭化物粒含む。焼土粒多く含む。径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。やや締まる。
- 11 暗褐色壤土 炭化物粒含む。木質炭化材片有り。径5mm大の二ツ岳軽石粒多く含む。焼土粒含む。
- 12 黒褐色壤土 炭化物粒含む。木質炭化材片有り。焼土小ブロック含む。径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。締まっている。
- 13 黒褐色壤土 炭化物粒含む。径15mm大の二ツ岳軽石粒7%。固く締まっている。
- 14 暗褐色壤土 焼土粒含む。径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まり弱い。
- 15 暗褐色壤土 炭化物含む。径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まり弱い。

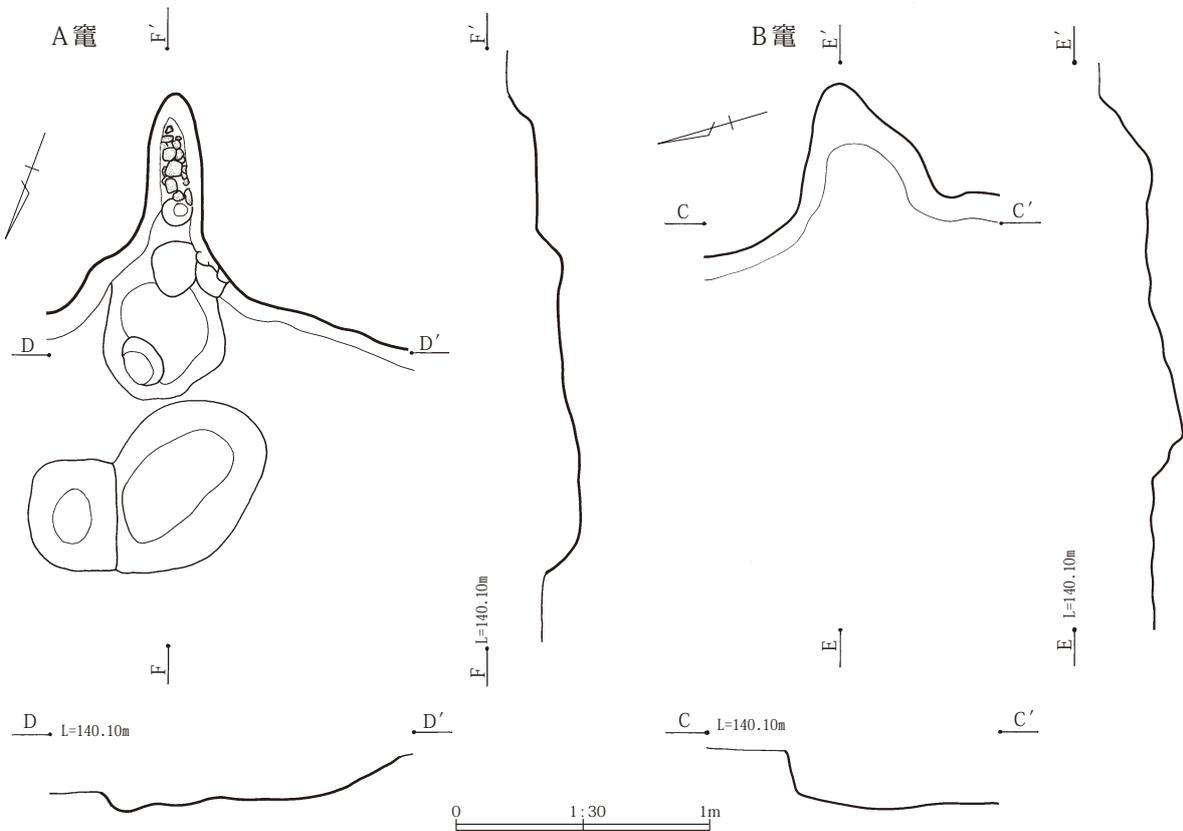
第60図 万蔵寺廻り遺跡 IV区2号住居



第61図 万蔵寺廻り遺跡 IV区2号住居掘り方・遺物分布・出土遺物



第62図 万蔵寺廻り遺跡 IV区2号住居竈



第63図 万蔵寺廻り遺跡 IV区2号住居竈掘り方

IV区2号住居A竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物粒含む。固く締まっている。住居覆土。
 - 2 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼土粒僅かに含む。A竈構築土の崩れたものか？
 - 3 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼土粒、炭化物粒少量含む。締まりやや弱い。
 - 4 暗褐色壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片、焼土小ブロック含む。やや締まる。
 - 5 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼土粒多く含む。炭化物片含む。締まっている。
 - 6 暗褐色土 軽埴土 径3mm大の二ツ岳軽石粒僅かに含む。焼土粒含む。締まっている。(竈構築土)
 - 7 黒色灰、炭化物の集中。焼土ブロック1%。
 - 8 暗褐色壤土 径2mm大の二ツ岳軽石粒、炭化物小片、焼土粒含む。締まりやや弱い。
 - 9 暗褐色土 壤土20%。黒色灰主体。掘り方覆土。
 - 10 黒色灰、炭化物主体。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。掘り方覆土。
 - 11 暗褐色壤土 掘り方覆土。
 - 12 暗褐色壤土 炭化物粒、焼土粒少量含む。やや粘質。締まっている。掘り方覆土。
 - 13 黄褐色壤土 焼土粒少量含む。掘り方覆土。
- ※4、5層カマド構築土。ローム質で、この部分の地山には無い土。

IV区2号住居B竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物粒含む。固く締まっている。住居覆土。
- 2 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼土粒。
- 3 炭化物および黒色灰の集中。
- 4 黒褐色壤土 焼土ブロック、径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。
- 5 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼土粒少量含む。大型炭化材片含む。粒子が揃っている。締まりやや弱い。
- 6 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。(黄褐色土)シルト小ブロック含む。やや粘質。やや締まる。
- 7 黒褐色砂壤土 黒色灰と地山砂の混土。
- 8 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼土含む。
- 9 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物片、焼土ブロック多く含む。締まっている。住居覆土。

IV区3号住居 (第64～68図 PL.27・28)

位置 X=49.230/Y=-71.395 IV区のほぼ中央に位置し、標高140.40～140.50mの緩斜面上に立地する。南側には3号溝が東西に走り、東側では4号住居と隣接する。周囲には土坑が点在する。

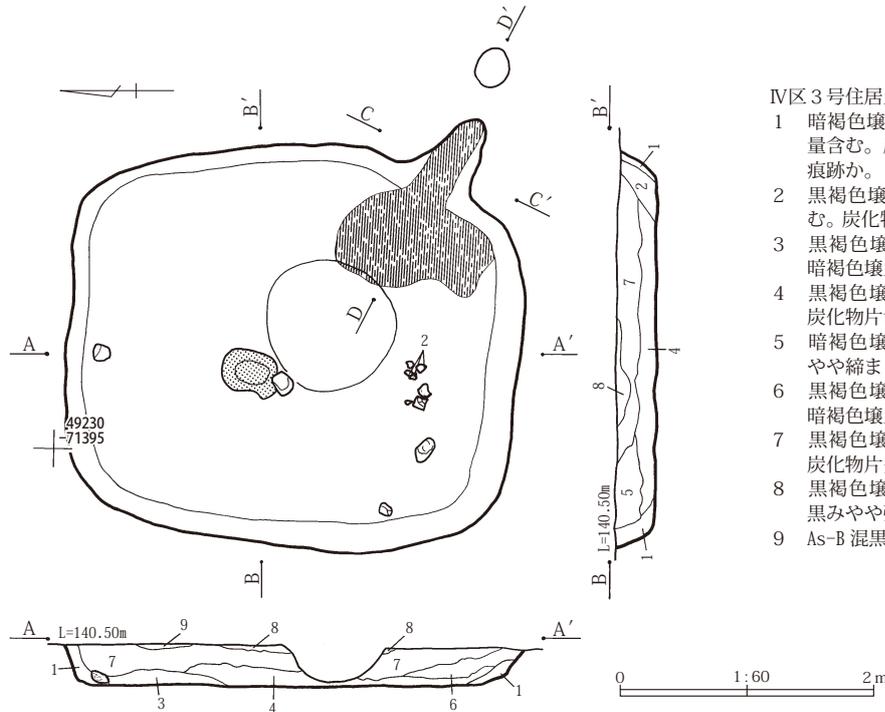
形態 南北に長軸をおく隅丸長方形で、長軸方位はN-5°-E。東壁がやや丸みを帯びて張り出す。

規模 長軸長3.56m、短軸長3.16m。

床 緩やかな起伏があるが、ほぼ平坦に作られる。住居中央に長径40cm、深さ10cmほどの楕円形ピット、南西隅に長径65cm、深さ15cmの楕円形住居内土坑がある。壁周溝などは認められず、底面をそのまま床面としたものと思われる。

壁 やや開き気味に上方へと立ち上がり、壁高30～34cm。四方の壁に沿って、腐植を含む締まりの弱い暗褐色土が堆積する。住居壁構造の痕跡の可能性があろう。

竈 東壁南端を掘り込んで構築する。焚き口両脇には袖石据え方が掘られ、袖石が据えられた状態で確認された。壁内への張り出しは無く、袖は認められない。燃烧部上半は壁外にあり、一段深く掘り込

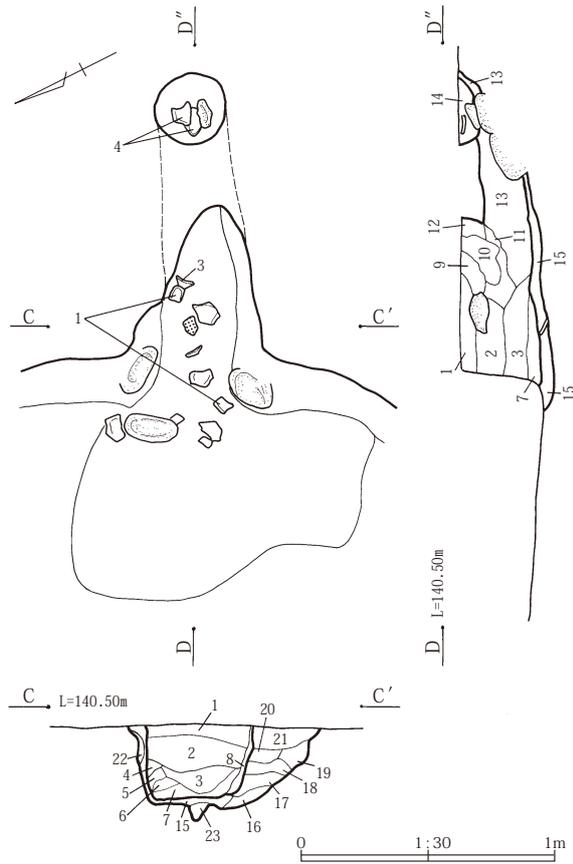


IV区3号住居土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を極少量含む。腐植を含む。締まり弱い。壁際の構造痕跡か。
- 2 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物粒含む。やや粘質。締まりやや弱い。
- 3 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。暗褐色壤土のブロック含む。やや締まる。
- 4 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物片含む。やや締まる。
- 5 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒3%。やや締まる。
- 6 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。暗褐色壤土の斑、粒子を含む。やや締まる。
- 7 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物片多く含む。やや粘質。やや締まる。
- 8 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。黒みや強く、締まっている。
- 9 As-B 混黒。28号土坑覆土と同相。

第64図 万蔵寺廻り遺跡 IV区3号住居

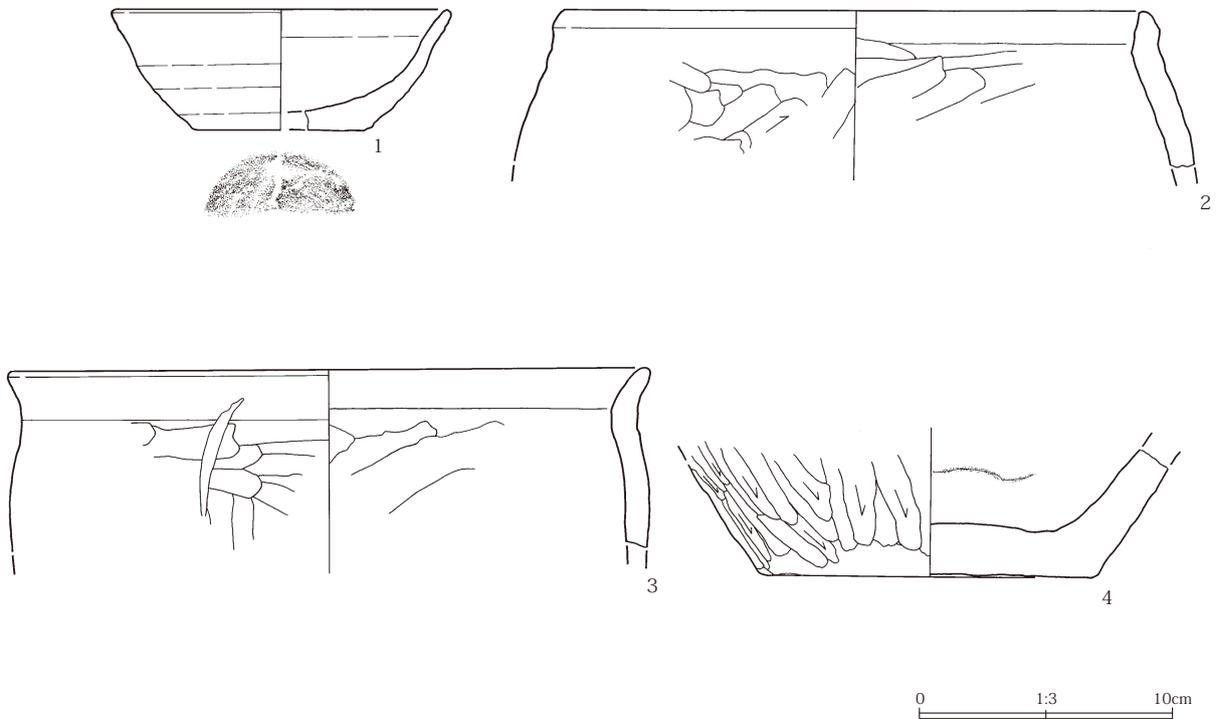
第4章 遺構と遺物



IV区3号住居竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。締まっている。焼土粒含む。炭化物片含む。
- 2 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%少量含む。締まり弱い。
- 3 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒、極少量含む。焼土小ブロック含む。黒色灰の斑含む。締まり弱い。
- 4 暗褐色土 軽埴土。焼土ブロック30%。締まり弱い。
- 5 黒褐色壤土 黒色灰、炭化物粒含む。締まり弱い。
- 6 暗褐色土 軽埴土。焼土小ブロック1%。締まりやや弱い。
- 7 黒色灰と焼土ブロックの混土。
- 8 褐色軽埴土 壁面構成土。
- 9 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒1%、焼土粒含む。締まっている。
- 10 崩れた焼土ブロック主体。暗褐色壤土と混じる。天井崩落土。
- 11 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物片含む。焼土粒少量含む。締まりやや弱い。
- 12 褐色・褐色軽埴土 下部焼土化。天井部分。
- 13 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒、極少量含む。焼土粒含む。締まり弱い。
- 14 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。焼土粒多く含む。
- 15 黒色灰主体。二ツ岳軽石粒含まない。焼土小ブロック含む。
- 16 黒褐色軽埴土 黒色灰、焼土ブロック主体。締まり弱い。
- 17 にぶい黄褐色軽埴土 焼土小ブロック含む。二ツ岳軽石粒の砕けた細粒含む。締まり強い。
- 18 暗褐色軽埴土 3層に近いが、焼土無し。
- 19 極暗褐色軽埴土 4層に近いがやや赤変。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まっている。
- 20 褐色軽埴土 焼土化した3層。締まっている。
- 21 黒褐色軽埴土 径3mm大の二ツ岳軽石粒1%、径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まっている。
- 22 褐色シルト質埴土。地山シルト主体。焼土化している。
- 23 褐色土軽埴土、焼土ブロック混土。締まり弱い。

第65図 万蔵寺廻り遺跡 IV区3号住居竈

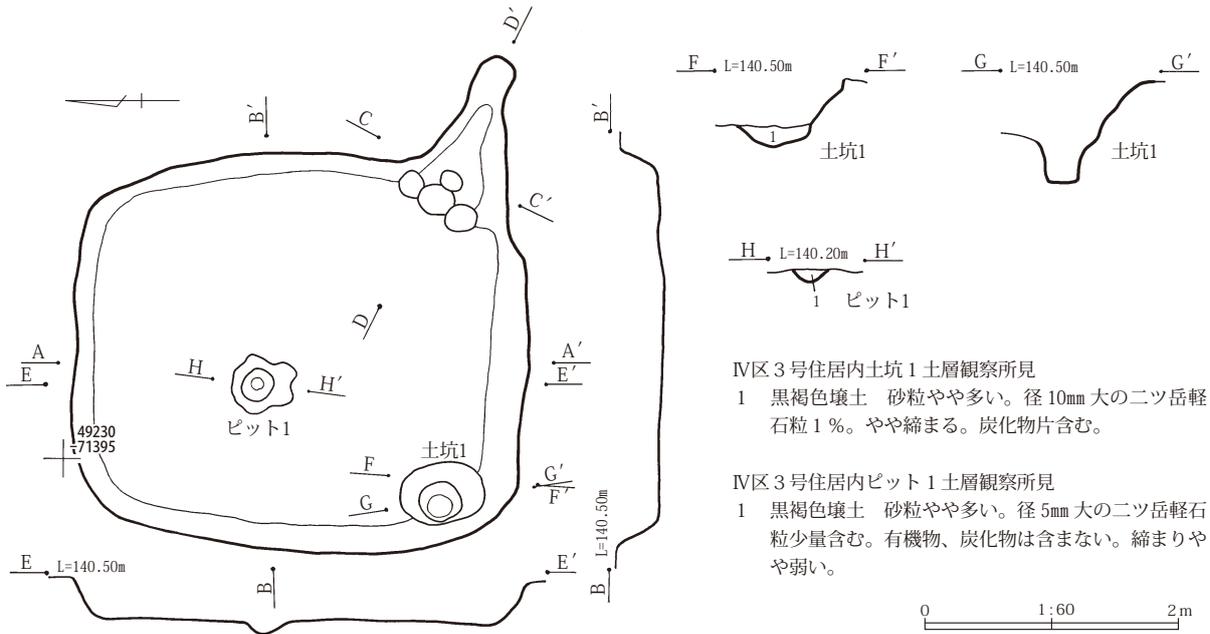


第66図 万蔵寺廻り遺跡 IV区3号住居出土遺物

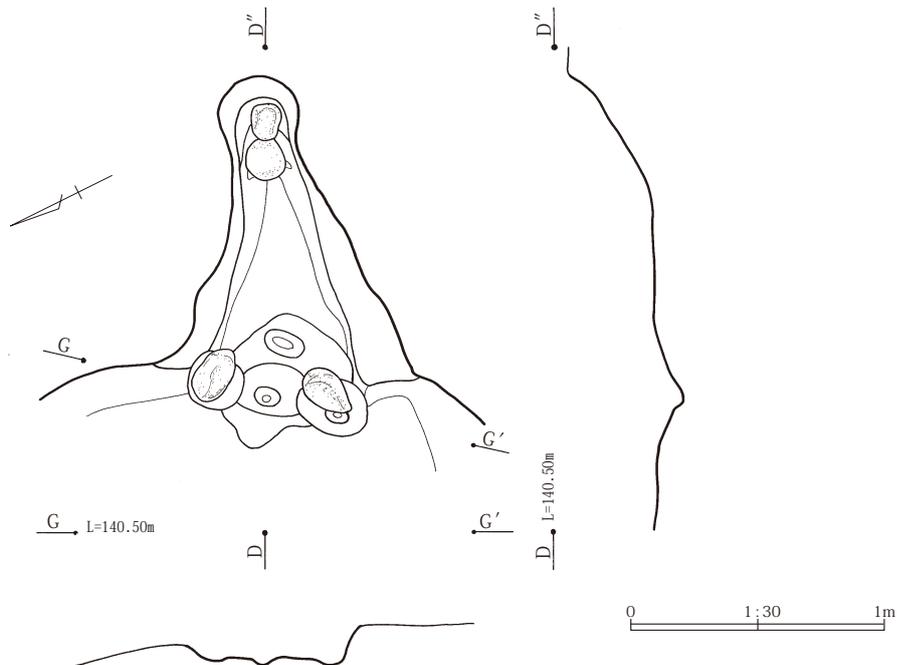
でから煙道へと連続する。燃烧部中央には支脚据え方もあるが、支脚は認められない。天井は残っておらず、下部が焼土化した天井崩落土が見られる。煙道だけは一部天井が残っており、壁から80cmの地点に煙出しが開口する。煙出し手前の煙道底面には、20cm大の丸石が敷かれており、2号住居A竈と類似する特徴が見られる。主軸方位はN-112°-E。

遺物 竈燃烧部から須恵器坏（1）、煙道から土釜

底部片（3・4）、煙道と住居覆土中から土釜（2）が出土している。竈からはイネ、ムギ類、ヒエ、アワ、マメ類、シソ属の炭化種実が少量出土している。
所見 遺物から10世紀後半の住居と考えられる。



第67図 万蔵寺廻り遺跡 IV区3号住居掘り方



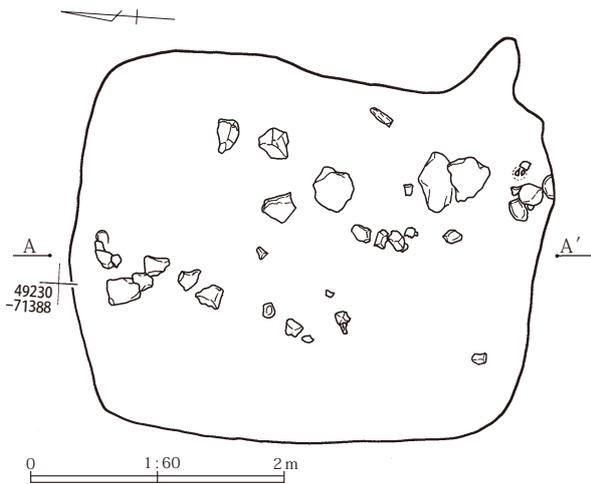
第68図 万蔵寺廻り遺跡 IV区3号住居竈掘り方

IV区4号住居 (第69～73図 PL.28)

位置 X=49.230/Y=-71.405 調査区のほぼ中央に位置し、標高140.24～140.26mの緩斜面上に立地する。西側には3号住居と隣接する。

形態 南北に長軸をおく隅丸長方形を基本とするが、東壁がやや北東に振れ、南壁がやや南東に振れるためわずかに歪みがある。

規模 長軸長3.58m、短軸長3.20m。

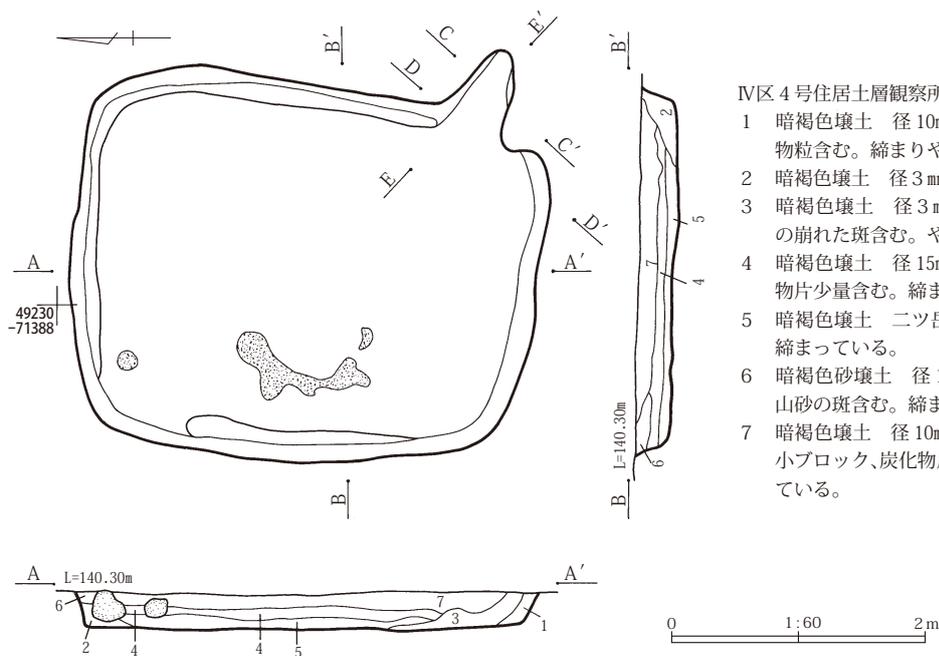


第69図 万蔵寺廻り遺跡 IV区4号住居覆土中の礫分布

床 緩やかな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られている。掘削底面をそのまま床面としたものと思われる。中央部の西側を中心に炭質物の薄い層が床面を覆う部分が見られる。南壁を除く壁際に壁周溝が掘られている。東壁では竈脇から始まり、北東隅を経て北壁西端で途切れる。西壁では北西隅手前から南西隅まで2mほどにわたって走る。南壁際ではピット状の落ち込みがいくつか見られるが、溝状にはならない。住居中央と西壁際の中央近くにはピットがあり、南西隅には長径60cm、深さ20cmの円形住居内土坑がある。

壁 わずかに開き気味に立ち上がる。最大壁高は34cmある。

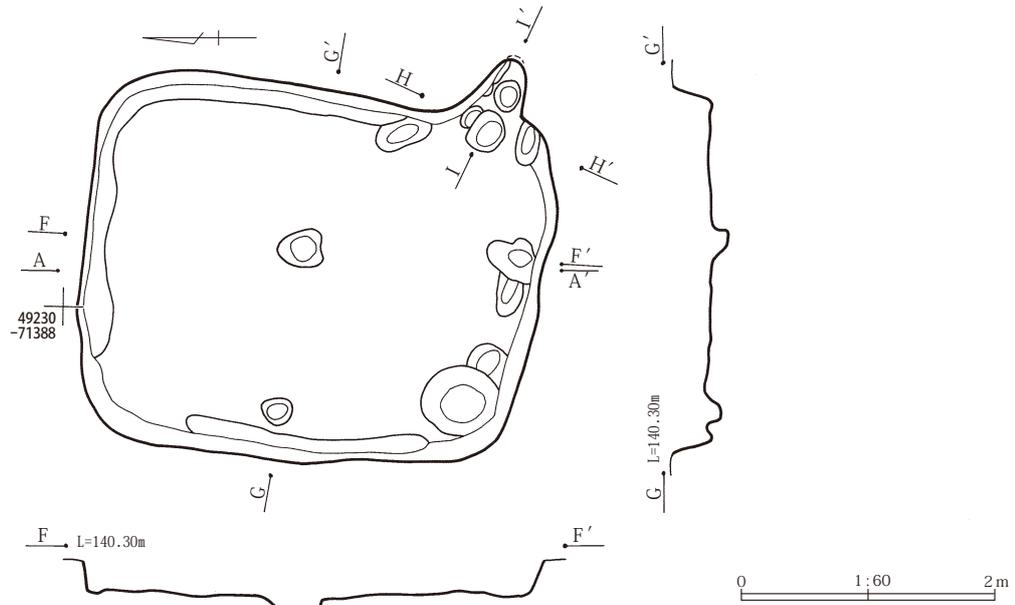
竈 東壁南端を掘り込んで構築する。主軸方向はN-124°-Eで、壁方向とわずかに斜交する。燃烧部はほぼ壁外にあり、中央に支脚の据え方と思われるピットが掘られる。焚き口両脇には袖石据え方と思われるピットが並び、挟まれるように中央にもピット状の落ち込みがある。焚き口両脇の壁内には張り出しは認められない。煙道は明瞭に残っていないが、燃烧部の掘り込みからすぐに急角度の立ち上がりに



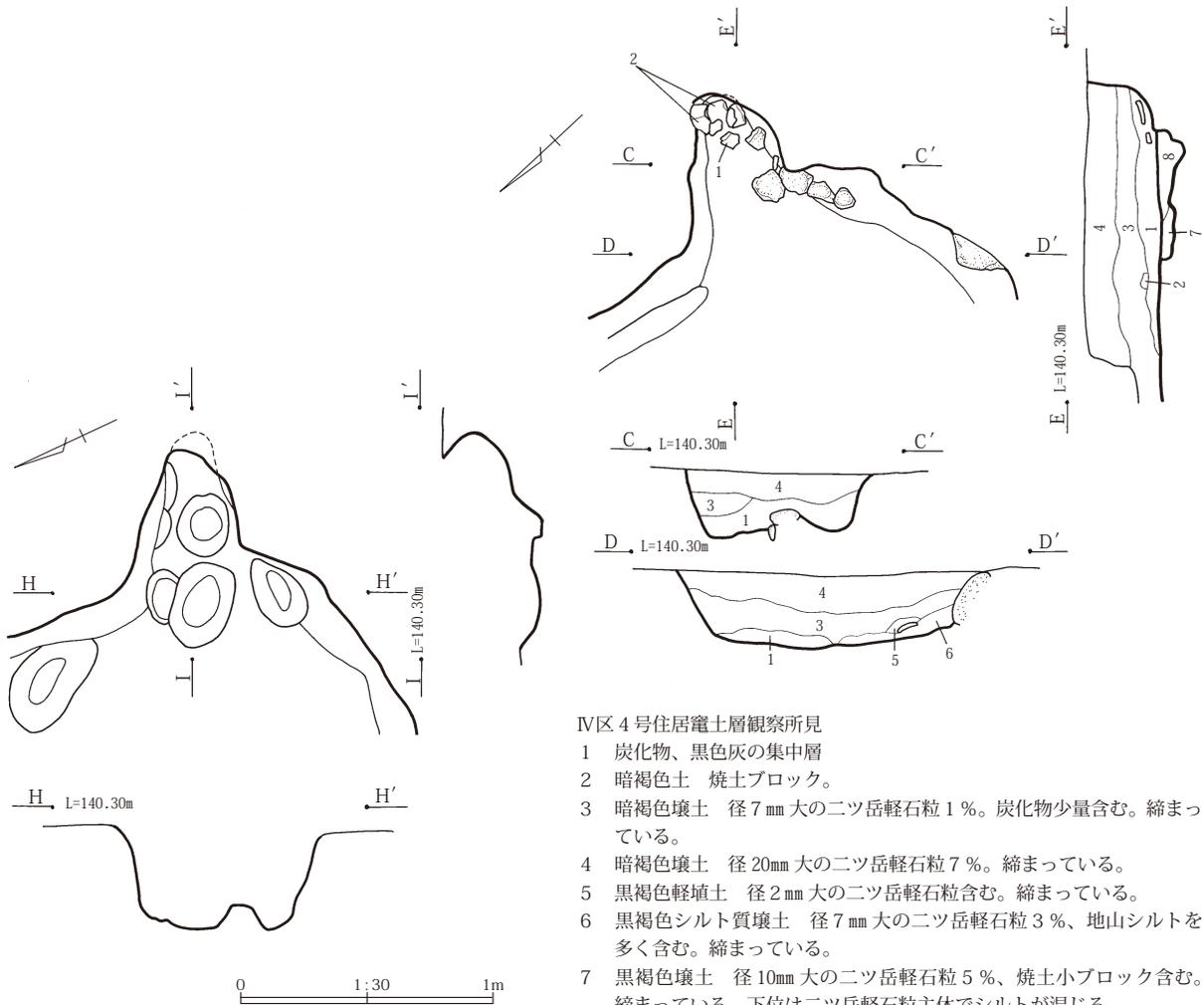
IV区4号住居土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物粒含む。締まりやや弱い。
- 2 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。
- 3 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山の崩れた斑含む。やや締まる。
- 4 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒3%。炭化物片少量含む。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒5%。炭化物多く含む。締まっている。
- 6 暗褐色砂壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒7%。地山砂の斑含む。締まっている。
- 7 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒10%。焼土小ブロック、炭化物片、黒色灰の斑含む。固く締まっている。

第70図 万蔵寺廻り遺跡 IV区4号住居



第71図 万蔵寺廻り遺跡 IV区4号住居掘り方



IV区4号住居土層観察所見

- 1 炭化物、黒色灰の集中層
- 2 暗褐色土 焼土ブロック。
- 3 暗褐色壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物少量含む。縮まっている。
- 4 暗褐色壤土 径20mm大の二ツ岳軽石粒7%。縮まっている。
- 5 黒褐色軽埴土 径2mm大の二ツ岳軽石粒含む。縮まっている。
- 6 黒褐色シルト質壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒3%、地山シルトを多く含む。縮まっている。
- 7 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒5%、焼土小ブロック含む。縮まっている。下位は二ツ岳軽石粒主体でシルトが混じる。
- 8 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。上位に少量の炭化物、焼土小ブロックが入る。縮まりやや弱い。掘り方覆土。

第72図 万蔵寺廻り遺跡 IV区4号住居竈・同掘り方

第4章 遺構と遺物

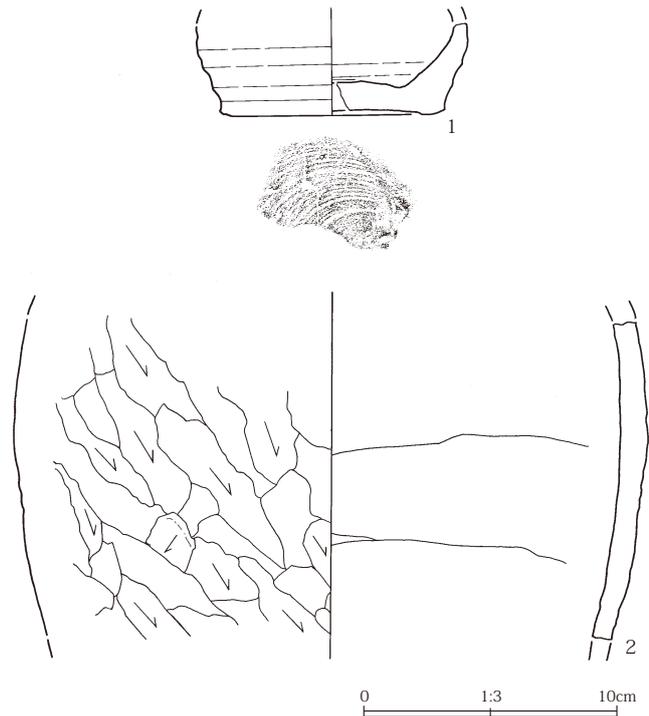
なっており、段差をつけてから煙道となっていた可能性はある。

なお、覆土中から最大で50cm程度の大きさの大小の礫が多量に出土している。床面に接してはいないが、竈前面に大型の礫が集中する。

遺物 竈煙道から須恵器の小型鉢の底部片（1）と土釜（2）の胴部下位破片が出土した。

床面近くの土壌からイネとオオムギ、コムギの炭化胚乳が僅かに得られている。

所見 出土遺物から、10世紀後半から11世紀前半にかけての住居と考えられる。



第73図 万蔵寺廻り遺跡 IV区4号住居出土遺物

IV区5号住居（第74・75図 PL.29）

位置 X=49.219/Y=-71.390 標高140.10～140.20mの緩斜面上に立地する。IV区のほぼ中央にあたる。

形態 北西隅を溝に、北東隅を21号土坑に切られている。さらに上部を削り込まれているために、住居の全容は明確ではないが、南北に長軸をおく長方形の平面形も持つものと推定される。南壁がやや丸みを帯びて外側に張り出すため、全体に歪みが見られる。長軸方位はN-2°-E。

規模 残存長軸長3.03m、短軸長2.63m。

床 緩やかな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られている。地山を掘り込み、基本的には掘削底面をそのまま床面としたものと思われるが、部分的に黒褐色土を貼り、踏み固めて床面を構成している部分も見られる。床面付近の覆土には炭質物粒子が多く含まれる。壁周溝、柱穴は認められないが、南西隅に貯蔵穴と思われる土坑がある。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高13cm。

竈 東壁南端を掘り込んで構築しているが、住居全体が削平を受けているため残存状態が悪く、袖、煙道などは残っていない。燃焼部は壁内にあり、一段

掘り込んでから煙道へと連続していたと思われる。燃焼部の中央に当たる部分には支脚の据え方と思われるピットがあり、右脇にもピット状の落ち込みがある。焚き口前から礫が出土していることを考え合わせると構築材の据え方であった可能性があるだろう。主軸方向はN-103°-Eを示す。

遺物 図示可能な出土遺物は見つかっていない。

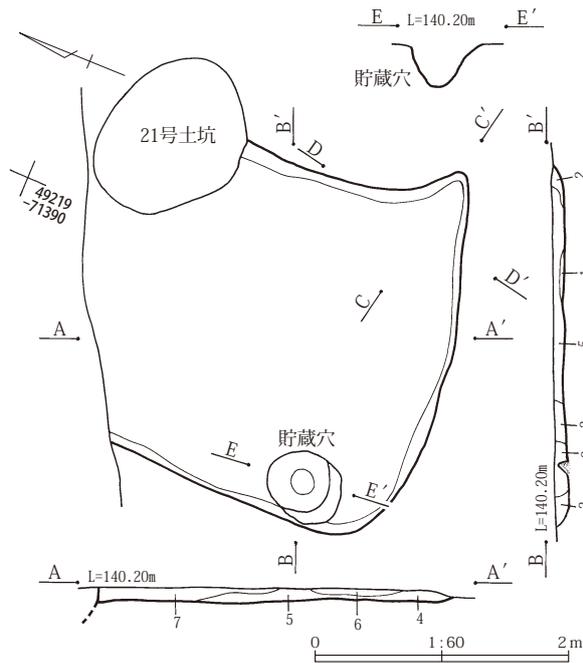
所見 住居全体の残りが悪く、出土遺物もないため、時期の確定ができない。竈は東南隅に作られるが壁面と斜行しない。燃焼部位置が壁内にあることなどから推測すると、10世紀後半から11世紀にかけての住居である可能性が高いものと思われる。

IV区6号住居（第76・77図 PL.29）

位置 X=49.230/Y=-71.405 標高140.40mの緩斜面上に立地する。IV区西端に位置し、東側に7号住居がある。

形態 西壁の一部が31号土坑に切られる。隅丸方形を示し、長軸方位はN-20°-E。

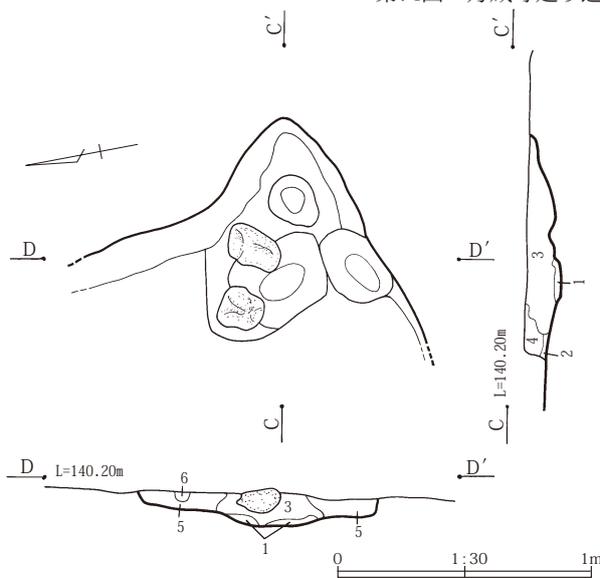
規模 両軸とも3.28m。



第74図 万蔵寺廻り遺跡 IV区5号住居

IV区5号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物粒含む。締まっている。(床)
- 2 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。炭化物粒少量含む。締まりやや弱い。
- 3 暗褐色砂壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片含む。褐色土ローム粒多く含む。地山砂を多く含む。やや締まる。
- 4 黒褐色壤土 径2mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物片、黒色灰を多く含む。締まりやや弱い。
- 5 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。炭化物粒含む。締まっている。
- 6 暗褐色シルト質壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山シルト斑30%含む。締まりやや弱い。
- 7 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%、15mm大を含む。炭化物粒含む。地山砂粒含む。
- 8 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒1%、10~15mm大含む。炭化物粒含む。締まりやや弱い。



第75図 万蔵寺廻り遺跡 IV区5号住居竈

IV区5号住居竈土層観察所見

- 1 地山砂層の焼化赤変部。
- 2 暗褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山の汚れた層。住居掘り方下部の埋土。
- 3 褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物、焼土粒含む。締まっている。やや粘質。竈構築土の残痕。
- 4 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まっている。
- 5 暗褐色砂壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土小ブロック少量含む。締まっている。
- 6 褐色壤土 地山ロームのブロック。

床 上部の削平が著しく詳細な構造を把握することができない。確認面が既に床面下に相当している可能性もあるが、竈前に広がる炭質物の薄層が掘削底面にそのまま広がっていること、砂質の地山がピットや土坑状の凹みなどほとんど起伏を持たずにほぼ平坦に掘り込まれていることから見て、掘削底面をそのまま床としていたものと考え。床面中央付近の掘削底面には地山砂に接して、炭質物の集中した

層があり、マメ類の炭化子葉が検出されている。

壁際には断続的に壁周溝が掘られている。東壁の壁周溝は竈脇から始まり、壁中央付近で途切れ、終端はピット状の落ち込みとなっている。北東隅から北壁中央までは壁周溝が認められず、北壁中央から再び現れて、北西隅ではごく浅くなって途切れるものの、南西隅まで巡ることになる。南西隅では再び一旦途切れるが、南壁では南西隅近くから竈脇ま

第4章 遺構と遺物

で続いている。壁周溝の幅は7～20cmと不揃いで、深さは1cm前後とごく浅い。

北東隅には住居内土坑がある。長径70cm、深さ30cmほどで、楕円形の平面形を呈する。貯蔵穴にあたる可能性もあるが、積極的にこれを裏付けるような出土遺物は認められなかった。

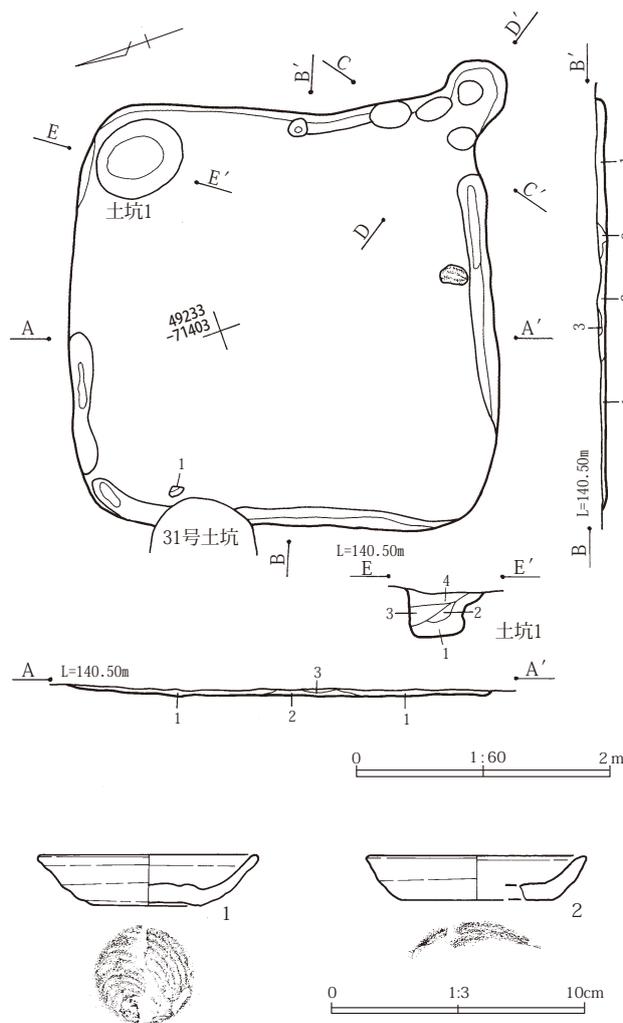
壁 削平によって大部分が失われているが、確認面から底面までの最大深さは6cmほどである。

竈 南東隅の壁面を、住居の対角線方向に突出するように掘り込んで構築している。煙道は認められないが、燃烧部底面から竈前の床面に掛けて薄い炭質物の堆積層も認められる。燃烧部は壁外にあり、わずかながら一段深く掘り込んで、小さな段差を持って煙道へと連続していたものと思われる。底面は焚き口まで焼土化していた。

焚き口両脇には袖石の据え方に当たるとと思われる浅いピットが左右にあり、燃烧部中央にもおそらくは支脚据え方にあたるものと思われる小ピットが残っている。竈付近には礫も見られたが、支脚や袖石と断定できるものではなかった。主軸方位はN-144°-Eを示す。

遺物 北西壁際の床面からわずかに浮いた位置で小型の須恵器坏（1）が出土している。復元口径8.4cmほどで、右回轉轆轤成形で底部は回轉糸切り離し。床面からも小型の須恵器坏（2）が出土しており、これも復元口径8.6cmほどとほぼ同じ大きさで、右回轉の轆轤成形、底部回轉糸切り離しである。住居中央の炭質物集中部と竈内土壌から、マメ類を主とする炭化種実が得られた。

所見 規模や軸方向に加え、南東隅に壁と斜行する方向で設けられる竈など、本遺跡内にある11世紀代の住居と共通点が見られる。出土遺物も壁際の埋没土低位及び床面にある酸化炎焼成の須恵器坏で、底径が比較的大きな、小型の皿に近い形状のものである。11世紀前半から中葉の住居と考えられる。



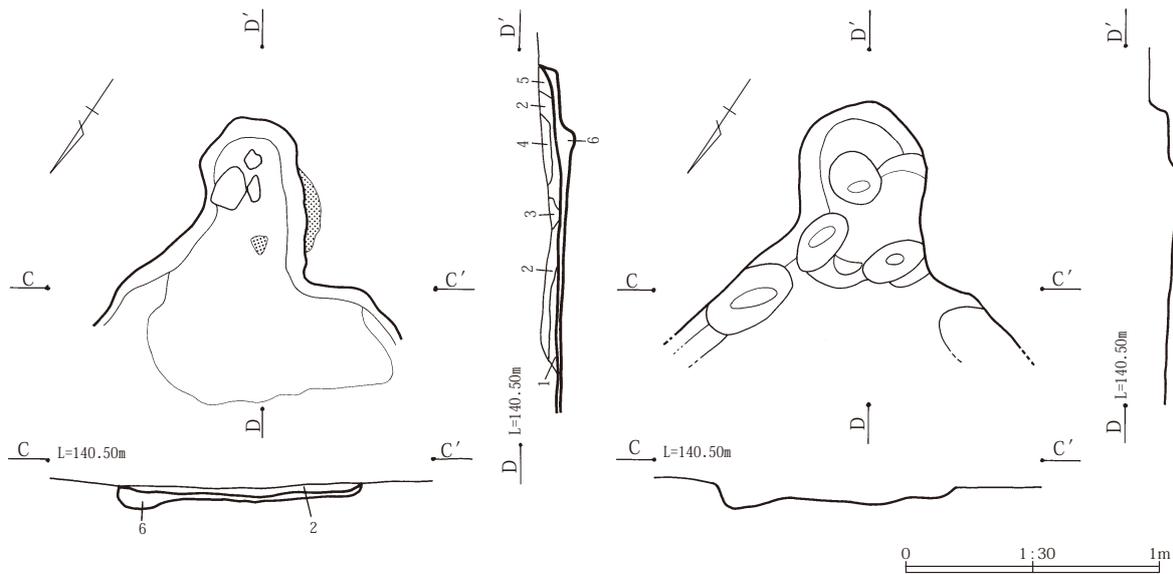
IV区6号住居土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒含む。やや締まる。
- 2 炭化物集中層。
- 3 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。締まりやや弱い。

IV区6号住居内土坑1土層観察所見

- 1 黒褐色砂壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。締まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒、シルト塊含む。締まり弱い。
- 3 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒、炭化物粒含む。やや締まる。
- 4 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒3%。炭化物粒多く含む。やや締まる。

第76図 万蔵寺廻り遺跡 IV区6号住居・出土遺物



IV区6号住居竈土層観察所見

- | | |
|---|----------------------|
| 1 炭化物、黒色灰の集中層 | 4 黒褐色壤土 攪乱土。 |
| 2 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土の崩れた斑を含む。締まりやや弱い。 | 5 暗褐色壤土 竈構築土が赤変した部分。 |
| 3 暗褐色シルト質壤土60%、焼土ブロック30%、黒褐色壤土ブロック10%。径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まり弱い。 | 6 黒色灰、炭化物粒と地山砂粒の混土。 |

第77図 万蔵寺廻り遺跡 IV区6号住居竈・同掘り方

IV区7号住居 (第78～80図 PL.29～31)

位置 X=49.235/Y=-71.400 IV区北西に位置し、標高140.50～140.60mの緩斜面上に立地する。

形態 南側で36号土坑、西側では53号土坑に西壁の上部を切られる。全体に丸みを帯び、北壁に対して南壁が1mほど短く、隅丸の台形に近い形状。長軸は南北におかれ、長軸方位はN-2°-W。

規模 長軸長4.00m、短軸長3.44m。

床 緩やかに波打つが、砂粒を多く含む暗褐色土によって埋め、床面とする。南北壁際に部分的に壁周溝が掘られる。南壁の壁周溝は中央やや西寄りの位置に、70cmほどの長さで掘られ、幅15cm、深さ5cm。北壁では短い溝が断続的に並び、幅5～25cm、深さ3～5cm。西壁北側にもピット状の落ち込みが壁際に並ぶが、溝状にはなっていない。

壁 かなり深く掘り込まれており、最大壁高54cm。開き気味に上方へ立ち上がるが、東壁中央のみほぼ垂直に立ち上がる。

掘り方 北側には多数の住居内土坑が掘り込まれ、

北西隅から中央に向かって少なくとも3基の土坑が掘り込まれる。北側中央付近の掘り込みが最も深く、深さ55cm。北東壁際の土坑4は長軸長1.50m、短軸長60cm、深さ45cm大型のものである。南側は南西隅に土坑1があり、長径深さ25cm。柱穴は確認されていない。

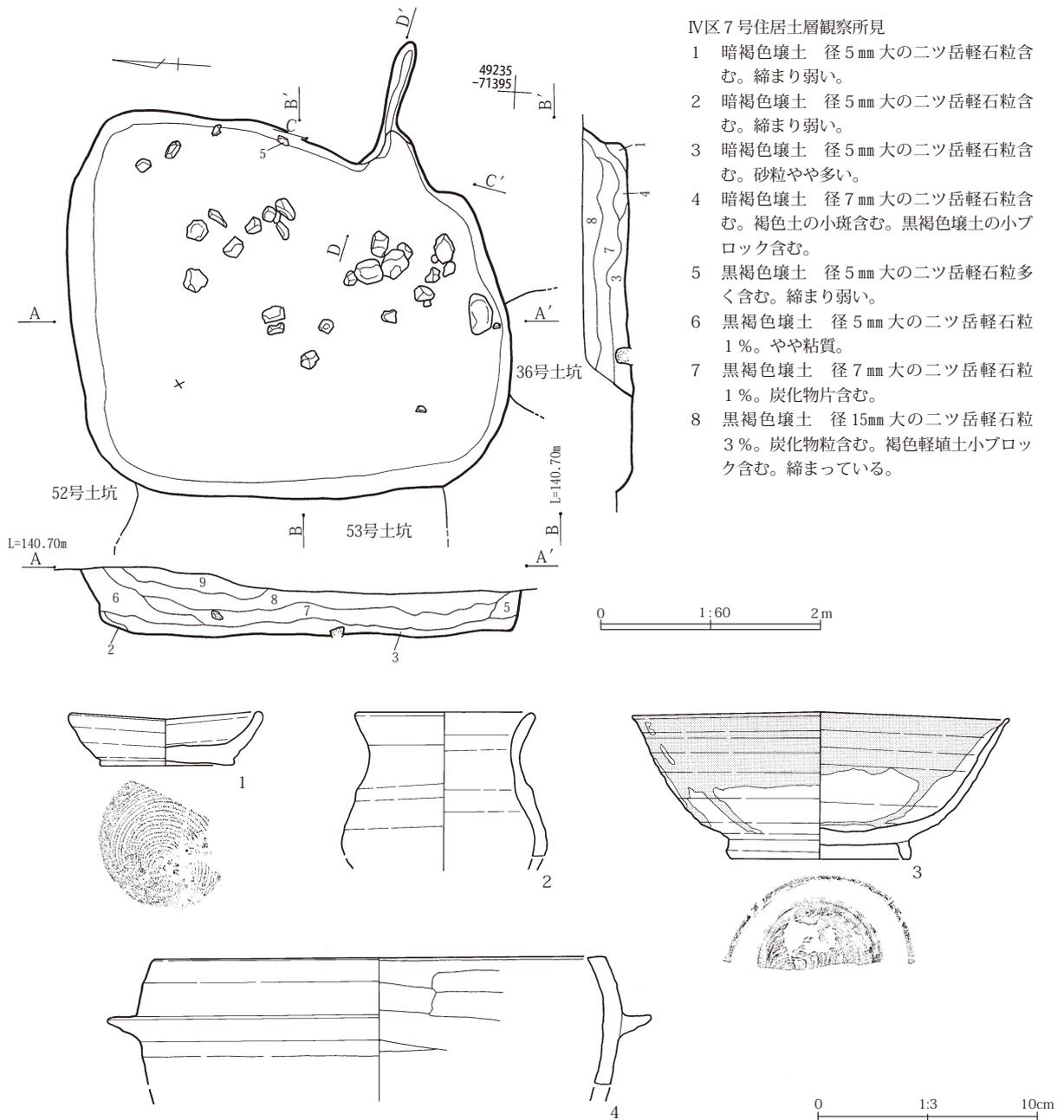
竈 東壁南端を掘り込んで構築する。燃烧部上半は壁外にあり、ピット状に深く掘り込んでから煙道へと連続する。煙道は燃烧部から60cmの地点で斜め上方へと立ち上がっている。焚き口両脇には壁内への張り出しは認められず、袖石の据え方と思われるピットが並ぶ。袖石は残っていないが、燃烧部から焚き口にかけて10～30cm大の砂岩の破片がまとまった状態で出土しており、おそらくは構築材に使われた石と思われる。周囲には、左袖に隣接して長径40cm、深さ20cmの円形ピットが掘られる。主軸方位はN-107°-E。

遺物 覆土中から羽釜(4)、灰釉陶器の壺(3)、須恵器甕破片(5)、床面から小型の須恵器壺(2)、

第4章 遺構と遺物

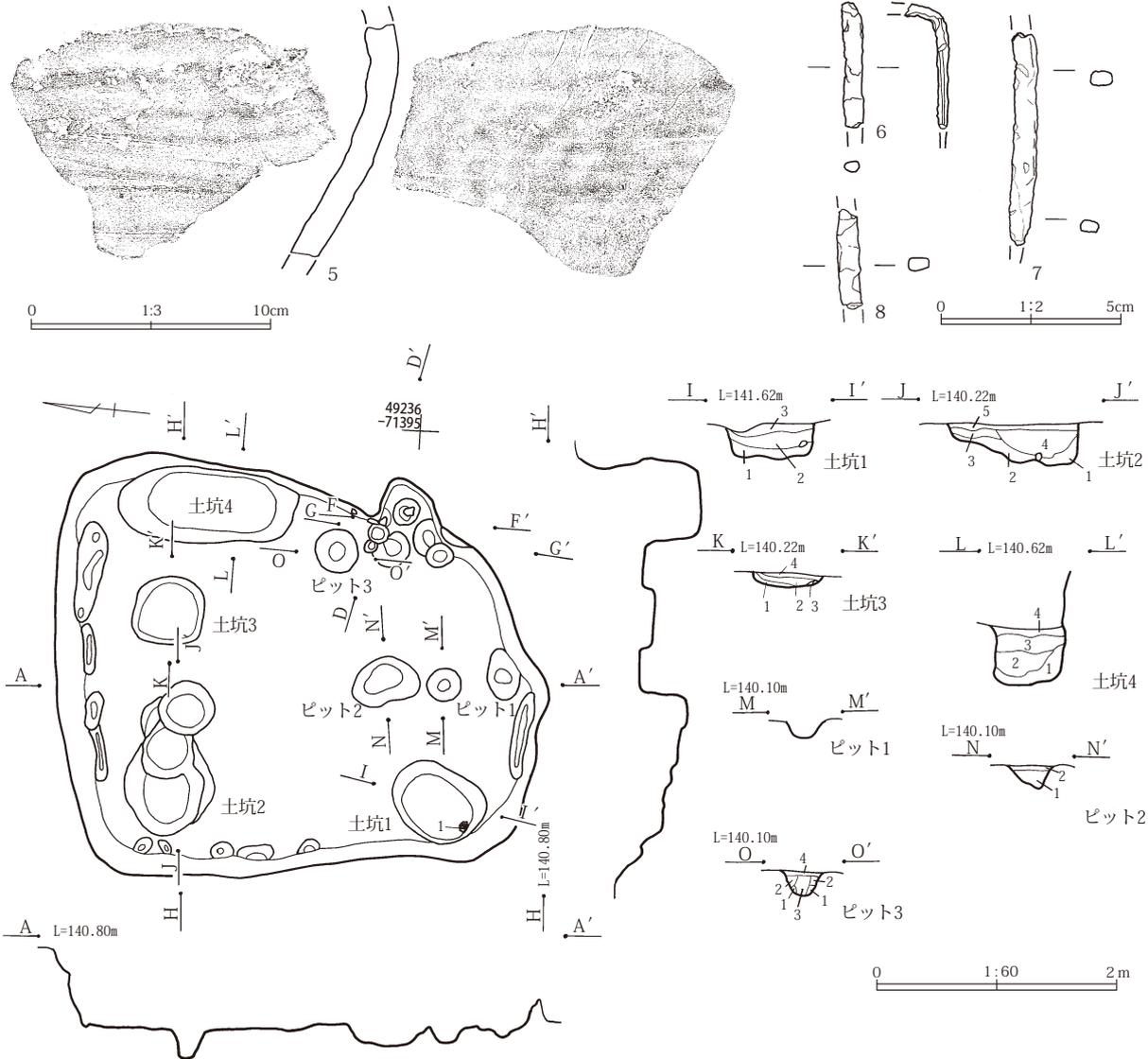
土坑底面から小型の須恵器杯(1)が出土している。覆土中からは土器類以外に10~50cm大の礫が多く検出されている。また、鉄釘破片(6~8)が出土している。竈脇のピット3から炭化したイネ、ムギ類、ヒエ、アワ、竈からはイネ、コムギ、マメ科、ヒエ、タデ科、アズキの仲間、ササゲ属が出土している。

所見 掘り方から多数の土坑が確認されている。南西隅に土坑が掘られている点は、本遺跡におけるいくつかの住居と共通する。竈脇のピット3は他の土坑に比べて小規模だが、内部から炭化種実が出ており、貯蔵穴の可能性も考えられる。床面からの出土遺物はないが、出土遺物から10世紀後半頃の住居と考えられる。



第78図 万蔵寺廻り遺跡 IV区7号住居・出土遺物(1)

第1節 古代・中世の遺構と遺物



第79図 万蔵寺廻り遺跡 IV区7号住居掘り方・出土遺物(2)

IV区7号住居内土坑1土層観察所見

- 1 暗褐色壤質砂土 縮まりやや弱い。混入物無し。
- 2 にぶい黄褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%。褐色軽植土ブロック1%。
- 3 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%。炭化物片含む。やや締まる。

IV区7号住居内土坑2土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒1%。縮まり弱い。
- 2 暗褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%。
- 3 暗褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物片少量含む。縮まりやや弱い。
- 4 暗褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%。炭化物片少量含む。縮まりやや弱い。
- 5 暗褐色壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒3%。炭化物片含む。褐色重植土小ブロック1%。固く締まっている。

IV区7号住居内土坑3土層観察所見

- 1 暗褐色壤質砂土 炭化物片含む。地山砂粒多い。
- 2 暗褐色砂壤土 炭化物を縞状に挟む。褐色軽植土小ブロック含む。
- 3 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物含む。褐色軽植土小ブロック1%。地山砂の小ブロック1%。締まっている。

IV区7号住居内土坑4土層観察所見

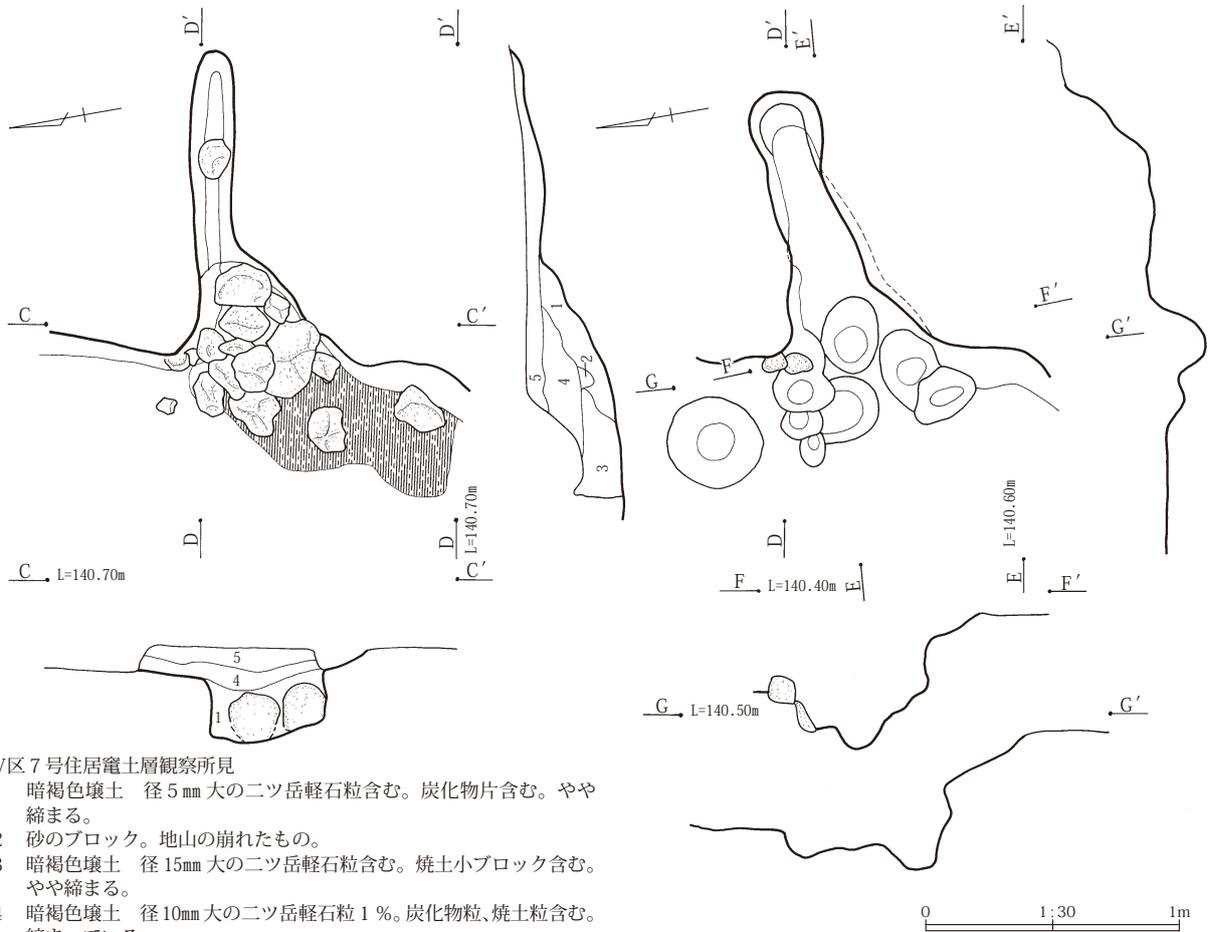
- 1 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。縮まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%。やや締まる。
- 3 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%。径20mm大あり。
- 4 暗褐色壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒3%、径20mm大1%。炭化物含む。締まっている。

IV区7号住居内ピット2土層観察所見

- 1 褐色砂壤土 径7mm大の二ツ岳軽石粒5%。褐色壤土ブロック1%。縮まりやや弱い。
- 2 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒3%。炭化物片含む。締まっている。

IV区7号住居内ピット3土層観察所見

- 1 褐色砂壤土 混入物少ない。縮まり弱い。
- 2 暗褐色壤質砂土 径5mm大の二ツ岳軽石粒極少量含む。やや締まる。
- 3 暗褐色壤質砂土 黒色の灰で汚れた斑30%。縮まり弱い。
- 4 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒10%。炭化物含む。固く締まっている。



IV区7号住居竈土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片含む。やや締まる。
- 2 砂のブロック。地山の崩れたもの。
- 3 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土小ブロック含む。やや締まる。
- 4 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物粒、焼土粒含む。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物粒含む。固く締まっている。

第80図 万蔵寺廻り遺跡 IV区7号住居竈・同掘り方

IV区8号住居 (第81～83図 PL.31・32)

位置 X=49.210/Y=-71.400 IV区中央西端に位置し、標高140.20mの緩斜面上に立地する。

形態 西半分は調査区外のため未調査となる。北東隅を2号溝に切られる。南北に長軸をおく長方形と推定され、長軸方位はN-11°-Eを示す。

規模 長軸長4.50m、残存短軸長3.28m。

床 緩やかな起伏が見られる。底面は壁際が低く、中央はやや高まる傾向がある。北東部に土坑状の落ち込みがある。

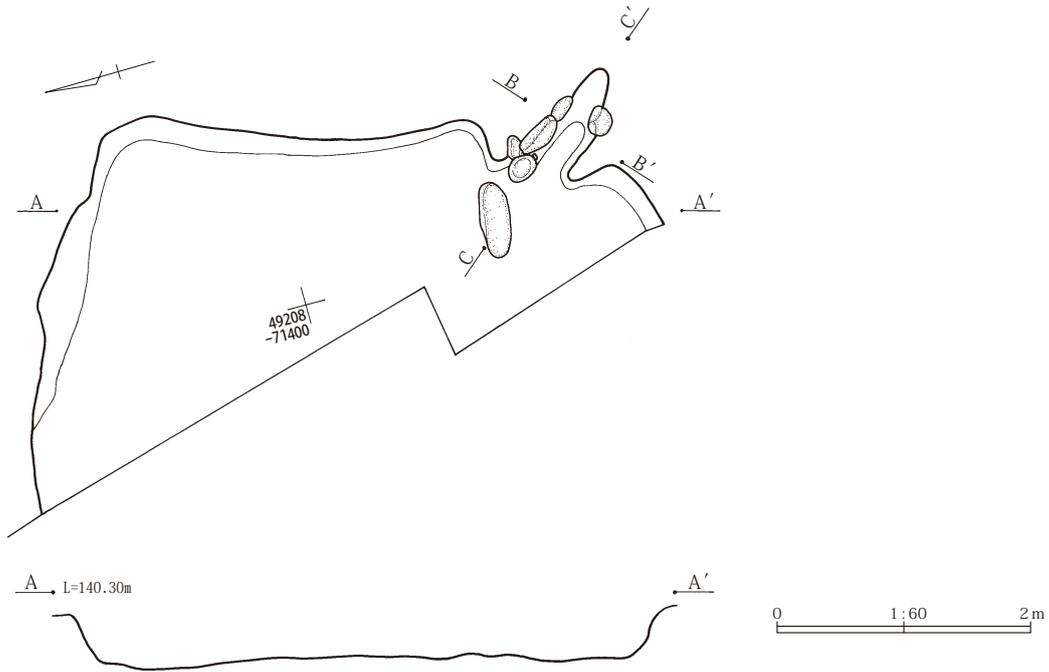
壁 やや開き気味に上方に立ち上がる。最大壁高は46cmある。

竈 東壁の南端を掘り込んで粘質の黒褐色土を貼り、暗色帯起源と思われる褐色の粘質土を用いて構築している。燃烧部は壁内にあって、一段深く掘り込んでから煙道へと連続する。焚き口の左脇は壁内へ張り出すように掘り残されており、左袖を形成す

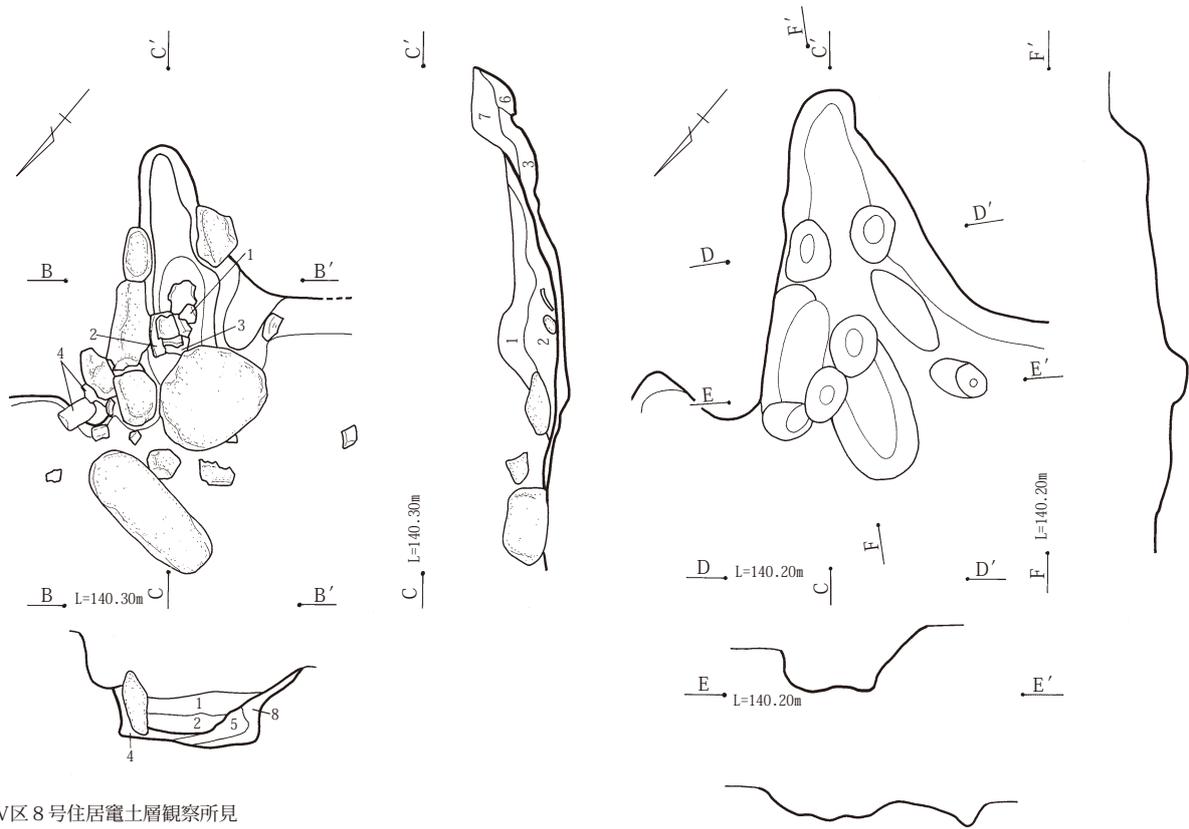
る。右袖は張り出しが認められないが、両脇ともに袖石の据え方が認められ、これを構造材として袖を形成したものと思われる。燃烧部壁際と煙道にも据え方の浅い凹みが並び、北側壁から煙道両脇にかけては構造材の垂角礫が残っている。焚き口には長径45cmの丸い平石、左袖前には長径65cm、幅22cm、厚さ16cmの長方形の垂角礫が残っていた。これも構造材の可能性はあるが、住居廃絶後に廃棄されたことも考えられるため、断定はできない。主軸方位はN-137°-E。

遺物 竈の燃烧部、袖周辺からは須恵器坏(1)と羽釜の破片(2～4)が出土している。炭化種実は得られなかった。

所見 長軸方位や竈の構造が2号住居A竈、6号住居と近似する。出土遺物の特徴とも合わせ、10世紀後半から11世紀前半の住居と考えられる。



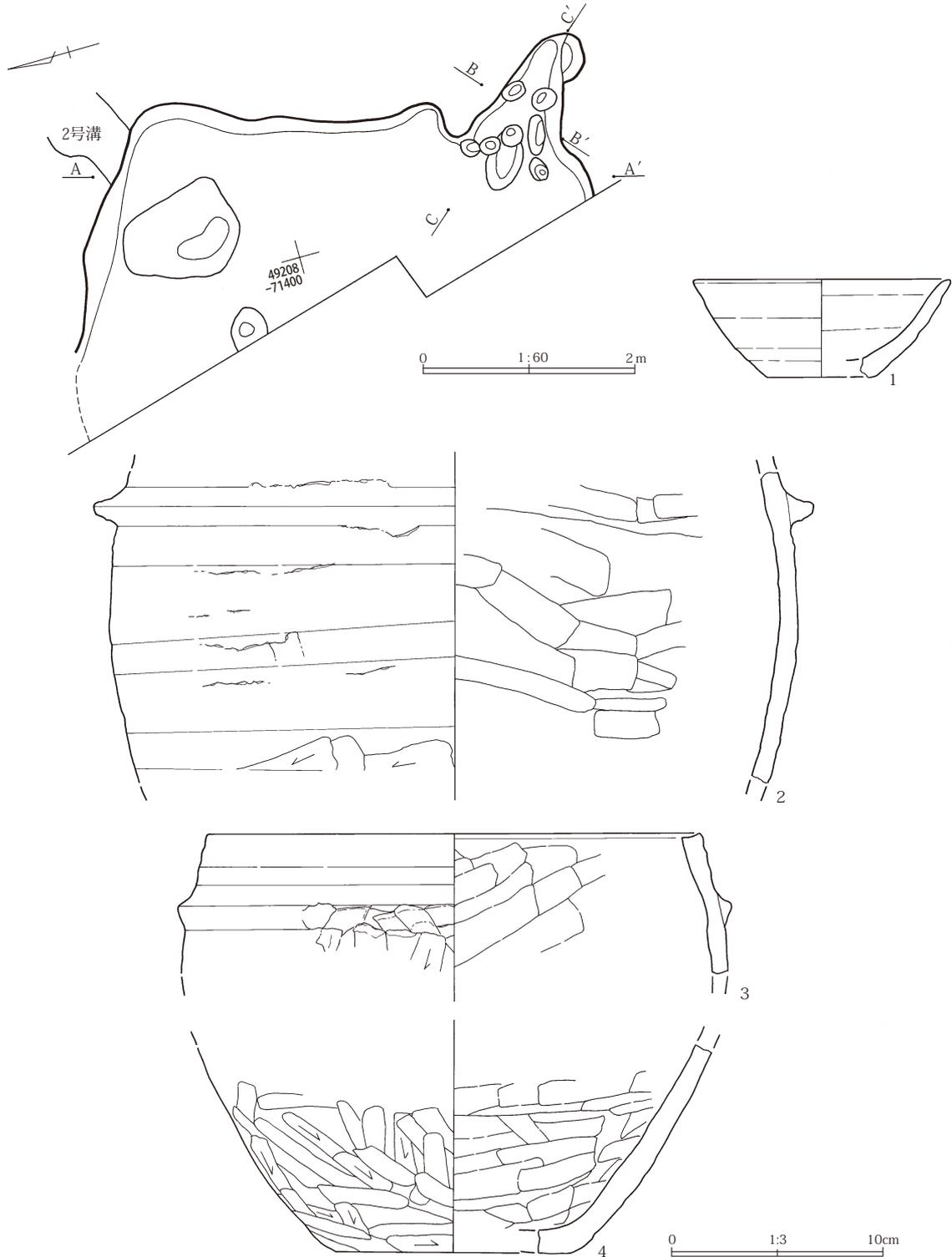
第81図 万蔵寺廻り遺跡 IV区8号住居



IV区8号住居竈土層観察所見

- | | |
|---|---|
| <p>1 暗褐色軽埴土 焼土、炭化物粒含む。</p> <p>2 黒褐色軽埴土 焼土、炭化物粒含む。</p> <p>3 黒褐色壤土 黒色灰、焼土多く含む。粘質強い。</p> <p>4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒含まない。上部のみ赤変。袖石の裏込め土。</p> <p>5 黒褐色壤土 焼土ブロック7%。黒色灰、炭化物。</p> <p>6 褐色軽埴土 焼土化した粘質土。構築土崩落。</p> | <p>7 黒褐色壤土 径5mm大のニツ岳軽石粒3%。炭化物含む。</p> <p>8 黒褐色軽埴土 袖石除去後の崩落土。</p> |
|---|---|

第82図 万蔵寺廻り遺跡 IV区8号住居竈・同掘り方



第83図 万蔵寺廻り遺跡 IV区8号住居掘り方・出土遺物

IV区9号住居 (第84～86図 PL.32・33)

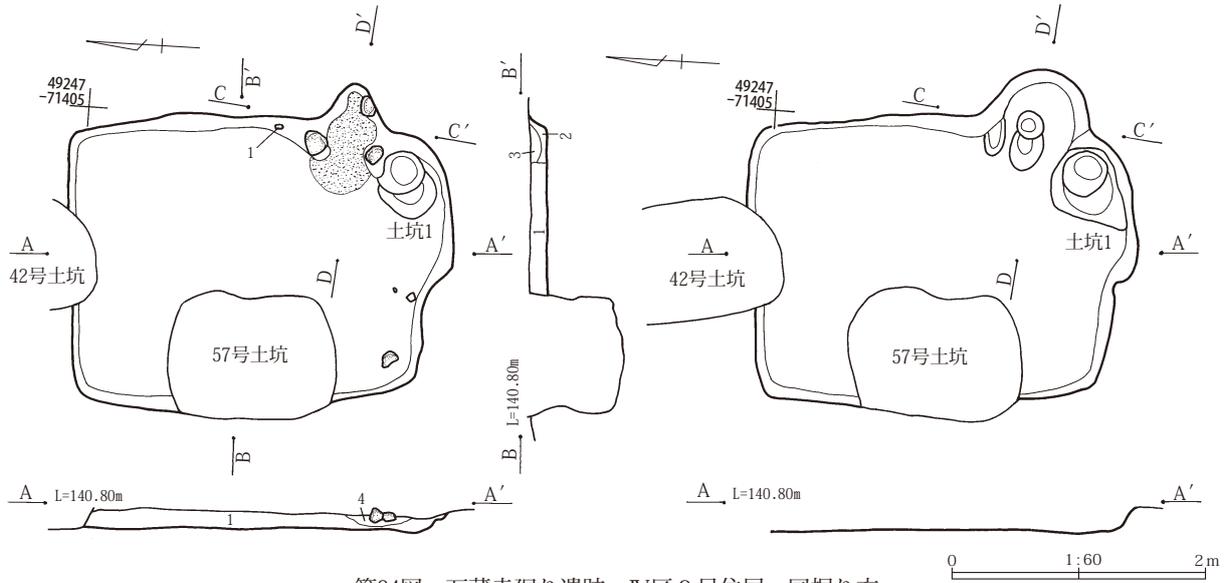
位置 X=49.274/Y=-71.405 IV区北西隅に位置し、
標高140.60～140.70mの微高地上に立地する。

形態 北壁の一部を42号土坑、西壁を57号土坑に切
られる。東側には10号住居が隣接する。南北に長軸

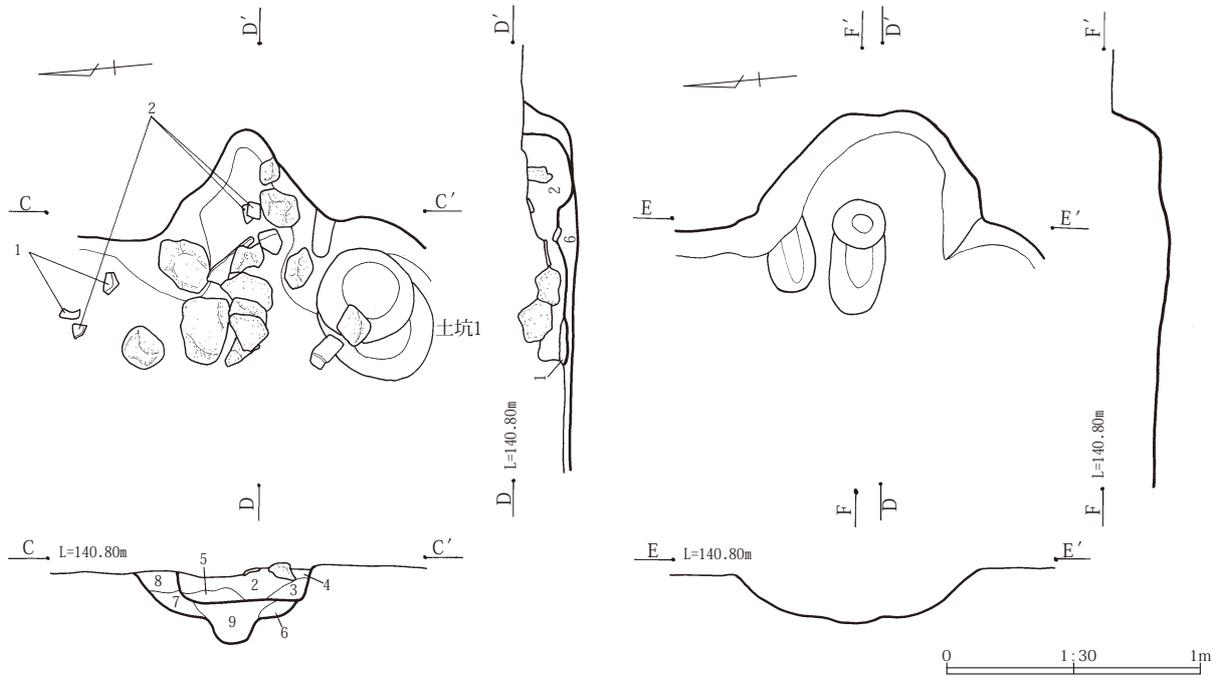
をおく長方形を基本形とする住居だが、南壁西半が
内側に窪むように歪んでいる。長軸方位はN-5°-W。

規模 長軸長3.08m、短軸長2.27m。

床 ほぼ平坦に掘り込まれ、底面をそのまま床面と
したものと思われる。竈脇に当たる南東隅に長径



第84図 万蔵寺廻り遺跡 IV区9号住居・同掘り方



IV区9号住居土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物粒多く含む。締まっている。
- 2 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。締まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒1%。固く締まっている。
- 4 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒3%。締まり弱い。(上位からの攪乱)

IV区9号住居竈土層観察所見

- 1 黒色の灰主体。焼土ブロック少量混じる。締まり弱い。
- 2 黒褐色軽植土 焼土小ブロック含む。
- 3 暗褐色軽植土 焼土。
- 4 黒褐色軽植土 炭化物含む。
- 5 黒褐色壤土 炭化物、黒色灰主体。径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。暗褐色土小ブロック少量。締まりやや弱い。
- 6 黒褐色壤土 灰、焼土粒を含む。
- 7 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片少量。
- 8 極暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土ブロック1%。締まっている。
- 9 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒含まない。炭化物、黒色灰10%。焼土小ブロック1%。締まりやや弱い。

第85図 万蔵寺廻り遺跡 IV区9号住居竈・同掘り方

第4章 遺構と遺物

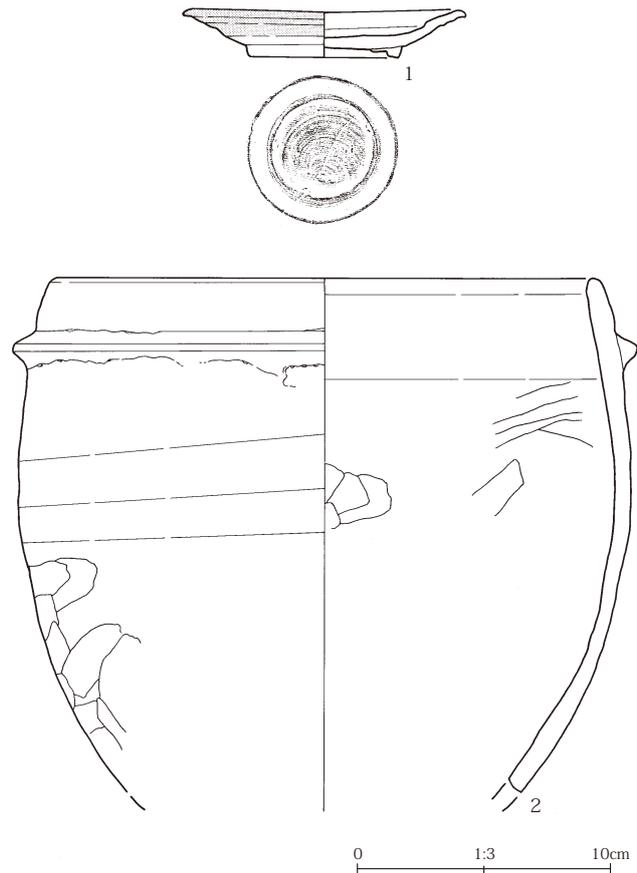
55cmの楕円形土坑があり、おそらく貯蔵穴と思われる。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高14cm。

竈 東壁南端を掘り込んで構築する。焚き口両脇は壁内に張り出し、左脇には袖石据え方が掘られ、袖石が据えられる。燃烧部上半は壁外にあり、中央やや左寄りに支脚据え方が掘られるが支脚は認められない。煙道は残っていない。右袖に隣接して貯蔵穴と思われる土坑が掘られるが、出土遺物はない。燃烧部と焚き口からは、10～30cm大の石が出土している。竈構築材と思われるが、埋没中に投棄されたものとも考えられる。主軸方位はN-97°-E。

遺物 東壁際から虎溪山1号窯式期の灰釉陶器皿(1)、竈燃烧部から羽釜(2)が出土している。掘り方覆土からマメ科の炭化子葉が得られた。

所見 本遺跡における住居には珍しく、竈脇に貯蔵穴を設ける。住居の規模や竈の構造は隣接する10号住居と類似する。出土遺物からも10世紀後半の住居と考えられる。



第86図 万蔵寺廻り遺跡 IV区9号住居出土遺物

IV区10号住居 (第87～94図 PL.33～38)

位置 X=49.250/Y=-71.400 IV区北西に位置し、標高140.70～140.80mの微高地上に立地する。住居周囲には土坑が密集して分布する。

形態 南北に長軸をおく隅丸方形で、東壁が若干丸みを帯びて外側に張り出す。長軸方位はN-3°-E。南東隅を僅かに73号土坑に切られる。

規模 比較的小規模な住居で、長軸長3.14m、短軸長3.03m。

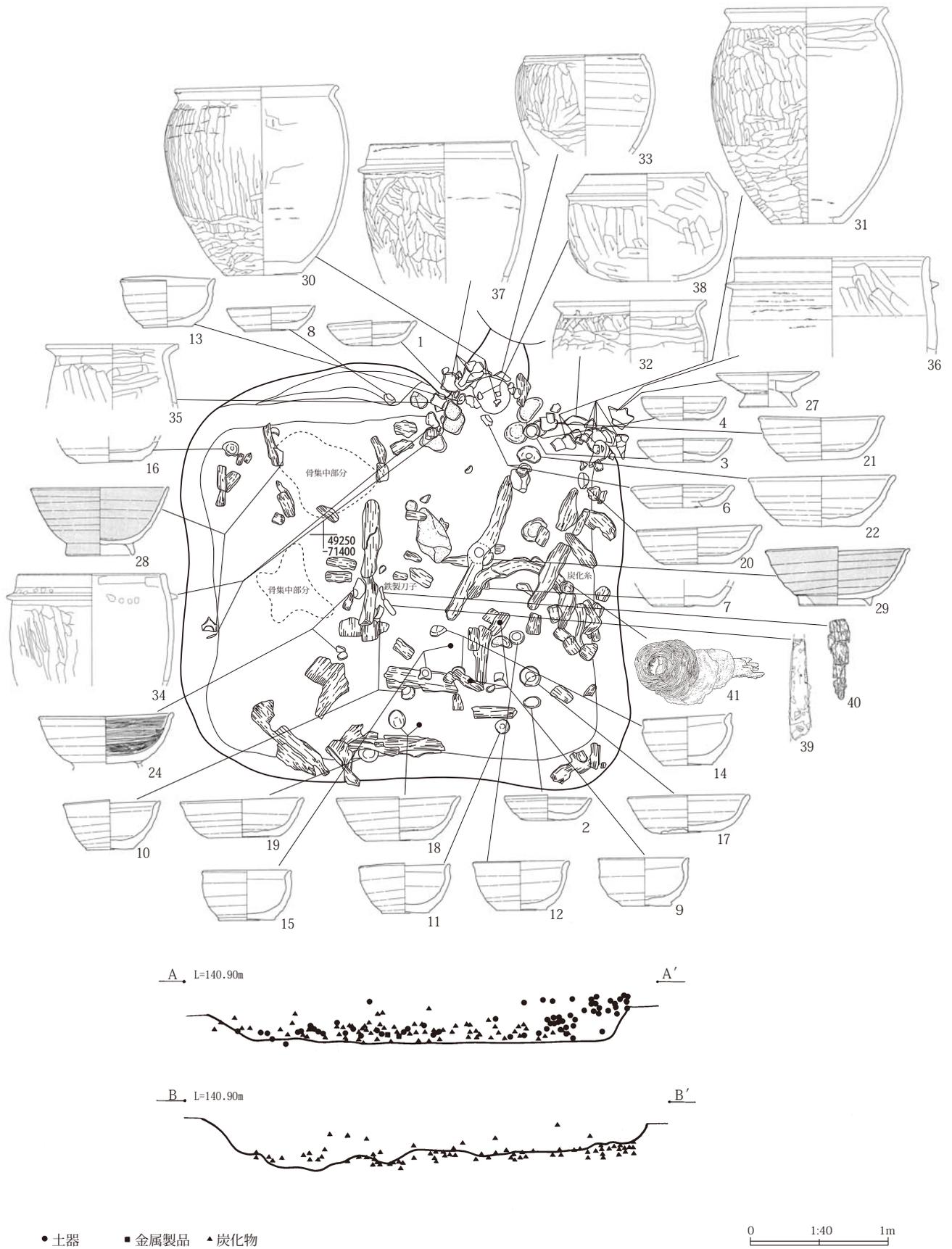
床 緩やかな起伏が見られる。北西部がやや深く掘り込まれる。床面上には多量の炭化材が集積し、床面に近い層では炭化材の土壌化が見られる。

壁 全体的に壁の立ち上がりが鈍角で、斜め上方に開く。壁高15～28cm。特に東壁は、竈脇から北端にかけて、壁上部がテラス状に外側へ張り出してお

り、1個体のみだが須恵器の小型環が出土している。竈脇にある点と、僅か1個体だが土器が出土している点から、棚状の機能を持つ付属施設の可能性が考えられる。

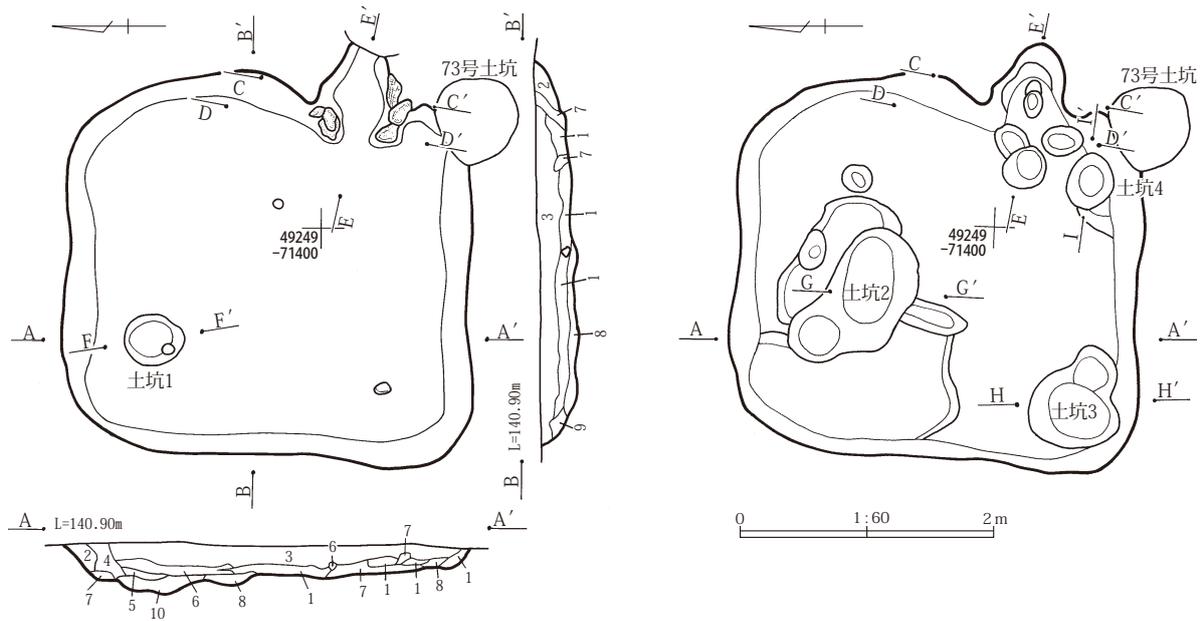
掘り方 北西隅、南西隅、南東隅に土坑がある。土坑1は長径50cm、深さ30cm円形を示し、土坑2とは掘り方で一部結合する。土坑1・2周辺は不整形の掘り込みが集中し、北西隅は南北1.7m、東西1mの範囲で僅かに窪む。南西には土坑3があり、長径70cm、深さ20cmの楕円形。竈脇に当たる南東隅には、長径45cm、深さ10cmの土坑4が掘られる。この上位には土釜、甑などの土器が多数出土していて、貯蔵場所としての性格を持っているのだが、この土坑自体は貯蔵穴としてはやや浅く、小さい。

竈 東壁南端を掘り込み、地山ロームを貼り付けて



第87図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居遺物分布

第4章 遺構と遺物



第88図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居・同掘り方

IV区10号住居土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片多く含む。縮まっている。
- 2 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片含む。固く縮まっている。
- 3 暗褐色壤土 径25mm大の比較的大粒の二ツ岳軽石粒3%。炭化物片、形のある材料含む。縮まっている。
- 4 黒褐色軽埴土 径10mm大の二ツ岳軽石粒多く含む。炭化物粒、焼土粒含む。縮まっている。

- 5 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒含まない。炭化物粒少量含む。地山の崩れた砂粒、シルトやや多い。縮まり弱い。
- 6 暗褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物片含む。やや縮まる。
- 7 炭化材の崩れたものを中心とする。
- 8 やや土壌化した7層
- 9 焼土粒を多く含む。
- 10 壤分多く、焼土、炭化物と同量。

構築する。燃焼部上半は壁外にあり、煙道は土坑によって切られている。燃焼部は若干深く掘り込んでから、煙道へと連続する。中央には支脚が据えられており、土釜がその支脚に乗った状態で出土している。焚き口両脇には袖石が2・3石並んでいる。砂粒を多く含む暗褐色土と粘質の黒褐色土で据え方を埋めて袖石を固定している。右袖は30cmほどの長めの石を直立させるのに対し、左袖は小振りの石を3個重ねて構成される。両袖ともに、袖石に黒褐色～暗褐色土を貼り付けて構築されている。焚き口の手前には長径34cm、深さ22cmとやや深い円形ピットが掘られている。

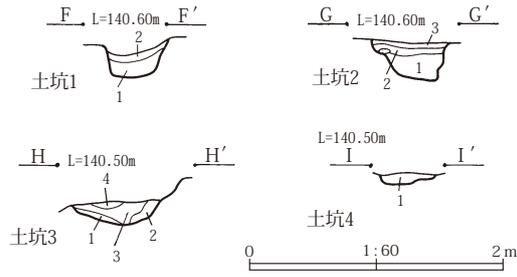
遺物 10号住居最大の特徴は、床面と覆土中に残された多量の炭化材である。床面と直上の覆土に含まれる炭化材は多くが崩れ、半ば土壌化していた。炭化材は住居のほぼ全体を覆うようにして残っているが、特に西壁から中央を経て南壁に至るまでの範囲

に、材の形状を留める大型の炭化材が分布する傾向がある。

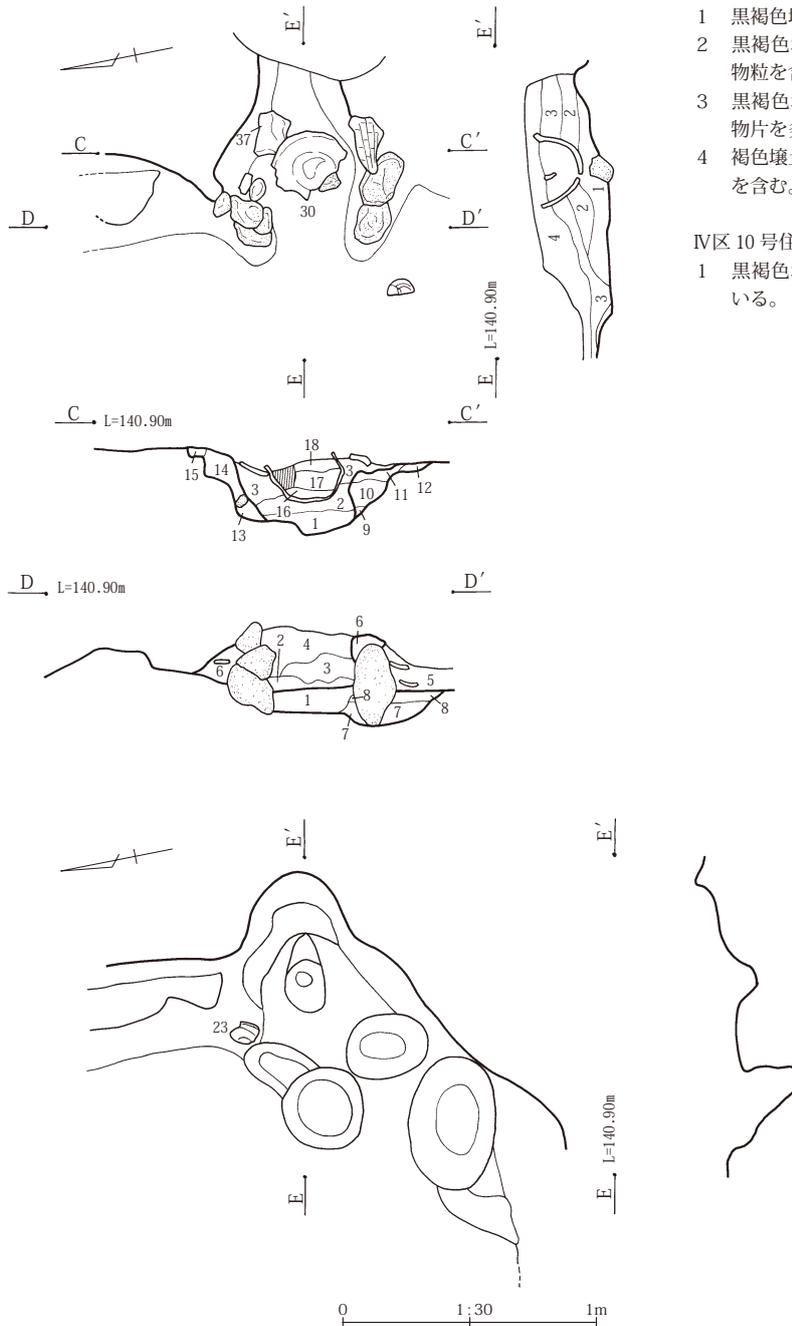
炭化材と並び、多くの土器も出土している。図示可能な土器として須恵器の坏16個体、埴3個体、鉢7個体、足高高台皿1個体、土釜5個体、羽釜3個体、甌1個体、灰釉陶器の埴2個体、計38個体がある。出土傾向は竈周辺と床面に大きく分けられる。床面出土の土器は、中央から南西にかけて集中的に分布しており、大型炭化材の分布傾向とほぼ同じ特徴である。須恵器坏と鉢が主体をなし、2個体のみ出土している灰釉陶器埴も加わる。また、残存状態が完形の個体が多く、出土位置を問わず、復元率が高い点も特徴である。

竈および竈周辺からは出土土器の半数である19個体が出土している。竈燃焼部からは土釜(30)が1点出土し、内部には土が充填されていた。土釜上部は破損していたが、土釜直下からは支脚が見つかった。

第1節 古代・中世の遺構と遺物



第89図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居土坑土層断面



第90図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居竈・同掘り方

IV区 10号住居内土坑1土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 黒色の灰、炭化物を多く含む。縮まり弱い。径5mm大の二ツ岳軽石粒を1%含む。
- 2 黒褐色壤土 炭化物片、焼土片を多く含む。縮まり弱い。

IV区 10号住居内土坑2土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 径20mm大の二ツ岳軽石粒を40%含む。縮まっている。
- 2 暗褐色砂壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒を3%含む。縮まっている。
- 3 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒、炭化物、焼土粒を含む。縮まっている。

IV区 10号住居内土坑3土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 炭化物粒を含む。縮まりやや弱い。
- 2 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物粒を含む。
- 3 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物片を多く含む。
- 4 褐色壤土 ロームの崩れたブロック。粘質強い。炭化物片を含む。

IV区 10号住居内土坑4土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 炭化物、灰の斑を15%含む。やや縮まっている。

IV区 10号住居竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 黒色灰を多く含む。炭化物片多く含む。縮まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片多く含む。やや縮まる。
- 3 暗褐色壤土 やや粘質。炭化物片多く含む。
- 4 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物片多く含む。縮まっている。
- 5 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒含まない。焼土粒少量含む。炭化物粒含む。縮まりやや弱い。
- 6 極暗褐色壤土 やや赤変した4層。
- 7 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒5%。砂粒多い。縮まっている。
- 8 黒褐色壤土 炭化物粒、焼土粒含む。粘性強い。縮まっている。
- 9 黒褐色壤土 炭化物含む。縮まっている。
- 10 二ツ岳軽石粒とシルトのブロック。
- 11 暗褐色壤土 炭化物片含む。縮まっている。
- 12 暗褐色砂壤土 地山砂と11層の混土。
- 13 黒褐色壤土 やや赤変。炭化物含まない。縮まっている。
- 14 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒5%。炭化物多く含む。
- 15 褐色シルト質壤土 地山ロームを貼ったもの。
- 16 黒褐色壤土 やや粘質。やや縮まる。
- 17 暗褐色壤土 炭化物片多く含む。土器片を多く含む。縮まり弱い。
- 18 黒褐色壤土 炭化物含む。やや縮まる。

第4章 遺構と遺物

ており、竈に据えたままの状態である可能性が高いと思われる。この他に、燃焼部、焚き口周辺からは羽釜3個体、土釜2個体、小型坏2個体、鉢1個体が出土している。

また、竈右脇に当たる住居南東隅の壁際からは、土釜2個体、甑1個体、足高高台皿1個体、小型坏3個体、坏3個体が出土している。

住居北部から竈右手にかけての部分は遺物分布がごく薄い。炭化材もあまり残されていなかった。しかし住居確認面においては、この部分を含む東壁が最も強く焼けていて、壁内側が赤い焼土の線として認められたほどであった。炭化材が少ないのは灰化した材が多かったためとも思われる。土器等の遺物の少なさはこれによっては説明できないが、ちょうど遺物分布が粗となる住居北から北東にかけての床面から、焼けて碎片状となった骨片が認められることには注意が必要である。

個別遺物を見ると、須恵器坏、鉢はすべて右回転の轆轤で整形し、底部は回転糸切りである。口径が10cm前後の小型坏（1～6・8）はそのほとんどが竈周辺から出土している。7は口縁を欠くため口径がわからないが、16～23に近い、口径13～15cmの類になると思われる。

小型でやや深く、内斜気味の口縁を有する鉢形の須恵器（9～15）はこの住居独特の器形であり、本遺跡では他に例がない。7個体中6個体が床南西部の炭化材下から出土し、1個体は竈燃焼部からの出土である。口径9.6～10.4cm、器口5.2～5.6cmと大きさもほぼ揃っている。

土釜（30～33）は比較的短胴で口縁が強い「く」字状に屈曲するもの、比較的長胴で同じく屈曲する口縁を持つもの、口縁が外反しないものがある。羽釜（34・37・38）は長胴のもの、短胴のものがある。甑は土釜に近い「く」字状口縁のもの（35）と羽釜状のもの（36）があり後者は紐作り後轆轤整形している。灰釉陶器碗のうち住居中央部床面出土の完形品（29）は転用して底部を硯として使用している。

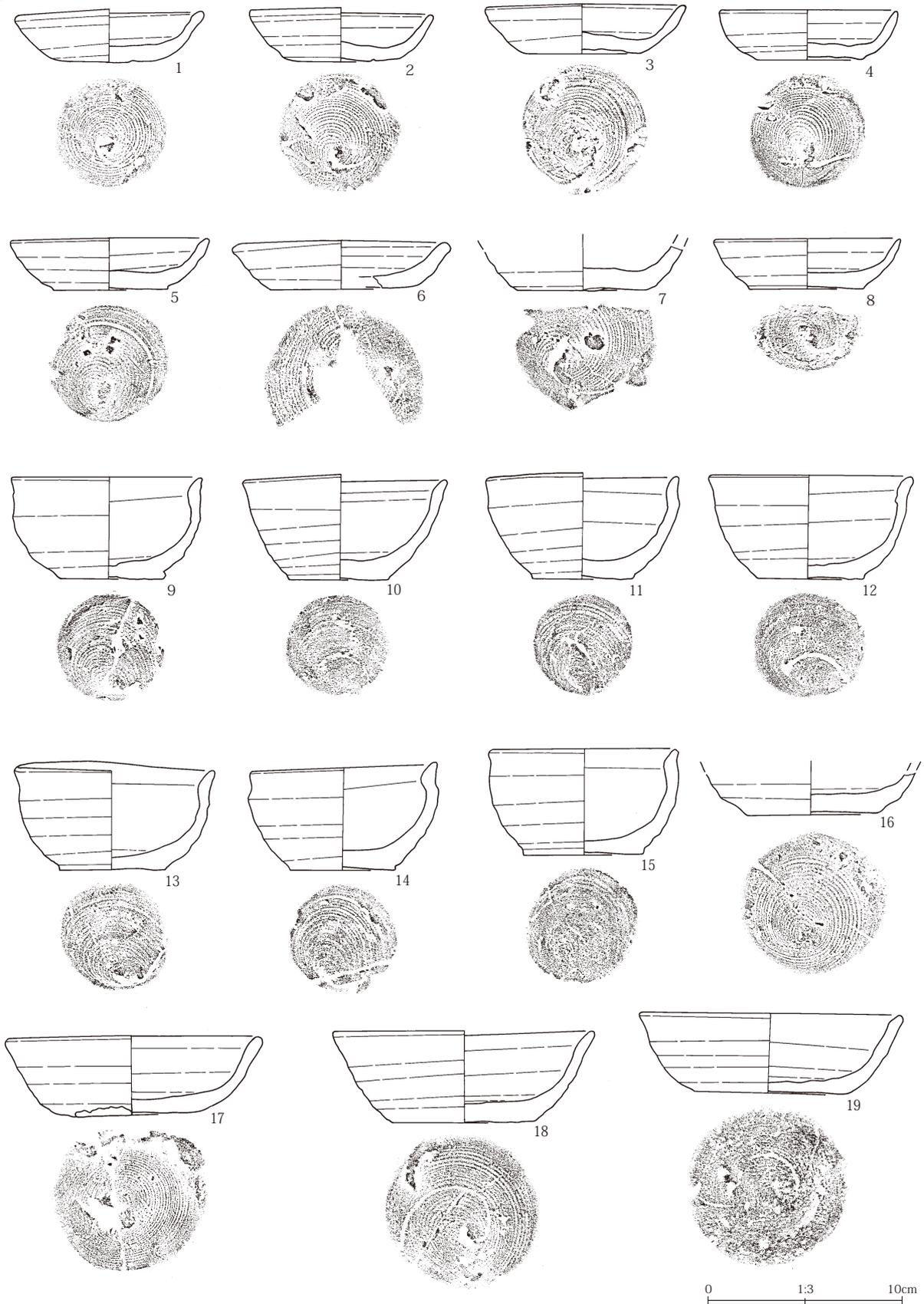
住居中央の床面から、鉄製の刀子（39・40）が出

土している。おそらく同一個体と思われる柄と刀身である。柄部は残存長8.7cm、炭化した柄木が残存している。また、軟光X線写真撮影によると中茎分には目釘を通すためと思われる孔が確認できる。刀身は切っ先を欠くが、残存長11.4cm、身幅2.4cm。比較的大振りの刀子である。

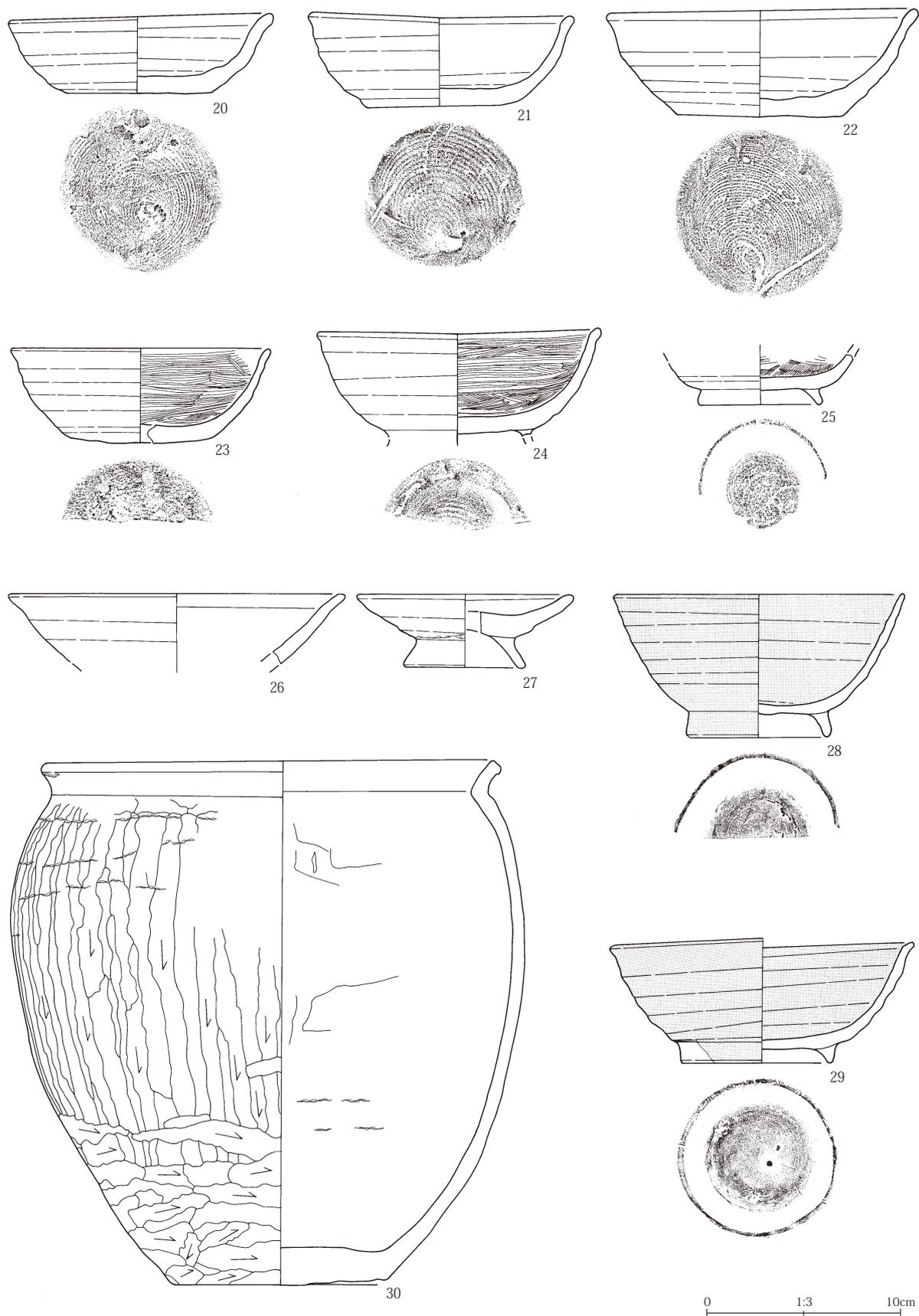
この他、特筆される遺物として、炭化した糸状の繊維製品が、住居南側床面付近から出土している。糸状製品は、植物質の繊維を軸に巻きつけ紡錘（つむ）状にしたもので、折り重なった炭化材の合間から出土した。これについては詳細を別稿としたので参照されたい。住居北西において検出された炭化材の中からは、端部を加工したと思われる棒状木製品が出土している。木製品は断面蒲鉾形で、特徴的なのは端部が丸みを帯びた加工を施されているように見える点である。側面の平坦部は損傷が著しいが、端部は比較的良好な状態であった。木製品の用途については確かでないが、家屋構造に伴う材の一部、木製農具の破片などが考えられる。

10号住居からは炭化材や遺物が良好な状態で出土しているが、炭化種実についても遺跡内最多の産出量であった。種類も豊富で検出量の多い順にイネ、コムギ、マメ科、オオムギ、ササゲ属、モモ、キビ、ヒエ、アワ、ダイズ、アズキの仲間などがあり、割合ではムギ、マメ類が多い結果が出ている。住居内地点別では、骨片の集中する北東、竈周辺ではイネが、南西ではコムギ、北西ではササゲ属が多く得られている。竈ではイネの他にマメ科、ムギ類も比較的多く、ヒエ、アワ、ササゲ属、ダイズの仲間なども見られる。全体的にはムギ類、マメ類の割合が多く、イネ、キビ族が少ないという結果が出ている。

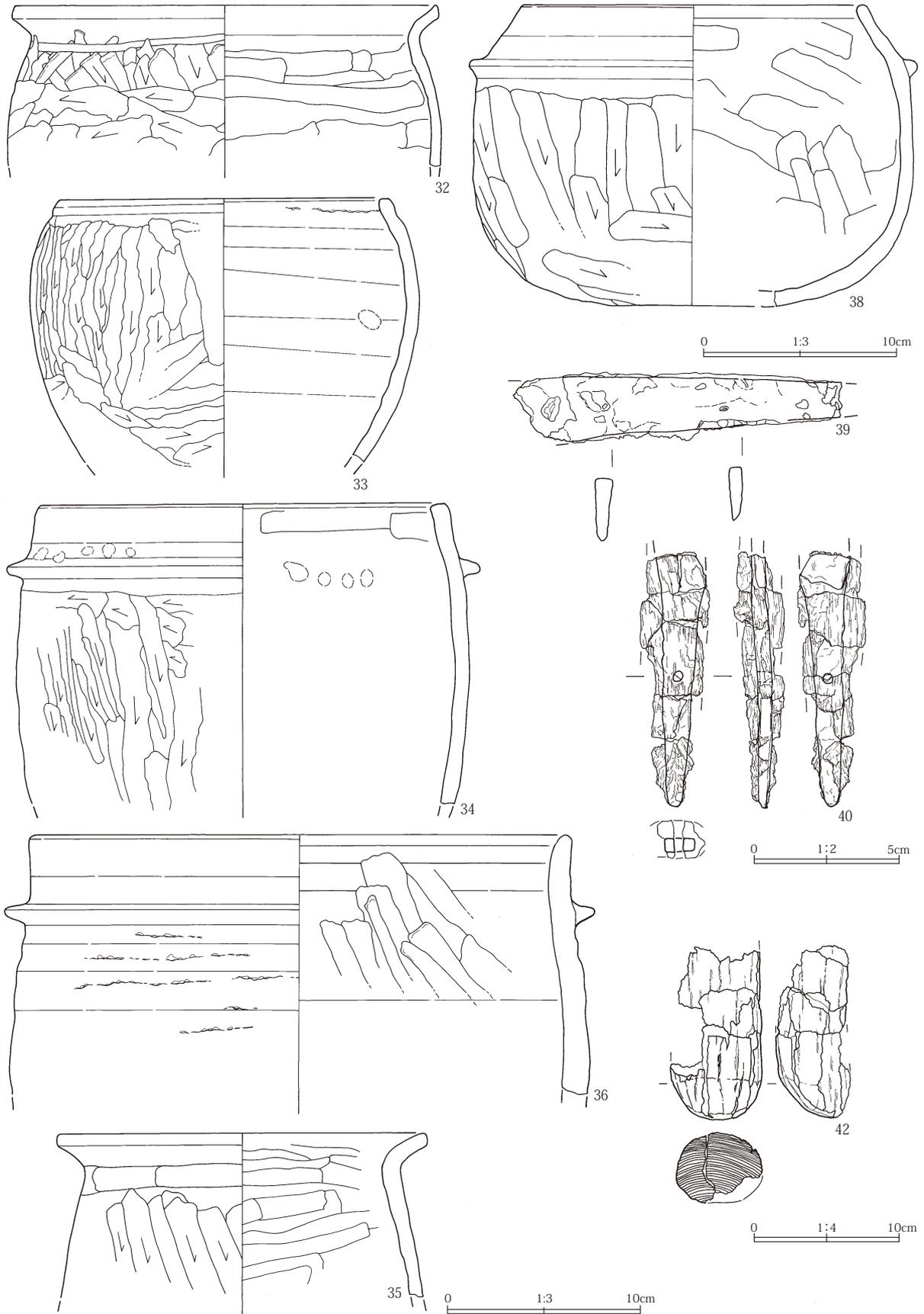
所見 土器類の出土個体数の多さは注目される。特に供膳具である坏、碗、鉢の個体数は坏が16個体、灰釉陶器も含めた碗が5個体、鉢が7個体と計28個体を数え、10号住居における出土遺物の40%を占めている。住居の時期については、規模、竈の設置、出土した土器から10世紀後半と考えられる。



第91図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居出土遺物(1)



第92図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居出土遺物(2)



第93図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居出土遺物(3)



第94図 万蔵寺廻り遺跡 IV区10号住居出土遺物(4)

IV区11号住居 (第95～97図 PL.39)

位置 X=49.255/Y=-71.380 IV区北東隅に位置し、標高140.20mの緩斜面上に立地する。住居の東側は段丘の縁である急傾斜となっている。

形態 12号住居の南東部を切っており、南壁は12号住居と共有する。東西に長軸をおく長方形、長軸方

位はN-95°-W。

規模 長軸長3.61m、短軸長2.91m。

床 僅かな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られる。砂質の地山を掘り込み、底面をそのまま床面としたものと思われる。柱穴は認められない。

壁 やや開き気味に立ち上がるが、東壁はほぼ垂直

に立ち上がる。最大壁高32cm。

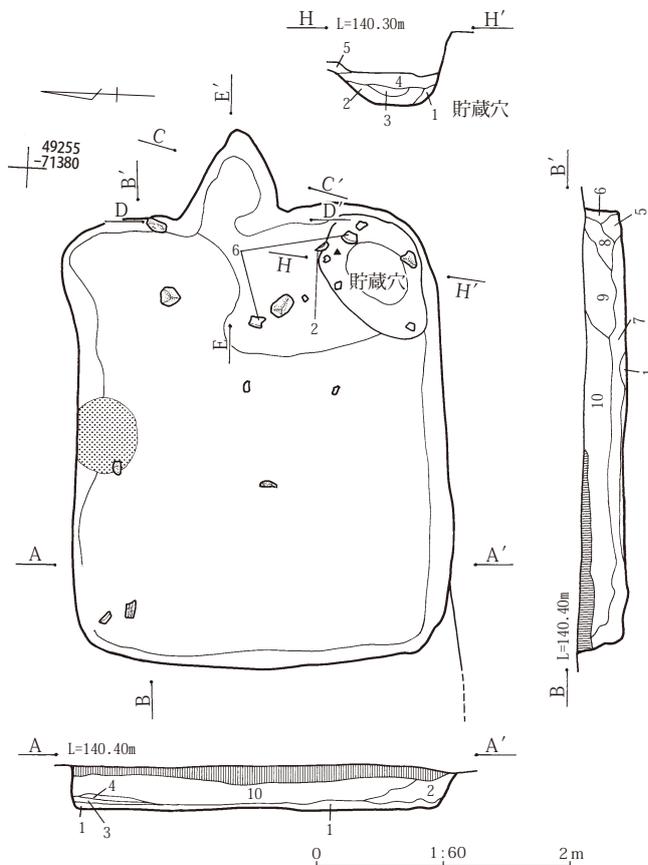
貯蔵穴 南東隅に設けられる。長径1.15m、短径0.85m、深さ25cmほどで、底面はほぼ平坦になっている。断面形は台形に近く、平面形は楕円形を呈する。内部からは土器片と少量の石が出土し、覆土には炭質物片と焼土ブロックが含まれる。

竈 東壁の中央やや北よりを掘り込んで、石組みを施し、地山ロームを主とする褐色土を貼り付けて構築している。燃烧部は壁外にあり、焚き口両脇から燃烧部壁面にかけて、左右3石ずつ円礫が並べられて燃烧部壁面を構成している。焚き口両脇の袖石は柱状の石を立位で2・3本据え、燃烧部壁面には柱状もしくは板状の石を並べている。これらの構造材に地山ロームを貼り付け、両袖と竈本体を構築している。また、燃烧部中央には高さ23cmほどの支脚石が残っていた。掘り方ではそれぞれの石の据え方が

ピット状の窪みとして認められる。焚き口前面には円形の浅いピットが掘られている。煙道は残っていないが、焚き口から約70cmの地点で煙道へと連続する立ち上がりとなっている。主軸方位はN-93°-E。

遺物 覆土から復元口径10cm前後の小型の須恵器環(1・2)、土釜の底部破片(3)、羽釜型の甑口縁部(5)と底部(6)、砥石(7)、鉄釘片(8)が出土し、竈煙道からは口縁がゆるい「く」の字を描く土釜の口縁部破片(4)が出土している。

所見 縦長長方形の平面形で東壁中央から北よりに竈を持つ例はI区1号住居がある。V区8号住居、11号住居は同じく縦長長方形だが東壁南隅に竈を持つ。いずれにせよ、本遺跡では少ない縦長の住居である。羽釜型の甑、土釜を含む出土遺物からは、10世紀後半の住居と考えられる。



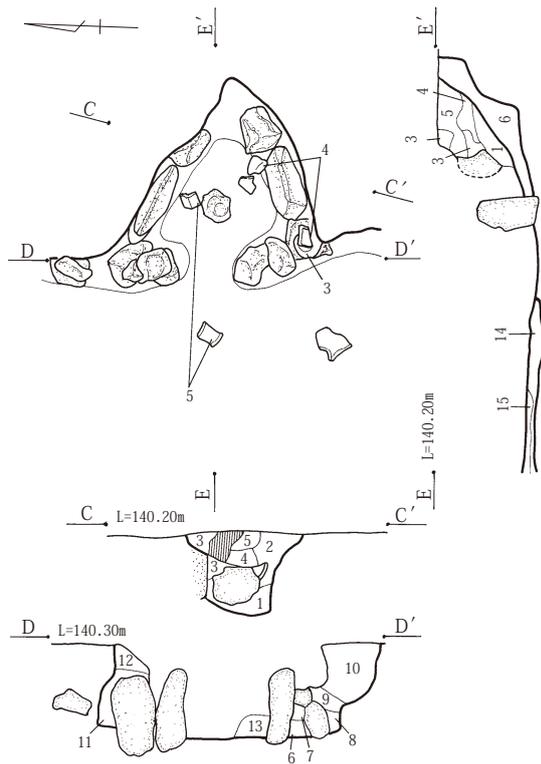
IV区11号住居土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。やや砂質。締まり弱い。粒子揃う。
- 2 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化材片、焼土粒子含む。やや砂質。
- 3 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物含む。締まっている。床面。
- 4 褐色壤土 やや砂質。平面的広がりはなく、斑状に分布。
- 5 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。やや粘質。締まっている。
- 6 黒褐色壤土 やや砂質。締まりやや弱い。
- 7 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。やや砂質。締まりやや弱い。
- 8 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。炭化物片含む。やや締まる。
- 9 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物粒、焼土粒含む。
- 10 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%。炭化物片含む。焼土粒少量含む。やや締まる。

IV区11号住居貯蔵穴土層観察所見

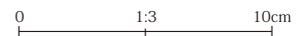
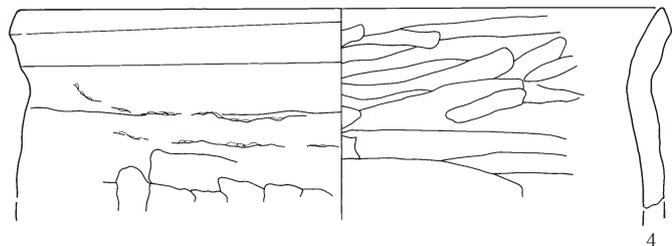
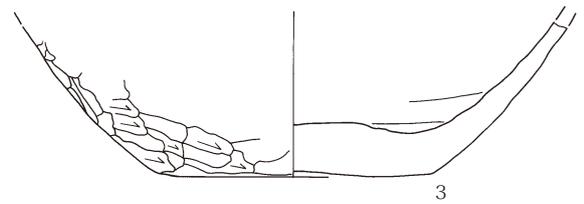
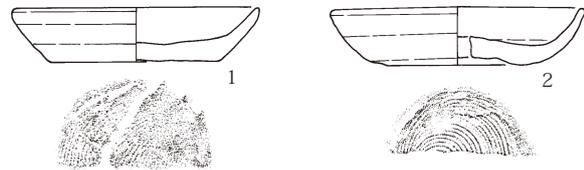
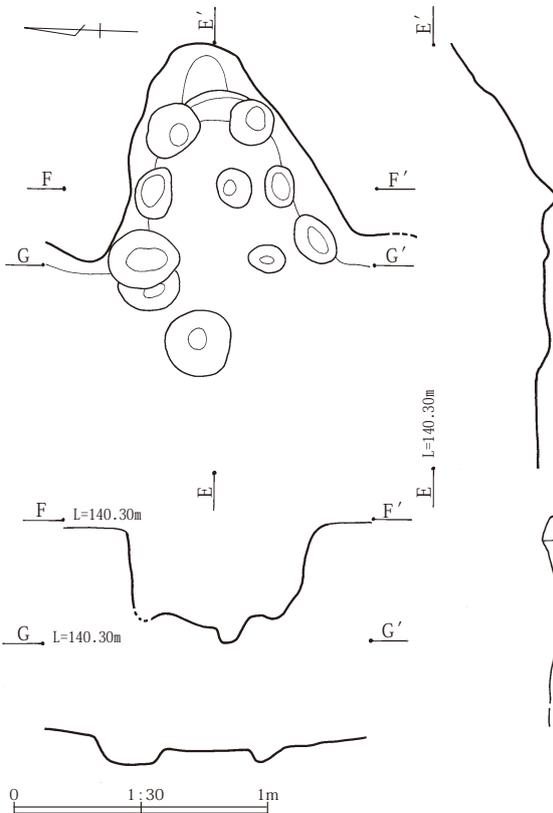
- 1 黒褐色壤土 炭化物粒多く含む。やや砂質。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 炭化物粒含む。やや粘質。締まり弱い。
- 3 暗褐色壤土 炭化物片極少量。
- 4 黒褐色壤土 炭化物粒、焼土小ブロック含む。
- 5 暗褐色壤土 ローム。竈構築土の崩れたもの。

第95図 万蔵寺廻り遺跡 IV区11号住居

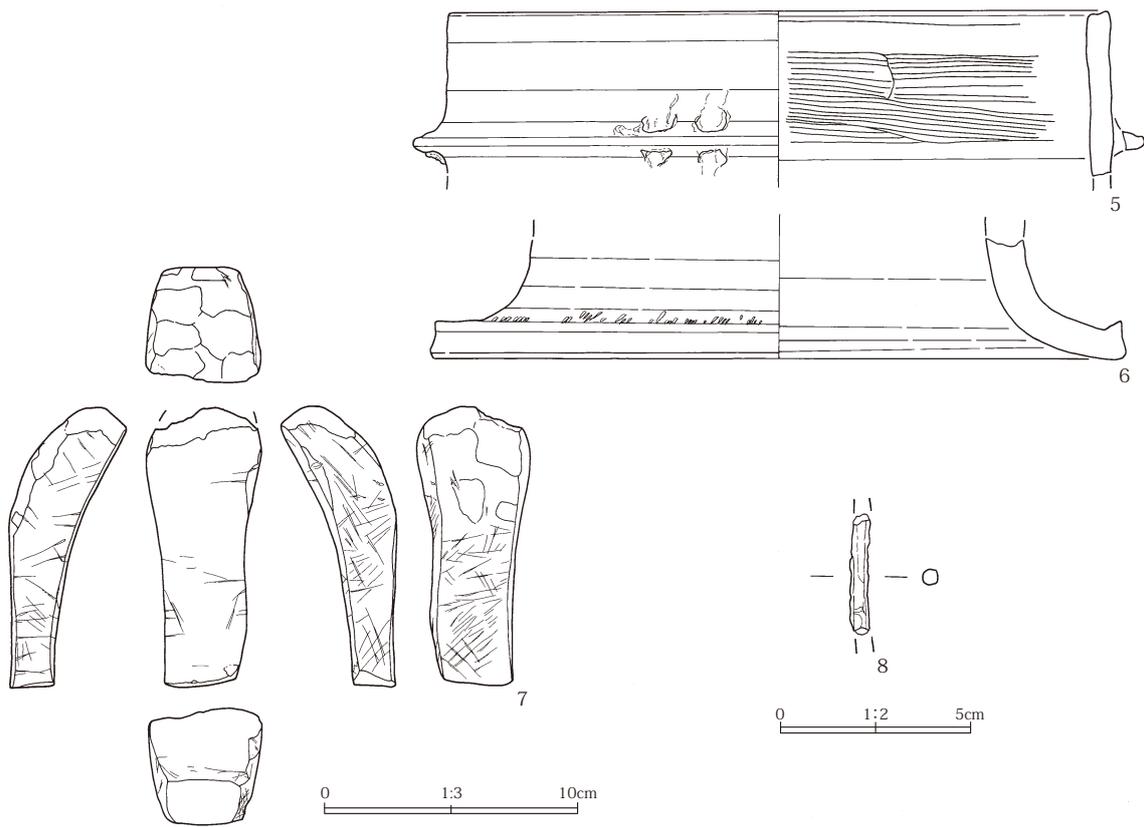


IV区 11号住居竈土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 焼土小ブロック1%。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒1%。焼土小ブロック含む。固く締まっている。
- 3 暗褐色壤土 焼土主体。固く締まっている。
- 4 褐色砂壤土 地山砂層主体。締まったブロック。
- 5 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。焼土小ブロック含む。固く締まっている。
- 6 褐色壤土 地山ロームを主とする竈構築土。黒色灰含む。
- 7 黒褐色壤土 やや粘性強い。締まっている。
- 8 黒褐色壤土 やや粘性強い。炭化物片1%。やや締まる。
- 9 褐色壤土 地山ローム。砂粒やや多い。締まっている。
- 10 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。砂粒やや多い。炭化物片含む。固く締まっている。
- 11 褐色壤土 固く締まっている。
- 12 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%。焼土小ブロック含む。固く締まっている。
- 13 極暗褐色壤土 焼土多く含む。
- 14 黒褐色壤土40%、褐色壤土60%の斑状混土。締まっている。
- 15 黒褐色壤土 焼土粒含む。炭化物片含む。固く締まっている。



第96図 万蔵寺廻り遺跡 IV区11号住居竈・同掘り方・出土遺物(1)



第97図 万蔵寺廻り遺跡 IV区11号住居出土遺物（2）

IV区12号住居（第98図 PL.39・40）

位置 X=49.255/Y=-71.380 IV区北東隅に位置し、標高140.20mの緩斜面上に立地する。

形態 当初は11号住居と一体のものとして調査したが、11号住居の輪郭が本住居の床面を僅かに掘り込んだ状態で認められたこと、本住居の床面構成土（第98図3層）と11号住居の床面構成土（第95図1層）の色調や締め方に差があることにより、調査途中から別住居としてとらえなおしたものである。これによると、本住居はほぼ方形の平面形を呈するが、東壁の中央部に屈曲があり、また、南壁の東部は11号住居と全く重なることになる。竈位置を含め、やや不自然さが感じられるところである。北東隅上部を62号土坑に切られる。

規模 長軸・短軸長ともに5.35m。

床 11号住居よりやや高い位置にあり、掘り方は僅かに波打つ。炭質物を含む暗褐色土と黒褐色土で床

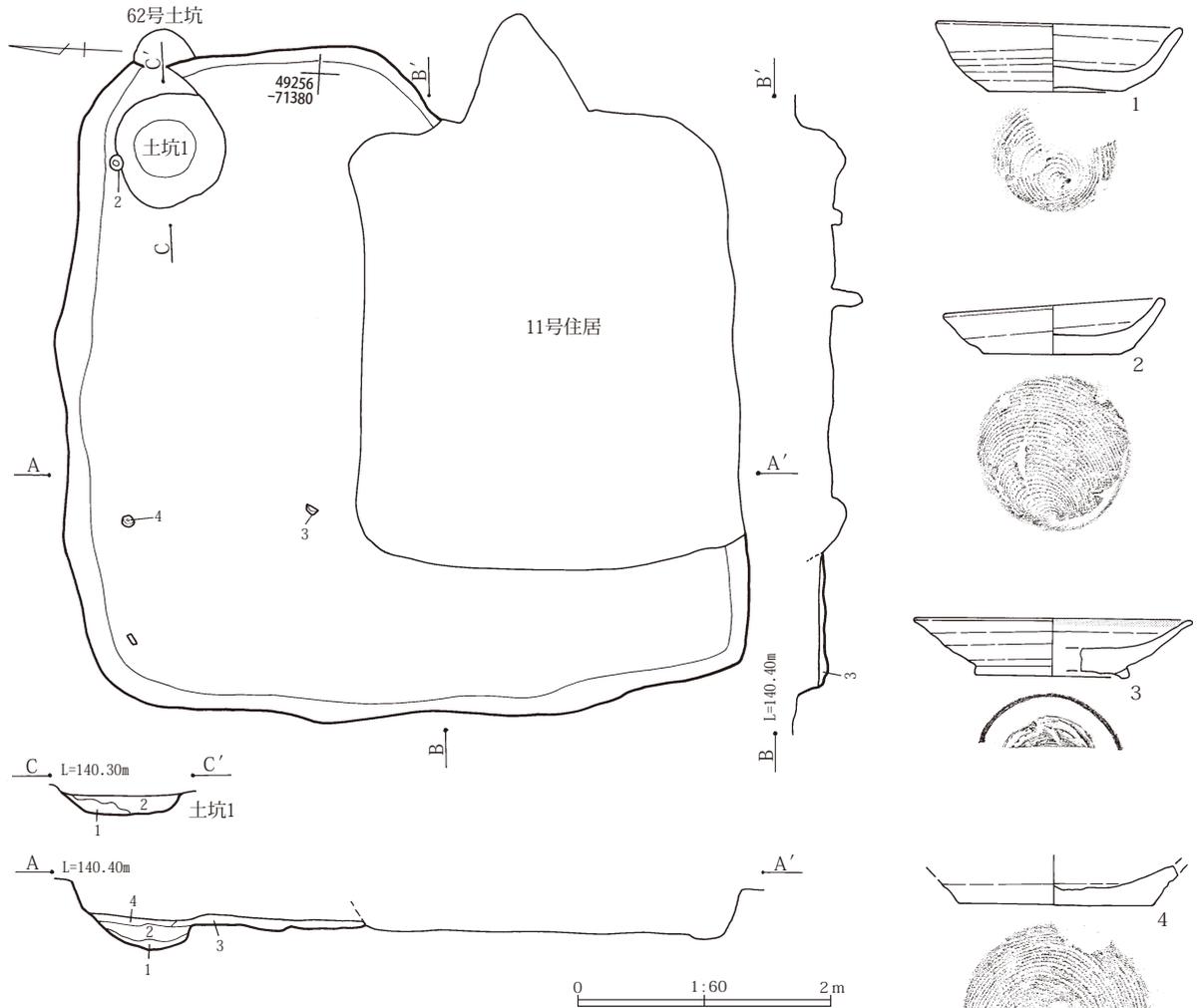
面を構成する。壁周溝、柱穴は認められない。北東隅には径90cm、深さ20cmほどの土坑がある。調査時に11号住居土坑1としたものである。

壁 やや開き気味に斜め立ち上がる。最大壁高34cmを計る。

遺物 住居中央付近の床面から虎溪山1号窯式期の灰釉陶器皿（3）、覆土中から復元口径9cm内外の須恵器の小型環2個体（1・2）と口縁を欠くがやや大型の環（4）が出土している。

また、北東隅の土坑内土壌からは少量ながらイネ、オオムギ、コムギ、マメ類などの炭化種実が出土している。

所見 11号住居と壁の一部を共有している点、軸を同じくする点から、12号住居廃絶から11号住居が作られるまでには、それほど時間が空いていないことが想定される。出土遺物から、10世紀後半頃の住居と考えられる。



IV区12号住居土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 大粒の二ツ岳軽石粒1%。崩れた地山。やや締まる。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒1%。炭化物少量含む。やや締まる。
- 3 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒含む。炭化物含む。締まっている。
- 4 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒含む。炭化物含む。締まっている。
- 5 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒含む。炭化物含む。やや締まる。
- 6 地山砂のブロック。

IV区12号住居内土坑1土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 炭化物含む。崩れた焼土ブロック含む。締まりやや弱い。
- 2 黒褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物少量含む。やや締まる。

第98図 万蔵寺廻り遺跡 IV区12号住居・出土遺物

IV区13号住居 (第99～103図 PL.40・41)

位置 X=49.240/Y=-71.380 IV区北東、11・12号住居の南側に位置し、標高140.20mの緩斜面上に立地する。東側は台地縁辺部の急傾斜となる。

形態 北東隅に土坑による攪乱を受ける。南北に長軸をおく隅丸長方形が、全体的に北東へ傾いたように歪んでおり、隅丸の平行四辺形に近い。長軸方位はN-2°-W。

規模 長軸長5.11m、短軸長4.46m。面積は12号住

居と並んでIV区の中では最大規模となる。

床 ほぼ平坦に作られるが細かな凹凸が多く、上には炭質物や灰を多く含む薄層が見られる。北壁から西壁にかけて幅10～20cm、深さ2cmほどの浅い壁周溝が巡る。壁周溝は、西壁の中央北寄りの地点で90cmほどの幅で途切れている。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、上方ではやや開き気味となる。深く掘られており、最大壁高は76cmある。

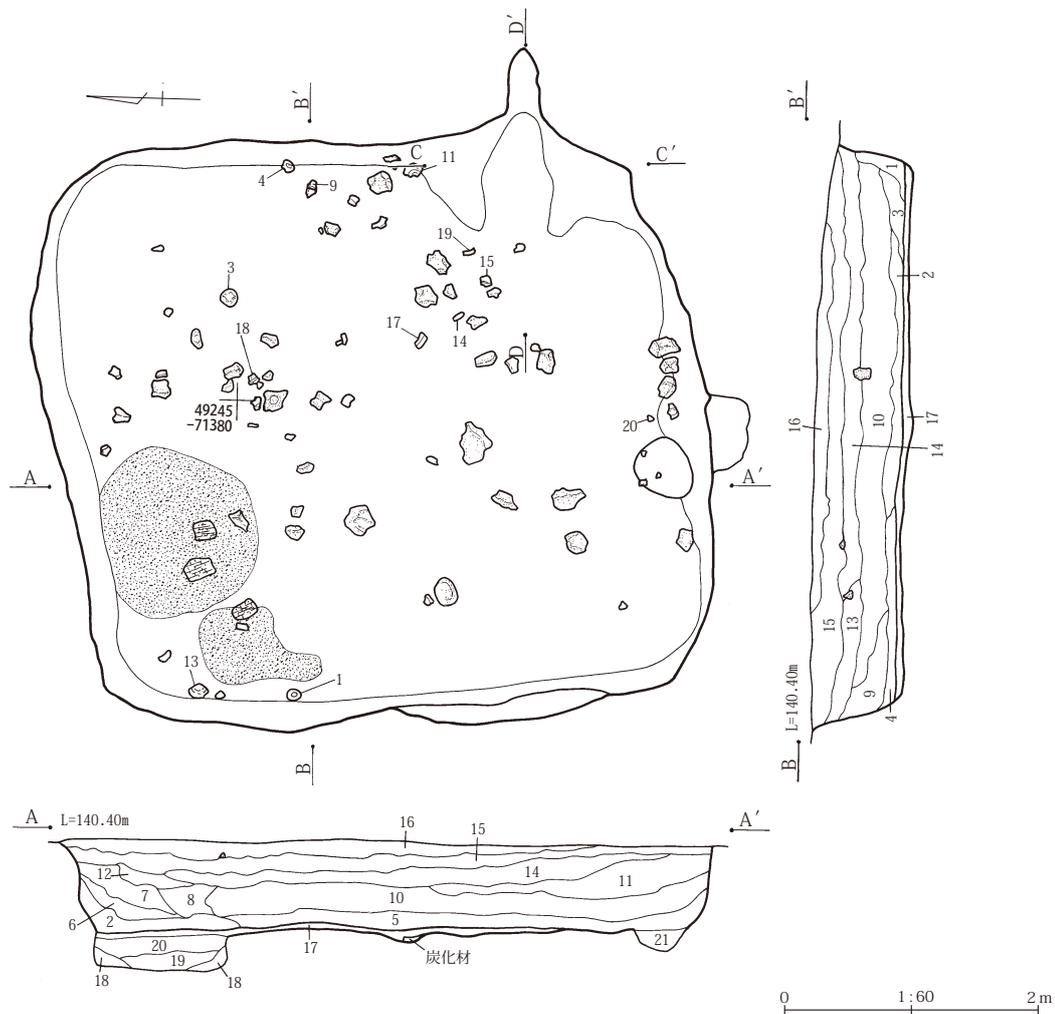
掘り方 北西、北東、南西の各隅に住居内土坑が掘

られる。北西の土坑1は長径1.45m、深さ25cmで楕円形を呈し、床面構成土が土坑上に貼られている。北東の土坑2は長径85cm、深さ20cmで円形、南西の土坑3は長径1.35m、深さ40cmで楕円形の形状である。土坑2・3は貯蔵穴の可能性があり、土器も出土している。住居中央部西よりと南壁際にはピットがあり、南壁際のピットは出入り口に関する機能を持つものかもしれない。

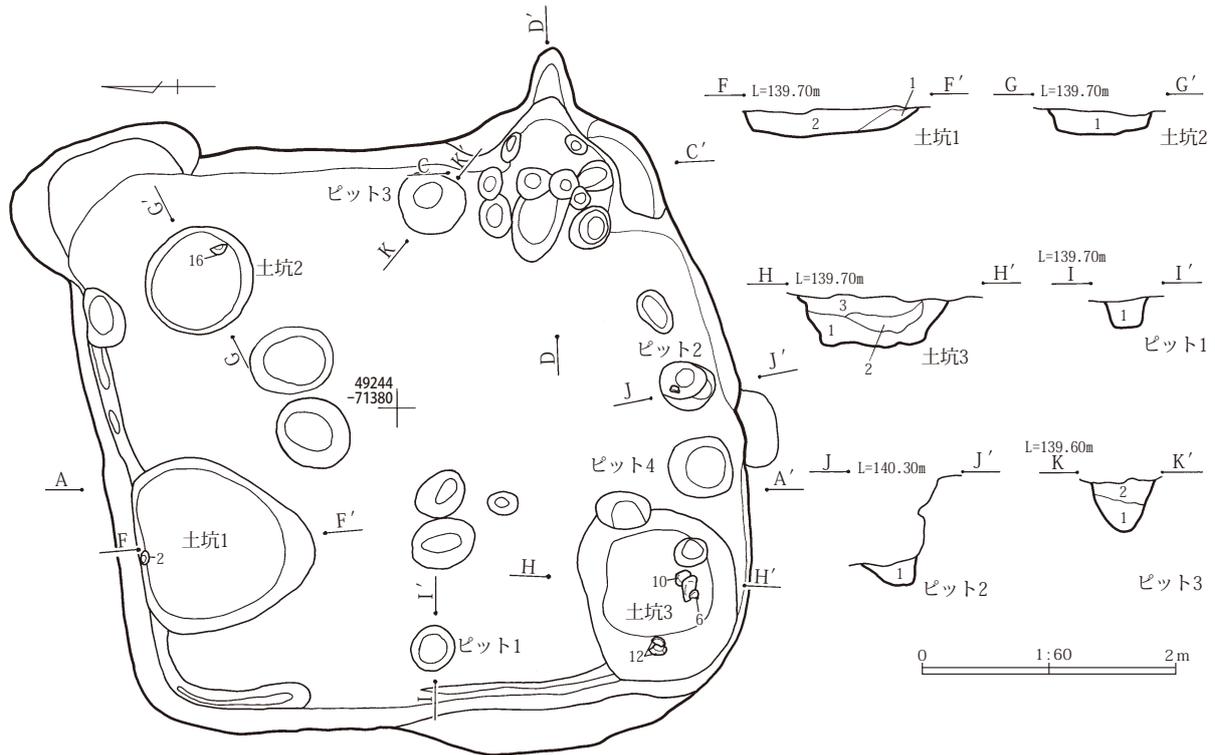
竈 東壁南端を掘り込み、褐色の軽埴土を主体とする土を貼り付けて構築する。主軸方位はN-92°-E。燃烧部はほぼ壁内にあり、天井構築土が半ば焼土化した状態で、崩れていた。焚き口両脇から燃烧部壁際にかけて袖石、壁石が3・4基並ぶ。燃烧部は若干深く掘り込まれ、中央には支脚の据え

方と思われる小ピットが掘られている。左袖先端と燃烧部奥には構造材の円礫が残る。両袖は、袖石と褐色～暗褐色土を積み重ねて構築されていたと思われる。左袖に隣接して、長径50cm、深さ40cmの円形ピットが掘られる。煙道は壁から50cmの地点で途切れている。

遺物 須恵器坏(10～13)、小型坏(1～9)、埴(14)、虎溪山1号窯式期の灰釉陶器埴(15)、皿(16)、羽釜(17)、甑(18)と多彩な土器が出土している。また、紡錘車の紡茎(19)、釘破片(22・23)も出土している。紡茎は鍛造品で上半部の破片である。紡茎上端は鉤状に屈曲する。東壁際の床面と覆土中からは埴形鉄滓が2点出土しているが、住居内や周辺に鍛冶関連遺構は認められない。



第99図 万蔵寺廻り遺跡 IV区13号住居



第100図 万蔵寺廻り遺跡 IV区13号住居掘り方

IV区 13号住居土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 炭化物粒を含む。締まり弱い。二ツ岳軽石粒を含まない。
- 2 暗褐色砂壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を3%含む。炭化物粒を含む。締まり弱い。
- 3 暗褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を5%含む。炭化物粒を多く含む。やや締まっている。
- 4 暗褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を5%含む。炭化物粒を多く含む。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物粒を多く含む。
- 6 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒を少量含む。黒色灰の斑含む。締まりやや弱い。
- 7 暗褐色壤土 径15mmの二ツ岳軽石粒を3%含む。炭化物片少量含む。締まりやや弱い。
- 8 暗褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を3%含む。7層と10層の斑状混土。
- 9 暗褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を1%含む。褐色土ブロック含む。締まりやや弱い。
- 10 暗褐色壤土 径15mmの二ツ岳軽石粒を3%含む。炭化物片を多く含む。やや締まっている。
- 11 暗褐色壤土 径15mmの二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物片を多く含む。やや締まっている。
- 12 暗褐色壤土 径7mm程度の二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物片を多く含む。やや締まっている。
- 13 暗褐色壤土 二ツ岳軽石粒を(0~5mm)含む。炭化物片含む。締まっている。
- 14 黒褐色壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物片を多く含む。やや締まっている。
- 15 黒褐色壤土 二ツ岳軽石粒を径15mmの二ツ岳軽石粒を5%含む。炭化物片を多く含む。
- 16 黒褐色砂壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を1%含む。As-Bの混土。固く締まっている。
- 17 床硬化面。炭化物、灰を多く含み、特に表層は黒色灰がこびり付く。

- 18 土坑3覆土。
- 19 土坑3覆土。
- 20 土坑3覆土。
- 21 黒褐色砂壤土 径10mmの二ツ岳軽石粒を1%含む。上面に炭化物多い。

IV区 13号住居内土坑1土層観察所見

- 1 地山、二ツ岳軽石粒を、シルト、砂の崩れたものが2層と混じる。
- 2 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物含む。締まりやや強い。

IV区 13号住居内土坑2土層観察所見

- 1 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒を1%含む。やや締まる。砂質やや強い。

IV区 13号住居内土坑3土層観察所見

- 1 黒褐色壤質砂土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を及び地山砂中心。締まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を1%含む。炭化物含む。砂粒多い。
- 3 黒褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を3%含む。炭化物片を多く含む。締まりやや弱い。

IV区 13号住居内ピット1土層観察所見

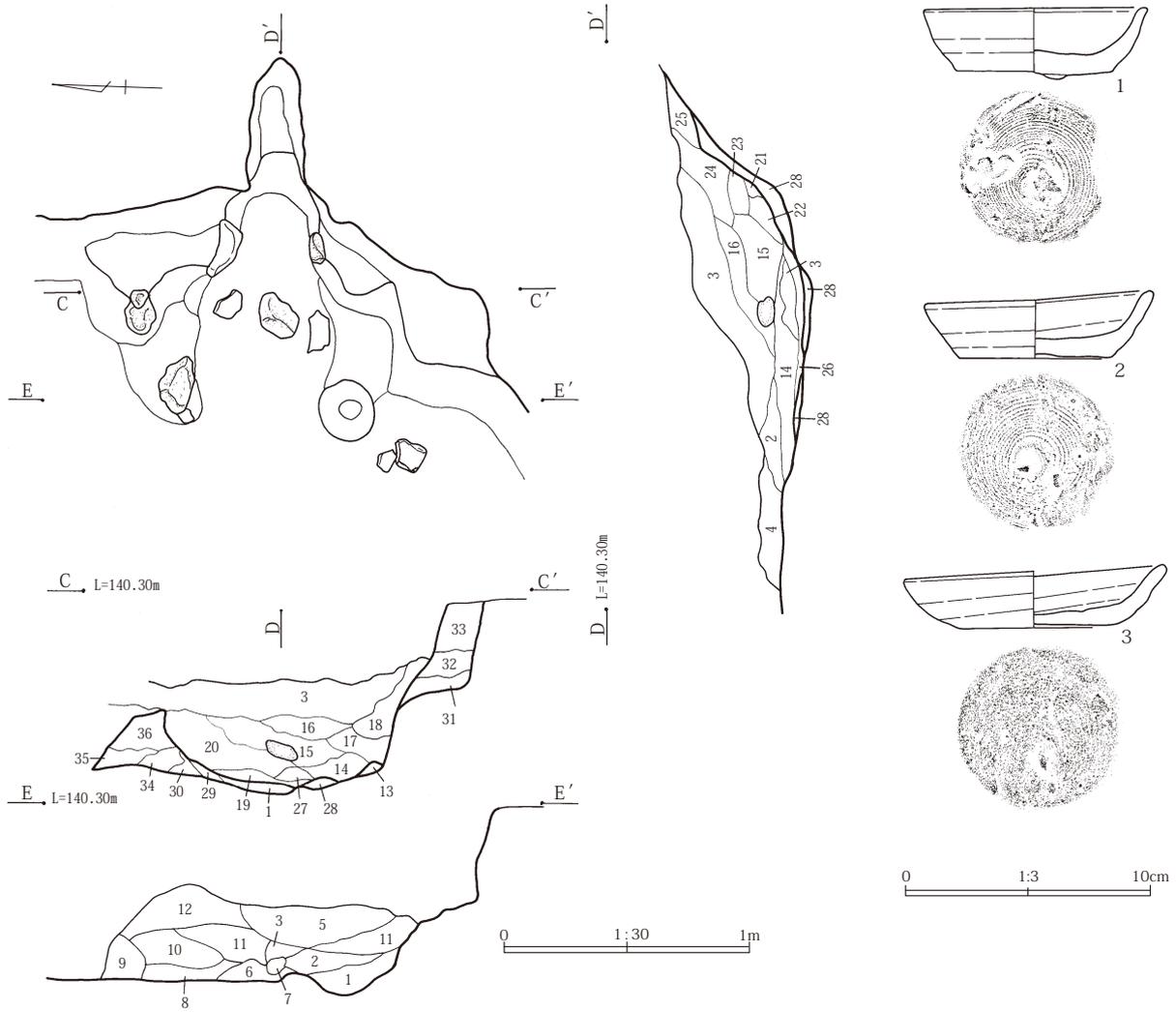
- 1 暗褐色砂壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒を3%含む。地山の崩れた土が汚れている。炭化物含む。やや締まる。上面床面。

IV区 13号住居内ピット2土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒を1%含む。上面炭化物多く含む。やや締まる。

IV区 13号住居内ピット3土層観察所見

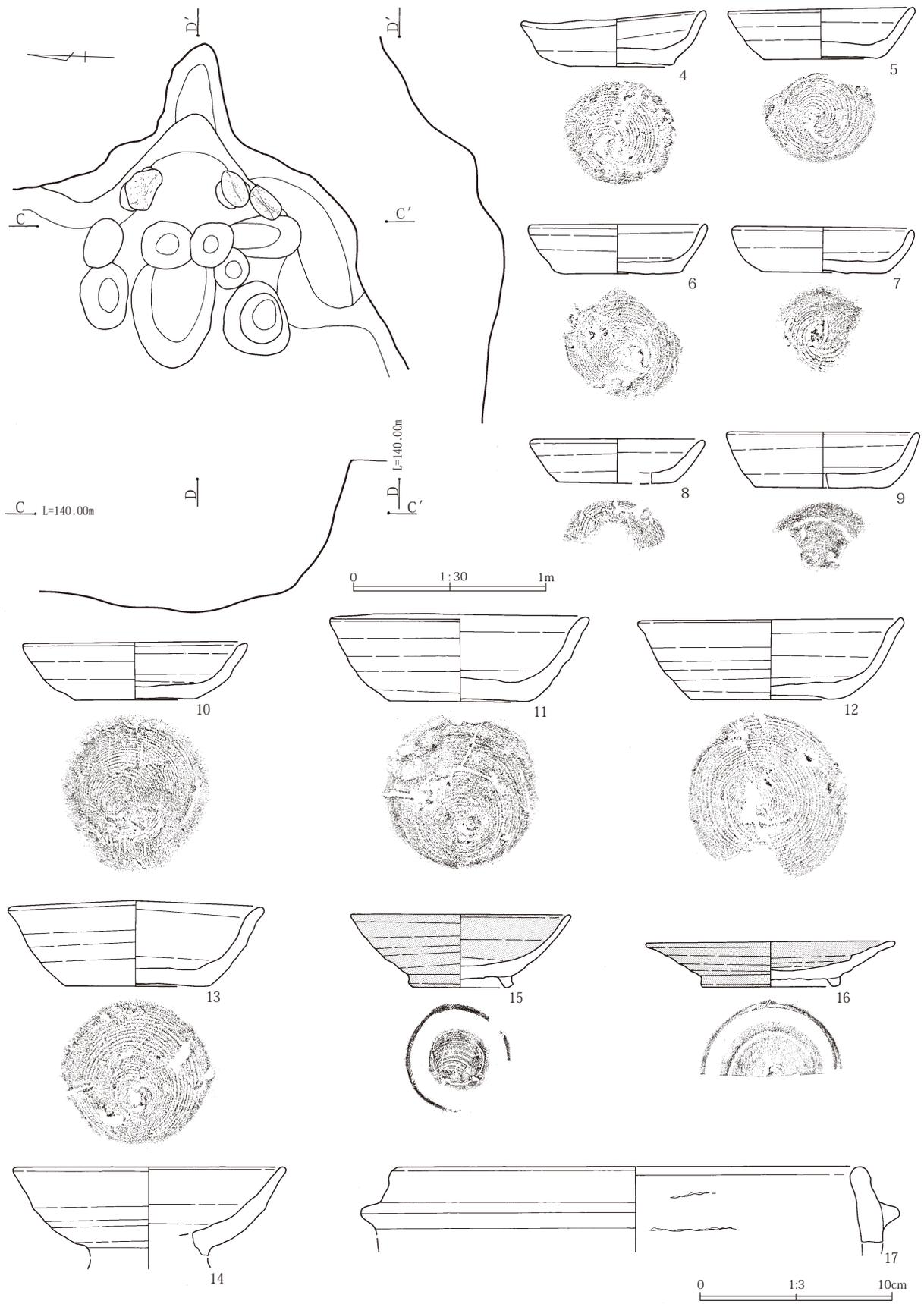
- 1 黒褐色壤土 炭化物少量含むが他に混入物ない。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒をを含む。締まっている。



第101図 万蔵寺廻り遺跡 IV区13号住居竈・出土遺物(1)

IV 13号住居竈土層観察所見

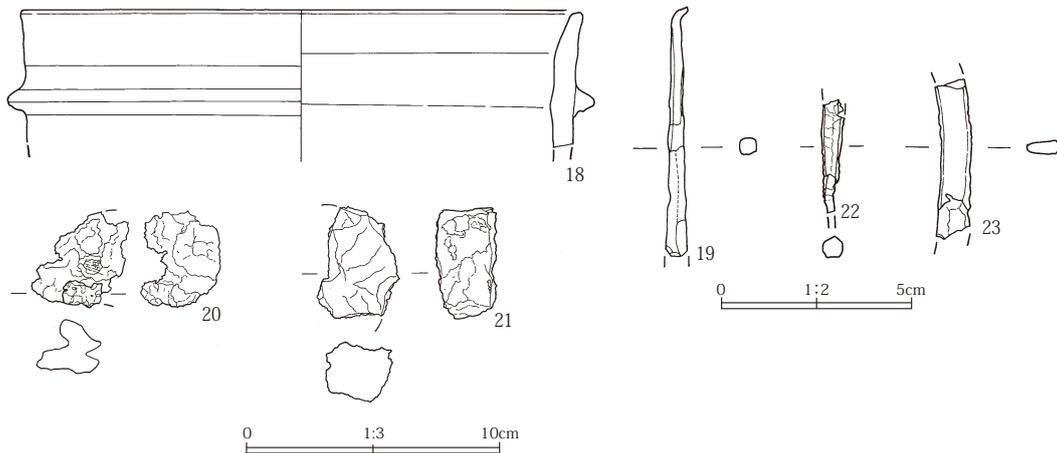
- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。炭化物片含む。縮まり弱い。袖抜き取り痕。</p> <p>2 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片含む。縮まりやや弱い。</p> <p>3 暗褐色壤土 ハードロームのブロック。</p> <p>4 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%含む。炭化物粒、黒色灰の斑含む。縮まっている。</p> <p>5 暗褐色壤土 砂質強い。径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。縮まりやや弱い。</p> <p>6 暗褐色焼土と褐色壤土の混土。炭化物片含む。</p> <p>7 暗赤褐色軽埴土 柔らかい粘土質。</p> <p>8 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物片1%含む。</p> <p>9 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。やや縮まる。</p> <p>10 暗褐色壤土 径15mm大の二ツ岳軽石粒3%含む。炭化物片含む。</p> <p>11 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。炭化物片含む。</p> <p>12 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒3%含む。炭化物片含む。焼土小ブロック含む。やや縮まる。</p> <p>13 褐色壤土 径3mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。構築土。</p> <p>14 褐色軽埴土 焼土及びロームの斑状混土。天井崩落土。</p> <p>15 暗褐色壤土 黒色灰のブロック30%、土斑10%含む。縮まりやや弱い。</p> <p>16 暗褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。褐色土斑7%含む。縮まりやや弱い。</p> | <p>17 暗褐色壤土 焼土及びロームの斑10%含む。縮まり弱い。</p> <p>18 14層と同相だが縮まっている。天井、壁の崩落土。</p> <p>19 灰、焼土ブロック、ロームの混土。</p> <p>20 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。炭化物、焼土粒含む。縮まりやや弱い。</p> <p>21 暗褐色軽埴土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。</p> <p>22 褐色軽埴土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物含む。</p> <p>23 褐色軽埴土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。炭化物含む。</p> <p>24 褐色軽埴土 径10mm大の二ツ岳軽石粒3%含む。炭化物含む。</p> <p>25 暗褐色軽埴土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。固く縮まっている。</p> <p>26 灰層</p> <p>27 黒褐色壤土</p> <p>28 褐色壤土 二ツ岳軽石粒主体の汚れた地山が焼けたもの。</p> <p>29 褐色軽埴土主体。焼土斑30%含む。特に下部が焼化赤変している。構築土。</p> <p>30 褐色軽埴土 径3mm大の二ツ岳軽石粒少量含む。焼けていない構築土。</p> <p>31 褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。縮まっている。</p> <p>32 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒3%含む。縮まっている。</p> <p>33 黒褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒炭化物、焼土粒含む。固く縮まっている。</p> <p>34 褐色壤土 径5mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。斑10%含む。縮まっている。</p> <p>35 褐色壤土 焼土小ブロック、暗褐色土ブロック等小円形ブロックを多く含む。固く縮まっている。</p> <p>36 暗褐色壤土 径10mm大の二ツ岳軽石粒1%含む。</p> |
|--|--|



第102図 万蔵寺廻り遺跡 IV区13号住居竈掘り方・出土遺物(2)

竈及び床面下の掘り方中央部の土壌から多量の炭化種実が得られた。特に掘り方中央部からの出土が多く、完形粒だけで160粒を越えるイネ以外にキビ、コムギ、ヒエが見られる。竈からはマメ科、コムギが、また、少量のオオムギ、ササゲ属も見られる。

所見 掘り込みの深さが特筆される。竈の左袖に隣接してピットが掘られる点は7号住居と共通する特徴である。これら住居構造の特徴と遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第103図 万蔵寺廻り遺跡 IV区13号住居竈出土遺物(3)

IV区14号住居 (第104～106図 PL.42)

位置 X=49.250/Y=-71.385 IV区北東に位置し、標高140.30mの緩斜面上に立地する。

形態 南北にやや長い横長長方形の平面形で、長軸方位はN-8°-Wを示す。南壁の一部を71号土坑に切られる。

規模 長軸長3.86m、短軸長3.35m。

床 地山を掘り込み、底面は若干波打つがほぼ平坦に作られる。壁周溝、柱穴は認められない。南西隅には円形の浅いピットが認められる。

壁 削平によりほとんど失われているが、北壁はほぼ垂直に立ち上がるのに対し、他壁はやや開き気味に立ち上がるものと思われる。最大壁高20cm。

貯蔵穴 竈右手脇に当たる南東隅にある。長径85cm、深さ20cm。平面形は楕円形で、底面は丸く、浅い皿状を呈する。

竈 東壁の中央南寄りを掘り込んで構築する。燃焼部は壁外にあり、中央に小ピットが4基認められているが、いずれも浅く、支脚据え方に相当するものを特定することができない。焚き口両脇には壁内への張り出しは認められず、袖石の据え方とおもわれ

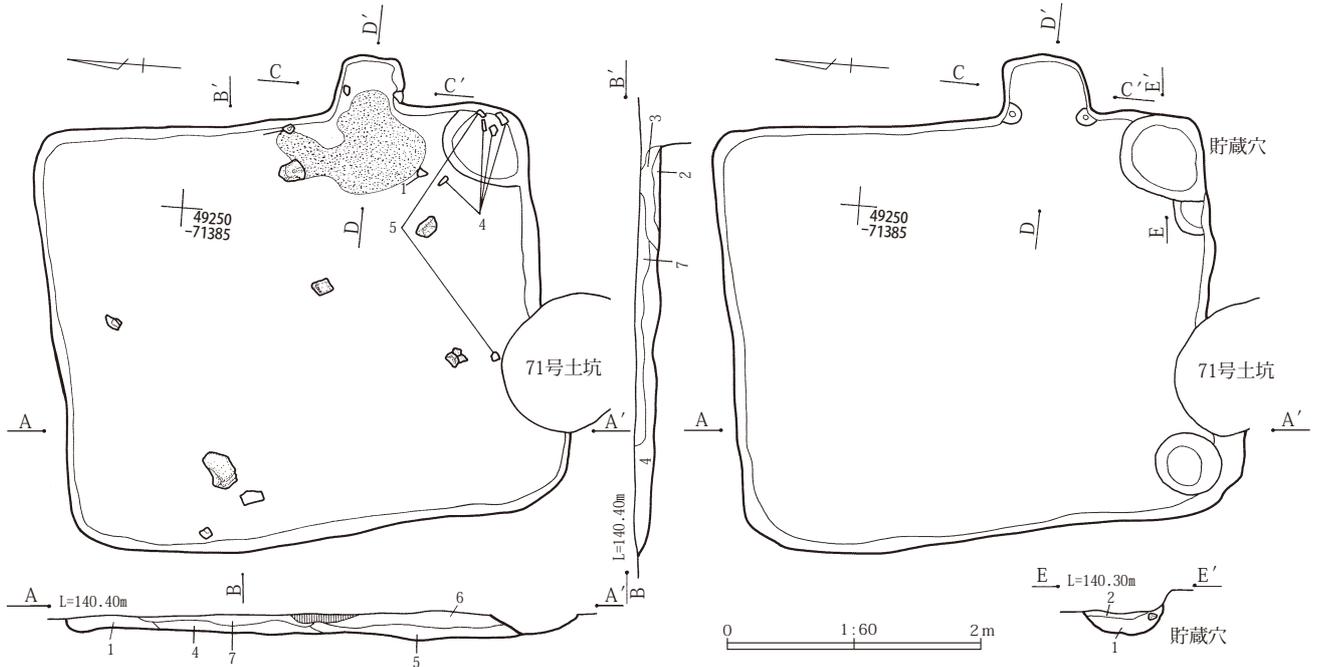
る小ピットが並んでいる。周辺には垂角礫が散らばった状態で認められるが、竈の施設、構造と関連をうかがわせるものではない。煙道は残っていない。主軸方位はN-94°-E。

遺物 住居北側の覆土中から、虎溪山1号窯式期の灰釉陶器壺(2・3)が出土した。竈前面の床からは須恵器壺(1)が出土し、竈周辺の覆土中と竈煙道からは羽釜(4・5)が出土した。

竈と貯蔵穴内の土壌から炭化種実が得られた。竈からはイネ、コムギ、ヒエ、マメ科が、貯蔵穴からはムギ類が僅かに出土した。

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と想定される。

第4章 遺構と遺物



IV区 14号住居土層観察所見

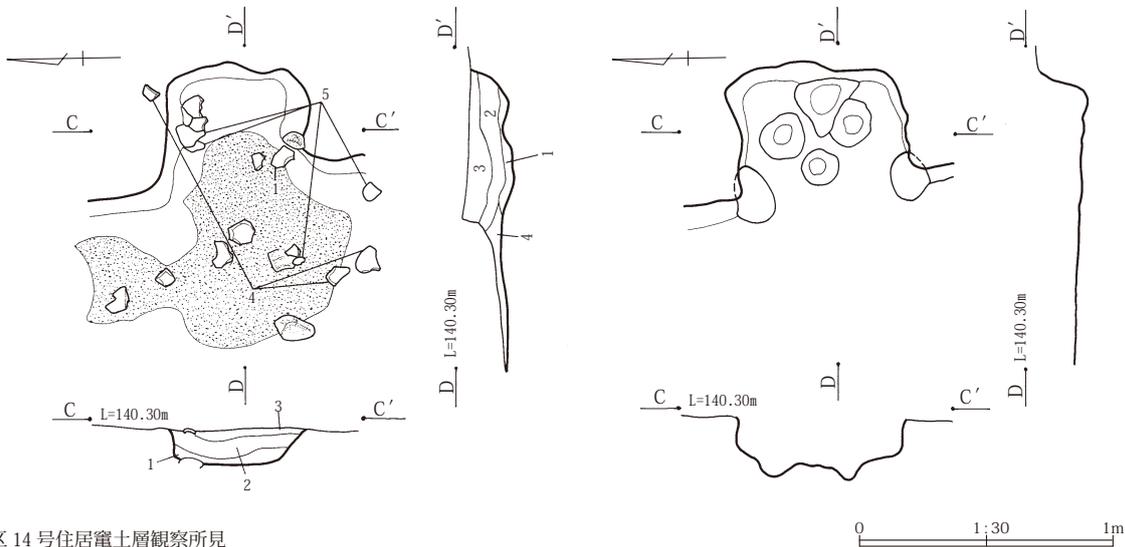
- 1 暗褐色シルト質壤土 ニツ岳軽石粒3%。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 やや粘質。締まりやや弱い。炭化物片含む。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石含む。地山ローム質の粘土含む。やや締まる。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒1%。やや砂質。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石粒1%。やや粘質。やや締まる。
- 6 暗褐色壤土 ニツ岳軽石粒3%。炭化物片含む。締まっている。

- 7 黒褐色壤土 ニツ岳軽石3%。炭化物片、黒色灰含む。固く締まる。

IV区 14号住居貯蔵穴土層観察所見

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石粒、炭化材片含む。締まりやや弱い。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石粒1%。焼土ブロック含む。炭化物片多く含む。やや締まる。

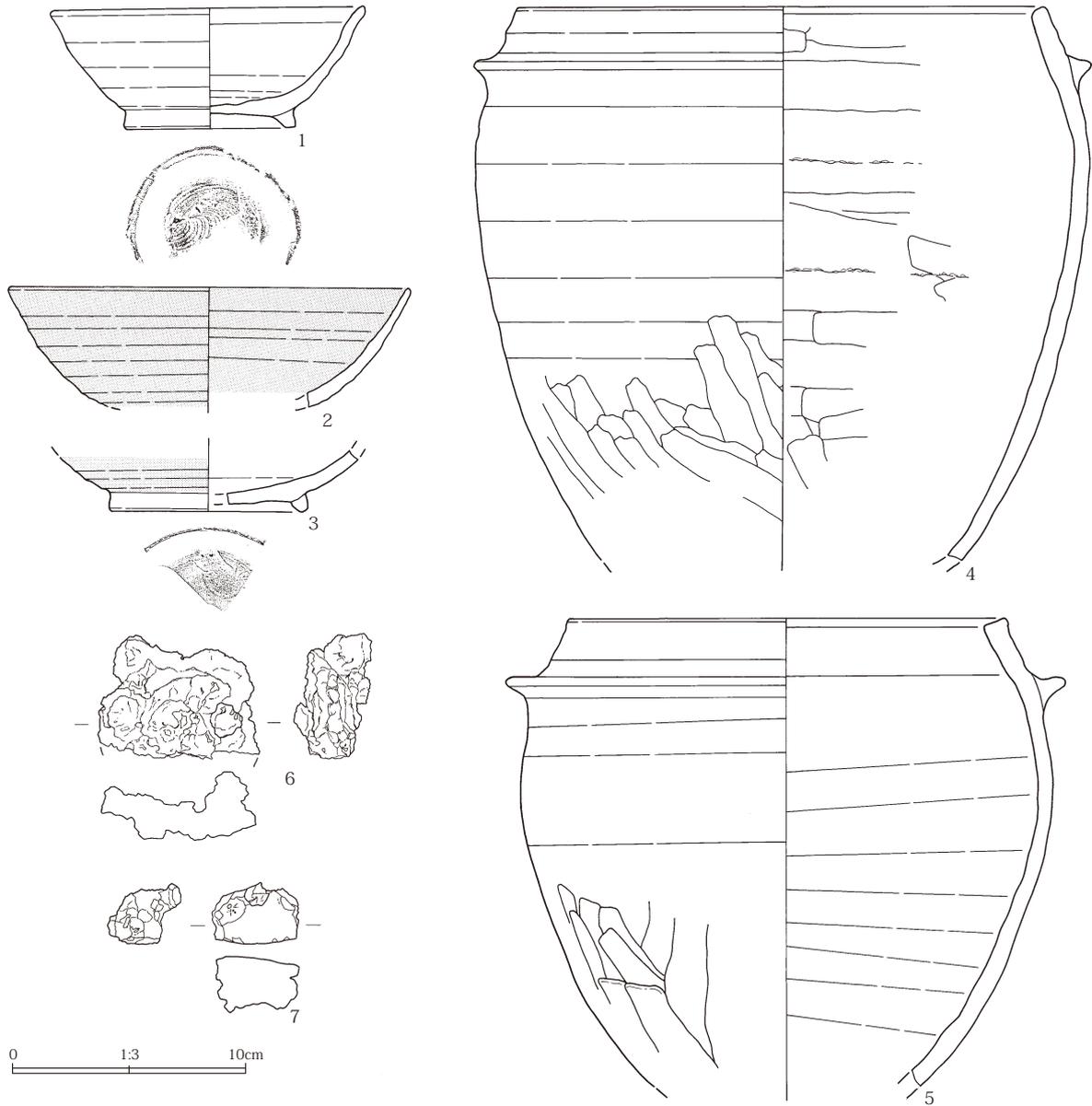
第104図 万蔵寺廻り遺跡 IV区14号住居・同掘り方



IV区 14号住居竈土層観察所見

- 1 黒褐色壤土 黒色の灰主体。焼土粒含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 粘質。焼土小ブロック含む。ニツ岳軽石粒ほとんど含まない。締まりやや弱い。
- 3 暗褐色壤土 径7mm大のニツ岳軽石粒3%。焼土小ブロック含む。締まっている。
- 4 黒褐色壤土 黒色灰を多く含む。径3mm大のニツ岳軽石粒1%。やや粘質。締まっている。

第105図 万蔵寺廻り遺跡 IV区14号住居竈・同掘り方



第106図 万蔵寺廻り遺跡 IV区14号住居出土遺物

V区1号住居 (第107・108図 PL.43)

位置 X=49.316/Y=-71.415 V区北端に位置し、標高140.95～141.00mの東に向かう緩斜面上に立地する。住居周囲には、北西側にピット群が、南西側には土坑群が密集して分布する。

形態 北東隅を80号土坑によって切られる。南北にやや長い長方形に近いが、西壁がやや短く、北壁に歪みが生じて台形に近い平面形状を呈する。長軸方位はN-2°-W。

規模 長軸長3.13m、短軸長2.67m。

床・壁 削平によって壁はほとんど失われ、住居の

確認面は掘り方底面と思われる。残存する底面には僅かな起伏が見られ、これらの砂を含む暗褐色土と黄褐色砂質土で埋めて床を構成していたものと思われる。また、西壁に幅20cm、深さ5cmほどの溝があり、壁周溝と思われる。南西隅から西壁中央までの1.1mほどで途切れている。

掘り方 南東、南西両隅に土坑が掘られている。南東隅の土坑は楕円形の平面形を示し、長径70cm、深さ15cm。竈焚き口の脇に当たり、位置的に貯蔵穴の可能性はある。他にも南中央から南西隅にかけては土坑状の浅い掘り込みがいくつか認められる。

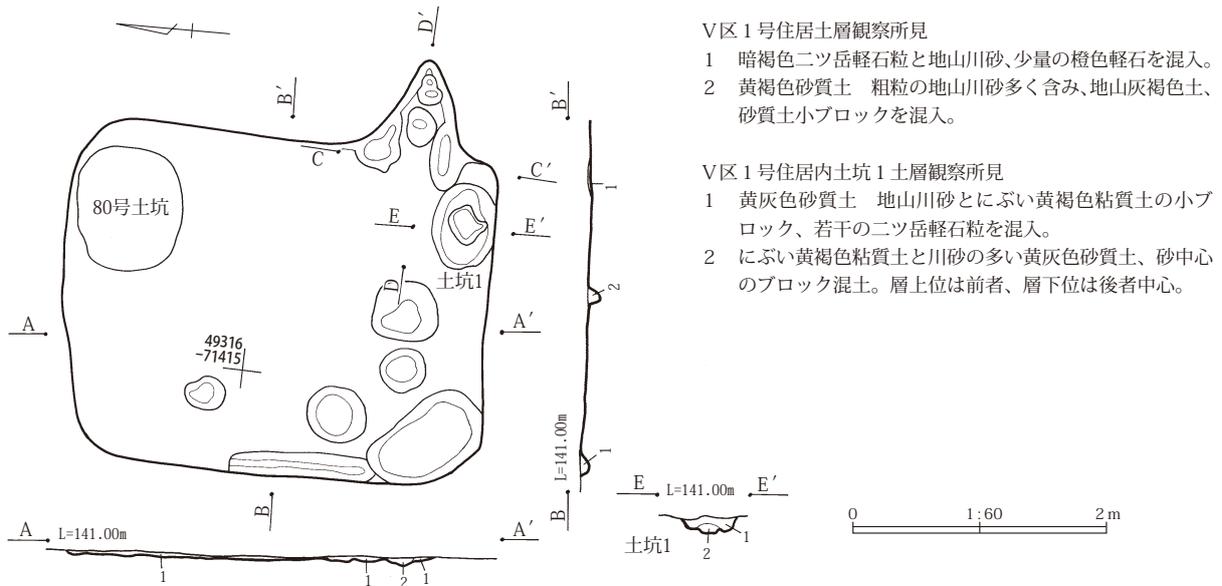
第4章 遺構と遺物

竈 上位が全く削平されているために、構造の詳細はわからない。東壁南端を壁外に掘り込んで構築する。燃烧部はほぼ壁外にある。焚き口両脇には壁内への張り出しは認められず、袖石据え方が左右に並んでいる。燃烧部中央には支脚の据え方と思われる小ピットが掘られている。煙道は認められない。主

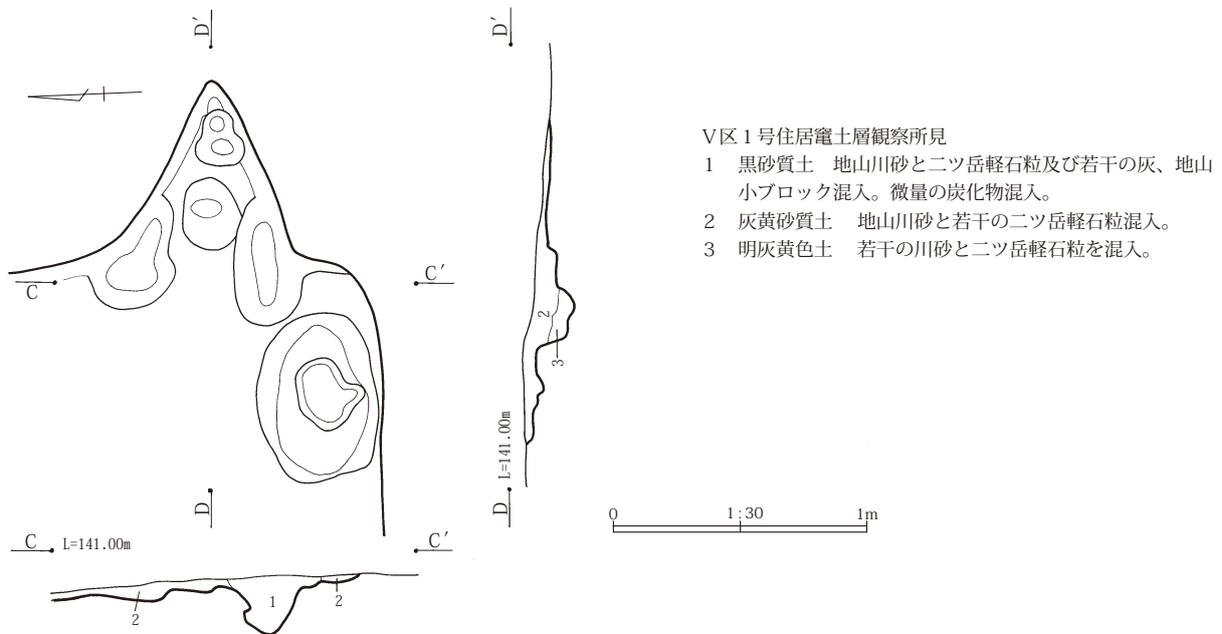
軸方位はN-95°-E。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物がなく、時期を確定することができないが、規模、東壁南端に設けられた竈などの特徴から、10世紀後半頃の住居と推定される。



第107図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号住居



第108図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号住居竈掘り方

V区2号住居 (第109・110図 PL.43・44)

位置 X=49.306/Y=-71.415 V区北側に位置し、標高141.00mの緩斜面上に立地する。住居北側には浅い窪地が東西に広がり、東に確認された谷へと緩やかに傾斜している。

形態 南壁を3号住居に、西壁中央付近を6号溝と71・85号土坑に、東壁を81号土坑に切られる。南壁が残っていないため推定となるが、南北に長軸をおく長方形、長軸方位はN-2°-W。

規模 長軸長2.94m、短軸長2.68m。

床 僅かな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られる。粘質の褐灰色砂質土を敷き、床面とする。

壁 削平のためか大半が失われているが、やや開き気味に上方へ立ち上がる。最大壁高は14cm。

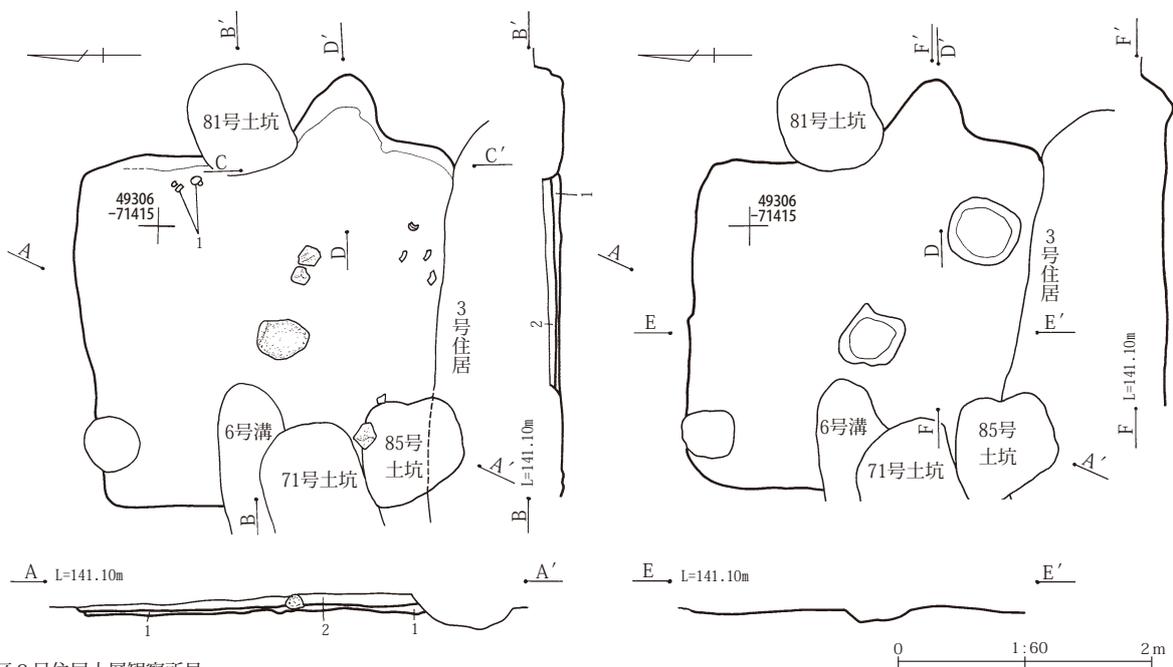
掘り方 竈右脇に当たる南東隅に、長径1.2m楕円形の住居内土坑が掘られる。壁際に掘られた不正形の土坑状落ち込みを切っており、ともに土器片が数点出土する。楕円形の土坑は貯蔵穴の可能性はある。

竈 東壁の中央やや南寄りを掘り込んで構築する。煙道は残っていない。燃烧部はほぼ壁外にあり、一

段深く掘り込まれてから煙道へと連続するものと思われる。焚き口両脇には壁内への張り出しはないが、袖石の据え方が並ぶ。据え方からは袖石と思われる柱状の石が倒れた状態で出土している。燃烧部内には、袖石以外にも二ツ岳石、粗粒輝石安山岩が多数出土しており、構築材に使われたものが崩れたか、廃棄されたものと思われる。主軸方位はN-95°-E。
遺物 東壁際の覆土下位から須恵器坏(1)が、竈燃烧部からは羽釜破片(2・3)が出土している。坏は内面に黒色処理を施され、棒もしくは籠状工具によって研磨される。

住居西側の床面直上の土壌から、イネ、オオムギを主とするムギ類、アワの炭化種実が得られた。また、南西からイネ、オオムギが、竈からはイネ、オオムギ、コムギが出ており、全体的にオオムギの出土が目立つ。

所見 規模、竈の設置位置など、1号住居とは共通する点が多い。出土遺物からも10世紀後半の住居と考えられる。

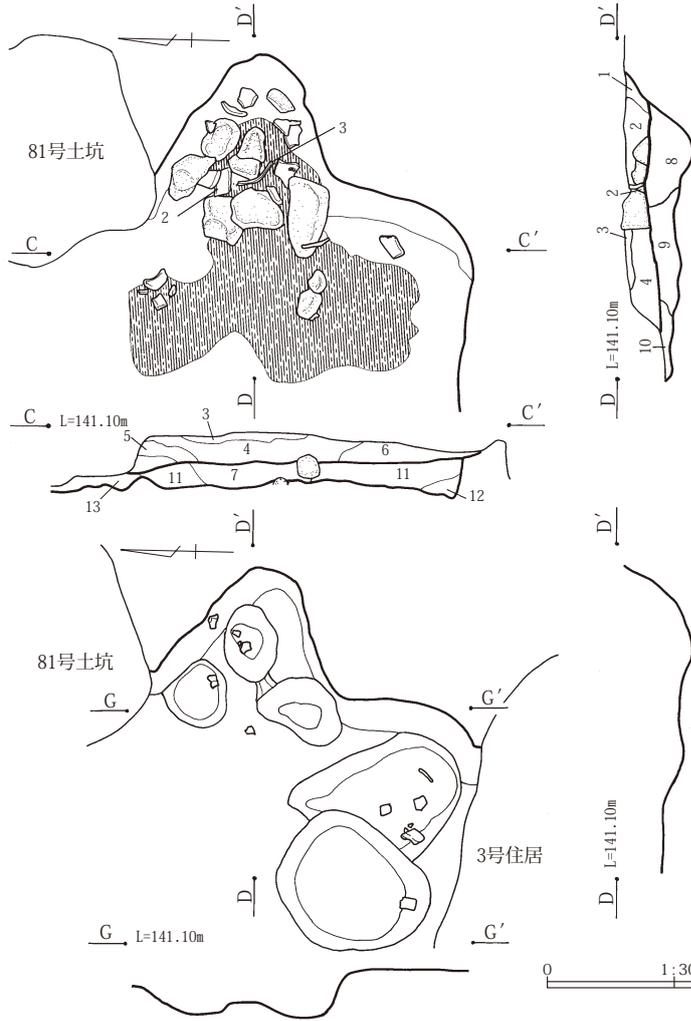


V区2号住居土層観察所見

- 1 黒褐色土 地山砂多く含む。径20mm以下の比較的大粒の二ツ岳軽石と黄褐色ブロック若干含む。
- 2 褐色土 粘性弱。灰黄褐色土小ブロックと二ツ岳軽石混。僅かに炭化物混。

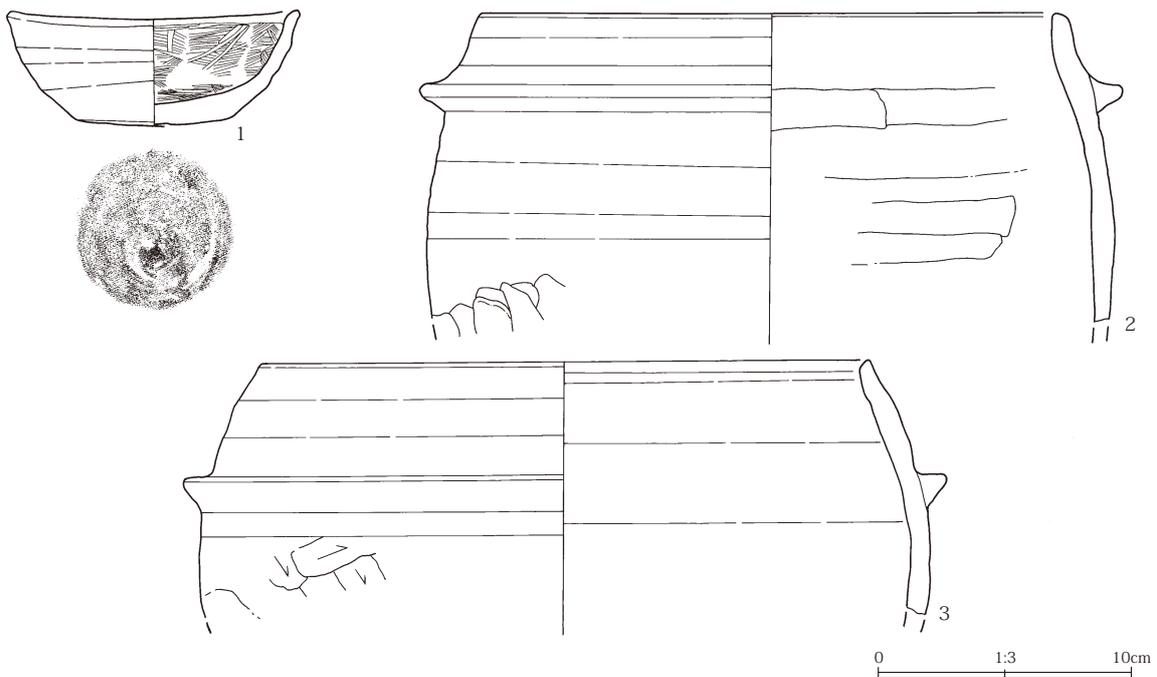
第109図 万蔵寺廻り遺跡 V区2号住居・同掘り方

第4章 遺構と遺物



V区2号住居竈土層観察所見

- 1 暗褐色土 砂質土。径5mm大の二ツ岳軽石粒含む。上面が赤化している。粘性弱。
- 2 灰黄褐色土 砂質土。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土粒少量混。締まり中。粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 シルトに近い砂質土。径20mm大の二ツ岳軽石粒含む。上面が赤化。締まりやや強い。粘性弱。
- 4 暗褐色土 シルトに近い砂質土。径30mm大の二ツ岳軽石粒 含む。粒子及び粒子を少量含む。締まり中。粘性弱。
- 5 暗褐色土 シルトに近い砂質土径1mm含む。締まり中。粘性やや弱。
- 6 暗褐色土 径25mm以下の比較的大粒の二ツ岳軽石粒含む。炭化物及び焼土粒子が入る。締まり中。粘性弱。
- 7 黒褐色土 径5mm大の二ツ岳軽石粒。締まり中。粘性弱。
- 8 暗褐色土 シルトに近い砂質土。黒色灰及び焼土粒子が入る。径20mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まり中。粘性弱。
- 9 暗褐色土 シルトに近い砂質土。黒色灰を多く含む。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まり中。粘性弱。
- 10 黒色灰を非常に多く含む。黄褐色土ブロック含む。締まり中。粘性弱。
- 11 暗褐色土 砂質土。径20mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山砂が混じる。締まり中。粘性弱。
- 12 黒褐色土 砂質土。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山砂混じる。締まり中。粘性弱。
- 13 黒褐色土 地山砂多く含む。径20mm大の二ツ岳軽石粒と黄褐色土ブロック若干含む。



第110図 万蔵寺廻り遺跡 V区2号住居竈・同掘り方・出土遺物

V区3号住居 (第111～114図 PL.44・45)

位置 X=49.304/Y=-71.415 2号住居と同様、IV区北部における窪地状地形の南側に位置し、標高141.00mの緩斜面上に立地する。

形態 北壁部が2号住居を切り、南西隅部では4号住居に、住居中央付近は83号土坑に切られている。平面形は南北に長軸をおく長方形を呈す。長軸方位はN-3°-E。

規模 長軸長が4.46m、短軸長3.96m。

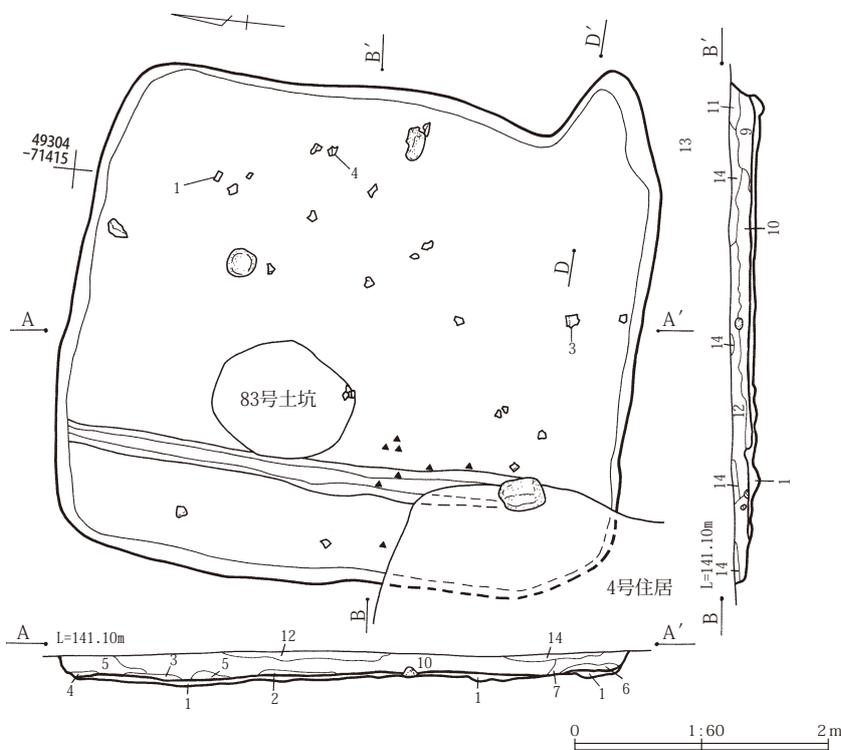
床 にぶい黄褐色砂質土を固めて床面とする。東壁から北壁中央付近にかけて、幅15～25cm、深さ3cmほどの壁周溝が巡る。東壁の周溝は北東隅でいったん途切れ、北壁東端から中央にかけて続いた後、住居内側に向かって「コ」の字状に周回する。南壁部では中央から竈右手前まで続く。北西隅から南に直線的な浅い溝が延びており、南壁手前に据えられた砥石(9)に達する。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高20cm。

掘り方 北東、北西両隅に住居内土坑が掘られる。いずれも楕円形の浅い土坑で、柱穴の可能性は低い。南西にも土坑があり、長径40cm、深さ20cm円形の土坑で北西から南へ直線的に走る溝と合流する。

竈 東壁南端を掘り込んで構築する。燃烧部はほぼ壁外にあり、中央には支脚据え方と思われる小ピットが掘られる。焚き口両脇には、袖石据え方と思われるピットが並ぶ。据え方に袖石は無かったが、焚き口から燃烧部にかけて40～30cmほどの石がまとまった状態で出土しており、袖石や竈本体の構築材が崩落、または投棄されたものと思われる。主軸方位はN-97°-E。煙道は残っていない。

遺物 北東部の床面から須恵器坏(1)、埴(2)、覆土から土釜(4)、虎溪山1号窯式期の灰釉陶器長頸壺頸部片(3)が出土している。1は、復元口径10cm、器高2.75cmほどの小型の坏であるが、内面が高熱により一部ガラス化している。坩堝などとして利用されていた可能性が考えられよう。3は口径



V区3号住居土層観察所見

- 1 にぶい黄褐色土 砂質土。二ツ岳軽石粒、暗褐色土小ブロック含む。縮まりやや強。粘質弱。
- 2 灰黄褐色砂質土 地山砂多量。
- 3 黄灰色砂質土 若干の川砂含む。
- 4 褐灰色土と5層土ブロック混土。
- 5 褐灰色土 やや砂質だが粘性有り。二ツ岳軽石粒と地山ブロック粒混入。
- 6 黒褐色土 粘性多少あるが砂質。地山川砂と二ツ岳軽石粒混入。
- 7 暗褐色土 粘性有り。炭化物含み二ツ岳軽石粒やや多く含む。
- 8 灰黄褐色土 やや砂質で弱い粘性有り。二ツ岳軽石粒と地山ブロック混入。
- 9 褐色土 やや粘性有り。二ツ岳軽石粒含む。
- 10 灰褐色砂質土 二ツ岳軽石粒、シルト粒、細砂含む。炭化物含む。
- 11 褐灰色砂質土 二ツ岳軽石粒とシルト小ブロック混入。
- 12 褐色土 粘性有り。二ツ岳軽石粒と灰白色シルト、酸化鉄混入。
- 13 灰褐色土 二ツ岳軽石粒小粒含む。
- 14 淡い明赤褐色土 酸化鉄凝集部。

第111図 万蔵寺廻り遺跡 V区3号住居

第4章 遺構と遺物

12.6cm、頸部高8.8cmある。

竈からは、底部に高台の付く須恵器甕（5）が出土している。紐作り後に回転轆轤整形し、胴部外面下位を篋削りして、撫でた後に底部に高台を付している。

鉄製の釘（7）と、紡錘車の軸（8）が覆土中から出土している。ともに鍛造品である。紡錘車はⅡ区5号住居で出土した紡軸と同様の作りである。

針状の鉄製品が6本錆着した状態で検出された（6）。住居内の土坑覆土中から出土したものの記載があるが、どの土坑から出土したものであるか詳細な記録を欠く。4.6cmほどの長いものが2本、短い3.9cmほどものが4本ある。1本あたりの太さはともに0.15cmほどとみられる。先端が尖り、反対側は方頭状となる。4本には、片面からの回転穿孔による小孔が頭部にあけられている。縫い針としてよいものと思われる。

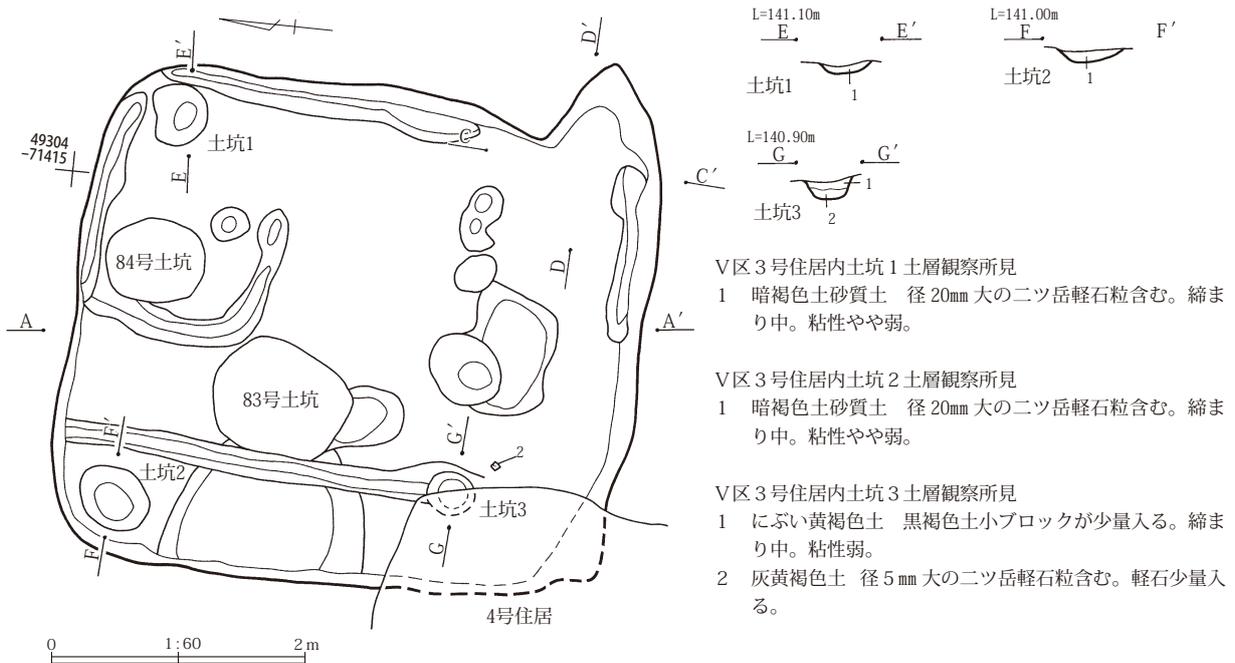
9の砥石は粗粒輝石安山岩の扁平な自然石を利用したもので、長さ35.2cm、幅22.7cm、厚さ10.4cmの大きなもので、重さも9.36kgある。裏面中央と右側面に磨面があり、裏面に見られる磨面周辺には、敲打痕と思われる細かな傷がある。右側面の磨面を中

心に錆が付着しておており、磨面の擦痕に入り込むように付着するものも見られる。金属製品を研ぐ際に出た金属粒子が付着した可能性があるだろう。出土地点は住居南西部で、床面から僅かに浮くとされるが、現位置を保ったものとして良いのではないだろうか。住居内を西壁に並行して走る溝端部に当たり、砥石下に住居内土坑がある。

10の砥石は竈前に当たる南東壁際の床面に密着して出土したもので、粗粒輝石安山岩製。本来は柱状の自然石と思われるが、全ての側面と上面の一部を磨面に用いている。側面で面積の大きい磨面7面、それによって生じた角を利用した狭い磨面4面がある。正面、裏面、左側面には長い線状の傷痕が20か所認められる。刃渡りの長い金属製品によって付けられたものと思われる。

床面構成土、住居内土坑からイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ、マメ類などが得られている。

所見 内面がガラス化した坏、灰陶陶器長頸壺、針、大型の砥石など、出土遺物に特異なものが多い。出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。

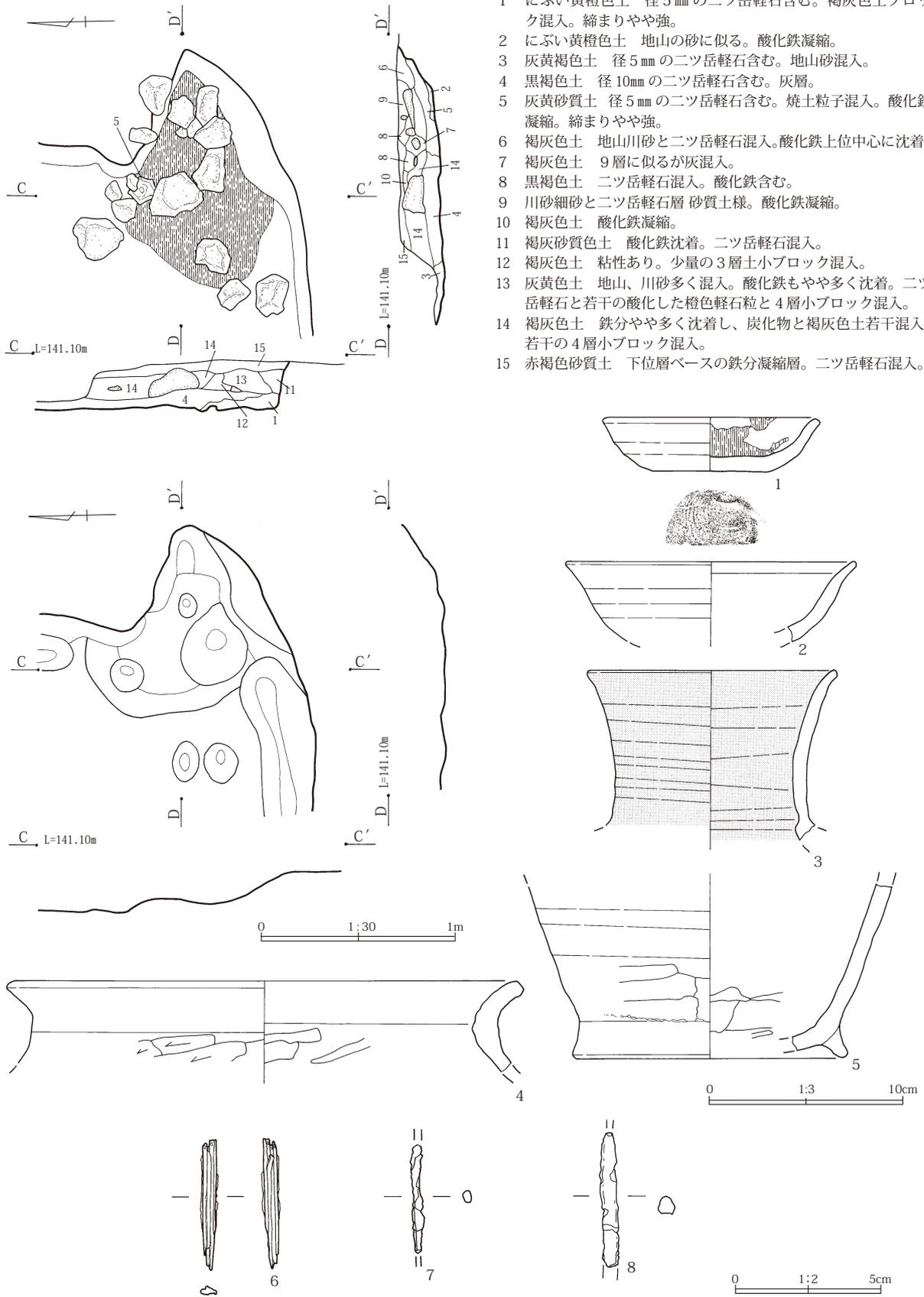


第112図 万蔵寺廻り遺跡 V区3号住居掘り方

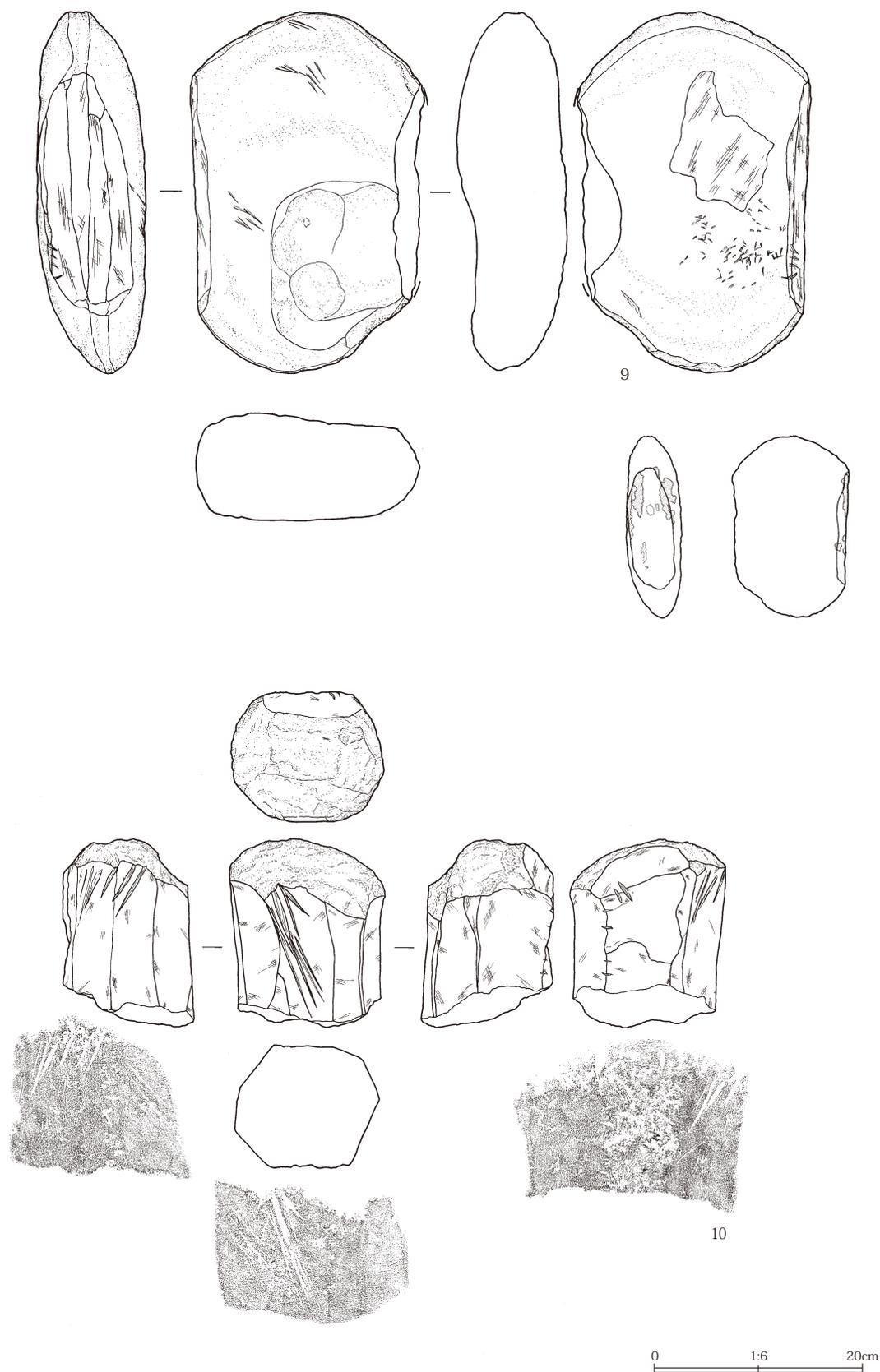
第1節 古代・中世の遺構と遺物

V区3号住居竈土層観察所見

- 1 にぶい黄橙色土 径5mmの二ツ岳軽石含む。褐灰色土ブロック混入。締まりやや強。
- 2 にぶい黄橙色土 地山の砂に似る。酸化鉄凝縮。
- 3 灰黄褐色土 径5mmの二ツ岳軽石含む。地山砂混入。
- 4 黒褐色土 径10mmの二ツ岳軽石含む。灰層。
- 5 灰黄砂質土 径5mmの二ツ岳軽石含む。焼土粒子混入。酸化鉄凝縮。締まりやや強。
- 6 褐灰色土 地山川砂と二ツ岳軽石混入。酸化鉄上位中心に沈着。
- 7 褐灰色土 9層に似るが灰混入。
- 8 黒褐色土 二ツ岳軽石混入。酸化鉄含む。
- 9 川砂細砂と二ツ岳軽石層 砂質土様。酸化鉄凝縮。
- 10 褐灰色土 酸化鉄凝縮。
- 11 褐灰砂質土 酸化鉄沈着。二ツ岳軽石混入。
- 12 褐灰色土 粘性あり。少量の3層土小ブロック混入。
- 13 灰黄色土 地山、川砂多く混入。酸化鉄もやや多く沈着。二ツ岳軽石と若干の酸化した橙色軽石粒と4層小ブロック混入。
- 14 褐灰色土 鉄分やや多く沈着し、炭化物と褐灰色土若干混入。若干の4層小ブロック混入。
- 15 赤褐色砂質土 下位層ベースの鉄分凝縮層。二ツ岳軽石混入。



第113図 万蔵寺廻り遺跡 V区3号住居竈・同掘り方・出土遺物(1)



第114図 万蔵寺廻り遺跡 V区3号住居出土遺物(2)

V区4号住居 (第115～117図 PL.45・46)

位置 X=49.306/Y=-71.420 V区北側に位置し、標高141.00mの緩斜面上に立地する。

形態 南北に長軸をおく長方形で北西隅が僅かに迫り出す。長軸方位はN-2°-W。

規模 長軸長3.50m、短軸長2.60m。

床 緩やかな起伏が見られ、東側が若干深く掘り込まれる。底面を、地山の砂が混じるにぶい黄褐色粘質土によって埋め、踏み固めて床面とする。壁周溝や柱穴は認められない。

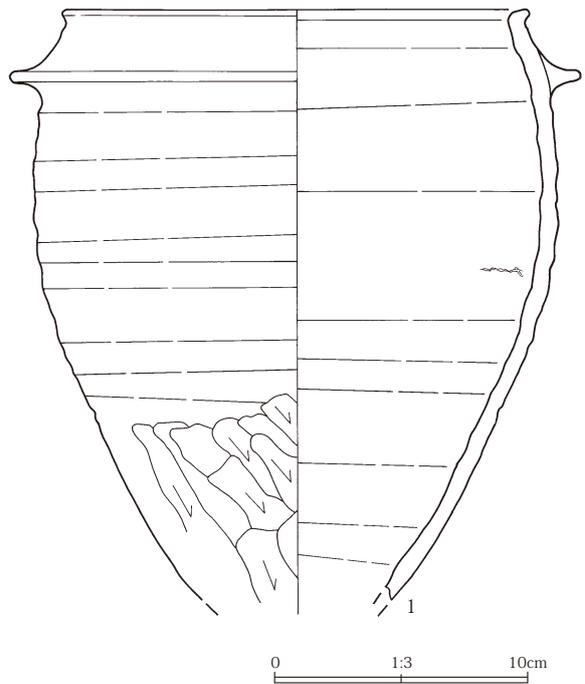
壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高22cm。

竈 東壁南端を掘り込んで構築する。燃烧部はほぼ壁外にあり、若干深く掘り込んでから煙道へと連続する。焚き口両側に壁内への張り出しは無く、袖は認められない。燃烧部から焚き口にかけては、袖石か構築材と思われる石がまとまって出土している。煙道の天井は残っておらず、燃烧部から90cmの地点で途切れている。主軸方位はN-97°-E。

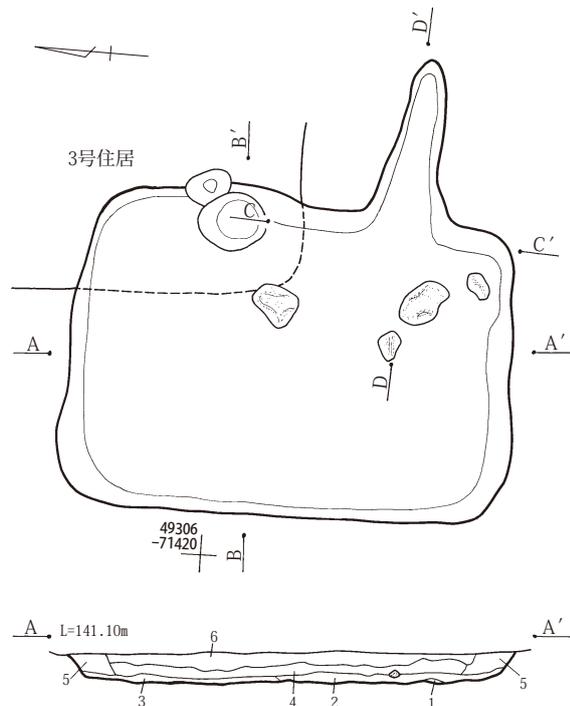
遺物 住居床面などからはほとんど見つかっておらず、竈燃烧部から羽釜(1)が出土している。

床面、竈等の土壌から、僅かながらイネ、ムギ類、ヒエ、マメ科の炭化種実が得られている。

所見 遺物から10世紀後半の住居と考えられる。



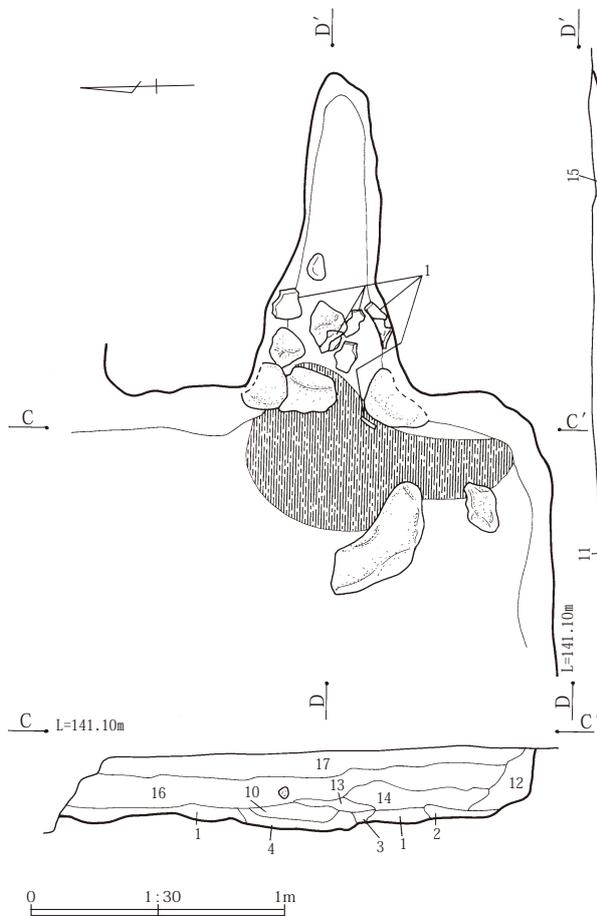
第116図 万蔵寺廻り遺跡 V区4号住居出土遺物



第115図 万蔵寺廻り遺跡 V区4号住居

V区4号住居土層観察所見

- 1 黒褐色砂質土 炭化物粒子入る。縮まり中。粘性弱。
- 2 灰褐色砂質土 (粒子細かい)。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山砂混じる。縮まり中。粘性弱。
- 3 にぶい黄橙色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。地山砂混じる。縮まりやや強。粘性弱。
- 4 にぶい黄橙色砂質土 径40mm以下の大粒の二ツ岳軽石粒含む。(3層より少ない)。3層土ブロックが少量入る。縮まり中。粘性弱。
- 5 にぶい黄橙色砂質土 径20mm大の二ツ岳軽石粒含む。明黄褐色小ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 6 にぶい黄橙色土 砂質に近いシルト質土。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。明黄褐色土粒子が少量入る。上面に酸化鉄が凝縮している。縮まりやや強。粘性やや弱。
- 7 暗褐色砂質土 径40mm以下の大粒の二ツ岳軽石粒含む。地山砂、灰黄褐色土が混じる。縮まり弱。粘性弱。
- 8 灰黄褐色砂質土 径20mm大の二ツ岳軽石粒含む。灰黄褐色土小ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。



V区4号住居竈土層観察所見

- 1 にぶい黄橙色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石含む。地山砂混じる。締まりやや強。粘性弱。
- 2 にぶい黄橙色砂質土 径5mm大の二ツ岳軽石含む。黒褐色土ブロック入る。
- 3 黒褐色砂質土 明黄褐色砂土混じる。締まり中。粘性弱。
- 4 にぶい黄橙色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石含む。明黄褐色土小ブロック入る。締まり中。粘性弱。
- 5 にぶい黄橙色砂質土 径5mm大の二ツ岳軽石含む。焼土粒子少量入る。焼土化(赤化)した部分あり。締まり中。粘性弱。
- 6 褐灰色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石含む。焼土粒子少量入る。地山砂混じる。締まり中。粘性弱。
- 7 灰黄褐色砂質土 径30mm大の二ツ岳軽石含む。焼土粒子入る。締まり中。粘性弱。
- 8 黒褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石含む。地山砂小ブロック入る。締まり中。粘性弱。
- 9 灰黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石及び地山砂入る。締まりやや強。粘性弱。灰層。
- 10 にぶい黄褐色シルト質土。径5mm大の二ツ岳軽石含む。にぶい黄褐色シルト質土ブロックが入る。締まりやや強。粘性弱。
- 11 黒褐色砂質土 径5mm大の二ツ岳軽石含む。地山砂混じる。締まり中。粘性弱。
- 12 黒褐色土 灰を多く含む。
- 13 黒褐色土 シルトに近い砂質土。径5mm大の二ツ岳軽石含む。にぶい黄褐色土ブロックが入る。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 14 褐灰色砂質土 全体的に酸化鉄が凝集している。径10mm大の二ツ岳軽石含む。締まりやや強。粘性弱。
- 15 灰黄褐色砂質土 径30mm大の二ツ岳軽石含む。明褐色土の砂が混じる。締まり中。粘性弱。
- 16 褐灰色砂質土 径30mm大の二ツ岳軽石含む。酸化鉄が凝集している部分がある。灰黄褐色土の砂が混じる。締まりやや強。粘性弱。
- 17 褐灰色砂質土 径30mm大の二ツ岳軽石多く含む。部分的に酸化鉄凝集。砂粒含む。締まりやや強。粘性弱。

第117図 万蔵寺廻り遺跡 V区4号住居竈

V区5号住居 (第118～121図 PL.46・47)

位置 X=49.294/Y=-71.400 V区のほぼ中央に位置し、標高140.95～141.00mの緩い斜面上に立地している。北側には2号掘立柱建物、南側には1号溝が隣接する。

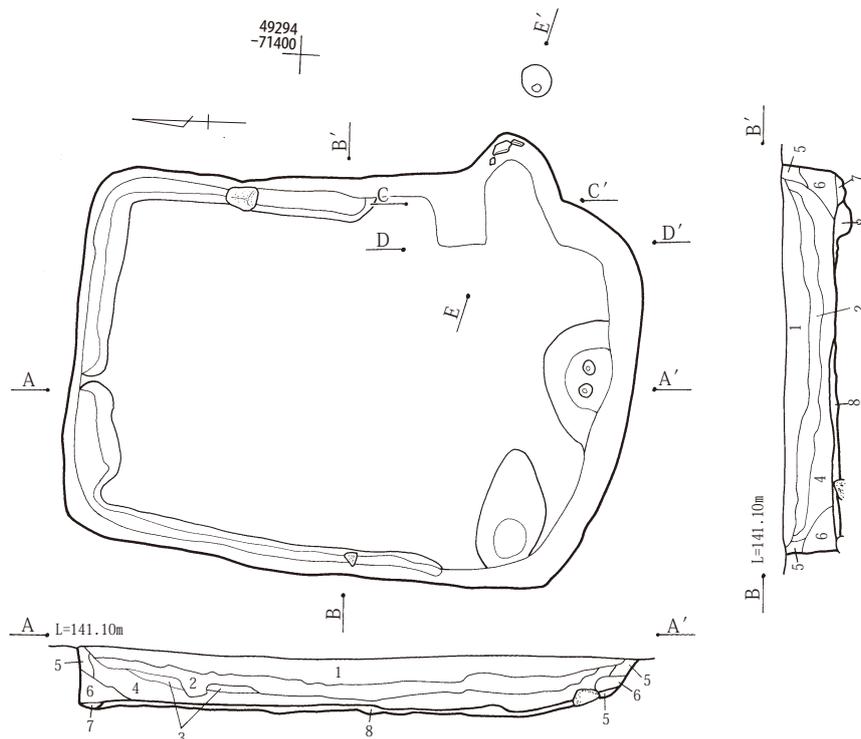
形態 南北方向に長軸をおく長方形を基本とするが、南壁は丸みを帯び、南東と南西の両隅は丸みを持って屈曲している。長軸方位はN-5°-E。

規模 長軸長4.38m、短軸長3.19m。

床 僅かな起伏はあるが、ほぼ平坦に作られている。南壁際のみがやや深く掘り込まれて、この部分は褐色土、灰黄褐色土を床面構成土としている。東壁の竈左手に当たる部分から、西壁の南端近くまで、「コ」の字状に、幅10～20cm、深さ10cmの壁周溝が掘られている。南西隅には長径90cm、深さ15cm楕円形土坑がある。南壁中央には浅い半円形掘り込みの中に小ピット2基が並列する構造が見られる。

壁 南壁以外はほぼ垂直に立ち上がる。平面的にも歪みの見られる南壁は、斜め上方へと立ち上がっている。最大壁高42cm。

竈 東壁南端近くを東側に壁外に掘り込んで構築している。燃烧部は壁内にあり、一段深く掘り込んでから煙道へと連続する。燃烧部の奥から東側に向けて煙道の天井部が残っている。幅、高さともに20cm、全長55cmにわたるものである。煙道は斜め上方へ緩やかに立ち上がり、末端でやや深く掘り込んでから上方へと立ち上がり、煙道口は円形のピット状に開口する。焚き口については、両脇の地山は掘り残され、壁内には僅かな張り出しが認められる。右袖に当たる位置には袖石据え方と思われる小ピットが掘られるが、袖石は残っていない。壁内張り出しに暗褐色土を主とする竈構築土と袖石を付け足して両袖を形成していたものと思われる。煙道、袖など竈本体の残存状態は比較的良好だが、竈からの出



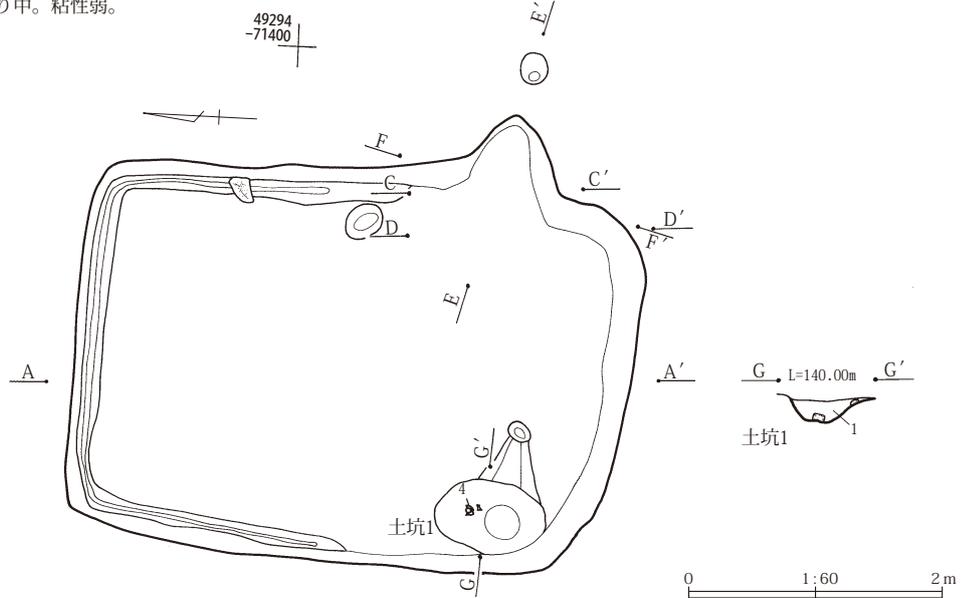
V区5号住居土層観察所見

- 1 灰黄褐色砂質土 径40mm以下の大粒の二ツ岳軽石含む。炭化物粒子が少量入る。黒褐色土ブロックが入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 2 黒褐色砂質土 径20mm大の二ツ岳軽石含む。炭化物がやや多く入る。縮まり中。粘性弱。
- 3 暗褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石含む。褐色土砂質に近いブロックが入る。縮まり中、粘性弱。
- 4 にぶい黄褐色土 径30mm大の二ツ岳軽石含む。炭化物粒子が入る。縮まり中。粘性弱。
- 5 灰黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石含む。黒褐色土の砂が混じる。縮まり中。粘性弱。

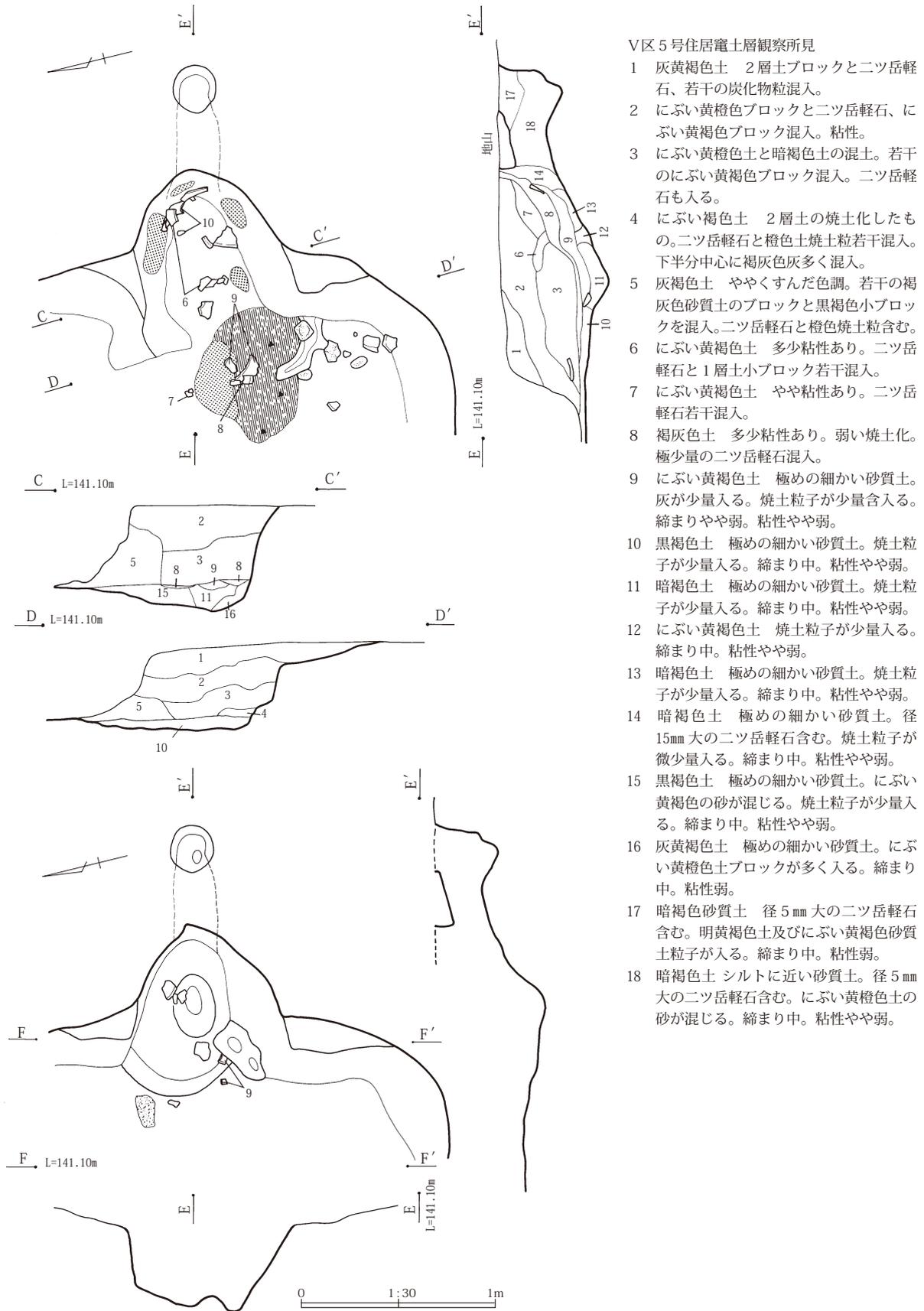
- 6 暗褐色砂質土 径20mm大の二ツ岳軽石、炭化物含む。
- 7 灰黄褐色砂質土 二ツ岳軽石(0~40mm)含む。にぶい黄褐色土の小ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 8 灰黄褐色砂質土 焼土粒子少量入る。縮まり中。粘性弱。径40mm以下の大粒の二ツ岳軽石含む。にぶい黄褐色土の砂質土ブロックが入る。縮まりやや強。粘性弱。

V区5号住居内土坑1土層観察所見

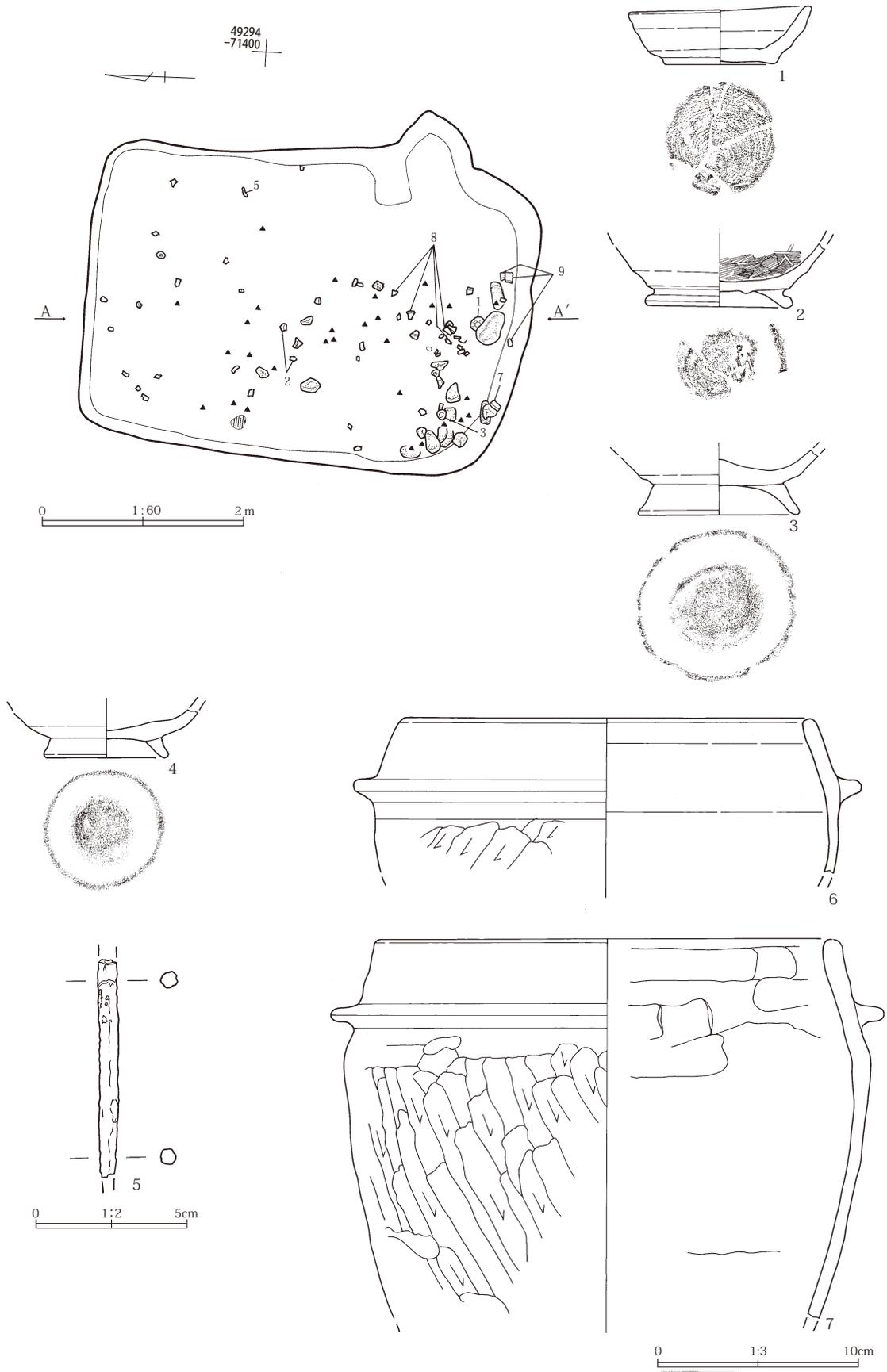
- 1 にぶい黄褐色砂質土 3cm程の礫、二ツ岳軽石、地山川砂及び若干の炭化物、焼土粒混入。



第118図 万蔵寺廻り遺跡 V区5号住居・同掘り方



第119図 万蔵寺廻り遺跡 V区5号住居竈・同掘り方



第120図 万蔵寺廻り遺跡 V区5号住居遺物分布・出土遺物(1)

第4章 遺構と遺物

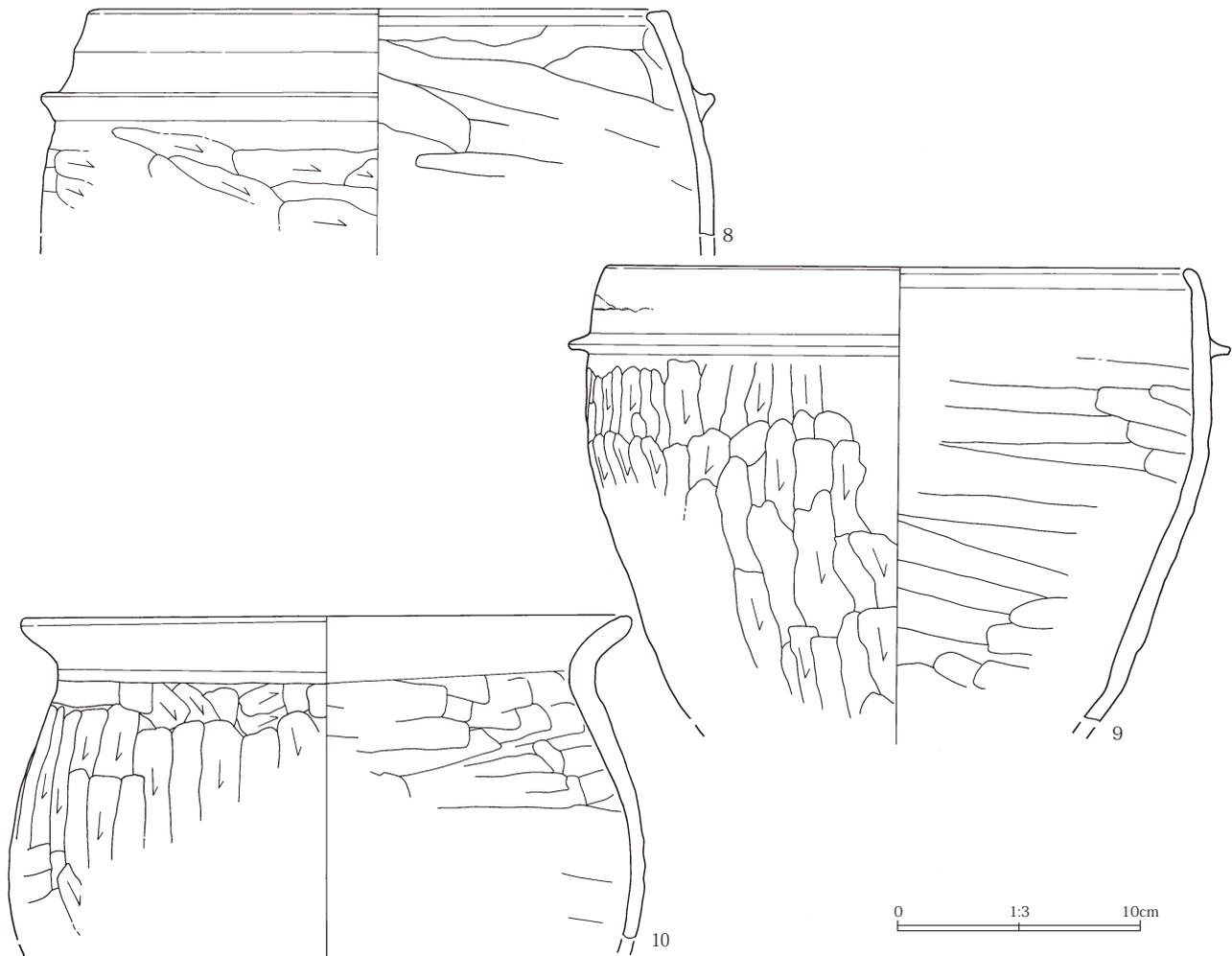
土遺物は土釜、羽釜の土器小片が出土するのみで、以下に述べる住居全体の遺物出土状況から見れば寧ろ少ないと言える。主軸方位はN-100°-E。

遺物 5号住居における遺物は、土器片が住居全体に散らばった状態で出土している。1の須恵器坏を除いて完形品には乏しいのだが、特に南西部、さらには南壁際に土器や川原石などが集中する傾向がある。須恵器坏（1）と足高高台埴（3）が床面から出土している。床からはやや浮いた状態にあるが、埴（2）と羽釜（8・9）が覆土中から、南西の住居内土坑からは埴（4）も出土している。竈周辺からの出土遺物は比較的少ないが、燃烧部内から羽釜（6）と土釜（10）、焚き口からは羽釜（7）が出土しているが、いずれも口縁部破片で、底部まで残

るものはない。土器の他、北東壁際からは鉄製紡錘車の紡茎（5）が出土している。鍛造品で、断面はほぼ円形である。

炭化種実は床南西部を中心に、イネ、ヒエ、アワ、オオムギを主とするムギ類が得られている。竈からもムギ類が多く、中でもコムギが最多となる。イネ、ヒエ、アワも得られている。

所見 比較的出土遺物に恵まれ、V区の住居では出土遺物数が最も多かった。出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。竈の位置や形状も同時期の住居の特徴を示している。



第121図 万蔵寺廻り遺跡 V区5号住居出土遺物（2）

V区6号住居 (第122・123図 PL.47・48)

位置 X=49.280/Y=-71.403 V区中央付近に位置し、標高140.90～140.95mの緩斜面上に立地する。

形態 西壁の一部を75・76号土坑に切られる。南北に長軸をおく横長長方形を基本とするが、北東と南西の両隅部は丸味を帯びている。長軸方位はN-12°-Wを示す。

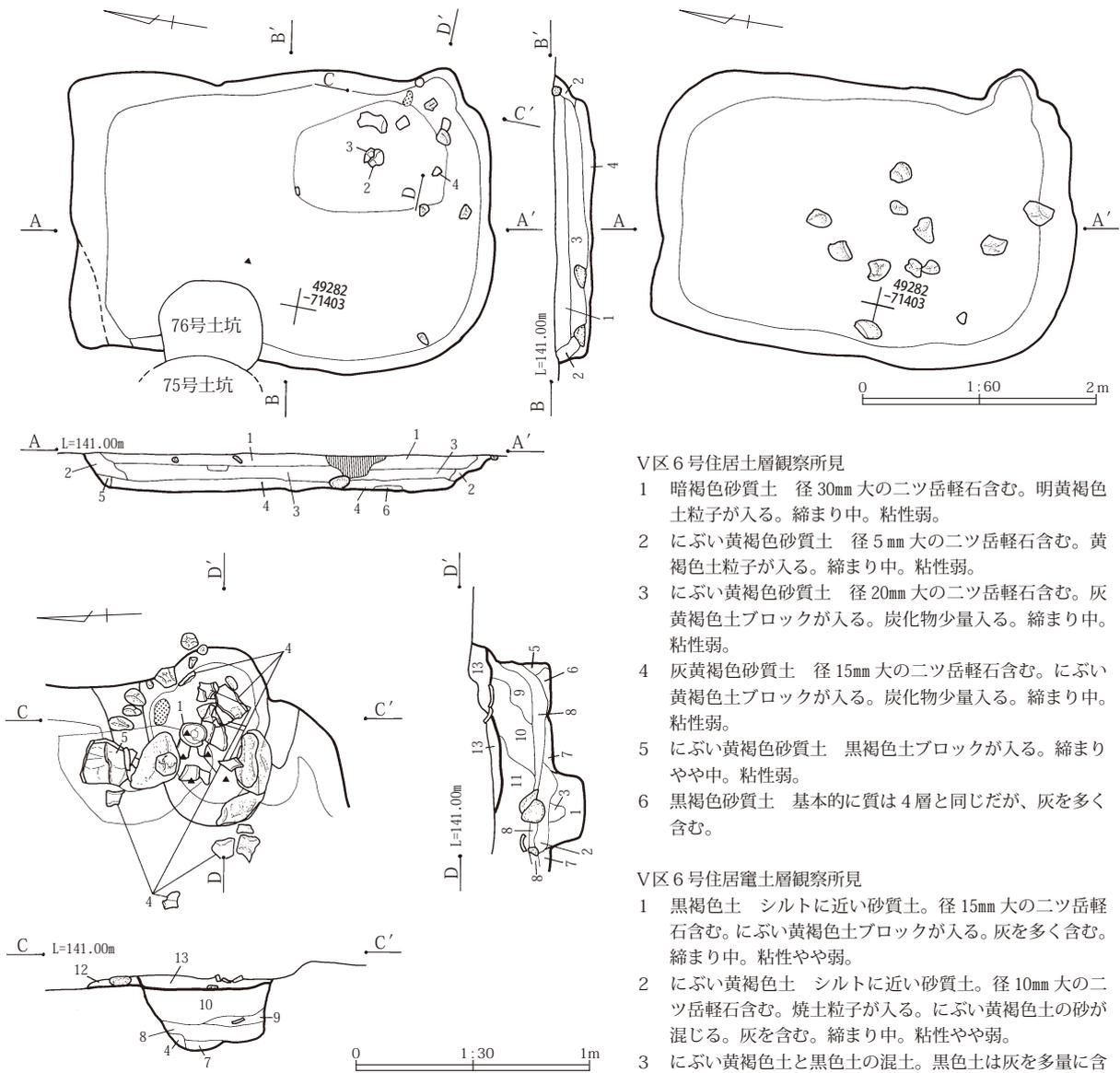
規模 長軸長3.58m、短軸長2.62m。

床 地山をほぼ平坦に掘り込むが、所々に僅かな起伏が見られる。にぶい黄褐色土で埋めて踏み固め、床面とする。壁周溝や柱穴、貯蔵穴等の施設は認め

られない。

壁 斜め上方へ大きく開きながら立ち上がる。最大壁高32cm。

竈 東壁南端近くを東側に掘り込んで構築する。燃烧部はほぼ壁内にあり、壁外には燃烧部先端が僅かに突出する程度である。燃烧部から煙道へは急角度に立ち上がり、連続していたものと思われる。燃烧部から焚き口、両袖を含む比較的広い範囲を一段深く掘り込んでおり、さらに焚き口前には長径40cm、深さ13cmの円形ピットが掘られている。焚き口左脇と中央、燃烧部奥には、構造物や支脚の据え方と思



V区6号住居土層観察所見

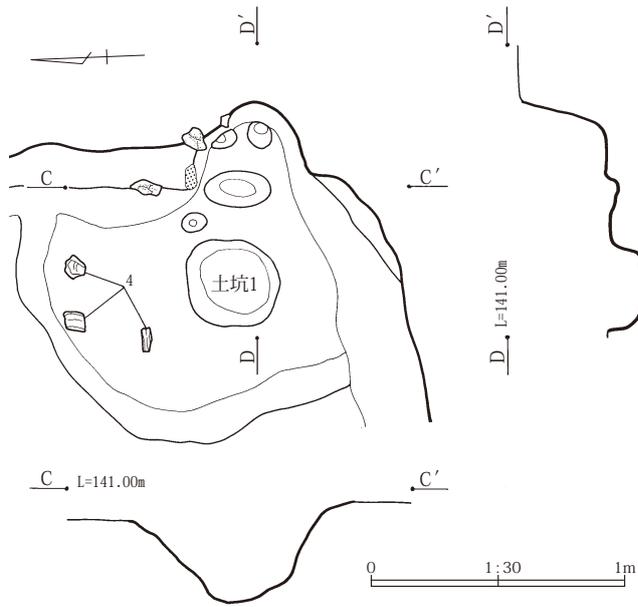
- 1 暗褐色砂質土 径30mm大の二ツ岳軽石含む。明黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 径5mm大の二ツ岳軽石含む。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 径20mm大の二ツ岳軽石含む。灰黄褐色土ブロックが入る。炭化物少量入る。締まり中。粘性弱。
- 4 灰黄褐色砂質土 径15mm大の二ツ岳軽石含む。にぶい黄褐色土ブロックが入る。炭化物少量入る。締まり中。粘性弱。
- 5 にぶい黄褐色砂質土 黒褐色土ブロックが入る。締まりやや中。粘性弱。
- 6 黒褐色砂質土 基本的に質は4層と同じだが、灰を多く含む。

V区6号住居竈土層観察所見

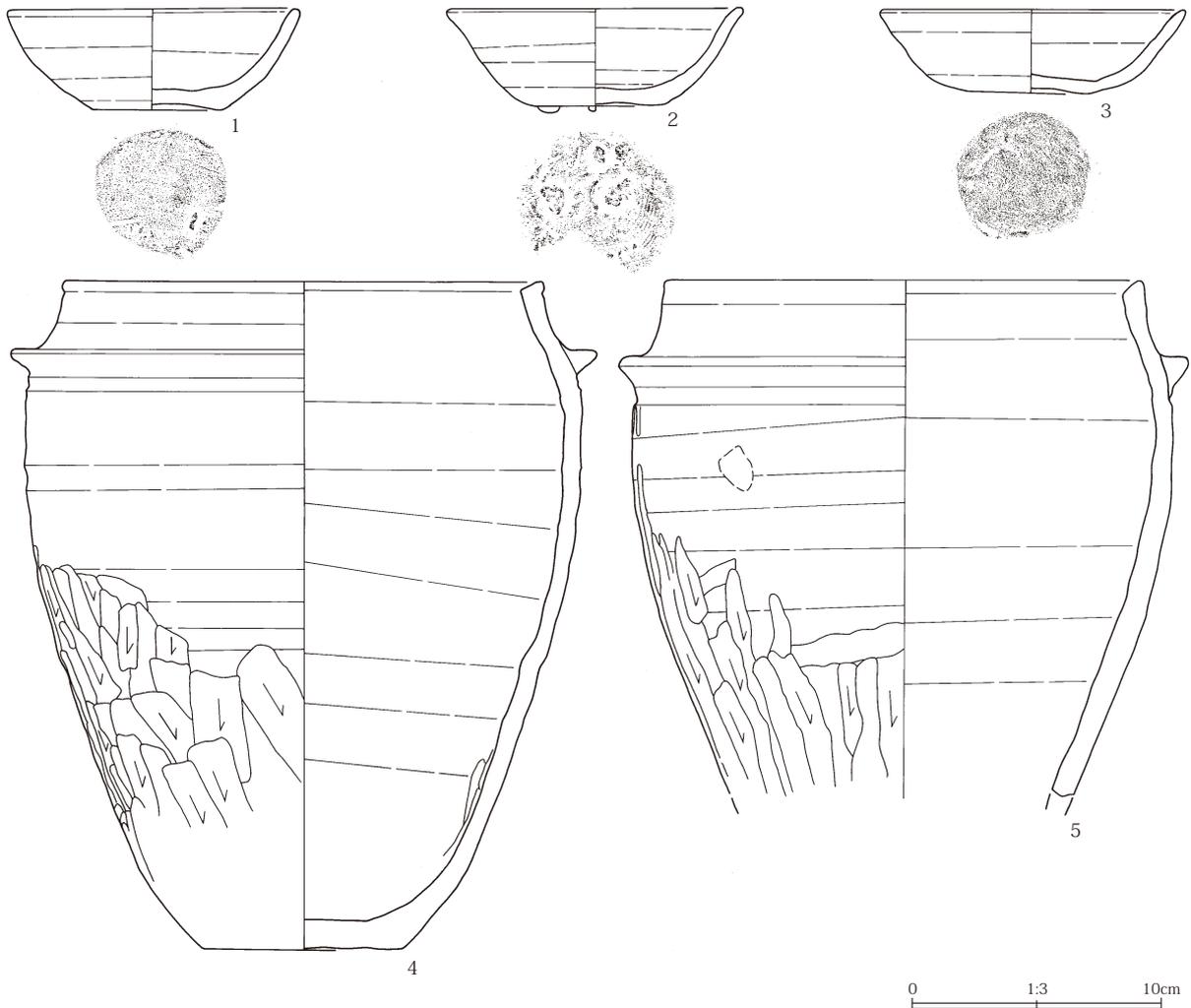
- 1 黒褐色土 シルトに近い砂質土。径15mm大の二ツ岳軽石含む。にぶい黄褐色土ブロックが入る。灰を多く含む。締まり中。粘性やや弱。
- 2 にぶい黄褐色土 シルトに近い砂質土。径10mm大の二ツ岳軽石含む。焼土粒子が入る。にぶい黄褐色土の砂が混じる。灰を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 3 にぶい黄褐色土と黒色土の混土。黒色土は灰を多量に含む。径10mm大の二ツ岳軽石含む。締まり中。粘性やや弱。

第122図 万蔵寺廻り遺跡 V区6号住居・礫の分布・竈

第4章 遺構と遺物



- 4 にぶい黄褐色砂質土 地山の砂に近い（やや地山よりも粒子が細かい）。
- 5 黒褐色土 シルトに近い砂質土。灰及び炭化物を含む。締まり中。粘性弱。
- 6 にぶい黄褐色砂質土 地山の砂に近い（やや地山よりも粒子が細かい）。
- 7 黒褐色土 シルトに近い砂質土。径15mm大の二ツ岳軽石含む。焼土粒子及び灰が含まれる。締まり中。粘性やや弱。
- 8 灰黄褐色土 シルトに近い砂質土。炭化物及び焼土粒子少量入る。締まり中。粘性やや弱。
- 9 暗褐色土 シルトに近い砂質土。焼土粒子少量入る。締まり中。粘性弱。
- 10 にぶい黄褐色土 シルトに近い砂質土。径15mm大の二ツ岳軽石含む。焼土粒子少量入る。締まり中。粘性弱。
- 11 にぶい黄褐色砂質土 径20mm大の二ツ岳軽石含む。にぶい黄褐色土ブロックが入る。炭化物少量入る。締まり中。粘性弱。
- 12 にぶい黄褐色土 やや締まりあり。若干の二ツ岳軽石と礫（径5cm以下）混入。
- 13 褐色土 やや粘性あり。明赤褐色焼土ブロック僅かに含む。二ツ岳軽石とにぶい黄褐色土（粘性ややあり）の小ブロック含む。



第123図 万蔵寺廻り遺跡 V区6号住居竈掘り方・出土遺物

われる小ピットが並ぶが整った配列ではない。焚き口の両脇には地山を掘り残した小さな袖状の突出部が見られる。この突出部や壁面内側に石を貼り付けて、両袖を構築している。主軸方位はN-95°-E。

遺物 竈燃焼部底面に密着して須恵器坏（1）と羽釜（4）が出土し、使用面下からも羽釜（5）が出土している。羽釜は竈で使用されていたというより構造の一端を担っていたものようである。覆土中からは坏（2・3）が出土している。床及び竈から炭化種実が得られている。

床面の土壌からはイネ、ムギ類、ヒエが主に得られている。北西部の土壌ではササゲ属とシソ属、南東部ではマメ科も見られる。竈内の灰層からはイネ、ムギ類、キビ、タデ科、ササゲ属、マメ科、シソ属が得られている。

所見 遺物から10世紀後半の住居と考えられる。

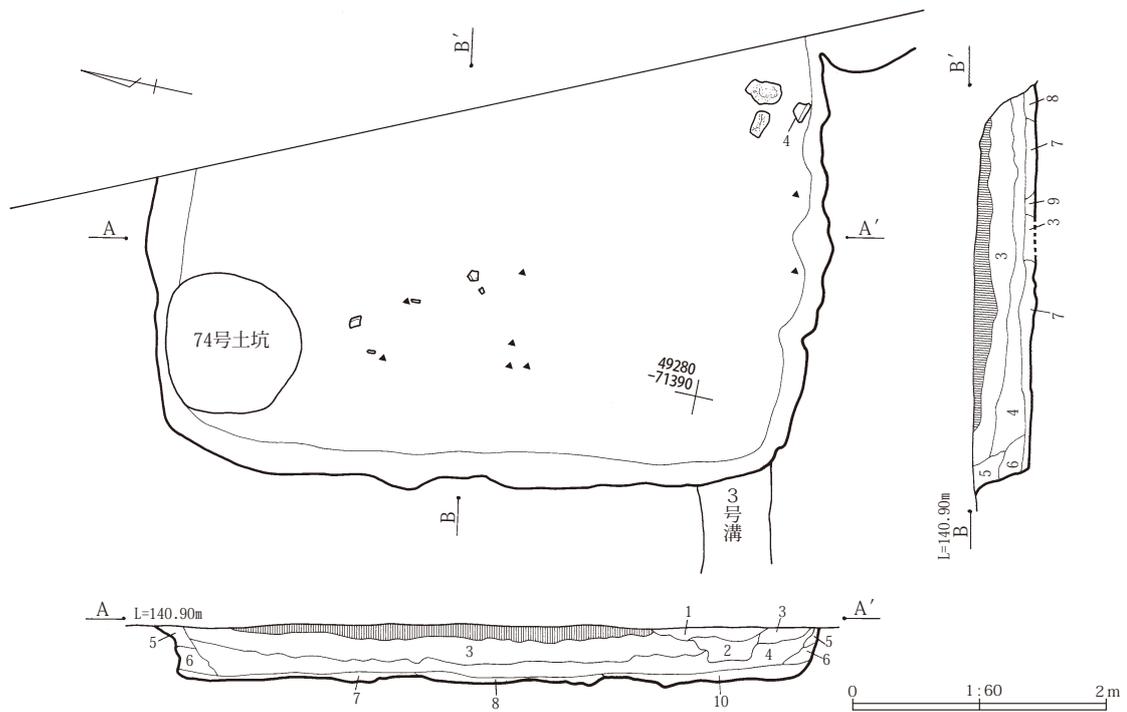
V区7号住居（第124・125図 PL.48）

位置 X=49.285/Y=-71.390 V区南東に位置し、標高140.85mの緩斜面上に立地する。住居東側1/3が調査区域外となっている。北西隅の覆土を74号土坑が、南西隅の壁を3号溝が切る。南北に長軸をおく長方形と推定され、長軸方位はN-10°-W。

規模 長軸長が5.21m、残存短軸長3.48m。

床 全体に緩やかな起伏が見られるが、ほぼ平坦に作られる。底面の起伏を、小礫が混じる粘質の黄褐色土によって埋め、床面とする。壁周溝、柱穴は認められない。

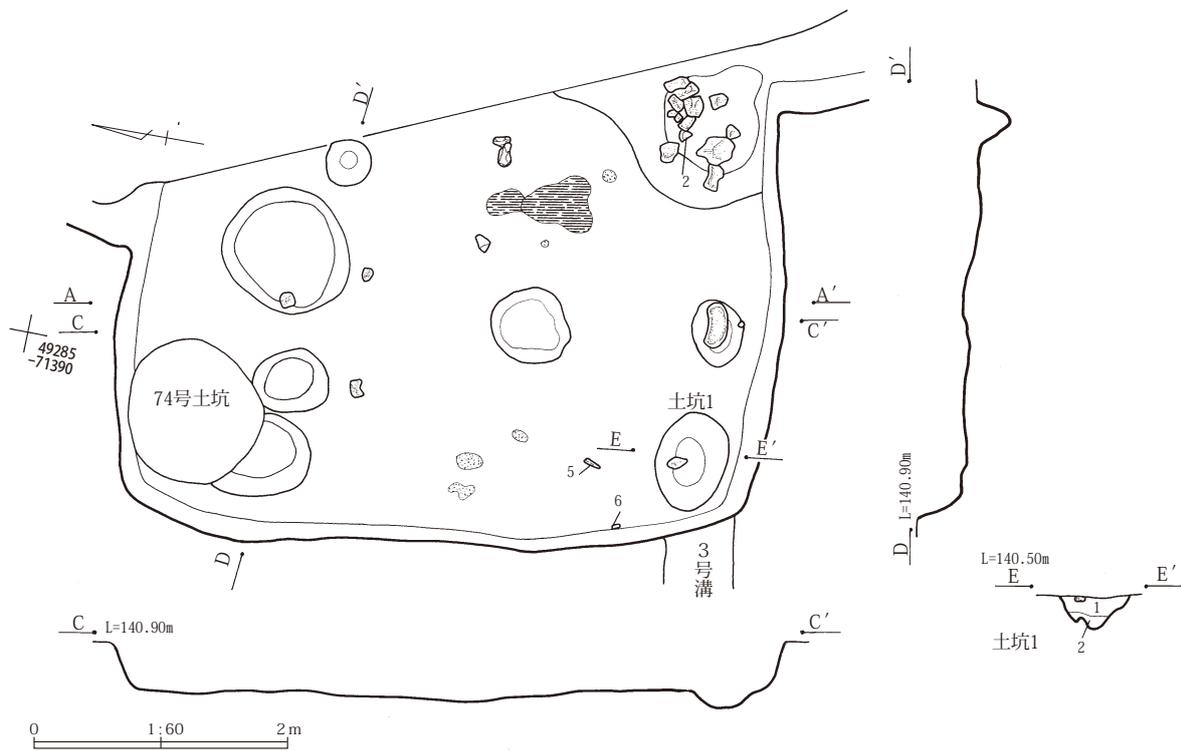
壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高は50cm。



V区7号住居土層観察所見

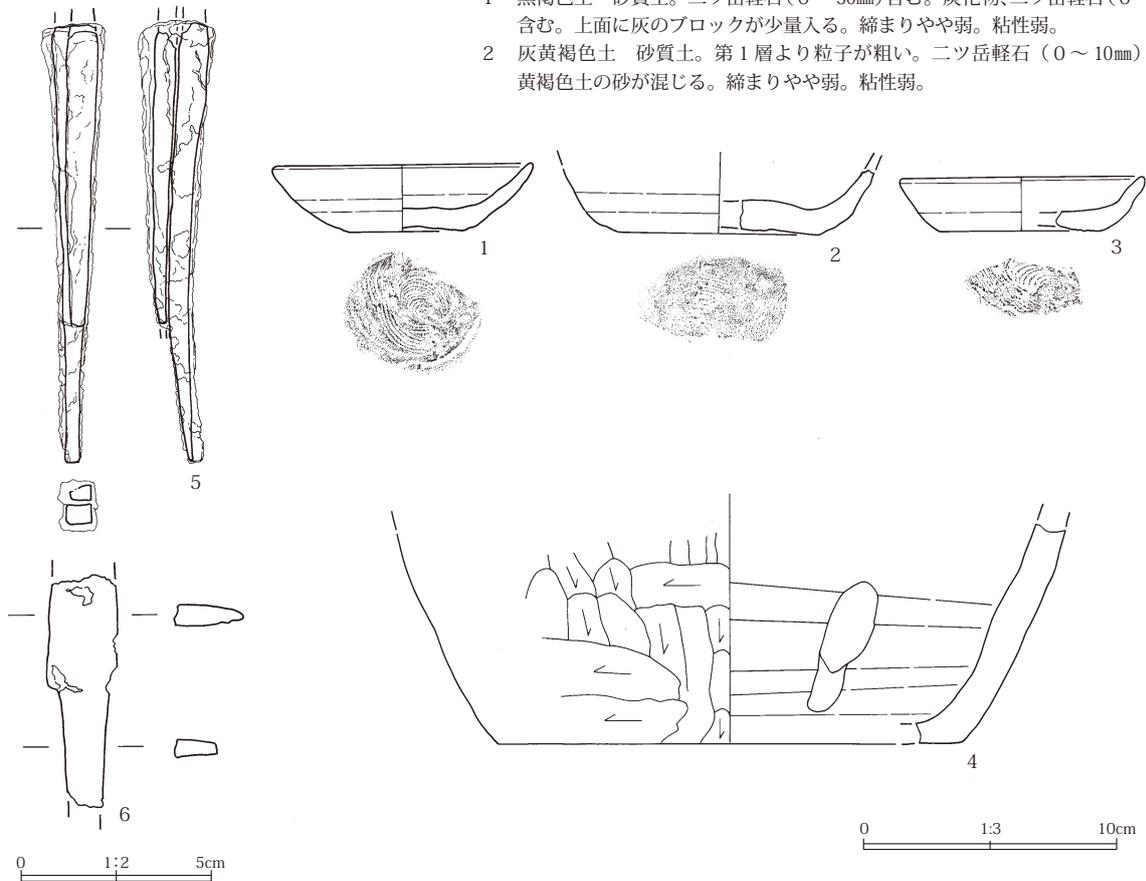
- | | |
|---|---|
| <p>1 にぶい褐色土 色調やや暗い。少量の軽石含み、砂質だが粘性も見られる。</p> <p>2 3層と黒褐色砂質土の入るブロック混土。</p> <p>3 黒褐色土 砂質土。二ツ岳軽石（0～30mm）含む。にぶい黄褐色土砂質土粒子が少量入る。締まり中。粘性弱。</p> <p>4 にぶい黄褐色土 砂質土。二ツ岳軽石（0～20mm）含む。黄褐色砂質土粒子が少量入る。締まり中。粘性弱。</p> <p>5 暗褐色土 砂質土。二ツ岳軽石（0～15mm）含む。明黄褐色土砂粒が混じる。締まり中。粘性弱。</p> | <p>6 にぶい黄褐色土 砂質土。第4層より極めが細かい。二ツ岳軽石（0～10mm）含む。黄褐色砂質土粒子が入る。締まり中。粘性弱。</p> <p>7 にぶい赤褐色砂質土 二ツ岳軽石と多量の地山細砂、川砂混入。明黄褐色土ローム小ブロック僅かに混入。</p> <p>8 にぶい黄褐色土 粘性あり。二ツ岳軽石、礫混入。</p> <p>9 にぶい黄褐色土と黒褐色土ブロックの混土。二ツ岳軽石混入。</p> <p>10 にぶい褐色土 色調やや暗い。少量の二ツ岳軽石含み、砂質だが粘性も見られる。</p> |
|---|---|

第124図 万蔵寺廻り遺跡 V区7号住居



V区7号住居内土坑1土層観察所見

- 1 黒褐色土 砂質土。ニツ岳軽石(0~30mm)含む。炭化物、ニツ岳軽石(0~5mm)含む。上面に灰のブロックが少量入る。締まりやや弱。粘性弱。
- 2 灰黄褐色土 砂質土。第1層より粒子が粗い。ニツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土の砂が混じる。締まりやや弱。粘性弱。



第125図 万蔵寺廻り遺跡 V区7号住居掘り方・出土遺物

掘り方 北側に浅い土坑状の落ち込みが並ぶ。南西隅には楕円形の住居内土坑が掘られ、長径80cm、深さ25cm。南東隅には土坑状の落ち込みが確認され、内部からは石が多数出土した。石は損壊した竈構築材の可能性もあり、落ち込みは竈に伴うピットか貯蔵穴とも考えられ、他の住居と同様、東壁南端付近に竈が構築された可能性は高い。

竈 調査範囲には認められない。

遺物 覆土中から須恵器の坏（1～3）、土釜（4）が出土している。土器以外に、南西壁際の床面と掘り方から刀子が1点ずつ出土している。床面から出土した刀子（5）は、全長20cm近い大振りのもので、中央付近から折り返され、錆着した状態で出土した。磨耗した刀子を打直して再利用しようとしたものだろうか。

床面の土壌からは多量の炭化種実が得られた。北東、北西、南東、南西で確認されており、イネ、ムギ類、ヒエ、ササゲ属、マメ科、ダイズの仲間が得られている。

所見 床面からの出土遺物は少ないが、10世紀後半から11世紀にかけての住居と考えられる。

V区8号住居（第126～128図 PL.49）

位置 X=49.265/Y=-71.390 V区南東隅に位置し、南側に向かう標高140.65～140.70mの緩斜面上に立地する。周辺には土坑が多く分布する。

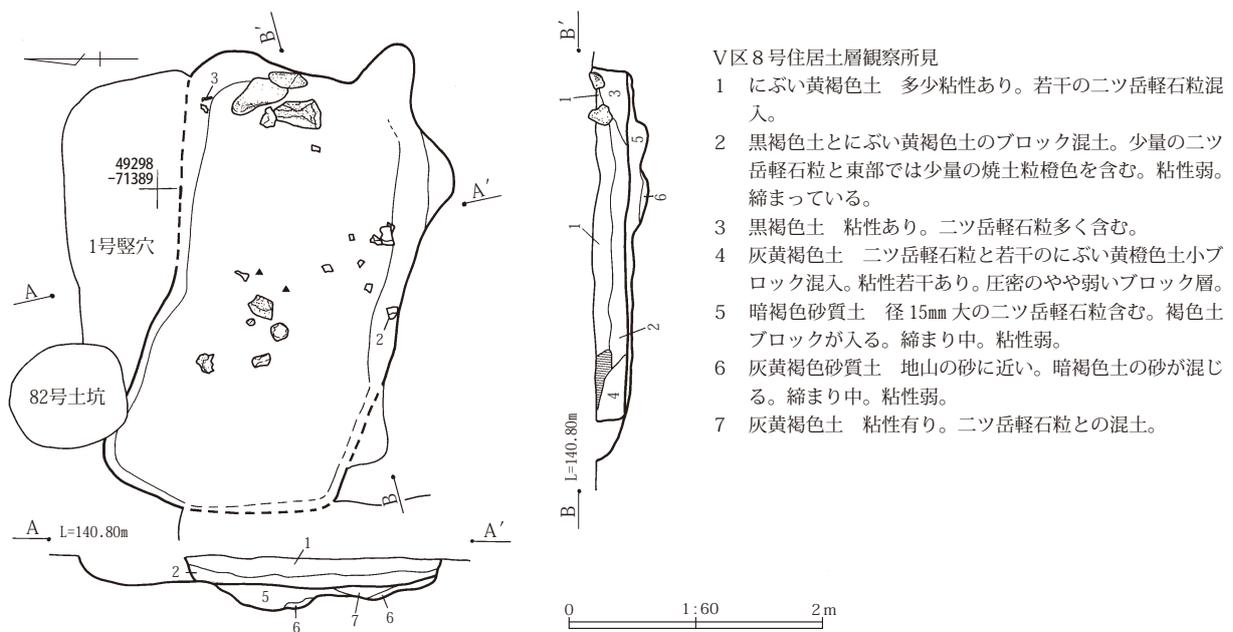
形態 58号土坑に南西隅を、82号土坑に北西隅を切られる。1号竪穴状遺構とは、軸をずらしてほぼ同じ位置で重複しており、本住居が1号竪穴状遺構の南半を切っている。東西に長軸をおく長方形を基本形とするが、南北両壁は中央付近に歪みが見られる。長軸方位はN-70°-W。

規模 長軸長3.60m、短軸長1.86m。

掘り方・床 掘り方では中央付近に東西に並んで2か所、土坑状の大きな掘り込みが見られ、底面は起伏に富む。これを暗褐色土と灰黄褐色土、粘質のにぶい黄褐色土によって埋めて床面を構成している。壁周溝や柱穴等の施設は認められないが、竈右手前に当たる南壁東端近くに不整形の窪みがある。

壁 僅かに開くが、ほぼ垂直に立ち上がる。最大壁高25cm。

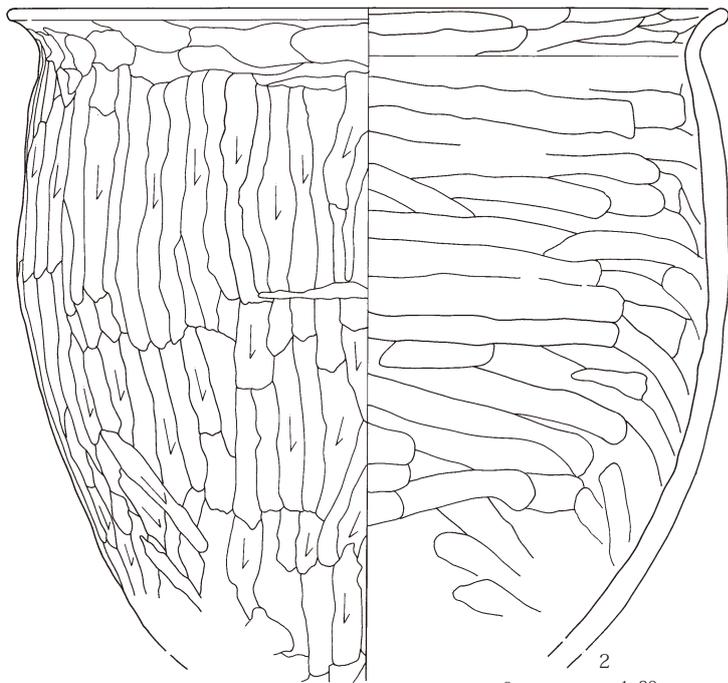
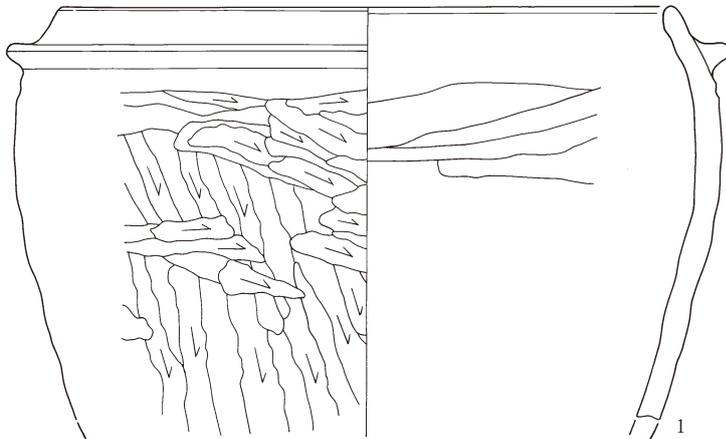
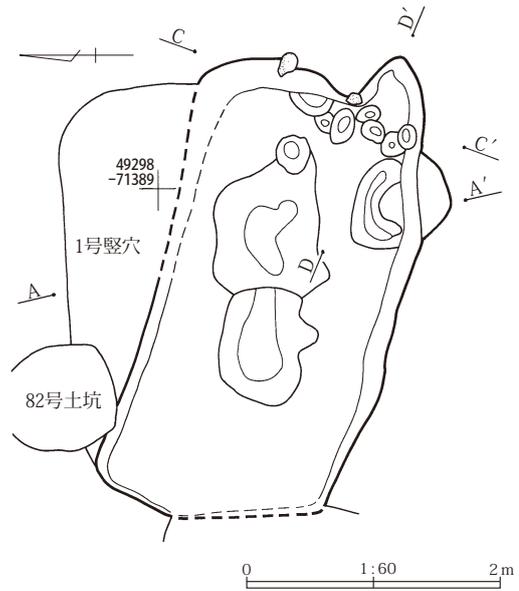
竈 東壁南隅を東側に壁外に掘り込み、構造材の石組みに褐灰色粘質土を貼って構築している。燃烧部



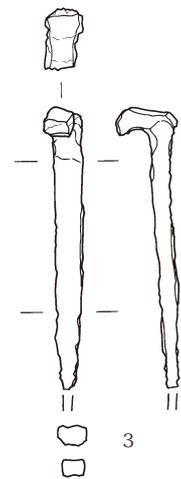
第126図 万蔵寺廻り遺跡 V区8号住居

第4章 遺構と遺物

上半が壁外にあり、焚き口両脇と中央には袖石、支脚の据え方が並ぶ。右袖には30cmほどの袖石が据えられ、左袖は褐灰色土の竈構築土に大小の石を貼り付けて両袖を構築している。燃烧部壁際にも構造材として石が据えられ、燃烧部奥壁には高さ24cm、幅14cm板状石が構造材として据えられていた。煙道は残っていないが、奥壁の石から斜め上方へとやや急角度に立ち上がるものと推定される。竈脇からは40cm大の円礫が数点認められるが、竈構造に関わるものか、別個に投棄されたものかは判断できない。竈自体は、大小の石を構造材に多用した、しっかり

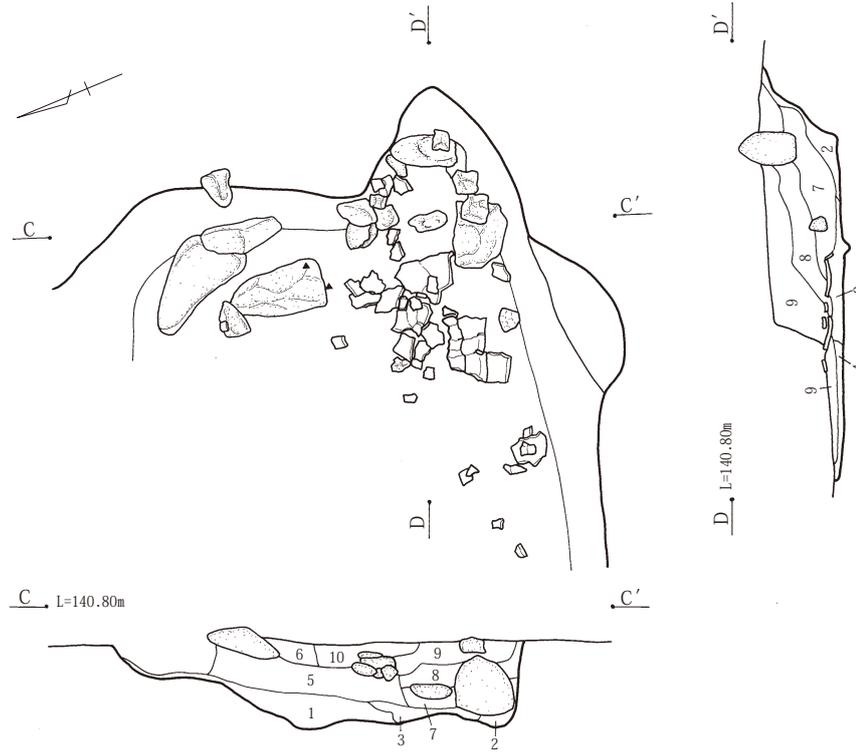


0 1:30 1m



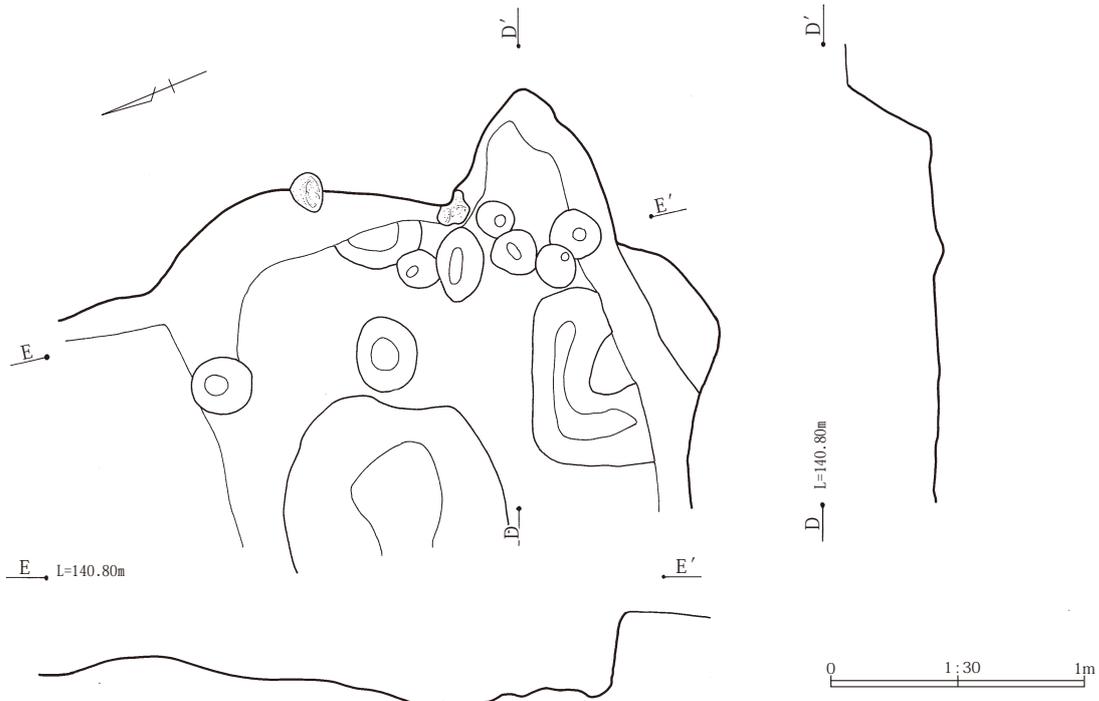
0 1:2 5cm

第127図 万蔵寺廻り遺跡 V区8号住居掘り方・出土遺物



V区8号住居竈土層観察所見

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色砂質土 径15mm大の二ツ岳軽石粒、黄褐色土ブロック含む。縮まり中。粘性弱。</p> <p>2 灰黄褐色砂質土 にぶい黄橙色土ブロック、焼土粒子少量含む。粘性弱。</p> <p>3 黒褐色砂質土 炭化物、焼土粒子含む。上面に灰。粘性弱。</p> <p>4 黒褐色砂質土 にぶい黄橙色土ブロック含む。縮まりやや弱。粘性弱。</p> | <p>5 褐灰色土 黄褐色土ブロック含む。</p> <p>6 灰褐色土 やや砂質。少量のにぶい黄橙色土ブロック、二ツ岳軽石粒含む。</p> <p>7 灰黄褐色土 やや砂質。小礫と二ツ岳軽石粒少量含む。下部に黒色灰少量含む。</p> <p>8 灰黄褐色土 粘性有り。少量の二ツ岳軽石粒含む。</p> <p>9 にぶい黄褐色土 粘性有り。少量の二ツ岳軽石粒含む。</p> <p>10 にぶい黄褐色土 粘性やや強。二ツ岳軽石粒含む。</p> |
|--|---|



第128図 万蔵寺廻り遺跡 V区8号住居竈・同掘り方

第4章 遺構と遺物

とした作りであったと思われる。また、焚き口部には羽釜片、土釜片が密着しており、これも構造に関わるものだろう。主軸方位はN-112°-E。

遺物 竈焚き口部の使用面に密着して羽釜（1）の口縁片と土釜（2）の大型破片が出土している。これらは竈で使用されていたというより、構造材の礫とともに竈構造の一端を担っていたものようである。北東壁際の床面からわずかに浮いて、鉄釘（3）が1点出土している。先端をわずかに欠くものの、ほぼ完形の角折釘で、鍛造品。頭部はほぼ直角に屈曲する。残存長は7.5cmある。

炭化種実は本遺跡中最多であったが、これは住居北半の床面土壌からオオムギ炭化胚乳及び胚乳片が1200点を越える数で出土していることによる。他に、イネ、ムギ類、キビ、ヒエ、アワ、イネ科、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科、シソ属と多様であった。

所見 縦長長方形の平面形はI区1号住居やIV区11号住居と共通する。本遺跡では少数例である。床面からの多数のオオムギの出土は特筆される。羽釜、土釜の特徴から、11世紀前半から中葉の住居と考えられる。

V区9号住居（第129・130図 P L 50）

位置 X=49.280/Y=-71.405 V区南東に位置し、南に向かう140.95mの緩斜面上に立地する。

形態 住居北西隅を77・78号土坑が切る。また、2号溝が住居南側を東西方向に切っている。平面形は南北に長軸をおく長方形を示し、やや南壁が長い。長軸方位はN-7°-W。

規模 長軸長3.64m、短軸長3.34m。

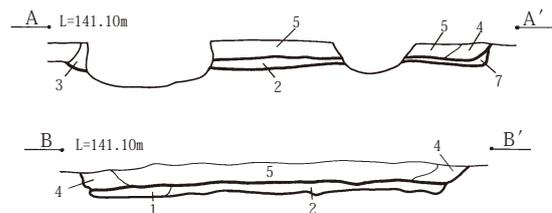
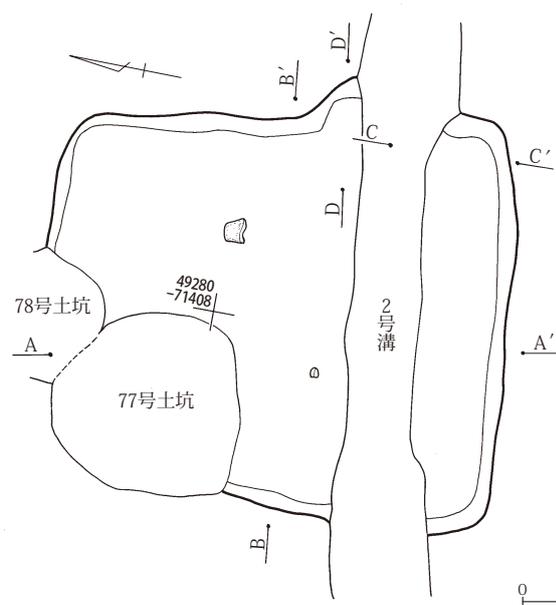
床 緩やかな起伏が見られ、やや西に傾斜する。砂混じりのにぶい黄褐色土を敷いて踏み固め、床面とする。壁周溝、柱穴は認められない。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高は25cm。

竈 東壁の中央やや南寄りを掘り込み、砂質の強い黒褐色土を貼り付けて溝築するものと思われる。東半部が2号溝に切られており、全体像は不明な点が多い。主軸方位はN-86°-E。

遺物 図示可能な遺物は出土していないが、炭化種実が北東床面と床下から出土している。得られた炭化種実はイネ、ムギ類、ヒエがあった。

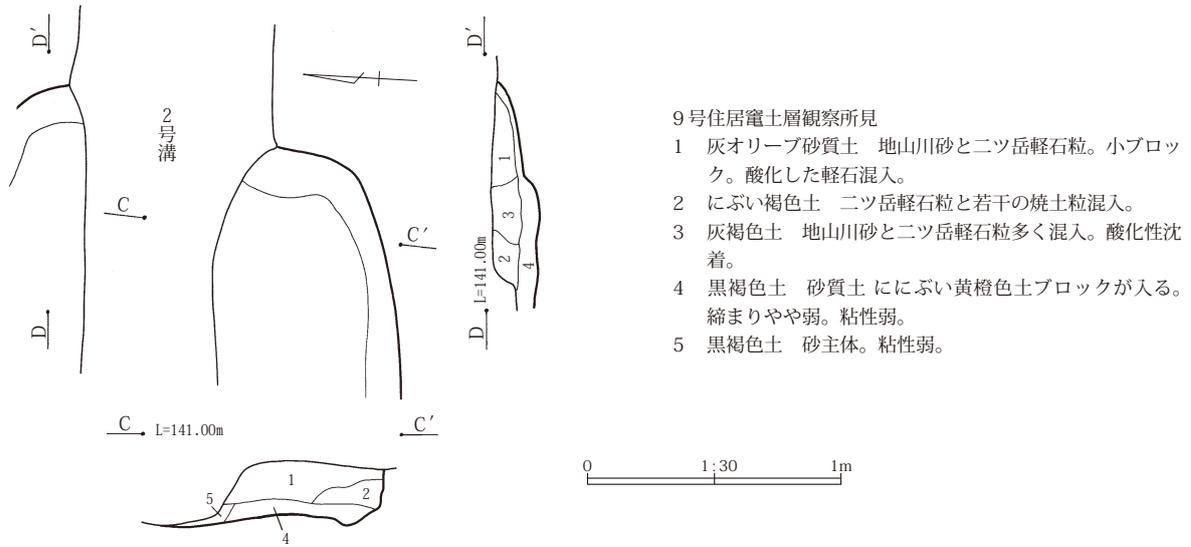
所見 住居の構造、規模は10世紀後半から11世紀にかけての住居とほぼ同じだが、遺物も無く、時期については確定できない。



V区9号住居土層観察所見

- 1 灰黄褐色砂質土 径15mm大の二ツ岳軽石粒含む。小ブロック含む。締まり中。粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。黄褐色土の砂が混じる。締まり中。粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 径15mm大の二ツ岳軽石粒含む。ブロック少量含む。締まり中。粘性弱。
- 4 灰黄褐色砂質土 砂質性5層より強い。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。褐色砂質土ブロックが少量入る。締まり中。粘性弱。
- 5 暗褐色砂質土 径15mm大の二ツ岳軽石粒含む。ブロック少量含む。締まり中。粘性弱。

第129図 万蔵寺廻り遺跡 V区9号住居



第130図 万蔵寺廻り遺跡 V区9号住居竈

V区10号住居 (第131・132図 PL.50・51)

位置 10号住居は9号住居の西、V区の南西に位置し、西側は調査区域外となる。9号住居同様、南に向かう緩斜面上に立地する。

形態 南北に長軸をおく長方形を基本形とするが、北壁に若干歪みが見られる。長軸方位はN-2°-W。

規模 長軸長が3.13m、短軸長3.03m。

掘り方・床 底面中央は縦2.05m、横1.9mの方形の範囲を一段深く掘り込んでおり、これを地山ブロックの混じるにぶい黄褐色土で埋め、この方形掘り込みを埋めてから同じ土を敷いて床面を構成している。仕上がった床面は方形掘り込みのある中央付近が僅かに窪むが、ほぼ平坦に作られる。壁周溝は認められないが、南北壁際の中央近くには掘り込みを挟むようにして、土坑が掘られている。南壁際の中央やや東寄りには長径45cm、深さ60cm円形の土坑1が、北壁際中央には長径45cm、深さ50cmでやはり円形の土坑2があり、土坑2の縁には周堤状の盛り上がりが見られる。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高23cm。

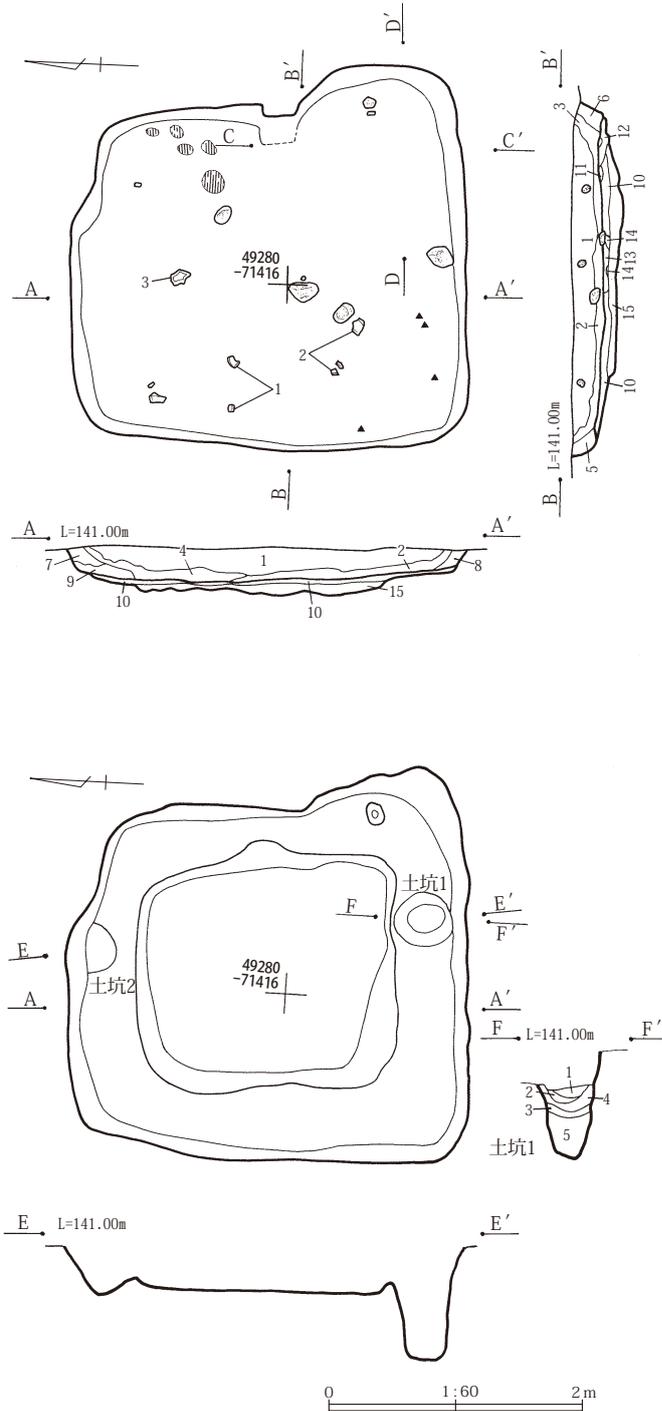
竈 南東隅を壁外に掘り込んで構築する。掘り方は半円形を呈していて、全体構造が崩れていることもあって確実な主軸方向をつかむことができない。燃烧部はほぼ壁外にあり、焚き口両脇に壁内への張り出しは認められない。左袖相当位置には袖石が見ら

れるが、右袖はロームを南壁に貼り付けて構築している。煙道は残っていないが、燃烧部奥は一度段状に立ち上がり、その後煙道へと連続していたものと思われる。燃烧部中央からは石がまとまった状態で出土しており、構築材に用いられたものが崩れたものと思われる。

遺物 覆土中から須恵器の坏(1)と羽釜(2)、及び須恵器甕胴部の破片(3)が出土している。須恵器坏は復元口径11cmほどの小型品。羽釜は紐作り後回転軸轆整形で、鏝は上方に反り、口縁は直線的に切れる。須恵器甕は外面に平行叩き目、内面に青海波状の当て具痕が残っている。

また、床全体と竈、住居内土坑から炭化種実が出土している。床からの出土はオオムギ、コムギの割合が高く、他にイネ、ヒエ、アワ、ダイズの仲間、シソ属が僅かに出土している。竈からはコムギが最も多く、イネ、オオムギの割合も高い。他にキビ、ヒエ、アワ、ホタルイ、マメ科が僅かに見られる。土坑からはイネ、ムギ類、マメ科が出土している。

所見 床面出土の遺物は見られないが、覆土中からの遺物は10世紀後半の特徴を備えている。竈が煙道が欠損し主軸方向を定められないが、おそらく東を向く構造と推測され、10世紀後半頃の住居と考えられる。

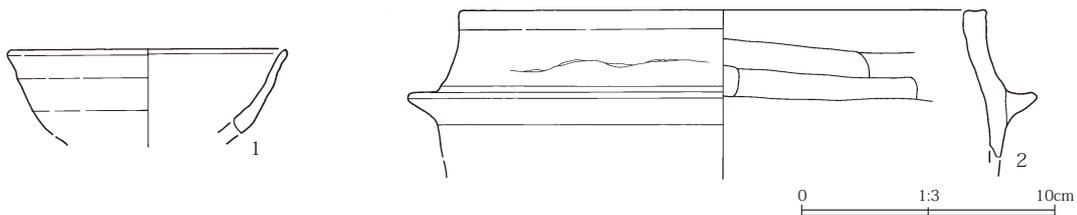


V区10号住居土層観察所見

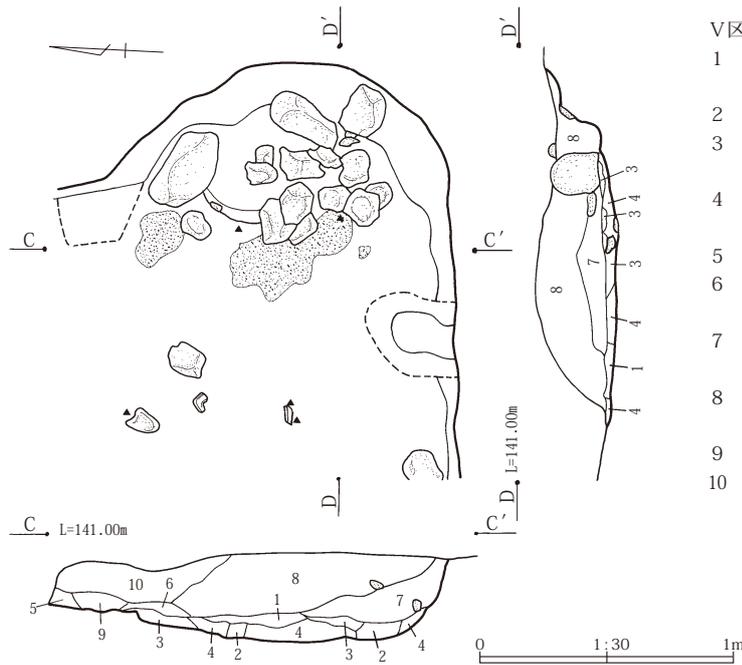
- 1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~20mm) 含む。炭化物 (0~15mm) 含む。赤褐色土粒子及び同ブロック (焼土か) 少量含む。赤褐色砂質土ブロック (0~10mm) 少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 2 黒褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~10mm) 含む。炭化物 (0~5mm) 少量含む。赤褐色土粒子少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 3 褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~10mm) 含む。炭化物 (0~5mm) 少量含む。黄褐色土粒子少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 4 暗褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~20mm) 含む。にぶい黄褐色土シルト質ブロック (0~40mm) 含む。赤褐色土粒子少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 5 黒褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石 (0~15mm) 含む。灰黄褐色砂質土ブロック少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 6 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石 (0~5mm) 少量含む。灰黄褐色砂質土ブロック少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 7 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~5mm) 少量含む。にぶい黄褐色土シルト質ブロック少量。縮まり中。粘性弱。
- 8 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石 (0~5mm) 少量含む。明黄褐色砂質土ブロック及び同粒子少量含む。炭化物少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 9 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石 (0~5mm) 少量含む。にぶい黄褐色土シルト質ブロック多く含む。黄褐色土粒子含む。縮まり中。粘性弱。
- 10 にぶい黄褐色砂質土 黒褐色土ブロック含む。縮まり中。粘性弱。
- 11 黒褐色土 シルトに近い砂質土。焼土粒子極少量含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 12 黒褐色土 灰を多量に含む (ほぼ灰層に近い)。焼土粒子極少量含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 13 黒褐色土 シルトに近い砂質土。灰を含む。にぶい黄褐色土ブロック含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 14 にぶい黄褐色砂質土 質的には掘方地山の土と同じだが、燃焼の影響を受けていると見られる。
- 15 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~20mm) 含む。灰黄褐色砂質土ブロック (地山の土) 含む。縮まりやや強。粘性弱。

V区10号住居内土坑1土層観察所見

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石 (0~20mm) 含む。明黄褐色土ブロックが入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 2 灰黄褐色砂質土 灰が多く混じる。
- 3 暗褐色砂質土 にぶい黄褐色砂土が少量混じる。縮まり中。粘性弱。
- 4 暗褐色砂質土 炭化物少量入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 5 暗褐色砂質土 炭化物やや多く入る。にぶい黄褐色砂質土ブロックが入る。(南側に多い) 縮まりやや弱。粘性弱。

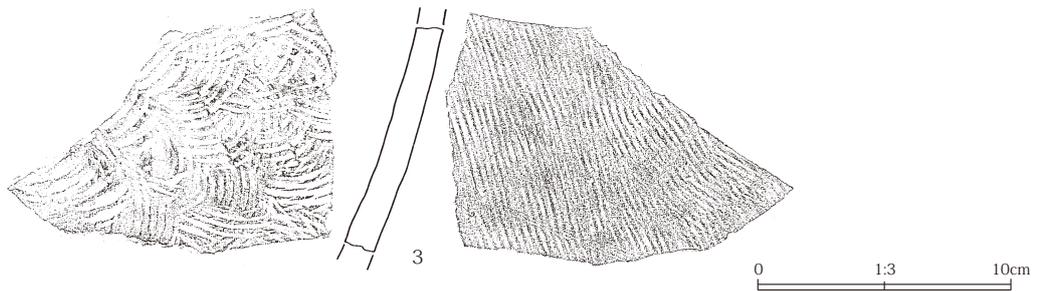


第131図 万蔵寺廻り遺跡 V区10号住居・同掘り方・出土遺物 (1)



V区10号住居竈土層観察所見

- 1 黒褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質土粒が混ざる。締まりやや弱。粘性弱。
- 2 黒褐色砂質土 炭化物少量入る。締まり中。粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 炭化物多く含む。締まり中。粘性弱。
- 4 にぶい黄褐色砂質土 黒褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性弱。
- 5 灰黄褐色土 3層土ブロックと黒色(白色)灰多く混入。
- 6 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石と少量の褐灰色シルト(砂質)小ブロック混入。
- 7 灰色砂質土 微量の炭化物とニツ岳軽石径(4cm以下)混入。
- 8 灰褐色土 少量の明黄褐色土ロームブロック混入。粘性あるがもろい。
- 9 灰黄褐色土 やや粘性あり。混入物は1層と同じ。
- 10 にぶい黄褐色土 明黄褐色土ローム小ブロックと炭化物小ブロック、ニツ岳軽石やや多く混入。



第132図 万蔵寺廻り遺跡 V区10号住居竈・出土遺物(2)

V区11号住居 (第133～135図 PL.51)

位置 X=49.270/Y=-71.400 V区の南中央付近に位置し、標高140.80～140.85mの南向き緩斜面上に立地する。

形態 東西に長軸をおく長方形を基本形とするが、南壁に対して北壁がやや長く、住居北側が全体的に丸みを帯びている。長軸方位はN-90°-W。

規模 長軸長3.72m、短軸長3.09m。

床 僅かに波打つが、ほぼ平坦に作られる。にぶい黄褐色土を敷き、踏み固めて床面とする。壁周溝や柱穴は認められないが、中央やや西寄りの位置に住居内土坑が1基掘られている。長径50cm、深さ40cmの楕円形の平面形を呈するものである。

壁 やや開き気味に立ち上がる。最大壁高26cm。

竈 東壁南端壁に直行する東方向に掘り込み、にぶい黄褐色土を貼って構築している。燃烧部は一段深く掘り込まれてから、煙道へと連続するものと思われる。煙道は削平によるものか残っていない。燃烧部は過半が壁外にあり、中央に支脚据え方かと思われる小ピットが掘られるが、やや奥に過ぎる位置であるように思われる。焚き口両脇に壁内への張り出しは無く、袖は認められない。燃烧部内には円礫、亜角礫が散在しているが、竈の構造をとどめるものではない。主軸方位はN-114°-E。

遺物 床面から須恵器の坏(3)と鉢(1)が1個体ずつ出土している。坏は西壁際から出土したもの

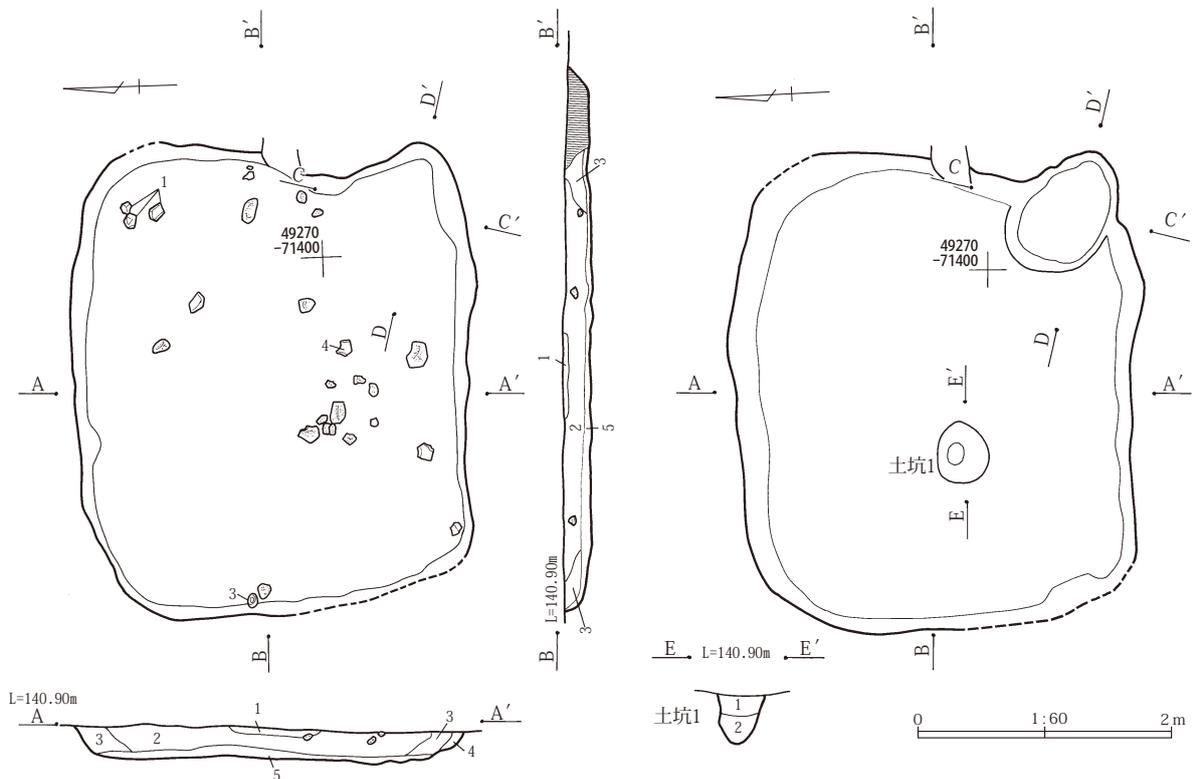
第4章 遺構と遺物

で、口径9.5cm、底径6.1cmで、器高が3.8cmあり、やや深い。鉢は北東部から出土したもので、口径9.4cm、底径8.1cm、器高7.5cm。平底の底部で、胴部はややふくらみを持ち、頸部が括れて口縁は弱く外反する。IV区10号住居出土鉢とはやや趣を異にしている。住居中央の覆土中からは羽釜状の甑の口縁と思われる破片（4）が出土している。復元口径は25cmあり、紐作り後に轆轤で整形している。竈燃焼部からは土釜（2）が出土している。復元口径は26cmあり、ふくらみを持った胴部から短い口縁が強く外反する。

本住居では竈を含めて、住居全体を縦横に8分割し、全体を64区画に区分して土壌サンプルを採取し、

水洗選別を行っている。さらに床面の土壌と床面構成土を分け、竈も灰層上下を区分した。サンプリングできなかった区画もあるため、トータルでは75のサンプリング単位から多様な炭化種実を検出している。詳細は別稿に譲るが、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、アワ、マメ類、モモなど、破片を含めて440点の炭化種実類が出土している。種実の分布上ではモモ核片が顕著な集中を見せているが、他の穀類はさほど目立った偏りを見せていない。また、洗浄を行った土量に比して種実の出土絶対数は多いとは言えない。

所見 出土遺物及び竈の位置等からみて、10世紀後半の住居と考えられる。



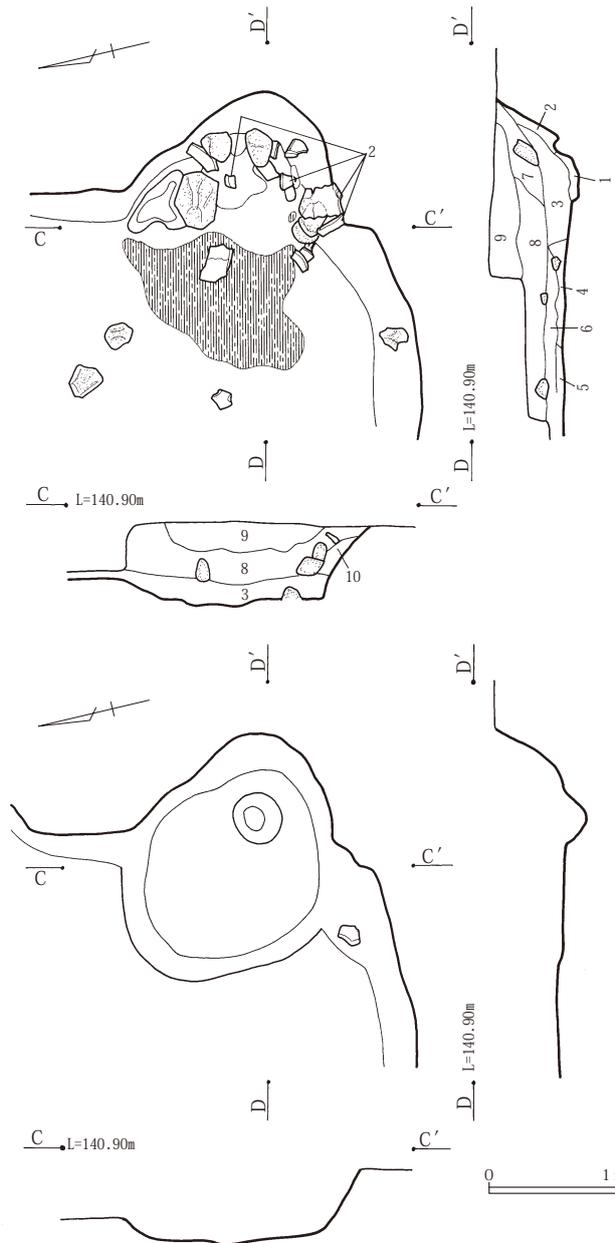
V区11号住居土層観察所見

- 1 にぶい黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。褐色土の砂が混じる。締まり中。粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 径20mm以下の比較的大粒の二ツ岳軽石粒含む。黄褐色土粒子が入る。炭化物少量入る。締まり中。粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。褐色土ブロックが入る。炭化物少量入る。締まり中。粘性弱。
- 4 褐色砂質土 径5mm大の二ツ岳軽石細粒含む。地山の土に似る。
- 5 褐色土と黒褐色土の混土 砂質土。径20mm以下の比較的大粒の二ツ岳軽石粒含む。黄褐色土ブロック及び灰黄褐色土細砂が入る。締まり中。粘性弱。

V区11号住居内土坑1土層観察所見

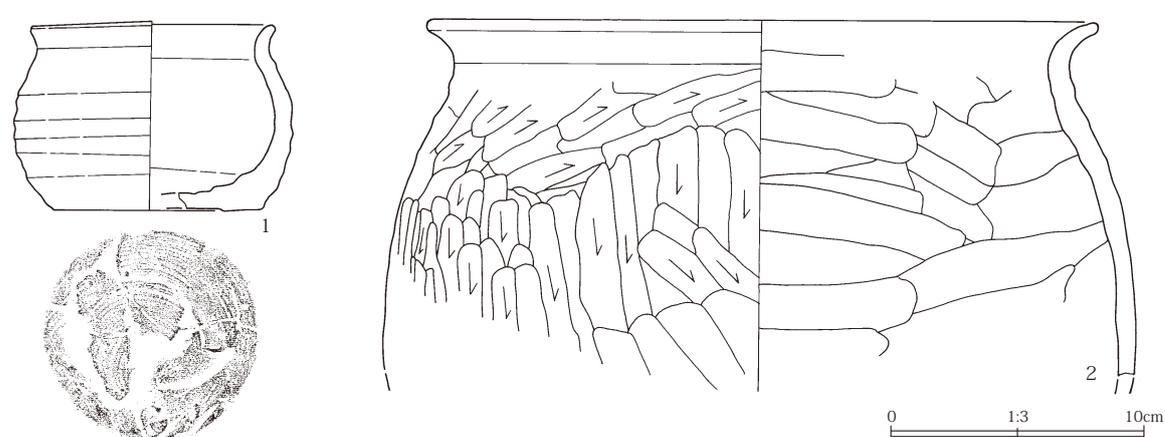
- 1 にぶい黄褐色砂質土 径20mm以下の比較的大粒の二ツ岳軽石粒含む。にぶい黄褐色土ブロックが少量混じる。締まりやや弱。粘性弱。
- 2 灰黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。にぶい黄褐色土地山砂、少量入る。締まりやや弱。粘性弱。

第133図 万蔵寺廻り遺跡 V区11号住居・同掘り方

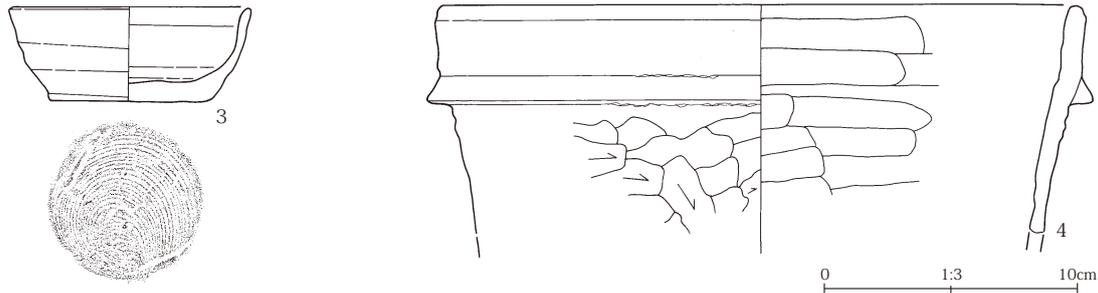


V区11号住居竈土層観察所見

- 1 第3層と第5層の混土層。
- 2 第5層に同じ。
- 3 暗褐色土 シルトに近い砂質土。径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土ブロック及びにぶい黄橙色土ブロックが入る。締まり中。粘性弱。
- 4 にぶい黄褐色砂質土 5層より極めが細かい。径20mm以下の比較的大粒の二ツ岳軽石粒含む。1層の近くに黒色灰が混入する。締まり中。粘性弱。
- 5 にぶい黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。締まりやや強。粘性弱。
- 6 褐灰色土 シルトに近い砂質土。黒色灰を多く含む。径10mm大の二ツ岳軽石粒及びにぶい黄橙色土ブロックが入る。締まり中。粘性やや弱。
- 7 暗褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。焼土粒子が極少量入る。締まり中。粘性弱。
- 8 にぶい黄褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物が入る。底部及び第7層との境に灰が混じる。締まり中。粘性弱。
- 9 暗褐色砂質土 径10mm大の二ツ岳軽石粒含む。炭化物が入る。にぶい黄褐色土の砂が混じる。締まり中。粘性弱。
- 10 にぶい黄褐色土 砂質土。にぶい黄橙色土の砂が混じる。一部焼土化している。締まり中。粘性弱。※第2層と同じ層か？



第134図 万蔵寺廻り遺跡 V区11号住居竈・同掘り方・出土遺物(1)



第135図 万蔵寺廻り遺跡 V区11号住居出土遺物(2)

V区12号住居 (第136～138図 PL.52)

位置 X=49.265/Y=-71.409 V区南西隅に位置し、標高140.90mの緩斜面上に立地する。

形態 南東隅のB竈が13号住居北西を切る。西側が調査区域外となるため、住居全体の形態はわからない。平面形は方形ないし長方形と推定される。東壁はややふくらみ出すように歪むが、ほぼ南北方向を示す。

規模 西半が調査区外となるため、東西方向の規模は不明。南北長は5.40m。

掘り方・床 緩やかな起伏が見られ、中央付近に対し、壁際がやや低い。立地する緩斜面と同様に東へ向かって緩やかに傾斜する。底面の凹凸を褐灰色の砂質土によって埋め、床面としたものと思われる。壁周溝、柱穴は認められないが、北西と南壁際中央、南東隅に土坑状の落ち込みが見られる。西側にはいくつかピットも見られる。

壁 削平によって上部は失われているが、やや開き気味に立ち上がる。壁高は22cm。

竈 東壁南端部に2基並列した状態で確認された。切り合う状態は認められず、新旧関係は把握されていない。ともに東壁南端を、東壁とほぼ直行する方向に掘り込んで構築されている。両竈とも燃焼部は壁外にあり、焚き口両脇に壁内への張り出しは無く、袖は認められない。ともに主軸方位はN-85°-Eを示す。以下、北側をA竈、南側をB竈とする。

A竈の煙道は残っていないが、燃焼部は一段深く掘り込んでから煙道へと連続していたものと思われる。中央には支脚据え方が掘られ、支脚石は認められないが、燃焼部壁際や焚き口に構造材と思われる

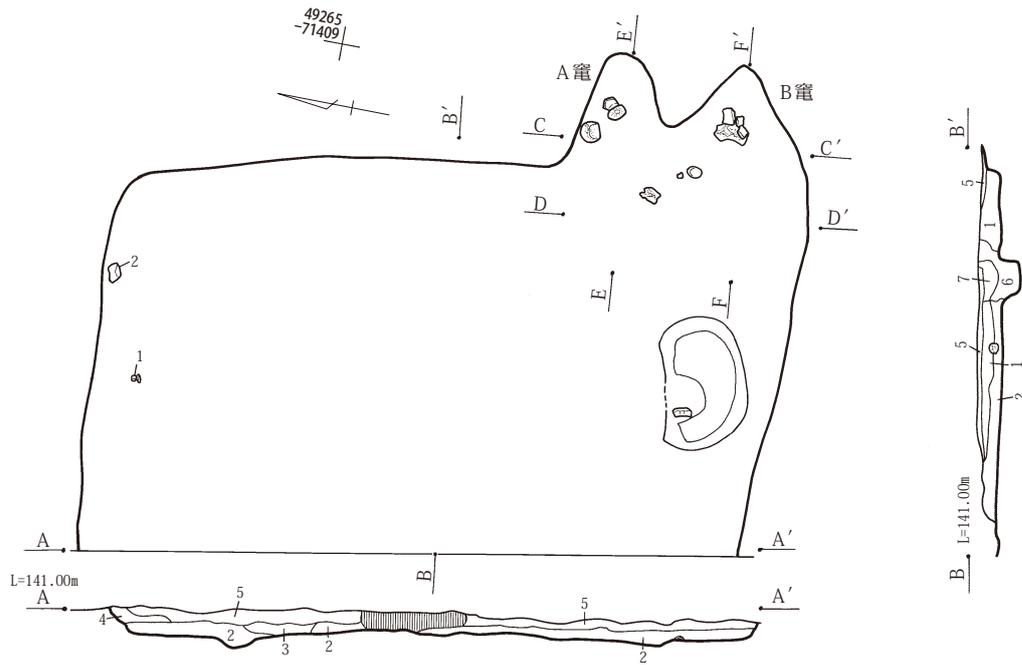
石が数点ある。B竈も同様の構造だが、焚き口の前が掘り込まれているのみで、袖石や支脚の据え方は認められない。

掘削底面ではA竈からB竈方向に傾斜し、両竈間に高低差がある。また、B竈右手に当たる住居南東隅部は土坑状に一段深く掘られていて、貯蔵穴を思わせるが、出土遺物はない。

遺物 須恵器の坏(2)、小型坏(1・3)、土釜3個体(4～6)が出土している。須恵器坏のうち1・2は東壁中央部付近の壁際近くの床面から出土したもので、1は1/2程度の破片で復元口径8.4cm、2は復元口径12cm程度である。3は竈の左手に当たる東壁中央部の壁際近くの床面から出土している。復元口径8.2cm。3つの坏ともに右回転の轆轤で成形し、底部は回転糸切りである。土釜は4・6がA竈の燃焼部、5がB竈の燃焼部から出土したものである。4が口径22.6cm、5は22.2cm、6は23.6cm。3個体ともに紐作りで、外面を篋削りして整形する。ふくらみのある胴部から短い口縁部が強く外反する。

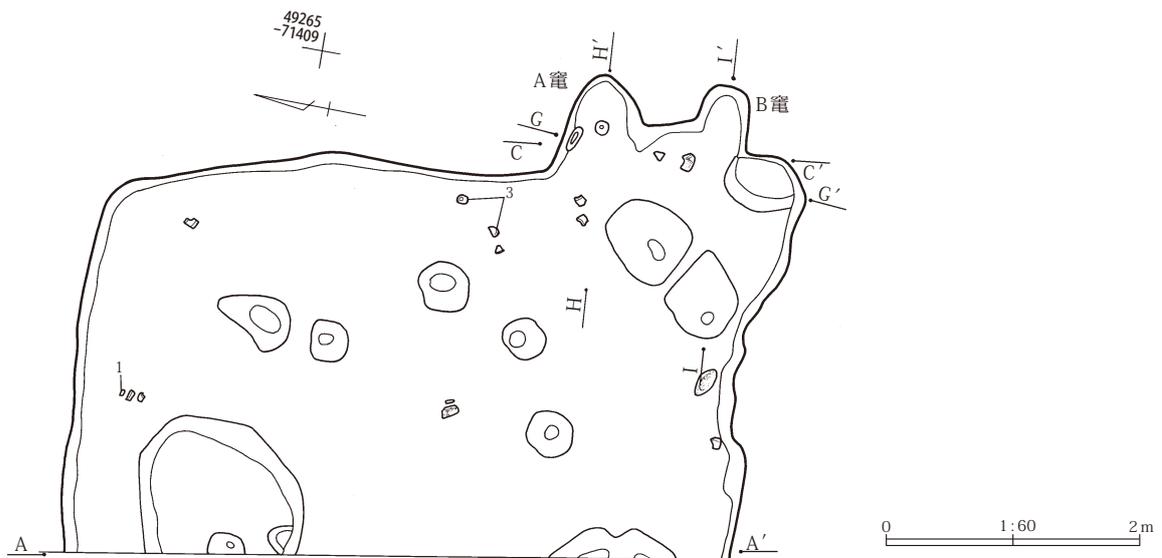
炭化種実も出土しており、北東、南東の床面構成土からイネ、ムギ類、ササゲ属、マメ科、シソ属が少量確認されている。竈と住居内土坑からも僅かに出土している。

所見 住居全体が削平を受けており、詳細は不明な点が多い。床面からの出土遺物はないが、規模や竈の構造、覆土中の遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



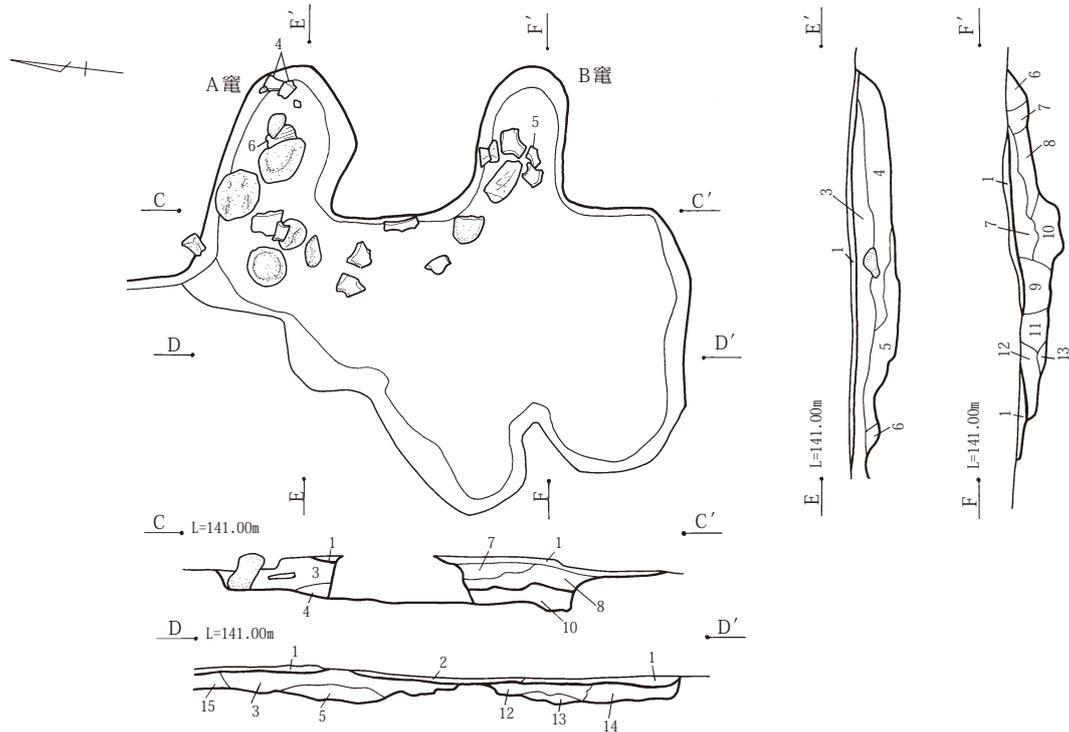
V区12号住居土層観察所見

- | | |
|---|--|
| <p>1 赤灰色土 細砂と若干の二ツ岳軽石粒含み、酸化鉄、斑状に凝縮、まれに酸化マンガン混入。</p> <p>2 褐灰色砂質土</p> <p>3 灰黄褐色砂質土 2、4層土の小ブロック、酸化した橙色土、赤灰色土シルト小ブロック、二ツ岳軽石粒、酸化マンガン（径5mm以下）混入。</p> <p>4 灰色砂質土 若干の二ツ岳軽石粒混入。</p> <p>5 赤灰色砂質土 現行作土。二ツ岳軽石粒混入。</p> | <p>6 黒褐色土 やや砂質。二ツ岳軽石粒と地山(淡橙色土)ブロック混入。</p> <p>7 褐色砂質土 若干の4層土ブロックと少量の二ツ岳軽石粒混入。</p> |
|---|--|



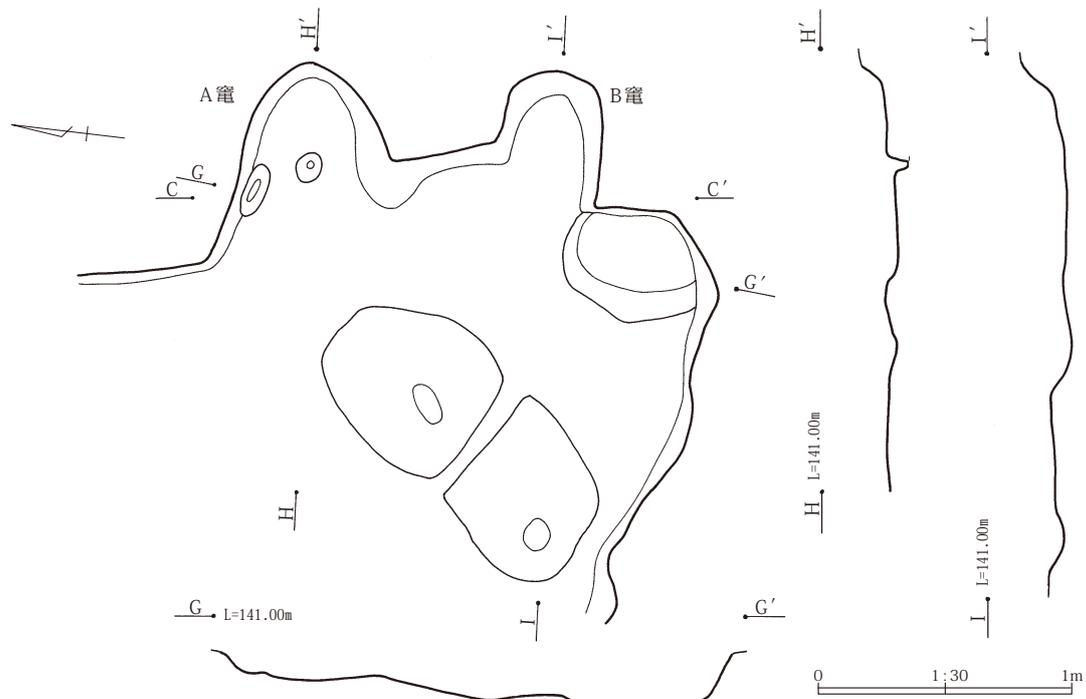
第136図 万蔵寺廻り遺跡 V区12号住居・同掘り方

第4章 遺構と遺物

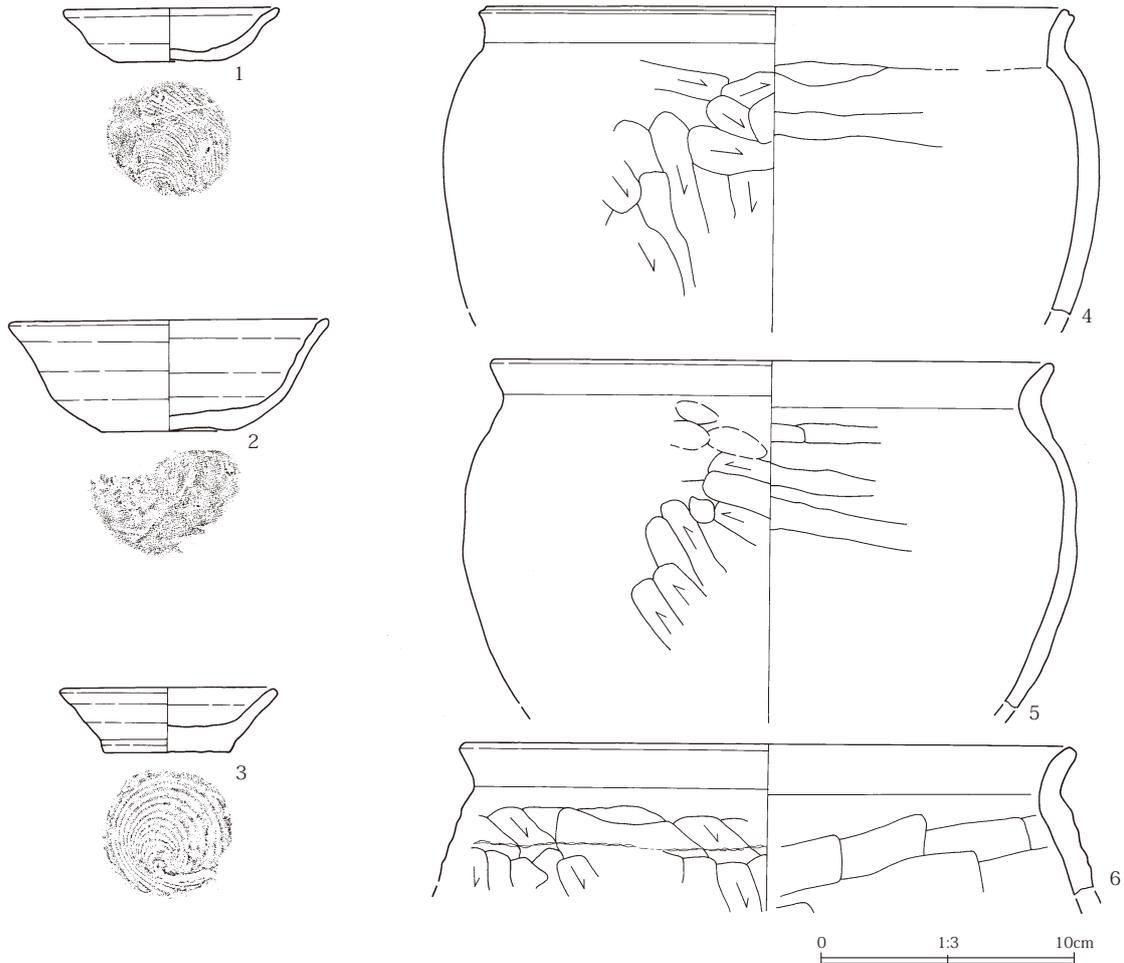


V区12号住居竈土層観察所見

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色砂質土 にぶい黄褐色土の砂が混じる。炭化物が入る。</p> <p>2 黒褐色砂質土 灰を多く含む。炭化物が入る。締まり中。粘性弱。</p> <p>3 黄褐色砂質土 黄灰色土の小ブロックと少量の焼土粒混入。</p> <p>4 暗灰黄・黄灰色土 砂質土のブロック混入。灰も含む。</p> <p>5 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒多く混入。4層土ブロック入る。</p> <p>6 黄褐色土 ニツ岳軽石粒混入。</p> <p>7 にぶい黄褐色土 シルトの板状ブロックと暗灰黄色土の混土。若干のニツ岳軽石粒と炭化物粒混入。</p> <p>8 褐灰色土 やや焼土化。若干の焼土小ブロックとニツ岳軽石粒混入。微量の灰も入る。</p> | <p>9 褐灰色土とにぶい黄褐色土ブロックの混土。若干のニツ岳軽石粒混入。</p> <p>10 褐灰色土と灰褐色土の混土。少量の礫混入。焼土化。</p> <p>11 黒褐色土と灰黄褐色土のブロック混土。ニツ岳軽石粒混入。</p> <p>12 にぶい赤褐色土 褐灰色土ブロックとニツ岳軽石粒混入。</p> <p>13 黒褐色土 炭化物と焼土小ブロック多く含む。</p> <p>14 褐色土とにぶい黄褐色焼土小ブロックの混土。やや粘質。ニツ岳軽石粒混入。</p> <p>15 灰黄褐色土 ニツ岳軽石粒と黒褐色土混入。やや締まり欠ける。</p> |
|--|---|



第137図 万蔵寺廻り遺跡 V区12号住居竈・同掘り方



第138図 万蔵寺廻り遺跡 V区12号住居出土遺物

V区13号住居 (第139・140図 PL.53)

位置 X=49.263/Y=-71.410 V区の調査区南東隅に位置し、標高140.90mの南に向かう緩斜面上に立地する。

形態 西壁中央から北部にかけて、一部を12号住居に切られる。方形を基本的な平面形とするが、北壁が南壁より長いために、東壁が斜行し、台形に近い形状となる。東西軸方位はN-83°-Eを示す。

床面を直接覆う灰黄褐色土は二ツ岳軽石とにぶい黄橙色粘質土の小ブロックを含むもので、床面に広く、かつ薄く分布しており、調査者は土葺き屋根材の可能性のあるものとしている。

規模 東西長4.15m、南北長4.00m

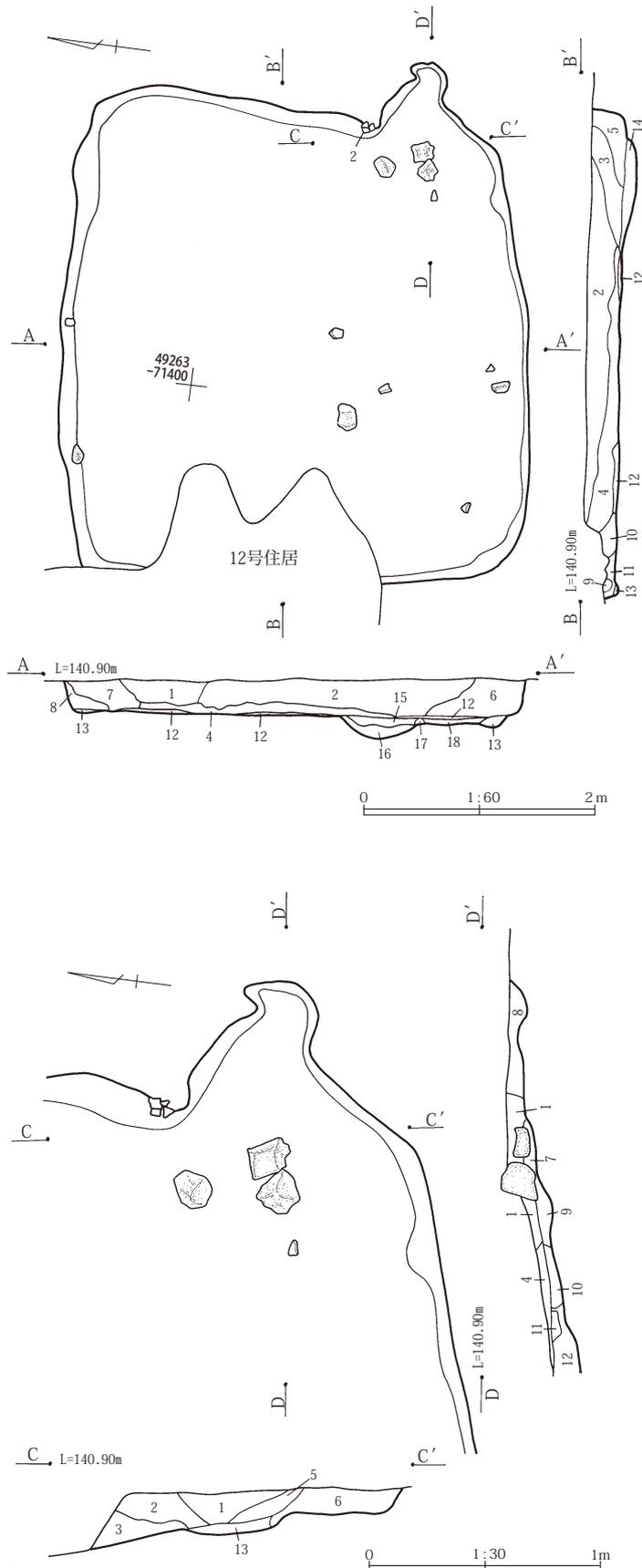
床 東・南の両壁際が土坑あるいは溝状に掘り込まれるが、ほぼ平坦に作られる。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。最大壁高26cm。

竈 東壁南端を掘り込んで構築する。煙道は残っていないが、燃烧部は一段深く掘り込んでから、煙道へと連続するものと思われる。燃烧部上半は壁外にあり、焚き口北側は僅かに壁内に張り出すが両袖は認められない。主軸方位はN-90°-Eを示す。

遺物 小型の須恵器坏と埴、虎溪山1号窯式期の灰釉陶器埴が1個体ずつ覆土中から出土している。床面全体から炭化種実が少量確認されている。イネ、ムギ類、特にオオムギが目立ち、ササゲなどマメ類も僅かに見られる。竈と住居内土坑からも少量出土しており、オオムギが多いという結果が出ている。

所見 遺物から10世紀後半の住居と考えられる。



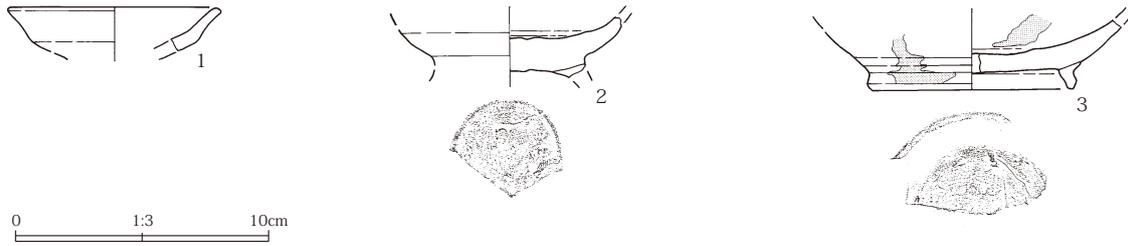
V区 13号住居土層観察所見

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石粒と酸化した、橙色、赤色軽石及び若干のニツ岳軽石粒若干砂混入。住居埋没後の掘削土か。
- 2 にぶい黄褐色土 粘性あり。ニツ岳軽石粒と地山、川砂混入。圧密は高くなる。
- 3 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒と若干の酸化したにぶい黄褐色土。にぶい黄褐色粘質土の小ブロックにぶい黄褐色土混入。
- 4 灰黄褐色土 ニツ岳軽石粒とにぶい黄褐色粘質土の小ブロックにぶい黄褐色土を混入する。土葺き材の可能性あり。1層に比べ明るい。
- 5 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒と微量の焼土粒混入。粘性ややあり。川砂混入。
- 6 にぶい黄褐色土 2層に比べやや赤味掛かる。やや粘性あり。ニツ岳軽石粒混入。
- 7 暗褐色土と灰黄褐色粘質土のブロック混入。ニツ岳軽石粒混入。締まり中。粘性弱。
- 8 にぶい黄褐色砂質土 暗褐色土のブロック(径4cm程)とニツ岳軽石粒混入。
- 9 灰褐色土 黒色灰の小ブロック多く含み、焼土小ブロック若干混入。
- 10 灰黄褐色土 粘性あり。暗褐色土ブロックとニツ岳軽石粒混入。
- 11 褐色土 若干酸化鉄沈着。ニツ岳軽石粒と地山灰赤色砂質土の小ブロック混入。
- 12 暗褐色土 地山砂混じる。締まり中。粘性弱。
- 13 灰黄褐色土 地山砂混じる。黒褐色土小ブロック入る。締まり中。粘性弱。
- 14 にぶい黄褐色土 径15mm大のニツ岳軽石粒含む。黄褐色土粒子少量入る。締まり中。粘性弱。
- 15 暗褐色土 径10mm大のニツ岳軽石粒含む。明褐色土少量入る。締まり中。粘性弱。
- 16 にぶい黄褐色土 径20mm以下のニツ岳軽石粒入る。地山砂(灰黄褐色土)小ブロック入る。締まり中。粘性弱。
- 17 にぶい褐色土 径20mm以下の比較的大粒のニツ岳軽石粒含む。灰褐色土地山砂小ブロック入る。締まり中。粘性弱。
- 18 灰褐色土 地山砂ブロック入る。径10mm大のニツ岳軽石粒含む。締まり中。粘性弱。

V区 13号住居竈土層観察所見

- 1 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒と少量の小ブロック混入。やや粘性。
- 2 にぶい黄褐色土 やや粘性。ニツ岳軽石粒混入。
- 3 灰黄褐色土 ニツ岳軽石粒と地山細砂含み、圧密弱い。
- 4 灰黄褐色土 粘性見られる。ニツ岳軽石粒混入。
- 5 褐灰色土 若干の焼土化見られる。にぶい黄褐色土小ブロックとニツ岳軽石粒混入。地山細砂も入る。
- 6 ニツ岳軽石粒に灰黄色砂質土混。
- 7 褐色土 ニツ岳軽石粒とにぶい黄褐色土小ブロック、地山細砂も入る。
- 8 淡赤褐色砂質土 ニツ岳軽石粒多量に混入。地山か?
- 9 にぶい黄褐色土 径20mm以下のニツ岳軽石粒含む。焼土が混じる。
- 10 灰黄褐色土 径20mm以下のニツ岳軽石粒含む。灰が多く、炭化物が少量入る。
- 11 黒色灰層 にぶい黄褐色土の砂が混じる。

第139図 万蔵寺廻り遺跡 V区13号住居・同竈



第140図 万蔵寺廻り遺跡 V区13号住居出土遺物

(2) 掘立柱建物跡

V区中央、やや北寄りで2棟の掘立柱建物を調査した。標高140.00～140.05mの緩い傾斜部にあって、西に2～4号住居が隣接する位置に当たる。

ほぼ全てのピットが深さ1m以上である。全ての柱穴において、柱痕が確認されている。

遺物 出土遺物は見られなかった。

V区1号掘立柱建物跡 (第141図 PL.54)

位置 X=49.300/Y=-71.410

主軸方位 N-80°-W

重複 2号掘立柱建物跡と重複するが、直接的新旧関係は不明である。

形態 1間×4間 (3.64m×6.06m・12尺×20尺)、面積22.0m²の東西棟の側柱建物である。底は認められない。四方いずれの辺も、ほぼ対応する位置に柱穴があるが、P8のみ若干南にずれている。柱穴は円形と楕円形、隅丸方形に分かれ、長径24～35cm、短径20～29.5cm、深さ40～110cmと、規模に若干ばらつきが見られる。全ての柱穴において、土層から柱痕が確認されている。

遺物 出土遺物は見られなかった。

第2表 掘立柱建物跡柱穴計測表

V区1号掘立柱建物跡					
柱穴番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	次柱穴間 (m)	平面形
1	24	23	41	1.74	楕円形
2	28	26	40	3.36	隅丸方形
3	32	26	47	1.74	楕円形
4	26	22	55	1.75	円形
5	27	24	32	1.82	円形
6	25	22	21	3.34	円形
7	35	30	36	1.73	隅丸方形
8	28	28	43	1.74	隅丸方形

V区2号掘立柱建物跡					
柱穴番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	次柱穴間 (m)	平面形
1	26	21	62	1.50	楕円形
2	28	26	61	3.60	楕円形
3	26	24	65	1.64	楕円形
4	38	33	63	1.50	楕円形
5	34	32	57	1.44	楕円形
6	34	32	60	1.79	隅丸方形
7	33	28	62	3.54	隅丸方形
8	34	30	64	1.84	楕円形
9	24	27	52	1.52	円形
10	33	30	65	1.68	円形

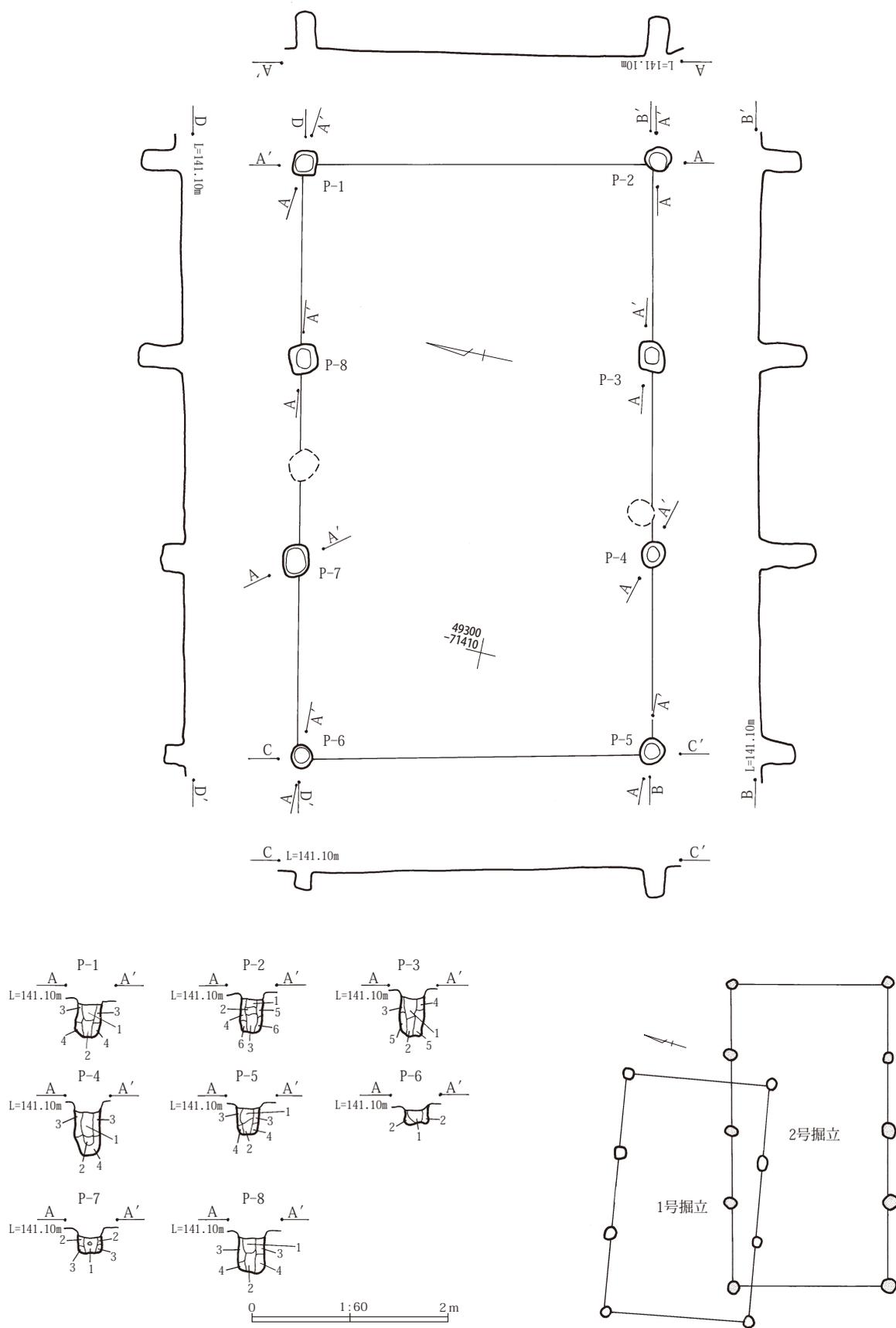
V区2号掘立柱建物跡 (第142図 PL.54)

位置 X=49.300/Y=-71.410

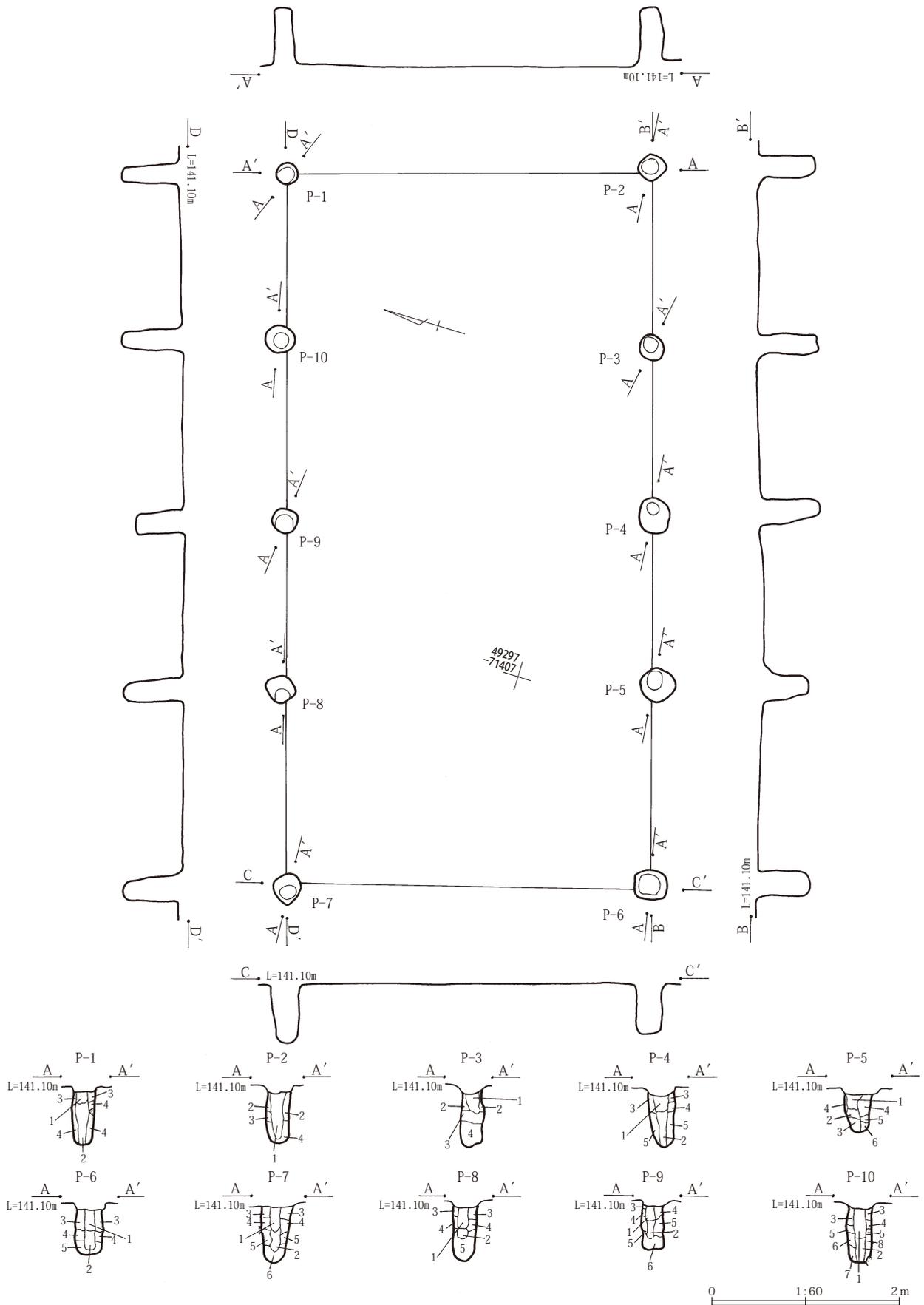
主軸方位 N-75°-W

重複 1号掘立柱建物跡と重複するが、直接的新旧関係は不明である。

形態 1間×5間 (3.99m×7.08m・13尺×23尺)、面積27.80m²東西棟で、1号掘立柱建物跡より若干規模が大きい。1号掘立柱建物跡同様、底は認められない。各辺の柱穴は、いずれもほぼ対応する位置にある。ほとんどが楕円形を示し、規模は長径26～38cm、短径20～36cm、深さは96～132cmあり、



第141図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号掘立柱建物跡・重複模式図



第142図 万蔵寺廻り遺跡 V区2号掘立柱建物跡

第4章 遺構と遺物

V区1号掘立柱建物跡土層観察所見

P-1

- 1 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と地山川砂含む。やや砂質。
- 2 暗灰黄色土 ニツ岳軽石と明黄褐色軽石含む。
- 3 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 4 褐色土 ニツ岳軽石少量含む。

P-2

- 1 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや砂質。
- 2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 3 黒褐色土 色調明るい。ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや砂質。
- 4 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 5 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 6 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや粘性あり。

P-3

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石含み、地山細砂やや多く含む。上位に弱く酸化鉄沈着。
- 2 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや砂質。
- 3 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂・酸化した明晰褐色軽石含む。上位に酸化鉄沈着。
- 4 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 5 灰褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや砂質。

P-4

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石含み、地山細砂やや多く含む。上位に弱く酸化鉄沈着。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 やや黄み掛かる。ニツ岳軽石含み、地山細砂やや多く含む。
- 3 褐色砂質土 ニツ岳軽石含み、やや多くの地山細砂含む。上位に弱く酸化鉄の沈着。
- 4 褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。

P-5

- 1 にぶい褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。上位に酸化鉄沈着。やや砂質。
- 2 にぶい褐色土 やや赤みを帯びる。ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや砂質。
- 3 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。酸化鉄沈着。やや砂質。
- 4 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。若干赤み掛かる。やや砂質。

P-6

- 1 にぶい褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。上位に酸化鉄沈着。やや砂質。
- 2 褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや砂質。

P-7

- 1 褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。上位は酸化鉄沈着。やや砂質。
- 2 褐色砂質土 地山細砂とニツ岳軽石含む。中・上位に酸化鉄沈着。
- 3 褐色土 ニツ岳軽石含み、地山細砂やや多く混入。やや砂質。

P-8

- 1 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。色調やや暗い。
- 2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石含み、地山細砂やや多く混入。縮まり欠ける。
- 3 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石と川砂・地山川砂含む。
- 4 にぶい褐色土 ニツ岳軽石と地山細砂、酸化した明黄褐色軽石含む。

V区2号掘立柱建物跡土層観察所見

P-1

- 1 灰褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。やや砂質。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と細砂含む。赤み掛かる。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と細砂含む。縮まる。
- 4 黒褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。やや砂質。

P-2

- 1 灰褐色土 細砂とニツ岳軽石、僅かに風化した橙色軽石含む。やや粘性あり。
- 2 灰褐色土 1層に比して黄み掛かる。細砂とニツ岳軽石、風化した橙色軽石ふくむ。
- 3 灰褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。
- 4 灰褐色土 3層に比し細砂・川砂多く、黄み掛かる。ニツ岳軽石若干含む。やや粘性あり。

P-3

- 1 灰黄褐色土 細砂とニツ岳軽石含む。
- 2 灰褐色土 細砂と少量のニツ岳軽石含む。圧密やや弱い。
- 3 にぶい黄褐色土 細砂とニツ岳軽石粒若干含む。酸化鉄。
- 4 褐灰色土 細砂と少量のニツ岳軽石含む。粘性あり。

P-4

- 1 褐灰色土 細砂とニツ岳軽石含む。
- 2 褐灰色土 細砂と少量のニツ岳軽石含む。
- 3 灰黄褐色土 ニツ岳軽石と若干の細砂含む。
- 4 灰褐色土 色調やや明るい。細砂とニツ岳軽石含む。
- 5 褐灰色土 細砂と僅かにニツ岳軽石含む。粘性あり。

P-5

- 1 褐灰色砂質土 細砂とニツ岳軽石含む。やや縮まりに欠ける。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石・酸化鉄含む。細砂やや多く含む。
- 3 褐灰色砂質土 やや赤み掛かる。ニツ岳軽石含み、細砂多く混入。
- 4 褐灰色土 ニツ岳軽石と細砂、風化した橙色軽石含む。縮まっている。
- 5 灰褐色土 細砂・ニツ岳軽石・風化した橙色軽石含む。
- 6 黒褐色土 ニツ岳軽石と多量の細砂・川砂含む。

P-6

- 1 灰褐色土 やや砂質。ニツ岳軽石と細砂含む。3層に比して黄み掛かる。
- 2 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石とやや多くの粗砂含む。縮まりにやや欠ける。
- 3 灰褐色砂質土 細砂やや多く含み、ニツ岳軽石混入。
- 4 灰褐色砂質土 2層に比し黄み掛かる。細砂やや多く、ニツ岳軽石若干含む。よく縮まる。
- 5 褐灰色砂質土 細砂やや多く含み、ニツ岳軽石若干含む。

P-7

- 1 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや粘性あり。
- 2 褐灰色土 地山細砂とニツ岳軽石含む。やや砂質で縮まりにやや欠ける。
- 3 黒褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。やや砂質。
- 4 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや粘性あり。
- 5 灰褐色土 色調やや明るい。粒径やや大きめのニツ岳軽石やや多く含み、細砂混入。やや砂質。
- 6 褐灰色土 細砂とニツ岳軽石混入。

P-8

- 1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや縮まり欠ける。
- 2 黄灰色砂質土 ニツ岳軽石含み、地山細砂多く混入。粘性見られる。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。縮まる。
- 4 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。やや粘性あり。
- 5 灰褐色土 色調やや明るい。粒径やや大きめのニツ岳軽石やや多く含み、地山細砂混入。やや砂質。

P-9

- 1 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 3 灰褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂、風化した明黄褐色軽石含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。
- 5 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石と地山細砂含む。縮まりやや欠ける。
- 6 黒褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。粘性ややあり。

P-10

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。上位に酸化鉄沈着。やや砂質。
- 2 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。やや砂質。
- 3 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石と細砂含む。上位に酸化鉄沈着。
- 4 灰褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。やや砂質で粘性弱。
- 5 黒褐色土 色調明るい。ニツ岳軽石と細砂含む。
- 6 褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。若干砂質。
- 7 灰黄褐色砂質土 粒径大きなニツ岳軽石(2~3cm)多く含み、細砂混入。
- 8 灰褐色土 ニツ岳軽石と細砂含む。やや砂質。

(3) 土坑

土坑は、Ⅰ区とⅥ区以外の各区にあり、総数272基ある。土坑の平面形は、①円形②楕円形③方形④長方形⑤隅丸方形⑥隅丸長方形⑦不整形に分類した。

Ⅱ区で検出された土坑は55基を数える。集落が展開する調査区南端の北側から集中的に検出されているが、土坑同士で重複しているものは比較的少ない。規模は様々だが、円形の土坑が大半を占める。遺物は54号土坑から羽釜が出土しているが、1号住居南東隅と重複しており、竈も近接することから住居に伴う遺物の可能性が高い。54号土坑以外からは出土遺物は無く、時期を決定出来る土坑は見られない。調査区北側における検出が見られないのは、大規模な攪乱を受けているためとも考えられるが、調査区北側の攪乱周辺において検出された土坑は1・47号土坑の2基のみであることを見ると、攪乱以前も北側に土坑は分布していなかった可能性が高い。

Ⅲ区において検出された土坑は、48基を数える。調査区中央付近で検出された1～3号住居の周辺に、重複しながら集中的に分布する。長方形もしくは隅丸長方形が20基、Ⅲ区全体の41%を占めるのが特長である。長方形の土坑には、2mを超える大型の土坑が多い。長方形の土坑は、互いに重複試合ながらも長軸は南北、もしくは東西で占められており、ほぼ同一時期の土坑と思われる。いずれも住居を切っていることから、後世の攪乱共考えられる。時期、性格については、隅丸長方形以外の土坑も含めて出土遺物は見られず、不明である。

Ⅳ区において検出された土坑は80基を数える。分布状況を見ると、調査区北西部の竪穴住居がまとまって検出された地点に集中する傾向がある。平面形は、円形の土坑が全体の半数以上を占めるが、楕円形や長方形、隅丸長方形には2mを超える大型の土坑が多い。Ⅲ区において11世紀前半の住居を壊していた南北に走る長方形の土坑も、Ⅲ区に近い調査区南端から、数基検出されている。遺物を伴う土坑はほと

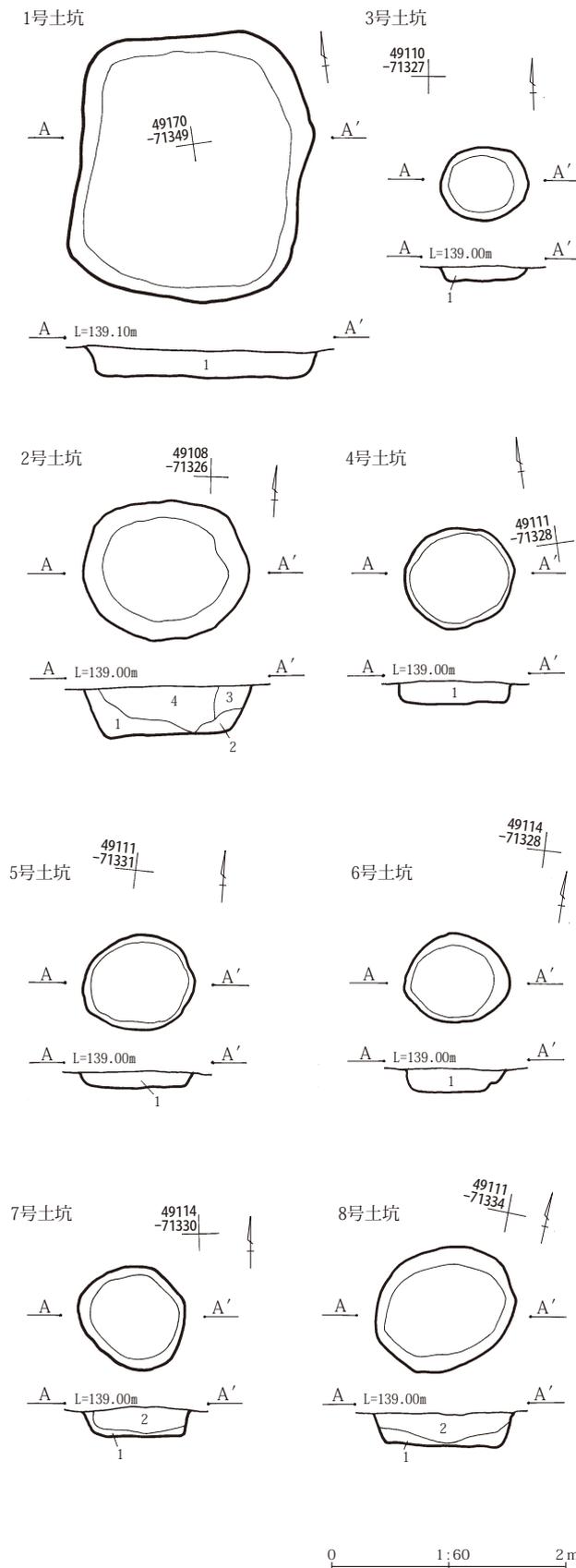
んど見られないが、9号土坑の覆土中から、中世渡来銭（元豊通宝）が1枚出土している。10号土坑の性格は不明だが、住居や昭和期の溝を切る土坑も多いため、後世の攪乱も多いと考えられる。

Ⅴ区において検出された土坑は89基を数える。全体的には円形、楕円形の土坑が大半を占める。分布状況を見ると、調査区の南北両端にまとまりを持って検出されている。北側の土坑群は1号住居南側と、2、3号住居、堀立柱建物跡周辺に集中する。南側では住居の周辺に散在するような検出状況。特に、Ⅲ区とⅣ区でも検出された大型長方形の土坑は、全て南側に分布している。Ⅲ・Ⅳ区同様、南北に長軸がおかれ、同様の土坑がⅢ～Ⅴ区にわたって分布していると思われる。

Ⅴ区の土坑からは、他の調査区に比べて出土遺物が多い点も特徴である。調査区北側の土坑群では、65、67号土坑から埴形鍛冶滓が、69号土坑からは鉄釘の破片が出土している。調査区南端の土坑で遺物を伴うのは31・45・46・52・60・61号土坑である。31号土坑からは須恵器環、埴1個体ずつが、45号土坑からは須恵器埴1個体、46号土坑から灰釉陶器長頸壺の底部破片、52号土坑からは灰釉陶器埴1個体、60号土坑からは、10世紀後半代の灰釉陶器長頸壺2個体と埴1個体、61号土坑からは須恵器甕の破片、66号土坑からは外面に墨書が施された須恵器環の底部破片が出土している。残存状態が悪く、字体は判読不能である。

(4) ピット

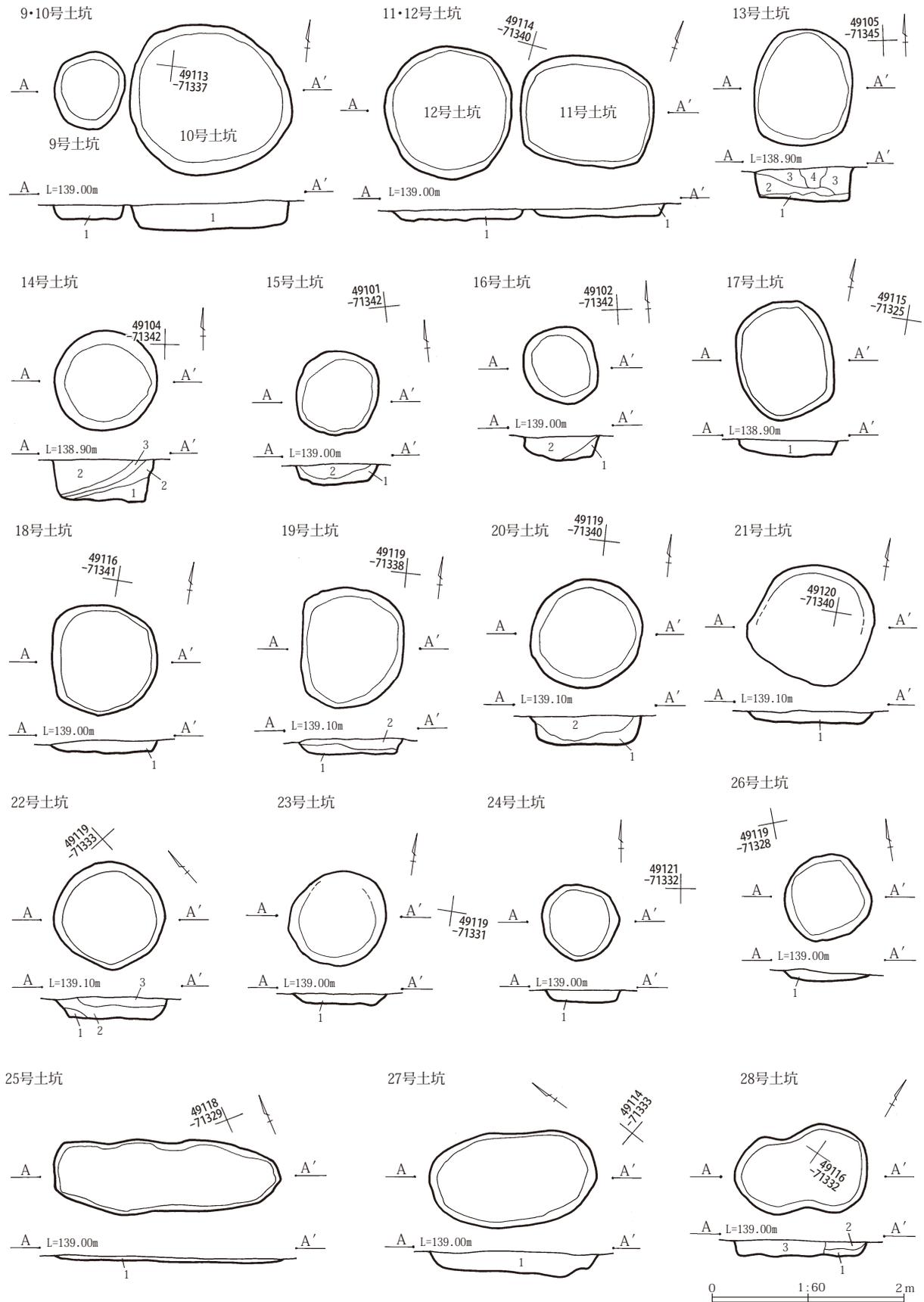
万蔵寺廻り遺跡におけるピットは、Ⅴ区から検出された37基のみである（堀立柱建物跡の柱穴18本は除く）。ピットの検出状況は2箇所で大別できる。Ⅴ区北端の1号井戸と1号住居に挟まれた地点と、堀立柱建物跡周辺から集中的に検出されている。ピットの性格としては、柵列や平地式建物などの柱穴などが考えられるが、遺構として確認できるピットは無い。



※以下の記載は遺構名/所在グリッド/長軸方位/形状/長径×短径×深さ(各cm)/土層観察所見の順である。

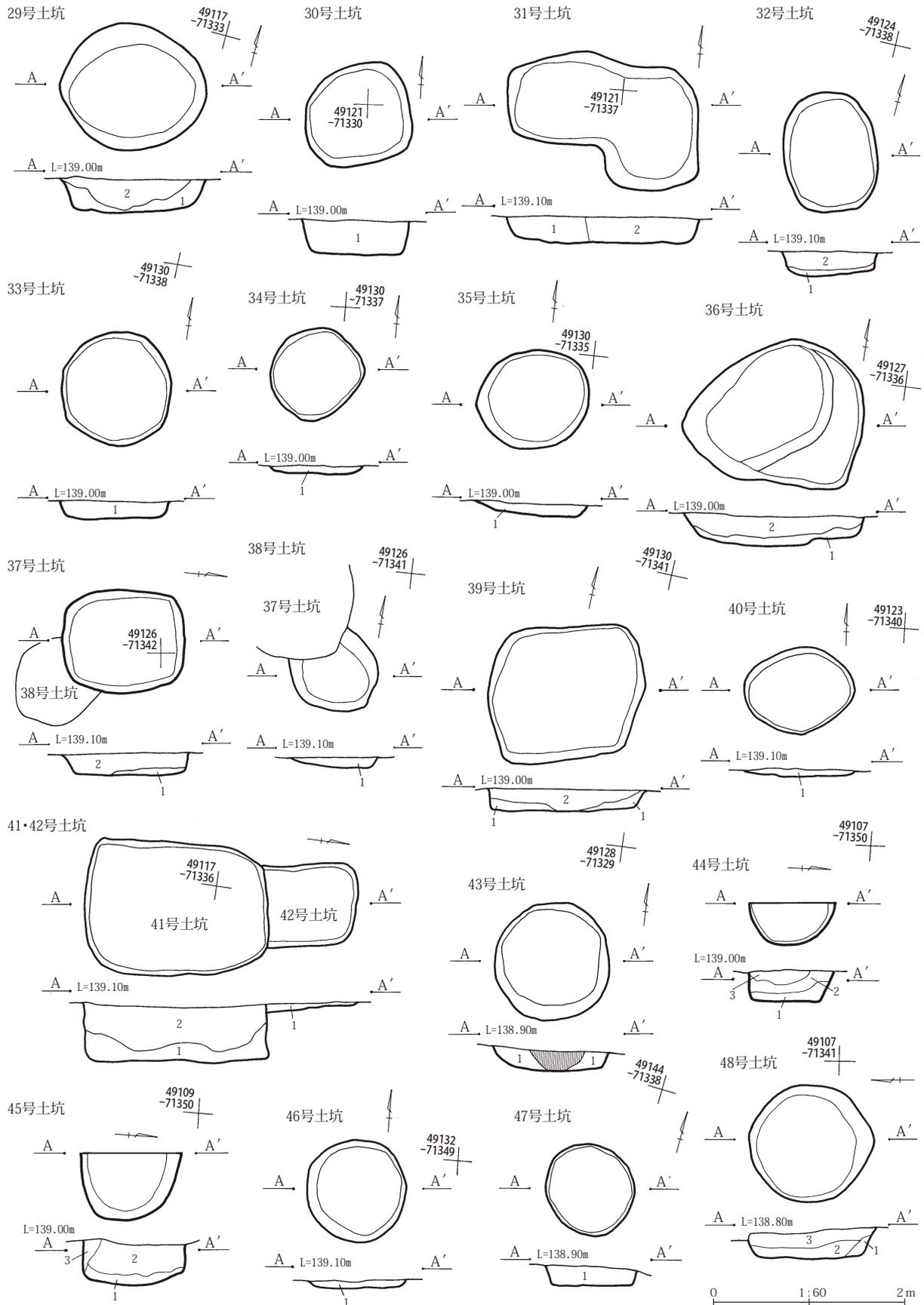
- II区 1号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.170/Y=-71.349 N-16°-E 隅丸方形 225×188×25
 1 褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(10~15mm)30%。縮まっている。
- II区 2号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.108/Y=-71.326 N-87°-E 円形 144×120×43
 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石7~10%。
 2 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石3~7%。
 3 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石3%。地山シルト斑7%。
 4 黒褐色壤土と暗褐色砂壤土の互層。
- II区 3号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.110/Y=-71.327 N-88°-W 円形 74×64×11
 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(10~15mm)。炭質物片含む。縮まっている。
- II区 4号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.111/Y=-71.330 N-82°-W 円形 94×86×20
 1 褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。炭質物片、焼土粒少量含む。
- II区 5号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.110/Y=-71.330 N-86°-E 円形 94×82×15
 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~15mm)3%。炭質物片、焼土粒少量含む。
- II区 6号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.114/Y=-71.328 N-83°-E 円形 88×76×21
 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)7%。粗砂粒含む。縮まっている。
- II区 7号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.114/Y=-71.330 N-57°-W 円形 94×83×24
 1 暗褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(0~5mm)3%。粗砂粒含む。縮まり弱い。
 2 暗褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。地山シルトブロック3%。
- II区 8号土坑** (第143図 PL55)
 X=49.113/Y=-71.333 N-49°-E 円形 121×102×30
 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(3~10mm)3%。大粒のニツ岳軽石含む。
 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(3~10mm)15%。大粒のニツ岳軽石含む。焼土ブロックを部分的に含む。炭質物粒含む。
- II区 9号土坑** (第144図 PL55)
 X=49.113/Y=-71.337 N-83°-W 円形 170×160×28
 1 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(1~15mm)15%。炭質物片含む。
- II区 10号土坑** (第144図 PL55)
 X=49.113/Y=-71.337 N-4°-E 円形 81×70×15
 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)10%。
- II区 11号土坑** (第144図 PL55)
 X=49.114/Y=-71.340 N-84°-E 隅丸方形 140×113×11
 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(5~20mm)10%。縮まっている。
- II区 12号土坑** (第144図 PL55)
 X=49.114/Y=-71.340 N-16°-W 円形 140×132×11
 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~15mm)7%。大粒のものあり。
- II区 13号土坑** (第144図 PL55)
 X=49.105/Y=-71.345 楕円形 121×101×36
 1 暗灰黄色砂土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。地山崩落土。
 2 暗褐色壤質砂土~砂壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。
 3 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)1%。
 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)多く含む。炭質物片含む。
- II区 14号土坑** (第144図 PL55)
 X=49.104/Y=-71.342 N-1°-E 円形 105×108×45
 1 暗灰黄色砂土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。地山崩落土。
 2 黒褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(5~10mm)含む。
 3 暗灰黄色砂土 粗砂主体。

第143図 万蔵寺廻り遺跡 II区土坑(1) 1~8号土坑



第144図 万蔵寺廻り遺跡 II区土坑(2) 9~28号土坑

第4章 遺構と遺物



第145図 万蔵寺廻り遺跡 II区土坑(3) 29~48号土坑

第1節 古代・中世の遺構と遺物

II区 15号土坑 (第144図 PL55)

X=49.101/Y=-71.342 N -23°-E 円形 88×86×21

- 1 黒褐色砂壤土 地山に由来する円磨した二ツ岳軽石(5~10mm)含む。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)3%。炭質物粒含む。

II区 16号土坑 (第144図 PL55)

X=49.102/Y=-71.42 N -31°-W 円形 82×78×25

- 1 黒褐色砂壤土 地山に由来する円磨した二ツ岳軽石(5~10mm)含む。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)3%。炭質物粒含む。

II区 17号土坑 (第144図 PL55)

X=49.115/Y=-71.325 N -27°-W 楕円形 121×102×18

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~30mm)10%。炭質物極少量含む。やや縮まっている。

II区 18号土坑 (第144図 PL56)

X=49.116/Y=-71.341 N -51°-W 楕円形 122×117×13

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)7%。褐色土斑含む。やや縮まっている。

II区 19号土坑 (第144図 PL56)

X=49.119/Y=-71.388 N -3°-E 楕円形 126×106×16

- 1 暗褐色壤質砂土 二ツ岳軽石15%。縮まっている。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)7%。やや縮まっている。

II区 20号土坑 (第144図 PL56)

X=49.119/Y=-71.340 N -51°-E 円形 120×110×30

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)1%。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)15%。褐色土ブロック含む。縮まっている。

II区 21号土坑 (第144図 PL56)

X=49.120/Y=-71.340 N -59°-E 円形 133×130×13

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)10%。褐色土ブロック含む。

II区 22号土坑 (第144図 PL56)

X=49.119/Y=-71.333 N -6°-W 円形 114×110×21

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)1%。縮まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)5%。砂の固まったブロック含む。
- 3 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)3%。褐色シルトブロック1%。縮まっている。

II区 23号土坑 (第144図 PL56)

X=49.119/Y=-71.331 N -46°-E 円形 103×96×13

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~30mm)5%。縮まっている。

II区 24号土坑 (第144図 PL56)

X=49.121/Y=-71.332 N -53°-W 円形 82×76×12

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)1%。砂の固まった斑含む。やや縮まっている。

II区 25号土坑 (第144図 PL56)

X=49.119/Y=-71.330 N -68°-W 隅丸長方形 235×70×5

- 1 暗褐色壤質砂土 二ツ岳軽石(5~30mm)30%。固く縮まっている。

II区 26号土坑 (第144図 PL56)

X=49.119/Y=-71.328 N -27°-E 楕円形 94×90×12

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)1%。焼土小ブロック少量含む。縮まっている。

II区 27号土坑 (第144図 PL56)

X=49.116/Y=-71.334 N -37°-W 円形 174×98×25

- 1 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)10%。炭質物片少量含む。

II区 28号土坑 (第144図 PL56)

X=49.117/Y=-71.332 N -56°-E 楕円形 138×80×17

- 1 暗褐色壤質砂土 二ツ岳軽石(5~30mm)15%。
- 2 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~30mm)30%。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~30mm)3%。炭質物片含む。

II区 29号土坑 (第145図 PL56)

X=49.117/Y=-71.333 N -77°-E 楕円形 154×134×36

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)7%。円磨された大粒の二ツ岳軽石含む。
- 2 黒褐色砂壤土 15%。炭質物粒少量含む。

II区 30号土坑 (第145図 PL56)

X=49.122/Y=-71.330 N -70°-E 楕円形 112×104×35

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)3%。

II区 31号土坑 (第145図 PL56)

X=49.122/Y=-71.336 N -70°-W 不整形 220×94×27

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)1%。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(5~30mm)7%。

II区 32号土坑 (第145図 PL35)

X=49.124/Y=-71.338 N -17°-W 楕円形 127×98×28

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)7%。縮まっている。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~20mm)1%。

II区 33号土坑 (第145図 PL56)

X=49.130/Y=-71.339 N -12°-W 円形 120×112×18

- 1 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~20mm)5%。大粒の二ツ岳軽石が上位に多い。炭質物粒少量含む。

II区 34号土坑 (第145図 PL56)

X=49.130/Y=-71.337 N -46°-E 楕円形 94×92×9

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)10%。上位に多い。縮まっている。炭質物粒極少量含む。

II区 35号土坑 (第145図 PL56)

X=49.130/Y=-71.335 N -84°-E 円形 116×104×12

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)5%。地山シルトブロック含む。縮まっている。

II区 36号土坑 (第145図 PL57)

X=49.127/Y=-71.336 N -83°-E 不整形 189×148×31

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)1%。縮まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~30mm)10%。炭質物片多く含む。やや縮まっている。

II区 37号土坑 (第145図 PL57)

X=49.126/Y=-71.342 方形 125×110×24

- 1 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)1%。
- 2 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~30mm)7%。炭質物粒含む。

II区 38号土坑 (第145図 PL57)

X=49.126/Y=-71.341 N -83°-E 楕円形 90×58×12

- 1 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~30mm)7%。炭質物粒、炭質物片含む。

II区 39号土坑 (第145図 PL57)

X=49.129/Y=-71.342 N -77°-E 方形 162×139×23

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)1%。縮まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~30mm)10%。炭質物片多く含む。やや縮まっている。

II区 40号土坑 (第145図 PL57)

X=49.123/Y=-71.340 N -86°-E 楕円形 116×91×8

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~20mm)7%。縮まっている。

II区 41号土坑 (第145図 PL57)

X=49.117/Y=-71.336 N -9°-W 方形 192×138×60

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)3%。縮まり弱い。
- 2 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~30mm)15%。やや縮まっている。

II区 42号土坑 (第145図 PL57)

X=49.117/Y=-71.336 N -9°-W 方形 93×85×8

- 1 暗褐色壤質砂土 二ツ岳軽石(0~10mm)3%。縮まっている。

II区 43号土坑 (第145図 PL57)

X=49.128/Y=-71.329 N -15°-E 円形 126×122×20

- 1 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~20mm)3%。炭質物粒、焼土粒含む。

II区 44号土坑 (第145図 PL57)

X=49.107/Y=-71.349 N -4°-W 円形 -×45×34

- 1 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)5%。炭質物粒少量含む。
- 2 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)10%。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~15mm)7%。炭質物片、焼土小ブロック含む。縮まっている。

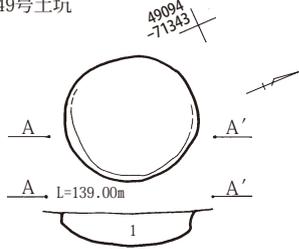
II区 45号土坑 (第145図 PL57)

X=49.109/Y=-71.349 N -89°-E 楕円形 -×106×45

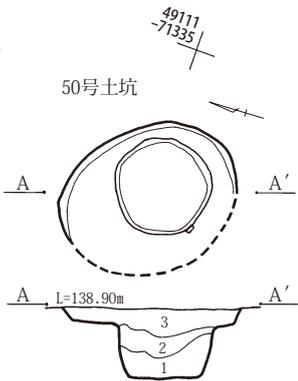
- 1 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(5~10mm)含む。縮まっている。
- 2 暗褐色砂壤土 炭質物粒少量含む。
- 3 地山砂層のブロック。

第4章 遺構と遺物

49号土坑



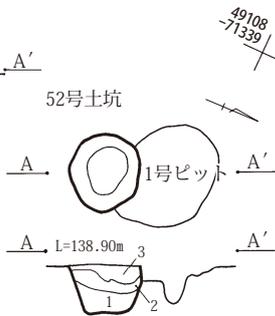
50号土坑



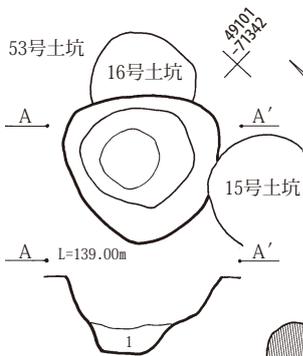
51号土坑



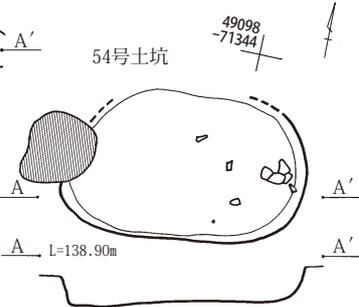
52号土坑



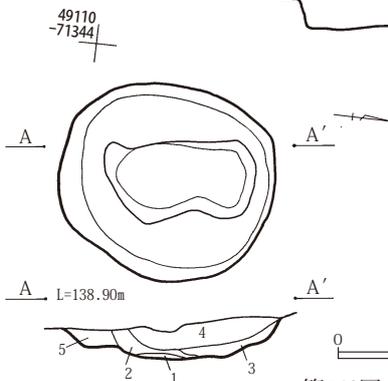
53号土坑



54号土坑



55号土坑



II区 46号土坑 (第145図 PL57)

X=49.132/Y=-71.349 N-5°-W 円形 108×103×9

1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)5%。縮まっている。

II区 47号土坑 (第145図 PL57)

X=49.144/Y=-71.338 N-42°-W 円形 98×90×21

1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~30mm)7%。大粒のニツ岳軽石は上位に目立つ。

II区 48号土坑 (第146図 PL57)

X=49.107/Y=-71.341 円形 132×122×30

1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。縮まり弱い。

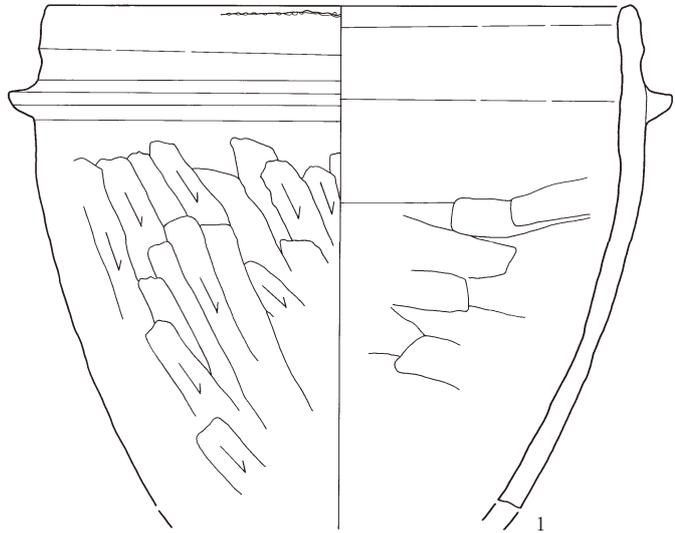
2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。縮まっている。

3 壤土 ニツ岳軽石(~10mm)多く含む。炭質物片含む。やや縮まっている。

II区 49号土坑 (第146図 PL57)

X=49.099/Y=-71.343 N-26°-E 円形 105×99×26

1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)30%。炭質物少量含む。縮まり弱い。



第147図 万蔵寺廻り遺跡 II区54号土坑出土遺物

II区 50号土坑 (第146図 PL57)

X=49.112/Y=-71.336 N-43°-W 楕円形 142×114×54

1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。砂粒含む。縮まり弱い。

2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。砂の小ブロック含む。焼土粒、炭質物片含む。やや縮まっている。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~30mm)3%。シルトブロック含む。焼土粒含む。縮まっている。

II区 51号土坑 (第146図 PL57)

X=49.119/Y=-71.343 楕円形 146×115×25

1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(5~7mm)含む。

2 暗褐色壤質砂土 焼土粒少量含む。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)1%。縮まっている。

4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。固く縮まっている。

II区 52号土坑 (第146図 PL57)

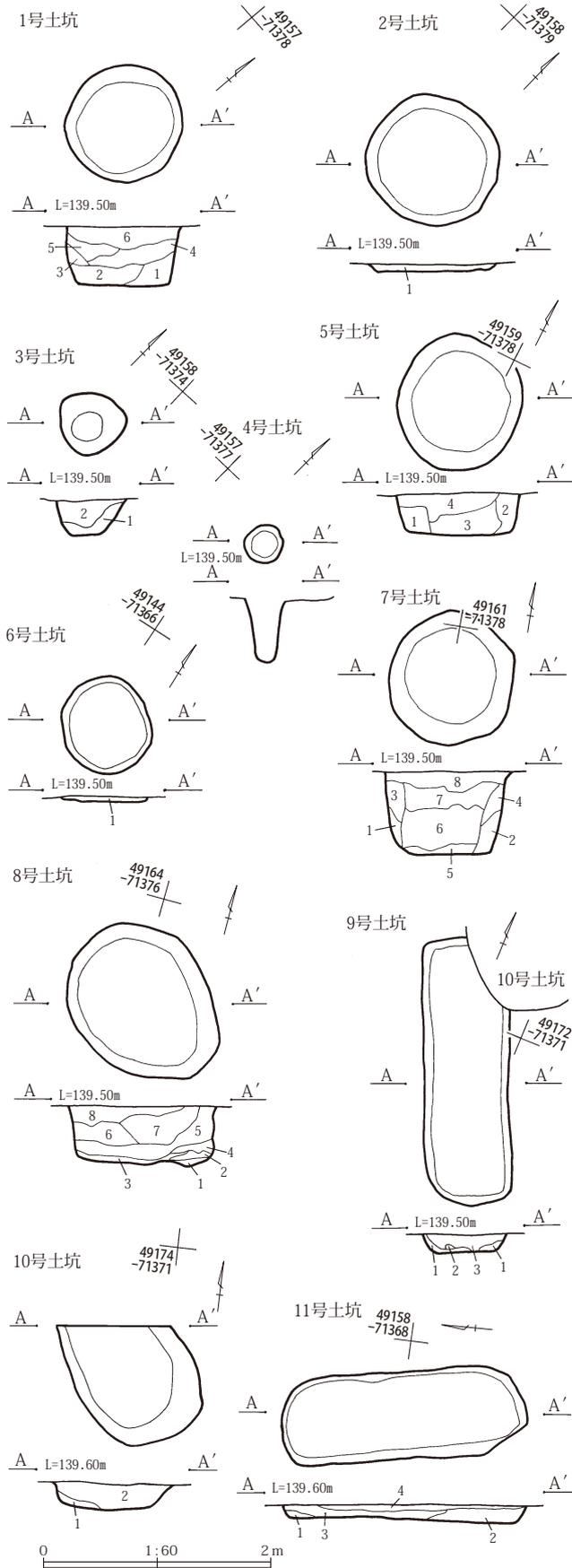
X=49.108/Y=-71.339 N-84°-E 円形 62×55×40

1 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)含む。縮まり弱い。

2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)多く含む。炭質物粒含む。縮まり弱い。

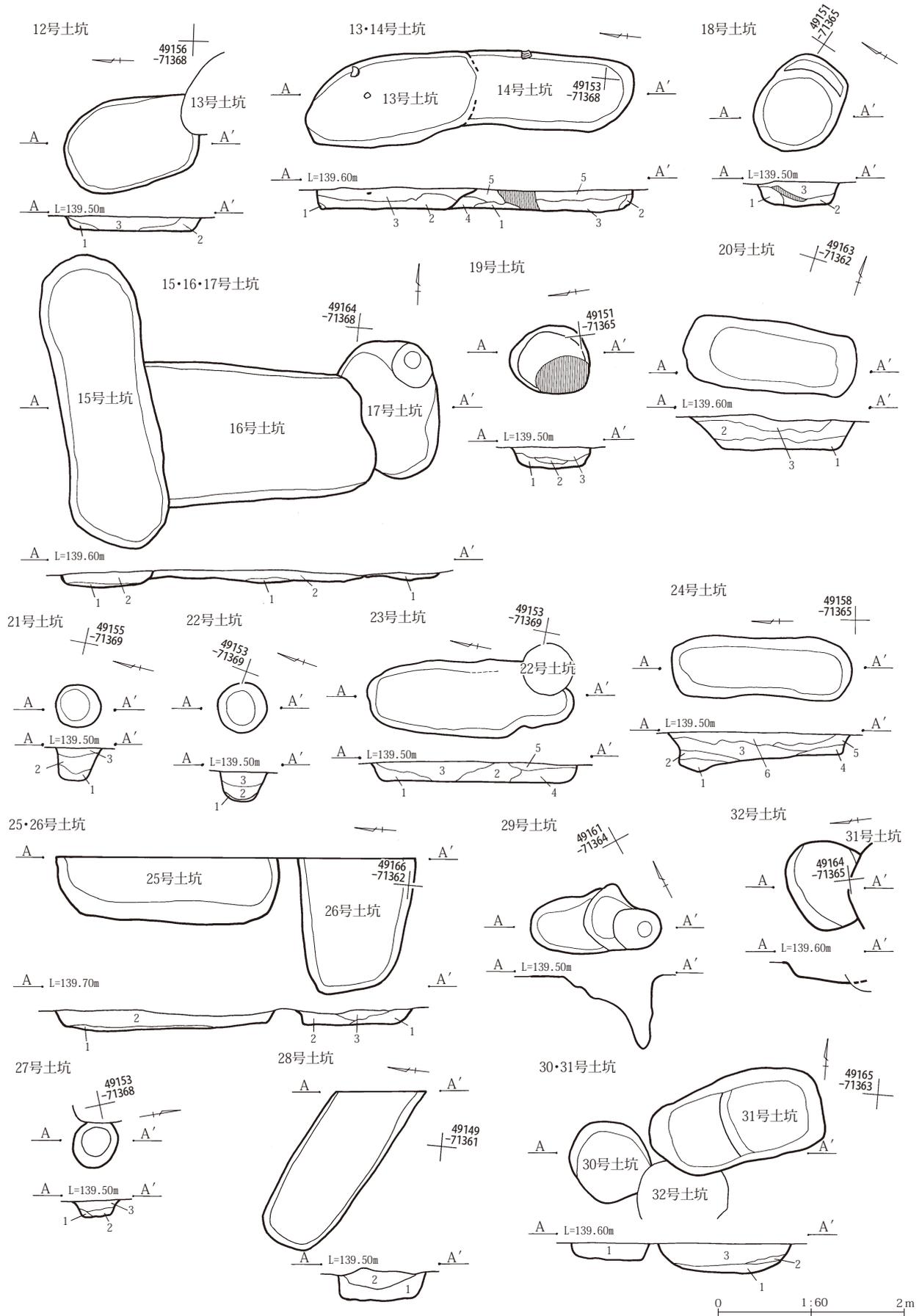
3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(5~10mm)3%。炭質物片含む。縮まっている。

第146図 万蔵寺廻り遺跡 II区土坑(4) 49~55号土坑



第148図 万蔵寺廻り遺跡 III区土坑(1) 1~11号土坑

第4章 遺構と遺物



第149図 万藏寺廻り遺跡 III区土坑(2) 12~32号土坑

第1節 古代・中世の遺構と遺物

Ⅲ区 8号土坑 (第148図 PL58)

X=49.164/Y=-71.374 N-37°-W 楕円形 147×118×53

- 1 汚れた砂層 地山砂層が主。やや攪乱され、二ツ岳軽石粒が混入。
- 2 汚れた砂層 5mm程度の細粒の二ツ岳軽石が主体。砂を混入。この部分より上位の地山から崩れたもの。
- 3 黒褐色砂壤土 腐植多く含む。締まり弱い。
- 4 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。壁面の崩れ。
- 5 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)15%。やや締まっている。
- 6 黒褐色二ツ岳軽石(0~10mm)含む。地山シルトブロック含む。やや締まっている。6・7層との間に薄い粘質土(黒褐色土)層をはさむ。
- 7 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。やや締まっている。
- 8 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~15mm)1%。締まっている。

Ⅲ区 9号土坑 (第148図 PL58)

X=49.172/Y=-71.371 N-25°-W 隅丸長方形 238×73×14

- 1 黒褐色砂壤土 崩れた砂粒主体。締まり弱い。
- 2 褐色土シルトブロック
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)多く含む。シルトブロック含む。やや締まっている。

Ⅲ区 10号土坑 (第148図 PL58)

X=49.174/Y=-71.371 N-35°-W 楕円形 -×98×22

- 1 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石ほとんど含まない。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。締まっている。

Ⅲ区 11号土坑 (第148図 PL58)

X=49.158/Y=-71.368 N-7°-W 隅丸長方形 214×76×15

- 1 暗褐色砂壤土 壁面の崩落土。円磨された二ツ岳軽石粒を極少量含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤質砂土 砂及び径10mmの円磨された二ツ岳軽石粒主体。やや締まっている。
- 3 黒褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。やや締まっている。
- 4 黒褐色壤土 砂粒、細粒の二ツ岳軽石。炭質物粒を多く含む。締まっている。

Ⅲ区 12号土坑 (第149図 PL58)

X=49.156/Y=-71.368 N-18°-W 隅丸長方形 133×96×14

- 1 暗褐色砂壤土 円磨された二ツ岳軽石(0~15mm)を多く含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色砂壤土 円磨された二ツ岳軽石(0~15mm)を多く含む。シルトブロック含む。やや締まっている。
- 3 黒褐色砂壤土 円磨された二ツ岳軽石(0~15mm)を含む。炭質物粒少量含む。締まっている。

Ⅲ区 13号土坑 (第149図 PL58)

X=49.153/Y=-71.367 N-10°-W 隅丸長方形 184×98×22

- 1 暗褐色砂土 二ツ岳軽石(0~7mm)含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~7mm)含む。炭質物粒ふくむ。締まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~7mm)少量含む。炭質物粒多く含む。やや締まっている。

Ⅲ区 14号土坑 (第149図 PL58)

X=49.153/Y=-71.367 N-10°-W 隅丸長方形 166×82×23

- 1 黒褐色壤土 炭質物粒含む。二ツ岳軽石(0~5mm)少量含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色砂壤土 壁面からの崩落砂主体。やや締まっている。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)少量含む。やや締まっている。
- 4 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。やや締まっている。
- 5 壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)多く含む。炭質物粒多く含む。締まっている。

Ⅲ区 15号土坑 (第149・150図 PL58・59)

X=49.164/Y=-71.367 N-15°-W 隅丸長方形 325×98×16

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)少量含む。締まっている。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。やや締まっている。

Ⅲ区 16号土坑 (第149図 PL59)

X=49.164/Y=-71.367 N-88°-E 隅丸長方形 228×138×14

- 1 褐色壤質砂土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。締まっている。黒褐色土の小ブロック含む。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。締まっている。炭質物粒多く含む。

Ⅲ区 17号土坑 (第149図 PL59)

X=49.164/Y=-71.367 N-9°-W 楕円形 150×83×6

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)少量含む。やや締まっている。

Ⅲ区 18号土坑 (第149図 PL59)

X=49.151/Y=-71.365 N-77°-E 楕円形 109×87×27

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)極少量含む。締まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色土ブロック含む。締まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。炭質物粒含む。やや締まっている。

Ⅲ区 19号土坑 (第149図 PL59)

X=49.151/Y=-71.366 N-49°-E 楕円形 84×78×22

- 1 暗褐色砂壤土 二ツ岳軽石(0~7mm)少量含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~7mm)含む。締まり弱い。
- 3 黒褐色土壌土 二ツ岳軽石(0~7mm)含む。炭質物粒多く含む。やや締まっている。

Ⅲ区 20号土坑 (第149図 PL59)

X=49.163/Y=-71.362 N-82°-E 隅丸長方形 186×74×36

- 1 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)極少量含む。褐色シルト質壤土ブロック含む。やや締まっている。
- 2 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。やや締まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)極少量含む。やや締まっている。

Ⅲ区 21号土坑 (第149図 PL59)

X=49.155/Y=-71.369 N-10°-W 円形 47×46×37

- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)少量含む。炭質物粒少量含む。締まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色ローム小斑含む。やや粘質。やや締まっている。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色ローム小斑含む。締まっている。

Ⅲ区 22号土坑 (第149図 PL59)

X=49.153/Y=-71.369 N-19°-W 楕円形 51×44×33

- 1 黒褐色砂壤土 壁面崩落砂と2層の混土。やや締まっている。二ツ岳軽石含まない。
- 2 暗褐色壤土 褐色ローム小ブロック含む。炭質物粒少量含む。焼土粒少量含む。締まり弱い。二ツ岳軽石含まない。
- 3 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色ローム小ブロック含む。締まっている。

Ⅲ区 23号土坑 (第149図 PL59)

X=49.153/Y=-71.369 N-11°-W 楕円形 118×81×20

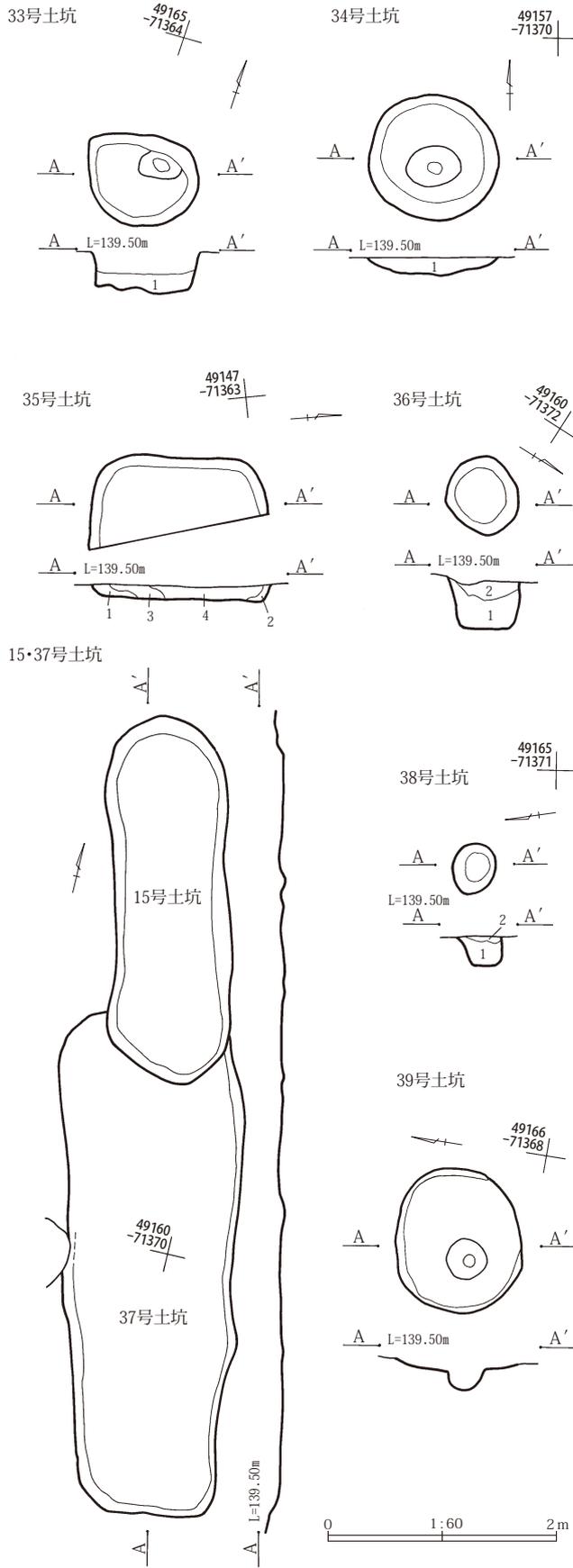
- 1 暗褐色壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)少量含む。黒褐色壤土の斑、褐色ロームの斑と混じる。締まり弱い。
- 2 暗褐色軽植土 褐色軽植土のブロックと黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~5mm)含むの混土。やや締まっている。
- 3 暗褐色壤土 褐色軽植土小ブロック3%、黒褐色壤土(二ツ岳軽石0~5mm含む)の斑3%含む。やや締まっている。
- 4 褐色軽植土 褐色土ブロック40%。二ツ岳軽石を含む。細砂~中砂60%の混土。
- 5 褐色土と黒褐色土の混土。締まっている。

Ⅲ区 24号土坑 (第149図 PL59)

X=49.158/Y=-71.365 N-1°-E 隅丸長方形 192×60×42

- 1 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)3%。固く締まっている。
- 2 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)多く含む。やや粘質。締まっている。
- 3 壁面崩落砂の斑を含む。やや砂質。
- 4 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)3%。炭質物粒含む。やや締まっている。
- 5 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)少量含む。炭質物粒少量含む。As-Bかと思われる軽石粒を含む。締まっている。
- 6 黒褐色壤土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。As-Bかと思われる軽石粒を多く含む。炭質物粒含む。締まっている。

第4章 遺構と遺物



Ⅲ区 25号土坑 (第149図 PL59)

X=49.167/Y=-71.362 N-4°-W 隅丸長方形 238×-×21

- 1 暗褐色砂壤土 底面砂層と比較的粘性の高いシルト質ロームの混土。縮まっている。
- 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。やや縮まっている。

Ⅲ区 26号土坑 (第149図 PL59)

X=49.167/Y=-71.362 N-84°-E 長方形 -×112×16

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~20mm)少量含む。やや縮まっている。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~20mm)極少量含む。縮まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 炭質微粒少量含む。やや縮まっている。

Ⅲ区 27号土坑 (第149図 PL59)

X=49.153/Y=-71.368 N-12°-E 円形 48×48×18

- 1 暗褐色壤土 やや砂質。縮まり弱い。
- 2 暗褐色壤土 褐色壤土斑40%。ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭質物片、焼土小ブロック含む。やや縮まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)多く含む。縮まっている。

Ⅲ区 28号土坑 (第149図 PL59)

X=49.150/Y=-71.361 N-62°-W 長方形 -×82×34

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。褐色小ブロック、小斑含む。やや砂質。縮まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。炭質微粒含む。褐色ローム斑含む。縮まっている。

Ⅲ区 30号土坑 (第149図 PL59)

X=49.165/Y=-71.363 N-30°-W 楕円形 106×87×18

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。炭質微粒含む。縮まっている。

Ⅲ区 31号土坑 (第149図 PL59)

X=49.165/Y=-71.363 N-73°-E 隅丸長方形 188×94×32

- 1 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。黄褐色シルト小ブロック含む。炭質物少量含む。縮まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。やや粘質。やや縮まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。やや砂質。縮まっている。

Ⅲ区 33号土坑 (第150図 PL59)

X=49.165/Y=-71.364 N-73°-E 楕円形 94×81×36

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)1%。炭化。下底近くは地山砂層。やや縮まっている。

Ⅲ区 34号土坑 (第150図 PL59)

X=49.156/Y=-71.370 N-89°-W 円形 114×110×15

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭質微粒、焼土粒少量含む。やや縮まっている。

Ⅲ区 35号土坑 (第150図 PL59)

X=49.147/Y=-71.363 N-6°-E 隅丸長方形 154×-×13

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。縮まり弱い。炭質物片含む。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。縮まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 褐色壤土ブロック15%、ニツ岳軽石(0~5mm)極少量含む。やや縮まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。崩れた焼土小斑を含む。縮まり弱い。

Ⅲ区 36号土坑 (第150図 PL59)

X=49.160/Y=-71.372 N-54°-E 円形 71×64×42

- 1 暗褐色砂質埴土 ニツ岳軽石(0~15mm)5%。縮まっている。地山砂層。
- 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)やや縮まっている

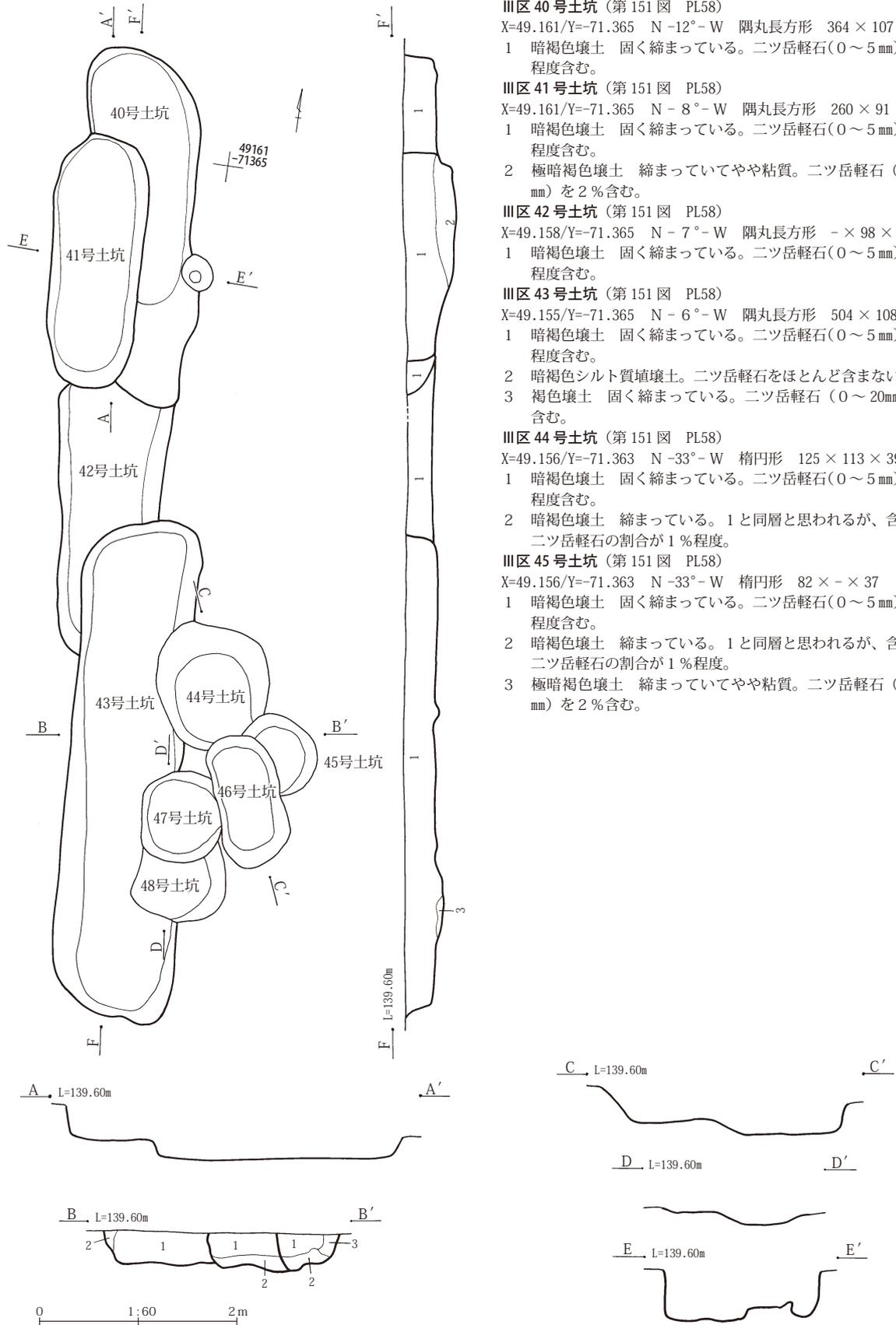
Ⅲ区 38号土坑 (第150図 PL60)

X=49.165/Y=-71.371 N-81°-W 楕円形 46×38×27

- 1 黒褐色シルトに近い砂質。縮まっている。ニツ岳軽石(0~15mm)少量含む。
- 2 暗褐色シルトに近い砂質。縮まっている。ニツ岳軽石(0~15mm)少量含む。

第150図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区土坑(3) 33~39号土坑

第1節 古代・中世の遺構と遺物



Ⅲ区 40号土坑 (第151図 PL58)

X=49.161/Y=-71.365 N-12°-W 隅丸長方形 364×107×32

- 1 暗褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~5mm)を3%程度含む。

Ⅲ区 41号土坑 (第151図 PL58)

X=49.161/Y=-71.365 N-8°-W 隅丸長方形 260×91×53

- 1 暗褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~5mm)を3%程度含む。
- 2 極暗褐色壤土 締まっていてやや粘質。二ツ岳軽石(0~3mm)を2%含む。

Ⅲ区 42号土坑 (第151図 PL58)

X=49.158/Y=-71.365 N-7°-W 隅丸長方形 -×98×26

- 1 暗褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~5mm)を3%程度含む。

Ⅲ区 43号土坑 (第151図 PL58)

X=49.155/Y=-71.365 N-6°-W 隅丸長方形 504×108×33

- 1 暗褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~5mm)を3%程度含む。
- 2 暗褐色シルト質埴土。二ツ岳軽石をほとんど含まない。
- 3 褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~20mm)2%含む。

Ⅲ区 44号土坑 (第151図 PL58)

X=49.156/Y=-71.363 N-33°-W 楕円形 125×113×39

- 1 暗褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~5mm)を3%程度含む。
- 2 暗褐色壤土 締まっている。1と同層と思われるが、含まれる二ツ岳軽石の割合が1%程度。

Ⅲ区 45号土坑 (第151図 PL58)

X=49.156/Y=-71.363 N-33°-W 楕円形 82×-×37

- 1 暗褐色壤土 固く締まっている。二ツ岳軽石(0~5mm)を3%程度含む。
- 2 暗褐色壤土 締まっている。1と同層と思われるが、含まれる二ツ岳軽石の割合が1%程度。
- 3 極暗褐色壤土 締まっていてやや粘質。二ツ岳軽石(0~3mm)を2%含む。

第151図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅲ区土坑(4) 40~48号土坑

第4章 遺構と遺物

IV区1号土坑 (第152図 PL60)

X=49.194/Y=-71.371 N -10°-E 楕円形 90×60×8

1 暗褐色シルト質壤土。黒色灰、炭質物の混土。

IV区2号土坑 (第152図 PL60)

X=49.197/Y=-71.371 N 円形 72×72×9

1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%含む。固く締まっている。

IV区3号土坑 (第152図 PL60)

X=49.198/Y=-71.368 N -12°-E 楕円形 76×70×19

1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。地山シルトブロック含む。締まっている。

2 極暗褐色シルト質壤土。ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。締まっている。

3 極暗褐色シルト質壤土。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。固く締まっている。

IV区4号土坑 (第152図 PL60)

X=49.200/Y=-71.371 N -33°-E 楕円形 82×70×41

1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。締まり弱くガサガサ。

2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。1層より粘質。やや締まっている。

3 極暗褐色壤土 黄褐色土ローム質のブロック含む。締まっている。

IV区5号土坑 (第152図 PL60)

X=49.201/Y=-71.369 N -78°-W 楕円形 100×67×47

1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。やや粘質。粒子細かい。

2 極暗褐色壤土 表層近くにニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。

IV区6号土坑 (第152図 PL60)

X=49.210/Y=-71.372 N -74°-W 円形 76×74×25

1 極暗褐色壤土 表層近くにニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。

IV区7号土坑 (第152図 PL60)

X=49.202/Y=-71.371 N -80°-W 楕円形 112×78×10

1 極暗褐色シルト質壤土。ニツ岳軽石(0~5mm)多く含む。炭質物粒含む。締まっている。

IV区8号土坑 (第152図 PL60)

X=49.194/Y=-71.380 N -85°-W 円形 104×102×54

1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。炭質物粒、焼土小ブロック含む。粒子のそろった締まり弱い層。矮小歯出土。

2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。褐色土ロームブロック含む。

3 極暗褐色壤土ニ砂壤土。ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。褐色土ロームブロック含む。

4 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土ロームブロック含む。

5 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。締まっている。

IV区9号土坑 (第153図 PL60)

X=49.196/Y=-71.380 N -5°-E 楕円形 116×72×40

1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)7%。締まっている。

2 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)少量含む。締まっている。

3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。やや締まっている。

4 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。締まっている。

IV区10号土坑 (第153図 PL60)

X=49.207/Y=-71.372 N -79°-W 不整形 210×122×20

1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。中~粗砂を多く含む。締まっている。壁・底面は硬質の砂層。底面中央は大粒のニツ岳軽石(0~100mm)とシルト、砂の固まった層。

IV区11号土坑 (第153図 PL60)

X=49.207/Y=-71.376 N -14°-E 隅丸長方形 235×90×11

1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色シルト斑(0~5mm)含む。締まっている。

IV区12号土坑 (第153図 PL60)

X=49.197/Y=-71.372 N -14°-E 楕円形 246×70×20

1 褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。締まっている。

2 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)多く含む。やや締まっている。

IV区13号土坑 (第153図 PL60)

X=49.209/Y=-71.384 N -25°-E 長方形 193×102×20

1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)極少量含む。締まり弱い。

2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まりやや弱い。

3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。締まっている。

4 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土ローム斑多く含む。締まっている。

IV区14号土坑 (第153図 PL61)

X=49.210/Y=-71.381 N -25°-E 楕円形 100×70×41

1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まりやや弱い。

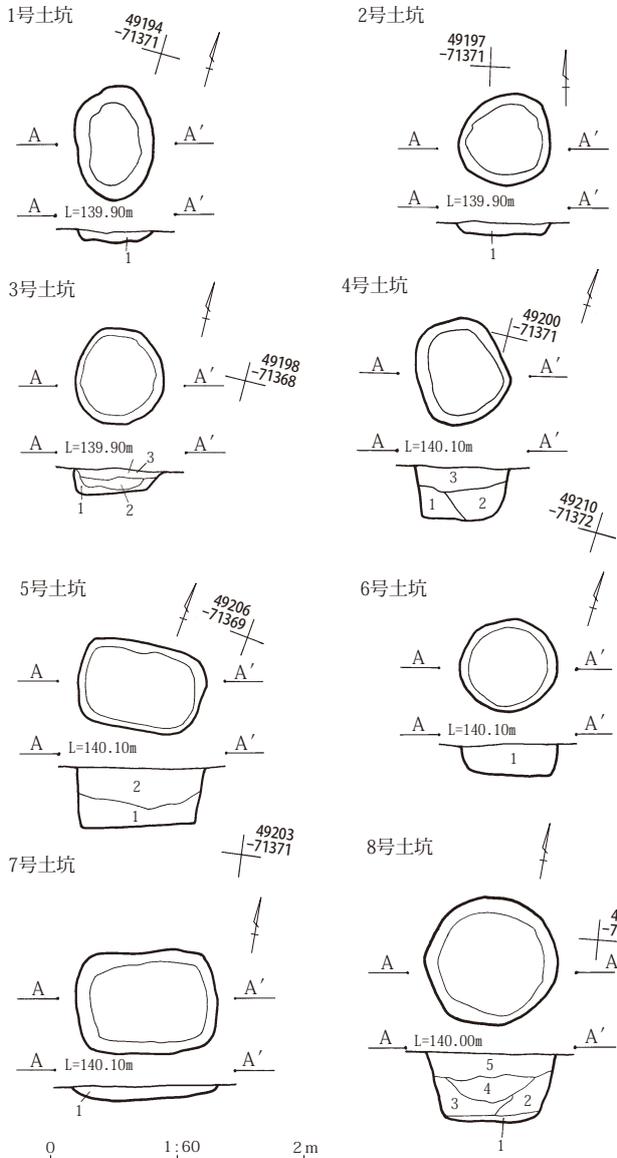
2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。締まっている。

3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土ローム斑多く含む。締まっている。

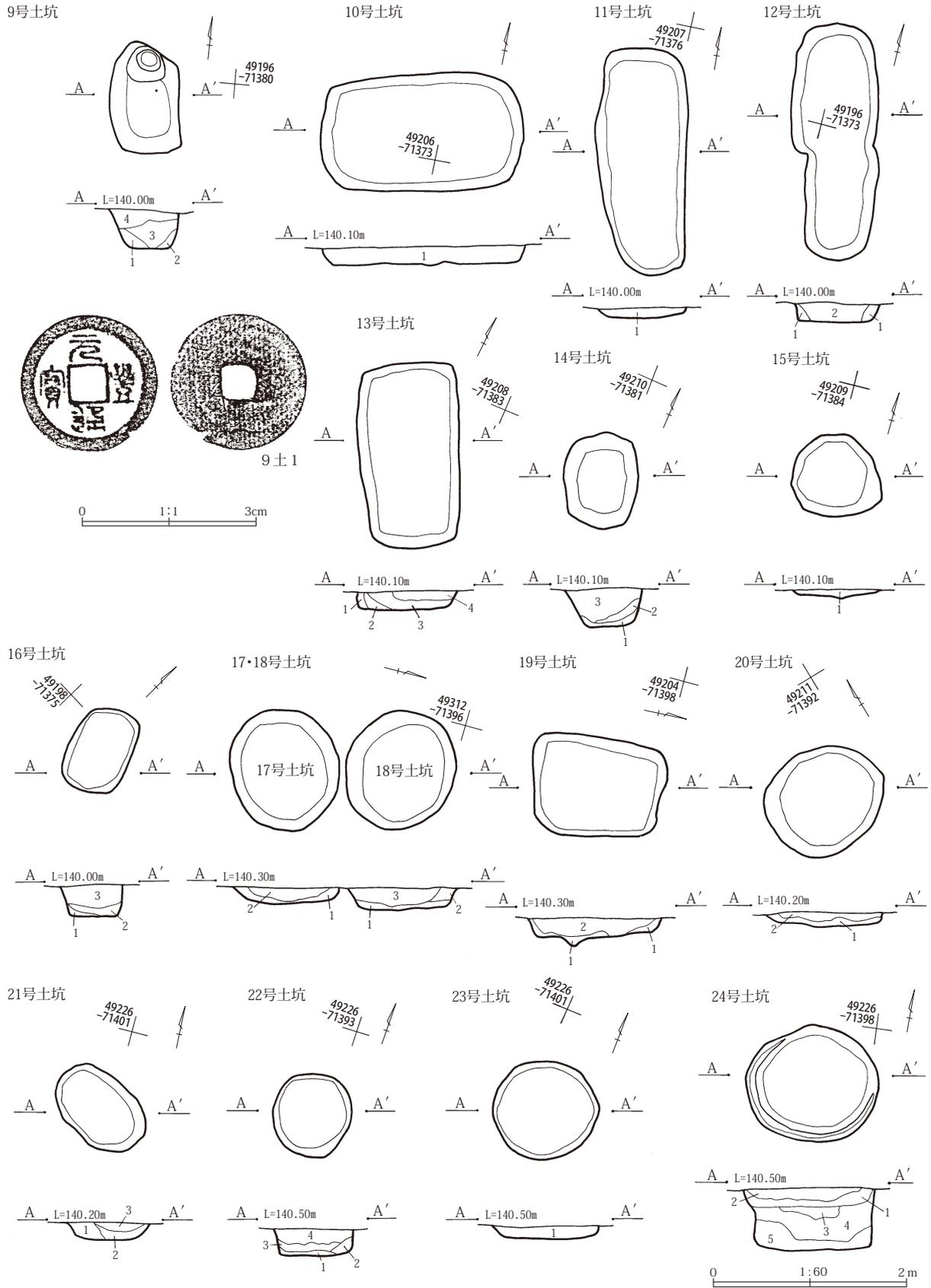
IV区15号土坑 (第153図 PL61)

X=49.209/Y=-71.384 N -77°-E 円形 100×86×8

1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)極少量含む。炭質物



第152図 万蔵寺廻り遺跡 IV区土坑(1) 1~8号土坑



第153図 万蔵寺廻り遺跡 IV区土坑(2) 9~24号土坑、9号土坑出土遺物

第4章 遺構と遺物

粒含む。締まっている。

IV区 16号土坑 (第153図 PL61)

X=49.198/Y=-71.375 N -20°-E 楕円形 93×66×34

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。締まりやや弱い。
- 2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)少量含む。炭質物粒含む。締まりやや弱い。
- 3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。締まっている。

IV区 17号土坑 (第153図 PL61)

X=49.212/Y=-71.396 N -60°-W 円形 130×110×16

- 1 極暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。黒褐色土小斑含む。締まっている。
- 2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。炭質物片含む。

IV区 18号土坑 (第153図 PL61)

X=49.212/Y=-71.396 N -76°-W 円形 124×113×23

- 1 極暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。黒褐色土小斑含む。締まっている。
- 2 極暗褐色砂壤土 黒褐色土小斑含む。
- 3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。炭質物片含む。

IV区 19号土坑 (第153図 PL61)

X=49304/Y=-71398 N -14°-E 長方形 134×104×30

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色シルト質壤土小ブロック含む。締まっている。

IV区 20号土坑 (第153図 PL61)

X=49.211/Y=-71.329 N -60°-E 円形 120×114×15

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。褐色シルト小ブロック含む。締まっている。
- 2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)多く含む。褐色シルト円形斑含む。締まっている。

IV区 21号土坑 (第153図 PL61)

X=49.219/Y=-71.389 N -59°-E 楕円形 102×68×18

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)3%。締まっている。
- 3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。炭質物粒含む。

IV区 22号土坑 (第153図 PL61)

X=49.226/Y=-71.393 N -18°-E 円形 87×83×29

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤質砂土
- 3 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まり弱い。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。炭質物少量含む。やや締まっている。

IV区 23号土坑 (第153図 PL61)

X=49.226/Y=-71.401 N -65°-W 円形 110×104×12

- 1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色地山シルトブロック1%。

IV区 24号土坑 (第153図 PL61)

X=49.226/Y=-71.398 N -82°-W 円形 138×120×52

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。やや締まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。炭質物含む。やや締まっている。
- 3 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。黒褐色の縞状斑を中位に挟む。締まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)20%。やや締まっている。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。締まり弱い。

IV区 25号土坑 (第154図 PL61)

X=49.232/Y=-71.395 N -86°-E 円形 94×94×23

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。焼土粒少量含む。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。炭質物片多く含む。焼土粒含む。やや締まっている。

IV区 26号土坑 (第154図 PL61)

X=49.232/Y=-71.395 N 円形 80×78×50

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)3%。締まり弱い。

- 2 極暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。炭質物小片含む。締まり弱い。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。炭質物片多く含む。焼土粒含む。やや締まっている。

IV区 27号土坑 (第154図 PL61)

X=49.228/Y=-71.395 N -70°-E 円形 102×108×26

- 1 黒褐色砂壤土 汚れたAs-B、As-kk粒を主体とする。暗褐色土斑30%。締まり弱い。

IV区 28号土坑 (第154図 PL61)

X=49.213/Y=-71.386 N -83°-W 円形 96×86×16

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。炭質物粒含む。締まりやや弱い。
- 2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(5~15mm)含む。1層より粘性弱い。やや締まっている。

IV区 29号土坑 (第154図 PL61)

X=49.214/Y=-71.380 N -5°-W 楕円形 92×72×23

- 1 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。20mm大のニツ岳軽石含む。締まりやや弱い。
- 2 極暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。地山砂粒、シルト粒多く含む。締まりやや弱い。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。10mm大のニツ岳軽石少量含む。やや締まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。地山シルト小斑多く含む。締まりやや弱い。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)1%。焼土粒含む。炭質物粒含む。地山シルト勝負ロック含む。締まっている。

IV区 30号土坑 (第154図 PL61)

X=49.232/Y=-71.405 N -86°-W 隅丸長方形 176×110×22

- 1 暗褐色壤質砂土 壁面から崩落した地山砂を主体とする。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(0~3mm)1%。やや締まっている。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(3~10mm)3%。やや締まっている。

IV区 31号土坑 (第154図 PL61)

X=49.234/Y=-71.404 N -63°-E 円形 96×88×41

- 1 極暗褐色砂壤土 黒色斑5%。地山砂を多く含む。締まり弱い。
- 2 極暗褐色砂壤土 地山砂を多く含むが、他に混入物は無い。締まりやや弱い。
- 3 極暗褐色砂壤土 地山砂を多く含む。ニツ岳軽石(0~5mm)1%。締まりやや弱い。
- 4 極暗褐色砂壤土 地山砂を多く含む。地山シルト小ブロック1%。ニツ岳軽石(0~3mm)含む。やや締まっている。

IV区 32号土坑 (第154図 PL62)

X=49.237/Y=-71.405 N -15°-W 円形 85×84×23

- 1 暗褐色砂壤土 地山砂を多く含む。ニツ岳軽石(0~3mm)含む。締まりやや弱い。
- 2 暗褐色砂壤土 地山砂を多く含む。ニツ岳軽石(0~5mm)1%。締まりやや弱い。
- 3 暗褐色砂壤土 地山砂を多く含む。ニツ岳軽石(0~5mm)3%。炭質物片を多く含む。褐色地山シルトブロック1%。やや締まっている。

IV区 33号土坑 (第154図 PL62)

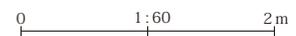
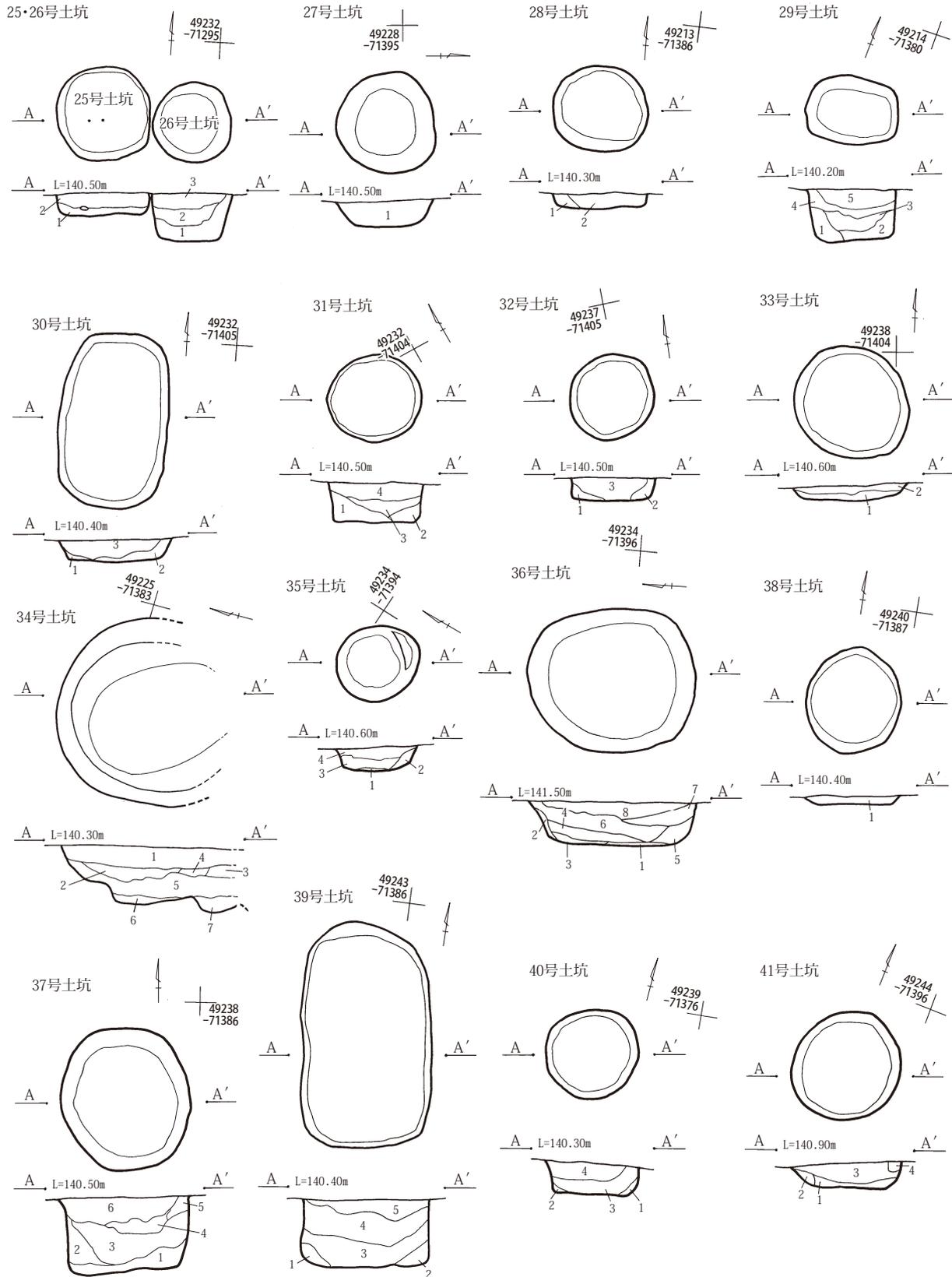
X=49.238/Y=-71.404 N -38°-E 円形 123×112×16

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)5%。やや締まっている。
- 2 暗褐色砂壤土 地山砂を多く含む。ニツ岳軽石(0~5mm)3%。炭質物片を多く含む。褐色地山シルトブロック1%。やや締まっている。

IV区 34号土坑 (第154図 PL62)

X=49.225/Y=-71.383 N -76°-W 円形 -×177×67

- 1 黒褐色軽植土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。焼土粒、炭質物粒含む。As-Bの可能性のある軽石粒含む。固く締まっている。
- 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。炭質物粒、焼土粒少量含む。As-Bの可能性のある軽石粒含む。締まっている。
- 3 黒褐色砂壤土 褐色ローム斑3%。締まっている。
- 4 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)3%。褐色ローム粒少量含む。締まっている。



第154図 万蔵寺廻り遺跡 IV区土坑(3) 25～41号土坑

第4章 遺構と遺物

5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。上層より砂質。やや締まっている。

6 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)10%。地山崩落土。やや締まっている。

7 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。締まりやや弱い。

IV区 35号土坑(第154図 PL62)

X=49.234/Y=-71.394 N-33°-E 円形 84×78×22

1 炭質物集中

2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。褐色ローム小ブロック含む。締まり弱い。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色ローム小ブロック含む。やや締まっている。

4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色ローム小斑1%。黒色灰の縞斑含む。焼土粒含む。やや締まっている。

IV区 36号土坑(第154図 PL62)

X=49.234/Y=-71.396 N-5°-E 円形 170×148×44

1 炭質物、黒色灰の集中層

2 黒褐色壤土 やや粘質。混入物無く、粒子揃った土。締まり弱い。

3 黒褐色壤土 やや粘質。焼土小ブロック、炭質物含む。締まり弱い。

4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭質物粒少量含む。締まりやや弱い。

5 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)5%。大粒のニツ岳軽石含む。壁面からの崩落砂と4、6層の混土。

6 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。炭質物片含む。砂粒多い。

7 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)2%。褐色土粒子多く含む。やや締まっている。

8 黒褐色壤土 砂粒多く含む。焼土小ブロック少量含む。締まっている。

IV区 37号土坑(第154図 PL62)

X=49.238/Y=-71.406 N 楕円形 145×132×79

1 暗褐色壤土 やや粘質。ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。粒子の揃った土。締まり弱い。

2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色土ブロック含む。締まりやや弱い。

3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。褐色土の崩れた斑を含む。

4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色、黄褐色斑3%。締まっている。

5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。締まり弱い。

6 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)2%。褐色土粒子多く含む。締まっている。

IV区 38号土坑(第154図 PL62)

X=49.240/Y=-71.387 N-5°-E 円形 109×77×10

1 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。炭質物粒少量含む。固く締まっている。

IV区 39号土坑(第154図 PL62)

X=49.243/Y=-71.386 N 隅丸長方形 230×130×68

1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。地山砂粒含む。締まり弱い。

2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。地山砂粒含む。褐色土小ブロック含む。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~30mm)20%。炭質物片含む。締まり弱い。

4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)10%。炭質物片多く含む。やや締まっている。

5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)3%。炭質物片、黒色灰の斑多く含む。焼土小ブロック含む。締まっている。

IV区 40号土坑(第154図 PL62)

X=49.239/Y=-71.377 N-8°-E 円形 94×92×32

1 暗褐色砂壤土 地山砂層主体。締まり弱い。

2 黒褐色砂壤土 地山砂の汚れたもの。締まり弱い。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)5%。やや締まっている。

4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)3%。締まっている。

IV区 41号土坑(第154図 PL62)

X=49.244/Y=-71.396 N-6°-W 円形 116×105×28

1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。褐色土斑多く含む。締まりやや弱い。

2 褐色土と黒褐色土の混土。やや締まっている。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。暗褐色土、褐色土の斑を含む。炭質物含む。やや締まっている。

4 褐色土ブロックが崩れたもの。

IV区 42号土坑(第155図 PL62)

X=49.247/Y=-71.405 N-12°-E 楕円形 152×90×16

1 暗褐色砂壤土 地山砂主体。締まり弱い。

2 暗褐色壤土 9号住居覆土と地山砂の混土。締まり弱い。

3 暗褐色砂壤土 地山砂・シルト斑40%、黒褐色土斑60%。締まりやや弱い。

4 黒褐色壤土 褐色土ブロック10%。ニツ岳軽石0~15mm)1%。黒褐色土斑30%。やや締まっている。

IV区 43号土坑(第155図 PL62)

X=49.242/Y=-71.402 N-82°-W 円形 84×80×14

1 褐色土の崩れたブロック中心。

2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土粒子多く含む。やや締まっている。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。褐色土小ブロック多く含む。炭質物含む。やや締まっている。

IV区 44号土坑(第155図 PL62)

X=49.242/Y=-71.400 N-71°-W 円形 90×90×29

1 暗褐色砂壤土 褐色土と地山砂の混土。

2 黒褐色砂壤土 褐色土斑10%。

3 黒褐色砂壤土 褐色土小ブロック含む。As-Bを含む可能性。

4 黒褐色壤土 褐色土斑3%。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。炭質物含む。

IV区 45号土坑(第155図 PL62)

X=49.242/Y=-71.400 N-71°-W 円形 90×90×29

1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。褐色土粒含む。締まっている。

2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。褐色土斑3%。締まっている。

3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)少量含む。褐色土斑5%。全体に褐色土粒子多く含む。やや締まっている。

IV区 46号土坑(第155図 PL62)

X=49.243/Y=-71.400 N-52°-E 円形 90×86×14

1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土粒含む。やや締まっている。

2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。褐色土小ブロック1%。炭質物含む。締まっている。

IV区 47号土坑(第155図 PL62)

X=49.245/Y=-71.399 N 楕円形 106×86×21

1 黒褐色壤土 褐色土粒含む。締まり弱い。

2 褐色軽殖土 地山ブロック

3 暗褐色壤土 地山ブロック30%。ニツ岳軽石(0~3mm)含む。

4 黒褐色壤土~砂壤土。ニツ岳軽石(0~50mm)含む。締まりやや弱い。

5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)多く含む。褐色土斑7%。締まっている。

IV区 48号土坑(第155図 PL62)

X=49.246/Y=-71.401 N-15°-W 円形 83×85×33

1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)3%。砂の小斑含む。締まり弱い。

2 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。炭質物含む。やや締まっている。

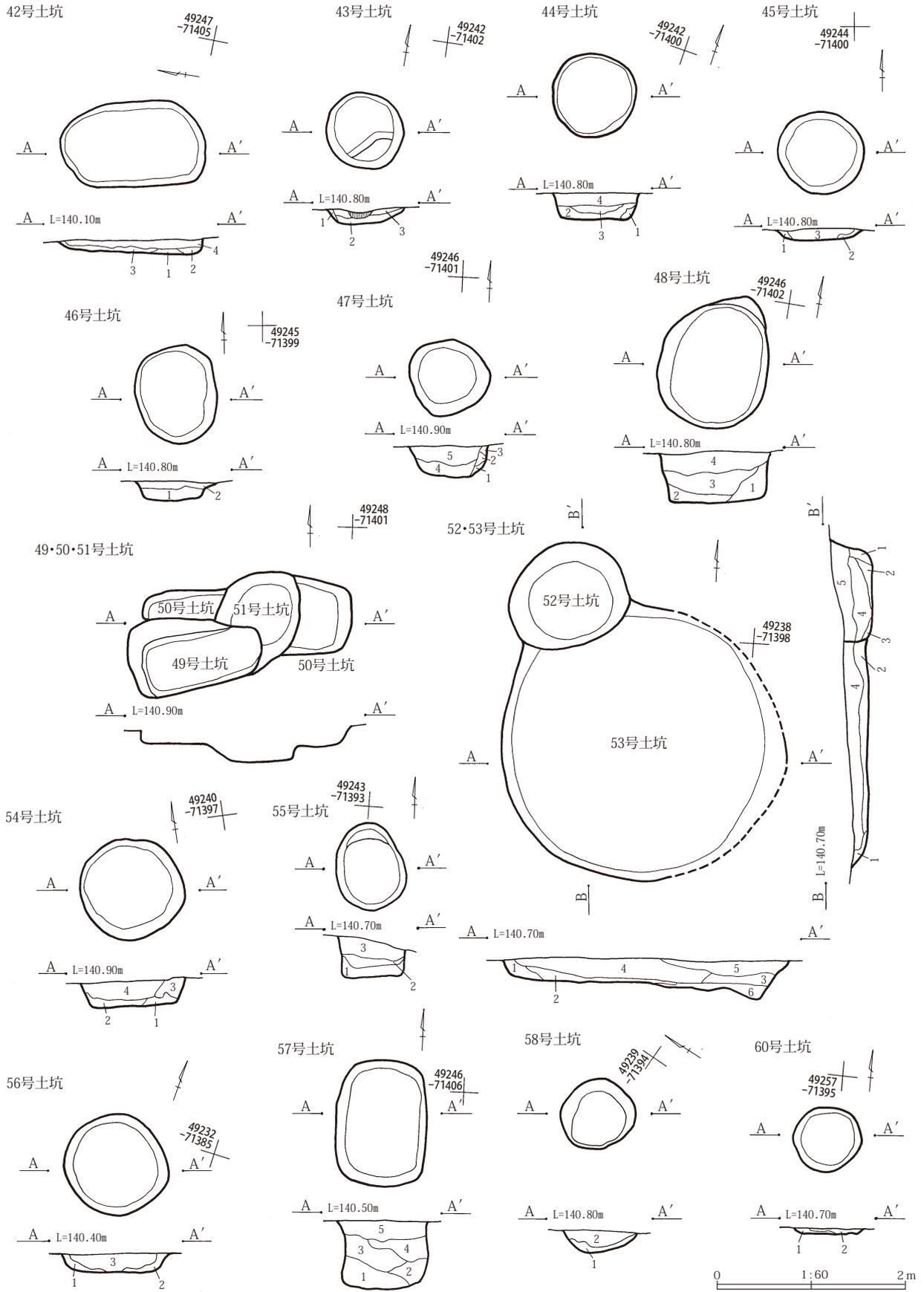
3 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)1%。炭質物含む。やや締まっている。

4 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)7%。炭質物含む。締まっている。

IV区 52号土坑(第155図 PL63)

X=49.238/Y=-71.398 N-74°-W 円形 129×110×44

1 黒褐色壤質砂土 地山砂の汚れたもの。締まりやや弱い。



第155図 万蔵寺廻り遺跡 IV区土坑(4) 42~58・60号土坑

第4章 遺構と遺物

- 2 黒褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。地山砂の汚れたもの。締まりやや弱い。
- 3 黒褐色壤質砂土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。地山砂の汚れたもの。締まりやや弱い。
- 4 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)5%。締まりやや弱い。
- 5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。締まっている。

IV区 53号土坑(第155図 PL63)

X=49.238/Y=-71.398 N -23°-E 円形 -×196×40

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土斑含む。締まり弱い。
- 2 暗褐色壤土~軽植土。ニツ岳軽石(0~5mm)1%。褐色土斑含む。炭質物含む。やや締まっている。
- 3 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)3%。やや締まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。炭質物片含む。黒褐色円形小斑含む。締まっている。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。炭質物片含む。締まっている。
- 6 暗赤褐色砂壤土 地山砂に近いが、下層に7号住居埋土あり。貼ったものか。

IV区 54号土坑(第155図 PL63)

X=49.240/Y=-71.397 N -82°-E 円形 110×107×27

- 1 黒褐色壤質砂土 地山砂層が崩れたものが汚れている。締まり弱い。
- 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。締まっている。
- 3 暗褐色軽植土 上位、地山の崩れたブロック。ニツ岳軽石少量含む。
- 4 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。As-Bの可能性ある軽石含む。締まっている。

IV区 55号土坑(第155図 PL63)

X=49.243/Y=-71.393 N -14°-E 楕円形 93×58×42

- 1 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)少量含む。締まり弱い。
- 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。やや締まっている。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。締まっている炭質物少量含む。

IV区 56号土坑(第155図 PL63)

X=49.232/Y=-71.385 N -20°-E 円形 112×108×10

- 1 黒褐色壤質砂土 地山砂の崩落土。締まり弱い。
- 2 黒褐色壤質砂土 地山砂の崩落土。ニツ岳軽石(0~20mm)含む。やや締まっている。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)10%。炭質物含む。締まっている。

IV区 57号土坑(第155図 PL63)

X=49.246/Y=-71.406 N 隅丸長方形 136×96×73

- 1 暗褐色壤土 やや砂質。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まり弱い。粒子の揃った土。
- 2 暗褐色壤土 やや砂質。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。やや締まっている。
- 3 暗褐色壤土 褐色土小ブロック含む。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。やや締まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。黒褐色土小斑1%。炭質物含む。やや締まっている。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。炭質物多く含む。焼土小ブロック含む。締まっている。

IV区 58号土坑(第155図 PL63)

X=49.240/Y=-71.395 N -32°-E 円形 81×75×23

- 1 暗褐色壤質砂土 地山砂層及びニツ岳軽石混砂層の崩れたもの。締まり弱い。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)1%。地山砂層の斑3%。やや締まっている。ぼやけた黒色灰の斑含む。

IV区 59号土坑(第156図 PL63)

X=49.258/Y=-71.396 N 長方形 -×74×33

- 1 黒褐色壤土~砂壤土。地山砂。締まり弱い。ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。
- 2 暗褐色壤土 締まり弱い。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。砂粒やや多い。締まり弱い。

IV区 60号土坑(第155図 PL63)

X=49.257/Y=-71.395 N -84°-W 円形 71×70×5

- 1 黒褐色砂壤土 地山砂層の汚れたもの。締まっている。ニツ岳軽石(0~3mm)少量含む。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)30%。炭質物少量含む。締まっている。

IV区 61号土坑(第156図 PL63)

X=49.259/Y=-71.390 N -84°-W 円形 -×77×20

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭質物含む。締まりやや弱い。

IV区 62号土坑(第156図 PL63)

X=49.257/Y=-71.380 N -83°-W 楕円形 96×68×15

- 1 暗褐色砂壤土。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。炭質物少量含む。締まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。炭質物多く含む。締まっている。

IV区 63号土坑(第156図 PL63)

X=49.253/Y=-71.381 N 円形 108×105×14

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色ローム粒含む。締まっている。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。褐色ローム斑1%。やや締まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。炭質物多く含む。締まっている。

IV区 64号土坑(第156図 PL63)

X=49.260/Y=-71.401 N -7°-E 円形 -×109×33

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。炭質物含む。締まっている。

IV区 65号土坑(第156図 PL63)

X=49.260/Y=-71.380 N -81°-W 隅丸長方形 179×-×68

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~20mm)3%。砂粒やや多い。締まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~20mm)1%。締まりやや弱い。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。やや粘質。締まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~30mm)3%。やや粘質。締まっている。炭質物片含む。

IV区 66号土坑(第156図 PL63)

X=49.237/Y=-71.391 N -40°-E 円形 107×93×36

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。締まっている。
- 2 3層中に褐色の縞状ブロックが入る。締まっている。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)1%。締まっている。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)含む。
- 5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。炭質物粒、褐色小ブロック含む。

IV区 67号土坑(第156図 PL63)

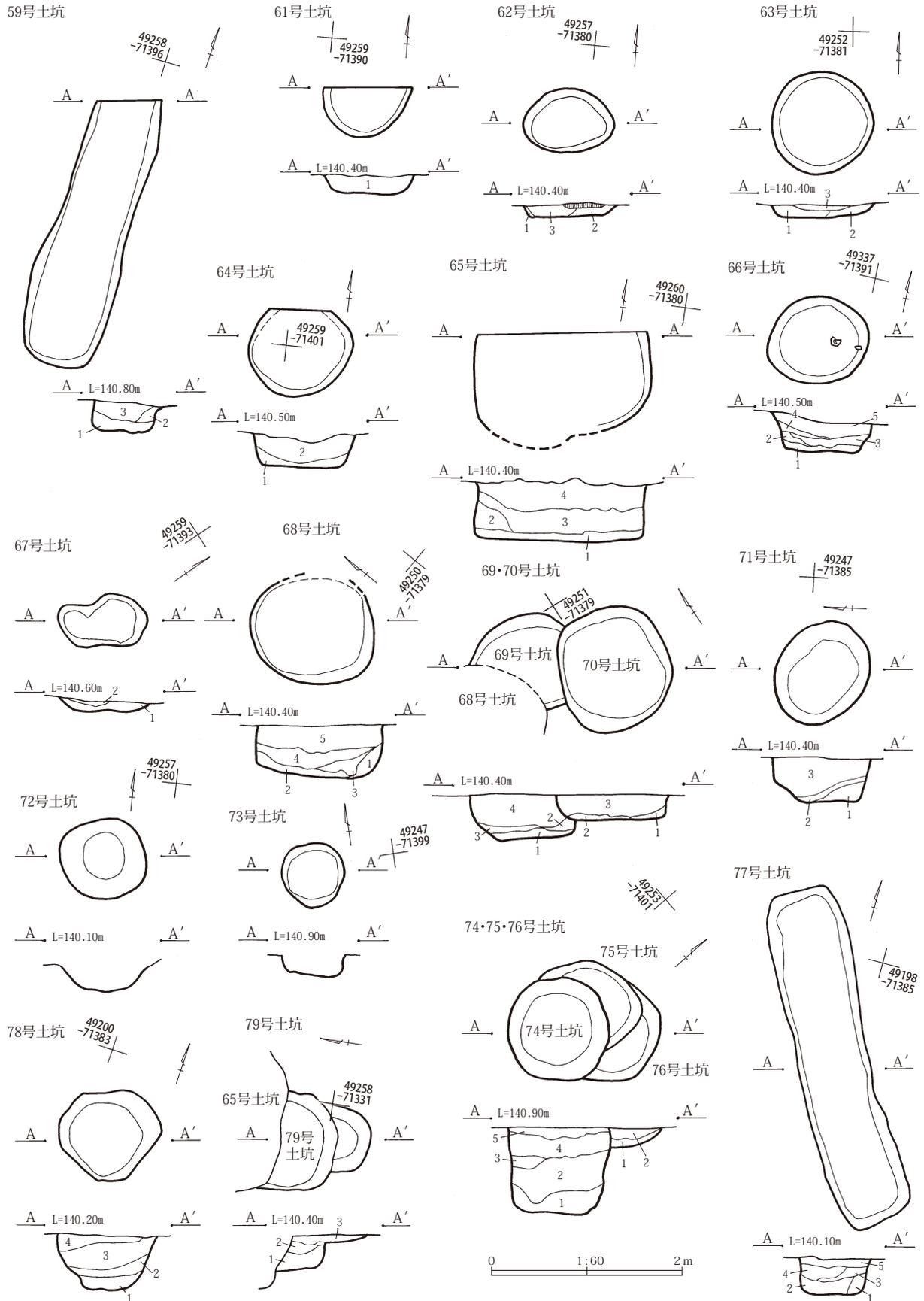
X=49.239/Y=-71.393 N -34°-W 不整形 93×45×12

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。炭質物含む。固く締まっている。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)1%。褐色土粒含む。固く締まっている。

IV区 68号土坑(第156図 PL63)

X=49.251/Y=-71.379 N -5°-E 円形 133×118×56

- 1 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。炭質物片含む。締まりやや弱い。
- 2 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。締まりやや弱い。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。炭質物粒少量含む。やや締まっている。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)3%。炭質物片含む。やや締まる。
- 5 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。炭質物片多く含む。締まっている。



第156図 万蔵寺廻り遺跡 IV区土坑(5) 59・61～79号土坑

第4章 遺構と遺物

IV区 69号土坑 (第156図 PL63・64)

X=49.251/Y=-71.379 N 円形 126×106×27

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭質物片含む。水平に圧縮された褐色土ブロック含む。やや縮まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。炭質物片含む。褐色土粒含む。縮まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。褐色土ブロック含む。やや縮まっている。
- 4 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)3%。炭質物片多く含む。褐色土小ブロック含む。縮まっている。

IV区 70号土坑 (第156図 PL64)

X=49.251/Y=-71.379 N -60°-E 円形 -×92×49

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色シルト斑(上部の地山土)含む。縮まっている。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。縮まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)3%。炭質物粒含む。褐色土小ブロック含む。縮まっている。

IV区 71号土坑 (第156図 PL64)

X=49.247/Y=-71.355 N -68°-E 楕円形 114×93×48

- 1 黒褐色壤土 やや砂質。ニツ岳軽石(0~5mm)1%。縮まっている。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。やや粘質。縮まっている。
- 3 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)7%。炭質物少量含む。縮まっている。

IV区 74号土坑 (第156図 PL64)

X=49.253/Y=-71.402 N -40°-W 円形 -×74×21

- 1 褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)1%。地山砂粒主体。縮まり弱くザラザラ。
- 2 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)3%。炭質物片少量含む。縮まりやや弱い。
- 3 2層と黒褐色土斑の混土。炭質物含む。縮まりやや弱い。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)1%。砂質強い。
- 5 黒褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~7mm)5%。炭質物粒、焼土粒含む。As-B含む。固く縮まっている。

IV区 76号土坑 (第156図 PL64)

X=49.253/Y=-71.402 N -66°-E 円形 94×88×25

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)1%。縮まっている。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~15mm)3%。固く縮まっている。

IV区 77号土坑 (第156図 PL64)

X=49.198/Y=-71.385 N -28°-E 長方形 360×56×36

- 1 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。縮まりやや弱い。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。縮まりやや弱い。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。縮まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)5%。縮まっている。
- 5 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。固く縮まっている。

IV区 78号土坑 (第156図 PL64)

X=49.201/Y=-71.384 N -73°-W 不整形 109×94×57

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石粒は含まないが、50mm大のニツ岳軽石が入る。縮まり弱い。
- 2 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)1%。縮まり弱い。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)7%。縮まっている。
- 4 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~5mm)3%。固く縮まっている。

IV区 79号土坑 (第156図 PL64)

X=49.258/Y=-71.330 N -9°-E 楕円形 -×67×33

- 1 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。やや縮まっている。やや粘質。
- 2 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)1%。やや縮まっている。やや粘質。
- 3 暗褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。縮まっている。やや粘質。炭質物等の混入はない。

IV区 80号土坑 (第157図 PL64)

X=49.208/Y=-71.398 N -17°-E 長方形 -×242×24

- 1 暗褐色砂壤土 ニツ岳軽石(0~3mm)含む。やや縮まっている。
- 2 黒褐色壤土 ニツ岳軽石(0~10mm)3%。縮まっている。
- 3 黄褐色軽粘土。地山土がこの部分だけブロック状に残る。下は固い砂層。

V区 1号土坑 (第157図 PL64)

X=49.318/Y=-71.419 N -40°-W 楕円形 159×69×14

- 1 褐灰色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。天明溶岩石少量含む。
- 2 明褐色灰色土 30mm以下の白色軽石を多く含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 2・3号土坑 (第157図 PL64)

X=49.275/Y=-71.390 N -60°-E 楕円形 96×75×12

- 1 褐灰色土 ニツ岳軽石(0~5mm以下)含む。やや縮まっている。
- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。天明溶岩石少量含む。

V区 4号土坑 (第157図 PL64)

X=49.307/Y=-71.409 N -79°-E 隅丸長方形 155×82×63

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~40mm)多く含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~20mm)含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 4 灰褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~15mm)含む。暗褐色シルト質土ブロック少量含む。縮まり弱い。粘性弱。

V区 5号土坑 (第157図 PL64)

X=49.302/Y=-71.412 N -9°-W 楕円形 118×87×12

- 1 明褐色土 ニツ岳軽石(0~30mm)と酸化鉄分含む。黄褐色のシルト質土ブロック含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 6号土坑 (第157図 PL64)

X=49.297/Y=-71.416 N -27°-W 円形 72×69×36

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~20mm)多く含む。やや縮まっている。粘性弱。上面に鉄分沈着。
- 2 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~30mm)含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 7号土坑 (第157図 PL64)

X=49.292/Y=-71.418 N -73°-W 円形 76×68×10

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~30mm)含む。明褐色シルト質ブロック含む。灰褐色砂混入。やや縮まっている。粘性弱。

V区 8号土坑 (第157図 PL64)

X=49.297/Y=-71.413 N -27°-E 楕円形 123×97×46

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~20mm)多く含む。やや縮まっている。粘性弱。上面に鉄分沈着。
- 2 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~30mm)含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 9号土坑 (第157図 PL64)

X=49.297/Y=-71.411 N -72°-W 円形 50×49×11

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~20mm)多く含む。やや縮まっている。粘性弱。上面に鉄分沈着。

V区 10号土坑 (第157図 PL64)

X=49.277/Y=-71.410 N -36°-W 楕円形 120×86×46

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~20mm)多く含む。やや縮まっている。粘性弱。上面に鉄分沈着。
- 2 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~30mm)含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 11号土坑 (第157図 PL64)

X=49.302/Y=-71.399 N -29°-W 円形 87×62×10

- 1 褐灰色土 20mm以下のニツ岳軽石含む。黒褐色および黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 12・13号土坑 (第157図 PL65)

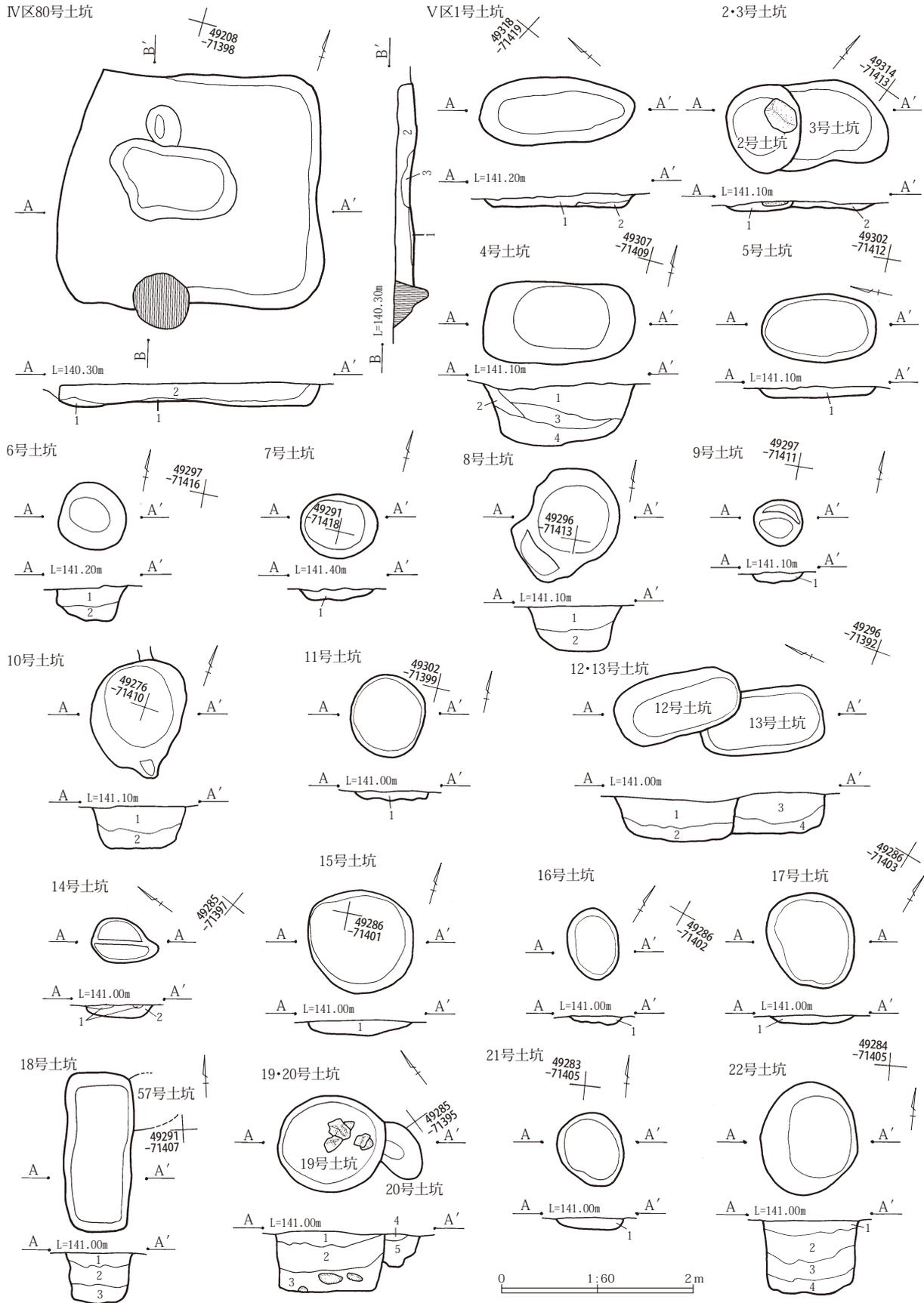
X=49.302/Y=-71.399 N -29°-W 円形 87×62×10

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。灰褐色砂質土ブロック含む。縮まり弱い。粘性弱。
- 2 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。縮まり弱い。粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色砂質土ブロック含む。縮まり弱い。粘性弱。
- 4 灰黄褐色土 シルトに近い砂質土。10mm以下のニツ岳軽石少量混入。縮まり弱い。粘性やや弱。

V区 14号土坑 (第157図 PL65)

X=49.285/Y=-71.397 N -34°-W 楕円形 70×46×11

- 1 黒褐色シルト質土 明褐色土ブロック含む。ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。灰褐色砂混入。縮まり弱い。粘性やや弱。



第157図 万蔵寺廻り遺跡 IV区土坑(6) 80号土坑・V区土坑(1) 1~22号土坑

第4章 遺構と遺物

- 2 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。明褐色砂質土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。

V区 15号土坑 (第157図 PL157)

X=49.286/Y=-71.400 N-66°-E 不整形 120×106×8

- 1 黒褐色シルト質土 明褐色土ブロック含む。ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。灰褐色砂混入。締まり弱い。粘性やや弱。

V区 16号土坑 (第157図 PL65)

X=49.286/Y=-71.402 N-41°-W 楕円形 74×56×8

- 1 黒褐色シルト質土 明褐色土ブロック含む。ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。灰褐色砂混入。締まり弱い。粘性やや弱。

V区 17号土坑 (第157図 PL65)

X=49.286/Y=-71.403 N-69°-W 楕円形 105×93×8

- 1 黒褐色シルト質土 明褐色土ブロック含む。ニツ岳軽石(0~10mm)少量含む。灰褐色砂混入。締まり弱い。粘性やや弱。

V区 18号土坑 (第157図 PL65)

X=49.291/Y=-71.407 N-2°-E 長方形 166×70×52

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。明黄褐色砂が混じる。締まり弱い。粘性弱。

- 2 褐灰色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。褐色土粒子少量含む。締まり弱い。粘性弱。

- 3 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~30mm)含む。褐色シルト質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 19・20号土坑 (第157図 PL65)

X=49.286/Y=-71.395 N-49°-W 円形 112×102×64

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(2~40mm)含む。明黄褐色の砂が混じる。やや締まっている。粘性弱。

- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(10~40mm)含む。明褐色の砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

- 3 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土粒子含む。締まり弱い。粘性弱。

- 4 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。明黄褐色の砂が混じる。締まり弱い。粘性弱。

- 5 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 21号土坑 (第157図 PL65)

X=49.283/Y=-71.405 N-27°-W 楕円形 78×65×12

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。10mm以下の礫含む。炭質物粒子及び褐色土ブロック少量含む。やや締まっている。粘性弱。

V区 22号土坑 (第157図 PL65)

X=49.284/Y=-71.405 N-5°-E 楕円形 117×100×76

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。

- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~30mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。

- 3 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石(0~30mm)含む。褐色シルト質土ブロック少量含む。締まり弱い。粘性弱。

- 4 灰黄褐色土 砂質性強い。ニツ岳軽石(0~30mm)含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 23号土坑 (第158図 PL65)

X=49.273/Y=-71.406 N-10°-W 楕円形 104×96×32

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。10mm以下の礫含む。炭質物粒子及び褐色土ブロック少量含む。やや締まっている。粘性弱。

- 2 灰黄褐色土 10mm以下のニツ岳軽石含む。褐色の砂が混じる。締まり弱い。粘性弱。

V区 24号土坑 (第158図 PL65)

X=49.294/Y=-71.393 N-21°-E 楕円形 108×92×32

- 1 褐灰色土 第3層に鉄分が沈着した層。

- 2 褐灰色土 シルト質土。20mm以下のニツ岳軽石含む。やや締まっている。粘性やや弱。

- 3 褐色土 シルトに近い砂質土。20mm以下のニツ岳軽石がやや多く含む。黄褐色土ブロックが少量含む。やや締まっている。粘性弱。

- 4 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~15mm)が少量含む。やや締まっている。粘性やや弱。

V区 25号土坑 (第158図 PL65)

X=49.282/Y=-71.399 N-86°-E 円形 67×58×23

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 26号土坑 (第158図 PL65)

X=49.280/Y=-71.397 N-43°-W 楕円形 75×48×14

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 27号土坑 (第158図 PL65)

X=49.280/Y=-71.398 N-70°-E 楕円形 95×58×23

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

- 2 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。地山砂混じる。

V区 28号土坑 (第158図 PL65)

X=49.279/Y=-71.401 N-77°-W 円形 56×46×8

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色砂質土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 29号土坑 (第158図 PL65)

X=49.275/Y=-71.390 N-60°-E 楕円形 96×75×12

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。黒褐色の砂含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 30号土坑 (第158図 PL65)

X=49.280/Y=-71.396 N-80°-E 円形 98×85×32

- 1 暗褐色土 シルト質に近い砂質土。ニツ岳軽石(0~30mm)含む。締まり中。粘性やや弱。

- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まり中。粘性弱。

V区 31号土坑 (第158図 PL65)

X=49.277/Y=-71.397 N-23°-E 円形 116×98×34

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石(0~10mm)含む。やや締まっている。粘性やや弱。

- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。やや締まっている。粘性弱。

V区 32号土坑 (第158図 PL65)

X=49.275/Y=-71.397 N-6°-W 隅丸長方形 373×100×22

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。明黄褐色土ブロック含む。締まり弱い。粘性弱。

- 2 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~30mm)含む。灰黄褐色の砂含む。やや締まっている。粘性弱。

V区 33号土坑 (第158図 PL65)

X=49.275/Y=-71.397 N-87°-W 円形 83×66×34

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。灰黄褐色の砂含む。やや締まっている。粘性弱。

- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。下層に褐灰色土ブロック含む。やや締まっている。粘性弱。

V区 34号土坑 (第158図 PL66)

X=49.275/Y=-71.392 N-16°-W 楕円形 394×88×18

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 35号土坑 (第158図 PL66)

X=49.275/Y=-71.392 N-80°-E 楕円形 161×62×8

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 36号土坑 (第158図 PL66)

X=49.275/Y=-71.392 N-88°-E 長方形 140×130×60

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。締まり弱い。粘性弱。

- 2 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。

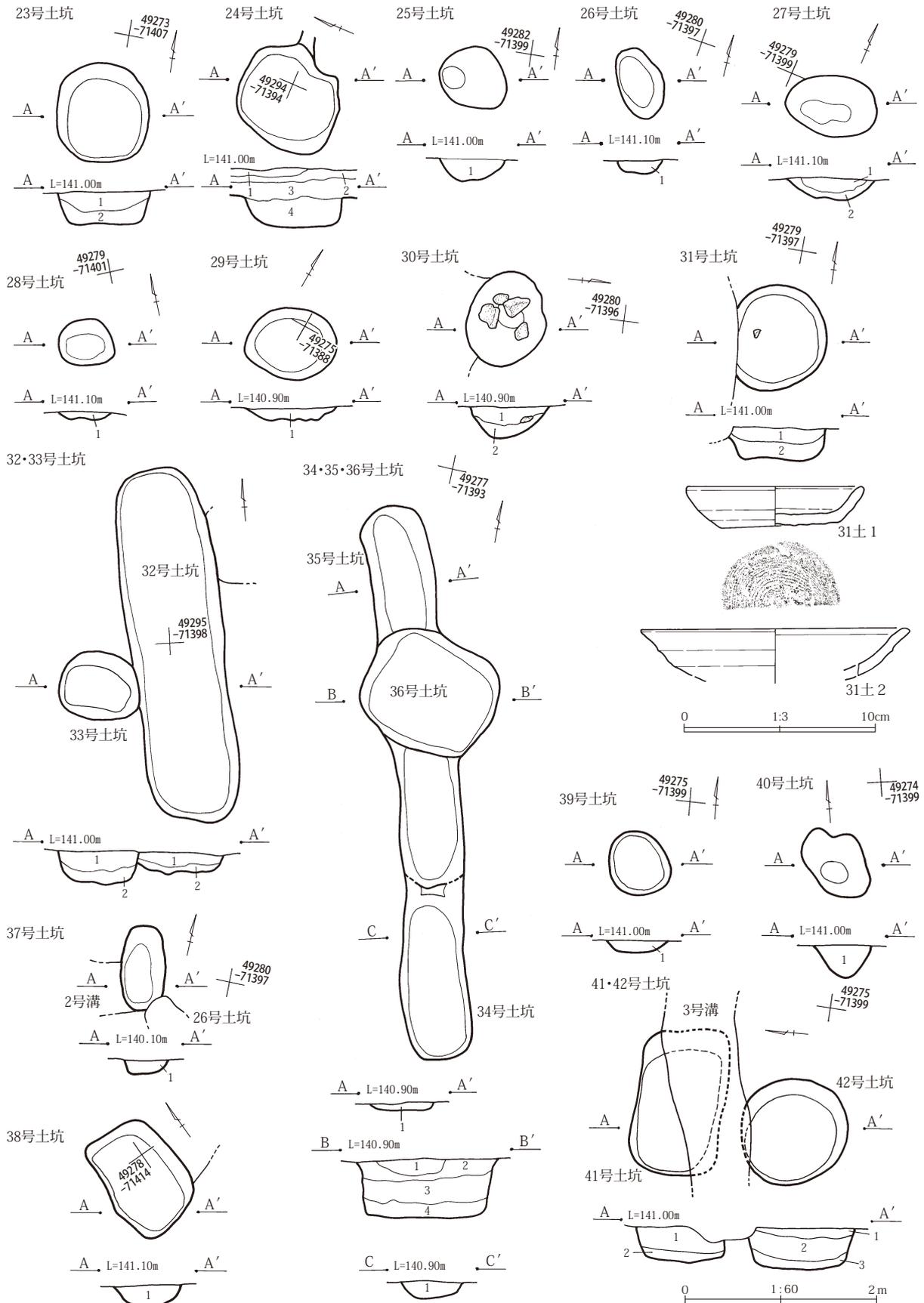
- 3 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~40mm)含む。黄褐色土粒子及びブロック含む。やや締まっている。粘性弱。

- 4 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。締まり弱い。粘性弱。

V区 37号土坑 (第158図 PL66)

X=49.280/Y=-71.397 N-8°-E 楕円形 90×45×12

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子及びブロック含む。やや締まっている。粘性弱。



第158図 万蔵寺廻り遺跡 V区土坑(2) 23~42号土坑、31号土坑出土遺物

第4章 遺構と遺物

V区 38号土坑 (第158図 PL66)

X=49.278/Y=-71.413 N-4°-E 長方形 118×83×23

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土ブロック及び粒子含む。炭質物粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 39号土坑 (第158図 PL66)

X=49.275/Y=-71.399 N-15°-E 円形 67×63×11

- 1 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。炭質物粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 40号土坑 (第158図 PL66)

X=49.274/Y=-71.399 N-38°-E 楕円形 84×59×34

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。二ツ岳軽石(0~10mm)含む。黒褐色土ブロック多量に含む。やや縮まっている。粘性やや弱。

V区 41号土坑 (第158図 PL66)

X=49.272/Y=-71.412 N-85°-W 長方形 153×92×38

- 1 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。炭質物粒子少量含む。縮まり弱い。粘性弱。
- 2 灰黄褐色土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。褐色土粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 42号土坑 (第158図 PL66)

X=49.272/Y=-71.412 N-6°-E 円形 114×111×44

- 1 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。黄褐色土粒子含む。縮まり弱い。粘性弱。
- 3 暗褐色土 砂質性強い。二ツ岳軽石(0~10mm)含む。縮まり弱い。粘性弱。

V区 43号土坑 (第159図 PL66)

X=49.274/Y=-71.410 N-9°-E 不整形 100×70×17

- 1 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。炭質物やや多く含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 44号土坑 (第159図 PL66)

X=49.285/Y=-71.399 N-20°-E 隅丸長方形 318×60×38

- 1 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。黄褐色土粒子1層より多めに含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 45号土坑 (第159図 PL66)

X=49.279/Y=-71.397 N-87°-W 楕円形 85×48×30

- 1 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。灰黄褐色土ブロック(地山の土)含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 暗褐色土 砂質性が強い。二ツ岳軽石(0~10mm)含む。黒褐色土ブロック少量含む。縮まり弱い。粘性弱。

V区 46号土坑 (第159図 PL66)

X=49.275/Y=-71.400 N-80°-E 隅丸長方形 355×80×33

- 1 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。黄褐色土粒子1層より多めに含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)少量含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 47号土坑 (第159図 PL66)

X=49.273/Y=-71.403 N-60°-W 楕円形 132×122×50

- 1 暗褐色土 シルトに近い砂質土。二ツ岳軽石(0~20mm)やや多く含む。にぶい黄褐色土ブロック及び炭質物含む。やや縮まっている。粘性やや弱。
- 2 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。灰黄褐色の砂含む。縮まり弱い。粘性弱。

V区 48号土坑 (第159図 PL66)

X=49.274/Y=-71.403 N-31°-W 方形 150×133×52

- 1 暗褐色砂質土 二ツ岳軽石(0~50mm)やや多く含む。炭質物粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土粒子及びにぶい黄褐色の砂含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。

やや縮まっている。粘性弱。

- 4 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。炭質物粒子極少量含む。縮まり弱い。粘性弱。

V区 49号土坑 (第159図 PL66)

X=49.275/Y=-71.403 N-81°-E 楕円形 180×68×33

- 1 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。炭質物少量含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色土 明黄褐色土ブロック及びにぶい黄褐色土ブロック含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 50号土坑 (第159図 PL66)

X=49.272/Y=-71.405 N-4°-W 隅丸長方形 185×80×40

- 1 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。暗褐色砂質土ブロック含む。炭質物粒子極少量含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 黒褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。にぶい黄褐色砂質土ブロックを多く含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。炭質物粒子及び黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 4 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子が第3層より多い。やや縮まっている。粘性弱。
- 5 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。炭質物粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 51号土坑 (第159図 PL66)

X=49.270/Y=-71.408 N-80°-W 隅丸長方形 218×155×33

- 1 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~30mm)含む。褐色及びにぶい黄褐色土ブロック含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 褐色土 二ツ岳軽石(0~5mm)含む。黄褐色土粒子含む。縮まりやや強。粘性弱。
- 4 褐色土 基本的に3層と同じ。褐灰色の砂が混じる。

V区 52号土坑 (第159図 PL66)

X=49.270/Y=-71.385 N-77°-E 円形 127×110×52

- 1 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。炭質物少量含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 2 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~15mm)含む。明黄褐色の砂混じる。炭質物少量含む。やや縮まっている。粘性弱。
- 3 暗褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土粒子含む。炭質物粒子少量含む。やや縮まっている。粘性弱。

V区 53号土坑 (第159図 PL66)

X=49.270/Y=-71.385 N-55°-W 円形 96×78×25

- 1 にぶい黄褐色土 二ツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色の砂含む。炭質物少量含む。縮まり弱い。粘性弱。
- 2 褐色土 二ツ岳軽石(0~10mm)含む。明黄褐色土粒子含む。炭質物少量含む。縮まり弱い。粘性弱。

V区 54号土坑 (第159図 PL67)

X=49.271/Y=-71.402 N-71°-E 円形 93×82×10

- 1 暗褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を含む。明黄褐色砂質土の粒子を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

V区 55号土坑 (第159図 PL67)

X=49.268/Y=-71.405 N-75°-E 楕円形 120×92×36

- 1 黒褐色土 やや大きめの二ツ岳軽石(0~30mm)を含む。暗褐色砂質土のブロックを含んでいる。縮まり、粘りともに全体に弱い。
- 2 暗褐色土 やや大きめの二ツ岳軽石(0~40mm)を含む。黒褐色砂質土のブロックを含んでいる。やや縮まっている。粘りは弱い。

V区 56号土坑 (第160図 PL67)

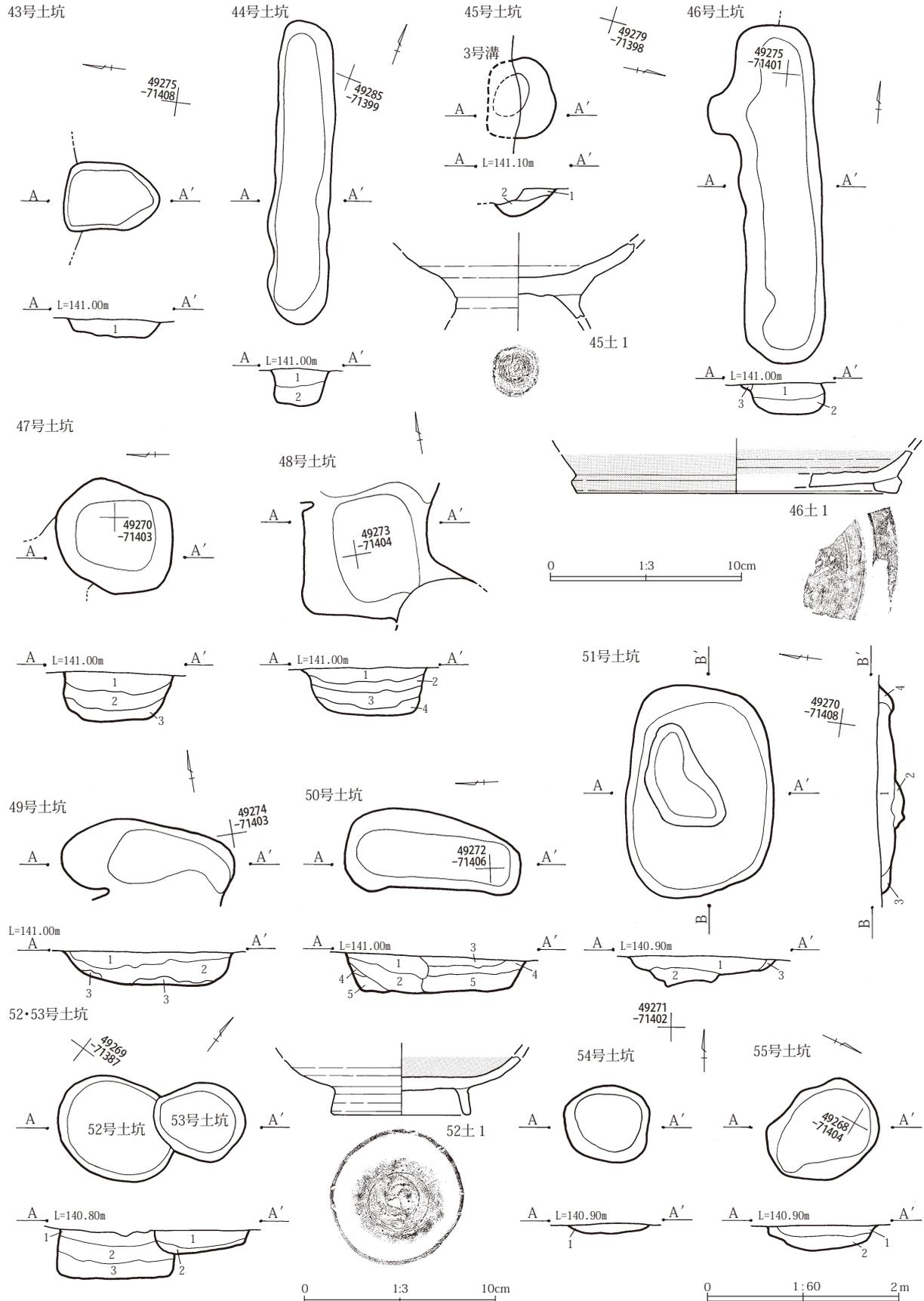
X=49.268/Y=-71.402 N-23°-W 楕円形 124×103×18

- 1 黒褐色土 やや大きめの二ツ岳軽石(0~30mm)を含む。褐色砂質土の粒子を含む。縮まり、粘りともに全体に弱い。

V区 58号土坑 (第160図 PL67)

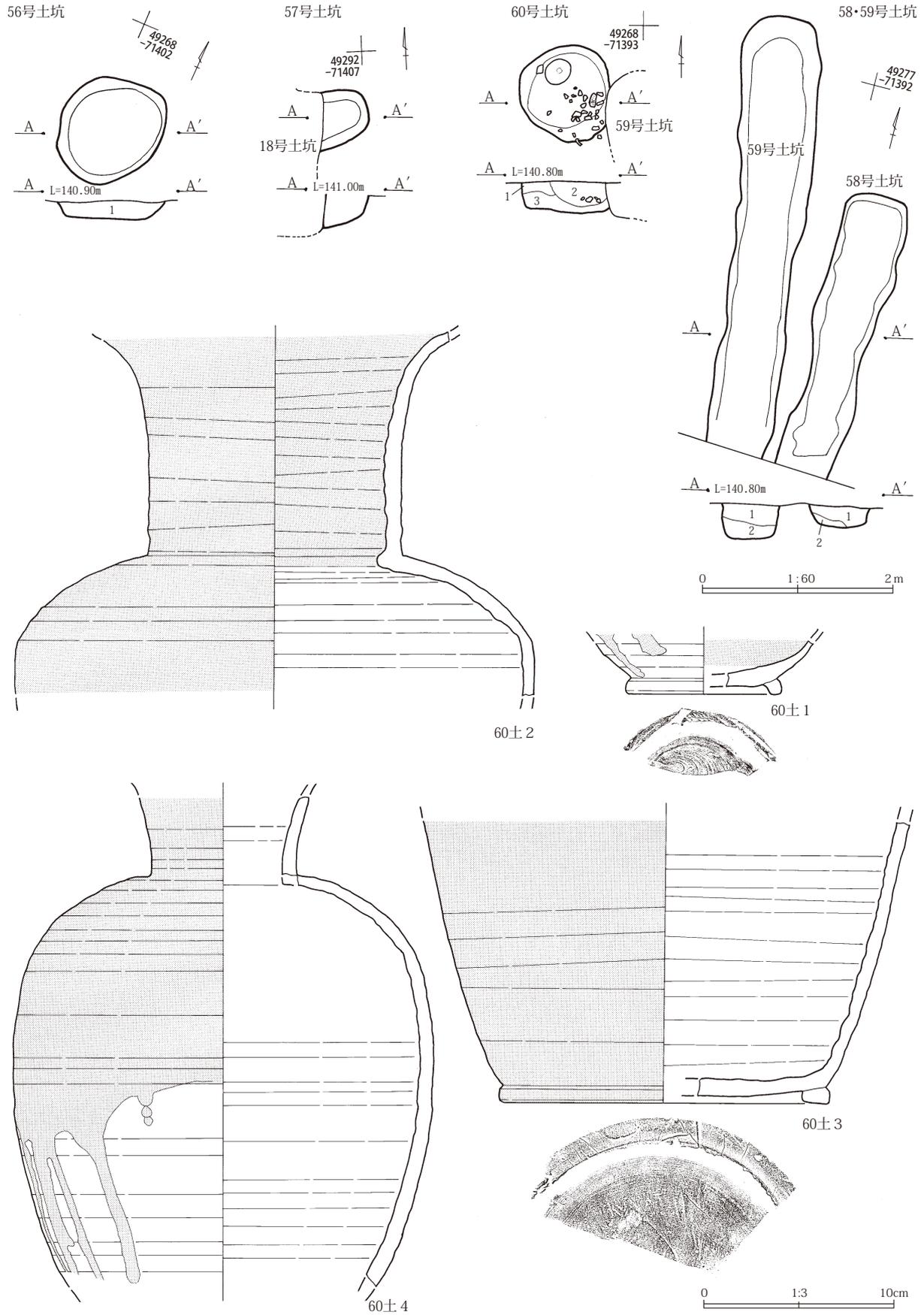
X=49.277/Y=-71.392 N-5°-W 隅丸長方形 304×58×12

- 1 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を少量含む。にぶい黄褐色砂質土の粒子を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

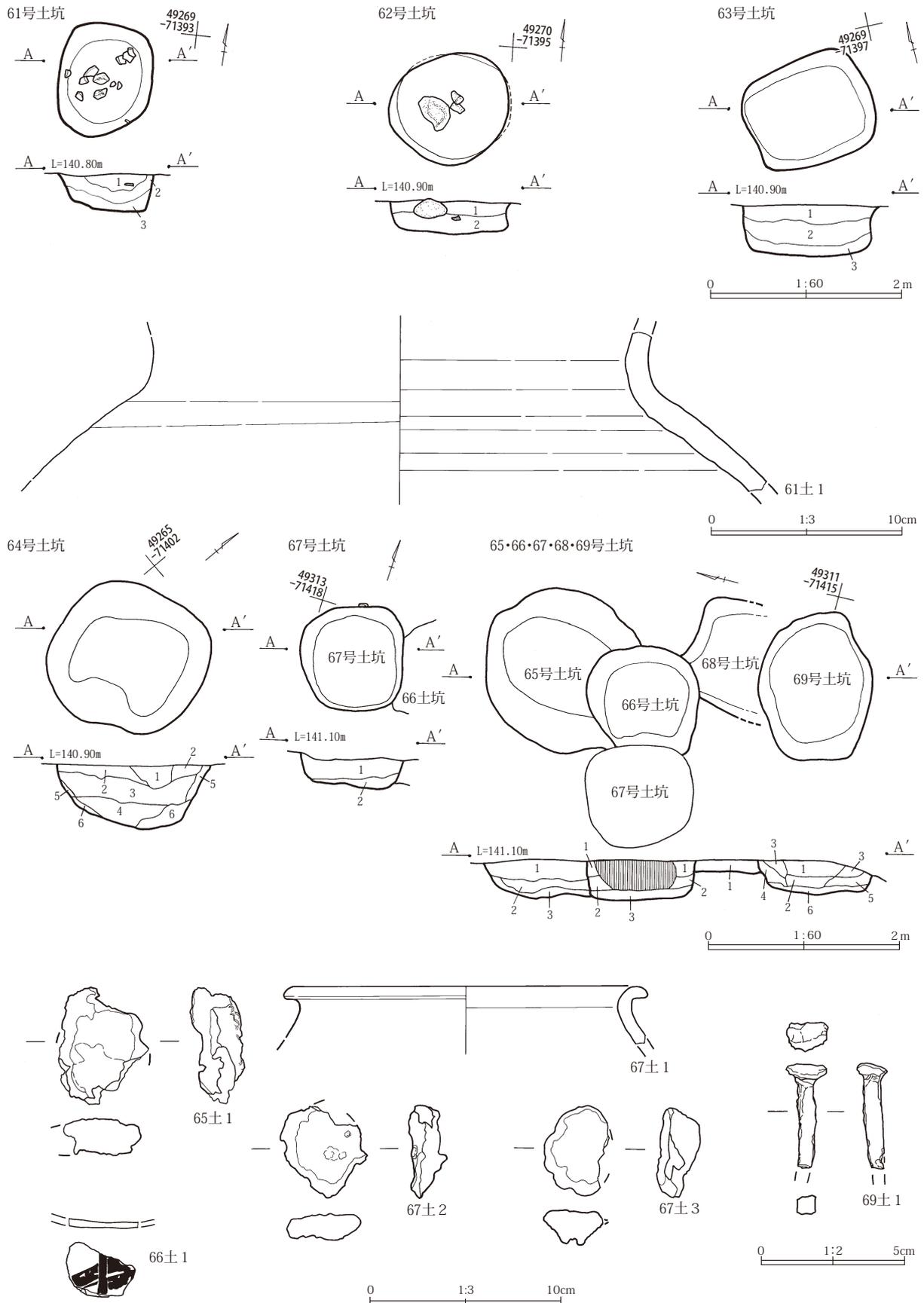


第159図 万蔵寺廻り遺跡 V区土坑(3) 43~55号土坑、45・46・52号土坑出土遺物

第4章 遺構と遺物



第160図 万蔵寺廻り遺跡 V区土坑(4) 56~60号土坑、60号土坑出土遺物



第161図 万蔵寺廻り遺跡 V区土坑(5) 61～69号土坑、61・65～67・69号土坑出土遺物

第4章 遺構と遺物

- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~3mm)を少量含む。砂のキメが1層より細かい。やや縮まっている。粘性やや弱。

V区 59号土坑(第160図 PL67)

X=49.277/Y=-71.392 N-8°-E 隅丸長方形 461×60×36

- 1 黒褐色土 小さめのニツ岳軽石(0~25mm)を少量含む。褐色砂質土の粒子を含む。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 2 黒褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を少量含む。褐色及びにぶい黄褐色砂質土の粒子を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

V区 60号土坑(第160図 PL67)

X=49.268/Y=-71.393 N-35°-E 楕円形 101×74×34

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石の細粒(0~5mm)を含む。黒色及びにぶい黄褐色砂質土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 2 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~15mm)を含む。炭質物やや多くを含む。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 3 にぶい黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。明黄褐色砂質土の粒子を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

※遺物は2層を中心に出土する。灰釉陶器碗(60土1)と長頸壺3個体(同No.2~4)がある。

V区 61号土坑(第161図 PL67)

X=49.269/Y=-71.393 N-4°-W 楕円形 120×95×8

- 1 黒褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 2 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。炭質物やや多くを含む。黄褐色砂質土のブロック及び黒褐色砂質土のブロックを含んでいる。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 3 にぶい黄褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。炭質物を極少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

※遺物は1層から出土している。軟質陶器の甕である。

V区 62号土坑(第161図 PL67)

X=49.270/Y=-71.395 N-86°-W 円形 126×125×35

- 1 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~15mm)を含む。黄褐色砂質土の粒子を少量含む。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 2 にぶい黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

V区 63号土坑(第161図 PL67)

X=49.269/Y=-71.396 N-80°-W 長方形 133×110×56

- 1 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。炭質物を少量含む。黄褐色砂質土の粒子を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 2 褐色土やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。褐色砂質土の粒子が入る。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 3 にぶい黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。上の2層より砂の極めが細かい。やや縮まっている。粘りは弱い。

V区 64号土坑(第161図 PL67)

X=49.268/Y=-71.402 N-77°-W 楕円形 161×150×63

- 1 黒褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。黒色砂質土のブロック及び黄褐色砂質土のブロック(シルトに近い砂質土)を含む。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 2 にぶい黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 3 灰黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。黄褐色砂質土の粒子を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 4 暗褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。褐色砂質土の粒子を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 5 黄褐色砂質土 砂質性が強い。小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。灰黄褐色砂質土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 6 褐色土 砂質性が強い。やや大きめのニツ岳軽石(0~30mm)を含む。暗褐色砂質土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区 65号土坑(第161図)

X=49.311/Y=-71.415 N-86°-W 円形 -×120×42

- 1 にぶい黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。

粒子の細かい灰黄褐色砂質土のブロックが下方に溜まっている。やや縮まっている。粘りは弱い。

- 2 灰黄褐色土 粒子粗い。ニツ岳軽石の細粒(0~5mm)を含む。黄褐色の砂混じる。締まり、粘りともに全体に弱い。
- 3 黒褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

※椀状滓が出土している。ガラス化した容器片。

V区 66号土坑(第161図 PL68)

X=49.311/Y=-71.415 N-34°-W 円形 136×112×53

- 1 灰黄褐色土 やや大きめのニツ岳軽石(0~30mm)を含む。明黄褐色砂質土の粒子を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 2 黒褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~15mm)を含む。褐色砂質土の粒子を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 3 黒褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。灰黄褐色砂質土のブロックを少量含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

※須恵器環の底部片が出土している。「中」かと思われる墨書があるが判読できない。

V区 67号土坑(第161図 PL68)

X=49.313/Y=-71.418 N-19°-E 長方形 110×109×32

- 1 暗褐色土 やや大きめのニツ岳軽石(0~30mm)を含む。炭質物を含んでいる。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 2 灰黄褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。にぶい黄褐色の砂を含んでいる。やや縮まっている。粘りは弱い。

※陶器の壺口縁片及び埴形鍛治滓2点が出土している。

V区 68号土坑(第161図)

X=49.311/Y=-71.415 N-8°-W 不整形 -×-×13

- 1 暗褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。黒褐色シルト質土のブロックを少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

V区 69号土坑(第161図 PL68)

X=49.311/Y=-71.415 N-76°-W 楕円形 154×117×34

- 1 暗褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 2 黒褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 3 にぶい黄褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~15mm)を少量含む。炭質物を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 4 灰黄褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。暗褐色砂質土の粒子を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 5 灰黄褐色砂質土のブロック多くを含む。小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 6 暗褐色土 シルトに近い砂質土。ニツ岳軽石の細粒(0~5mm)を少量含む。暗褐色砂質土の粒子を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。

※鉄製品釘1点が出土している。

V区 70号土坑(第162図 PL68)

X=49.313/Y=-71.415 N-80°-E 楕円形 120×106×16

- 1 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~15mm)を含む。にぶい黄褐色砂質土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区 71号土坑(第162図 PL68)

X=49.304/Y=-71.416 N-10°-E 長方形 150×87×30

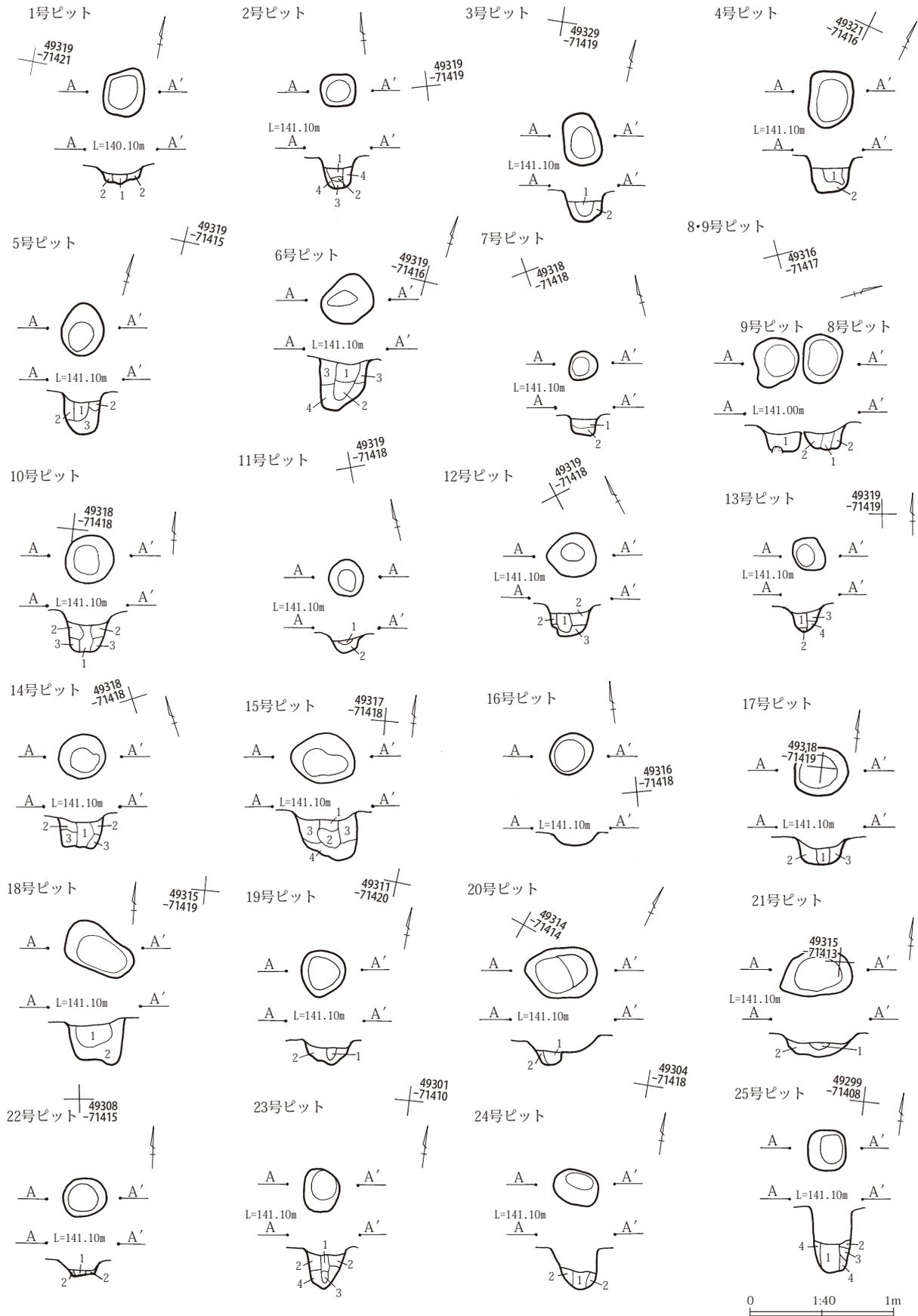
- 1 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。明黄褐色砂質土の粒子を少量含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 2 暗褐色土 1層よりやや大粒のニツ岳軽石(0~20mm)を含む。やや縮まっている。粘りは弱い。
- 3 暗褐色土 2層より極めが粗い。1層と2層の間中間的な粒径のニツ岳軽石(0~15mm程度)を含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区 72号土坑(第162図 PL68)

X=49.304/Y=-71.419 N-17°-E 長方形 135×110×40

- 1 暗褐色土 小粒のニツ岳軽石(0~10mm)を含む。
- 2 暗褐色土 やや小さいニツ岳軽石(0~20mm)を含む。粘りは弱い。

第4章 遺構と遺物



第163図 万蔵寺廻り遺跡 V区ピット(1) 1~25号ピット

第1節 古代・中世の遺構と遺物

3 暗褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~15mm)を含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区73号土坑(第162図 PL68)

X=49.305/Y=-71.416 N-8°-E 長方形 75×84×9

1 暗褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を含む。にぶい黄褐色土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区74号土坑(第162図 PL68)

X=49.284/Y=-71.389 N-11°-E 円形 109×108×25

1 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を少量含む。にぶい黄褐色砂質土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

2 黒褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。にぶい黄褐色砂質土のブロックを少量含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区75号土坑(第162図 PL68)

X=49.284/Y=-71.403 N-5°-E 円形 117×90×24

1 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

2 黒褐色土 やや締まっている。粘りは弱い。

V区76号土坑(第162図 PL68)

X=49.284/Y=-71.403 N-52°-E 円形 93×90×20

1 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区77号土坑(第162図 PL68)

X=49.281/Y=-71.410 N-46°-E 円形 130×125×34

1 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~15mm)を含む。暗褐色砂質土のブロックを含んでいる。締まり、粘りともに全体に弱い。

2 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~15mm)を含む。暗褐色砂質土のブロックを含んでいる。褐色砂質土のブロックを少量含む。やや締まっている。粘りは弱い。

V区78号土坑(第162図 PL68)

X=49.282/Y=-71.409 N-15°-E 楕円形 98×88×18

1 黒褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~15mm)を含む。暗褐色砂質土のブロックを含んでいる。炭質物粒子を少量含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

2 9号住居の覆土。

V区79号土坑(第162図 PL68)

X=49.277/Y=-71.402 N-19°-W 円形 80×60×43

1 暗褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を含む。粘りは弱い。

2 にぶい黄褐色土 やや大きめの二ツ岳軽石(0~30mm)、炭質物粒子を含む。

3 にぶい黄褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

V区80号土坑(第162図)

X=49.318/Y=-71.413 N-83°-W 楕円形 99×83×47

1 にぶい黄褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~15mm)を含む。やや締まっている。

2 にぶい黄褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)をやや多く含む。やや締まっている。粘りは弱い。

3 褐色土 二ツ岳軽石(0~50mm)。やや締まっている。粘りは弱い。

V区81号土坑(第162図 PL68)

X=49.306/Y=-71.413 N-76°-W 楕円形 90×74×16

1 黒褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。粘りは弱い。

V区82号土坑(第162図 PL68)

X=49.266/Y=-71.390 N-26°-W 円形 92×84×46

1 褐色土 二ツ岳軽石を含む。粘りは弱い。

V区83号土坑(第162図 PL68・69)

X=49.303/Y=-71.416 N-20°-W 楕円形 108×94×53

1 褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を含む。炭質物を少量含む。やや締まっている。粘りは弱い。

2 灰褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を含む。

3 暗褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を含む。にぶい黄褐色砂質土のブロックを少量含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

4 灰褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。炭質物を含む。締まり、粘りともに全体に弱い。

※灰釉陶器皿が出土している。

V区84号土坑(第162図 PL69)

X=49.305/Y=-71.303 N 楕円形 78×67×46

1 褐色土 やや大きめの二ツ岳軽石(0~40mm)を含む。粘りは弱い。

2 灰褐色土 大粒の二ツ岳軽石(0~100mm)を含む。にぶい黄褐色の砂を含む。やや締まっている。粘りは弱い。

V区86号土坑(第162図 PL69)

X=49.264/Y=-71.405 N 楕円形 -×120×20

1 黒褐色土 やや小さい二ツ岳軽石(0~20mm)を含む。灰黄褐色の砂混じる。締まり、粘りともに全体に弱い。

2 灰褐色土 小粒の二ツ岳軽石(0~10mm)を含む。にぶい黄褐色砂質土のブロックを少量含む。やや締まっている。粘りは弱い。

ピット

V区1号ピット(第163図 PL69)

X=49.320/Y=-71.420 楕円形 35×29×19

1 褐灰色土 にぶい黄褐色砂質土小ブロックを含んでいる。二ツ岳軽石粒を含む。川砂を含む。粘性あり。

2 明褐灰色土 細砂・川砂・二ツ岳軽石粒。やや粘性あり。

V区2号ピット(第163図 PL69)

X=49.320/Y=-71.419 隅丸方形 24×22×23

1 にぶい褐色土 細砂、川砂、褐灰色土小ブロックを含んでいる。

2 灰黄色土 川砂。褐灰色土小ブロックを含んでいる。

3 灰褐色土 細砂を含む。二ツ岳軽石粒、褐灰色土小ブロックを含んでいる。

4 褐灰色土 二ツ岳軽石粒を含む。若干の細砂を含む。

V区3号ピット(第163図 PL69)

X=49.320/Y=-71.419 隅丸長方形 36×24×22

1 灰褐色土 二ツ岳軽石粒を含む。若干の細砂。粘性あり。

2 灰褐色土 やや小さい二ツ岳軽石粒(0~20mm)を含む。細砂混じる。

V区4号ピット(第163図 PL69)

X=49.321/Y=-71.416 隅丸長方形 40×29×25

1 褐灰色土 細砂を含む。二ツ岳軽石粒を含む。

2 灰褐色土 二ツ岳軽石粒を含む。細砂、明黄褐色小ブロックを含んでいる。

V区5号ピット(第163図 PL69)

X=49.319/Y=-71.415 楕円形 36×29×31

1 二ツ岳軽石粒を含む。僅かな細砂を含む。やや砂質だが粘性あり。

2 灰黄色砂質土と褐灰色土の小ブロックの混土。二ツ岳軽石粒を含む。

3 褐灰色土 二ツ岳軽石粒やや多く、川砂を多量に混入する。

V区6号ピット(第163図 PL69)

X=49.318/Y=-71.416 隅丸長方形 35×29×37

1 灰褐色土 やや砂質。二ツ岳軽石粒を含む。

2 褐灰色土 二ツ岳軽石粒を含む。細砂やや多くを含む。

3 褐灰色土 二ツ岳軽石粒を含む。細砂・4層小ブロック混入。

4 褐灰色土 細砂を含む。二ツ岳軽石粒を含む。

V区7号ピット(第163図 PL69)

X=49.318/Y=-71.416 楕円形 21×18×15

1 にぶい黄褐色土 川砂を含む。2層土小ブロック、二ツ岳軽石粒。

2 褐灰色土 川砂を含む。

第4章 遺構と遺物

V区8号ピット (第163図 PL69)

X=49.316/Y=-71.417 楕円形 34×28×19

- 1 褐灰色土 ニツ岳軽石粒を多く含む。細砂混入。
- 2 灰黄褐色土 細砂を含む。若干のニツ岳軽石粒を含む。

V区9号ピット (第163図 PL69)

X=49.316/Y=-71.417 楕円形 30×29×19

- 1 暗灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。川砂多く砂層に近い。

V区10号ピット (第163図 PL69)

X=49.318/Y=-71.417 円形 34×32×29

- 1 褐灰色土 やや細砂質。若干の細砂を含む。ニツ岳軽石粒を含む。
- 2 褐灰色土 ニツ岳軽石粒を含む。細砂及び少量の砂利を含む。
- 3 黒褐色土 細砂混入。ニツ岳軽石粒多くを含む。

V区11号ピット (第163図 PL69)

X=49.319/Y=-71.418 楕円形 26×24×13

- 1 灰褐色土 地山細砂を含む。ニツ岳軽石粒を含む。
- 2 褐灰色土 地山細砂を含む。灰黄色土小ブロックを含んでいる。

V区12号ピット (第163図 PL69)

X=49.319/Y=-71.418 円形 33×31×22

- 1 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒細粒と細砂を含む。多少の粘性あり。
- 2 灰褐色土 ニツ岳軽石粒(0~20mm)と黄褐色軽石を含む。
- 3 灰黄褐色土 にぶい黄褐色土とニツ岳軽石粒、川砂を含む。

V区13号ピット (第163図 PL69)

X=49.319/Y=-71.419 楕円形 26×22×20

- 1 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。細砂・川砂を含む。
- 2 灰黄褐色土 細砂を含む。軽石粒を含む。
- 3 暗灰黄色土 川砂を含む。ニツ岳軽石粒(20mm程度)を含む。
- 4 黄灰色土 細砂質土 細砂を含む。若干のニツ岳軽石粒を含む。

V区14号ピット (第163図 PL70)

X=49.318/Y=-71.418 円形 33×30×25

- 1 灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。若干の細砂を含む。
- 2 灰黄褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。細砂・川砂を含む。締まっている。
- 3 暗灰黄色細砂質土 細かい川砂多くを含む。ニツ岳軽石粒を含む。

V区15号ピット (第163図 PL70)

X=49.317/Y=-71.418 楕円形 45×36×35

- 1 褐灰色細砂質土 灰白色川砂小ブロックを含む。軽石を含む。
- 2 褐灰色細砂質土 ニツ岳軽石粒を含む。細砂を含む。
- 3 褐灰色細砂質土 ブロック化した1層の土を含んでいる。締まっている。
- 4 褐灰色細砂質土 ニツ岳軽石粒。やや粘性あり。締まっている。

V区17号ピット (第163図 PL70)

X=49.316/Y=-71.419 円形 39×35×19

- 1 褐灰色土 ニツ岳軽石粒を含む。細砂を含む。
- 2 褐灰色土 ニツ岳軽石粒を含む。川砂・細砂やや多く混入。
- 3 褐灰色土 細砂質土と2層の小ブロック混土。

V区18号ピット (第163図 PL70)

X=49.315Y=-71.420 楕円形 49×30×33

- 1 灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。若干の地山細砂を含む。
- 2 褐灰色細砂質土 ニツ岳軽石粒を含む。地山細砂を含む。やや粘性あり。

V区19号ピット (第163図 PL70)

X=49.311/Y=-71.420 楕円形 32×29×17

- 1 灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。
- 2 灰黄褐色土 地山細砂を含む。ニツ岳軽石粒を含む。

V区20号ピット (第163図 PL70)

X=49.313Y=-71.414 楕円形 49×35×22

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。川砂、2層土の小ブロックを含んでいる。
- 2 にぶい黄褐色土 少量のニツ岳軽石粒を含む。細砂を含む。若干粘りがある。

V区21号ピット (第163図 PL70)

X=49.313/Y=-71.314 楕円形 50×32×16

- 1 灰白色細砂小ブロックを含む。灰褐色砂質土小ブロックの混土。前者に一部酸化鉄付着。ニツ岳軽石粒を含む。
- 2 褐灰色土 灰白色細砂小ブロックを含む。ニツ岳軽石粒を含む。

V区22号ピット (第163図 PL70)

X=49.308/Y=-71.415 円形 30×28×31

- 1 褐灰色土 ニツ岳軽石粒を含む。
- 2 灰黄褐色土 地山細砂を含む。

V区23号ピット (第163図)

X=49.301/Y=-71.410 楕円形 30×25×28

- 1 灰黄褐色土 黄褐色砂質土の粒子及び微量のニツ岳軽石粒を含む。
- 2 褐色土 全体が赤色化している。ニツ岳軽石粒を含む。
- 3 灰黄褐色土 地山細砂若干を含む。締まり強い。
- 4 暗褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。地山細砂を含む。締まり強い。

V区24号ピット (第163図)

X=49.304/Y=-71.411 楕円形 32×23×31

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。やや粘性あり。
- 2 黒褐色土 酸化鉄若干を含む。地山の礫混入。

V区25号ピット (第163図)

X=49.299/Y=-71.408 隅丸長方形 28×26×46

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土 地山灰白色細砂を多量に含む。
- 3 暗褐色土 小ブロック状地山細砂を含む。
- 4 灰黄褐色土 暗褐色の砂を含む。若干のニツ岳軽石粒を含む。

V区26号ピット (第164図)

X=49.301/Y=-71.404 隅丸長方形 30×27×37

- 1 褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。川砂を含む。酸化鉄。粘性あり。
- 2 灰褐色土 若干のニツ岳軽石粒を含む。酸化鉄若干沈着。
- 3 灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。やや粘性あり。
- 4 褐色土 ニツ岳軽石粒及び地山細砂を含む。やや砂質。
- 5 灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。若干の川砂を含む。やや粘性あり。

V区27号ピット (第164図)

X=49.298/Y=-71.403 楕円形 33×30×66

- 1 褐色粘質土 ニツ岳軽石粒を含む。地山川砂若干を含む。
- 2 黒褐色粘質土 ニツ岳軽石粒若干を含む。
- 3 黒褐色土 ニツ岳軽石粒含み、地山川砂やや多く混入。やや砂質。
- 4 褐色粘質土 ニツ岳軽石粒を含む。川砂若干を含む。
- 5 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石粒若干を含む。粘性あり。
- 6 灰褐色~褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。灰黄褐色砂質土を含む。やや粘性あり。

V区28号ピット (第164図)

X=49.300/Y=-71.403 隅丸長方形 26×24×17

- 1 にぶい赤褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。地山川砂を含む。酸化鉄。
- 2 灰褐色土 ニツ岳軽石粒を含む。川砂多くを含む。酸化鉄多く沈着。

V区36号ピット (第164図)

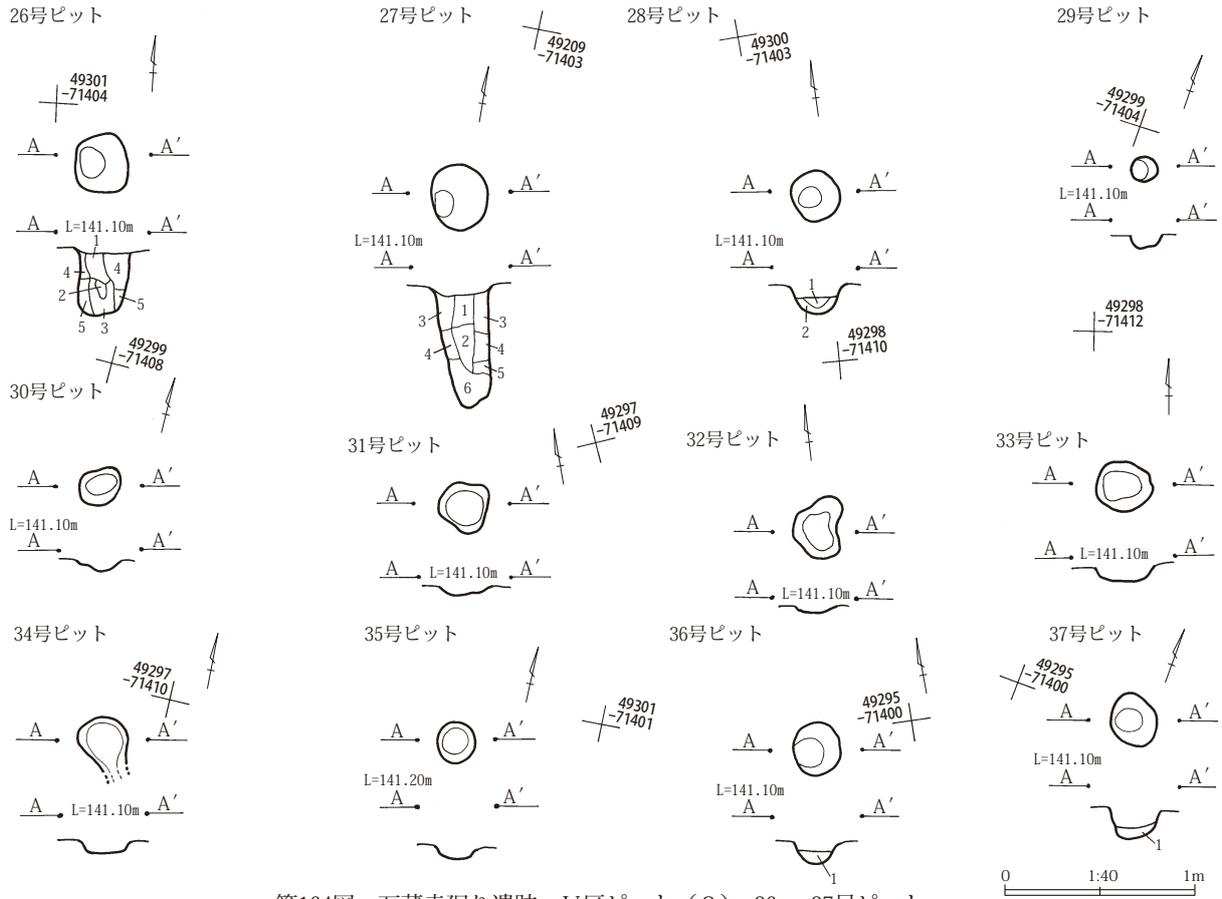
X=49.295/Y=-71.400 楕円形 28×23×13

- 1 川砂に灰褐色粘質土小ブロックを含む混土。全体としてにぶい黄褐色を呈す。

V区37号ピット (第164図)

X=49.295/Y=-71.400 楕円形 29×24×17

- 1 暗褐色粘質土 ニツ岳軽石粒を僅かに含む。



第164図 万蔵寺廻り遺跡 V区ピット (2) 26～37号ピット

(5) 竪穴状遺構

V区1号竪穴状遺構 (第165図)

V区南西隅に位置し、8号住居に大半を切られた状態で検出された。住居である可能性が高いが、確定できないため竪穴状遺構として扱う。長軸方位はN-84°-E、規模は長軸長3.20m、短軸長2.16m、深さ23cm。残存する覆土には微量のHr-FPと炭質物が含まれ、粘性を持つ。出土遺物が無く、時期、性格ともに確かではないが、8号住居が11世紀前半であるため、11世紀以前の遺構と考えられる。

V区1号竪穴状遺構土層観察所見

- 1 褐色土 緻密。粘性多少あり。若干の二ツ岳軽石と微量の酸化した橙色土軽石含む。
- 2 にぶい黄褐色土 やや粘性あり。二ツ岳軽石細粒含む。
- 3 灰黄褐色土 粘性多少あり。二ツ岳軽石含む、微量の明黄褐色土軽石と炭化物含む。
- 4 褐灰色土 粘性あり。二ツ岳軽石と灰黄褐色土小ブロック含む。
- 5 褐色土 径20mm以下の二ツ岳軽石含む。灰黄褐色の砂含む。やや締まっている。粘性弱い。



第165図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号竪穴状遺構

(6) 溝

I区1号溝 (第166図 PL.71)

位置 I区南端に位置する。

形態 東から南西に向かって弧を描くように走り、次第に幅が広がる。断面形状は緩やかな立ち上がりのV字形。

規模 調査長は14.4m、最大幅10.3m、最深部は1.70m。

遺物 覆土中から開元通宝が1枚出土している。

所見 時間的推移の詳細は不明だが、覆土上位に第1次堆積に近いAs-Bが見られる。北から南に向かって少しずつ広げられたものと推測される。覆土は軽石の他に円礫を含み、底面付近にはシルト質の層や粗砂を多く含む。

V区1号溝 (第167図 PL.71・72)

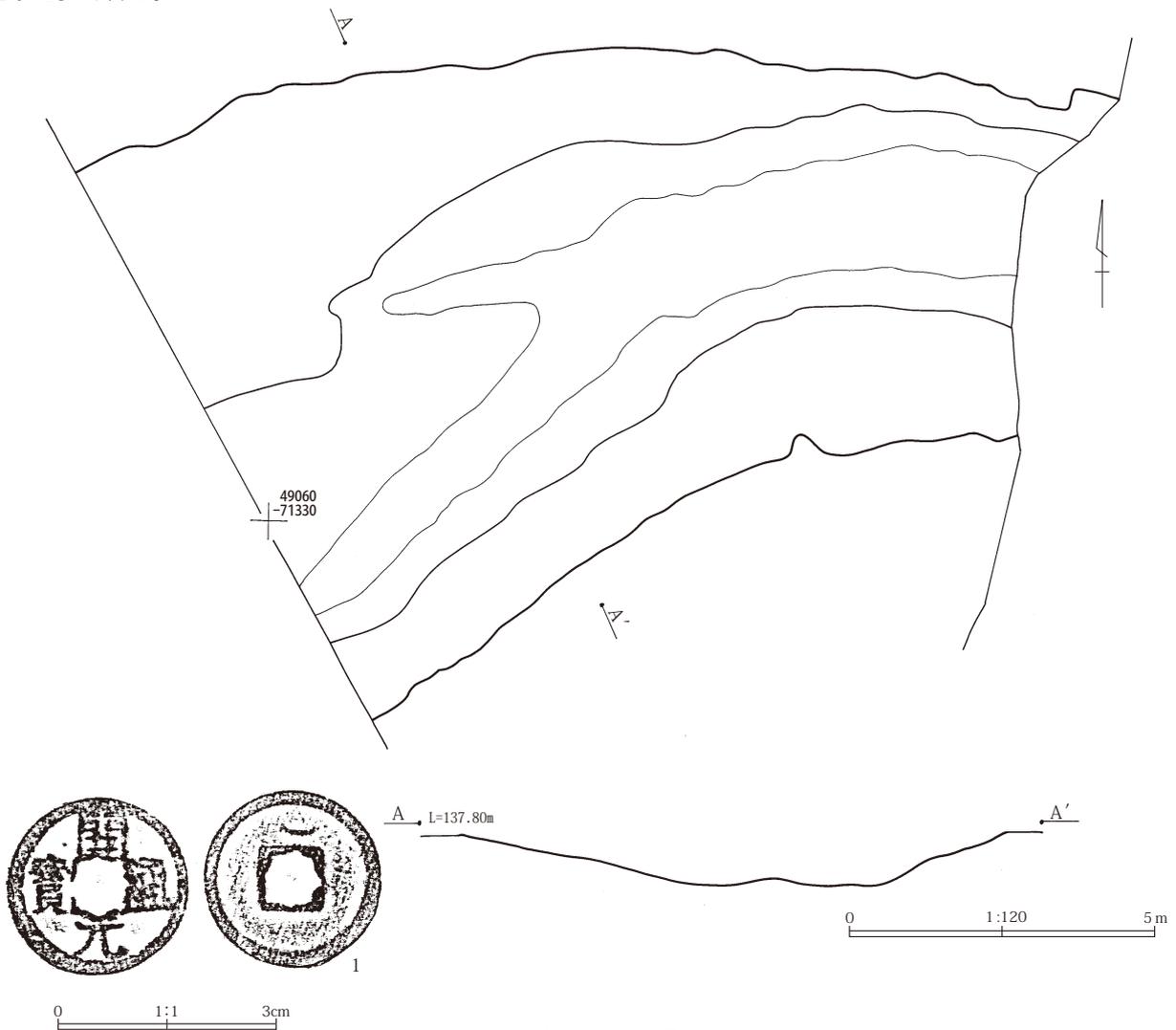
位置 V区中央に位置し、標高140.90～140.95mの緩斜面上に立地する。

形態 東西方向に直線的に走る。東端は調査区に切られており、西端は調査区中央付近で途切れる。

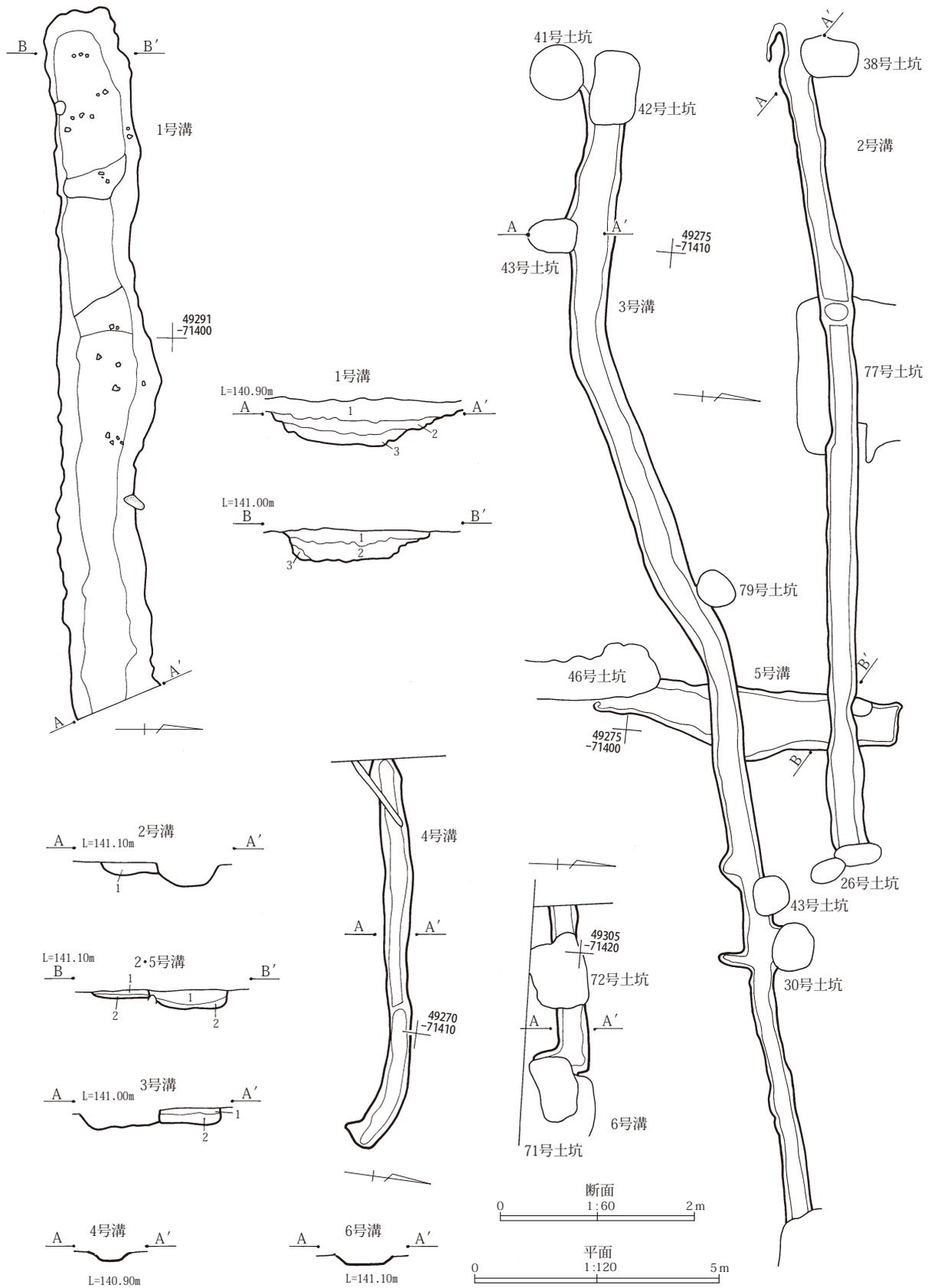
規模 最大幅2.10m、最小幅1.44m、深さ50cm、調査長は14.34m。

遺物 覆土中から刀子が1点、鎌と思われる鉄製品破片が1点出土している。

所見 他の溝に比べて規模が大きいのが、ほぼ並行して走る。覆土中の鉄製品は鍛造品であり、現代の遺物ではないが、流れ込みとも考えられ、時期は不明。



第166図 万蔵寺廻り遺跡 I区1号溝・出土遺物



第167図 万蔵寺廻り遺跡 V区1～6号溝

第4章 遺構と遺物

V区1号溝Aライン土層観察所見

- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)多く含む。褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。
- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭化物少量含む。黄褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。

V区1号溝Bライン土層観察所見

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。炭化物少量含む。黄褐色土粒子含む。やや締まっている。粘性弱。
- 2 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。シルト質黒褐色土ブロック多く含む。シルト質黄褐色土ブロック含む。炭化物含む。焼土粒子少量含む。やや締まっている。粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 砂質強い。ニツ岳軽石(0~5mm)少量含む。炭化物少量含む。やや締まっている。粘性弱。

V区2号溝土層観察所見

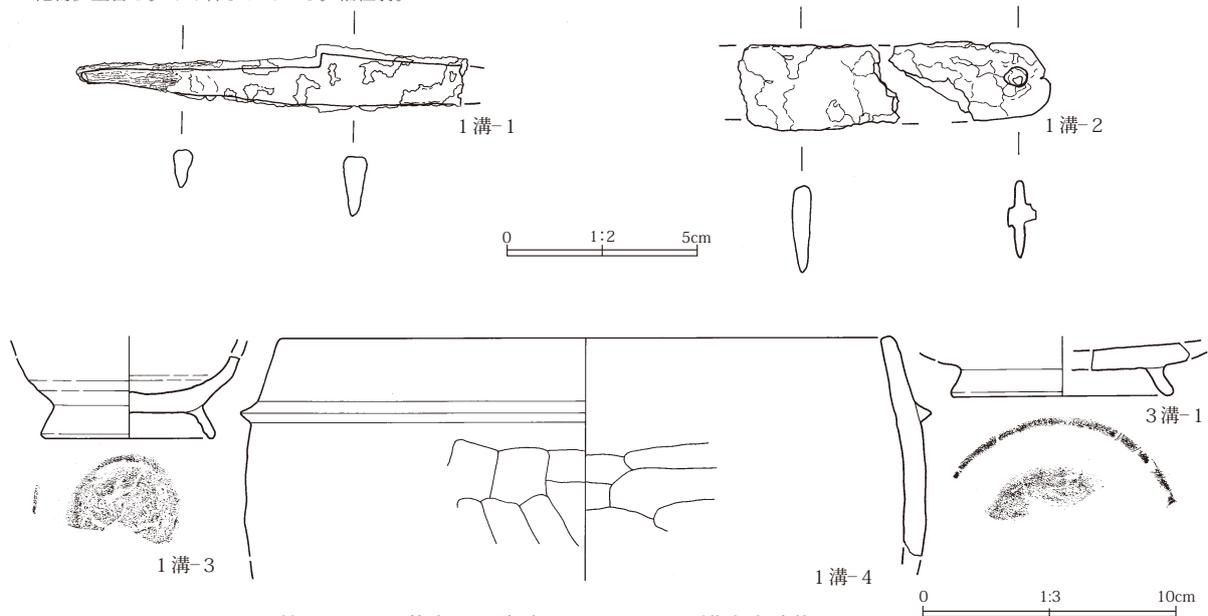
- 1 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~10mm)含む。黄褐色土粒子含む。
- 2 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。地山砂を多く含む。

V区3号溝土層観察所見

- 1 褐色土 砂質土。粒子粗い。ニツ岳軽石(0~15mm)含む。黄褐色土粒子が入る。
- 2 黒褐色土 ニツ岳軽石(0~15mm)含む。微量の黄褐色土、締まり中。粘性弱。

V区5号溝土層観察所見

- 1 暗褐色土 ニツ岳軽石(0~20mm)含む。黄褐色土の砂混入。締まり中。粘性弱。
- 2 にぶい褐色土 地山の土に似る。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。締まりやや強。粘性弱。



第168図 万蔵寺廻り遺跡 V区1・3号溝出土遺物

V区2号溝(第167図 PL.72)

1号溝の南、約10mの地点に位置し、1号溝と並行するように東西方向に走っている。溝の東端は土坑に切られていて、この土坑以東では溝の延長部分が認められない。西端は10号住居の南付近で浅く不明瞭になって、延長部分を追跡することができなくなった。幅は72cmほどでほぼ一定する。深さ17cm、調査長は17.52mある。9号住居と5号溝を切っている。遺物は出土していない。時期、性格を確定できる資料は得られなかった。

V区3号溝(第167図 PL.72)

V区の南部に位置し、ほぼ調査区を横断するかたちで東西方向に走る。溝の南北は、それぞれ2号溝、4号溝が並行するように走る。規模は最大幅96cm、最小幅39cm、東部で幅が狭く、西部では広がる。

深さ21cm、調査長は24.96m。溝の東端は7号住居を切りながら調査区域外へと続いており、西端は42号土坑に切られていて、この部分以西では延長部分を確認できなくなった。西半分は、南に弧を描くように若干湾曲する。調査区中央付近で、2号溝と同様に5号溝を切っている。時期、性格を確定できる資料は得られなかった。

V区4号溝(第167図)

調査区南西に位置し、3号溝の南を並行するように東西へと走る。規模は最大幅66cm、深さ11cm、調査長8.22m。西端は調査区域手前でごく浅くなっており、以西に連続しない可能性もある。東端はやや南に向かって湾曲しながら浅くなっている。出土遺物は無く、時期、性格を確定できる資料は得られなかった。

V区5号溝 (第167図)

調査区南側に位置する。他の溝とは異なって南北方向の走行を有しており、2・3号溝とほぼ直角に交差して重複する。2・3号溝ともにこの溝を切る。規模は3号溝との交点近くで最大幅1.56mとなり、南北両端部では狭くなって北端近くでの確認最小幅78cmほどとなる。深さは11cm、調査長6.24m。溝北端は6号住居手前で終息し、南端は46号土坑に切れ、それ以南で延長部を確認することができない。浅く短い溝で、他の溝とは方向も異なることから、周辺にある隅丸長方形の土坑のうち、特に長いものであることも考えられるだろう。出土遺物は無く、時期、性格を確定できる資料は得られなかった。

(7) 井戸・土坑墓(第169～171図 PL.73・74)

万蔵寺廻り遺跡で検出された井戸は、V区北端における1基のみである。周辺は台地平坦面だが東側には谷が入り込んでおり、急傾斜地となっている。南側には時期不明のピット群があり、ピット群の南に1号住居がある。

長軸方向はN-89°-E、長軸長5.0m、短軸長4.25m、深さ4.14m。平面形は円形を呈する。

素掘りの井戸で、確認面から2.6mほど下の地点から、径1.5mほどに狭まり、以後は直線的に底面まで達している。底面は利根敷きと呼ばれる湧水層に達していた。

井戸上部の覆土中から人骨が2体分検出された。

1号人骨は井戸北東、確認面から1.27mの地点、2号人骨は1.2mの地点で検出されたもので、人骨の依存状態は悪く、埋葬状態の詳細は判別できなかった。1号人骨の傍らから、元豊通宝が1枚出土している。

2号人骨は北西壁寄りから検出されており、頭を

V区6号溝 (第167図)

調査区北西に位置し、2号住居と調査区西端ラインの間にある。溝西端は調査区域外となり不明だが、東端は71号土坑、2号住居に切られる。検出範囲の中央も72号土坑に切られており、遺構の全容はほとんどが不明となっている。最大幅1.14m、最小幅60cm、深さ17cm、調査長3.54m。出土遺物は無く、時期、性格を確定できる資料は得られなかった。

北にして東を向いた状態で屈葬されていた。2号人骨に伴って、目の粗い布状の繊維に包まれた古銭が出土している。

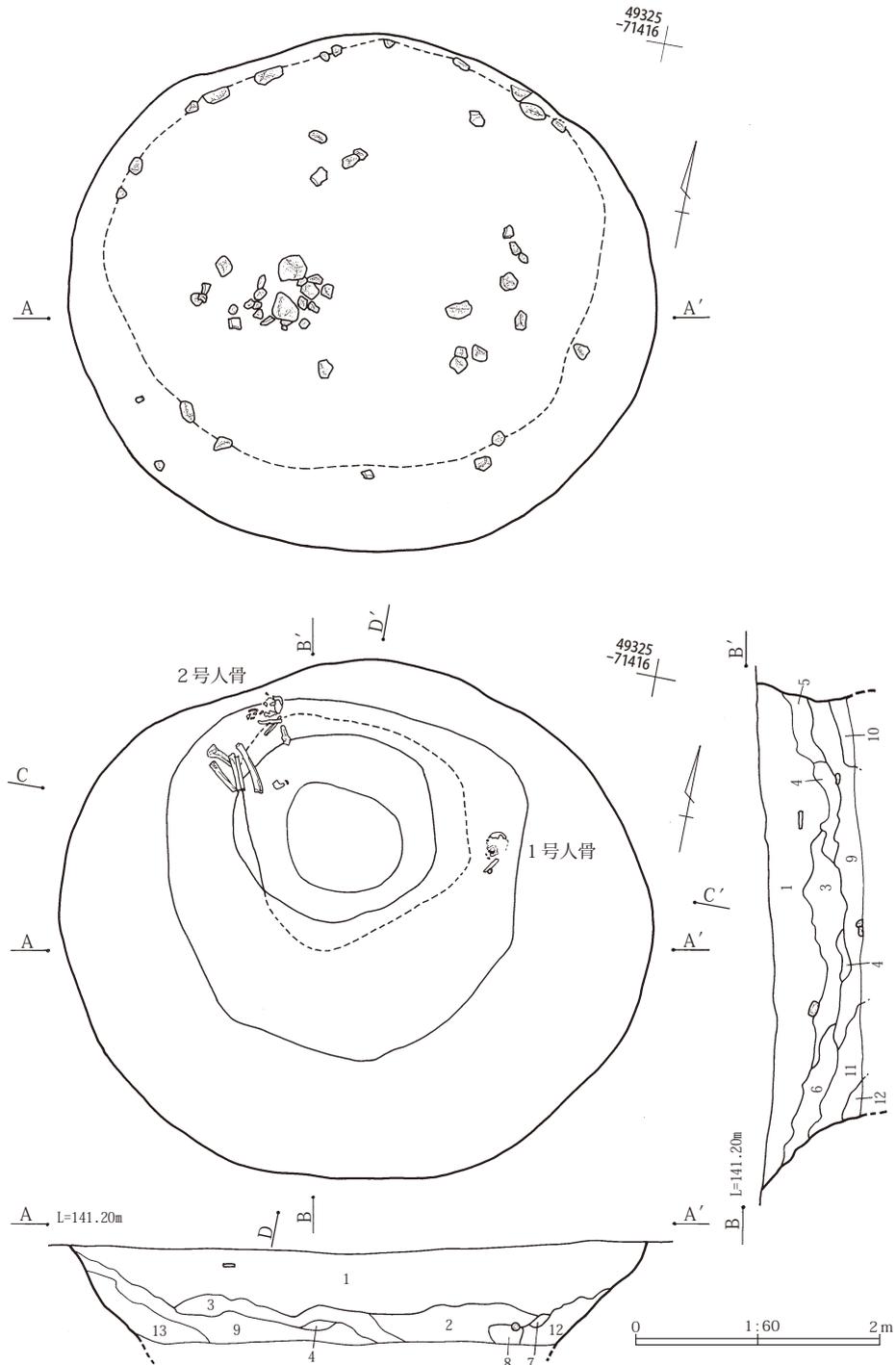
古銭は元豊通宝(1078年初鑄)3枚、軋元重宝(758年初鑄)1枚、紹聖元宝(1094年初鑄)1枚、洪武通宝(1368年初鑄)1枚の計6枚であった。また、景祐元宝(1034年初鑄)1枚が別に出土している。

人骨、古銭の他に、上層の覆土中から軟質陶器の鉢破片と、土師質土器の皿、常滑の甕破片が出土している。

布状の繊維に包まれた6枚は、六道銭を埋納したものであると思われる。1368年初鑄の洪武通宝が最も新しい。また、土師質土器の皿は銭とともに中世土坑墓から頻繁に出土する遺物である。

1号井戸造営の時期は不明だが、土坑墓として埋葬された時期は、出土遺物から15世紀から16世紀と考えられる。

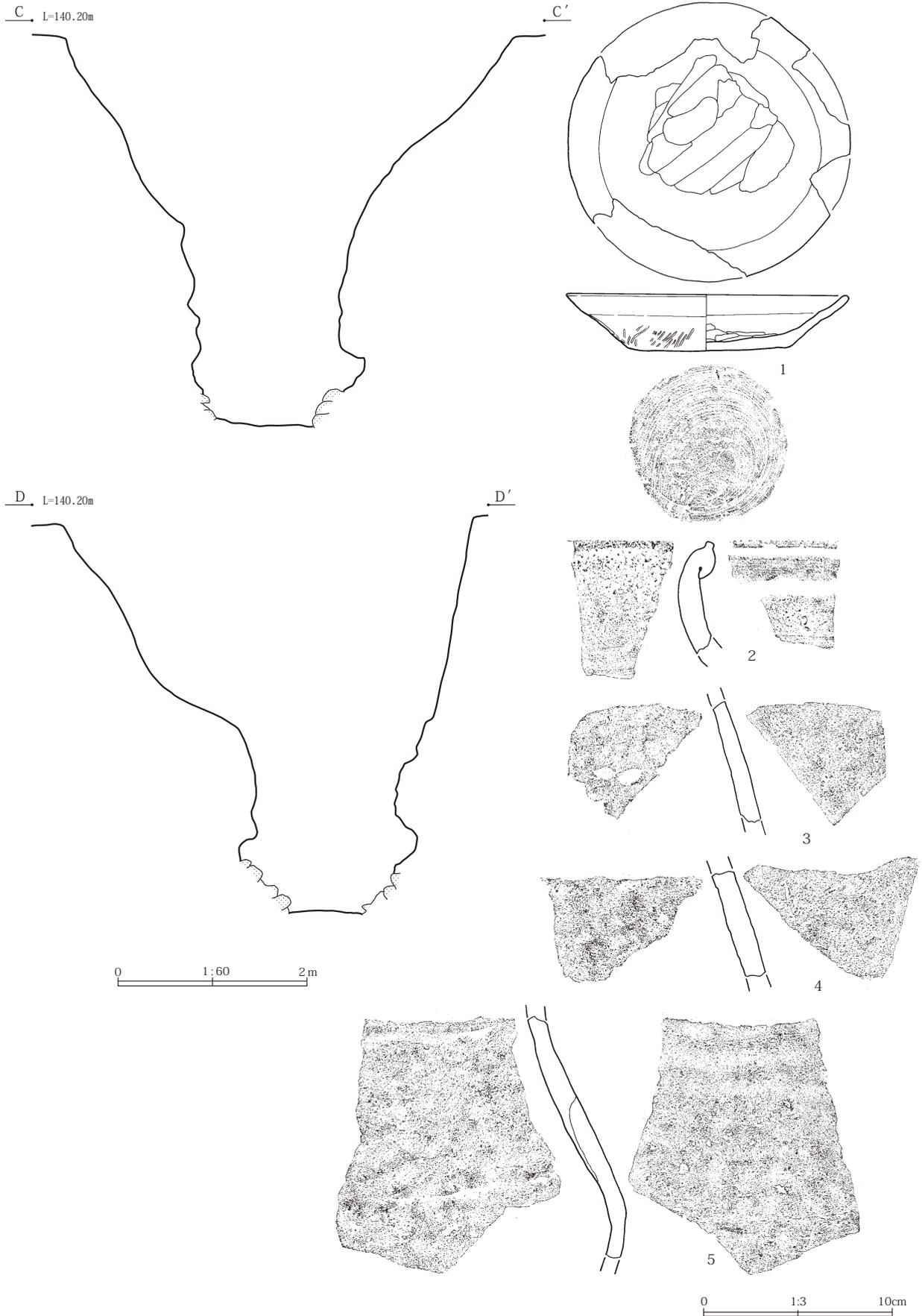
人骨についての詳細は、宮崎重雄氏による報告を別に掲載する。



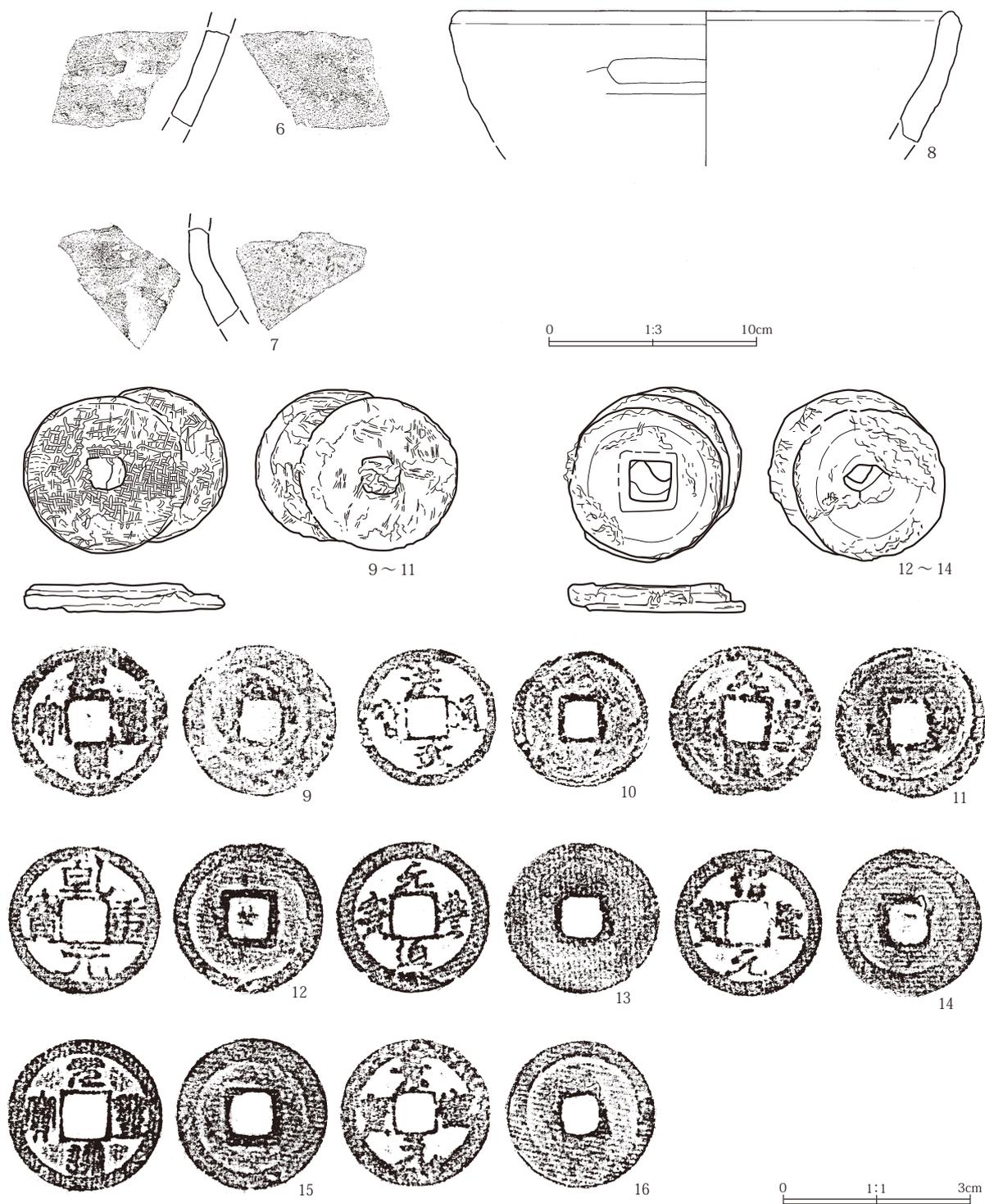
V区1号井戸土層観察所見

- | | |
|---|---|
| <p>1 にぶい黄橙色土 地山細砂多量、ニツ岳軽石</p> <p>2 にぶい黄褐色土 地山細砂とニツ岳軽石含む。</p> <p>3 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石と2層より少量の川砂含む。</p> <p>4 明赤灰色砂層土 地山砂。ニツ岳軽石粒、3層土ブロック。</p> <p>5 にぶい黄橙色土 地山川砂とニツ岳軽石含む。</p> <p>6 にぶい黄褐色土 やや赤み掛かる。地山細砂。</p> <p>7 黄褐色土 川砂及び若干のニツ岳軽石含む。</p> <p>8 川砂ブロック。灰色～緑灰色。ニツ岳軽石含む。よく締まる。</p> | <p>9 にぶい黄褐色土 やや赤み掛かる。ニツ岳軽石(0~5mm)、地山細砂含む。</p> <p>10 にぶい黄褐色土 川砂と細砂多量、砂質、ニツ岳軽石含む。</p> <p>11 川砂、細砂、明黄褐色土の混土。ニツ岳軽石(0~5mm)含む。</p> <p>12 川砂凝縮層の崩落した砂層。ニツ岳軽石と明黄褐色砂質土含む。</p> <p>13 にぶい黄褐色砂質土と川砂・細砂の混土層。ニツ岳軽石含む。</p> |
|---|---|

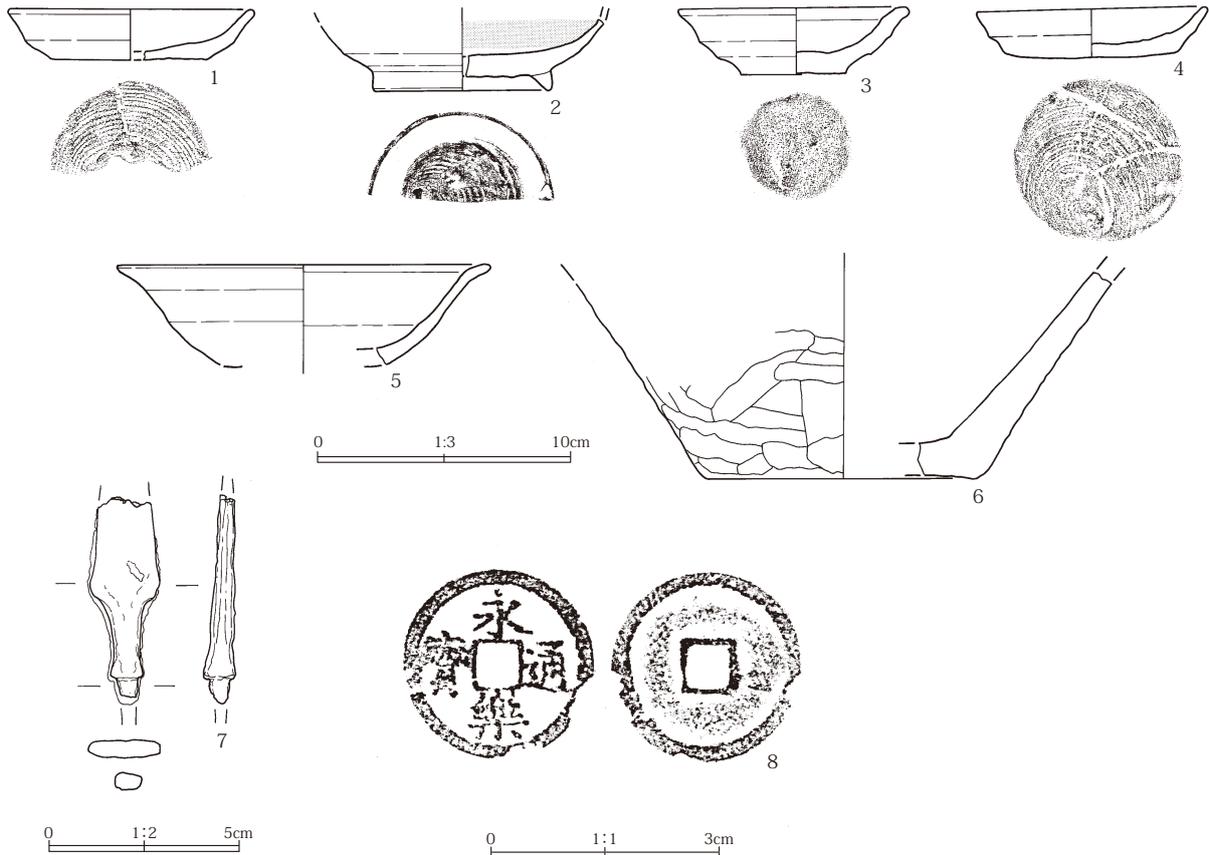
第169図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号井戸



第170図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号井戸断面図・出土遺物(1)



第171図 万蔵寺廻り遺跡 V区1号井戸出土遺物(2)



第172図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物

第4項 十二廻り遺跡

(1) 土坑・ピット

土坑は、16基ある。Ⅱ区からは遺構が検出されていないため、全てⅠ区からの検出である。全体的に浅く、小規模である。中でも用水路北側の南端では土坑、ピットが集中した状態で検出されている。これに対し、用水路南側では土坑は3基のみの検出であった。用水路北側に比べると、3基ともに規模は大きくなる。1号土坑は、多量の炭化材と焼骨、埋納銭と思われる古銭も出土しており、火葬墓であったと思われる。

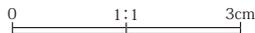
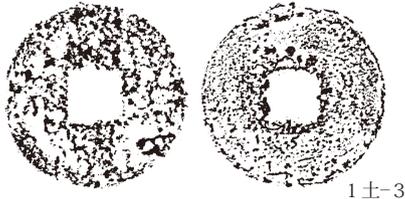
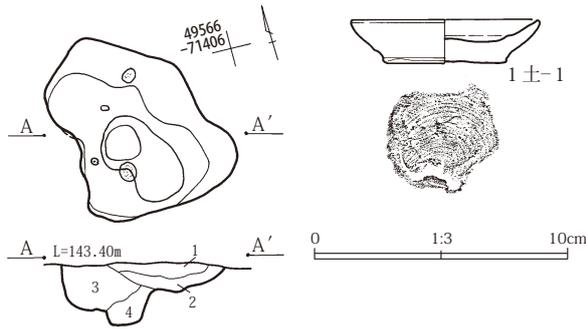
ピットもほとんどがⅠ区、天狗岩用水北側にあり、谷西側と用水路と接する南端でややまとまりを見せる。用水路北側の谷付近におけるピット群では、配列に若干の規則性が伺えたが、掘立柱建物跡を組むには至らなかった。

1号土坑 X=49566/Y=-71406 数回の掘削により、上面の平面形状はごく乱れた不定形をなす。南北に長軸を持ち、長軸長148cm、短軸長118cm、深さ52cmほどである。当初径70cmほどの円形土坑を掘り、これの上位に長径1.2mほどの楕円形土坑を掘っている。焼けた骨片や銭はこの楕円形土坑の覆土である3層中から出土しており、これが主体的な墓坑であつたらしい。これの東を浅く掘り込んでいる。この上位覆土である1層の底面には部分的ではあるが炭化材が層をなして残っており、何らかの火を伴う行為がなされたことがわかる。

須恵器杯は復元口径7.4cmほどのものである。銭は2枚が銹着した状態で楕円形土坑西部の覆土中位、骨片や土器よりやや高いレベルで出土している。六道銭に当たるものであろう。1枚は元豊通宝であることが確認できるが、もう一枚は銭種が判断できない。六道銭に当たるものであろう。

第4章 遺構と遺物

1号土坑



※以下の記載は遺構名/所在グリッド/長軸方位/形状/長径×短径×深さ(各cm)/土層観察所見の順である。

1号土坑 (第173図 PL75)

X=49.566/Y=-71.406 N-7°-W 不整形 148×118×52

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石を少量含む。最下層に部分的に、炭化材が層になって認められる。やや縮まっている。粘り弱い。
- 2 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石を少量含む。炭化材を少量含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を少量含む。炭化材を少量含む。縮まりは弱い。
- 4 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石を含む。炭化材を含む。やや縮まっている。

2号土坑 (第173図 PL75)

X=49.609/Y=-71.395 N-11°-W 楕円形 108×94×8

- 1 褐灰色砂質土川砂とニツ岳軽石多く混入し、やや粘性のあるにぶい黄褐色土小ブロックを少量含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 川砂ブロックの混土。ニツ岳軽石を含む。

3号土坑 (第173図 PL75)

X=49.598/Y=-71.395 N-41°-W 不整形 148×134×16

- 1 褐灰色砂質土川砂を含む。ニツ岳軽石を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を含む。縮まりやや強い。

4号土坑 (第173図 PL75)

X=49.593/Y=-71.410 N-11°-W 楕円形 40×30×22

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を含む。縮まりやや弱い。

5号土坑 (第173図 PL75)

X=49.593/Y=-71.410 N-61°-E 楕円形 74×48×12

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を少量含む。

6号土坑 (第173図 PL75)

X=49.593/Y=-71.410 N-59°-E 楕円形 62×38×14

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を少量含む。縮まりやや強い。

7号土坑 (第173図 PL75)

X=49.595/Y=-71.408 N-11°-W 不整形 38×38×12

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を少量含む。小礫を含む。縮まり強い。

8号土坑 (第174図 PL75)

X=49.596/Y=-71.408 N-5°-E 楕円形 49×44×16

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を少量含む。縮まりやや弱い。
- 2 灰黄褐色土 ニツ岳軽石を多く含む。縮まりやや弱い。

9号土坑 (第174図 PL75)

X=49.595/Y=-71.411 N-25°-E 楕円形 40×29×27

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石、小礫を多く含む。縮まりやや強い。

10号土坑 (第174図 PL75)

X=49.596/Y=-71.410 N-93°-E 円形 58×53×14

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。縮まりやや弱い。小礫と砂主体の黄褐色土を含む。

11号土坑 (第174図 PL75)

X=49.596/Y=-71.408 N-57°-W 不整形 54×44×8

- 1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。縮まりやや弱い。小礫と砂主体の黄褐色土を含む。

12号土坑 (第174図 PL75)

X=49.598/Y=-71.408 N-106°-E 楕円形 61×50×8

- 1 灰黄褐色砂質土 小礫と砂主体の黄褐色砂質土を含む。

13号土坑 (第174図 PL75)

X=49.597/Y=-71.407 N-76°-E 不整形 94×49×10

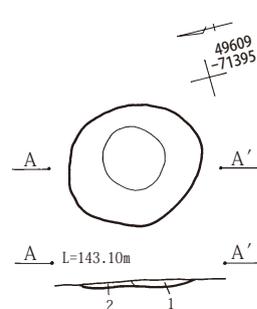
- 1 灰黄褐色砂質土 小礫と砂主体の黄褐色砂質土を含む。

14号土坑 (第174図 PL75)

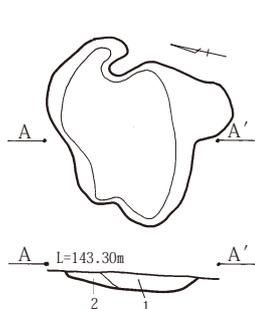
X=49.603/Y=-71.408 N-40°-E 不整形 46×44×16

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多量に含む。縮まりやや強い。
- 2 灰黄褐色砂質土 礫と砂主体の黄褐色砂質土を含む。

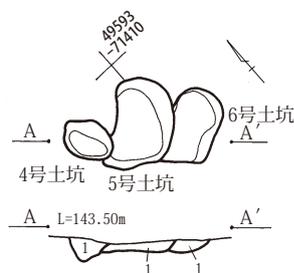
2号土坑



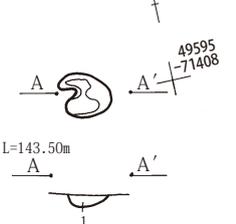
3号土坑



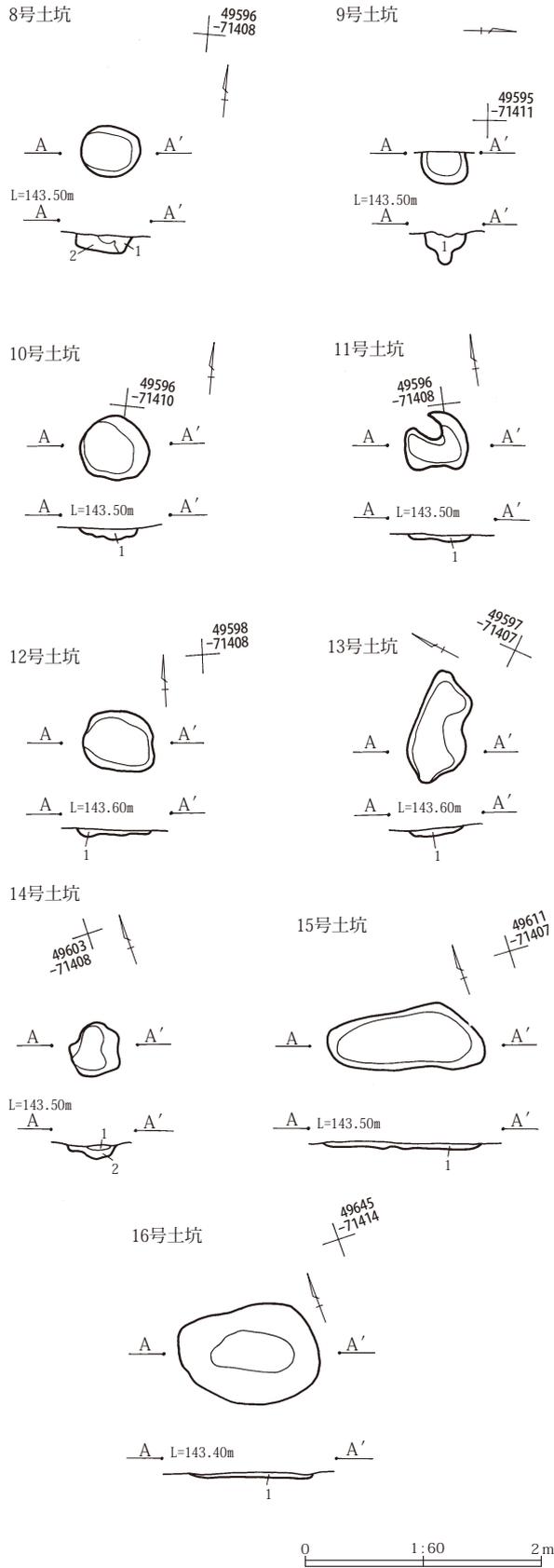
4・5・6号土坑



7号土坑



第173図 十二廻り遺跡 I区土坑(1) 1~7号土坑、1号土坑出土遺物



15号土坑 (第174図 PL75)

X=49.611/Y=-71.407 N-65°-W 楕円形 132×54×6

- 1 灰黄褐色砂質土 小礫と砂主体の黄褐色砂質土を含む。
- 2 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多量に含む。締まりやや強い。

16号土坑 (第174図 PL75)

X=49.645/Y=-71.414 N-59°-W 楕円形 122×90×6

- 1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を多量に含む。小礫を多く含む。

ピット

1号ピット (第175図 PL76)

X=49.613/Y=-71.395 円形 44×43×8

- 1 暗灰黄色砂質土 ニツ岳軽石、川砂多く含み、明オリブ灰色細砂ブロックを少量含む。

2号ピット (第175図 PL76)

X=49.570/Y=-71.406 隅丸方形 54×48×16

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。締まりは弱い。
- 2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。締まりは弱い。小礫を少量含む。

3号ピット (第175図 PL76)

X=49.618/Y=-71.396 楕円形 66×34×15

- 1 黒褐色土 粘りは普通。やや締まっている。ニツ岳軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 粘性弱い。締まりは弱い。
- 3 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を少量含む。締まりは弱い。小礫を少量含む。

4号ピット (第175図 PL76)

X=49.585/Y=-71.403 楕円形 42×21×25

- 1 にぶい黄褐色土 ニツ岳軽石を多量に含む。粘りは普通。やや締まっている。
- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石を多量に含む。粘性弱い。締まっている。
- 3 黒褐色土 ニツ岳軽石を少量含む。粘性弱い。締まりは弱い。砂質。
- 4 暗褐色土 ニツ岳軽石少量を含む。粘りは普通。締まりは弱い。

5号ピット (第175図 PL76)

X=49.568/Y=-71.406 円形 31×30×17

- 1 暗褐色土 粘りは普通。やや締まっている。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 粘性弱い。締まりは弱い。
- 3 灰黄褐色砂質土 粘性弱い。締まりは弱い。

6・7号ピット (第175図 PL76)

6号 X=49.592/Y=-71.409 隅丸方形 34×32×5

7号 X=49.529/Y=-71.409 隅丸方形 27×27×13

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を少量含む。締まりやや強い。

8号ピット (第175図 PL76)

X=49.594/Y=-71.409 楕円形 34×32×15

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。締まりは弱い。
- 2 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多量に含む。小礫を少量含む。締まりやや弱い。

9号ピット (第175図 PL76)

X=49.594/Y=-71.408 不整形 56×25×15

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を少量含む。締まりやや弱い。

10号ピット (第175図 PL76)

X=49.594/Y=-71.411 楕円形 37×29×12

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を含む。締まりやや強い。

11号ピット (第175図 PL76)

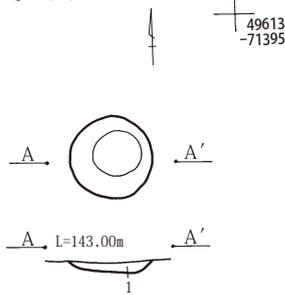
X=49.612/Y=-71.410 楕円形 38×34×5

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。締まりは弱い。小礫と砂主体の黄褐色砂質土含む。

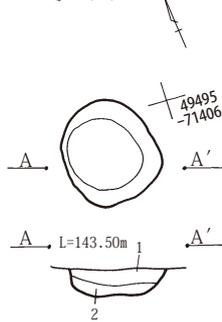
第174図 十二廻り遺跡 I区土坑(2) 8～16号土坑

第4章 遺構と遺物

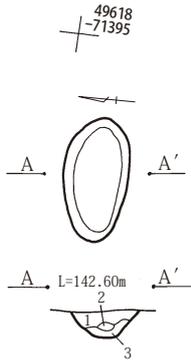
1号ピット



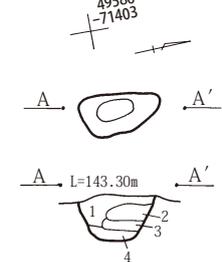
2号ピット



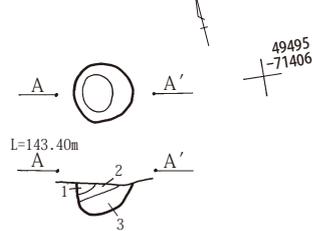
3号ピット



4号ピット



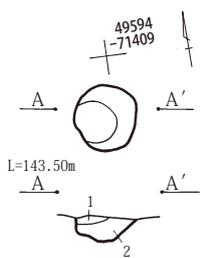
5号ピット



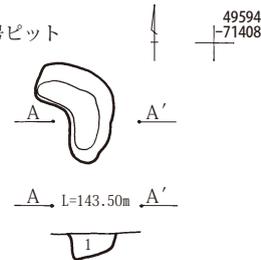
6・7号ピット



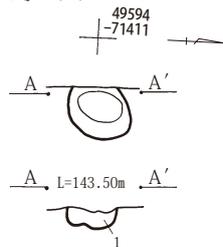
8号ピット



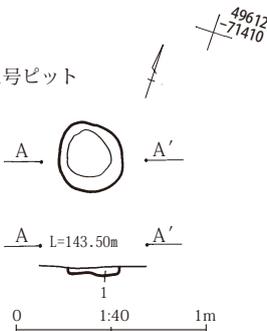
9号ピット



10号ピット



11号ピット



12号ピット (第177図 PL76)

X=49.610/Y=-71.410 楕円形 27×22×10

1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を多く含む。小礫を少量含む。

13号ピット (第177図 PL76)

X=49.617/Y=-71.406 楕円形 24×20×18

1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。やや縮まっている。

14号ピット (第177図 PL76)

X=49.621/Y=-71.408 円形 26×23×21

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を含む。縮まりやや弱い。

15号ピット (第177図 PL76)

X=49.621/Y=-71.408 楕円形 25×19×16

1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。縮まりやや弱い。

16号ピット (第177図 PL76)

X=49.620/Y=-71.405 隅丸方形 18×16×7

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。やや縮まっている。

2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。縮まりやや弱い。

17号ピット (第177図 PL76)

X=49.620/Y=-71.408 隅丸方形 26×22×10

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を含む。縮まりやや弱い。

18号ピット (第177図 PL76)

X=49.622/Y=-71.411 楕円形 24×19×7

1 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を少量含む。やや縮まっている。

19号ピット (第177図 PL76)

X=49.523/Y=-71.410 楕円形 23×21×7

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。縮まっている。

20号ピット (第177図 PL76)

X=49.523/Y=-71.408 楕円形 26×23×19

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を少量含む。小礫を少量含む。やや縮まっている。

21号ピット (第177図 PL76)

X=49.523/Y=-71.405 隅丸方形 20×20×9

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石多量含む。小礫を多く含む。縮まっている。

22号ピット (第177図 PL76)

X=49.624/Y=-71.411 隅丸方形 25×24×21

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石、小礫を多く含む。縮まりやや強い。

2 灰黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。やや縮まっている。

23号ピット (第177図 PL76)

X=49.624/Y=-71.409 円形 25×23×18

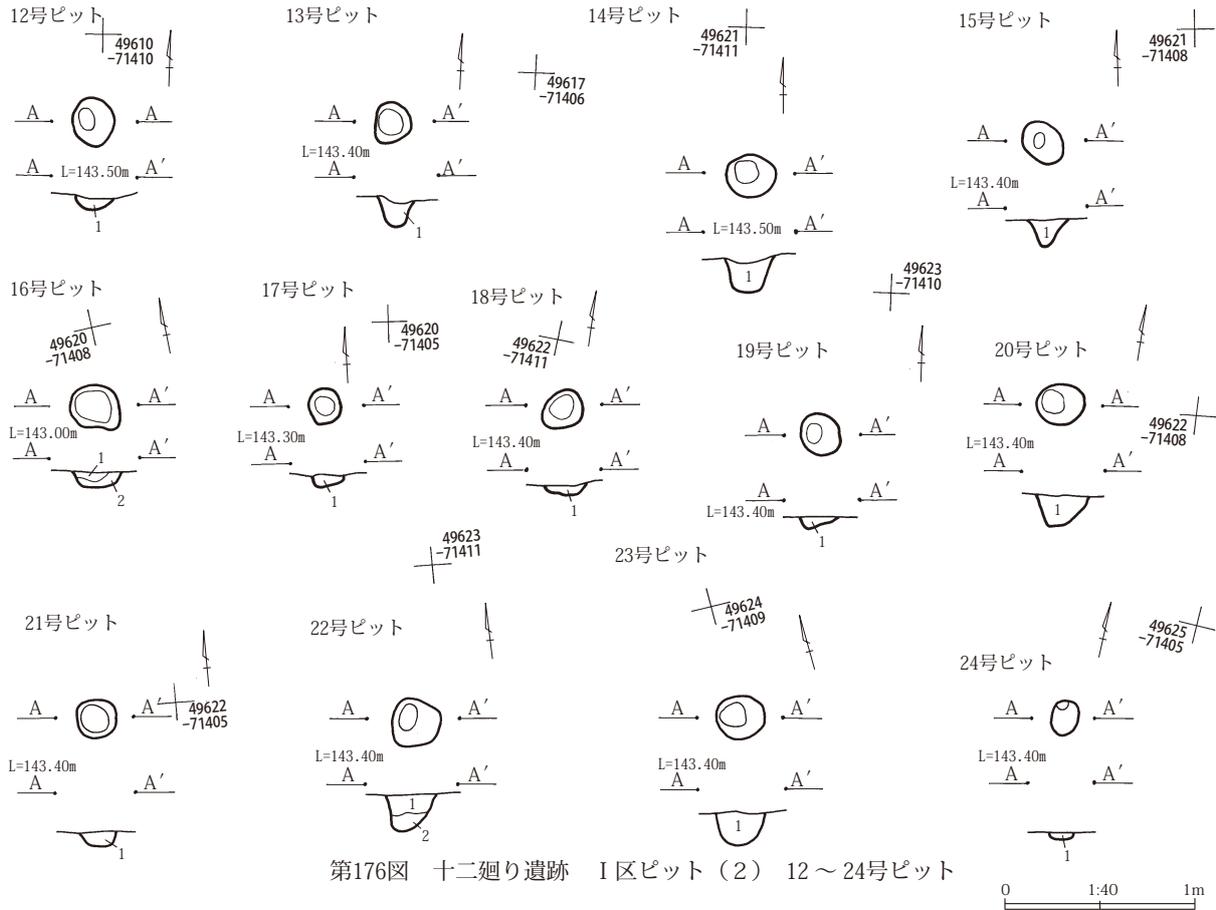
1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石、小礫を多く含む。やや縮まっている。

24号ピット (第177図 PL76)

X=49.625/Y=-71.405 楕円形 19×13×5

1 にぶい黄褐色砂質土 ニツ岳軽石を中量含む。縮まりやや弱い。

第175図 十二廻り遺跡 I区ピット(1) 1~11号ピット



第176図 十二廻り遺跡 I区ピット(2) 12~24号ピット

(2) 溝

I区1号溝 (第177図 PL.77)

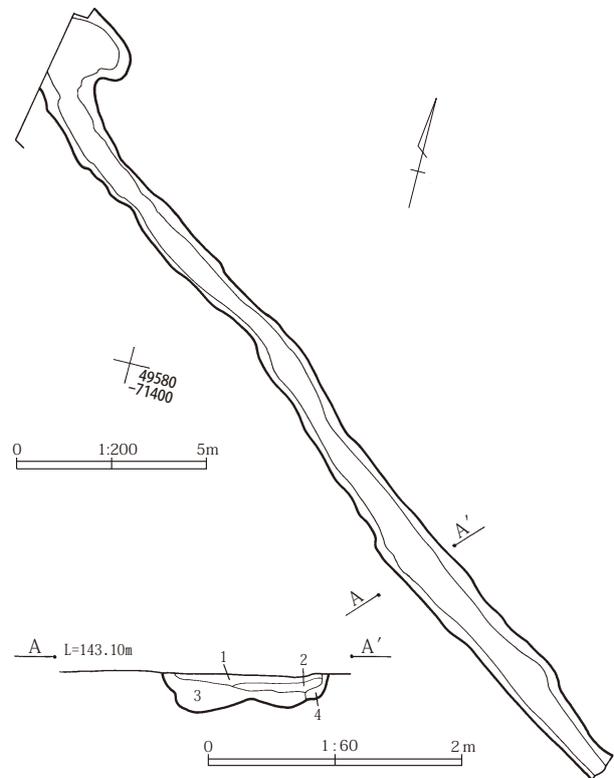
I区中央付近に位置し、北西から南東へ直線的に調査区を横断する。北西端部は現代の用水路に、南東端部は攪乱に切られる。最大幅2.7m、最小幅0.3m、深さ30cm、調査長24.0m。北側に2号溝が、南側に1号井戸が隣接する。出土遺物は無い。

I区2号溝 (第178図 PL.77)

1号溝北側に並行して走り、南東端部は不明瞭になる。北東端部は現代の用水路に切られる。最大幅0.9m、最小幅0.6m、深さ18cm、調査長7.0mを測る。出土遺物は無い。

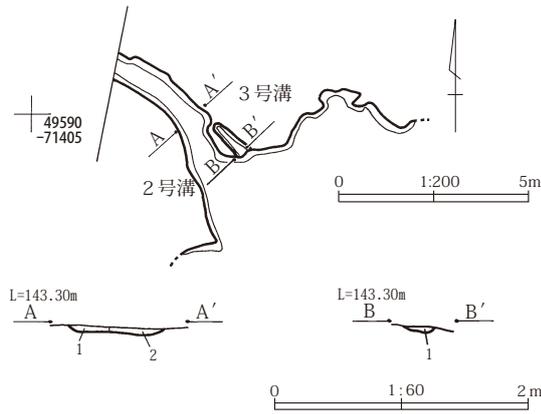
I区3号溝 (第178図)

2号溝北側に並行して走り、南東端部は扇状に広がった2号溝によって切られる。2号溝同様に浅く、最大幅0.86m、最小幅0.62m、深さ5cm、調査長1.44m。出土遺物は無い。



第177図 十二廻り遺跡 I区1号溝

第4章 遺構と遺物



第178図 十二廻り遺跡 I区2・3号溝

I区1号溝土層観察所見

- 1 黒褐色砂質土 ニツ岳軽石（0～2mm）少量含む。締まり弱い。粘性弱い。
- 2 明黄褐色砂質土 ニツ岳軽石（0～2mm）少量含む。締まり弱い。粘性極弱い。
- 3 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石（0～2mm）以下の礫を少量含む。締まり弱い。粘性極弱い。
- 4 地山。

I区2号溝土層観察所見

- 1 褐灰色砂質土 ニツ岳軽石と川砂多く含む。地山小ブロックと黒褐色色粒も少量含む。
- 2 褐灰色土 砂質土と3層土ブロックの混土。ニツ岳軽石少量含む。

I区3号溝土層観察所見

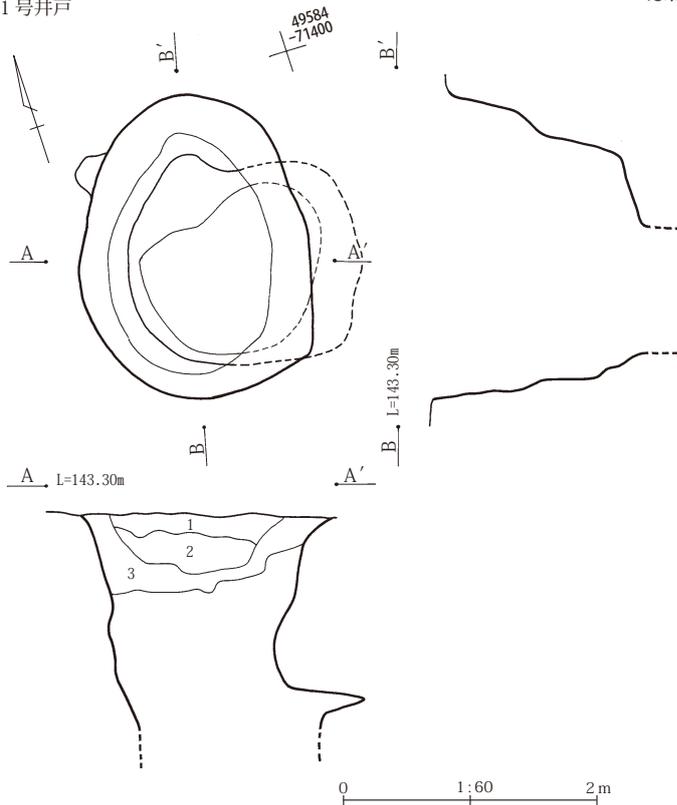
- 1 暗灰黄色砂質土 ニツ岳軽石、黄褐色土粒、川砂混入。

(3) 井戸

I区1号井戸（第179図 PL.77）

I区の中央付近に位置し、用水路南側から検出される。1号溝の南岸と隣接し、平面形は楕円形、長軸方位はN-12°-Eを示す。長軸長2.43m、短軸長

1号井戸



I区1号井戸土層観察所見

- 1 褐灰色土 シルト質土。ニツ岳軽石（0～40mm）含む。明黄褐色シルト質土ブロック含む。やや締まっている。
- 2 明黄褐色土 シルト質土。ニツ岳軽石（0～30mm）含む。にぶい黄橙色土ブロック上面に多く含む。やや締まっている。粘性やや強い。
- 3 地山ブロック層。

第179図 十二廻り遺跡 I区1号井戸

1.82m。深さ1.7mまで掘り下げた段階で、危険と判断し完掘を断念した。基本的には円形素掘りの井戸と思われ、井戸枠などは検出されていない。地山が砂質であるため崩落が著しく、覆土中にもシルト質のブロックが混入する。出土遺物が無いため時期は確認できなかった。

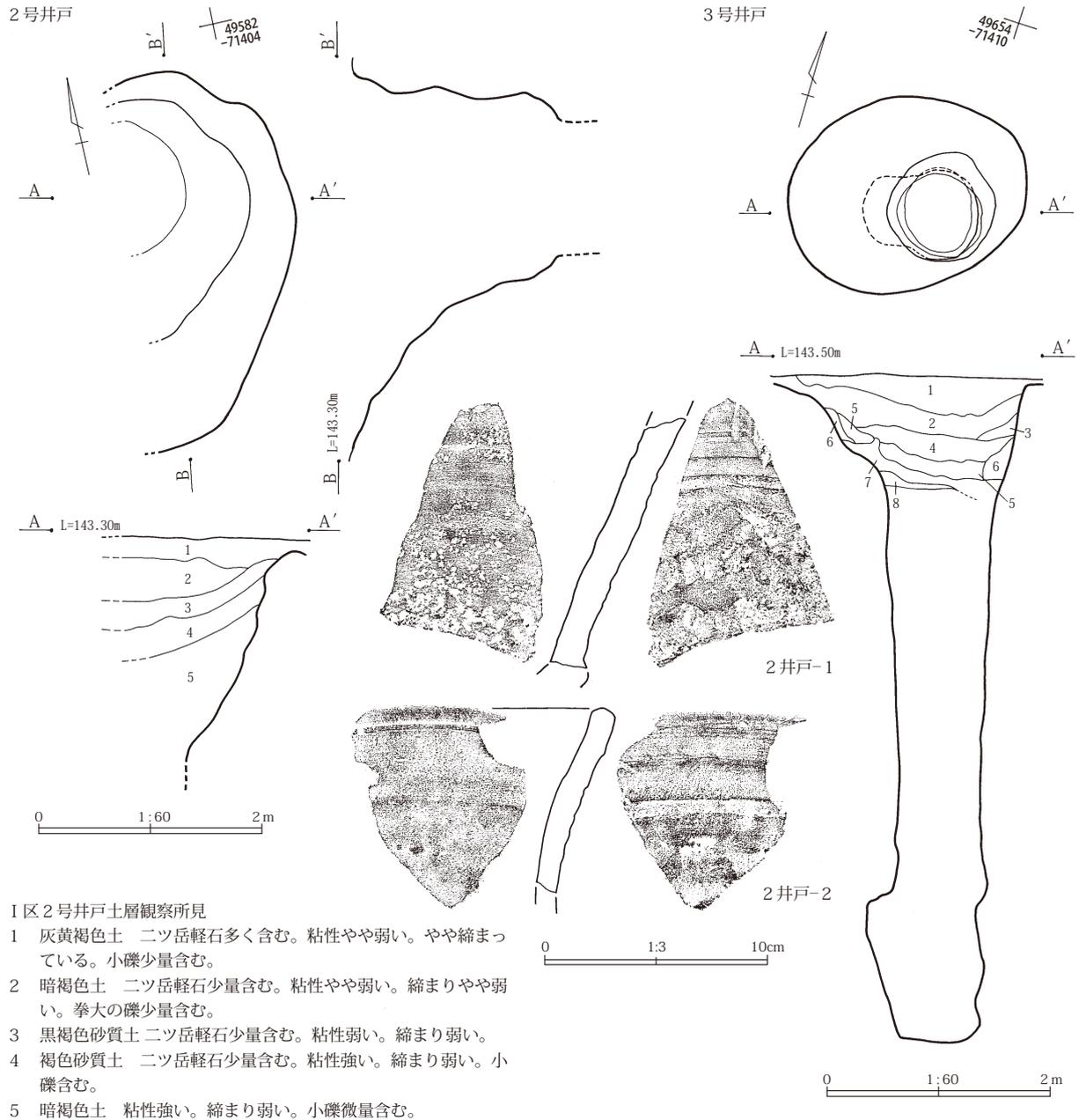
I区2号井戸（第180図 PL.77）

1号井戸の南西に位置し、用水路に西側2/3を切られる。平面形は楕円形で、長軸方位はN-11°-Eを示す。長軸長3.42m、短軸長は不明、危険回避のため1.95mの地点で掘削を断念した。円形素掘りの井戸と思われ、井戸枠などはない。覆土最上層は締まりがやや弱く、粘性も若干弱い。小礫を少量含む。下層にいくにしたがって、粘性が強くなるが、小礫を含む砂層が混じる。出土遺物は無く、時期は不明である。

I区3号井戸（第180図 PL.77・78）

I区北側に位置し、用水路北側から検出された。調査区東側の谷部に近接し、平面形は楕円形、長軸方位はN-44°-Eを示す。規模は長軸長2.15m、短軸長1.73m、深さ5.87m。円形素掘りの井戸で、井戸枠などはない。井戸上部は漏斗状に広がっているが、約1m掘り下げて以降は、ほぼ同径で下降する。

第1節 古代・中世の遺構と遺物



I区2号井戸土層観察所見

- 1 灰黄褐色土 ニツ岳軽石多く含む。粘性やや弱い。やや締まっている。小礫少量含む。
- 2 暗褐色土 ニツ岳軽石少量含む。粘性やや弱い。締まりやや弱い。拳大の礫少量含む。
- 3 黒褐色砂質土 ニツ岳軽石少量含む。粘性弱い。締まり弱い。
- 4 褐色砂質土 ニツ岳軽石少量含む。粘性強い。締まり弱い。小礫含む。
- 5 暗褐色土 粘性強い。締まり弱い。小礫微量含む。

I区3号井戸土層観察所見

- 1 灰黄色砂質土 川砂多く、ニツ岳軽石やや多く含む。締まりやや弱い。
- 2 灰黄褐色砂質土 川砂・ニツ岳軽石やや多く含む。1層より締まる。
- 3 にぶい黄色砂質土 川砂・ニツ岳軽石粒・砂利やや多く含む。
- 4 暗灰黄色砂質土 川砂・ニツ岳軽石やや多く含む。1層より締まる。

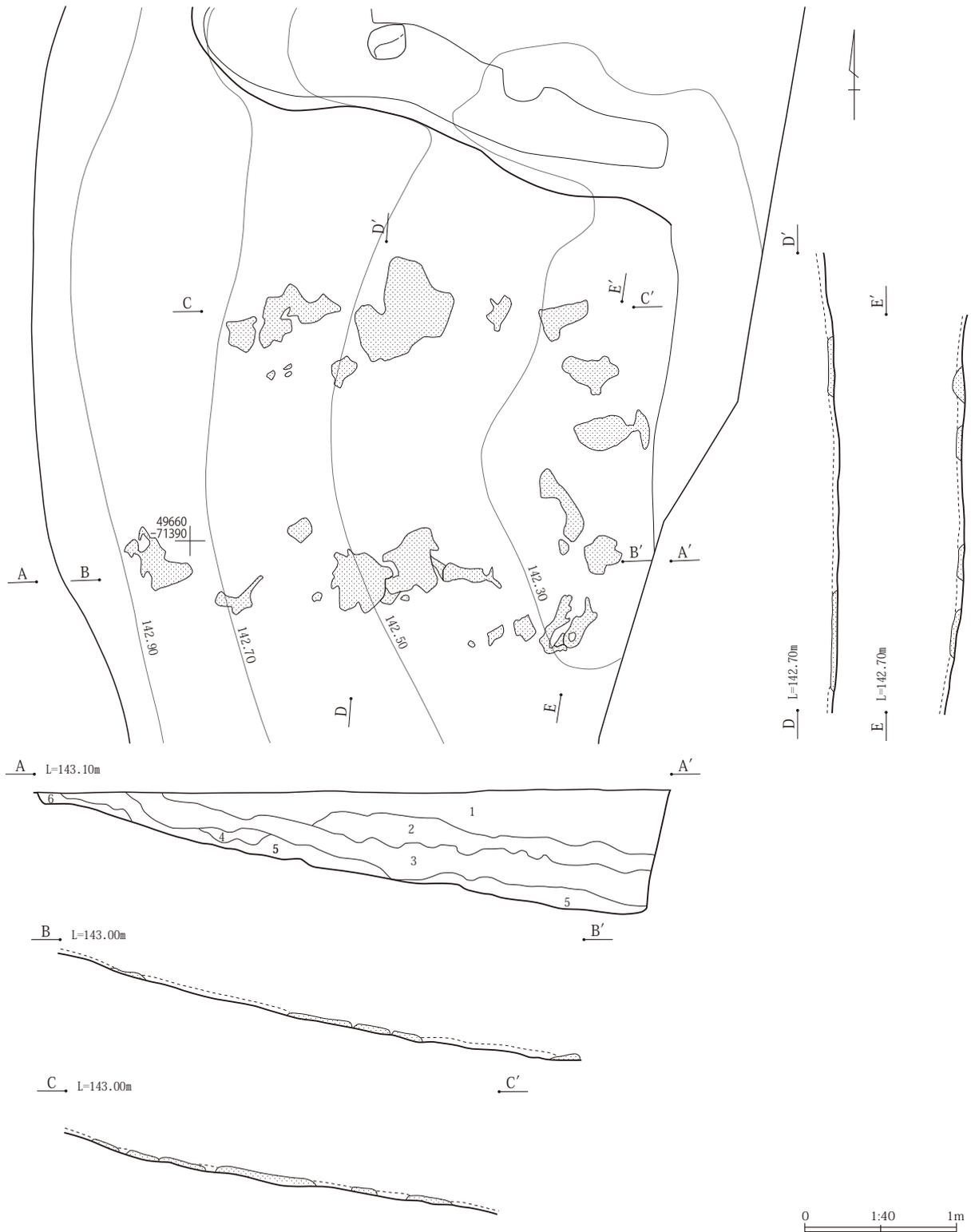
- 5 黄灰色砂質土 粒径やや大きめのニツ岳軽石多く含む。川砂も含む。
- 6 黄灰色砂質土 川砂主体のブロックに暗灰黄色砂質土ブロック含む。
- 7 灰色砂質土 6層土小ブロック。
- 8 暗灰黄色土 やや砂質だが粘性あり。川砂含む。ニツ岳軽石若干含む。

第180図 十二廻り遺跡 I区2・3号井戸、2号井戸出土遺物

(4) 谷 (第181・182図 PL.78)

I区北側の谷状地形は、天狗岩用水路に分断されたかたちで、用水路の南北から1号谷、2号谷として検出された。万蔵寺廻り遺跡V区において検出された谷と同様、緩やかな傾斜で東に向かって展開す

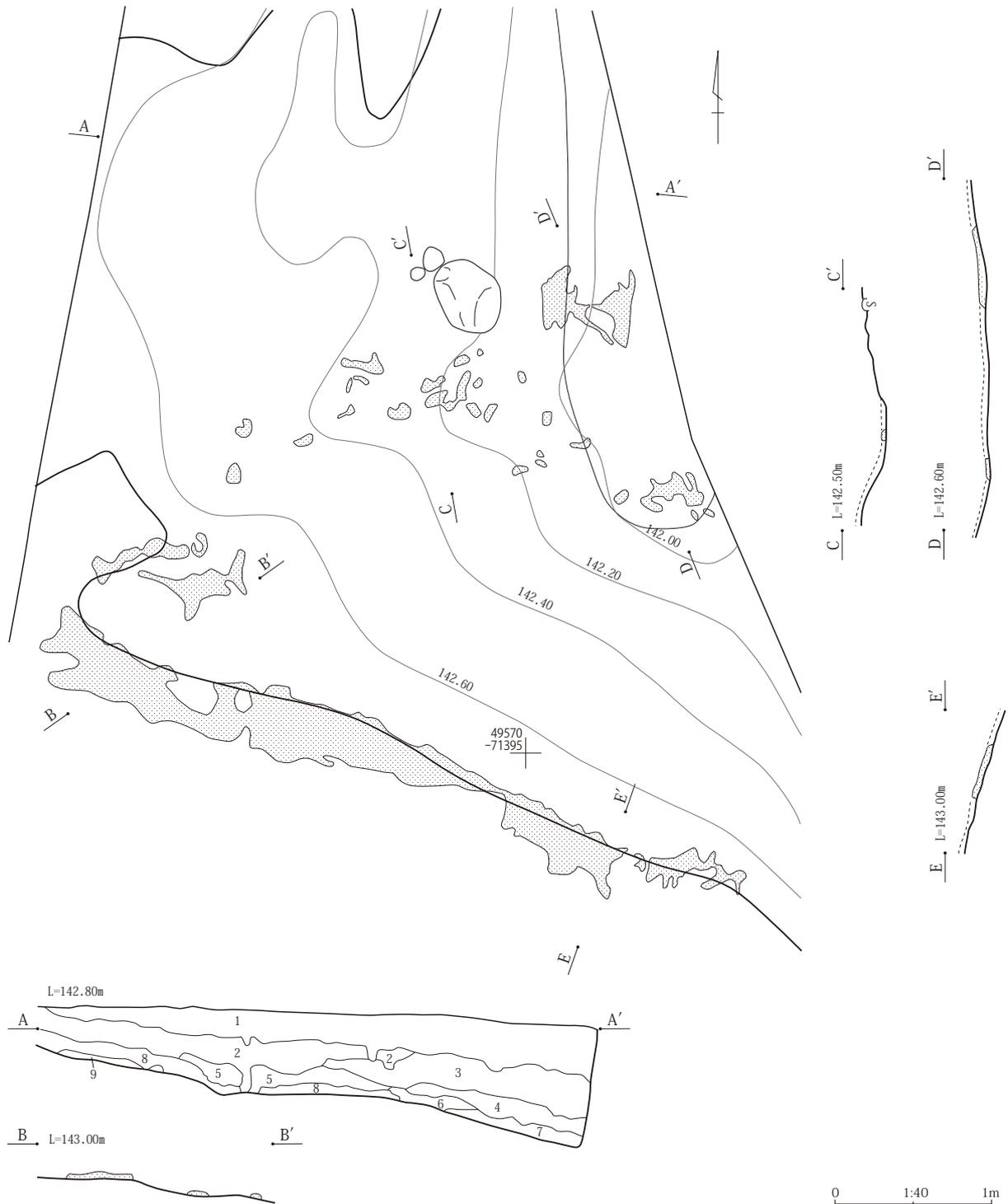
る。出土遺物は無いが、1号谷、2号谷それぞれから帯状の硬化面が検出された。硬化面は部分的に不明瞭な部分も見られるが、1号谷から2号谷に向かって連続すると考えられ、道路状遺構の可能性も考えられる。



I区1号谷土層観察所見

- | | |
|--|--|
| <p>1 灰黄色土 川砂とニツ岳軽石を含む。</p> <p>2 暗灰黄色土 やや砂質。川砂とニツ岳軽石及び若干の3層土ブロック含む。</p> <p>3 黒色砂質土 若干のニツ岳軽石と川砂と少量の上下層土ブロック含む。</p> | <p>4 3層土と5層土のブロック含む。</p> <p>5 暗灰黄色砂質土 川砂やや多く、若干のニツ岳軽石含む。</p> <p>6 暗灰黄色砂質土 多少粘性あり、若干のニツ岳軽石含む。</p> |
|--|--|

第181図 十二廻り遺跡 I区1号谷



I区2号谷土層観察所見

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗灰黄色砂質土 川砂、砂利やや多く含み、二ツ岳軽石を若干混入する。</p> <p>2 暗灰黄色砂質土 川砂と若干の二ツ岳軽石を混入する。</p> <p>3 黄灰色砂質土 若干の川砂と少量の二ツ岳軽石混入。弱い粘性見られる。</p> <p>4 黒褐色土 川砂混入。弱い粘性見られる。</p> <p>5 黒色砂質土 やや砂質。若干の川砂混入する。粘性やや見られる。</p> | <p>6 黒褐色砂質土 粘質。川砂と少量の二ツ岳軽石を混入する。</p> <p>7 暗灰黄色砂質土 肌理細かい。若干の川砂混入。粘性やや見られる。</p> <p>8 灰黄褐色砂質土 川砂と若干の二ツ岳軽石を混入する。締まる。</p> <p>9 にぶい黄色砂質土 若干の川砂と二ツ岳軽石を混入する。締まる。</p> |
|---|--|

第182図 十二廻り遺跡 I区2号谷

第2節 近世の遺構と遺物

第1項 天明泥流下の遺構

概観

天明三年七月八日、現在の暦では1783年8月5日、浅間山が大噴火を起こした。泥流は、吾妻川、利根川に流れ込み、各地にすさまじい洪水を引き起こした。このときの浅間山の噴火シナリオは、発掘調査の成果も含めて各方面から研究され、詳細に跡づけられている。ここ漆原の地に洪水が到達したのは、その日の昼ごろのことであったようだ。幸い、死者はいなかったとされているが、精魂込めた田畑が、一瞬のうちに洪水に飲み込まれた。この地域の田に水を供給していた漆原用水は壊滅し、その後長く復旧されなかったという。

今次の発掘調査では、阿久津遺跡、桑原田遺跡、中町遺跡の各調査区で水田を、桑原田遺跡IV区ではイモ類を作付けていたと思われる畑を調査した。田面には泥流に含まれた岩塊が削り取った細長い傷跡が幾筋も残され、稲と思われる植物の痕跡は、その場にあったすべてのものが、それと同じ方向になぎ倒されたことを示している。棚田状に整えられた水田区画、石垣を伴う水路とそこにかけられた石橋、稲の株跡をよけて歩く人の足跡、空洞となって残されたイモの根茎部等々。泥流下から姿を現した田畑は、江戸時代ののどかな農村風景をそのままにとどめており、災害の恐ろしさをことさらに強調しているようですらあった。

一方で、これらの遺跡に見られる水田耕土は砂質で有機質に乏しく、ごく薄いものであった。阿久津遺跡VI区の調査では畦畔や水路を壊すような形で掘られた土坑群や溝状の大きな掘り込みが見られ、この部分の水田は、泥流到達時には耕作されていなかった事が示された。さらに、天明泥流直下水田の下層に畦畔が埋もれている部分があることもわかった。地味に乏しく、それに加えて度重なる洪水に脅かされたものであろう、水田を幾度か作り替えてきた土地柄であることも理解された。



第183図 近世遺構調査区概念図 (S=1/5000)

第2項 阿久津遺跡

概要 阿久津遺跡はⅠ区、Ⅲ区～Ⅵ区に分けて調査を実施し、すべての区で1面に近世の水田遺構を検出した。阿久津遺跡の地形は、北から南へ緩やかに傾斜しているが、最南のⅠ区では落ち込みがある。地形に合わせて水田が形成され、Ⅰ区では柵田状の水田があり、Ⅲ区では、ほぼ平坦な水田が続いていた。Ⅳ区・Ⅴ区では、調査区の西側に用水路が走り、用水路の西側は一段高くなっている。各調査区とも、用水路や畦によって水田が区分けされ、各区画ごとに田面が整えられている。水田上に堆積した泥流の厚さは約1.5～3mである。Ⅲ区は他の調査区に比べて泥流の堆積が薄く、堆積が確認できなかった箇所もあるが、これは後世の攪乱や、圃場整備によって削平されたものと考えられる。水田の耕作土は、褐灰色の砂質性シルト質土が基本となる。粘性はあまり強くない。少量の白色軽石粒が混入し、酸化鉄を含んでいる。水田の畦は、水田の土を盛り上げてつくられていることから水田と同質の土壌であるが、水田の耕作土よりしまりがある。

Ⅰ区

検出された遺構は水田11枚、溝4条、道2条である。残存状況は概ね良好であるが、水田面には泥流による無数の傷跡が残っている。水田番号は南から付けている。

水田の形状

調査区の北側境界から2号溝の北側にかけて地形が落ち込んでいて、柵田状の水田が見られる。2号溝の南側では地形に著しい変化はなく、北から南へ緩やかに傾斜している。北部の10号水田と南部の1号水田との標高差は4.46mで1号水田が低い。水田は用水路や畦によって区分けされ、田面が整えられている。

1号溝はⅢ区の1号溝から続いており、Ⅰ区の北側境界に出て、西側境界を南下しながら3号水田へ突き当たったところで、東に折れて南東の調査区境

界へ至る。東に折れてすぐのところ、南北に走る4号溝が連結する。

2号溝は調査区中央部よりやや北の東側境界から出て西へ向かい、1号溝に突き当たったところで南に折れ、1号溝の東側を併走しながら、4号水田の南東隅で3号溝に合流する。3号溝は調査区の東側境界に沿って北東方向から南へ流れ、1号溝に合流する。

水田の区画

[7・10・11号水田]

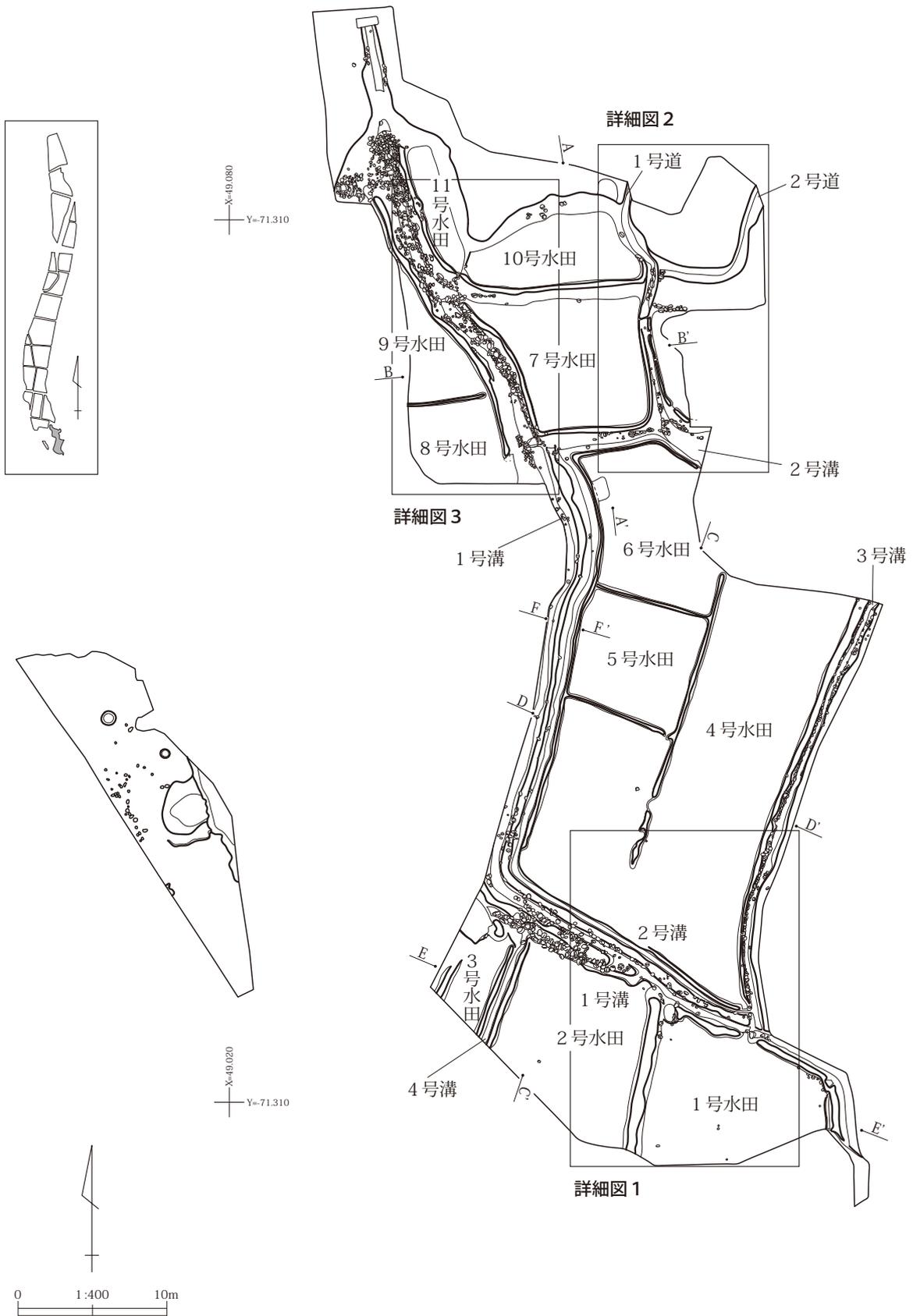
(第184・185・188・190・191図 PL.80・81)

調査区の北部にある。標高が最も高く、柵田状の水田を形成している。西側を1号溝が走り、7号水田の南側を2号溝が走る。

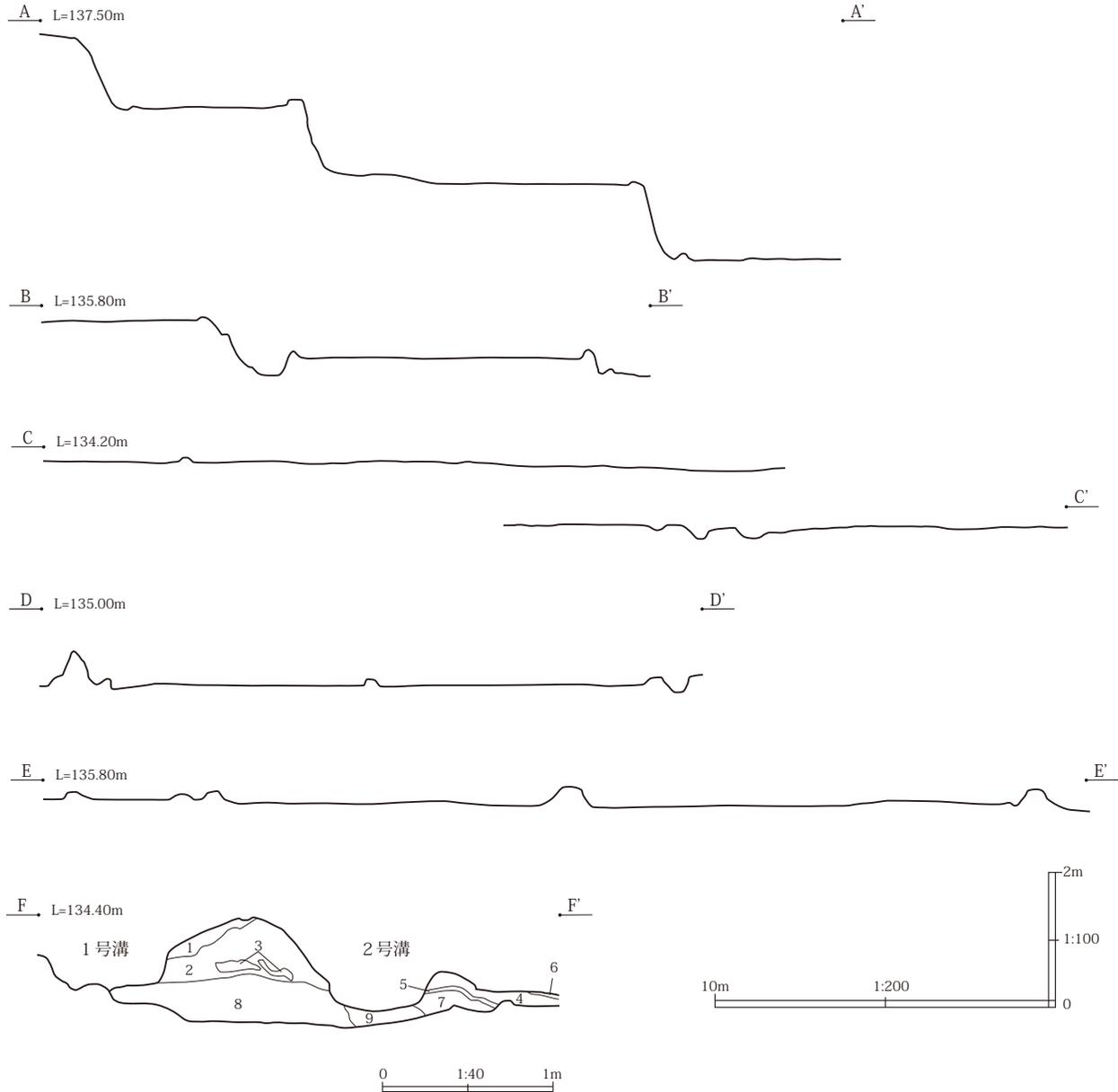
10号水田は最も高所にあり、地形を生かしてつくられている。北側は10号水田より80cmほど高くなっており、柵田状の水田があった可能性が考えられるが、攪乱されているためわからない。10号水田は幅30～50cm、田面からの高さ7～15cmの畦で南を囲まれている。10号水田の東側には幅30～50cmの1号道がある。1号道は調査区の北側境界から出て、10号水田と7号水田の東を沿うように南下して、2号溝に突き当たる。7号水田や10号水田、また2号溝の南側の6号水田へ下りるための作業用の通路と考えられる。

1号道は、10号水田の南東部を通過する付近で石が検出されている。これは10号水田の畦の壁面部分を補強していた石垣が崩れたと思われる。7号水田の東側を通過する中央より南の部分では、路面を石で補強している。路面は、人が歩いて踏み固められることからしまっている。

2号道は1号道より東につくられ、幅約30～70cmで、1号道よりやや広い。調査区境界の北東部から南西に向かって伸びながら西へ曲がり、1号道へ合流する。1号道と同様に水田へ行くための作業用通路と考えられる。路面は、人が歩いて踏み固められることからしまっている。2号道の東側から南側は斜面となっていて、2号道が1号道へ合流する地点の斜面の下部では、比較的大きめの川原石を積



第184図 阿久津遺跡 I区全体図



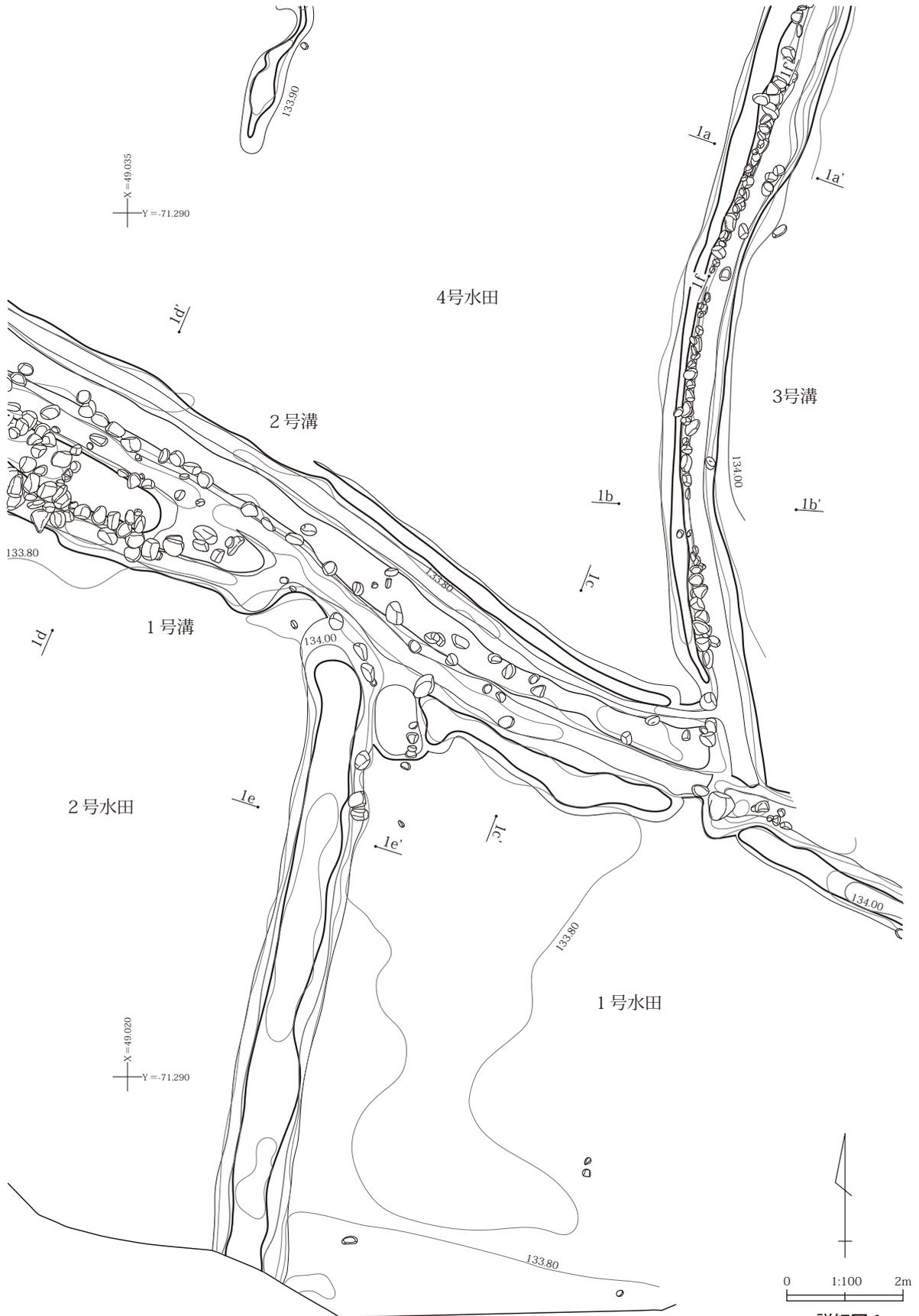
阿久津遺跡 I 区土層断面 F ライン土層観察所見

- 1 灰黄褐色砂質土 酸化鉄粒と 2 層土の小ブロックを含む。粗砂をやや多く含む。
- 2 褐灰色砂質土 少量の酸化鉄と二ツ岳軽石を含む。細砂を主体とし、粗砂も少量含む。(植物の根の痕跡：天明泥流と 2 層土の混土、外周に酸化鉄付着?)。粘性あり。
- 3 2 層土に酸化鉄の付着した層。橙色を呈す。(明赤褐色土)
- 4 暗灰黄色砂質土 細砂を多く含み、若干の二ツ岳軽石や砂利を含む。
- 5 2 黄灰色砂質土 粗砂主体。橙色土・灰褐色～にぶい赤褐色土の酸化鉄を多く含む。酸化マンガン粒を含む。
- 6 にぶい黄橙色砂質土 細砂主体。上下端位ににぶい褐色土の酸化鉄が沈着する。
- 7 褐灰色砂質土 川砂の小ブロック、二ツ岳軽石、酸化鉄などが比較的多く混入する。粘性なし。
- 8 にぶい黄色砂質土 黄色粘質土、灰色砂質土、灰白色砂質土の小ブロックを多量に含む。人為的に埋めた土と思われる。

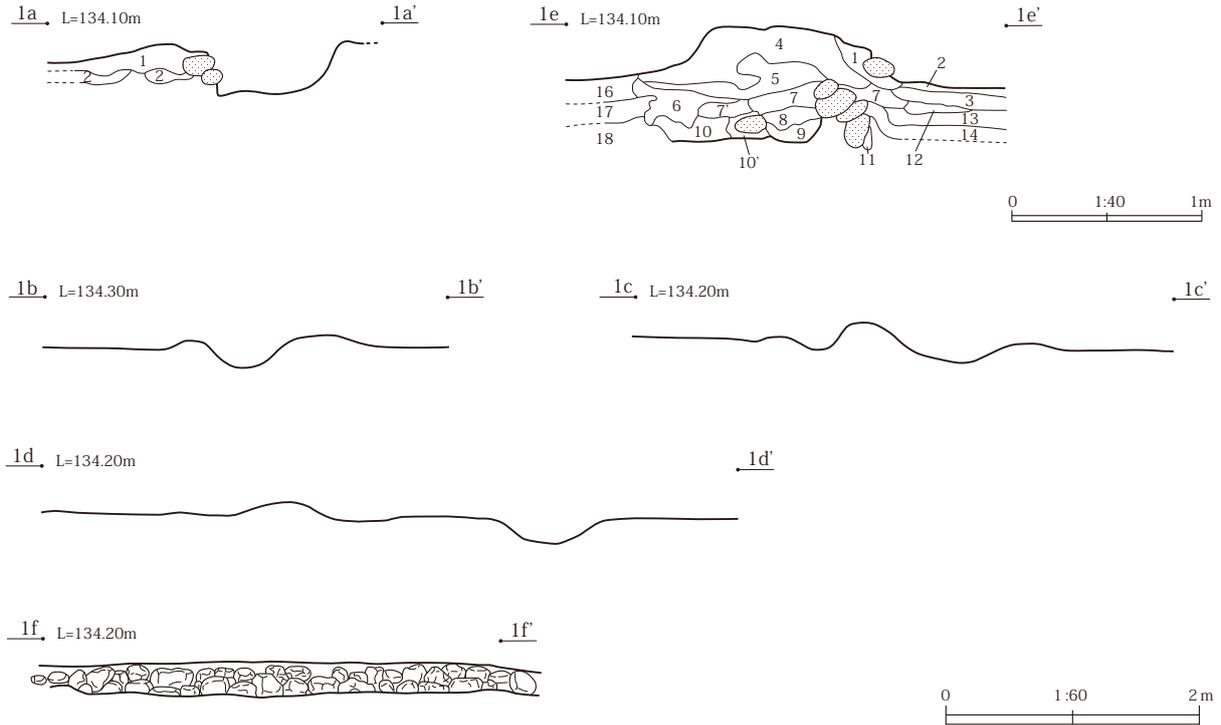
- 9 灰白色土、灰白色砂質土を含む黄灰色土、明オリーブ灰色土の小ブロック混土層。明オリーブ灰色土は東よりに多く、酸化鉄が部分的に沈着する。

※東は 5 号水田であり、4 層が 2 号溝と田面を限る畦の構成土及び耕土にあたるものと思われる。8 層を人為的な埋設にかかる土層と見るので、天明泥流下に残された水田に先行する水田には、1・2 号溝を合わせた幅広の溝が伴っていたことになる。この溝を 8 層で埋め、中央部に 2 層を盛って、2 条の溝を作っている。

第185図 阿久津遺跡 I 区高低図・土層断面図



第186図 阿久津遺跡 I区詳細図1



阿久津遺跡 I 区 1a ライン土層観察所見

- 1 灰色～灰オリーブ色シルト質壤土 上位は灰オリーブ色、下位は灰色となる。河床小礫を若干混入する。植生に沿って酸化鉄が入る。
- 2 砂利と灰黄色砂質土小ブロックの混土。

※西側が4水田で、1層は天明泥流水田の耕作土及び畦構成土である。ここでは3号溝の西壁にのみ石組みが見られた。東側は調査区外となる。地山は砂礫層で、酸化鉄の沈着が顕著に見られる。

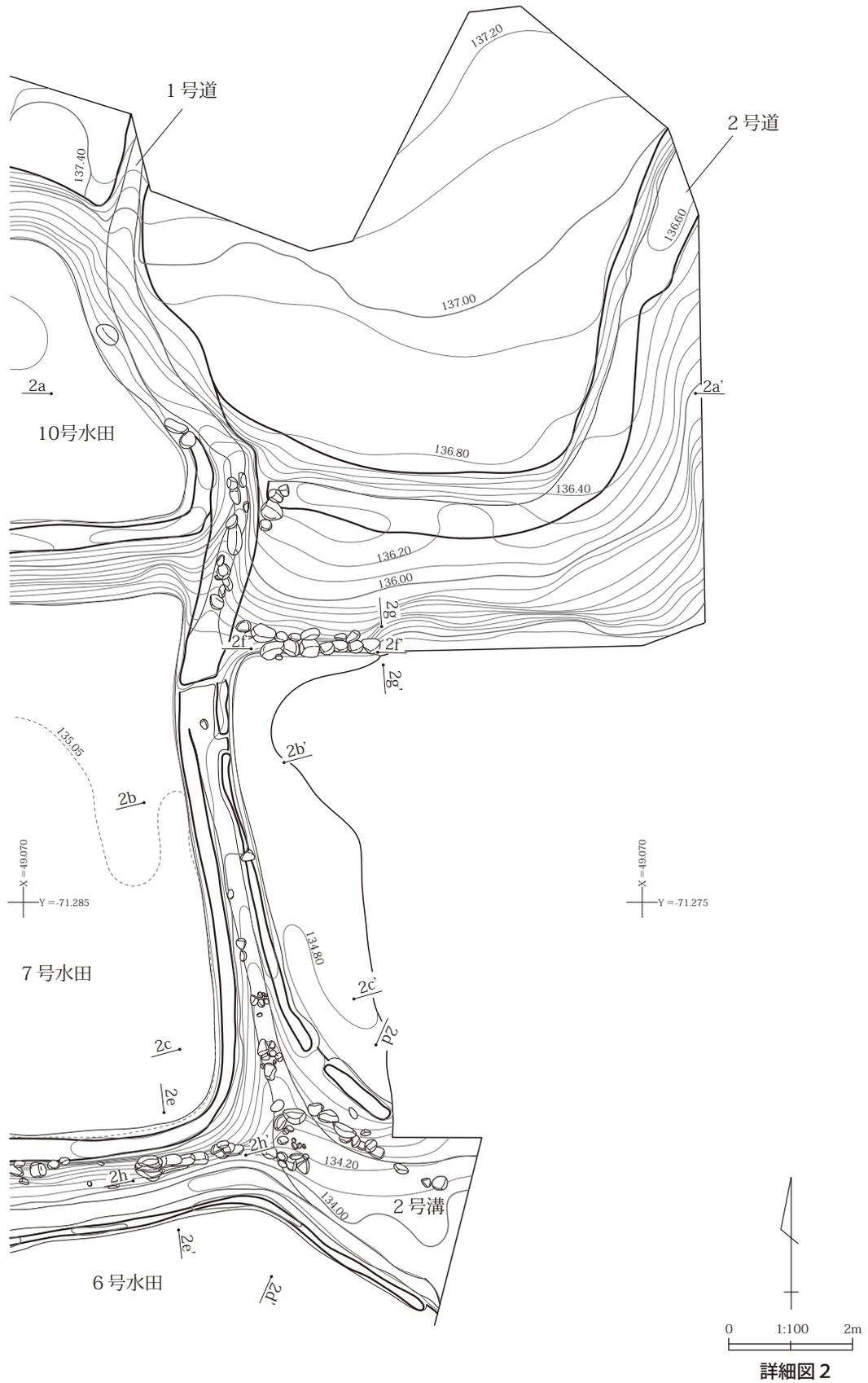
阿久津遺跡 I 区 1e ライン土層観察所見

- 1 灰褐色シルト質壤土 ニツ岳軽石を若干含む。畦上部の最終堆積土。
- 2 灰褐色シルト質壤土 ニツ岳軽石を若干含む。水田最終耕土。
- 3 灰色～灰白色砂 川砂層。小礫と若干の2層土ブロックを含む。洪水層か？
- 4 褐灰色土 ニツ岳軽石、酸化鉄の小ブロック、にぶい黄色土、明黄褐色土の小ブロック、細砂を若干含む。畦の構成土。
- 5 褐灰色土と灰黄色砂質土の小ブロック混土。少量のニツ岳軽石を含む。4層との間を中心に、酸化鉄の凝集層がある。畦の構成土。
- 6 暗灰黄色砂質土と、やや粘質の褐灰色土の小ブロック混土。少量のニツ岳軽石を含む。旧水路の覆土か。
- 7 灰黄褐色土 やや砂質。シルトに細砂を含む。粒径の小さいニツ岳軽石を少量含む。石組み水路の覆土。
- 7' 7層に似るが、砂の混入量少ない。10層と同じく石組み水路の裏込めに相当する。
- 8 川砂と7層土ブロックの混土。子どもの拳大の河床礫を含む。若干の砂利を含む。石組み水路の覆土。
- 9 にぶい黄褐色土 川砂が主体。流水の痕跡。石組み水路の覆土。
- 10 灰色粘質土 川砂と少量の砂利を含む。石組み水路の裏込め土。
- 10' 黄灰色粘質土 色調は異なるが10層に似る。石組み水路の裏込め土。
- 11 黄灰色砂質土 砂質シルト質。石組み水路の裏込め土。

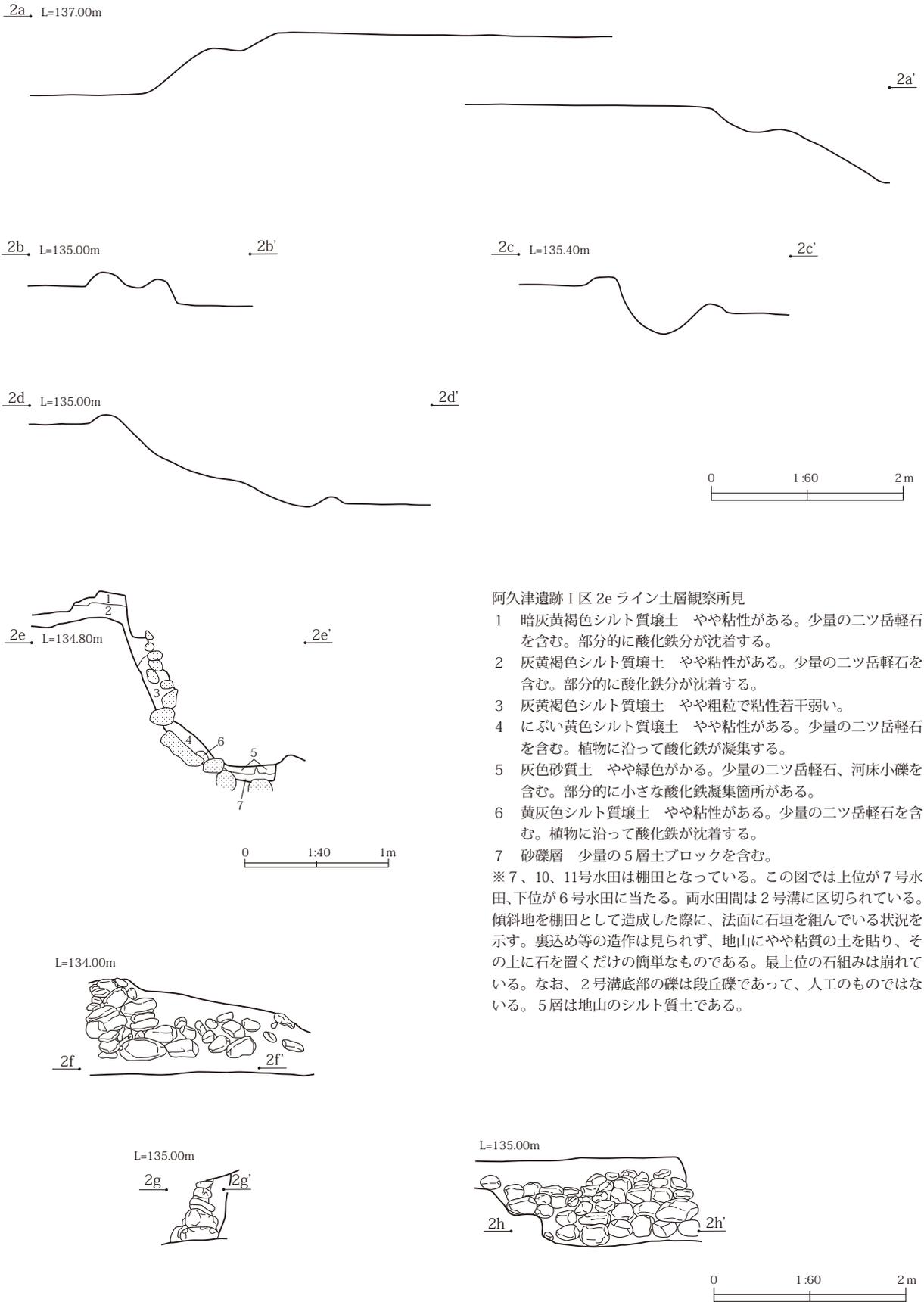
- 12 灰黄褐色砂質土 多少粘性がある。川水混入し、灰白色シルト質壤土が縞状に入る。洪水起源の層と思われる。
- 13 12層土とニツ岳軽石、川砂の混土層。洪水起源の層と思われる。
- 14 明オリーブ灰色粗砂 川砂が縞状に入り、酸化鉄も縞状に沈着する。地山砂層。
- 15 上位は褐灰色土、下位は褐灰色シルト質壤土。やや粘性あり。川砂を含む。
- 16 褐灰色土 酸化鉄が沈着した細砂、17層土の小ブロック、ニツ岳軽石を含む。天明泥流直下の水田耕土。
- 17 灰褐色砂質土 細砂と少量のニツ岳軽石を含む。地山。
- 18 オリーブ灰色砂質土 細砂を多く含む。微量のニツ岳軽石を含む。

※天明泥流下では1号水田と2号水田を区分する畦であるが、これ以前の段階で、6層に埋もれた水路があり、さらにさかのぼるとほぼ同じ位置に石組みを伴う水路が作られていた事が示されている。9層がこの水路の下底に当たり、砂の堆積により流水があったことが示される。

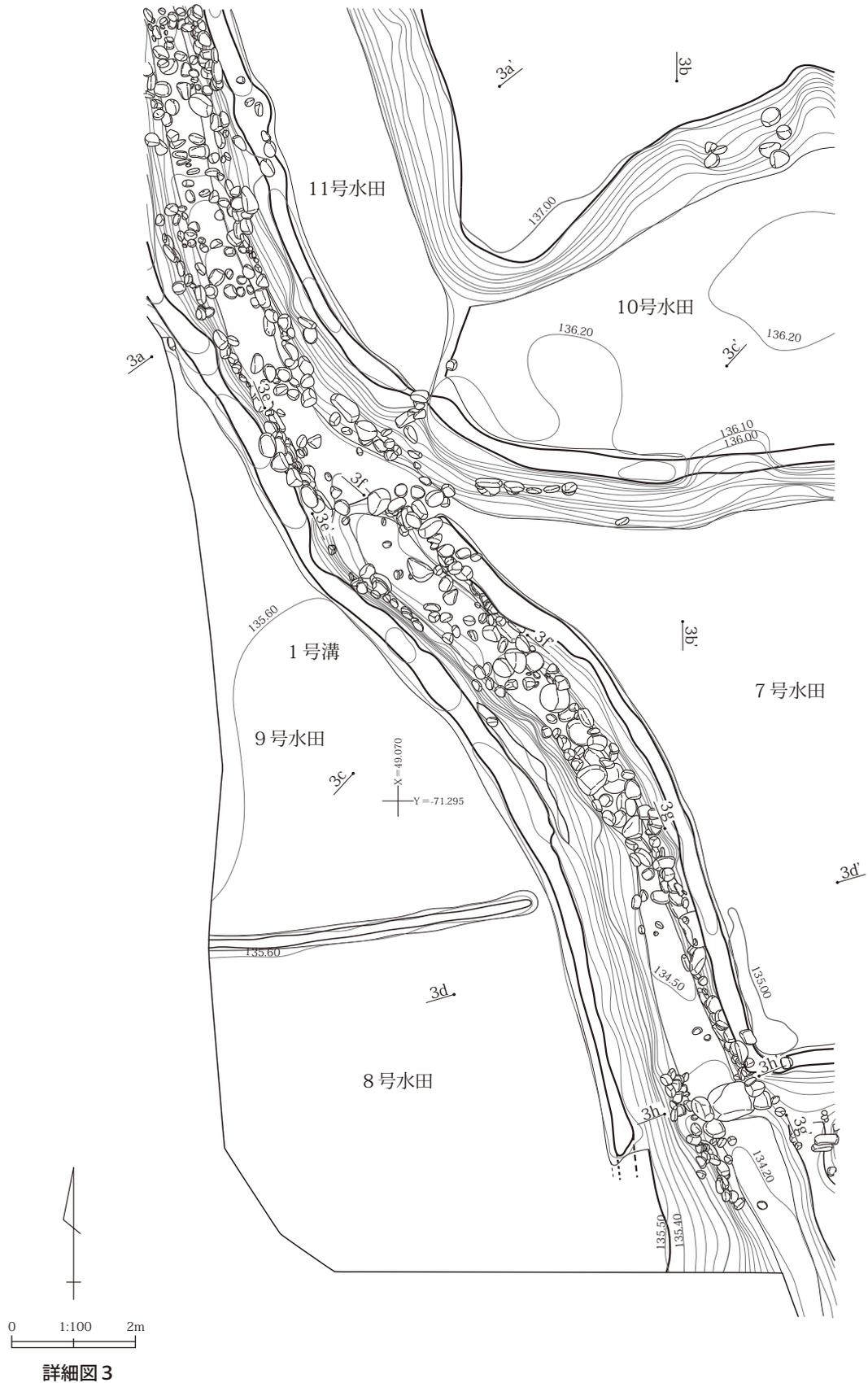
第187図 阿久津遺跡 I 区詳細図1 土層断面図・高低図・立面図



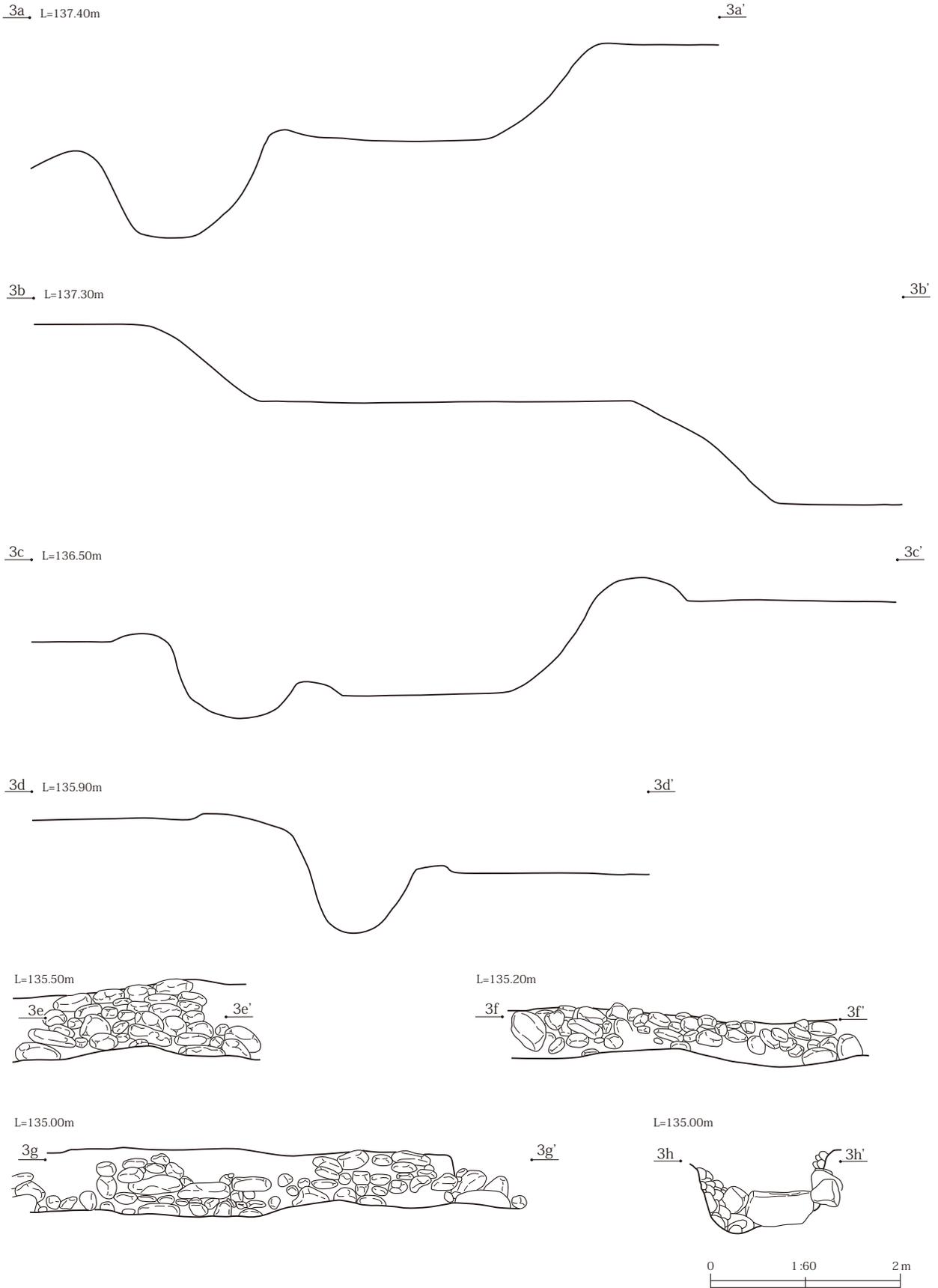
第188図 阿久津遺跡 I区詳細図2



第189図 阿久津遺跡 1区詳細図2 土層断面図・高低図・立面図



第190図 阿久津遺跡 I区詳細図3



第191図 阿久津遺跡 I区詳細図3 高低図・立面図

第4章 遺構と遺物

んだ石垣が見られる。

西を1号道、東を2号道で囲まれたところは、10号水田より64cm高くなっている。水田跡は確認できなかったが、周囲の状況から棚田状の水田がつくられていた可能性が考えられる。

11号水田は10号水田の北西にあり、南北に細長く、非常に狭い。西側で70～100cm下を1号溝が流れる。1号溝は地形に沿って南側が深くなる。11号水田の東から北側は攪乱されているが、東で94～110cm、北で123cm高くなっており、棚田状の水田があった可能性が考えられる。11号水田は10号水田より15cm低く、両水田の境界では畦の高まりは見られず、段差が生じて10号水田から11号水田へ水が流れるしくみになっている。西を幅35～60cm、田面からの高さ12～21cmの畦で囲まれ、この南端が幅30cmほど途切れて水口となり、11号水田から1号溝へ落水する。水口は川原石を積んで補強している。

7号水田は北の10号水田より110～115cm低く、北側は段境の斜面になっている。西側では29～62cm下を1号溝が流れ、南では107～113cm下を2号溝が流れる。1号溝は南側が深くなる。7号水田の東、南、北を囲んでいる畦は幅25～50cm、田面からの高さ1～15cmである。南で低くなっている。西側の畦の北端が幅50cmほど途切れて水口となり、1号溝から取水する。また南西隅の畦を低くして幅50cmほどの水口とし、7号水田から1号溝へ排水する。

[8・9号水田]

(第184・185・190・191図 PL.80・81)

調査区の北西部にある。8・9号水田は1号溝の西側にあり、ともにごく一部を確認したのみである。北の9号水田がやや高く、8号水田との間に1～4cmの標高差がある。両水田は幅20～40cm、高さ3～5cmの畦で区切られ、この東端が幅20cmほど途切れて水口となっているが、調査範囲内には他に水口が見られず、給排水の詳細はわからない。東側は1号溝に沿った土手状の畦で区切られる。幅30～70cmで、田面からの高さは7～12cmだが、9号水田北側では25cmほどの高さとなる部分が見られる。

畦頂部から1号溝底までは85～145cmあり、地形に沿って南側が深くなる。1号溝を挟んで東に接する7号水田、田面との比高は47～50cmで7号水田が低く、11号水田、田面との差は45cmで11号水田が高い。

[4・5・6号水田] (第184～186図 PL.80)

調査区の中央部にある。4・5・6号水田は北、西、南を2号溝が流れ、東側を3号溝が流れる。全体に北から南へ僅かに傾斜している。2・3号溝で囲まれた範囲のほぼ中央に北北東から南南西方向に延びる幅30～60cm、高さ3～8cmの畦がつくられ、畦の西側の5・6号水田と4号水田を区切っているが、畦の南が途中で途切れている。

6号水田は、北から西を2号溝に沿った土手状の畦で区切られる。幅20～40cm、田面からの高さ2～15cmだが、北側が低くなっている。東の4号水田との比高は畦の両側でほとんど同じである。2号溝を挟んで、北の7号水田との比高は、105～107cmで6号水田が低い。調査範囲内に水口は見られない。

5号水田は、6号水田の南にあり、6号水田より1cmほど低く、両水田は幅30～50cm、高さ1cmの畦で区切られる。西は2号溝に沿った幅25～40cm、田面からの高さ7～12cmの土手状の畦で区切られる。東の4号水田との比高は畦の両側でほとんど同じであるが、5号水田の西側がやや高い。5号水田の南は、幅30～50cm、高さ4～5cmの畦で4号水田と区切られ、3cmほど4号水田が低くなる。この畦の東側が幅10cmほど途切れて水口となり、5号水田から4号水田に水が流れたと思われるが、6号水田と5号水田の間や2号溝と5号水田の間に水口は見られず、どこから取水したか詳細はわからない。

4号水田は、東を3号溝に沿った幅30～70cm、田面からの高さ5～12cmの土手状の畦で区切られている。西から南は、幅20～50cm、田面からの高さ1～6cmの土手状の畦で区切られている。南側の畦は、あまり高くなく、西寄りでは高まりが消滅している。この南側の畦の東端が40cmほど途切れて水口となり、4号水田の水が2号溝に排水されたと思われる。

[1・2・3号水田] (第184～187図 PL.80)

調査区の南部にある。1・2・3号水田の北側を1号溝が流れ、1号水田の北東部で南に折れる。全体に西から東へ傾斜している。

3号水田は、調査区の南西隅にあり、ごく一部を確認したのみである。北側を1号溝が流れるが、畦は崩れているためほとんど高まりは見られない。調査区の境界際に幅80～90cm、高さ12cmの畦があるが、一部が検出されたのみであるため、詳細はわからない。東に2号水田があり、3号水田との間を幅60～70cmの4号溝が流れる。4号溝は1号溝に連結し、1号溝から取水していると思われる。3号水田の東は、この4号溝に沿った幅30～50cm、田面からの高さ9～13cmの畦で区切られている。3号水田は、1号溝を挟んで北の4号水田より2～4cm高い。

2号水田は、西の3号水田より3～7cm低い。北側を1号溝が流れるが、畦は崩れているため高まりは見られない。1号溝を挟んで北の4号水田より3～5cm低い。

1号水田は西の2号水田より3～7cm低く、両水田は幅110～140cm、高さ26～36cmの畦で区切られる。北から東は1号溝に沿った幅50～70cm、田面からの高さ5～23cmの土手状の畦で区切られ、東側の畦が高くなっている。1号水田の北西隅に浅い窪みがあるが、水流で窪んだものと思われる。北側の畦の中央部が幅70cmほど途切れて水口となり、1号溝から1号水田へ取水される。東側の畦沿いに、溝状の窪みがあるが、一部を確認したのみであるため、詳細はわからない。1号溝を挟んで北の4号水田より5～9cm低い。

溝

1号溝 (第184～187・190・191図 PL.82)

位置 X=49.015～49.090/Y=-71.265～-71.300

規模 長さ96.5m、幅(上端)0.5～2.2m(下端)0.2～1.1m、深さ0.13～0.85m

特徴 溝の北部と南部では溝の内壁を補強するための多数の石が乱雑な状態で検出された。本来石垣が

施されていたものが、泥流によって崩されたと考えられる。石は丸みを帯びた川原石を使用し、大きさは様々である。

2号溝 (第184・185・188・189図)

位置 X=49.025～49.065/Y=-71.275～-71.290

規模 長さ60.0m、幅(上端)0.3～1.5m(下端)0.15～0.6m、深さ0.05～0.2m

特徴 部分的に内壁を川原石で補強している。6号水田の北から西側を流れる部分で幅が比較的広いが、3号溝に合流する付近では狭くなる。

3号溝 (第186・187図)

位置 X=49.025～49.050/Y=-71.265～-71.275

規模 長さ32.0m、幅(上端)0.45～1.1m(下端)0.2～0.6m、深さ0.11～0.29m

特徴 掘り込みは平均に浅い。内壁にやや小さめの川原石を埋め込むように組んで補強している。特に西側内壁は全体に石で補強している。

4号溝 (第184図 PL.82)

位置 X=49.020～49.030/Y=-71.285～-71.290

規模 長さ7.8m、幅(上端)0.6～0.7m(下端)0.2～0.4m、深さ0.12～0.25m

特徴 北部が1号溝に連結し、1号溝から水を取り入れている。2号水田と3号水田の境界となっている。

道

1号道 (第188・189図 PL.81)

位置 X=49.070～49.080/Y=-71.280

規模 長さ19.0m、幅0.25～0.7m

2号道 (第188・189図 PL.81)

位置 X=49.075～49.080/Y=-71.265～-71.275

規模 長さ10.7m、幅0.3～0.7m

Ⅲ区

検出された遺構は水田6枚、溝3条である。水田面に北北西から南南東方向に無数の筋がついているのが見られ、泥流の痕跡を確認できる。水田面は泥流によって波打ち、また泥流中の小石が水田面に入り込んで荒れた状態になっている。1号溝の西側は、砂っぽい土壌で水田跡は確認できなかった。

水田の形状

平坦な水田がつくられている。北西部隅の6号水田と南部の1号水田との標高差は約20cmで1号水田が低い。水田は用水路や畦によって分けられ、田面が整えられている。1号溝は調査区境界の北西部から出て南下し、1号溝の中央部で調査区境界の北東部から出た2号溝が合流する。合流点より南は大きく西側へ湾曲して調査区の南側境界へ至り、Ⅰ区の1号溝へ続く。1号溝は内壁を川原石で補強し、特に2号溝との合流点より南は石が規則的に組み立てられており、一部に五輪塔が利用されていた。3号溝は調査区の東側境界で一部を確認したが、ほとんどが調査区外のため詳細はわからない。

水田の区画

[6号水田] (第195図 PL.82)

調査区の北西隅にあり、Ⅲ区で最も標高が高い。6号水田は5号水田より2～4cm高く、両水田は幅95～160cm、高さ7～13cmの畦で区切られる。調査範囲内に水口は見られない。

残存状況はあまり良好ではなかったが、6号水田で稲跡や人の足跡が検出された。稲は北西から南東方向へ倒れているのが確認できた。足跡は、長さが36～41cm、幅が15～22cmで、水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。足跡は左右が不揃いのため、どの方向へ歩いたのかわからない。6号水田以外の水田では泥流による傷が顕著であったため、検出できなかった。

[2・4・5号水田] (第192～195図 PL.82)

調査区の中央部から北部にある。西側を1号溝が

走り、東から南側を2号溝が走る。4号水田の東に3号溝の一部が見られる。

5号水田、4号水田とも東側が低くなっている。

4号水田は、5号水田より西が2～3cm低く、東が2～4cm高い。両水田は幅35～60cm、高さ1～6cmの畦で区切られ、この西端が幅130cmほど途切れて水口となり、5号水田から4号水田へ水が流れる。

4号水田の西は1号溝に沿った幅45～90cm、田面からの高さ5～12cmの土手状の畦で区切られている。この畦の南は泥流に流されて途中で途切れており、水田面が1号溝へ向かって低くなっている。4号水田の東は3号溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ3～7cmの土手状の畦が一部見られる。

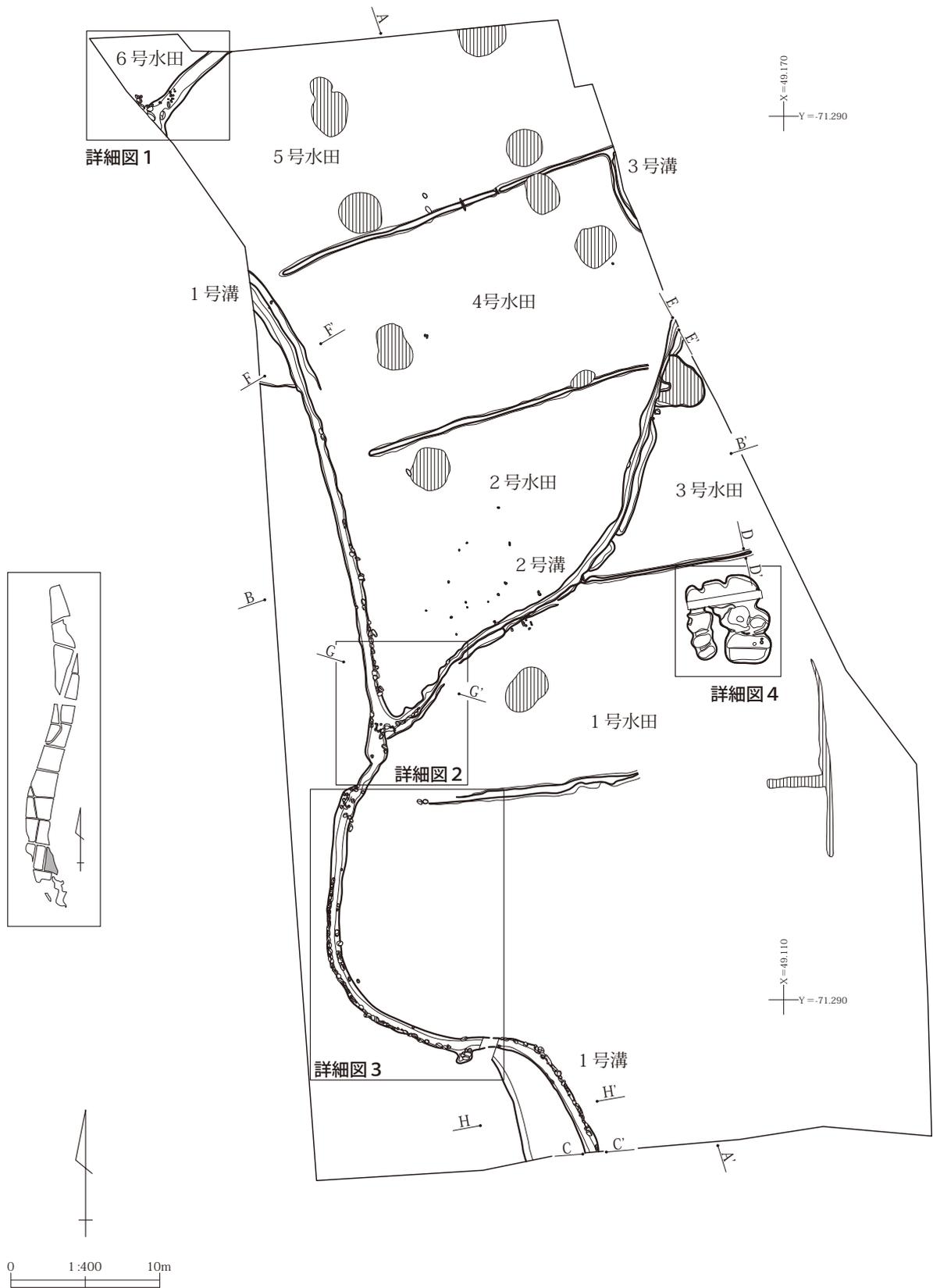
2号水田は4号水田より、1～2cm低く、北東部がやや高く、北西部と南西部が1号溝に向かって低くなっている。両水田は幅35～60cm、高さ2～6cmの畦で区切られ、この西端が幅260cmほど途切れて水口となり、4号水田から2号水田へ水が流れる。2号水田の西は1号溝が流れ、東から南は2号溝が流れるが、溝に沿った畦は泥流に流されたと思われ、畦の高まりは見られない。また2号水田の水は1号溝か2号溝へ排水されたと思われるが、水口は見られなかった。

[1・3号水田] (第192～195・197図 PL.82)

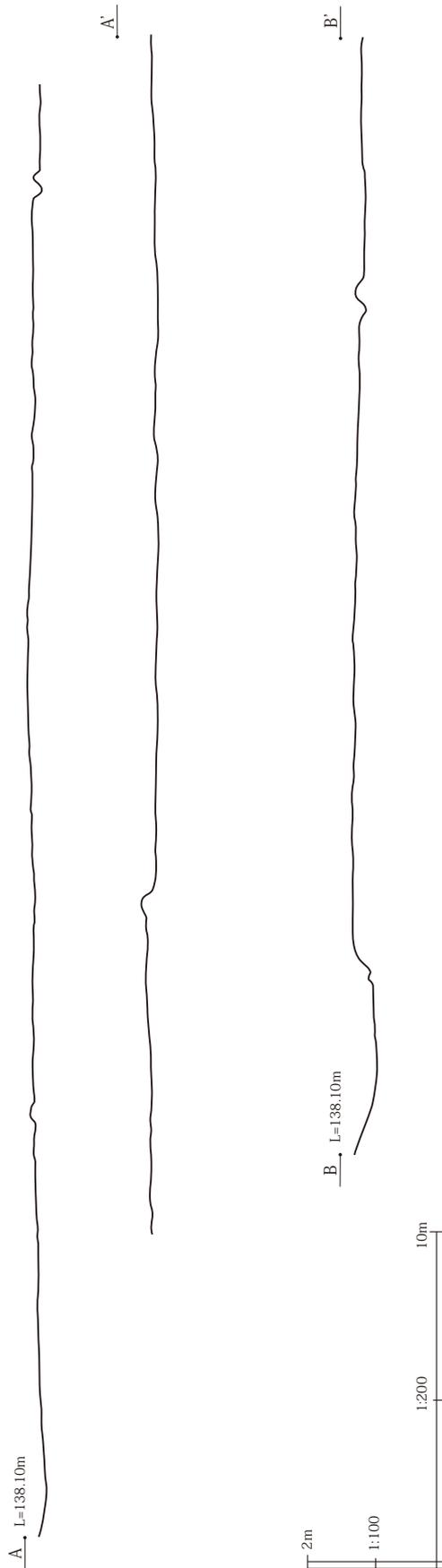
調査区の南部にある。1・3号水田の北西を2号溝が走る。1号水田の西で2号溝が1号溝に合流する。1号水田と3号水田はほとんど同じ標高で、2号溝の際が若干低くなっている。両水田は、幅30～50cm、高さ4～10cmの畦で区切られている。畦の東端は攪乱により途中で消滅している。

3号水田の北西は2号溝に沿った幅50～60cm、田面からの高さ9～15cmの畦で区切られている。泥流の影響により畦が途中で切れているところや、攪乱されているところもある2号溝を挟んで接する2号水田より12～15cm低い。

1号水田は、北西が2号溝に沿った幅20～60cm、田面からの高さ7cmの畦で区切られているが、泥流に流されて途中で消滅している部分がある。2号溝



第192図 阿久津遺跡 Ⅲ区全体図



第193図 阿久津遺跡 Ⅲ区高低図1

を挟んで接する2号水田より10～15cm低い。

南は幅40～90cm、高さ4～6cmの畦で区切られているが、畦の両端が泥流に流されて途中で消滅している。1号水田の東部が攪乱されていたり、また東部から畦の南側では泥流の堆積が見られず、水田跡は確認できなかった。1・3号水田の水口は、調査範囲内には見られず、給排水の詳細はわからない。

溝

1号溝 (第192・194～196図 PL.83)

位置 X=49.095～49.155/Y=-71.300～-71.325

規模 長さ71.5m、幅(上端)0.4～1.5m(下端)0.2～1.2m、深さ0.13～0.42m

特徴 溝の内壁を川原石で補強している箇所がある。2号溝との合流点付近のすぐ北では、東側内壁に石が規則的に貼られ補強されている。合流点では、東側と西側の内壁に部分的に石が貼られているが、一部小さい石が崩れて溝の底部に落ちている。合流点付近より少し南では、内壁の石が崩れ落ちている。さらに、南下して西側へ大きく湾曲しているところでは、規則的に石を組んで補強している。大きい石は1枚で壁に並べて貼って、隙間を小さい石で埋めている。また、小さい石をいくつも組んで積み上げて補強しているところもある。補強材として五輪塔の一部も利用されていた。石の補強は、特に水が当たる部分に施された。

2号溝 (第192・194・195図 PL.83・84)

位置 X=49.125～49.155/Y=-71.295～-71.315

規模 長さ35.8m、幅(上端)0.2～0.8m(下端)0.08～0.4m、深さ0.06～0.2m

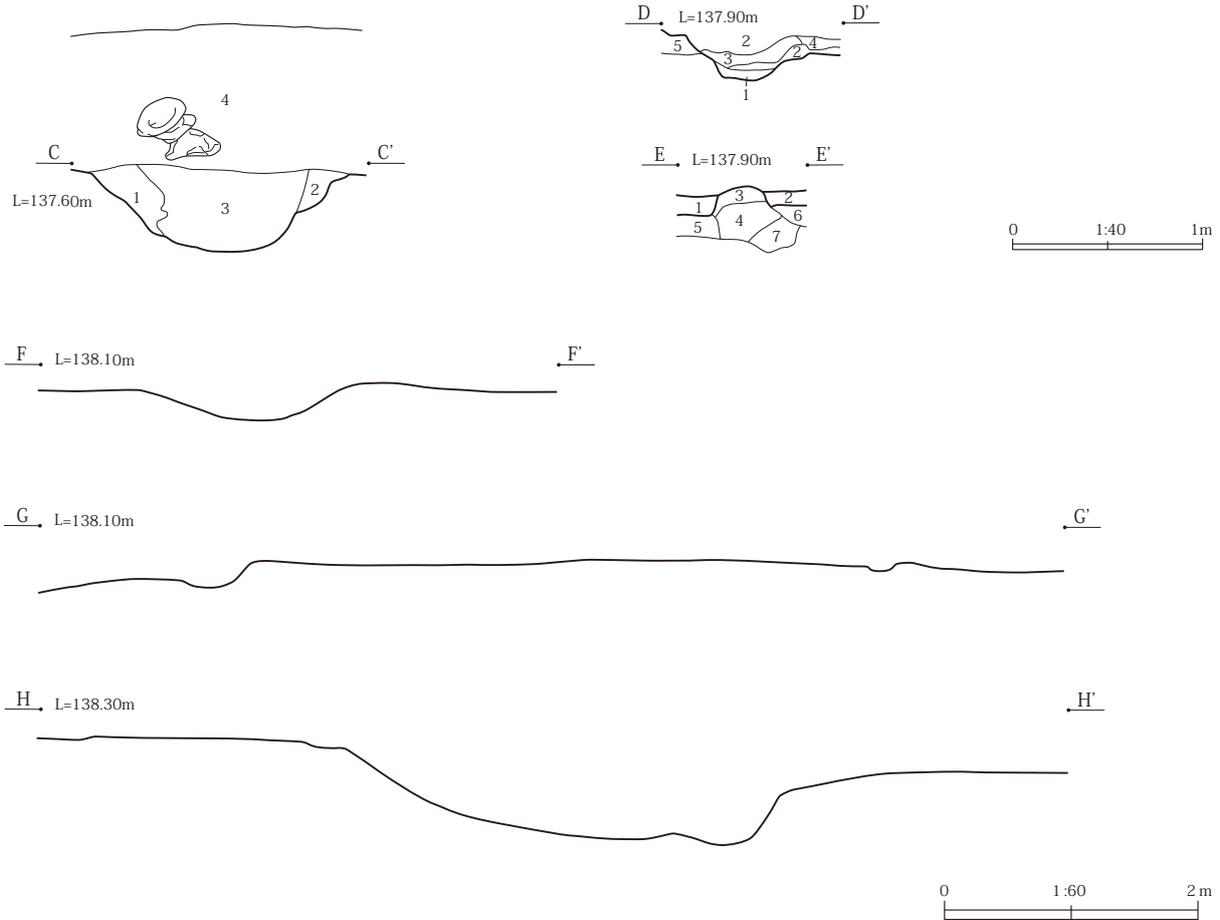
特徴 1号溝と比較すると掘り込みが浅く、幅も狭い。1号溝との合流点付近で南側内壁に石が貼られ補強されている。

3号溝 (第192図 PL.84)

位置 X=49.160～49.165/Y=-71.295～-71.300

規模 長さ4.8m、幅 不明、深さ0.24～0.27m

特徴 溝の一部を確認したが、ほとんどが調査区外であるため、詳細は不明である。



阿久津遺跡Ⅲ区Cライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石を含む。締まり中。粘性弱い。
- 2 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の白色軽石を含む。明黄褐色土細砂を含む。締まり中。粘性弱い。
- 3 天明泥流層。
- 4 現表土。

※1号溝南端の土層断面であるが、隣接する阿久津遺跡Ⅰ区との連続は確認できない。4層中に見られる礫は火山礫ではなく、溝内壁の石組みに用いられる円礫で、数石が組み合う。この図を採取した調査区南部には天明泥流がほとんど残っておらず、圃場整備によって旧地表面は失われていることからみて、1号溝は本来この位置まであって、石垣の痕跡が残されたものとの想定がなされている。

阿久津遺跡Ⅲ区Dライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 砂質に近いシルト質。赤褐色の砂を含む。締まりやや弱い。粘性やや弱い。
- 2 天明泥流
- 3 灰白色シルト質土 径2mm以下の白色軽石を含む。締まり中程度。粘性やや弱い。
- 4 明褐色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石を含む。赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 5 明褐灰色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石を含む。赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。

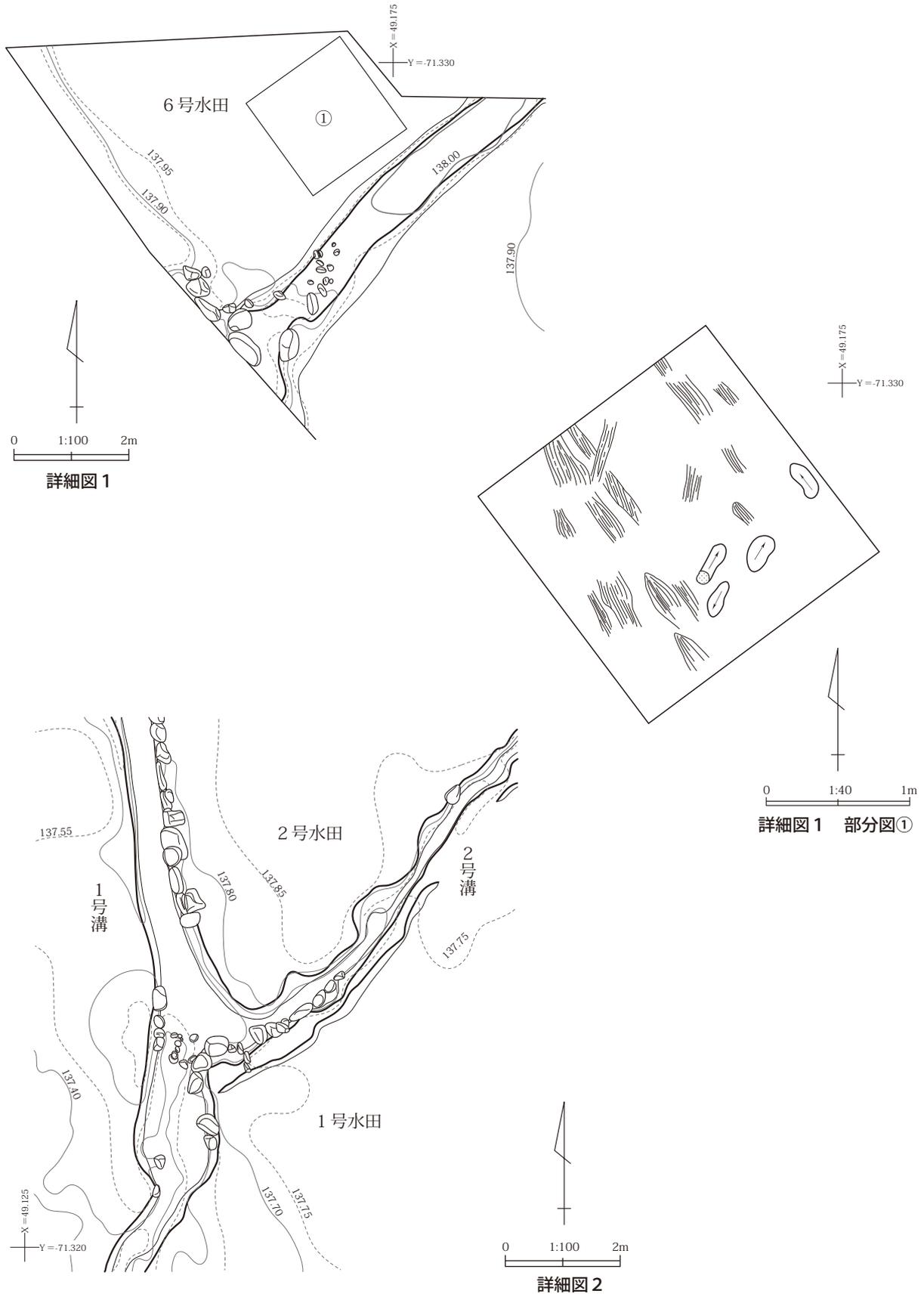
※2層の天明泥流が3層を挟むように堆積する。また、水田耕土に相当する4層下に潜り込み、さらに4層が変形して溝上に傾く様子も見られる。

阿久津遺跡Ⅲ区Eライン土層観察所見

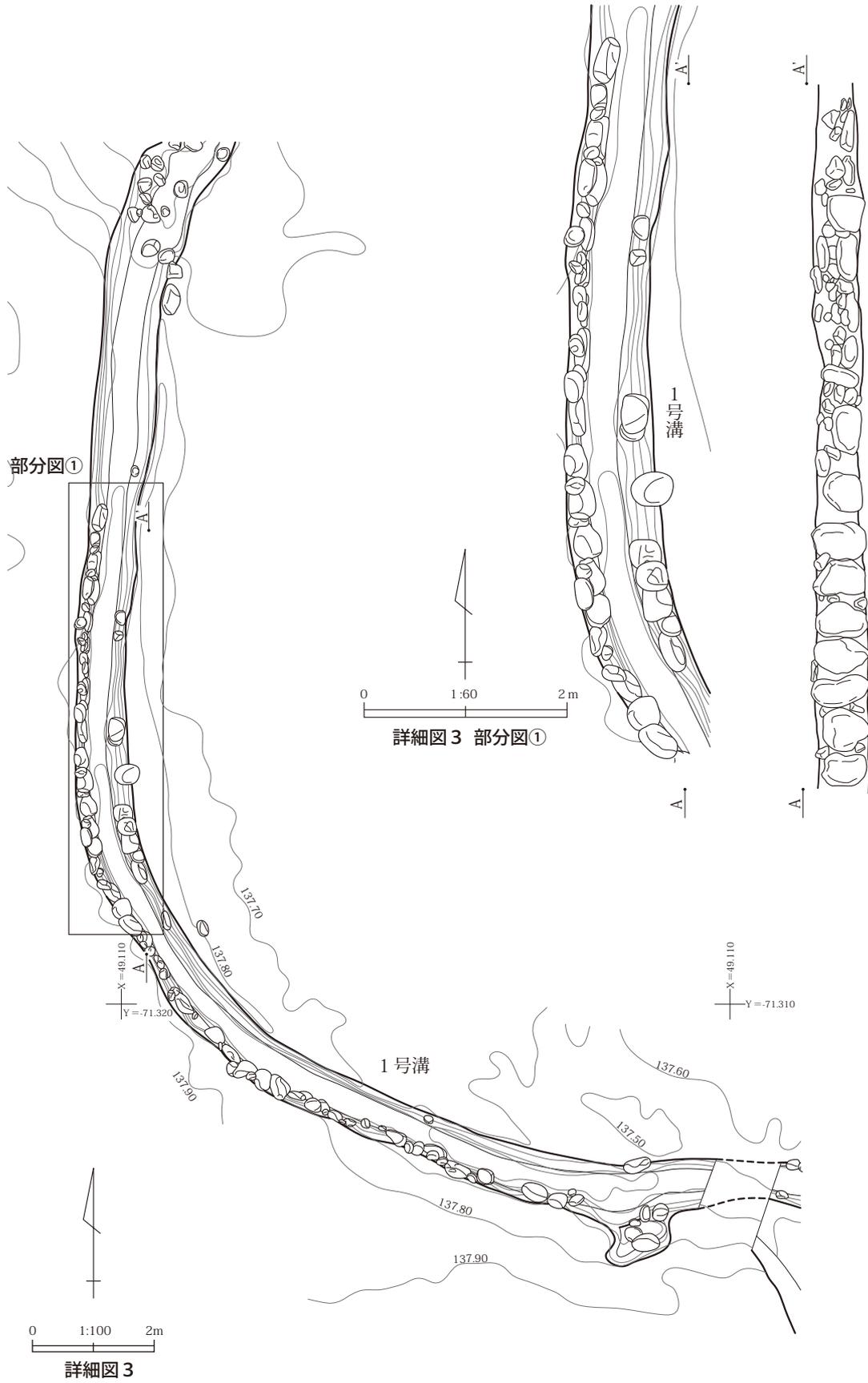
- 1 明褐灰色土 シルト質。一部黄褐色化。径5mm以下の白色軽石含む。締まり中。粘性やや弱い。
- 2 明褐灰色土 シルト質。径3mm以下の白色軽石含む。締まり中。粘性弱い。
- 3 明褐灰色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石含む。締まり中。粘性弱い。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石、黄褐色シルト質土ブロックを含む。締まり中。粘性やや弱い。
- 5 褐灰色土 シルト質。上面赤褐色化。径2mm以下の白色軽石、黄褐色シルト質土ブロック含む。締まり中。粘性やや弱い。
- 6 灰黄褐色土 シルト質。上面赤褐色化。径3mm以下の白色軽石含む。黄褐色シルト質土ブロックを含む。締まり中。粘性やや弱い。
- 7 褐灰色土 シルト質。径2mm以下の白色軽石、黄褐色シルト質土ブロックを含む。締まり中。粘性やや弱い。

第194図 阿久津遺跡 Ⅲ区土層断面図・高低図2

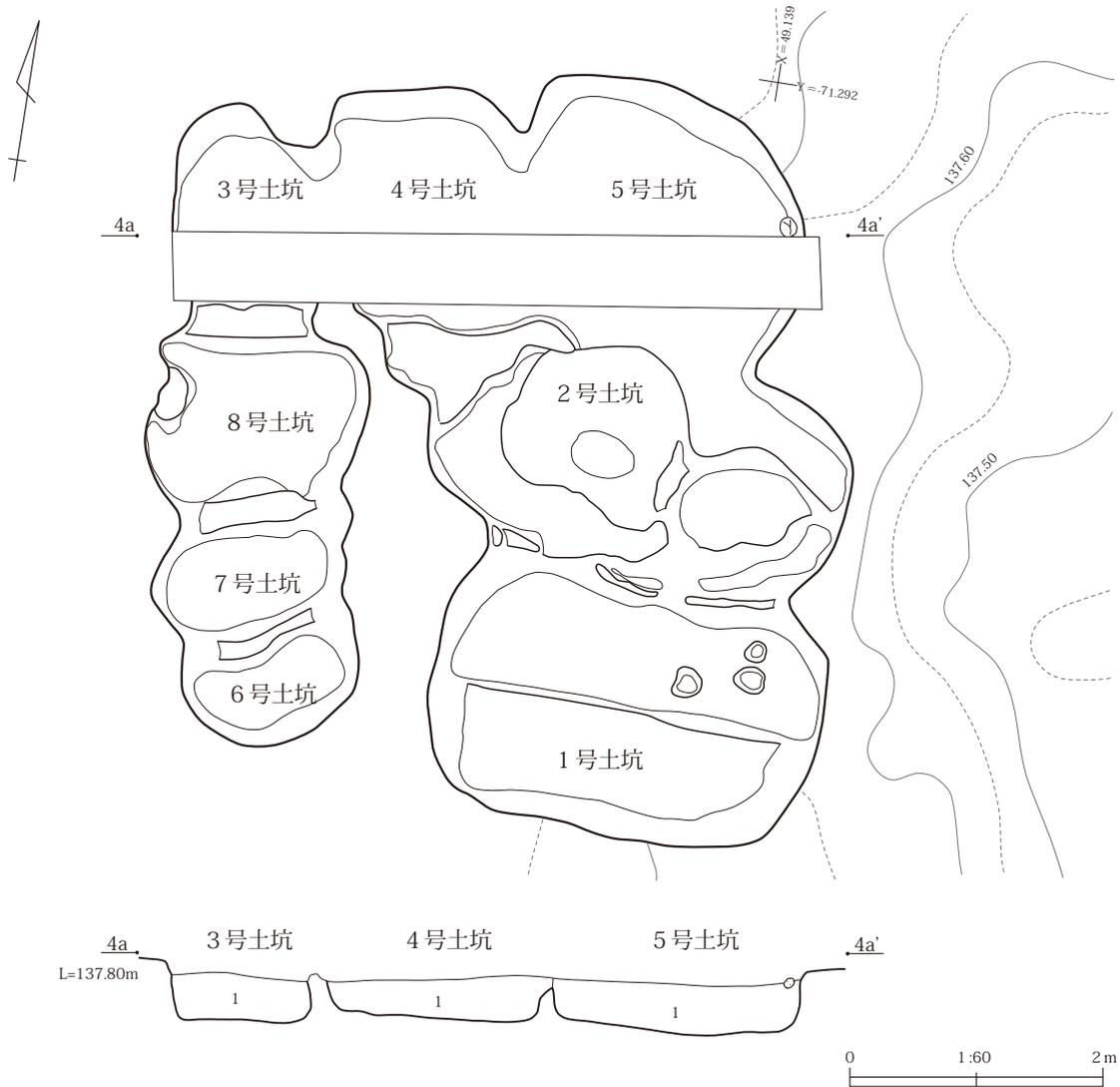
第4章 遺構と遺物



第195図 阿久津遺跡 III区詳細図1・2



第196図 阿久津遺跡 Ⅲ区詳細図3



詳細図4

阿久津遺跡Ⅲ区土坑土層観察所見

1 黒褐色砂質土 天明泥流中のものと同じ溶岩質の礫を含む。締まり弱い。粘性ごく弱い。

※8基の土坑が密集して掘られているものである。この土坑群について、調査時の所見は、他の円形土坑と合わせて、埋土が比較的新しく、泥流中に見られる火山礫を含むことから、「攪乱か復旧土坑」とされた。平成18年度の整理作業時には攪乱として掲載遺構からは除外されている。出土遺物もなく、年代が決定できないが、円形土坑は極浅く、泥流上位からの掘り込みであることが明らかである。

一方この土坑群は、平面形状が方形を基調とする複数の土坑が空間的に連続して掘られていることや、壁面がややオーバーハング気味に掘られる部分があるなどの特徴がある。粘土やローム土を採掘する際に掘られる土坑と類似しているが、この部分の地山がロームや粘土であったか否かについて記載がなく、担当者の記憶もはっきり

りしない。

これと同じ形態的特徴を持った土坑群が平成18年度に阿久津遺跡Ⅵ区で調査されており（1～8号土坑）、これについては調査担当者により天明泥流以前のものと判断がなされている。本土坑はⅥ区の土坑と違って泥流との上下関係が必ずしも明確ではないものの、同様に泥流下のものである可能性が否定できないため、記録を掲載することとした。

この土坑は1号水田中にある。1号水田は本来は3面ないし4面の水田面に区分されていたものであろうことが等高線の状況から推測されるが、畦などの残りが悪く、詳細がとらえられない。泥流の影響と圃場整備のために乱されたものと考えているが、この土坑が泥流下に帰属するものであるとすれば、阿久津遺跡Ⅵ区の観察所見同様に、この水田は泥流到達以前には既に耕作されていない状態であった可能性がある。

第197図 阿久津遺跡 Ⅲ区詳細図4

IV区

IV区で検出された遺構は、水田11枚、溝2条である。調査区のほぼ中央に、北北西から南南東方向に水田面を削ったような筋がつき、9号水田の南畦の手前で、泥流の石が堆積しているのが見られ、泥流の痕跡を確認できる。水田番号は、北から付けている。

水田の形状

調査区の西側を1号溝が走り、東側を2号溝が走る。1号溝の西側は一段高くなっている。西部の2号水田と南東部の10号水田の標高差は約1mで10号水田が低い。水田は用水路や畦によって区分けされ、田面が整えられている。

1号溝は、V区の3号溝から続き、調査区境界の北西部から出て、南東方向へ流れる。2号溝は、調査区の東側境界から出て西へ向かって流れ、3号水田に突き当たったところで、ほぼ直角に南へ折れ、8号水田の南西付近までまっすぐ南下する。その後やや南東へ向きを変え、7号水田の北西付近で再び南へ向きを変えて流れ、9号水田の南東付近で東へ向きを変え調査区境界へ至る。

水田の区画

[1・2号水田] (第198・199・201図 PL.84・85)

調査区の西部にあり、調査区の中で最も標高が高い。

1・2号水田は1号溝の西側にあり、ともにごく一部を確認したのみである。北の1号水田は南の2号水田より約26cm低い。両水田は幅30cm、高さ39cmほどの畦で区切られている。またこの畦の北側に沿って幅50cmほどの溝状の浅い窪みがあり、ここを通って1号水田の水が1号溝へ排水されたと思われる。

1号水田の東は、幅35～40cm、田面からの高さ13～16cmの土手状の畦で区切られている。1号溝を挟んで東に接する3号水田との比高は76cm、6号水田との比高差は76cmで、いずれも1号水田が高い。

2号水田は、東を幅40～50cm、田面からの高さ11～13cmの畦で区切られている。2号水田の南側は攪乱されている。1号溝を挟んで東に接する6号水田との比高差は約1mで、2号水田が高い。

[3・4・6号水田] (第198～202図 PL.84)

調査区の北部にある。1号溝は3・6号水田の西側を流れる。2号溝は4号水田の南側を流れ、3・6号水田の東側を流れる。

4号水田は最も標高が高い位置にあって、南は2号溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ5～6cmの土手状の畦で区切られている。2号溝を挟んで南に接する5号水田との比高は1～3cmでやや5号水田が低い。

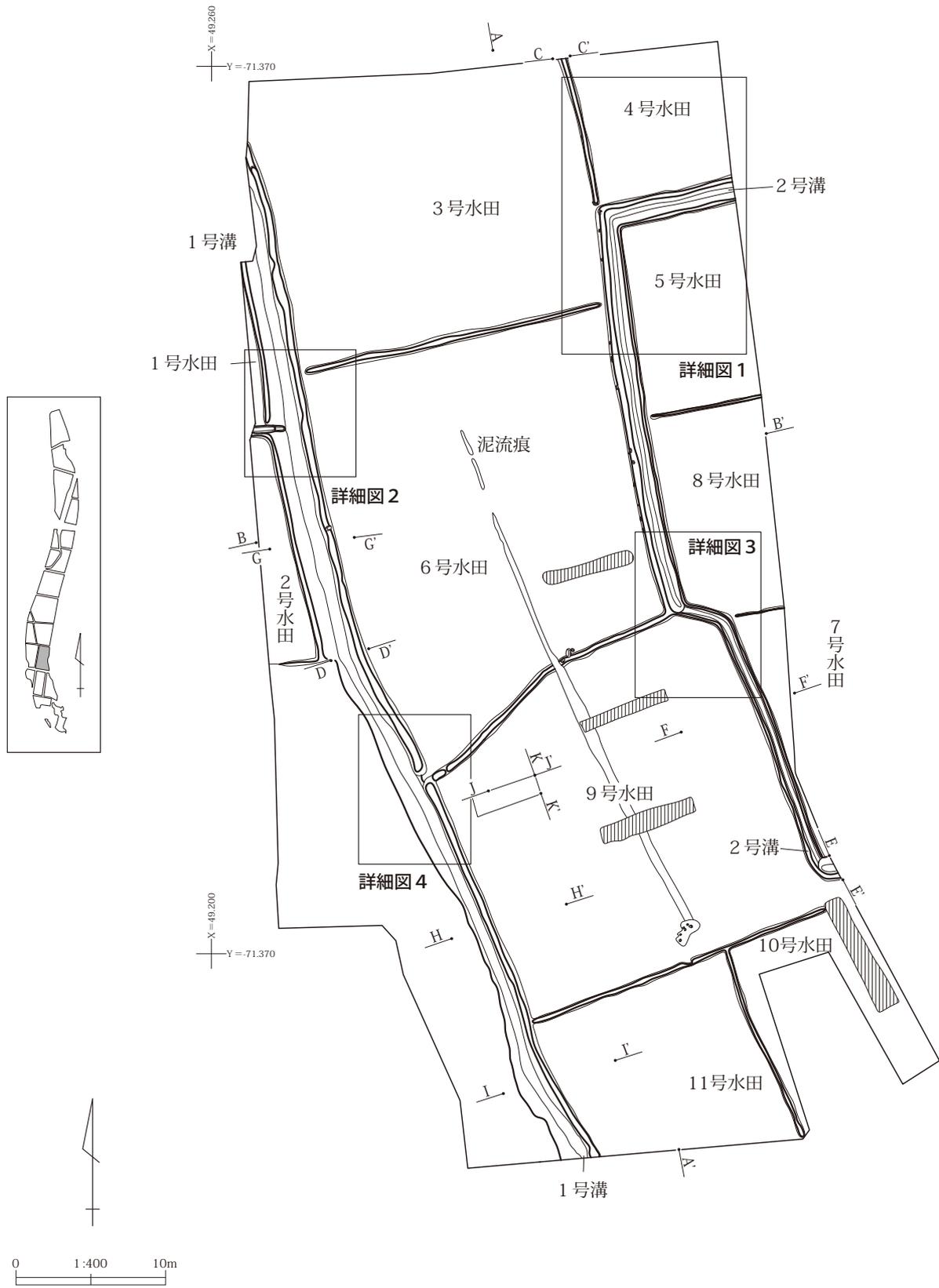
3号水田は4号水田の西にあり、4号水田より4～6cm低い。両水田は、幅40～60cm、高さ15～20cmの畦で区切られ、この南端が幅20cmほど途切れて水口となり、3号水田へ水が流れる。また3号水田の東南は、2号溝に沿った幅50～60cm、田面からの高さ5～13cmの土手状の畦で区切られている。畦の壁面に川原石を貼って補強している箇所が見られる。西は1号溝に沿った幅40～80cm、田面からの高さ33～49cmの土手状の畦で区切られている。

6号水田は、3号水田の南にあり、3号水田とほとんど同じ標高である。両水田は幅35～70cm、高さ2～3cmの畦で区切られ、この東端が幅20cm、西端が幅30cmほど途切れて水口となり、それぞれ6号水田へ水が流れる。東は2号溝に沿った幅45～65cm、田面からの高さ4～9cmの畦で区切られている。畦の壁面には部分的に川原石を貼って補強している。

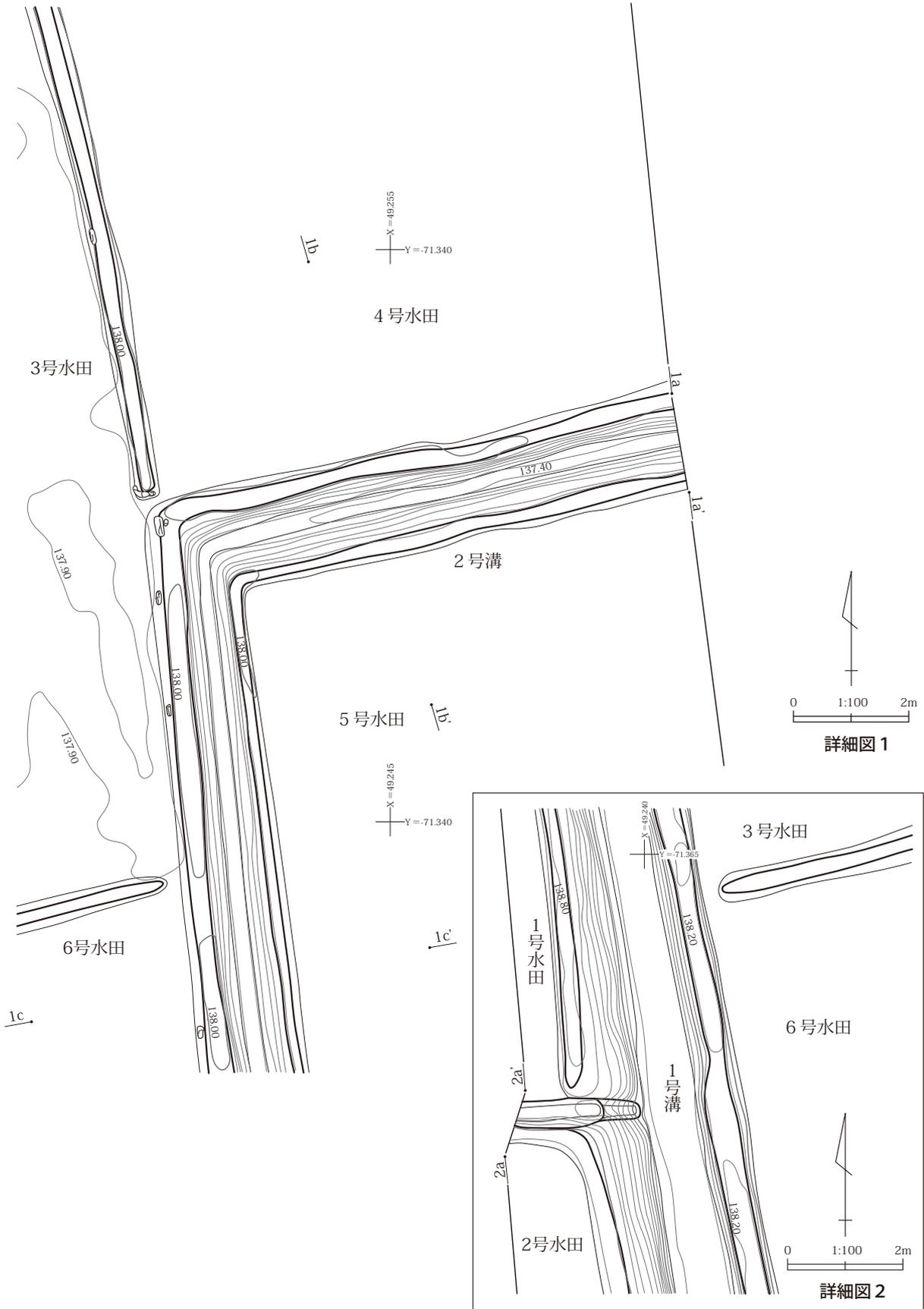
2号溝を挟んで東に接する5号水田及び8号水田との比高差は1～2cmで5号水田及び8号水田がやや高い。西は1号溝に沿った幅45～75cm、田面からの高さ33～43cmの土手状の畦で区切られ、この南端が幅30cmほど途切れて水口となり、6号水田から1号溝へ排水される。

[9・10・11号水田] (第198・200～203図 PL.84)

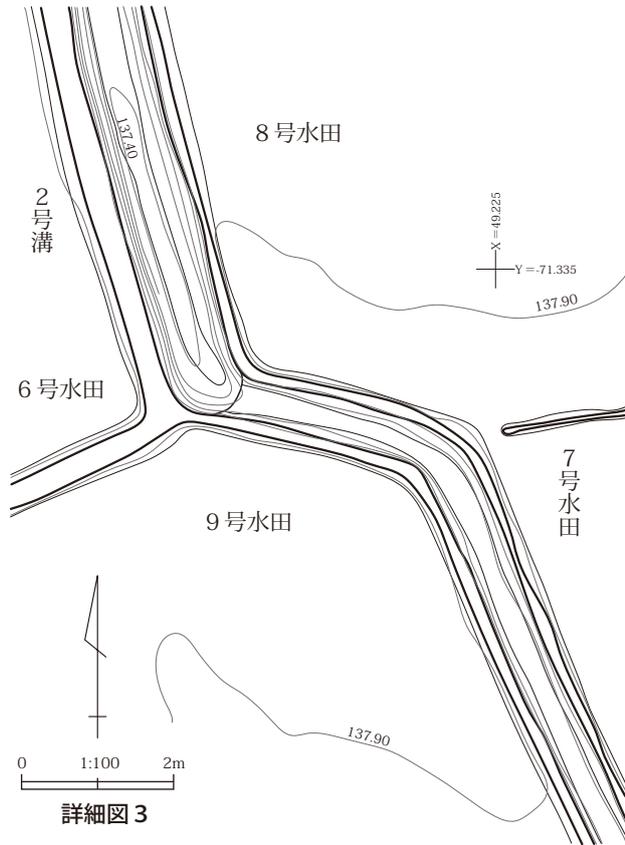
調査区の南部にある。西側を1号溝が流れ、9号



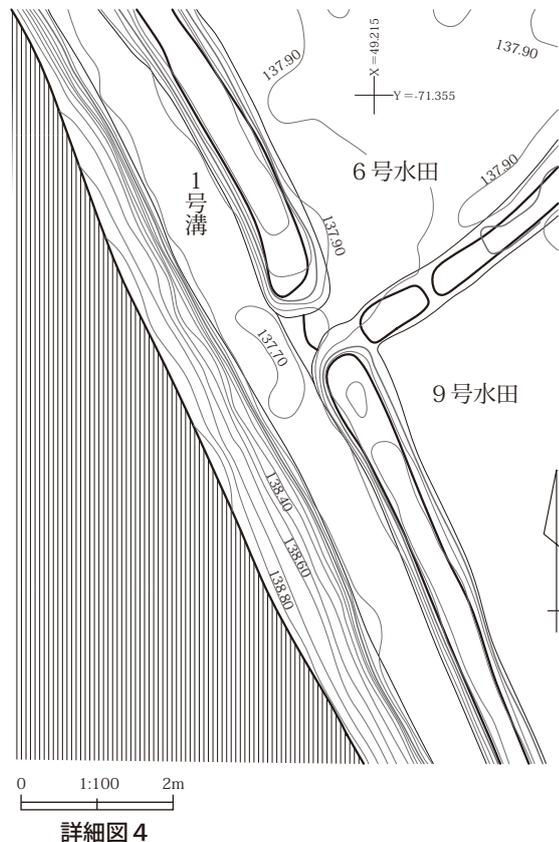
第198図 阿久津遺跡 IV区全体図



第199図 阿久津遺跡 IV区詳細図1・2



詳細図3



詳細図4

第200図 阿久津遺跡 IV区詳細図3・4

水田の東側を2号溝が流れる。

9号水田は、北の6号水田より2cmほど低い。9号水田面は西部が僅かに高くなっている。両水田は幅45～75cm、高さ5～10cmの畦で区切られている。東は2号溝に沿った幅30～40cm、田面からの高さ1～6cmの土手状の畦で区切られている。2号溝を挟んで東に接する7号水田との標高はほとんど同じである。

西は1号溝に沿った幅50～65cm、田面からの高さ18～34cmの土手状の畦で区切られている。1号溝または2号溝から取水していたと思われるが、水口は見られない。また9号水田南東部は間隔が開き、南の10号水田へ水が流れたと思われるが、攪乱があるため水口の詳細はわからない。

11号水田は北の9号水田より2～3cm高く、両水田は幅30～50cm、高さ5～6cmの畦で区切られている。9・10号水田を区切っている畦と続いている。西は1号溝に沿った幅50～70cm、田面からの高さ20～22cmの土手状の畦で区切られる。

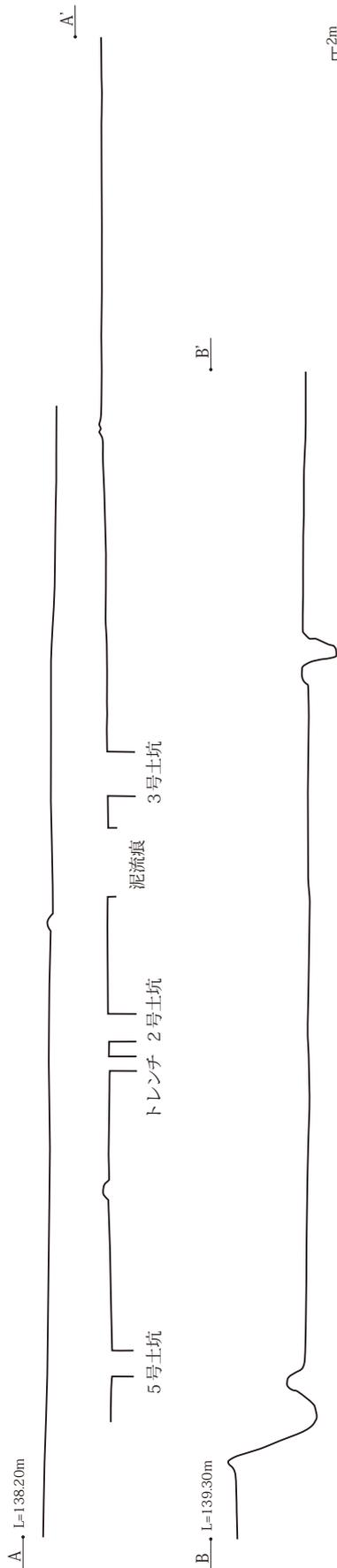
10号水田は北の9号水田の標高とほとんど同じである。両水田は幅30～50cm、高さ3cmほどの畦で区切られている。この畦の東は攪乱により消滅している。また西の11号水田より3cmほど低く、両水田は幅30～50cm、高さ4～6cmの畦で区切られている。

9号水田と11号水田の間や、11号水田と10号水田の間に水口は見られず、給排水の詳細はわからない。
[5・7・8号水田] (第198～202図 PL.84)

調査区の東部にある。北から西側を2号溝が流れる。

5号水田が最も標高が高く、5号水田の北から西は2号溝に沿った幅25～40cm、田面からの高さ4～9cmの土手状の畦で区切られている。

8号水田は5号水田の南にあり、5号水田より1～2cm低い。両水田は幅20～35cm、高さ6cmの畦で区切られ、この西端が幅20cmほど途切れて水口となり、8号水田へ水が流れる。西は2号溝に沿った幅15～35cmの土手状の畦で区切られている。



阿久津遺跡Ⅳ区Cライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径10mm以下の白色軽石、黄褐色土ブロック、赤褐色の紐状ブロックを少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径2mm程度の軽石粒、赤褐色の砂質土ブロックを多く含む。縮まり弱。粘性弱。
- 3 褐灰色シルト質土 径10mm以下の白色軽石を下部に含む。赤褐色の紐状ブロックを含む。縮まり中。粘性中。
- 4 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質。径1mm程度の軽石粒を少量、赤褐色の紐状ブロックを少量含む。縮まり中。粘性中。

阿久津遺跡Ⅳ区Dライン土層観察所見

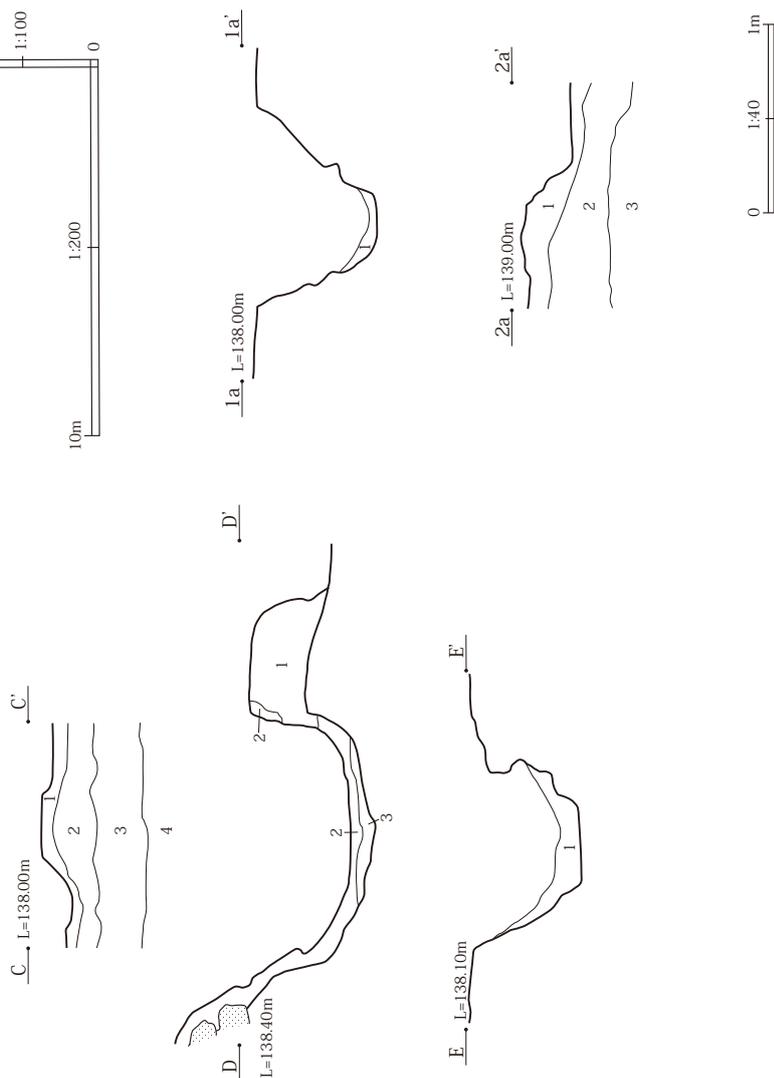
- 1 褐灰色シルト質土 径10～20mmの白色軽石を多量、黄褐色の細砂粒を少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径10～30mmの白色軽石を多量、黄褐色の細砂粒を非常に多く含む。縮まり中。粘性弱。
- 3 褐灰色シルト質土 径10mm程度の白色軽石を少量、黄褐色の細砂粒を含む。縮まり中。粘性中。

阿久津遺跡Ⅳ区E・1aライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性中。

阿久津遺跡Ⅳ区2aライン土層観察所見

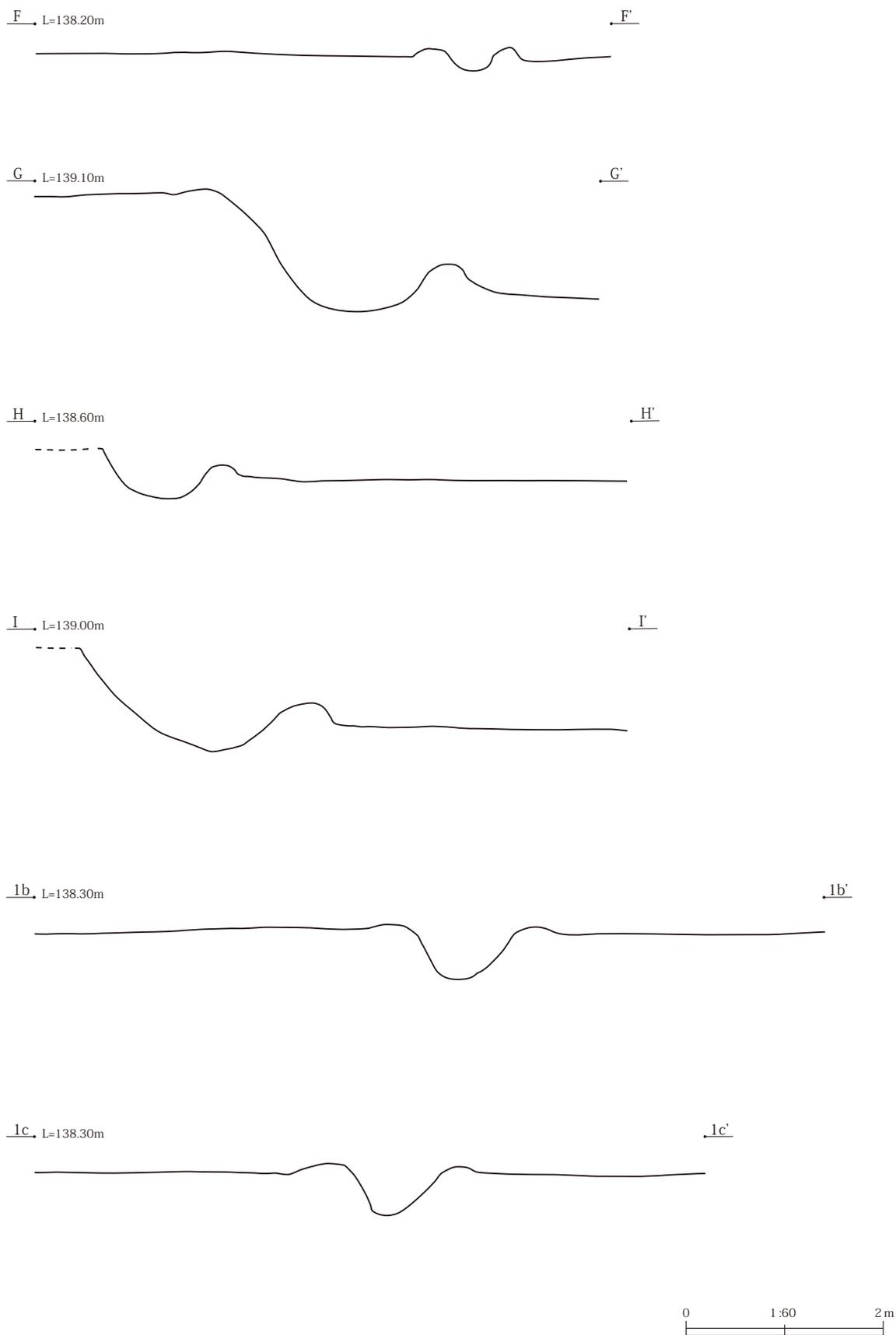
- 1 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径50mm以下の白色軽石を多量、黄褐色の細砂粒を多く含む。縮まり弱。粘性弱。
- 2 褐灰色シルト質土 白色軽石粒を少量、黄褐色の細砂粒を含む。縮まり弱。粘性中。
- 3 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径20～30mmの白色軽石、黄褐色の細砂粒を少量含む。縮まり弱。粘性弱。



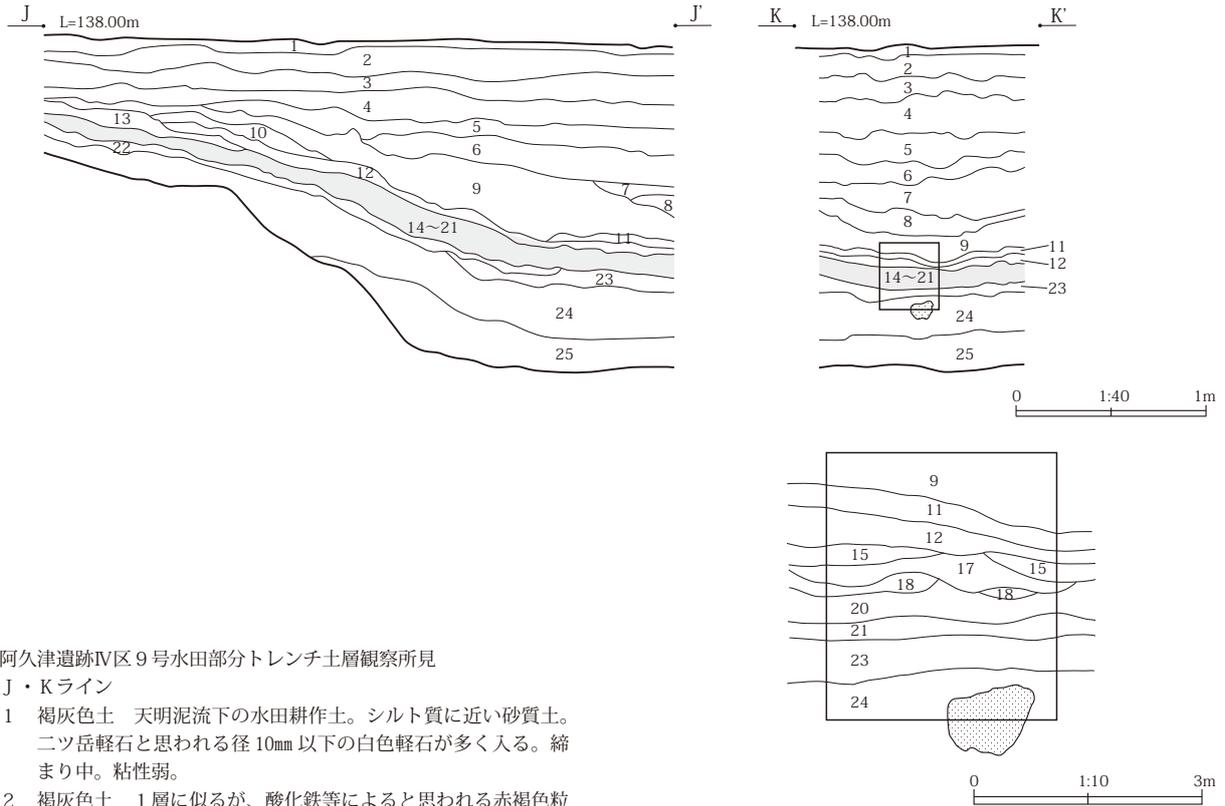
第2節 近世の遺構と遺物

第201図 阿久津遺跡 Ⅳ区高低図1・土層断面図1

第4章 遺構と遺物



第202図 阿久津遺跡 IV区高低図2



阿久津遺跡IV区9号水田部分トレンチ土層観察所見
J・Kライン

- 1 褐灰色土 天明泥流下の水田耕作土。シルト質に近い砂質土。二ツ岳軽石と思われる径10mm以下の白色軽石が多く入る。締まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 1層に似るが、酸化鉄等によると思われる赤褐色粒が多く入る。また、白色軽石が多く入る。締まり中。粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 シルト質に近い砂質土。径50mm以下の白色軽石が多く入る。締まり中。粘性弱い。
- 4 灰黄褐色土 3層に近い。酸化鋳物によると思われる黄褐色粒やブロックが層の上部に多く見られる。他は3層と同じ。締まり中。粘性弱。水田床土か。
- 5 灰黄褐色土 砂質土。酸化鋳物によると思われる黄褐色土粒子が層全体に多く入る。径50mm以下の白色軽石が多く入る。締まり中。粘性なし。水田床土か。
- 6 灰黄褐色土 砂質土。赤褐色粒（酸化鉄）がやや多く入る。径50mm以下の白色軽石がやや多く入る。締まり中。粘性なし。
- 7 黒褐色土 砂質土。赤褐色粒（酸化鉄）がやや多く入る。径40mm以下の白色軽石がやや多く入る。締まり中。粘性なし。
- 8 黒褐色土 砂質土。灰白色の粘質土ブロックがやや多入る。径20mm以下の白色軽石を少量含む。締まり弱。粘性なし。
- 9 黒褐色土 砂質土。褐灰色の粘質土ブロックを少量含む。径20mm以下の白色軽石や小礫を少量含む。締まり弱。粘性なし。
- 10 黒色土 砂質土。灰白色やにぶい黄褐色の砂粒が混じる。締まり弱。粘性なし。
- 11 灰褐色土 粘質土。径50mm以下の白色軽石を少量含む。締まり中。粘性強。
- 12 灰白色土 粘質土。灰褐色粘質土と層状に重なり合う。締まり中。粘性強。
- 13 黒色土 砂質土。10層とほぼ同様であるが、黒みが強い。締まり弱。粘性なし。
- 14 黒褐色土 砂質土。混和された（動いた）As-B軽石粒がやや多く入る。締まり弱。粘性なし。
- 15 青灰色土 As-kkまたはAs-Bの灰層と思われる。締まり弱。粘性なし。
- 16 にぶい黄褐色 混和された（動いた）As-B軽石を主体とする層。層の下部には青灰色のAs-Bの灰層らしきものがブロック状に入る。締まり弱。粘性弱。
- 17 灰黄褐色土 As-B軽石を主体とする層。締まり弱。粘性弱。径1mm以下。

第203図 阿久津遺跡 IV区土層断面図2

- 18 灰赤色土層 As-Bの灰層。締まり弱。粘性弱。
- 19 青灰色土層 15層類似の青灰色火山灰と18層の灰赤色火山灰の混層。締まり弱。粘性弱。
- 20 灰黄褐色土 As-Bの軽石を主体とする層。径1mm以下。締まり弱。粘性弱。
- 21 青灰色土 As-Bの灰と灰白色軽石の層。締まり弱。粘性弱。
- 22 灰褐色土 シルト質土。径20mm以下の二ツ岳軽石粒がやや多く入る。締まり中。粘性やや強。
- 23 灰黄褐色土 粘質土。黒色粘質土や浅黄褐色粘質土とともに層状になる。径20mm以下の白色軽石を少量含む。締まり中。粘性やや強。
- 24 褐灰色土 砂質土。径100mmの二ツ岳軽石が入る。径10mm以下の二ツ岳軽石粒を少量含む。灰白色粘質土ブロックを少量含む。締まり中。粘性なし。
- 25 褐灰色土 砂質土。径50mm以下の二ツ岳軽石や小礫がやや多く入る。締まり中。粘性なし。

※1層の天明泥流下の水田耕作土は極薄く、褐灰色を呈していて良好な耕土ではない。これ以下には東に急激に落ちる地形が埋没していて、As-B降下時にもこれが残っており、12層の状況を見ても低湿な環境であったものと思われる。As-Bは上位に火山灰層を伴い、大きく乱されていない事がわかる。As-B下には水田耕土となるような土壌は認められない。

第4章 遺構と遺物

7号水田は8号水田の南にあり、ごく一部を確認したのみである。8号水田より1cmほど低い。両水田は幅10～20cmの畦で区切られ、この西端が幅25cm途切れて水口となり、7号水田へ水が流れる。西は2号溝に沿った幅15～30cmの土手状の畦で区切られている。

溝

1号溝 (第198～202図 PL.85)

位置 X=49.185～49.250/Y=-71.340～-71.365

規模 長さ70.3m、幅(上端)1.9～2.2m(下端)0.5～0.9m、深さ0.4～0.57m

V区

検出された遺構は、水田17枚、溝3条、道1条である。水田面は、泥流によって削られたような筋がついていたり、泥流中の小石が水田面にくい込んでいるなど荒れている。11号水田の東畦近くに直径1m以上の泥流の石が残されていることから、泥流の勢いが感じられる。水田番号は南から付けている。

なお、本区の3号溝はIV区1号溝に連続するものと思われる幹線水路である。また、本区の3号溝はIV区3号水田と4号水田の境界をなす畦とほぼ同方向をとるが、連続しない。

水田の形状

調査区は3号溝の西側が一段高くなっており、棚田状の水田がつくられている。調査区の東はやや高くなっており、徐々に北から南へ傾斜している。中央の水田はほとんど同じ標高であるが、南の3号水田で少し低くなる。

西部の16号水田と最南部の2号水田の標高差は1.23mで、2号水田が低い。水田は用水路や畦によって分けられ、田面が整えられている。

3号溝は、V区の主要用水路であり、調査区境界の北西部から出て、南側境界へ至り、IV区の1号溝へ続く。

2号溝は北部にあり、13号水田の南側を流れる。

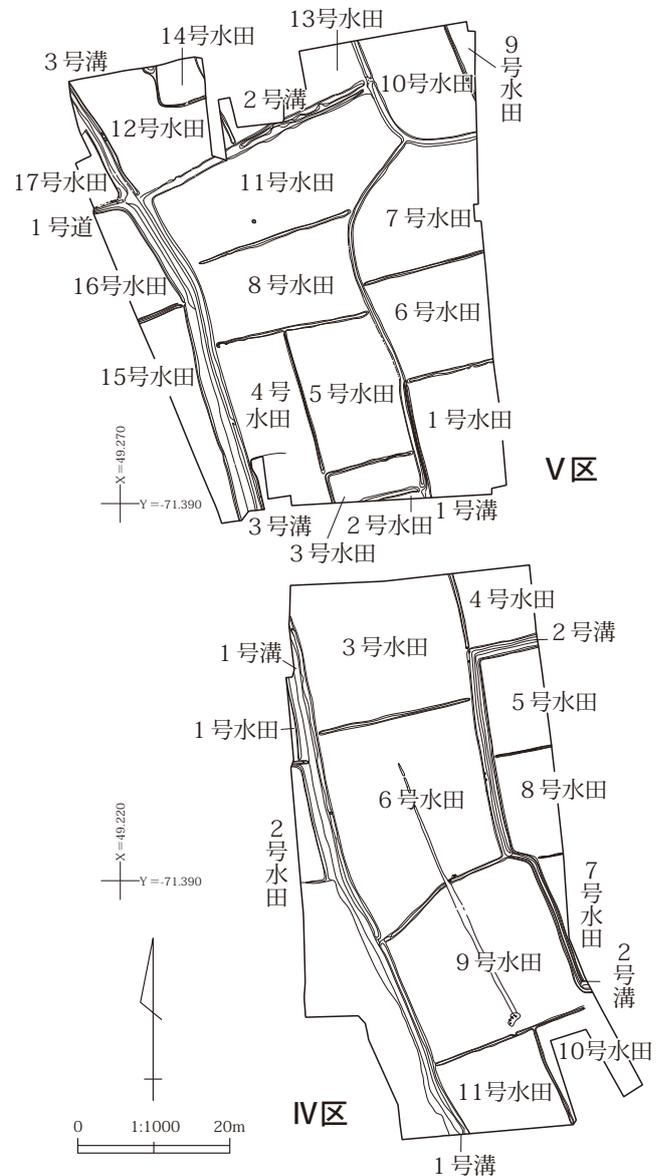
特徴 1号水田の南東水口、6号水田の南西水口から水田内の水が排水される。6号水田を流れる付近でやや幅が広がっている。

2号溝 (第198～202図 PL.85)

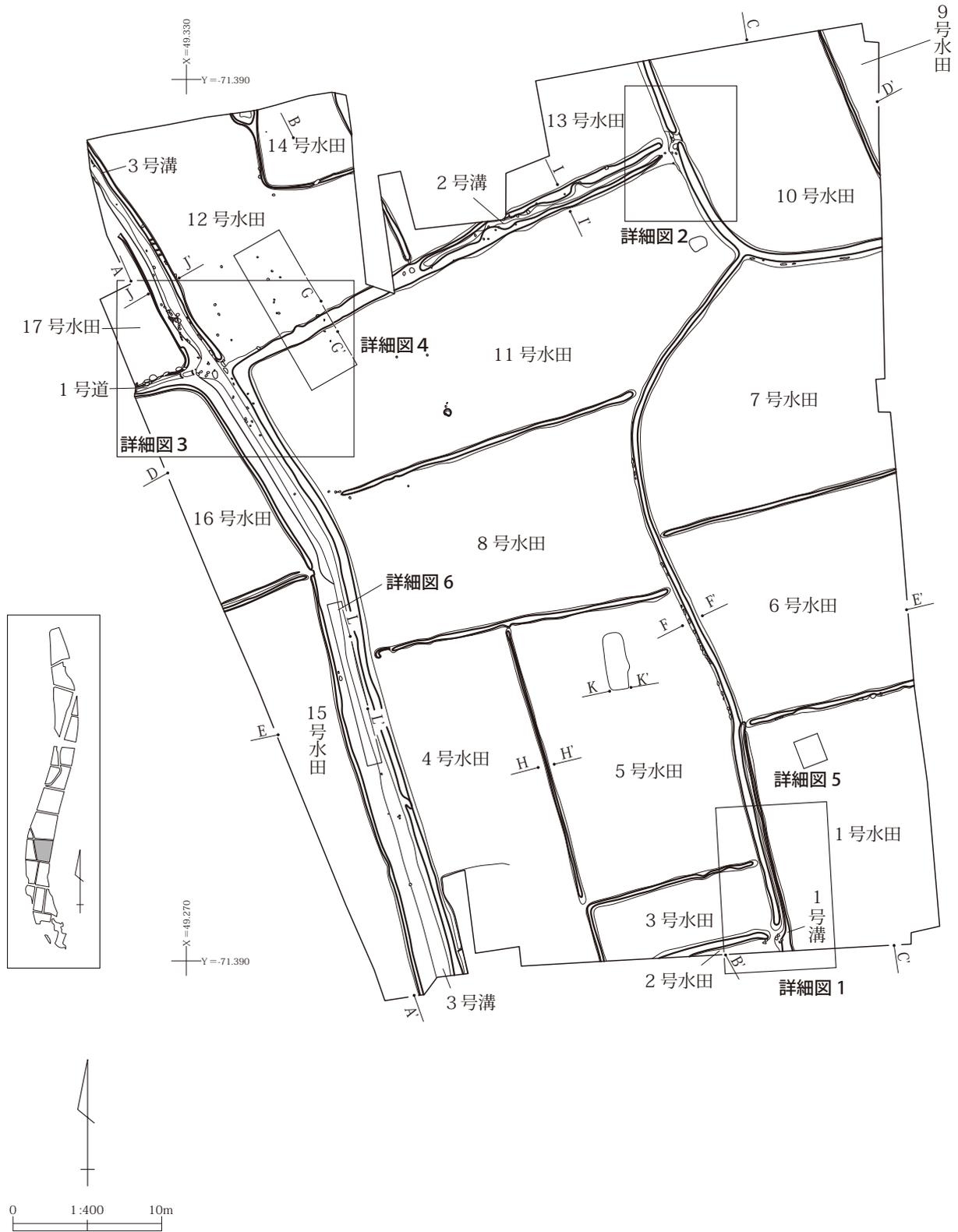
位置 X=49.205～49.250/Y=-71.325～-71.340

規模 長さ56.8m、幅(上端)0.4～1.3m(下端)0.2～0.5m、深さ0.11～0.61m

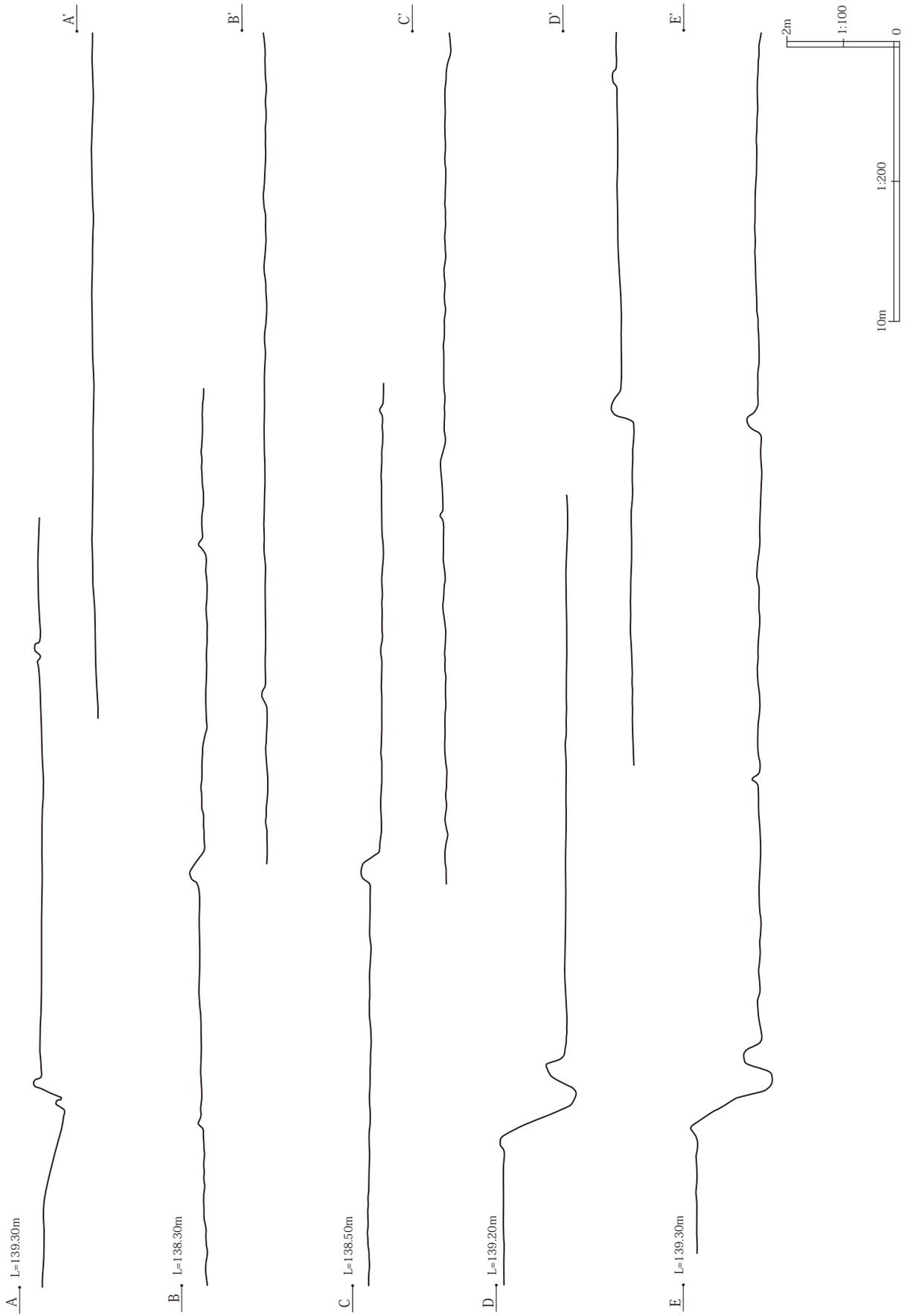
特徴 5号水田と8号水田を流れる部分は、幅が広く掘り込みは深い。8号水田南西部から東側境界までは、幅が狭く浅くなる。水田から排水したり、水田へ水を供給するような水口等は確認できない。



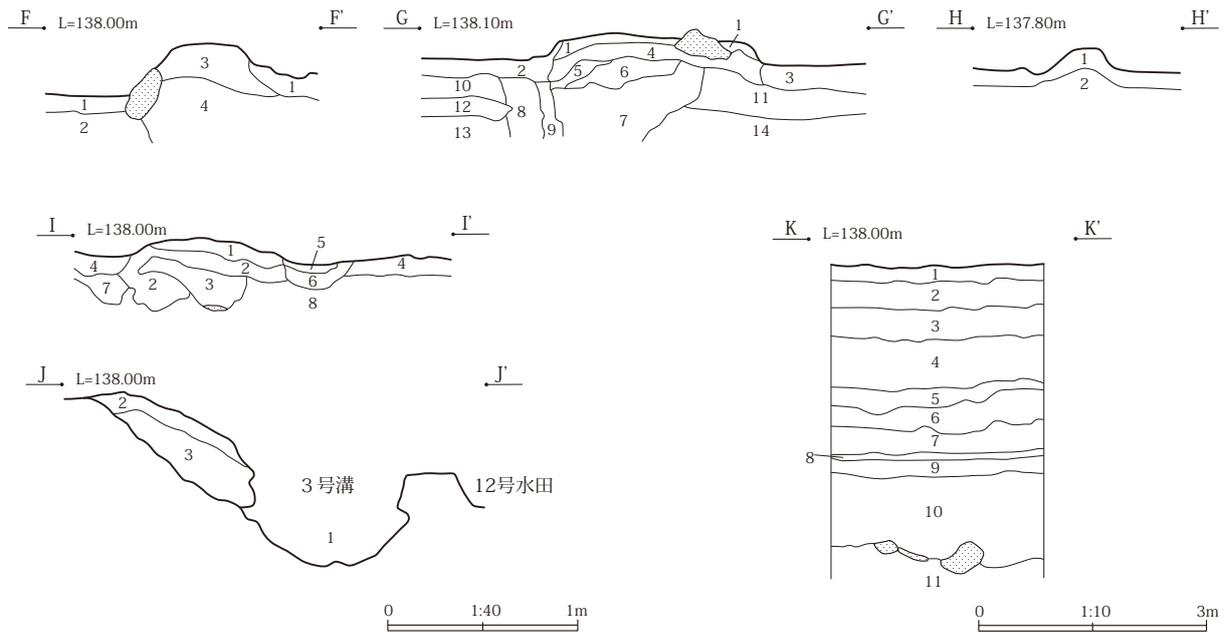
第204図 阿久津遺跡 IV区・V区遺構配置模式図



第205図 阿久津遺跡 V区全体図



第206図 阿久津遺跡 V区高低図



阿久津遺跡V区Fライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径3～15mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状にを少量含む。締まり中位。粘性強い。耕作土。
- 2 褐灰色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状にを少量含む。径15mmの炭化物を僅かに含む。締まり中位。粘性やや強い。
- 3 褐灰色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を少量含む。径30mmの円礫を少量含む。酸化鉄を斑状にやや多く含む。締まり中位。粘性やや強い。
- 4 灰黄褐色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状にを少量含む。締まり中位。粘性強い。

阿久津遺跡V区Gライン土層観察所見

- 1 明褐灰色土 砂質に近いシルト質。径20mm以下の二ツ岳軽石入る。赤褐色の砂が混じる。締まり中位。粘性弱い。
- 2 灰白色シルト質土 径20mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。赤褐色の砂が混じる。下層との間が赤褐色化している。(鉄沈着か) 締まり中位。粘性中位。
- 3 2層と同じだが砂粒子やや少ない。
- 4 灰白色土 砂質に近いシルト質。径5mm以下の二ツ岳軽石、赤褐色砂が混じる。下層との間が赤褐色化している。(鉄沈着か) 締まり中位。粘性中。2、3層に比べやや色が暗い。
- 5 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。川砂が混じる。締まり中位。粘性弱い。
- 6 褐灰色砂層 径30mm以下の二ツ岳軽石が入る。締まりやや弱い。粘性弱い。
- 7 にぶい黄褐色シルト質 径30mm以下の二ツ岳軽石が入る。全体がやや黄褐色化している。川砂状の砂が少量混じる。締まり中位。粘性中。
- 8 灰白色土 砂質に近いシルト質。径30mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。川砂状の砂が混じる。締まりやや弱い。粘性やや弱い。
- 9 褐灰色砂層 灰白色シルト質土のブロックが入る。締まりやや弱い。粘性弱い。
- 10 灰白色シルト質土 径10mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。川砂状の砂が混じる。締まりやや弱い。粘性中。

- 11 灰黄褐色シルト質土 径10mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。黄褐色の砂が混じる。締まり中位。粘性やや弱い。
- 12 褐灰色砂層 粒子粗い。灰白色シルト質土ブロック、径20mm以下の二ツ岳軽石入る。締まり弱い。粘性弱い。
- 13 灰白色シルト質土 径20mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。黄褐色化している部分がある。締まり中位。粘性中。
- 14 褐灰色シルト質土 径15mm以下の二ツ岳軽石を少量含む。締まり中位。粘性中。

阿久津遺跡V区Hライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 酸化鉄を斑状にやや多く含む。下部に酸化鉄が5mmの厚さで層状に入る。締まり中位。粘性強い。
 - 2 灰黄褐色シルト質土 径3～15mmの白色軽石をやや多く含む。径15mmの炭化物1個あり。酸化鉄を少量含む。締まり中位。粘性やや強い。
- ※左が4号水田、右が5号水田。

阿久津遺跡V区Iライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径3mm～10mmの白色軽石を少量含む。径3mmの炭化物を僅かに含む。酸化鉄を斑状に含む。締まり中位。粘性強い。
 - 2 褐灰色土シルト質土に砂利が斑状に混じる。径3～10mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状に含む。締まり弱い。粘性あまりない。
 - 3 にぶい黄褐色土 締まりなく崩れる。径150mm大の礫を含む。
 - 4 褐灰色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を僅かに含む。酸化鉄を斑状に含む。締まり中位。粘性強い。
 - 5 にぶい黄褐色土砂利質。酸化鉄が下部に層状に溜まる。
 - 6 褐灰色土 赤褐色の砂利が薄い層状に三層入る。締まりやや弱い。粘性あまりない。
 - 7 にぶい黄褐色土 砂利質にシルト質の褐灰色土が混じる。径10mmの白色軽石を僅かに含む。締まりやや弱い。粘性なし。
 - 8 灰黄褐色土 径3～30mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状に含む。締まり中位。粘性中位。
- ※11～13号水田部分。5層及び6層が2号溝の覆土。

第207図 阿久津遺跡 V区土層断面図

第4章 遺構と遺物

阿久津遺跡V区Jライン土層観察所見

- 1 天明泥流層
- 2 灰白色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の二ツ岳軽石が入る。縮まり中位。粘性やや弱い。
- 3 にぶい黄橙色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の二ツ岳軽石が入る。赤褐色の砂少量混じる。縮まり中位。粘性やや弱い。

阿久津遺跡V区Kライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径3～15mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状に少量含む。縮まり中位。粘性強い。耕作土。
- 2 褐灰色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状に少量含む。径15mmの炭化物を僅かに含む。縮まり中位。粘性やや強。
- 3 褐灰色土 径10mm大の円磨された白色軽石を多く含む。斑鉄層がわずかに見られる。縮まり中位。
- 4 褐灰色土 径10mm大の円磨された白色軽石をやや多く含む。斑鉄層はない。縮まりやや弱い。
- 5 褐灰色土 径10mm大の円磨された白色軽石をかなり多く含む。最大50mmのものも見られる。斑鉄層はない。縮まりやや弱い。
- 6 褐灰色土 白色軽石を含まない。橙色の斑紋層が多く見られる。縮まり弱い。
- 7 明黄褐色土 8～10層の再堆積土。不均等。

非常に浅く、輪郭もはっきりしていないが、北部の水田に給水したと思われる。

1号溝は南部の1号水田の西を流れる。1号溝と2号溝は規模が小さいので、給排水に利用する水路というよりも、水田に水を流す際、温めてから流すように設けられた溝と思われる。

水田の区画

[15・16・17号水田] (第205・206・209図)

調査区の西部にある。東側を3号溝が流れる。16号水田は南の15号水田より1cmほど高く、僅かに南へ傾斜している。両水田は幅35～45cm、高さ3～4cmの畦で区切られ、この東端が幅15cmほど途切れて水口となり、15号水田に水が流れる。また、この畦に沿って北側に溝状の窪みがあり、16号水田の水が排水される。16号水田の北は1号道に沿った幅25～50cm、田面からの高さ1～8cmの土手状の畦で区切られている。東は3号溝に沿った幅40～60cm、田面からの高さ7～12cmの土手状の畦で区切られ、この南端が幅30cmほど途切れて水口となり、16号水田から3号溝へ落水する。3号溝を挟んで東に接する11号水田との比高差は1.12～1.14m、8号水田との比高差は1.12mでいずれも、16号水田が高い。

- 8 灰色土 上位より黒色(厚さ5mm)・明褐灰色(同2mm)・黒色(同5mm)・明褐灰色(同5mm)の縮まりを欠く粘質土(?)が上位に乗る厚さ10～20mmの均質な火山灰層。粒径やや細かく、純堆積層と考えられる。さらに下位には厚さ5mmの縮まりを欠く不均質な黒色の粘質土(?)がある。
- 9 暗褐色土 As-B 軽石層 粒径最大3mm程度、概ね1mmの軽石層。最大で約10cmの厚さが確認できる純堆積層。目視では大きく三つに分けられ、上位の3cmは桃色味が強く火山灰質が強い。中位は白色味が強い軽石層。下位は全体に灰色味が強い軽石層。上中下層とも厚さはほぼ各々3cm程度。
- 10 明黄褐色土 粘性の高い粘土層。黄色味の強い明褐灰色土層と黒色土層の互層。各層の堆積は均質で、水性堆積と考えられる。
- 11 灰褐色土 縮まり弱い細粒砂層。20cm程度の円礫を多く含んでいる。やや不均質。

※5号水田内の深掘りトレンチセクション。1層の上位には天明泥流及び現表土が約1.8mの厚さで堆積する。天明泥流水田の耕土はここでも褐灰色のシルト質土で、良好な水田土壌ではない。1層から5層に含まれる白色軽石は吉岡川の氾濫によってもたらされた二ツ岳軽石で、円磨が著しい。As-Bは乱れの少ない降下堆積層であるが、これ以下は水性堆積層及び段丘砂礫層となっていて、ここでも古代の水田は認められない。

15号水田は、東を3号溝に沿った幅30～60cm、田面からの高さ6～12cmの土手状の畦で区切られている。3号溝を挟んで東に接する8号水田との比高差は1.12m、4号水田との比高差は1.1～1.18mでいずれも15号水田が高い。

17号水田は、16号水田の北にあり、16号水田より51～56cm低く、棚田状の水田を形成している。16号水田との境に幅50～80cmの1号道があるが、路面は固く、中央が凹んでいる。3号溝の東西の水田を往来するための作業用の通路と考えられる。1号道に沿った畦は川原石で補強されている。17号水田の東は、3号溝に沿った幅10～20cmの畦で区切られている。3号溝を挟んで東に接する12号水田より52～58cm高い。

[9・10号水田] (第205・206・208図 PL.88～90)

9・10号水田は、調査区の北東部にあり、ごく一部を確認した。

9号水田は10号水田より1～3cm高く、両水田は幅30～50cm、高さ6～10cmの畦で区切られている。

10号水田は西から南を幅90～120cm、高さ30～44cmの畦で区切られ、この西側の畦の途中が幅30cmほど途切れて水口となり、10号水田から排水される。畦を挟んで西に接する13号水田より25～28cm高く、11号水田より31～37cm高い。

[12・13・14号水田]

(第205・206・208～210図 PL.86・88・90・91)

調査区の最北部にある。

12号水田は最も標高が高く、水田面の北側がやや低くなっている。西は3号溝に沿った幅20～50cm、田面からの高さ9～19cmの土手状の畦で区切られ、この南端が幅40cmほど途切れて水口となり、12号水田から3号溝へ落水する。

14号水田は12号水田の北東にあり、12号水田より2～5cm低い。14号水田の西と南は幅25～40cm、高さ3～12cmの畦で区切られている。

13号水田は12号水田の東にあり、12号水田より4～6cm低く、両水田は幅40～55cm、高さ10cmの畦で区切られ、この南端が幅20cmほど途切れて水口となり、13号水田へ水が流れる。13号水田の東がやや低い。南は2号溝に沿った幅30～70cm、田面からの高さ2～9cmの畦で区切られ、この東端が幅40cmほど途切れて水口となり、13号水田から排水される。

[2・3・4・5・8・11号水田]

(第205～210図 PL.86～91)

調査区の中央部にある。西側を3号溝が走り、4・8・11号水田の西は3号溝に沿った幅60～120cm、田面からの高さ33～49cmの土手状の畦で区切られている。畦は南でやや幅が狭くなっている。

4・5・8・11号水田はほとんど標高が同じで、2・3号水田はやや低くなる。

11号水田は12号水田と13号水田の南にあり、水田面は西がやや高い。11号水田は12号水田より8～11cm低く、両水田は幅90～150cm、高さ15～27cmの畦で区切られ、西側の3号溝に沿った土手状の畦と繋がっている。また13号水田より5～12cm低く、境界を2号溝が流れ、2号溝に沿った幅30～120cm、田面からの高さ4～6cmの畦で区切られている。この東端が幅50cmほど途切れて水口となり、11号水田へ水が流れる。

2号溝は輪郭がはっきりせず、非常に浅く、畦の中央を掘り込んだような形状である。南西から北東へ僅かに低くなっている。2号溝に沿った畦は2号

溝の西端で繋がり、そのまま西へ延びて11号水田と12号水田を区切る畦になる。

11号水田は北の13号水田と東の10号水田から取水したと思われるが、一度2号溝に溜めて水を温めてから水田へ流したと思われる。

8号水田は11号水田の南にあり、11号水田とほとんど同じ標高であるが、水田面は西がやや高い。両水田は幅30～65cm、高さ3～8cmの畦で区切られていて、この両端が途切れて水口となっている。東端部は幅40cm、西端部は幅110cmほどの水口となっていて、それぞれ11号水田から8号水田へ水が流れる。

4号水田と5号水田は北の8号水田と幅30～70cm、高さ2～7cmの畦で区切られていて、5号水田側で幅が広がっている。この畦の西端と東端が幅20cmほど途切れて水口となり、8号水田から4号水田と5号水田へ水が流れる。4号水田の標高は8号水田とだいたい同じであるが、5号水田は北の8号水田と西の4号水田より1～2cm低い。4号水田と5号水田は、幅25～40cm、高さ7～17cmの畦で区切られていて、この北端と南端が途切れて水口となっている。北端は畦がつぶれているため、わずかしき間隔が開いていないが、4号水田から5号水田へ水が流れた。南端は幅30cmの水口で5号水田から4号水田へ水が流れた。

3号水田は北の5号水田より5～6cm低く、両水田は幅30～55cm、高さ6～9cmの畦で区切られ、この東端が幅6cmほど途切れて水口となり、3号水田へ水が流れる。また西の4号水田より6cmほど低く、両水田は幅40～50cm、高さ17～21cmの畦で区切られ、北の畦と続いている。

2号水田は3号水田の南にあり、ごく一部を確認しただけである。3号水田より1～2cm低く、両水田は幅60～80cm、高さ15cmの畦で区切られていて、この東端が幅30cmほど途切れて水口となり、2号水田へ流れている。この水口のすぐ東には1号溝の終点があって、2号水田は3号水田と1号溝から取水する。

第4章 遺構と遺物

[1・6・7号水田] (第205・206・208図 PL.86～90)
調査区の東部にある。北の7号水田から南の1号水田へ向かって徐々に低くなる。

7号水田は北東部がやや高くなっていて、畦を挟んで北に接する10号水田よりは22～27cm低い。畦の南側の壁面には川原石を貼って補強している。北西から西にかけては幅50～70cm、高さ19～26cmの畦で区切られている。畦の西側の壁面に川原石を貼って補強している。畦を挟んで接する11号水田よりは8～10cm高く、8号水田よりは10～11cm高い。

6号水田は、7号水田の南にあり、7号水田よりは1～3cm低い。両水田は幅35～50cm、高さ3～9cmの畦で区切られ、この西端が幅6cmほど途切れて水口となり、6号水田へ水が流れる。西は幅60～80cm、高さ19～26cmの畦で区切られている。畦の西側の壁面に川原石を貼って補強している。畦を挟んで西に接する8号水田よりは10～12cm高く、5号水田よりは9～12cm高い。

1号水田は6号水田の南にあり、6号水田よりは1～2cm低い。両水田は幅40～65cm、高さ9～14cmの畦で区切られている。畦の南側の壁面の一部が川原石で補強されている。畦の西端は幅30cmほど途切れて水口となっている。この水口から1号溝が始まり、1号水田の西側の畦に沿って流れ、3号水田の南東に出て、2号水田へ流れる。1号溝の東側は幅10～30cmの畦がつくられており、南で2号水田の東側の畦に繋がる。

1号溝の西側は幅20～40cm、高さ18～23cmの畦で3号水田、5号水田と区切られている。1号水田は5号水田よりは5～8cm高く、3号水田よりは10cm高い。

稲跡

1号水田、11号水田、12号水田で稲跡が検出された。1号水田、11号水田、12号水田の稲は、北西から南東方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北西から流れてきたことがわかる。11号水田、12号水田では、稲株の穴が確認できた。11号水田の株穴の

列の方向は、北西-南東方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約20cm、列と列の間隔は約20～28cmで、ばらつきがある。12号水田の株穴の列の方向は、東北東-西南西方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は、約20～25cm、列と列の間隔は約25～30cmである。

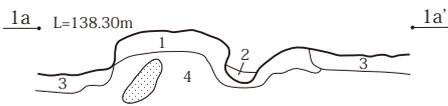
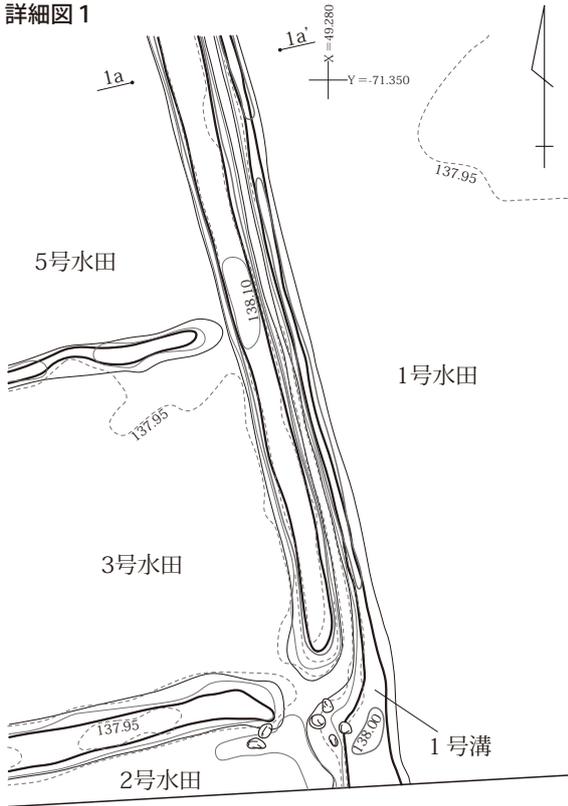
株穴は直線状に並んでいる部分と湾曲している部分がある。

それとして図示可能な状態ではなかったが、V区では多くの田面に筋状の痕跡が見られたことが2004年度の調査時に注意されている(PL.90参照)。特に1・3・6・7・10号水田に顕著であり、7号水田北部の東西畦に沿っては、畦際のくぼみを切るように畝状の凹みが明瞭に残されていた。この畦際のくぼみは、畦畔造成時やクロ塗りに際して形成されたものと見て良い。従って、この筋状痕跡は水田が完成した後につけられものと見て良い。

調査当初は天明泥流中の礫による削痕と考えられていた。しかし、6・7号水田間に見られる、畦を壊す明瞭に残された泥流削痕とは異なる走行を有する。特に10号水田では泥流の走行はもちろん、他の水田の筋状痕跡と比較しても直行方向に近い異方向でこの痕跡が残されることなどから、人為的な、何らかの耕作行動にかかるウネ、サクの痕跡であろう事が想定される事となった。ウネ幅はいずれも30cm程度で一尺に相当する。

3号水田では、作物の痕跡があり、この倒覆の状態からウネの上部に植えられていたことが観察されている。稲と考えられるものではあるが、畝立てを伴う、他の作物であった可能性も無しとしない。また、貧栄養の浅い耕土を補うためにこうした栽培方法を採用した可能性も考えられる。作物の確定を目的として、科学分析用に土壌サンプルが採取されたが、発掘調査終了から平成19年度整理時点までの間に失われてしまった。

詳細図1

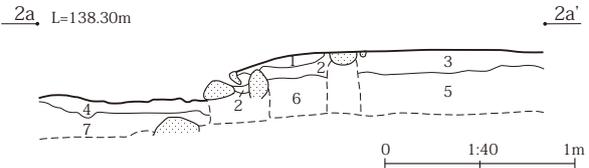
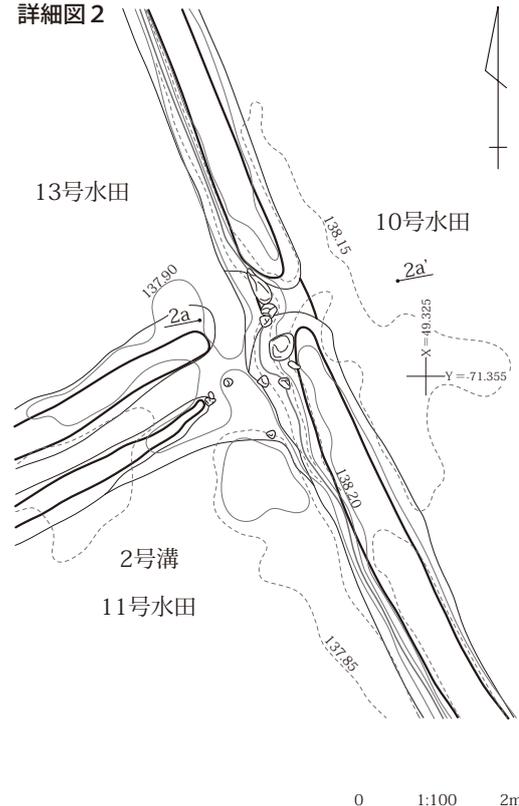


阿久津遺跡V区 1a ライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径3mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状にやや多く含む。畦直下はよく締まっている。他は締まり中位。粘性強い。
- 2 褐灰色シルト質土 上部に砂利を僅かに含む。締まり中位。粘性強い。
- 3 褐灰色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を少量、酸化鉄を少量含む。締まり中位。粘性強い。
- 4 灰黄褐色シルト質土 径3～10mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を少量含む。径10mmの炭化物を僅かに含む。締まり中位。粘性強い。

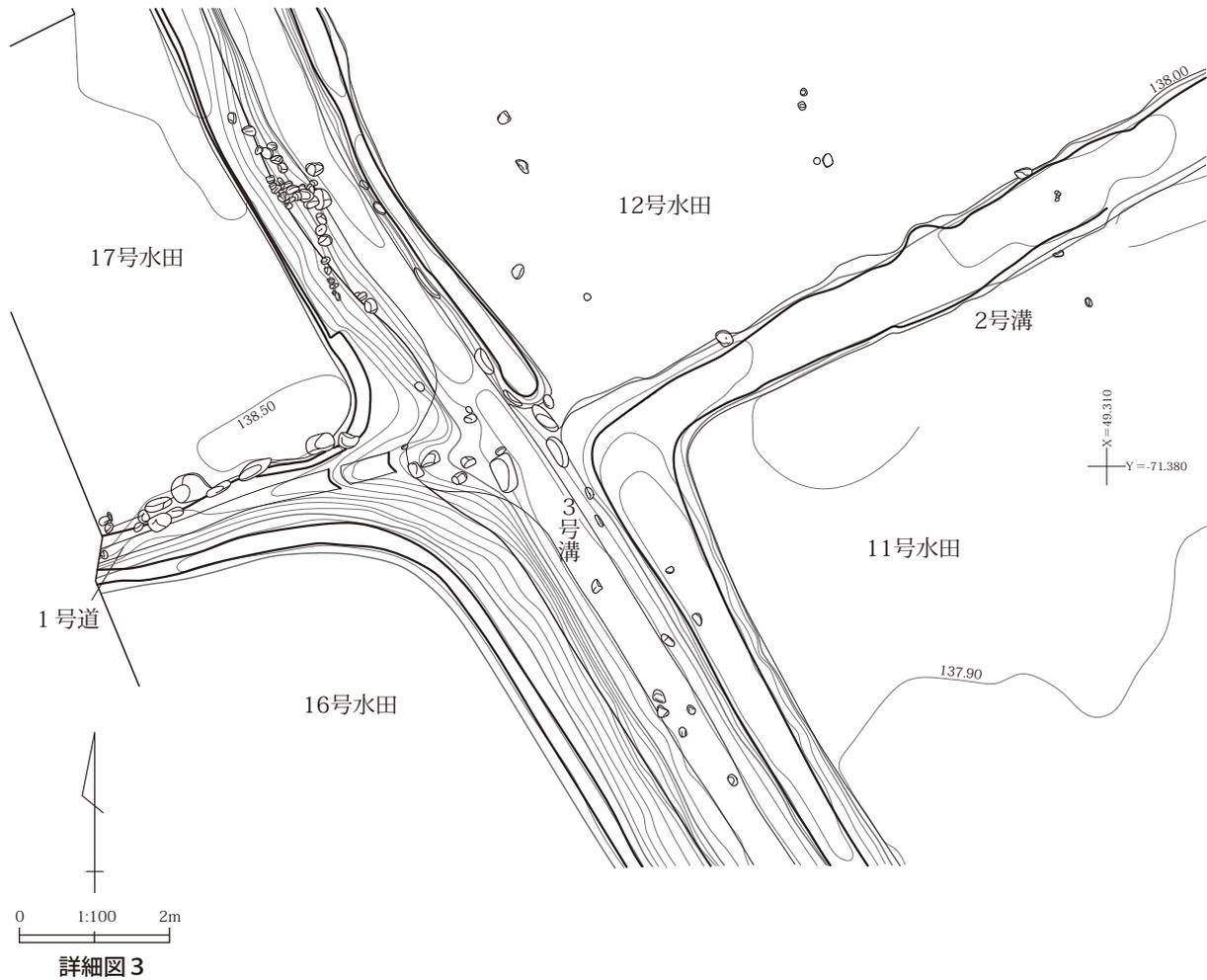
※左が5号水田、右が1号水田。2層が1号溝の覆土

詳細図2



阿久津遺跡V区 2a ライン土層観察所見

- 1 灰黄褐色土 褐灰色土と砂利が混じる。酸化鉄を斑状に含む。締まり弱い。粘性弱い。
- 2 灰黄褐色土 褐灰色土と砂利を少々混じる。酸化鉄を斑状に含む。締まり弱い。粘性ややあり。
- 3 褐灰色土 径10mm以下の白色軽石を少量含む。酸化鉄をやや層状に含む。径10mmの炭化物を僅かに含む。締まり中位。粘性ややあり。
- 4 灰黄褐色土 径3～10mmの白色軽石を少量含む。上部に砂利が層状に混じり、酸化鉄がつく。締まり弱い。粘性弱い。
- 5 灰黄褐色土 径3～30mmの白色軽石を少量含む。酸化鉄を斑状に含む。締まり中位。粘性強い。
- 6 灰黄褐色土 褐灰色土にやや多く砂利質が混じる。径40mmの白色軽石1個、酸化鉄を斑状に含む。締まりやや弱い。粘性中。
- 7 灰黄褐色土 径3～20mmの白色軽石を少量含む。径40mmの白色軽石1個あり。砂利質少々含む。酸化鉄を斑状に含む。締まり中位。粘性中位。



第209図 阿久津遺跡 V区詳細図3

溝

1号溝 (第205・207・208図 PL.91)

位置 X=49.270 ~ 49.285/Y=-71.345 ~ -71.350

規模 長さ15.3m、幅(上端)0.28 ~ 0.4m (下端)0.1 ~ 0.2m、深さ0.15 ~ 0.23m

特徴 1号水田の西側の畦際を走る。6号水田から排水され、2号水田へ流れる。

2号溝 (第205・207 ~ 209図 PL.91・92)

位置 X=49.315 ~ 49.325/Y=-71.355 ~ -71.370

規模 長さ18.6m、幅(上端)0.35 ~ 1.08m (下端)0.06 ~ 0.83m、深さ0.05 ~ 0.06m

特徴 掘り込みが浅く輪郭がはっきりしない。

3号溝 (第205・207・209・210図 PL.92)

位置 X=49.265 ~ 49.325/Y=-71.370 ~ -71.395

規模 長さ64.0m、幅(上端)1.33 ~ 2.3m (下端)0.28 ~ 1.08m、深さ0.35 ~ 0.7m

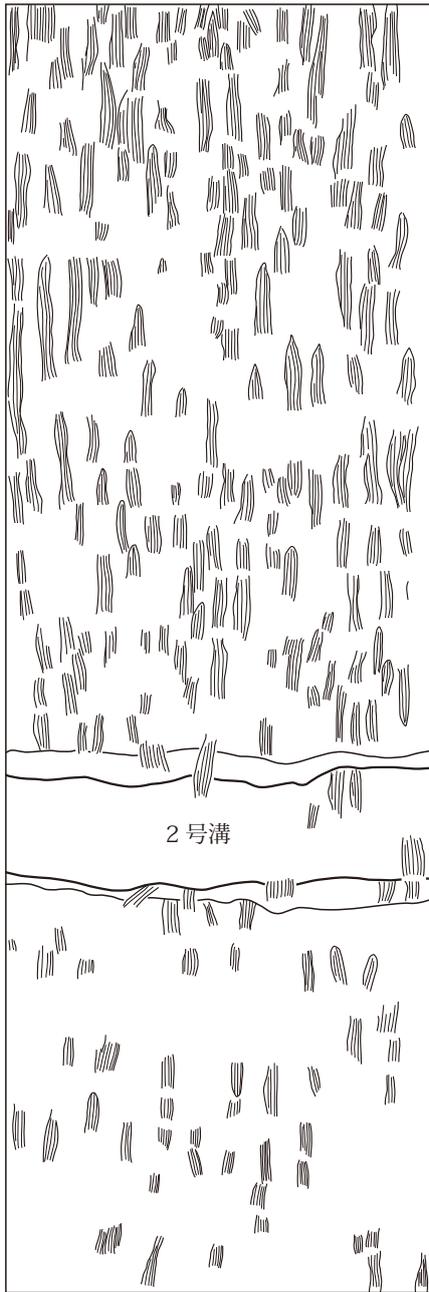
特徴 溝北部の西側内壁の下部に石垣が施されている。丸みを帯びた川原石を使用し、平たく大きめの石を平らに積んで、隙間に小さい石を入れて組んでいる。

道

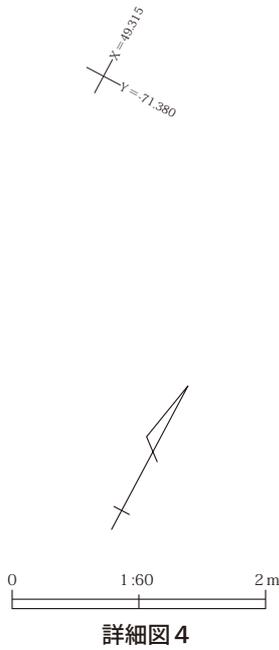
1号道 (第209図)

位置 X=49.305/Y=-71.385 ~ -71.390

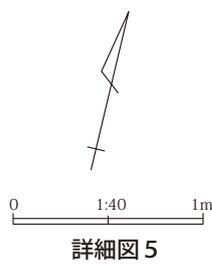
規模 長さ4.4m、幅0.5 ~ 0.8m



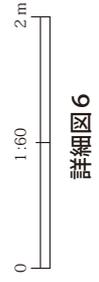
11・12号水田稻跡



1号水田稻跡



L=138.00m



第210図 阿久津遺跡 V区詳細図4～6

Ⅵ区

Ⅵ区は平成15年度、16年度、18年度に調査を行った。天明泥流下の水田、溝、土坑が見つかっている。水田は1号から35号までの番号が付されている。水田番号の順序は基本的に西から東、南から北を基本としているが、3次に分割した調査となったため、必ずしも一定しない。また、10号水田の南にも1区画が認められるが、調査範囲が狭く、水田としてとらえられるものか否かわからない。溝は1号から8号まで番号が付されている。1号溝は、用排水路としての機能を持つ他の溝とは、規模形状ともに大きく異なるものである。ここに取り付く2号から6号溝も、用水として機能するものではない。10号溝は暗渠状をなす。平成18年度調査では田面に掘られた土坑群が認められた。畦や水路となる溝を切るものであり、1号溝のあり方とともに、天明泥流到達時にはこれらの水田が機能していなかった事を示すものである。

水田の区画

[1・2号水田] (第211・212・216・218図 PL.94)

調査区南西隅にある。両水田ともに西部は調査区外となり全形はとらえられない。Ⅴ区の12号、14号水田につながる区画を構成するものとすれば、Ⅴ区3号溝に西辺を区切られる、東西に長い長方形を基本形とするものである可能性が高いだろう。1号水田は南北長13mほど、2号水田は確認できる南北の最大長15mほどの規模で、田面の標高はともに137.95m、ほぼ均平に整えられている。東は畦を介して1号溝に接するが、1号水田の中部、2号水田の北東部では畦が途切れている。1号水田東側の1号溝内には、この畦が切れた部分の斜面に、4mほどの長さの石積みが見られる。扁平な円礫を5～6段ほど互の目積み風に積み重ねたものだが、石相互の密着度は低く、水路等に見られる石組みや石垣に比べると表面を整える意識も低い。一時的な土留めとしての使用を前提して作られたものかもしれない。用排水にかかる水口は調査範囲外に設けられた

ものと思われる。

田面には足跡が明瞭に残されている部分があり、細部の記録を行っている。個々の足跡については変形が著しいが、痕跡の明瞭な133個について計測を行ったところ、足跡長の平均は22.4cm、最頻値は20.0cm、幅の平均11.4cm、最頻値10.0cm、歩幅の平均は25cmほどとなった。行跡としてたどれるものは水田の北辺では東西方向、東辺沿いでは南北方向から西へ回り込むような動きを示している。田面の中央部では足跡がそれとしては認めがたくっており、田面全体を対象とした作業の痕跡ではないものと思われる。

1号溝に接する部分の畦が切れていることにより、両水田ともに泥流到達時には機能していなかったものと考えざるを得ない。

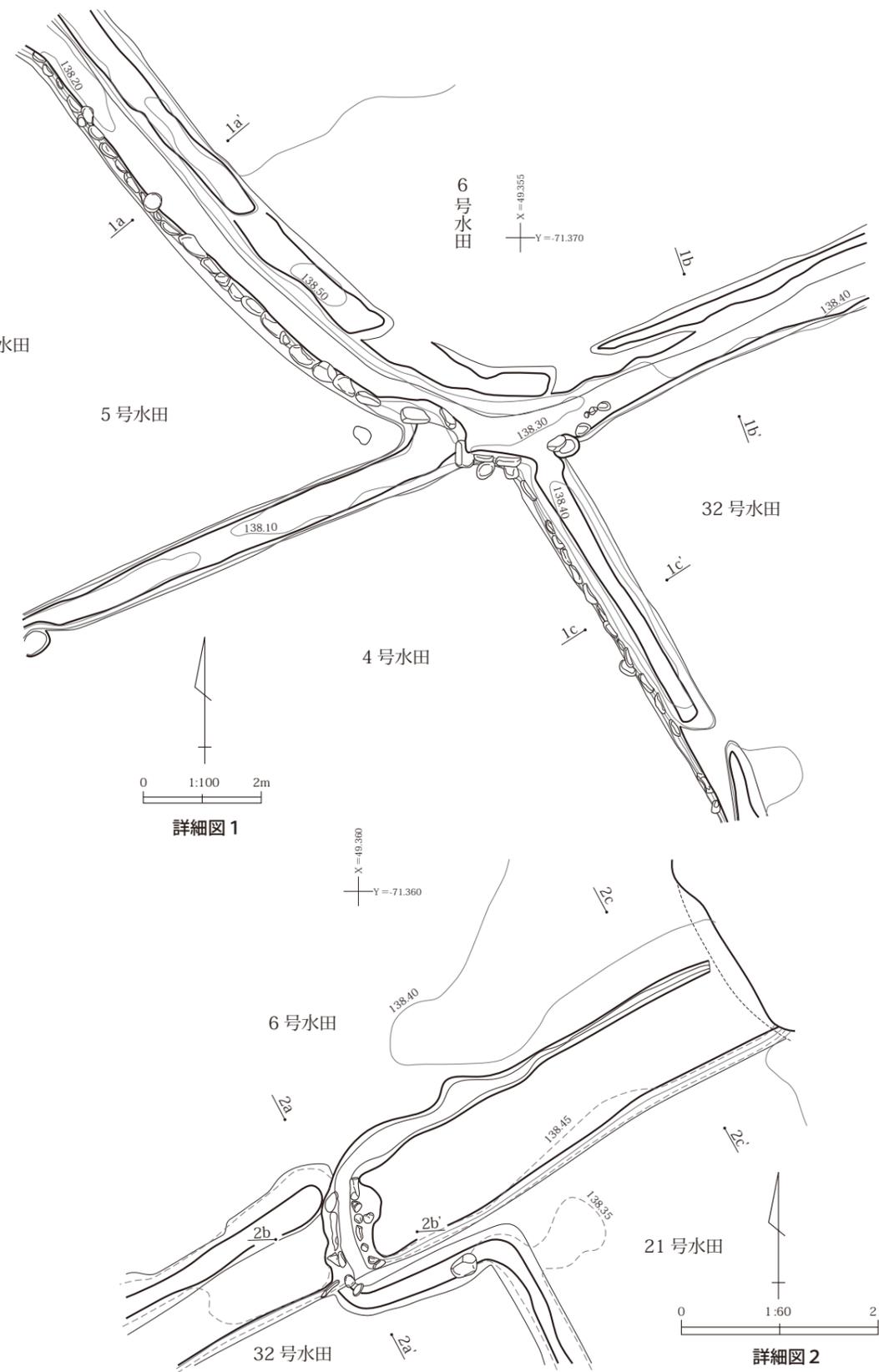
[3～5・8～12号水田]

(第211・213・214・216図 PL.94・95)

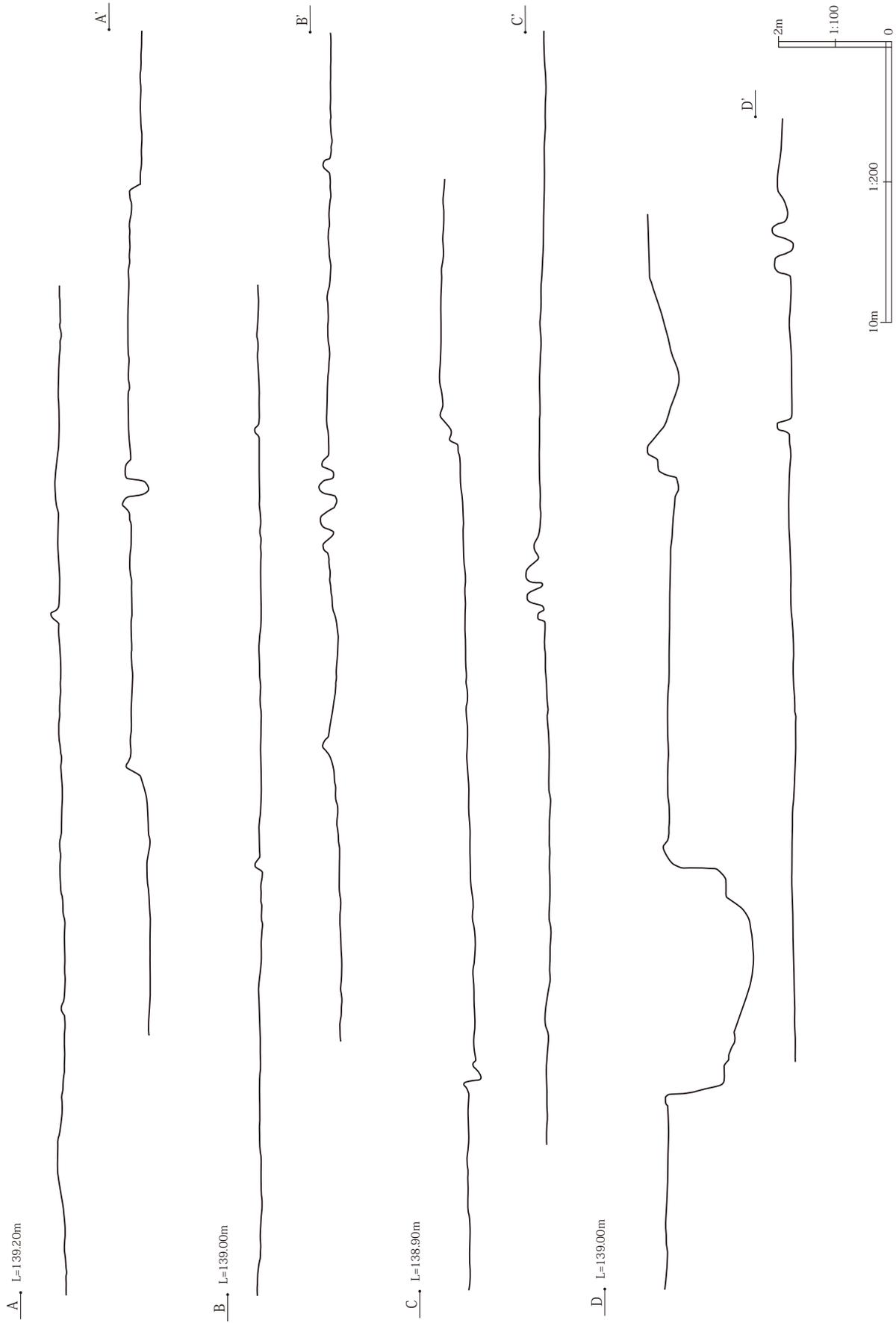
調査区南西にある。1・2号水田とは1号溝で分断されているが、1号溝はⅤ区には連続せず、本来はⅤ区12～14号水田と1・2号を含めたこれらの水田が同一区画をなすものであろう。北及び東側の水田からは一段低くなっている。12号水田を例にとると、北の15号水田、東の13号水田よりそれぞれ30cm低く、5号水田は東の6号水田より45cm低い位置にあり、この段差を石垣を伴う大畦で区切っている。大畦は上段にある水田の畦から、比較的急角度の法面で浅い水路の底部に至り、緩やかに立ち上がってからわずかな平坦面をおいて円礫、垂角礫を1段ないし2段積んだ石垣を作るという構造である。全体で1.5mほどの幅を有する。田面の標高は3～5及び9号水田が137.95m、8・10・11号水田が138.0m、12号水田が138.05mで、それぞれ均平に作られている。

3号水田は調査区南端にあたり、ごく一部を調査したのみである。西に1号溝があって、この部分には畦が認められない。

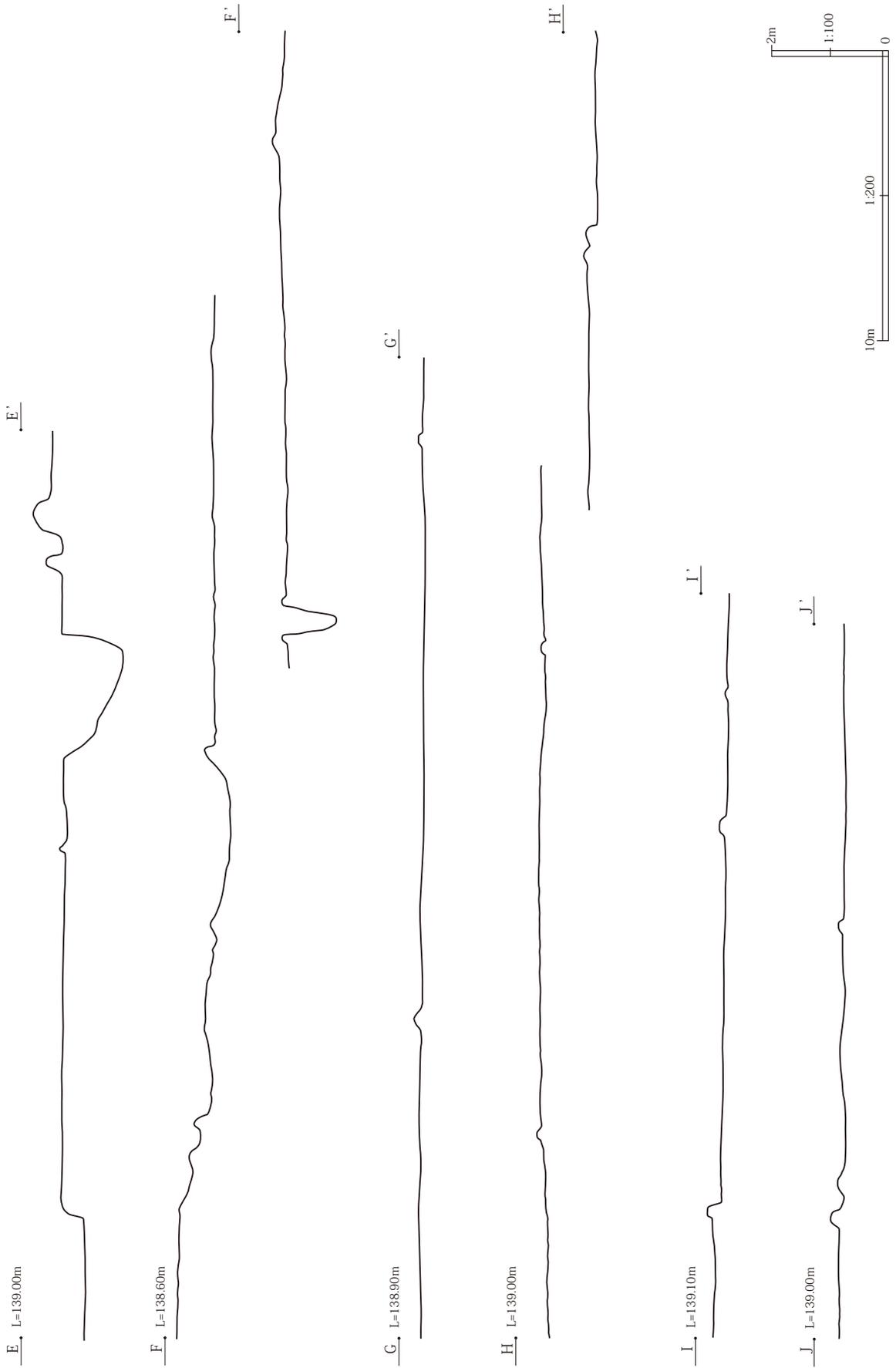
東に隣接する4号水田は北辺長16mほどの規模である。5号水田は南北長15m、北辺長13m、南辺長



第211図 阿久津遺跡 VI区全体図 詳細図1・2



第212図 阿久津遺跡 VI区高低図1



第213図 阿久津遺跡 VI区高低図2

17mの台形状を呈する。西に1号溝が接し、西辺の北端には畦が残っているが以南には畦が認められない。南西隅は2号溝に切られたようになっていて、この部分でも畦が途切れる。8号水田は南北長16m、北辺長11m、南辺長14mほどで西辺中央部が括れた台形状を呈する。括れ部に9号水田が陥入するような形で作られている。南部で1号溝と接するが、この部分には畦がない。北の12号水田との境界は細い畦で、北東隅部の畦が切れ、水口となっている。5号水田と8号水田の境には3号溝がある。深さ0.8～0.9mと比較的深い台形断面の溝で、両側には畦が付属する。この溝は東側畦に到達せずに切れていて、かつ東側は畦が一部切れて開放状態となっている。底面レベルを追うと、1号溝との接点近くが高く、中央部が最も低くなっていて、溝としての機能は果たしていないようである。

10号水田は北を5号溝、東を4号溝に画され、南は畦と段差をもって2号水田北の区画と接し、また1号溝の北端と接する。東辺の南北長7mほどの狭い区画である。

11号水田は5号溝を挟んで10号水田の北にある。北辺は14号水田との間を大畦で画される。東は12号水田との間を畦で画し、その畦の北端が切れて水口となる。東辺の南北長6mほどの小さな区画である。

12号水田は東西22m、西辺長14.5m、東辺長7.5mであるが、西辺の中央から東に向けて5号溝が田面中央近くまで伸びる。5号溝は幅55～75cm、深さ14～20cmほどの溝で、断面形は半円から浅いU字状を呈す。周囲にはごく低い畦状の高まりが廻り、12号水田西部の北側と4号溝との交点南側ではこの高まりが途切れる。4号溝は5号溝にT字形に取り付いて、南に延び、1号溝に至る。長さ8m、上端幅70cmほどで、深さは16～20cmほどある。4・5号溝ともに3号溝と似た形態であり、直接的な用排水路とは異なる性格を有するものようである。

[32・21号水田] (第211・213・215・219図 PL.97)

調査区南東隅にある。田面の標高はともに138.3mで、北の6号水田より10cm低く、西の4号水田よ

り35cm高い。南は調査区外で、北は水路、畦により6号水田と画され、西は大畦で4号水田と画される。東は7～9号溝に接している。

32号水田は東西長11.5m、南北確認長11mほどで、北辺の東西両角は直角に屈曲し、各辺の直線性も強い。南北に長い長方形を呈するものであろう。21号水田との間は畦で区切られる。6号水田との境をなす幅広の畦が21号水田との交点よりわずかに西で切れて水口となるが、ここは扁平な円礫を組んだ橋状の構造によって暗渠状に作られている。石組みの上面は硬化していて、道として使用されていたものと思われる。

21号水田は同じく南部が調査区外にあたり、東辺は蛇行する7～10号溝に接し、さらに北辺東半を土坑群に切られる。確認できる南北方向の最大長は15mほど、東西長は10mほどである。この水田を切る土坑については後述するが、6号水田とともに、田としては機能していなかったものと考えられる。

[6・7・13・23・33号水田]

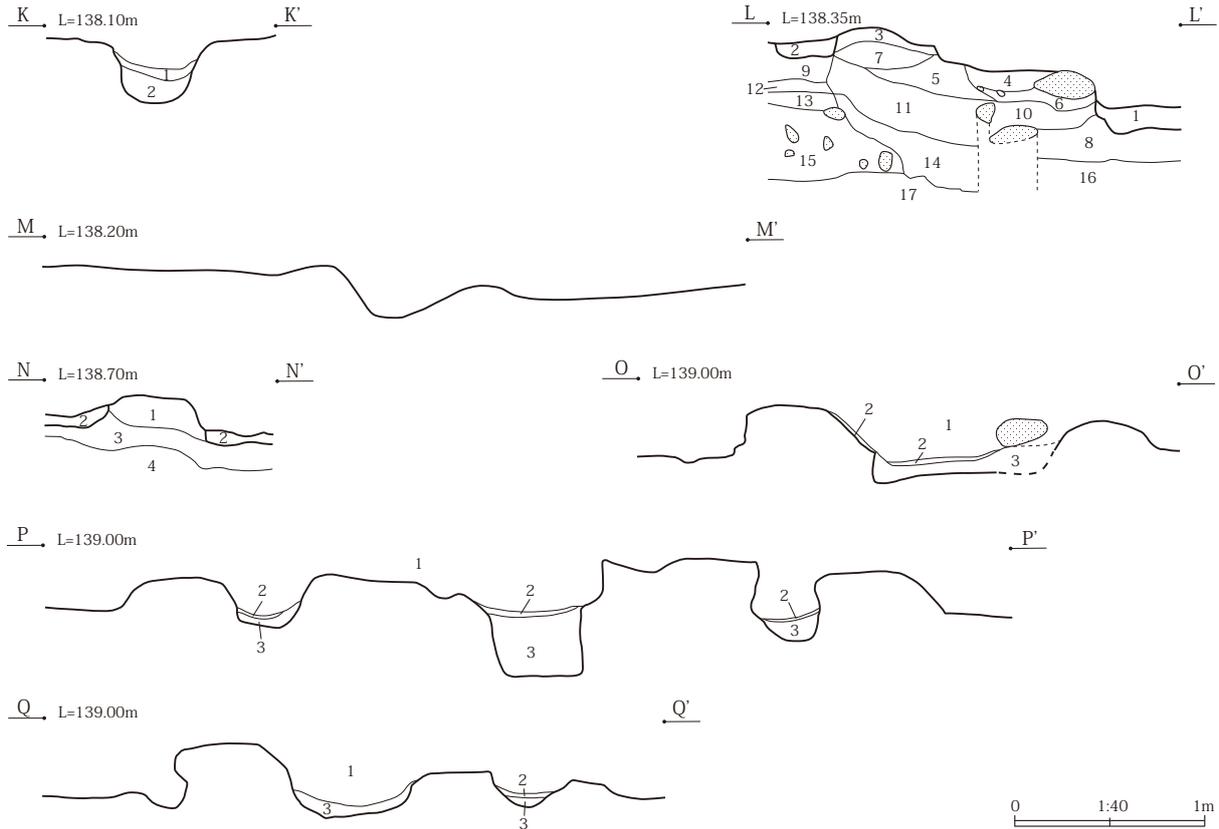
(第211～213・215・219図 PL.94・95・97)

調査区南部にある。東を7～9号溝、西と南を大畦に限られる。北はやや幅広の畦を以て14～17・34号水田と画される。これらの水田とはさほど高低差はないが、平面形状が異なるため別のグループとしてとらえることとする。

6号水田は北辺の東西長30m、南辺の東西長30m、高さ14.5mの台形状をなす。西は大畦、東は7～9号溝で画される。北辺畦の東西両端が切れて水口となる。南辺東端は土坑群に切られており、21号水田とともに泥流到達時には機能していなかったと考えられる。田面で採取した植物遺体からもイネの植物珪酸体は検出されず、イネ科かカヤツリグサ科か特定できないもののイネではない事がわかっている。

7号水田は北辺の東西長17m、南北長16.5mほどで、西は大畦に接し、他の3方は畦で各水田と画される。田面の標高は138.4mで、北の13号水田、東の33号水田よりやや低い。北辺畦の西端が切れて水口となる。田面には北東から南西方向に泥流による

第4章 遺構と遺物



阿久津遺跡Ⅵ区Kライン土層観察所見

- 1 灰白色土 砂質に近いシルト質。黄褐色砂を含む。締まり中。粘性中。
- 2 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質。径5mm以下の白色軽石、赤褐色砂、炭化物粒子含む。締まりやや強。粘性やや弱。

阿久津遺跡Ⅵ区Lライン土層観察所見

- 1 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石、赤褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性やや弱。
- 2 灰白色シルト質土 径3mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 3 灰白色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まりやや強。粘性弱。
- 4 灰白色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 5 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径50mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 6 にぶい黄褐色土 砂質土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。締まりやや弱。粘性弱。
- 7 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 8 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 9 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径2mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 10 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径30mm以下の白色軽石、赤褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性弱。
- 11 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂、黄褐色土粒子を含む。締まり弱。粘性やや弱。

- 12 灰黄褐色土 砂質土。径20mm以下の白色軽石、多量の褐灰色の砂を含む。締まりやや弱。粘性弱。
- 13 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径30mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 14 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂、黄褐色土粒子を少量含む。締まり中。粘性やや弱。
- 15 褐灰色シルト質土 径100mm以下の白色軽石及び赤褐色の砂を多く含む。締まり中。粘性中。
- 16 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石、赤褐色組状ブロックを含む。締まり中。粘性中。
- 17 褐灰色土 砂質土。径10mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。締まり強。粘性弱。

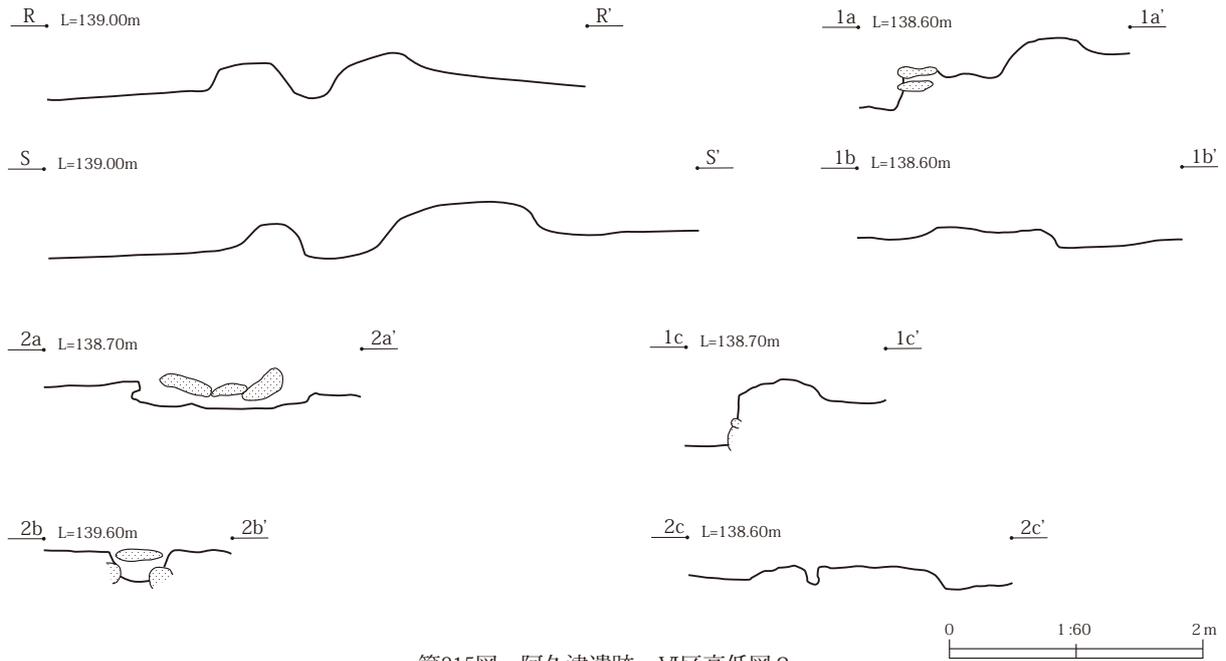
阿久津遺跡Ⅵ区Nライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径5mm以下の白色軽石、赤褐色砂質土ブロック、赤褐色組状ブロック含む。締まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 シルト質。径5mm以下の白色軽石を少量、赤褐色砂質土ブロック、赤褐色組状ブロック含む。締まり中。粘性弱。
- 3 褐灰色土 シルト質。径10mm以下の白色軽石を少量、赤褐色砂質土ブロック、赤褐色組状ブロックを含む。締まり中。粘性中。
- 4 にぶい黄褐色土 シルト質。径30mm以下の白色軽石少量、黄褐色土粒子含む。全体が黄褐色化している。締まりやや弱。粘性中。

阿久津遺跡Ⅵ区O・P・Qライン土層観察所見

- 1 天明泥流層
- 2 暗褐色土 細砂層。粘性・締まり弱。上面に酸化鉄層あり。
- 3 褐色土 細砂・粗砂が層状に重なる。径5～10mmの礫少量混。粘性、締まり弱。

第214図 阿久津遺跡 Ⅵ区土層断面図



第215図 阿久津遺跡 VI区高低図3

削痕が明瞭に残される。

33号水田は7号水田の東にあり、両者はごく低い、不明瞭な畦で区画される。田面の標高は138.45m、南辺の東西長14.5m、南北長16mで、北東隅が7～9号溝に接して乱れるが、基本的には整った方形の平面形である。北辺畦の東端が切れて水口となるほか、8号溝からも取水したもののようである。田面には田面には北東から南西方向に泥流による削痕がある。

23号水田は蛇行する7～9号溝を弧とする半月形をなしている。弦部の長14.5m、奥行き5.5mほどの規模である。田面の標高138.5m。33号水田との境界をなす西辺畦の北端が切れて水口となり、7号溝から給水される。

13号水田は東西長26.8m、南北最大長10.5mの東西に細長い水田で、田面の標高138.45m。東西は大畦と7～9号溝、南北は畦に画される。北辺畦の東端部が切れて水口となり、7号溝から取水する。

[14～20・34・35号水田] (第211・212・213図 PL.95)

調査区北西部にある。北と西は調査区外となる。南は16号水田中部以西は大畦により、これ以东は畦により画される。南北方向にやや長い長方形を基本とするため、東西に細長い形状をとる前項の水田群

と区分した。東は7～9号溝に画される。南及び西が低くなっており、東の7～9号溝から取水して順次西の水田に給水していったものと思われる。

14号水田は調査区界に接していて、南北14m、南辺の東西確認長3.5mの鋭角な三角形の範囲鑿の調査となった。東辺畦の南端が切れて水口となっている。

15号水田は南を大畦、他の3方を畦に画される。北西隅が調査区外となるが、東西長15m、20.5～21.5mの比較的整った長方形の平面形を呈す。田面の標高は138.4m。東辺畦の南北両端と北辺畦の中央近くが切れて水口となっている。16号水田も南辺の西半を大畦、他を畦に画され、東辺畦の南北両端が切れて水口となっている。南東の、13号水田との境界畦がゆるい弧状に歪むが、東西長15m、南北長18.5～21mの長方形の平面形を示す。田面標高は138.45m。南北方向に畝状の痕跡が見られ、16号水田では北東から南西方向に泥流による削痕が明瞭に残されている。

17号水田は平成15年度調査と18年度調査に分割された位置に当たり、北辺畦の記録に不整合がある。四辺ともに畦で画され、東辺畦の南北両端が切れて水口となっている。東西長15.5m、南北長18.5mほ

第4章 遺構と遺物

どの長方形の平面形である。ここでも南北方向に畝状の痕跡や泥流による削痕が認められる。

18号水田は西部と北部、19・20・35号水田は北部が調査区外となる。18号水田は東西確認長10m、南北確認長12.5mほどで田面標高138.45m。19号水田は東西長13.5m、南北確認長10.5m、田面標高138.5m、20号水田は東西長20.5m、南北確認長10.5mほどで田面標高138.55mである。18・19号水田では東辺畦の南端が切れて水口となっているが、20号水田ではこれが見られない。3水田ともに南北方向の畝状痕跡や北東から南西方向の泥流削痕が明瞭に残されている。18号水田では泥流作痕が緩い弧状を描いて南に方向を変えるかのような挙動を見せる。段丘崖が近いことによって、泥流の方向が変化していることが示されている。

34号水田は17号水田、35号水田は20号水田と7～9号溝に挟まれた細長い区画である。34号水田では北辺の東西長7m、南辺の東西長3m、西辺の南北長19.5m、田面の標高は138.6m。東辺畦中央部を切って水口とし、7号溝から取水する。35号水田は北部が調査区外となるが、調査範囲内での東西最大長9.5m、南北確認長6.5m、田面の標高138.83mである。

[22・24・26～31号水田] (第211～213・219図)

調査区東端にある。7～9号溝以東の水田群である。最北部の31号水田の田面標高が最も高い138.78mで、26～29号水田が同138.6m、22・24号水田は138.5mである。

22・24号水田は東部が調査区外となり、西が蛇行する7～9号溝に接するため全形が推測しがたい。22号水田は7～9号溝を弦とした歪んだ半月状で、調査区界での弦の長21.5m、最大奥行き8mほどである。24号水田は東西最大確認長4m、南北長10mほどであった。

26号水田は東辺が調査区外となるが、27号水田との境となる北辺は全長が確認できる。北辺畦の西端が切れて水口となっている。北辺の東西長17mで、西は蛇行する7～9号溝と接して弧状をなす。南北

長は12.5mほどある。南北方向の畝状痕跡、北東から南西方向に泥流削痕が残されている。

27号水田は西が7～9号溝と接し、他の3辺は畦で画される。南辺と東辺の畦は直線的だが、北辺畦は29号水田が大きくはらみだす形で歪む。29号水田との境界をなす北辺畦の東端が切れて水口となる。南辺は26号水田と共有する畦で東西長17m、東辺の南北長4.5m。あまり明瞭ではないが、東西方向に畝状の痕跡が残されている。

28号水田は26・27号水田の東に接するが、調査範囲がごく狭く、詳細を把握することができなかった。

29号水田は東を7～9号溝、他の3辺を畦で画される。南辺畦がふくらんで弧状をなすが、他の3辺は比較的直線的である。北辺の東西長9.5m、南北最大長12.5m。31号水田との境をなす北辺畦の東端が切れて水口となる。27号水田と同じく、東西方向の畝状痕跡が認められる。

30号水田は29号・31号水田の東にあって、北部と東部が調査区外となる。南北方向の確認長17m、東西方向の確認長5.5m。31号水田は北部が調査区外となり、南北確認長5.5mであった。

溝

1号溝 (第216～218図 PL.95)

位置 X=49.340～49.370/Y=-71.385～-71.415

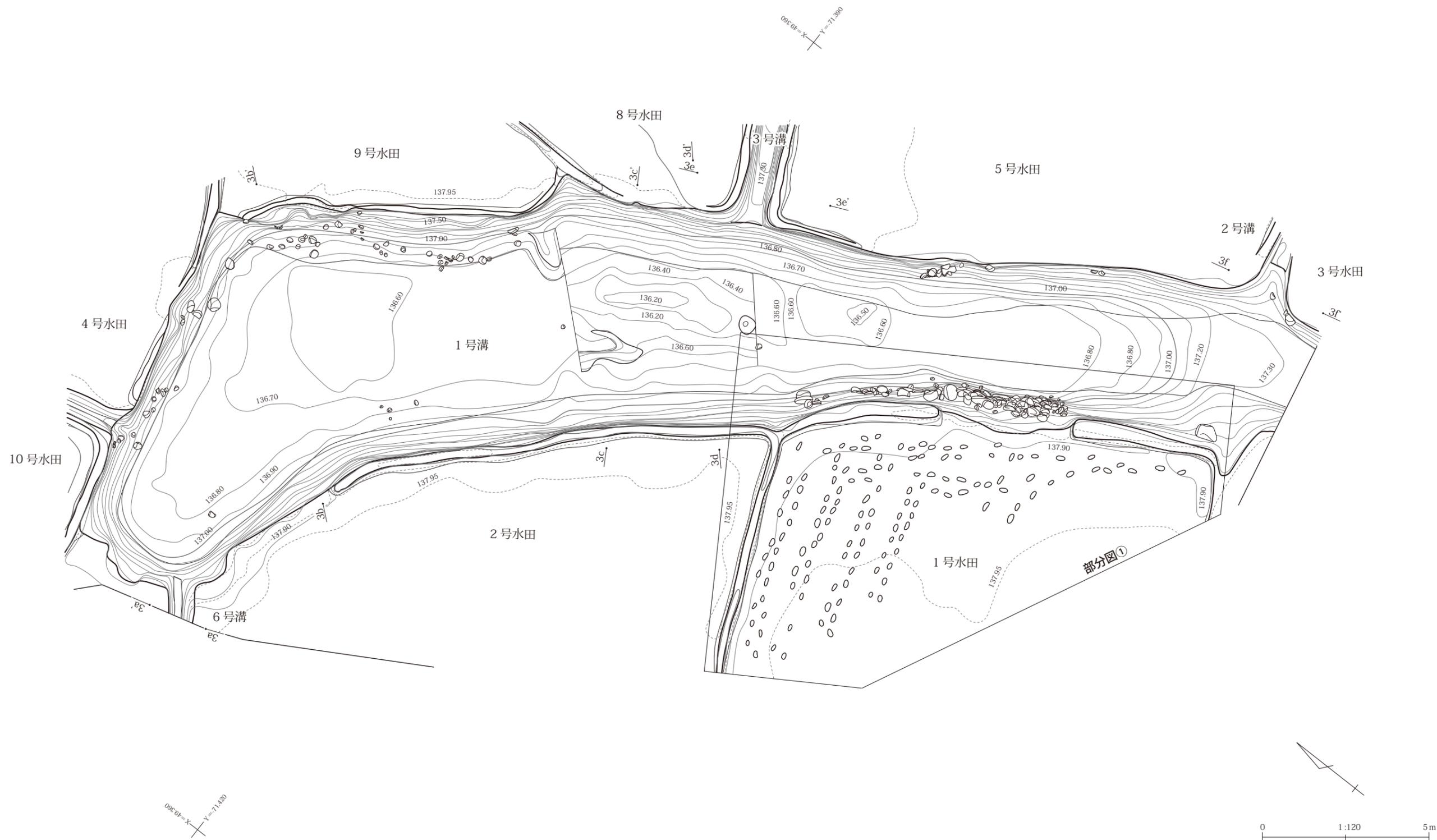
走向 西→南東

規模 長さ45.3m、幅(上端)4.3～9.8m(下端)1.7～7.8m、深さ0.77～1.78m

形態 不定形の断面を呈する。

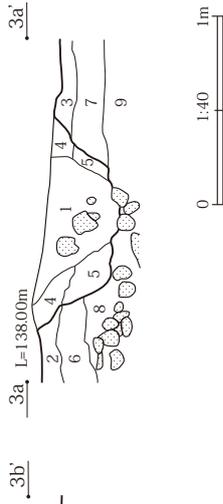
所見 調査区の南部に位置する。北西から中央にかけて、また南東から中央にかけて低くなり、中央部で水が溜まるような状態である。発掘の際底にノロが堆積していた。用水路というよりも、溜め池のような感じが感じられる。

東側に2号溝、3号溝が連結しているが、堰き止められ水が溜まるような状態であり、1号溝から2号溝、3号溝へ、または2号溝、3号溝から1号溝



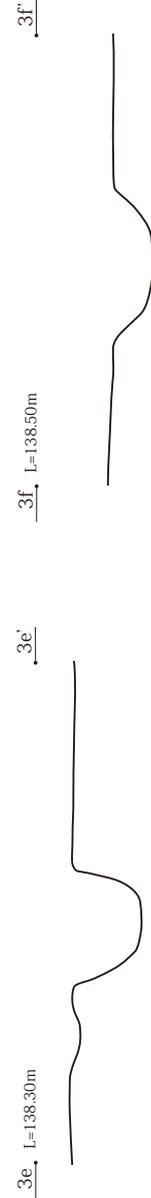
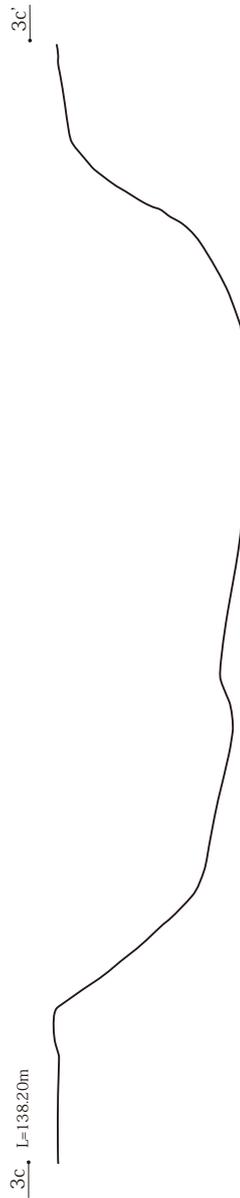
第216図 阿久津遺跡 VI区詳細図3

詳細図3



阿久津遺跡VI区 3a ライン土層観察所見

- 1 天明泥流
- 2 灰白色土 砂質に近いシルト質土。径15mm以下の白色軽石、赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 3 灰白色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性弱。
- 4 灰白色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 5 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径20mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 6 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。縮まり中。粘性弱。
- 7 褐灰色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石、にぶい黄褐色砂質土ブロック、赤褐色の砂を含む。縮まりやや弱。粘性中。
- 8 褐灰色土 シルト質土。径100～200mm以下の白色軽石を多量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。
- 9 褐灰色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。



0 1:60 2m

第217図 阿久津遺跡 VI区詳細図 3 土層断面図・高低図



詳細図3 部分図①
1号水田足跡

第218図 阿久津遺跡 VI区詳細図3 部分図①

第3表 阿久津遺跡IV区1号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	行跡	左	20.0	12.0		
2	行跡	右	16.0	10.0		1-2間 30
3	行跡	左	21.0	9.0		2-3間 31
4	行跡	右	19.0	10.0		3-4間 22
5	行跡	左	19.0	9.0		4-5間 40
6	単独	右	19.0	9.0		-
7	単独	左	20.0	11.0		-
8	行跡	左	25.0	8.0		
9	行跡	右	22.0	10.0		8-9間 13
10	行跡	左	28.0	12.0		9-10間 38
11	行跡	右	24.0	10.0		10-11間 13
12	行跡	左	22.0	11.0		11-12間 27
13	行跡	右	26.0	13.0		12-13間 18
14	行跡	左	28.0	9.0		13-14間 31
15	行跡	左	20.0	11.0		
16	行跡	右	25.0	13.0		15-16間 21
17	行跡	右	24.0	15.0		16-17間 34
18	行跡	右	26.0	11.0		17-18間 16
19	行跡	左	23.0	15.0		18-19間 31
20	行跡	右	22.0	11.0		19-20間 14
21	行跡	左	23.0	9.0		20-21間 34
22	単独	右	28.0	9.0		-
23	単独	左	18.0	9.0		-
24	単独	?	21.0	11.0		-
25	単独	右	20.0	10.0		-
26	単独	右	20.0	10.0		-
27	行跡	右	21.0	10.0		
28	行跡	左	22.0	12.0		27-28間 26
29	行跡	右	25.0	12.0		28-29間 31
30	行跡	左	30.0	15.0		29-30間 11
31	行跡	右	22.0	13.0		30-31間 39
32	行跡	左	29.0	16.0		31-32間 26
33	行跡	右	23.0	13.0		32-33間 37
34	単独	?	24.0	14.0		-
35	行跡	左	28.0	15.0		
36	行跡	右	22.0	11.0		35-36間 15
37	行跡	左	23.0	9.0		36-37間 19
38	行跡	右	22.0	11.0		37-38間 16
39	行跡	左	21.0	11.0		38-39間 20
40	行跡	右	20.0	9.0		39-40間 5
41	単独	左	24.0	11.0		-
42	行跡	左	24.0	15.0		
43	行跡	右	19.0	12.0		42-43間 34
44	行跡	左	26.0	13.0		43-44間 32
45	行跡	右	27.0	15.0		45-44間 27
46	行跡	左	21.0	9.0		45-46間 30
47	行跡	右	23.0	10.0		46-47間 29
48	行跡	左	23.0	11.0		47-48間 21
49	行跡	左	22.0	9.0		
50	行跡	右	20.0	10.0		49-50間 33
51	行跡	左	21.0	11.0		50-51間 24
52	行跡	右	21.0	10.0		51-52間 16
53	行跡	左	23.0	10.0		52-53間 22
54	行跡	右	19.0	10.0		53-54間 29
55	行跡	左	20.0	10.0		54-55間 21
56	行跡	右	21.0	12.0		55-56間 28
57	行跡	左	24.0	15.0		56-57間 21
58	行跡	右	29.0	11.0		57-58間 25
59	行跡	左	19.0	9.5		58-59間 41
60	単独	?	20.0	13.0		-
61	単独	?	16.0	11.0		-
62	行跡	左	21.0	12.0		
63	行跡	右	20.0	10.0		62-63間 20
64	行跡	左	20.0	12.0		63-64間 34
65	行跡	右	18.0	9.0		64-65間 21
66	行跡	左	18.0	10.0		65-66間 29
67	行跡	右	18.0	10.0		66-67間 23

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
68	行跡	左	19.0	10.0		67-68間 18
69	行跡	右	23.0	13.0		68-69間 26
70	行跡	左	26.0	10.0		69-70間 25
71	行跡	右	20.0	11.0		70-71間 14
72	行跡	左	18.0	8.0		71-72間 12
73	行跡	右	19.0	12.5		72-73間 30
74	行跡	左	20.0	10.0		73-74間 12
75	行跡	右	22.0	11.0		74-75間 25
76	単独	右	19.0	10.0		-
77	単独	左	19.0	10.0		-
78	行跡	右	24.0	19.0		
79	行跡	左	21.0	12.0		78-79間 5
80	行跡	右	20.0	11.0		79-80間 15
81	行跡	左	23.0	11.5		80-81間 25
82	行跡	右	27.0	11.0		81-82間 28
83	行跡	左	29.0	15.0		82-83間 4
84	行跡	右	20.0	12.0		83-83間 44
85	単独	?	21.0	14.0		-
86	単独	?	31.0	13.0		-
87	単独	?	25.5	13.0		-
88	単独	?	29.0	10.0		-
89	単独	?	30.0	15.5		-
90	単独	?	23.5	11.0		-
91	単独	?	25.0	11.0		-
92	単独	?	28.0	14.0		-
93	単独	?	19.0	10.0		-
94	単独	右	22.0	10.0		-
95	単独	左	25.0	14.0		-
96	単独	?	15.0	12.0		-
97	単独	?	28.0	11.0		-
98	単独	?	24.0	9.0		-
99	単独	?	17.0	10.0		-
100	単独	?	19.0	9.0		-
101	単独	?	22.0	9.5		-
102	単独	?	27.0	12.0		-
103	単独	?	21.5	13.0		-
104	単独	右	18.0	11.0		-
105	単独	?	21.0	10.0		-
106	単独	右	24.0	12.0		-
107	単独	右	22.0	15.0		-
108	単独	?	21.0	10.0		-
109	単独	?	22.5	9.0		-
110	単独	?	20.0	11.0		-
111	行跡	左	26.0	11.0		
112	行跡	右	20.0	9.0		111-112間 1
113	行跡	左	20.0	10.0		112-113間 15
114	行跡	右	24.0	15.0		113-114間 12
115	単独	右	21.0	12.0		
116	行跡	左	25.0	10.0		115-116間 14
117	行跡	右	24.0	10.0		116-117間 12
118	行跡	左	19.0	13.0		117-118間 35
119	行跡	右	22.0	11.0		118-119間 24
120	単独	?	15.0	10.0		-
121	単独	?	22.0	11.0		-
122	単独	?	25.0	9.0		-
123	単独	?	17.0	13.0		-
124	単独	?	20.0	11.0		-
125	単独	?	26.0	14.0		-
126	単独	?	24.5	13.5		-
127	単独	?	21.5	11.0		-
128	行跡	右	26.0	10.0		
129	行跡	左	24.5	13.0		129-128間 36
130	行跡	右	21.5	10.5		129-130間 44
131	単独	右	25.0	11.5		-
132	単独	右	27.0	15.0		-
133	単独	右	24.5	12.5		-

第4章 遺構と遺物

へ水が流れていく様子は確認できない。どのように水が流れるかは不明である。北側で4号溝が連結し、1号溝へ水が流れるようになっている。西側で6号溝が連結し、1号溝へ水が流れ落ちるようになっている。1号溝の内側側面には石で補強されている箇所がある。溝の南寄りの西側側面は整然とした石組みが確認でき、水の流れにより崩れやすい箇所を石で補強したと考えられる。

2号溝 (第216・217図 PL.95・96)

位置 X=49.340～49.345/Y=-71.380～-71.385

走向 東→西

規模 長さ3.0m、幅(上端)0.5～1.0m(下端)0.3～0.5m、深さ0.12m

形態 台形状の断面を呈する。

所見 1号溝に連結しているが、非常に短い。1号溝から2号溝へ、または2号溝から1号溝へ水が流れていくか確認できない。

3号溝 (第216・217図 PL.96)

位置 X=49.355～49.360/Y=-71.380～-71.395

走向 南西→北東

規模 長さ12.7m、幅(上端)0.9～1.5m(下端)0.5～1.0m、深さ0.82～0.91m

形態 台形状の断面を呈する。

所見 1号溝に連結しているが、1号溝から3号溝へ、または3号溝から1号溝へ水が流れていくか確認できない。3号溝に水が溜まる状態で堰き止められている。底の標高は南西から北東に向かって低くなっているが、1号溝から自然に水が流れ込むような状態になっていない。1号溝から水を引き込んで、水田に配水したか不明である。

4号溝 (第211・214図 PL.96)

位置 X=49.365～49.375/Y=-71.410～-71.415

走向 北西→南東

規模 長さ8.0m、幅(上端)0.7m(下端)0.1～0.25m、深さ0.16～0.19m

形態 台形状の断面を呈する。

所見 1号溝に連結している。5号溝から4号溝へ水が流れ込み、4号溝から1号溝へ水が流れ落ちる。4号溝の北は11号水田と12号水田の境界となる小畦があるが、畦としての高まりがはっきりと確認できない。4号溝が続くような感じで途中で消滅しているようにも見える。幅が狭く、掘り込みの浅い小規模の溝であり、水田内に配水するための小溝と考えられる。

5号溝 (第211・214図 PL.96)

位置 X=49.375～49.380/Y=-71.400～-71.420

走向 北東→南西

規模 長さ19.6m、幅(上端)0.55～0.75m(下端)0.2～0.25m、深さ0.14～0.22m

形態 丸底状の断面を呈する。

所見 4号溝に連結し、5号溝から4号溝へ水が流れる。小規模の溝であり、水田内に配水するための小溝と考えられる。

6号溝 (第216・217図 PL.96)

位置 X=49.360～49.365/Y=-71.410～-71.415

走向 南西→北東

規模 長さ1.2m、幅(上端)0.8m(下端)0.25m、深さ0.35m

形態 丸底状の断面を呈する。

所見 1号溝に連結し、6号溝から1号溝へ水が流れる。溝の一部が検出され、ほとんどが調査区外で全体が検出されていないため、詳細は不明である。

7・8・9号溝 (第211・214・215・219図 PL.97)

位置 X=49.353～49.424/Y=-71.343～-71.365

走向 北→南

規模・形態 7号溝 長さ18m、幅(上端)0.2～0.4m、深さ0.15～0.35m 台形からU字形の断面形を呈する。 8号溝 長さ34m、幅(上端)0.8～1.2m(下端)0.3～0.6m、深さ0.24～0.43m 台形状の断面を呈する。 9号溝 長さ62m、幅(上端)

0.5～0.7m、深さ0.14～0.37m台形からU字形の断面形を呈する。

所見 調査区北端から、大きく蛇行しつつ南へ流下して調査区南端近くの東壁に達する幹線水路である。北端では1条であるがX=46.413付近で3条に分かれる。西の7号溝は最も短く、分岐点から34号水田に給水し、13号水田の水口に収束する。東側の9号溝は27号水田に給水し、24号水田の水口に収束する。8号溝は両溝に挟まれた中央にあって、調査範囲内の水田には直接給水しない。13号水田と26号水田の間に8号・9号溝を切って9号・10号土坑が掘られているところから、泥流到達時には機能していなかったものと見られる。

土坑

1～8号土坑（第219・220図 PL.97）

X=49.355～49.367/Y=-71.350～-71.359にある。7～9号溝の西、6号水田と21号水田にまたがって、両水田の中間畦を壊して掘られている。おおよそ北から南へと連続して掘られた、8ないし9単位の掘削痕跡の集合体である。

最北部の1号土坑は口径部での東西3.25m、南北2.2mの長方形に近い平面形で、深さは1.09mある。南壁は2号土坑に切られるが、他の各壁は20cmほどえぐり込まれている。中央部には掘り残したような高まりがある。

2号土坑は1号土坑の南にあってこれを切るが、北部に小さな段があって、その南がさらに深くなる構造を持つ。北の段はそれとして一つの掘削単位を構成するものかもしれない。段の部分は東西1.6m、南北0.8mで、深さ1.1mある。南の主体部分は東西3.2m、南北2.3mの南辺を底辺とする台形状を呈し、深さは1.28mある。東壁で最大20cmほど、西壁では30cmほどをえぐり込んで掘削している。

3号土坑は2号土坑の南辺に接するように掘られていて、東西3.8m、南北2.8mと最も大きい。長方形の平面形を呈する。深さは1.09mで、西壁部のみ20cm弱えぐり込むように掘削されている。南壁中央

やや西よりにはステップ状の掘り残しが2段分見られる。

4号土坑は東西3.7m、南北2.5mで、長方形を基本とするが、北西隅部が掘削されていないため、南辺を底辺とする台形状を呈する。東壁は最大20cmほどえぐり込まれる。深さは0.94mある。5号土坑は4号土坑の南壁中央近くにほられている。東西8.5m、南北10.5mほどの小さなもので、底面は4号土坑の底面より1cmだけ深くなっている。4号土坑の一部をなすものかもしれない。

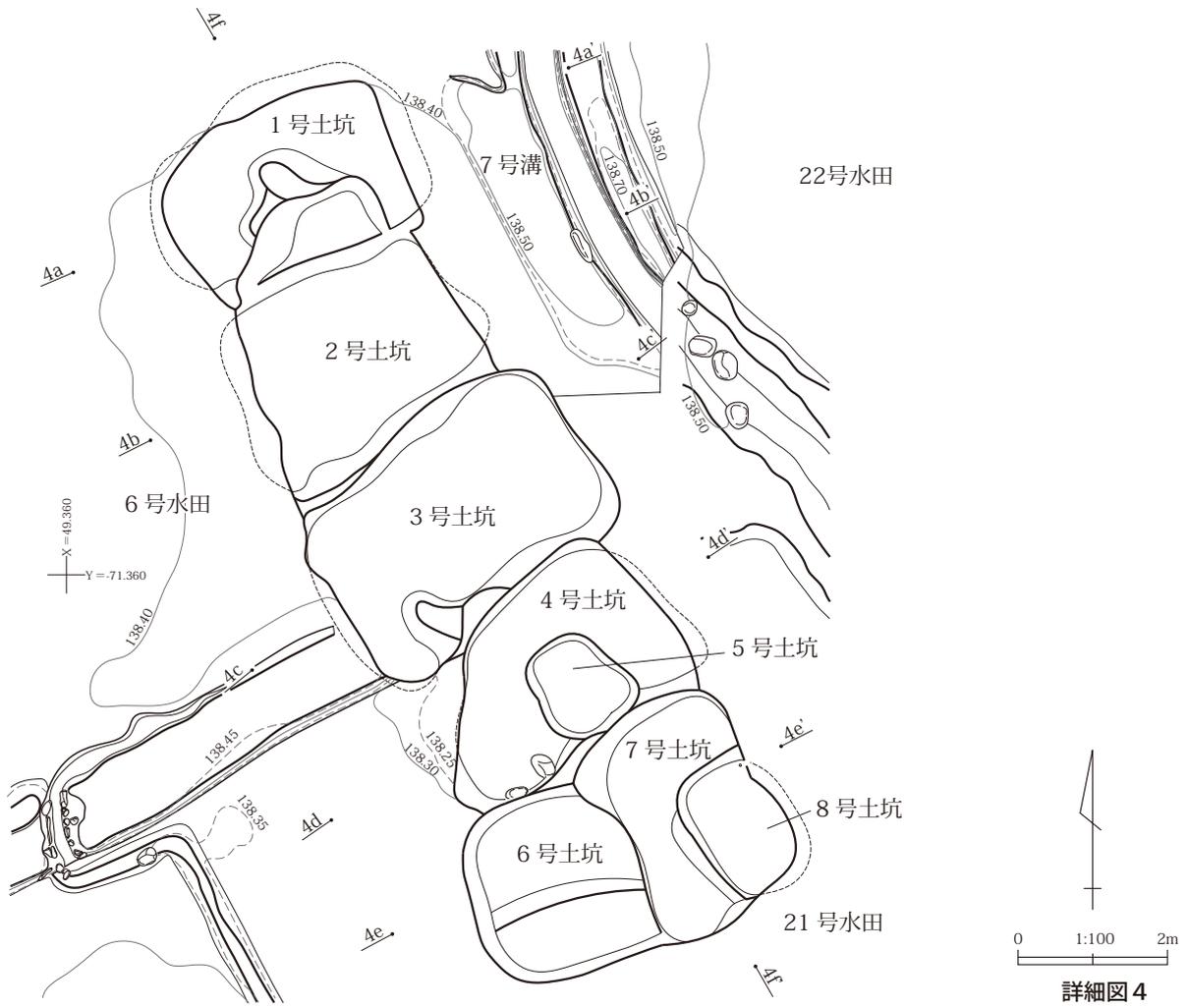
6号土坑は4号土坑の南西を切るが、東部は7号土坑に切られている。東西確認長2.2m、南北長2.5mで、深さは0.67mとやや浅い。

7号土坑は5号土坑を含む4号土坑の南壁東部と6号土坑の東半を切る。東西2.3m、南北3.1mと、他とは異なり、南北に長い長方形の平面形を呈する。

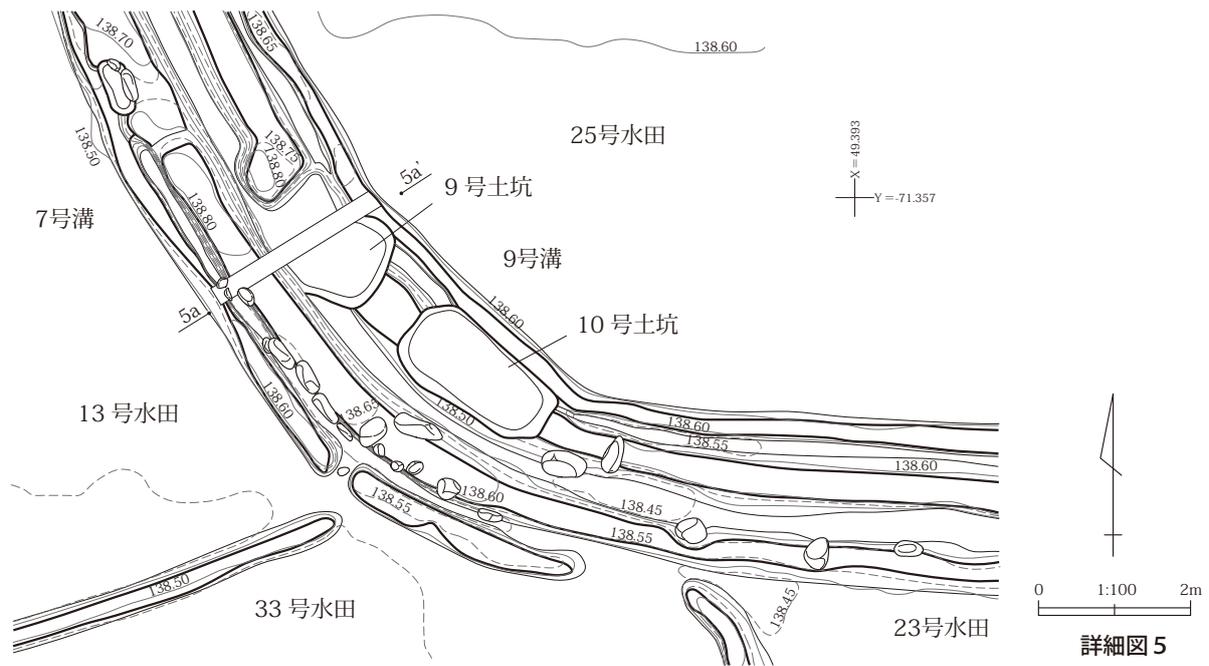
8号土坑は7号土坑の南東隅を切る。東西1.4m、南北2mと、南北に長い、小さな隅丸長方形の平面形を呈する。5号土坑と似た形態のものだろう。

いずれの土坑でも、壁面をえぐり込むように掘削された部分には、土坑具による掘削痕跡が残され、特に6～8号土坑で良く観察されている。角先で刃部幅11cmほどの、比較的長い刃部を持つ鋤状の工具ではないかと思われる。

なお、これらの土坑の覆土については記録を欠くが、調査担当者による泥流に埋まったものとの所見があり、泥流到達以前に掘削されていたものと思われる。この調査区では旧地表上におよそ1.8mの厚さで泥流が堆積しており、泥流による埋没後に深い穴を掘ることは考えがたい。隅丸方形に近い平面形状や壁面がえぐり込まれること、一定方向に順次掘削されることなど、粘土やロームなどの採掘穴と考えられている土坑に類似する。一方、天明泥流災害からの復旧に当たって掘削される土坑は、細長い形状のものが大多数を占め、形状がこれらとは全く異なる。全体の掘削軸はN-30°-Wを示し、直近の21～32号、7～33号水田間の畦方向と近い。こうしたことから見て、これらの土坑が天明泥流到達以前

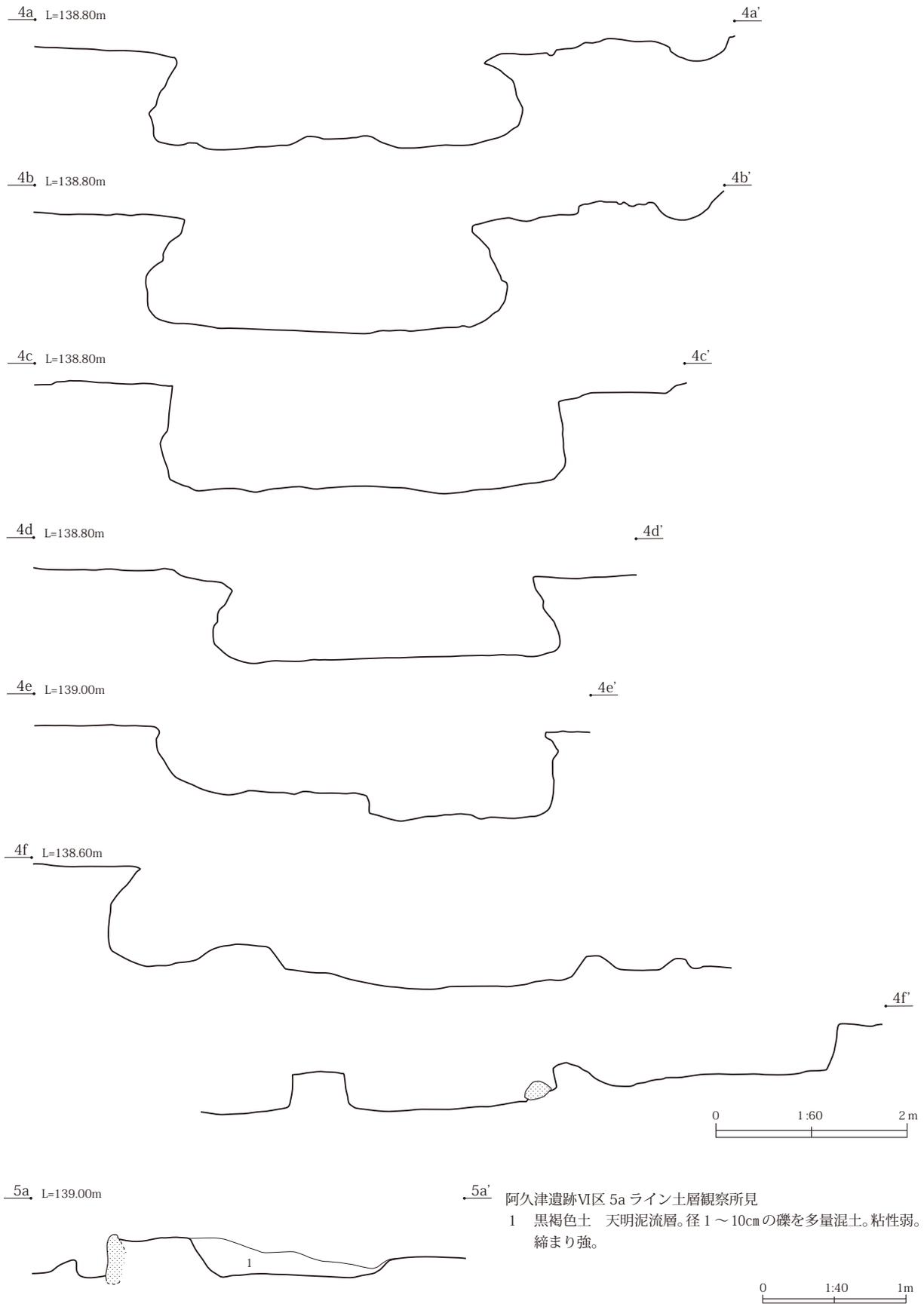


詳細図4



詳細図5

第219図 阿久津遺跡 VI区詳細図4・5



第220図 阿久津遺跡 VI区詳細図 4 高低図・土層断面図

第4章 遺構と遺物

に掘削されたことは確実と思われる。従って、この土坑が掘られている6・21号水田、そして6号水田から給水を受ける32号水田については、水田として機能していなかったものと考えざるを得ない。

9・10号土坑 (第219・220図 PL.97)

X=49.390/Y=-71.360にある。

13号・26号・33号水田交点近くの、8・9号溝内にあつて、この二条の溝とその中間にある畦状部を壊している。

9号土坑はN-65°-Wと北西～南東方向に主軸を持つ隅丸長方形の平面形で、上端部での長軸長1.7m、短軸長1.18m、深さは直近畦の最高点から37cmあり、8号溝底と同じレベルである。

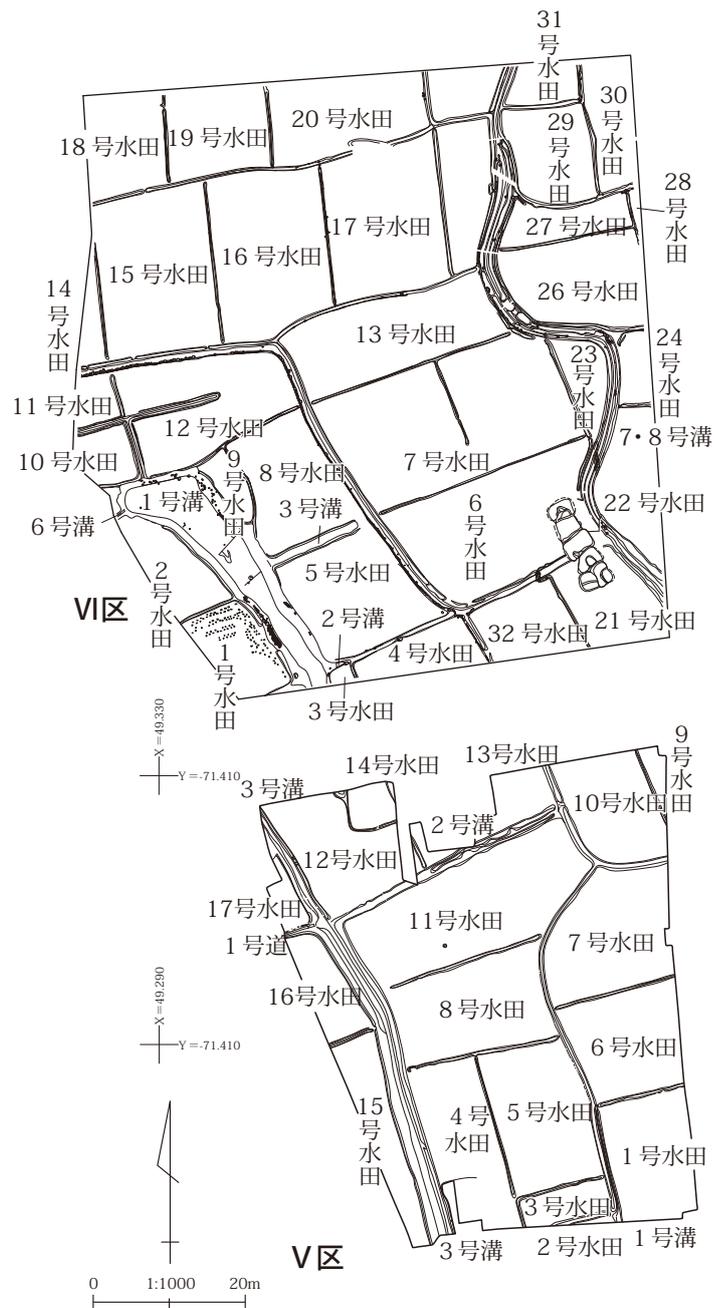
10号土坑も主軸方向はN-50°-Wを示す。北西～南東方向に主軸を持つ隅丸長方形の平面形で、上端部での長軸長2.15m、短軸長1.1m、深さは直近畦の最高点から30cm、8号溝底から5cm低く、9号溝底から18cm低い位置まで掘り込まれている。

9・10号土坑ともに、主軸方向は近隣の畦方向とは一致せず、溝の走行に合わせて掘削されていることが明らかである。とすれば当然、泥流の到達後に掘削されたものとは考えられない。水路の破壊を前提とした土坑掘削であったことになる。9号土坑の土層観察所見によれば、天明泥流の下位に、底面に接して径1～10cmの礫を主体として10YR3/2黒褐色土を含む層が堆積していて、泥流到達前にこの土坑が掘削され、ある程度の土砂が堆積する時間が経過していたことになる。従って8号・9号溝は、少なくともこの土坑位置より下流については、泥流到達前に既に水路としての機能を期待されていないことになる。

先の6・21・32号水田に加えて、7・33・23・24・22号水田などは給水を受けておらず、さらに下流の8号溝から給水されるべき水田も機能していなかった可能性を考えなくてはならない。

第221図に示したとおり、1号溝は南のV区には連続せずに完結する。溝と言うより、細長い池状の

構造となるものと思われる。この周辺の水田は畦が切れていて、田面には湛水せずに1号溝に落水する状態にある。これら1号溝周辺の水田群も加えて、この調査区の水田の多くで、泥流到達時に作付けがなされていない可能性がある。また翻って、作付けされない水田であることが、1号溝や土坑群の意味を示すものかもしれない。

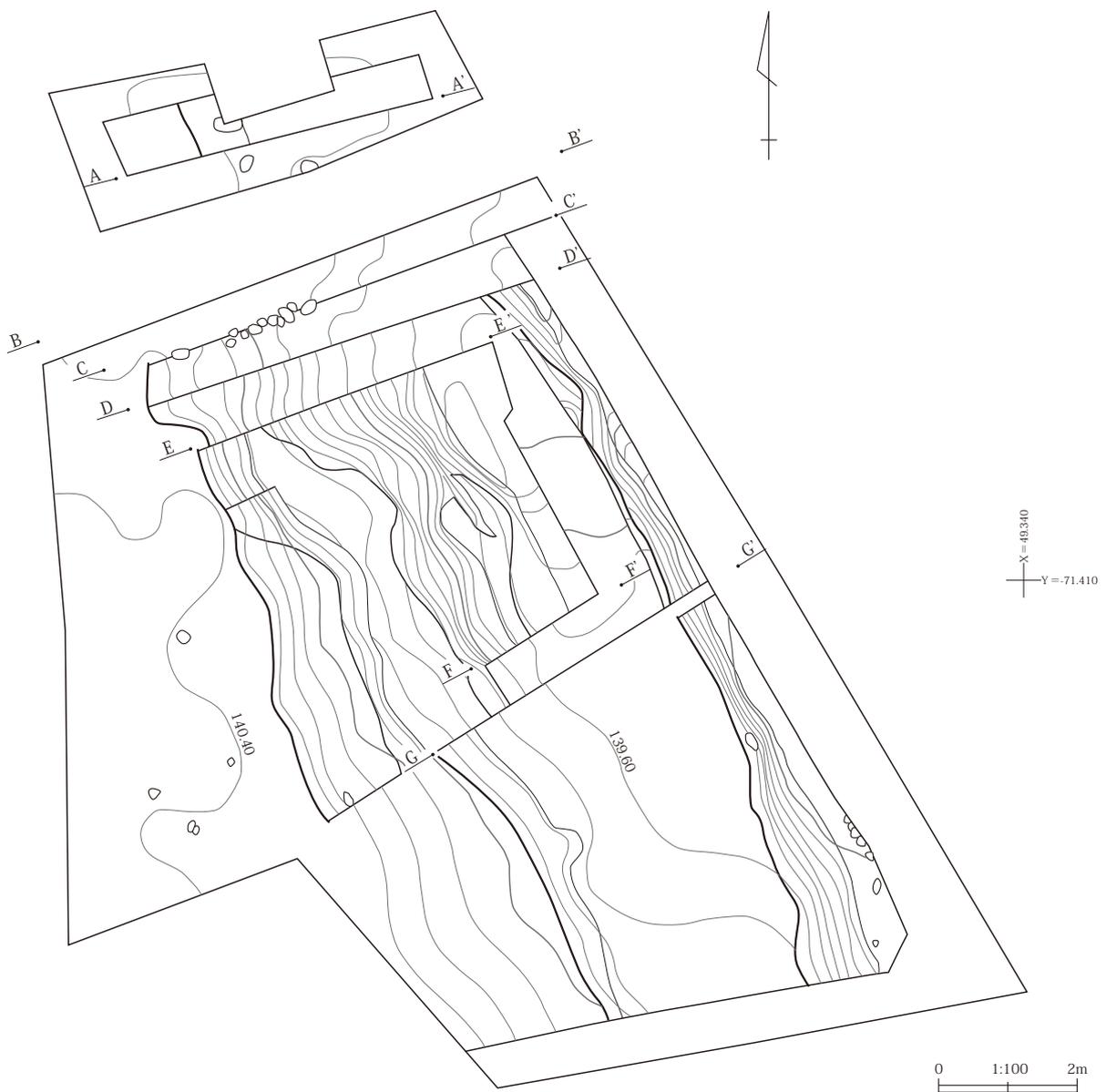


第221図 阿久津遺跡 V区・VI区遺構配置模式図

第3項 万蔵寺廻り遺跡

概要 万蔵寺廻り遺跡では最北部の調査区であるVI区の東半部分のみで天明泥流の堆積が認められ、天明三年当時の旧地表面が確認された。また、天明泥流の到達限界が土層断面Aライン及びCラインで把握され、この地点では標高139.8m付近まで達していることがわかった。しかし、西から東へと比較的急に傾斜する段丘崖の斜面部分のみの調査となったため、泥流下の田・畑などの遺構は認められていない。

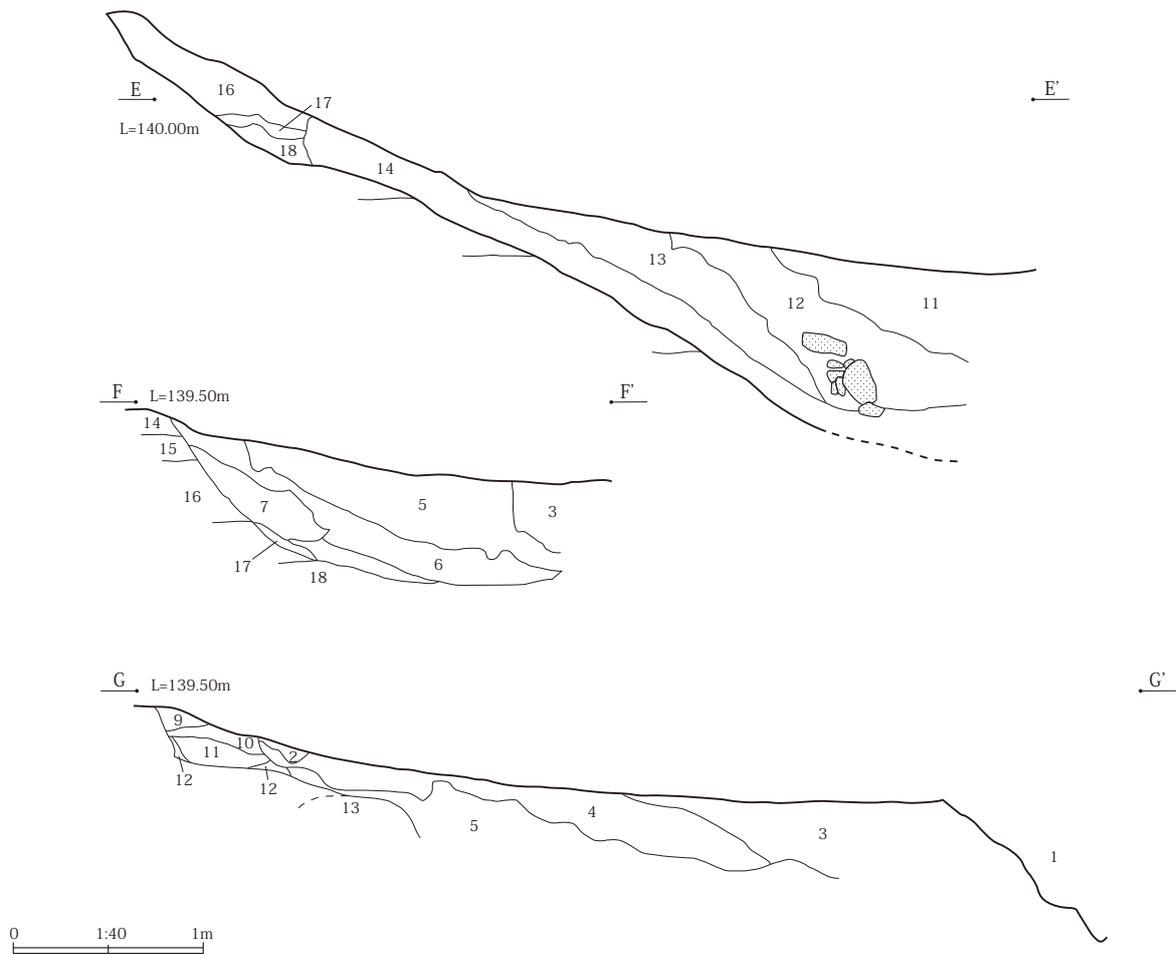
調査区北部では泥流下の地表面より下の面で、斜面を保護するために崖端に沿って設けられた石垣と思われる石列を確認している。平面的には明確な遺構としては認められていないが、土層断面Eラインの12層中では天端石、根石、裏込石など立体的な構造がとらえられている。この周辺からは陶器の片口、焙烙などが出土している。また、寛永通宝・永楽通宝などの古銭も出土している。



第222図 万蔵寺廻り遺跡 VI区全体図



第223図 万蔵寺廻り遺跡 VI区土層断面図1



万蔵寺廻り遺跡Ⅵ区Aライン土層観察所見

- 1 戦後の埋立土。北壁セクション2層に同じ。
- 2 黒ボク土。終戦直後の表土層。北壁セクション4層に同じ。
- 3 褐灰色細砂質土。若干の二ツ岳軽石、川砂、炭化物を含む。北壁セクション6層に同じか。
- 4 褐灰色細砂質土。所々に酸化鉄が沈着した部分がある。少量の二ツ岳軽石を混入する。北壁セクションの7層にほぼ同じ。
- 5 a (川砂を含む。褐灰色細砂質土)とb (a層を混じ、鉄分が沈着する粗い川砂)、c (粗砂を含む川砂)、d (粗砂主体の黒褐色砂質土)の互層。大まかに分層ができる。なお、全体としてbは明褐色のくすんだ感じ、cは灰黄褐色。
- 6 天明泥流。
- 7 褐灰色土。やや砂質。二ツ岳軽石を部分的に多く含んでいる。
- 8 灰黄褐色細砂質土。礫を含み、多少粘性有り。
- 9 黄褐色土と灰黄褐色砂質土ブロックの混土。径1cm以下の二ツ岳軽石を混入する(部分的に多い)。

万蔵寺廻り遺跡Ⅵ区B～Eライン土層観察所見

- 1 2層土と9層土(天明泥流)の混土。径10cmクラスの河床礫、天明泥流の焼礫多く混入。6・8層土ブロックも若干混入する。戦後2層埋立後の大型土坑覆土。
- 2 褐灰色シルト(酸化鉄混じり)・黄色シルト(粘土に近い)・明黄褐色ローム(粗粒)・河床礫・黄灰色川砂・二ツ岳軽石等雑多な土砂の混土。ガラス片なども見られる。戦後の埋立。
- 3 小礫・細礫(河床礫)及び川砂に灰黄褐色砂質土が混ざるバラ層。若干の二ツ岳軽石を混入する。客土。
- 4 黒褐色土と灰黄褐色土の混土。戦争直後以前の表土。黒ボク土で、粘性に欠ける。若干の河床礫、炭化物、にぶい黄色シルト質細砂質壤土のブロックを混入する。近世後期から戦後直ぐにかけての土層。
- 5 黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土ブロックの混土。土坑覆土かと思われる。河床礫、二ツ岳軽石、川砂を多く含む。近世後期から戦後直ぐにかけての土層。
- 6 灰黄褐色細砂質土 若干の二ツ岳軽石と5層土ブロックが混入する。近世後期から戦後直ぐにかけての土層。
- 7 灰黄褐色細砂質土 若干の二ツ岳軽石と6・8層土小ブロックが混入する。酸化鉄がわずかに混入する。(植物の周囲に沈着したものか)。近世後期から戦後直ぐにかけての土層。

第224図 万蔵寺廻り遺跡 Ⅵ区土層断面図2

第4章 遺構と遺物

- 8 褐灰色シルト質砂土 ブロック状に植物痕かと思われる酸化鉄が沈着している。二ツ岳軽石が少量混入する。近世後期から戦後直ぐにかけての土層。
- 9 褐灰色砂質土 粘性認められる。横断面には黒色土の火山噴出礫を含む。西端付近では10層土を巻き込み、小粒の二ツ岳軽石も含む。天明泥流層。
- 10 灰黄褐色砂質土 細砂を多量に含み、二ツ岳軽石を多く含む。かなり砂質。少量の河床礫も含む。泥流前段階の表土。
- 11 灰褐色砂質土 細砂を多く含むが、粘性有り。二ツ岳軽石と小粒の河床礫が混入する。二ツ岳軽石は10層に比して小粒。
- 12 黒褐色細砂質土 粘性有り。大型の河床礫を部分的にやや多く混入する。二ツ岳軽石も若干含む。黒ボク土。中世段階かと思われる。
- 13 褐色砂質土 多少粘性が有る。褐灰色砂質土の小ブロックと小粒の二ツ岳軽石と若干の河床礫を混入する。中世?以前の堆積層土。
- 14 灰褐色砂質土 二ツ岳軽石を含み、褐灰色砂質土の小ブロックをやや多く混入する。中世?以前の堆積層土。
- 15 にぶい黄褐色土 やや砂質。小粒の二ツ岳軽石を含み、4層際には河床礫を混入する。地山。
- 16 砂粒を多く含む浅黄色砂質土と、薄い層状の酸化鉄沈着層を含むオリーブ灰色シルト質細砂土及びローリングを受けた小粒の二ツ岳軽石が多く混入する褐灰色砂質土ブロックの混土。地山。
- 17 褐灰色砂質土と、酸化鉄が薄層状に入る灰白色シルト質細砂土ブロックの混土。ローリングを受けた小粒の二ツ岳軽石が多く入った褐灰色砂質土ブロックを含む。地山。
- 18 酸化鉄が層状に入る灰白色細砂質シルト。地山。
- 9 灰白色シルト 酸化鉄が葉脈状に入り込む。
- 10 灰褐色細砂質土 灰色シルト。小ブロックを含む。
- 11 川砂と灰色シルト。小ブロックの混土。
- 12 褐灰色砂質土 黄灰色シルトの小ブロックを含む。
- 13 灰色シルト 所々に酸化鉄の沈着する部分がある。
- 14 砂質だがやや粘性のある褐灰色土と15層土ブロックの混土。二ツ岳軽石と川砂の小ブロックが混入する。
- 15 にぶい黄色細砂質シルト 粒径の小さい二ツ岳軽石が混入する。
- 16 にぶい黄色細シルト質細砂土 所々に酸化鉄が陥入する灰白色シルトの小ブロックと小粒の二ツ岳軽石が混入する。
- 17 16層土に風化・酸化して黄褐色に変色した部分のある浅黄色シルトが入る混土。小粒の二ツ岳軽石が混入する。
- 18 灰黄褐色砂質土と、径5mm程の球状の黄灰色土。粒を灰白色土が包み込むようなシルトブロックの混土。小粒の二ツ岳軽石が混入する。

万蔵寺廻り遺跡Ⅵ区F・Gライン土層観察所見

- 1 天明泥流。
- 2 褐色砂質土 川砂、二ツ岳軽石、風化・酸化した橙色軽石を混入する。
- 3 灰黄褐色砂質土 ローリングをうけた二ツ岳軽石、若干のオリーブ黄色シルトの小ブロック及び多量の川砂を混入する。
- 4 黄褐色砂質土 細砂を多量に含む。ローリングをうけた二ツ岳軽石を多く混入する。
- 5 褐灰色砂質土 細砂を混入する。所々に酸化鉄沈着のオリーブ黄色シルト。小ブロックを混入する部分がある。ローリングをうけた二ツ岳軽石も含む。
- 6 暗黄褐色細砂質土 ローリングをうけた二ツ岳軽石と細砂を含み、酸化鉄の沈着が見られるにぶい黄色シルト。小ブロックを若干量混入する。
- 7 灰黄褐色砂質土 川砂。細砂。ローリングをうけた二ツ岳軽石、外面に酸化鉄が沈着する浅黄色シルトの小ブロックを混入する。
- 8 褐灰色砂質土と川砂の混土。黒褐色砂質土。ブロックとローリングをうけた二ツ岳軽石を混入する。

第4項 桑原田遺跡

概要 桑原田遺跡はⅠ区～Ⅴ区に分けて調査を実施し、すべての区で近世の水田・畑遺構を検出した。桑原田遺跡の地形は北から南へ緩やかに傾斜し、また西が高くなっている。天狗岩用水がⅣ区とⅤ区の間を通り、Ⅰ区からⅢ区の西側を流れている。

Ⅰ区は東寄りに南北方向に水路が蛇行し、水路の東西に比較的平坦な水田がつくられている。この水路は地形変換点に設けられたものと考えられ、西側水田面と東側では、65cmほど東側が低くなっている。

Ⅱ区とⅢ区では、西が高く、段を設けて東へ向かって低くなり、棚田状の水田を形成している。Ⅳ区では北部に水田跡を検出した以外に畑跡を検出した。Ⅴ区では西が一段高く、棚田状の水田が形成されている。

水田及び畑上に堆積した泥流の厚さは約1.5～2mである。水田の耕作土は、褐灰色～灰黄褐色の砂質性シルト質土である。ややしまっているが、粘性はあまり強くない。少量の白色軽石粒が混入し、酸化鉄を含んでいる。水田の畦は、水田の土を盛り上げてつくられていることから、水田と同質の土壌であるが、水田の耕作土よりしまりがある。畑の耕作土は水田耕作土に近似しているが、水田耕作土より砂質の強い褐灰色のシルト質土で、ややしまっている。白色軽石粒が僅かに混入し、全体に鉄分の凝集が見られる。

Ⅰ区

検出された遺構は、水田28枚、溝4条であり、残存状況は概ね良好である。水田番号は、基本的に北から付しているが、当区は2次の調査を行っているため、一部南から北に向かって番号を付した部分がある。

水田の形状

地形は全体的に北から南へ傾斜している。調査区の北東部の1号水田と南西部の13号水田の標高差は約1mである。水田は畦によって分けられ、田面が整えられている。東西方向に規模の大きい畦がつけられ、段差を設けて徐々に南へ低くなっている。

さらに東西の畦で区切った中を南北の畦で区切り、水田をつくっている。ほぼ長方形の水田が形成されている。調査範囲内では主要用水路と思われる溝が見られず、南部の畦沿いに西側の境界から出て東へ延びる1号溝の一部が見られるのみである。

水田の区画

[1・2・6号水田]

(第225～228・231・232図 PL.104・105・107)

調査区の最北部にある。1・2・6号水田はほとんど同じ標高である。南は幅60～90cm、高さ34～41cmの畦で区切られ、畦の東側で幅がやや広い。畦が崩れないように南側の壁面に川原石を貼り付けて補強している。特に中央から西で多く補強している。

1号水田は西の2号水田より僅かに高い。両水田は幅20～30cm、高さ6～8cmの畦で区切られ、この南端が幅10cmほど途切れて水口となり、2号水田へ水が流れる。

2号水田は北東部がやや高い。2号水田と西の6号水田は幅25～45cm、高さ10～11cmの畦で区切られ、この南端が幅10cmほど途切れて水口となり、6号水田へ水が流れる。

6号水田はごく一部を確認したのみで詳細はわからない。

[3・4・5号水田]

(第225～228図 PL.104・105・107)

調査区の北部にあり、1・2・6号水田の南にある。3・4・5号水田は全体に西へ傾斜している。3・4・5号水田の南は幅60～95cm、高さ29～39cmの畦で区切られる。畦が崩れないように、畦の中央から西の南側壁面に川原石を貼り付けて補強している。また畦頂部で境木の痕と思われる穴が部分的に見られる。

3号水田は北の1号水田より23～24cm低く、西の4号水田より2～4cm高い。両水田は幅25～60cm、高さ5～8cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅20cm、南端は幅15cmほどの水口で、いずれも4号水田へ水が流れる。

4号水田は北東がやや高く、南西へ向かって低くなっている。北の1号水田より26cm低く、2号水田より25～26cm低い。西の5号水田よりやや高く、両

第4章 遺構と遺物

水田は幅25～50cm、高さ3～10cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅20cm、南端は幅15cmほどの水口で、それぞれ5号水田へ水が流れる。

5号水田は北がやや高く、南へ傾斜している。北の2号水田より25～28cm低い。

[7・8号水田] (第225・227図 PL.104・105)

調査区の中央部にあり、3・4・5号水田の南にある。7・8号水田の南は幅40～60cm、高さ17～24cmの畦で区切られる。畦が崩れないように南側壁面に川原石を貼り付けて補強している。

7号水田は北の3号水田より24～25cm低く、4号水田より20～24cm低い。西の8号水田よりやや高く、両水田は幅25～35cm、高さ2～5cmほどの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅20cm、南端は幅15cmほどの水口となり、それぞれ8号水田へ水が流れる。

8号水田はほとんど平坦である。北の4号水田より18～26cm、5号水田より18～24cm低い。

[9・10・11号水田] (第225・227・229図 PL.105・106)

調査区の南部にあり、7・8号水田の南にある。9・10・11号水田は全体に西へ傾斜している。南は幅90～110cm、高さ43～59cmの畦で区切られ、I区の中で畦の規模が最も大きい。畦が崩れないように南側壁面に川原石を貼り付けて補強している。この畦の10号水田の南東部分が幅90cmほど途切れて水口となり、10号水田から南の12号水田へ落水する。

9号水田は北東部と南部でやや高い。北の7号水田より4～7cm低い。西の10号水田より1～2cm高く、両水田は幅30～50cm、高さ4～9cmの畦で区切られ、この北端と南端がいずれも幅15cmほど途切れて水口となり、10号水田へ水が流れる。

10号水田は東部がやや高い。7号水田より9cmほど低く、8号水田より8～10cm低い。11号水田とほとんど同じ標高で、両水田は幅20～40cm、高さ5～7cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅20cm、南端は幅10cmほどの水口となり、いずれも11号水田へ水が流れる。

11号水田はほとんど平坦な水田である。8号水田より8～9cm低い。

[12・13・14号水田] (第225～230図 PL.104～107・109)

調査区の最南部にあり、9・10・11号水田の南にある。東から西へ傾斜している。

14号水田はごく一部を確認した。西の12号水田より25～27cm高く、段差が生じている。畦の高まりは見られない。北の9号水田より11cmほど低い。

12号水田はほとんど平坦である。北の9号水田より37～39cm低く、10号水田より34～36cm低い。西の13号水田より3～5cm高く、両水田は幅15～50cm、高さ7～10cmの畦で区切られている。

13号水田は東がやや高い。北の10号水田より39～41cm低く、11号水田より39～43cm低い。

12・13・14号水田の北は、畦に沿って、水田面より15cmほど低い位置から石列が検出された。石列は、畦沿いを走る1号溝の東端から東へ約26m続く。1号溝の東端から約6.5mまでは、畦の壁面を補強している石と同様の平たく大きい石が水平に並べられ、隙間に小さい石がはめ込まれている。大きい石が終わると、石列は畦際から30～50cmほど離れ、不定形で小さめの石が水平に並べられ、その両脇にさらに小さい石がはめ込まれている。また、1号溝の南側の畦に沿って石列が約13.5m検出された。ここで使用されている石も不定形で、小さめの石である。これらの石列は畦の芯材としての可能性を考察することができる。畦の規模が大きいことから、畦の基盤に石を敷くことで、崩れるのを防止したと考えられる。

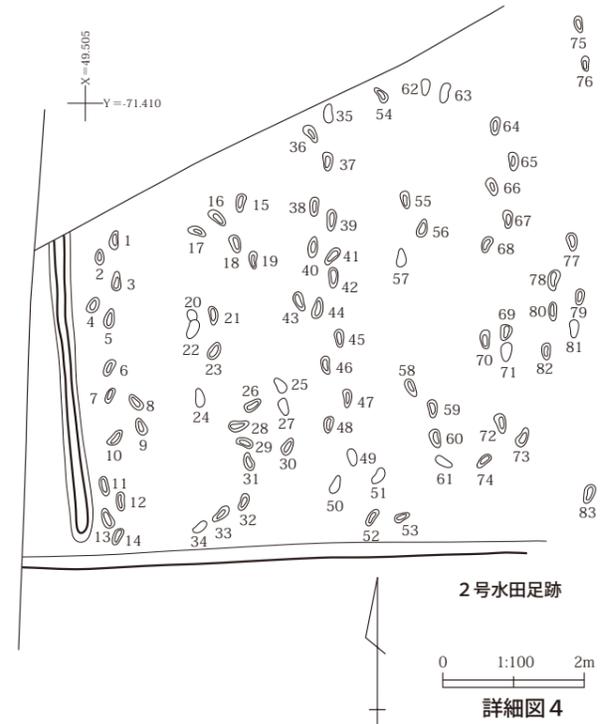
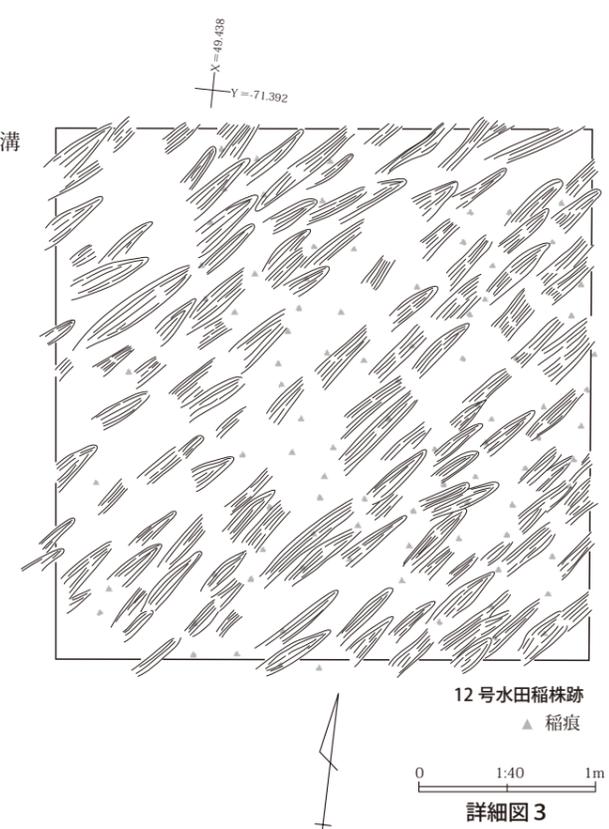
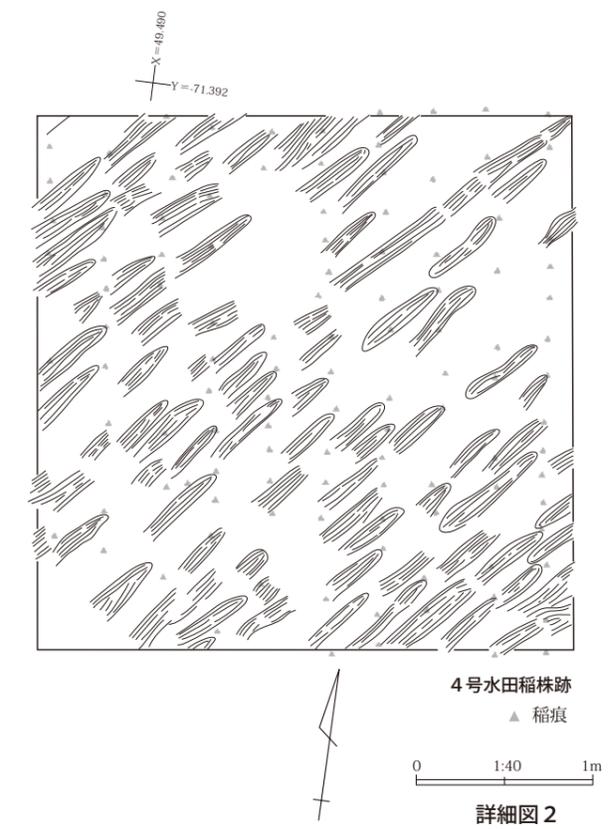
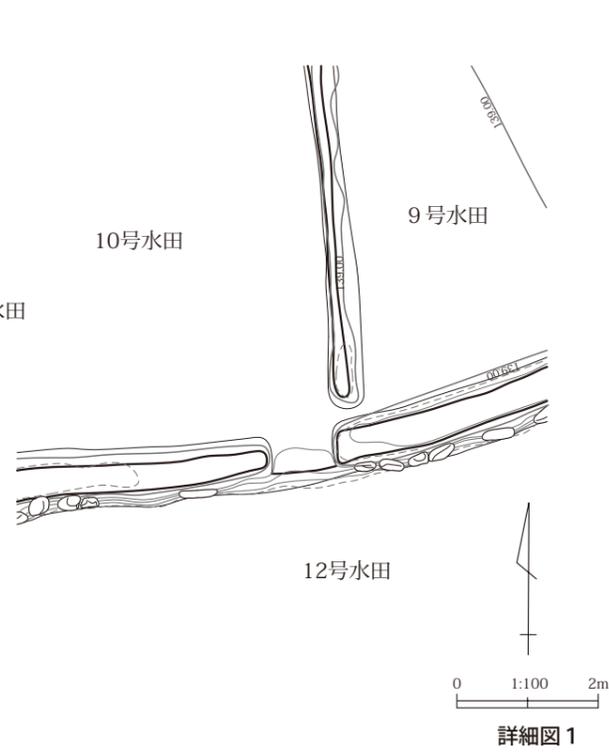
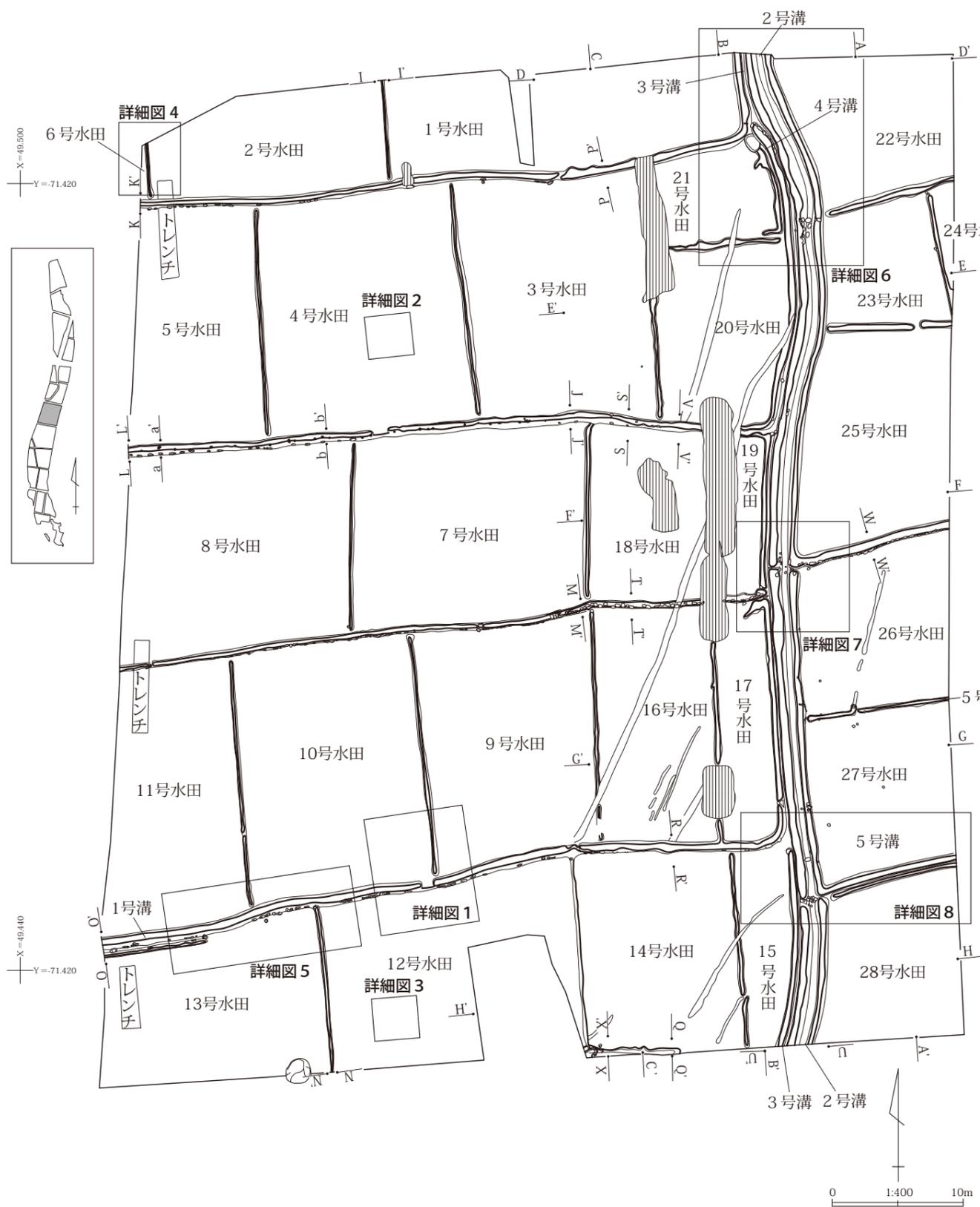
[14・15号水田] (第225・226・228・233図 PL.107・109)

調査区の南端で12号水田に隣接し、東側に主要水路の2号溝がある。14号水田は、北東隅に水口を持ち、15号水田を介して水路から水を引き入れている。西側と南側には低い畦が確認されている。15号水田は、北東隅の水口から水を取り込み、北西隅の水口から14号水田へと水を流している。南側の幅が約2.5mと狭く、水量調節のための役割をも担った水田の可能性はある。

[16・17・18・19号水田]

(第225・226・228・233図 PL.107・109・110)

7・9号水田と2号溝との間に検出された。16・17号水田は東西に並んだ短冊状の水田で、16号水田の水口は北西隅に検出したが、北東隅の取り入れ口は

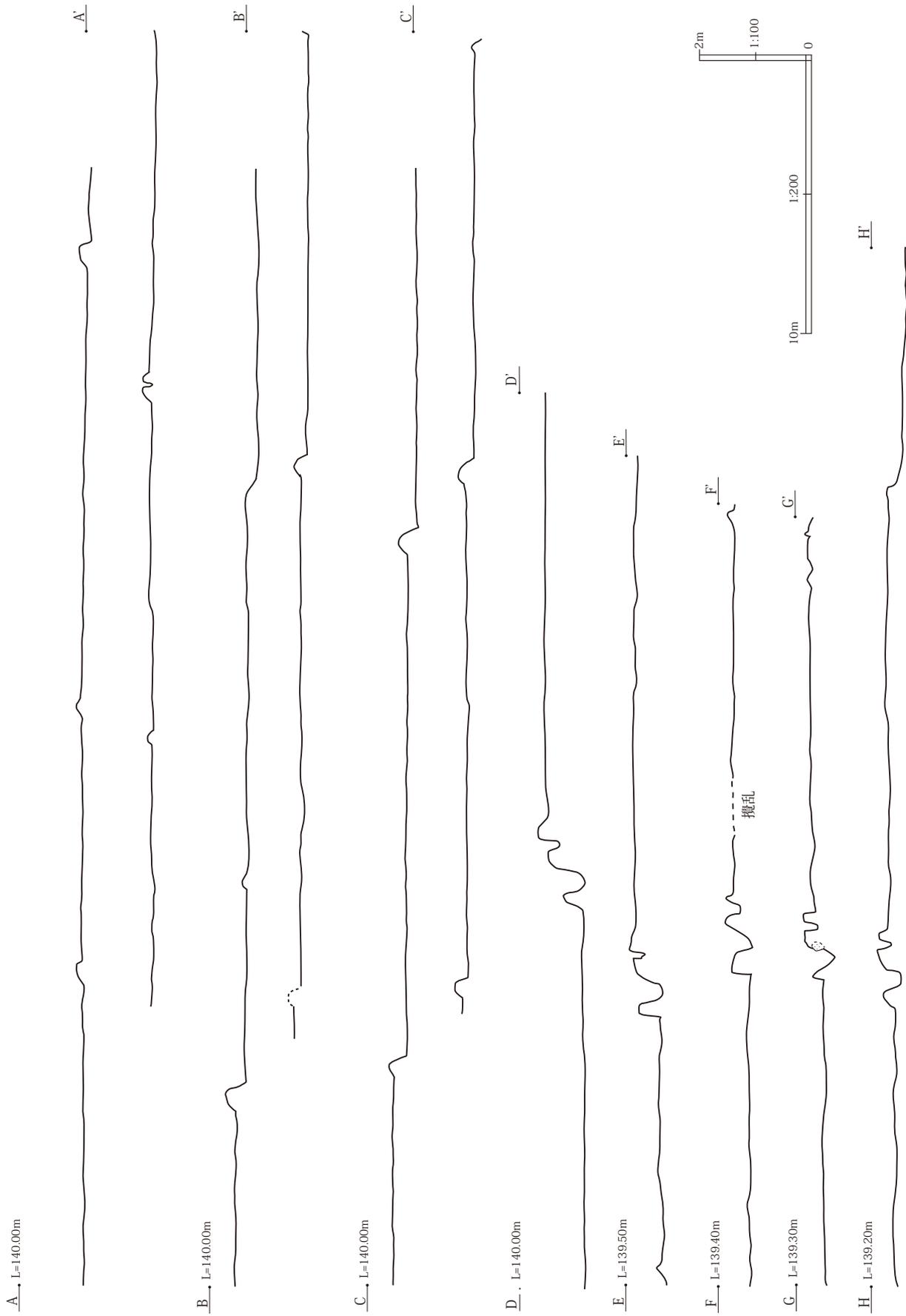


第225図 桑原田遺跡 I区全体図・詳細図1～4

第4表 桑原田遺跡I区2号水田足跡計測表

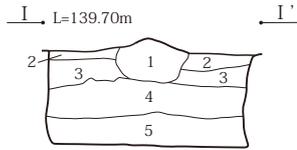
番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	右	26.0	14.0	2.0	
2	行跡	右	23.0	12.0	2.0	
3	行跡	左	27.0	12.0	2.0	2-3間 30
4	単独	左	25.0	15.0	2.5	
5	単独	右	28.0	15.0	2.0	
6	行跡	左	24.0	12.0	3.0	
7	行跡	右	23.0	10.0	2.5	6-7間 38
8	単独	右	25.0	14.0	3.0	
9	単独	右	25.0	15.0	4.0	
10	単独	左	27.0	12.0	2.5	
11	単独	左	27.0	12.0	4.0	
12	単独	左	27.0	11.0	2.5	
13	単独	右	29.0	16.0	3.0	
14	単独	左	25.0	12.0	1.5	
15	単独	左	26.0	15.0	2.5	
16	単独	右	28.0	13.0	2.5	
17	単独	右	25.0	12.0	3.5	
18	単独	右	26.0	15.0	2.0	
19	単独	左	25.0	12.0	2.5	
20	単独	右	—	12.0	—	
21	単独	右	26.0	12.0	1.5	
22	単独	右	29.0	14.0	—	
23	単独	左	27.0	15.0	2.5	
24	単独	左	26.0	13.0	0.5	
25	単独	左	23.0	14.0	1.5	
26	単独	左	26.0	13.0	1.0	
27	単独	左	25.0	14.0	1.0	
28	単独	左	27.0	15.0	3.0	
29	行跡	左	25.0	12.0	1.5	
30	行跡	右	25.0	14.0	2.5	29-30間 19
31	単独	右	26.0	13.0	1.5	
32	単独	右	24.0	12.0	2.0	
33	単独	右	27.0	12.0	3.0	
34	単独	右	23.0	11.0	1.5	
35	単独	右	26.0	12.0	1.5	
36	単独	右	27.0	14.0	2.5	
37	単独	右	25.0	14.0	3.5	
38	行跡	左	26.0	13.0	2.5	
39	行跡	右	29.0	14.0	2.5	38-39間 21
40	単独	右	29.0	12.5	2.0	
41	単独	左	28.0	14.0	2.5	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
42	単独	右	28.0	15.0	2.0	
43	単独	左	27.0	15.0	1.0	
44	単独	左	29.0	15.0	1.5	
45	行跡	右	25.0	13.0	2.0	
46	行跡	左	26.0	13.0	3.5	45-46間 32
47	行跡	右	24.0	12.0	2.0	46-47間 50
48	行跡	左	24.0	13.0	2.0	47-48間 31
49	単独	右	24.0	12.0	2.5	
50	単独	左	26.0	12.0	2.0	
51	単独	右	26.0	13.0	—	
52	単独	左	27.0	11.0	3.0	
53	単独	右	24.0	11.0	2.5	
54	単独	左	25.0	13.5	2.0	
55	単独	左	25.0	13.0	2.5	
56	単独	左	26.0	14.0	2.5	
57	単独	左	26.0	13.0	2.0	
58	行跡	左	27.0	13.5	3.0	
59	行跡	右	25.0	13.5	2.0	58-59間 38
60	単独	左	27.0	16.0	2.5	
61	単独	左	26.0	12.0	2.0	
62	単独	右	23.0	12.0	1.5	
63	単独	左	29.0	12.0	1.5	
64	行跡	左	25.0	14.0	4.0	
65	行跡	右	26.0	13.0	2.5	64-65間 48
66	行跡	左	26.0	16.5	4.5	65-66間 36
67	行跡	右	25.0	13.5	2.5	66-67間 47
68	行跡	左	24.0	13.0	2.5	67-68間 32
69	行跡	右	23.0	16.5	1.0	
70	行跡	左	27.0	16.0	2.0	69-70間 19
71	単独	左	25.0	16.0	1.5	
72	単独	右	27.0	14.0	3.5	
73	単独	左	28.0	14.0	3.0	
74	単独	左	24.0	11.0	1.5	
75	単独	左	23.5	12.5	3.0	
76	単独	左	22.0	11.0	3.5	
77	単独	右	24.0	15.0	3.0	
78	単独	左	29.0	15.5	1.5	
79	行跡	右	23.5	12.0	3.5	
80	行跡	左	26.0	11.5	2.0	
81	行跡	右	25.0	12.0	2.5	
82	行跡	左	24.0	12.0	3.0	
83	単独	右	28.0	14.0	2.0	

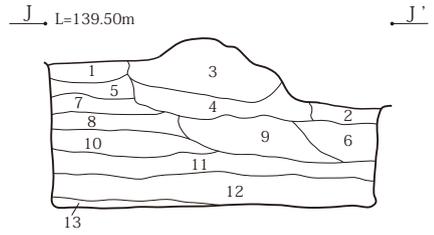


第226図 桑原田遺跡 I区高低図1

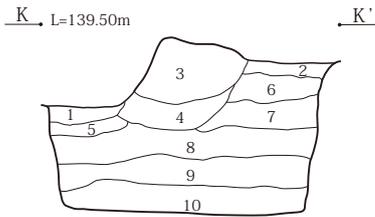
1・2号水田 畦



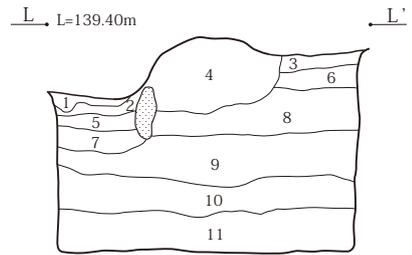
3・7号水田 畦



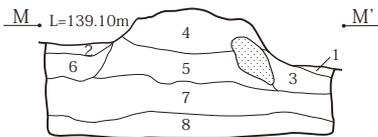
5・6号水田



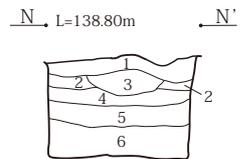
5・8号水田 畦



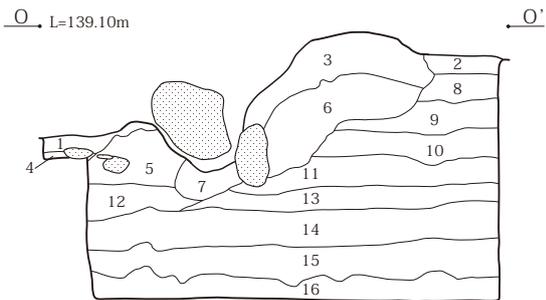
7・9号水田



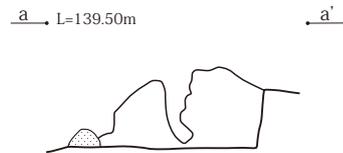
12・13号水田



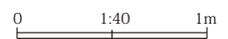
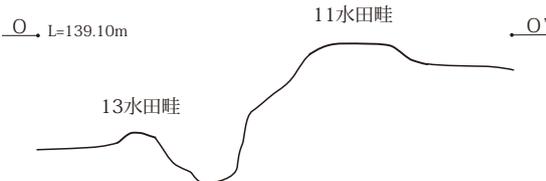
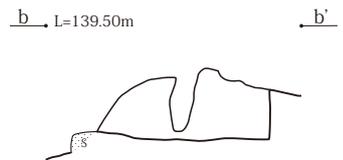
11・13号水田 畦



境木 No.1

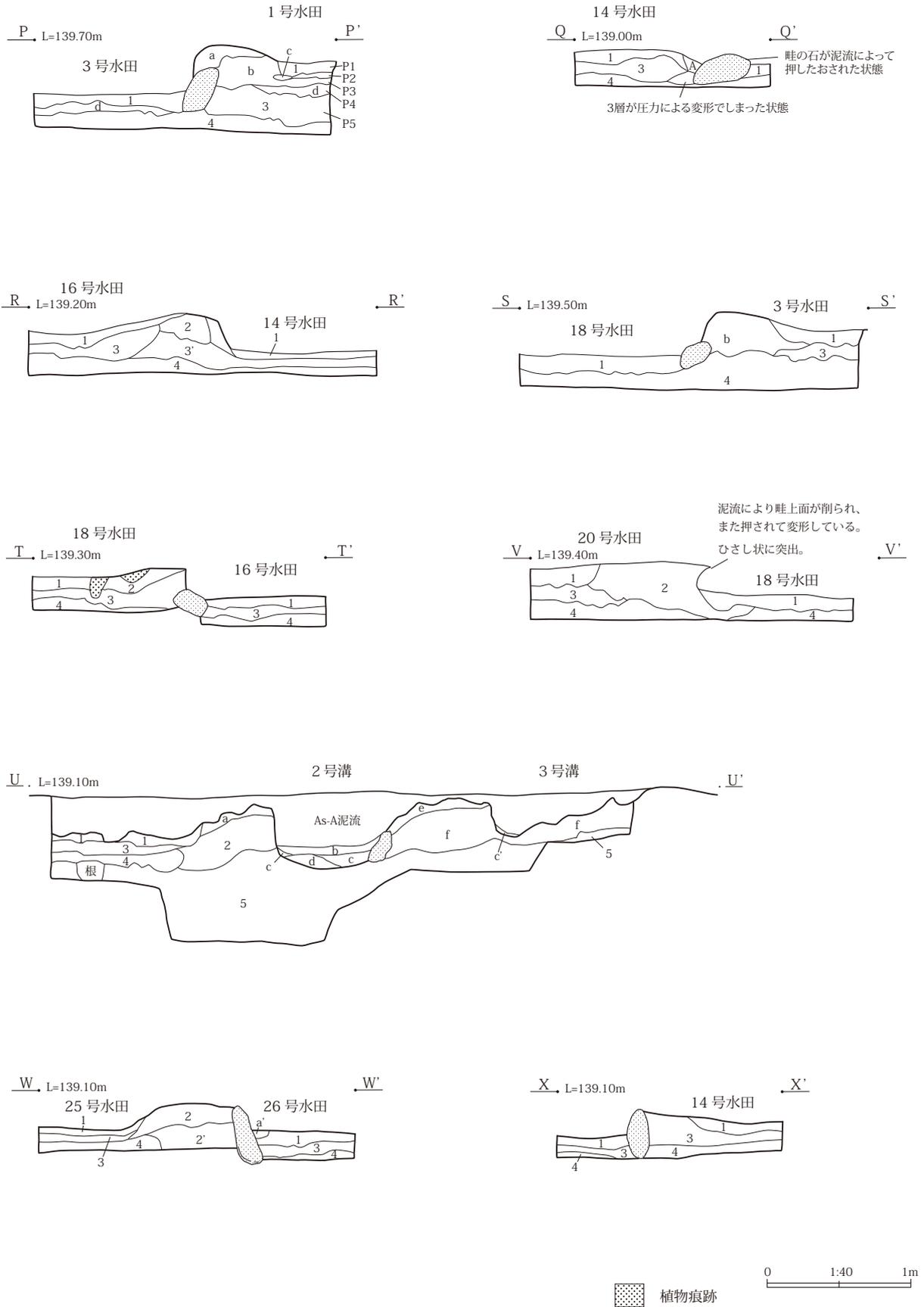


境木 No.2



第227図 桑原田遺跡 I区土層断面図1

第4章 遺構と遺物



第228図 桑原田遺跡 I区土層断面図2

第2節 近世の遺構と遺物

桑原田遺跡Ⅰ区3・7号水田畦Jライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 3 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが多く入る。縮まり中。粘性弱。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。黄褐色土粒子が少量入る。縮まり中。粘性弱。
- 5 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 6 灰黄褐色土 シルト質土。径3mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 7 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石がやや多く入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。全体が黄褐色化している。縮まりやや弱。粘性弱。
- 8 灰黄褐色土 シルト質土。径3mm以下の白色軽石が入る。赤褐色紐状ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 9 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 10 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 11 暗褐色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が入る。縮まり中。粘性中。
- 12 暗褐色土 シルト質土。径3mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が入る。縮まり中。粘性やや強。
- 13 暗褐色土 砂質土。黄褐色粘質ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。

桑原田遺跡Ⅰ区1・2号水田畦Iライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石をやや多く含む。黄褐色土粒子を極少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 シルト質土。径3mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子を極少量含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 3 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径20mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子を極少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 4 灰黄褐色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり弱。粘性中。
- 5 灰黄褐色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石が少量入る。上層よりやや少ない。黄褐色土粒子を極少量含む。赤褐色砂質土ブロックが入る。上層より黄色味が弱い。縮まり弱。粘性中。

桑原田遺跡Ⅰ区12・13号水田畦Nライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石を少量含む。黄褐色砂質土ブロックを少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が極少量入る。縮まり中。粘性やや弱。上層より暗い。
- 3 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が極少量入る。赤褐色土ブロックが入る。縮まり弱。粘性中。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径3mm以下の白色軽石及び黄褐色土粒子が入る。縮まり中。粘性弱。
- 5 灰黄褐色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色紐状ブロックが入る。縮まり中。粘性中。
- 6 灰黄褐色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。赤褐色紐状ブロックが入る。上層より黄色味が弱い。縮まり中。粘性やや弱。

桑原田遺跡Ⅰ区5・8号水田畦Lライン土層観察所見

- 1 天明泥流
- 2 褐灰色土 シルト質土。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり

中。粘性やや弱。

- 3 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色の砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 5 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 6 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土が入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 7 灰黄褐色土 シルト質土。径3mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子及び赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 8 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。全体が黄褐色化している。縮まり中。粘性弱。
- 9 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径3mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が入る。全体が黄褐色化している。縮まりやや弱。粘性中。
- 10 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径20mm以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。縮まり弱。粘性やや弱。
- 11 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径30mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が入る。全体が黄褐色化している。縮まり中。粘性中。

桑原田遺跡Ⅰ区5・6号水田畦Kライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 シルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色紐状ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 3 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石が入る。赤褐色土ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 5 褐灰色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。縮まり弱。粘性やや弱。
- 6 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径20mm以下の白色軽石が多く入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まりやや弱。粘性弱。
- 7 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が少量入る。縮まり中。粘性中。
- 8 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 9 褐灰色土 シルト質土。径30mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が入る。縮まり弱。粘性中。
- 10 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。全体が黄褐色化している。径30mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が入る。縮まりやや弱。粘性中。

桑原田遺跡Ⅰ区11・13号水田畦Oライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 2 褐灰色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 3 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径3mm以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。縮まり中。粘性弱。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが少量入る。縮まり中。粘性やや弱。
- 5 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックがやや多く入る。縮まりやや弱。粘性やや弱。

第4章 遺構と遺物

- 6 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックがやや多く入る。炭化物粒子が少量入る。締まり中。粘性やや弱。
- 7 褐灰色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが少量入る。締まり中。粘性やや弱。
- 8 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径20mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まりやや弱。粘性弱。
- 9 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックがやや多く入る。黄褐色粒子が少量入る。締まり中。粘性やや弱。
- 10 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径15mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが少量入る。黄褐色土粒子が少量入る。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 11 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。全体が黄褐色化している。径20mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色紐状ブロックが入る。黄褐色粒子が入る。締まりやや弱。
- 12 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。赤褐色の紐状ブロックが入る。締まりやや弱。粘性弱。
- 13 褐灰色土 シルト質土。径5mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色の紐状ブロックが入る。黄褐色土粒子が少量入る。締まり中。粘性やや弱。
- 14 黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。赤褐色の紐状ブロックが入る。黄褐色粒子が入る。締まり中。粘性中。
- 15 黄褐色土 シルト質土。上層より黄色味が強い。径20mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色粘質土ブロックが入る。締まり中。粘性やや強。
- 16 暗褐色土 粕川テフラと思われる。

桑原田遺跡I区7・9号水田畦Mライン土層観察所見

- 1 天明泥流
- 2 褐灰色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性弱。
- 3 褐灰色土 シルト質土。径2mm以下の白色軽石が入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性やや弱。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が多く入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まりやや弱。粘性弱。
- 5 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性やや弱。
- 6 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径3mm以下の白色軽石が入る。黄褐色土粒子が入る。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 7 灰黄褐色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色紐状ブロックが入る。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性中。
- 8 灰黄褐色土 シルト質土。径5mm以下の白色軽石が極少量入る。黄褐色土粒子が多く入る。黄褐色土ブロックが入る。締まり中。粘性やや強。

桑原田遺跡I区12号水田北側トレンチ5bライン土層観察所見

- 1 褐灰色土 シルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。第4層との境が黄褐色化している(鉄分が沈殿か?)黄褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性弱。
- 2 9号水田の第1層に同じ。
- 3 11・13号水田1号溝の第3層に同じ。
- 4 褐灰色土 砂質に近いシルト質。径25mm以下の白色軽石が入る。黄褐色の細粒子の砂が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性弱。(石の上が黄褐色化している)
- 5 11・13号水田1号溝の第5層に同じ。
- 6 9号水田の第5層に同じ。

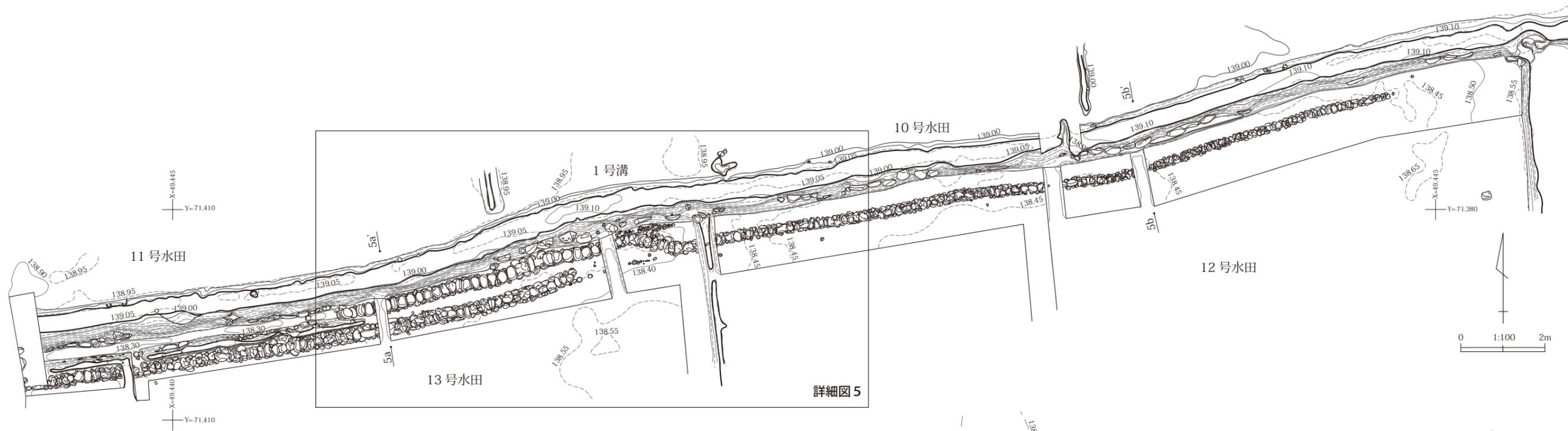
- 7 褐灰色土 シルト質土。径5mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。黄褐色土粒子が少量入る。締まり中。粘性弱。
- 8 褐灰色土 シルト質土。全体が黄褐色化している。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性中。(石の直下は締まり弱)
- 9 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石が入る。黄褐色の細粒子の砂が入る。黄褐色土粒子及び赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性やや弱。
- 10 褐灰色土 シルト質土。径20mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。黄褐色の細粒子の砂が入る。黄褐色土粒子が多く入る。締まり中。粘性中。
- 11 黄褐色土 シルト質土。径30mm以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が多く入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性中。

桑原田遺跡I区13号水田北側トレンチ5aライン土層観察所見

- 1 11・13号水田1号溝の第1層に同じ。
- 2 11・13号水田1号溝の第2層に同じ。
- 3 11・13号水田1号溝の第3層に同じ。
- 4 11・13号水田1号溝の第4層に同じ。
- 5 11・13号水田1号溝の第6層に同じ。
- 6 11・13号水田1号溝の第8層に同じ。
- 7 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性やや弱。
- 8 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。白灰褐色の砂が多く入る。締まり中。粘性弱。
- 9 褐灰色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性やや弱。
- 10 11・13号水田1号溝の第9層に同じ。
- 11 11・13号水田1号溝の第10層に同じ。
- 12 11・13号水田1号溝の第11層に同じ。
- 13 11・13号水田1号溝の第13層に同じ。

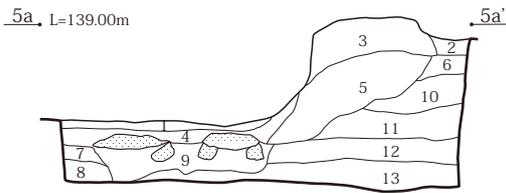
桑原田遺跡I区6aライン土層観察所見

- 1 オリーブ褐色土 ニツ岳軽石粒少量含む。鉄分の汚れ少ない。水田耕土。
- 2 オリーブ褐色土 ニツ岳軽石粒含む。鉄分の汚れ少ない。1層より締まっている。畦構成土。
- 2' ニツ岳軽石含む。鉄分で汚れるが4層程強く締まらない。地山。
- 3 オリーブ褐色土 ニツ岳軽石粒含む。鉄分でやや汚れる。締まっている。
- 3' ニツ岳軽石極少ない。
- 4 3層より鉄分の汚れが強い。
- 5 褐色土 ニツ岳軽石は上位より少ない。砂粒多く含む。鉄分の凝集があり、固く締まる。
- ア 小礫～中砂主体。ニツ岳軽石の円磨されたものを含む。本来はより下位の層にあたるのではないと思われるが、自然堆積層であることは間違いない。イ層とともに他には見られない。
- イ 褐色土 円磨されたFPを含む。土壌化していて、粘性は弱い。万歳寺廻り遺跡の古代遺構覆土に似ている。
 - a 明黄褐色の細砂、微砂、シルト。2号溝底の堆積土。
 - a' 黄褐色土 シルトを主体とし最下位に細砂の薄層がある。
 - b 黒褐色土 砂粒を多く含む。下位、イ層が主となっている。
 - c ア層に近い。小円礫～中砂主体の層。円磨されたニツ岳軽石を含む。
 - d c層と同相だが礫少なく中砂主体。
 - e 中砂～細砂。1号溝底の堆積土。
 - f c層と同相。
 - g b層に近いがより砂粒多い。
 - h シルト主体のブロック。
 - i d層に近い。砂主体の層。

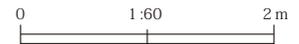
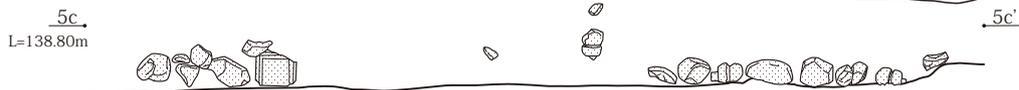
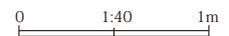
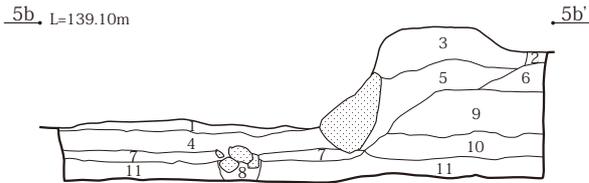


第229図 桑原田遺跡 I区詳細図5

13号水田北側 トレンチ深堀り



12号水田北側 トレンチ深堀り



桑原田遺跡 I 区 P～Xライン・6e・8a・8b ライン土層観察所見

- 1 オリーブ褐色土 ニツ岳軽石粒少量含む。鉄分の汚れ少ない。
水田耕土。
- 2 オリーブ褐色土 ニツ岳軽石粒含む。鉄分の汚れ少ない。1
層より締まっている。畦構成土。
- 2' ニツ岳軽石含む。鉄分で汚れるが4層程強く締まらない。地山。
- 3 オリーブ褐色土 ニツ岳軽石粒含む。鉄分でやや汚れる。締
まっている。
- 3' ニツ岳軽石極少ない。
- 4 3層より鉄分の汚れが強い。

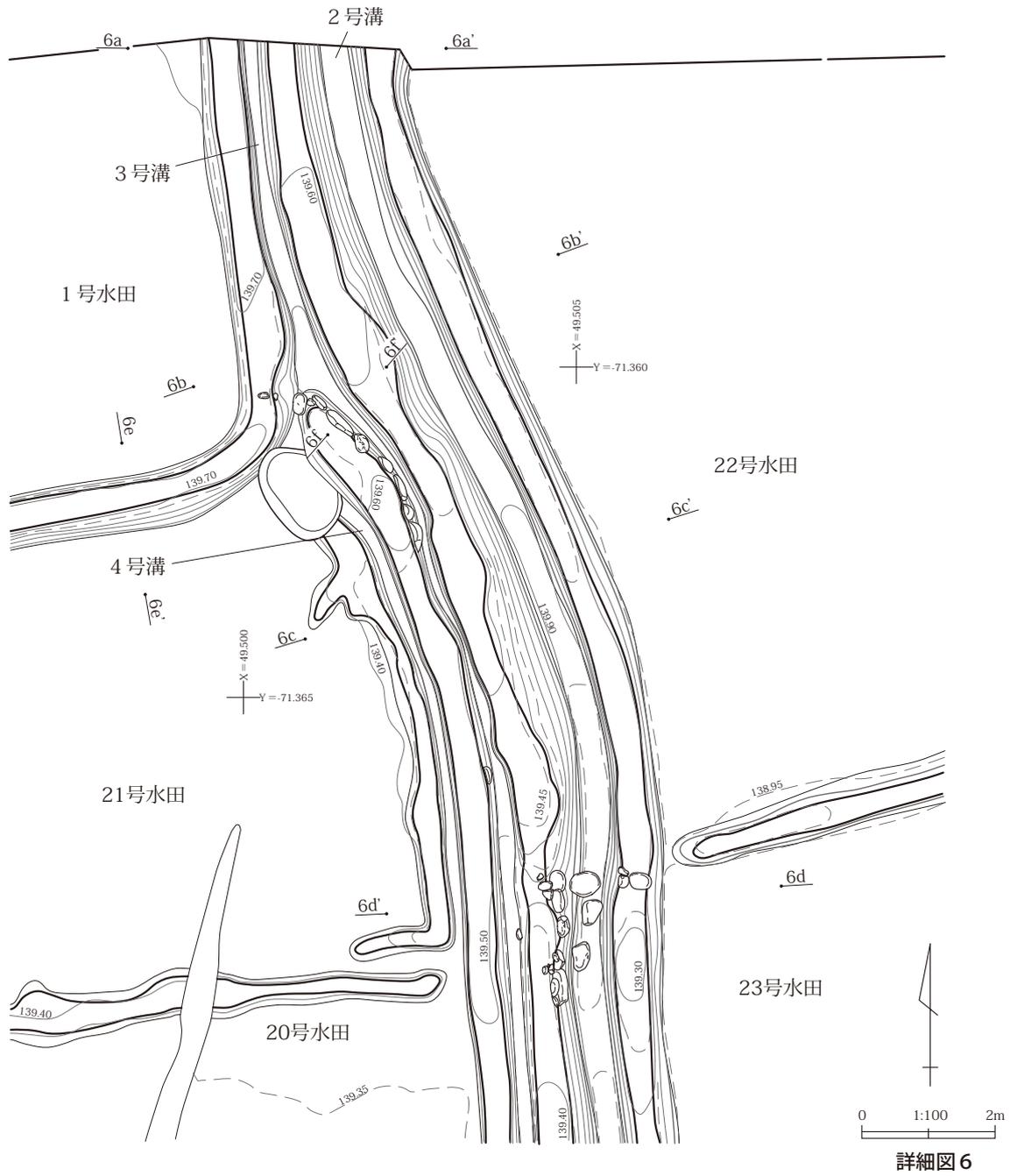
桑原田遺跡 I 区 P～Xライン土層断面図

- a 暗オリーブ褐色土 中～細砂の薄層をはさむ。
- b 中砂のみの層。
- c 細砂の集中層。
- d 小円礫。粗砂～中砂の層。
- e a層に近い。
- f 2層に近いがやや土壌化して、ローム質強い。地山。

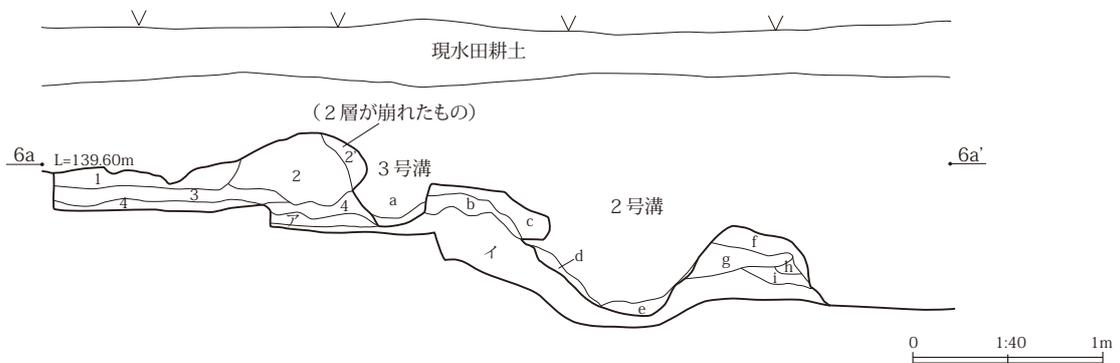
桑原田遺跡 I 区 8a ライン土層断面図

- 2' ニツ岳軽石をほとんど含まない。1層を盛り上げたと思われ
る畦構成土。
- a 細砂～シルトのラミナ。

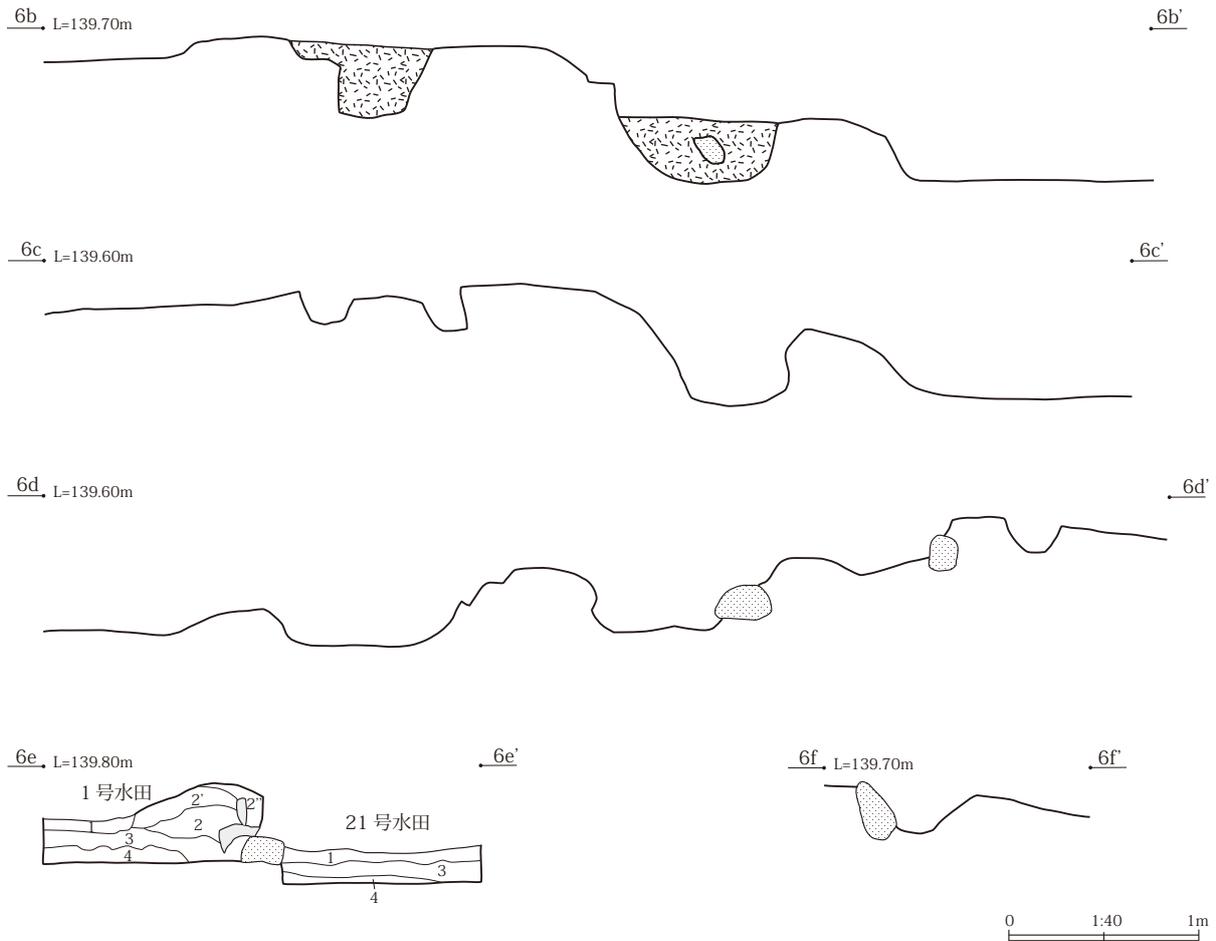
第230図 桑原田遺跡 I 区詳細図5 土層断面図



詳細図6



第231図 桑原田遺跡 I区詳細図6 土層断面図1



第232図 桑原田遺跡 I区詳細図6 高低図・土層断面図2

攪乱によって検出できなかった。18号水田は、北西・北東・南西隅にそれぞれ水口があり、南南西方向に泥流中の岩塊による削痕が確認された。19号水田は、北西・北東・南東隅にそれぞれ水口が検出されている。18・19号水田の南畦は、川原石を立て並べて補強がされていた。また、北側の水田とは段差が大きい、畦下端にはまばらではあるが、南畦と同様に河原石が補強として使われていた。

[20・21号水田] (第225・226・228・231図 PL.110・111)

3号水田と2号溝との間に南北方向に隣接して検出された。20号水田は、泥流中の岩塊による強い削痕が2カ所残されており、稲株の痕跡はほとんど残っていなかった。畦の一部には泥流によって壊された痕跡が残されていた。南側の畦を南北に断ち切るように、幅2.1m、長さ15mほどの溝状の土坑が掘削されており、泥流中の岩塊が充填されていた。この土坑の掘削時期は調査結果からは特定できなかったが、後世の水田復旧に伴うものであろう。21

号水田は、北東隅に3号溝から直接に水を引き込むような広く開いた水口があり、南東隅には同溝への排水のための水口が設けられている。北東部からは東畦に沿って小規模な溝が南東部の排水口まで掘削されていた。3号水田との間の畦と重なるように幅1.8m、長さ10mほどの泥流中の岩塊処理のための土坑が掘削されていた。北側の1号水田とは段差があり、間の畦の一部には川原石が使われていた。

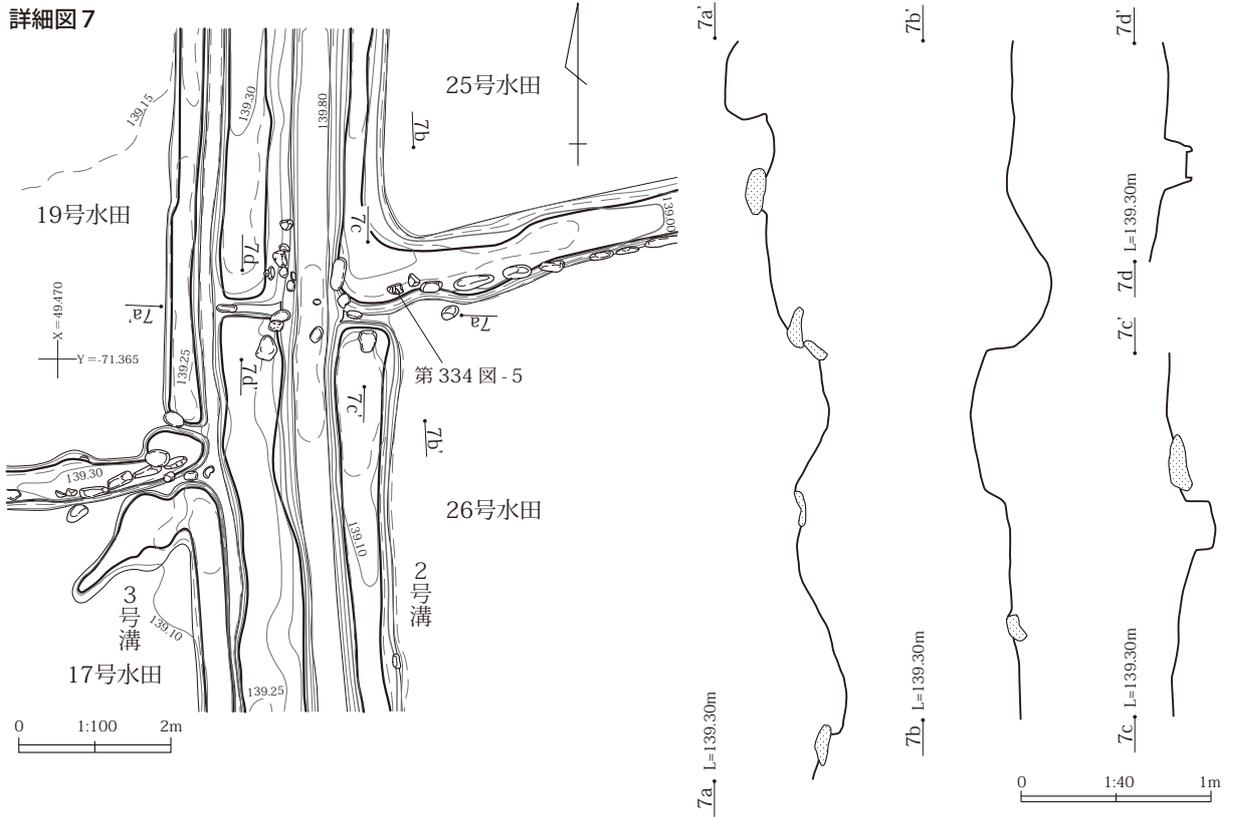
[22・23・24号水田] (第225・226・231・334図 PL.111)

主要水路である2号溝の東側に検出された。水口は23号水田の北西隅に2号溝から取り入れるように設けられ、22号水田へも同時に給水されたものと考えられる。

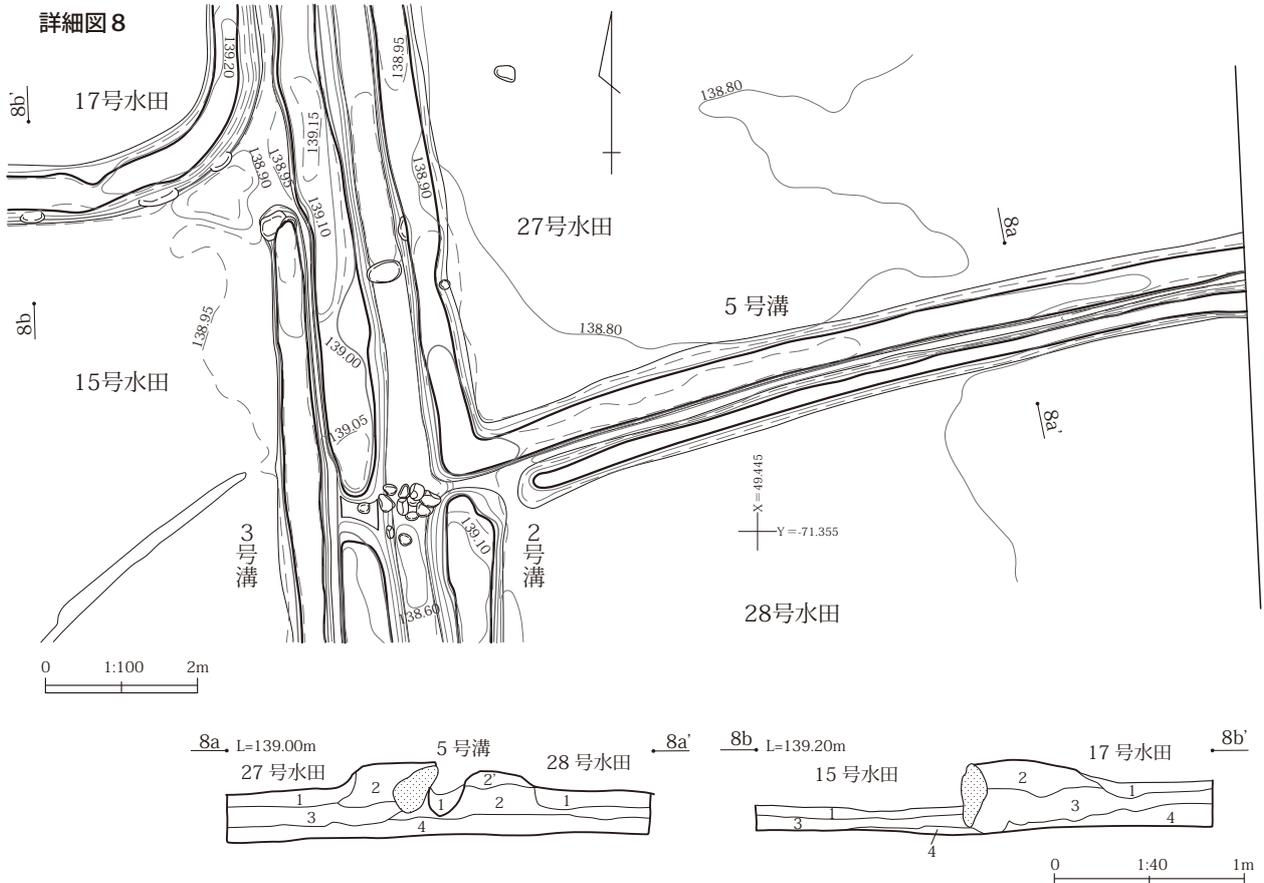
[25・26号水田] (第225・226・228・233・334図 PL.111)

2号溝の東、22・23号水田の南側に検出した。25・26号水田は水田面の標高差はなく、間は下幅約90cm、高さ約18cmの畦で区切られていた。この畦の南側裾部には川原石をほぼ等間隔で立てて補強とし

詳細図7



詳細図8



第233図 桑原田遺跡 I区詳細図7・8 高低図・土層断面図

ていた。25号水田の南西部には、直径約5cm、深さ約15cmの杭の痕跡が約50cmの間隔で3カ所検出された。水口は北西隅に検出したが、隣接する2号溝から取り入れたものではなく、西側に並行する3号溝から木樋を介して取り入れていたものと思われる。

[27・28号水田] (第225・226・233図 PL.112)

27・28号水田は、主要水路の2号溝東側の調査区南端に南北に並んで検出した。26号水田北側の25号水田との間に設けられた畦は他の部分と比較して低く、北西隅に水口が設けられている。28号水田の水口は、北東と南西隅に設けられており、北側の畦に沿って5号溝が東西方向に掘削されている。

稲跡と人の足跡

2号水田と18号水田、28号水田で足跡、4号水田と12号水田、16号水田、18号水田、19号水田、22号水田、23号水田、26号水田で稲跡が検出された。

2号水田の人の足跡は、長さ22～29cm、幅10～16.5cmである。水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。足跡は左右が不揃いで、どの方向へ歩いたのか行跡が不明のものと、規則的に歩いているのが部分的に確認できるものがある。規則的に並んだ足跡は、南から北へ付いていて、北が爪先になるものが多い。18号水田と28号水田の北側畦に沿って検出された足跡は、残りが悪く方向歩行方向もわからなかったが、28号水田周辺の足跡は、東から西に向かっていたことが確認できた。

4号水田の稲跡は、稲が北東から南西方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北東から流れてきたことがわかる。稲株の穴は、ほぼ規則的に並んで列をつくっている。列は、ほとんど直線状に並んでいる。株穴の列の方向は、北～南方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～25cmで、検出範囲内では20cm間隔のものが多い。列と列の間隔は約30～35cmで、検出範囲内では35cmが多く、部分的にやや幅が狭いところで30cmとなる。

12号水田の稲跡は、稲が北東から南西方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北東から流れてきたことがわかる。水田面にも泥流の傷痕が筋状に付いていた。

稲株の穴は、4号水田に比べてばらつきが目立つ。列は全体にやや曲がっている。株穴の列の方向は、北北東から南南西方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～30cm、列と列の間隔は約20～30cmである。検出範囲の西側では株穴はほとんど確認できなかった。

16号水田の稲株は、南西方向に倒れた直径約5cm、根と葉を合わせて60cmほどが残存していたが、穂先までは確認できなかった。株は、東西約30cm、南北約20cmの間隔で検出されていることから、南北方向に植えられていたものと考えられる。

19号水田の稲株は、間隔が東西10cm、南北35cmほどであり、26号水田の稲株は、南方向に倒れたもので根から80cmほどが残されていた。東側の稲株の間隔が5～10cmほどであるのに対して、西側では20～25cmほどと広がっていた。18号水田では、比較的良好な稲株が6カ所確認され、22・23号水田では、南方向に倒れた稲株痕が検出されているが、詳細なデータを取ることはできなかった。

溝

1号溝 (第225・227～230図 PL.104・106)

位置 X=49.440/Y=-71.405～-71.410

規模 長さ7.6m、幅(上端)0.7～0.9m(下端)0.1～0.2m、深さ0.27～0.28m

特徴 内壁を石で補強し、五輪塔の一部も利用されていた。

2号溝 (第225・228・231～233・334図 PL.108)

位置 X=49.135～49.510/Y=-71.358～-71.365

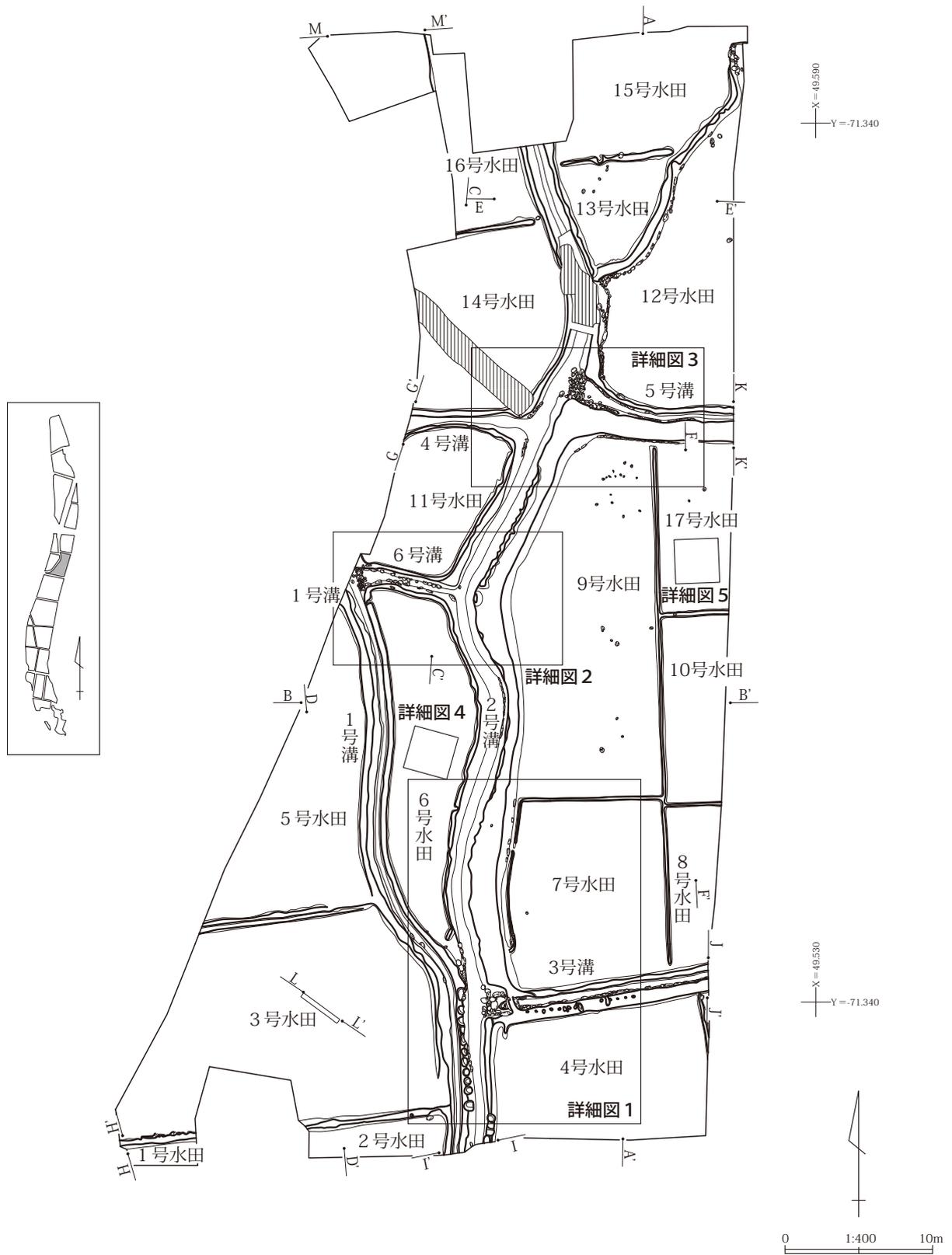
規模 長さ75.3m、幅(上端)0.85～1.17m(下端)0.45～0.6m、深さ0.37～0.45m

特徴 調査区を南北に緩く蛇行して貫いており、南寄りの位置で4号溝が分岐している。位置的に桑原田遺跡Ⅱ区の2号溝に繋がっているものと考えられる。3号溝と並行しているが、当溝の底面標高は、3号溝よりも34～37cmほど低い位置にあり、東側の水田への給水を目的に掘削された水路と考えられる。

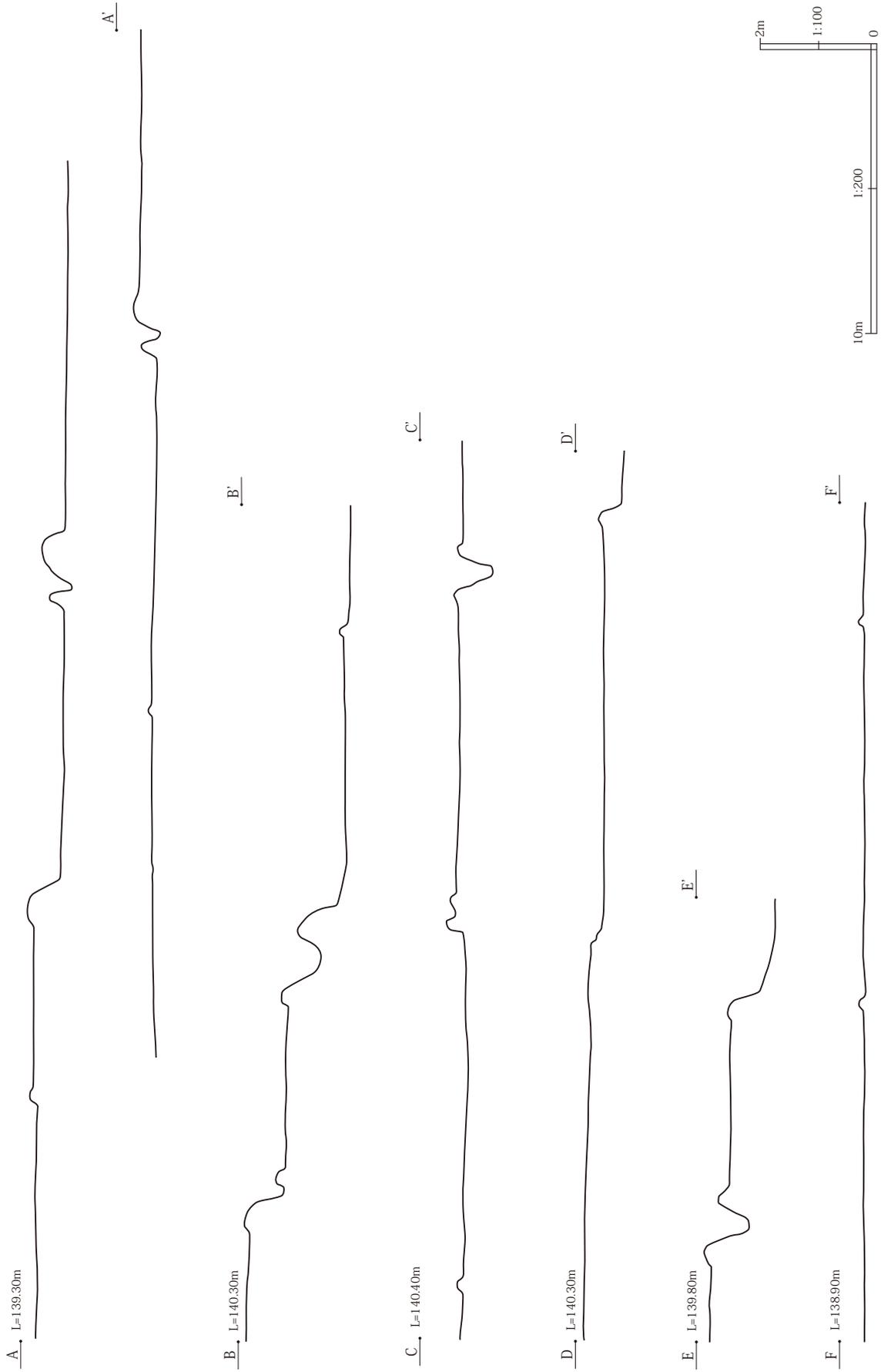
3号溝 (第225・228・231～233・334図 PL.108)

位置 X=49.435～49.510/Y=-71.360～-71.365

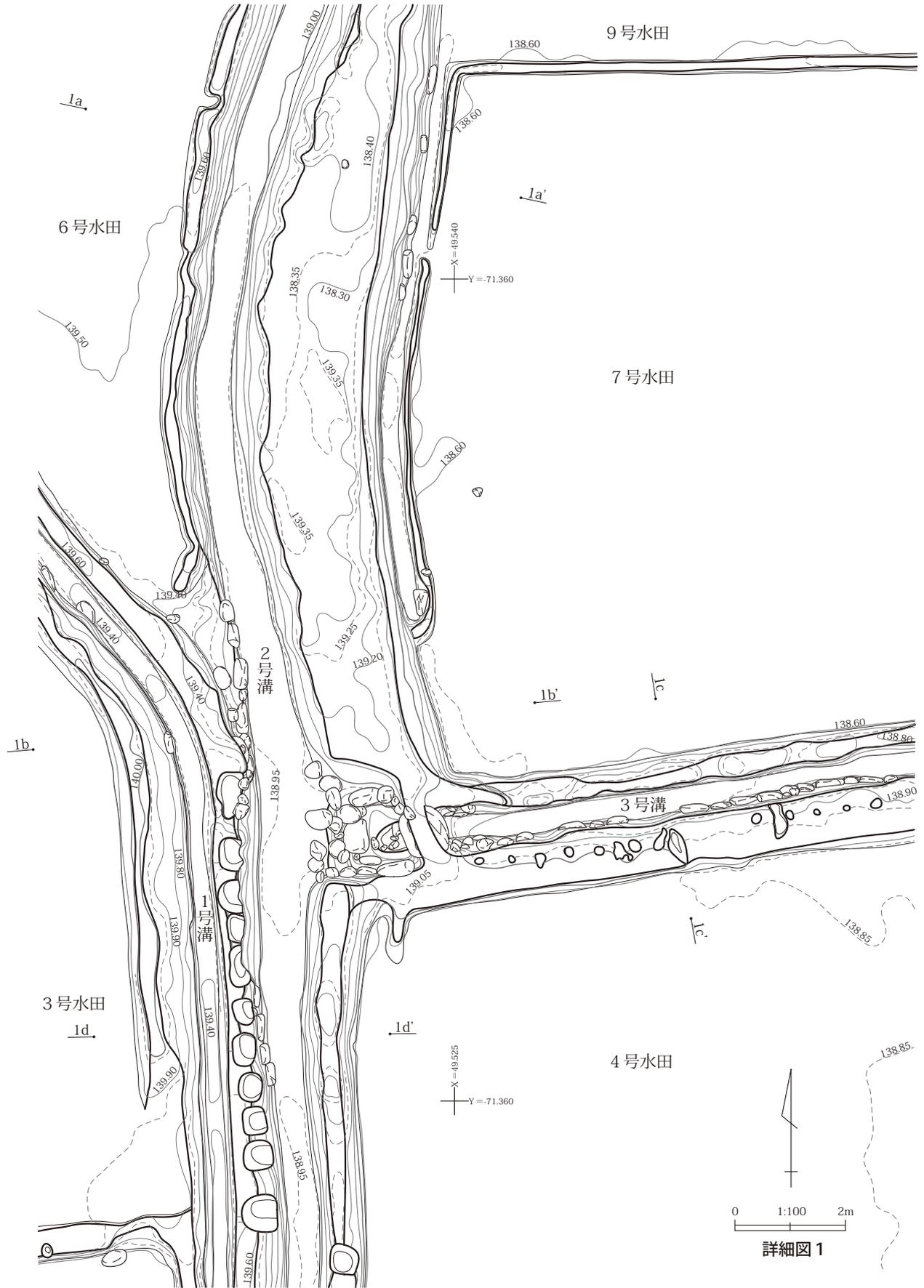
規模 長さ75.3m、幅(上端)0.58～1.12m(下端)



第234図 桑原田遺跡 II区全体図

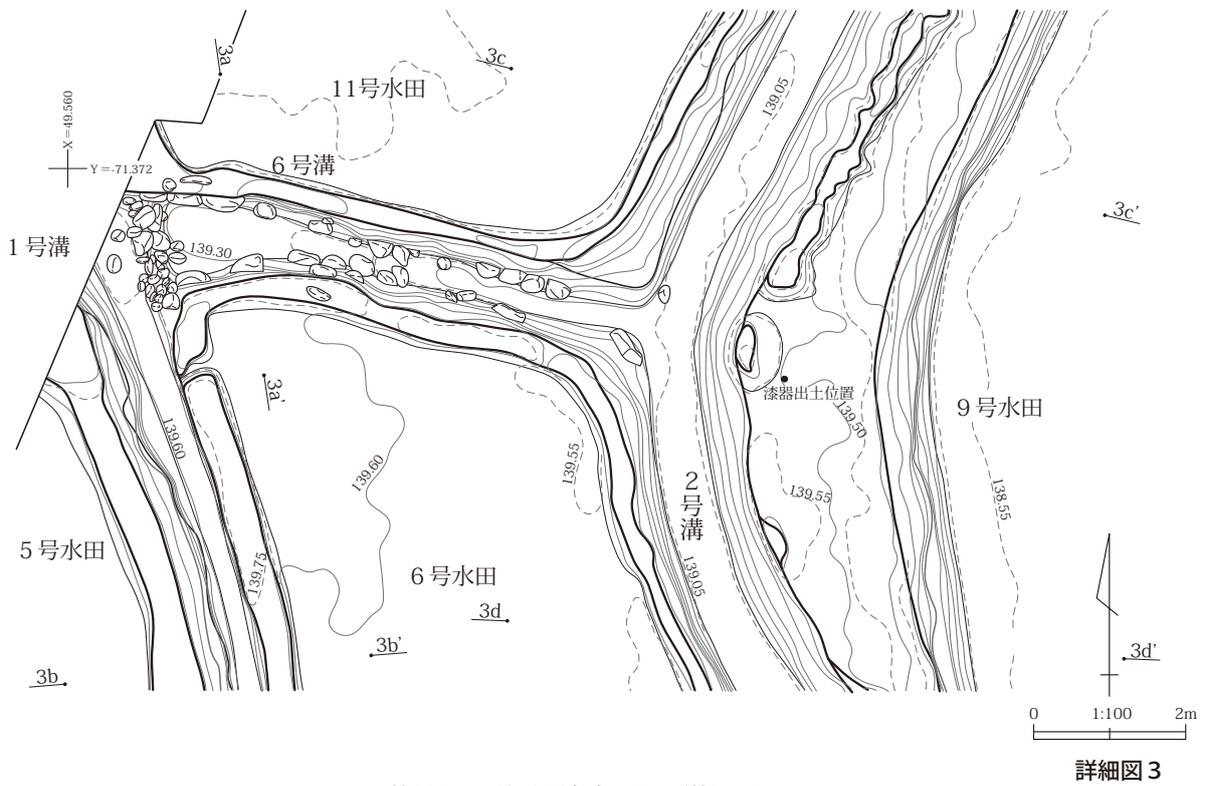
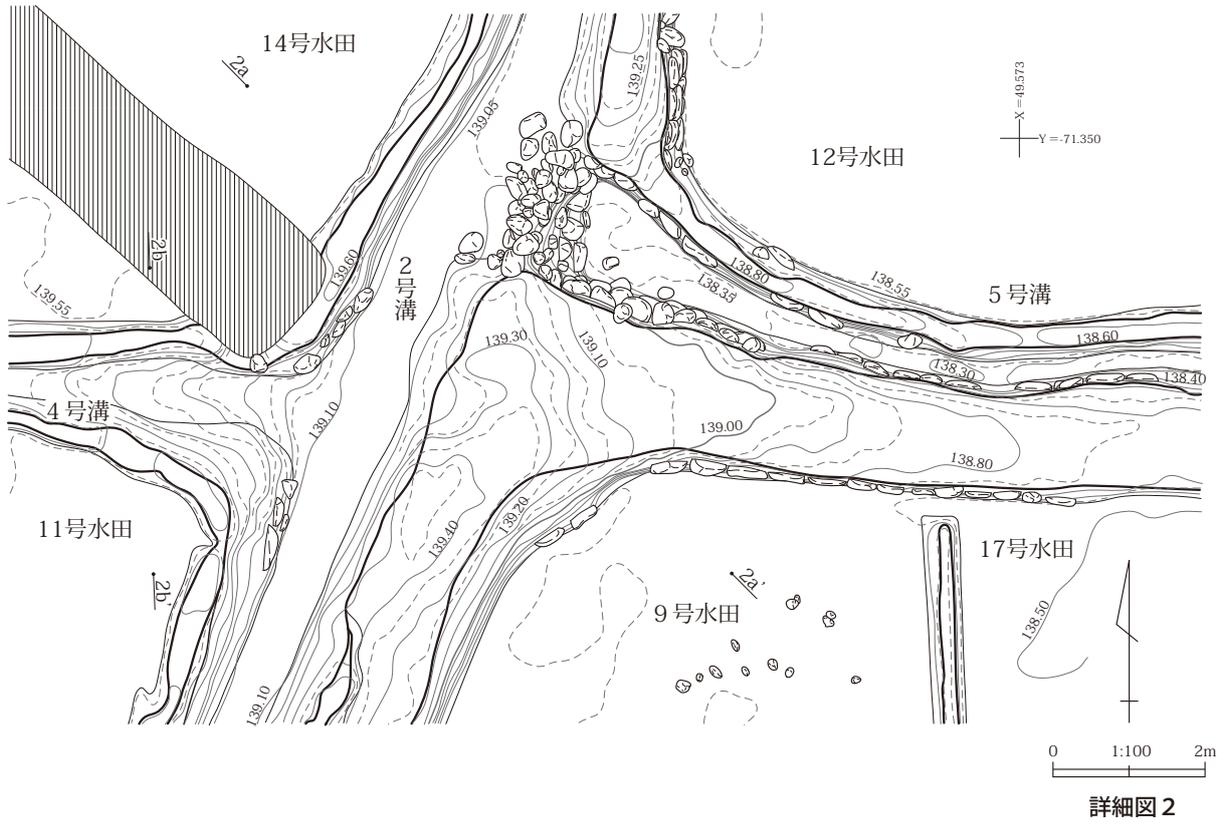


第235図 桑原田遺跡 II区高低図



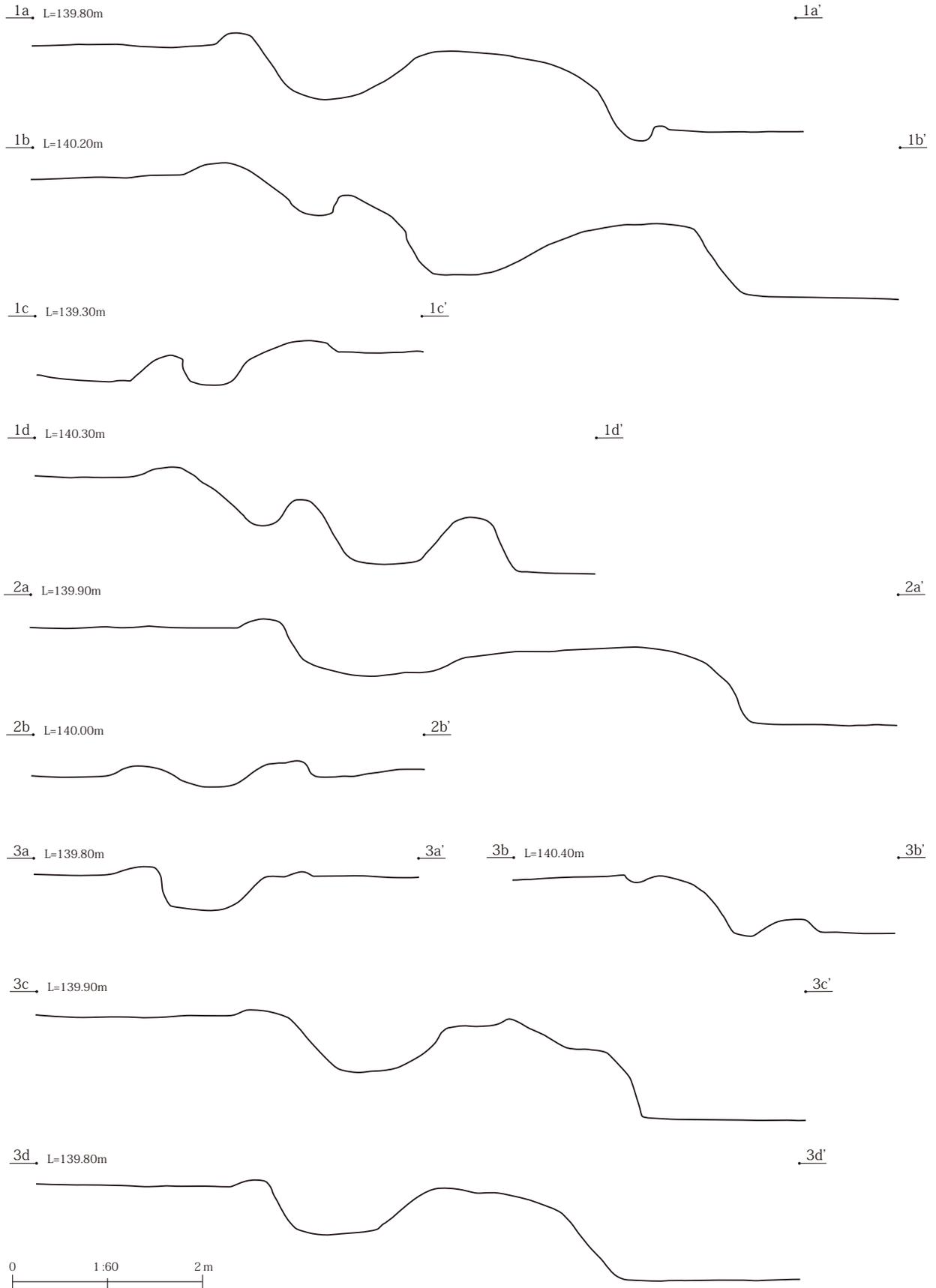
第236図 桑原田遺跡 II区詳細図1

詳細図1



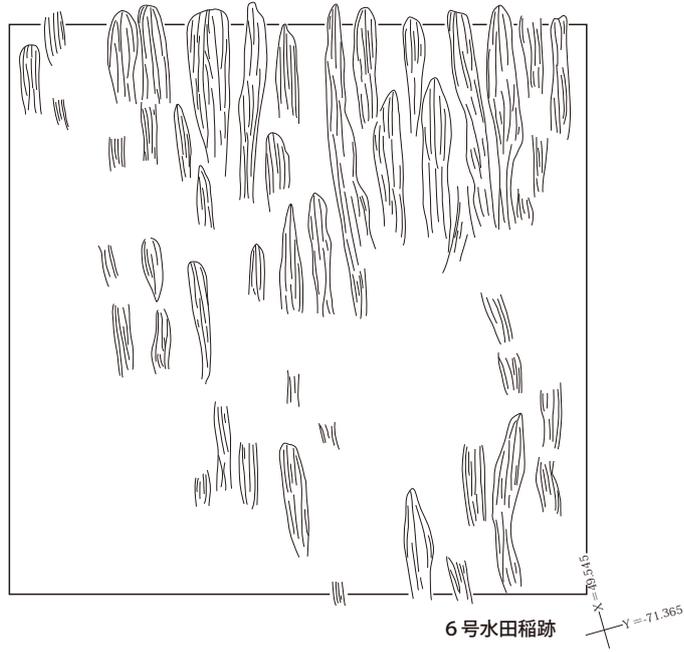
第237図 桑原田遺跡 II区詳細図2・3

第4章 遺構と遺物

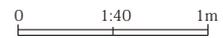
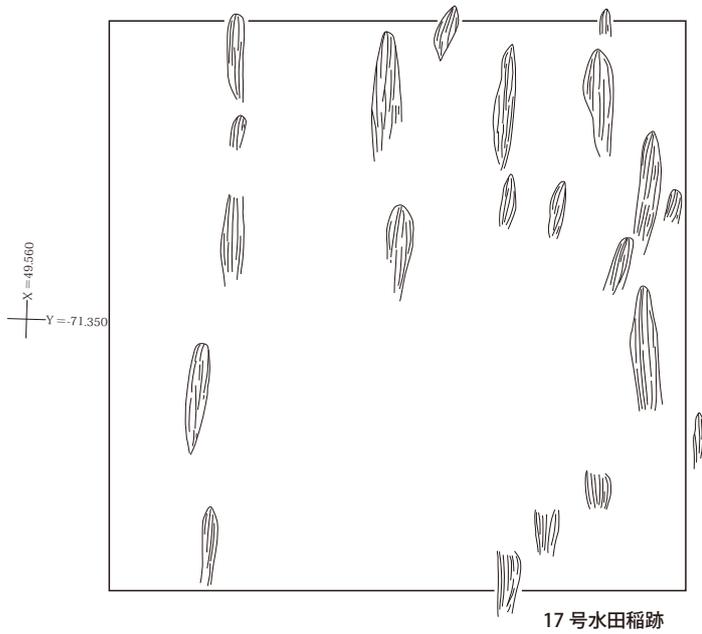


第238図 桑原田遺跡 II区詳細図1~3 高低図

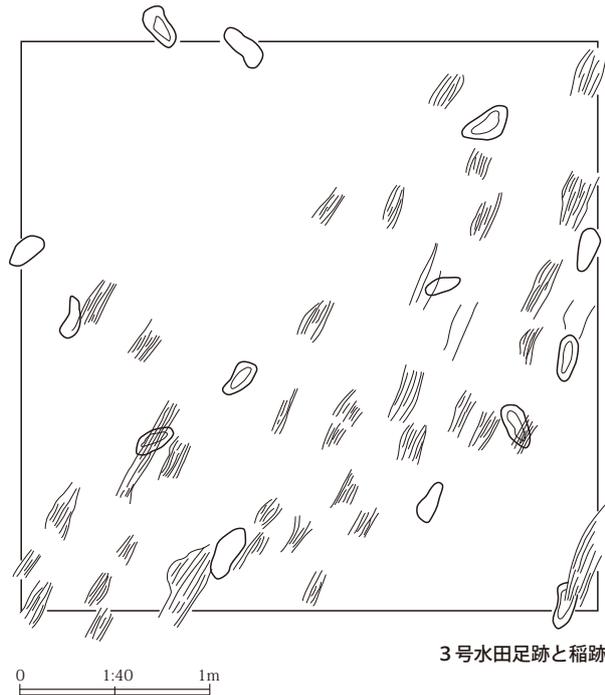
詳細図4



詳細図5



第239図 桑原田遺跡 II区詳細図4・5



第240図 桑原田遺跡 II区詳細図

第5表 桑原田遺跡II区3号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	?	20.0	11.0	0.5	
2	単独	左	23.0	9.0	2.0	
3	単独	左	25.0	12.0	3.0	
4	単独	?	25.0	10.0	2.9	
5	行跡	左	23.0	10.0	2.5	
6	行跡	右	21.0	11.0	2.0	5-6間 55
7	単独	左	30.0	14.0	2.5	
8	単独	右	26.0	12.0	3.0	
9	単独	右	24.0	8.0	1.9	
10	単独	右	23.0	11.0	3.0	
11	単独	右	25.0	10.0	2.0	
12	単独	右	25.0	9.0	2.5	
13	単独	右	25.0	11.0	2.5	
14	単独	右	25.0	10.0	2.0	

※第240図及び第5表は桑原田遺跡II区3号水田の足跡についての記録であるが、データ採取位置の詳細記録が失われており、全体図上にその対応位置を示すことができていない。

0.15～0.35m、深さ0.22～0.4m

特徴 2号溝と並行し、北部で4号溝が分岐している。2号溝が東西の地形変換点の低い位置をトレースして掘削されているのに対して、西側の高い部分に掘削されており、主に西側の水田への給水を担ったものと考えられる。当調査区においては例外的に、25号水田へは木樋を介して給水していた。

4号溝 (第231・232図 PL.108)

位置 X=49.495～49.504/Y=-71.362～-71.365
規模 長さ9.0m、幅(上端)0.27～0.34m(下端)0.1～0.18m、深さ0.17～0.2m

特徴 21号水田の水口部分で3号溝から分岐し、20号水田の南側畦に沿って西に向かっていたものと思われる。

5号溝 (第233図 PL.108・109)

位置 X=49.445～49.449/Y=-71.360～-71.365
規模 長さ10.08m、幅(上端)0.18～0.23m(下端)0.1m、深さ0.28m

特徴 27・28号水田との間に東西方向に設けられた溝で、溝の両側に10cmほどの高さの畦を設けている。溝底部と水田面との差は、約12cmである。

II区

検出された遺構は、水田17枚、溝6条であり、残存状況は概ね良好である。水田番号は南から付けている。

水田の形状

II区の地形は西から東に向かって傾斜している。調査区の西側が利根川の河岸段丘面にあたり、一段高くなっている。東を流れる利根川に向かって段差を設けて低くなり、棚田状の水田を形成している。最も標高の高い西部の5号水田と最も標高の低い東部の17号水田の標高差は1.72mである。

1号溝と2号溝はII区の主要用水路であり、北から南へ流れ、途中で連結した3・4・5・6号溝が東西方向へ走っている。溝で区切られた区画ごとに段差を設けている。大別すると、1号溝の西側、2号溝の西側、北東部の段境の西側、段境の東側及び2号溝の東側の順で段が低くなっている。

水田の区画

[1・2・3・5号水田]

(第234～238・240～242図 PL.112・113)

調査区の南西部にある。調査区で最も高い段に水田をつくっている。北の5号水田から南の1・2号

水田に向かって低くなっている。

5号水田は東側を1号溝に沿った幅70～110cm、田面からの高さ3～8cmの土手状の畦で区切られている。水田面は北から南へ低くなっている。調査範囲内に水口はない。1号溝を挟んで東に接する6号水田より56～60cm高い。

3号水田は、南東部でやや低くなっている。5号水田より21～22cm低い。両水田は幅65～90cm、高さ25cmの畦で区切られている。この畦は3号水田側と5号水田側から土を盛ってつくられており、5号水田側の東で畦の高まりが消滅している。東は1号溝に沿った幅80～120cm、田面からの高さ13～15cmの土手状の畦で区切られ、この南部で畦の高まりが消滅している。1号溝を挟んで北東に接する6号水田より37～41cm高い。調査範囲内に水口は見られない。

1号水田は3号水田の南にあり、ごく一部を確認したのみである。3号水田より28cm低い。両水田は幅60～80cm、高さ28～45cmの畦で区切られている。3号水田側は泥流の影響を受けて、畦の形が崩れている。調査範囲内に水口は見られない。

2号水田は西の1号水田より2cmほど低く、北の3号水田より26～29cm低い。2号水田と3号水田は幅50～90cm、高さ30～37cmの畦で区切られている。東は1号溝に沿った幅55～65cm、田面からの高さ14cmの土手状の畦で区切られている。調査範囲内に水口は見られない。

[6・11・14・16号水田] (第234～239図 PL.112～114)

調査区の西部にあり、2番目に高い段に水田をつくっている。東側を2号溝が流れ、11号水田の北側を走る4号溝と南側を走る6号溝が合流する。1号溝は6号水田の西側を流れ、6号水田の南で2号溝の西隣りを併走する。

11号水田は最も標高が高く、北を4号溝、東を2号溝、南を6号溝に囲まれ、溝に沿った幅20～40cm、田面からの高さ5～20cmの土手状の畦で区切られる。田面は東がやや低い。2号溝を挟んで東に接する9号水田より107～111cm高い。

14・16号水田は4号溝を挟んで南の11号水田より若干低い位置にあり、北の16号水田から南の14号水田へ傾斜している。

16号水田は11号水田より5cmほど低い。東は2号溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ11～12cmの土手状の畦で区切られている。2号溝を挟んで東に接する13・15号水田より50cmほど高い。

14号水田は16号水田より3～5cm低い。両水田は幅30～65cm、高さ3～8cmの畦で区切られ、この東端が幅40cmほど途切れて水口となり、14号水田へ水が流れる。水口は、水流で田面が削られないように川原石を置いて補強したと思われる。東は2号溝に沿った幅40～60cm、田面からの高さ9～14cmの土手状の畦で区切られている。2号溝を挟んで東に接する13号水田より45cmほど高く、12号水田より99～106cm高い。南は4号溝に沿った幅25～50cm、田面からの高さ13～24cmの土手状の畦で区切られている。4号溝を挟んで南に接する11号水田より11cmほど低い。

6号水田は6号溝を挟んで北に接する11号水田より2～5cm低くなる。北から東を6号溝と2号溝に沿った幅20～50cm、田面からの高さ5～14cmの土手状の畦で区切られ、この南端が1mほど南西方向へ曲がり、西側の畦との間に幅45cmほどの水口をつくっている。この水口を通して、6号水田の水が、東側を流れる2号溝へ落水する。水が落ちるところは川原石を貼って補強している。2号溝を挟んで東に接する9号水田より95～104cm高く、7号水田より90～96cm高い。西は1号溝に沿った幅40～70cm、田面からの高さ12～17cmの土手状の畦で区切られている。稲跡が検出され、稲が北北東から南南西方向へ倒れているのが確認でき、泥流の方向がわかる。6号水田の南では1号溝が2号溝に近づいて併走するため、6号水田の南は1号溝と2号溝に挟まれて先が細くなる。

[13・15号水田] (第234・235図 PL.113・114)

調査区の北部にある。調査区の中で泥流の傷跡が特に顕著である。西側を2号溝が流れる。13・15号水田の東は一段低くなっている。

15号水田は南の13号水田より僅かに高く、両水田は幅35～70cm、高さ2～3cmの畦で区切られている。泥流の傷跡が著しく、畦の形や高まりがはっきりしない。この畦の東端、西端がいずれも幅20cmほど途切れて水口となり、15号水田から13号水田へ水

第4章 遺構と遺物

が流れる。13・15号水田は幅55～120cm、13・15号水田面からの高さ1～7cmの畦で東の12号水田と区切られている。東側の壁面に川原石で石垣をつくり、畦が崩れないように補強している。12号水田より49～55cm高い。13・15号水田の西は2号溝に沿った幅35～75cm、田面からの高さ31～40cmの土手状の畦で区切られている。

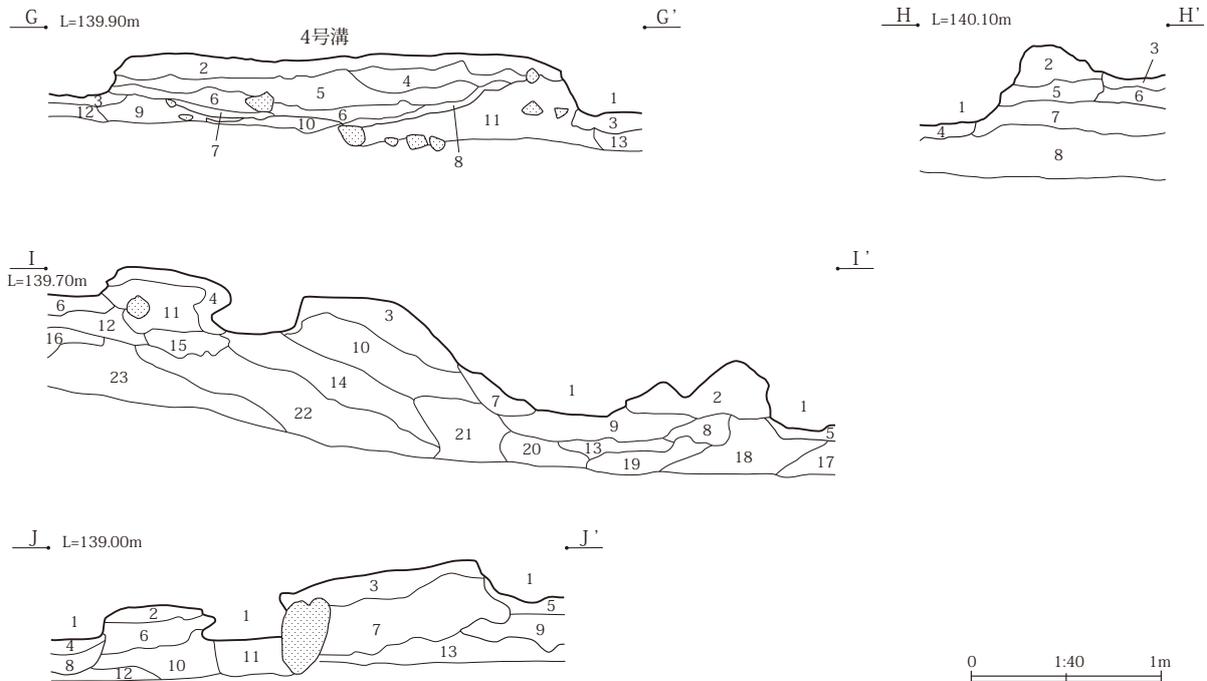
[12号水田] (第234・235・237図 PL.113)

調査区の北東部にあり、北西に接する13・15号水田より一段低い。南西を2号溝が流れ、南を5号溝が流れる。12号水田は東が西より低くなっている。南西は2号溝に沿った幅70～100cm、田面からの高さ71cmの土手状の畦で区切られている。壁面は石垣を施して補強している。南は5号溝に沿った幅25～50cm、田面からの高さ3～10cmの土手状の畦で区切られている。5号溝を挟んで南に接する9号水田とほとんど同じ標高で、17号水田より3～6cm高い。12号水田の南西部で2号溝から分岐している5号溝は、2号溝より72cmほど低くなり、分岐点では壁面に川原石を積んで石垣をつくり、補強している。

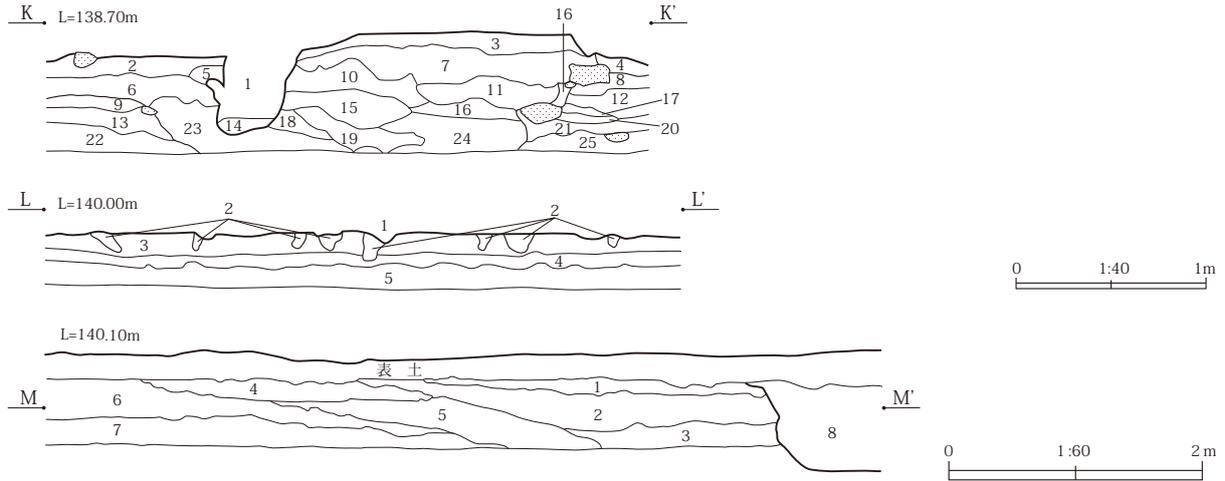
[7・8・9・10・17号水田] (第234～239図 PL.112・114)

調査区の中央部から東部にあり、西から東へ傾斜している。西側を2号溝が流れ、2号溝から分岐した5号溝が北側を、3号溝が南側を流れる。北から西は5号溝と2号溝に沿った土手状の畦で区切られ、幅100～260cm、田面からの高さは北が24～46cm、西が63～114cmである。この畦は人が歩くのに十分な幅があり、作業用の通路として使用されていたと思われる。この畦の南端は3号溝にかかる土橋によって3号溝の南側にある4号水田の畦と繋がっている。土橋は長さ約110cm、幅約80cmで、2枚の平たい大きな石を重ねて3号溝の間を渡し、その上を土で覆って作っている。3号溝は、2号溝より49cmほど低くなり、分岐点では壁面に川原石積みの石垣をつくり、補強している。

7・8号水田の南は3号溝に沿った幅40～60cm、田面からの高さ24～32cmの土手状の畦で区切られている。7・8・9・10・17号水田は溝に沿った土手状の畦で囲まれた中を幅30～50cm、高さ10～18cmの南北方向の畦で区切り、さらに東西方向の畦で区切ってつくられている。9号水田と南の7号水田はほとんど同じ標高である。両水田は幅20～35cm、



第241図 桑原田遺跡 II区土層断面図1



第242図 桑原田遺跡 II区土層断面図2

桑原田遺跡II区（4号溝）土層観察所見Gライン

- 1 天明泥流。
- 2 暗褐色砂質土。径10mm以下の白色軽石、少量の礫、褐灰色シルト質土ブロックを多く含む。縮まりやや強。粘性弱。
- 3 褐灰色シルト質土。径2mm以下の白色軽石を少量含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 4 褐灰色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石、暗灰褐色砂質土ブロックを含む。縮まりやや強。粘性弱。
- 5 暗灰褐色砂質土。径5mm以下の白色軽石、褐灰色シルト質土ブロックを含む。縮まりやや弱。粘性弱。
- 6 灰褐色砂質土。径30mm以下の礫、褐灰色シルト質土ブロックを含む。縮まり中。粘性弱。
- 7 暗灰褐色砂質土。礫を少量含む。縮まりやや弱。粘性弱。
- 8 褐灰色砂質に近いシルト質土。径20mm以下の礫を少量含む。縮まりやや弱。粘性やや弱。
- 9 褐灰色シルト質土。径20mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。縮まり弱。粘性やや弱。
- 10 灰褐色土シルト質に近い砂質。径30mm以下の礫を含む。縮まり弱。粘性弱。
- 11 灰褐色砂質土。径60mm以下の礫多く含む。縮まり強。粘性弱。
- 12 褐灰色シルト質土。全体が暗褐色化している。赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 13 褐灰色砂質に近いシルト質土。径1mm以下の白色軽石を少量、灰黄褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。

- 6 褐灰色シルト質土。径2mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。黄褐色化している部分がある。縮まり中。粘性やや弱。
- 7 褐灰色砂質に近いシルト質土。黄褐色のきめの細かい砂を含む。縮まり弱。粘性弱。
- 8 褐灰色砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性弱。
- 9 褐灰色砂質土。径30mm以下の白色軽石、礫を非常に多く含む。縮まり弱。粘性弱。
- 10 褐灰色砂質に近いシルト質土。径40mm以下の白色軽石を多く含む。縮まり弱。粘性弱。
- 11 褐灰色土シルト質土。径5mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 12 褐灰色土シルト質土。径3mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子を含む。全体が黄褐色化している。縮まり中。粘性中。
- 13 褐灰色土シルト質土。赤褐色及び暗灰褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。
- 14 褐灰色砂質土。径30mm以下の白色軽石含む。縮まり弱。粘性弱。
- 15 暗灰褐色土。砂礫層。径50mm以下の白色軽石、礫を非常に多く含む。縮まり弱。粘性極弱。
- 16 暗灰褐色土。15層と同様であるが、黒褐色の砂を多く含む。
- 17 褐灰色砂質に近いシルト質土。赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性弱。
- 18 褐灰色砂質土。径3mm以下の白色軽石含む。炭化物を多く含む。縮まり弱。粘性弱。
- 19 暗灰褐色砂質土。砂の粒子が粗い。径30mm以下の白色軽石、褐灰色のシルト質土ブロックを含む。縮まり中。粘性極弱。
- 20 褐灰色砂質に近いシルト質土。暗褐色の砂を多く含む。縮まり中。粘性弱。
- 21 褐灰色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まり弱。粘性弱。
- 22 褐灰色土シルト質土。径10mm以下の白色軽石を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 23 褐灰色土シルト質土。径2mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子を少量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。

桑原田遺跡II区（1・3号水田畦断面）土層観察所見Hライン

- 1 天明泥流。
- 2 褐灰色砂質に近いシルト質土。径2mm以下の白色軽石を含む。縮まり中。粘性弱。
- 3 褐灰色シルト質土。径15mm以下の白色軽石を少量含む。縮まり中。粘性弱。
- 4 褐灰色シルト質土。径5mm以下の白色軽石を少量、黄褐色シルト質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 5 褐灰色砂質に近いシルト質土。径3mm以下の白色軽石を含む。黄褐色化している部分がある。縮まり中。粘性やや弱。
- 6 褐灰色シルト質土。径2mm以下の白色軽石、赤褐色砂質土の紐状ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 7 黄褐色砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 8 褐灰色シルト質土。全体が暗褐色化している。径20mm以下の白色軽石、炭化物を含む。縮まり中。粘性中。

※泥流の圧力で畦の変形が見られる。左が2号水田で、6層がその耕土、3層、4層の間が2号溝にあたる。2号水田側から畦が崩れて、2号溝に覆い被さるよう変形する。3層は1～2溝間の畦状部で、7層が1号溝内の堆積土。右は4号水田で、5層が耕土である。10・14・22層は西側から流れ込むような堆積状況を示し、8・9・13・19・20層は古い溝の痕跡とも見える。

桑原田遺跡II区（1・2号溝）土層観察所見Iライン

- 1 天明泥流。
- 2 褐灰色砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。縮まりやや弱。粘性弱。
- 3 褐灰色土。2層と同様だが、径10mm以下の白色軽石を含む。
- 4 褐灰色シルト質土。径1mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。
- 5 褐灰色シルト質土。径10mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。

桑原田遺跡II区（3号溝）土層観察所見Jライン

- 1 天明泥流。
- 2 褐灰色砂質に近いシルト質土。径20mm以下の白色軽石を多く、礫を含む。縮まりやや強。粘性弱。
- 3 褐灰色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。縮まりやや強。粘性弱。
- 4 褐灰色シルト質土。径2mm以下の白色軽石、黄褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。

第4章 遺構と遺物

- 5 褐灰色シルト質土 径3mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 6 褐灰色砂質に近いシルト質土 径20mm以下の白色軽石、黄褐色及び赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 7 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石、黄褐色及び赤褐色の砂を含む。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 8 褐灰色シルト質土 径2mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 9 黄褐色シルト質土 径5mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 10 褐灰色シルト質土 径2mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 11 暗灰褐色土 砂礫層。径30mm以下の白色軽石を多く含む。締まり中。粘性弱。
- 12 黄褐色砂質に近いシルト質土 径3mm以下の白色軽石、黄褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性弱。
- 13 黄褐色砂質に近いシルト質土 径20mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を多く含む。締まりやや弱。粘性弱。

桑原田遺跡Ⅱ区（5号溝）土層観察所見Kライン

- 1 天明泥流。
- 2 褐灰色シルト質土 径2mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 3 褐灰色砂質に近いシルト質土 径15mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。締まりやや強。粘性弱。
- 4 褐灰色シルト質土 径2mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 5 褐灰色シルト質土 黄褐色の砂を多く含む。締まり中。粘性弱。
- 6 褐灰色シルト質土 径10mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子、多量の赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 7 褐灰色砂質に近いシルト質土 径20mm以下の白色軽石、灰褐色砂質土ブロックを含む。締まりやや強。粘性弱。
- 8 褐灰色砂質に近いシルト質土 径1mm以下の白色軽石を少量含む。締まり中。粘性弱。
- 9 灰黄褐色砂質に近いシルト質土 黄褐色土粒子を含む。締まり中。粘性弱。
- 10 褐灰色シルト質土 径15mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。締まり弱。粘性中。
- 11 暗褐色砂質土 径15mm以下の白色軽石、褐灰色シルト質土ブロックを含む。締まり中。粘性弱。
- 12 暗灰褐色砂質土 灰黄褐色砂質土が層状に入る。締まり弱。粘性極弱。
- 13 灰黄褐色砂質土 径50mm以下の白色軽石、暗灰褐色の砂礫層が間に入る。締まりやや弱。粘性極弱。
- 14 褐灰色砂質に近いシルト質土 径10mm以下の白色軽石を含む。締まり弱。粘性やや弱。
- 15 褐灰色シルト質土 径2mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。締まり弱。粘性やや弱。
- 16 褐灰色シルト質土 径2mm以下の白色軽石を少量、黄褐色砂質土ブロックを含む。締まり弱。粘性中。
- 17 褐灰色砂質に近いシルト質土 赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 18 褐灰色砂質に近いシルト質土 灰黄褐色の砂を多く含む。締まり中。粘性弱。
- 19 褐灰色砂質に近いシルト質土 径20mm以下の白色軽石少量、粒子の粗い黄褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性弱。
- 20 黄褐色砂質土 砂の粒子が粗い。径30mm以下の白色軽石を多く含む。締まり中。粘性極弱。
- 21 褐灰色砂質に近いシルト質土 径1mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 22 褐灰色砂質に近いシルト質土 暗灰褐色の細砂粒が層状に入る。締まり中。粘性極弱。
- 23 灰黄褐色砂質に近いシルト質土 黄褐色土粒子、多量の黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性弱。
- 24 暗灰褐色土 砂礫層。褐灰色シルト質土ブロックを含む。締ま

- り弱。粘性極弱。
- 25 暗灰褐色砂質土 径70mm以下の白色軽石、礫を含む。締まり弱。粘性弱。

※左手が北であるが、12号水田の耕土は表現されていない。2層が12号水田の南辺畦にあたる。14層は5号溝の堆積土。3層は畦道で、やや締まっている。右手の4層は17号水田の耕土である。23層が9・13・22層を切っており、24層も8層から25層を切った状態にある。この部分がかつては幅広の溝状あるいは谷状を呈すしていたことになる。

桑原田遺跡Ⅱ区（3号水田深掘り）土層観察所見Lライン

- 1 天明泥流
 - 2 灰黄褐色シルト質土 径1mm以下の白色軽石及び赤褐色の砂を少量含む。褐灰色化する。締まり弱。粘性弱。植物痕か。
 - 3 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石含む。黄褐色砂質土粒子ごく少量含む。締まり中。粘性弱。
 - 4 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石含む。黄褐色砂質土粒子が入る。灰黄褐色化している。締まり中。粘性中。
 - 5 灰黄褐色土 径15mm以下の白色軽石含む。黄褐色砂質土粒子が入る。締まり中。粘性中。砂質に近いシルト質。
- ※2層は植物痕跡と考えられる。3層、4層が水田耕土で、4層は3層中に5層が混入したような状態を示す。各層に含まれる白色軽石は二つ岳軽石と見られ、下層ほど粒径が大きくなっている。耕作等によって砕けたものと見られる。

桑原田遺跡Ⅱ区（調査区北壁西部）土層観察所見Mライン

- 1 灰黄褐色シルト質土 径3mm以下の白色軽石含む。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性中。
- 2 褐灰色砂質に近いシルト質土 径10mm以下の白色軽石含む。黄褐色土粒子を少量含む。締まり中。粘性やや弱。
- 3 褐灰色シルト質土 径10mm以下の白色軽石含む。全体的に暗褐色化している。赤褐色砂含む。締まり中。粘性やや弱。
- 4 褐灰色砂質に近いシルト質土 径15mm以下の白色軽石含む。全体的に暗褐色化している。赤褐色砂含む。締まり中。粘性弱。
- 5 褐灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石含む。2・3層との境が暗褐色化している。赤褐色砂含む。締まり中。粘性中。
- 6 褐灰色砂質に近いシルト質土 径10mm以下の白色軽石含む。全体的に暗褐色化している。褐灰色シルト質土の紐状ブロック含む。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性やや弱。
- 7 褐灰色シルト質土 径3mm以下の白色軽石含む。全体的に暗褐色化している。褐灰色シルト質土の紐状ブロック含む。黄褐色土粒子が入る。締まり中。粘性中。
- 8 天明泥流層

高さ5～7cmの畦で区切られている。この畦の西端が南へ折れ、幅15～30cmほどの間隔を空けて2号溝の土手状の畦に沿って延びている。この畦は途中で幅20cmほど途切れて水口となり、畦と畦の間を通過してきた9号水田の水が7号水田へ流れ込むようになっている。また、余分な水はこの隙間を通過して2号溝の畦の下部を貫通している排水口穴から2号溝へ排水されたものと考えられる。

17号水田は西の9号水田より5～8cm低く、両水田を区切っている畦の北端が幅30cmほど途切れて水口となり、17号水田へ水が流れる。

10号水田は西の9号水田より8～9cm低く、北の17号水田とほとんど同じ標高である。10号水田と17号水田は幅35～45cm、高さ7～15cmの畦で区切られている。

8号水田は北の10号水田より1～5cm高く、両水田は幅20～40cm、高さ6～7cmの畦で区切られている。西の7号水田より3～6cm低く、両水田を区切っている畦の南端が幅30cmほど途切れて水口となり、8号水田へ水が流れる。

[4号水田] (第234～236・238図 PL.112)

調査区の南東部にある。西側を2号溝、北側を3号溝が流れる。西は2号溝に沿った幅60～90cm、田面からの高さ38～55cmの土手状の畦で区切られている。畦の南部は攪乱されている。北は3号溝に沿った幅80～120cm、田面からの高さ11～16cmの土手状の畦で区切られている。畦頂部に境木の痕と思われる穴が数箇所見られた。3号溝を挟んで北に接する7号水田より30～34cm高く、8号水田より30cmほど高い。東は幅35～40cm、高さ5cmほどの畦の一部が見られる。調査範囲内で水口は見られなかった。

溝

1号溝 (第234・236～238・241図 PL.115)

位置 X=49.515～49.555/Y=-71.360～-71.370
規模 長さ41.1m、幅(上端)0.45～0.85m(下端)0.2～0.45m、深さ0.16～0.24m
特徴 調査区内の主要水路である。調査区の西側の境界から出て緩い曲線を描きながら南下し、南部で2号溝の西側を併走する。また、境界から出たところ

で6号溝が連結し、東へ流れて2号溝に合流している。6号溝との分岐点では川原石で石垣がつくられている。

2号溝 (第234・236～238・241図 PL.115)

位置 X=49.515～49.585/Y=-71.355～-71.360
規模 長さ71.5m、幅(上端)1.2～2.1m(下端)0.4～1.3m、深さ0.31～0.63m
特徴 調査区の中央を流れ、1号溝とともに主要水路である。Ⅲ区の1号溝から続いており、調査区の北側の境界から出て曲線を描きながら南下し、南側の境界へ至る。北部で西側に4号溝が合流し、合流点は壁面に川原石を貼って補強している。東側では3号溝と5号溝が分岐して東へ流れていく。分岐点は落差があるため、石垣を施して補強している。また2号溝の中央部よりやや南で、東側の内壁の一部を補強しているのが見られる。

3号溝 (第234・236・238・241図 PL.115・116)

位置 X=49.525～49.530/Y=-71.345～-71.360
規模 長さ13.3m、幅(上端)0.55～0.9m(下端)0.25～0.5m、深さ0.27～0.33m
特徴 2号溝との分岐点は石垣が施されている。南側の内壁に川原石を貼って補強している。

4号溝 (第234・237・238・241図)

位置 X=49.565～49.570/Y=-71.360～-71.365
規模 長さ8.1m、幅(上端)0.6～1.6m(下端)0.25～0.95m、深さ0.02～0.13m
特徴 掘り込みは非常に浅い。幅は中央が狭く、西と東で広がっている。

5号溝 (第234・237・242図 PL.115・116)

位置 X=49.565～49.570/Y=-71.345～-71.355
規模 長さ10.2m、幅(上端)0.45～1.6m(下端)0.15～1.4m、深さ0.33～0.38m
特徴 2号溝との分岐点は石垣が施されている。内壁に川原石を貼って補強している。

6号溝 (第237・238図 PL.115)

位置 X=49.555/Y=-71.360 ~ -71.370

規模 長さ6.8m、幅(上端)0.8~1.35m(下端)0.2~0.85m、深さ0.46~0.56m

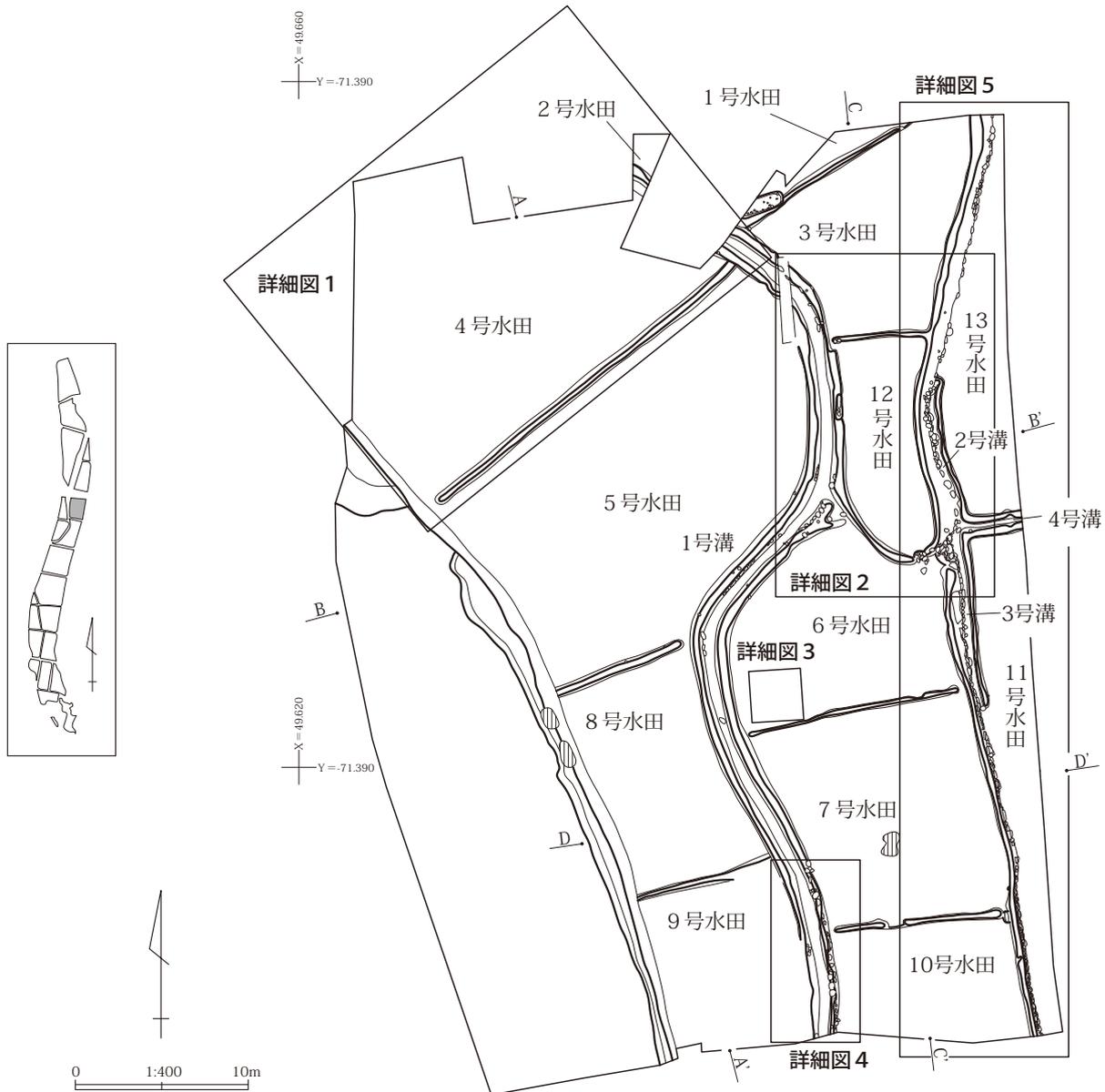
特徴 1号溝との分岐点は石垣が施されている。内壁に川原石を貼って補強している。

Ⅲ区

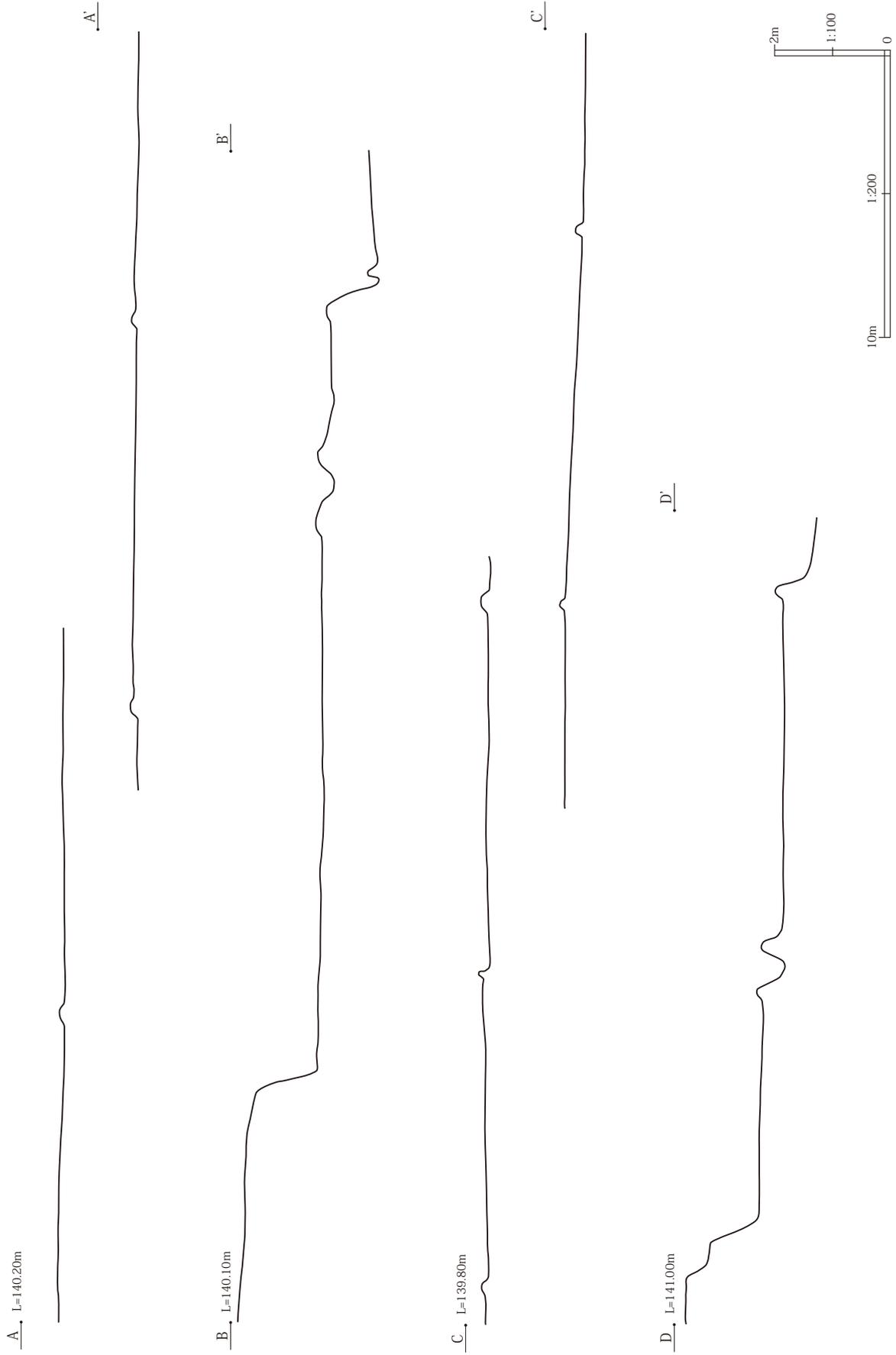
検出された遺構は、水田13枚、溝4条であり、残存状況は概ね良好であるが、水田面に付いた泥流の傷跡が顕著である。水田番号は北から付けている。

水田の形状

地形は全体的に西から東へ向かって低くなる。調査区の西側が利根川の河岸段丘面にあたり、一段高くなっている。段丘の下を天狗岩用水が通る。調査



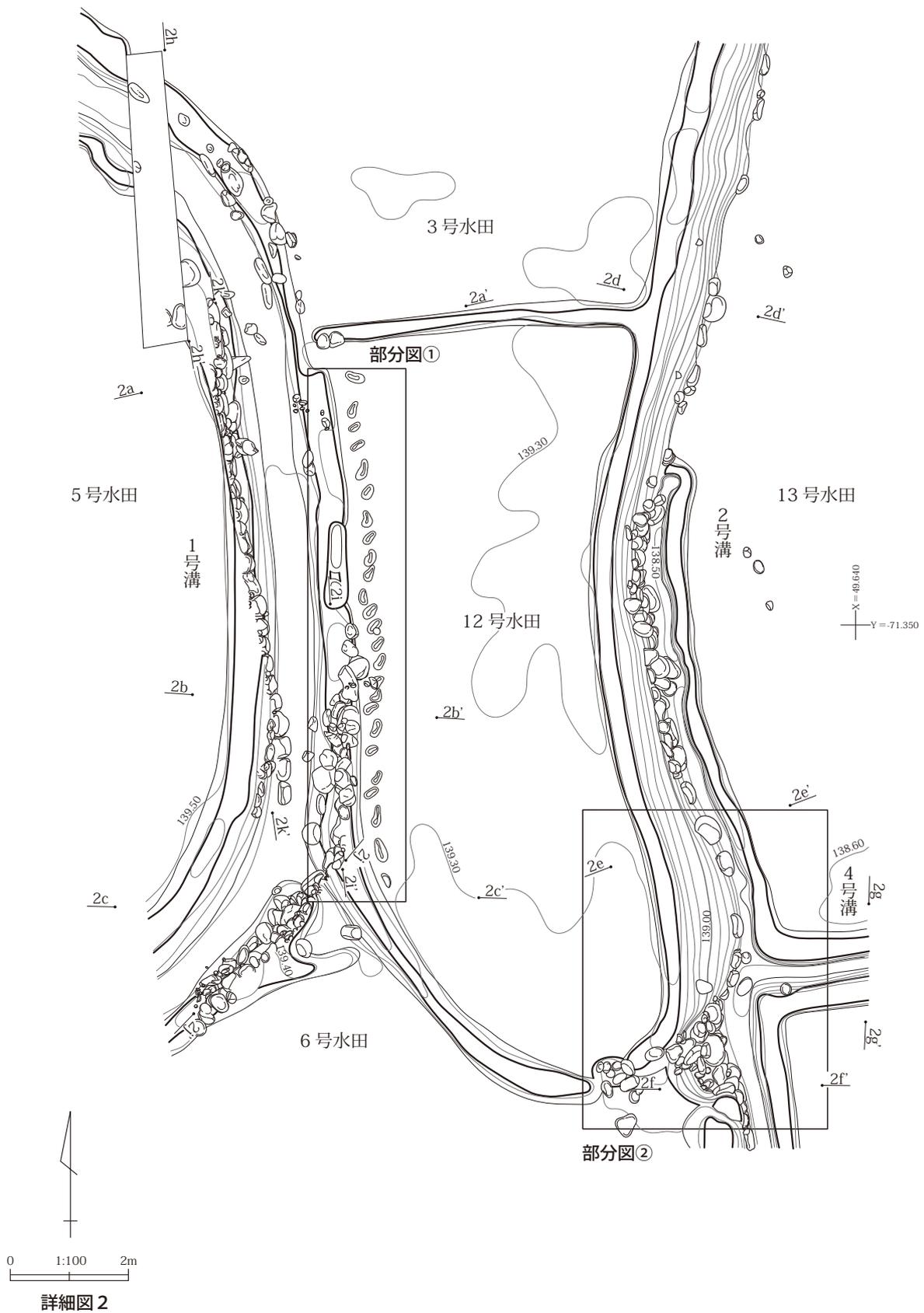
第243図 桑原田遺跡 Ⅲ区全体図



第244図 桑原田遺跡 Ⅲ区高低図

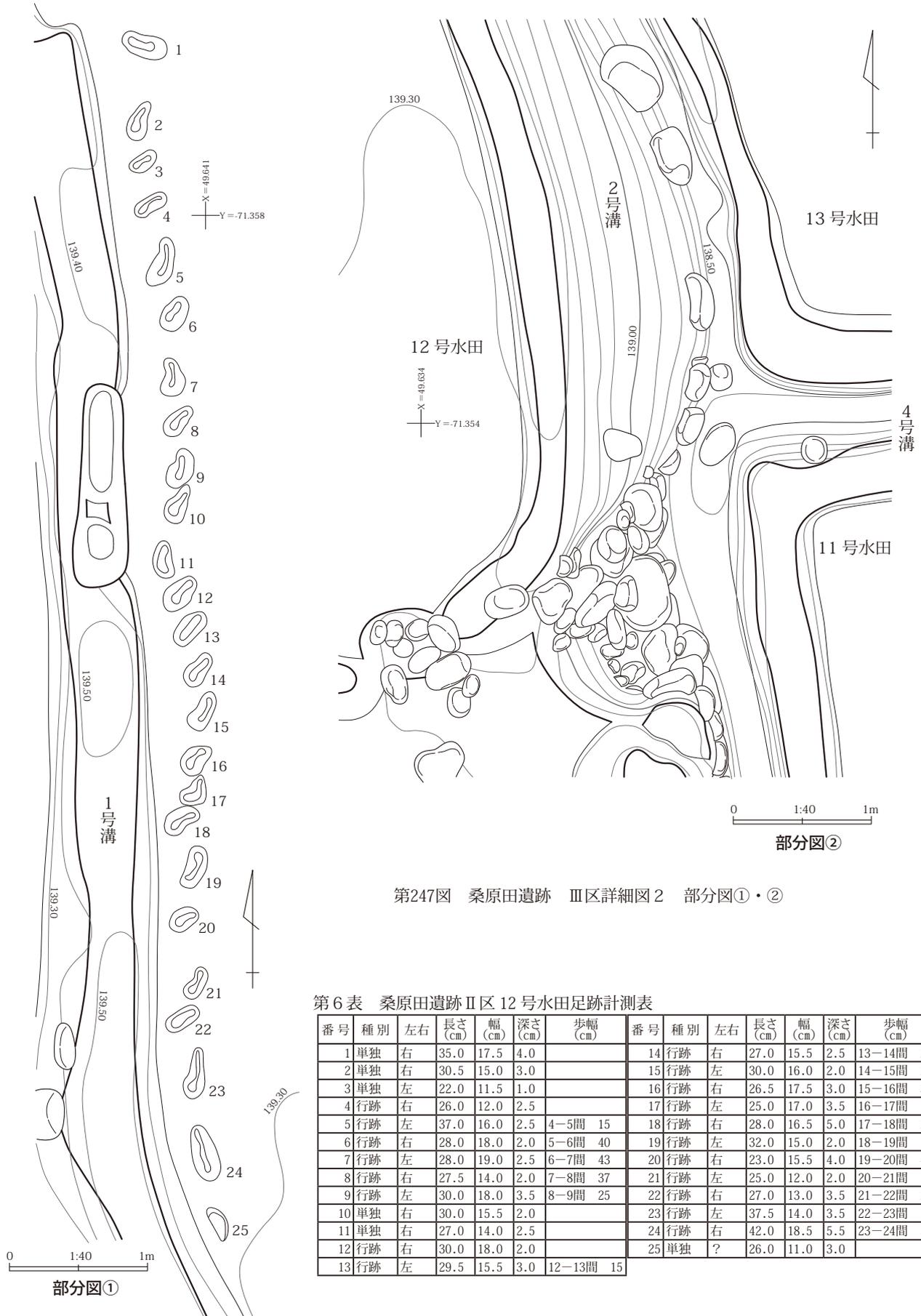


第245図 桑原田遺跡 Ⅲ区詳細図1



第246図 桑原田遺跡 Ⅲ区詳細図2

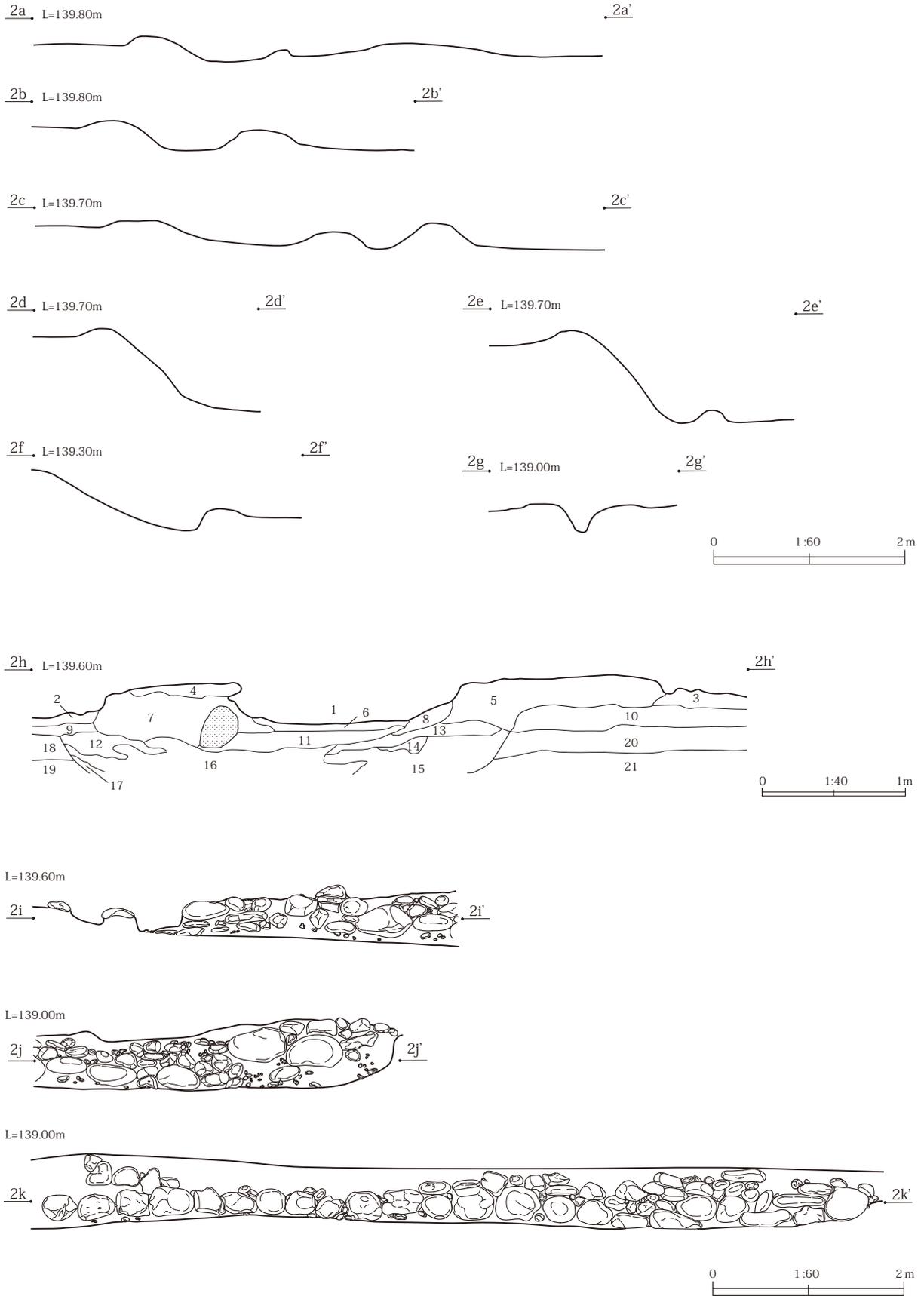
第4章 遺構と遺物



第247図 桑原田遺跡 III区詳細図2 部分図①・②

第6表 桑原田遺跡II区12号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)	番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	右	35.0	17.5	4.0		14	行跡	右	27.0	15.5	2.5	13-14間 23
2	単独	右	30.5	15.0	3.0		15	行跡	左	30.0	16.0	2.0	14-15間 22
3	単独	左	22.0	11.5	1.0		16	行跡	右	26.5	17.5	3.0	15-16間 38
4	行跡	右	26.0	12.0	2.5		17	行跡	左	25.0	17.0	3.5	16-17間 19
5	行跡	左	37.0	16.0	2.5	4-5間 15	18	行跡	右	28.0	16.5	5.0	17-18間 23
6	行跡	右	28.0	18.0	2.0	5-6間 40	19	行跡	左	32.0	15.0	2.0	18-19間 11
7	行跡	左	28.0	19.0	2.5	6-7間 43	20	行跡	右	23.0	15.5	4.0	19-20間 45
8	行跡	右	27.5	14.0	2.0	7-8間 37	21	行跡	左	25.0	12.0	2.0	20-21間 18
9	行跡	左	30.0	18.0	3.5	8-9間 25	22	行跡	右	27.0	13.0	3.5	21-22間 28
10	単独	右	30.0	15.5	2.0		23	行跡	左	37.5	14.0	3.5	22-23間 15
11	単独	右	27.0	14.0	2.5		24	行跡	右	42.0	18.5	5.5	23-24間 58
12	行跡	右	30.0	18.0	2.0		25	単独	?	26.0	11.0	3.0	
13	行跡	左	29.5	15.5	3.0	12-13間 15							



第248図 桑原田遺跡 Ⅲ区詳細図2 高低図・土層断面図・立面図

第4章 遺構と遺物

桑原田遺跡Ⅲ区（3・5号水田畦断割）土層観察所見 2h ライン

- 1 天明泥流
- 2 灰白色シルト質土 黄褐色の砂を含む。粘性中。
- 3 灰白色シルト質土 径2mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。
- 4 にぶい黄褐色砂質土 径20mm以下の礫を多く含む。縮まり弱。粘性弱。
- 5 明褐色シルト質土 径15mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 6 砂礫層 明黄褐色及び灰褐色の砂と径30mm以下の白色軽石、礫によって構成される。縮まり弱、粘性極弱。
- 7 明褐色シルト質土 径20mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 8 明褐色土 砂質に近いシルト質土。黄褐色の砂を含む。縮まりやや弱。粘性やや弱。
- 9 明褐色土 砂質に近いシルト質土。黄褐色及び赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 10 明褐色シルト質土 径10mm以下の白色軽石、黄褐色及び赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。
- 11 砂礫層 明黄褐色及び褐色の砂と径40mm以下の白色軽石、礫によって構成される。縮まり中、粘性極弱。

区の西部は東側に接する水田面より1～1.2mほど高くなっているが、遺構は確認できなかった。東部では一段低くなり、棚田状の水田を形成している。調査区の中で最も標高の高い北西部の4号水田と、最も低い北東部の13号水田の標高差は約1mである。水田は用水路や畦によって区分けされ、田面が整えられている。

1号溝はⅢ区の主要用水路である。調査区の北側の境界から出て調査区の中央を曲線を描きながら南下し、南側の境界へ至り、Ⅱ区の2号溝へ続く。2号溝、3号溝、4号溝は東部の一段低い位置を流れる。2号溝と3号溝は段境に沿って南北に走り、4号溝は2号溝と3号溝の合流点から東へ延びている。

水田の区画

[4・5・8・9号水田]

(第243～246・248図 PL.117・118)

1号溝の西側にある。1号溝の西側は東側より一段高く、標高差は調査区の南ほど大きい。水田面は全体に東に比べて西がやや高くなり、5号水田が最も低くなっている。

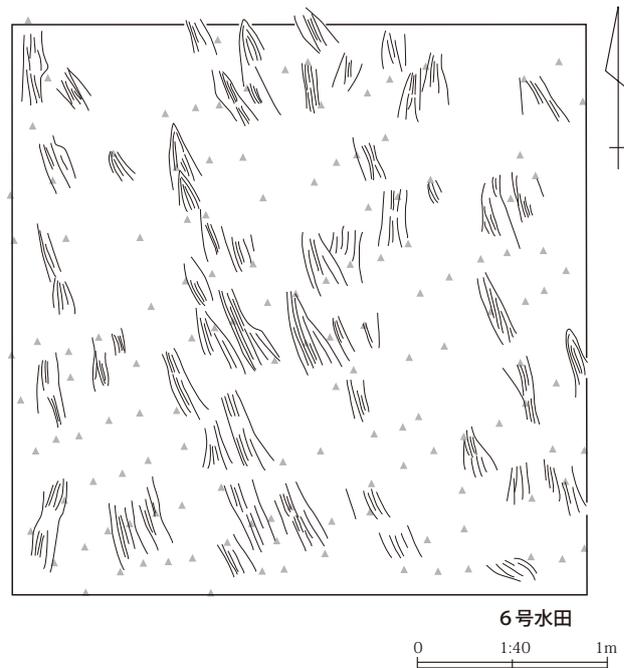
4号水田は南の5号水田より3～7cm高い。両水田は幅60～80cm、高さ4～6cmの畦で区切られ、この西端が幅50cmほど途切れて水口となり、5号水田へ水が流れた。水口は川原石で補強されている。水田面は東を流れる1号溝に向かって低くなる。1

- 12 明褐色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石を僅かに、黄褐色の砂を多く含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 13 明褐色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石、灰黄褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 14 灰白色土 シルト質に近い砂質土。14層との境に明黄褐色の砂が層状に入る。縮まり中。粘性弱。
- 15 明褐色土 砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石を僅かに、明黄褐色及び灰褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 16 砂礫層 明黄褐色及び灰褐色の砂と径50mm以下の白色軽石、礫によって構成される。明褐色シルト質土ブロックを含む。縮まり中、粘性極弱。
- 17 灰白色土 砂質に近いシルト質土。黄褐色及び赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性弱。
- 18 明褐色シルト質土 径10mm以下の白色軽石を少量、赤褐色紐状ブロックを含む。全体が黄褐色化している。縮まり中。粘性中。
- 19 明黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径3mm以下の白色軽石を僅かに、赤褐色紐状ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱。
- 20 灰黄褐色シルト質土 9層との境が黄褐色化している。径5mm以下の白色軽石を含む。赤褐色の砂を含む。縮まり中。粘性中。
- 21 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径50mm以下の白色軽石を僅かに含む。赤褐色の砂を含む。19層より黄色味が強い。縮まり中。粘性やや弱。

号溝を挟んで北東に接する2号水田より8～10cm高い。

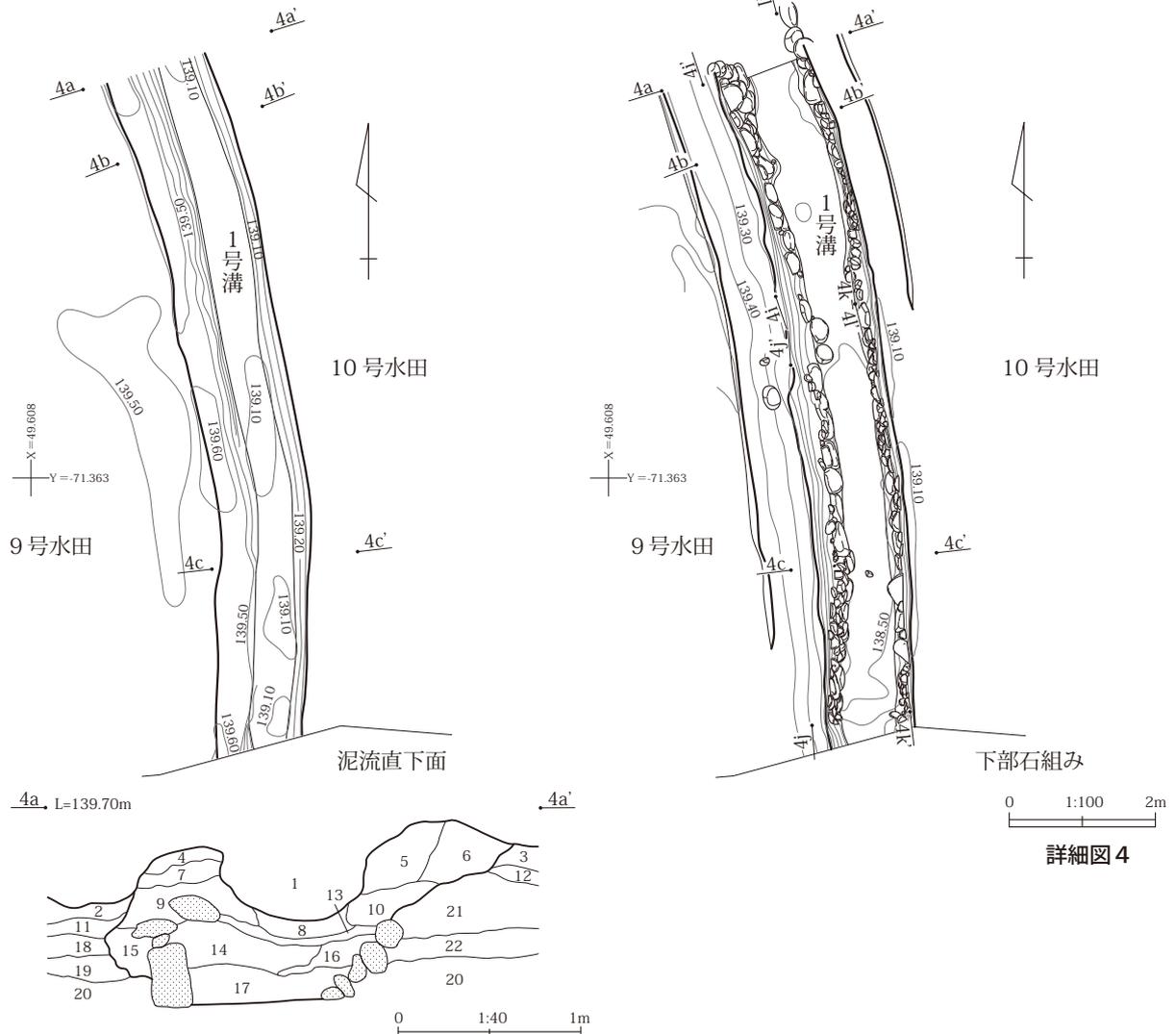
5号水田は東を1号溝に沿った幅30～75cm、田面からの高さ2～18cmの土手状の畦で区切られている。水田面は東を流れる1号溝に向かって低くなる。

1号溝を挟んで東に接する3号水田より4～5cm高く、12号水田より16～17cm高い。



詳細図3

第249図 桑原田遺跡 Ⅲ区詳細図3



第250図 桑原田遺跡 III区詳細図4 土層断面図

桑原田遺跡III区（1号溝）土層観察所見4aライン

- 1 天明泥流
- 2 灰白色シルト質土 径20mm以下の白色軽石僅か、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性中。
- 3 明褐色灰色シルト質土 径10mm以下の白色軽石、赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性中。
- 4 にぶい黄褐色砂質土 径30mm以下の白色軽石、礫を含む。締まり弱。粘性極弱。
- 5 明褐色灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石を少量、赤褐色の砂を含む。締まり弱。粘性中。
- 6 明褐色灰色シルト質土 径5mm以下の白色軽石、黄褐色及び赤褐色の砂を含む。締まり中。粘性中。
- 7 明褐色灰色砂質に近いシルト質土 径25mm以下の白色軽石、黄褐色の砂を含む。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 8 砂礫層 明黄褐色及び灰褐色の砂と径30mm以下の白色軽石。明褐色灰色シルト質土ブロック含む。締まりやや弱、粘性極弱。
- 9 明褐色灰色シルト質土 径50mm以下の白色軽石を僅かに、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 10 明褐色灰色シルト質土 黄褐色砂多く含む。締まり中。粘性中。
- 11 明褐色灰色シルト質土 径3mm以下の白色軽石を少量、黄褐色の砂を含む。締まり中。粘性中。
- 12 明褐色灰色シルト質土 2層との境が黄褐色化している。径15mm

以下の白色軽石を含む。締まり中。粘性中。

- 13 明褐色灰色砂質に近いシルト質土 灰褐色の砂を少量含む。締まりやや弱。粘性やや弱。
- 14 砂礫層 明黄褐色及び灰褐色の砂と径40mm以下の白色軽石、礫によって構成される。締まり中。粘性極弱。
- 15 明褐色灰色砂質に近いシルト質土 8層、10層との境黄褐色化。灰褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性やや弱。
- 16 明褐色灰色砂質に近いシルト質土 黄褐色砂多い。締まり中。粘性弱。
- 17 砂礫層 灰褐色の砂と径30mm以下の白色軽石、礫。締まり弱。粘性極弱。
- 18 明褐色灰色シルト質土 10層との境が黄褐色化。径15mm以下の白色軽石、黄褐色土粒子を含む。締まり中。粘性やや弱。
- 19 灰黄褐色シルト質土 径5mm以下の白色軽石少量含む。締まり中。粘性やや弱。
- 20 灰黄褐色砂質に近いシルト質土 径3mm以下の白色軽石を僅かに含む。締まり中。粘性弱。
- 21 灰黄褐色シルト質土 径10mm以下の白色軽石、11層との境が黄褐色化している。締まり中。粘性中。
- 22 灰黄褐色シルト質土 径10mm以下の白色軽石を少量含む。締まり中。粘性中。

第4章 遺構と遺物

8号水田は東が低く、北の5号水田より2～5cm高い。両水田は幅60～70cm、高さ2～8cmの畦で区切られ、この東端が幅35cmほど途切れて水口となり、8号水田から5号水田へ水が流れる。東は1号溝に沿った幅35～60cm、田面からの高さ9cmの土手状の畦で区切られる。1号溝を挟んで東に接する6号水田より23～27cm高く、7号水田より28～35cm高い。

9号水田は8号水田より僅かに高い。両水田は幅40～50cm、高さ4cmの畦で区切られている。東は1号溝に沿った幅30～40cm、田面からの高さ13～15cmの土手状の畦で区切られるが、畦の高まりが途中で消滅している。1号溝を挟んで東に接する7号水田より35～42cm高く、10号水田より39～47cm高い。水口は見られなかった。

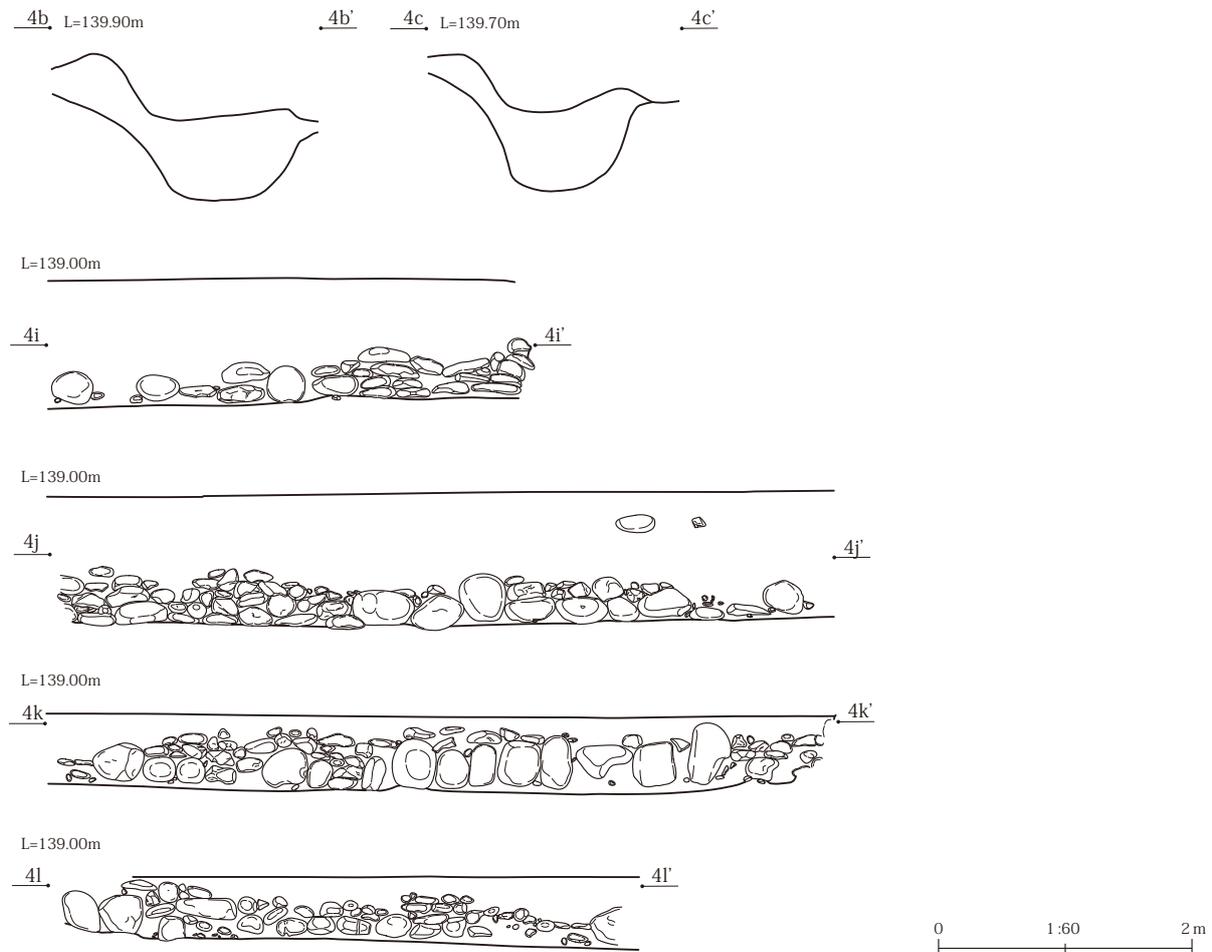
[1・2・3・6・7・10・12号水田]

(第243・244・246～250・252～255図 PL.116～118)

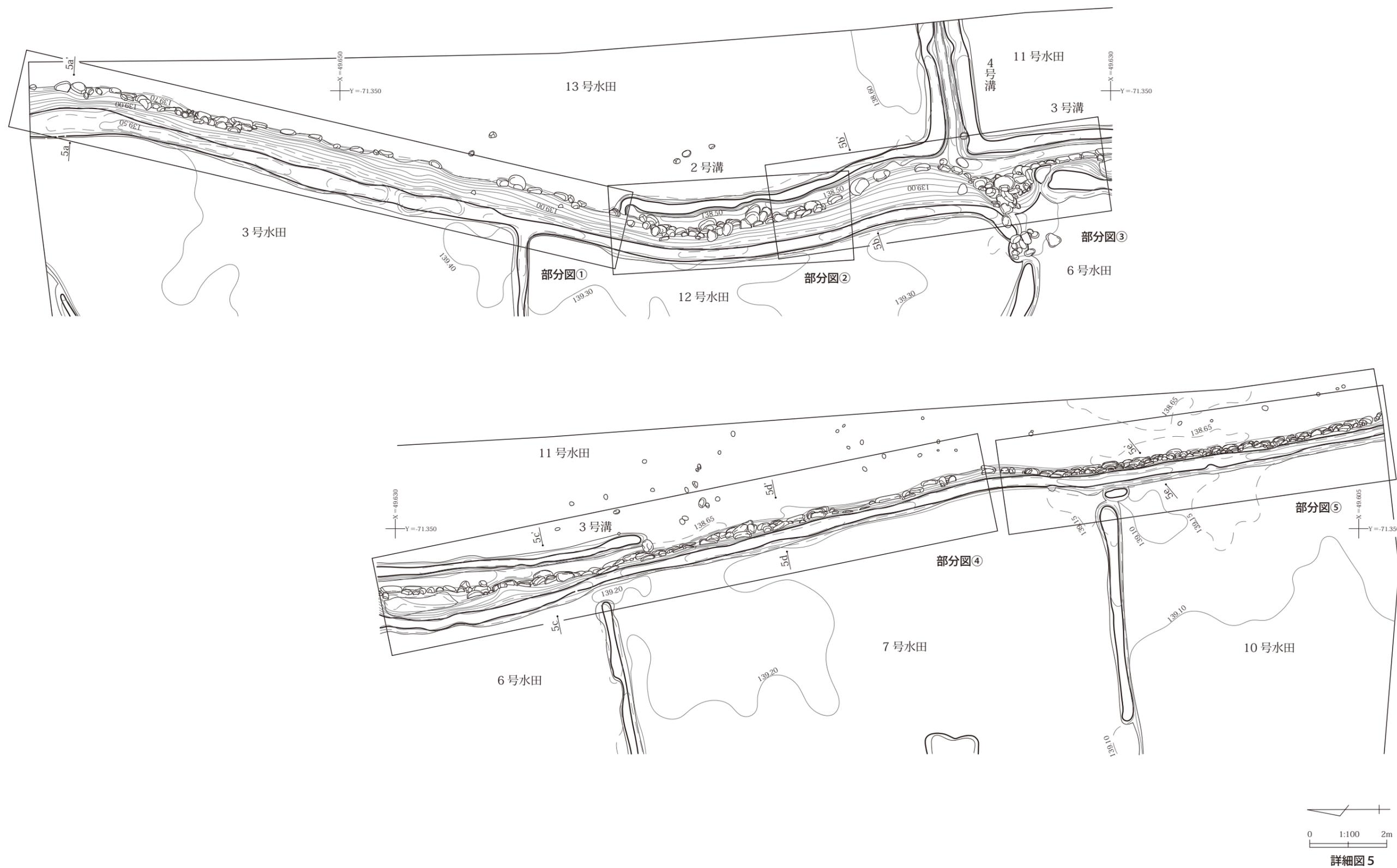
1号溝の東側にある。全体に北から南へ低くなっている。1号水田と2号水田は北部にあり、ごく一部を確認したのみである。1号溝が南西を流れている。1号水田と2号水田の標高はほぼ同じである。大部分が調査範囲外のため、詳細はわからないが、同じ1枚の水田である可能性が高い。

3号水田は1号水田の南にあり、1号水田より7～12cm低い。両水田は幅30～60cm、高さ7～8cmの畦で区切られ、南西部が攪乱されている。西は1号溝に沿った幅20～60cm、田面からの高さ15cmの土手状の畦で区切られ、12号水田まで続く。東は幅40～80cm、3号水田面からの高さ11～17cmの畦で区切られ、畦の東は一段低くなっている。東に接する13号水田より76～79cm高い。

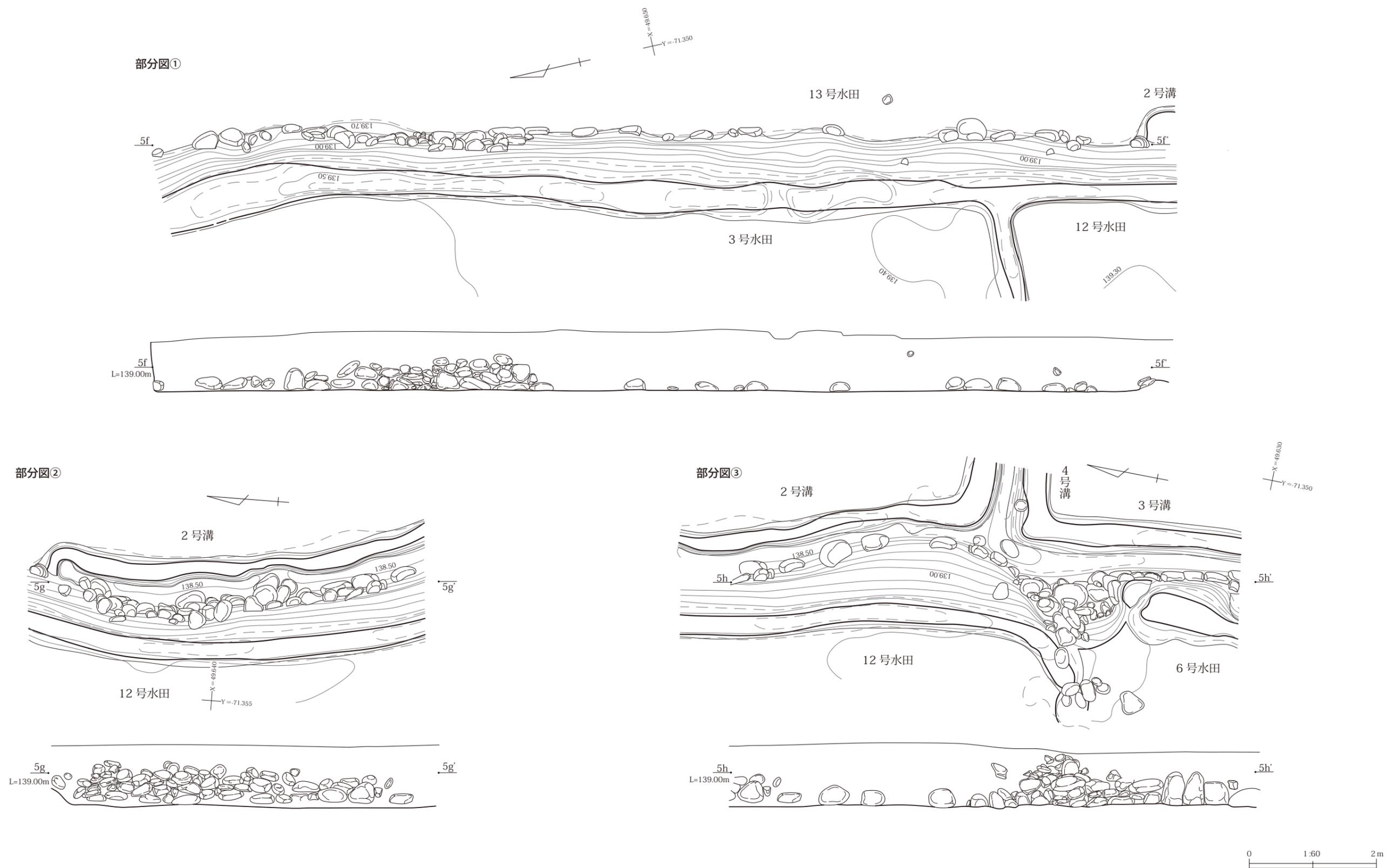
12号水田は北の3号水田より9～10cmほど低い。両水田は幅30～50cm、高さ14～19cmの畦で区切ら



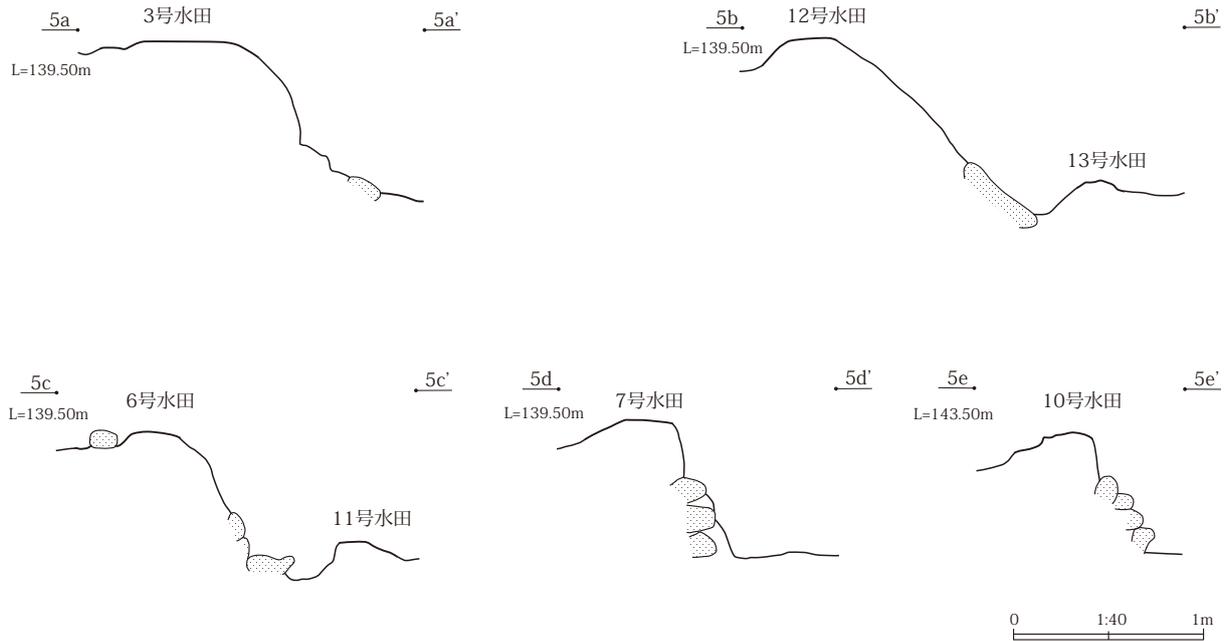
第251図 桑原田遺跡 III区詳細図4 高低図・立面図



第252図 桑原田遺跡 III区詳細図5



第253図 桑原田遺跡 III区詳細図5 部分図①～③ 立面図



第255図 桑原田遺跡 III区詳細図5 高低図

れ、この西端が幅15cmほど途切れて水口となり、12号水田へ水が流れる。

西は1号溝に沿った幅45～75cm、田面からの高さ19～24cmの土手状の畦で区切られ、この畦の南部が12号水田を囲むように南東へ延びて南の6号水田と区切っている。この6号水田と区切っている畦の幅は45～70cm、高さ11～13cmである。東は幅30～50cm、12号水田面からの高さ15～20cmの畦で区切られている。東に接する一段低い13号水田との比高差は64～66cmである。12号水田の南を囲むように東西の畦の先端が近づき、幅60cmほど間隔をあけて、水口をつくっている。水口は、川原石を積んで補強している。

6号水田は北の12号水田より2～8cm低い。北西から西は1号溝に沿った幅50～90cm、田面からの高さ11～28cmの土手状の畦で区切られ、この北端が幅20cmほど途切れて水口となり、1号溝から水が流れてくる。東は幅30～100cm、6号水田面からの高さ8～10cmの畦で区切られている。東に接する一段低い11号水田との比高差は54～57cmである。6号水田の北東隅は畦が途切れて幅90cmほどの水口となり、東の3号溝に落水する。水口は石垣を施して補強している。

7号水田は、北の6号水田より3～9cm低く、両水田は幅10～50cm、高さ10～13cmの畦で区切ら

れ、この両端が途切れて水口となっている。東端は幅40cm、西端は幅10cmの水口で、いずれも7号水田へ水が流れる。西は1号溝に沿った幅30～80cm、田面からの高さ31～33cmの土手状の畦で区切られ、一部川原石で補強されている。東は幅25～50cm、7号水田面からの高さ9～16cmの畦で区切られる。東に接する11号水田より46～55cm高い。

10号水田は北の7号水田より3～12cm低い。両水田は幅35～65cm、高さ9～17cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。東端、西端はともに幅30cmの水口でいずれも10号水田へ水が流れる。西は1号溝に沿った幅30～45cm、田面からの高さ19cmの土手状の畦で区切られ、川原石で補強されている。東は幅40～50cm、10号水田面からの高さ12～19cmの畦で区切られる。東に接する11号水田より44～52cm高い。

[11・13号水田]

(第243・244・246～248・252・254・255図 PL.116・117) 調査区の東部にあり、西側より一段低くなっている。段境の畦の壁面に大小の川原石を使用して石垣が施され、崩れないように補強している。大きい石を1枚貼り付けているところや、大小の石を組み合わせで石垣をつくっているところがある。この畦に沿って2号溝と3号溝がつくられている。上段の6号水田から3号溝へ落水した水が2号溝と3号溝に分か

第4章 遺構と遺物

れ、一度温められてから、それぞれ北の13号水田と南の11号水田へ運ばれたと思われる。11号水田と13号水田は4号溝によって南北に分けられている。11号水田と13号水田の間を走る4号溝の底部の標高は2号溝、3号溝より13～20cm低いが、調査範囲内では4号溝の傾斜が見られないため、2号溝と3号溝から4号溝へ水が流れたか、4号溝から2号溝、3号溝へ流れたのか詳細はわからない。

11号水田は北の13号水田より3～7cmほど高く、ほぼ平坦である。北は4号溝に沿った幅35～50cm、田面からの高さ5cmの土手状の畦で区切られ、この畦は南に折れて西の3号溝に沿った幅20～50cm、田面からの高さ6～12cmの畦に続いている。3号溝から11号水田へ取水されたと思われる。

13号水田は南を4号溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ5～9cmの土手状の畦で区切られ、この畦は北に折れて西の2号溝に沿った幅20～40cm、田面からの高さ5～10cmの畦に続いている。2号溝から13号水田へ取水されたと思われる。

稲株の穴はほぼ一直線上に規則的に並んで列をつくっている。列の方向は、北東-南西方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約15～24cm、列と列の間隔は約20～30cmである。調査範囲の北側で列と列の間隔がやや広がっている。

12号水田の足跡は、長さ22～42cm、幅11～19cmである。水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。足跡は爪先を畦の方向へ向けて左右交互に横向きに並んでおり、畦際を歩いたと思われる。

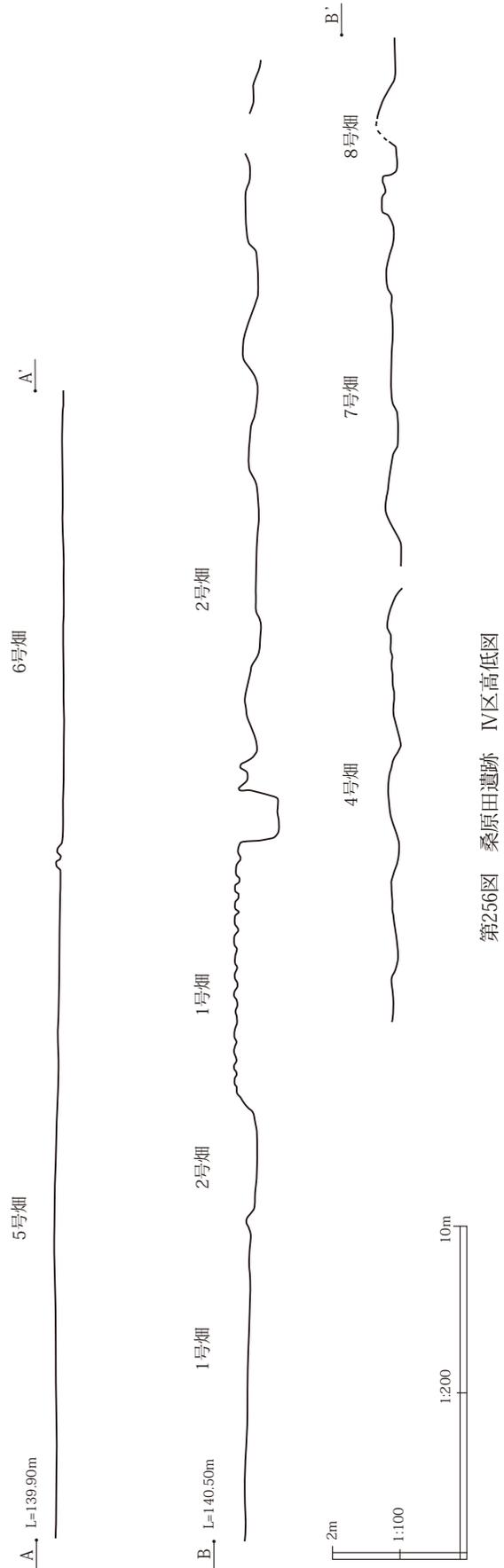
溝

1号溝 (第246～248・250・251図 PL.118～120)

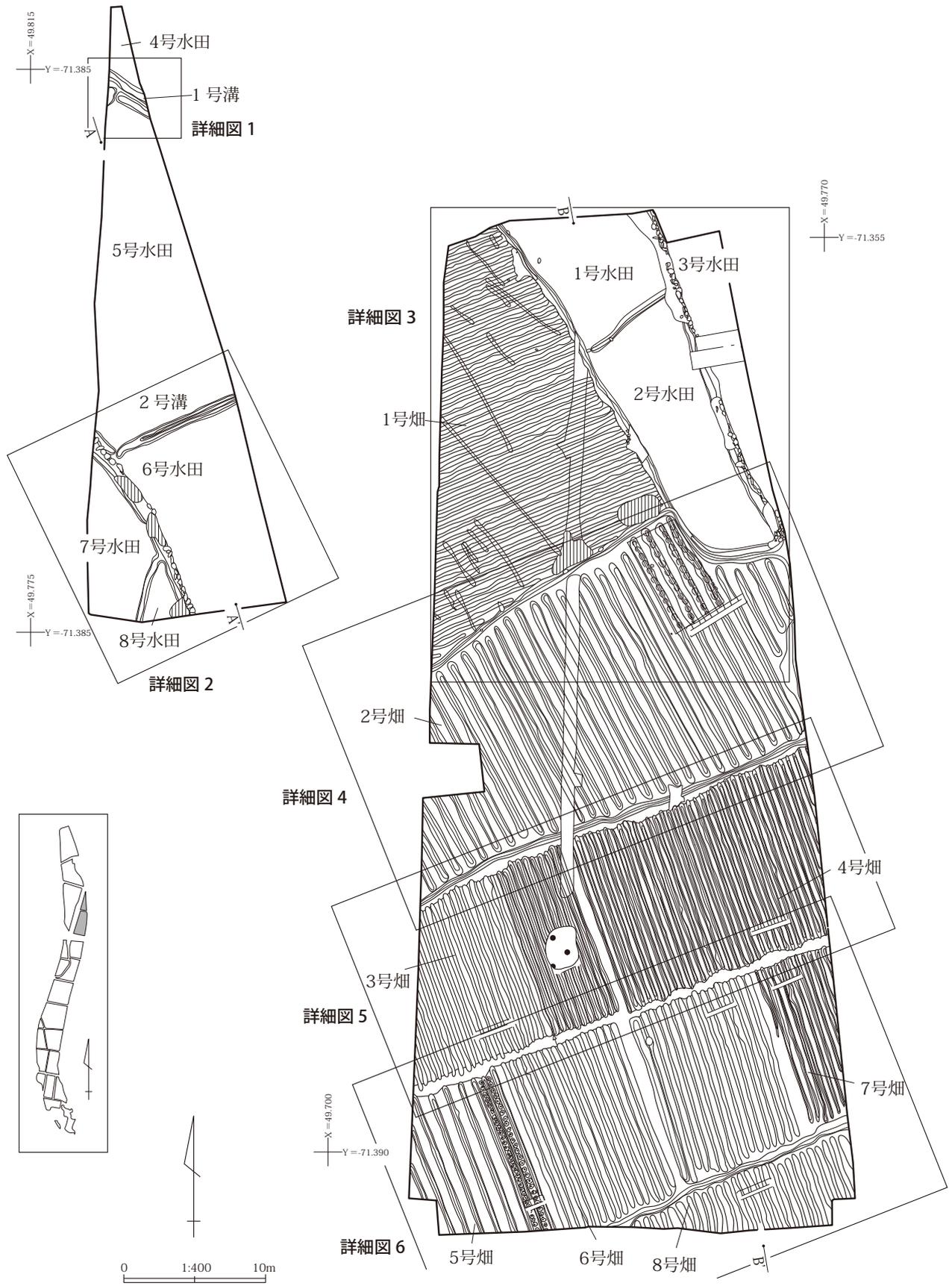
位置 X=49.600～49.655/Y=-71.355～-71.365

規模 長さ53.8m、幅(上端)0.8～1.35m(下端)0.35～0.7m、深さ0.2～0.41m

特徴 調査区の中央を流れる主要な用水路と考えられる。内壁を川原石で補強していた。天明泥流によって埋没した溝より前につくられた溝が確認でき、繰り返し補修をして利用されたと考えられる。

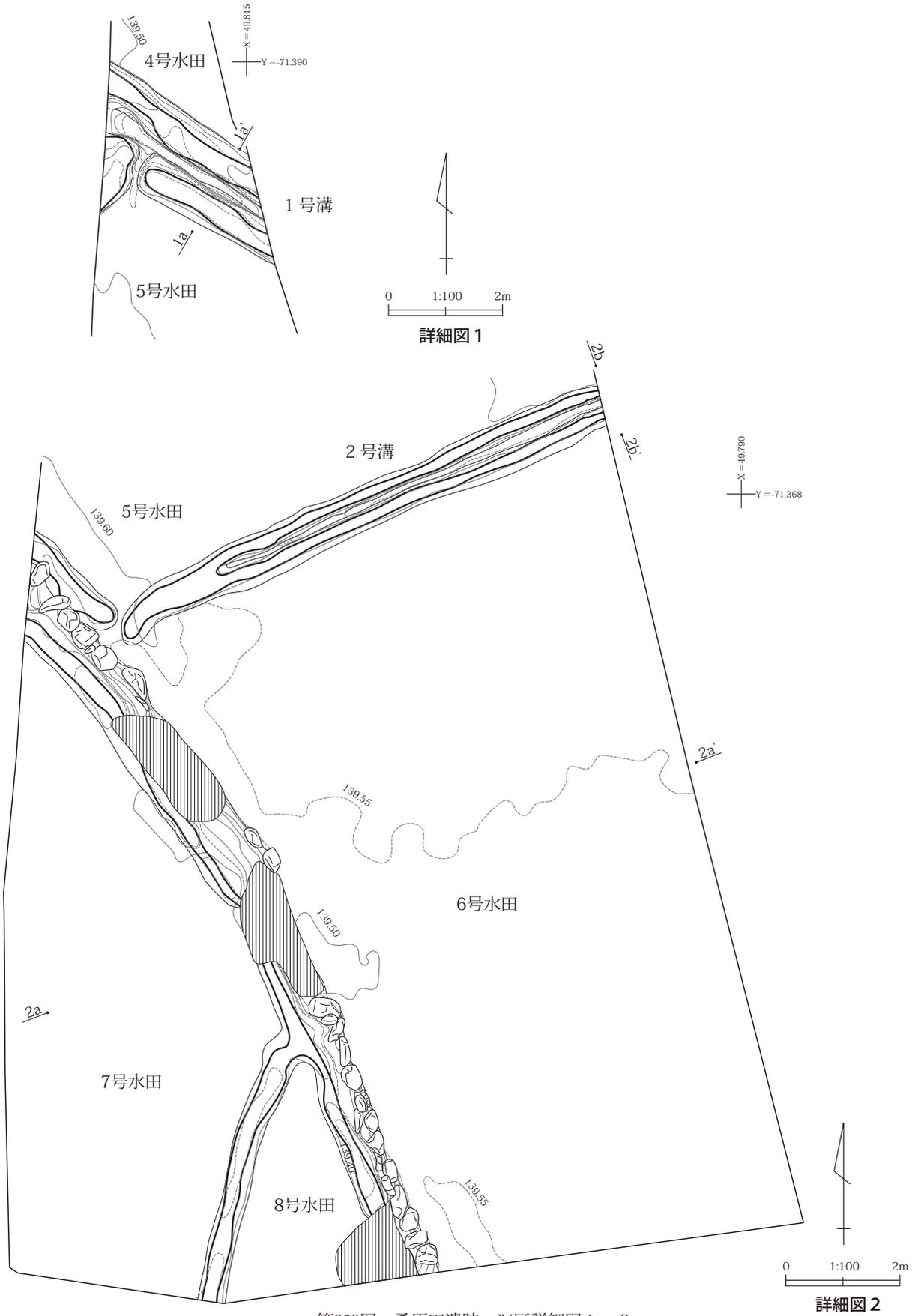


第256図 桑原田遺跡 IV区高低図



第257図 桑原田遺跡 IV区全体図

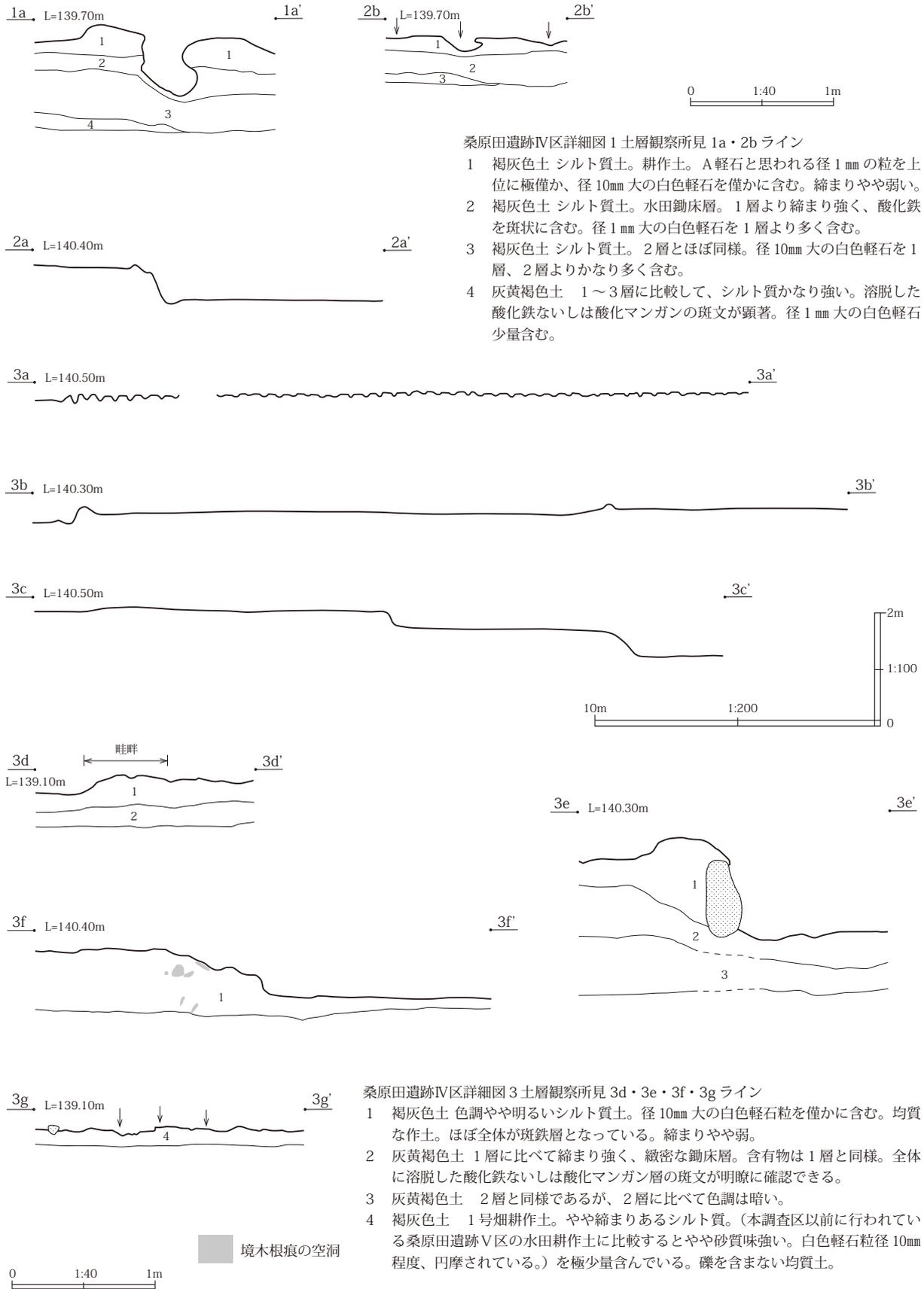
第4章 遺構と遺物



第258図 桑原田遺跡 IV区詳細図1・2



第259図 桑原田遺跡 IV区詳細図3



第260図 桑原田遺跡 IV区詳細図1～3 高低図・土層断面図

第4章 遺構と遺物

2号溝 (第246～248・252・253・255図 PL.120・121)

位置 X=49.630～49.640/Y=-71.350

規模 長さ9.1m、幅(上端)0.5～0.7m(下端)0.1～0.3m、深さ0.19～0.26m

特徴 東部の段境の下を流れ、3・4号溝と繋がる。傾斜はほとんどない。壁面を石垣で補強している。

3号溝 (第252～255図 PL.120・121)

位置 X=49.620～49.630/Y=-71.350

規模 長さ10.8m、幅(上端)0.3～0.5m(下端)0.2～0.5m、深さ0.17～0.3m

特徴 東部の段境の下を流れ、2号溝、4号溝と繋がっている。南から北へ若干傾斜している。段境の壁面を石垣で補強している。

4号溝 (第252・253図 PL.120・121)

位置 X=49.630/Y=-71.345～-71.350

規模 長さ3.6m、幅(上端)0.3～0.7m(下端)0.15～0.7m、深さ0.29～0.36m

特徴 ごく一部を確認したのみであるため、詳細はわからない。調査範囲内では傾斜は見られない。

IV区

調査区はIV区とIV区-2に分けて調査し、IV区で水田3枚、畑8枚、IV区-2で水田5枚、溝2条を検出した。水田番号及び畑番号は北から付けている。水田の形状

地形は西から東へ向かって低くなる。IV区の1・2号水田の西側から南側は畑が検出されている。IV区-2で最も高い7号水田と最も低い4号水田の標高差は62cmである。IV区で最も高い1号水田の北側と、最も低い3号水田の南側の標高差は約62cmである。水田は溝や畦によって分けられ、田面が整えられている。IV区-2からIV区にかけて、北西から南東へ延びる畦を境に段差が生じている。段境の西側に7・8・1・2号水田があり、東側の一段低いところに6・3号水田がある。段境の壁面は川原石で石垣をつくり補強している。5号水田の北側を1号溝、南側を2号溝が流れる。

水田の区画

[1・2号水田]

(第256・257・259～263図 PL.122～124・126)

IV区の北東部にある。1・2号水田は西から2号水田の南にかけて幅40～80cm、高さ5～24cmの畦で隣接する畑と区切られている。畦は2号水田の西側で特に高くなっている。

1号水田は3号水田より56～60cm高い。稲跡を検出した。北西から南東方向へ倒れているのが確認できる。稲株の穴はほぼ規則的に並んで列をつくっている。株穴の列の方向は、北東から南西方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～23cm、列と列の間隔は25～30cmである。

2号水田は1号水田の南にあり、1号水田より6～11cmほど低く、両水田は幅40～60cm、高さ13～16cmの畦で区切られ、この西端が幅30cmほど途切れて水口となり、2号水田へ水が流れる。水口は、川原石を置いて補強している。東は幅40～50cm、高さ16cmの畦で区切られているが、一部高まりが消滅しているところもある。南東の隅に水口があり、2号水田の水が3号水田へ落水したと思われ、川原石で石垣をつくり補強している。水田面は東の3号水田より47～53cm高い。

[3号水田] (第259・260・269図 PL.122・123)

1・2号水田の東にあり、一段低くなっている。西側の段境の壁面は大小の川原石を組み合わせで補強している。

[7・8号水田] (第258・260図 PL.122)

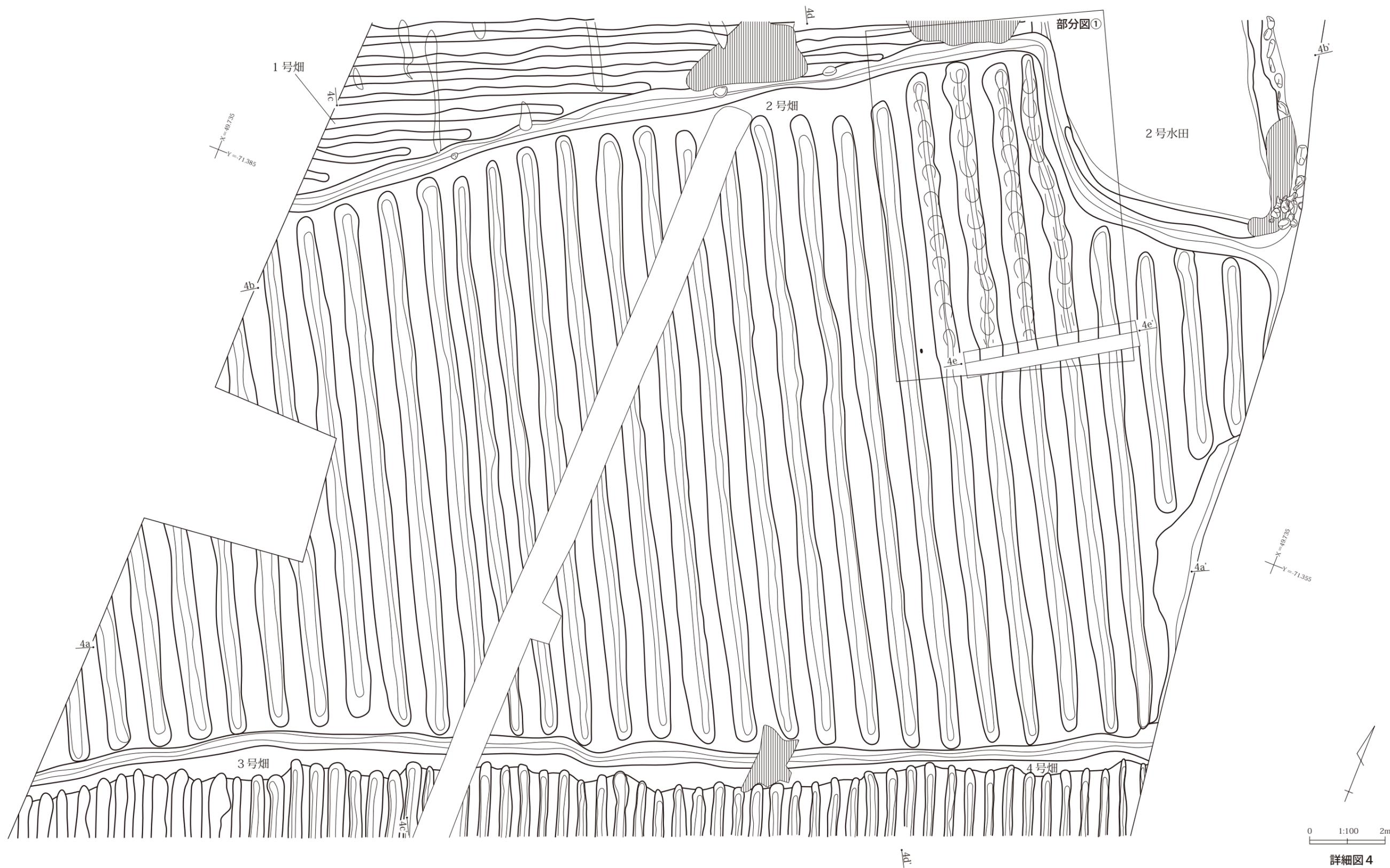
IV区-2の南西部にある。7号水田は東を幅60～65cm、7号水田面からの高さ1～8cmの畦で区切られる。6号水田より57～63cm、5号水田より55cmほど高い。

8号水田は7号水田の南にあり、7号水田より5cmほど低く、両水田は幅45～50cm、高さ8～12cmの畦で区切られている。東は幅35～50cm、8号水田からの高さ9cmの畦で区切られる。東の6号水田より49～56cm高い。

[4・5・6号水田] (第256～258・260図 PL.122)

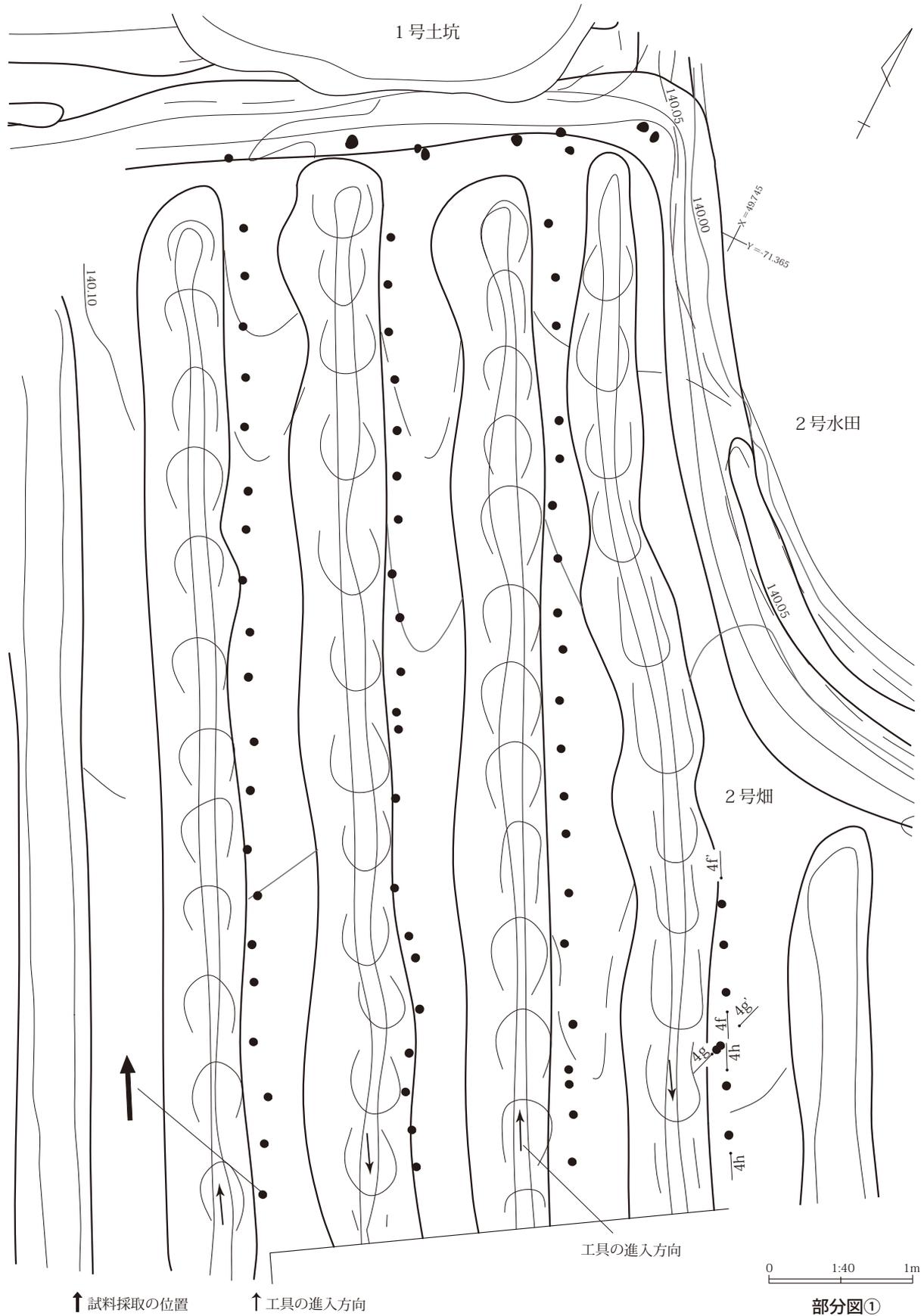
IV区-2の北から南に位置し、南西部の7・8号水田より一段低くなる。

4号水田は南側を1号溝が流れ、1号溝に沿った幅50～70cm、田面からの高さ10～12cmほどの土手



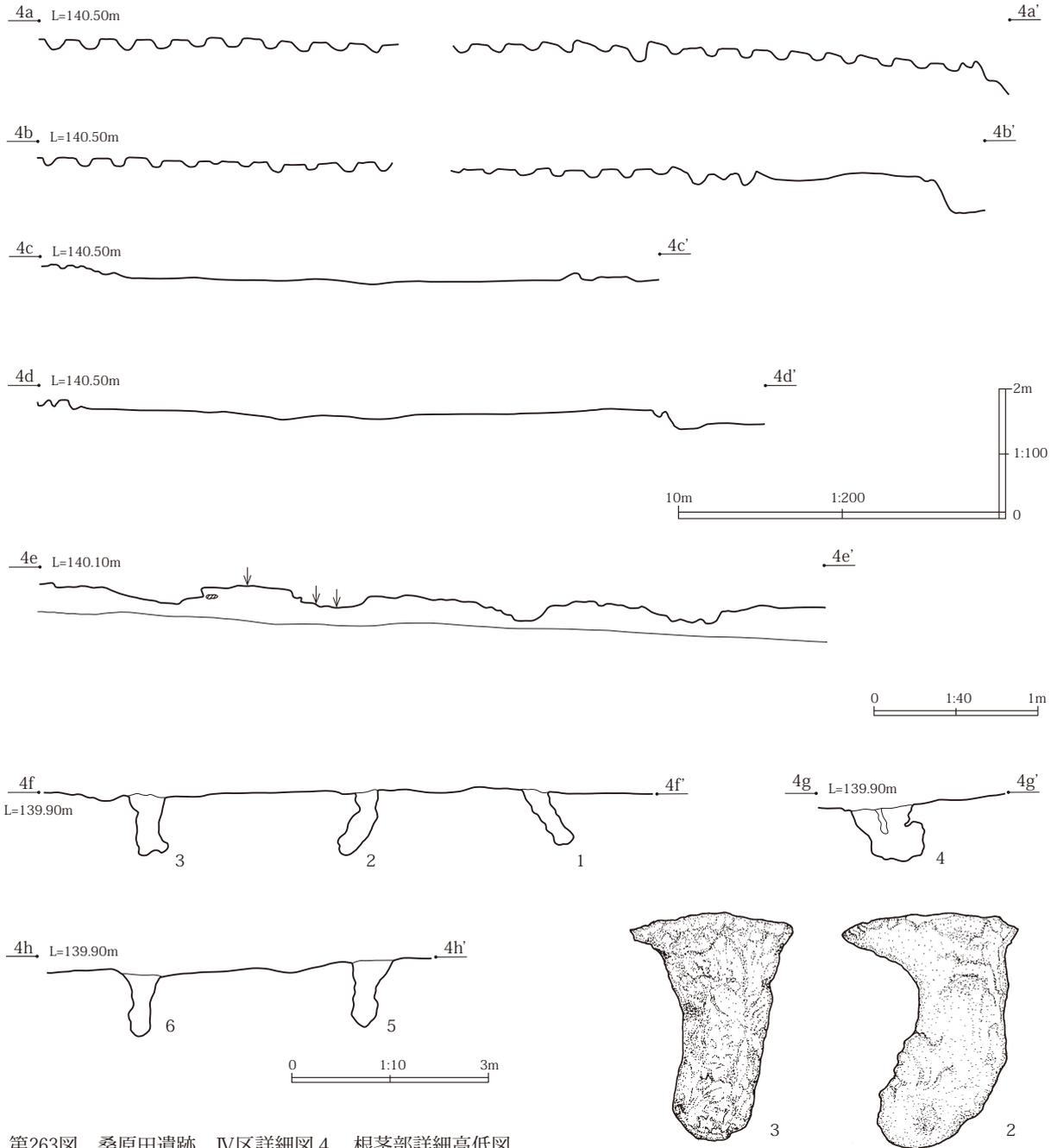
第261図 桑原田遺跡 IV区詳細図4

詳細図4

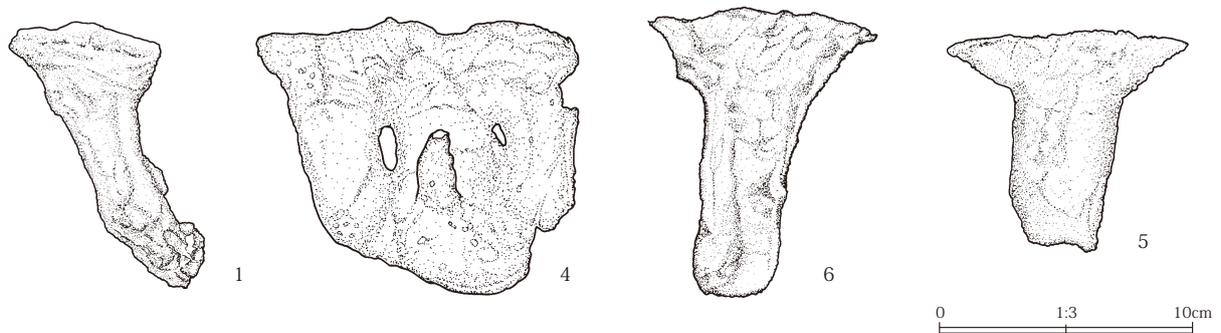


第262図 桑原田遺跡 IV区詳細図4 部分図①

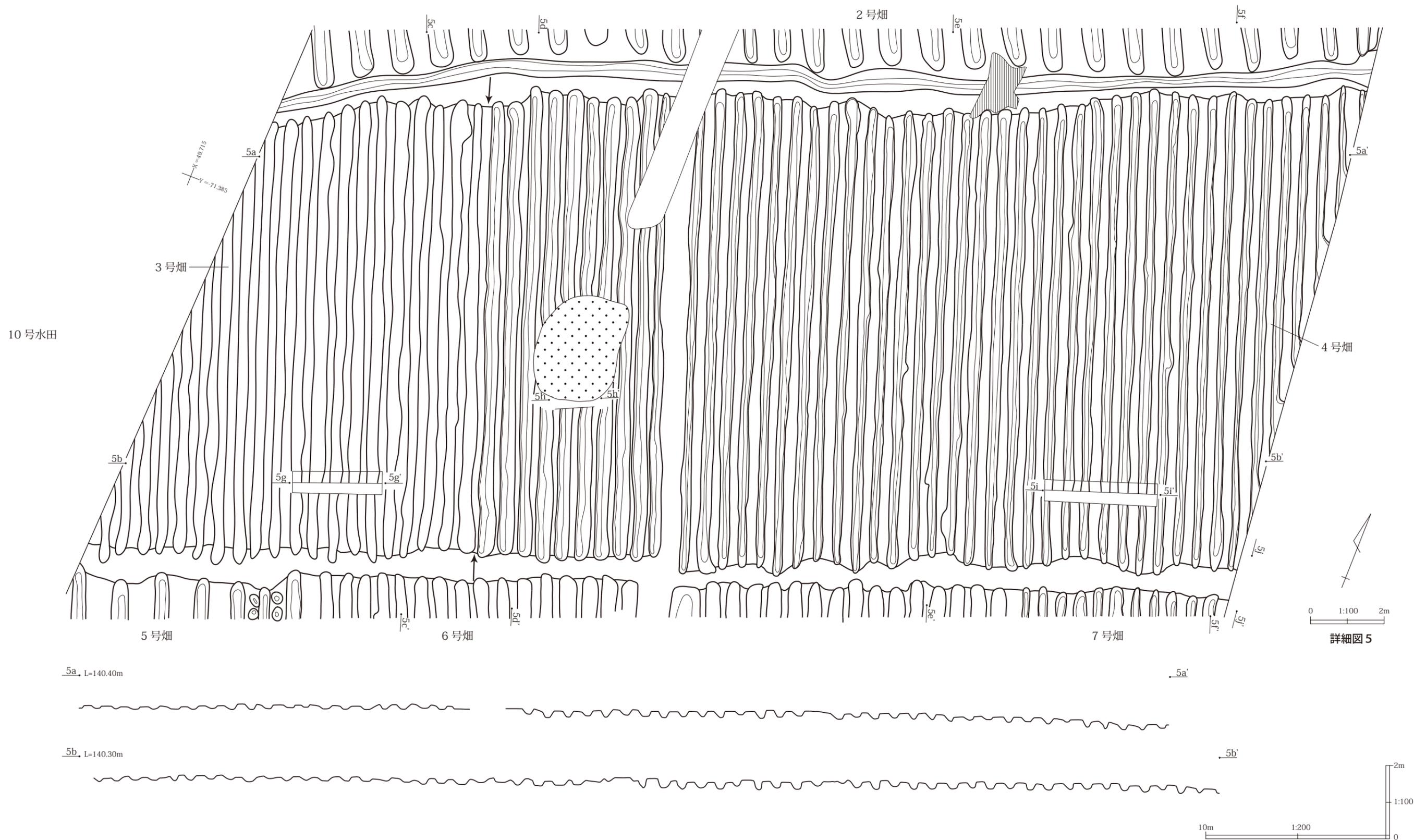
第4章 遺構と遺物



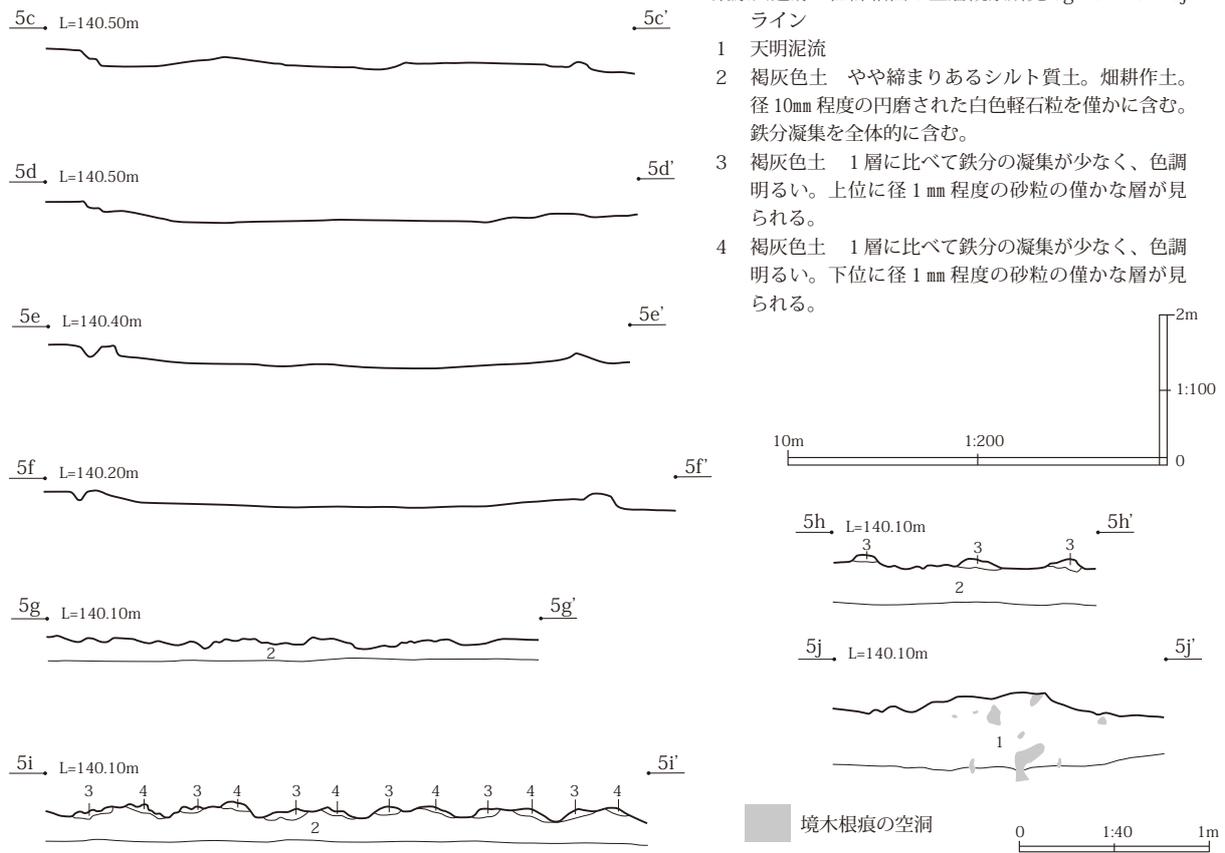
第263図 桑原田遺跡 IV区詳細図4 根基部詳細高低図



第264図 桑原田遺跡 IV区詳細図4 根基部石膏キャスト実測図



第265図 桑原田遺跡 IV区詳細図5 高低図1



第266図 桑原田遺跡 IV区詳細図5 高低図2・土層断面図

状の畦で区切られる。1号溝を挟んで南に接する5号水田より6～9cm低い。

5号水田は東と北がやや低くなっている。北は1号溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ10～11cmの畦で区切られている。この畦の途中が幅10cmほど途切れて水口となり、5号水田から1号溝へ排水される。南西部に境界から出ている幅60cm、高さ7cmほどの畦の一部が見られる。南は2号溝に沿った幅20～30cm、田面からの高さ2～4cmの畦で区切られる。2号溝西端では、底部が溝に沿った畦とほとんど同じ高さになり、溝が次第に消滅し、その延長に幅50～70cm、高さ1cmほどの畦が続いている。この畦の西端と西側の境界から一部出ている畦の間が幅10cmほど間隔が開いて水口となり、6号水田へ水が流れる。

6号水田は5号水田の南にあり、5号水田より2～5cm低く、北は2号溝に沿った幅30cm、高さ7cmほどの畦で区切られている。

溝

1号溝 (第258・260図 PL.129)

位置 X=49.810/Y=-71.375

規模 長さ3.4m、幅(上端)0.4～0.6m(下端)0.15～0.4m、深さ0.39～0.4m

特徴 しっかりと掘り込まれている。

2号溝 (第258・260図 PL.129)

位置 X=49.785～49.790/Y=-71.370～-71.375

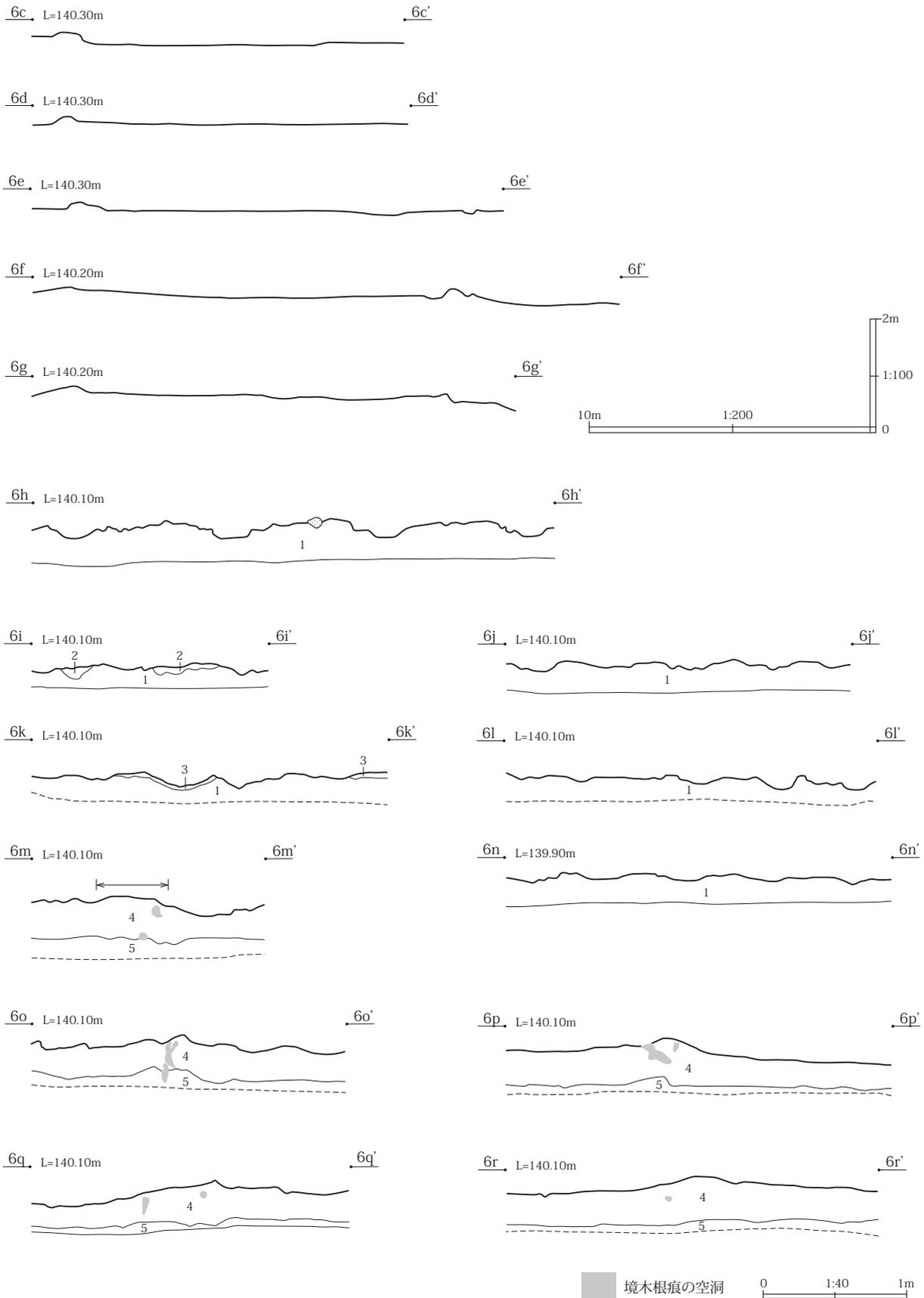
規模 長さ7.5m、幅(上端)0.2～0.3m(下端)0.1～0.2m、深さ0.07～0.11m

特徴 非常に幅が狭く浅い。

畑

地形は西から東へ向かって低くなり、さらに北から南へ緩やかな傾斜が見られる。北部の1号畑と南西部の5号畑の標高差は30～43cmで南西が低く、1号畑と南東部の8号畑の標高は50～64cmで南東が低い。各畑は北東から南西方向に区切られた地境

第4章 遺構と遺物



第267図 桑原遺跡 IV区詳細図6 高低図1・土層断面図1

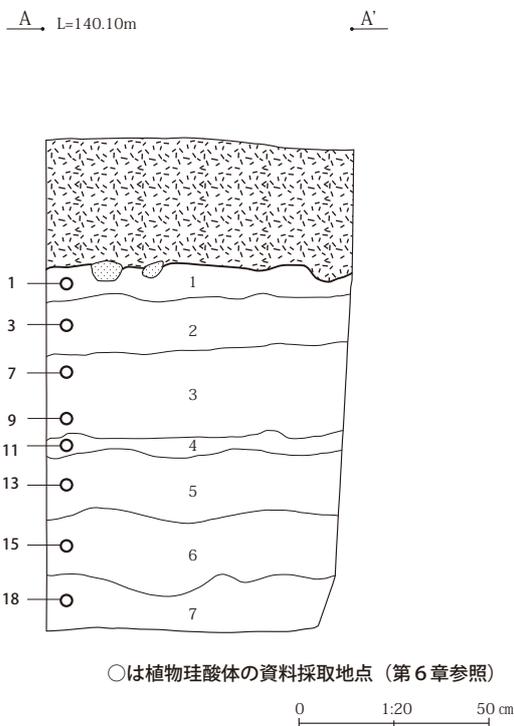


第268図 桑原田遺跡 IV区詳細図6 高低図2

ごとに南へ行くに連れて徐々に低くなる。

1号畑と2号畑の間、2号畑と3・4号畑の間、6・7号畑と8号畑の間には北東から南西方向に延びる幅40～60cmの道があり、踏み分け道に沿った両側の地境には境木の痕と思われる穴が多数見られた。

また3・4号畑と5・6・7号畑の間は幅50～100cmの間隔が開き、3号畑と4号畑の間に幅50～80cm、6号畑と7号畑の間に幅50～100cmの間隔が開いて地境となっている。地境には境木の痕と思われる穴が多数見られるが、5号畑と6号畑の間は境木の痕が確認できず、地境は明瞭ではない。



第269図 桑原田遺跡 IV区詳細図3 (3号水田部分) 土層断面図

桑原田遺跡IV区詳細図6土層観察所見 6h～6r ライン

- 1 褐灰色土 やや縮まりあるシルト質土。耕作土。径10mm程度の円磨された白色軽石粒を僅かに含む。鉄分凝集を全体的に含む。
- 2 褐灰色土 1層に比べてやや色調明るく、鉄分凝集はあまり見られない。やや土層が乱れ、部分的に炭化物と思われる黒色土が混入する。
- 3 褐灰色土 鉄分の凝集は全く見られない。
- 4 褐灰色土 色調やや明るいシルト質土。径10mm大の白色軽石粒を僅かに含む。均質な作土。ほぼ全体が斑鉄層となっている。1・2号水田より鉄分斑やや多い。縮まりやや弱。
- 5 灰黄褐色土 4層に比べて縮まり強く、緻密な鋤床層。含有物は4層と同様。全体に溶脱した酸化鉄ないしは酸化マンガン層の斑文が明瞭に確認できる。1・2号水田より色調やや暗い。

桑原田遺跡IV区土層 (3号水田部分) 土層観察所見

- 1 褐灰色土 3号水田作土。径1mmの白色軽石粒を上位に極僅かに含む。均質なシルト層。縮まりやや弱い。
 - 2 褐灰色土 3号水田鋤床層。1層より縮まり強い。斑鉄層。縦方向の酸化鉄(植物残渣か)が目立つ。径1mmの白色軽石粒を1層より多く含む。
 - 3 褐灰色土 2層とほぼ同様。径1mmの白色軽石粒を1・2層よりかなり多く含む。
 - 4 灰黄褐色土 1～3層に比して、シルト質かなり強い。溶脱した酸化鉄ないしは酸化マンガンの斑紋が顕著。径1mmの白色軽石粒を少量含む。
 - 5 灰黄褐色土 4層と同様で砂質味がやや強い。径1mmの白色軽石粒を全く含まない。
 - 6 褐灰色土 4・5層と同様で、縮まり若干弱い。4層から6層は一連の堆積層と考えられる。径1mmの白色軽石粒を全く含まない。
 - 7 灰黄褐色土 細粒砂層。不規則に川床円礫径20～30cmも見られるが、均質な川床砂と考えられる。径1mmの白色軽石粒を極少量含む。
- ※上位には天明泥流堆積物が約1.7m、現行水田の鋤床層20cm、現行水田耕土が30cmある。調査区北壁では天明泥流中に、酸化部分を持つ差し渡し2m以上の礫が見られ、3号畑上には厚さ最大0.8m、長軸2.5m、短軸2mの大きな礫が見られた。
 ※白色軽石は調査時点では天明泥流と見られているが、1層から4層についてはHr-FPないしHr-FAである可能性が高い。

第7表 桑原田遺跡IV区畑計測表

	面積		畝幅 (cm)	畝間間隔 (cm)	畝高 (cm)	畝の長さ (cm)	畝数 (列)	畝の走向
	(m ²)	(畝・歩)						
1号畑	289.5	2・27	30～40	20～30	2～5	—	54	東北東—西南西
2号畑	451.5	4・16	50～70	40～70	10～14	14.1～18.4	32	北西—南東
3号畑	179.8	1・24	20～30	20～30	2～4	11.6～12.7	30	北西—南東
4号畑	236.2	2・11	20～40	20～30	5～8	12.0～13.1	35	北西—南東
5号畑	93.4	・28	60～70	30～45	10～15	—	10	北西—南東
6号畑	130.3	1・9	10～30	30～40	2～5	13.0～13.4	15	北西—南東
7号畑	191.8	1・28	10～30	20～40	2～5	11.9～12.9	27	北西—南東
8号畑	66.5	・20	20～40	30～60	2～5	—	28	北西—南東

面積の算出はデジタルプランメーターを使用し、3回計測した平均値とした。

畝幅は上端から上端までの幅を計測し、畝間間隔は下端から下端までの幅を計測した。

畝の長さは全体が検出されているものについて計測し、計測不能なものについては—とした。

畝高は畝と畝間の標高差を計測した。

畝数については、検出されているものについて数えた。

畑の区画

[1号畑] (第256・257・259～261図 PL.124～126)

調査区の北部にある。畝の走向は東北東から西南西方向である。畝幅は30～40cm、畝間は20～30cm、畝高は2～5cmある。1号水田より25～26cm高く、2号水田より31～36cm高い。水田との境界は境木の痕と思われる穴が見られる。

[2号畑]

(第256・257・259・261～265図 PL.126～128・136)

北の1号畑より5～12cm低い。畝の走向は北西から南東方向である。畝幅は50～70cm、畝間は40～70cm、畝高は10～14cmである。1号畑より畝幅や畝間が広い。2号畑の北東部分では、イモと思われる塊茎痕穴が約30cm間隔で検出された。塊茎痕穴は畝の西寄りの位置に見られた。塊茎痕穴の石膏型取りを行い、完全な形で採取されたものを観察したところ、それぞれ形や大きさに個体差があるが、イモの可能性が考えられる。

[3号畑] (第261・265～268図 PL.124～127・129)

北の2号畑より18～25cm低い。畝の走向は北西から南東方向で、畝幅20～30cm、畝間20～30cm、畝高2～4cmである。1号畑と比較すると、畝幅はやや狭く、畝間はほぼ同じである。

[4号畑]

(第256・257・261・265～268図 PL.124～126・129)

北の2号畑より18～23cm低く、西の3号畑より8～21cm低い。畝の走向は北西から南東方向である。畝幅は20～40cm、畝間は20～30cm、畝高は5～8cmである。3号畑と比較すると、畝幅はやや広く、畝間はほぼ同じである。

[5号畑] (第265・267・268図 PL.126～127)

調査区の南西部で、北の3号畑より2～6cm低い。畝の走向は北西から南東方向である。畝幅は60～70cm、畝間は30～45cm、畝高は10～15cmである。2号畑と比較すると、畝幅はやや広く、畝間は狭い。

[6号畑] (第265・267・268図 PL.124～127・129)

調査区の南部で、3号畑より2～4cm低く、5号畑とほぼ同じ高さである。畝の走向は北西から南東方向である。畝幅は10～30cm、畝間は30～40cm、畝高は2～5cmである。3号畑と比較すると、畝幅はやや狭く、畝間はやや広い。

[7号畑]

(第256・257・265・267・268図 PL.124～127・129)

調査区の南東部で、北の4号畑より3～10cm低く、6号畑より10～17cm低い。畝の走向は北西から南東方向。畝幅は10～30cm、畝間は20～40cm、畝高は2～5cmある。6号畑と比較すると、畝幅はほぼ同じで、畝間はやや狭い。

[8号畑]

(第256・257・267・268図 PL.124・126・127)

調査区の最南部で、6・7号畑の南にある。6号畑より14～17cm低く、7号畑より8～12cm低い。畝の走向は北西から南東方向である。畝幅は20～40cm、畝間は30～60cm、畝高は2～5cmである。4号畑と比較すると、畝幅はほぼ同じで、畝間は広い。

V区

検出された遺構は、水田36枚、溝4条であり、残存状況は概ね良好であるが、水田面には泥流による無数の傷跡が残っている。水田番号は北から付けている。

水田の形状

地形は全体的に北から南へ傾斜している。また西が高く、東にかけて徐々に低くなる。最も標高の高い西部の24号水田と最も低い最南部の35号水田の標高差は1.17mである。水田は溝や畦によって区分けされ、田面が整えられている。

調査区のほぼ中央を東西に延びる湾曲した畦の北側と南側で水田の様子が異なる。北側では、地形に合わせてつくられた水田の大きさや形状は様々である。北西部が高く、棚田状の水田を形成している。南側では、西部が高く、棚田状の水田を形成している他は、傾斜の緩い水田が向きを揃えてつくられている。

1号溝は、調査区の北西から出て、6号水田を囲むように北から東を流れ、6号水田の南東隅で東へ折れて7号水田の南を走り、12号水田へ流れ込む。12号水田へ流れ込む手前で一部攪乱されている。

2号溝は、8・9号水田の北から8号水田の西を走っている。

3号溝は、12号水田の西に1号溝が流れ込む地点

よりやや南で始まり、12号水田の西から12・13号水田の南を流れる。

4号溝は調査区の西から出て21号水田の北を流れ、北東へ向きを変えて、19号水田の西を流れ、北西隅で終わる。

水田の区画

[1・2・3・4・5・7号水田]

(第270～275図 PL.130・132・133)

調査区の北部にある。1・2号水田が3・4・5・7号水田より一段高くなっており、棚田状の水田を形成している。

1号水田は最も標高が高く、南は1号溝が流れている。溝に沿った畦の高まりは見られず、水田面は1号溝に向かって低くなっている。東は段差が生じ、10～17cm低いところに2号水田がある。東側の畦も消滅している。

2号水田は東に接する3号水田より28～32cm高く、南に接する7号水田より24～25cm高い。東と南で畦の高まりは見られない。南西は1号溝に沿った幅30～50cm、田面からの高さ7～8cmの土手状の畦で区切られている。2号水田の南東隅と南西隅はいずれも幅50cmほどの水口があり、2号水田の水が7号水田へ落水した。水口は川原石を組んで補強している。

3号水田は西の2号水田より一段低くなり、南西の7号水田より3～6cm低い。3号水田と7号水田は幅60～80cm、高さ20cmほどの畦で区切られている。この畦は3号水田の南の2号溝に沿った幅40～60cm、田面からの高さ10～15cmの土手状の畦に続いている。

4号水田は3号水田の東にあり、3号水田より3～5cm低い。両水田は幅25～35cm、高さ8～12cmの畦で区切られ、この南端が幅40cmほど途切れて水口となり、4号水田へ水が流れる。水口は、水流で田面が削られないように川原石を置いて補強したと思われる。水田面は東がやや低くなっている。南は2号溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ7～9cmの土手状の畦で区切られ、この畦の西部が幅20cmほど途切れて水口となり、4号水田から2号溝へ排水される。

5号水田は4号水田の東にあり、4号水田より1～3cm低い。両水田は幅30～40cm、高さ3cmの畦で区切られ、この南端が幅30cmほど途切れて水口となり、5号水田へ水が流れる。南は2号溝に沿った幅40～55cm、田面からの高さ4～5cmの土手状の畦で区切られている。

7号水田は2号水田の南にあり、一段低くなっている。西から南側を1号溝が流れる。西は1号溝に沿った土手状の畦が部分的に残っている。畦の幅は20～55cm、田面からの高さ8～18cmである。1号溝を挟んで隣接する6号水田より12～25cm低い。南は1号溝に沿った幅40～80cm、田面からの高さ6～15cmの土手状の畦で区切られている。南側に攪乱があり、畦が部分的に消滅している。北東は3号水田に接し、両水田を分けている畦は南へ延び、東側を走る2号溝に沿った幅45～80cm、田面からの高さ11～17cmの土手状の畦に続いている。この畦の南部が途中で幅30cmほど途切れて水口となり、7号水田から12号水田へ水が流れる。水口は複数の川原石を使って、水流で田面が削られないように補強したと思われる。

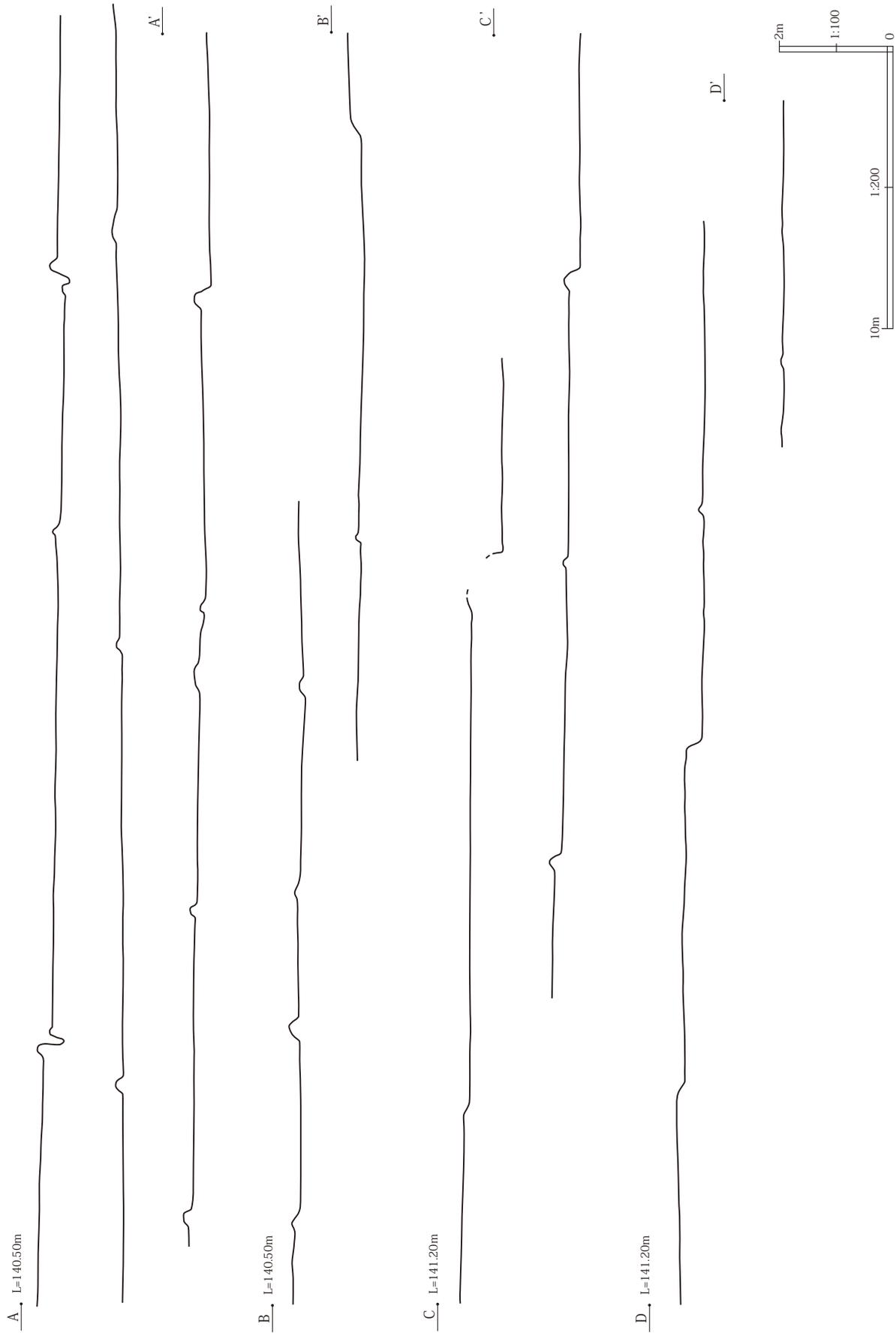
[8・9・12・13号水田]

(第270～272・274・275図 PL.130～133)

調査区の北部にあり、2号溝と3号溝に囲まれている。

8号水田は北から南へ低くなっている。北と西を2号溝に沿った幅15～30cm、田面からの高さ2～9cmの畦で区切られている。北側の畦の途中が幅50cmほど途切れて水口となり、2号溝から8号水田へ取水される。2号溝を挟んで北に接する3号水田より14～16cm低く、4号水田より6～11cm低い。また西に接する7号水田より15～22cm低い。

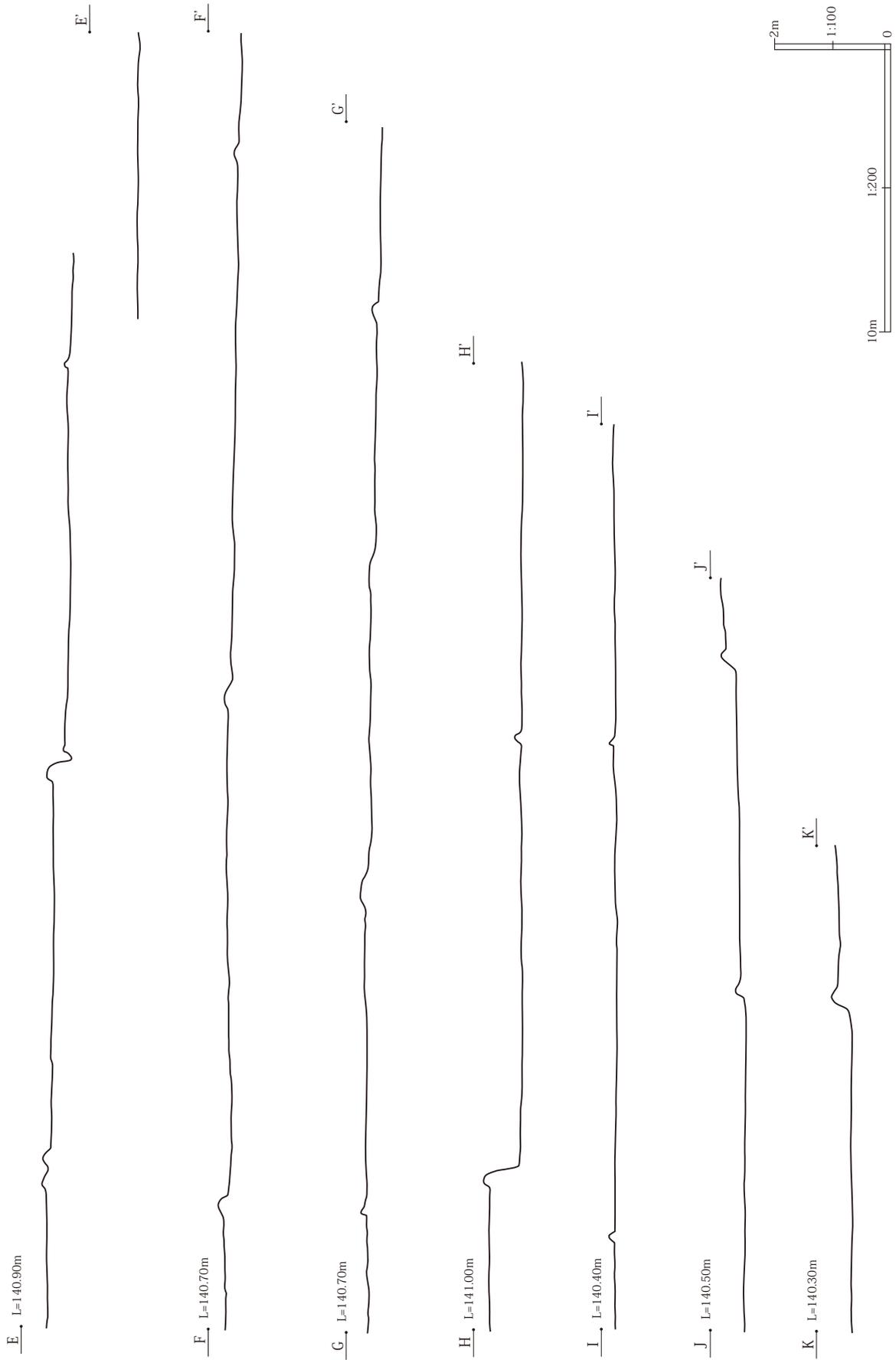
9号水田は8号水田の東にあり、8号水田より2～5cm低い。両水田は幅30～50cm、高さ7～14cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅15cm、南端は幅10cmの水口でいずれも9号水田へ水が流れる。北は2号溝に沿った幅20～30cm、田面からの高さ2～7cmの土手状の畦で区切られている。2号溝を挟んで北に接する4号水田より11～13cm低く、5号水田より12～13cm低い。南東は、13号水田との間に段差が生じ、幅60cm、9



第270図 桑原田遺跡 V区高低図1



第271図 桑原田遺跡 V区全体図



第272図 桑原田遺跡 V区高低図2

第4章 遺構と遺物

号水田面からの高さ16cmの畦の一部が見られる。

12号水田は、8・9号水田の南にあり、幅20～50cm、高さ8～12cmの畦で区切られている。8号水田より4～6cm低く、9号水田より2～4cm低い。北西に接する7号水田より22cmほど低い。3号溝を挟んで西に接する11号水田より16～18cm低く、南に接する15号水田より11～15cm低い。12号水田面は東が低くなっている。西の7号水田と1号溝から取水され、また北西隅の2号溝から取水される。1号溝が流れ込んだ地点よりやや南で3号溝が始まり、12号水田の西から南を流れ、3号溝に沿った幅30～45cm、田面からの高さ4～11cmの土手状の畦で区切られる。この畦の東端が幅1mほど途切れて水口となり、12号水田の水が3号溝へ排水される。水口は川原石で補強されている。水口から2.5mほど西で3号溝に沿った土手状の畦の南側壁面に漆器と思われる木製品がめり込んでいる状態で見つかった。泥流に流されてきたと考えられる。自然科学分析を行った結果、漆であることを確認した。塗膜は1層のみであり、赤色顔料はベンガラであることがわかった。下地層は炭化していた。通常漆器の塗膜は何層も重ねられるが、ここで見つかった漆器は1層のみで、泥流に流される中で上層が剥がれたと考えられる。

13号水田は、12号水田の東にあり、一段低くなっている。12号水田より29～33cm低く、北西の9号水田より35～36cm低い。段境の壁面は川原石を貼り付けて補強している。南は3号溝に沿った幅40～60cm、田面からの高さ20cmほどの土手状の畦で区切られている。3号溝を挟んで南に接する15号水田より49cmほど低く、16号水田より45cmほど低い。

[6・10・11・14・20号水田]

(第270～273・276・277図 PL.130・132・133)

調査区の西部にある。

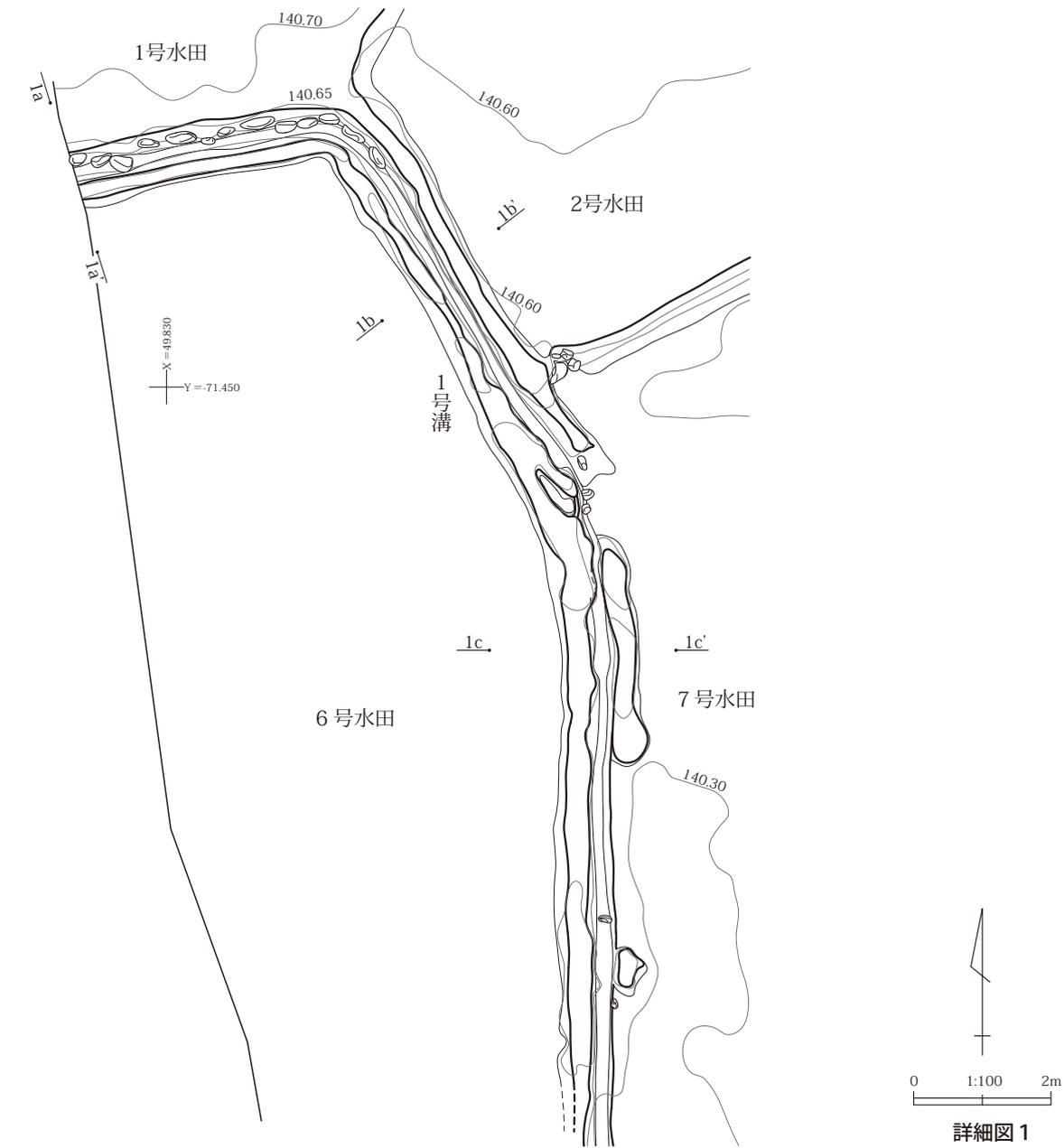
6号水田は北から東を1号溝が流れ、溝に沿った幅25～70cm、田面からの高さ4～11cmの土手状の畦で区切られている。東側の畦は途中で消滅している。北側の畦のほうが幅が狭い。1号溝を挟んで北に接する1号水田より20～25cm低く、北東に接する2号水田より13～16cm低く、東に接する7号水田より12～25cm高くなっている。

10号水田は6号水田の南にあり、6号水田より5～7cm低い。両水田は幅40～80cm、高さ8cmの畦で区切られ、この東端が幅50cmほど途切れて水口となり、6号水田から10号水田へ水が流れる。また、6号水田の東側の畦が消滅しているため、水口の範囲は明確でないが、6号水田から1号溝へも水が流れたと思われる。

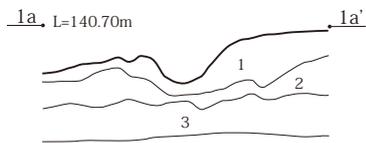
14号水田は10号水田の南にあり、10号水田より2～4cm低い。両水田は幅30～60cm、高さ10～11cmの畦で区切られ、この東端が幅40cmほど途切れて水口となり、14号水田へ水が流れる。南東は幅40～110cm、田面からの高さ3～10cmの畦で15・17号水田と区切られ、この北端が幅50cmほど途切れて水口となり、15号水田へ水が流れる。14号水田は15号水田より13～16cm高く、17号水田より11～16cm高い。また19号水田との間に4号溝が流れ、4号溝に沿った幅50～70cm、高さ4～6cmの土手状の畦で区切られている。この畦の北端と、14号水田と15・17号水田とを区切る畦の南端の間が幅90cmほど途切れて水口となり、14号水田から17号水田と19号水田へ水が流れる。14号水田は19号水田より13～16cm高い。

20号水田は14号水田の南西に接し、14号水田より1～4cm高く、両水田は幅30～40cm、高さ4～9cmの畦で区切られる。水口は見られない。南は4号溝に沿った幅50～85cm、田面からの高さ5～8cmの土手状の畦で区切られる。4号溝を挟んで南に接する21号水田より9～11cm高く、19号水田より14～15cm高い。

11号水田は10号水田の東に接し、14号水田の北に接する。10号水田より15～18cm低く、14号水田より3～11cm低い。幅40～80cm、高さ12～26cmの畦で10・14号水田と区切られる。10号水田側の畦が高くなっている。北は一部攪乱されているが、11号水田の北から東側の途中まで1号溝が流れ、1号溝に沿った幅25～50cm、田面からの高さ3～12cmの土手状の畦で区切られている。東側の畦が低くなっている。この畦の西端が幅50cmほど途切れて水口となり、1号溝から取水される。1号溝を挟んで北に接する7号水田より1～4cm低い。また、東側で1号溝より南は幅60～95cm、高さ11～20cmの畦で区切られている。東に接する15号水田より6～10cm

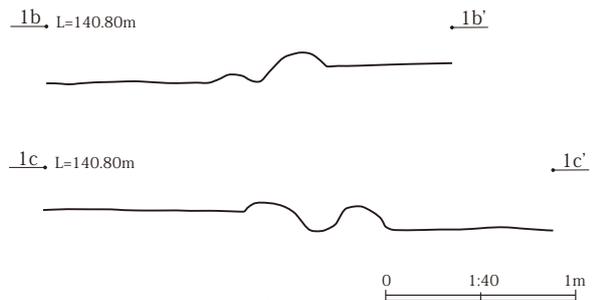


詳細図1



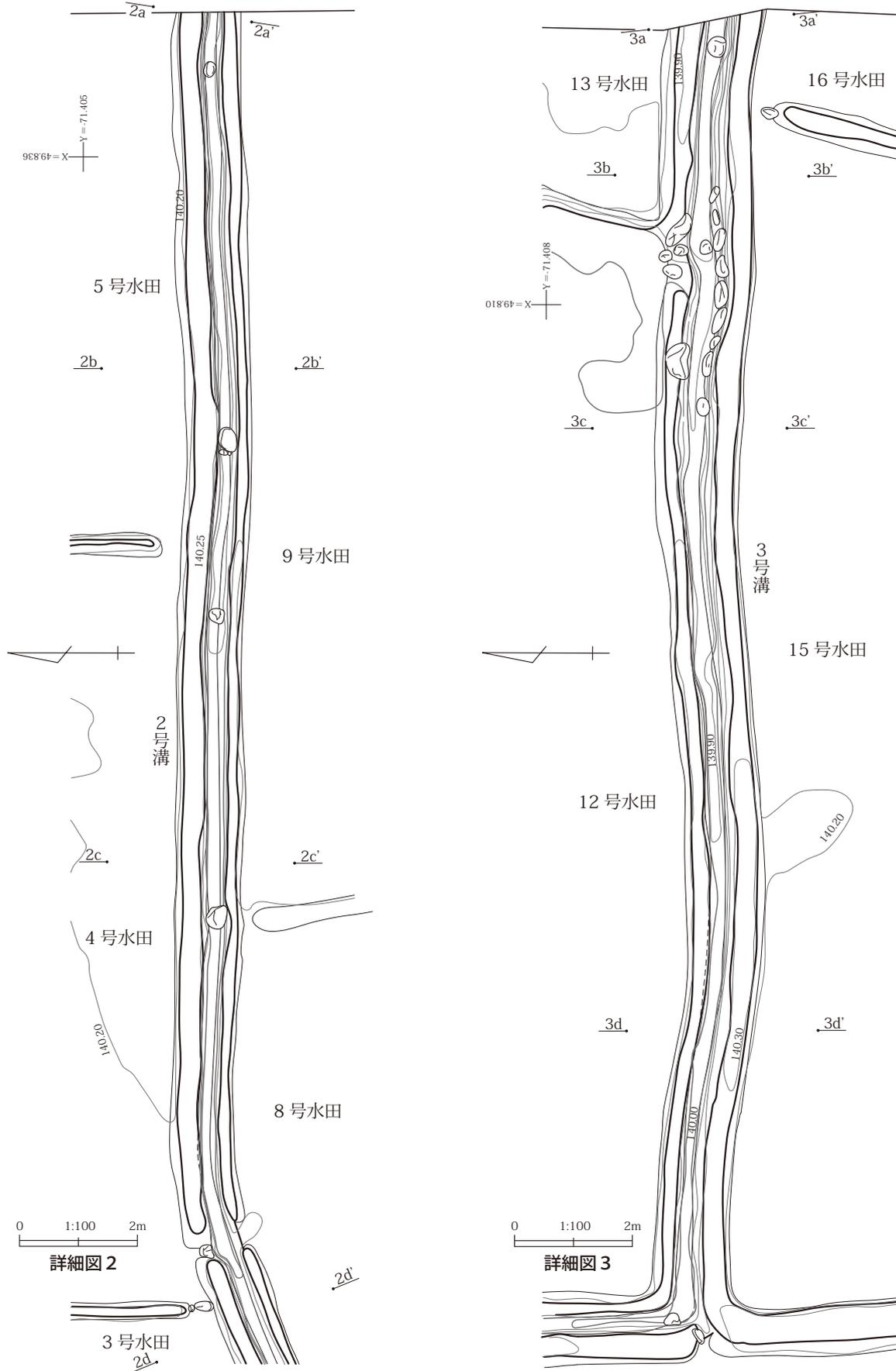
桑原田遺跡V区土層観察所見 1a ライン

- 1 褐灰色シルト質土 径10～20mm程度の軽石を少量、赤褐色土粒子を含む。締り中。粘性中。
- 2 褐灰色シルト質土 1層より暗い色調。黄褐色の細砂粒、赤褐色の砂、径10～20mm程度の軽石を少量含む。締り中。粘性中。
- 3 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。2層より黄褐色の細砂粒を多量、赤褐色の砂、径10～30mm程度の軽石を僅かに含む。締り中。粘性弱。

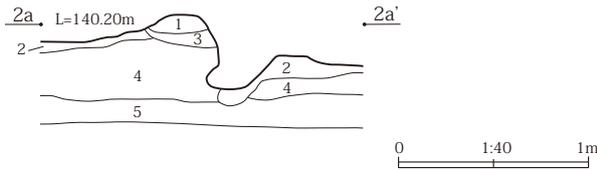


第273図 桑原田遺跡 V区詳細図1 高低図・土層断面図

第4章 遺構と遺物

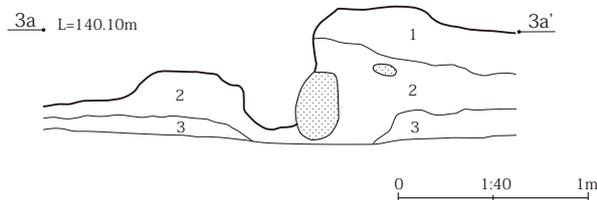


第274図 桑原田遺跡 V区詳細図2・3



桑原田遺跡V区土層観察所見 2a ライン

- 1 褐灰色シルト質土 黄白色の細砂粒を多量、赤褐色の砂を含む。締まり弱。粘性中。
- 2 褐灰色シルト質土 極め細かい暗褐色の砂のブロックを含む。締まり弱。粘性中。
- 3 褐灰色シルト質土 暗褐色の細砂粒を層状に含む。1層より極めの粗い黄白色の砂を多く含む。赤褐色の砂を含む。締まり弱。粘性中。
- 4 褐灰色シルト質土 径10～20mm程度の軽石を僅かに、赤褐色土粒子を含む。締まり中。粘性中。
- 5 褐灰色シルト質土 4層より暗い色調。黄褐色の細砂粒及び径10～20mm程度の軽石を少量含む。締まり中。粘性中。



桑原田遺跡V区土層観察所見 3a ライン

- 1 褐灰色土 シルト質土。径10～20mm程度の軽石を僅かに、赤褐色土粒子を含む。締まり中。粘性中。
- 2 褐灰色土 シルト質土。1層より暗い色調。黄褐色の細砂粒及び径10～20mm程度の軽石を少量含む。締まり中。粘性中。
- 3 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。2層より黄褐色の細砂粒を多量、径10～30mm程度の軽石を僅かに含む。締まり中。粘性弱。

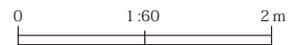
2b, L=140.50m



2c, L=140.50m



2d, L=140.60m



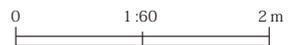
3b, L=140.60m



3c, L=140.60m



3d, L=140.60m



第275図 桑原田遺跡 V区詳細図2・3 土層断面図・高低図

高い。11号水田の南東隅は畦が幅50cmほど途切れて水口となり、15号水田へ水が流れる。

[15・16・17・18・19号水田]

(第270～272・274～276・280図 PL.130～133)

調査区の中央部から東部にある。南西の19号水田が最も標高が高く、全体に南西から北東へ傾斜している。南は幅40～80cm、高さ5～18cmの畦が17・18・19号水田と21・22号水田を区切っている。

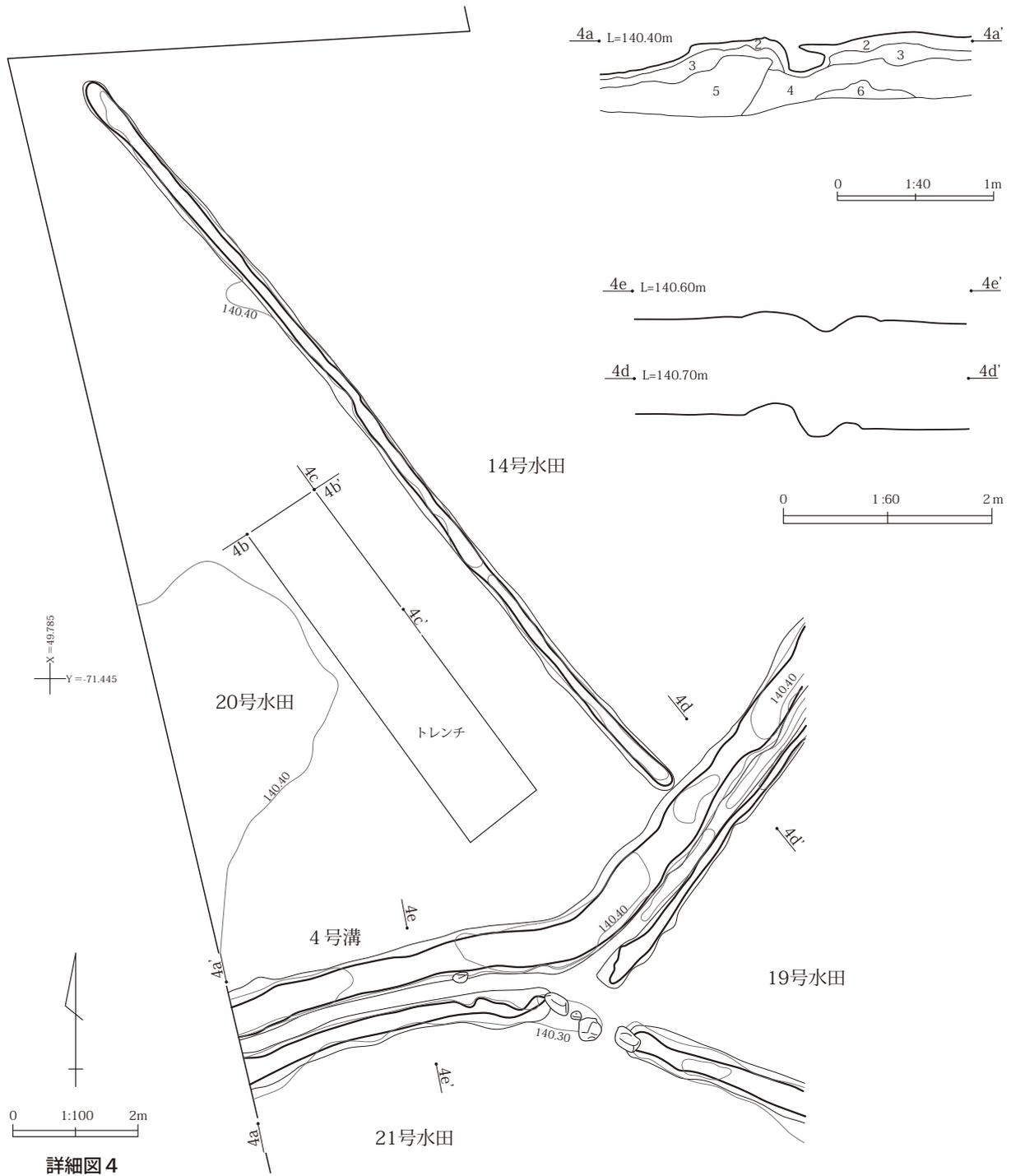
19号水田は17号水田の中を北から東を畦で囲んで区切っている。この畦の幅は40～80cm、高さ9～16cmである。東側の畦の南端が幅60cmほど途切れて水口となり、17号水田へ水が流れる。西は4号溝に沿った幅15～45cm、田面からの高さ4～8cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅30cmほどの水口で、4号溝と北西に接する14号水田から取水される。南端は幅60cmほどの水口

で、4号溝から取水される。

17号水田は19号水田より1～3cm低い。水田面は東がやや低い。北は幅35～60cm、高さ9～14cmの畦で15号水田と区切られ、この西端が幅30cmほど途切れて水口となり、15号水田へ水が流れる。

18号水田は17号水田の東にあり、17号水田より3～4cm低い。両水田は幅40～70cm、高さ6～9cmの畦で区切られ、この北端と南端が幅20cmほど途切れて水口となり、18号水田へ水が流れる。北は幅30～50cm、高さ10～11cmの畦で16号水田と区切られている。

15号水田は南の17号水田より2～6cm低く、水田面は北東部がやや低くなっている。北は3号溝に沿った幅30～50cm、田面からの高さ7～13cmの土手状の畦で区切られている。

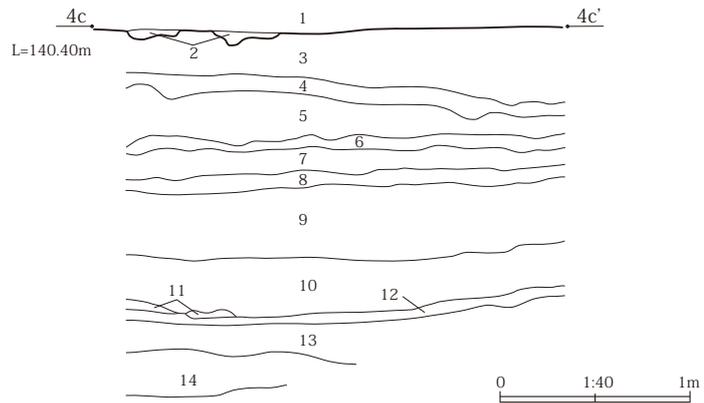
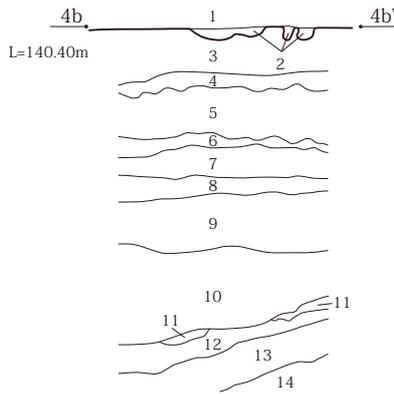


詳細図4

桑原田遺跡V区土層観察所見 4a ライン

- 1 暗褐色砂質土。
- 2 褐灰色シルト質土 極めの細かい暗褐色の砂のブロックを含む。3層と4層の境に赤褐色の層がある。縮まり弱。粘性中。
- 3 褐灰色シルト質土 径10～20mm程度の軽石を僅かに、赤褐色土粒子を含む。縮まり中。粘性中。
- 4 褐灰色シルト質土 3層より暗い色調。黄褐色の細砂粒及び径10～20mm程度の軽石を少量含む。縮まり中。粘性中。
- 5 礫層。暗灰褐色砂質土と径20～150mm程度の軽石から成る。縮まり弱。粘性弱。
- 6 礫層。暗灰褐色砂質土と径20～40mm程度の礫から成る。縮まり弱。粘性弱。

第276図 桑原田遺跡 V区詳細図4 土層断面図1・高低図



桑原田遺跡V区土層観察所見 4b・4c ライン

- 1 黒褐色土 天明泥流層 2層を削るようにして厚く堆積する。このトレンチ付近では1.5mの厚さがある。
- 2 灰褐色土 田面の窪地などに残存する。天明泥流の軽石と思われる。径1mm及びそれ以下の粒子からなる。
- 3 褐灰色土 シルト質。田の耕土と思われる。径2mm～10mmの二ツ岳軽石を少量含む。酸化鉄により赤褐色化した土が短い紐状に入る。植物残痕か。締まり中。粘性やや強。
- 4 にぶい黄褐色土 やや砂質に近いシルト質。田の床土に相当するか。3層と同様の白色軽石が極少量入る。酸化鉄により赤褐色化した短い紐状の土も入る。締まり中。粘性中。
- 5 灰黄褐色砂質土 かなりの細粒子からなる。含むものは4層と同様だがさらに明黄褐色の砂質がやや多く入る。砂粒は細～中粒子。締まり中。
- 6 灰黄褐色土 基本的には5層と同じ。明黄褐色の砂粒が5層より多く入る。締まり中。
- 7 灰黄褐色土 基本的には5層と同じ。酸化鉄による赤褐色土が多く入り、やや赤っぽく見える。締まりやや弱。

- 8 褐灰色土 細粒子を主体とする砂質土。中粒砂も多く含まれる。白色軽石極少量入る。酸化によると思われる赤褐色に近い褐色粒がやや多く見られる。一部は短い紐状の形態。締まり弱い。
- 9 褐灰色土 シルト質に近い砂質土。かなりの細粒子からなる。明黄褐色、褐灰色の中粒の砂粒も少量入る。白色軽石極少量入る。8層と同じ褐色の酸化土がやや多く入る。締まり中。粘性弱い。
- 10 褐灰色土 砂質土。細粒子を主体とするが、褐灰色の中粒子も多く入る。白色軽石極少量入る。褐色酸化土は9層と同様にやや多く入る。締まりやや弱。
- 11 褐灰色土 10層と基本的には同じ。浅黄褐色の細粒の砂粒ブロックを多く含む。締まり弱い。
- 12 褐灰色土 10層と基本的には同じ。褐灰色の中粒の砂粒をより多く含む。締まり弱い。
- 13 褐灰色土 12層と基本的には同じ。褐色酸化土を多く含み、褐色に近く見える。締まりやや弱い。
- 14 褐灰色土 砂礫層。やや黒っぽい。径20mm～50mm程度の礫と大粒子の砂粒からなる。

第277図 桑原田遺跡 V区詳細図4 土層断面図2

16号水田は南の18号水田より4～8cm低く、西の15号水田より1～3cm低い。15号水田と16号水田は幅35～60cm、高さ1～9cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。北端は幅40cm、南端は幅20cmほどの水口で16号水田へ水が流れる。北は3号溝に沿った幅40cm、田面からの高さ9cmほどの土手状の畦で区切られている。

[23・24・25号水田] (第270～272図 PL.131・132)

調査区西側の境界にあり、一部を確認した。棚田状の水田を形成している。

24号水田は最も標高が高く、東の21号水田より56～57cm高い。水田を囲む畦の高まりは見られない。

25号水田は北の24号水田より11cmほど低い。東から南は幅40～70cm、高さ4～11cmの畦に囲まれ、この東側の畦の北端が幅1mほど途切れて水口となり、21号水田へ落水する。水口は川原石を積んで補強している。25号水田は、東の21号水田より45～46cm、26号水田より50～53cm、南の29号水田より59cm、28号水田より58cm高い。

23号水田は、南の24号水田より26cmほど低く、東の21号水田より21～30cm高い。水田を囲む畦の高まりは見られない。

[21・22・26・27・28・29・36号水田]

(第270～272・276図 PL.131・133)

調査区の中央から南部にある。全体に北から南へ傾斜している。北西から南東方向へ幅15～60cm、高さ4～12cmの畦がつくられ、この畦の東西でさらに、北東から南西方向の畦がつくられ、水田を区切っている。

21号水田は北西に4号溝が走り、溝に沿った幅40～50cm、田面からの高さ4～11cmの土手状の畦で区切られる。北に接する19号水田より4～5cm高い。19号水田とを区切っている畦の西端が幅80cmほど途切れて水口となり、4号溝から取水される。水口は川原石で補強されている。

22号水田は北の17号水田より1～2cm高く、18号水田より3～7cm高い。西の21号水田より1～5cm低く、両水田を区切っている畦の北端が幅20cmほど

第4章 遺構と遺物

途切れて水口となり、22号水田へ水が流れる。

26号水田は、北の21号水田より5～8cm低く、両水田は幅20～40cm、高さ5～15cmの畦で区切られ、この東端と西端が幅40cmほど途切れて水口となり、26号水田へ水が流れる。西端の水口には川原石が置かれ、補強されている。北東の22号水田より1～4cm低い。

27号水田は北の22号水田より5～6cm低く、両水田は幅20～35cm、高さ6～7cmの畦で区切られ、この西端が幅20cmほど途切れて水口となり、27号水田へ水が流れる。また西の26号水田より1～2cm低く、水田面は南西が低くなっている。

29号水田は北の26号水田より5～7cm低く、両水田は幅40～55cm、高さ9～14cmの畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。東端が幅10cm、西端が幅20cmの水口で、いずれも29号水田へ水が流れる。西端の水口には川原石が置かれ、補強されている。また東の27号水田より1～5cm低く、両水田を区切っている畦の南端が幅10cmほど途切れて水口となり、29号水田へ水が流れる。

28号水田は29号水田の西にあり、29号水田より僅かに高く、両水田は幅30～40cm、高さ9～12cmの畦で区切られ、この畦の北部が幅10cmほど途切れて水口となり、29号水田へ水が流れる。

36号水田は隣接している水田より一段高い。北の27号水田より20～23cm高く、北西の29号水田より31cm、31号水田より36～37cm高い。段差の壁面は川原石で補強されている。水田を囲んでいる畦の高まりは見られない。

[30・31・32・33・34・35号水田]

(第270～272・278～280図 PL.131・133)

調査区の南部にある。

31号水田は北の29号水田より5～9cm低く、両水田は幅30～50cm、高さ8～13cmの畦で区切られ、この東端が幅35cmほど途切れて水口となり、31号水田へ水が流れる。水口には川原石が置かれ、補強されている。水田面は南部がやや低くなっている。

30号水田は、東の31号水田より6～11cm低く、両水田は幅30～50cm、高さ15～20cmの畦で区切られている。北の28号水田より17～18cm低く、両水田は幅55～70cm、高さ32cmの畦で区切られている。

また29号水田より14～16cm低く、両水田は幅40～70cm、高さ20～24cmの畦で区切られている。水田面は北東部がやや高い。

32号水田は東の31号水田より7～10cm低く、両水田は幅35～50cm、高さ12～14cmの畦で区切られている。また北の30号水田より4～7cm低く、幅35～50cm、高さ4～9cmの畦で区切られ、この東端が幅20cm途切れて水口となり、32号水田へ水が流れる。稲跡を検出した。稲が北北西から南南東方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北北西から流れてきたことがわかる。残存状況はあまり良好ではない。

34号水田は北の31号水田より4cm低く、両水田は幅30～40cm、高さ3～5cmの畦で区切られ、この西端が幅5cmほど途切れて水口となり、31号水田から34号水田へ水が流れる。また32号水田より3～5cm高く、両水田は幅50cm、高さ4～7cmの畦で区切られている。

33号水田は、東の34号水田より21～25cm低く、両水田は幅70～80cm、高さ25～31cmの畦で区切られている。また北の32号水田より19～25cm低く、両水田は幅50～80cm、高さ29～30cmの畦で区切られている。32・33号水田を区切る畦の東端と32・34号水田を区切る畦の西端との間は幅1.9mほど間隔が開いて水口となり、34号水田から32号水田へ水が流れ込み、また32号水田から33号水田へ流れる。

35号水田は調査区の最南部にあり、ごく一部を確認した。北の33号水田より1～4cm低く、両水田は幅30～40cm、高さ6～7cmの畦で区切られ、この東端が幅30cmほど途切れて水口となり、35号水田へ水が流れる。北東の34号水田より25cmほど低くなっている。

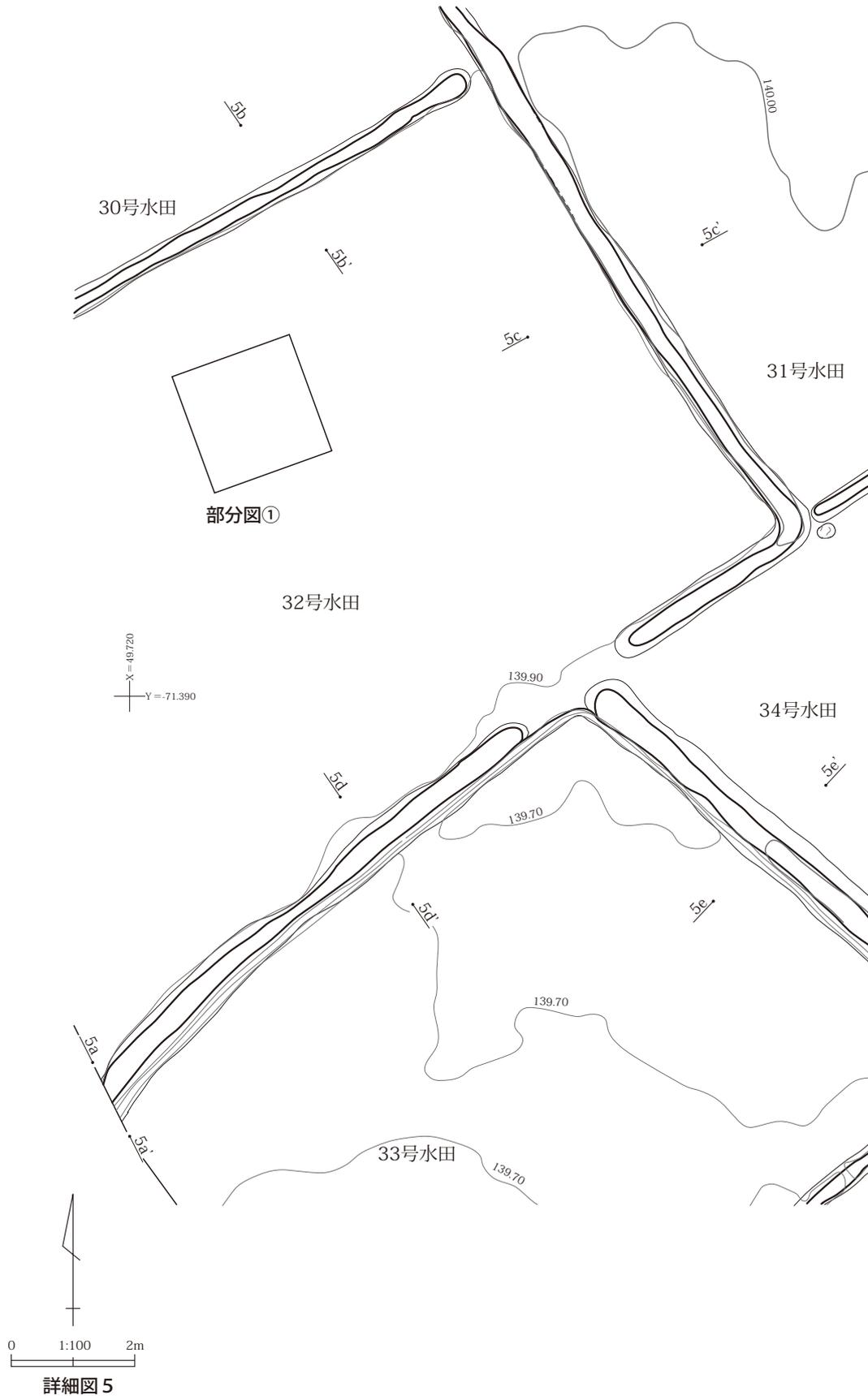
溝

1号溝 (第273図)

位置 X=49.810～49.830/Y=-71.425～-71.450

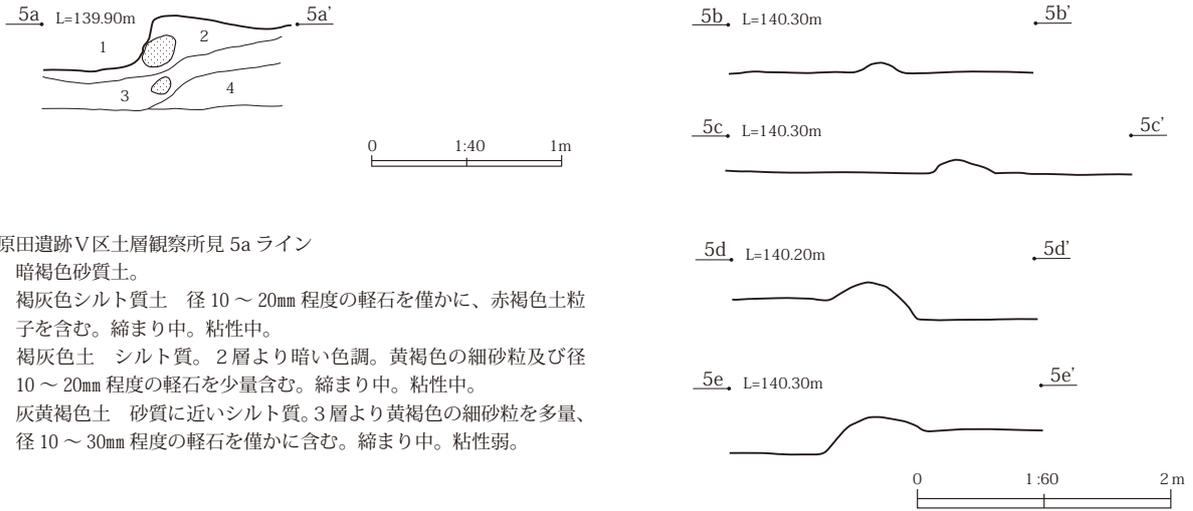
規模 長さ45.0m、幅(上端)0.15～1.2m(下端)0.1～0.8m、深さ0.15～0.3m

特徴 1号水田と6号水田の間を流れる部分では、内壁を川原石で補強している。6号水田の南東隅の水口から1号溝へ排水される部分や、12号水田へ流れ出る水口にも川原石で補強している。



第278図 桑原田遺跡 V区詳細図5

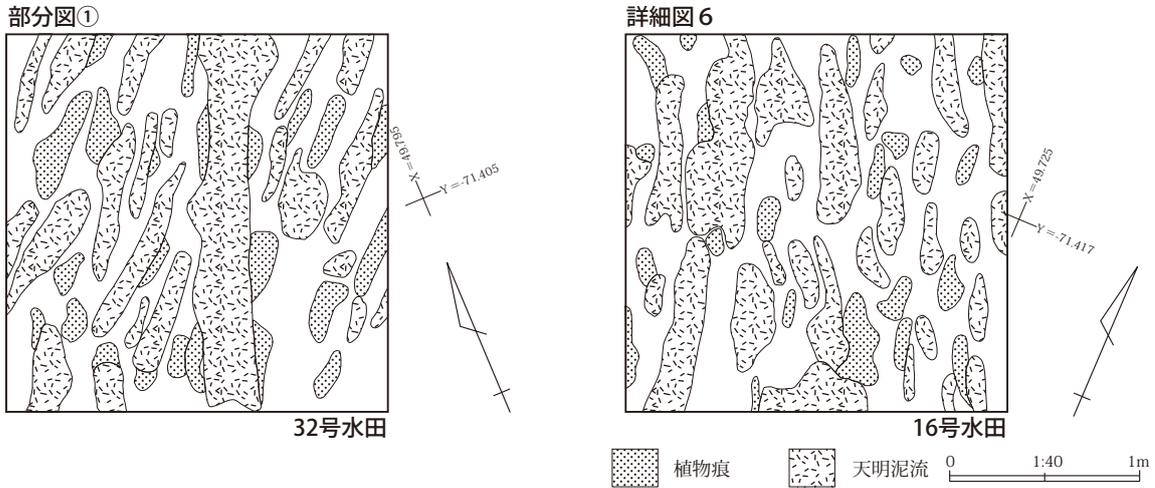
第4章 遺構と遺物



桑原田遺跡V区土層観察所見 5a ライン

- 1 暗褐色砂質土。
- 2 褐灰色シルト質土 径10～20mm程度の軽石を僅かに、赤褐色土粒子を含む。縮まり中。粘性中。
- 3 褐灰色土 シルト質。2層より暗い色調。黄褐色の細砂粒及び径10～20mm程度の軽石を少量含む。縮まり中。粘性中。
- 4 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質。3層より黄褐色の細砂粒を多量、径10～30mm程度の軽石を僅かに含む。縮まり中。粘性弱。

第279図 桑原田遺跡 V区詳細図5 土層断面図・高低図



第280図 桑原田遺跡 V区詳細図5 部分図①・詳細図6

2号溝 (第274・275図)

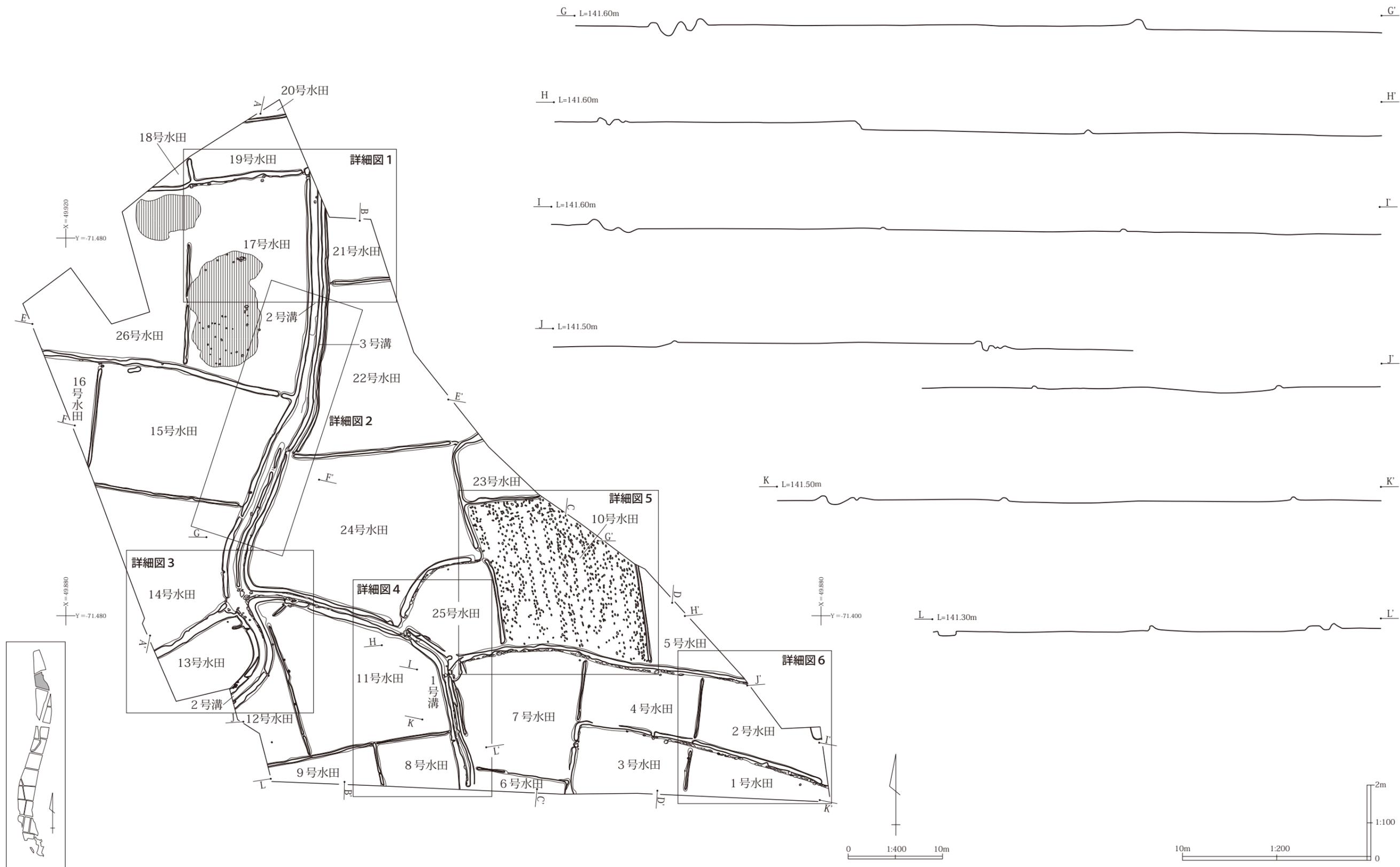
位置 $X=49.815 \sim 49.830/Y=-71.400 \sim -71.430$
 規模 長さ46.6m、幅(上端)0.4～0.7m(下端)0.1～0.35m、深さ0.13～0.27m
 特徴 7号水田と8号水田の間を流れる部分では、内壁に川原石を貼り付けて補強している。また溝の底部の石は、水流の勢いを調整するために設けられたと思われる。溝の傾斜は、4号水田及び8号水田の水口付近から東は緩やかに低くなっていくが、水口より西は、西へ向かってやや低くなるが、12号水田の西側を走る部分では一方向への傾斜は見られない。水は東から西へ流れ、8号水田の北西で南に折れて南下し、12号水田へ流れ込んだと思われるが、途中で傾斜を付けることで水流の勢いを調整したと考えられる。

3号溝 (第274・275図)

位置 $X=49.805 \sim 49.810/Y=-71.400 \sim -71.425$
 規模 長さ27.5m、幅(上端)0.4～0.8m(下端)0.1～0.4m、深さ0.14～0.27m
 特徴 北から東へ折れる部分や東側の境界付近では、内壁を川原石で補強している。

4号溝 (第276図)

位置 $X=49.775 \sim 49.785/Y=-71.430 \sim -71.440$
 規模 長さ15.3m、幅(上端)0.2～0.7m(下端)0.2～0.3m、深さ0.1～0.17m
 特徴 北東方向へ延び、19号水田の西側を流れる部分ではやや深くなっている。



第281図 中町遺跡 I区全体図 高低図1

第5項 中町遺跡

概要 中町遺跡はⅠ区、Ⅱ区に分けて調査を実施し、すべての区で近世の水田遺構を検出した。中町遺跡の地形は、北西から南東へ傾斜している。調査区の西側が高く、東側は崖となり、下方を天狗岩用水が流れる。隣接する水田で著しい標高差はなく、徐々に段差を設けながら低くなる。Ⅰ区は用水路や畦によって水田が区分けされ、段差を設けながら、様々な形や大きさの水田が形成されている。Ⅱ区は西側が高くなっている。水田はほぼ平坦であるが、調査区の南側で一段低くなっている。

水田上に堆積した泥流の厚さは約1.5～2mである。水田の耕作土は、褐灰色～灰黄褐色の砂質性シルト質土である。粘性はあまり強くなく、しまりも強くない。少量の白色軽石粒が混入し、酸化鉄を含んでいる。水田の畦は、水田の土を盛り上げてつくられていることから、水田と同質の土壌であるが、水田の耕作土よりしまりがある。

Ⅰ区

検出された遺構は、水田26枚、溝3条である。残存状況は概ね良好であるが、水田面には泥流による無数の傷跡が残っている。水田番号は南から付けている。

水田の形状

地形は全体的に北西から南東に傾斜している。北部の20号水田と南東部の1号水田の標高差は約80cmで1号水田が低い。水田の形状は、用水路や畦によって区分けされ、田面が整えられている。

調査区の中央を北北東から南南西方向へ2号溝が流れる。調査区の北側境界から出て、調査区の中央をほぼ直線状に走り、南部で湾曲し、南側境界へ至る。東側を3号溝が併走し、調査区のほぼ中央部で終わる。3号溝の終点よりやや西寄りでは1号溝が始まる。1号溝は2号溝から水を得て、2号溝に沿って南下し、24号水田の南西部で南東方向へ折れて11

号水田の北辺を囲むように流れる。さらに11号水田の北東部で南へ向きを変え、そのまま南下して調査区の南側境界へ至る。

水田の区画

[1・2・3・4・6・7号水田]

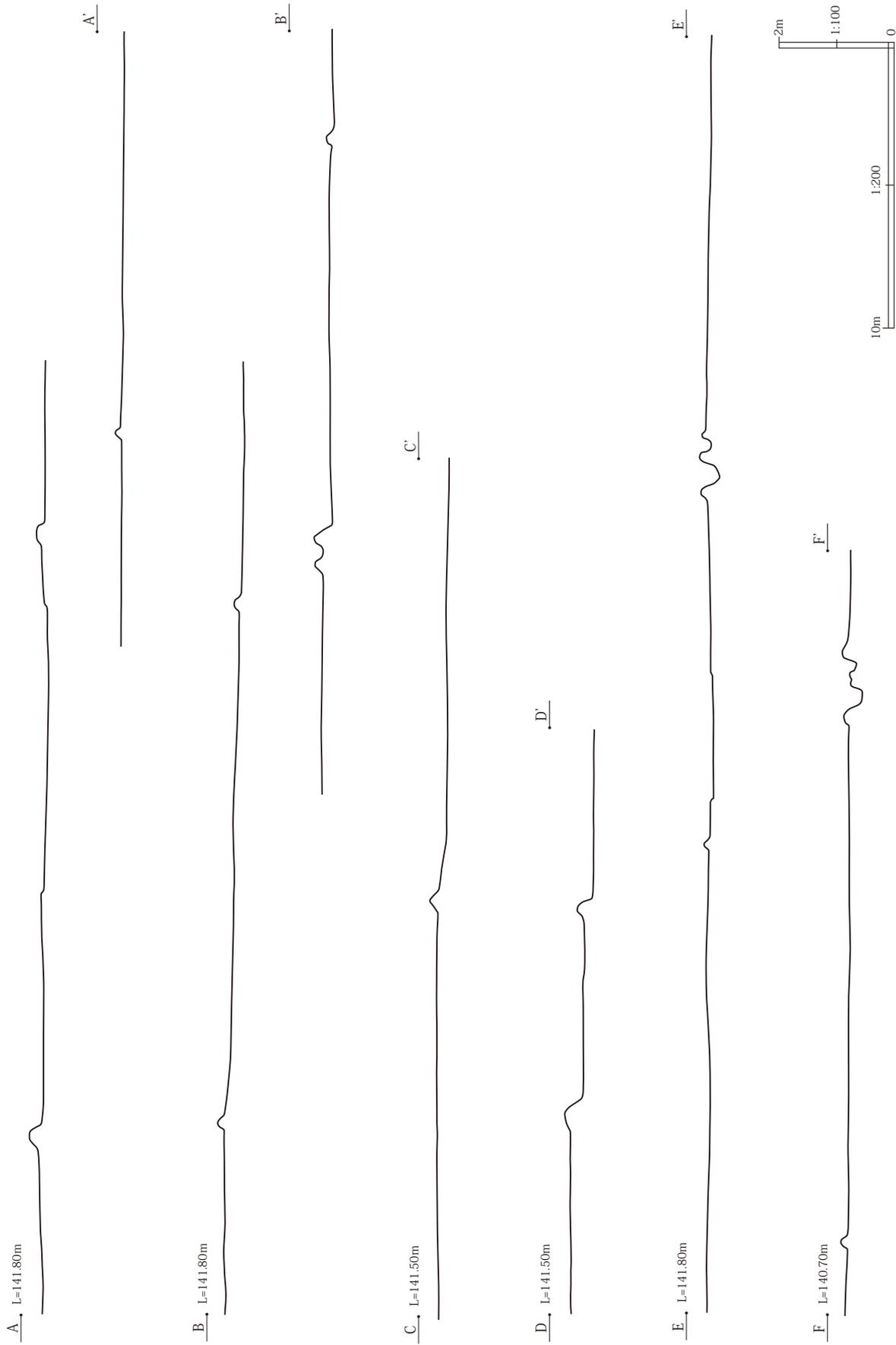
(第281・282・285・290・291・293～295図 PL.137・138)

調査区の南東部にある。6・7号水田の西側を1号溝が流れ、2・4・7号水田の北側を幅60～95cm、高さ24～35cmの畦で区切られている。畦の南側壁面は、大きい川原石を1枚ずつ規則的に並べて貼り付けて補強している。

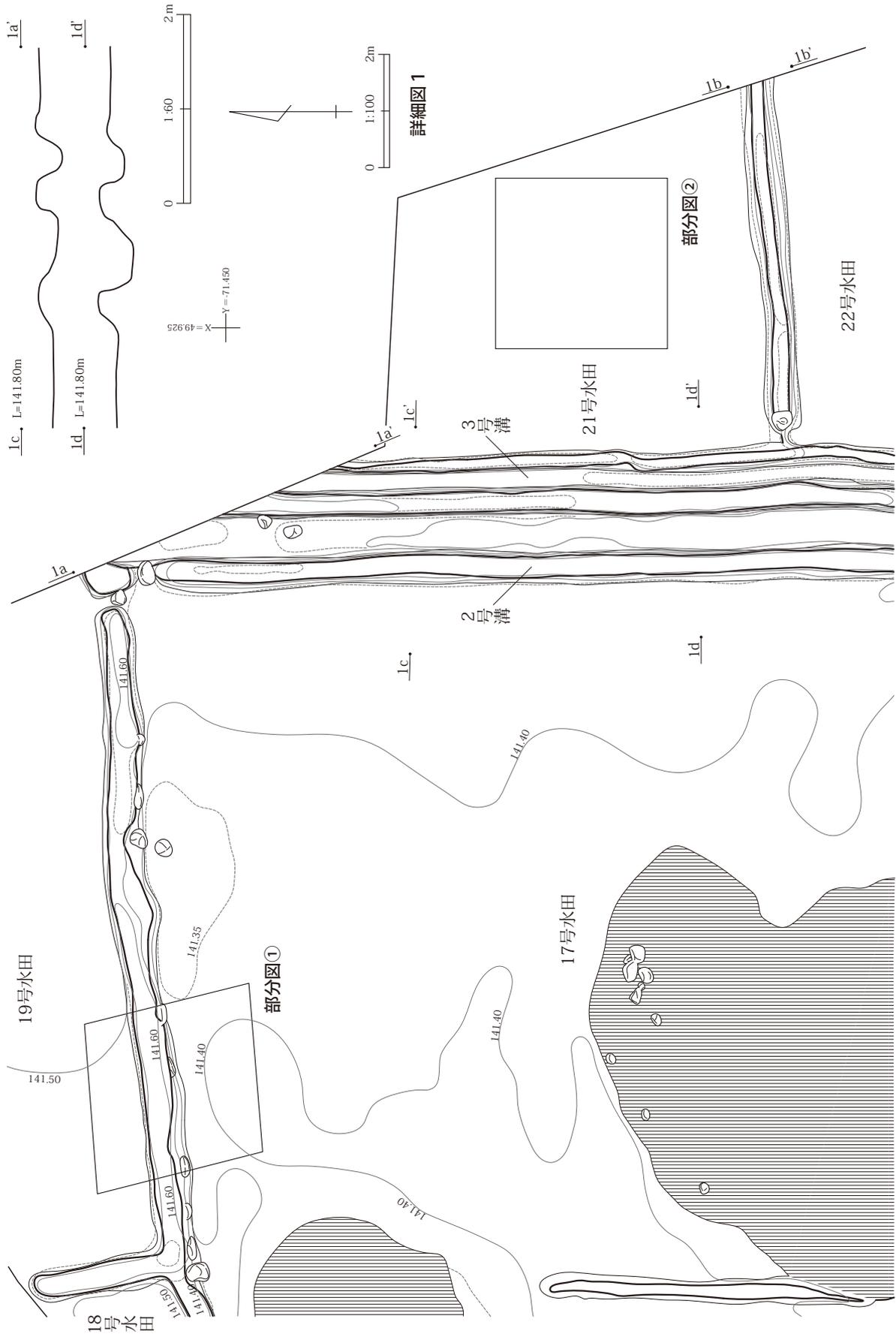
7号水田は最も標高が高い。7号水田の西側は1号溝に沿った幅30～50cmの土手状の畦で区切られている。畦の北部が幅40cmほど途切れて水口となり、1号溝から7号水田へ取水される。取水された7号水田の北西隅では、水田面に人工的につくられた浅い窪みがあり、窪みの外側に畦のような高まりが一部見られる。また窪みのすぐ南に西側の畦に沿って幅10～20cmの溝がある。1号溝から取水された水が、一度窪みに溜まって溝を通り、温められてから水田内に流されたと考えられる。7号水田は北に接する25号水田より16～26cm低く、10号水田より9～16cm低い。1号溝を挟んで西に接する11号水田より11～21cm低い。

6号水田は、北の7号水田より4～5cm低い。両水田は幅20～40cm、高さ3cmの畦で区切られているが、西側の一部が残るのみで、その他の畦の高まりは見られない。この畦の西端が幅20cmほど途切れて水口となり、7号水田から水が流れる。

7号水田の東は、上段の2・4号水田と下段の1・3号水田に分かれる。1・3号水田の北から3号水田の西を囲んでいる幅50～90cm、高さ13～30cmの畦で区切られている。3号水田の西側の畦が高く、北側の畦の一部が泥流の影響を受けて、高まりが消滅している。畦の南側壁面は、大きい川原石を1枚ずつ規則的に並べて貼り付けて補強している。西側の畦は、部分的に補強されている。この畦の上段、

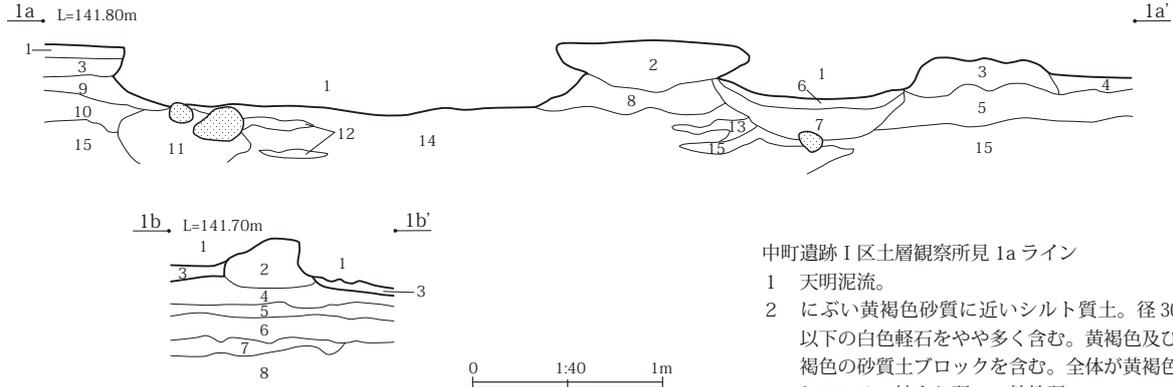


第282図 中町遺跡 I区高低図2



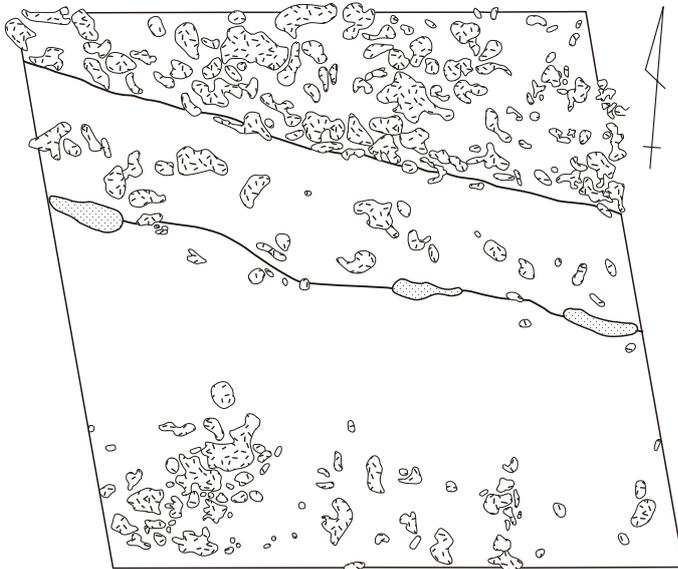
第283図 中町遺跡 I区詳細図1 高低図

第4章 遺構と遺物



第284図 中町遺跡 I区詳細図1 土層断面図

部分図①



7号・19号水田間 天明泥流火山灰分布

第285図 中町遺跡 I区詳細図1 部分図①

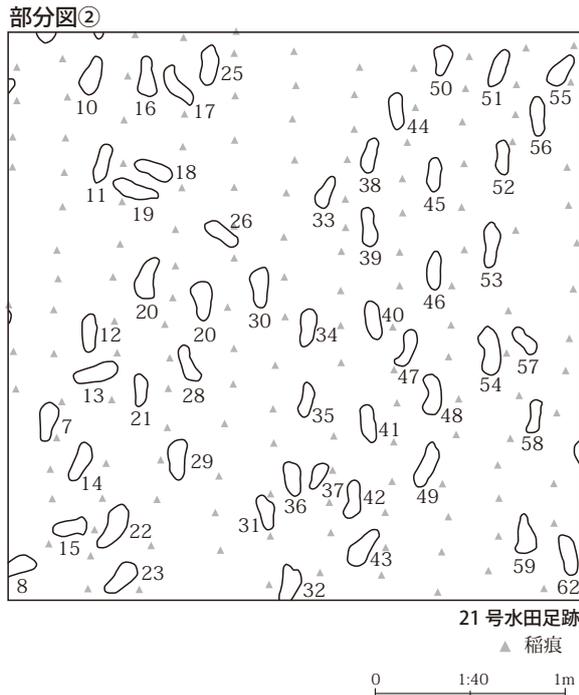
- 9 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石を少量含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まりやや弱い。粘性やや弱い。
- 10 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径50mm以下の白色軽石を多量、黄褐色土粒子と赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まり弱い。粘性やや弱い。
- 11 灰黄褐色シルト質土。径5mm以下の白色軽石を僅か、黄褐色土粒子と赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性中。
- 12 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石を僅かに含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まり弱い。粘性弱い。
- 13 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石を僅かに含む。黄褐色土粒子と赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱い。
- 14 砂礫層
- 15 灰黄褐色シルト質土。径10mm以下の白色軽石を僅かに含む。黄褐色土粒子と赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性やや弱い。

中町遺跡 I区土層観察所見 1a ライン

- 1 天明泥流。
- 2 にぶい黄褐色砂質に近いシルト質土。径30mm以下の白色軽石をやや多く含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。全体が黄褐色化している。縮まり弱い。粘性弱い。
- 3 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まりやや弱い。粘性弱い。
- 4 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱い。
- 5 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径30mm以下の白色軽石をやや多く含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性弱い。
- 6 褐灰色砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石を僅かに含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性弱い。上部に黄色の砂が堆積している。
- 7 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石を少量含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性やや弱い。
- 8 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径30mm以下の白色軽石を少量含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まりやや弱い。粘性やや弱い。

中町遺跡 I区土層観察所見 1b ライン

- 1 天明泥流。
- 2 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径5mm以下の白色軽石をやや多く含む。少量の黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性弱い。
- 3 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石やや多く含む。少量の黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まり中。粘性やや弱い。
- 4 灰黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石やや多く含む。少量の黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性弱い。
- 5 にぶい黄褐色砂質に近いシルト質土。径10mm以下の白色軽石をやや多く含む。黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。全体が黄褐色化している。縮まっている。粘性やや弱い。
- 6 灰黄褐色シルト質土。径20mm以下の白色軽石をやや多く含む。黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性中。
- 7 砂礫層。径30mm以下の白色軽石を含む。
- 8 灰黄褐色シルト質土。径10mm以下の白色軽石を僅かに含む。黄褐色及び赤褐色の砂質土ブロックを含む。縮まっている。粘性やや弱い。



第286図 中町遺跡 I区詳細図1 部分図②

下段それぞれで7号水田から順に水が回される。上段では、7号水田の水が4号水田を通過して2号水田へ流れる。

4号水田は7号水田より3cmほど低い。両水田は幅30～50cm、高さ7cmの畦で区切られ、この北端が幅20cmほど途切れて水口となる。水口は川原石で補強されている。

2号水田は4号水田より1～2cm低い。両水田は幅25～40cm、高さ5～9cmの畦で区切られ、この北端が幅20cmほど途切れて水口となる。水口は川原石で補強されている。下段では、7号水田の水が3号水田を通過して1号水田へ流れる。

3号水田は7号水田より23cmほど低い。両水田を区切っている畦の途中が幅60cmほど途切れて水口となる。この畦の南部は畦の高まりが消滅している。北の4号水田より17～19cm低い。

1号水田は3号水田より1～3cm低い。両水田は幅30～45cm、高さ9～12cmの畦で区切られ、この北端が幅20cmほど途切れて水口となる。南端は途切れているが、畦の南が調査区外となり、水口であるか判断できない。北の2号水田より16～18cm低い。

[8・9・11・12号水田]

(第281・282・289～291図 PL.138・139)

調査区の南部にある。北側から東側を走る1号溝と西側の2号溝によって囲まれている。11号水田は最も標高が高い。

11号水田の北側から8・11号水田の東側は1号溝に沿った土手状の畦で区切られる。幅40～100cm、田面からの高さ15～38cmで、11号水田の東側では幅が狭く低くなる。11号水田は、1号溝が南東へ折れたところで、土手状の畦を貫通する取水口から1号溝の水を取り入れたと考えられる。11号水田の北西隅では人工的につくられた浅い窪みがあり、畦のような高まりによって区切られる。取水された水は一時的に溜まり、温められてから水田内に流されたと考えられる。

12号水田は東の11号水田より8～10cm低く、両水田は幅30～50cm、高さ10～13cmの畦で区切られる。畦の北端が途切れていて、11号水田から12号水田へ水が流れ込む。12号水田の北側を2号溝が流れ、幅60～80cm、田面からの高さ12～15cmの土手状の畦によって区切られる。

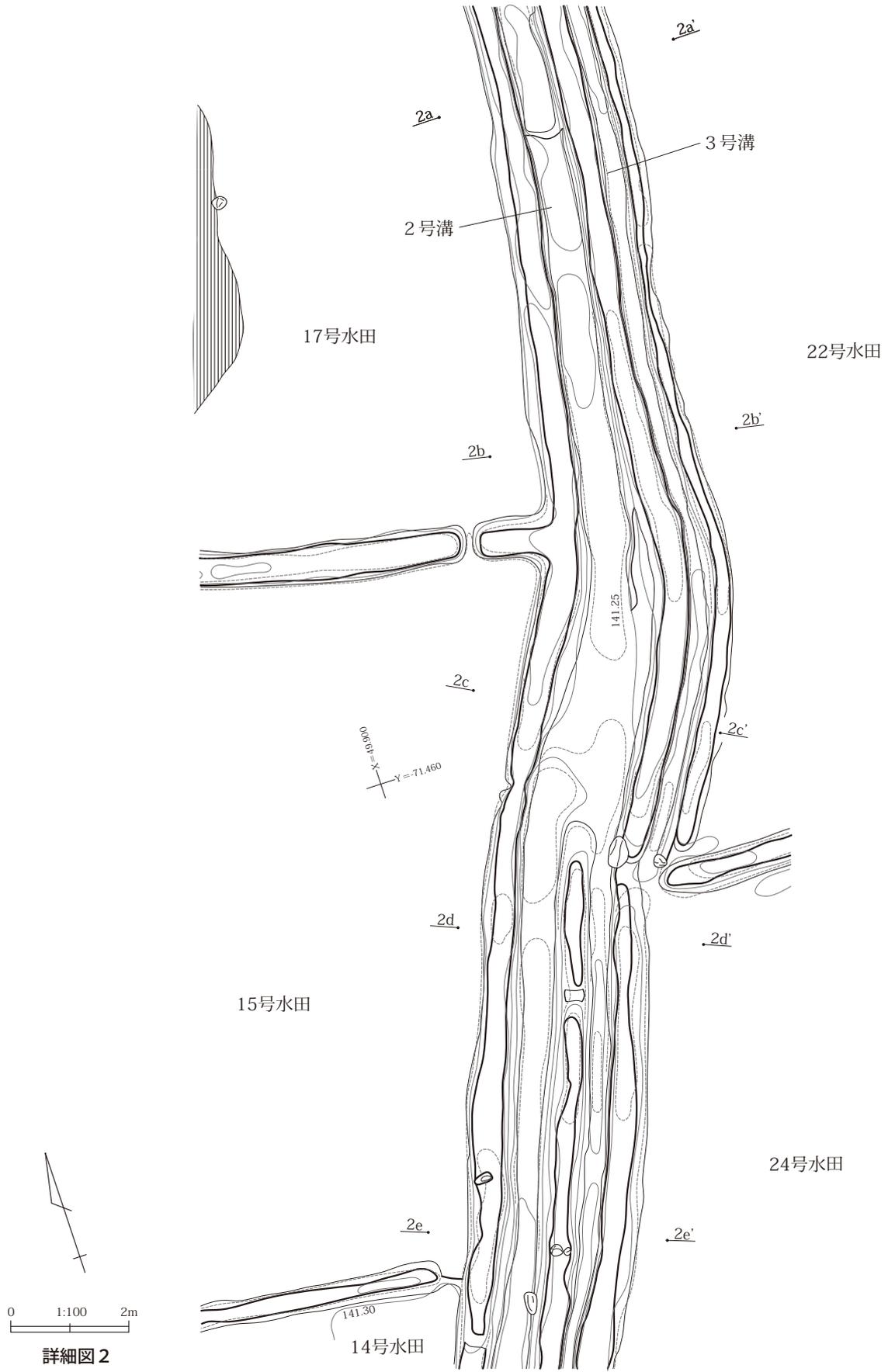
8・9号水田は11・12号水田の南にあり、幅30～60cm、高さ15cmの畦で区切られる。8号水田は11号水田より15～18cm低く、また9号水田は8号水田より1cmほど低い。9号水田は11号水田より17～18cm低く、12号水田より10～11cm低い。8号水田と9号水田は幅35～50cm、高さ10cmの畦で区切られる。調査範囲内には水口が見られず、給排水の詳細はわからない。

[5・10・21・22・23・24・25号水田]

(第281～284・286～291・293・294図 PL.138・139)

調査区の中央部から北東部にある。北の21号水田から南の24号水田へ向かって低くなり、さらに24号水田から南東の5号水田へ向かって低くなる。21・22号水田の西側を2・3号溝が流れ、21・22号水田の西は3号溝に沿った幅15～45cm、田面からの高さ3～7cmの土手状の畦で区切られる。

21号水田の標高が最も高く、22号水田との間に8



第287図 中町遺跡 I区詳細図2

cmの標高差がある。両水田は幅45～70cm、高さ12～20cmの畦で区切られ、この西端が幅20cmほど途切れて水口となり、22号水田へ水が流れる。

24号水田は22号水田より6～9cm低い。両水田は幅50～70cm、高さ17～20cmの畦で区切られ、この西端が幅30cmほど途切れて水口となり、24号水田へ水が流れる。また、この水口に21・22号水田の西側を走る3号溝が流れ込み、24号水田へ流れる。24号水田の西から南側は、1号溝に沿った土手状の畦で区切られる。幅50～70cm、田面からの高さは2～16cmで、南で低い部分がある。

23号水田は24号水田より5cm低く、10号水田は24号水田より13cm低い。24号水田と10・23号水田を区切っている畦は、23号水田の北から西を囲むようにして10号水田の途中まで延びている。幅60～110cm、高さ19～31cmで、北側で広がっている。

25号水田は24号水田より12cm低く、両水田は幅70～125cm、高さ14～23cmの畦で区切られている。

畦の南側壁面は川原石が貼られ補強されている。この畦の両端は途切れて水口となっている。東端は幅60cm開き、10号水田と25号水田へ水が流れる。南端は幅100cm開き、25号水田と1号溝へ落水する。25号水田は、南西を1号溝に沿った幅50～60cmの土手状の畦で区切られ、この両端が途切れて水口となっている。西端は幅50cm開き、1号溝から取水され、東端は幅60cm開き、1号溝へ排水される。

10号水田は25号水田より2～3cm低く、両水田は幅35～60cm、高さ10cmの畦で区切られ、この南端が幅20cmほど途切れて水口となり、10号水田へ水が流れる。また10号水田は北の23号水田より7cm低く、両水田は幅35～65cm、高さ10～12cmの畦で区切られている。

5号水田は10号水田より3cm低く、両水田は幅30～40cm、高さ5～8cmの畦で区切られ、この南端が幅15cmほど途切れて水口となり、5号水田へ水が流れる。

[13・14・15・16・17・18・19・20・26号水田]

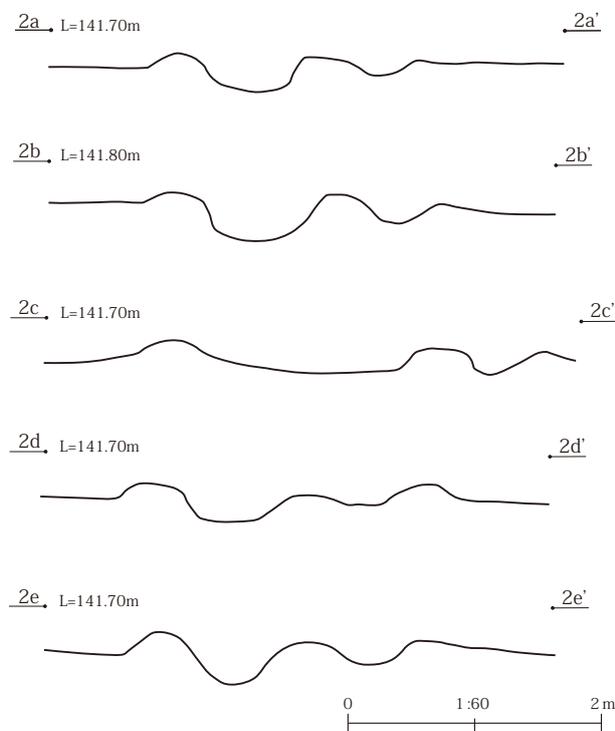
(第281～283・285・287～289図 PL.139)

調査区の西部にある。東側を2号溝が走る。北の20号水田から南の14号水田へ徐々に低くなり、13号水田で一段低くなる。全体に西が東よりやや高い。

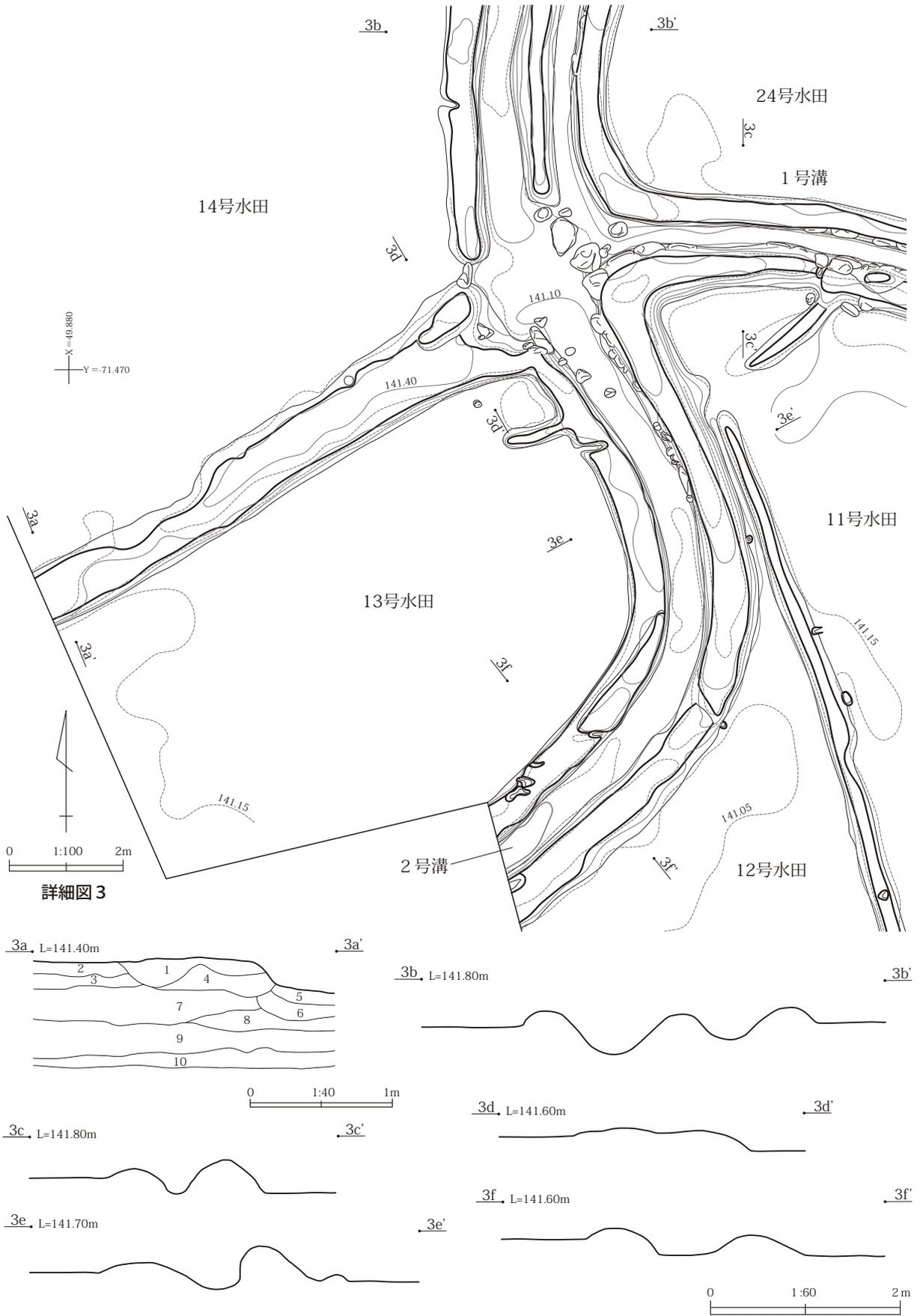
19号水田は20号水田より3cm低く、両水田は幅30～45cm、高さ8cmの畦で区切られている。調査範囲内に水口は見られない。また19号水田は18号水田より1～2cm低く、両水田は幅50～70cm、高さ9cmの畦で区切られている。調査範囲内に水口は見られない。

26号水田は18号水田より10cm低く、両水田は幅40～50cm、高さ13cmの畦で区切られている。17・19号水田を区切っている畦と続いている。

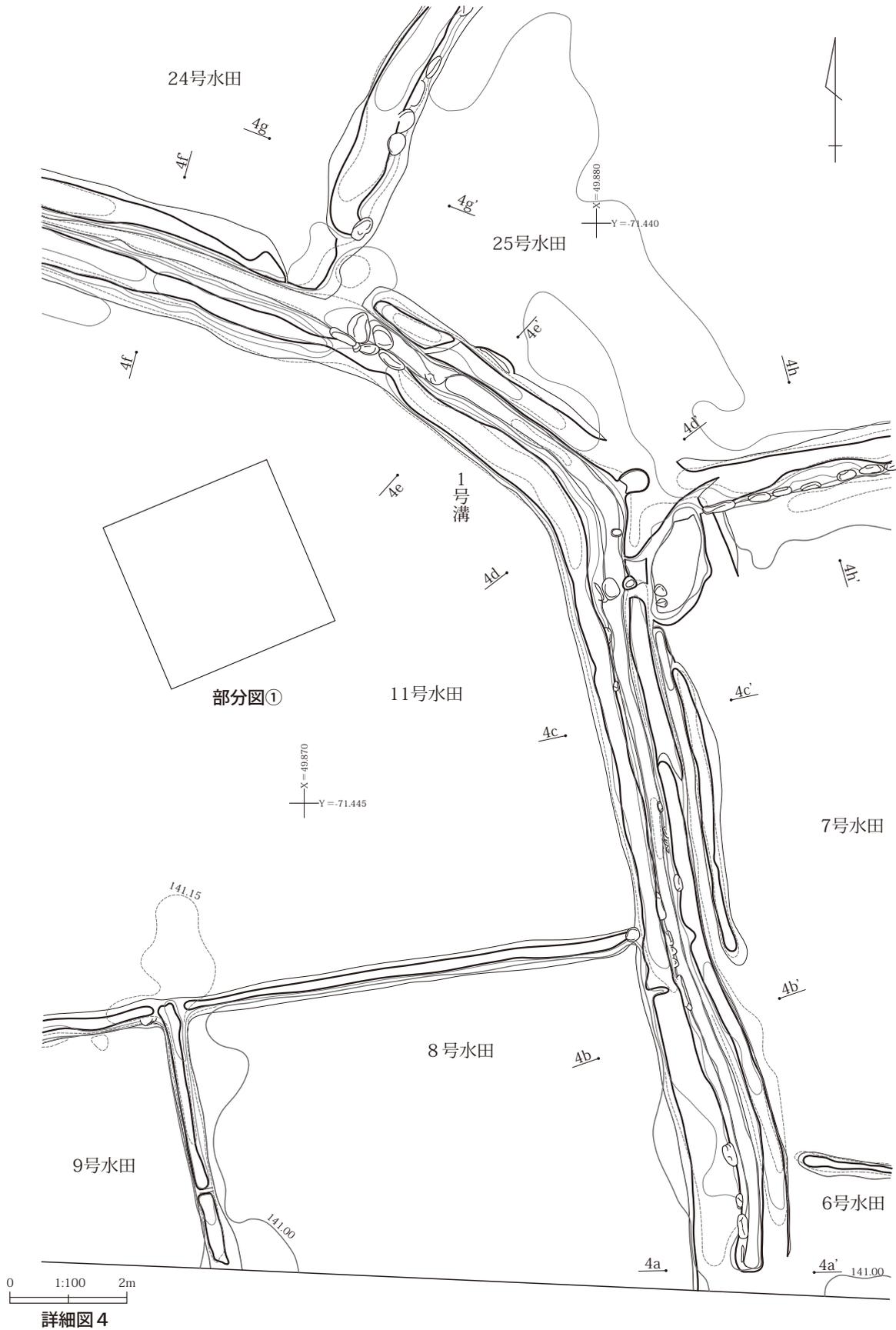
17号水田は19号水田より7～15cm低く、両水田は幅60～90cm、高さ13～21cmの畦で区切られ、この東端が幅20cmほど途切れて水口となり、17号水田へ水が流れる。水口は川原石で補強されている。畦の南側壁面は川原石を貼って補強している。また17号水田は26号水田より1～2cm低く、両水田は幅35



第288図 中町遺跡 I区詳細図2 高低図



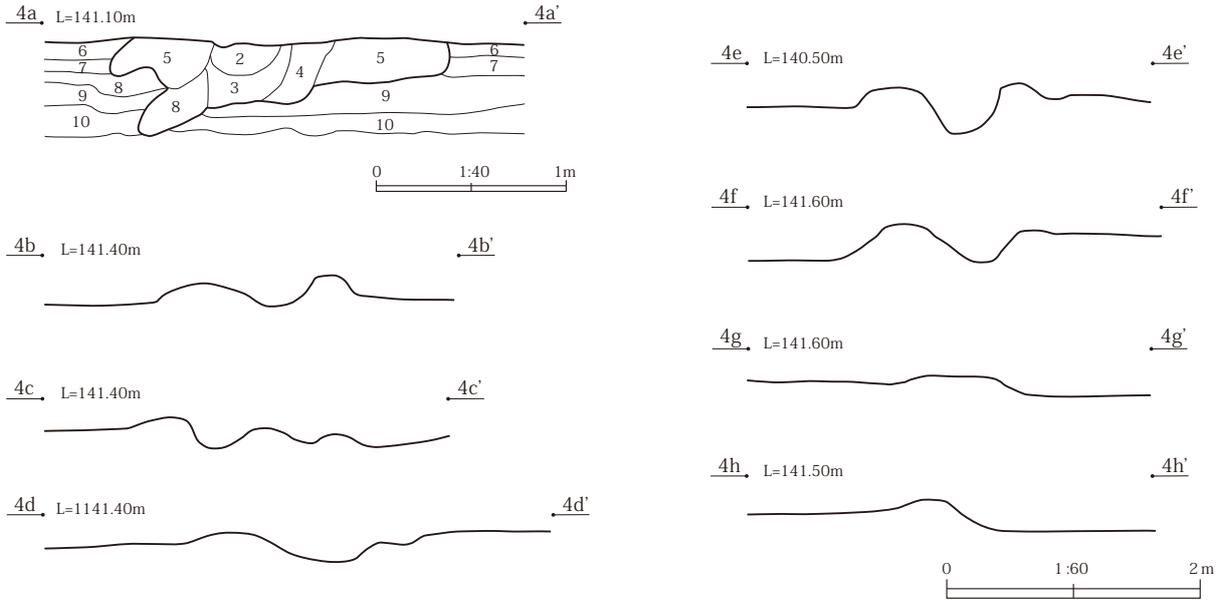
第289図 中町遺跡 I区詳細図3 土層断面図・高低図



詳細図4

第290図 中町遺跡 I区詳細図4

第4章 遺構と遺物



中町遺跡 I 区土層観察所見 3a ライン

- 1 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石を多量に含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。全体が黄褐色化し、砂を多く含む。締まり弱い。粘性弱い。
- 2 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。締まり弱い。粘性やや弱い。
- 3 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石を多量に含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。締まりやや弱い。粘性弱い。
- 4 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 20mm 以下の白色軽石を多量に含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性弱い。
- 5 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。締まりやや弱い。粘性中。
- 6 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石を多量に含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。締まりやや弱い。粘性やや弱い。
- 7 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 30mm 以下の白色軽石を多量に含む。黄褐色土粒子を少量含む。赤褐色砂質土ブロックを含む。締まり中。粘性やや弱い。
- 8 灰黄褐色土 シルト質土。径 10mm 以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。締まっている。粘性やや弱い。
- 9 灰黄褐色土 シルト質土。径 5mm 以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。全体が黄褐色化している。締まっている。粘性やや弱い。
- 10 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石を少量含む。黄褐色土粒子、赤褐色砂質土ブロックを含む。全体が黄褐色化している。締まっている。粘性やや弱い。

中町遺跡 I 区土層観察所見 4a ライン

- 1 天明泥流
- 2 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂と、砂質に近いシルト質土が層を形成している。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり弱い。粘性弱い。
- 3 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まりやや弱い。粘性弱い。底部に白色軽石と砂が堆積している。
- 4 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まりやや弱い。粘性弱い。
- 5 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まりやや弱い。粘性弱い。
- 6 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石が極少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性やや弱い。
- 7 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まっている。粘性やや弱い。
- 8 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 15mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まり中。粘性やや弱い。
- 9 褐色シルト質土 径 20mm 以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色砂質土ブロックが入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まっている。粘性中。全体が黄褐色化している。
- 10 褐色シルト質土 径 10mm 以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。締まっている。粘性中。
- 11 暗褐色土 砂質に近いシルト質土。径 30mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。炭化物が入る。締まっている。粘性やや弱い。

第291図 中町遺跡 I 区詳細図 4 土層断面図・高低図

～55cm、高さ1～6cmの畦で区切られ、この南端が幅10cmほど途切れて水口となり、17号水田へ水が流れる。畦の中央部と北部に攪乱があり、北部は畦が途中で途切れている。17号水田の東側を2号溝が流れ、溝に沿った幅50～70cm、田面からの高さ15～22cmの土手状の畦で区切られる。この畦の北部が幅30cmほど途切れて水口となり、2号溝から17号水田へ取水される。水口は川原石で補強されている。17号水田は、2・3号溝を挟んで東に接する21号水田より10cm低く、22号水田より5cm低い。

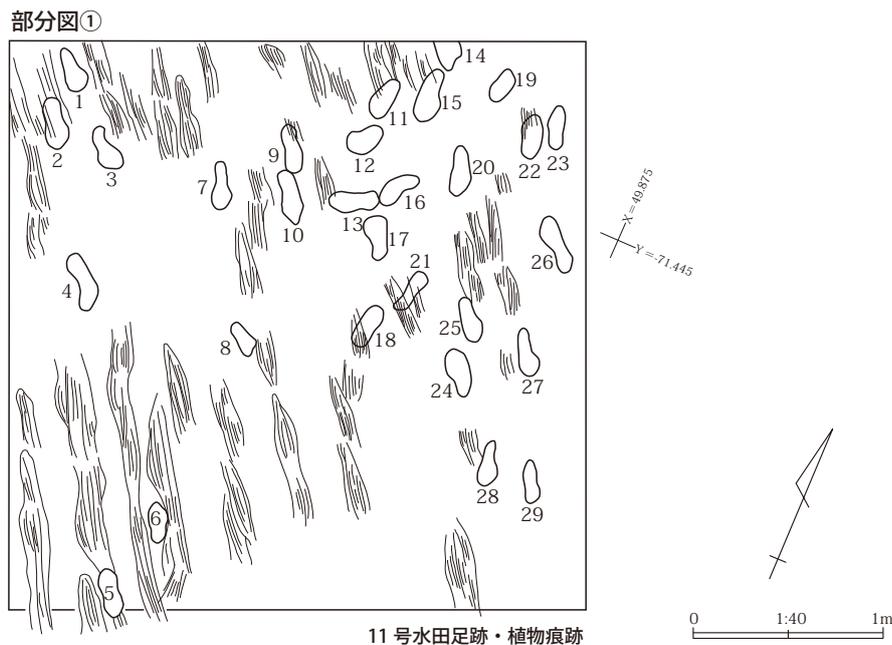
17・26号水田の南は15・16号水田があり、幅55～95cm、高さ16～28cmの畦で区切られ、この東で幅10cmほど途切れて水口となり、17号水田から15号水田へ水が流れる。

16号水田は26号水田より12cm低い。15号水田は26号水田より8～11cm低く、17号水田より3～4cm低い。15号水田は16号水田より1cmほど低い。両水田は幅30～55cm、高さ4～6cmの畦で区切られ、この北端が幅30cmほど途切れて水口となり、15号水田へ水が流れる。15号水田の東は2号溝に沿った幅40～65cm、田面からの高さ14cmの土手状の畦で区切られている。15号水田は、2・3号溝を挟んで東

に接する22号水田より7cm低く、24号水田より1cm高い。

14号水田は15号水田より2～5cm低く、両水田は幅40～55cm、高さ5～7cmの畦で区切られ、この東端が幅30cmほど途切れて水口となり、14号水田へ水が流れる。14号水田の東は2号溝に沿った幅60～80cm、田面からの高さ9～10cmの土手状の畦で区切られ、この南端が幅30cmほど途切れて水口となり、14号水田から2号溝へ排水される。水口は川原石で補強されている。14号水田は、東に接する24号水田とはほぼ同じ高さである。

13号水田は14号水田より15～17cm低く、両水田は幅90～180cm、高さ20～28cmの畦で区切られている。13号水田の東は2号溝に沿った幅60～80cm、田面からの高さ12～15cmの土手状の畦で区切られている。13号水田の北東隅では人工的につくられた浅い窪みがあり、畦のような高まりによって区切られている。取水された水が一時的に溜まり、温められてから水田内に流されたと考えられるが、調査範囲内に水口は見られず、給排水の詳細はわからない。2号溝を挟んで南に接する12号水田面との比高は15cmで、12号水田が低い。



第292図 中町遺跡 I区詳細図4 部分図①

稲跡と人の足跡

10号水田、11号水田で稲跡と人の足跡が検出された。

10号水田では稲株の穴がほぼ規則的に並んで列をつくっているのが見られた。列は直線状に並んでいる部分と湾曲している部分がある。株穴の列の方向は、北北西から南南東方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約20～25cm、列と列の間隔は約30～35cmである。場所によってばらつきがある。10号水田の人の足跡は、長さ11～39cm、幅6～26cmである。水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。足跡は左右が揃いで、どの方向に歩いたのか行跡が不明のものと、規則的に歩いているのが部分的に確認できるものがある。行跡が確認できる部分では、左右の足跡の間に稲株の列があり、稲を踏まないように歩いていたのがわかる。

11号水田では、稲が北北西から南南東方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北北西から流れてきたことがわかる。稲株の穴はほぼ規則的に並んで列をつくっている。列は直線状に並んでいる部分と湾曲している部分がある。株穴の列の方向は、北北西から南南東方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～22cm、列と列の間隔は約25～33cmである。場所によってばらつきがあり、検出範囲の西側で列と列の幅がやや狭くなっている。人の足跡は、長さが17～31.5cm、幅が8～14cmである。水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。左右が揃って検出されたものは一部で、足跡の方向も様々であり、一連の動きが推測できる行跡は確認できない。

溝

1号溝 (第289～291図 PL.140)

位置 X=49.860～49.895/Y=-71.435～-71.460

規模 長さ53.0m、幅(上端)0.3～0.7m(下端)0.1～0.6m、深さ0.16～0.32m

特徴 内壁を川原石で補強している箇所がある。2号溝との合流点より少し北で東側の内壁に補強が見られる。また、2号溝との合流点から南東へ折れたところで、内壁に川原石を規則的に貼り付けて補強している。さらに調査区南側境界付近の西側の内壁を補強している。

2号溝 (第283・284・287～289図 PL.140)

位置 X=49.870～49.925/Y=-71.450～-71.460

規模 長さ59.8m、幅(上端)0.7～1.8m(下端)0.3～1.5m、深さ0.14～0.38m

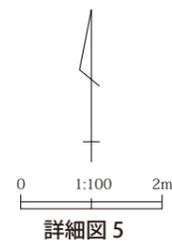
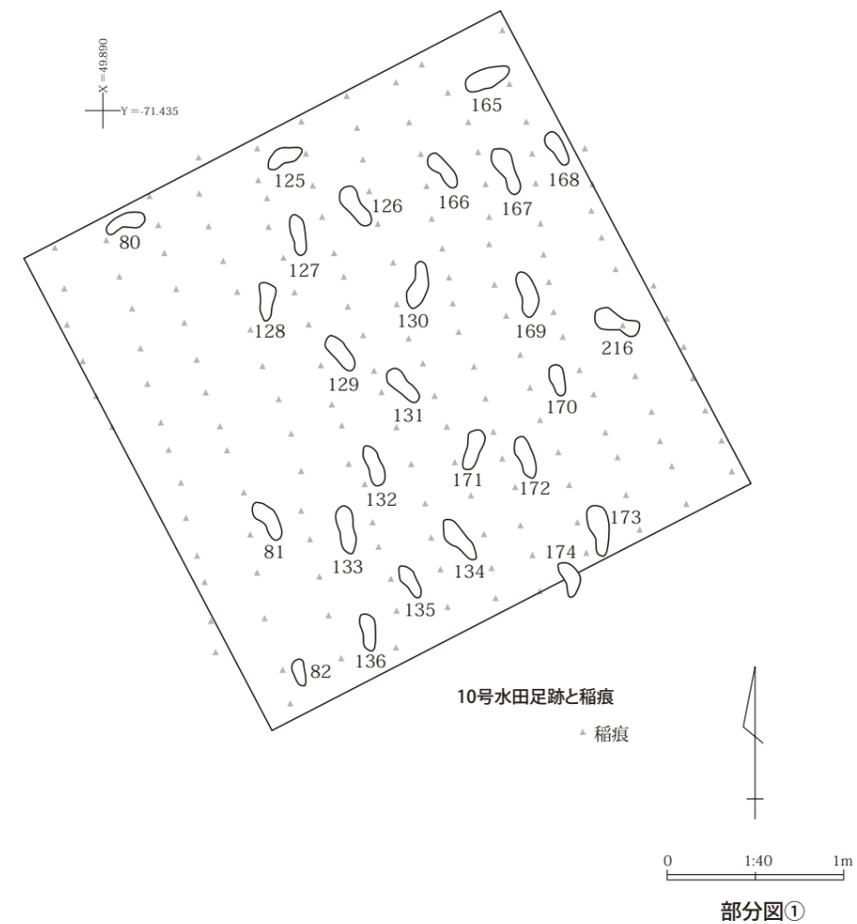
特徴 I区的主要用水路で、幅が広い。1号溝との合流点付近で東側の内壁を川原石で補強しているのが見られる。1号溝との合流点では、川原石が置かれ、水流を調節していると考えられる。

3号溝 (第283・284・287・288図 PL.140)

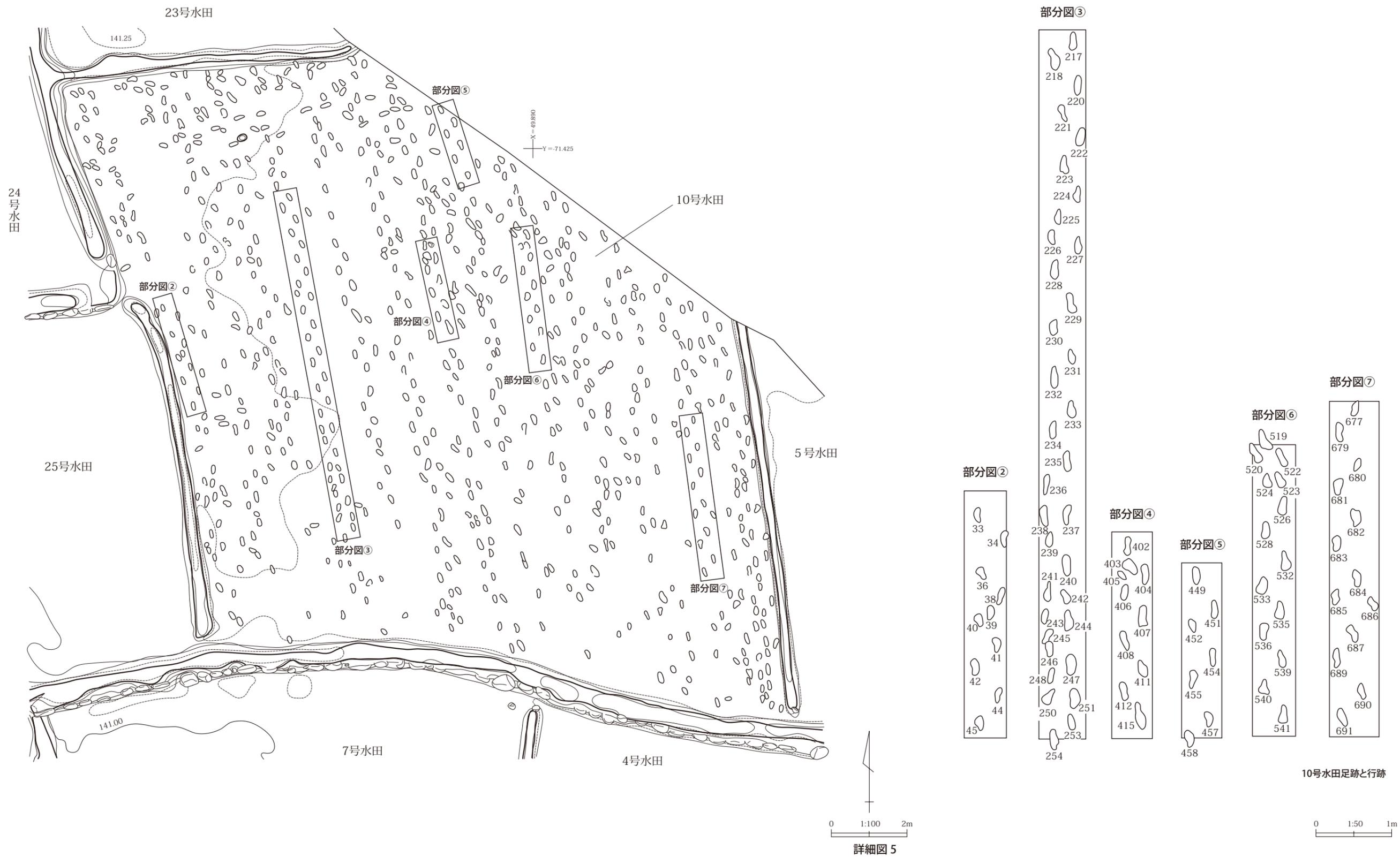
位置 X=49.895～49.920/Y=-71.450～-71.455

規模 長さ27.7m、幅(上端)0.4～0.55m(下端)0.1～0.35m、深さ0.13～0.32m

特徴 2号溝の東側を併走する。2号溝と比較して補助的な用水路である。24号水田へ水を供給する。

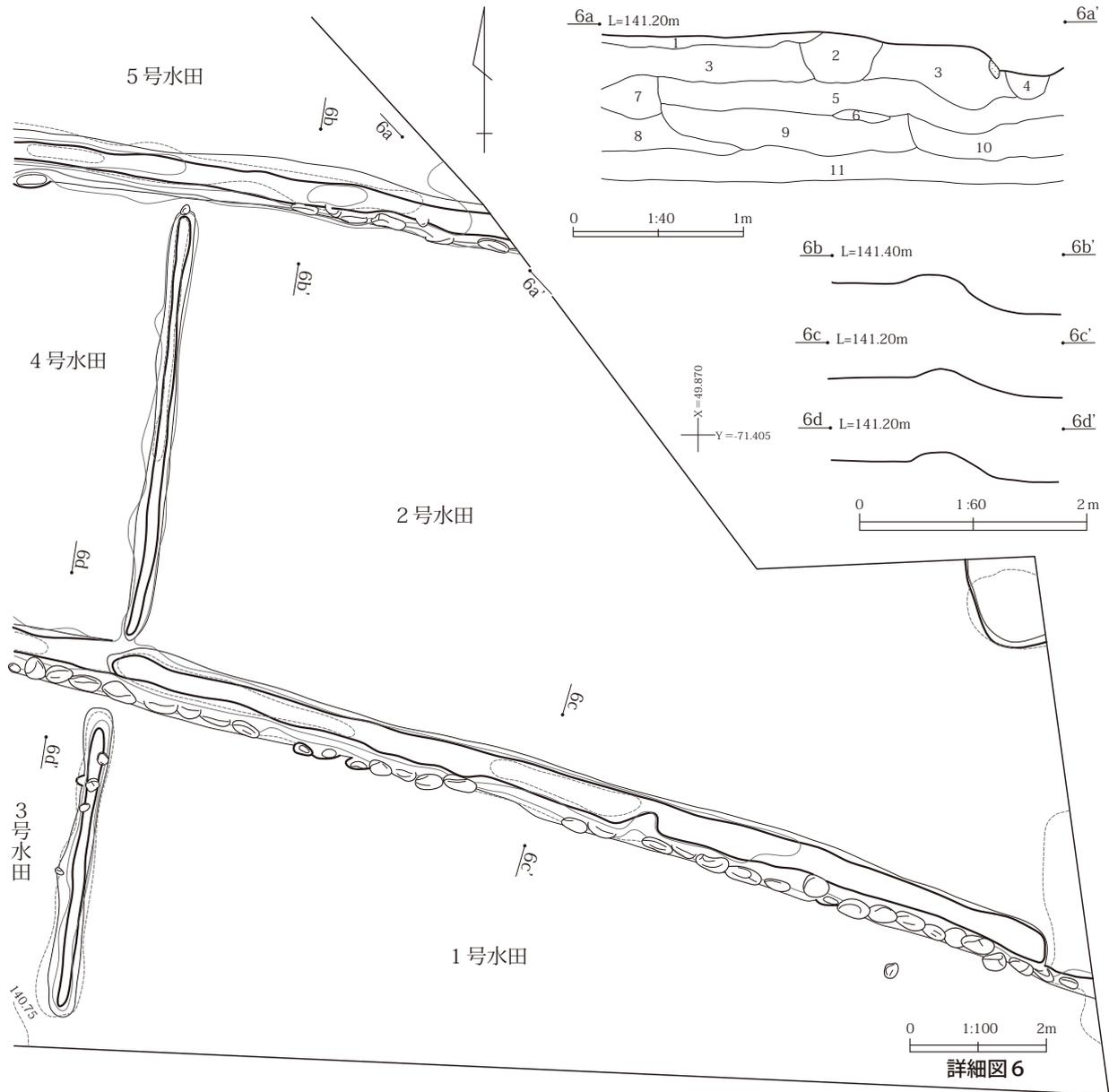


第293図 中町遺跡 I区詳細図5 部分図①



第294図 中町遺跡 I区詳細図5 部分図②～⑦

第2節 近世の遺構と遺物



詳細図6

中町遺跡 I 区土層観察所見 6a ライン

- 1 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石少量入る。黄褐色土粒子が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まりやや弱い。粘性やや弱い。
- 2 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が多く入る。黄褐色土粒子が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性弱い。
- 3 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 30mm 以下の白色軽石が多く入る。黄褐色土粒子が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性弱い。
- 4 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性やや弱い。
- 5 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が多く入る。黄褐色土粒子が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性弱い。

- 6 灰黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 10mm 以下の白色軽石が多く入る。黄褐色土粒子が少量入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。炭化物が入る。縮まっている。粘性やや弱い。
- 7 にぶい黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性弱い。
- 8 にぶい黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 5mm 以下の白色軽石が少量入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性やや弱い。
- 9 にぶい黄褐色土 砂質に近いシルト質土。径 20mm 以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性やや弱い。
- 10 にぶい黄褐色シルト質土 径 10mm 以下の白色軽石がやや多く入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性やや弱い。
- 11 にぶい黄褐色シルト質土 径 5mm 以下の白色軽石が極少量入る。黄褐色土粒子が入る。赤褐色砂質土ブロックが入る。縮まっている。粘性中。

第295図 中町遺跡 I 区詳細図6 土層断面図・高低図

第4章 遺構と遺物

第8表 中町遺跡I区10号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	左	27.0	10.0	1.2	—
2	単独	右	21.0	9.0	1.7	—
3	行跡	左	24.0	8.0	1.1	—
4	行跡	右	22.0	12.0	1.1	3-4間 7
5	単独	右	22.0	8.0	1.7	—
6	行跡	右	24.0	11.0	0.7	3-6間 25
7	単独	?	19.0	9.0	2.6	—
8	単独	右	23.0	11.0	2.5	—
9	単独	右	24.0	7.0	0.7	—
10	単独	左	14.0	6.0	1.4	—
11	単独	?	22.0	7.0	0.8	—
12	単独	右	21.0	6.0	1.4	—
13	単独	右	16.0	6.0	—	—
14	単独	左	22.0	11.0	2.1	—
15	単独	右	16.0	8.0	1.3	—
16	単独	右	22.0	12.0	1.3	—
17	単独	左	22.0	14.0	1.1	—
18	単独	右	21.0	9.0	2.1	—
19	単独	左	20.0	8.0	0.0	—
20	単独	右	24.0	10.0	1.4	—
21	単独	右	21.0	11.0	3.0	—
22	単独	右	20.0	10.0	1.0	—
23	単独	右	26.0	7.0	1.3	—
24	単独	右	19.0	9.0	0.6	—
25	単独	?	11.0	8.0	—	—
26	単独	?	33.0	11.0	1.6	—
27	単独	?	19.0	6.0	0.8	—
28	単独	?	24.0	7.0	1.2	—
29	単独	?	34.0	12.0	1.7	—
30	単独	右	26.0	9.0	2.2	—
31	単独	右	25.0	11.0	1.1	—
32	単独	右	26.0	13.0	1.9	—
33	行跡	左	20.0	10.0	2.3	—
34	行跡	右	22.0	9.0	2.1	33-34間 30
35	単独	?	29.0	13.0	1.0	—
36	行跡	左	18.0	11.0	2.5	34-36間 44
37	単独	?	26.0	8.0	0.7	—
38	行跡	右	22.0	7.0	2.2	36-38間 33
39	単独	右	18.0	10.0	0.3	—
40	行跡	左	17.0	10.0	1.9	38-40間 30
41	行跡	右	20.0	9.0	1.2	40-41間 34
42	行跡	左	23.0	10.0	2.4	41-42間 38
43	単独	右	25.0	12.0	0.9	—
44	行跡	右	19.0	8.0	1.7	42-44間 36
45	行跡	左	20.0	11.0	2.7	44-45間 38
46	単独	左	22.0	13.0	1.1	—
47	単独	右	17.0	7.0	2.2	—
48	単独	?	18.0	7.0	1.7	—
49	単独	右	20.0	9.0	2.1	—
50	単独	左	18.0	9.0	2.0	—
51	単独	?	19.0	10.0	2.5	—
52	行跡	左	25.0	9.0	0.6	—
53	単独	右	17.0	10.0	1.4	—
54	単独	右	33.0	11.0	3.2	—
55	行跡	右	23.0	9.0	2.4	52-55間 35
56	単独	?	22.0	11.0	1.8	—
57	単独	左	25.0	11.0	2.9	—
58	単独	左	22.0	12.0	2.1	—
59	単独	左	26.0	12.0	1.7	—
60	単独	?	11.0	13.0	1.5	—
61	単独	右	21.0	9.0	0.1	—

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
62	行跡	右	22.0	9.0	1.7	—
63	行跡	左	21.0	7.0	1.2	62-63間 26
64	単独	右	26.0	13.0	3.0	—
65	単独	右	27.0	12.0	1.9	—
66	単独	左	21.0	10.0	1.9	—
67	単独	右	25.0	13.0	1.0	—
68	単独	左	26.0	12.0	1.1	—
69	単独	左	20.0	9.0	1.3	—
70	単独	左	23.0	14.0	1.5	—
71	単独	左	24.0	12.0	2.0	—
72	単独	右	27.0	12.0	2.4	—
73	単独	?	29.0	9.0	1.8	—
74	単独	右	24.0	14.0	1.8	—
75	単独	左	24.0	11.0	1.9	—
76	単独	左	25.0	12.0	1.1	—
77	単独	?	20.0	9.0	1.1	—
78	単独	?	14.0	8.0	2.1	—
79	単独	左	27.0	15.0	3.0	—
80	単独	右	18.0	7.0	2.9	—
81	単独	右	24.0	8.0	0.7	—
82	単独	左	20.0	9.0	2.3	—
83	単独	左	18.0	12.0	2.1	—
84	単独	右	30.0	9.0	1.1	—
85	単独	右	24.0	10.0	2.3	—
86	単独	右	27.0	10.0	2.8	—
87	単独	?	32.0	11.0	3.2	—
88	単独	左	21.0	11.0	1.5	—
89	行跡	左	22.0	12.0	2.5	—
90	単独	?	24.0	12.0	1.1	—
91	行跡	右	27.0	12.0	2.5	89-91間 32
92	行跡	右	28.0	13.0	2.6	89-92間 32
93	単独	右	25.0	9.0	1.1	—
94	単独	?	30.0	10.0	?	—
95	単独	右	22.0	10.0	1.6	—
96	単独	左	24.0	9.0	2.1	—
97	単独	右	23.0	9.0	0.9	—
98	行跡	左	26.0	10.0	3.6	—
99	単独	右	26.0	13.0	2.4	—
100	行跡	右	21.0	9.0	1.5	98-100間 22
101	行跡	左	31.0	9.0	2.5	100-101間 46
102	単独	?	20.0	8.0	3.0	—
103	単独	?	27.0	14.0	2.0	—
104	単独	左	21.0	16.0	3.0	—
105	単独	右	25.0	11.0	2.4	—
106	単独	右	13.0	9.0	0.9	—
107	単独	?	29.0	9.0	2.0	—
108	単独	左	19.0	10.0	0.7	—
109	単独	右	21.0	11.0	0.6	—
110	単独	右	26.0	12.0	2.2	—
111	単独	?	21.0	9.0	3.8	—
112	単独	左	28.0	13.0	1.4	—
113	単独	?	12.0	13.0	1.6	—
114	単独	左	22.0	12.0	1.6	—
115	行跡	右	22.0	14.0	1.3	—
116	行跡	左	11.0	9.0	2.5	115-116間 22
117	行跡	右	31.0	12.0	3.5	116-117間 15
118	単独	?	20.0	9.0	3.6	—
119	行跡	左	28.0	13.0	3.6	117-119間 25
120	単独	右	21.0	7.0	1.3	—
121	単独	?	19.0	9.0	2.6	—
122	単独	左	22.0	12.0	3.4	—

第2節 近世の遺構と遺物

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
123	単独	右	23.0	15.0	2.4	
124	単独	右	24.0	12.0	3.8	
125	単独	右	22.0	10.0	2.9	
126	単独	左	27.0	10.0	2.5	
127	行跡	右	24.0	8.0	2.1	
128	行跡	左	19.0	9.0	1.8	127-128間 35
129	行跡	右	24.0	11.0	2.9	128-129間 41
130	単独	左	26.0	11.0	1.9	
131	単独	左	22.0	9.0	0.7	
132	行跡	右	22.0	9.0	1.8	
133	行跡	左	25.0	9.0	3.9	132-133間 31
134	単独	?	27.0	12.0	3.0	
135	行跡	右	21.0	11.0	3.1	133-135間 33
136	単独	右	21.0	9.0	2.7	
137	単独	?	31.0	14.0	4.6	
138	単独	左	27.0	14.0	3.0	
139	単独	右	25.0	11.0	1.4	
140	単独	右	26.0	11.0	3.2	
141	単独	右	30.0	12.0	3.1	
142	行跡	左	14.0	12.0	2.5	
143	単独	左	26.0	13.0	1.9	
144	行跡	右	24.0	12.0	2.1	142-144間 38
145	単独	左	26.0	11.0	3.2	
146	行跡	右	25.0	9.0	3.0	
147	行跡	左	25.0	11.0	2.2	146-147間 36
148	行跡	右	31.0	11.0	3.5	147-148間 26
149	単独	右	32.0	10.0	4.5	
150	単独	右	25.0	9.0	2.6	
151	行跡	左	29.0	11.0	4.1	148-151間 48
152	行跡	右	24.0	11.0	3.2	151-152間 28
153	単独	右	22.0	9.0	2.0	
154	単独	左	29.0	12.0	3.4	
155	単独	左	25.0	11.0	3.2	
156	単独	?	22.0	9.0	1.1	
157	単独	?	24.0	7.0	0.7	
158	単独	左	26.0	12.0	2.8	
159	単独	右	21.0	11.0	0.8	
160	単独	右	23.0	12.0	1.0	
161	単独	?	38.0	10.0	2.3	
162	単独	左	21.0	9.0	1.5	
163	単独	右	24.0	11.0	2.1	
164	単独	?	13.0	10.0	2.4	
165	単独	左	17.0	13.0	3.6	
166	単独	右	19.0	8.0	1.2	
167	単独	右	26.0	11.0	2.3	
168	単独	右	21.0	8.0	1.1	
169	単独	右	24.0	9.0	0.7	
170	単独	右	20.0	9.0	1.0	
171	単独	右	22.0	7.0	2.0	
172	単独	右	22.0	7.0	1.8	
173	単独	右	31.0	12.0	3.8	
174	単独	右	21.0	7.0	3.2	
175	単独	右	24.0	10.0	3.3	
176	単独	左	25.0	10.0	2.8	
177	単独	左	24.0	9.0	3.1	
178	行跡	左	19.0	9.0	3.3	
179	行跡	右	21.0	11.0	1.8	178-179間 40
180	単独	左	24.0	10.0	0.6	
181	単独	右	22.0	11.0	2.0	
182	単独	?	28.0	14.0	1.9	
183	単独	右	20.0	8.0	2.3	
184	単独	右	23.0	11.0	2.3	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
185	単独	右	24.0	9.0	2.3	
186	単独	右	23.0	11.0	2.0	
187	単独	右	32.0	11.0	3.7	
188	単独	右	30.0	12.0	0.9	
189	単独	右	22.0	10.0	0.6	
190	単独	右	26.0	11.0	2.6	
191	単独	左	20.0	9.0	1.1	
192	単独	?	15.0	10.0	1.0	
193	単独	右	25.0	12.0	2.0	
194	単独	左	19.0	12.0	3.2	
195	単独	右	26.0	12.0	2.4	
196	単独	右	25.0	12.0	1.1	
197	単独	左	24.0	9.0	2.0	
198	単独	右	36.0	18.0	1.2	
199	単独	右	30.0	14.0	2.4	
200	単独	右	27.0	13.0	4.0	
201	単独	左	26.0	11.0	3.9	
202	単独	右	26.0	12.0	2.6	
203	単独	右	26.0	12.0	4.0	
204	単独	右	18.0	9.0	2.9	
205	単独	右	25.0	14.0	3.0	
206	単独	右	26.0	12.0	3.8	
207	単独	右	27.0	10.0	2.5	
208	単独	右	22.0	10.0	2.3	
209	行跡	右	22.0	12.0	1.8	
210	単独	左	25.0	9.0	2.1	
211	行跡	左	23.0	7.0	1.9	209-211間 36
212	行跡	右	19.0	10.0	3.1	211-212間 24
213	単独	右	26.0	12.0	1.9	
214	行跡	左	18.0	8.0	2.9	212-214間 43
215	単独	右	26.0	11.0	3.0	
216	単独	左	28.0	12.0	1.3	
217	行跡	左	22.0	8.0	2.2	
218	行跡	右	28.0	11.0	2.2	217-218間 23
219	単独	?	25.0	9.0	1.5	
220	行跡	左	26.0	11.0	2.3	218-220間 33
221	行跡	右	23.0	9.0	2.8	220-221間 39
222	行跡	左	23.0	10.0	1.2	221-222間 38
223	行跡	右	24.0	10.0	2.3	222-223間 37
224	行跡	左	22.0	10.0	2.8	223-224間 28
225	行跡	右	33.0	10.0	1.8	224-225間 32
226	単独	?	19.0	9.0	0.8	
227	行跡	左	25.0	10.0	1.8	225-227間 33
228	行跡	右	25.0	10.0	2.8	227-228間 33
229	行跡	左	25.0	13.0	2.9	228-229間 40
230	行跡	右	20.0	11.0	2.7	229-230間 35
231	行跡	左	23.0	8.0	1.8	230-231間 36
232	行跡	右	29.0	10.0	2.6	231-232間 24
233	行跡	左	23.0	9.0	3.6	232-233間 40
234	行跡	右	24.0	9.0	2.4	232-233間 41
235	行跡	左	25.0	10.0	2.4	232-233間 42
236	行跡	右	27.0	7.0	2.4	235-236間 34
237	行跡	左	25.0	9.0	3.4	236-237間 35
238	単独	左	26.0	11.0	2.5	
239	行跡	右	20.0	8.0	2.0	237-239間 37
240	行跡	左	25.0	10.0	2.4	239-240間 30
241	行跡	右	26.0	10.0	1.8	240-241間 35
242	単独	左	20.0	9.0	2.1	
243	単独	?	19.0	10.0	1.4	
244	行跡	左	29.0	10.0	3.0	241-244間 33
245	単独	?	22.0	10.0	3.3	
246	行跡	右	22.0	9.0	2.0	244-246間 40

第4章 遺構と遺物

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
247	行跡	左	29.0	11.0	3.5	246-247間 16
248	行跡	右	19.0	7.0	1.9	
249	単独	右	24.0	9.0	1.7	247-250間 48
250	行跡	右	21.0	12.0	0.6	248-251間 23
251	行跡	左	24.0	14.0	2.5	
252	単独	左	21.0	11.0	1.5	
253	行跡	左	19.0	9.0	2.0	250-253間 32
254	単独	?	26.0	9.0	2.2	
255	単独	右	22.0	14.0	2.4	
256	単独	?	20.0	7.0	0.6	
257	単独	左	20.0	9.0	1.0	
258	単独	右	19.0	7.0	1.8	
259	単独	左	23.0	11.0	2.4	
260	単独	?	28.0	12.0	3.0	
261	単独	右	23.0	14.0	4.0	
262	単独	左	22.0	10.0	2.9	
263	単独	右	19.0	8.0	2.3	
264	単独	左	23.0	11.0	1.3	
265	単独	左	26.0	12.0	3.2	
266	単独	?	16.0	9.0	4.1	
267	単独	左	24.0	11.0	0.4	
268	単独	右	20.0	10.0	1.7	
269	単独	左	23.0	9.0	-	
270	単独	左	25.0	10.0	4.4	
271	単独	左	23.0	11.0	?	
272	単独	左	22.0	12.0	1.9	
273	単独	左	23.0	11.0	1.4	
274	単独	左	25.0	12.0	2.6	
275	単独	右	21.0	14.0	1.9	
276	単独	右	26.0	10.0	1.6	
277	単独	?	30.0	9.0	2.6	
278	単独	左	20.0	12.0	0.7	
279	行跡	左	21.0	8.0	2.4	
280	行跡	右	25.0	11.0	2.9	279-280間 36
281	単独	右	22.0	10.0	1.2	
282	単独	左	25.0	11.0	2.5	
283	単独	右	20.0	12.0	1.6	
284	単独	右	22.0	10.0	1.2	
285	単独	左	26.0	10.0	2.4	
286	単独	左	22.0	9.0	2.6	
287	行跡	左	25.0	10.0	1.9	
288	行跡	右	20.0	12.0	2.1	287-288間 43
289	行跡	左	24.0	9.0	?	288-289間 36
290	行跡	右	30.0	16.0	2.9	289-290間 46
291	行跡	左	24.0	13.0	2.7	290-291間 32
292	単独	左	34.0	12.0	2.0	
293	単独	右	15.0	12.0	3.5	
294	単独	右	27.0	10.0	1.9	
295	行跡	右	25.0	15.0	2.9	
296	行跡	左	25.0	11.0	3.2	295-296間 34
297	行跡	右	34.0	12.0	1.7	
298	行跡	左	25.0	11.0	3.2	297-298間 35
299	行跡	右	24.0	11.0	3.3	
300	行跡	左	25.0	7.0	2.7	299-300間 36
301	行跡	左	32.0	12.0	3.4	
302	行跡	右	19.0	9.0	2.9	301-302間 28
303	単独	右	26.0	10.0	3.2	
304	単独	左	20.0	8.0	1.8	
305	行跡	右	22.0	9.0	3.3	
306	行跡	左	20.0	10.0	3.5	305-306間 43
307	行跡	右	25.0	9.0	3.3	306-307間 42
308	単独	右	25.0	9.0	3.4	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
309	単独	左	25.0	13.0	3.7	
310	単独	左	33.0	11.0	0.4	
311	単独	?	25.0	12.0	3.0	
312	単独	右	28.0	11.0	1.7	
313	単独	右	24.0	10.0	2.7	
314	単独	右	24.0	12.0	1.3	
315	単独	右	26.0	12.0	0.9	
316	単独	右	29.0	15.0	2.3	
317	単独	左	20.0	10.0	2.4	
318	単独	左	34.0	15.0	4.2	
319	単独	右	17.0	8.0	1.9	
320	単独	左	27.0	11.0	3.0	
321	行跡	左	22.0	9.0	2.5	
322	単独	右	25.0	11.0	2.2	
323	行跡	右	17.0	11.0	2.3	321-323間 6
324	単独	右	23.0	7.0	1.8	
325	単独	左	16.0	9.0	0.6	
326	行跡	左	28.0	10.0	2.1	
327	行跡	右	24.0	11.0	2.8	326-327間 28
328	行跡	左	23.0	7.0	1.8	327-328間 40
329	行跡	右	25.0	11.0	1.7	328-329間 34
330	行跡	左	25.0	9.0	2.2	329-330間 31
331	行跡	右	25.0	12.0	2.8	330-331間 26
332	行跡	左	25.0	16.0	2.3	
333	単独	?	11.0	8.0	-	
334	行跡	右	26.0	12.0	2.4	332-334間 22
335	単独	左	22.0	15.0	1.7	
336	単独	左	15.0	11.0	-	
337	単独	右	25.0	11.0	2.8	
338	単独	右	25.0	11.0	2.2	
339	単独	左	27.0	15.0	1.4	
340	単独	右	30.0	11.0	3.4	
341	単独	右	24.0	13.0	3.5	
342	単独	右	25.0	11.0	2.1	
343	単独	左	24.0	12.0	2.9	
344	単独	左	30.0	11.0	2.0	
345	行跡	左	26.0	11.0	2.1	
346	行跡	右	26.0	8.0	1.8	345-346間 36
347	行跡	左	24.0	10.0	2.7	346-347間 34
348	行跡	右	21.0	9.0	2.8	347-348間 34
349	単独	?	23.0	10.0	1.5	
350	行跡	左	28.0	13.0	3.8	348-350間 37
351	行跡	右	28.0	10.0	2.8	350-351間 38
352	単独	右	26.0	12.0	2.8	
353	行跡	右	26.0	11.0	2.0	
354	単独	左	25.0	11.0	2.8	353-354間 10
355	単独	左	29.0	11.0	3.3	
356	単独	?	22.0	10.0	5.8	
357	単独	?	29.0	11.0	3.2	
358	単独	右	25.0	12.0	2.5	
359	単独	右	25.0	13.0	3.5	
360	単独	左	22.0	10.0	2.2	
361	単独	?	13.0	9.0	3.2	
362	行跡	左	24.0	9.0	2.5	
363	行跡	右	23.0	9.0	0.9	362-363間 21
364	単独	?	31.0	10.0	1.8	
365	単独	左	19.0	7.0	2.3	
366	単独	?	28.0	9.0	1.4	
367	単独	右	23.0	9.0	1.2	
368	単独	左	29.0	9.0	2.2	
369	単独	右	24.0	11.0	1.3	
370	単独	右	24.0	11.0	2.0	

第2節 近世の遺構と遺物

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
371	単独	右	37.0	12.0	2.2	
372	単独	右	20.0	8.0	0.7	
373	単独	?	19.0	7.0	1.7	
374	単独	左	19.0	8.0	1.5	
375	単独	左	20.0	10.0	2.3	
376	単独	左	21.0	9.0	1.5	
377	単独	右	21.0	9.0	1.8	
378	単独	右	27.0	13.0	3.3	
379	単独	?	29.0	12.0	2.9	
380	単独	左	26.0	14.0	2.2	
381	単独	右	27.0	8.0	2.3	
382	単独	左	27.0	9.0	0.9	
383	単独	左	28.0	9.0	3.1	
384	単独	?	28.0	12.0	2.8	
385	単独	?	19.0	9.0	1.9	
386	単独	右	32.0	16.0	2.8	
387	単独	左	26.0	11.0	0.6	
388	単独	右	25.0	12.0	2.5	
389	行跡	右	23.0	9.0	2.2	
390	行跡	左	29.0	16.0	1.1	389-390間 35
391	行跡	右	29.0	9.0	3.7	390-391間 30
392	単独	右	30.0	12.0	1.6	
393	単独	右	28.0	11.0	2.8	
394	単独	右	22.0	9.0	1.2	
395	単独	右	21.0	10.0	1.3	
396	単独	右	19.0	8.0	0.6	
397	単独	右	23.0	9.0	1.9	
398	単独	右	25.0	13.0	2.8	
399	単独	右	25.0	10.0	2.8	
400	行跡	左	22.0	8.0	1.8	
401	単独	?	26.0	6.0	2.2	
402	行跡	右	24.0	8.0	1.4	
403	単独	?	24.0	13.0	4.6	
404	行跡	左	28.0	9.0	2.9	402-404間 31
405	単独	?	17.0	8.0	0.8	
406	行跡	右	24.0	9.0	4.9	404-406間 30
407	行跡	左	26.0	12.0	3.2	406-407間 24
408	行跡	右	26.0	9.0	3.3	407-408間 35
409	単独	右	30.0	12.0	0.5	
410	単独	右	26.0	10.0	2.4	
411	行跡	左	26.0	10.0	3.9	408-411間 37
412	行跡	右	24.0	11.0	3.5	411-412間 25
413	単独	左	34.0	15.0	2.1	
414	単独	右	25.0	10.0	2.2	
415	行跡	左	39.0	13.0	1.5	412-415間 29
416	単独	左	25.0	11.0	1.9	
417	行跡	左	25.0	9.0	2.2	
418	行跡	右	26.0	10.0	2.6	417-418間 25
419	行跡	左	25.0	9.0	1.7	418-419間 11
420	行跡	左	22.0	10.0	2.1	
421	行跡	右	20.0	7.0	1.3	420-421間 23
422	単独	左	29.0	10.0	2.6	
423	行跡	右	35.0	11.0	2.0	
424	行跡	左	30.0	11.0	1.0	423-424間 34
425	単独	右	25.0	12.0	2.2	
426	単独	右	27.0	9.0	2.0	
427	単独	左	27.0	10.0	3.4	
428	単独	左	26.0	9.0	1.2	
429	単独	右	25.0	11.0	2.9	
430	単独	右	24.0	9.0	2.5	
431	単独	左	20.0	9.0	2.9	
432	単独	?	30.0	9.0	1.8	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
433	単独	?	22.0	7.0	2.8	
434	単独	?	30.0	8.0	2.2	
435	単独	?	20.0	8.0	1.8	
436	行跡	右	30.0	12.0	2.1	
437	単独	左	26.0	11.0	3.3	
438	行跡	左	22.0	10.0	2.0	436-438間 31
439	行跡	右	19.0	10.0	3.3	438-439間 29
440	行跡	左	22.0	8.0	3.4	439-440間 33
441	行跡	右	23.0	9.0	1.7	440-441間 25
442	単独	左	24.0	9.0	2.3	
443	単独	左	31.0	9.0	1.2	
444	単独	右	22.0	12.0	0.7	
445	単独	左	22.0	7.0	1.9	
446	単独	右	26.0	11.0	1.5	
447	単独	左	36.0	9.0	6.3	
448	単独	右	22.0	9.0	2.7	
449	行跡	左	24.0	9.0	2.9	
450	単独	右	29.0	14.0	1.2	
451	行跡	右	22.0	10.0	2.9	449-451間 42
452	行跡	左	19.0	9.0	1.7	451-452間 24
453	単独	右	27.0	12.0	0.9	
454	行跡	右	25.0	11.0	1.8	452-454間 41
455	行跡	左	27.0	12.0	0.9	454-455間 32
456	単独	右	24.0	12.0	0.7	
457	行跡	右	24.0	12.0	2.3	455-457間 46
458	単独	右	25.0	14.0	3.2	
459	単独	右	26.0	11.0	1.4	
460	単独	右	23.0	11.0	1.9	
461	単独	右	19.0	13.0	2.5	
462	行跡	左	24.0	11.0	2.4	462-463間 26
463	行跡	右	23.0	14.0	3.0	
464	単独	右	25.0	10.0	0.4	
465	行跡	右	26.0	12.0	1.4	463-465間 27
466	単独	?	37.0	9.0	1.3	
467	行跡	右	22.0	9.0	2.6	
468	行跡	左	25.0	13.0	1.7	467-468間 27
469	行跡	右	17.0	9.0	1.2	
470	単独	右	20.0	9.0	2.9	
471	行跡	左	16.0	10.0	2.3	469-471間 26
472	単独	右	21.0	11.0	1.6	
473	単独	左	21.0	10.0	1.4	
474	単独	右	23.0	10.0	2.6	
475	単独	右	29.0	14.0	0.7	
476	単独	右	24.0	10.0	1.0	
477	単独	左	37.0	9.0	1.5	
478	単独	右	21.0	9.0	1.1	
479	行跡	右	25.0	12.0	3.1	
480	単独	右	22.0	9.0	1.1	
481	行跡	左	24.0	14.0	1.9	479-481間 24
482	単独	左	24.0	11.0	2.2	
483	単独	左	16.0	9.0	1.7	
484	単独	左	17.0	9.0	0.5	
485	単独	右	20.0	7.0	2.2	
486	単独	左	19.0	9.0	1.1	
487	単独	右	20.0	11.0	2.9	
488	行跡	右	32.0	11.0	3.2	
489	行跡	左	25.0	11.0	2.6	488-489間 26
490	行跡	右	25.0	10.0	2.0	489-490間 43
491	行跡	左	24.0	11.0	2.4	490-491間 31
492	単独	?	19.0	10.0	1.9	
493	単独	?	19.0	10.0	3.0	
494	単独	左	24.0	13.0	2.8	

第4章 遺構と遺物

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
495	単独	左	22.0	13.0	3.3	
496	単独	左	20.0	14.0	1.5	
497	単独	右	24.0	9.0	2.5	
498	単独	左	24.0	9.0	2.9	
499	単独	左	29.0	26.0	1.9	
500	単独	右	26.0	7.0	1.0	
501	行跡	右	19.0	10.0	1.1	
502	行跡	左	27.0	11.0	1.8	501-502間計測不可
503	単独	左	25.0	9.0	2.7	
504	単独	左	26.0	10.0	1.1	
505	単独	?	25.0	9.0	2.0	
506	単独	?	26.0	9.0	1.7	
507	単独	右	25.0	11.0	1.1	
508	行跡	左	21.0	12.0	2.9	
509	行跡	右	19.0	10.0	2.3	508-509間 17
510	行跡	左	24.0	8.0	1.5	
511	行跡	右	20.0	8.0	2.4	510-511間 10
512	単独	?	27.0	8.0	2.6	
513	行跡	左	24.0	12.0	1.7	
514	行跡	右	16.0	12.0	1.0	513-514間 31
515	単独	左	23.0	10.0	1.1	
516	単独	右	24.0	12.0	2.3	
517	単独	右	21.0	14.0	4.0	
518	単独	右	24.0	11.0	1.3	
519	単独	右	27.0	13.0	3.1	
520	単独	左	27.0	13.0	2.0	
521	単独	?	18.0	13.0	1.3	
522	行跡	左	26.0	12.0	3.8	
523	単独	右	22.0	12.0	3.1	
524	行跡	右	18.0	10.0	2.1	522-524間 23
525	単独	?	20.0	16.0	3.8	
526	行跡	左	22.0	11.0	2.6	524-526間 35
527	単独	左	26.0	14.0	2.6	
528	行跡	右	22.0	13.0	1.6	526-528間 35
529	行跡	右	22.0	12.0	3.6	
530	単独	左	25.0	10.0	1.5	
531	単独	左	23.0	12.0	1.2	
532	行跡	左	25.0	16.0	2.5	528-532間 40
533	行跡	右	22.0	14.0	3.1	532-533間 28
534	単独	左	25.0	12.0	1.2	
535	行跡	左	23.0	11.0	3.0	533-535間 34
536	行跡	右	21.0	12.0	3.6	535-536間 31
537	単独	右	27.0	14.0	2.2	
538	単独	?	25.0	9.0	1.4	
539	行跡	左	24.0	10.0	3.0	536-539間 33
540	行跡	右	19.0	14.0	2.5	539-540間 41
541	行跡	右	25.0	13.0	1.4	540-541間 31
542	単独	右	24.0	14.0	2.5	
543	単独	右	26.0	10.0	1.9	
544	単独	?	24.0	7.0	2.8	
545	単独	?	32.0	7.0	1.0	
546	単独	左	21.0	9.0	1.5	
547	行跡	左	24.0	12.0	3.1	
548	行跡	右	31.0	14.0	5.3	547-548間 18
549	単独	右	25.0	11.0	2.2	
550	単独	左	27.0	10.0	0.3	
551	単独	左	25.0	11.0	3.3	
552	単独	左	24.0	10.0	3.6	
553	単独	右	33.0	12.0	2.5	
554	単独	左	12.0	10.0	1.4	
555	単独	左	20.0	11.0	1.7	
556	単独	右	25.0	11.0	1.7	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
557	単独	?	29.0	11.0	2.8	
558	単独	?	21.0	11.0	1.9	
559	単独	左	20.0	7.0	1.5	
560	単独	右	22.0	9.0	1.1	
561	単独	左	23.0	12.0	1.9	
562	単独	右	24.0	12.0	1.6	
563	単独	右	25.0	9.0	1.0	
564	行跡	左	25.0	11.0	2.9	
565	単独	右	25.0	7.0	1.2	
566	行跡	右	27.0	12.0	2.3	564-566間 32
567	単独	右	21.0	12.0	2.7	
568	行跡	左	25.0	11.0	2.5	529-568間 20
569	単独	右	21.0	12.0	1.4	
570	単独	?	24.0	11.0	3.3	
571	単独	?	28.0	9.0	2.5	
572	単独	左	18.0	10.0	1.2	
573	単独	右	19.0	9.0	1.0	
574	単独	?	21.0	9.0	2.1	
575	行跡	右	18.0	10.0	2.4	
576	行跡	左	23.0	12.0	2.0	575-576間 28
577	行跡	右	21.0	12.0	2.7	576-577間 49
578	行跡	左	22.0	9.0	2.3	577-578間 35
579	単独	?	25.0	10.0	2.2	578-580間 37
580	行跡	右	20.0	14.0	2.7	
581	行跡	左	25.0	8.0	2.8	580-581間 30
582	単独	左	25.0	11.0	1.7	
583	単独	左	20.0	10.0	2.5	
584	行跡	左	23.0	11.0	2.5	
585	行跡	右	25.0	11.0	2.0	584-585間 34
586	行跡	左	21.0	10.0	2.2	585-586間 33
587	行跡	右	25.0	13.0	2.8	
588	行跡	左	20.0	7.0	2.2	587-588間 42
589	単独	?	30.0	9.0	-	
590	単独	右	25.0	15.0	2.3	
591	行跡	右	29.0	11.0	2.3	588-591間 45
592	単独	右	25.0	13.0	2.0	
593	単独	右	23.0	9.0	2.1	
594	単独	左	25.0	10.0	1.4	
595	行跡	右	22.0	10.0	1.4	
596	行跡	左	19.0	10.0	2.2	595-596間 27
597	単独	左	26.0	12.0	3.7	
598	単独	?	32.0	8.0	2.1	
599	単独	左	23.0	9.0	2.9	
600	単独	右	35.0	14.0	4.5	
601	単独	右	17.0	9.0	1.7	
602	単独	右	19.0	10.0	1.3	
603	単独	右	31.0	11.0	2.3	
604	単独	右	30.0	12.0	2.1	
605	単独	左	26.0	9.0	2.4	
606	単独	右	30.0	10.0	1.4	
607	単独	?	27.0	10.0	1.6	
608	単独	?	20.0	16.0	1.3	
609	単独	左	24.0	11.0	1.3	
610	単独	左	25.0	13.0	2.0	
611	単独	左	20.0	10.0	0.9	
612	単独	?	23.0	8.0	2.2	
613	単独	?	20.0	14.0	3.0	
614	単独	右	20.0	9.0	1.0	
615	単独	右	28.0	13.0	3.8	
616	単独	?	19.0	11.0	1.3	
617	単独	左	26.0	9.0	1.2	
618	単独	左	23.0	11.0	0.7	

第2節 近世の遺構と遺物

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
619	単独	左	19.0	12.0	2.2	
620	単独	左	21.0	8.0	1.8	
621	単独	左	21.0	14.0	1.0	
622	単独	右	20.0	12.0	1.3	
623	単独	左	21.0	10.0	2.1	
624	単独	右	22.0	9.0	3.1	
625	単独	右	22.0	13.0	2.3	
626	単独	右	24.0	12.0	2.4	
627	単独	左	24.0	10.0	0.5	
628	単独	右	20.0	11.0	1.0	
629	単独	右	21.0	10.0	1.7	
630	単独	左	20.0	9.0	2.9	
631	単独	右	23.0	11.0	3.1	
632	単独	?	30.0	10.0	1.8	
633	単独	?	24.0	8.0	2.5	
634	単独	左	24.0	7.0	1.9	
635	単独	右	23.0	10.0	2.3	
636	単独	右	20.0	13.0	2.7	
637	単独	右	22.0	7.0	2.4	
638	単独	左	27.0	10.0	1.1	
639	単独	左	20.0	12.0	1.4	
640	単独	右	24.0	9.0	2.2	
641	単独	右	25.0	11.0	2.4	
642	単独	左	26.0	11.0	2.5	
643	単独	左	26.0	10.0	2.6	
644	単独	左	23.0	11.0	2.4	
645	単独	右	18.0	14.0	2.0	
646	単独	?	15.0	7.0	1.1	
647	単独	左	20.0	9.0	1.2	
648	単独	?	20.0	12.0	4.9	
649	単独	左	18.0	9.0	1.3	
650	単独	左	19.0	9.0	0.8	
651	単独	?	25.0	7.0	0.6	
652	単独	?	14.0	11.0	2.9	
653	単独	左	21.0	11.0	1.5	
654	単独	右	28.0	9.0	2.1	
655	単独	?	20.0	8.0	4.5	
656	単独	右	30.0	19.0	1.3	
657	単独	左	24.0	10.0	3.1	
658	単独	右	21.0	11.0	3.3	
659	行跡	右	20.0	11.0	2.5	
660	行跡	左	24.0	14.0	3.8	659-660間 27
661	単独	?	23.0	7.0	2.2	
662	単独	右	25.0	9.0	2.1	
663	単独	右	21.0	9.0	2.9	
664	単独	右	30.0	10.0	2.0	
665	単独	左	19.0	14.0	1.0	
666	単独	右	24.0	11.0	2.7	
667	単独	?	30.0	10.0	2.6	
668	単独	左	26.0	8.0	3.3	
669	単独	?	30.0	9.0	0.4	
670	単独	右	26.0	12.0	4.4	
671	単独	左	26.0	11.0	2.9	
672	単独	右	20.0	8.0	1.3	
673	単独	左	25.0	12.0	3.0	
674	単独	右	20.0	12.0	1.6	
675	単独	右	25.0	12.0	2.3	
676	単独	?	17.0	9.0	2.3	
677	行跡	右	19.0	11.0	2.0	
678	単独	?	19.0	14.0	1.5	
679	行跡	左	25.0	11.0	2.8	677-679間 33
680	行跡	右	19.0	10.0	2.3	679-680間 42

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
681	行跡	左	23.0	13.0	2.0	680-681間 29
682	行跡	右	24.0	13.0	2.0	681-682間 42
683	行跡	左	19.0	10.0	2.0	682-683間 32
684	行跡	右	24.0	9.0	2.4	683-684間 46
685	行跡	左	20.0	10.0	2.0	684-685間 21
686	単独	右	20.0	7.0	2.6	
687	行跡	右	23.0	10.0	1.9	685-687間 52
688	単独	右	23.0	10.0	1.5	
689	行跡	左	24.0	9.0	2.0	687-689間 32
690	行跡	右	23.0	8.0	2.2	689-690間 46
691	行跡	左	24.0	9.0	1.8	690-691間 31
692	単独	左	24.0	11.0	0.9	
693	単独	右	24.0	10.0	2.2	
694	単独	右	19.0	7.0	1.7	
695	単独	左	19.0	11.0	1.2	
696	単独	左	21.0	8.0	1.9	
697	単独	?	23.0	7.0	2.5	
698	単独	?	16.0	11.0	2.6	
699	単独	?	25.0	6.0	2.1	
700	単独	左	25.0	14.0	2.5	
701	単独	左	30.0	12.0	2.0	
702	単独	右	24.0	6.0	1.2	
703	単独	左	24.0	9.0	2.3	
704	単独	右	24.0	7.0	5.0	
705	単独	左	25.0	9.0	2.2	
706	単独	左	25.0	10.0	1.5	
707	単独	?	21.0	11.0	1.2	
708	単独	右	25.0	9.0	0.5	
709	単独	?	23.0	6.0	1.9	
710	単独	右	24.0	13.0	3.0	
711	単独	左	24.0	11.0	2.9	
712	単独	?	25.0	7.0	1.7	
713	単独	?	25.0	9.0	1.6	
714	行跡	右	21.0	10.0	2.0	
715	行跡	左	20.0	7.0	2.0	714-715間 36
716	行跡	右	28.0	10.0	3.2	715-716間 26
717	行跡	左	25.0	11.0	1.8	716-717間 32
718	単独	右	21.0	7.0	1.1	
719	行跡	右	23.0	8.0	1.5	717-719間 25
720	行跡	左	22.0	9.0	1.3	719-720間 20
721	単独	右	28.0	10.0	0.6	
722	単独	?	16.0	10.0	1.7	
723	単独	左	27.0	11.0	3.3	
724	単独	左	22.0	11.0	2.5	
725	単独	左	22.0	11.0	2.9	
726	単独	右	24.0	12.0	2.4	
727	単独	右	20.0	8.0	2.7	
728	単独	?	16.0	7.0	2.6	
729	単独	右	26.0	11.0	1.2	
730	単独	左	30.0	9.0	2.6	
731	単独	右	20.0	11.0	1.7	
732	単独	左	27.0	11.0	1.9	
733	単独	左	29.0	13.0	1.7	
734	単独	右	29.0	9.0	2.1	
735	単独	右	26.0	11.0	2.2	
736	単独	右	25.0	10.0	2.0	
737	単独	?	16.0	10.0	2.7	
738	単独	右	24.0	9.0	2.2	
739	単独	右	26.0	9.0	3.0	
740	単独	左	20.0	15.0	0.6	
741	単独	?	22.0	6.0	1.3	
742	単独	右	29.0	11.0	2.2	

第4章 遺構と遺物

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
743	単独	?	25.0	13.0	2.2	
744	単独	?	20.0	8.0	2.2	
745	単独	?	26.0	7.0	2.4	
746	単独	?	22.0	9.0	2.2	
747	単独	左	31.0	9.0	1.3	
748	単独	左	28.0	9.0	2.3	
749	単独	右	24.0	11.0	2.9	
750	単独	左	20.0	9.0	1.4	
751	単独	右	19.0	10.0	2.8	
752	単独	左	21.0	9.0	0.3	
753	単独	右	21.0	11.0	1.3	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
754	単独	左	15.0	7.0	1.1	
755	単独	?	29.0	11.0	2.9	
756	単独	右	31.0	14.0	1.0	
757	単独	左	25.0	7.0	2.7	
758	単独	左	23.0	9.0	1.4	
759	単独	右	21.0	8.0	0.8	
760	単独	?	29.0	10.0	1.8	
761	単独	右	21.0	11.0	3.0	
762	単独	右	23.0	13.0	1.5	
763	単独	右	22.0	10.0	2.0	
764	単独	?	24.0	9.0	2.4	

第9表 中町遺跡I区11号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	右	24.0	13.0	1.2	
2	単独	左	27.0	12.0	5.0	
3	単独	右	23.5	11.0	2.5	
4	単独	?	31.5	9.0	2.3	
5	行跡	左	24.5	10.0	3.0	
6	行跡	右	20.0	9.5	3.1	5-6間 37
7	単独	左	24.0	9.0	2.9	
8	単独	左	18.5	8.0	0.7	
9	単独	左	25.0	8.5	2.8	
10	単独	左	29.0	11.0	1.1	
11	行跡	右	21.0	11.0	1.0	
12	行跡	左	20.0	12.0	2.0	11-12間 27
13	単独	左	25.0	11.0	2.0	
14	単独	?	—	14.0	3.3	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
15	行跡	右	27.0	13.5	3.1	
16	単独	右	22.0	10.5	2.8	
17	単独	右	23.5	11.0	1.6	
18	行跡	左	24.0	10.0	2.4	
19	行跡	左	17.0	10.5	3.0	15-19間 21
20	行跡	左	27.0	11.0	1.6	15-20間 34
21	行跡	右	23.0	8.0	2.6	18-21間 28
22	単独	?	23.5	11.0	3.0	
23	単独	?	23.5	8.0	0.7	
24	単独	右	25.0	11.0	3.5	
25	単独	?	23.0	9.0	1.0	
26	単独	右	31.0	10.0	3.7	
27	単独	右	26.0	10.5	0.5	
28	行跡	右	23.0	9.5	0.8	
29	行跡	左	23.0	8.0	1.7	28-29間 8

第10表 中町遺跡I区21号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	右	27.0	12.0	1.0	
2	単独	右	23.0	10.0	2.1	
3	単独	右	23.0	8.0	1.7	
4	単独	?	23.0	12.0	1.4	
5	単独	右	21.0	11.0	1.2	
6	単独	右	25.0	12.0	1.1	
7	行跡	左	22.0	11.0	0.7	
8	単独	左	18.0	10.0	0.4	
9	単独	右	24.0	7.0	3.3	
10	単独	右	22.0	10.0	2.5	
11	単独	?	21.0	7.0	1.3	
12	行跡	左	19.0	7.0	0.9	
13	単独	右	24.0	10.0	3.7	
14	行跡	右	20.0	9.0	—	7-14間 14
15	単独	?	19.0	10.0	1.5	
16	単独	右	20.0	11.0	—	
17	単独	?	22.0	8.0	1.5	
18	単独	左	22.0	9.0	1.0	
19	単独	左	25.0	8.0	2.2	
20	単独	右	23.0	10.0	2.5	
21	行跡	右	18.0	7.0	1.5	12-21間 30
22	単独	右	26.0	11.0	2.2	
23	単独	右	21.0	11.0	2.0	
24	単独	左	19.0	10.0	0.4	
25	単独	右	23.0	9.0	1.7	
26	単独	右	20.0	8.0	3.0	
27	単独	右	21.0	11.0	3.2	
28	単独	右	20.0	7.0	1.5	
29	単独	左	21.0	10.0	0.4	
30	行跡	左	21.0	10.0	1.2	
31	単独	右	19.0	9.0	1.3	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
32	単独	右	22.0	11.0	2.1	
33	単独	右	17.0	8.0	1.0	
34	行跡	右	20.0	8.0	0.8	30-34間 18
35	単独	右	35.0	6.0	1.0	
36	単独	左	19.0	9.0	1.1	
37	単独	左	15.0	7.0	1.7	
38	行跡	右	18.0	8.0	1.8	
39	行跡	左	20.0	8.0	1.4	38-39間 37
40	単独	右	20.0	9.0	0.7	
41	行跡	右	20.0	8.0	3.0	
42	単独	左	20.0	9.0	1.3	
43	単独	右	23.0	11.0	—	
44	単独	左	19.0	7.0	2.9	
45	単独	右	18.0	7.0	2.4	
46	行跡	左	20.0	7.0	1.6	
47	単独	右	20.0	7.0	1.3	
48	行跡	左	21.0	10.0	1.9	41-48間 17
49	行跡	左	24.0	8.0	1.0	41-49間 18
50	単独	?	16.0	10.0	2.4	
51	単独	右	20.0	9.0	0.8	
52	単独	左	18.0	7.0	0.7	
53	単独	右	24.0	8.0	0.5	46-53間 12
54	単独	?	25.0	10.0	1.3	
55	単独	左	19.0	10.0	1.1	
56	単独	?	22.0	7.0	0.3	
57	単独	左	18.0	7.0	1.2	
58	単独	?	18.0	7.0	1.0	
59	単独	左	22.0	11.0	0.5	
60	単独	右	23.0	8.0	2.3	
61	単独	左	21.0	9.0	2.0	
62	単独	?	23.0	8.0	1.4	

II区

検出された遺構は、水田18枚、溝4条であり、残存状況は概ね良好であるが、調査区の東部と西部は大きく攪乱されている。水田番号は北から付けている。

水田の形状

地形は全体的に北西から南に傾斜している。北西部の1号水田と南部の14号水田の標高差は約1mで14号水田が低い。調査区の西部は一段高くなっている。水田の形状は、用水路や畦によって分けられ、田面が整えられている。

調査区の北西を1号溝が走る。1号溝の東側の高台は攪乱され、水田跡は検出されなかった。調査区の北東部では2号溝とその東側を4号溝が併走する。3号溝は調査区南部にあり、14・15号水田の北側を流れる。

5・7号水田の南側の畦を境に南北で水田の向きが変わる。

水田の区画

[1・2・3・4・5・6・7号水田]

(第296～299・301～303・305～307図 PL.141～146)

調査区の北部から中央部にある。1号水田は最も標高が高い。

2号水田は1号水田より6～8cm低く、両水田は幅30～55cm、高さ10～14cmの畦で区切られ、この東端が幅40cmほど途切れて水口となり、2号水田へ水が流れる。2号水田は東側を2号溝に沿った幅50～95cm、田面からの高さ10～16cmの土手状の畦で区切られる。畦頂部に境木の痕と思われる穴が多数見られた。

3号水田は2号水田より21～26cm低く、両水田は幅75～100cm、高さ26～30cmの畦で区切られ、この東端が幅60cmほど途切れて水口となり、3号水田へ水が流れる。畦の南側壁面に境木の痕と思われる穴が見られた。3号水田は東側を2号溝に沿った幅50～70cm、田面からの高さ6～20cmの土手状の

畦で区切られ、この北部が幅25cmほど途切れて水口となり、3号水田から2号溝へ落水する。

4号水田は3号水田より11cm低く、両水田は幅60～80cm、高さ17～19cmの畦で区切られ、この西端が幅50cmほど途切れて水口となり、4号水田へ水が流れる。水口は川原石で補強されている。

5号水田は4号水田より5～7cm低く、両水田は幅40～60cm、高さ10～17cmの畦で区切られ、この西端が幅30cmほど途切れて水口となり、5号水田へ水が流れる。4・6号水田を区切っている畦と続いている。

6号水田は北の4号水田より2cm低く、両水田は幅40～70cm、高さ9cmの畦で区切られている。また6号水田は西の5号水田より1cm低く、両水田は幅40～50cm、高さ3～7cmの畦で区切られ、この北端が幅25cmほど途切れて水口となり、6号水田へ水が流れる。5・7号水田を区切っている畦と続いている。

7号水田は西の5号水田より1～4cm低く、両水田は幅40～60cm、高さ7～11cmの畦で区切られ、この南端が幅40cmほど途切れて水口となり、7号水田へ水が流れる。水口は川原石で補強されている。また7号水田は北の6号水田より3～5cm低く、両水田は幅40～70cm、高さ11～14cmの畦で区切られ、この西端が幅40cmほど途切れて水口となり、7号水田へ水が流れる。水口は川原石で補強されている。

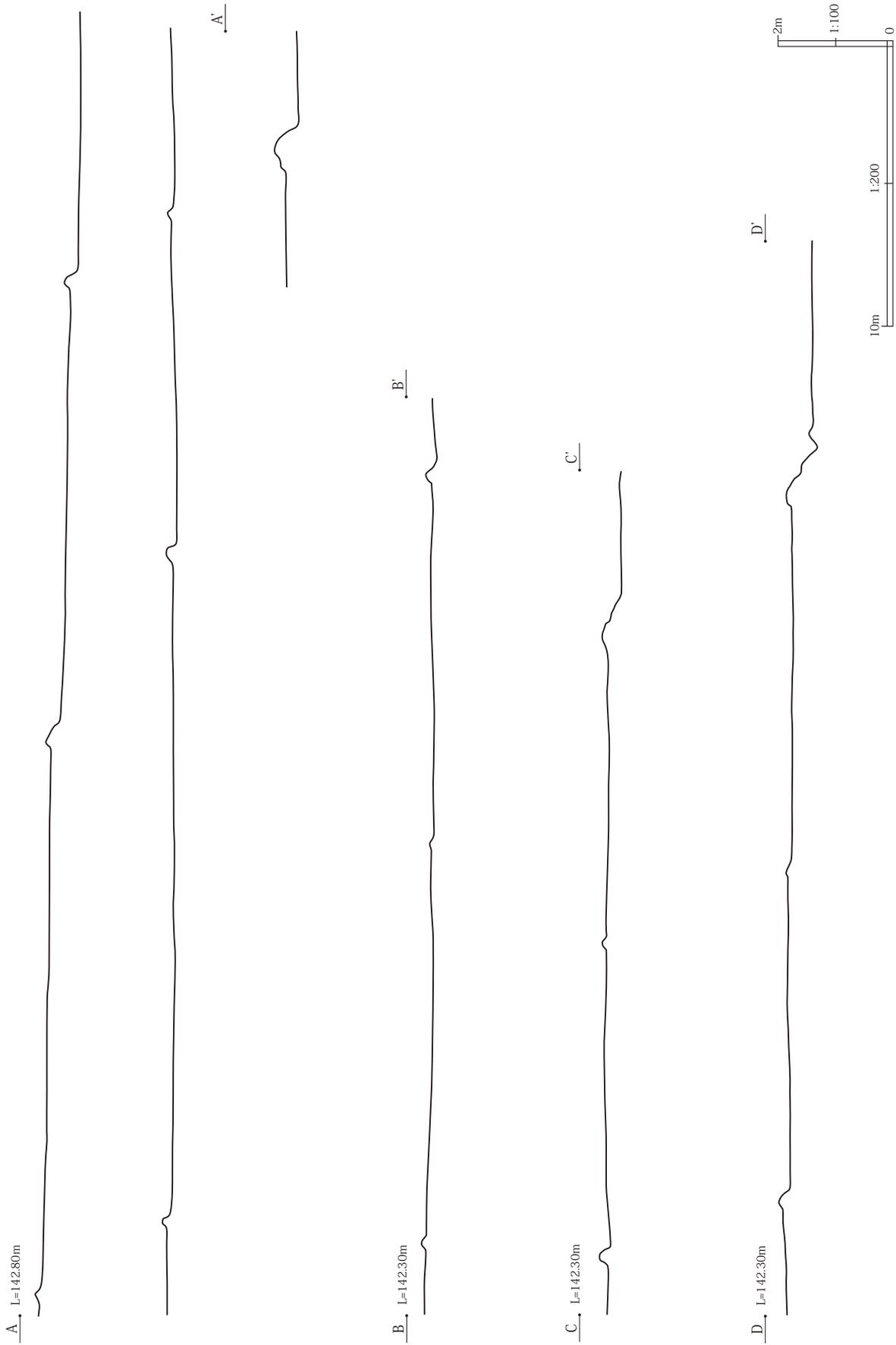
[8・9・10・11・12・13号水田]

(第296～298・306～308図 PL.141・143～145・147)

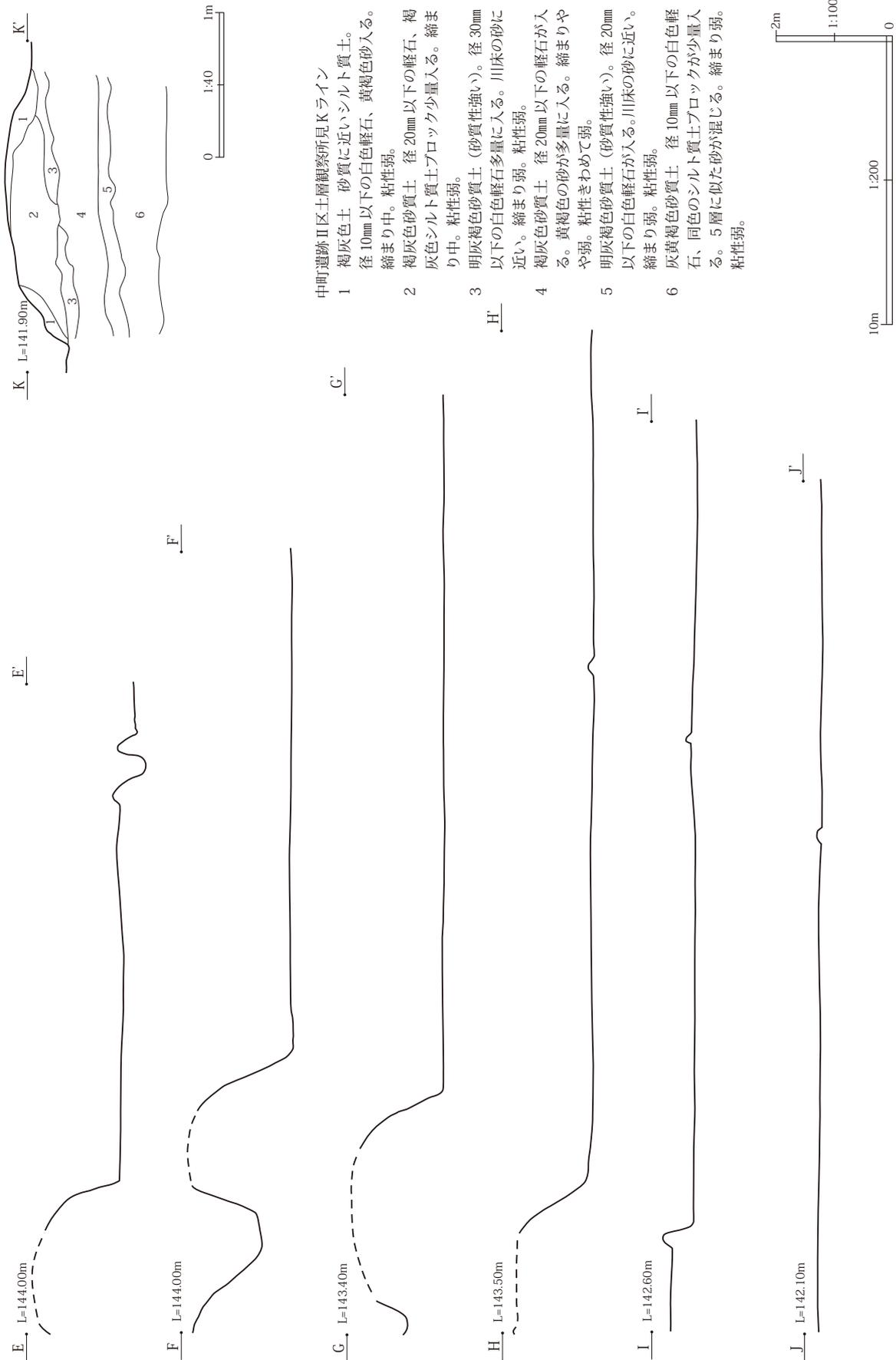
調査区の南部にある。西側の9号水田の標高が最も高い。北の5号水田より32～33cm高く、両水田は幅80～130cm、高さ45～53の畦で区切られている。

9号水田の西にある8号水田は、ほとんどが調査範囲外であるため詳細はわからない。

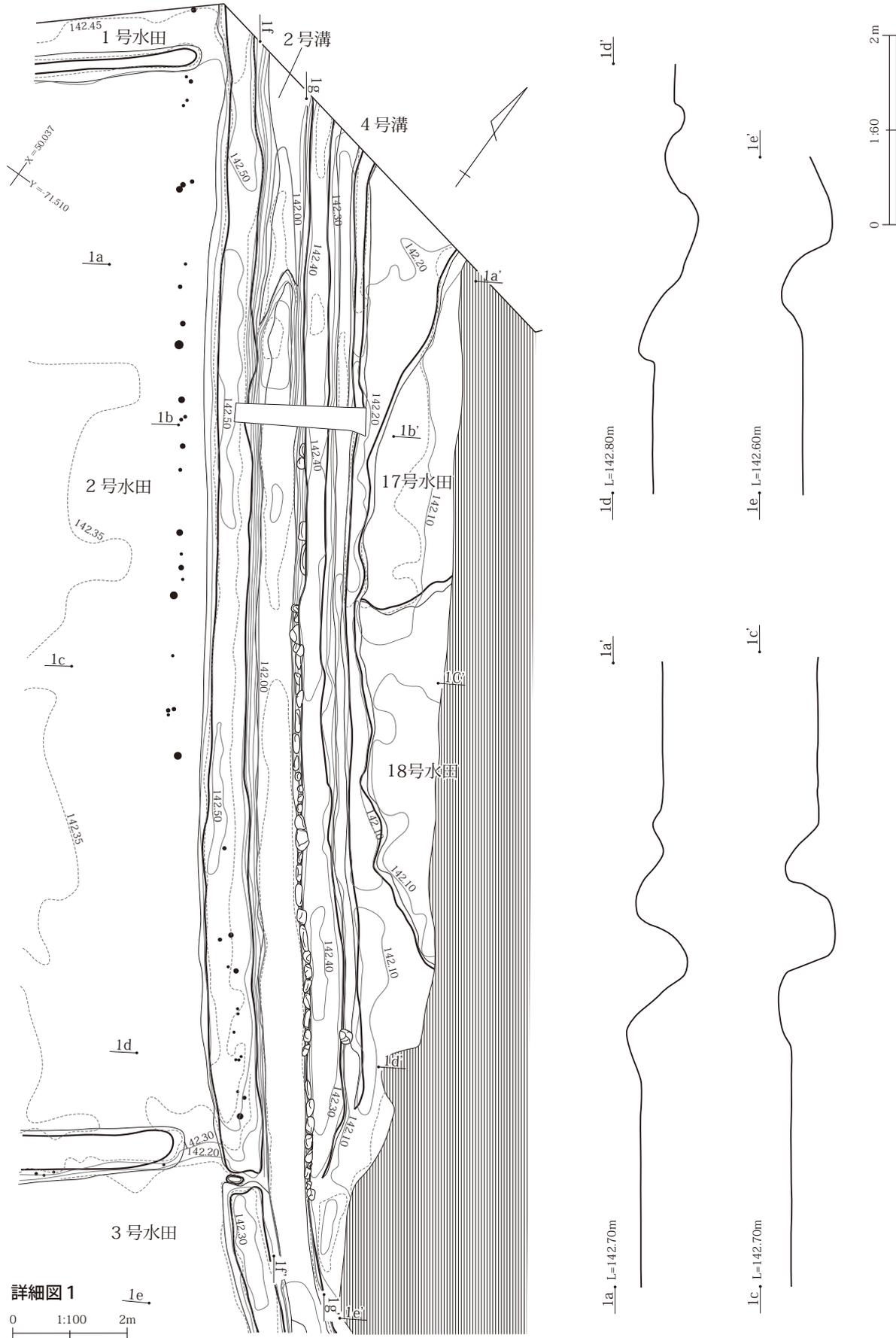
10号水田は、北の5号水田より3～9cm低く、両水田は幅70～100cm、高さ16～27cmの畦で区切られている。畦の西部で南側壁面に川原石を貼って補強しているのが見られる。7・11号水田を区切っている畦と続いている。また10号水田は西の9号水田



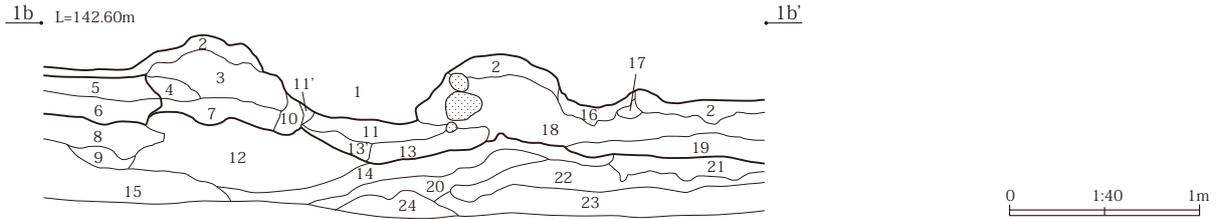
第296図 中町遺跡 II区高低図1



第298図 中町遺跡Ⅱ区高低図2・土層断面図

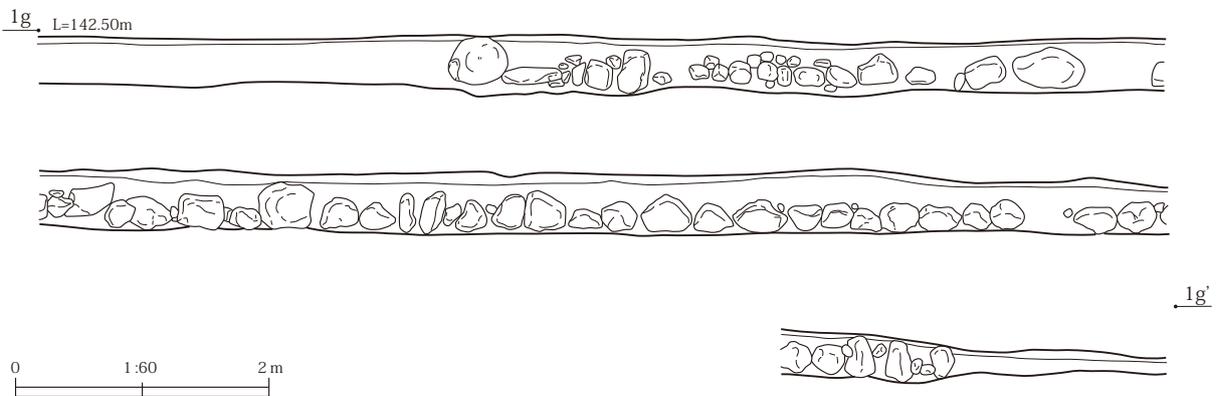
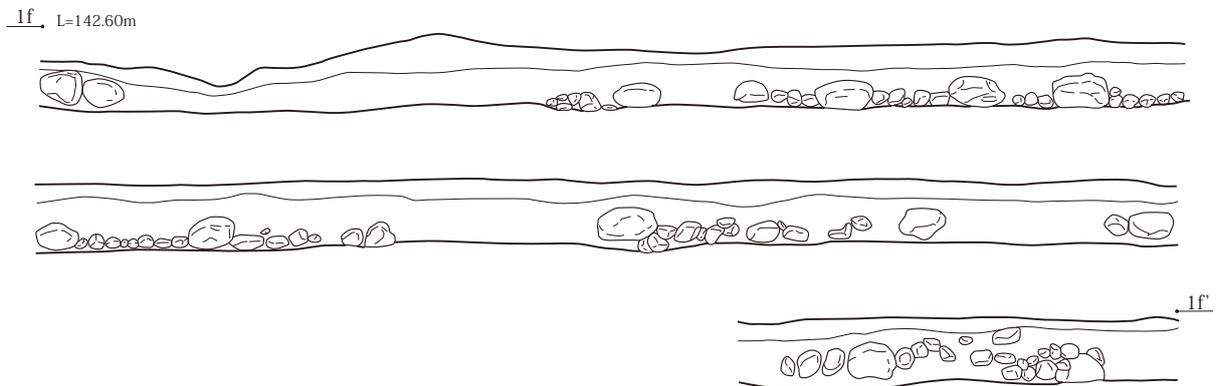


第299図 中町遺跡 II区詳細図1 高低図



中町遺跡Ⅱ区土層観察所見 1 b ライン

- | | |
|--|--|
| <p>1 天明泥流 径 20cm 程度の礫混。最下位に砂層を伴う。</p> <p>2 暗灰褐色シルトに近い砂質土 ニツ岳軽石少量混。</p> <p>3 暗灰褐色シルトに近い砂質土 2層よりやや暗い。酸化鉄分、黄褐色砂粒、ニツ岳軽石やや多い。</p> <p>4 3層に近い。黄褐色砂粒少量入る。</p> <p>5 3層に近い。酸化鉄分による赤色粒がより多い。</p> <p>6 暗灰褐色砂質土 黄褐色粒上層に多い。白色細砂がブロック状に入る。ニツ岳軽石少量混。</p> <p>7 6層と同相。径 10mm 以下の礫が少量入る。</p> <p>8 暗灰褐色砂質土 径 10mm 以下の礫。ニツ岳軽石極少量混。</p> <p>9 8層と同相。やや黄褐色。</p> <p>10 暗灰褐色シルト質に近い砂質土 締まり。粘性弱。</p> <p>11 砂礫層 径 150mm 程度の礫を含む。 11' 砂主体の層</p> <p>12 砂礫層 径 10mm 以下の礫が多い。地山。</p> | <p>13 暗灰褐色砂質土 径 50mm 以下の礫やや多く入る。 13' 礫多い。</p> <p>14 暗灰褐色砂質土 細かい砂粒を基本とするが、やや粗い砂粒や径 50mm 以下の礫がやや多く入る。</p> <p>15 砂礫層 12層と同相。</p> <p>16 暗灰褐色砂質土 黄褐色細砂やや多い。</p> <p>17 16層と同相。黄褐色細砂少ない。ニツ岳軽石少量混。</p> <p>18 3層に近い。径 30mm 以下の礫。ニツ岳軽石少量混。</p> <p>19 暗灰褐色砂質土 黄褐色粒上層に多い。ニツ岳軽石少量混。</p> <p>20 暗灰褐色砂質土 細砂主体。径 5mm 以下の礫や粗砂少量混。</p> <p>21 暗灰褐色砂質土 径 20mm 以下の礫。ニツ岳軽石少量混。</p> <p>22 暗灰褐色砂質土 黄褐色細砂の互層。</p> <p>23 暗灰褐色砂質土 褐色粒やや多い。</p> <p>24 砂礫層 径 30mm 以下の礫が多く入る。</p> |
|--|--|



第300図 中町遺跡 Ⅱ区詳細図 1 土層断面図・立面図

第4章 遺構と遺物

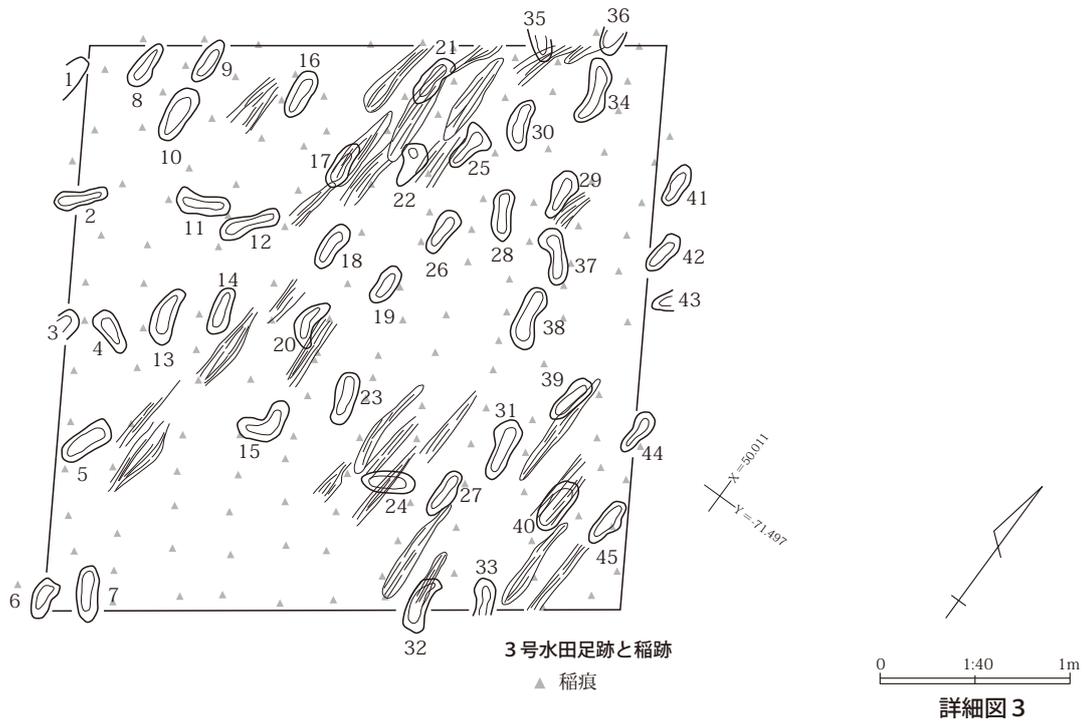


第301図 中町遺跡 II区詳細図2

第11表 中町遺跡II区2号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	左	26.0	13.0	2.0	
2	単独	?	—	14.0	1.6	
3	単独	左	21.0	12.0	1.9	
4	行跡	右	25.0	16.0	2.8	
5	単独	左	24.0	10.0	1.0	
6	単独	?	21.0	11.5	1.2	
7	単独	右	30.0	16.0	3.1	
8	単独	左	26.0	11.0	2.2	
9	行跡	左	24.0	10.0	2.3	4-9間 33
10	行跡	右	26.0	11.0	3.7	9-10間 19
11	行跡	右	23.0	13.0	1.9	11-12間 21
12	単独	左	29.0	14.0	1.9	
13	単独	?	—	13.0	2.7	
14	単独	?	21.0	10.0	2.8	
15	単独	右	25.0	11.0	2.2	
16	行跡	左	25.0	14.0	3.6	11-16間 22
17	行跡	右	—	11.0	2.8	16-17間 7
18	行跡	左	23.5	12.0	2.9	17-18間 21
19	単独	右	34.0	14.0	2.4	
20	単独	左	23.0	11.5	2.2	
21	行跡	左	22.0	9.0	1.7	10-21間 24
22	行跡	右	29.0	12.0	3.2	21-22間 31
23	行跡	右	26.5	12.5	2.8	18-23間 20
24	単独	?	24.0	11.5	2.7	
25	単独	?	23.0	12.0	3.2	
26	単独	?	25.5	12.0	2.0	
27	単独	左	24.0	12.0	2.6	

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
28	単独	右	22.0	14.0	1.2	
29	行跡	右	21.5	9.0	2.4	
30	行跡	左	22.0	11.0	0.6	29-30間 25
31	単独	左	29.0	15.0	2.2	
32	単独	?	21.5	10.0	1.5	
33	単独	?	20.0	11.0	1.0	
34	単独	右	30.0	12.5	2.8	
35	単独	左	26.0	11.0	2.2	
36	単独	右	23.0	9.5	2.7	
37	行跡	右	21.0	10.0	4.6	
38	行跡	左	27.0	10.5	2.0	37-38間 19
39	行跡	右	24.0	10.0	2.9	38-39間 17
40	単独	右	25.5	11.5	2.5	
41	単独	?	28.0	10.0	3.5	
42	単独	?	27.0	11.0	3.4	
43	単独	右	23.0	12.0	3.5	
44	単独	左	32.0	15.0	2.1	
45	単独	?	25.0	12.0	2.1	
46	単独	左	27.0	13.0	2.8	
47	単独	左	27.0	12.0	3.3	
48	単独	右	25.0	12.0	2.5	
49	単独	左	32.0	11.5	3.1	
50	単独	?	26.0	13.0	2.2	
51	単独	右	25.0	13.0	2.0	
52	単独	右	31.5	12.5	3.1	
53	単独	左	23.0	11.5	1.8	
54	単独	左	26.5	10.0	1.7	



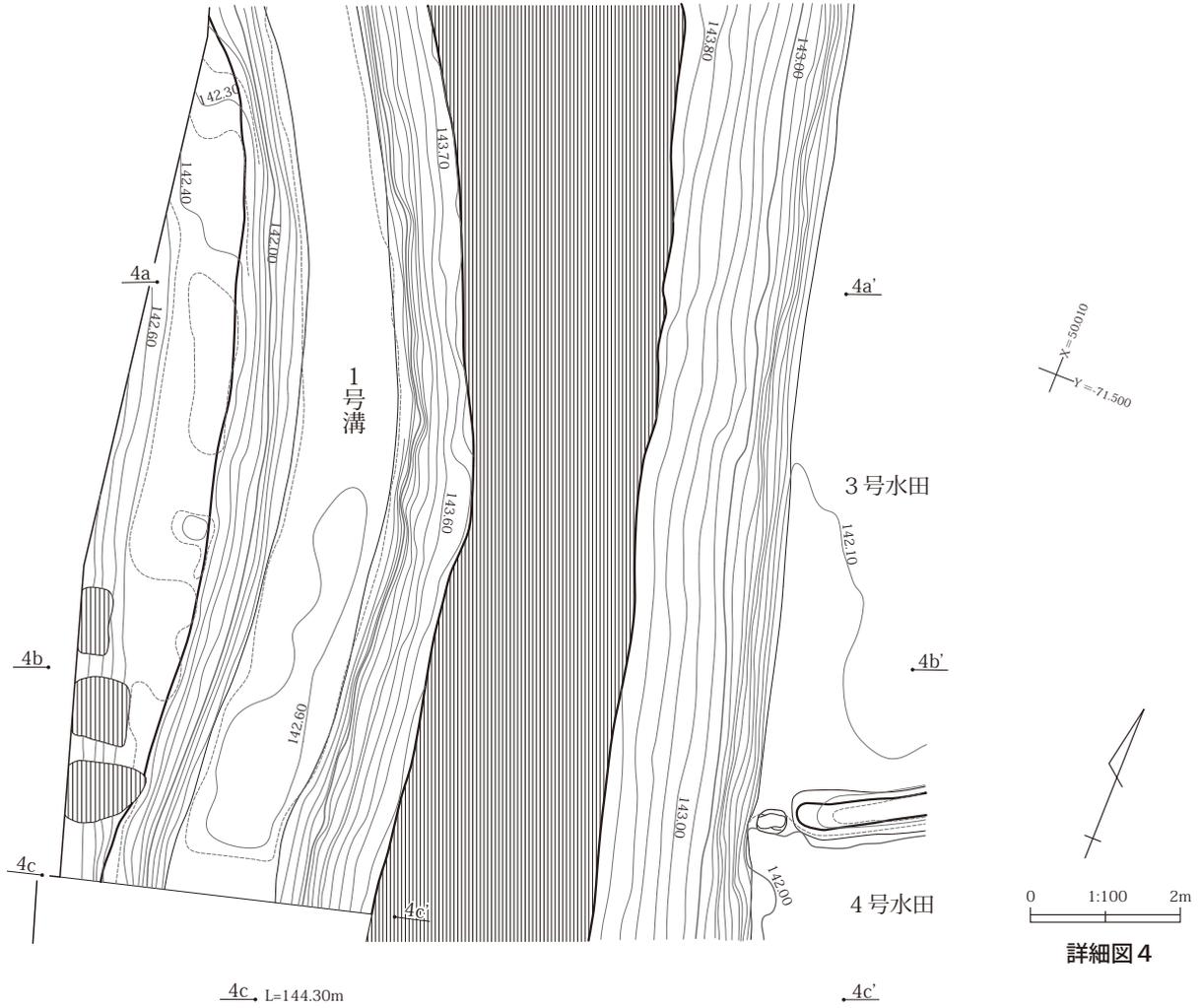
第302図 中町遺跡 II区詳細図3

第12表 中町遺跡II区3号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	?	—	11.0	1.1	
2	単独	左	29.0	9.5	1.4	
3	単独	?	—	12.0	1.1	
4	単独	右	24.0	11.0	2.0	
5	単独	?	28.5	12.5	3.8	
6	単独	左	22.5	12.5	1.8	
7	単独	左	30.0	11.0	1.7	
8	行跡	右	26.5	10.5	3.0	
9	行跡	左	26.0	9.0	1.7	8-9間 19
10	単独	?	31.0	15.0	2.5	
11	単独	左	28.0	12.5	3.2	
12	単独	右	32.5	11.0	2.5	
13	行跡	右	30.0	11.0	3.5	
14	行跡	左	26.0	11.0	3.0	13-14間 12
15	単独	?	26.0	11.5	4.7	
16	単独	?	27.0	11.0	3.4	
17	単独	左	26.0	11.0	1.6	
18	行跡	左	25.0	11.0	2.5	
19	行跡	右	22.0	9.0	1.8	18-19間 2
20	行跡	左	25.0	8.0	1.1	19-20間 39
21	行跡	左	28.0	12.0	1.0	
22	行跡	右	24.0	15.0	3.9	21-22間 43

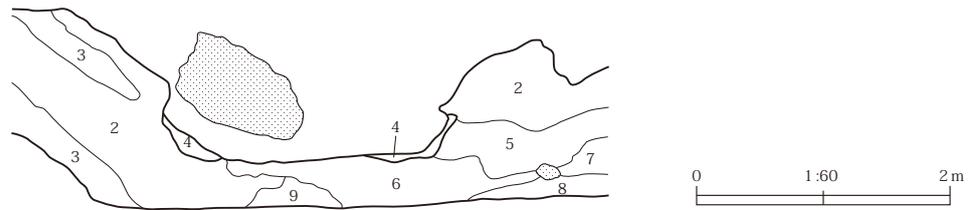
番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
23	行跡	右	27.5	11.5	3.0	20-23間 29
24	単独	?	27.0	11.5	3.4	
25	単独	?	26.0	16.0	1.6	
26	単独	右	25.0	11.0	2.0	
27	行跡	左	26.5	9.0	3.0	
28	行跡	左	28.0	11.0	2.5	
29	行跡	右	25.0	13.0	1.6	28-29間 15
30	行跡	左	27.0	11.0	2.0	29-30間 26
31	行跡	右	32.0	14.0	3.4	27-31間 33
32	単独	左	30.5	11.0	4.7	
33	単独	右	—	12.0	1.8	
34	行跡	右	35.0	11.5	3.0	30-34間 21
35	行跡	左	—	10.0	1.6	34-35間 26
36	行跡	右	—	12.0	2.5	35-36間 14
37	行跡	右	29.0	12.0	1.6	
38	行跡	左	32.0	13.0	3.0	37-38間 37
39	単独	左	27.0	9.5	2.2	
40	行跡	左	30.0	14.0	3.2	
41	行跡	左	24.0	10.0	1.6	
42	行跡	右	23.0	10.0	2.7	41-42間 33
43	単独	?	—	10.0	3.2	
44	単独	右	25.0	11.0	1.5	
45	行跡	右	26.0	12.0	3.1	40-45間 11

第4章 遺構と遺物



4c, L=144.30m

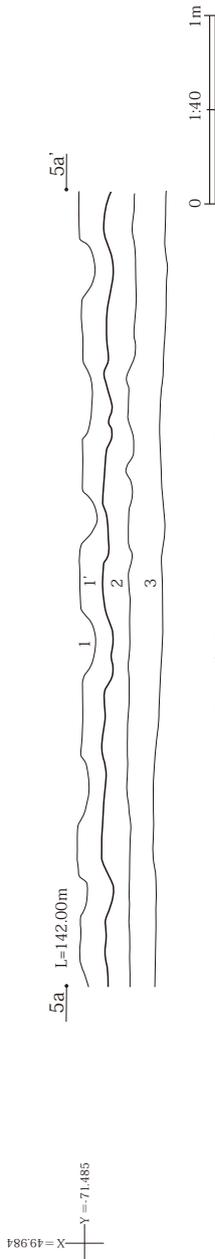
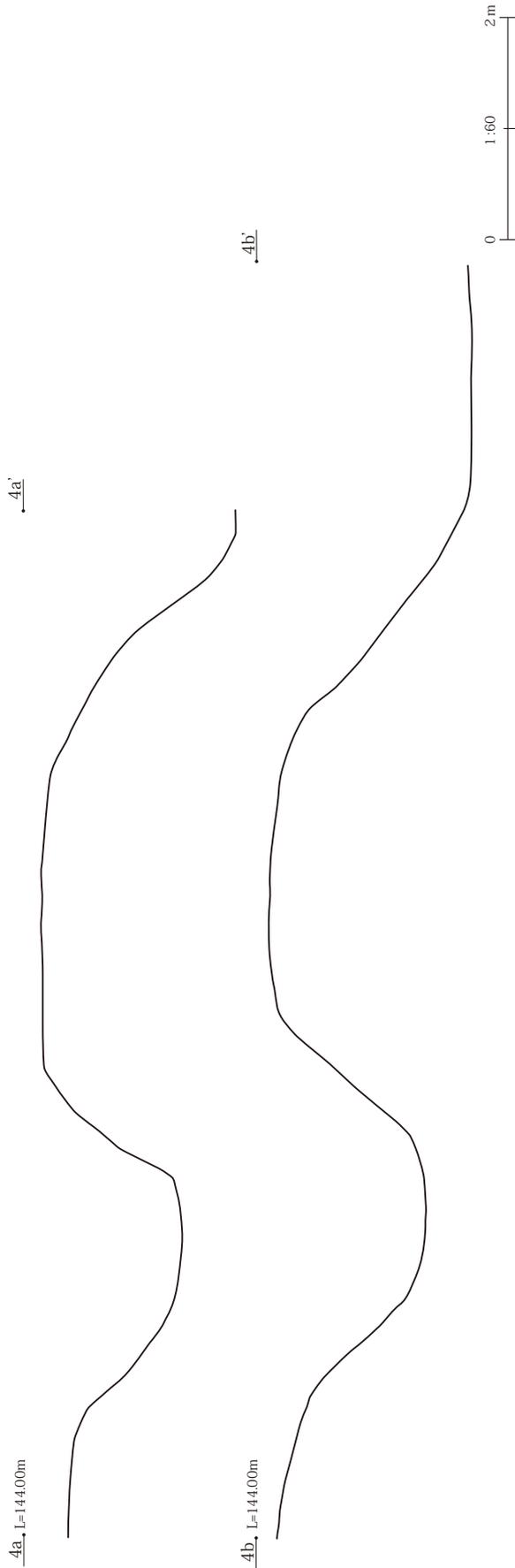
4c'



中町遺跡Ⅱ区土層観察所見 4c ライン

- | | |
|--|--|
| <p>1 天明泥流。</p> <p>2 暗灰褐色砂質土層 径 50mm 以下の白色軽石が入る。径 20mm 以下の礫が入る。縮まり弱。粘性弱。</p> <p>3 暗灰褐色砂礫層 径 30mm 以下の白色軽石及び礫が多く入る。縮まり弱。粘性弱。</p> <p>4 褐灰色シルトに近い砂質土層 灰褐色の砂質土ブロックが入る。径 10mm 以下の軽石が多量に入る。縮まり中。粘性やや弱。</p> <p>5 暗灰褐色砂質土層 全体に砂のきめ細かい。褐灰色砂質土ブロック及び暗褐色砂質土ブロック（河床の砂に近い）が入る。径 30mm 以下の白色軽石が少量入る。縮まり中。粘性やや弱。</p> | <p>6 暗灰褐色砂礫層 径 50mm 以下の白色軽石及び径 100mm 以下の礫が非常に多く入る。縮まり弱。粘性弱。</p> <p>7 暗灰褐色シルトに近い砂質土層。砂礫土のブロックが入る。縮まり中。粘性やや弱。</p> <p>8 暗灰褐色砂質土層 5層、7層に比べてきめが粗い。径 20mm 以下の白色軽石が少量入る。縮まり中。粘性弱。</p> <p>9 暗灰褐色シルトに近い砂質土層 径 10mm 以下の白色軽石が少量入る。縮まり中。粘性中。</p> |
|--|--|

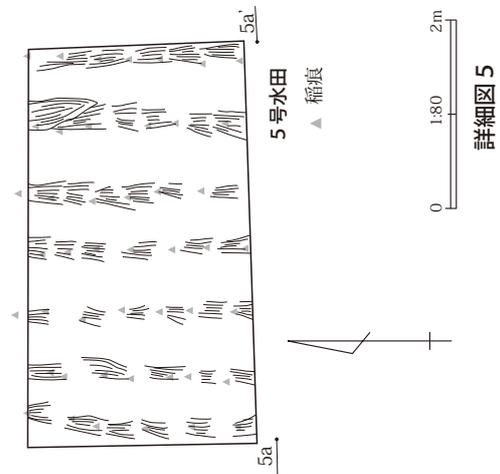
第303図 中町遺跡 Ⅱ区詳細図4 土層断面図



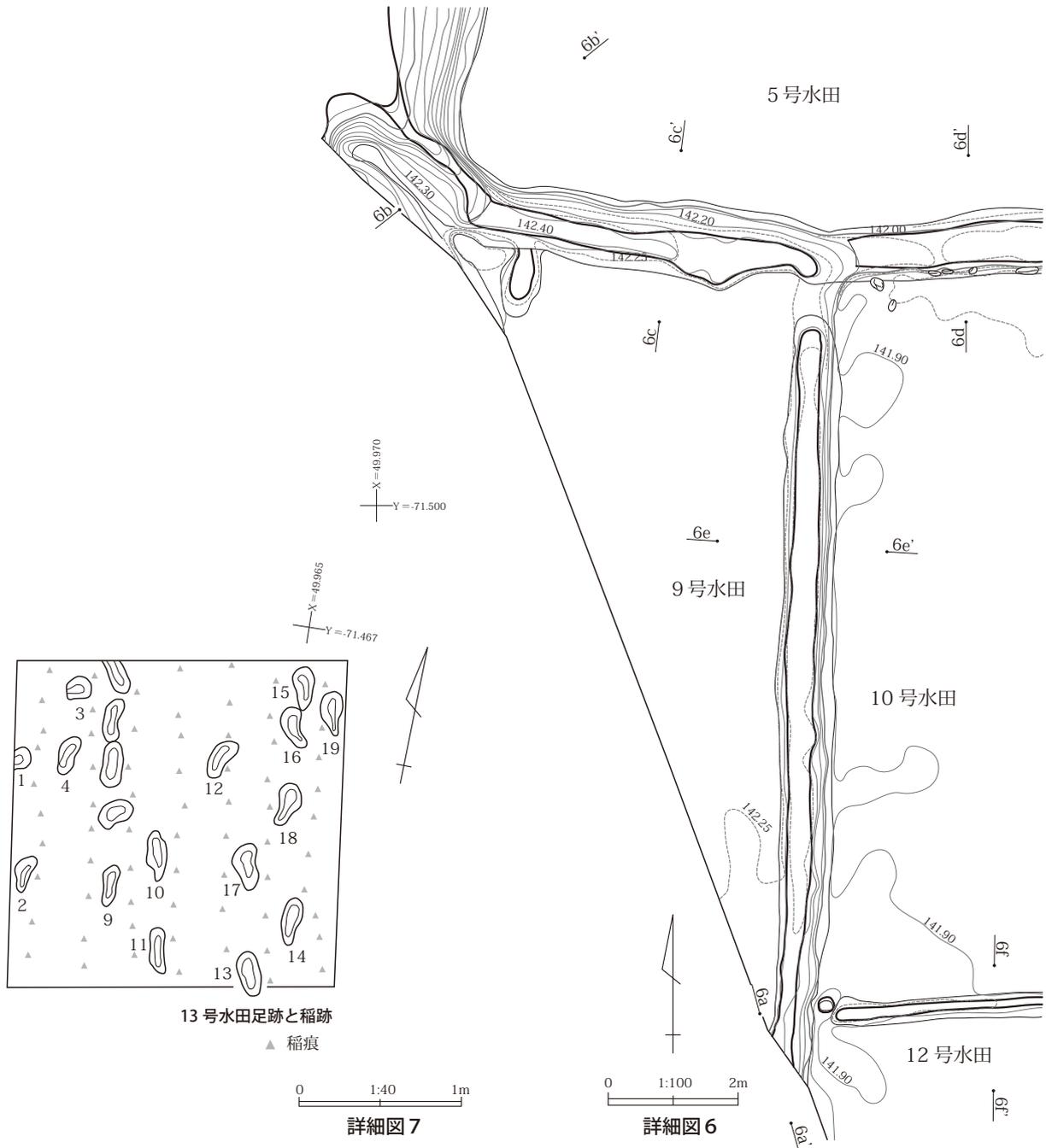
第304図 中町遺跡 II区詳細図 4 高低図

中町遺跡II区土層観察所見 5a ライン

- 1 天明泥流及び表土 約1.8m。
- 1' 暗褐色土 鉄分の酸化により全体的に赤みを帯びる。1層との境界には径1mm以下の細粒砂から最大径10mm程度の火山弾様の礫が確認できる。逆級化構造層の砂層と考えられる。地表面の凹凸を反映し、逆級化構造層が均厚に近い状態で堆積したという観察視点で本図を作成する。最大厚さ7cm。本来は1層との分層は不要と考えられるが散えて分層する。重機による表土掘削で水平になった状態で砂層が筋状に認められていることとで本図を作成した。また、1層と1'層を合わせて「天明泥流堆積物」とするべきである。
- 2 褐灰色土 やや締まり弱いシルト。最大厚8cm。耕作時ないしは被災時にごく近い時期の作土の痕跡と考えられる均質土。最大径20mmの摩滅した白色軽石を極僅かに含む。
- 3 灰黄褐色土 2層に含まれる軽石粒を2層よりやや多く含む。2層よりやや締まりあるシルト。全体に斑鉄層を良好に確認することができる。



第305図 中町遺跡 II区詳細図 5 土層断面図



第306図 中町遺跡 II区詳細図6・7

第13表 中町遺跡II区13号水田足跡計測表

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
1	単独	?	—	—	1.7	
2	単独	左	22.0	9.5	1.4	
3	単独	?	—	15.0	4.4	
4	単独	左	26.0	10.0	1.6	
5	単独	?	—	11.0	2.6	
6	単独	左	27.0	10.0	2.2	
7	単独	?	29.0	12.0	3.5	
8	単独	?	22.0	15.0	2.4	
9	行跡	左	26.0	10.5	1.5	
10	行跡	右	32.0	13.0	3.4	9-10間 18

番号	種別	左右	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	歩幅 (cm)
11	単独	右	30.0	9.0	3.7	
12	単独	左	26.0	13.0	2.8	
13	行跡	左	28.0	13.0	3.2	
14	行跡	右	30.0	11.0	2.3	13-14間 26
15	行跡	右	26.0	13.0	2.3	
16	行跡	左	27.0	14.0	2.9	15-16間 21
17	行跡	左	28.0	14.0	3.4	14-17間 32
18	行跡	右	27.0	14.0	3.8	17-18間 37
19	単独	?	28.0	14.0	3.3	

より31～37cm低い。両水田は幅55～90cm、高さ40～50cmの畦で区切られ、この北端が幅5cmほど途切れて水口となり、10号水田へ水が流れる。

11号水田は、北の7号水田より1～9cm低く、両水田は幅50～70cm、高さ13～18cmの畦で区切られている。畦の南側壁面は川原石を貼って補強している。また11号水田は東の10号水田より1～2cm低く、両水田は幅25～45cm、高さ8～10cmの畦で区切られ、この北端が幅10cmほど途切れて水口となり、11号水田へ水が流れる。11号水田の北東部で落ち込みがあり、北東隅は中央の標高より21cmほど低い。

12号水田は西の9号水田より35cm低く、両水田は幅60cm、高さ42cmの畦で区切られている。畦の下部に板材の跡が見られた。板材は検出されなかったが、畦が崩れるのを防止するため、芯材を用いていたことが窺える。また12号水田は北の10号水田より2～4cm低く、両水田は幅20～45cm、高さ5～8cmの畦で区切られ、この西端が幅30cmほど途切れて水口

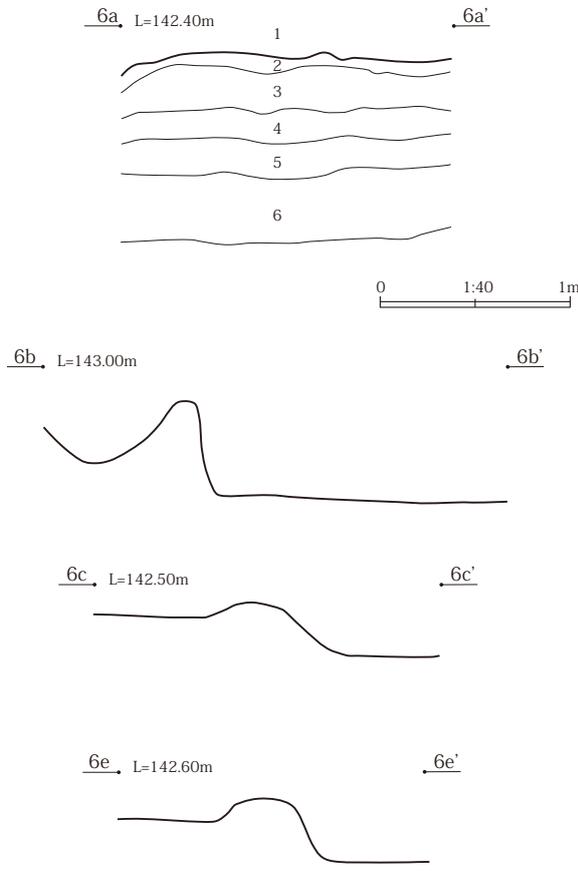
となり、12号水田へ水が流れる。水口は川原石で補強されている。

13号水田は北の11号水田より2～3cm低く、両水田は幅25～40cm、高さ7～8cmの畦で区切られている。また西の12号水田より4～5cm低く、両水田は幅30～45cm、高さ6～10cmの畦で区切られ、この南端が幅15cmほど途切れて水口となり13号水田へ水が流れる。

[14・15・16号水田]

(第296～298・308・309図 PL.141～144・147)

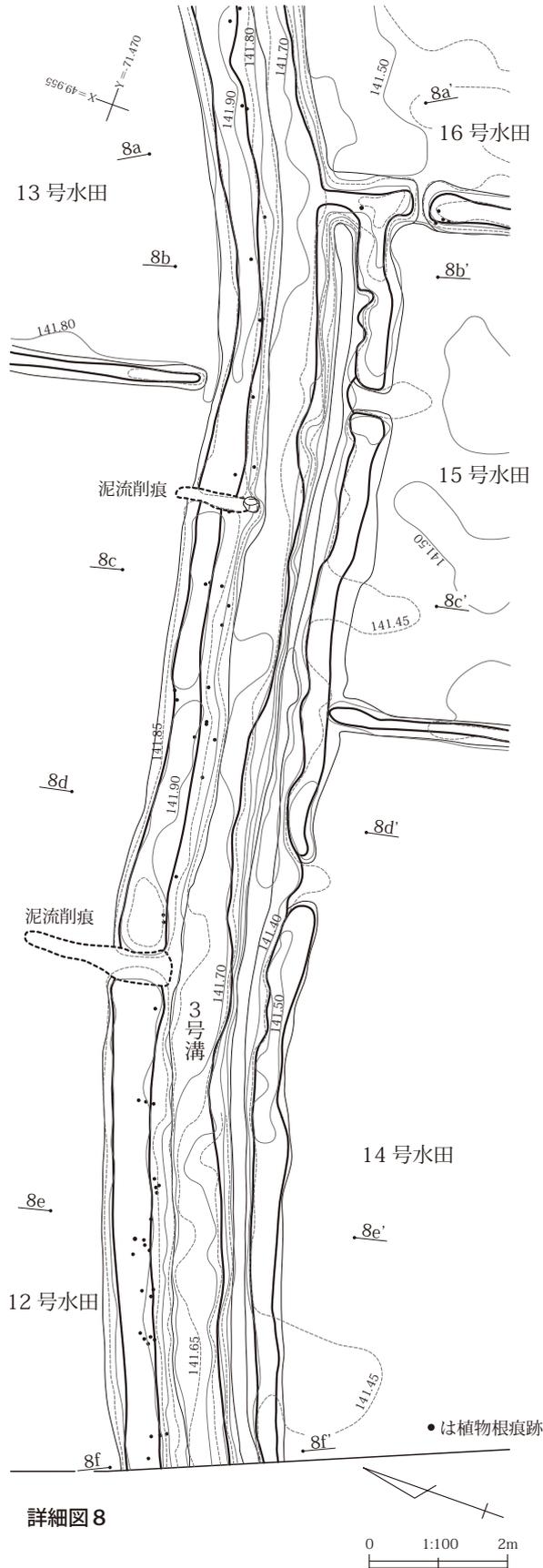
調査区の最南にある。北側を幅160～190cmの畦で区切られている。畦は、段差が生じて、幅70～120cmの上段と幅40～90cmの下段に分かれる。段差は22～31cmである。下段は中央部分が凹んでいて、人が歩くのに十分な広さであり、作業用の通路としての役割を持っていたと考えられる。東側へ行くほど幅が狭くなり、段差はなくなる。上段では境木の痕と思われる穴が多数見られた。3号溝が畦に沿い



中町遺跡Ⅱ区土層観察所見 6a ライン

- 1 天明泥流。
- 2 褐灰色シルト質土 赤褐色の砂質土粒が入る。径5mm以下の白色軽石入る。締まり中。粘性中。
- 3 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土のブロック及び粒子が多く入る。径20mm以下の白色軽石が入る。締まり中。粘性中。
- 4 灰黄褐色シルト質土 赤褐色の砂質土粒及び黄褐色の砂質土粒が入る。径10mm以下の白色軽石が入る。締まり中。粘性中。
- 5 灰黄褐色シルト質土 上層より黄色みが強い。黄褐色の砂質土粒子が多く入る。径10mm以下の白色軽石が入る（上層より少ない）。締まり中。粘性中。
- 6 褐灰色シルト質土層 薄い暗褐色の砂質土に近い土のブロックが縦に筋状に多く入る。こい暗褐色土粒子が少量入る。径10mm以下の白色軽石が少量入る。締まり中。粘性中（上層よりやや弱）

第307図 中町遺跡Ⅱ区詳細図6 土層断面図・高低図



詳細図 8

第308図 中町遺跡 II区詳細図 8

ながら、14号水田と15号水田の北側を流れている。

14号水田は3号溝に接する幅30～60cm、田面からの高さ4～5cmの畦で区切られ、この東側が幅60cmほど途切れて水口となっている。

14号水田は南部が高くなっていて、14号水田から3号溝へ排水されたと考えられる。北側の畦を挟んで接する12号水田との比高は36～42cmで、14号水田が低い。

15号水田は3号溝に接する幅50～70cm、田面からの高さ3～5cmの畦で区切られ、この中央部よりやや東側が幅30cmほど途切れて水口となっている。15号水田は南部が高く北へ傾斜し、15号水田から3号溝へ排水されたと考えられる。また西の14号水田より3cm高く、両水田は幅30～50cm、高さ9～12cmの畦で区切られている。北側の畦を挟んで接する12号水田との比高は35cm、13号水田との比高は30cmで、いずれも15号水田が低い。

16号水田は東の15号水田より5～6cm高く、両水田は幅40～70cm、高さ19cmの畦で区切られ、この北側が幅5cmの水口となり、16号水田から15号水田へ水が流れる。16号水田は南部が高く北側の畦沿いは低くなっている。畦を挟んで接する13号水田との比高は24～29cmで16号水田が低い。

[17号水田] (第299図)

17号水田は調査区の北部にあり、西側を4号溝が走る。4号溝に沿った幅20～25cm、田面からの高さ3cmの畦で区切られるが、畦の高まりが見られるのは北から4.5mほどの地点までである。4号溝の南端から17号水田へ水が流れ込むようになっている。2・4号溝を挟んで西に接する2号水田との比高は14～25cmで17号水田が低い。17号水田は調査範囲内のほとんどが攪乱されている。

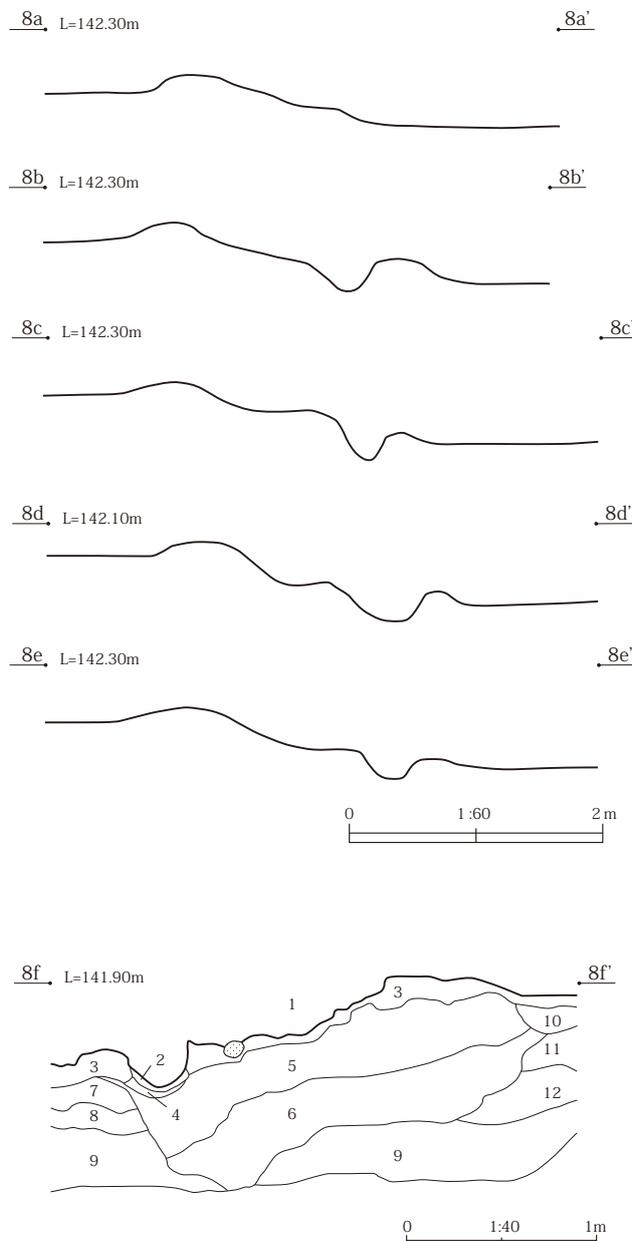
稲跡と人の足跡

2号水田から人の足跡が検出され、3号水田、5号水田、13号水田で稲跡と人の足跡が検出された。

2号水田で検出された人の足跡は、長さ20～34cm、幅9～16cmである。水田面が軟弱であるため、

足の置き方によって足跡の残り方も様々である。検出範囲の西側で行跡が確認でき、北北東から南南西方向へ付いていて、南が爪先になる。しかし前進したか、後退したかについては、明確でない。

3号水田では、稲は北から南方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北から流れてきたことがわかる。稲株の穴はほぼ規則的に並んで列をつくっている。列は直線状に並んでいる部分と湾曲している部分がある。株穴の列の方向は、北北西から南南東方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～28cm、



第309図 中町遺跡 II区詳細図8 土層断面図・高低図

列と列の間隔は約25～35cmである。場所によってばらつきがあり、検出範囲の南でやや列が曲がる。また検出範囲の東隅で株穴の列が乱れている。

人の足跡は、長さが22～35cm、幅が8～16cmである。水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。足跡の方向は左右が不揃いで、どの方向に歩いたのか行跡が不明のものがある。足跡の方向は検出範囲の西側で不規則だが、それ以外は、ほとんどが南から北方向で、爪先が北になる。行跡が確認できる部分では、左右の足跡の間に稲株の列があり、稲を踏まないように歩いていたのがわかる。歩幅が狭く、左右の足跡がほとんど平行に付いているものや、歩幅が広く、左右の足跡が前後に付いているものがある。

5号水田では、稲は北から南方向へ倒れているのが確認でき、泥流が北から流れてきたことがわかる。株穴の列の方向は、北北西から南南東方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～28cmで、20cm程度のものが多い。列と列の間隔は約25

中町遺跡II区土層観察所見 8fライン

- 1 天明泥流。
- 2 砂層 逆級化構造の一部か。
- 3 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土混。白色軽石（0～10mm）少量混。縮まり中。粘性やや弱。
- 4 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土少量含む。縮まり、粘性中。
- 5 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土及び白色軽石（0～10mm）、暗褐色・黄褐色砂質土ブロック混。縮まり、粘性中。
- 6 褐灰色砂質に近いシルト質土 赤褐色砂質土混。白色軽石（0～40mm）多い。縮まり中。粘性弱。
- 7 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土紐状塊及び白色軽石（0～10mm）混。縮まり、粘性やや弱。
- 8 褐灰色砂質に近いシルト質土 赤褐色砂質土紐状塊、白色軽石（0～20mm）混。縮まり中。粘性やや弱。
- 9 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土紐状塊、白色軽石（0～30mm）混。縮まり中。粘性やや弱。
- 10 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土、白色軽石（0～10mm）混。縮まり中。粘性やや弱。
- 11 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土、白色軽石（0～10mm）混。縮まり中。粘性やや弱。
- 12 褐灰色シルト質土 赤褐色砂質土紐状塊、黄褐色土、白色軽石（0～10mm）混。縮まり、粘性中。
- 13 灰黄褐色砂質に近いシルト質土 黄褐色土、赤褐色砂質土混。縮まり、粘性中。

第4章 遺構と遺物

～40cmであり、検出範囲の東側で40cm程度、中央部で35cm程度、西側で25～30cm程度と場所によって異なる。

13号水田では、稲株の穴はほぼ規則的に並んで列をつくっているのが見られた。株穴の列の方向は、北北西から南南東方向である。同じ列上の株穴と株穴の間隔は約18～28cmで、20cm程度のものが多い。列と列の間隔は約25～35cmで30cm程度のものが多い。検出範囲の中央部で列と列の間隔がやや広い。検出範囲の南東部で列がやや曲がっている。人の足跡は、長さが22～32cm、幅が9～15cmである。水田面が軟弱であるため、足の置き方によって足跡の残り方も様々である。足跡は稲株に沿って南南東から北北西方向に付いていて、爪先が北北西になる。行跡が確認できる部分では、左右の足跡の間に稲株の列があり、稲を踏まないように歩いていたのがわかる。

溝

1号溝 (第303・304図 PL.146)

位置 X=49.985～50.020/Y=-71.505～-71.510

規模 長さ37.5m、幅(上端)2.7～3.65m(下端)0.1～1.5m、深さ0.61～1.15m

特徴 中央付近が低くなっていて、溜め池のような用途だったと考えられる。

2号溝 (第299・300図 PL.146・147)

位置 X=50.020～50.040/Y=-71.490～-71.505

規模 長さ22.7m、幅(上端)0.8～1.0m(下端)0.5～0.8m、深さ0.31～0.82m

特徴 内壁を川原石で補強している。東側壁面は比較的大きさの揃った大きめの石が使われている。西側壁面は大きい石と小さい石が使われ、大きい石が一定間隔で貼られてその間に小さい石を貼っている。

3号溝 (第308・309図 PL.146・147)

位置 X=49.945～49.950/Y=-71.470～-71.485

規模 長さ18.6m、幅(上端)0.35～1.0m(下端)0.1～0.35m、深さ0.14～0.25m

特徴 ほとんど傾斜は見られない。14号水田と15号水田の排水路と考えられる。

4号溝 (第299・300図 PL.146)

位置 X=50.025～50.040/Y=-71.495～-71.505

規模 長さ17.3m、幅(上端)0.2～0.5m(下端)0.1～0.35m、深さ0.06～0.1m

特徴 2号溝の東側を併走し、17号水田へ流れ込む。

第6項 半田常法院遺跡

概要 半田常法院遺跡は、利根川右岸に位置しており、東側を南流する午王川の護岸に隣接する狭い調査区全域から泥流に埋もれた状態の遺構が検出された。調査区内の現表土の標高は151.3mで、泥流上端の標高は150.5mほどであり、調査区西側は東側に比較して地形的に高い。台地平坦部で検出した土坑内には川砂混じりの泥流が確認されたものの、平坦部においては調査区際の断面観察においても泥流の堆積はほとんど確認することができなかった。これに対して東側で検出された溝は、泥流で埋没したままであることから、利根川から流入した泥流は溝を含む東側低地部は埋め尽くしたものの、西側台地部まではあまり大きな被害をもたらさなかったものと推定できる。調査開始時点では、半田常法院遺跡においても吉岡地区の調査結果から天明泥流に埋没した水田が検出されるものと予想されたが、1号溝の東側平坦部において粘質土の面や畦と思われるわずかな高まりは検出されたものの、明らかな水田区画面の検出はなかった。結果的に検出された遺構は、台地縁辺に掘削された南北方向の石積みを伴う溝1条と、これに斜交する溝1条のほか、西側台地部で3群のまとまりを持つ土坑17基である。

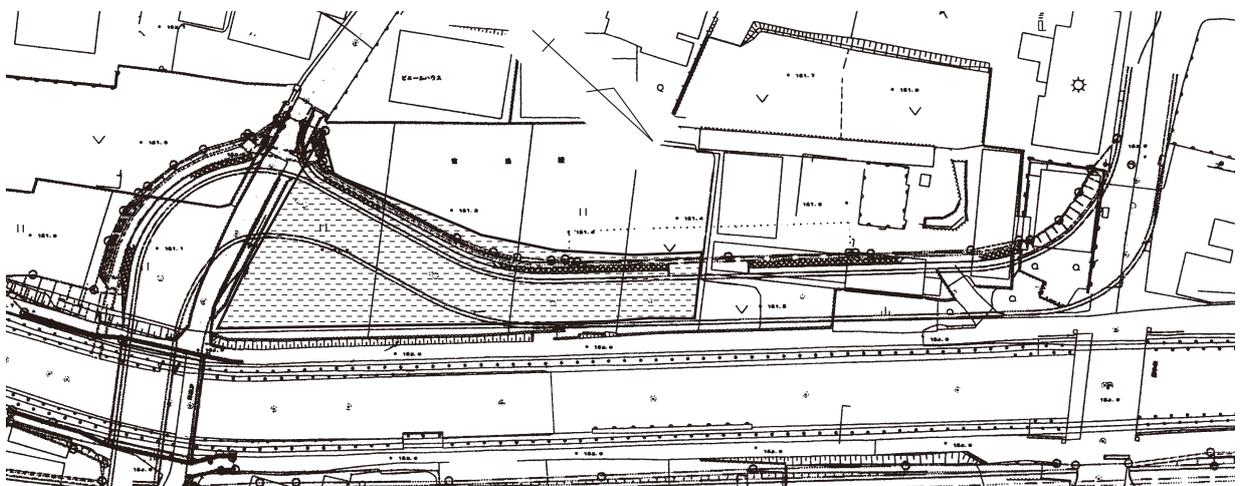
溝

1号溝 (第312～314・317・343～345図 PL.148・149)

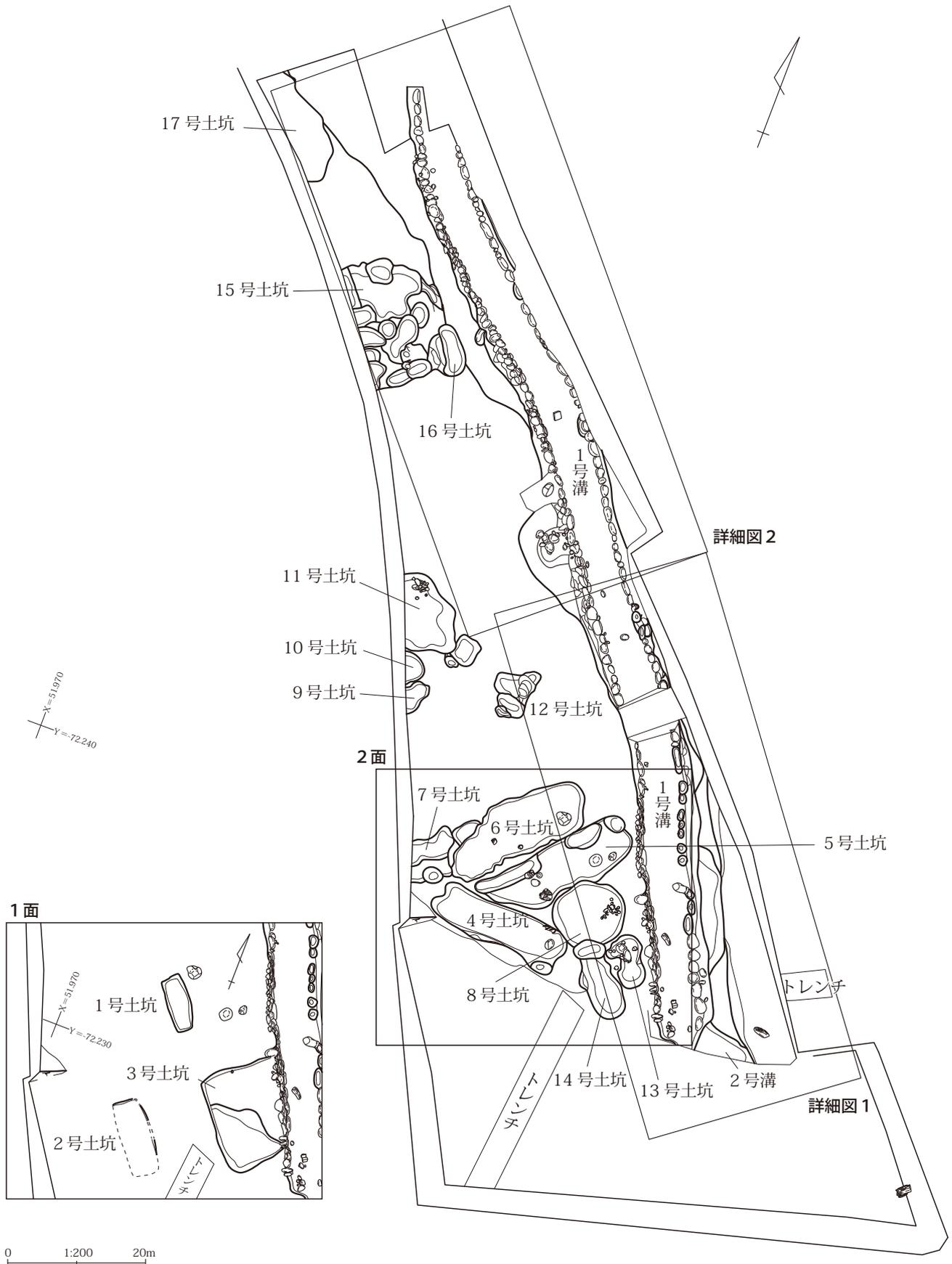
位置 X=51.960～52.000, Y=-72.210～-72.240

規模 長さ36.5m、幅(上端)1.5～2.1m(下端)1.0～1.2m、深さ0.8m

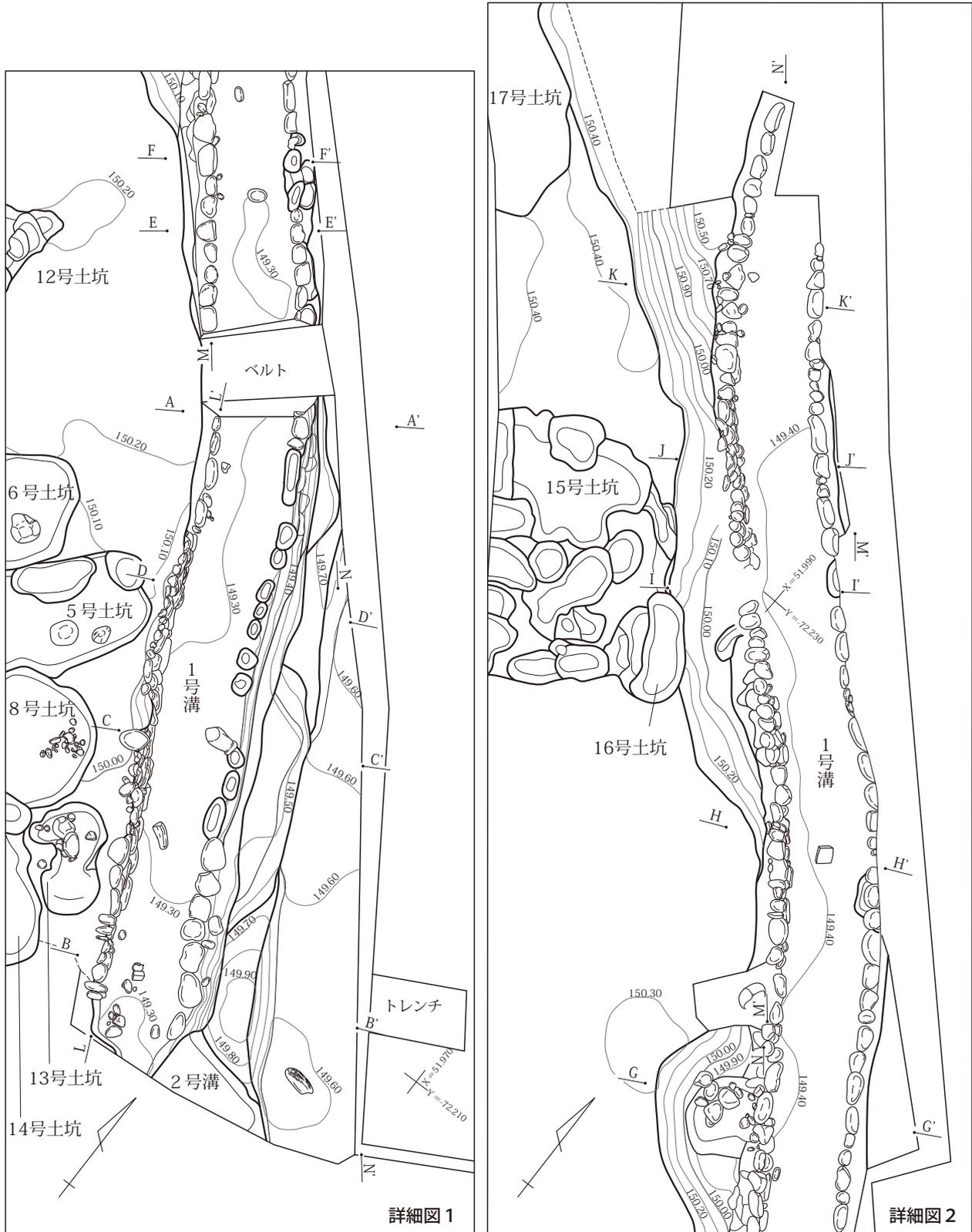
特徴 内壁の西側は扁平な川原石を4～5段程度積み上げて補強していた。石積みの検出されなかった部分においても最下段の1石だけは検出されていることから、少なくとも調査された部分については全体に石積みがされていたと見てよいであろう。東側については、最下段の1石が残っている部分があることから石積みの補強がなされていたものと考えられるが、当時においても東側は西側と比較して低かった可能性が高いことから、西側と同様に5段の石積みがあったとは考えにくい。西側の石積みにおいては、下から上まで同程度の川原石を積み上げている部分と、最下段に大振りな礫を据えている部分があった。底面は、基盤となる礫面に達して素掘りされた状態であり、この底面から浮いた位置から石塔相輪、石仏、石殿などの一部が出土した。これらの遺物は、泥流中から出土したものであり、泥流とともに運ばれたものと考えられる。



第310図 半田常法院遺跡 調査区概念図 (S=1/1000)

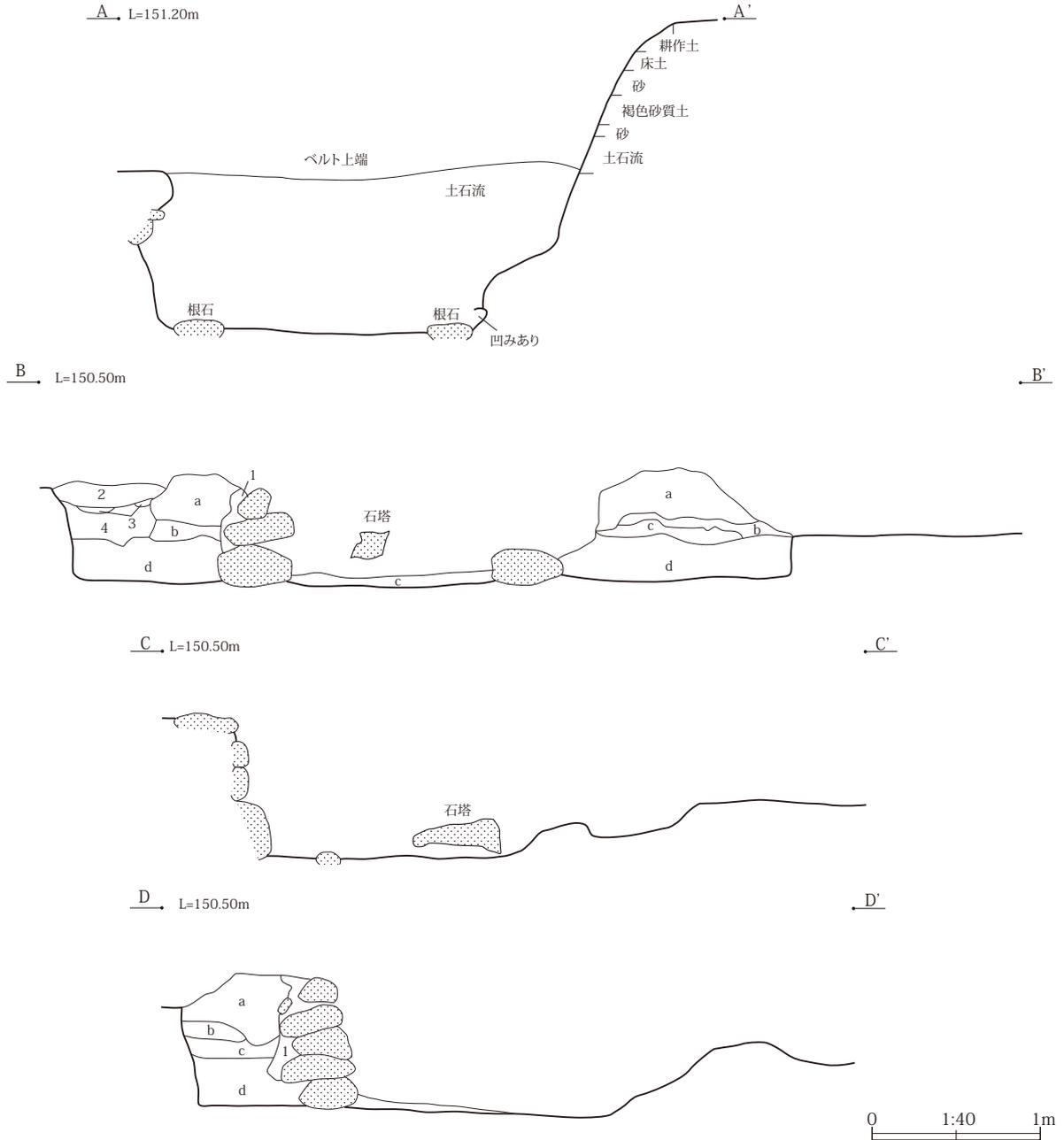


第311図 半田常法院遺跡 全体図



第312図 半田常法院遺跡 1号溝 詳細図1・2

第4章 遺構と遺物



半田常法院遺跡 1号溝土層観察所見Bライン

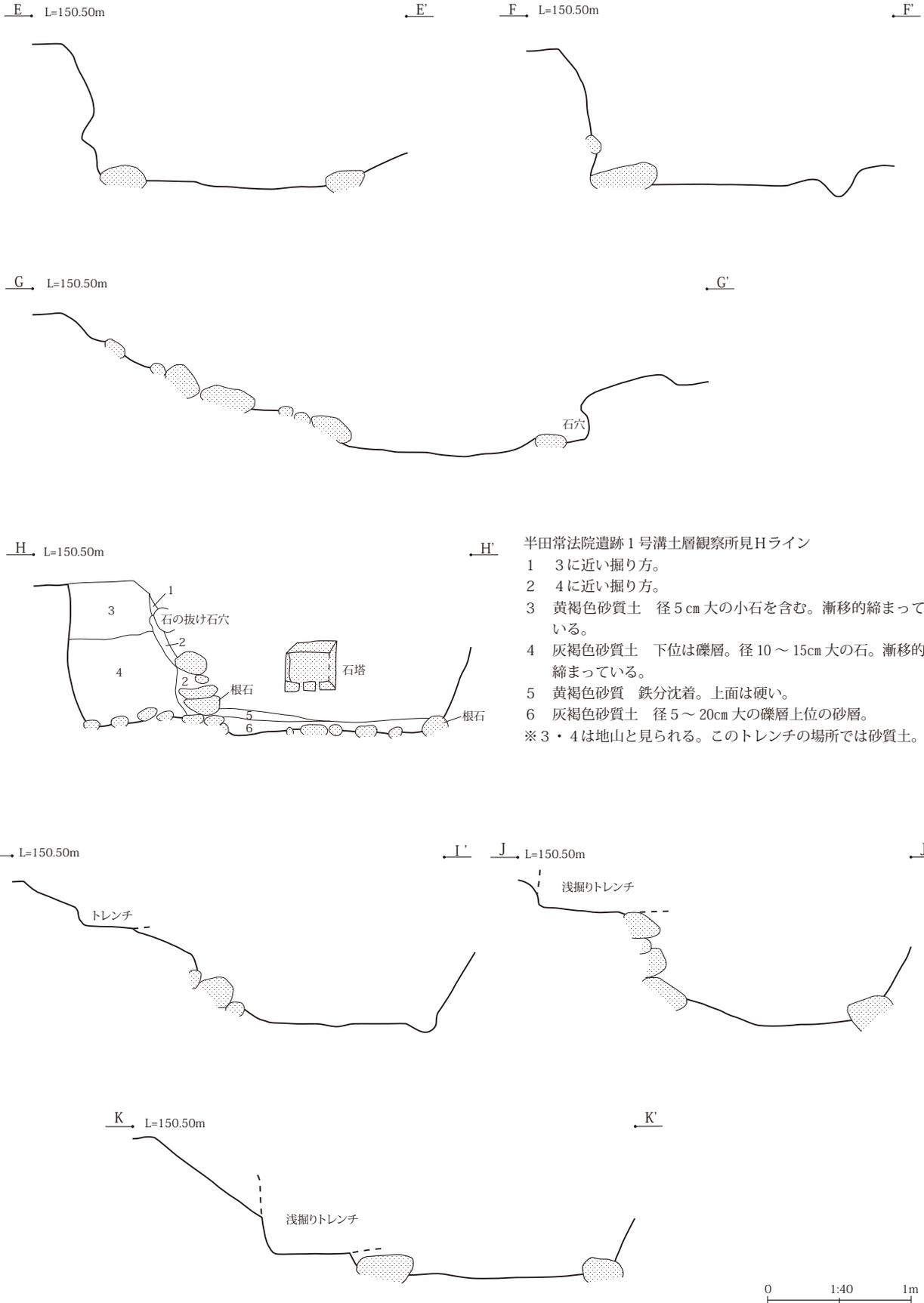
- 1 褐色土 酸化鉄分少量。下層に微砂層。粘質土層のブロック混。粘性締まりやや強。石垣の裏込みの土。
- 2 灰褐色土 細砂、粗砂の互層。南側水路（2号溝）の埋土と考えられる。粘性弱、締まりやや弱。
- 3 灰黄褐色土 酸化鉄分中量混。シルト質。微砂少量混。地山の崩落したものか。粘性締まりやや弱。
- 4 暗灰色砂層 細粒砂と粗粒砂が互層を成し、最下部に小礫が堆積している。
- a 灰黄褐色土 酸化鉄分多量混。シルト質。微砂中量混。下層に多い。粘性やや弱。締まりやや強。地山。
- b 灰黄色土 細砂層。酸化鉄分少量混。粘性締まり弱。地山。
- c 灰褐色砂質土 細砂、粗砂、礫（径1～3cm）混入。粘性極弱、締まり弱。地山。
- d 灰褐色粘質土 酸化鉄分少量混。粘性強、締まりやや強。地山。

半田常法院遺跡 1号溝土層観察所見Dライン

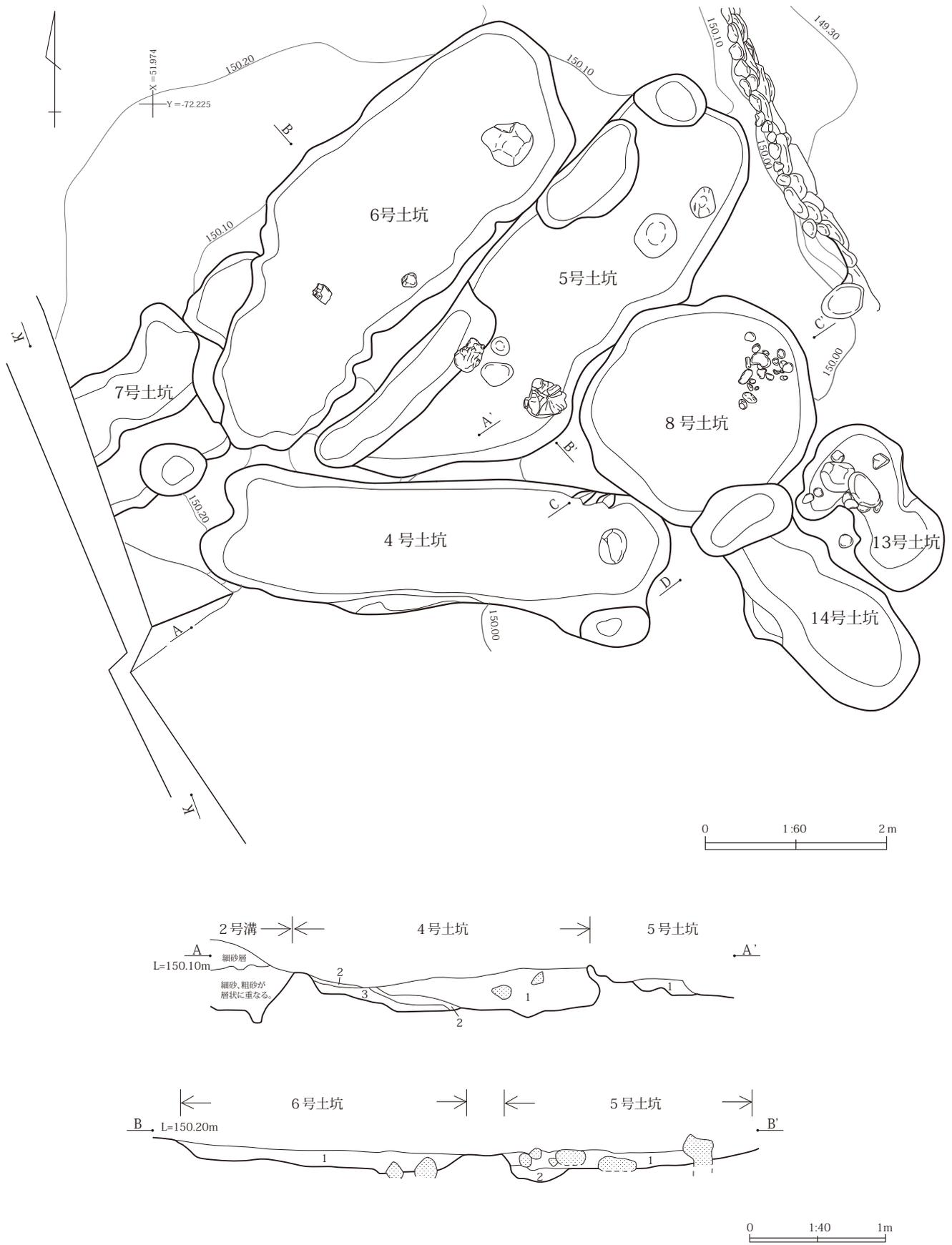
- 1 褐色土 酸化鉄分少量混。下層はやや粘質。粘性締まりやや弱。ボソボソの土。石垣の裏込み。
- a 灰黄褐色土 酸化鉄分少量混。細砂中量混。粘性弱、締まり強。B - B'のaに相当。
- b 灰褐色土 粗砂層。礫（径1～5cm）多量混。粘性極弱、締まり弱。
- c 灰黄褐色土 細砂層。粘性弱締まりやや弱。
- d 灰褐色粘質土 酸化鉄分少量混。粘性強、締まりやや強。C層のブロック混。B - B'のdに相当。

第313図 半田常法院遺跡 1号溝 土層断面図1・高低図1

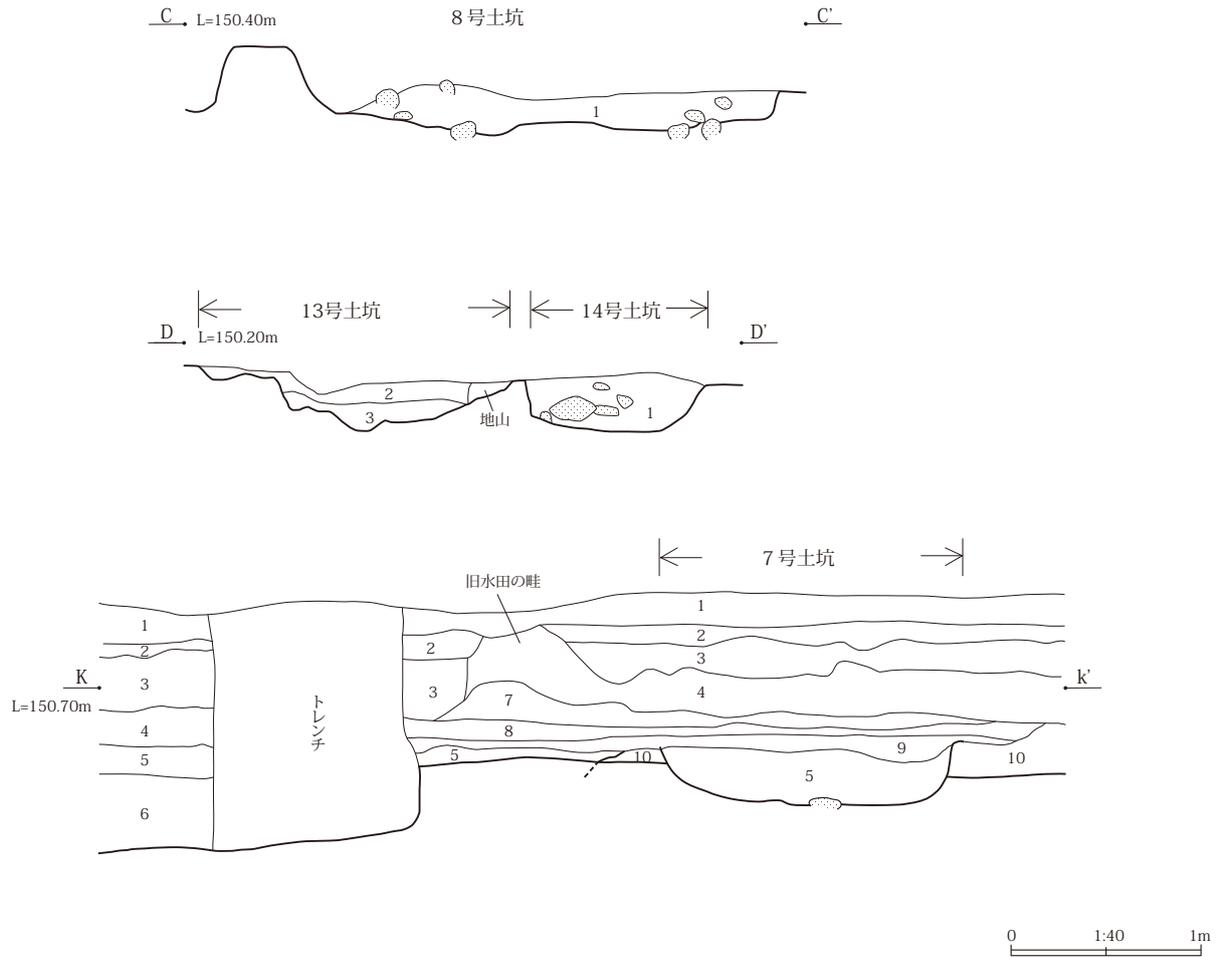
第2節 近世の遺構と遺物



第314図 半田常法院遺跡 1号溝 土層断面図2・高低図2



第315図 半田常法院遺跡 4～6号土坑 土層断面図



半田常法院遺跡 4号土坑土層観察所見Aライン

- 1 黒褐色土 天明泥流と粗砂の混土。礫（径1～5cm）多量混。粘性極弱、縮まりやや強。
- 2 灰黄褐色土 シルト層。細砂を層状に含む。粘性強、縮まりやや弱。
- 3 黒褐色土 粗砂層。礫（径0.5～1cm）多量混。地山ブロック（径1～2cm）少量混。粘性極弱、縮まりやや弱。

半田常法院遺跡 5・6号土坑土層観察所見Bライン

- 1 黒褐色土 天明泥流と粗砂の混土。粘性極弱、縮まりやや強。礫（径1～5cm）多量混。
- 2 灰黄褐色シルト質土と礫（径0.5～1cm）を含む粗砂層が層状に重なる。

半田常法院遺跡 8号土坑土層観察所見Cライン

- 1 黒褐色土 天明泥流と粗砂の混土。礫（径1～5cm）多量混。二次泥流か。

半田常法院遺跡 13・14号土坑土層観察所見Dライン

- 1 黒褐色土 天明泥流と粗砂の混土。礫多量混。粘性弱、縮まり強。
- 2 黒褐色土 粗砂層。礫多量混。天明泥流、地山ブロック混入。粘性極弱、縮まりやや弱。
- 3 灰黄褐色土 細砂層。粗砂、礫少量混。粘性弱、縮まり弱。

半田常法院遺跡西壁トレンチ（7号土坑）土層観察所見Kライン

- 1 黒褐色土 現代耕作土
- 2 褐色土 やや灰色。粘質。床土。
- 3 灰褐色砂質土 縮まりなし。天明泥流軽石+二ツ岳軽石（0.5～5cm）大含む。
- 4 灰褐色土 やや粘質。旧耕作土
- 5 褐色土 天明泥流と粗砂の混土。二次泥流か。縮まりなし。
- 6 灰色砂質土 ラミナ状。天明泥流を切り込んだ水路堆積。
- 7 灰褐色土 4に似る。やや黄色味。砂質。
- 8 灰褐色粘質土
- 9 褐色粘質土
- 10 明黄褐色砂質土 地山の土。縮まっている。

第316図 半田常法院遺跡 7・8・13・14号土坑土層断面図



第317図 半田常法院遺跡 1号溝 石積み立面図

2号溝 (第312・315・343図 PL.149)

位置 X=51.970/Y=-72.220

規模 不明

特徴 1号溝と北西から南東方向に斜行して交わっていたものと考えられる。調査所見では、調査区東西壁の土層観察から1号溝を壊して掘削されていること、及び1号溝を埋めた泥流をも掘削していることが確認されており、泥流埋没後における復旧の可能性がある。また、土坑の掘削方位も当溝との関連が想定される。

土坑

1～8・13・14号土坑

(第312・315・316・318・344図 PL.149・150)

X=51.967～51.975/Y=-72.216～-72.226にある。1号溝に接するように掘削された不整形を呈する大小の土坑の集合体である。

1～3号土坑は、遺構の検出状況から4～8、13・14号土坑よりも新しいものと考えられる。1号土坑は、N-35°-Wに主軸を持つ長方形の平面形で、上端部での長軸長2.04m、短軸長0.85m、深さは3～5cm程しか残存していない。2号土坑は、N-37°-Wに主軸を持つ平面形が長方形と考えられる土坑で、確認面まで下げた時点で南半が残存しなかったため、規模の計測ができなかった。残存した深さは8～11cmである。3号土坑は、方形または長方形の平面形の土坑で、残存した一辺は3.76mほどで、深さは4.5～24.5cmである。1～3号土坑は、埋没土中に泥流は確認されておらず、灰色シルトが堆積していた。この3基の土坑下層からは、泥流で埋没したと見られる土坑群が検出されていることから、基本的に泥流被災後に掘削された土坑と考えられる。これを裏付けるように、3号土坑においては泥流を掘り込んでいることが土層断面で確認された。4～8、13・14号土坑は、1～3号土坑の下部で検出された土坑群で、4号土坑は、E-5°-Sに主軸方位を持つ長方形、5号土坑は、N-45°-E、6号土坑は、N-42°-Eの主軸となる不整形円形、

8号土坑は、円形の平面形となる土坑である。7号土坑は6号土坑の西側で、13・14号土坑は、8号土坑の南側でそれぞれ検出したやや小規模の不整形円形土坑である。これらの土坑群は、平面形、掘削方位、規模が異なるにもかかわらず重複することなく接していることから、短い時間幅のなかで掘削された可能性が高いものである。これらの土坑は粗粒砂を含む泥流堆積物と黒色の焼石が入っており、比較的しまりのある堆積状態を示していることから、流下した泥流によって埋もれたままの状態を検出されたものと考えられる。

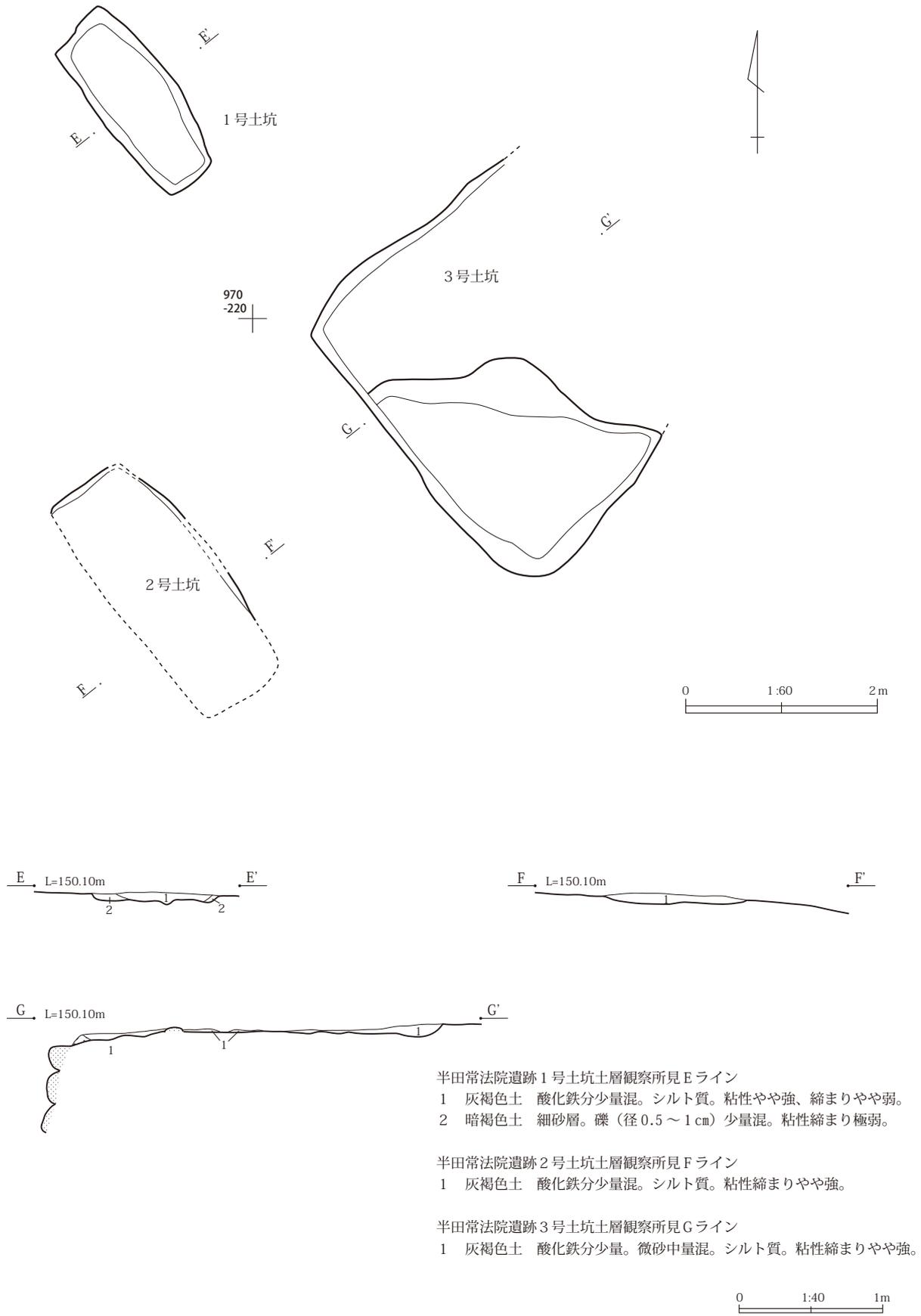
9～12号土坑 (第312・319図 PL.150)

X=51.975～51.980/Y=-72.223～-72.229にある。1～8号土坑などの北側に掘削された不整形を呈する大小の土坑の集合体である。いずれも不整形の土坑であるが、泥流によって埋没した可能性が高い。

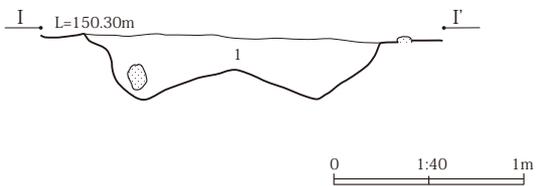
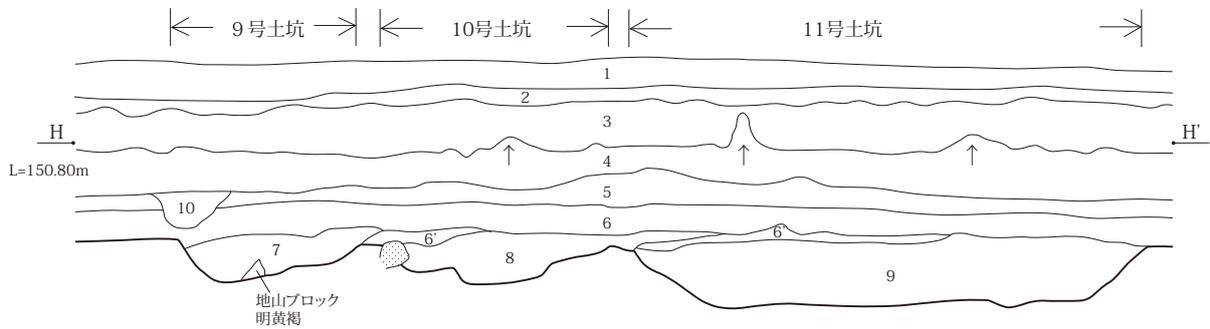
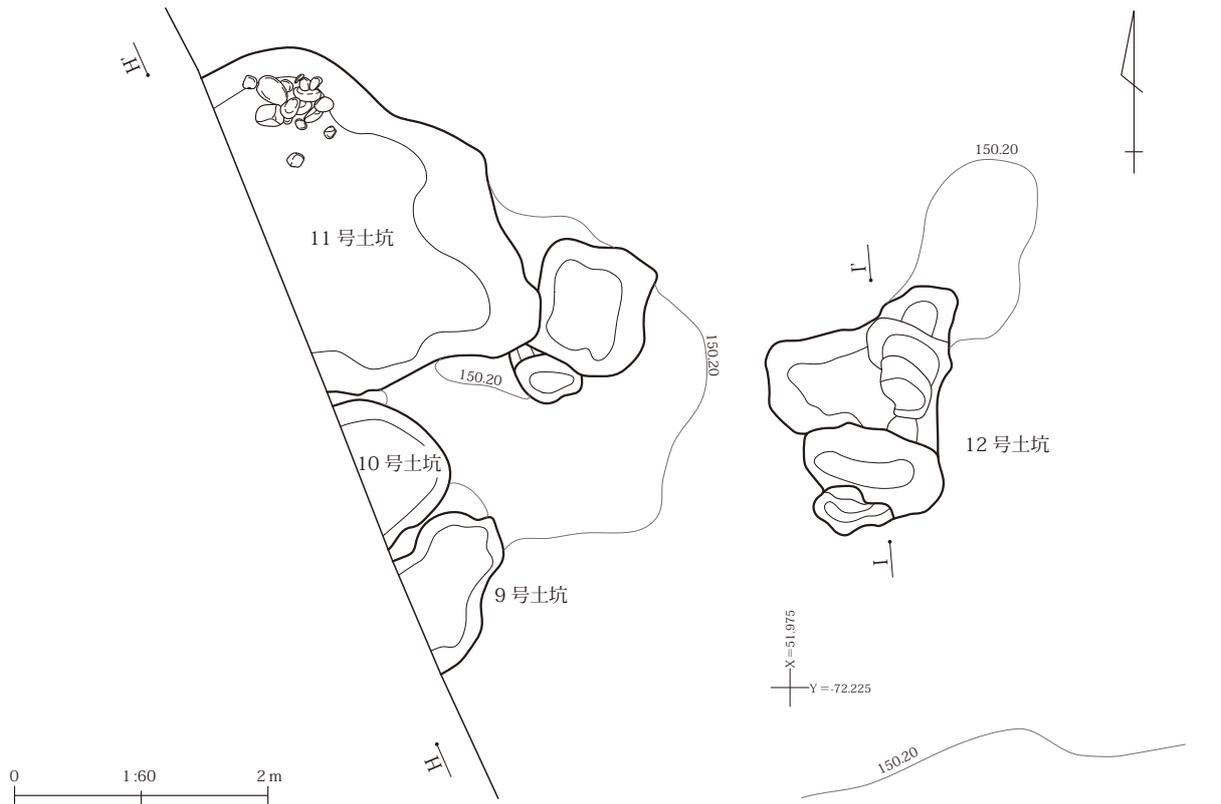
15・16号土坑 (第312・320・343図 PL.151)

X=51.985～51.990/Y=-72.230～-72.235にある。1号溝に接するように掘削された不整形を呈する大小の土坑の集合体であるが、土坑番号については比較的規模の大きかった2基に代表させ、小規模の土坑については、個別番号を付していない。群在する状況は南側で検出された土坑群と同様であり、同様に泥流が充填していた。

第4章 遺構と遺物



第318図 半田常法院遺跡 1～3号土坑



半田常法院遺跡 9・10・11号土坑土層観察所見Hライン

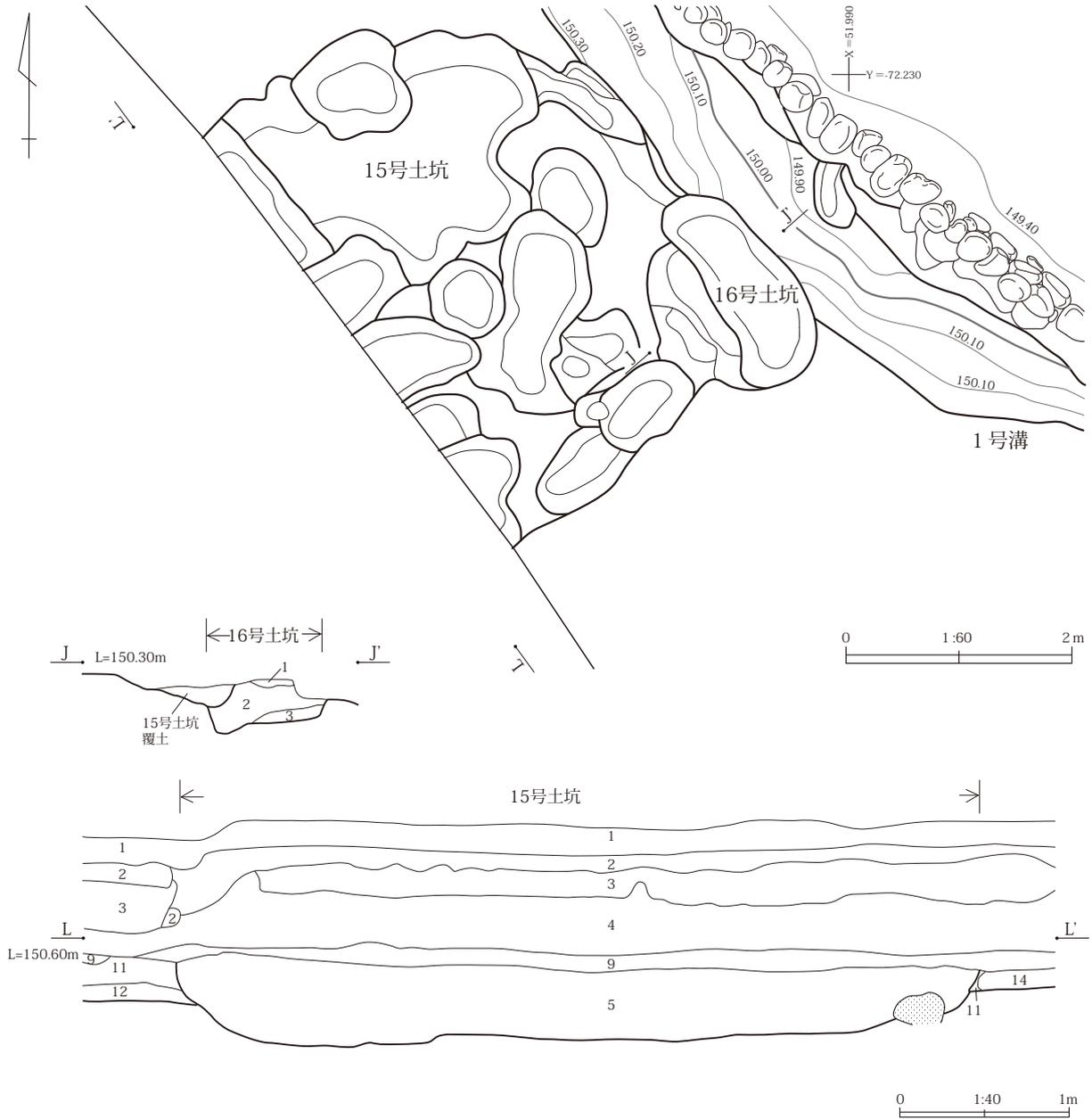
- 1 黒褐色土 現代耕作土
- 2 褐色粘質土床土。
- 3 灰褐色砂質土
- 4 灰褐色土 やや粘質。旧耕作土。
- 5 灰褐色土 やや砂質。川砂をブロック状に含む。黄色味を帯びる。
- 6 黄褐色土 やや粘質。
- 6' 上に薄い砂層あり。7の一部(9・10号土坑)。上に8の層が乗る(11号土坑)。
- 7・8・9 黒褐色土 天明泥流に砂礫を多く含む。締まりなし。二次泥流か。
- 10 灰色土 やや粘性のあるシルト質土。
- ↑のところ、三角形に凸に残る。人為的埋め立てか？

半田常法院遺跡 12号土坑土層観察所見Iライン

- 1 黒褐色土 天明泥流と粗砂の混土。粘性極弱、締まりやや強。礫(径1~5cm)多量混。

第319図 半田常法院遺跡 9~12号土坑

第4章 遺構と遺物



半田常法院遺跡 16号土坑土層観察所見Jライン

- 1 褐色土 微砂層。細砂、粗砂多量混。粘性弱、縮まり強。
- 2 黒褐色土 天明泥流層。礫中量混。粘性弱、縮まり強。
- 3 灰黄褐色シルト質土 細砂少量混。粘性やや強、縮まりやや弱。

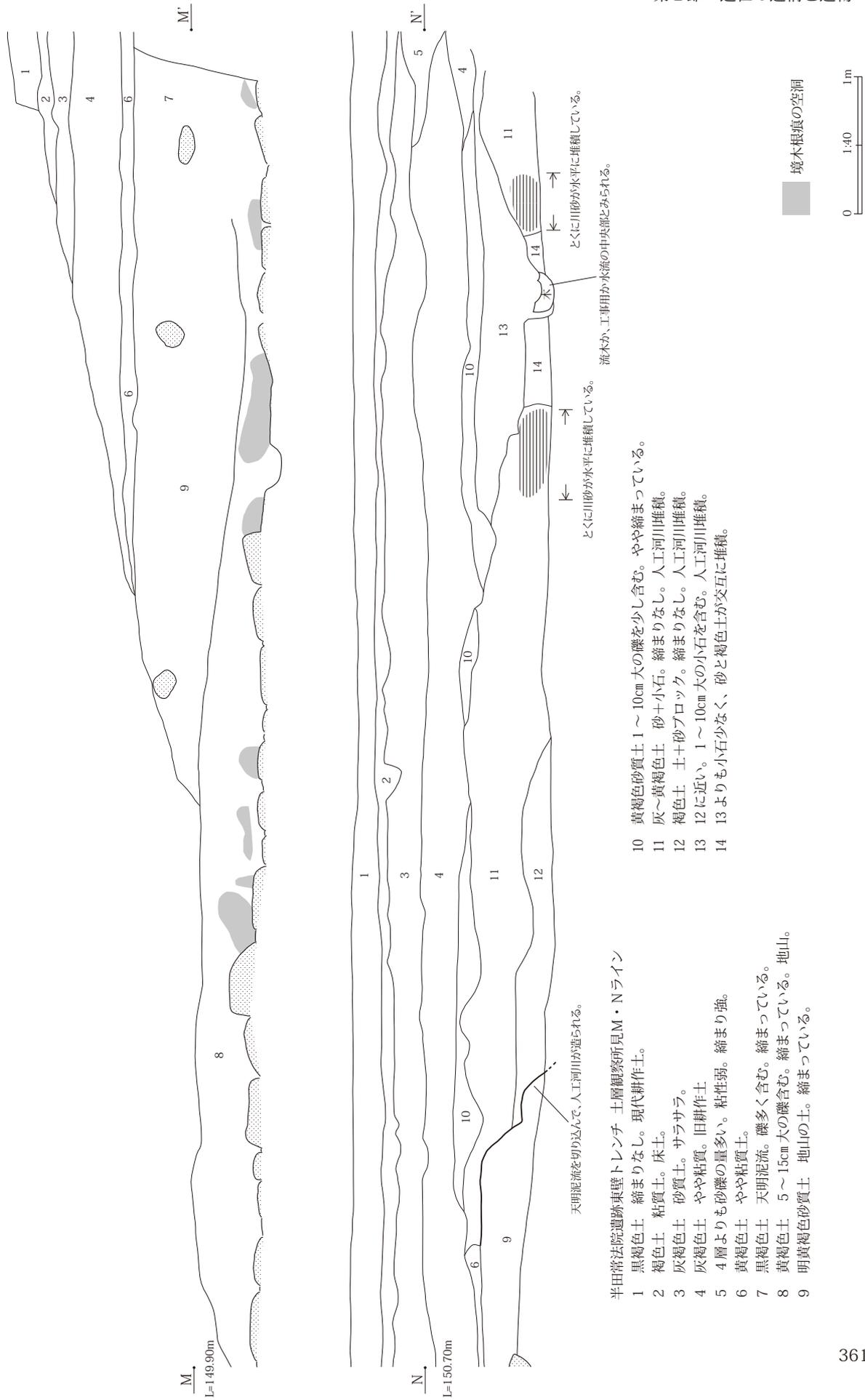
半田常法院遺跡西壁トレンチ (15号土坑) 土層観察所見

Lライン

- 1 黒褐色土 現代耕作土
- 2 褐色土 やや灰色。粘質。床土。
- 3 灰褐色砂質土 縮まりなし。天明泥流軽石+二ツ岳軽石 (0.5~5cm) 大含む。
- 4 灰褐色土 やや粘質。旧耕作土
- 5 褐色土 天明泥流と粗砂の混土。二次泥流か。縮まりなし。
- 6 灰色砂質土 ラミナ状。天明泥流を切り込んだ水路堆積。
- 7 灰褐色土 4に似る。やや黄色味。砂質。

- 8 灰褐色粘質土
- 9 褐色粘質土
- 10 明黄褐色砂質土 地山の土。縮まっている。
- 11 9に似ているがやや砂質。
- 12 4に似る。
- 13 1に似るが縮まっている。旧水田の畦か。
- 14 褐色土 川砂、径1~5cmの石を含む。5に比べやや砂質強い。黄色味少ない。

第320図 半田常法院遺跡 15・16号土坑



第321図 半田常法院遺跡 東壁土層断面図

第3節 出土遺物

概要 阿久津遺跡、桑原田遺跡、中町遺跡、半田常法院遺跡では、全体が天明泥流に覆われている。泥流経路上にあった村落は悉く泥流に覆われたはずである。したがって、泥流中から出土した遺物は必ずしも近在の村落における遺物とは限らないが、江戸時代中頃に人々の間で一般的に用いられていたものであることは確かだろう。出土遺物の概要は、阿久津遺跡からは陶器22個体、磁器12個体、土器2点、金属製品5点、石製品8点が出土している。桑原田遺跡からは陶器21個体、磁器10個体、土器1個体、金属製品3点、石製品13点が出土している。中町遺跡からは陶器4個体、磁器2個体、金属製品3点、石製品2点、半田常法院遺跡からは、磁器1点、陶器2点、石製品5点が出土している。図示可能であった前述の出土遺物に加え、阿久津遺跡では陶器破片184点、磁器破片79点、その他の土器破片26点が出土している。桑原田遺跡では陶器破片296点、磁器破片130点、土器破片30点が出土している。中町遺跡では陶器破片39点、磁器破片19点、土器破片1点、半田常法院遺跡では陶器破片2点、磁器破片が1点が出土した。最も多く出土したのは陶器、次いで磁器、土器、石製品、金属製品となる。近世遺物全体で見ると、陶器が大多数を占める。18世紀末頃には肥前窯の磁器製品が東日本にも普及していたが、陶器が食器においては主体を占めていたと思われる。中でも碗は、日本における食器の中心的な役割を果たしており、用途によって様々な形態が見られる。阿久津、桑原田、中町の3遺跡で見られるのは、18世紀から小型化する半球形の丸碗が主体である。碗以外に皿、鉢類、瓶類、急須などがあるが、いずれも破片が少量見られるのみである。鉢類はほとんどが播り鉢であった。形態、胎土、内外面に鉄釉が施される点などは共通する。近隣の村落内では広く使用されていたと推測される。磁器は碗が最も多い点では陶器と共通する。碗はいずれも口径7cm～10cm前後と小振りのものであり、陶器碗と同様に食器、

飲料器として江戸周辺の村落にも普及していたと思われる。磁器は陶器よりも多様な器種が見られ、碗にも丸碗、筒形碗の他、小型端反碗などが見られる。この他に杯、大小の皿、猪口、徳利、一輪挿し、仏飯器、香炉がある。実用的な食器以外に信仰、観賞用などの器種がある点が特徴である。陶磁器以外に、素焼きの加熱調理具である焙烙は中近世の遺跡から多く出土するもので、本遺跡周辺においても広く使用されていたものと思われる。金属製品は鉄製の釘4点、銅製の煙管4点、古銭2点、飾り金具1点の計11点である。釘はいずれも鍛造品であり、残存状態は悪いが頭巻釘と思われる。頭巻釘は釘上端を叩き潰し、折り返して頭部とするものであるが、出土した釘はいずれも頭部や先端が失われている。煙管については、江戸周辺地域へも喫煙の風習が普及していたことを示す。いずれもほぼ同じ規格で、18世紀に多く見られる形態である。古銭は寛永通宝1点と破片の2点のみで、銅製の一文銭と考えられる。寛永通宝は「寶」の字の一部である貝下部が、「ス」状ではなく「ハ」であることから、17世紀後半より鑄造された「新寛永」と思われる。石製品は五輪塔水輪1点、火輪3点、空風輪10点、宝篋印塔笠部2点、石製擬宝珠1点、石臼1点、茶臼1点、砥石4点で計23点を数える。この内、阿久津遺跡Ⅲ区1号溝、桑原田Ⅰ区13号水田畦、Ⅲ区1号溝の石垣には五輪塔水輪、火輪2点、空風輪9点、宝篋印塔笠部2点が石垣として転用されており、これ以外の五輪塔火輪、空風輪、石製擬宝珠、石臼、茶臼、砥石が泥流中からの出土である。石塔には、二ツ岳石と粗粒輝石安山岩の2種類の石材がある。阿久津遺跡Ⅳ区出土の空風輪1点と、桑原田遺跡Ⅲ区の水輪、空風輪1点が粗粒輝石安山岩でつくられ、残り8点は二ツ岳石製である。宝篋印塔は2点とも粗粒輝石安山岩であった。五輪塔の形態を見ると、水輪石塔は総じて南北朝から室町時代にかけて造立されたものと思われる。

陶器 泥流中から見つかった陶器のうちで、最も多い器種は碗である。18世紀中葉当時、肥前窯の生産

による磁器製品が東日本にも普及していたが、陶器製品も食器を中心に生活什器の主体を占めていたと思われる。中でも碗は、日本における食器の中でも中心的な役割を果たしており、用途によって様々な形態が見られる。阿久津、桑原田、中町の3遺跡で見られるのは、18世紀から小型化の傾向を示す半球形の丸碗が主体である。桑原田遺跡Ⅲ区では、小型で法量、文様もほぼ同一の端反碗が5個体出土しているが、端反碗は19世紀以降に生産されるようになったもので、天明期の水田には伴わないものと思われる。碗以外に皿、鉢類、瓶類、急須などが陶器の器種として見られるが、いずれも破片が少量見られるのみである。碗に次ぐ出土量は鉢類で、ほとんどが播り鉢であった。破片として出土したものが多く、形態、胎土、内外面に鉄釉が施される点などは共通する。近隣の村落内では広く使用されていたものと推測される。用途はまったく異なるが、暖房・加熱具としての火鉢も少量ながら見られる。

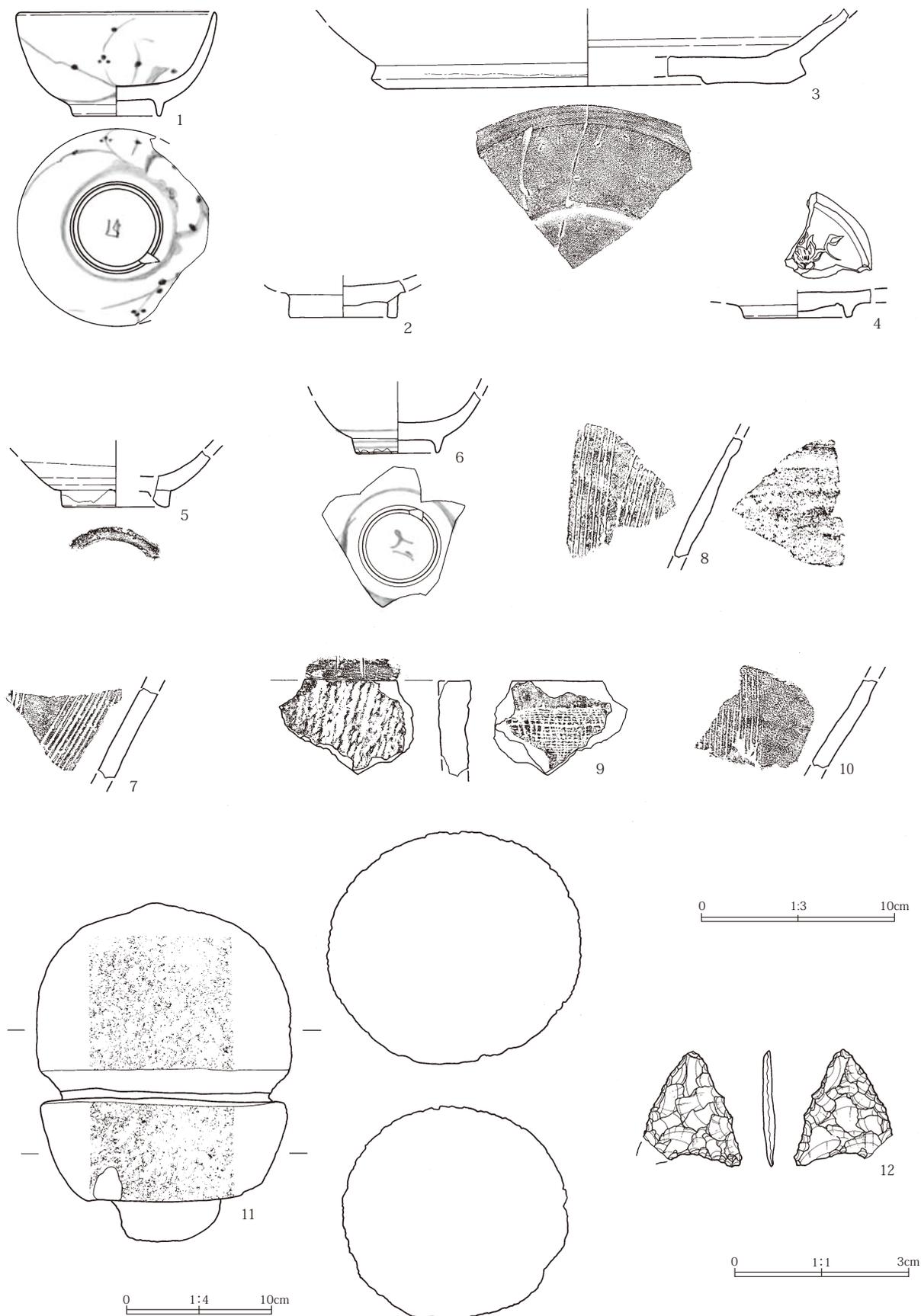
磁器 阿久津、桑原田、中町遺跡において水田が営まれていた江戸時代中葉頃、江戸を中心とした東日本では、肥前産の磁器製品ものが一般的に流通していたものと思われる。本遺跡群を覆う泥流中から出土した磁器は、碗が最も多い点では陶器と共通する。碗はいずれも口径7cm～10cm前後と小振りのものであり、陶器碗と同様に食器、飲料器として重宝されていたことが推測される。磁器の特徴としては、陶器よりも多様な器種が見られる。碗にも丸碗、筒形碗の他、小型端反碗などが見られる。この他に碗よりも小型で、主に飲料器として用いられた杯、大小の皿、猪口、徳利、一輪挿し、仏飯器、香炉が出土している。磁器の器種に見られる特徴は、実用的な食器以外に一輪挿しや仏飯器、香炉など観賞用、信仰に伴う用具などの用途があり、人々の生活が一定の水準に達していたことが推測される。

土器 素焼きの火鉢2個体と焙烙が1個体出土している。火鉢には土器以外に陶器製のものも見られるが、焙烙は中近世の遺跡から加熱調理具として多く

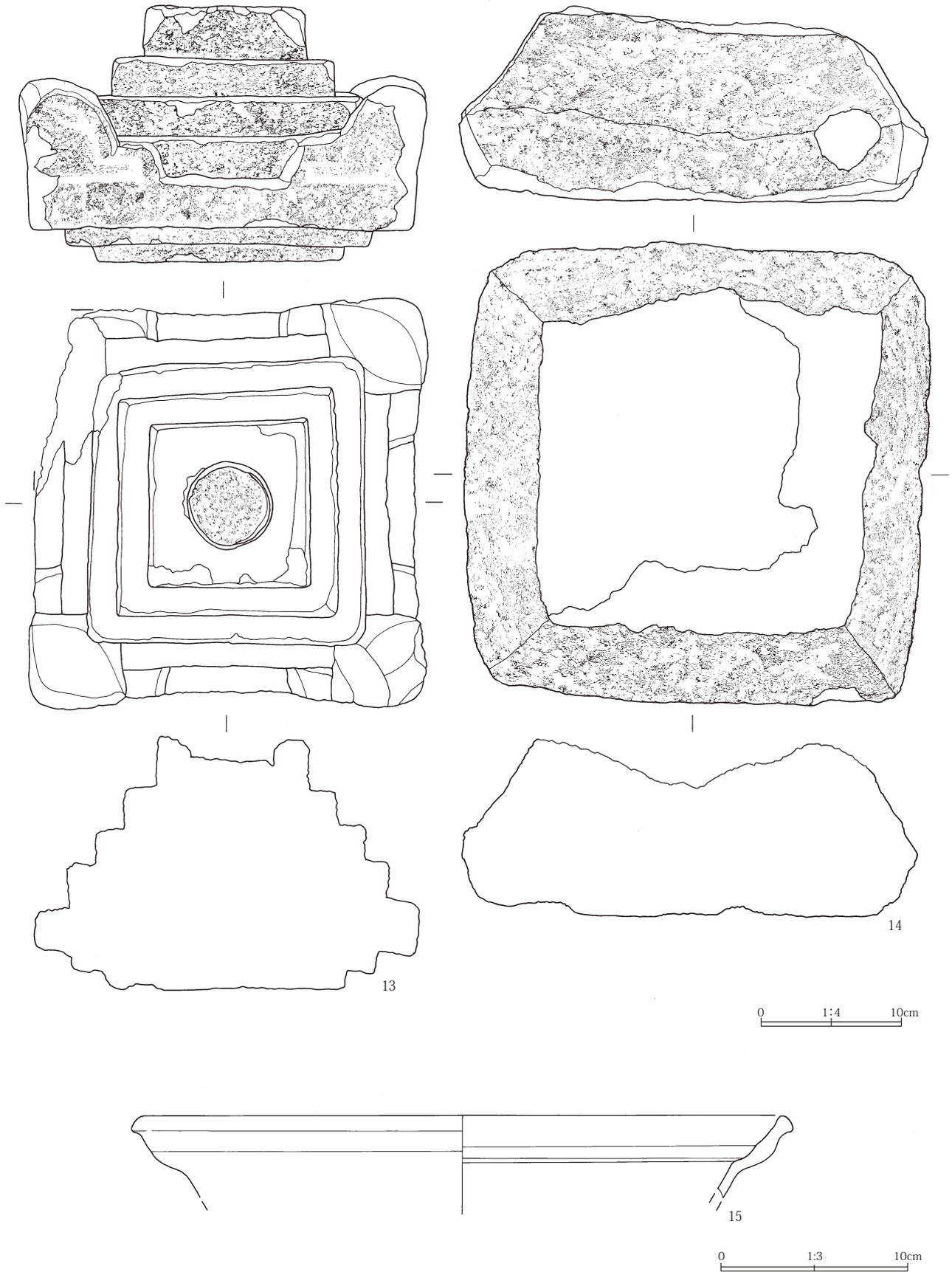
出土するもので、本遺跡周辺においても広く使用されていたものと思われる。

金属製品 泥流中から見つかった金属製品は鉄製の釘4点、銅製の煙管4点、古銭2点、飾り金具1点の計11点である。釘はいずれも鍛造品であり、残存状態は悪い。釘は江戸時代になってから木材を接合、固定する道具として急速に発達し、種類も豊富であるが、本遺跡群で出土した釘は最も多く見られる頭巻釘と思われる。頭巻釘は釘上端を叩き潰し、折り返して頭部とするものであるが、出土した釘はいずれも頭部や先端が失われている。出土した煙管は、いずれもほぼ同じ規格であり、江戸周辺地域へも喫煙の風習が普及していたことを示す。古銭は寛永通宝1点と残存状態が悪く、銭名が判別できない1点のみであった。寛永通宝は「寶」の字の一部である貝下部が、「ス」状ではなく「ハ」であることから、17世紀後半より鑄造された「新寛永」であることが分かる。銅製の一文銭と考えられる。

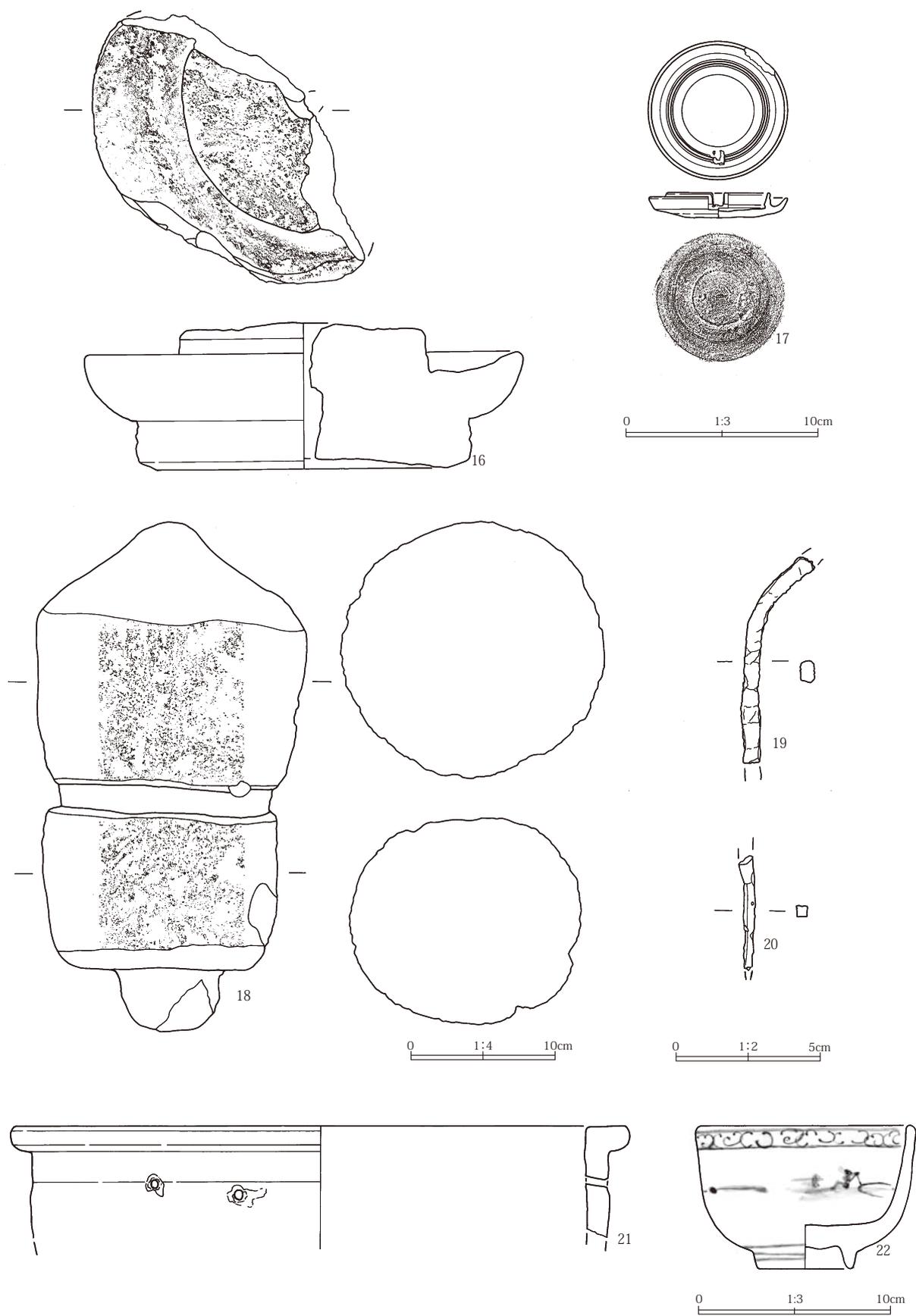
石製品 出土した石製品は五輪塔水輪1点、火輪3点、空風輪10点、宝篋印塔笠部2点、石製擬宝珠1点、石臼1点、茶臼1点、砥石4点で計23点を数えるが、この内、阿久津遺跡Ⅲ区1号溝、桑原田Ⅰ区13号水田畦、Ⅲ区1号溝の石垣には五輪塔水輪、火輪2点、空風輪9点、宝篋印塔笠部2点が石垣として転用されており、これら水田の構築材として使われたものを除く五輪塔火輪、空風輪、石製擬宝珠、石臼、茶臼、砥石が泥流中からの出土である。石塔は、二ツ岳石と粗粒輝石安山岩の2種類の石材によって製作されていた。全体的に二ツ岳石製のものが多く、阿久津遺跡Ⅳ区出土の空風輪1点と、桑原田遺跡Ⅲ区の水輪、空風輪1点が粗粒輝石安山岩でつくられ、残り8点は二ツ岳石製である。宝篋印塔は2点とも粗粒輝石安山岩であった。五輪塔の形態を見ると、水輪石塔は総じて南北朝から室町時代にかけて造立されたものと思われる。



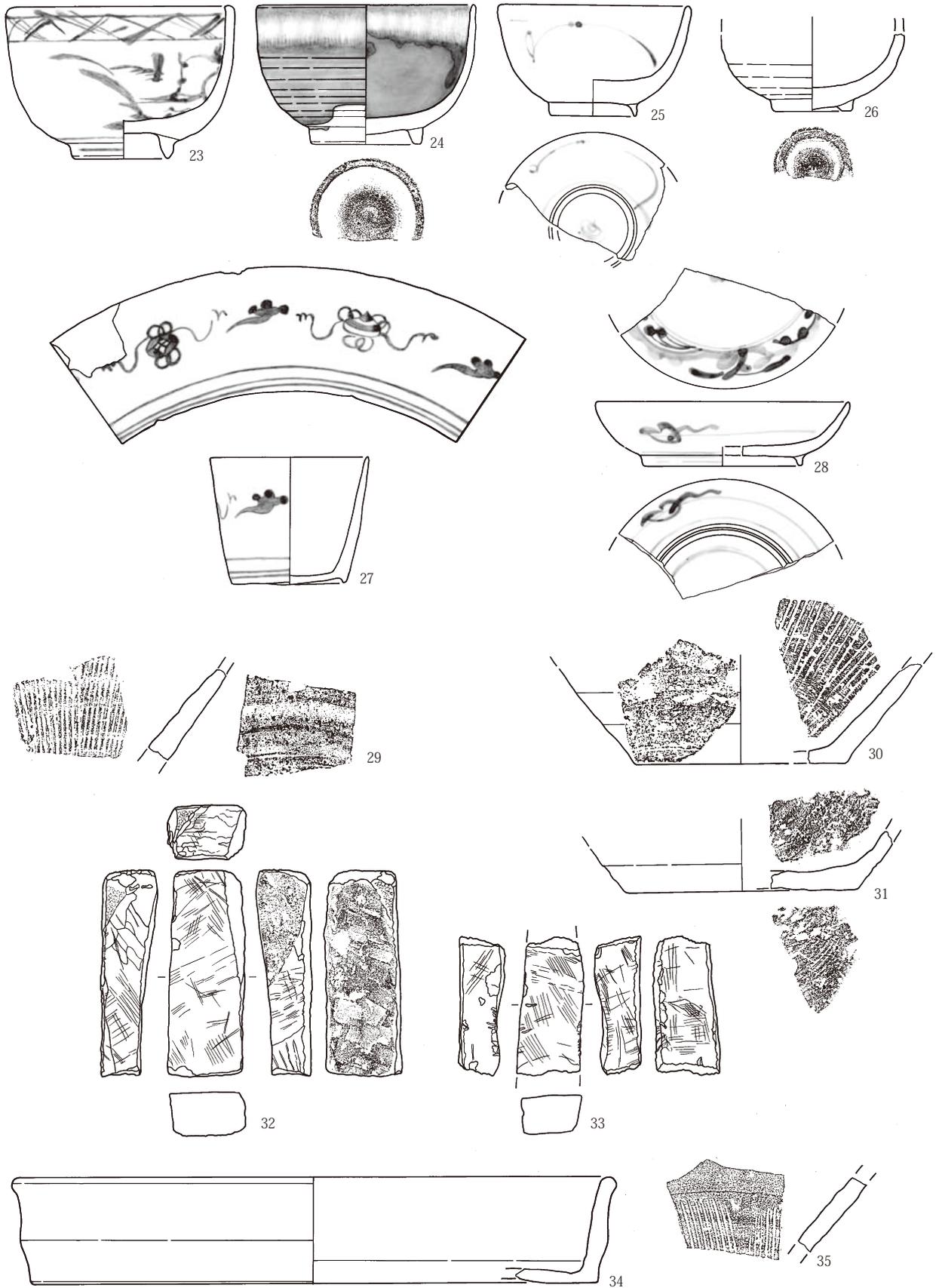
第322図 阿久津遺跡 遺構外出土遺物(1)



第323図 阿久津遺跡 遺構外出土遺物(2)

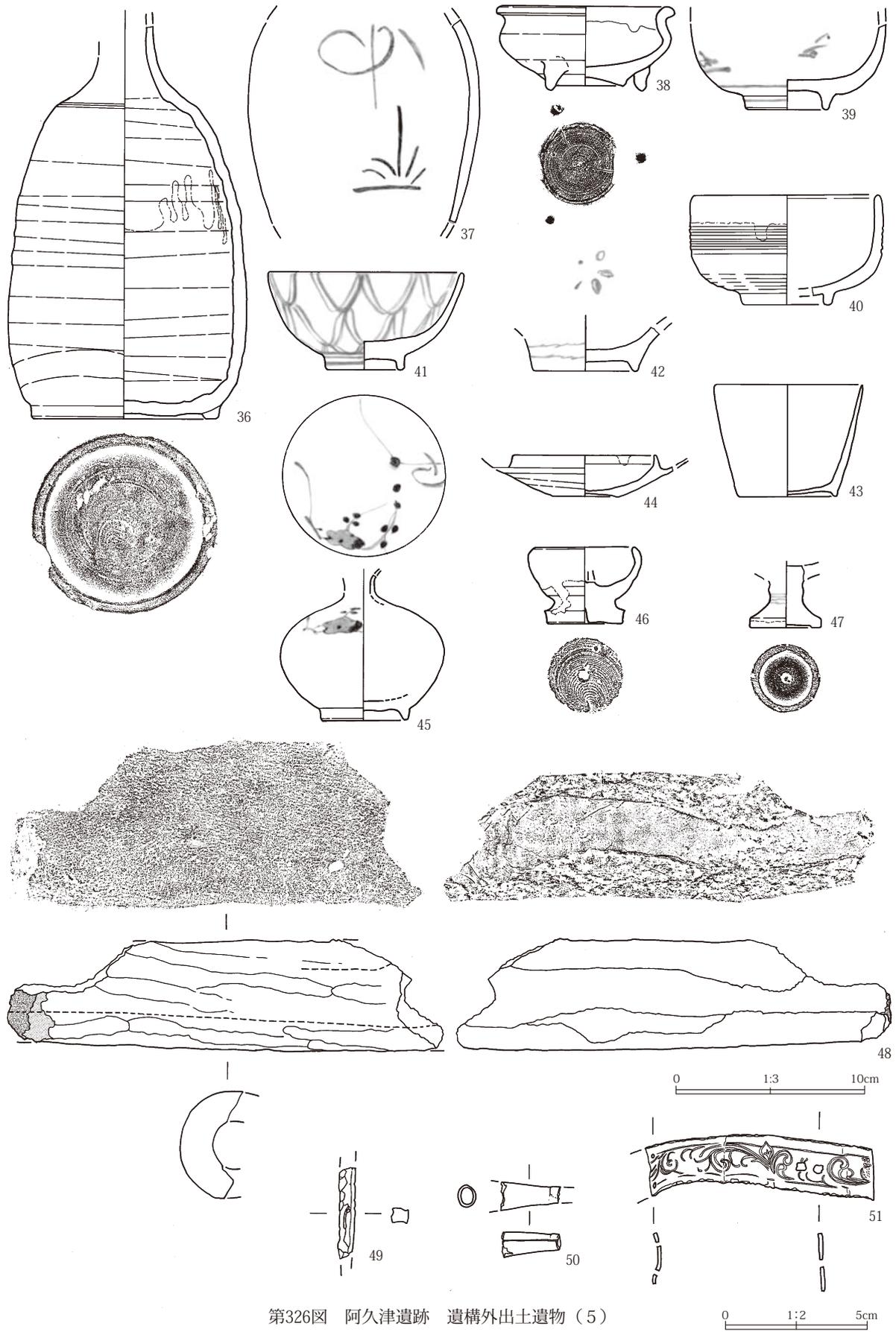


第324図 阿久津遺跡 遺構外出土遺物（3）

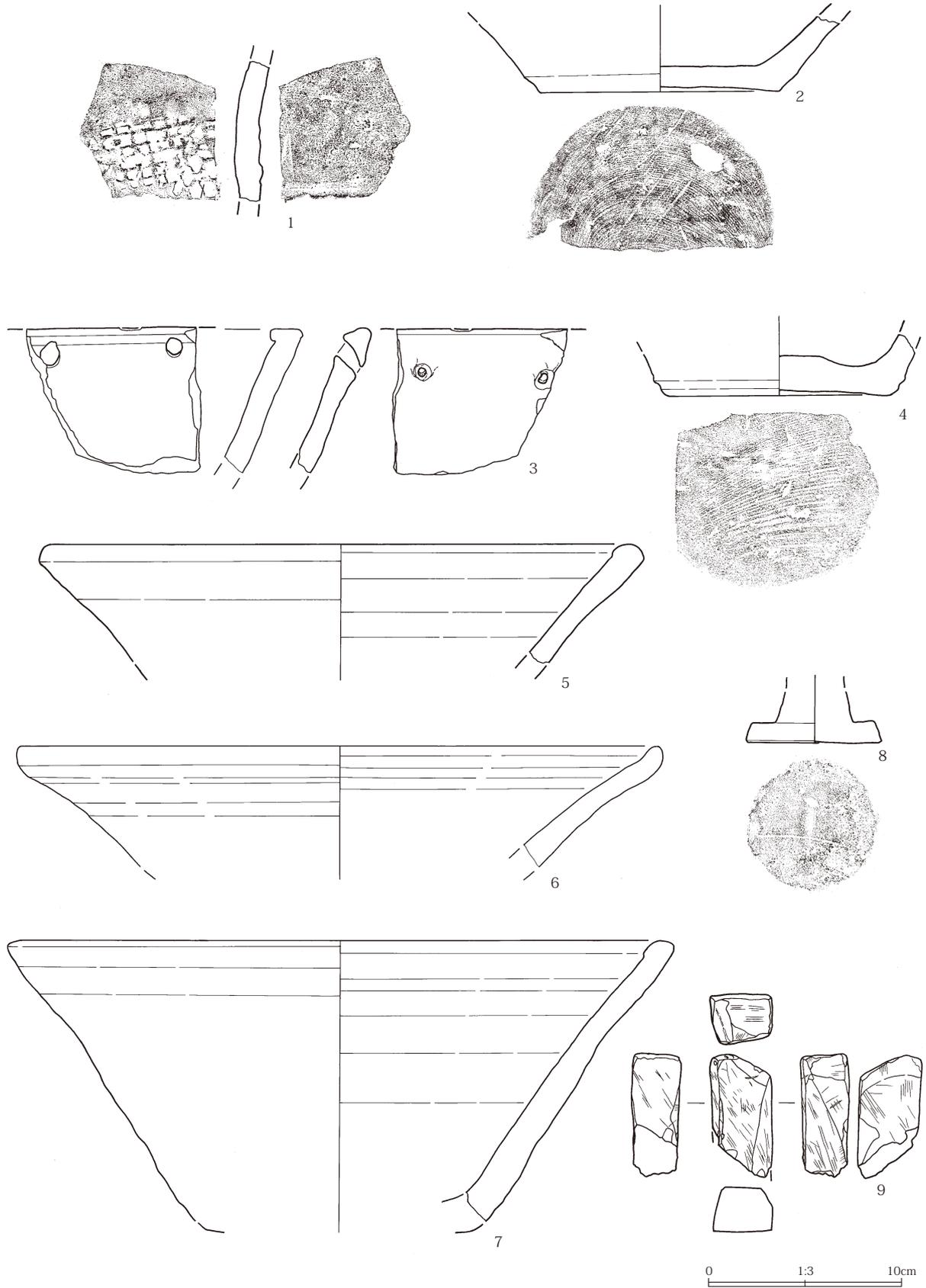


第325図 阿久津遺跡 遺構外出土遺物(4)

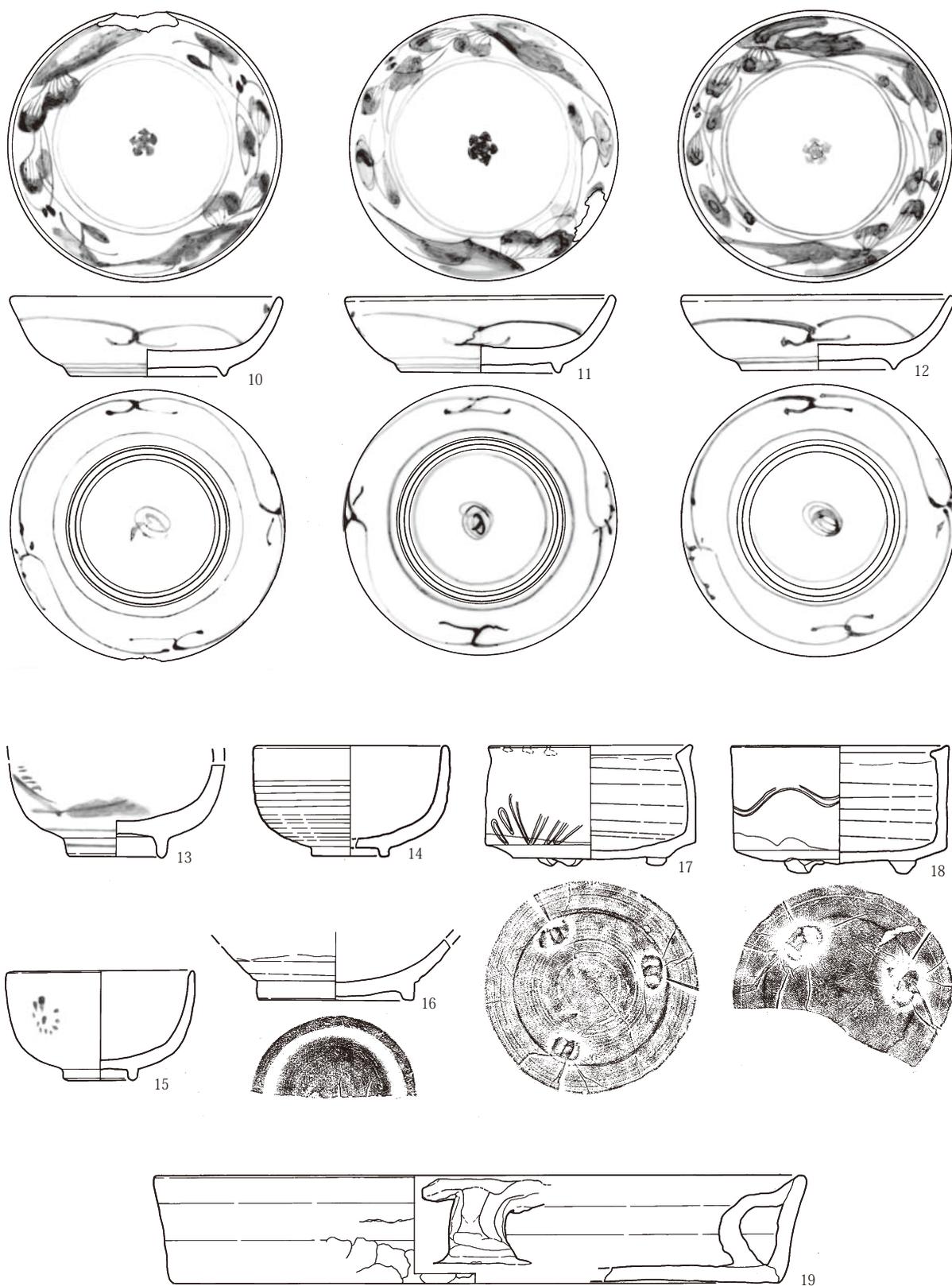
0 1:3 10cm



第326図 阿久津遺跡 遺構外出土遺物(5)

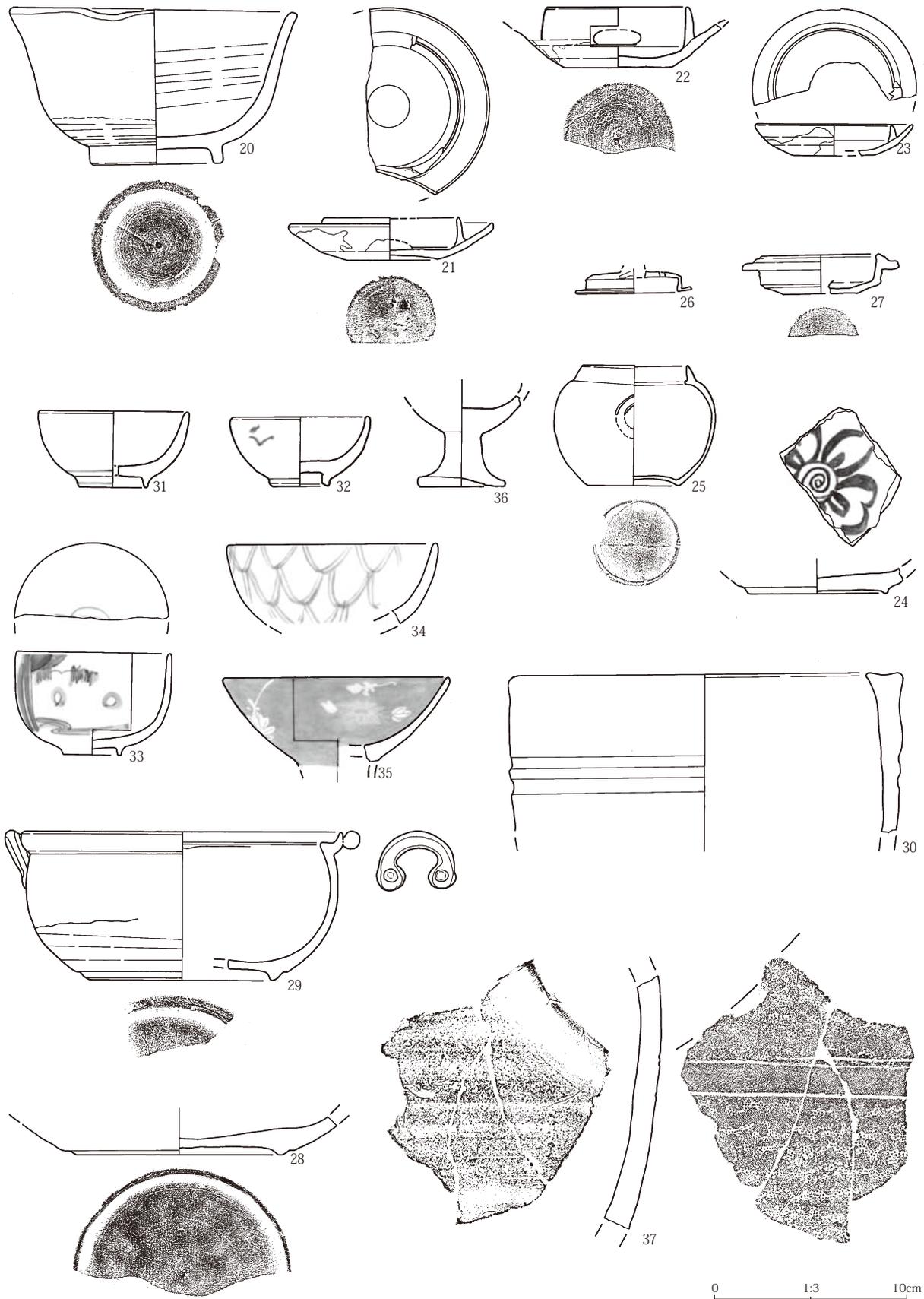


第327図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物（1）

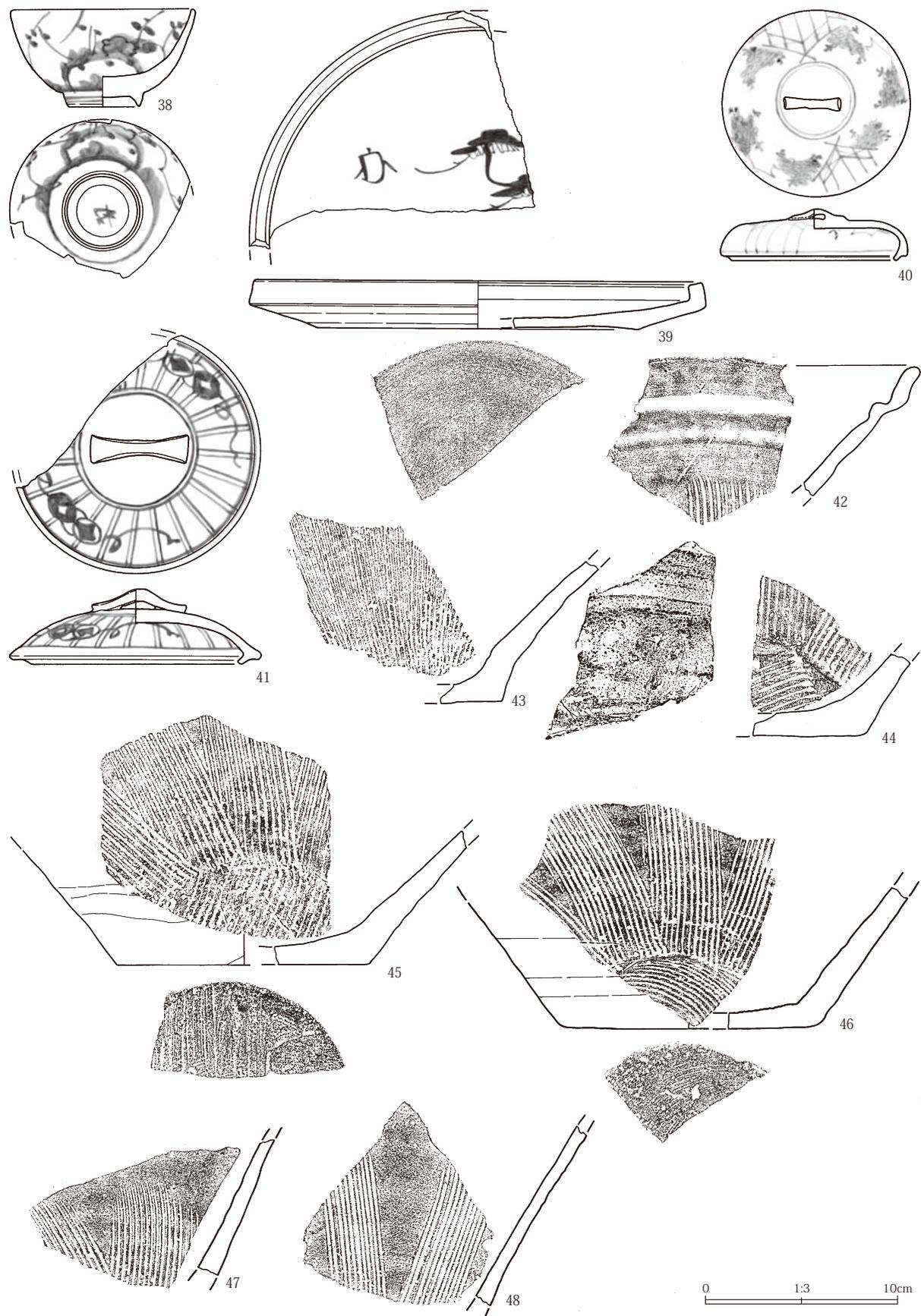


0 1:3 10cm

第328図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物（2）



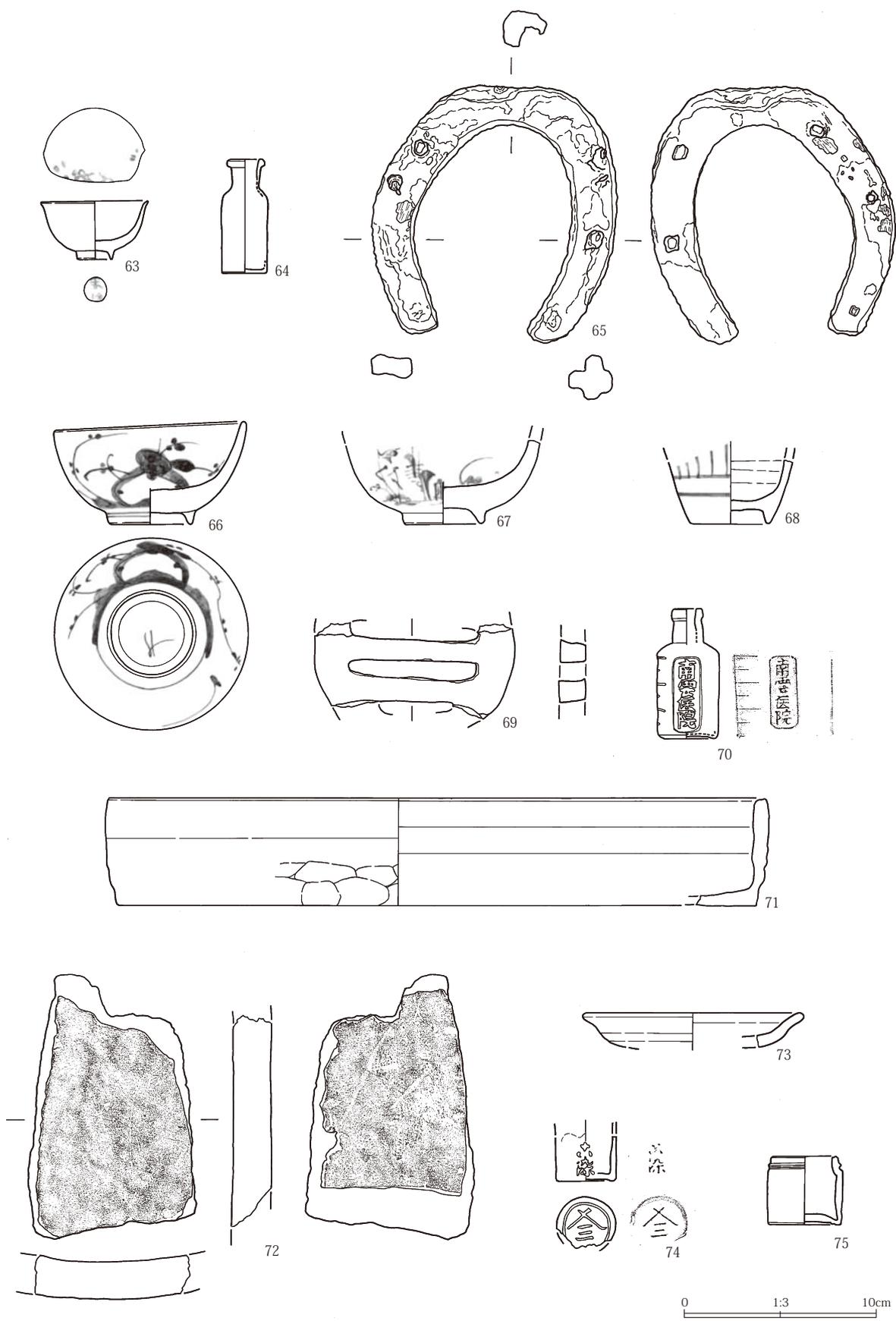
第329図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物（3）



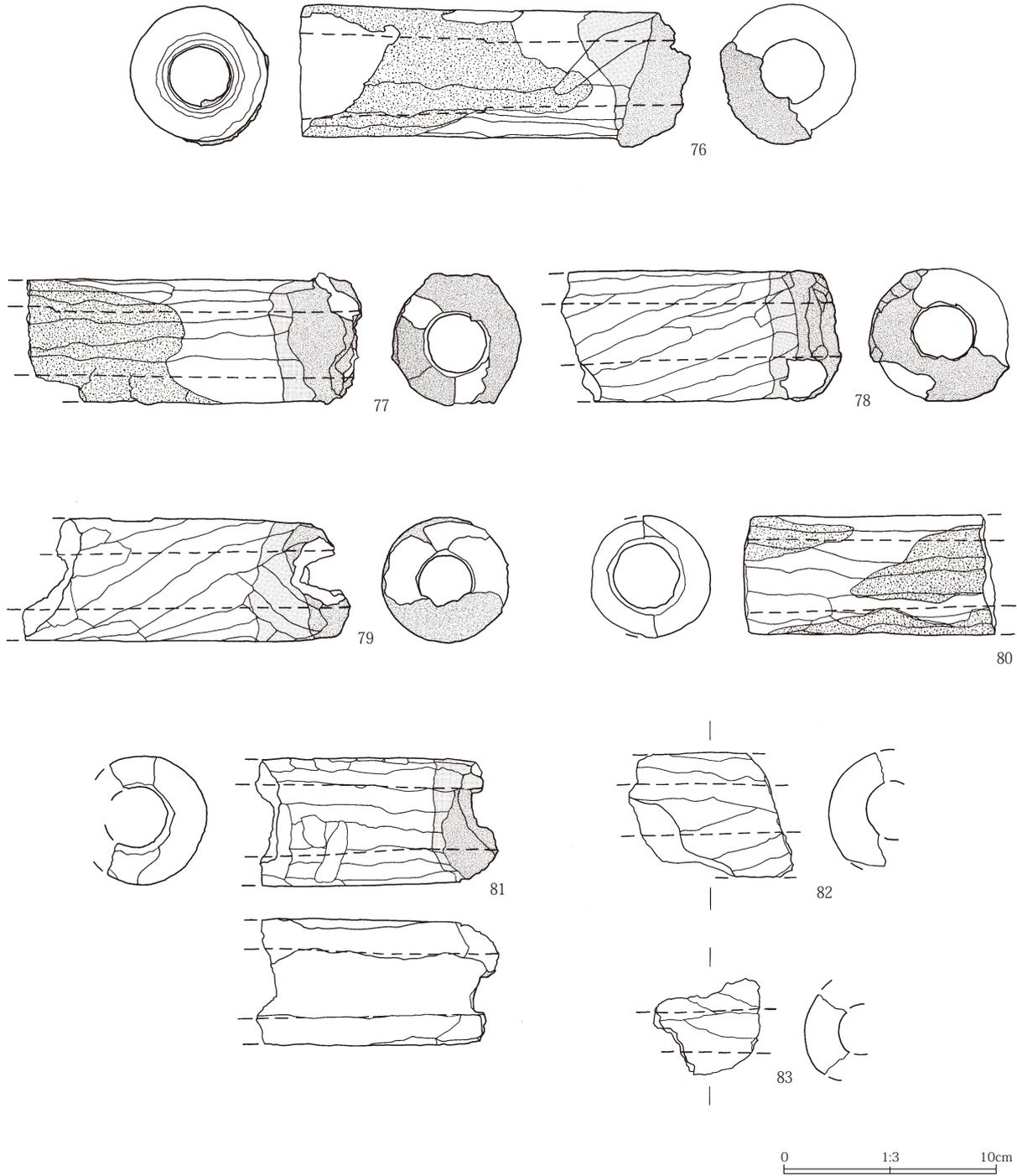
第330図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物（4）



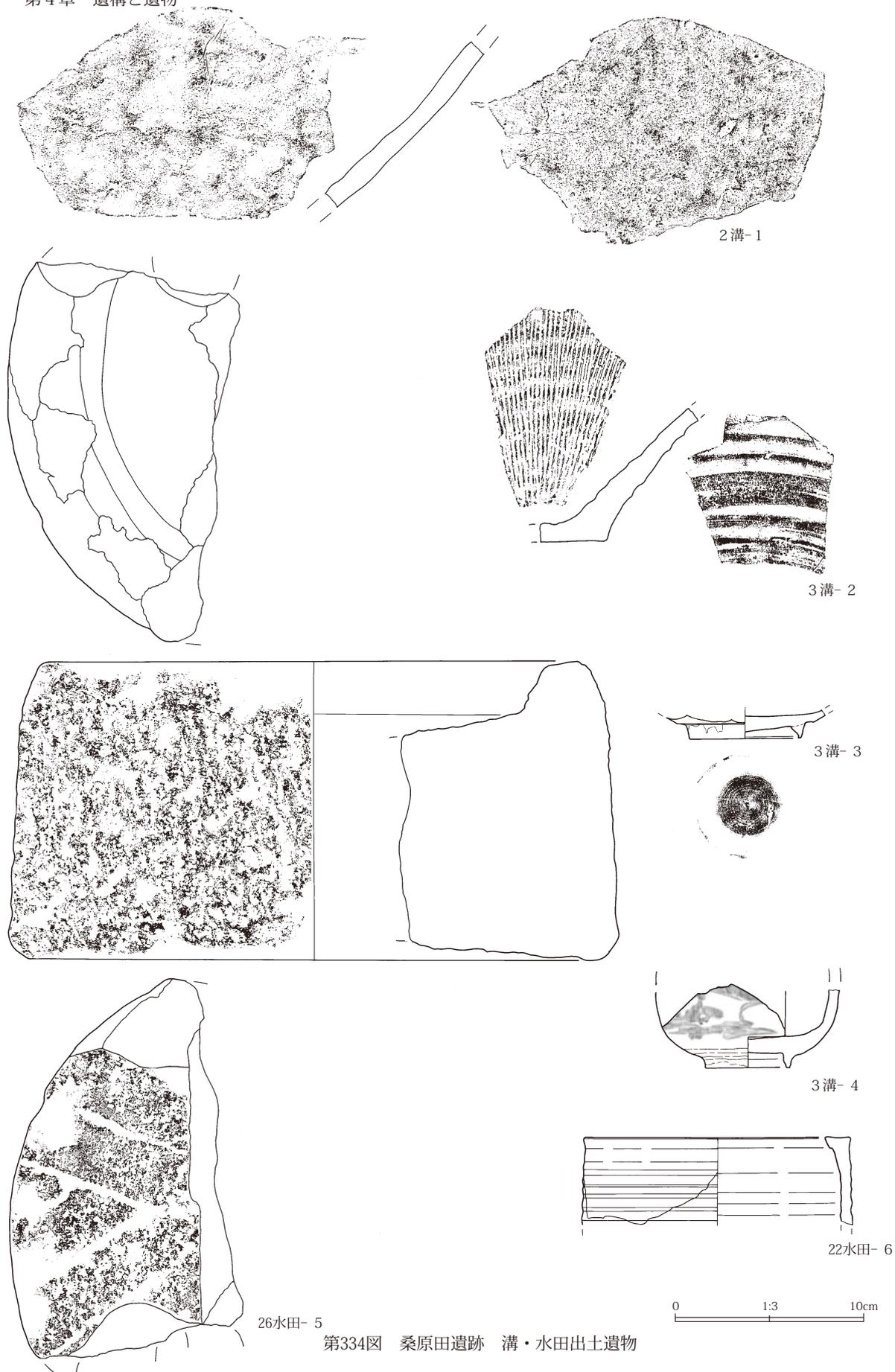
第331図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物（5）



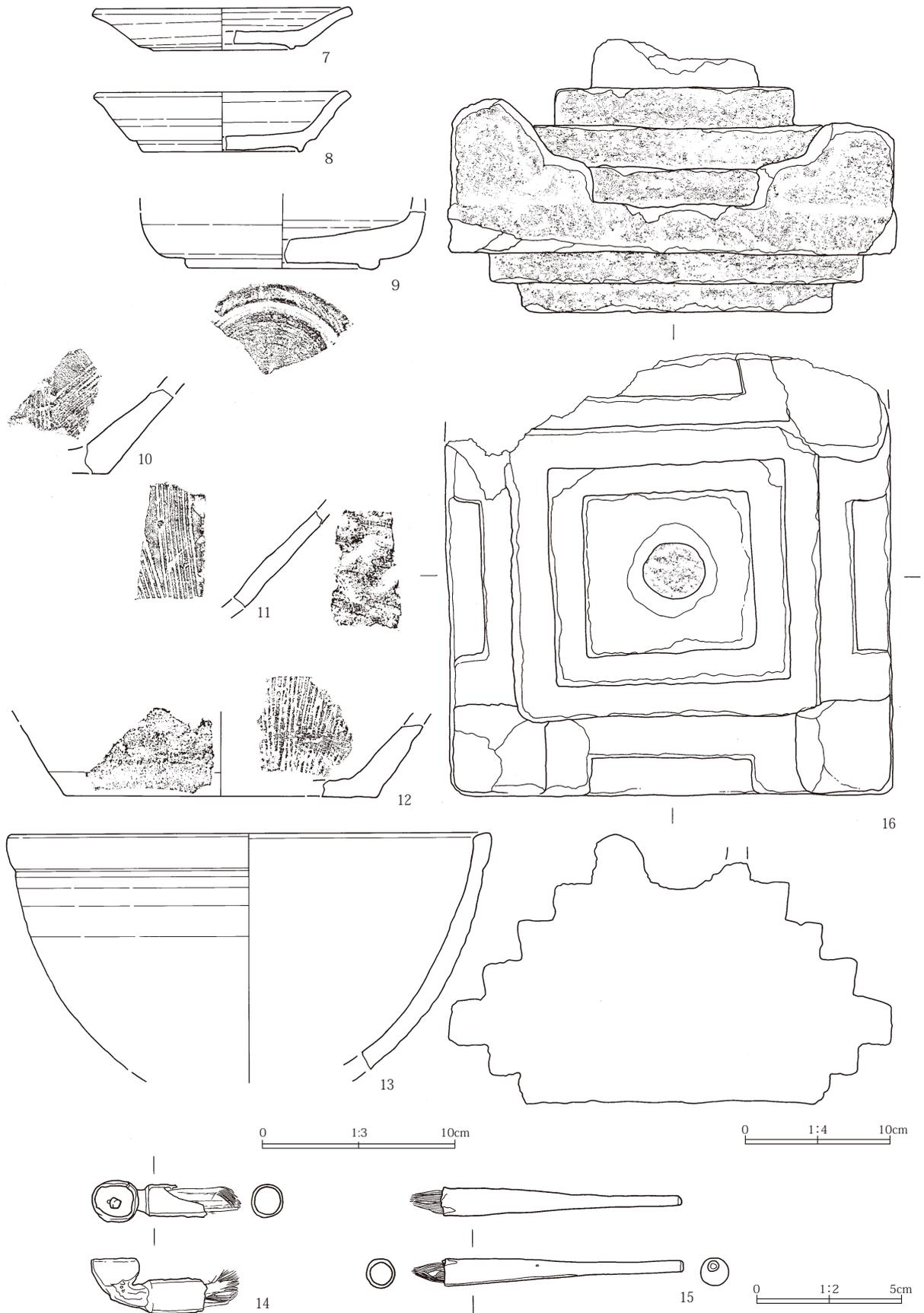
第332図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物 (6)



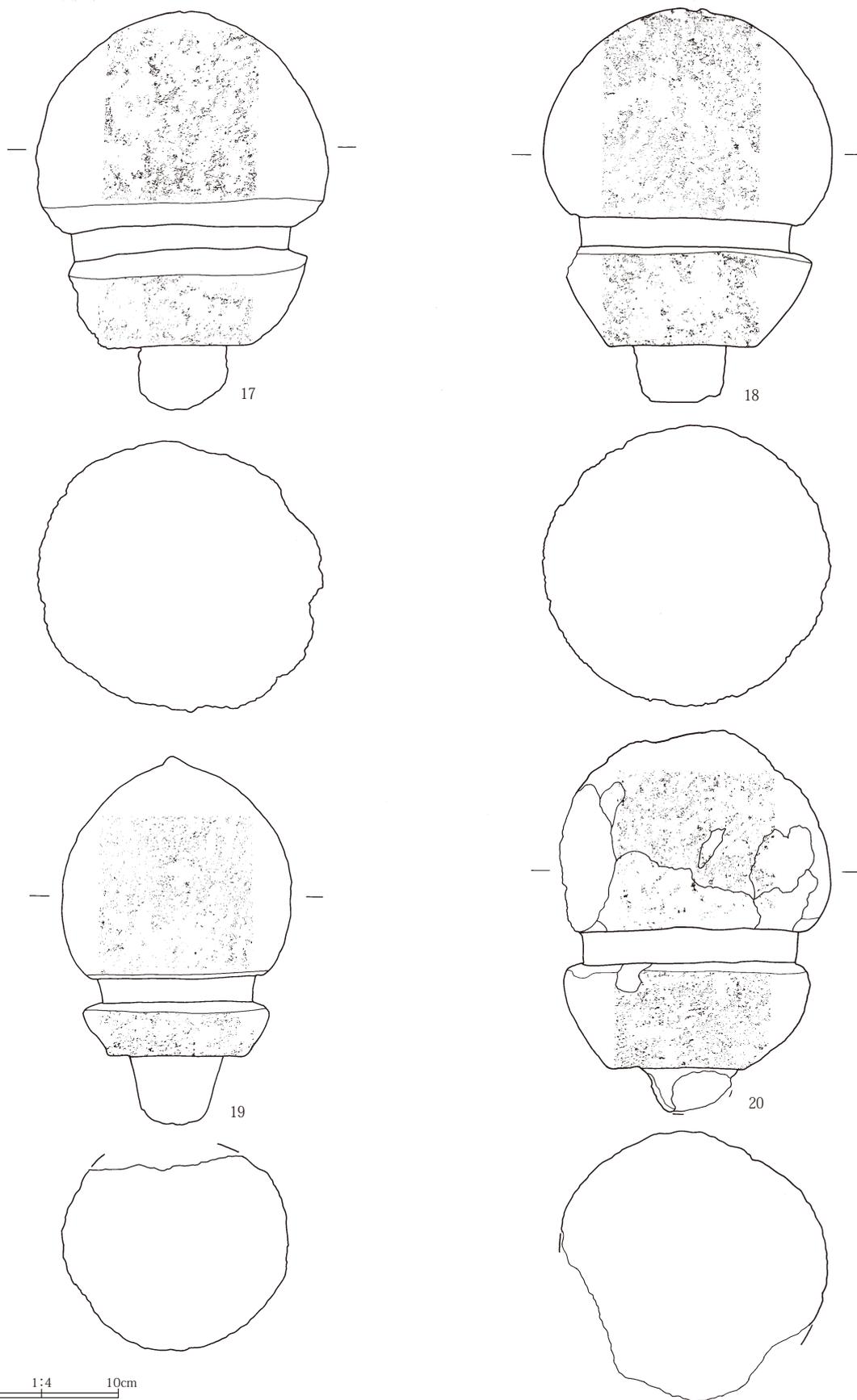
第333図 万蔵寺廻り遺跡 遺構外出土遺物（7）



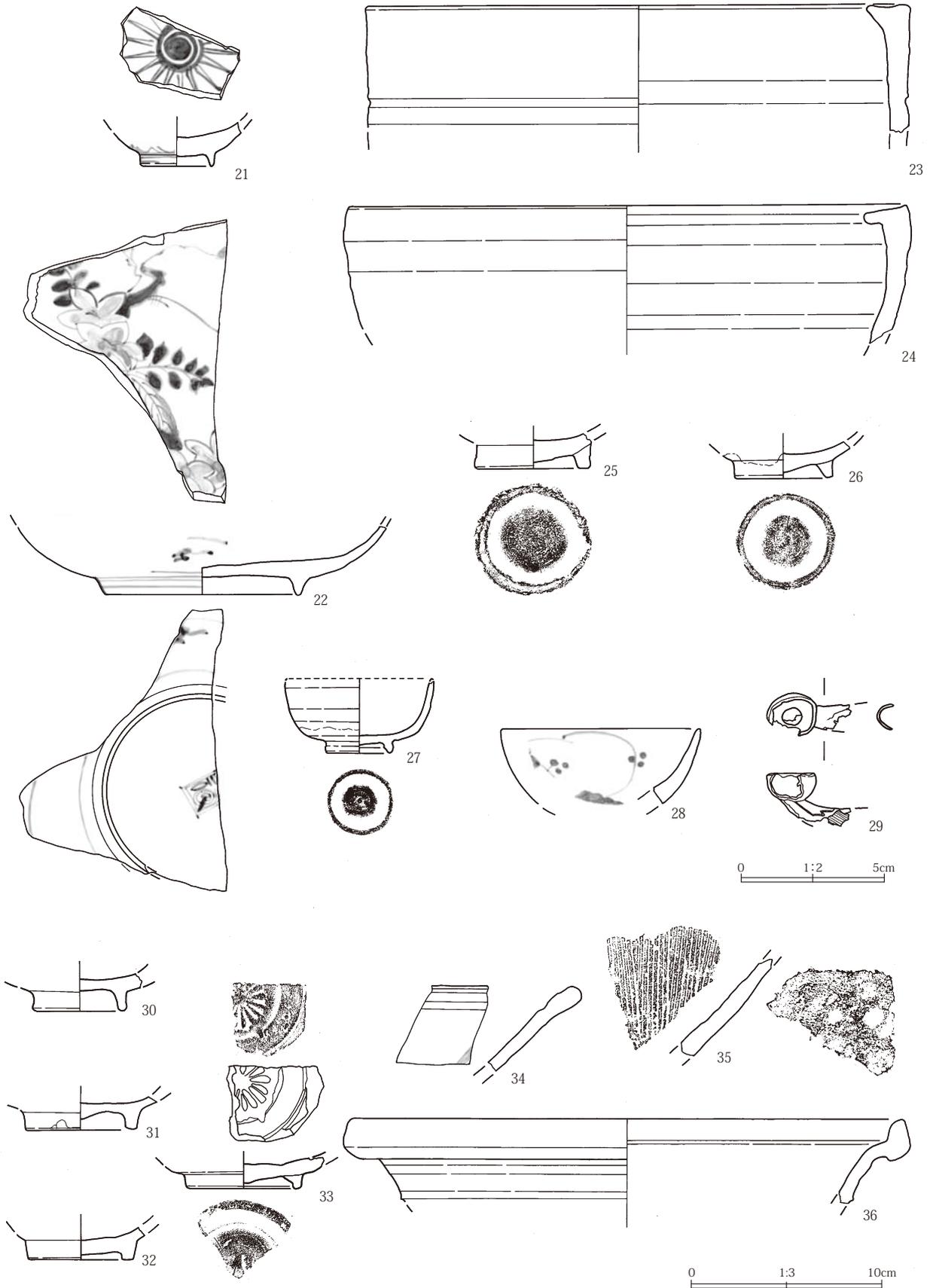
第334図 桑原田遺跡 溝・水田出土遺物



第335図 桑原田遺跡 遺構外出土遺物(1)

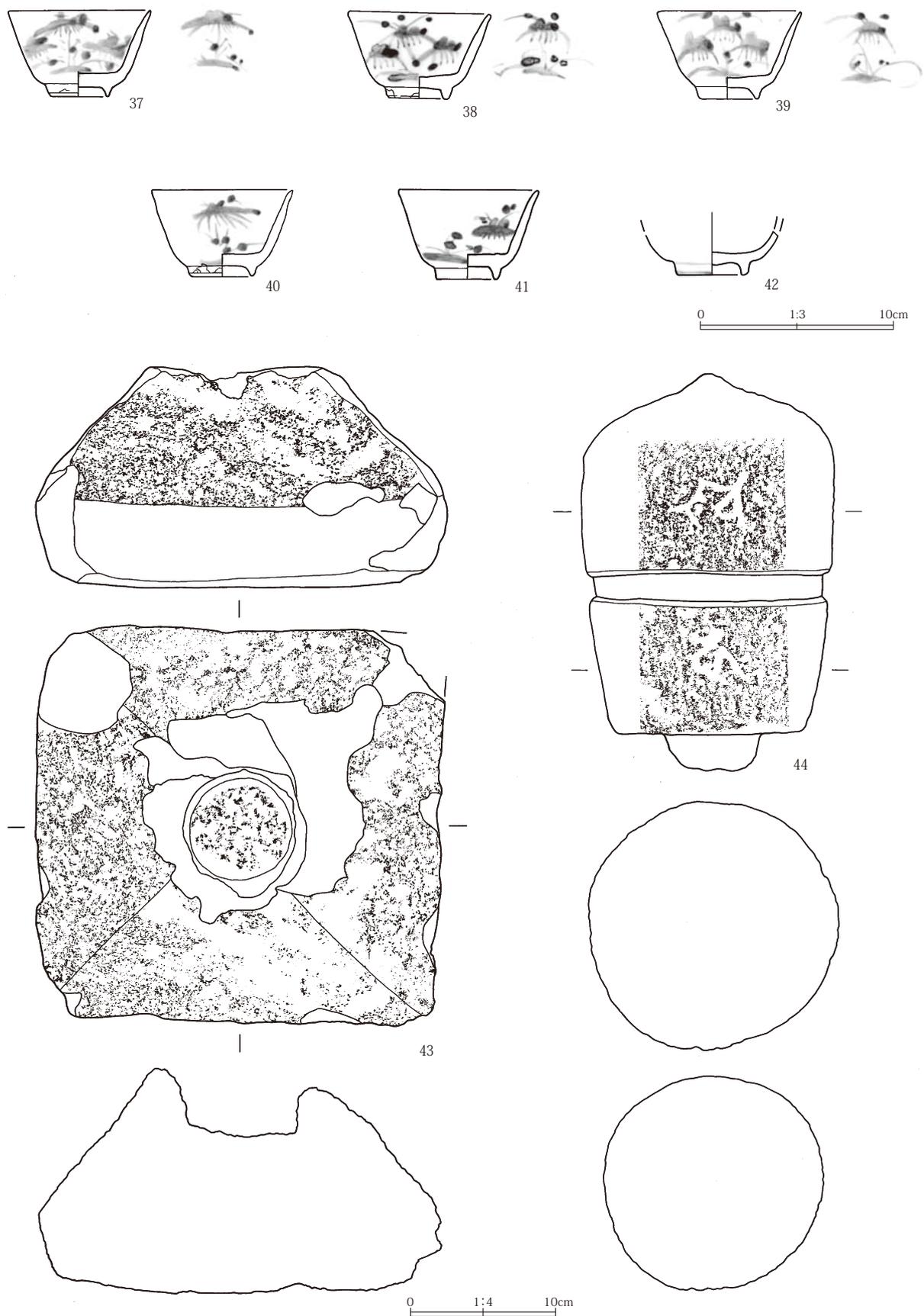


第336図 桑原田遺跡 遺構外出土遺物(2)

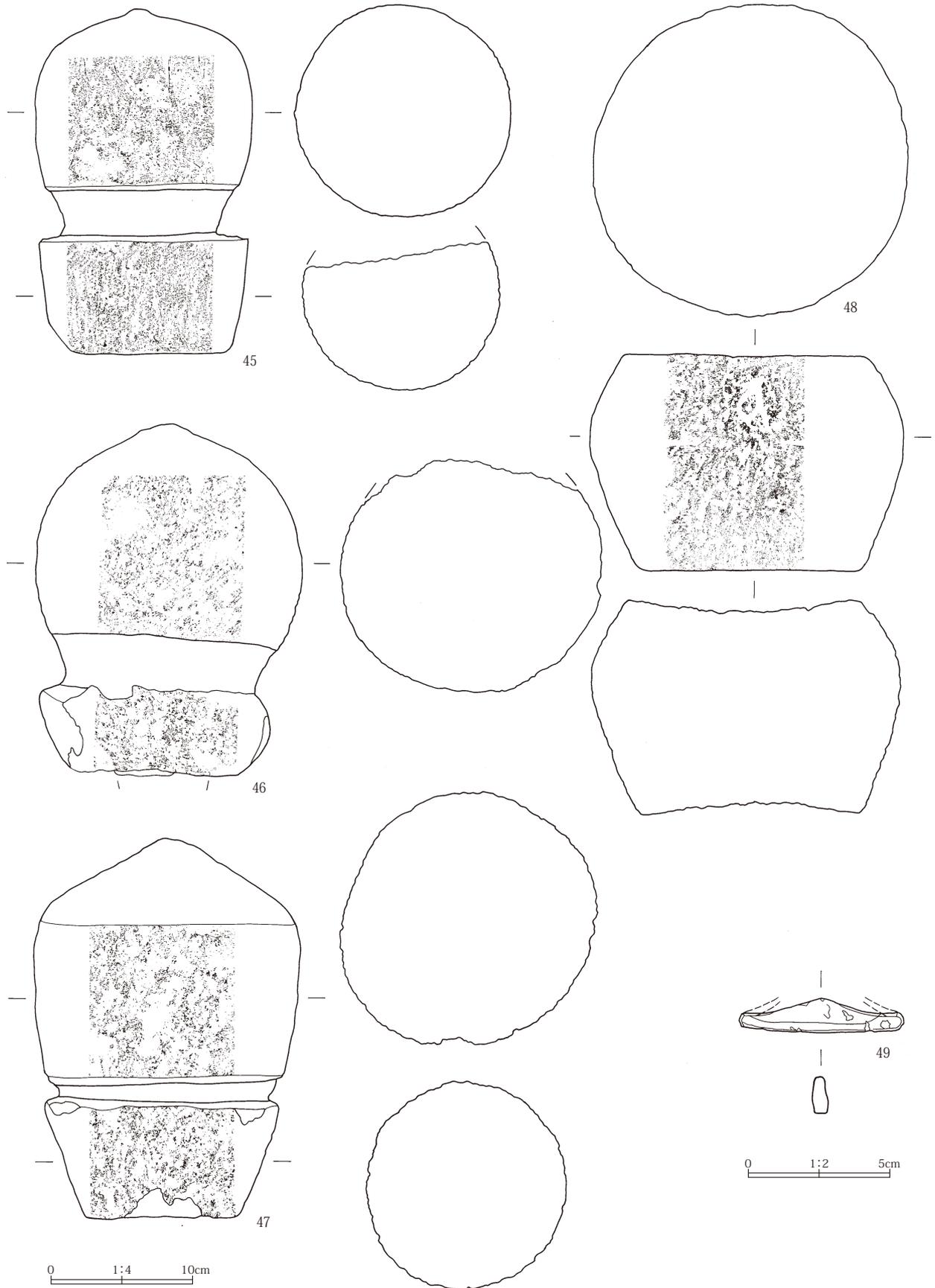


第337図 桑原田遺跡 遺構外出土遺物 (3)

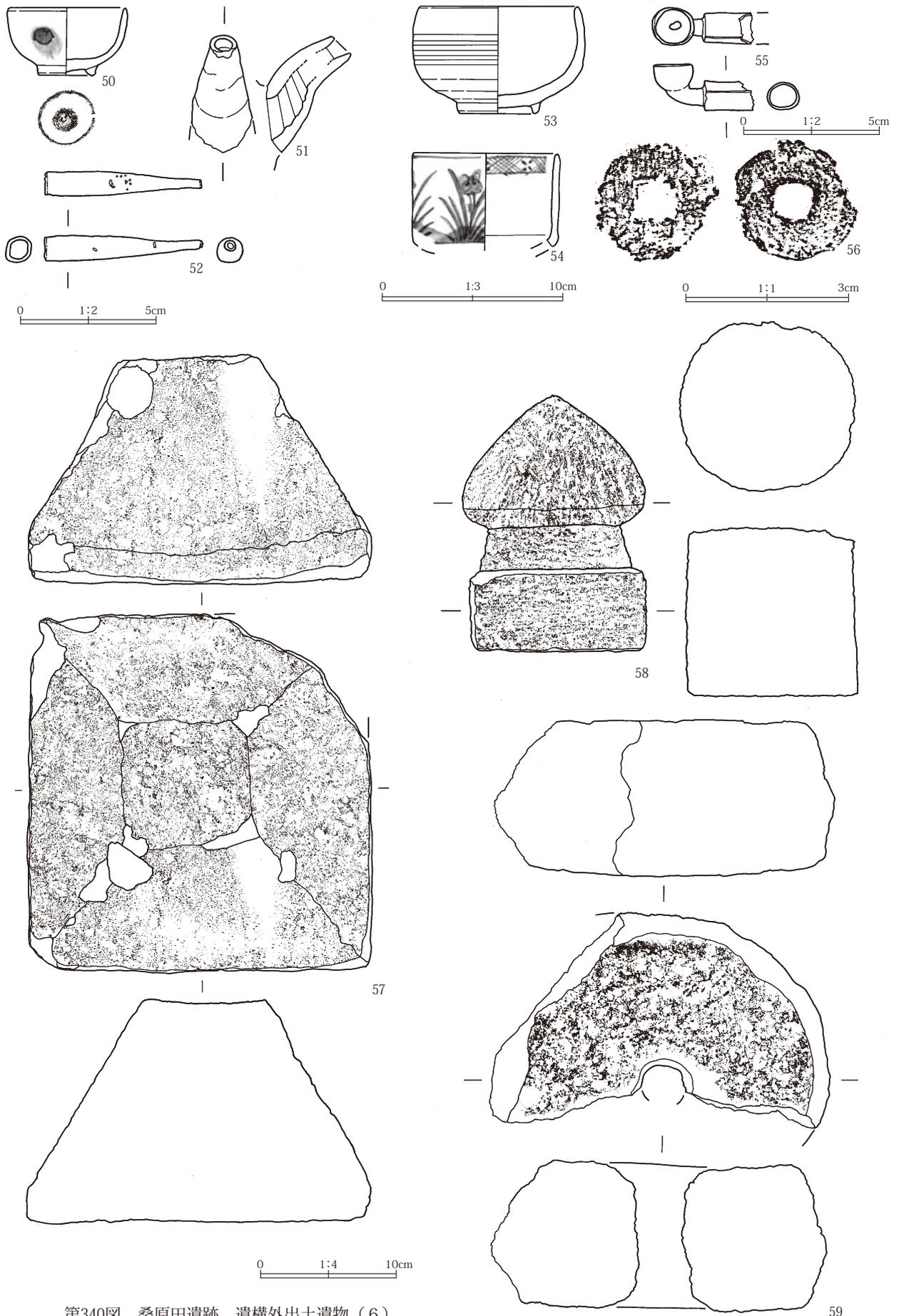
第4章 遺構と遺物



第338図 桑原田遺跡 遺構外出土遺物(4)

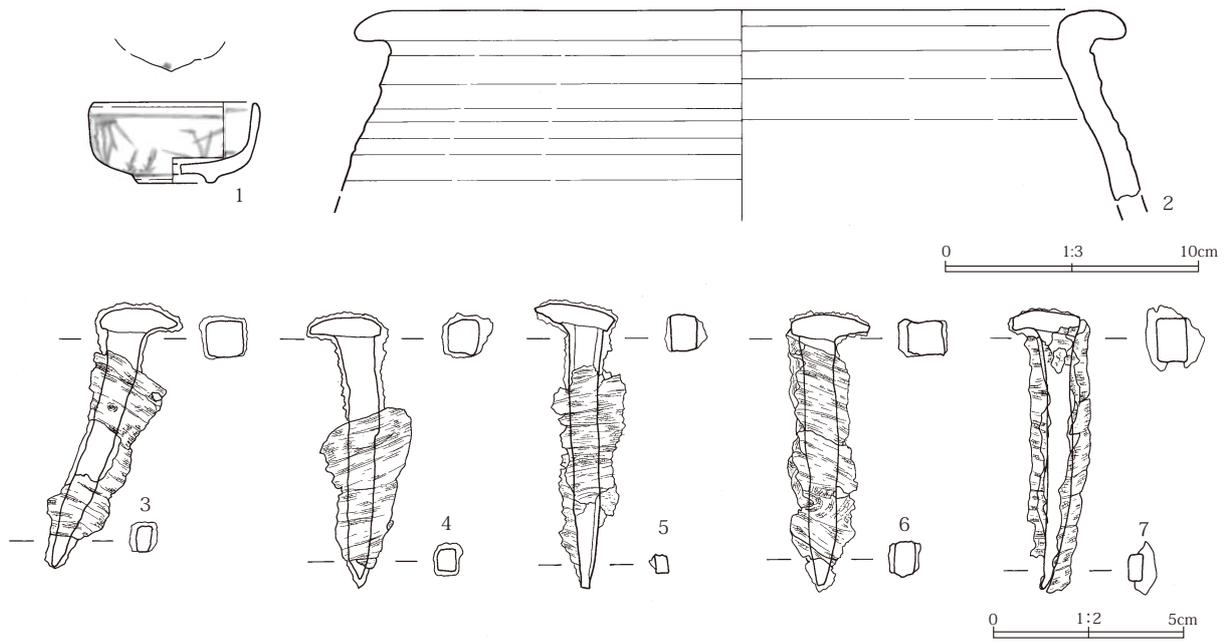


第339図 桑原田遺跡 遺構外出土遺物（5）

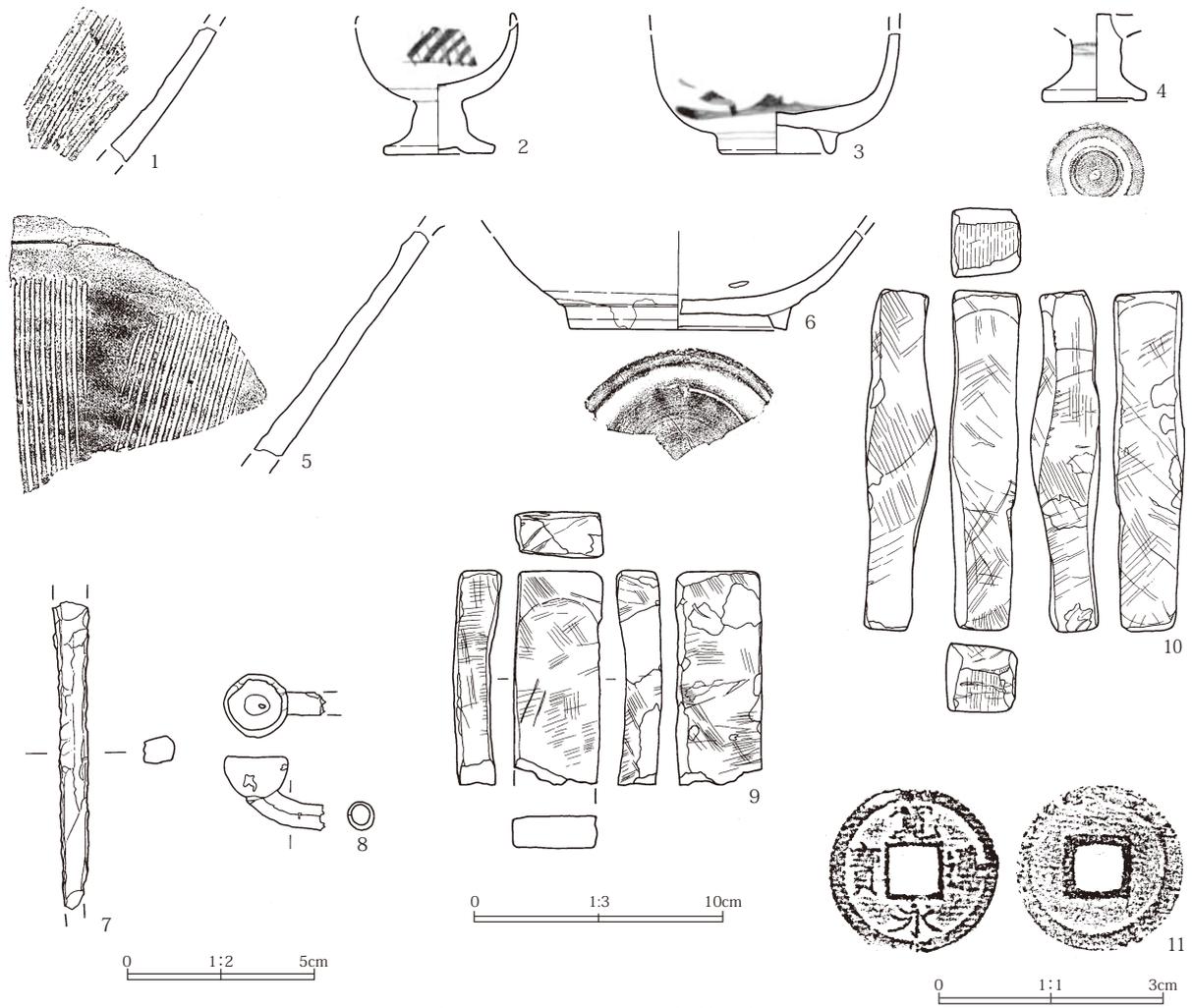


第340図 桑原田遺跡 遺構外出土遺物（6）

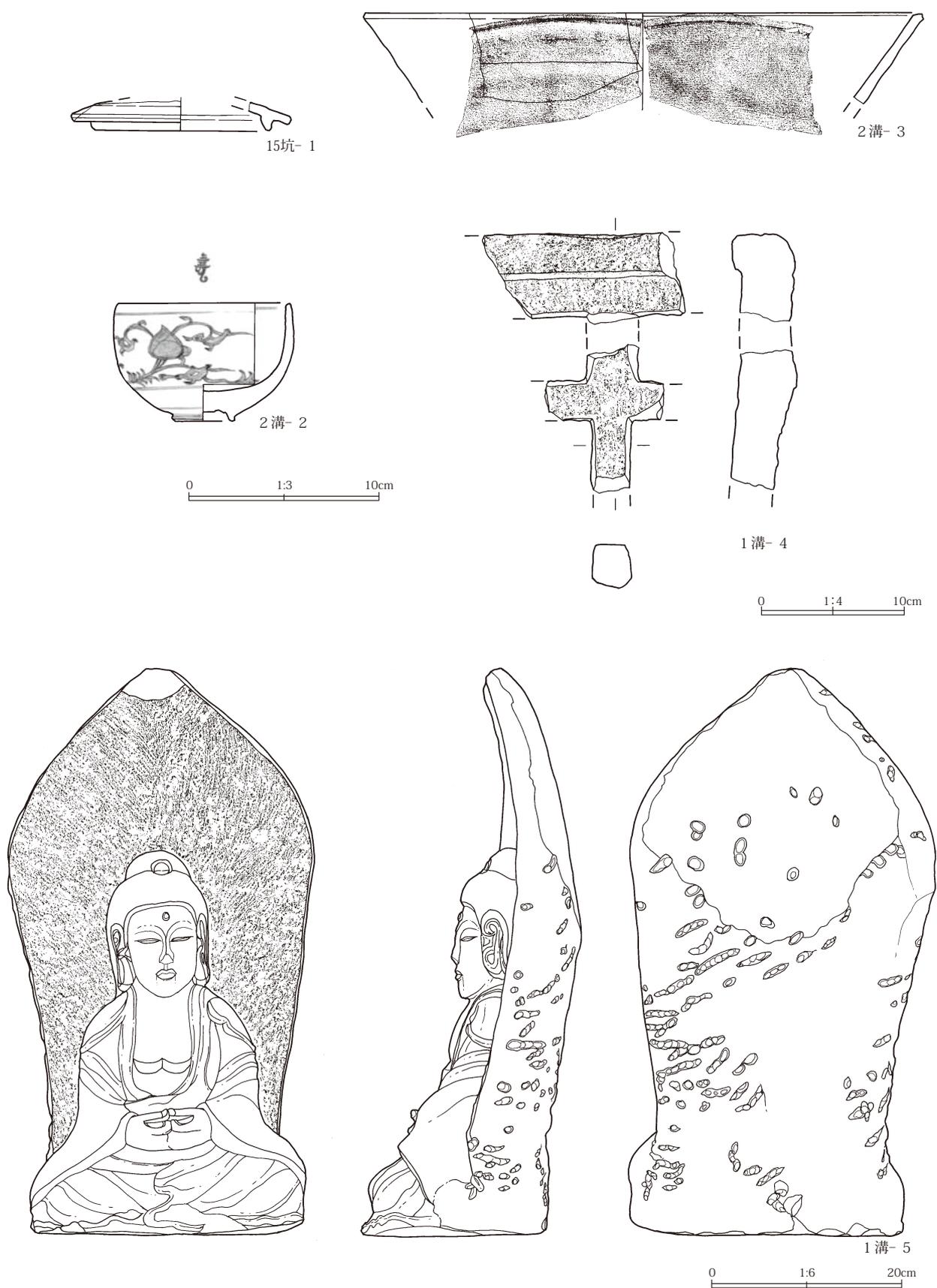
59



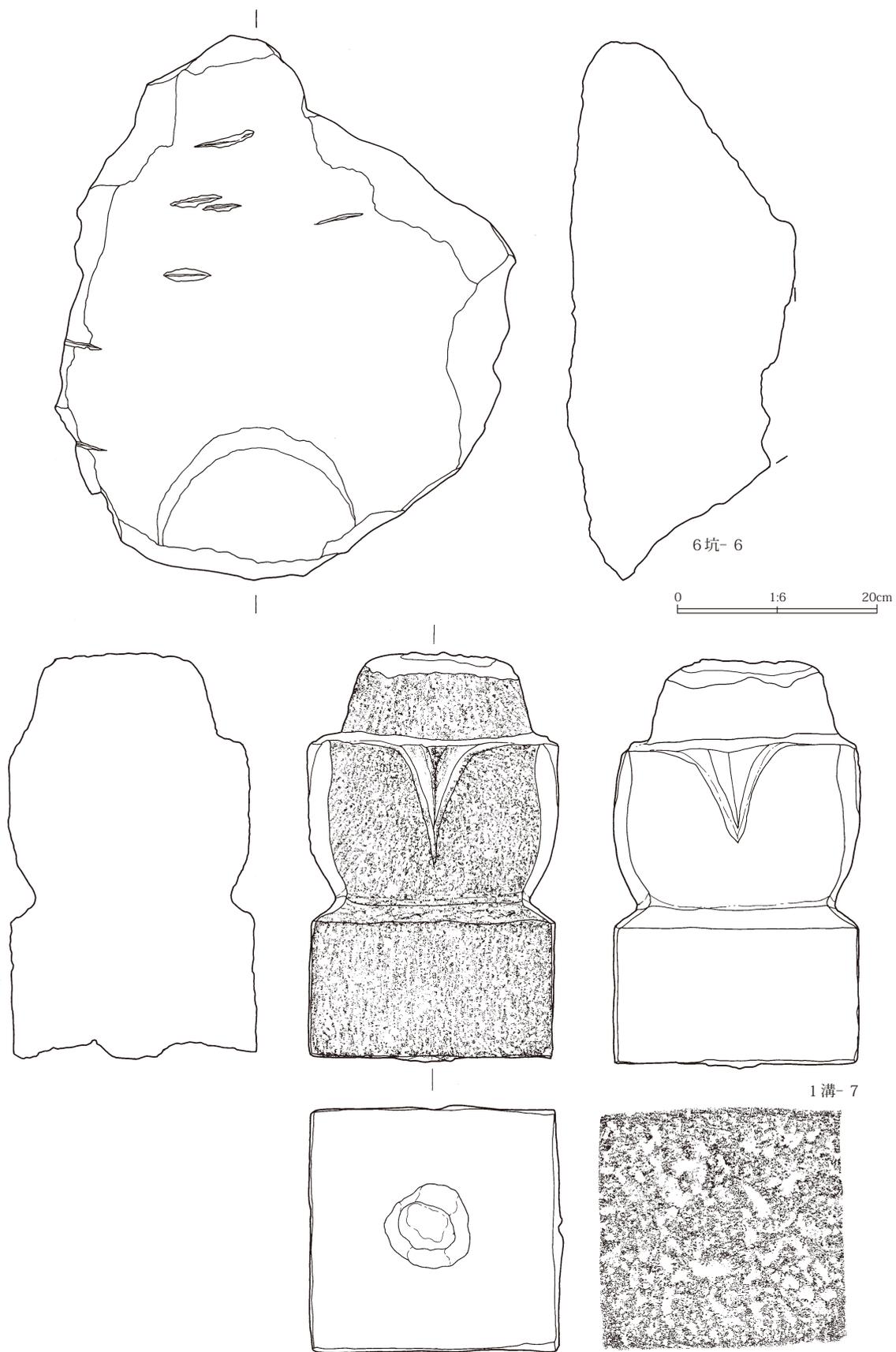
第341図 十二廻り遺跡 遺構外出土遺物



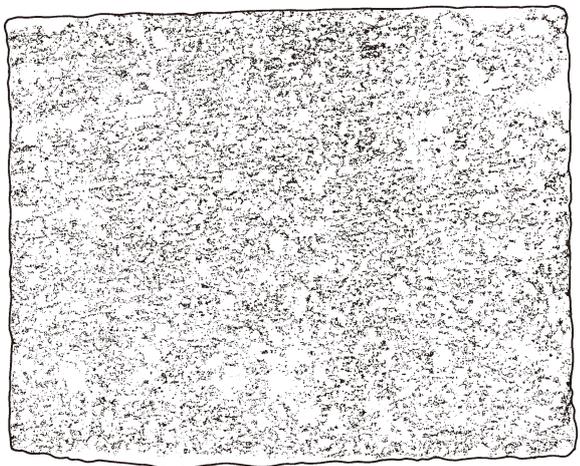
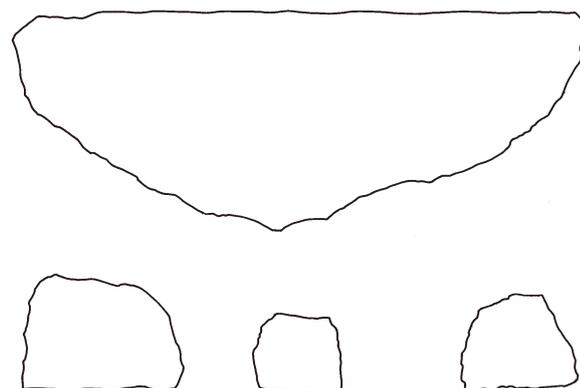
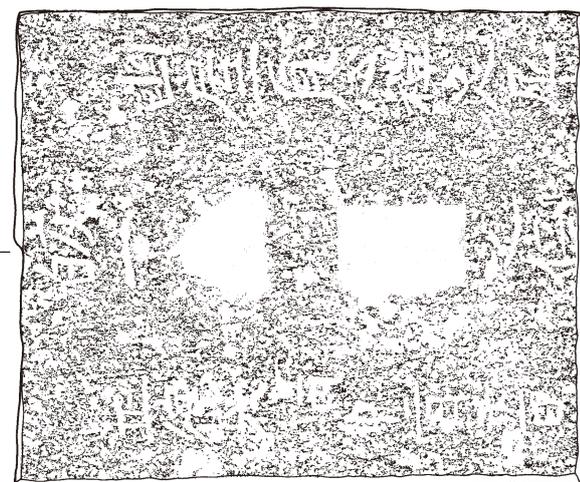
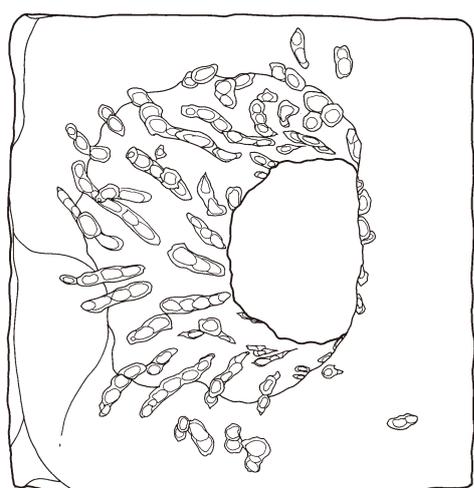
第342図 中町遺跡 遺構外出土遺物



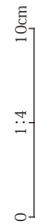
第343図 半田常法院遺跡 土坑・溝出土遺物(1)



第344図 半田常法院遺跡 土坑・溝出土遺物(2)



1溝-8



第345図 半田常法院遺跡 1号溝出土遺物

第5章 遺物観察表

() 数字：復元数値 < > 数字：現存数値

1 阿久津遺跡出土古代土器観察表

I 区 1号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	土釜	(29.3)	<15.2>		竈埋没土	口縁~胴部、酸化、にぶい褐色、粗	紐作り、胴部外面縦篋削り、内面撫で。	11	6

III区遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏		<2.2>	4.9	2/3、酸化、にぶい黄橙色、並	左回転轆轤成形、撫で、底部外面墨書。	13	7

2 万蔵寺廻り遺跡出土古代・中世土器観察表

I 区 1号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	羽釜		<5.9>		埋没土	口縁、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、内面篋撫で。	16	8

II 区 1号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(9.5)	2.1	6.6	南壁際 +13.8	1/2、還元、黄灰色、粗	回転轆轤成形後に底部内外面撫で。	17	10
2	灰釉陶器 皿	10.0	1.9	5.8	北 東+7.4 住居内 土坑埋土	3/4、還元、灰白色、密	右回転轆轤成形、横撫で、付高台。虎溪山1号窯式期。	17	10
3	灰釉陶器 碗	14.5	6.7	6.8	竈 焚き口 +3.5	1/2、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で。付高台。虎溪山1号窯式期。	20	10
4	灰釉陶器 碗	(14.7)	6.6	7.4	住居内土 坑埋没土	1/6、還元、黄灰色、密	回転轆轤成形、横撫で、付高台。高台は強い撫でによって「ハ」の字状に外反。虎溪山1号窯式期。	20	10
5	羽釜	(23.0)	<13.5>		竈 焚き口 +9.0	口縁部、酸化、赤褐色、並	紐作り後右回転轆轤整形、胴部外面下半篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅上位。	20	10

II 区 2号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	平瓦				南 壁 際 +5.5	破片、良好、灰色、密	器壁2.1cm。	24	11
2	羽釜	(22.5)	<18.3>		中央床面 密着	口縁~胴部、酸化、にぶい赤褐色、並	回転轆轤成形、胴部外面下半に縦方向篋削り。胴部最大幅は上位。鏝上位の一部に指押さえ痕。	24	11

II 区 3号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(12.0)	3.9	6.0	南+8.5	1/3、酸化、灰黄褐色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。口縁部は外反。口唇部肥厚。	25	12
2	須恵器 坏	(10.7)	3.4	5.8	竈袖+12.3	1/3、酸化、灰白色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。	25	12
3	須恵器 坏	(11.0)	4.0	5.6	竈袖+40.0	1/4、酸化、灰黄色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。	25	12
4	須恵器 坏	(11.3)	4.3	5.4	竈 燃焼部 +10.0	1/3、酸化、黒褐色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。	25	12
5	須恵器 碗		3.6	6.6	竈袖+17.3	底部、酸化、にぶい褐色、並	回転轆轤成形、横撫で、内面研磨、付高台。高台は端部で僅かに外反し、断面三角形。	25	12
6	須恵器 碗	(13.8)	7.4	8.1	南+1.6	1/4、酸化、にぶい黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、付高台、足高高台碗。	25	12
7	須恵器 碗	13.3	6.9	9.1	竈 燃焼部 +2.5	1/2、酸化、にぶい黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、付高台、足高高台碗。	25	12

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
8	灰釉陶器 皿	(12.4)	2.4	6.3	西壁際 +6.2	1/5、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、付高台。虎溪山1号室式期。	25	12
9	羽釜		<8.8>	(5.5)	竈燃焼部 +7.0	胴部下位～底部、酸化、褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半に斜め方向の筥削り。	25	12

II区7号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	10.2	2.1	5.7	竈燃焼部 +3.6	完形、酸化、橙色、粗	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。	28	14
2	須恵器 碗	(14.4)	<6.5>		南+3.4	1/4、酸化、にぶい黄橙色、並	回転轆轤成形、横撫で、付高台。体部立ち上がりは直線的、口縁部は外反する。	28	14
4	羽釜	(21.6)	<19.5>		竈煙道埋 没土	1/3、酸化、にぶい赤褐色、並	紐作り後轆轤整形。口縁部、胴部外面上位に横、中～下位に斜め筥削り。内面筥撫で。胴部最大幅は上位、口縁部は若干内湾する。	30	14

II区8号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(8.5)	2.3	6.0	埋没土	1/2、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。口径に対して底径が大きく、体部は外反しながら立ち上がる。焼成甘い。	33	15
2	須恵器 碗	8.8	3.5	4.7	南+3.6	ほぼ完形、酸化、浅黄橙色、並	回転轆轤成形、横撫で、付高台。丁寧なつくり。体部立ち上がりは直線的。	33	15

II区9号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(8.8)	2.7	4.2	南壁際 +4.8	1/2、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。口縁部は外反する。焼成甘い。	39	17
2	須恵器 坏	8.9	2.3	4.6	南壁際 +4.8	ほぼ完形、酸化、淡黄色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。口縁部は若干内傾する。	39	17
3	羽釜		<10.8>		南西隅 +2.0	胴部、酸化、灰褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面上位に横方向、中位から斜め方向の筥削り、内面筥撫で。鐔の先端はやや下向き。	39	17

II区10号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	土釜	(21.5)		<6.1>	北西床面 密着	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り、横撫で。胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は「く」の字状に外反。胴部外面に筥削り。	40	17

II区11号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	羽釜	(24.7)	<6.6>		北西+11.8	口縁部、酸化、暗褐色、密	紐作り後轆轤整形、胴部外面筥削り、内面筥撫で。鐔の突出は弱く、断面三角形。口縁部は僅かに外反する。	42	17

III区1号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	土釜	22.3	15.3		竈燃焼部 使用面密 着	2/3、酸化、浅黄橙色、並	紐作り、横撫で、胴部外面上半縦、下半横筥削り、内面筥撫で。胴部最大幅は中位。口縁部外反。胴部の割口を水平に調整、甑として二次使用か。	48	19
2	土釜	(24.2)	<21.0>		東+0.8 ~ 15.0	1/3、酸化、にぶい黄橙色、並	胴部最大幅は上位に位置、口縁部は「く」の字状に外反する。胴部外面には縦方向の筥削り。	48	19
3	羽釜		<9.1>	(9.0)	竈燃焼部 +3.7	底部、酸化、にぶい橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半斜方向筥削り、内面筥撫で。	48	19
4	土釜	(26.0)	<6.2>			口縁部、酸化、にぶい黄橙色、密	紐作り、横撫で、胴部外面に縦方向の筥削り。口縁部は「く」の字状に外反する。	49	19
5	羽釜		<12.1>		竈燃焼部 +0.2	胴部、酸化、赤褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面上位に横、中位から縦方向の筥削り、内面筥撫で。鐔の突出は弱く、断面三角形。	49	19

Ⅲ区 2号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	8.3	1.8	6.4	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄色、密	右回轉轆轤成形、底部回轉糸切り離し。器高低く、体部立ち上がりは直線的で短い。胎土は均一。	53	21
2	須恵器 坏	9.0	2.3	4.9	竈焼部	ほぼ完形、酸化、黄褐色、密	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部立ち上がりは直線的。	53	21
3	須恵器 坏	8.9	2.55	4.0	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、並	右回轉轆轤成形、底部回轉糸切り離し、横撫で。胎土は均一。焼成が良く、丁寧なつくり。底部は高台状に突出する。	53	21
4	須恵器 坏	9.0	2.1	5.3	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、並	右回轉轆轤成形、底部回轉糸切り離し、横撫で。体部は外反しながら立ち上がる。口唇部肥厚。	53	21
5	須恵器 坏	8.7	2.1	4.4	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、並	左回轉轆轤成形、底部回轉糸切り離し、横撫で。	53	21
6	須恵器 坏	9.6	2.15	5.3	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄色、並	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。	53	21
7	須恵器 坏	9.7	2.0	6.5	竈焼部	ほぼ完形、酸化、明赤褐色、並	左回轉轆轤成形、撫で、底部回轉糸切り離し。体部器壁に厚みがあり、直線的に立ち上がる。全体が被熱により赤色化。	53	21
8	須恵器 碗	8.8	<2.5>		竈焼部	2/3、酸化、にぶい黄褐色、密	回轉轆轤整形、撫で。高台は欠損するが、欠損後に平らになるよう調整したものと思われる。坏として二次利用したものか。	53	21
9	須恵器 坏	8.9	2.3	4.9	竈焼部	完形、酸化、にぶい黄褐色、密	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部は外反しながら立ち上がる。口唇部で肥厚。	53	21
10	須恵器 坏	9.1	2.3	4.3	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、密	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。胎土は均一で丁寧なつくり。底部は高台状に突出する。	53	21
11	須恵器 坏	8.9	2.3	4.6	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、並	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部は緩やかに立ち上がる。	53	21
12	須恵器 坏	9.2	2.3	5.6	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、並	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部は外反しながら立ち上がる。口唇部肥厚。	53	21
13	須恵器 坏	9.0	2.4	6.0	竈焼部	完形、酸化、にぶい褐色、並	左回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。器壁に厚みがあり、底部が大きく体部が短い。	53	21
14	須恵器 坏	9.2	2.0	5.8	竈焼部	完形、酸化、にぶい橙色、並	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。口縁部外反。	53	21
15	須恵器 坏	8.9	1.9	5.7	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、密	右回轉轆轤整形、横撫で、底部回轉糸切り離し。器壁に厚みがあり、底径が大きく体部が短い。	53	21
16	須恵器 坏	8.8	2.2	5.5	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、並	右回轉轆轤整形、横撫で、底部回轉糸切り離し。底部中央の器壁が薄く、体部は僅かに外反しながら立ち上がる。	53	21
17	須恵器 坏	9.0	2.4	4.5	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、密	右回轉轆轤整形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部は外反しながら立ち上がり、口唇部で肥厚する。	53	21
18	須恵器 坏	8.8	2.2	5.2	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、密	右回轉轆轤整形、横撫で、底部回轉糸切り離し。口縁部で外反し、口唇部肥厚。	53	21
19	須恵器 坏	9.3	2.4	5.2	竈焼部	ほぼ完形、酸化、にぶい黄褐色、密	右回轉轆轤整形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部は器壁が薄く、緩やかに立ち上がる。口唇部で肥厚する。	53	21
20	須恵器 坏	8.9	2.25	4.6	竈焼部	完形、酸化、にぶい黄褐色、並	右回轉轆轤整形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部は緩やかに立ち上がる。胎土は粗いが均一。焼成が良い。	53	21

Ⅲ区 3号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	羽釜	(26.3)	<7.1>			口縁部、酸化、褐色、密	紐作り後轆轤整形、内面窺撫で。口縁部は直立し、口唇部は僅かに内湾する。鏝の突出は弱く、断面三角形。	55	22

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
2	土釜	(26.0)	<4.6>		南+1.2	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り、横撫で、胴部外面に縦方向の篋削り、頸部に指頭圧痕。	55	22

IV区 1号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(9.3)	2.5	(5.0)	住居内ピット埋没土	1/4、酸化、にぶい黄橙色、並	回転轆轤成形、底部回転糸切り離し。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。	59	24
2	須恵器 坏	(10.2)	6.5	2.3	西壁際+7.8	3/4、酸化、にぶい黄橙色、並	右回転轆轤成形、底部回転糸切り離し、横撫で。体部は緩やかに立ち上がる。	59	24
3	須恵器 坏	8.7	2.3	5.0	東+6.3	完形、酸化、明黄褐色、並	左回転轆轤成形、底部回転糸切り離し。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。底部は高台状に突出する。	59	24
4	須恵器 碗	(14.2)	<4.9>		住居内土坑2埋没土	1/2、酸化、明黄褐色、並	回転轆轤成形、付高台、横撫で、碗に比べ器高が低く、口縁部は外反しない。高台の器壁は厚みがあり、端部は欠損するが「ハ」の字状に開く。足高高台碗。	59	24
5	須恵器 碗	15.0	9.6	6.4	中央+4.3	ほぼ完形、酸化、にぶい黄橙色、並	回転轆轤成形、底部回転糸切り離し、撫で。体部緩やかに立ち上がり、口縁部外反。付高台。高台は直線的で「ハ」の字状に開く。	59	24
6	土釜	(23.4)	<8.7>		南東+7.0	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り、横撫で、胴部外面篋削り。口縁部「く」の字状に外反。	59	24
7	甗	(23.4)	<16.4>		竈燃焼部埋没土	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り、横撫で、胴部外面篋削り。	59	24
8	須恵器 甕				南壁際+0.2	胴部、還元、灰色、密	外面に叩き目。胎土は均一。	59	24

IV区 2号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏		<1.1>	6.0	竈焚き口+8	底部、酸化、にぶい黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。底部のみ残存。	61	26
2	灰釉陶器 皿		<1.3>	6.2	東+10.7	底部、還元、灰白色、密	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、付高台、底部内面転用硯。虎溪山1号窯式期。	61	26
3	羽釜	(19.0)	<10.0>		中央+9.8	口縁部、酸化、にぶい橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面に縦もしくは横方向の篋削り、内面篋撫で。	61	26

IV区 3号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(13.0)	4.75	(6.6)	竈燃焼部・煙道+0.5	1/4、酸化、橙色、並	回転轆轤成形、横撫で、回転糸切り離し。口縁部は外反する。	66	28
2	土釜	(24.6)	<6.4>		埋没土	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、密	紐作り、横撫で、胴部外面に篋削り、内面に篋撫で。口縁部は短く、直立する。	66	28
3	土釜	(25.0)	<7.1>		竈煙道+1.5	口縁部、酸化、にぶい赤褐色、並	紐作り、横撫で、胴部外面篋削り、内面篋撫で。頸部の括れは目立たず、口縁部僅かに外反。	66	28
4	土釜		<5.1>	(13.0)	竈煙道+3.0	底部、酸化、褐色、並	紐作り、横撫で、胴部外面に縦方向の篋削り、内面に篋撫で。	66	28

V区 4号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 鉢		<3.6>	(8.8)	煙道+0.5	底部、酸化、にぶい黄橙色、並	回転轆轤成形、横撫で。底部の器壁は厚みがあり、胴部最大幅は中位に位置すると思われる。	73	28
2	土釜		<12.5>		煙道+4.6	胴部下位、酸化、にぶい黄橙色、密	紐作り、胴部外面に斜め方向の篋削り。	73	28

V区 6号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(8.4)	2.0	4.2	北西壁際+3.0	3/4、酸化、浅黄色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。	76	29
2	須恵器 坏	(8.6)	1.75	(6.0)	埋没土	1/3、酸化、にぶい橙色、並	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。	76	29

IV区7号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(8.2)	2.4	(5.9)	住居内土 坑1底面 密着	3/4、酸化、浅黄色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。口径に対し底径が大きく、 器高が低い。体部は緩やかに立ち上 がる。	78	31
2	須恵器 壺	(8.1)	<6.5>		埋没土	口縁部、酸化、浅黄橙色、 並	回転轆轤成形、横撫で。胴部最大幅は 中位に位置する。口縁部は外反。口唇 部で若干肥厚する。	78	31
3	灰釉陶器 碗	(17.0)	6.5	(7.2)	埋没土	1/4、酸化、灰白色、密	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。器壁薄く、体部は緩やかに 立ち上がり口唇部僅かに外反。付高台 は断面方形で、僅かに「ハ」の字状に 開く。体部中位から口縁部内外面にか けて施釉。虎溪山1号窯式期。	78	31
4	羽釜	(20.4)	<5.8>		埋没土	口縁部、酸化、にぶい橙色、 並	紐作り後回転轆轤整形、胴部内面篋撫 で。口縁部は内湾し、口唇部は平坦に 仕上げられる。鏝先端は上向きに付け られる。	78	31
5	須恵器 甕		<9.7>		東壁際 +5.8	胴部、還元、灰黄色、並	回転轆轤成形、撫で。胴部中位～下位 付近の破片。	79	31

IV区8号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(11.8)	<4.6>	(5.0)	竈燃烧部 +6.9	口縁部、酸化、浅黄橙色、 並	回転轆轤成形、横撫で、焼成甘く風化 進む。体部立ち上がりは緩やか。口縁 部で僅かに外反。	83	32
2	羽釜		<18.7>		竈燃烧部 +2.0	胴部、酸化、にぶい黄橙色、 並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半に篋 削り、内面篋撫で。上半は轆轤目が明 瞭に残る。口縁部を欠損。	83	32
3	羽釜	(23.0)	<6.6>		竈燃烧部 +1.5	胴部、酸化、赤褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面篋削り、 内面篋撫で。口縁部は内傾し、口唇部 は平坦に仕上げられる。鏝の突出は弱 く、断面三角形。	83	32
4	羽釜		<9.9>	(11.0)	竈北袖 +30.0	胴部、酸化、にぶい赤褐色、 密	紐作り後轆轤整形、胴部外面篋削り、 内面篋撫で。	83	32

IV区9号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	灰釉陶器 皿	(10.8)	1.95	5.7	東壁際 +3.1	2/3、還元、灰白色、密	段皿。右回転轆轤成形、横撫で、底部 回転糸切り離し、付高台。口縁部は外 反する。虎溪山1号窯式期。	86	33
2	羽釜	(20.8)	<20.3>		竈燃烧部 +5.9	口縁～胴部、酸化、にぶい 黄褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半に縦 もしくは斜め方向の篋削り、内面篋撫 で。胴部最大幅は中位に位置する。口 縁部は若干内傾する。鏝の突出は弱く、 断面三角形。	86	33

IV区10号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	9.5	2.7	5.6	竈燃烧部 +14.5	完形、酸化、にぶい黄橙色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、微量の煤付着。体部は緩や かに立ち上がり、口唇部肥厚。	91	37
2	須恵器 坏	9.3	2.8	5.8	南西床面 密着	完形、酸化、にぶい橙色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。体部は緩やかに立ち上がる。	91	37
3	須恵器 坏	10.2	2.6	6.4	南袖脇 +8.0	完形、酸化、橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。体部は緩やかに立ち上がり、 口縁部は肥厚する。	91	37
4	須恵器 坏	9.1	2.6	5.7	南袖脇 +7.4	ほぼ完形、酸化、橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。体部は丸みを帯びて立ち上 がる。	91	37
5	須恵器 坏	(10.1)	2.6	5.8	南東隅 +16.0	2/3、酸化、灰白色、密	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、微量の煤付着。	91	37

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
6	須恵器 坏	10.6	2.5	7.3	竈 焚 き 口 +1.5/南東 +1.8	3/4、酸化、にぶい黄橙色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。器壁に厚みがあり、底径が 大きく器高が低い。口唇部は僅かに外 反する。	91	37
7	須恵器 坏		<2.1>	7.2	中央+2.4	1/2、酸化、暗灰黄色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。器壁に厚みがある。	91	37
8	須恵器 坏	(9.5)	2.6	(5.75)	東 壁 際 +8.9	1/2、酸化、にぶい橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、煤付着。	91	37
9	須恵器 鉢	9.7	5.2	5.5	南西+1.6	ほぼ完形、酸化、にぶい黄 橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面全体に煤付着。体部は 丸みを帯びて立ち上がる。口縁部は僅 かに外反し、口唇部肥厚。	91	37
10	須恵器 鉢	10.4	5.4	5.0	西+6.1/中 央+5.0	完形、酸化、橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、部分的に還元焰焼成。体部 は緩やかに立ち上がり、口縁部は僅か に外反する。	91	37
11	須恵器 鉢	9.9	5.5	5.2	南西+1.7	完形、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面に煤付着。口縁部は直 立し、若干外反する。	91	37
12	須恵器 鉢	10.4	5.3	5.3	南+6.0	完形、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面に煤付着。口縁部は外反。 口唇部が肥厚する。	91	37
13	須恵器 鉢	10.3	5.6	5.3	竈 燃 焼 部 +15.5	完形、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面に煤付着。口縁部は外 反する。	91	37
14	須恵器 鉢	9.55	5.55	5.6	西+4.0/中 央+4.0	完形、酸化、灰白色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面煤付着。体部と口縁部 の境に最大幅。口縁部は肥厚し、若干 外反する。	91	37
15	須恵器 鉢	9.7	5.45	5.9	中央+1.7	ほぼ完形、酸化、灰黄色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面煤付着。体部緩やかに 立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	91	37
16	須恵器 坏		2.1	6.6	北 東 隅 +21.4	底部、酸化、にぶい黄橙色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面に煤付着。	91	37
17	須恵器 坏	13.0	4.1	7.0	南西+1.2	完形、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し、外面に煤付着。口縁部は僅 かに外反する。	91	37
18	須恵器 坏	13.3	4.7	7.4	西+1.5	ほぼ完形、酸化、黒褐色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。体部は緩やかに立ち上がり、 口縁部は外反する。	91	37
19	須恵器 坏	13.4	4.4	7.3	西+3.0	完形、酸化、黒色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。	91	37
20	須恵器 坏	13.3	4.2	7.5	南 東 隅 床 面密着	完形、酸化、にぶい黄褐色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。口縁部は僅かに外反する	92	37
21	須恵器 坏	13.4	5.0	8.0	南 袖 脇 +1.3	ほぼ完形、酸化、暗灰黄色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。口縁部は外反する。	92	37
22	須恵器 坏	15.0	5.55	8.4	竈 焚 き 口 +1.0	3/4、酸化、橙色、並	右回転轆轤成形、撫で、底部回転糸切 り離し、被熱により赤色化。口径大き く、底部器壁厚みがある。口縁部は外反。 口唇部肥厚。	92	37
23	須恵器 坏	(13.4)	4.9	(8.0)	竈 焚 き 口 +3.4	1/4、酸化、にぶい黄橙色、 並	内黒土器。回転轆轤成形、横撫で、底 部回転糸切り離し。口縁部外反。内面 に研磨が施される。	92	37
24	須恵器 埴	(14.4)	<5.4>		中央+5.9	1/2、酸化、浅黄橙色、並	内黒土器。回転轆轤成形、横撫で、底 部回転糸切り離し。内面に研磨が施さ れる。体部は緩やかに立ち上がり、口 唇部は外反する。高台は欠損する。	92	37
25	須恵器 埴		<2.6>	(6.2)	埋没土	底部、酸化、にぶい褐色、 並	内黒土器。回転轆轤成形、横撫で、底 部回転糸切り離し。内面に研磨が施さ れる。高台は付高台で「ハ」の字状に 開く。	92	37

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
26	須恵器 碗	(17.2)	<3.5>		埋没土	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	回転轆轤成形、横撫で。口縁部は僅かに外反する。	92	38
27	須恵器 高台付皿	(11.0)	3.8	(5.9)	埋没土	1/2、酸化、浅黄橙色、並	足高高台皿。回転轆轤成形、横撫で、付高台。底部器壁は厚みがあり、体部は緩やかに開く。高台は直線的で「ハ」の字状に開く。	92	38
28	灰釉陶器 碗	14.8	7.5	(7.0)	北 壁 際 +20.8/北 東+24.8	3/4、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、付高台。体部は緩やかに立ち上がる。高台内面を除き、ほぼ全面に施釉される。虎溪山1号窯式期。	92	38
29	灰釉陶器 碗	15.5	6.4	7.4	中央+0.8	完形、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し、付高台。やや器高が低い。高台は直立して付けられ、断面三角形。高台を除くほぼ全面に施釉。高台内面は擦痕と墨の付着が見られ、硯として転用されたと思われる。虎溪山1号窯式期。	92	38
30	土釜	22.9	27.0	11.0	竈 燃 焼 部 +8.0 ~ 28.5	3/4、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り、胴部外面上位～中位は縦、下位には横方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は「く」の字状に外反する。	92	38
31	土釜	22.8	31.0	(10.0)	南東+1.6	2/3、酸化、橙色、並	紐作り、胴部外面上半に縦、下半に横方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は中位に位置する。口縁部は「く」の字状に外反する。	94	38
32	土釜	(21.6)	<8.3>		南 東 隅 +11.7	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り、口縁部直下に斜め、横方向の篋削り、内面篋撫で。口縁部は「く」の字状に外反する。	93	38
33	土釜	(16.8)	<13.6>		竈 燃 焼 部 +21.2	1/5、酸化、にぶい橙色、並	紐作り、胴部外面上半に縦、下半に横方向の篋削り、内面篋撫で。口縁部は短く、若干内湾する。	93	38
34	羽釜	(21.9)	<15.6>		竈 袖 使 用 面密着	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面に縦方向の篋削り。胴部最大幅は中位に位置し、口縁部は若干内湾する。	93	38
35	甌	(18.8)	<8.5>		竈 袖 +24.3	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り、胴部外面に斜め方向の篋削り、内面篋撫で。口縁部は「く」の字状に大きく外反する。	93	38
36	甌	(27.0)	<13.0>			口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り後轆轤整形、内面篋撫で。口縁部は羽釜よりやや高く、直立する。	93	38
37	羽釜	(20.7)	<19.0>		竈 燃 焼 部 +10.5	1/4、酸化、黒褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面に縦もしくは斜め方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は上位に位置し、口縁部は内湾する。	94	38
38	羽釜	(17.6)	15.6		竈 燃 焼 部 +5.5	1/2、酸化、黒褐色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面に縦方向の篋削り、内面篋撫で。小型の羽釜で半球形に近い。口縁部は大きく内傾する。鏝の突出は弱く、先端は上向きに付けられる。	93	38

IV区11号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(9.6)	2.1	(6.6)	埋没土	底部、酸化、浅黄橙、粗	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。	96	39
2	須恵器 坏	(10.0)	2.3	(6.0)	南東+23.7	1/2、酸化、にぶい橙色、並	回転轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。	96	39
3	土釜		<6.1>	10.8	北 西 隅 +4.0	底部、酸化、にぶい橙、並	紐作り、胴部外面篋削り。	96	39
4	土釜	(25.0)	<7.8>		竈 煙 道 +17.5	口縁部、酸化、橙、並	紐作り、胴部外面に縦方向の篋削り、内面に篋撫で。口縁部は若干外反する。	96	39
5	甌	(25.7)	<6.5>		竈 焚 き 口 使 用 面 密 着	口縁部、酸化、橙、密	紐作り後轆轤整形、胴部内面篋撫で。口縁部は長く、直立する。鏝に2個並んで穿孔が見られる。	97	39

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
6	甑		<4.8>	(26.9)	東+9.2	裾部	紐作り後轆轤整形、撫で。裾は大きく外反し、端部外面には断面三角形の小突帯が巡る。	97	39

IV区12号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	9.5	2.8	5.1	埋没土	2/3、酸化、にぶい橙色、並	左回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は緩やかに立ち上がる。	98	40
2	須恵器 坏	8.7	2.3	5.3	北東+2.6	完形、酸化、灰白色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。器高が低く、底径が大きい。	98	40
3	灰釉陶器 皿	(10.8)	2.3	(6.0)	中央+2.9	1/2、還元、灰白色、密	回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し、付高台。口縁部は外反する。高台は短い。虎溪山1号窯式期。	98	40
4	須恵器 坏		<1.6>	7.5	北西+10.0	底部、酸化、にぶい黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。	98	40

IV区13号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	8.9	2.7	6.3	西壁際 +1.4	完形、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。底径が大きく、口縁部は僅かに外反する。小型坏。	101	41
2	須恵器 坏	9.3	2.8	6.0	埋没土	完形、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は直線的に立ち上がる。小型坏。	101	41
3	須恵器 坏	10.6	2.5	6.2	北東床面 密着	完形、酸化、浅黄橙色、粗	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。小型坏。	101	41
4	須恵器 坏	9.6	2.9	5.6	東壁際床 面密着	ほぼ完形、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。全体に歪み。小型坏。	102	41
5	須恵器 坏	(9.6)	2.6	(5.8)	埋没土	1/2、酸化、にぶい黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は直線的に立ち上がる。小型坏。	102	41
6	須恵器 坏	(9.2)	2.6	(6.2)	南西隅床 面密着	2/3、酸化、橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は若干肥厚する。小型坏。	102	41
7	須恵器 坏	(9.4)	2.4	(6.2)	埋没土	1/4、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。器高が低く、体部は丸みを帯びて立ち上がる。小型坏。	102	41
8	須恵器 坏	(9.0)	2.4	(6.0)	埋没土	1/4、酸化、浅黄橙色、並	回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は直線的に立ち上がる。小型坏。	102	41
9	須恵器 坏	(9.9)	2.9	(7.0)	東壁際 +31.0	1/4、酸化、にぶい黄橙色、並	回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。体部は緩やかに立ち上がる。小型坏。	102	41
10	須恵器 坏	(11.5)	3.0	6.1	住居内土 坑3+18.0	3/4、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。やや器高低い。	102	41
11	須恵器 坏	13.3	4.6	7.0	東壁際 +2.5	ほぼ完形、酸化、にぶい黄 橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。底部器壁厚い。口縁部僅かに外反する。	102	41
12	須恵器 坏	13.6	4.2	7.5	住居内土 坑3+24.5	ほぼ完形、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。口縁部外反。	102	41
13	須恵器 坏	12.5	4.7	7.9	北西隅床 面密着	ほぼ完形、酸化、浅黄橙色、並	右回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し。口縁部外反。	102	41
14	須恵器 碗	(14.0)	4.6		南東+14.0	口縁部、酸化、橙色、並	回轆轤成形、横撫で。体部厚みがある。緩やかに立ち上がる。	102	41
15	灰釉陶器 碗	(11.3)	3.8	4.8	南西+13.0	3/4、還元、灰白色、密	回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し、付高台。やや小振りな碗で、底部内外面を除き、ほぼ全面に施釉。高台は僅かに「ハ」の字状に開く。虎溪山1号窯式期。	102	41
16	灰釉陶器 皿	(12.8)	2.3	(7.0)	住居内土 坑3+25.5	1/2、還元、灰白色、密	段皿。回轆轤成形、横撫で、底部回転系切り離し、付高台。口縁部外反。高台内面を除きほぼ全面に施釉。虎溪山1号窯式期。	102	41

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
17	羽釜	(24.0)	<4.1>		中央+20.0	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、撫で。口縁部は短く、若干内湾する。鏝の突出は弱い。	102	41
18	甌	(21.9)	<5.3>		中央+2.5	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り後轆轤整形、撫で。口縁部直立し、僅かに外反する。鏝の突出は弱く、断面三角形。	103	41

IV区14号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 埴	(13.3)	5.2	(7.1)	南東+1.3	1/2、酸化、橙色、並	右回轆轤成形、横撫で。底部回転糸切り離し、付高台。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。高台は短く、僅かに「ハ」字状に開く。	106	42
2	灰釉陶器 埴	(17.0)	<5.0>		埋没土	口縁部、還元、灰白色、密	回轆轤成形、横撫で。体部は緩やかに立ち上がる。体部～口縁部の内外に施釉。虎溪山1号窯式期。	106	42
3	灰釉陶器 埴		<2.3>	(8.0)	埋没土	底部、還元、灰白色、密	回轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、付高台。虎溪山1号窯式期。	106	42
4	羽釜	(22.2)	<23.7>		南東+1.6	1/3、酸化、にぶい橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半に斜め方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は内傾し、鏝の突出はやや弱い。	106	42
5	羽釜	(18.5)	<20.0>		煙道使用 面密着	胴部、酸化、にぶい橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半に縦方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は内傾し、口唇部は僅かに外反する。	106	42

V区2号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(11.4)	4.6	6.2	東壁際 +1.5	底部、酸化、浅黄橙色、並	内黒土器。右回轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。内面黒色処理後、研磨。口縁部は外反する。	110	44
2	羽釜	(22.4)	<12.1>		竈燃焼部 使用面密着	口縁～胴部、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面下半に縦方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は中位に位置する。口縁部は内傾する。	110	44
3	羽釜	(23.9)	<10.1>		竈燃焼部 +2.5	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面篋削り、内面篋撫で。口縁部は長く、大きく内傾する。鏝先端は上向きに付けられる。	110	44

V区3号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(10.8)	2.8	(6.0)	北東床面 密着	1/4、酸化、灰白色、並	左回轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、内面が高熱によってガラス化、坍塌として使用か。	113	45
2	須恵器 埴	(14.8)	4.1		南西床面 密着	口縁部、酸化、にぶい橙色、並	回轆轤成形、横撫で。口縁部は外反する。	113	45
3	灰釉陶器 長頸壺	(12.6)	<8.8>		南+5.5	頸部、還元、灰白色、並	回轆轤成形、横撫で。頸部緩やかに外反。内外面施釉。虎溪山1号窯式期。	113	45
4	土釜	(25.6)	<4.3>		東+6.5	口縁部、酸化、にぶい橙色、並	紐作り、胴部外面篋削り、内面篋撫で。口縁部「く」の字状に外反。	113	45
5	須恵器 甕		<8.9>	(13.6)	竈焚き口 +0.4	胴部下位、酸化、橙色、並	紐作り後回轆轤整形、胴部外面下位篋削り、撫で。体部は直線的に立ち上がる。底部に高台貼付、高台は「ハ」の字状に開く。	113	45

V区4号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	羽釜	(18.2)	<23.3>		竈燃焼部 密着	口縁～胴部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り後回轆轤整形、胴部外面下半斜め方向篋削り、撫で。胴部最大幅は上位。口縁部は内傾し、口唇部で強く外反する。	116	46

遺物観察表

V区5号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	9.1	2.9	5.6	南+3.6	ほぼ完形、酸化、にぶい黄 橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。	120	47
2	須恵器 碗		<3.2>	(6.8)	中央+11.5	1/2、酸化、橙色、並	内黒土器。回転轆轤成形、横撫で、内 面黒色処理、研磨。高台は外反しなが ら「ハ」の字状に開く。	120	47
3	須恵器 碗		<3.2>	7.8	南西+0.5	底部、酸化、橙色、並	回転轆轤成形、横撫で。高台は「ハ」の字 状に開く。足高高台碗。	120	47
4	須恵器 碗		<2.3>	6.0	住居内土 坑埋没土	底部～高台、酸化、浅黄色、 並	右回転轆轤整形、横撫で、底部回転糸 切り離し、付高台。高台は「ハ」の字 状に開き、僅かに外反。	120	47
6	羽釜	(20.0)	<7.7>		竈 燃 焼 部 +5.2	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面斜め方向 筥削り。口縁部内傾。	120	47
7	羽釜	(22.6)	<18.9>		竈 焚 き 口 +4.1	口縁部、酸化、にぶい黄褐色、 並	紐作り後轆轤整形、胴部外面に斜め方 向の筥削り、内面筥撫で。胴部最大幅 は上位。口縁部は直線的に立ち上がり、 内傾する。	120	47
8	羽釜	(23.4)	<9.3>		中央+8.6	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り後轆轤整形、胴部外面上位に横 方向の筥削り、内面筥撫で。胴部最大 幅は上位に位置、口縁部は長く、内傾 する。	121	47
9	羽釜	(24.0)	<18.8>		南 壁 際 +11.6	口縁部、酸化、にぶい橙色、 並	紐作り後轆轤整形、胴部外面に縦方向 の筥削り、内面筥撫で。胴部最大幅は 上位に位置する。口縁部は内湾気味に 直立する。	121	47
10	土釜	(25.0)	<13.3>		竈 燃 焼 部 +2.5	口縁部、酸化、にぶい橙色、 並	紐作り、胴部外面に縦方向の筥削り、 内面に筥撫で。胴部最大幅は中位に位 置する。口縁部は「く」の字状に外反 する。	121	47

V区6号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	11.6	4.1	5.2	竈 燃 焼 部 使用面密 着	完形、酸化、橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で。底部回転糸 切り離し後、筥調整で糸切り痕を消す。 体部は緩やかに立ち上がる。胎土は均 一。	123	48
2	須恵器 坏	11.8	4.2	5.6	南東+19.0	2/3、酸化、にぶい橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で。底部回転糸 切り離し。口縁部外反。	123	48
3	須恵器 坏	(12.2)	3.4	4.7	南東+20.0	1/4、酸化、にぶい黄橙色、 並	回転轆轤成形、横撫で。器高が低い。 体部やや直線的に立ち上がる。	123	48
4	羽釜	19.0	26.8	(7.9)	竈 燃 焼 部 使用面密 着	1/2、酸化、灰白色、並	紐作り後回転轆轤整形、胴部下半に縦 方向の筥削り。胴部最大幅は上位に位 置する。口縁部は内傾し、緩やかに外 反する。	123	48
5	羽釜	(19.0)	<20.7>		竈 脇 床 面 密着	1/4、酸化、灰白色、並	紐作り後回転轆轤整形、胴部下半縦方 向筥削り。胴部最大幅上位に、口縁部 は内傾し、緩やかに外反。口唇部肥厚。	123	48

V区7号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(10.2)	2.6	4.8	埋没土	2/3、酸化、にぶい黄橙色、 並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。	125	48
2	須恵器 坏		<2.6>	(8.0)	住居内土 坑埋没土	底部、酸化、にぶい黄橙色、 並	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切 り離し。	125	48
3	須恵器 坏	(9.6)	2.1	(6.2)	埋没土	1/5、酸化、にぶい橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸 切り離し。器壁に厚みがあり、底径が 大きく器高が低い。	125	48
4	土釜		<8.65>	(18.0)	南 壁 際 +3.0	胴部下位、酸化、浅黄橙色、 並	紐作り、胴部外面筥削り。	125	48

V区8号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	羽釜	(23.7)	<16.6>		竈 焼き口 使用面密着	口縁部、酸化、橙色、密	紐作り後轆轤整形、胴部外面に横もしくは縦方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は上位。口縁部は短く内傾。	127	49
2	土釜	28.0	28.5	7.5	竈 焼き口 使用面密着	2/3、酸化、橙色、密	紐作り、胴部外面に縦方向の篋削り、内面に篋撫で。胴部最大幅は中位。口縁部は「く」の字状に外反。	127	49

V区10号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(11.0)	<3.3>		北西+6.0	口縁部、酸化、にぶい橙色、並	回転轆轤成形、横撫で。口縁部は外反する。	131	51
2	羽釜	(20.4)	<5.8>		中央+3.3	口縁部、酸化、にぶい黄橙色、並	紐作り後回転轆轤整形、撫で。口縁部は外反しながら立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げられる。	131	51
3	須恵器 甕				北床面密着	胴部、還元、灰色、密	外面叩き締め、内面青海波状当て具痕。	132	51

V区11号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 鉢	9.4	7.5	8.1	北東+3.0	ほぼ完形、酸化、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。体部最大幅は中位に位置する。口縁部は外反する。	134	51
2	土釜	(26.0)	<13.9>		竈 燃焼部 +1.5	口縁～胴部、酸化、橙色、並	紐作り、胴部外面上位に斜め、中位から縦方向の篋削り、内面篋撫で。口縁部は緩やかに外反する。	134	51
3	須恵器 坏	9.5	3.8	6.1	西 壁 際 +1.5	2/3、酸化、灰白色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。小型坏だが器高が高く、体部は斜め上方へと立ち上がる。口唇部僅かに外反。	135	51
4	甌	(25.0)	<9.0>		中央+14.5	口縁部、酸化、にぶい橙色、並	紐作り後回転轆轤整形、胴部外面篋削り、内面に篋撫で。胴部上位は若干外反しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立。	135	51

V区12号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(8.4)	2.1	4.5	北床面密着	1/2、酸化、浅黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。器壁薄く、焼成悪い。口縁部外反する。口縁部にタール状の付着物、灯明皿か。	138	52
2	須恵器 坏	(12.3)	4.35	5.0	北壁際床面密着	口縁部、酸化、浅黄橙色、並	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。緩やかに外反しながら立ち上がる。	138	52
3	須恵器 坏	(8.2)	2.55	5.0	東壁際床面密着	底部、酸化、にぶい黄橙色、並	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。底部がやや大きい。底部器壁に厚みがあり、体部は直線的に立ち上がる。	138	52
4	土釜	(22.6)	<12.0>		A竈燃焼部 +2.2	口縁部、酸化、灰褐色、並	紐作り、胴部外面に縦方向の篋削り、内面に篋撫で。胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は短く直立し、口唇部で外反する。	138	52
5	土釜	(22.2)	<13.6>		B竈燃焼部 +8.8	口縁部、酸化、明赤褐色、並	紐作り、胴部外面に斜め方向の篋削り、内面篋撫で。胴部最大幅は上位。口縁部で肥厚し、緩やかに「く」の字状に外反する。	138	52
6	土釜	(23.6)	<5.5>		A竈燃焼部 +11.2	口縁部、酸化、橙色、並	紐作り、胴部外面縦方向の篋削り、内面篋撫で。口縁部は外反。	138	52

V区13号住居

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(8.4)	<1.7>		埋没土	口縁部、酸化、にぶい橙色、並	回転轆轤成形、横撫で。口縁部は外反する。	140	53

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
2	須恵器 埴		<2.5>		竈使用面 密着	底部、酸化、にぶい橙色、 並	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。付高台。	140	53
3	灰釉陶器 埴		<2.7>	(8.2)	埋没土	底部、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。高台は「ハ」の字状に開く。虎溪山1号窯式期。	140	53

II区54号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	羽釜	(22.7)	<19.7>		埋没土	口縁部～胴部、酸化、にぶい黄橙色、密	紐作り後轆轤整形、胴部外面斜め方向の筥削り、内面筥撫で。胴部最大幅は上位。口縁部は直立するが、僅かに内湾する。	147	58

V区31号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	9.2	2.2	6.1	埋没土	1/2、酸化、にぶい黄橙色、 並	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。底部大きく、器高低い。	158	65
2	須恵器 坏	(14.0)	<2.4>		埋没土	口縁部、酸化、浅黄色、並	回転轆轤成形、横撫で。口縁部は外反する。	158	65

V区45号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 埴		<3.8>		埋没土	底部、酸化、浅黄橙色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、付高台。高台は「ハ」字状に開く。	159	66

V区46号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	灰釉陶器 長頸壺		<2.2>	(16.4)	埋没土	底部、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、付高台。虎溪山1号窯式期。	159	66

V区52号土坑

No.	種別	口径	器高	底径	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	灰釉陶器 埴		<3.1>	6.8	埋没土	底部、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、付高台。高台は長めで若干開きながら直立する。虎溪山1号窯式期。	159	67

V区60号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	灰釉陶器 埴		<2.3>	(8.0)	埋没土	1/4、還元、灰白色、密	右回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し、付高台。高台は短く、丸みを帯びる。虎溪山1号窯式期。	160	67
2	灰釉陶器 長頸壺		<19.1>		埋没土	1/3、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で。胎土が均一で丁寧なつくり。頸部はほぼ直立し、口縁部で外反する。肩部から下と口唇部は欠損する。外面と、頸部内面まで施釉される。虎溪山1号窯式期。	160	67
3	灰釉陶器 長頸壺		<15.1>	(16.9)	埋没土	1/3、還元、明褐色、密	回転轆轤成形、横撫で、底部回転糸切り離し。底部は平底で断面方向の高台が付く。胴部は斜め上方に立ち上がり、外面全体に薄く施釉される。施釉にはむらが目立ち、2と特徴が共通することから同一個体の可能性がある。虎溪山1号窯式期。	160	67
4	灰釉陶器 長頸壺		<25.6>		埋没土	1/2、還元、灰白色、密	回転轆轤成形、横撫で。胴部最大幅は中位に位置する。肩部丸みを持つ。口縁と底欠損。頸部から胴部中位まで暗緑色がかかった釉が掛かる。虎溪山1号窯式期。	160	67

V区61号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	軟質陶器 甗		<8.2>		埋没土	肩部	紐作り後轆轤整形。やや撫で肩で焼成がやや悪い。	161	67

V区66号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器坏				埋没土	底部、酸化、橙色、並	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し、底部外面に墨書、字体は判読不能。	161	68

V区67号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	陶器壺	(18.8)	<3.0>		埋没土	口縁部、良好、灰白色、並	回轉轆轤成形、撫で。灰釉。口縁部は強く外反する。	161	68

V区83号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	灰釉陶器皿	(11.6)	2.0	6.5	埋没土	1/3、酸化、浅黄橙色、密	回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し、付高台。体部はやや直線的に開く。高台を除く内外面に施釉。虎溪山1号窯式期。	162	69

V区1号溝

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
3	須恵器碗		3.3	(6.6)	埋没土	底部、酸化、褐灰色、並	回轉轆轤成形、横撫で、付高台。高台は直線的で「ハ」の字状に開く。	168	72
4	羽釜	(11.9)	<8.7>		埋没土	口縁部、酸化、にぶい褐色、並	紐作り後轆轤整形。胴部最大幅は上位に位置し、口縁部は内傾する。鏝の突出は弱く、断面三角形。	168	72

V区3号溝

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器碗		<2.1>	(8.6)	埋没土	底部、酸化、にぶい橙色、並	回轉轆轤成形、横撫で、付高台。高台は外反しながら「ハ」の字に開く。	168	72

V区1号井戸

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	土師質土器皿	14.9	3.0	8.5	埋没土	3/4、酸化、灰黄色、並	左回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。体部器壁が薄く、僅かに外反する。内面には撫での痕が残る。胎土は均一。	170	73
2	常滑甕				埋没土	口縁部、良好、灰白色、密	折り返し口縁。胎土は堅緻。1～7までは同一個体の可能性が高い。	170	73
3	常滑甕				埋没土	胴部、良好、灰赤色、密	紐作り。撫で。	170	73
4	常滑甕				埋没土	胴部、良好、灰褐色、密	紐作り。撫で。	170	73
5	常滑甕				埋没土	肩部、良好、灰赤色、密	紐作り。撫で。	170	73
6	常滑甕				埋没土	胴部、良好、灰赤色、密	紐作り。撫で。	171	73
7	常滑甕				埋没土	肩部、良好、灰オリブ色、密	紐作り。撫で。	171	73
8	軟質土器鉢	(23.6)	<6.3>		埋没土	口縁部、並、灰黄褐色、並	紐作り。撫で。素焼きで焼成はやや甘い。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。	171	73

遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器坏	(9.5)	2.0	(6.0)	1/2、酸化、橙色、並	回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。	172	74
2	灰釉陶器碗		<2.6>	(7.0)	底部、還元、灰白色、密	回轉轆轤成形、回轉糸切り離し、付高台。虎溪山1号窯式期。	172	74
3	須恵器坏	9.0	2.6	4.2	ほぼ完形、酸化、黄橙色、並	回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し、口縁部に煤付着。	172	74
4	須恵器坏		<1.9>	6.6	底部、酸化、橙色、並	右回轉轆轤成形、横撫で、底部回轉糸切り離し。	172	74
5	須恵器碗	(14.6)	<3.9>		口縁部1/3、酸化、にぶい褐色、並	回轉轆轤成形、横撫で。	172	74
6	土釜		<8.1>	(10.5)	胴部～底部、酸化、にぶい橙色、並	紐作り後、胴部外面篋削り。	172	74

遺物観察表

3 万蔵寺廻り遺跡出土古代・中世金属製品観察表

II区7号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
3	塊形 鍛冶滓	4.9	<4.4>	2.4	70.0、2/3	竈前ピット、埋没土	側面が破面となる。下面には木炭痕。	28	74

II区8号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
3	紡錘車	17.3	0.65		12.1、紡茎	北東+1.8	鍛造品。紡輪欠。断面は円形。	33	15
4	鎌	13.4	0.4～3.2	0.6	14.8、完形	住居内土坑+3.0	鉄製、鍛造品。鎌身部は鐮矢形。	33	15

II区9号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
4	刀子	<3.2>	2.0	0.5	4.6、切先破片	埋没土	鍛造品。	39	17
5	塊形 鍛冶滓	7.5	4.5	2.3	98.0、ほぼ完形	東+1.4	扁平。ほぼ完形。上面には粘土質の溶解物が付着。	39	74

III区1号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
6	釘	<7.6>	0.5		3.3、ほぼ完形	竈焚き口密着	鍛造品。「コ」の字状に屈曲。頭部と尖端は欠損。	48	19
7	釘	<2.5>	0.5		0.8、1/3	竈埋没土	鍛造品。頭部は折損。	48	19

IV区1号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
9	釘	<3.5>	0.6		1.8、1/2	北壁際+0.8	鍛造品。頭部は屈曲後欠損。	59	24

IV区2号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
4	鎌	<11.9>	2.1	0.6	13.9、ほぼ完形	南東密着	鉄製、鍛造品。広根、両平の鎌身部。尖端を欠く。	61	26

IV区7号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
6	釘	<3.5>	0.6		1.1、1/2	埋没土	鍛造品。頭部は屈曲後に欠損。	79	31
7	釘	<5.9>	0.7		3/4	埋没土	鍛造品。頭部欠損。	79	31
8	釘	<2.8>	0.6		1.0、1/3	埋没土	鍛造品。	79	31

IV区10号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
39	刀子	<11.3>	2.4	0.4	20.3、刃部	中央+4.5	大振りの刀子で切先を欠損。40と同一個体か。	93	38
40	刀子	<8.7>	0.95	0.6	19.6、中茎	中央	中茎中央に目釘用の孔。ほぼ全面と思われる木質が付着。	93	38

IV区11号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
8	釘	<3.2>	0.4		1.4、破片	埋没土	鍛造品。	97	39

IV区13号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
19	紡錘車	<6.5>	0.4		1.7、紡茎破片	南東埋没土	鍛造品。紡茎端部の破片。端は鉤状に屈曲。断面はほぼ円形。	103	41
20	塊形 鍛冶滓	3.8	<3.8>	3.1	29.0、ほぼ完形	埋没土	やや不整形。上面が平坦で下面が皿状。上下面ともに細かい木炭痕が残る。	103	74
21	鉄滓	4.4	<3.3>	2.5	56.0、1/2	埋没土	上下面がともに平坦な滓。滓質は密で断面には気泡がある。上下面ともに薄く含鉄部がある。破面の割れ口は鋭い。	103	74
22	釘	<3.0>	0.6		1.0、破片	埋没土	鍛造品。	103	41
23	釘	<4.1>	0.8		3.1、1/2	埋没土	鍛造品。若干湾曲する。	103	41

IV区14号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
6	塊形 鍛冶滓	6.9	<5.3>	3.4	84.0、2/3	東壁際+2.8	扁平で、上下面ともに細かい木炭痕が見られる。下面に滓付着。二段の塊形に近い形状。	106	74
7	塊形 鍛冶滓	3.7	<2.6>	1.9	37.0、1/2	埋没土	上面が平坦で下面には小型の木炭痕。粘土質溶解物が主体を占め、滓質密。	106	74

遺物観察表

V区3号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
6	針状鉄製品	4.5	0.15		1.2、ほぼ完形	住居内土坑、埋没土	針状製品6本が錆着。うち4本には頭部に穿孔。	113	45
7	釘	<3.8>	0.4		0.8、破片	埋没土	鍛造品。	113	45
8	紡錘車	<4.2>	0.6		2.3、紡錘破片	掘り方埋没土	鍛造品。断面円形。	113	45

V区5号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
5	紡錘車	<7.2>	0.7		4.4、紡錘1/2	東+5.0	断面形は円形。鍛造品。	120	47

V区7号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
5	刀子	11.7	1.7	0.7	45.5、ほぼ完形	南西+1.9	鍛造品。刀身で二つに折れ、重なった状態で錆着する。	125	48
6	刀子	<6.1>	1.8	0.55	7.9、1/4	南西壁際+1.7	茎と刃部の大半を欠損。	125	48

V区8号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
3	釘	7.5	1.0	0.5	6.5、ほぼ完形	北東壁際+2.5	鍛造品。丁寧なつくりで頭部はほぼ直角に屈曲する。先端欠損。	127	49

V区65号土坑

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
1	碗形鍛冶滓	6.2	4.3	2.2	79.0、ほぼ完形	埋没土	上面が平坦で下面が皿状。黒色ガラス化した粘土質溶解物主体。	161	74

V区67号土坑

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
2	碗形鍛冶滓	4.8	4.6	2.0	43.0、ほぼ完形	埋没土	やや扁平な小型の碗形鍛冶滓。側面に小さな破面。	161	74
3	碗形鍛冶滓	4.8	<3.3>	2.2	38.0、ほぼ完形	埋没土	やや扁平な小型の碗形鍛冶滓。下面は凹凸目立つ。	161	74

V区69号土坑

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
1	釘	<3.7>	0.7	0.6	3.9、1/2	埋没土	鍛造品。頭部～中央の破片。	161	68

V区1号溝

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
1	刀子	<11.5>	1.4	0.3	10.7、1/2	埋没土	中茎から刃部1/3残存。刃は摩耗顕著。茎端部に木質が付着。	168	72
2	鋸	<7.8>	2.15	0.5	11.2、破片	埋没土	残存部の一端に穿孔が見られ、鋸の一部が錆着している。	168	72

遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
7	鍬	<5.5>	1.9	0.5	6.5、2/3	埋土	鉄製。突端と茎を欠損。	172	74

4 万蔵寺廻り遺跡出土 古代石製品観察表

IV区11号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
7	砥石	10.9	4.5	2.6	177.0、1/2		ほぼ全面に磨り痕。埋没土中。	97	39

V区3号住居

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	出土位置	特徴	図	PL
9	砥石	35.2	22.7	10.4	9.4、完形		粗粒輝石安山岩の扁平な自然石を利用。裏面中央と右側面に磨面。裏面に見られる磨面周辺には、敲打痕と思われる細かな傷がある。右側面の磨面を中心に錆付着。磨面の擦痕に入り込むように付着するものも見られ、金属製品を研ぐ際に出た金属粒子が付着した可能性がある。出土地点は南西部+2.5cm。住居内を西壁に平行して走る溝端部に当たり、砥石下には住居内土坑がある。	114	45

遺物観察表

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
10	砥石	18.3	15.0	12.7	3.7、不明	南東壁際（竈前）の床面に密着して出土。粗粒輝石安山岩。本来は柱状の自然石と思われるが、全側面と上面の一部を磨面に用いる。側面で面積の大きい磨面7面、それによって生じた角を利用した狭い磨面4面。磨面以外に正面、裏面、左側面には線状の傷痕が20箇所認められる。金属製品の刃によって付けられたと思われる。	114	45

5 万蔵寺廻り遺跡出土古代木製品観察表

IV区10号住居

No.	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種、残存	出土位置	特徴	図	PL
41	糸巻き				軸樹種不明、ほぼ完形	西床面密着	管状木質と角柱状木質を軸として糸状の繊維を束ね、巻き付けたもの。軸、糸状繊維ともに全面炭化。	94	38
42	棒状木製品	12.0	6.2	5.0	不明、一端部残存	北西+4.3	全面炭化しており、断面は扁円形。端部は丸く加工される。	93	-

6 万蔵寺廻り遺跡出土古代・中世古銭観察表

IV区2号住居

No.	銭名	初鑄	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土位置	特徴	図	PL
5	天聖元寶	1023、北宋	2.5	0.1	2.4	住居内土坑2	出土した土坑は2号住居を切る後世のものと思われる。篆書。	61	26

IV区9号土坑

No.	銭名	初鑄	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土位置	特徴	図	PL
1	元豊通寶	1078、北宋	2.4	0.1	2.4	埋没土	銭名は篆書。状態は比較的良好。	153	60

I区1号溝

No.	銭名	初鑄	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土位置	特徴	図	PL
1	開元通寶	621、唐	2.5	0.2	2.8	埋没土	背面上位に月文。方孔は鑄造後に傷つき、八角形もしくは円形に近い。	166	71

V区1号井戸

No.	銭名	初鑄	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土位置	特徴	図	PL
9	元豊通寶	1078、北宋	2.5	0.1	2.8	埋没土		171	73
10	洪武通寶	1368、明	2.3	0.1	2.2	埋没土		171	73
11	元豊通寶	1078、北宋	2.5	0.1	1.9	埋没土		171	73
12	貞元重寶	758、唐	2.4	0.11	2.6	埋没土	布状の繊維が付着。銭名は篆書。9～14までは2号人骨に伴う六道銭として埋納された可能性が高い。	171	73
13	元豊通寶	1078、北宋	2.5	0.1	2.1	埋没土		171	73
14	紹聖元寶	1094、北宋	2.4	0.1	3.0	埋没土		171	74
15	元豊通寶	1078、北宋	2.5	0.1	2.9	埋没土	1号人骨付近で出土。銭名は篆書。	171	74
16	景祐元寶	1034、北宋	2.4	0.1	2.5	埋没土	2号人骨付近で出土。銭名は真書。	171	74

遺構外

No.	銭名	初鑄	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土位置	特徴	図	PL
8	永樂通寶	1408、明	2.5	0.11	1.8		やや外径が大きい。	172	74

7 十二廻り遺跡出土古代・中世土器・陶器観察表

I区1号土坑

No.	種別	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	須恵器 坏	(7.4)	1.7	<4.6>	埋没土	2/3、酸化、にぶい橙色、並み	左回転軸輪整形、底部回転糸切り離し。器高が低く、底部器壁厚みを持つ。小型坏。	173	75

I区2号井戸

No.	種別	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土位置	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	陶器鉢		<11.1>		埋没土	胴部、良好、浅黄色、密	底部に近い位置の破片。斜め上方へ直線的に立ち上がる。下位でやや肥厚。	180	77
2	陶器鉢		<8.3>		埋没土	口縁部、良好、灰赤色、密	口縁部は僅かに外反する。	180	77

8 十二廻り遺跡出土古代・中世古銭観察表

I区1号土坑

No.	銭名	初铸	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	特徴	図	PL
2	嘉祐元寶	1056、北宋	2.5	0.1	3.0	埋没土	3と銹着した状態で出土。	173	75
3	不明		2.5	0.1	2.5	埋没土	2と銹着した状態で出土。銭名不明。	173	75

9 阿久津遺跡出土近世陶磁器観察表

遺構外

No.	種別	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	肥前磁器碗	10.2	5.4	4.3	1/2、良好、明オリーブ灰色、密	雪輪梅樹文。高台内不明銘。波佐見系。見込み使用による擦れ顕著。18世紀中頃～後。	322	98
2	瀬戸・美濃陶器碗		<1.8>	(5.4)	底部、並、灰オリーブ色、並	内面から高台内の一部まで鉛釉。体部人為的な打ち欠きにより円形に再加工か。江戸時代。	322	98
3	製作地不詳陶器練鉢		<3.8>	(20.5)	底部、良好、灰白色、密	内面から高台脇灰釉。見込み団子状目跡1箇所。近現代か。	322	98
4	龍泉窯系青磁皿		<1.3>	(5.2)	底部、良好、オリーブ灰色、並	見込み印花花卉文。小さい突帯による界線。内面から高台内面、高台内中央青磁釉。見込み使用による擦れ顕著。15世紀か。	322	98
5	瀬戸・美濃陶器碗		<2.9>	(5.4)	底部、並、褐色、並	内面から高台外面鉛釉。江戸時代。小型の片口鉢の可能性もある。	322	98
6	肥前磁器碗		<2.7>	4.0	底部、良好、明オリーブ灰色、密	高台内「大明」崩れ銘か。波佐見系。18世紀後半。	322	98
7	瀬戸陶器搗鉢				破片、並、にぶい赤褐色、粗	錆釉。江戸時代。	322	98
8	丹波陶器搗鉢				破片、良好、にぶい赤褐色、密	鉄泥塗付か。外面下位指頭圧痕。江戸時代。	322	98
9	瓦				破片、並、にぶい黄褐色、並	厚さ1.6cm、表面に布目痕。古代。	322	98
10	瀬戸陶器搗鉢				破片、並、暗赤褐色、粗	錆釉。江戸時代。	322	98
15	瀬戸陶器搗鉢	(34.0)	<4.4>		口縁部、良好、にぶい赤褐色、並	錆釉。口縁部内面下位段差をなす。口縁部肥厚。19世紀前半。	323	98
17	瀬戸・美濃陶器灯火受皿	7.1	1.3	6.6	完形、良好、にぶい赤褐色、並	錆釉を施し、外面を拭う。器高低く小型。受け部の切り込み1箇所。外面、同種受皿の重ね焼き痕。18世紀中頃以降。	324	98
21	在地系土器火鉢	(15.8)	<8.3>		口縁部、良好、にぶい黄褐色、並	体部ほぼ垂直に立ち上がり、口唇部ほぼ直角に折り曲げる。口縁部焼成前の穿孔2箇所残存。江戸時代以降か。	324	98
22	肥前陶器碗	(11.2)	7.5	(5.0)	1/2、良好、オリーブ灰色、密	陶胎染付。貫入入る。染付け不鮮明。18世紀前半。	324	98
23	肥前陶器碗	11.4	8.0	4.8	1/2、良好、オリーブ灰色、密	陶胎染付。貫入入る。東屋山水文。口縁部簡略化した四方禪文。高台内挟りこみ深い。17世紀末から18世紀中頃。	325	99
24	美濃陶器碗	(11.1)	7.4	5.6	1/4、並、褐色、並	所謂尾呂茶碗。内面から高台脇鉛釉、口縁部葉灰釉。高台脇以下僅かに鉄化粧。18世紀中頃。	325	99
25	肥前磁器碗	(9.7)	4.8	(4.3)	1/3、良好、灰白色、密	釉やや白濁。焼成不良。残存部梅樹文、高台内簡略化した渦福字文。18世紀中頃～後半。	325	99
26	瀬戸・美濃陶器丸碗		<4.0>	(4.0)	1/3、並、灰白色、密	内面から体部外面下位長石釉。粗い貫入入る。内面目跡3箇所。高台内兜巾状に括る。17世紀代か。	325	99
27	肥前磁器猪口	8.2	5.8	6.5	ほぼ完形、良好、明緑灰色、密	底部中央が下方に肥厚し、接地面が平坦ではなく不安定。外面宝尽文。18世紀。	325	99
28	肥前磁器皿	(13.0)	3.4	(8.2)	1/4、良好、明緑灰色、密	高台内1重圏線。見込み五弁花コンニャク判か。波佐見系。17世紀後半から18世紀中頃。	325	99
29	丹波陶器搗鉢		<5.0>		破片、良好、浅黄色、密	外面下位指撫で。江戸時代。	325	99
30	丹波陶器搗鉢		<5.1>	(11.0)	底部、並、灰褐色、粗	体部外面下位指撫で。内面使用により摩滅。江戸時代。	325	99

遺物観察表

No.	種別	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
31	瀬戸陶器 播鉢		<3.0>	(12.0)	底部、並、にぶい橙色、粗	錆釉。底部回転糸切無調整。内面使用による摩滅著しい。時期不詳。	325	99
34	在地系土器 焙烙	(31.4)	5.5	(29.4)	破片、良好、褐灰色、並	体部外面中位紐作り痕、下位指押さえ後軽く撫で。江戸時代。	325	99
35	瀬戸陶器 播鉢		<4.5>		破片、良好、暗赤褐色、並	錆釉。江戸時代。	325	99
36	美濃陶器 徳利		<20.8>	9.6	ほぼ完形、良好、褐色、並	口縁部欠損。外面鉛釉、体部下位以下は粗く拭う。肩部外面の一部に藁灰釉。肩部3条の沈線。18世紀。	326	99
37	肥前磁器 徳利		<10.7>		胴部破片、良好、灰白色、密	焼成不良。内面無釉。外面下半釉白濁。江戸時代。	326	99
38	肥前磁器 香炉	8.6	4.5	4.0	2/3、良好、明緑灰色、密	口縁部から高台外面青磁釉。三足で高台接地しない。18世紀から19世紀中頃。	326	99
39	肥前陶器 碗		<4.6>	(4.2)	2/3、良好、明オリーブ灰色、密	陶胎染付。文様は山水か。高台内挟りやや深い。貫入あり。18世紀前半。	326	99
40	瀬戸・美濃 陶器碗	(10.6)	5.9	(5.8)	1/4、良好、灰白色、オリーブ色、密	腰錆碗。内面から口縁部外面下位釉、口縁部以下から高台内錆釉。高台端部無釉。体部外面5条の螺旋状沈線。18世紀後半。	326	-
41	肥前磁器 碗	10.3	5.2	4.0	1/2、良好、灰白色、並	二重網目文。高台内挟り浅い。波佐見系。18世紀中頃から後半。	326	-
42	瀬戸・美濃 陶器 広東形碗		<2.3>	5.4	底部、良好、灰白色、並	釉オリーブ灰色を呈し、染付不明瞭。見込み梅花状の文様、外面高台境と高台外面に各1条の横線。高台端部無釉。19世紀前半から中頃。	326	-
43	肥前磁器 猪口	(7.7)	5.9	5.1	2/3、良好、灰白色、密	白磁。器壁薄い。18世紀。	326	99
44	京・信楽系 陶器灯火受 皿	(7.5)	2.2	3.3	2/3、良好、灰白色、並	内面灰釉。細かい貫入入る。外面回転篋削り。受部端部無釉。19世紀前半以降。	326	-
45	肥前磁器 瓶		<7.6>	4.5	ほぼ完形、良好、明オリーブ色、密	油徳利。口縁部欠損。外面梅花と折れ枝文。17世紀末から18世紀中頃。	326	99
46	陶器乗燭	(5.1)	4.1	3.8	1/2、良好、灰白色、密	内面から杯部外面下位柿釉。灯芯穴欠損。脚部外面右回転糸切無調整。脚部に支え穴。19世紀前半。	326	99
47	肥前磁器 仏飯器		<3.3>	3.6	1/2、良好、灰白色、密	脚部中央膨らみ稜線をなす。外面稜線下2条の染付横線。脚端部外面から内面無釉。脚端部内面浅く挟りこむ。江戸時代。	326	99

10 阿久津遺跡出土近世金属製品観察表

遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
19	釘	<7.3>	0.7	0.5	5.0、2/3	「く」の字状に湾曲、断面方形、鍛造品。	324	98
20	釘	<3.95>	0.4	0.4	1.0、破片	細身の釘で断面方形、鍛造品。先端部分の破片。	324	98
49	釘	<3.0>	0.6	0.5	1.0、破片	断面方形、鍛造品。	326	99
50	煙管吸口	<2.1>	1.0	0.1	1.0、破片	肩部分の破片。	326	99
51	飾り金具	<8.0>	1.8	0.1	7.0、破片	固定用の鋲穴が金属版中央に2箇所並ぶ、表面に蓮華と唐草文様が陰刻される。仏教関連の建築物か調度品に用いられたものと思われる。	326	99

11 阿久津遺跡出土近世羽口観察表

遺構外

No.	種別	全長 (cm)	中心内・外径 基部内・外径	残存	特徴	図	PL
48	羽口	23.4	5.8・－ －・－	1/2	直線的なつくり。体部外面は斜め方向の篋削りによって丁寧に整形。先端部は黒色ガラス化。	326	99

12 阿久津遺跡出土近世石製品観察表

遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
11	五輪塔・空風輪	23.3	18.5		6.7、ほぼ完形	空輪は宝珠形に近く、風輪はやや潰れた半球形。風輪底部に火輪との接続用突出部が削りだされる。粗粒輝石安山岩製。	322	98
12	石鏃	1.7	1.6	0.3	0.1、ほぼ完形	左逆刺が欠損。	322	98
13	宝篋印塔・笠部	19.4	29.0		14.0、ほぼ完形	隅飾突起が一つ欠損、露盤上面中央に相輪との接続用孔。粗粒輝石安山岩製。	323	98
14	五輪塔・火輪	<12.6>	33.2		15.7、1/2	上半を欠損する。やや粗雑なつくりで、軒には反りがあまり目立たない。二ツ岳軽石製。	323	98
16	茶臼	(30.4)		10.2	2.8、1/4	下臼。破片だが、中央に芯棒を差し込む孔が開けられる。粗粒輝石安山岩製。	324	98
18	五輪塔・空風輪	35.5	18.8		8.1、ほぼ完形	全体が円筒形に近く、空輪と風輪の境は溝を彫り込むことで示す。空輪頂部は円錐状に突出するが、作りは粗雑である。風輪は円筒形。粗粒輝石安山岩製。	324	98
32	砥石	10.7	3.9	2.8	0.2、2/3	長方形で正面の摩滅が著しい。一部に敲打痕あり。	325	99
33	砥石	7.0	3.2	2.4	0.1、1/2	ほぼ全面が磨面。	325	99

13 万蔵寺廻り遺跡出土近世陶磁器観察表

I 区遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	常滑陶器 甕				頸部、還元、灰オリーブ色、密	形部片。外面格子状の叩き目。中世。	327	100
2	在地系土器 片口鉢		<3.8>	(12.6)	底部、還元、灰オリーブ色、密	左回転糸切無調整。内面、底部と体部境を除き、播鉢としての使用で摩滅。中世。陶器質。	327	100
3	在地系土器 鉢		<8.5>		口縁部、良好、黄灰色、並	口縁端部若干肥厚し、2箇所焼成前の穿孔。中世。	327	100
4	在地系土器 片口鉢		<3.1>	11.4	底部、良好、褐色、並	底部静止糸切無調整。底部周縁内面播粉木によると推定される摩滅顕著で深く窪む。中世。	327	100
5	在地系土器 片口鉢	(31.0)	<6.1>		口縁部、良好、橙色、並	器壁やや厚い。口縁端部内側に肥厚。15世紀。	327	100
6	在地系土器 片口鉢	(32.8)	<6.5>		口縁部、良好、にぶい赤褐色、並	器壁薄く、口縁端部玉縁状をなす。14世紀。焼締りあり。	327	100
7	在地系土器 片口鉢	(34.2)	<14.5>		体～口縁部、良好、にぶい橙色、並	器壁やや厚い。口縁端部内側に肥厚。口縁部外反。体部下位内面使用により摩滅。15世紀。5と同一個体か。	327	100
8	在地系土器 不詳		<2.7>	6.9	脚台部、良好、にぶい橙色、並	灯火器の脚部か。脚部外面凸面をなし安定しない。脚台部、脚柱部外面黒色。時期不詳。	327	100
10	肥前磁器 皿	13.0	3.9	7.6	完形、良好、明緑灰色、密	波佐見系。見込み五弁花コンニャク印判。高台内1重圏線内に簡略化した渦福字銘。18世紀中頃から19世紀初。	328	100
11	肥前磁器 皿	13.0	3.8	7.6	完形、良好、明緑灰色、密	波佐見系。見込み五弁花コンニャク印判。高台内1重圏線内に簡略化した渦福字銘。18世紀中頃から19世紀初。	328	100
12	肥前磁器 皿	13.0	3.7	7.4	完形、良好、明緑灰色、密	波佐見系。見込み五弁花コンニャク印判。高台内1重圏線内に簡略化した渦福字銘。18世紀中頃から19世紀初。	328	100
13	肥前陶器 碗		<4.6>	4.4	1/2、不良、灰色、密	陶胎染付。外面山水文。18世紀前半。	328	100
14	瀬戸・美濃陶器 碗	(9.4)	5.5	(3.7)	1/2、良好、灰白色、並	腰鎗碗。内面から口縁部外面灰釉。体部外面から高台内鉄釉。高台端部無釉。外面口縁部下螺旋状沈線。18世紀後半から19世紀前半。	328	101
15	瀬戸・美濃陶器 碗	(9.1)	5.6	(3.7)	1/2、良好、灰白色、並	外面梅花状の染付2カ所残存、3カ所施文であろう。「長」か。内面から高台脇灰釉。粗い貫入。18世紀後半から19世紀前半。	328	101

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
16	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢		<3.1>	(7.2)	底部、良好、灰黄色、並	内面から体部外面下位灰釉。見込み目跡2カ所残存。江戸時代。	328	101
17	美濃陶器 筒型香炉	(9.9)	6.0	7.5	1/2、良好、にぶい黄色、並	口縁端部から体部外面下端鉛釉。体部外面若松状の文様を鑿状工具で施す。脚3カ所に貼付。18世紀中頃から後半。	328	101
18	瀬戸・美濃 陶器 筒型 香炉	(10.6)	6.4	7.4	1/2、良好、オリーブ色、並	口縁部から体部下端鉛釉。体部外面鑿状工具で波状文。貼付脚2カ所残存。18世紀中頃から後半。	328	101
19	在地系土器 焙烙	(32.0)	4.9	(29.0)	底部～口縁部、並、灰黄色、並	外型成形、轆轤調整。耳部下方は底部に接合。耳部1カ所残存。江戸時代。	328	101
20	瀬戸・美濃 陶器 片口 鉢	(14.4)	8.4	6.9	2/3、良好、淡黄色、並	内面から体部外面下位灰釉。貫入入る。外反する口縁の1カ所を押し出して片口にする。残存部片口1カ所。見込み目跡5カ所。江戸時代。	329	101
21	志戸呂陶器 灯火受皿	(10.4)	2.2	2.2	1/2、良好、暗赤灰色、密	内面から口縁部外面錆釉。釉の一部は口縁部下に流れる。受部アーチ状の窓2カ所。18世紀中頃から後半。	329	101
22	志戸呂陶器 灯火受皿	(7.2)	3.2	5.6	2/3、良好、にぶい赤褐色、密	内面から口縁部外面錆釉。釉の一部は口縁部下に流れる。受部アーチ状の窓1カ所残存。受部外面から口縁部内面油付着。18世紀中頃から後半。	329	101
23	瀬戸・美濃 陶器 灯火 受皿	8.5	1.1	(4.2)	1/2、並、褐色、密	錆釉施釉後、外面口縁部以下拭う。「コ」字状に近い切り込み1カ所。19世紀前半から中頃。	329	101
24	瀬戸・美濃 陶器 皿		<1.2>	(7.2)	底部、良好、灰白色、並	鉄絵皿。内面から高台内の一部まで灰釉。見込み鉄絵具による花文。内外面目跡1カ所残存。17世紀前半。	329	101
25	製作地不詳 陶器 急須	5.4	6.3	4.6	2/3、良好、暗赤灰色、密	無釉。注ぎ口接合部から欠損。近現代。	329	101
26	製作地不詳 陶器 急須 蓋		<1.2>	(6.0)	1/2、良好、赤灰色、密	天井部小孔1カ所。天井部外面、金色と黄緑色の上絵。落とし蓋。近現代。	329	101
27	製作地不詳 陶器 汁次蓋	(5.4)	2.0	(3.1)	1/2、良好、明赤褐色、密	内面から口縁部下面の一部まで柿釉。つまみ欠損。19世紀。	329	101
28	製作地不詳 陶器鍋		<1.6>	(10.3)	底部、良好、オリーブ褐色、並	内面透明釉。細かい貫入入る。外面煤付着。近現代。	329	101
29	製作地不詳 陶器 鍋	(16.2)	7.7	(9.4)	1/5、良好、にぶい黄褐色、並	内面透明釉。口縁部外面から体部中位鉄釉。蓋受け部無釉。取っ手貼り付ける。底部外面煤付着。近現代。	329	101
30	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	(19.5)	<8.2>		口縁部、並、黒褐色、粗	内外面柿釉。外面口縁部下2条の沈線。	329	101
31	肥前磁器 小碗	6.9	3.6	2.9	1/2、良好、白色、密	高台外面に2条、体部外面下位に1条の圈線。波佐見系。18世紀。	329	101
32	肥前系磁器 小碗	(7.6)	4.0	(3.4)	1/4、不良、明緑灰色、密	高台内の抉り深い。釉白濁。18世紀後半から19世紀中頃。	329	101
33	肥前系磁器 小丸碗	(8.0)	5.35	(3.0)	1/2、良好、灰白色、密	外面山水文。見込み線描き。18世紀後半から19世紀初。	329	101
34	肥前磁器 碗	(10.2)	<4.2>		1/3、良好、明青灰色、密	波佐見系。二重網目文。18世紀中から後半。	329	101
35	瀬戸・美濃 磁器 平碗	(11.6)	<4.4>		1/2、良好、極暗赤褐色、密	内外面極暗赤褐色釉。内外面、金色と白色、黄緑色で菊文の上絵。近現代。	329	101
36	肥前磁器 仏飯器		<4.6>	4.4	2/3、良好、明緑灰色、密	脚台端部以下無釉。脚台底面蛇の目凹型状を呈する。江戸時代。	329	101
37	在地系土器 風炉か		<14.6>		口縁部、良好、黒褐色、並	外型成形轆轤調整。外面吸炭による黒色仕上げ。外面左上部に切り込みがあり、内面を厚くする。江戸時代以降。	329	101
38	肥前磁器 碗	(9.2)	5.1	3.6	2/3、良好、灰白色、密	波佐見系。雪輪梅樹文。高台内不明銘。18世紀後半から19世紀前半。	330	101

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
39	瀬戸・美濃 陶器 皿	(23.0)	2.5	(16.5)	1/4、良好、灰白色、並	行灯皿。内面白化粧後鉄絵具で海浜風景を描く。全面長石釉？施釉後底部内面周縁の釉を削り取る。外面の釉は薄い。19世紀頃。	330	102
40	肥前磁器 鉢蓋	8.4	2.65		完形、良好、灰白色、密	天井部外面建物と花卉文。天井部中央紐状取っ手貼付。身受け部無釉。18世紀から19世紀中頃。	330	102
41	肥前磁器 鉢蓋	10.8	3.9		2/3、良好、明緑灰色、密	天井部外面七宝繫文。天井部リボン状つまみ貼付。口縁部水平に開く。身受け部無釉。18世紀から19世紀中頃。	330	102
42	瀬戸陶器 搦鉢		<7.9>		口縁部、良好、暗赤褐色、並	内外面錆釉。口縁部S字状を呈し、内面突帯状に盛り上がる。18世紀後半。	330	102
43	丹波陶器 搦鉢		<7.2>		底部～体部、良好、黄褐色、密	外面上位轆轤目、下位指押さえ痕。江戸時代。	330	102
44	瀬戸陶器 搦鉢		<4.2>	(7.0)	底部～体部、暗赤褐色、粗	内外面錆釉、底部外面の釉拭う。底部回転糸切無調整。内面使用により摩滅。江戸時代。	330	102
45	瀬戸陶器 搦鉢		<6.9>	(12.7)	底部～体部、並、にぶい赤褐色、粗	内外面錆釉、体部外面下位以下の釉拭う。底部回転糸切無調整。底部内面を中心に使用により摩滅。江戸時代。	330	102
46	瀬戸陶器 搦鉢		<7.3>	(13.0)	底部～体部、良好、にぶい赤褐色、並	内外面錆釉、底部外面の釉拭う。底部回転糸切無調整。底部内面を中心に使用により摩滅。底部外面周縁も摩滅。江戸時代。	330	102
47	瀬戸陶器 搦鉢				体部、良好、赤褐色、並	内外面錆釉。江戸時代。	330	102
48	瀬戸陶器 搦鉢				体部、良好、暗赤褐色、並	内外面錆釉。江戸時代。	330	102
63	製作地不詳 炆器？ 盃	5.5	3.0	1.8	1/2、良好、黄褐色、密	薄い黄緑色の素地、透明釉。高台内金彩により銘、内面文様を描く。両者ともに剥落により不明瞭。近現代。記念盃の可能性高い。	332	103
66	肥前磁器 碗	9.8	5.4	4.2	完形、良好、灰白色、密	外面雪輪梅樹文。高台内不明銘。18世紀中頃から後半。波佐見系。	332	103
67	肥前陶器 碗		<4.3>	3.8	1/4、良好、灰色、密	陶胎染付。外面山水文。器壁厚い。18世紀前半から中頃。	332	103
68	肥前磁器 德利		<3.3>	3.9	底部、良好、灰白色、密	内面無釉。江戸時代。	332	103
69	在地系土器 目皿	10.3	1.4		1/3、並、にぶい橙色、並	被熱により表面剥離。通気部溝状を呈する。近現代か。	332	103
71	在地系土器 炆烙	33.0	5.5	31.0	底部～口縁部、良好、黒色、並	外型成形轆轤調整。外面、底部と体部下端を除き黒灰色。耳部欠損。江戸時代。	332	103
72	瓦				破片、並	燻し瓦。江戸時代以降か。	332	103
73	瀬戸・美濃 陶器 志野丸皿	11.4	1.9		口縁部、良好、灰白色、並	長石釉。口縁部外反。17世紀中頃。	332	103

14 万蔵寺廻り遺跡出土近世金属製品観察表

遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
56	釘	10.15	1.3	0.7	29.6、完形	鍛造品。断面扁平でしっかりとしたつくり。頭部を直角に屈曲させる「皆折釘」。先端はやや鋭い。江戸時代。	331	102
57	煙管雁首	6.2	1.2		17.5、火皿～肩	雁首。火皿は潰れ、上部が欠損する。油反らしが短く、肩部が長い。18世紀。	331	102
58	釘	<2.4>	0.9	0.6	4.2、破片	鍛造品。	331	102
59	碗形鍛冶 滓	7.9	6.5	3.0	133.0、ほぼ完形	上面はほぼ平坦で肩部に小破面が見られる。下面は皿状で軽石を含む。炉床土や木炭痕が見られる。	331	102
60	碗形鍛冶 滓	5.2	5.8	2.9	61.0、2/3	側面から下面にかけて含鉄部が認められる。黒色ガラス化した粘土質溶解物が主体。	331	102
61	碗形鍛冶 滓	3.6	3.0	1.0	21.0、ほぼ完形	上面は平坦で、下面は皿状。下面には木炭痕が目立つ。扁平な碗形鍛冶滓の可能性ある。	331	102
65	蹄鉄	14.0	12.5	1.0	267.7、完形	楕円形で固定用の鉤が錆着した状態で残存。中型馬の後ろ脚用と思われる。明治以降。	332	103

遺物観察表

15 万蔵寺廻り遺跡出土近世古銭観察表

VI区遺構外

No.	銭名	初铸	外径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	図	PL
62	寛永通寶	1697 ~	2.3	0.1	2.7	銭名における「寶」の特徴から、17世紀以降に鑄造された新寛永と思われる。	331	103

16 万蔵寺廻り遺跡出土近世羽口観察表

遺構外

No.	種別	全長 (cm)	中心内・外径 基部内・外径	残存	特徴	図	PL
76	羽口	8.1	6.0・2.9 6.2・3.8	ほぼ完形	胎土は白色軽石粒、黒色粒を含み、スサなどは無く微細な粒子が均一に混和する。体部は直線的なつくりで外面は体部に沿った直線的な筥削りによって整形。通風口は基部側から5.9cmの位置に段を有する。先端部は黒色ガラス化する。	333	103
77	羽口	<15.8>	5.8・3.0 -・3.6	基部欠損	胎土は白色軽石粒、黒色粒を含み、スサなどは無く微細な粒子が均一に混和。体部は直線的なつくり。外面は体部に沿った直線的な筥削りによって整形。通風口に段を有する。先端部は欠損部も含めて黒色ガラス化しており、欠損後も使用した可能性。	333	103
78	羽口	<15.3>	5.8・2.6 5.8・2.6	基部、先端部を一部欠損	直線的なつくり。体部外面は斜め方向の筥削りによって丁寧な整形。先端部は欠損部も含めて黒色ガラス化しており、欠損後も使用した可能性。	333	103
79	羽口	<13.2>	6.2・2.8 -・-	2/3	直線的なつくり。体部外面は斜め方向の筥削りによって丁寧な整形。先端部は黒色ガラス化。	333	103
80	羽口	<11.9>	5.6・3.6 5.7・3.4	1/2	直線的なつくり。体部外面は直線的な筥削りによって整形。広範囲に吸炭が見られる。	333	103
81	羽口	<11.8>	6.0・3.2 -・-	1/4	直線的なつくり。体部外面は直線的な筥削りによって整形。先端部は黒色ガラス化。	333	103
82	羽口		-・- -・-	体部破片	直線的なつくり。体部の厚さ1.5cm。体部外面は斜め方向の筥削りによって整形。	333	103
83	羽口	<7.5>	-・- -・-	体部破片	直線的なつくり。体部外面は斜め方向の筥削りによって整形。	333	103

17 万蔵寺廻り遺跡出土近世石製品観察表

IV区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
9	砥石	<5.6>	3.1	2.5	63.0、1/3	ほぼ全面に磨り痕が残る。破損部に直線的な傷痕、刃などの研ぎ痕か。	327	100
49	砥石	(7.0)	2.8	2.4	80.0、1/2	ほぼ全面に磨り痕が残る。破損部に刃研ぎ痕。	331	102
50	砥石	(7.1)	3.1	1.6	64.0、破片	両側面櫛歯鑿痕。	331	102
51	砥石	(12.8)	3.35	2.8	115.0、ほぼ完形	左側面と上小口面に櫛歯鑿痕。	331	102
52	砥石	(7.1)	3.0	2.6	82.0、1/2	両側面櫛歯鑿痕。裏面線条痕交錯する。	331	102
53	砥石	(5.7)	3.1	2.7	183.0、1/2	表面主に使用。左側櫛歯鑿痕明瞭に残る。下面と右側は軽微な使用のため、櫛歯鑿痕僅かに残る。	331	102
54	砥石	(8.3)	4.5	1.6	105.0、2/3	ほぼ全面に磨り痕が残る。扁平な長方形。	331	102
55	砥石	(8.0)	5.0	2.4	127.0、2/3	ほぼ全面に磨り痕が残る。扁平な長方形。主な使用面は裏面。表面ほぼ平坦。	331	102

18 万蔵寺廻り遺跡ガラス製品観察表

遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存	色調	特徴	図	PL
64	小瓶	1.6	5.9	2.2	完形	茶色	微量の気泡、薬瓶か。	332	103
70	小瓶	1.3	6.8	2.8	完形	透明	胴部正面に病院名、脇に目盛を浮彫、少量の気泡。	332	103
74	小瓶		<2.4>	2.9	1/4	透明	少量の気泡、胴部「古染」、底部屋号の浮文字、染料瓶か。	332	103
75	小瓶	(3.4)	3.6	3.8	1/2	青緑色	少量の気泡、ねじ栓。	332	103

19 桑原田遺跡出土近世陶磁器観察表

I区2号溝

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	常滑陶器 甕				体部片、褐灰	体部下位片か。中世。	334	134

I区3号溝

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
2	丹波・信楽 陶器 搦鉢				体部下位、浅黄	外面轆轤目顕著。内面薄く鉄泥を塗る？	334	134
3	瀬戸・美濃 陶器 皿			5.6	底部、淡黄	高台断面三角形。内面から高台脇灰釉。見込み高台直接重ね焼き痕あり。江戸時代。	334	134
4	肥前陶器 碗			4.2	1/4、灰白	陶器胎染付。外面東屋山水文。18世紀前半。	334	134

I区22号水田

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
6	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	14.1			口縁部片、灰黄	やや厚く錆釉施す。口縁部外面2条の沈線。江戸時代。	334	134

遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
7	美濃陶器 反皿	(13.0)	2.3	(7.2)	1/2、良好、灰オリーブ色、密	内面か高台内面の一部灰釉。内外面円錐ピン痕。器高低く、体部緩く外湾。口縁部外反。外面口縁部以下丁寧な回転へら削り。高台脇水平に削る。17世紀。	335	134
8	美濃陶器 反皿	(12.8)	3.1	(8.2)	1/4、良好、灰白色、密	内面から高台内面の一部灰釉。高台脇水平に削り、高台内外は段差を生じる。体部中位以下回転へら削り。17世紀。	335	134
9	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕？		<3.1>	(9.8)	破片、良好、灰褐色、粗	内面から体部下端柿釉。江戸時代。	335	134
10	瀬戸陶器 搦鉢		<4.0>		体部、良好、黒褐色、密	体部下位片。内外面錆釉。江戸時代。	335	134
11	丹波陶器 搦鉢		<6.0>		体部、良好、橙色、密	無釉。外面指押さえ痕。江戸時代。	335	134
12	丹波陶器 搦鉢		<4.3>	(16.0)	底部、良好、にぶい赤褐色、密	無釉。体部外面指押さえ状態あり。江戸時代。	335	134
13	瀬戸・美濃 陶器 片口 鉢？	(24.5)	<12.3>		体～口縁部、良好、灰白色、並	内外面灰釉。貫入する。体部内湾して立ち上がる。口縁部やや肥厚し、外面1条の沈線。17世紀末から18世紀前半。	335	134
21	肥前磁器 碗		<2.2>	(3.7)	底部、良好、灰白色、密	波佐見系。外面二重網目文。見込み渦巻き文、内面網目文。18世紀。	337	135
22	肥前磁器 皿		3.6	(10.2)	底部、良好、灰白色、密	中皿。内面花卉文。外面唐草文。高台内1重圏線、二重角内に渦福字銘。18世紀前半から中頃。	337	135
23	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	(29.0)	<6.8>		破片、良好、暗明褐色、並	体部は直立し、口唇部は内側に突出。外面口縁部下2条の沈線。17世紀中頃から18世紀後半。	337	135
24	在地系土器 火鉢	(24.4)	<7.2>		口縁部、良好、灰黄色、並	口縁部内面内側に屈曲する。色調は断面中央から黒灰、灰黄、黒灰色。江戸時代以降。	337	135
25	美濃陶器 碗		<1.8>	5.7	底部、良好、淡黄色、並	内面鉛釉。底部周縁高台外面に沿って打ち割られた可能性高い。18世紀。	337	135
26	美濃陶器 碗		<1.9>	5.0	底部、良好、淡黄色、並	内面鉛釉。底部周縁高台外面に沿って打ち割られた可能性高い。高台幅狭く、径も小さい。18世紀。	337	135
27	瀬戸・美濃 陶器 小碗		<3.8>	3.3	底部、良好、灰白色、並	内面から高台脇灰釉。貫入する。18世紀中頃から後半。	337	135
28	肥前磁器 碗	(10.2)	<4.0>		口縁部、良好、明緑灰色、密	波佐見系。残存部梅樹文。18世紀中頃から後半。	337	135
30	肥前陶器 呉器手碗		<1.9>	4.5	底部、良好、灰白色、並	高台端部を除き細かい貫入の入る透明釉。17世紀後半。	337	135
31	美濃陶器 碗		<1.7>	5.6	底部、並、にぶい黄褐色、並	内面から高台内一部鉛釉。高台端部摩滅。江戸時代。	337	135
32	美濃陶器 碗		<1.6>	(5.4)	底部、良好、オリーブ褐色、密	内面鉛釉。外面化粧掛け風に鉛釉薄く掛ける。高台内浅い。18世紀。	337	135

遺物観察表

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
33	瀬戸・美濃 陶器 輪秀皿		<1.7>	(5.8)	底部、良好、淡黄色、並	見込み菊花陽刻文。内面長石釉。底部内面周縁の突部釉剥ぎ。17世紀前半から中頃。	337	135
34	瀬戸・美濃 陶器 鉄絵鉢				口縁部、良好、オリーブ黄色、密	内外面灰釉。口縁部僅かに外反し、肥厚。口縁部内面僅かに窪む。屈曲部内面1条の沈線。体部内面鉄絵。18世紀中頃か。	337	135
35	丹波陶器 播鉢				体部、良好、にぶい黄橙色、並	無釉。外面指押さえ痕。江戸時代。	337	135
36	瀬戸陶器 播鉢	(28.6)	<4.3>		口縁部、良好、極暗赤褐色、並	内外面錆釉。口縁部外反し、端部上方に立ち上げる。口縁部全面やや波打つように削るか擦るかされている。17世紀中頃から後半。	337	135
37	肥前磁器 小杯	7.2	4.4	3.0	完形、良好、明緑灰色、密	口縁部緩く外反。主従の雪持笹を対角に配置。17世紀末から18世紀。	338	135
38	肥前磁器 小杯	7.3	4.5	3.1	完形、良好、明緑灰色、密	口縁部緩く外反。主従の雪持笹を各一カ所に描く。従文様は右135度付近に配置する。17世紀末から18世紀。	338	135
39	肥前磁器 小杯	7.2	4.5	3.0	ほぼ完形、良好、明緑灰色、密	口縁部緩く外反。主従の雪持笹を各一カ所に描く。従文様は右135度付近に配置する。17世紀末から18世紀。	338	135
40	肥前磁器 小杯	(7.4)	(4.4)	3.0	1/2、良好、明緑灰色、密	口縁部緩く外反。主従の雪持笹を対角に配置。側図は従文様。17世紀末から18世紀。	338	135
41	肥前磁器 小杯	(7.1)	4.6	3.0	1/2、良好、明緑灰色、密	口縁部緩く外反。主従の雪持笹を対角に配置。側図は主文様。17世紀末から18世紀。	338	135
42	肥前系磁器 碗		<2.2>	3.4	底部、良好、灰白色、並	高台外面と高台脇各1条の横線。江戸時代。	338	135
50	瀬戸・美濃 陶器 小碗	6.2	3.8	2.9	完形、良好、灰白色、密	内面から高台脇灰釉。貫入入る。外面1カ所錆釉風の斑が1カ所あるが、石ハゼ状の窪みがあり、意図的でない可能性高い。18世紀後半から19世紀前半。	340	135
51	美濃陶器 汁次		<6.5>		注口、良好、浅黄色、並	外面灰釉。汁次注片。江戸時代。	340	135
53	瀬戸・美濃 陶器 腰錆碗	(8.6)	6.0	4.0	3/4、良好、灰黄色、並	内面から口縁部外面粗い貫入のある灰釉。外面口縁部以下鉄釉。高台端部無釉。外面口縁部下螺旋状沈線。18世紀後半。	340	135
54	肥前磁器 筒型碗	(7.8)	5.2		口縁部、良好、灰白色、密	外面草花文。口縁部内面簡略化した四方禪文。18世紀中頃から後半。	340	135

20 桑原田遺跡出土近世金属製品観察表

I区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
14	煙管雁首	5.1	1.1 ~ 1.5	0.1	4.0、火皿~肩	火皿から脂反らし、肩まで残存する。首部に当たる脂反らしは短い。肩は一部破損するが、羅字が折られた状態で残存する。9にも同様の羅字が残存しており、同一個体と考えられる。18世紀後半。	335	134
15	煙管吸口	9.35	0.3 ~ 0.9	0.1	4.0、完形	口付から羅字との接合部までに装飾的な特徴は見られず、素朴なつくりである。篠竹製と思われる羅字の一部が残存しており、8と同一個体と思われる。18世紀後半。	335	134
29	煙管雁首	<2.9>	<1.4>	0.1	3.0、火皿~肩	損傷が著しい。18世紀後半。	337	135
49	火打ち金	5.6	1.2	0.5	3.0、ほぼ完形	山形と呼ばれる種類と思われる。長軸両端部は破損していると思われ、ねじり鎌形の可能性もある。火打ち金としてもやや小振りで、詳細な年代は不明。	339	135
52	煙管吸口	5.8	0.3 ~ 0.9	0.1	3.0、吸口	装飾的な特徴は見られない。18世紀後半。	340	135
55	煙管雁首	3.6	0.6 ~ 1.4	0.1	4.0、火皿~肩	首に当たる脂反らしが短い。肩との境は明瞭に段差を作り出しており、肩は円筒形。火皿はやや小振りとなる。火皿下部に補強帯などは見られない。18世紀代。	340	135

21 桑原田遺跡出土近世古銭観察表

V区遺構外

No.	銭名	初鋳	外径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	図	PL
56	寛永通寶	1697 ~	2.3	0.1	1.0	破損と錆の進行によって銭名の判読は困難である。字体の特徴から寛永通寶と判断した。	340	135

22 桑原田遺跡出土近世石製品観察表

I 区26号水田

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
5	粉挽臼 上臼		<32.0>	15.2	4.0、1/2	残存部のふくらみは6mm。供給口は不明瞭。	334	134

I 区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
16	宝篋印塔・ 笠部	30.2	30.4	18.6	16.4、ほぼ完形	隅飾突起と露盤の一部が欠損、露盤上面中央に相輪との接続用孔。露盤には格座間などの装飾は見られない。粗粒輝石安山岩製。	335	134
17	五輪塔・ 空風輪	26.0	18.5		4.6、ほぼ完形	全体に丸みを帯び、風輪底面に火輪との接続用突出部を削り出す、二ツ岳石製。	336	134
18	五輪塔・ 空風輪	25.8	18.6		6.8、ほぼ完形	全体に丸みを帯び、風輪底面に火輪との接続用突出部を削り出す、粗粒輝石安山岩製。	336	134
19	五輪塔・ 空風輪	24.2	14.5		3.1、ほぼ完形	空輪はしっかりとした宝珠形を示す、風輪底面に火輪との接続用突出部を削り出す、二ツ岳石製。	336	134
20	五輪塔・ 空風輪	25.5	17.4		4.5、ほぼ完形	全体に丸みを帯び、風輪底面に火輪との接続用突出部を削り出す、二ツ岳石製。	336	134

III 区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
43	五輪塔・ 火輪	27.9	27.6	15.4	12.0、ほぼ完形	水田用水路の石垣に転用されたもの。軒反りは殆ど見られない。上面に風輪との接続用孔が彫られる。二ツ岳石製。	338	135
44	五輪塔・ 空風輪	24.2	14.5		3.0、完形	水田用水路の石垣に転用されたもの。各輪正面に五輪塔四方種子の発心門「キャ・カ」が彫られる。風輪は円筒状で底面に火輪との接続用突出部を作り出す。粗粒輝石安山岩製。	338	135
45	五輪塔・ 空風輪	27.5	17.2		10.5	水田用水路の石垣に転用されたもの。空輪は宝珠形、風輪は円筒形となる。両輪の境は明確に表現される。風輪底部に接続用の突出部は見られない。	339	135
46	五輪塔・ 空風輪	24.5	15.2		5.08	水田用水路の石垣に転用されたもの。全体に丸みを帯び、空輪は宝珠形で大振り、風輪が平たく潰れた形状となっている。二ツ岳石製。	339	135
47	五輪塔・ 空風輪	24.8	18.4		6.8、ほぼ完形	水田用水路の石垣に転用されたもの。空輪は砲弾形、風輪は底部に向かって窄まる逆台形となる。両輪の境は溝を彫ることで表現される。二ツ岳石製。	339	135
48	五輪塔・ 水輪	26.6	18.6		5.72	水田用水路の石垣に転用されたもの。最大径は上半部にある、上半正面に「バ」の種子、粗粒輝石安山岩製。	339	135

V 区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
57	五輪塔・ 水輪	37.4	39.2	24.0	28.7、ほぼ完形	比較的丁寧なつくり。軒に反りは殆ど見られない。頂部には空風輪との接合孔は彫られておらず、重ね置くだけであったと思われる。二ツ岳石製。	340	135
58	擬宝珠	19.0	12.3		3.5、完形	石橋等の欄干に用いられたものか。基部、宝珠とも丁寧な作られる、粗粒輝石安山岩製。	340	135
59	石臼	24.8	<11.2>	10.8	5.18、1/2	中央には芯通しの孔が貫通する。下白か。	340	135

23 十二廻り遺跡近世陶磁器観察表

遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	製作地不詳 磁器 小碗	(6.8)	3.2	(3.8)	1/4、良好、オリープ灰色、密	口径のわりに器高が低い。外面は孟宗譚か。見込み文様ほとんど欠損し不明。内面後部と底部周縁1重圈線。18世紀末から19世紀中。	341	136
2	瀬戸・美濃? 陶器 甕	(30.0)	<7.5>		口縁部、良好、にぶい褐色、並	内外面柿釉。肩部外面沈線。江戸時代か。	341	136

24 十二廻り遺跡出土近世金属製品観察表

I 区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
3	釘	6.8	0.9	1.0	35.5、完形	断面方形。比較的短く、頭部は長方形。身部全体に木質が付着。	341	136

遺物観察表

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
4	釘	7.3	1.4	1.1	36.2、完形	断面方形。比較的短く、頭部は長方形。身部全体に木質が付着。	341	136
5	釘	7.6	0.7	0.9	30.3、完形	断面方形。比較的短く、頭部は長方形。身部全体に木質が付着。	341	136
6	釘	7.2	0.9	1.2	37.8、完形	断面方形。比較的短く、頭部は長方形。身部全体に木質が付着。	341	136
7	釘	7.5	0.9	1.2	30.6、完形	断面方形。比較的短く、頭部は長方形。身部全体に木質が付着。	341	136

25 中町遺跡出土近世陶磁器観察表

I 区遺構外

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	堺・明石陶器 搦鉢		<7.4>		破片、良好、赤褐色、密	外面回転篋削り。無釉。江戸時代。	342	147
2	肥前磁器 仏飯器		<5.2>	4.2	2/3、良好、灰白色、密	外面格子状文。脚部中央緩い稜線。脚端部無釉、脚端部内施釉。18世紀末から19世紀中頃。	342	147
3	肥前陶器 碗		<4.8>	4.2	底部、オリープ灰色、密	陶胎染付。外面東屋山水か。18世紀前半。	342	147
4	肥前磁器 仏飯器		<3.5>	4.0	脚台部、良好、灰白色、密	脚台部付け根に二条の圏線。脚台裾ぶ1/3無釉。脚台端部から内面無釉。江戸時代。	342	147
5	瀬戸陶器 搦鉢		<10.9>		破片、良好、暗赤褐色、密	錆釉。口縁部内面小さい突帯。外面は割れ口付近で外反。江戸時代。	342	147
6	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢		<4.0>	(8.6)	底部、良好、淡黄色、並	内面から高台脇施釉。内面目跡2カ所残存。江戸時代。	342	147

26 中町遺跡出土近世金属製品観察表

II 区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)、残存	特徴	図	PL
7	釘	<8.3>	0.8	0.8	13.0、3/4	鍛造品。太くしっかりとしたつくり。中央付近から先端にかけての破片で頭部は欠損する。	342	147
8	煙管雁首	<2.7>	0.6~1.7	0.1	3.0、火皿~脂反らし	装飾的な特徴は見られず、素朴なつくり。首部にあたる脂反らしの中ほどで破損する。18世紀後半。	342	147

27 中町遺跡出土近世石製品観察表

II 区遺構外

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
9	砥石	13.7	2.8	2.7	141.0、完形	右側面と両小口面に櫛歯鑿痕。表、裏、左側面を使用。	342	147
10	砥石	<8.5>	3.4	1.7	83.0、2/3	扁平な形状で表面の所々が剥離状に欠損。石材自体に赤褐色の縞が認められる。	342	147

28 中町遺跡出土近世古銭観察表

II 区遺構外

No.	銭名	初鑄	外径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	図	PL
11	寛永通寶	1697~	2.3	0.1	1.9	銭名における「寶」の特徴から、17世紀末以降に鑄造された新寛永と思われる。	342	147

29 半田常法院遺跡出土近世陶磁器観察表

15号土坑

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
1	瀬戸・美濃? 陶器蓋	<5.9>			口縁部、破片、灰白	天井部錆釉。内面無釉。18世紀~19世紀。	343	-

2号溝

No.	種別	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存/焼成/色調/胎土	特徴	図	PL
2	肥前系磁器 丸碗	8.3	3.1	6.1	3/4 白	高台径小さい。見込み、やや簡略化した寿字文か。割れ口漆継ぎの可能性高い。18世紀中頃~後半。	343	151
3	在地系土器 鍋	<39.0>			口縁部、灰白、器表黒灰	内面丁寧な回転撫で。口縁部横撫で。江戸時代	343	-

30 半田常法院遺跡出土近世石製品観察表

6号土坑

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
6	不明				一部欠損	比較的平坦な面に加工痕が認められるが、成形・調整痕は認められない。石造物の台として使用か。	344	-

1号溝

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)、残存	特徴	図	PL
4	石祠?	54.3	44.2	24.0	破片	接合しないが、調整痕、石質、大きさから同一個体と考えた。石祠などの前面部分であろう。図とは上下逆の可能性もある。また、前面中央ではなく、角付近であろう。内面は削り貫いただけで表面は無調整。	343	-
5	阿弥陀如来坐像		32.5	60.5	光背先端一部欠損	台座は出土していない。坐像で阿弥陀定印を結ぶ。頭部に螺髪表現はないが、肉髻と肉髻珠は表現する。三道は表現されていない。光背は頭上を境に調整方向を変えている。背面は成形痕を残す。	343	151
7	石塔	高さ27.0	16.3	16.3	完形	下面は小さくほぞを造る。下段は方形で上段は中央に丸みを持ち、上部にやや開く。上部中央は請花状に造る。石塔上部。	344	152
8	石祠?	高さ29.8	25.0	24.6	完形	前面を薄く、背面には厚みを残して中空とする。前面は猪の目と長方形に削り貫く。前面右から「幽屋真心禪定尼」「飯一之位」「正徳六丙申二月五日」と刻む。正徳6年は西暦1716年で、改元直前の銘である。	345	152

第6章 科学分析

第1節 万蔵寺廻り遺跡出土糸の材質分析

万蔵寺廻り遺跡IV区10号住居は焼失しており、床面近くに残された炭化材の間から軸に巻きつけられた糸状の繊維製品が出土した。発掘調査によって繊維製品が出土することは極めて稀なことであり、残存状態が比較的良好であるため分析によって材質を明らかにできる可能性が高かったことから、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に受託調査研究として委託し、同研究所の高妻洋成氏、田村朋美氏及び京都工芸繊維大学の赤田昌倫氏により分析された結果は以下のとおりである。

万蔵寺廻り遺跡より出土した炭化糸巻の調査

1. はじめに

群馬県北群馬郡吉岡町の万蔵寺廻り遺跡では、平安時代の焼失住居跡からほぼ完形を保った状態で炭化した糸巻が出土した。この糸巻は、平安時代の糸巻の構造を良好に残しているものの、炭化によりきわめて脆弱化した状態にあった。

ここでは、この炭化糸巻を保存処理するにあたり、その材質ならびに構造の調査をおこなって得られた知見について報告することにする。

2. 調査・分析法

1 内部構造

炭化糸巻の芯がどのような形状をしているのか、あるいはどの程度の残存状態にあるかを把握するため、X線コンピュータドラジオグラフィ (X-ray Computed Radiography, XCR) とX線コンピュータトモグラフィ (X-ray Computed Tomography, XCT) により調査をおこなった。それぞれの調査法の概要は以下の通りである。

XCR 撮影には株式会社富士フィルム製マイクロフォーカスX線拡大撮像システム μ FX-1000を用いた。X線透過画像はイメージングプレート (株式会社富士フィルム製BAS IP SR2025) に記録したものを、バイオイメージングアナライザー BAS-5000 (株式会社富士フィルム製) により走査して、デジタル画像として取得した。管電圧 (E)、管電流 (I) および撮影時間 (t) は各画像とともに付す。

XCT 島津製作所製X線CTスキャナSMX-100CT-Dを用いて断層撮影をおこなった (撮影者: 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室長大河内隆之)。撮影条件はX線管電圧55 kV、X線管電流75 μ A、スライス厚0.12mmであった。なお、撮影枚数は519枚であった。

2 繊維の種類

フーリエ変換赤外分光分析 (Fourier Transform Infrared Spectroscopy, FT-IR) 有機質材料の種類を同定する分析法のひとつにFT-IRがある。この分析法では未知試料について得られたIRスペクトルのプロファイルを標準試料のものと比較検討することにより、材質を同定することが可能である。しかしながら、今回の資料のように、炭化などによりオリジナルの材質とは明らかに異なった状態になっている場合には、精度よく材質を

特定することは極めて困難となるが、植物性の繊維であるのかあるいは動物性の繊維であるのかということを推定することは可能である。

分析には島津製作所製IR-Prestige21を用いてATR法ならびに顕微測光法により分析をおこなった。ATR法では、波数分解能は 8 cm^{-1} 、スキャン回数は1024回で 1860 cm^{-1} から 700 cm^{-1} をスキャンした。一方、顕微測光法では、波数分解能は 8 cm^{-1} 、スキャン回数は512回で 4000 cm^{-1} から 700 cm^{-1} をスキャンした。

3. 調査結果

1 炭化糸巻の構造

XCRを撮影した資料の画像を図1から図4に、それぞれのXCR画像を図5から図8に示す。これらのXCR画像から、糸巻は炭化が進行しているものの、その軸部分が良好に遺存していることが明らかである。糸巻の軸は通直な長い繊維を有しており、また空洞も確認される。

一方、図9から図11は炭化糸巻の一部に対して得られたXCTの画像である。XCRで確認されている通り、糸巻の軸には明らかに空洞がある。これらの観察所見から、糸巻の軸は竹類である可能性が示唆される。また、炭化はしているものの糸が軸木に巻かれている構造を明瞭に読み取ることができる。



図1 炭化糸巻 (No. 1)



図2 炭化糸巻 (No. 2)



図3 炭化糸巻 (No. 3)



図4 炭化糸巻 (No. 4)



図5 No. 1のXCR



図6 No. 2のXCR

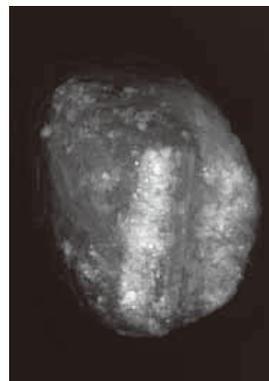


図7 No. 3のXCR

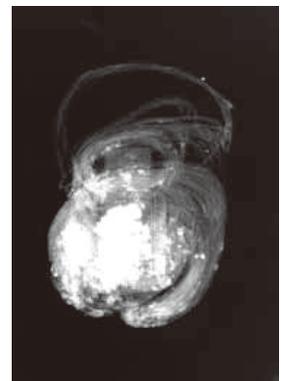


図8 No. 4のXCR

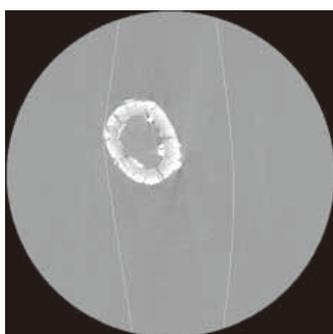


図9 No. 1 の XCR 画像 1

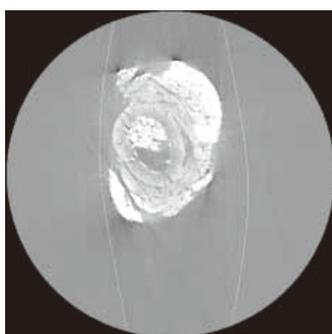


図10 No. 1 の XCR 画像 2

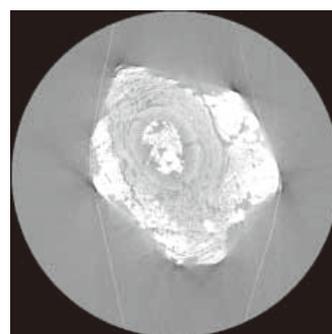


図11 No. 1 の XCR 画像 3

2 糸の繊維の種類

図12に顕微測光法により測定したFT-IRスペクトルを示す。1585 cm^{-1} に炭化物質に特有のC=Cの強い吸収を確認することができる。測定部位により得られるFT-IRスペクトルは異なるが、(a)のように、分析する部位によっては1090 cm^{-1} と1020 cm^{-1} に強い吸収が出現している。これらの波数における強い吸収は植物性繊維に特徴的なものであることから、この糸が植物性繊維である可能性が高い。また、部位によっては炭化していない部分があるということを示すものでもある。

さらに動物性繊維か植物性繊維かを判断するために偏光子をいれて分析をおこなった。繊維の偏光特性により、動物性繊維であれば1700～1500 cm^{-1} のピークパターンが変化し、植物性繊維であれば1100～900 cm^{-1} のピークパターンが変化することがわかっている。試料は炭化が顕著であり、顕微FT-IRを使用するためのプレスによる試料調製によっては繊維の配向が崩れてしまうため、ATR分析を行った。得られたスペクトルを図13に示す。分析の結果、前述の植物性繊維に特有な偏光パターンを示すことが明らかとなった。

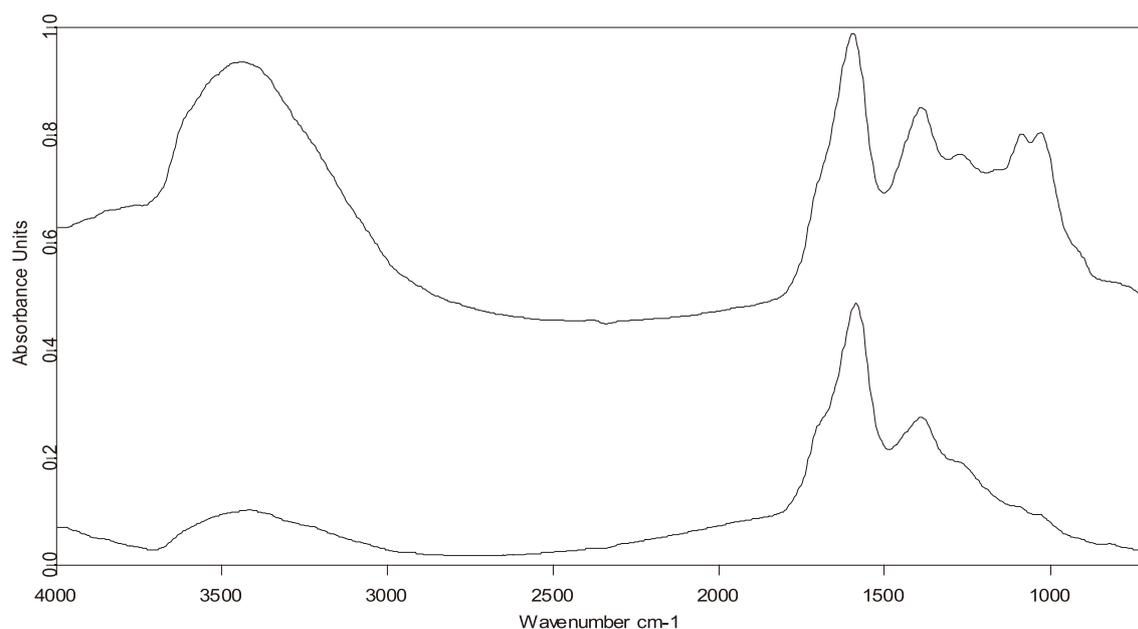


図12 顕微測光法により測定した FT-IR スペクトル

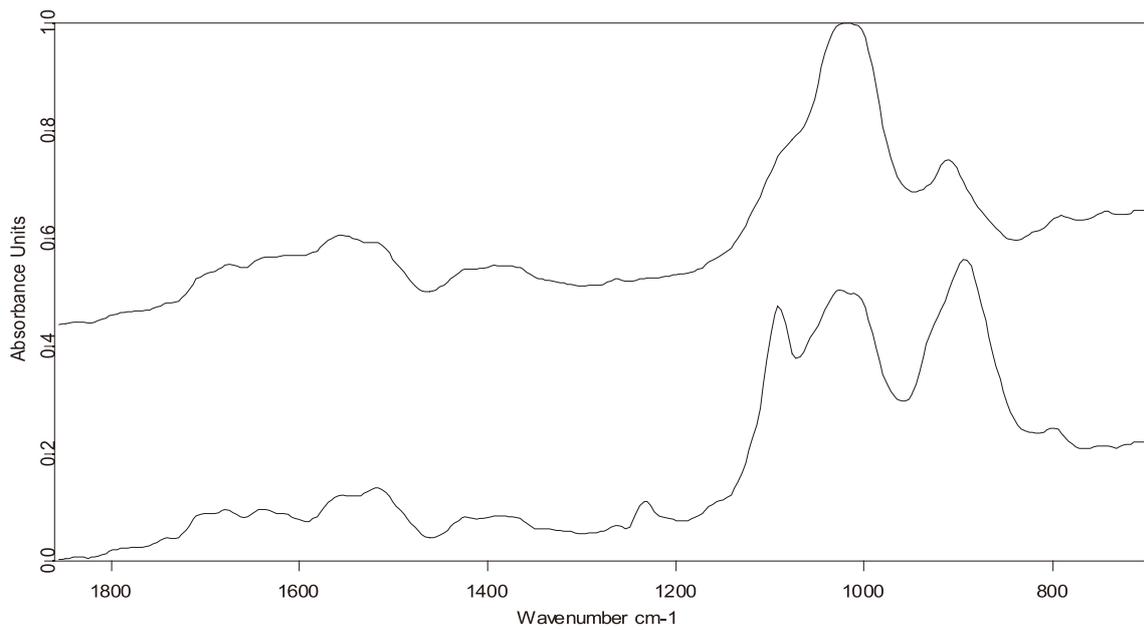


図13 ATR法により測定したFT-IR スペクトル

以上の顕微鏡観察とFT-IR分析の結果から、この繊維が植物性繊維であること、ならびに炭化していない部分も存在しているということが明らかとなった。

4. 強化処置

糸巻は炭化して極めて脆弱な状態になっており、観察などにおいて触れるたびに損傷するような状況にあった。このような糸巻を強化するため、アクリル樹脂（商品名：パラロイドB72）のアセトン溶液（2 wt%）を複数回塗布した。この処置により、炭化糸巻にある程度の強度を付与することができた。糸巻は複数個の断片になっている。強化処置は、軸木をともなうものに限定した。糸だけからなる断片は、この強化処置に用いたアクリル樹脂溶液により崩壊する危険性が高かったため、強化処置をおこなっていない。

5. まとめ

万蔵寺廻り遺跡より出土した炭化した糸巻について、構造調査（XCR、XCT）および糸の定性分析（顕微鏡観察、FT-IR）をおこない、以下の知見を得た。

- 1) 糸巻は炭化しているもののその構造を良好に保持している。
- 2) 糸巻の軸は竹類である可能性が高い。
- 3) 糸は植物性繊維で、炭化していない部分も存在している。

軸木をともなう糸巻の断片については、アクリル樹脂により強化処置を施した。糸だけの断片については強化処置がなされていないため、今後とも取り扱いについては注意を要する。

第2節 桑原田遺跡・万蔵寺廻り遺跡の自然科学分析

桑原田遺跡及び万蔵寺廻り遺跡の発掘調査において検出された堆積年代の不明な土層についてテフラの検出を行い、指標テフラとの層位関係から堆積した年代を明らかにし、関連する遺構の構築年代などについて検討するためのテフラ分析と、併せてAs-A泥流下の水田における稲作の有無と周辺環境を把握することを目的として、プラント・オパール分析を株式会社古環境研究所に委託した結果は以下のとおりである。

I. 桑原田遺跡および万蔵寺廻り遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された桑原田遺跡および万蔵寺廻り遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、桑原田遺跡Ⅱ区16号水田、13号水田深掘トレンチ、万蔵寺廻り遺跡Ⅰ区、Ⅱ区第1地点、Ⅱ区第2地点、1号溝セクションの6地点である。

2. 土層層序

(1) 桑原田遺跡Ⅱ区16号水田

桑原田遺跡Ⅱ区16号水田は、1783（天明3）年の浅間火山の噴火に伴って発生した天明泥流堆積物の直下に層位がある。水田の上面には、白色粗粒火山灰層（層厚3mm、試料1）がレンズ状に認められる。

(2) 桑原田遺跡13号水田深掘トレンチ

桑原田遺跡13号水田深掘トレンチでは、下位より黄灰色砂層（層厚15cm）、黄色シルト層（層厚1cm）、黄灰色砂層（層厚9cm）、黄色シルト層（層厚1cm）、黒灰色土（層厚0.8cm）、灰色シルト質砂層（層厚16cm）、黄灰色シルト層（層厚12cm）、暗灰褐色土（層厚4cm）、成層したテフラ層（層厚7.9cm）、暗灰褐色土（層厚2.6cm）、青灰色砂質細粒火山灰層（層厚1.8cm）、黒灰色土（層厚3cm）、暗灰色土（層厚9cm）、円磨された白色軽石混じり灰色土（層厚12cm、軽石の最大径21mm）、黄色土（層厚2cm）、白色軽石混じりで上半部が黄色がかった灰色土（層厚12cm、軽石の最大径21mm）、円磨された白色軽石混じり灰色土（層厚32cm、軽石の最大径20mm）、黄色土（層厚0.5cm）、灰色土（層厚4cm）が認められる（図1）。

(3) 万蔵寺廻り遺跡Ⅰ区

万蔵寺廻り遺跡Ⅰ区では、下位より灰色シルト層（層厚15cm以上）、円磨された軽石を多く含む礫層（層厚13cm、軽石の最大径33mm）、白色軽石混じり灰色土（層厚5cm、軽石の最大径5mm）、黄灰色砂層（層厚6cm）、

灰色砂層（層厚12cm）、若干褐色がかった灰色砂層（層厚15cm）、灰褐色砂層（層厚31cm）、褐色砂質土（層厚8cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚6cm）、砂混じり暗褐色土（層厚6cm）、灰色シルト質砂層（層厚1.3cm）、黄色砂層（層厚0.8cm）、成層したテフラ層（層厚0.9cm）、黄色砂層（層厚1cm）、黄灰色砂質土（層厚9cm）、白色軽石混じり灰色土（層厚15cm、軽石の最大径9mm）が認められる（図2）。

これらのうち灰色粗粒火山灰層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧，1968，新井，1979）であるが、何らかの攪乱作用を受けて、一次堆積層を示すユニットの組み合わせは認められない。また成層したテフラ層は、下部の青灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）と、上部の青灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.5cm）からなる。このテフラ層は、層相から1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間粕川テフラ（As-Kk、早田，1991，2004）に同定される。

（4）万蔵寺廻り遺跡Ⅱ区第1地点

万蔵寺廻り遺跡Ⅱ区第1地点では、下位よりラミナが発達した砂礫層（層厚160cm以上、礫の最大径68mm）、暗灰色砂質土（層厚1.3cm）、黒色砂質土（層厚0.5cm）、ラミナをもつ黄灰色砂質シルト層（層厚1.3cm）、最下部に灰色砂層（層厚1cm）をもち白色軽石を含む灰色泥流堆積物（層厚95cm、軽石の最大径18mm）が認められる（図3）。これらのうち、灰色火山泥流堆積物については、その層相から6世紀中葉に榛名火山で発生した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）の噴火の際に発生した火山泥流堆積物（早田，1989，以下Hr-FP泥流堆積物と呼ぶ）の可能性が高い。

（5）万蔵寺廻り遺跡Ⅱ区第2地点

万蔵寺廻り遺跡Ⅱ区第2地点では、下位より円磨された白色軽石を少量含みラミナが発達した灰色砂層（層厚119cm以上、軽石の最大径23mm）、暗灰色砂質土（層厚2cm）、黒色砂質土（層厚1cm）、ラミナをもつ黄灰色砂質シルト層（層厚6cm）、灰色泥流堆積物（層厚12cm）、下部にラミナが発達した灰色砂層をもつ桃灰色泥流堆積物（層厚47cm、軽石の最大径123mm）、ラミナが発達した桃灰色砂層（層厚6cm）、下部にラミナが発達した灰色砂層をもつ桃灰色泥流堆積物（層厚28cm、軽石の最大径46mm）、灰色砂層（層厚10cm以上）が認められる（図4）。

これらのうち最上部の桃灰色泥流堆積物の泥流主体部（不淘汰な部分）には気泡が認められ、泥流堆積時に高温であったことを示している。これらの火山泥流堆積物については、層相からHr-FP泥流堆積物と考えられる。

（6）万蔵寺廻り遺跡1号溝セクション

万蔵寺廻り遺跡1号溝セクションにおける溝の覆土は、下位より灰色シルト層（層厚3cm以上）、黒泥層（層厚0.8cm）、成層したテフラ層（層厚12.6cm）が認められる（図5）。成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色細粒軽石層（層厚1.8cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mm）、紫灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.7cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚1.2cm）、桃橙色粗粒火山灰層（層厚1.3cm）、黄灰色細粒軽石層（層厚3cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、桃色砂質細粒火山灰層（層厚2cm）からなる。このテフラ層は、層相からAs-Bに同定される。

As-Bの上位には、下位より桃灰色シルト層（層厚5cm）、暗灰褐色泥層（層厚0.4cm）、暗灰褐色泥層（層厚0.4cm）、灰色シルト層（層厚3cm）、黒泥層（層厚0.2cm）、灰色砂層（層厚4cm）、黒泥層（層厚0.3cm）、灰色砂層（層

第6章 科学分析

厚2cm)、暗灰褐色砂質土(層厚1.2cm)、成層した黄灰色砂層(層厚12cm)、暗灰褐色泥層(層厚2cm)、青灰色砂質細粒火山灰層(層厚4cm)が認められる。このうち青灰色砂質細粒火山灰層は、層相からAs-Kkに同定される。

As-Kkの上位には、さらに下位より黄白色シルト層(層厚0.7cm)、暗灰褐色泥層(層厚1.3cm)、桃灰色シルト層(層厚4cm)、暗灰色泥層(層厚0.4cm)、黄灰色砂層(層厚9cm)、黒泥層(層厚0.3cm)、灰色砂層(層厚0.8cm)、黒泥層(層厚0.3cm)、灰色砂質土(層厚3cm)、黄白色砂質シルト層(層厚0.3cm)、灰色粘質土(層厚6cm)、灰色土(層厚0.8cm)、黄色砂層(層厚0.4cm)、灰色土(層厚0.4cm)、灰色砂質シルト層(層厚1.8cm)、黒泥層(層厚0.3cm)、暗灰褐色土(層厚13cm)、暗灰色砂層(層厚1.4cm)、暗灰褐色土(層厚2cm)、灰色砂層(層厚3cm)、白色軽石混じり灰色土(層厚18cm、軽石の最大径24mm)が認められる。

3. テフラ検出分析・屈折率測定

(1) 分析試料と分析方法

桑原田遺跡Ⅱ区16号水田において水田面上面に認められた白色粗粒火山灰層について、テフラ検出分析と屈折率測定を行って、指標テフラとの同定を行った。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料6gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

なお屈折率については、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)を利用して、試料に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の測定を行った。

(2) 分析結果

テフラ検出分析と屈折率測定の結果を表1に示す。白色粗粒火山灰には、白色の軽石型ガラスが多く含まれている。火山ガラスの最大径は1.7mmで、多くがスポンジ状に良く発泡しており、光沢をもつものも認められる。火山ガラスの屈折率(n)は、1.505-1.512である。

4. 考察

桑原田遺跡Ⅱ区16号水田において水田面上面に認められた白色粗粒火山灰層は、含まれる火山ガラスの色調や形態さらに屈折率などから、天明泥流の流下に先立って降灰していた浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。また万蔵寺廻り遺跡1号溝の覆土では、As-BとAs-Kkが認められたことから、1号溝の層位は、より下位のAs-Bよりさらに下位にあると考えられる。

5. 小結

桑原田遺跡および万蔵寺廻り遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)の噴火に伴う火山泥流堆積物、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)および天明泥流堆積物などの層位学的な指標層を検出することができた。本遺跡において検出された1号溝については、As-Bより下位にあると考えられる。

第2節 桑原田遺跡・万蔵寺廻り遺跡の自然科学分析

文献

- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No.157, p.41-52.
 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地函研専報, no.45, 65p.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, No.53, p.2-7.
 早田 勉 (2004) 火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について. かみつけの里博物館編「1108—浅間山噴火—中世への始動」, p.45-56.

表1 桑原田遺跡におけるテフラ検出分析・屈折率測定結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			
		量	色調	最大径	量	形態	色調	屈折率 (n)
Ⅱ区16号水田	1	-	-	-	+++	pm	白	1.505-1.512

+++：とくに多い, ++：多い, +：中程度, +：少ない, -：認められない.
 最大径の単位は, mm. bw：バブル型, pm：軽石型.
 屈折率の測定は, 温度変化型屈折率測定装置 (RIMS86) による.

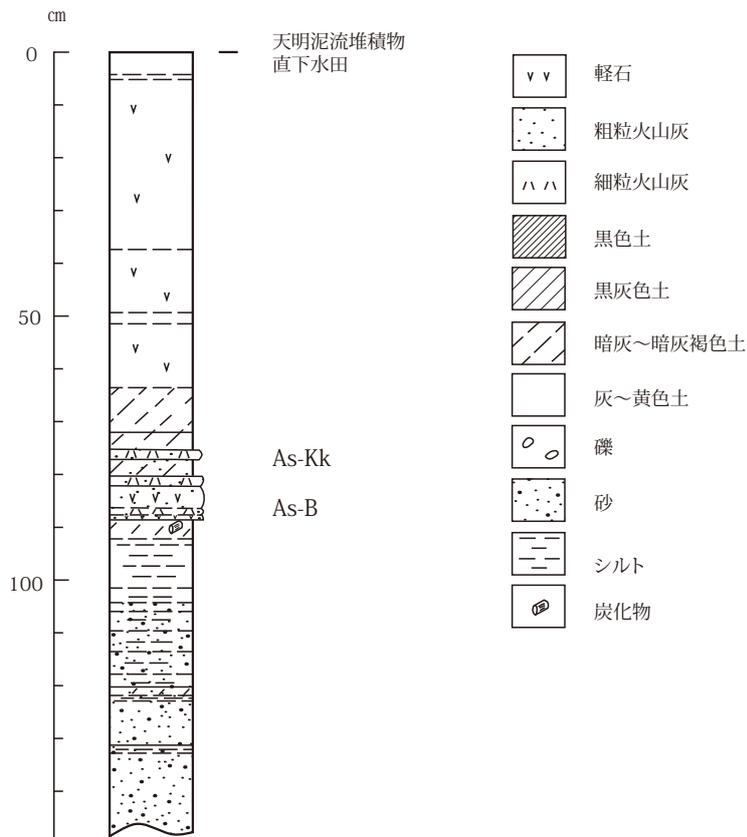


図1 13号水田深堀トレンチの土層柱状図

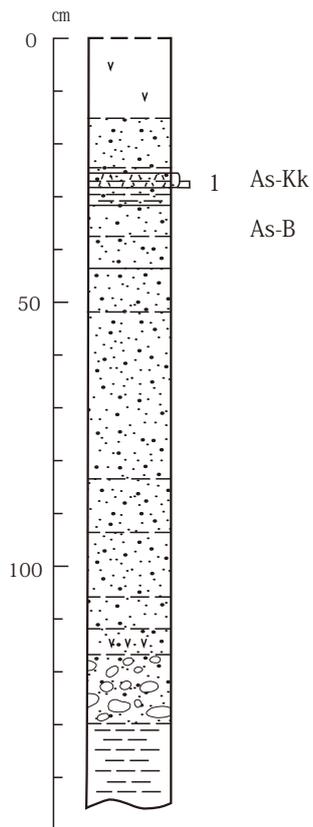


図2 万蔵寺廻り遺跡 I区の土層断面柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

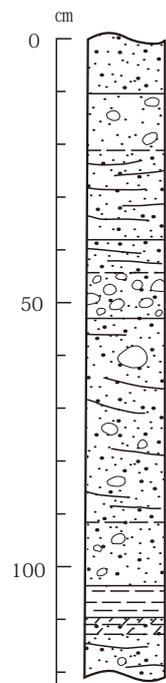


図4 万蔵寺廻り遺跡 II区第2地点の土層柱状図

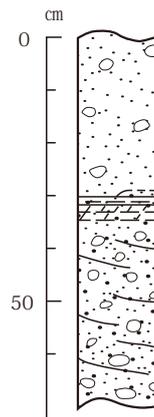


図3 万蔵寺廻り遺跡 II区第1地点の土層柱状図

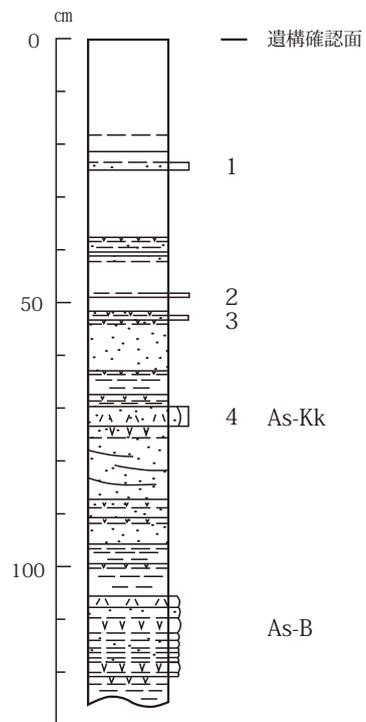


図5 万蔵寺廻り遺跡 1号溝セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

II. 桑原田遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO₂）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

2. 試料

試料は、桑原田遺跡の13号水田深掘トレンチ、11号水田、2号・5号水田、および万蔵寺廻り遺跡I区から採取された計16点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10～5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図6に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以

第6章 科学分析

上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 13号水田深掘トレンチ

天明泥流堆積物直下層（試料1）からAs-Bの下位層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk直上（試料7）とAs-B直下（試料9）を除く各層準からイネが検出された。このうち、天明泥流堆積物の直下（試料1）とその下層（試料2、3）では、密度が6,800～12,100個/gと高い値であり、その下位層（試料4）からAs-Kkの上層（試料6）にかけて、およびAs-Bの下位層（試料11）でも3,000～4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が800～1,500個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 11号水田

As-B直下層（試料1）とその下位層（試料2）について分析を行った。その結果、試料2からイネが検出されたが、密度は800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) 2号・5号水田

As-Kk直上層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが4,500個/gと比較的高い値で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

4) 万蔵寺廻り遺跡 I 区

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

(2) ムギ類について

13号水田深掘トレンチの試料3では、ムギ類（穎の表皮細胞）が検出された。密度は800個/gと低い値であるが、穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその周辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、ほとんどの層準からススキ属やタケ亜科が検出されたが、いずれも少量である。また、As-B直下層やAs-Kkの上下層ではヨシ属が比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、As-B直下層ではヨシ属が優勢であり、As-Kkの上位層から天明泥流堆積物直下層にかけてはイネが優勢となっている。

以上のことから、As-B直下層の時期には、何らかの原因によって一時的に水田が放棄（もしくは休耕）され、ヨシ属などが生育する湿地的な環境になっていたと推定される。このような状況は前橋市や高崎市周辺な

どでも一般に認められており、比較的広い範囲に及ぶ現象として注目される（杉山，2004）。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、天明泥流堆積物直下層から浅間粕川テフラ（As-Kk，1128年）の上層までの各層準、および浅間Bテフラ（As-B，1108年）の下位層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-Kk直下層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。As-B直下層の堆積当時は、何らかの原因によって一時的に水田が放棄（もしくは休耕）され、ヨシ属などが生育する湿地的な環境になっていたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
 杉山真二（2004）自然科学分析が語る平安時代末期の水田跡. かみつけの里博物館第12回特別展図録「1108年—浅間山大噴火、中世への胎動」: p.57-61.
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

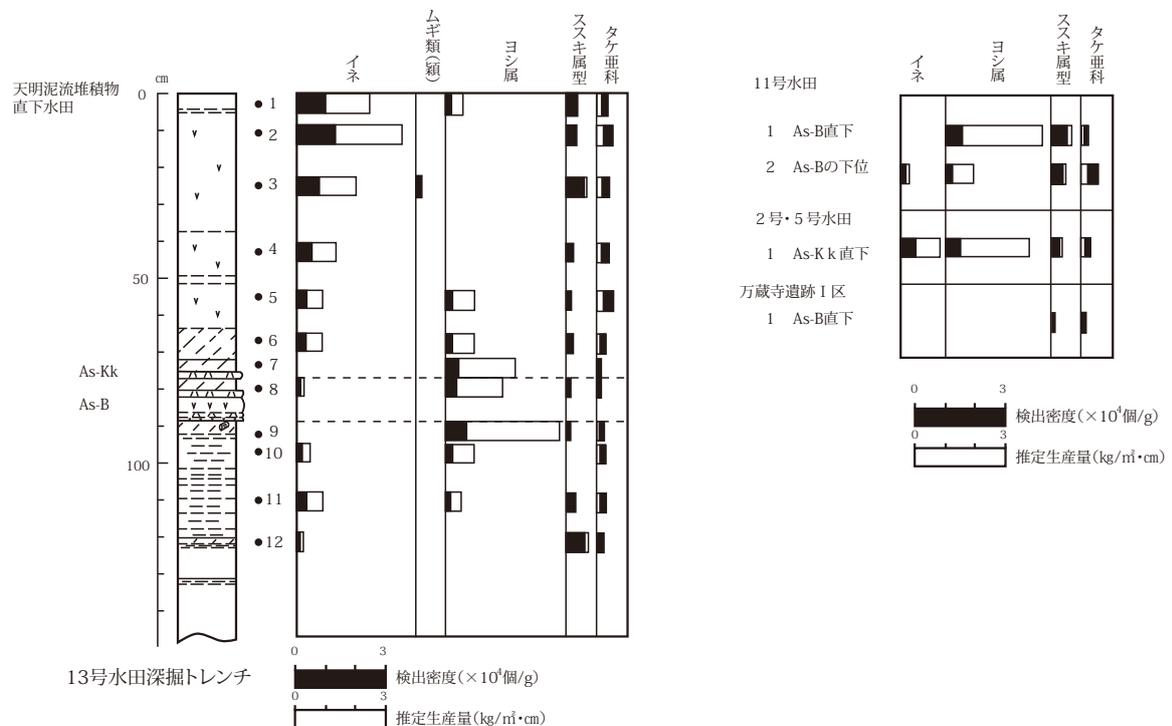
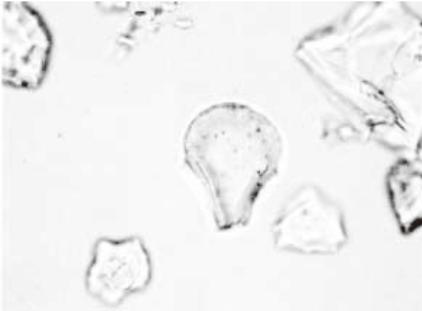


図6 桑原田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

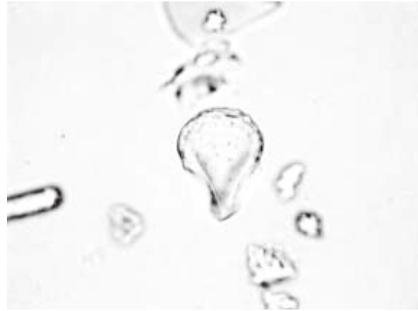
表2 桑原田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)	地点・試料																	
	13号水田深掘トレンチ								11号水田				2号・5号					I区
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	1	1	1
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	83	121	68	45	30	30	8	8	15	15	30	8	8	8	45		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	8				15	15	37	30	61	15	8		52	15	45		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	23	23	53	15	8	15	8	8	8	23	61		52	38	30		7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	30	46	38	37	53	30	7	8	23	30	30	23	22	53	30		15
ムギ類 (穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk phytolith)			8														
推定生産料 (単位: × kg/ m ² ・cm)																		
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	2.44	3.57	1.99	1.32	0.89	0.88	0.22	0.22	0.44	0.44	0.89	0.22	0.22	0.22	1.32		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.48				0.95	0.95	2.36	1.90	3.83	0.95	0.48		3.31	0.95	2.84		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.28	0.28	0.65	0.19	0.09	0.19	0.09	0.09	0.09	0.28	0.75		0.65	0.47	0.37		0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.14	0.22	0.18	0.18	0.25	0.14	0.04	0.04	0.11	0.14	0.15	0.11	0.11	0.25	0.14		0.07

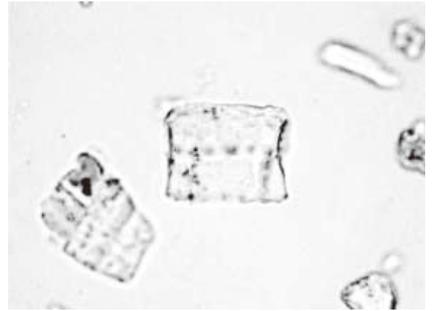
※試料の仮比重を0.1と仮定して算出。



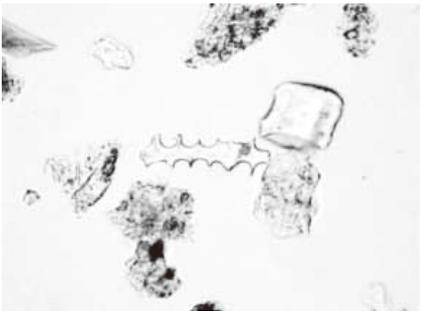
イネ
13号水田深堀 2



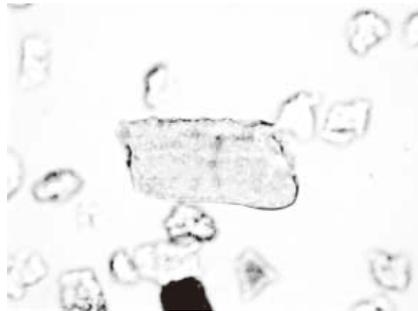
イネ
13号水田深堀 2



イネ (側面)
13号水田深堀 2



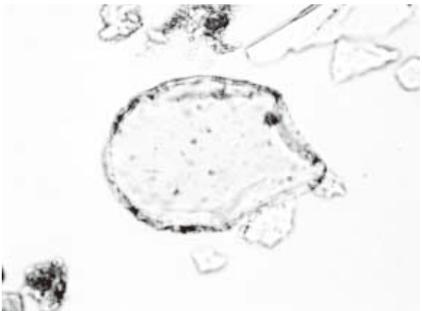
ムギ類 (穎の表皮細胞)
13号水田深堀 3



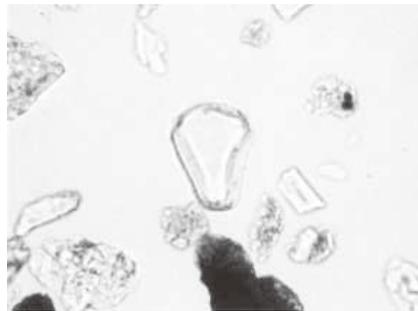
キビ族型
13号水田深堀 8



ジュズダマ属
11号水田 2



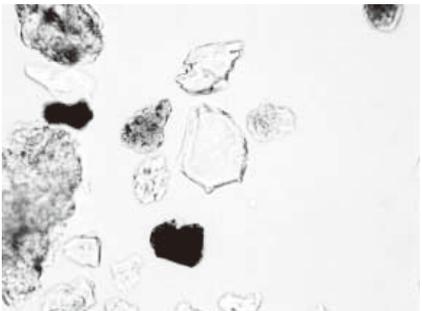
ヨシ属
13号水田深堀 9



ススキ属型
11号水田 1



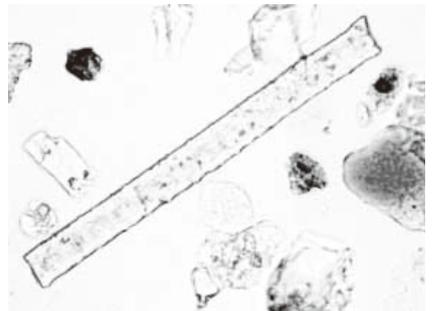
ネザサ節型
25号水田 1



ミヤコザサ節型
13号水田深堀 11



マダケ属型
11号水田 3



棒状珪酸体
13号水田深堀 1

植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真

————— 50μm

第3節 桑原田遺跡Ⅳ区の自然科学分析

桑原田遺跡Ⅳ区の調査において、As-A 泥流下から水田跡と畑跡が検出されており、畑跡の畝サク部の直上には砂が検出された。この砂が As-A 軽石由来であるかをテフラ分析を通して明らかにし、併せて同一地点に水田跡と畑跡が存在することが田畑輪換によるものであるのかを明らかにするために耕作土中のプラント・オパールと花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した結果は以下のとおりである。

はじめに

桑原田遺跡Ⅳ区（群馬県北群馬郡吉岡町漆原に所在）は、利根川右岸の河岸段丘上に位置し、天明の泥流に覆われた畑跡、水田跡が検出されている。これらの畑跡の畝サク部直上には、浅間 A 軽石に由来すると考えられる砂分が部分的に認められている。そこで、浅間 A 軽石の確認を行うためにテフラ分析を実施する。また、本遺跡では水田を中心として耕作が行われている中で畑が検出されており、田畑輪換が行われた水田転換畑である可能性が指摘されている。この水田転換畑に関する検討資料を得るために花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

調査区内では、北側から 1 号畑、2 号畑、3 号畑、4 号畑が検出され、調査区北東側に 3 区画の水田跡（1～3 号水田）が検出されている。1 号畑は、東西方向に畝が伸び、畝幅約 30cm、サク幅約 20cm、畝高約 8cm を測る。2 号畑は、南北方向に畝が伸び、畝幅約 70～80cm、サク幅約 40cm、畝高約 10cm を計る幅広の畝である。3 号畑および 4 号畑は、2 号畑と同様に南北方向に畝が構築されているが、畝幅、サク幅、畝高が 1 号畑と類似する形態を示す。土壌試料は、1 号畑、2 号畑、3 号水田から採取した（図1）。

1 号畑では、畝から 3 点（No. 1～3）、南側サクから 2 点（No. 1・2）を採取した。この内、泥流直下の畝 No. 1 とサク No. 1 について花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。また、試料を採取した畝北側のサクで認められた浅間 A 軽石に由来すると考えられる砂分を採取し、テフラ分析を行う。

2 号畑では、畝から 3 点（No. 1～3）、東側サクから 1 点（No. 1）を採取した。花粉分析と植物珪酸体分析は、泥流直下の畝 No. 1 とサク No. 1 について実施する。また、畝部からサク部への肩部で認められた浅間 A 軽石に由来すると考えられる砂分を採取し、テフラ分析を実施する。

3 号水田では、泥流の下位は 7 層に分層され、上位より、作土層、スキ床土層、心層土 1～5 層とされている。心層土 5 は、最上部に膜状酸化鉄が沈着しており、礫が混じる砂層である。心層土 4 は暗灰から暗オリーブ褐色を呈する砂よりなる。心層土 3 は、黄褐色の砂からなる。心層土 2 は、軽石（Hr-FP）が混じる暗黄褐色シルト混じり砂よりなる。心層土 1 は、軽石が比較的多く混じる暗褐色砂質シルトである。スキ床層は、軽石が混じる暗褐色砂質シルトよりなる。作土層は、スキ床土層よりもグライ化した土壌であることが観察され、暗灰褐色砂質シルトよりなる。また、心層土 3 より上位では、糸根状酸化鉄が沈着するが、心層土 1 とスキ床土層でその発達が顕著である。泥流直下から 5 cm 連続で計 19 点（上位より No. 1～19）を採取した。この採取した試料の内、No. 1・3 について花粉分析 No. 1・3・7・9・11・13・15・18 について植物珪酸体分析を実施する。

2. 分析方法

（1）テフラ分析

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡にて観察する。

観察は、テフラの本質物質であるスコリア、火山ガラス、軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性

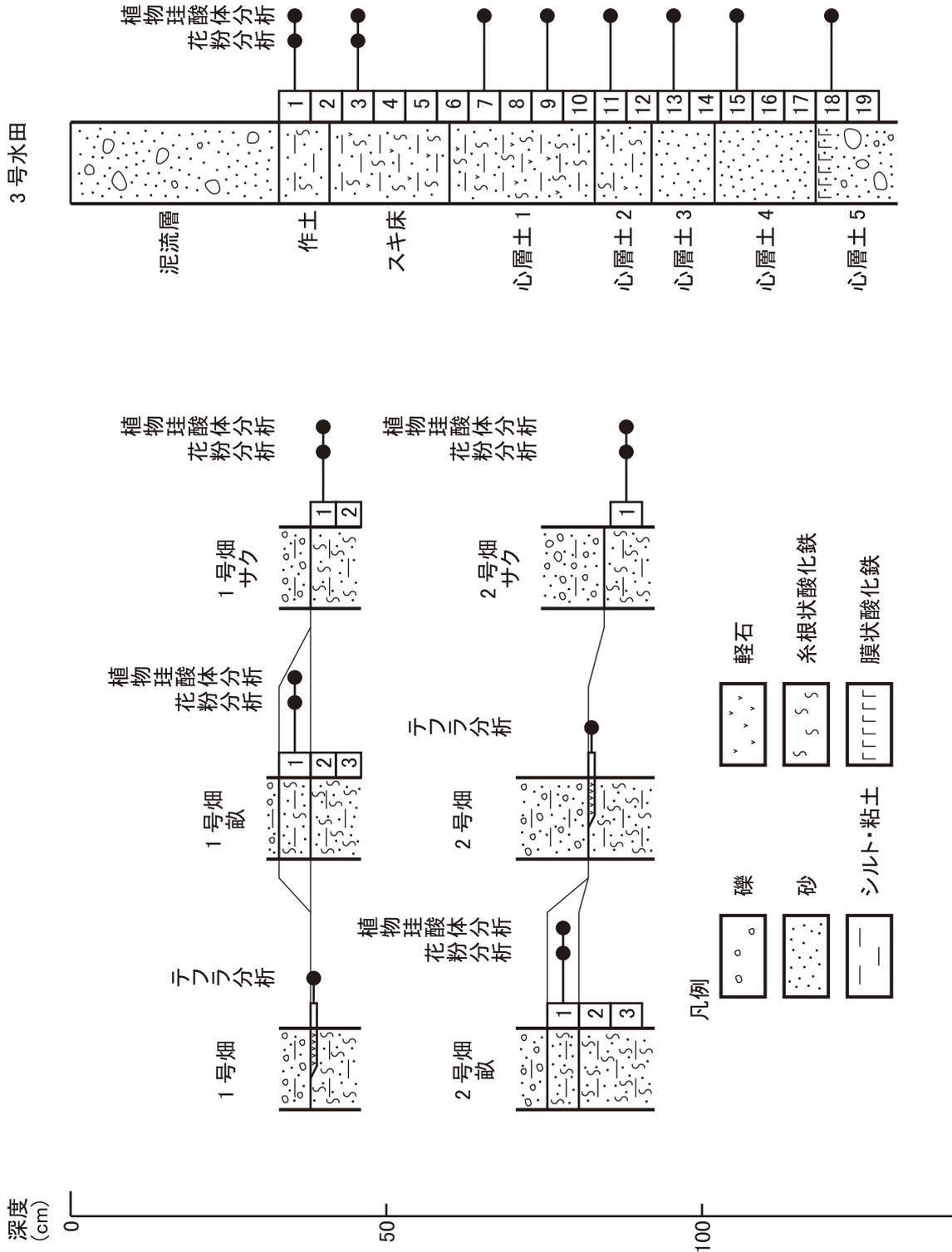


図1 試料採取地点の模式柱状図および分析層位

第6章 科学分析

的に調べる。なお、火山ガラスについては、緩い曲率を持った薄手平板状および継ぎ目のある平板状のものをバブル型とし、スポンジ状に発泡したもの、および発泡が引き伸ばされて繊維束状のものを軽石型、破砕片状のものを中間型とする。また、軽石の屈折率の測定については、古澤（1995）の"MAIOT"を使用した温度変化法を用いる。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定、計数結果の一覧表として表示する。なお、表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

（3）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水-塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンゲステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理、化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。これをカバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

（1）テフラ分析

<1号畑テフラ>

軽石が少量認められた。軽石は、最大径約3mm、淡灰褐色から灰白色を呈し、発泡は不良からやや不良である。角閃石または斜方輝石の斑晶を包有しているものも認められた。軽石の多くは、表面が汚れており、やや円磨された状況が窺える。軽石の屈折率は、 $n_{1.502} \sim 1.504$ の狭いレンジに集中する（図2）。

<2号畑テフラ>

軽石が中量認められた。軽石の特徴は、屈折率も含めて試料1と全く同様である。ただし、径1mm以下のやや発泡の良好な軽石の中に、極めて微量の高屈折率（ $n_{1.509}$ 前後）を示す軽石も認められた。

（2）花粉分析

結果を表1に示す。表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。

木本花粉ではツガ属、マツ属、スギ属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属、アカメガシワ属が検出される。一方、草本花粉ではガマ属、イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、ナデシコ科、キク亜科が検出される。

（3）植物珪酸体分析

結果を表2・3、図3・4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

<1号畑>

畝No. 1とサクNo. 1の植物珪酸体含量は、ともに約7万個/gである。いずれの試料からも、栽培植物のイネ属が検出される。特に、機動細胞珪酸体の産出が目立つ。その含量は約1.5万～2.4万個/gである。短細胞珪酸体は約6000～9000個/g、穎珪酸体が約600～1300個/gである。また、キビが属するキビ属、オオムギやコムギなどのムギ類が属するオオムギ族が検出される。畝No.1では、ヒエなどが属するヒエ属の短細胞珪酸体も認められる。この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などが認められる。

<2号畑>

畝No. 1とサクNo. 1の植物珪酸体含量は1号畑よりもやや少なく、約4万～5万個/gである。各試料からイネ属が検出され、機動細胞珪酸体の産出が目立ち、短細胞珪酸体や穎珪酸体も認められる。その含量は機動細胞珪酸体が約1.2～1.5万個/g、短細胞珪酸体が約3000～8000個/g、穎珪酸体が約600～800個/gである。また、キビ属やオオムギ族も検出される。この他、1号畑試料と同様にネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などが認められる。

<3号水田>

植物珪酸体含量は、No.13・15・18が約1500個/g以下と少なく、No.11が約3万個/g、No. 9が約7.4万個/gであり、この試料まで上位に向かって増加する。しかし、No. 7になると約1.6万個/gに減少する。その上位では、No. 3・1になると約5～6万個/g程度検出される。

栽培植物であるイネ属は、機動細胞珪酸体がすべての試料で、また短細胞珪酸体や穎珪酸体がNo.13より上位で検出される。特にNo.11、No.9、No. 3、No. 1では、機動細胞珪酸体の含量が約1万個/gを超える。また、No.11より上位ではキビ属やオオムギ族も検出される。この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などが認められる。

4. 考察

(1) 泥流直下水田層上面に認められたテフラ

1号畑テフラと2号畑テフラに認められた軽石は、上記の特徴から大半が榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP: 新井,1979;早田,1989) に由来する。Hr-FPの噴出年代は、古墳時代6世紀中葉とされている(町田・新井,2003)。また、2号畑テフラに極めて微量認められた高屈折率の軽石は、その屈折率の値から浅間A軽石 (As-A:新井,1979) に由来する可能性がある。このことから、泥流の堆積以前に本遺跡付近でもAs-Aの降下があったこ

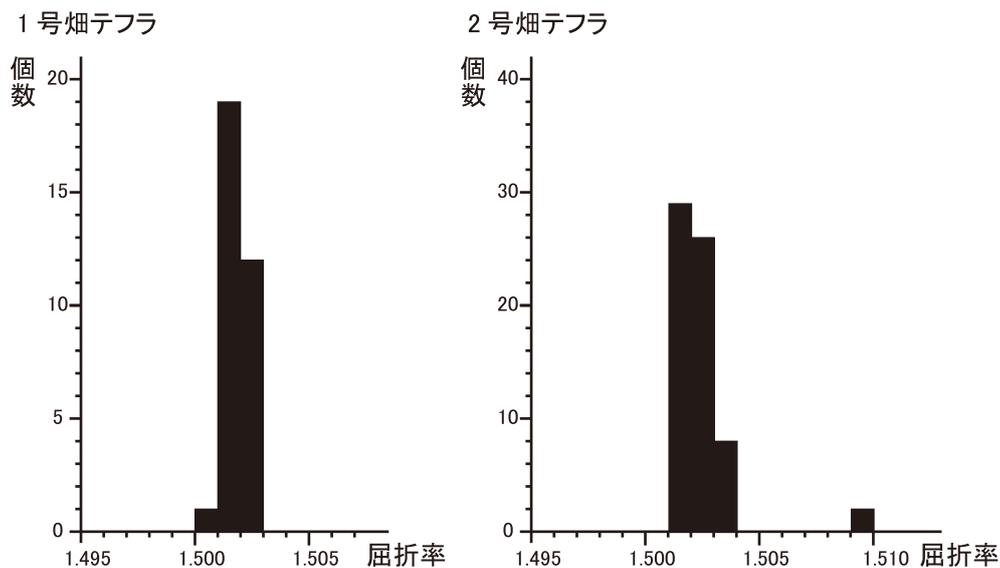


図2 火山ガラスの屈折率測定結果

とを示していると考えられる。ここで、テフラの垂直的な分布状況を確認するために、2号畑の心層土 (No. 2) について、追加分析を行った。そこにも、Hr-FPに由来する軽石が比較的多く含まれており、その砂分の状況は1号畑や2号畑からテフラ分析用に採取した試料と類似している。したがって、畑直上にみられたレンズ状堆積物は、As-Aの降下堆積物を主体とするものと言えないが、その下位の土壌層に由来する可能性があり、そこにAs-Aの降下軽石が微量含まれるものと考えられる。したがって、レンズ状堆積物は、As-A降下後、泥流本体の流下に先駆けて一帯を流下した洪水堆積物の可能性がある。また、本地点でAs-Aが認められないのは、泥流によって軽石が流亡したためかもしれない。

(2) 泥流直下の畑と水田

今回の分析の結果、花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。同試料で実施した植物珪酸体分析の結果を見ると、植物珪酸体が豊富に

産出していることから、花粉や胞子が取り込まれにくかったとは考えにくい。また、僅かに検出される花粉・胞子化石は、保存状態が極めて悪く、分解している痕跡が認められた。一般的に花粉やシダ類胞子は、常に酸化状態にあるような場合、化学的な酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている (中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。このことから、花粉化石は堆積後の経年変化により分解し、消失したと考えられる。したがって、ここでは、植物珪酸体の産状を中心に検討を行う。

1号畑と2号畑におけるイネ属機動細胞珪酸体の含量をみると約1~2.3万個/gであり、3号水田の作土およびスキ床におけるイネ属機動細胞珪酸体の含量と同様な産状を示す。また、水田雑草となり得るチゴザサ属やコブナグサ属に由来する植物珪酸体も検出されている。これらのことを考慮すると、1号畑および2号畑の土壌は、水田耕土に由来している可能性が高いと考えられる。このことは、本遺構が水田転換畑であることを反映しているのかもしれない。検出された植物珪酸体群をみると、ヒエ属、キビ属、オオムギ族など、栽培種を含む分類群が検出されている。これらが栽培種に由来するものであれば、ヒエ・キビ類、ムギ類が栽培されていた可能性もある。なお、群馬県下では渋川市中村遺跡のダイズ畑跡など、As-A泥流に埋積された畑で換金作物が栽培されていた可能性が指摘されている (能登, 2000)。また長野原町の林中棚Ⅱ遺跡ではイモ栽培の痕跡やマメ類の栽培痕と思われる遺構が認められ、イネ属などイネ科作物がわずかに認められるに過ぎない。特徴的な植物珪酸体を形成しないマメ類やイモ類が栽培されていた場合には、土壌中の植物珪酸体群集に栽培の痕跡が反映されない。そのため、今回の畑跡についてもイネ科作物以外の栽培も考えられる。ここで花粉化石の産状をみると、3号水田においてソバ属花粉が検出されており、周辺での栽培が示唆される。ソバ属の花粉は、生産域から離れるとその出現率が極端に減少することが知られている (中村ほか, 1981)。このことは、ソバ属の花粉の散布距離が短いことを示している。よって、本遺跡で検出された畑でもソバ栽培が行われていた可能性がある。また、当時、田畑の周辺には、ネザサ節、ススキ属、シバ属、上記したチゴザサ属やコブナグサ属などのイネ科植物、カヤツリグサ科、ナデシコ科、キク亜科などの草本類が生育していたと考えられる。なお、

表1. 花粉分析結果

種 類	1号畑		2号畑		3号水田	
	畝	サク	畝	サク	1	3
試料番号	1	1	1	1	1	3
木本花粉						
ツガ属	1	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	1	-	-	-	2	-
マツ属 (不明)	-	-	-	3	5	1
スギ属	-	-	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	-	-	1	1	-	-
ブナ属	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	-	1	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	1	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	1	-	-
草本花粉						
ガマ属	-	1	-	-	-	-
イネ科	4	2	-	2	3	1
カヤツリグサ科	1	-	-	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	2	-
ナデシコ科	-	-	-	-	1	-
キク亜科	1	1	-	1	-	-
不明花粉	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	-	3	-	-	-	-
他のシダ類胞子	9	11	5	2	5	11
合計						
木本花粉	2	1	2	7	9	1
草本花粉	6	4	0	3	6	1
不明花粉	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	9	14	5	2	5	11
総計 (不明を除く)	17	19	7	12	20	13

表2. 植物珪酸体分析結果

種類 試料番号	1号畑		2号畑		3号水田							
	畝 1	サク 1	畝 1	サク 1	1	3	7	9	11	13	15	18
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	44	62	22	57	55	36	15	40	31	1	-	-
キビ族ヒエ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族キビ属	8	5	6	6	10	7	1	9	3	-	-	-
キビ族チゴザサ属	2	-	1	-	2	-	-	1	1	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	29	36	-	14	18	-	25	29	-	-	-	-
タケ亜科	3	2	18	1	5	12	13	1	5	1	1	2
ヨシ属	11	12	8	6	6	9	1	20	7	1	1	-
ウシクサ族コブナグサ属	1	1	1	2	2	1	1	-	2	-	-	-
ウシクサ族スキ属	13	19	5	8	7	15	6	15	6	2	-	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族	21	8	5	6	8	4	2	10	5	-	-	-
イチゴツナギ亜科	14	10	3	16	6	4	19	15	6	-	-	-
不明キビ型	36	65	34	24	32	36	20	58	34	7	2	1
不明ヒゲシバ型	6	7	14	10	7	2	8	9	4	-	-	2
不明ダンチク型	6	10	5	7	2	7	9	11	7	-	2	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	188	106	82	108	201	114	57	132	185	3	4	1
キビ族	2	-	-	3	3	-	1	-	1	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	17	16	19	18	38	2	17	27	-	12	3	2
タケ亜科	2	3	3	2	1	27	1	2	26	4	2	-
ヨシ属	5	6	3	4	11	3	-	12	12	2	2	3
ウシクサ族	93	55	26	56	74	53	45	75	78	3	7	-
シバ属	23	25	6	3	19	13	10	22	17	2	-	2
不明	15	30	11	15	17	19	11	40	20	7	6	5
珪化組織片												
イネ属類珪酸体	10	4	4	6	12	1	1	15	9	1	-	-
合計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	196	237	122	157	160	133	120	218	111	12	6	6
イネ科葉身機動細胞珪酸体	345	241	150	209	364	231	142	310	339	33	24	13
珪化組織片	10	4	4	6	12	1	1	15	9	1	0	0
総計	551	482	276	372	536	365	263	543	459	46	30	19

1号畑サクNo. 1でガマ属の花粉が検出されている。ガマ属は、休耕田や河道沿いなどに生育する水生植物である。ただし、ガマ属は、風媒花で比較的大型となることから、水田雑草として存在していたのではなく、周辺の河川敷等に生育していたと考えられる。

(3) 泥流直下水田層以前の稲作

3号水田の下部に認められた砂礫層および砂層、すなわち心層土3～5層では、植物珪酸体含量が約500～1500個/gと極めて少ない。これは、層相を考慮すると、氾濫堆積物であるために、堆積物中に植物珪酸体が多量に取り込まれなかったことを反映していると考えられる。おそらく一過性の堆積物であるために、堆積後も植生に覆われることなく、土壌生成作用をほとんど受けなかったことが考えられる。なお、少ないながら検出されるイネ属は周辺地域で行われていた稲作に由来するとみられ、上流域から運搬され、堆積したものと思われる。

この上位では、心層土2と心層土1下部でイネ属が多産する。イネ属機動細胞珪酸体が堆積物に含まれる量は、約1～2万個/gであり、泥流直下の作土とスキ床とほぼ同程度検出される。ここで検出されるイネ属の植物珪酸体は、心層土1上部でイネ属の植物珪酸体が少ないことから、上位からの落ち込みとは考え難い。このことと、植物珪酸体の産状が泥流直下水田と共通性が認められることから、心層土2および心層土1下部が堆積した頃、遺跡の近傍では稲作が行われていた可能性がある。砂層直上から認められる変化であることから、洪水が治まった後、生産域として利用されていたことが推定される。ただし、遺跡の立地条件からみると、利根川の氾濫によって被害を受けることもあったと考えられる。なお、上記したように心層土1上部になると、イネ属植物珪酸体の含量が減少するが、約3500個/g程度検出されている。ここで、植物珪酸体の産状で水田検証を行う場合には機動細胞珪酸体の含量が5000個/gを越えれば、水田耕作土として利用していたと推定している例が多い(株式会社古環境研究所,1994など)。一方で、畦畔など水田に関連する施設が検出されている場合

種類	1号畑		2号畑		3号水田							(個/g)	
	畝	サク	畝	サク	1	3	7	9	11	13	15		18
試料番号	1	1	1	1	1	3	7	9	11	13	15	18	
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属	5,554	9,018	3,288	7,787	6,072	4,673	931	5,470	2,002	33	0	0	
キビ族ヒエ属	252	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
キビ族キビ属	1,010	727	897	820	1,104	909	62	1,231	194	0	0	0	
キビ族チゴザサ属	252	0	149	0	221	0	0	137	65	0	0	0	
タケ亜科ネザサ節	3,661	5,236	0	1,913	1,987	0	1,552	3,966	0	0	0	0	
タケ亜科	379	291	2,690	137	552	1,558	807	137	323	33	30	61	
ヨシ属	1,389	1,745	1,196	820	662	1,168	62	2,735	452	33	30	0	
ウシクサ族コブナグサ属	126	145	149	273	221	130	62	0	129	0	0	0	
ウシクサ族アヌキ属	1,641	2,764	747	1,093	773	1,947	372	2,051	387	65	0	0	
イチゴツナギ亜科オオムギ族	2,651	1,164	747	820	883	519	124	1,368	323	0	0	0	
イチゴツナギ亜科	1,767	1,455	448	2,186	662	519	1,179	2,051	387	0	0	0	
不明キビ型	4,544	9,455	5,082	3,279	3,533	4,673	1,241	7,932	2,196	229	60	30	
不明ヒゲシハ型	757	1,018	2,092	1,366	773	260	497	1,231	258	0	0	61	
不明タンク型	757	1,455	747	956	221	909	559	1,504	452	0	60	30	
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属	23,732	15,418	12,256	14,754	22,190	14,797	3,538	18,051	11,947	98	120	30	
キビ族	252	0	0	410	331	0	62	0	65	0	0	0	
タケ亜科ネザサ節	2,146	2,327	2,840	2,459	4,195	260	1,055	3,692	0	393	90	61	
タケ亜科	252	436	448	273	110	3,505	62	274	1,679	131	60	0	
ヨシ属	631	873	448	546	1,214	389	0	1,641	775	65	60	91	
ウシクサ族	11,740	8,000	3,886	7,650	8,169	6,879	2,793	10,256	5,037	98	210	0	
シハ属	2,903	3,636	897	410	2,098	1,687	621	3,009	1,098	65	0	61	
不明	1,894	4,364	1,644	2,049	1,877	2,466	683	5,470	1,292	229	180	151	
珪化組織片													
イネ属穎珪酸体	1,262	582	598	820	1,325	130	62	2,051	581	33	0	0	
合計	24,740	34,473	18,232	21,450	17,664	17,265	7,448	29,813	7,168	393	180	182	
イネ科葉部短細胞珪酸体	43,550	35,054	22,419	28,551	40,184	29,983	8,814	42,393	21,893	1,079	720	394	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,262	582	598	820	1,325	130	62	2,051	581	33	0	0	
珪化組織片	69,552	70,109	41,249	50,821	59,173	47,378	16,324	74,257	29,642	1,505	900	576	
総計													

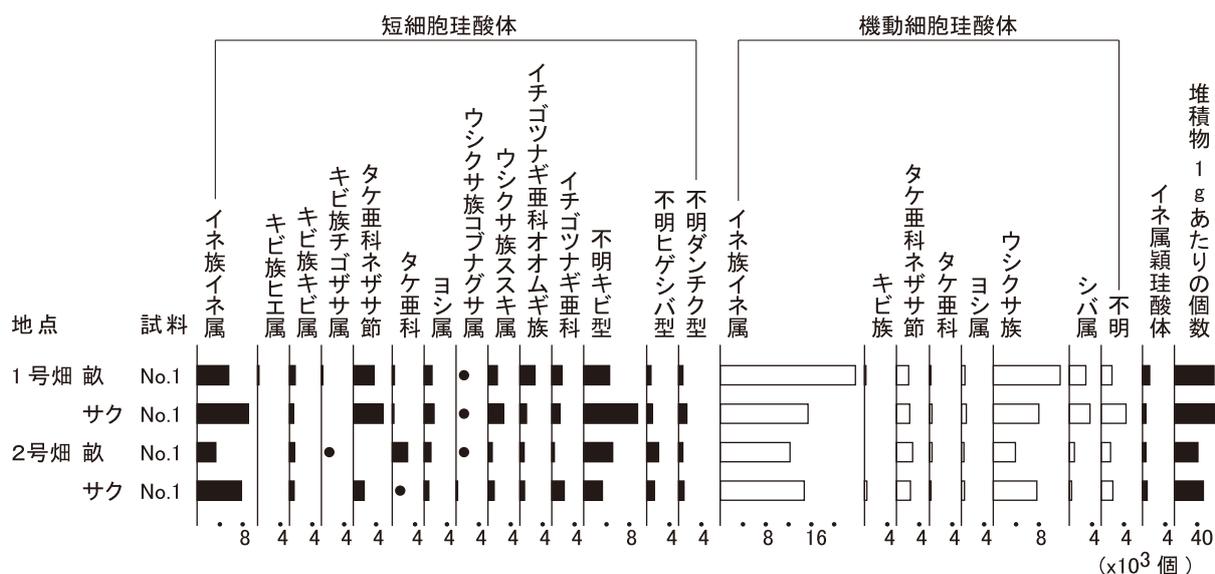


図3 1号畑および2号畑の植物珪酸体含量
堆積物 1 gあたりに換算した個数を示す。●は 200 個 /g 未満の種類を示す。

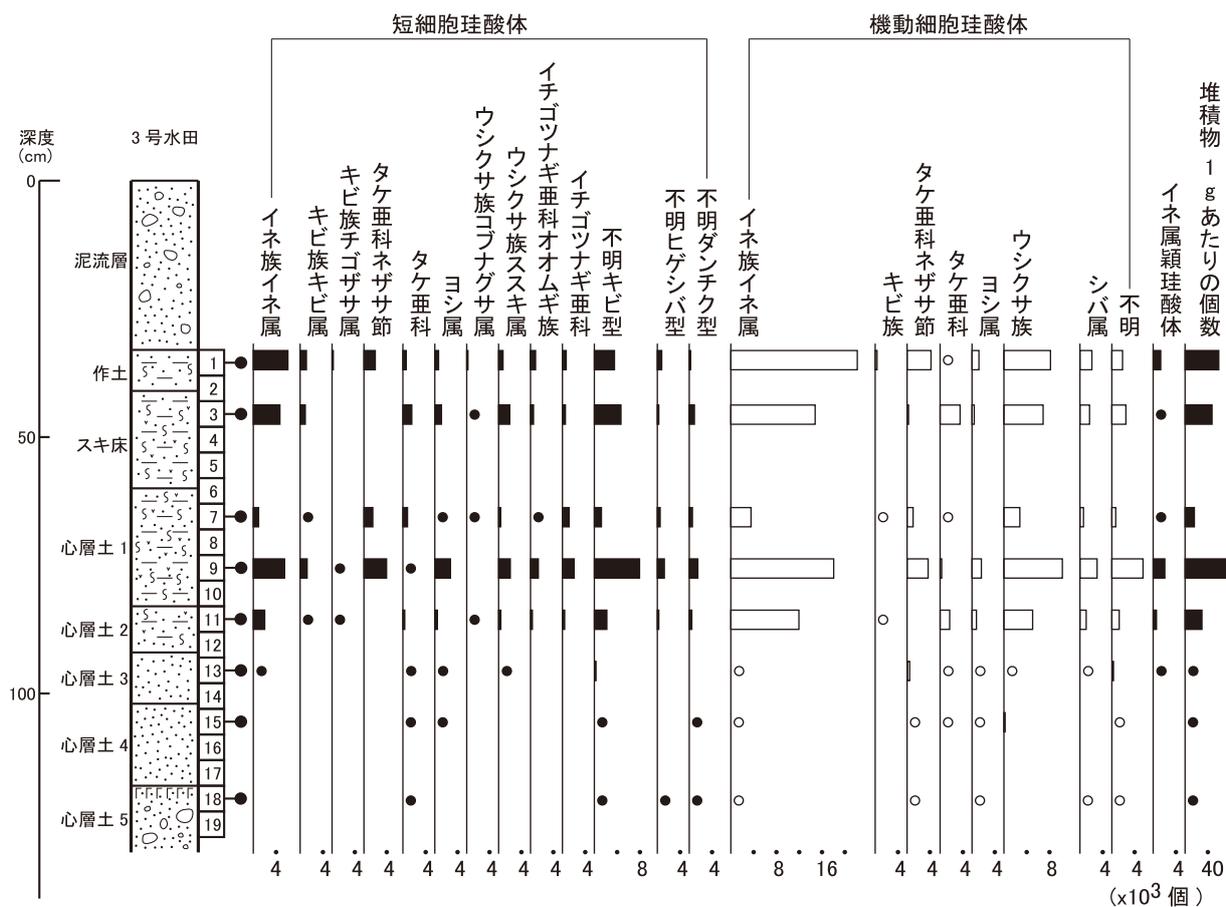


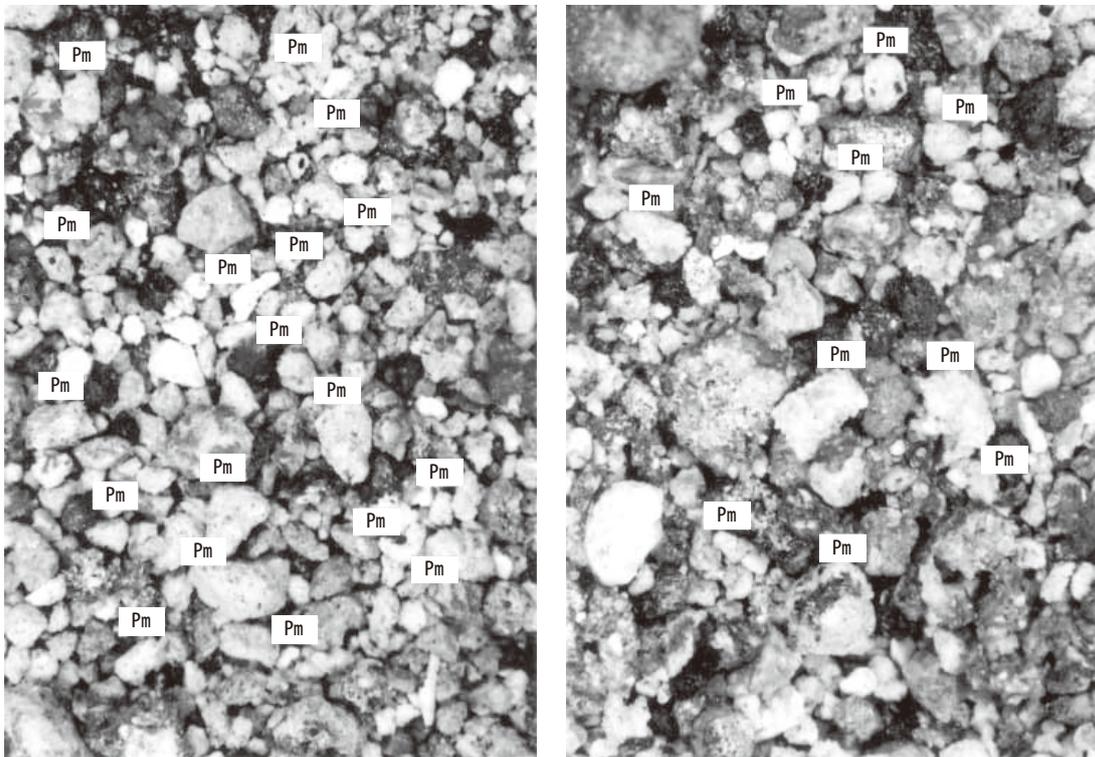
図4 3号水田の植物珪酸体含量
堆積物 1 gあたりに換算した個数を示す。●○は 200 個 /g 未満の種類を示す。

でも、イネ属の機動細胞珪酸体含量が1000個/g程度である事例も報告されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2001,2002；株式会社古環境研究所,1992）。本層準において機動細胞珪酸体の中でイネ属が占める割合は約40%である。作土、スキ床、心層土1下部、心層土2でも、イネ属機動細胞珪酸体が全機動細胞珪酸体の中で占める割合が約40～55%であり、それと比較しても遜色ない出現率である。これらの点を考慮すると、心層土1上部になると稲作が行われていなかったとは断定できない。ただし、現時点ではイネ属機動細胞珪酸体含量が減少した要因についてはよくわからず、今後の課題として残される。

引用文献

- 新井 房夫,1979,関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層.考古学ジャーナル,157,41-52.
 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
 株式会社古環境研究所,1992,プラント・オパール分析調査報告.群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集 二之宮千足遺跡 国道17号(上部道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学分析編),建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団,50-60.
 株式会社古環境研究所,1994,塚田遺跡付近のプラント・オパール分析.塩野西遺跡群塚田遺跡―長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書一,長野県御代田町教育委員会,217-221.
 近藤 鍊三・佐瀬 隆,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.
 町田 洋・新井 房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
 中村 純・畑 中健一・三好 教夫・山中 三男,1981,農耕史の花粉分析学的研究.古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和55年度年次報告書,文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班,147-153.
 能登 健,2000,関東地方のはたけ―火山灰に埋まった畠・畑の調査一.日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集「はたけの考古学」,26-29.
 パリノ・サーヴェイ株式会社,2001,亀里平塚遺跡の自然科学分析.群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第280集 亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長湍線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,群馬県埋蔵文化財調査事業団,343-353.
 パリノ・サーヴェイ株式会社,2002,横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析.財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第292集 横手南川端遺跡・横手湯田遺跡 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第1分冊(本文編),財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,133-155.
 早田 勉,1989,六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害.第四紀研究,27,297-312.
 徳永 重元・山内 輝子,1971,花粉・孢子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

図版1 軽石

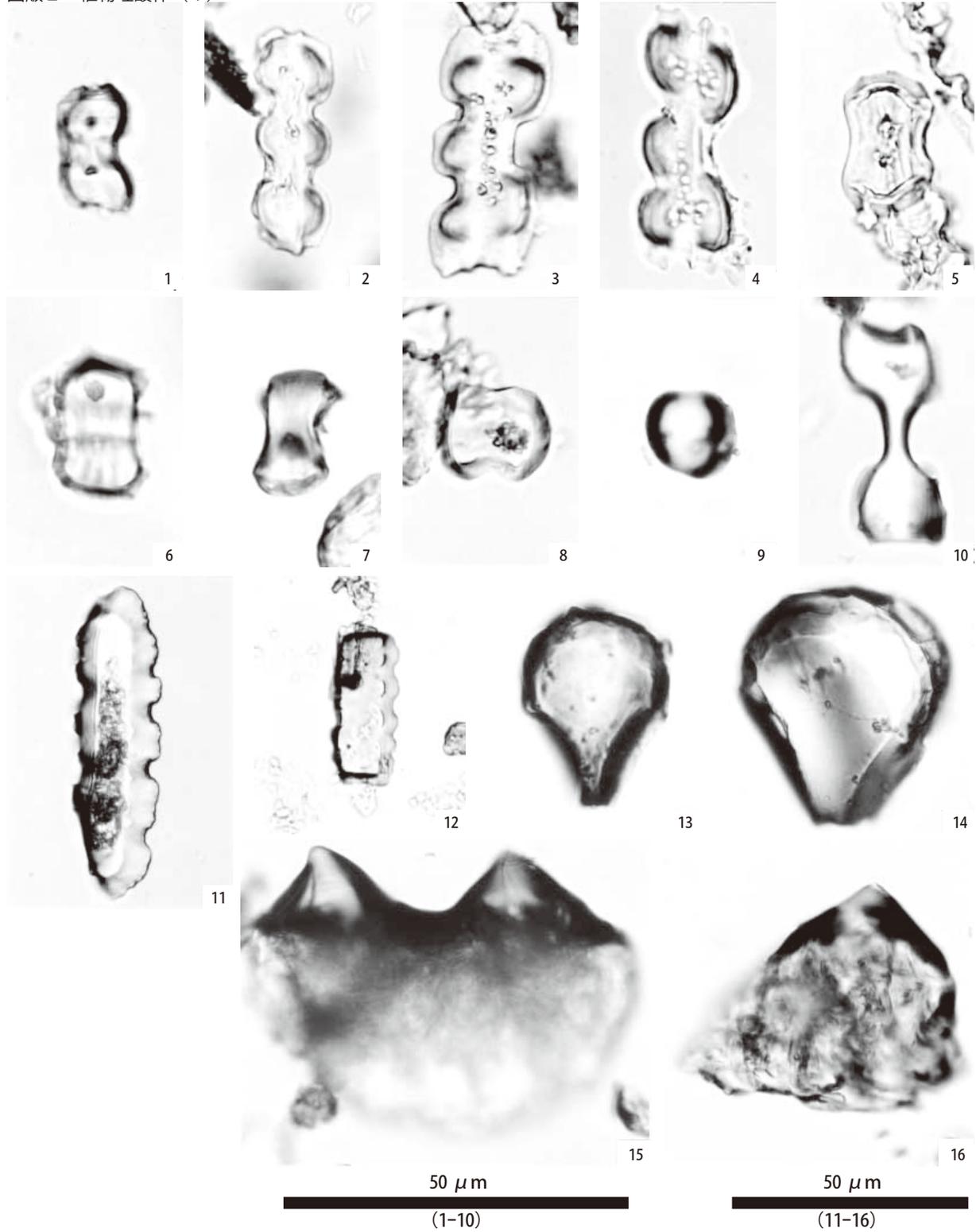


1・1号畑；テフラ

2・2号畑；テフラ

4 mm

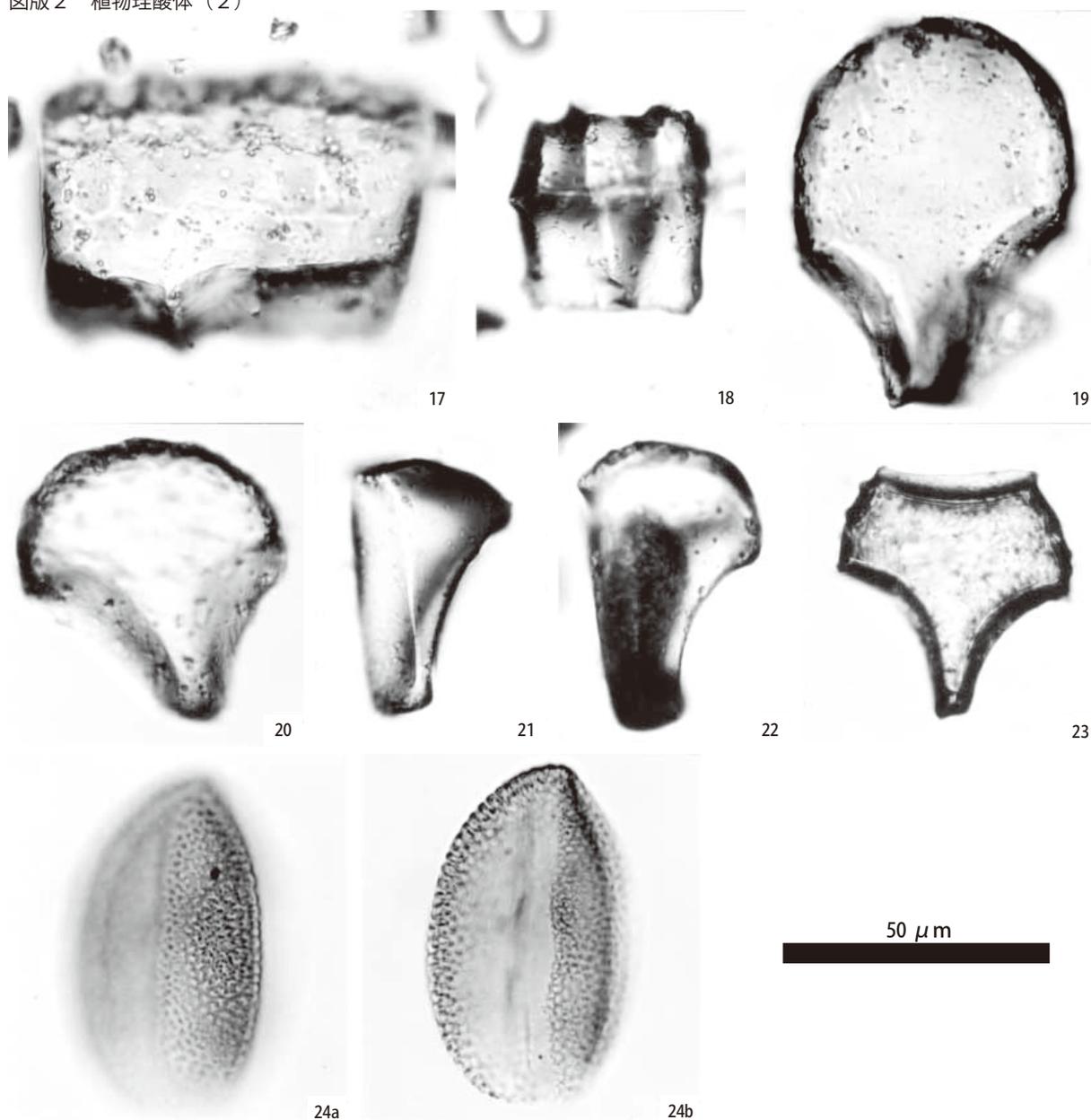
図版2 植物珪酸体 (1)



- 1 イネ属短細胞珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 2 ヒエ属短細胞珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 3 キビ属短細胞珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 4 キビ属短細胞珪酸体 (3号水田; No. 9)
- 5 チゴザサ属短細胞珪酸体 (3号水田; No. 1)
- 6 ネザサ節短細胞珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 7 ネザサ節短細胞珪酸体 (3号水田; No. 7)
- 8 ヨシ属短細胞珪酸体 (2号畑; サク No. 1)

- 9 ヨシ属短細胞珪酸体 (3号水田; No. 11)
- 10 ススキ属短細胞珪酸体 (3号水田; No. 9)
- 11 オオムギ族短細胞珪酸体 (3号水田; No. 1)
- 12 オオムギ族短細胞珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 13 イネ属機動細胞珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 14 イネ属機動細胞珪酸体 (3号水田; No. 1)
- 15 イネ属穎珪酸体 (1号畑; 畝 No. 1)
- 16 イネ属穎珪酸体 (3号水田; No. 9)

図版2 植物珪酸体 (2)



- 17 キビ属機動細胞珪酸体 (2号畑;サク No. 1)
- 18 ネザサ節機動細胞珪酸体 (3号水田;No. 9)
- 19 ヨシ属機動細胞珪酸体 (2号畑;サク No. 1)
- 20 ヨシ属機動細胞珪酸体 (3号水田; No. 11)

- 21 ウシクサ族機動細胞珪酸体 (3号水田;No. 9)
- 22 ウシクサ族機動細胞珪酸体 (1号畑;畝 No. 1)
- 23 シバ属機動細胞珪酸体 (1号畑;畝 No. 1)
- 24 ソバ属 (3号水田;No. 1)

第4節 樹種同定

十二廻り遺跡1号井戸及び万蔵寺廻り遺跡IV区2・10号住居からは炭化材が検出されている。特に2棟の住居は焼失しており多くの炭化材が残存しており、その多くが建築部材と思われることから使用された樹種を明らかにするために樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した結果は以下のとおりである。

I 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の樹種同定

1. はじめに

万蔵寺廻り遺跡は群馬県北群馬郡吉岡町に位置し、利根川の河岸段丘上の低地に立地した10～11世紀に形成されたと考えられている集落跡である。ここでは、万蔵寺廻り遺跡の10世紀後半から11世紀前半にあたとされるIV区2号住居跡、10世紀後半にあたとされるIV区10号住居跡から出土した炭化材98試料の樹種同定結果の報告を行う。炭化材試料は概ね焼失住居跡の建築材であると考えられている。10号住居には横槌や縦杵、机脚、何らかの紡織具の炭化木製品があるとされているが、炭化材の形状からは製品かどうかを判別できなかった。

2. 炭化材樹種同定の方法

樹種同定用の炭化材を選び出す際には、材の3方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成することが可能な大きさの炭化材を選び出した。このとき実体顕微鏡下で観察を行い、横断面の道管配列が異なる複数種の炭化材片が認められた試料については、-1、-2と枝番号を付し分けて同定を行なった。このため試料総数は107試料となった。なお、コナラ節とクヌギ節、クリは実体顕微鏡で同定が可能なためこの時点で同定を行なった。

次に、走査電子顕微鏡写真を撮影するため、材の3方向の断面を作成し材組織を観察、撮影した。走査電子顕微鏡用の試料は3断面を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料台を作成した。この後試料台を乾燥させ、金蒸着を施し走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-T100型）で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版（図版1～7）を添付し、その材組織を結果に記載した。なお、同定を行なった残りの炭化材片は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果

各試料の樹種同定結果の一覧を表1に示した。同定の結果、針葉樹であるモミ属、スギ、落葉広葉樹であるヤナギ属・サワグルミ・カバノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）・クリ・ケヤキ・クワ属・サクラ属・カエデ属・トチノキ・シナノキ属・リョウブ・ツツジ科の合計17分類群とススキ属1分類群が認められた。なお、材組織の保存状態は良いが、既知の材組織の記載と特徴が合致しないため、環孔材A、散孔材Aまでの記載に留めたものが2分類群認められた。また、表1には保存状態が悪いが、炭化材片が小さく試料台を作成することができなかったために針葉樹、散孔材、同定不可までの記載に留めた試料も記した。このほか、表1のリスト上には記してあるが、試料がないものについては同定不能と記し、この試料が7試料ある。

第6章 科学分析

次に、同定が確定した分類群の点数を述べる。10号住居跡には炭化材が94試料あり、このうち、コナラ節が21試料と最も多く産出し、次いでクヌギ節が14試料、クリが8試料、ヤナギ属5試料、カバノキ属・ブナ属各4試料、モミ属・シナノキ属3試料、クワ属・トチノキ・ススキ属各2試料、スギ・サワグルミ・ケヤキ・カエデ属・リョウブ・ツツジ科が各1試料産出した。

2号住居跡には炭化材が13試料あり、このうち、カエデ属が5試料、クヌギ節が2試料、ブナ属・クリ・ケヤキ・クワ属・サクラ属が各1試料産出した。

次に同定された樹種の記載を行なう。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 (1a~1c) W15

仮道管および放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は全て放射柔細胞によって構成され2~20細胞高になり、放射柔細胞の壁は厚くじゅず状肥厚を有する。放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個存在する。日本に分布するモミ属には、北海道に分布するトドマツ、亜高山帯など高標高域に分布するシラビソ・オオシラビソ、標高1,000~2,000mに分布するウラジロモミ、ウラジロモミよりも低標高域に分布するモミなどがありいずれも常緑高木である。ウラジロモミ・モミの用途はほとんど同じとされ、材は針葉樹材のうちでやや軽軟で、切削その他の加工は容易であり割裂性も大きい。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.fil.) D. Don スギ科 図版1 (2a~2c) W83-2

仮道管および樹脂細胞、放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、放射組織は2~15細胞高になる。放射断面(柾目)の放射組織と仮道管との間の分野壁孔は孔口の大きく開いたスギ型で、1分野に2~3個存在する。スギは高さ30~40mになる常緑高木である。自生状態では山地の沢沿いに多く生育する。材は比較的軽軟で切削などの加工は容易であり、乾燥も容易で割裂性が大きい。

(3) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版1 (3a~3c) W20

やや小型の道管が、単独または放射方向に数個複合して散在する散孔材である。放射組織は単列で異性である。道管の穿孔は単穿孔であり、道管と放射組織間の壁孔は比較的大きな蜂の巣状の交互壁となる。ヤナギ属樹木の材は軽軟で、切削その他の加工は容易であるが、耐朽性は低いとされる。高木から低木まで様々な種があり、日本では約40種類が報告されている。

(4) サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc. クルミ科 図版2 (4a~4c) W1

単独で大型の道管が散在し、柔細胞が短接線状に1列に連なる散孔材である。放射組織は同性で1~2細胞幅と細く、2~20細胞高になる。道管の穿孔は単穿孔であり、道管の側壁は交互壁孔がみられる。サワグルミは高さ10~20mになる落葉高木で山地の川沿いの砂礫地に生育する樹種である。材は軽軟な白色材であり、切削そのほかの加工はとて良いとされる。

(5) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版2 (5a~5c) W39

中径の道管が2~5個放射方向に連なる散孔材である。放射組織は異性ないし同性で、1~4列となる。道管の穿孔は単穿孔、道管の側壁には細かい交互壁孔が認められる。カバノキ属はシラカンバ、ミズメなど11種があり、多くは陽樹で山火事跡や開放地に純林を作り易い樹種である。

(6) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版2 (6a~6c) W4

小型で単独の道管が散在する、道管の占める割合が高い散孔材である。道管径は早材部から晩材部に向かって径を減じる。放射組織は単列でほぼ同性、または集合放射組織から構成される。道管の穿孔は階段穿孔および単穿孔であり、放射組織と道管との壁孔は階段壁孔となる。ブナ属には落葉高木であるブナとイヌブナがあ

り、両種ともに温帯から冷温帯林を代表する樹種である。ブナの材は緻密でやや重硬であるが、切削そのほかの加工は困難ではない。イヌブナの材はブナよりも重硬なことが多く、狂いも大きいとされる。

(7) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版3 (7a~7c) W51

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた壁の薄い角張った道管が配列する環孔材である。放射組織は同性の単列および集合放射組織から構成される。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は柵状となる。コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワなどが含まれる。代表的なコナラ節であるミズナラの材は広葉樹材のうちでは重硬な方であり、切削などの加工はやや困難で割れが生じやすいとされる。同じく代表的なコナラ節であるコナラはミズナラよりも重硬とされ加工しにくく、乾燥で割れが生じやすいとされている。

(8) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版3 (8a~8c) W28

大型の道管が年輪界において並び、孔圏外の道管は径を減じた円形の小道管が放射方向に並ぶ環孔材である。放射組織は同性で単列であるが集合放射組織も伴う。道管の穿孔は単穿孔で、道管と放射組織の壁孔には柵状の壁孔が認められる。クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、本州（岩手県・山形県以南）・四国・九州に分布する高さ30mの落葉高木であり、丘陵から山地に生育する。

(9) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版3 (9a~9c) W50

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。放射組織は単列で同性である。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は柵状である。クリは北海道（石狩・日高地方以南）・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木で高さ20mほどになる。材は耐朽性が強く、水湿に耐え、保存性がきわめて高い。

(10) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版4 (10a~10c) W82-2

大型の道管が年輪界において1列に並び、孔圏外の小道管は数個複合して接線状に並ぶ環孔材である。放射組織は5細胞幅程度で紡錘形のものが目立ち、上下には大型の直立細胞がある。道管は単穿孔であり、小道管にはらせん肥厚がみられる。ケヤキは北海道・本州・四国・九州の溪畔林や丘陵部、山地によく生育する高さ20mほどの落葉高木である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(11) クワ属 *Morus* クワ科 図版4 (11a~11c) W86-2

大型の道管が年輪界において並ぶ環孔材である。道管は孔圏部において単独あるいは2・3個複合し、孔圏外では小塊状に複合して分布する。放射組織は紡錘形で1~6細胞幅となり主に平伏細胞から構成されるが、上下端には直立細胞が見られる。道管の穿孔は単穿孔であり、壁孔は交互壁孔となる。小道管にはらせん肥厚が存在する。クワ属は高さ3~10mになる落葉低木であり、ケグワ、マグワ、ヤマグワなど5種がある。

(12) サクラ属 *Prunus* バラ科 図版4 (12a~12c) W87

小型の道管が散在する散孔材である。年輪界で道管は並ぶ傾向がありやや環孔性を示している。放射組織はほぼ同性で1~4細胞幅、道管には交互壁孔とらせん肥厚を伴い、道管は単穿孔である。日本にはモモやウメなど22種があり、そのうち15種が自生する。主なものにウワミズザクラ、ヤマザクラなどがある。落葉小高木~落葉高木で比較的向陽地を好む樹種である。材は耐朽、保存性が高く、光沢美がある。

(13) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版5 (13a~13c) W90

小型の道管が放射方向に2・3個連なって散在する散孔材である。放射組織は1~3細胞幅の平伏細胞からなる同性で、紡錘形となる。道管の穿孔は単穿孔であり、道管には交互状の壁孔およびらせん肥厚が発達する。カエデ属には、イロハモミジやイタヤカエデなど28種がある。

第6章 科学分析

(14) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版5 (14a～14c) W57

小型の道管が単独かあるいは2～4個複合して放射方向に連なって散在する散孔材である。放射組織は単列であり規則的な層階状配列となる。道管は単穿孔であり、側壁には交互壁孔とらせん肥厚が認められる。トチノキは高さ20～30mになる落葉高木で、北海道(南部)・本州・四国・九州に分布し、主として溪谷沿いの肥沃地に生育する。材はやや軽軟で、切削そのほかの加工はきわめて容易である。

(15) シナノキ属 *Tilia* 図版5 (15a～15c) W2

小型の道管が放射方向に2・3個複合して散在する散孔材である。柔細胞は短接線状に配列する。放射組織は同性で3～4細胞幅となり、紡錘形から角張った矢じり型を呈する。道管は単穿孔であり、らせん肥厚を伴う。シナノキ属には、落葉高木になるシナノキやボダイジュなど5種があり、山地域に多く分布する樹種である。

(16) リョウブ *Clethra barvinervis* Sieb. et Zucc. リョウブ科 図版6 (16a～16c) W48

小型の道管が散在する散孔材で、放射組織は異性で1～2列となる。道管は階段数の非常に多い階段穿孔となる。山地に生育し高さ3～6mになる落葉小高木で、北海道南部・本州・四国・九州の乾いた林内に生育する。

(17) ツツジ科 Ericaceae 図版6 (17a～17c) W85

小型の道管が散在する散孔材で、放射組織は異性で1～2列となる。道管は単穿孔または階段数の少ない階段穿孔となる。常緑または落葉の低木または高木になる。日当たりの良い岩地や風当たりの強い場所を好んで生育するものが多い。

(18) 環孔材A Ring-porous woodA 図版6 (18a～18c) W47

やや中型の道管が年輪界においていびつに並ぶ環孔材である。晩材部において小道管は2・3個複合する。道管は単穿孔であり、放射組織は同性となる。以上の観察では落葉広葉樹であるクサギに類似するものと考えられるが、決め手となる特徴が認められないため、ここでは環孔材Aとした。

(19) 散孔材A Diffuse-porous woodA 図版7 (19a～19c) W86-3

小型の道管が均一に分布する散孔材である。放射組織は異性で2～3列となり、道管は階段数の高い階段穿孔となる。以上の観察結果に合致する既知の樹種の記載がないため、ここでは散孔材Aとした。

(20) ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版7 (20a) W80

向軸側に原生木部、その左右に2個の後生木部と背軸に篩部の3・4個の穴を持つ維管束である。維管束は薄壁の繊維鞘に囲まれ散在して配置する。表皮側に向かって維管束は小さくなり、それに伴い繊維鞘の細胞は厚壁になる。また、表皮近くで維管束周囲の細胞が厚く発達する。ススキ属には沼や沢に生育するオギ、茅葺きに用いるススキ、このほかトキワススキやカリヤスモドキ、カリヤスの5種がある。

4. 考察

表2に各住居跡の樹種構成を示した。今回の同定で特徴的であったのが、コナラ節とクヌギ節の多産であった。山田(1993)による関東地方北部の8～11世紀にかけての住居跡出土樹種同定結果の集計をみると、古代以前のコナラ節やクヌギ節が多産する傾向が継続していることが示されている。今回の結果もそれと同様の傾向であり、2号・10号住居跡を合わせたコナラ節とクヌギ節の産出割合はややコナラ節が多く全体の19.6%、クヌギ節は15.0%を占めていた。

ここで、周辺遺跡の焼失住居跡の炭化材樹種同定の例をみる。群馬県内において古代に相当する遺跡でのまとまった量の建築材の炭化種同定例がないため、ここでは古墳時代の同定例と比較して検討を行った。山田(1993)による集計をみると、古墳時代後期にあたる渋川市中筋遺跡の竪穴住居跡内の炭化材では全52試料中、

コナラ節が15試料、オニグルミ14試料、クヌギ節・ムラサキシキブ属が5試料、そのほかクリ・コクサギ・ブナ属・カバノキ属・サクラ属が同定されている。植田（2000）による安中市松井田町愛宕山遺跡の古墳時代にあたる竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定では、クリを主としてヤマウルシ・クヌギ節・ケンボナシ属・カエデ属・カヤ・モミが同定されている。高橋・田中（1996）による北橋村北町遺跡の古墳時代前期にあたる住居跡内の炭化材の樹種同定では、クヌギ節を中心とし、これにオニグルミ・カバノキ属・コナラ節・クリ・ヤマゲワ・コクサギ・カエデ属が同定されている。以上の同定例から、当地域の古墳時代から古代にかけての住居の建築材には、クヌギ節・コナラ節・クリを中心として遺跡周辺の様々な樹種を利用していたことが推察される。本遺跡でも特徴的であったのが、コナラ節およびクヌギ節を含む17種類もの樹種が産出したことであった。今回同定された樹種の生態学的特性を考慮すると、次の三つの区分に分けられると考えられた。一つ目は遺跡近隣の低標高域の二次林からの材利用である。この区分に当てはまると考えられるのがコナラ節・クヌギ節・クリ・クワ属・リョウブ・ツツジ科であり、これらは関東地方で二次林を構成する代表的な樹種である。

二つ目は遺跡よりもやや高い立地に位置する山地域からの材利用である。モミ属・スギ・カバノキ属・ブナ属・シナノキ属などはこれにあてはまると考えられ、これらの分類群の多くの樹種は本遺跡が位置する低標高域には生育せず、山地域に多く生育する樹種である。このことから、遺跡近くに所在する榛名山（榛名富士、標高1391m）や赤城山（黒檜山、標高1828m）などのやや標高の高い山地域からの樹種利用が考えられた。

三つ目は遺跡近隣に位置する河川域からの材利用である。これにあてはまるのが、ヤナギ属・サワグルミ・ケヤキ・トチノキであり、これらの樹種は湿潤な河川域に多く生育する。本遺跡は利根川の河岸段丘上に位置することからも、これらの樹種の産出は河川域に近い立地環境を反映していると考えられる。今回、このように三つの区分を通してみると、森林の利用範囲が遺跡近隣の二次林に留まらず山地域などやや離れた遠隔地からの材利用も伴っていたことが明らかとなり、樹種構成は遺跡周辺の多様な立地環境を反映していることが考えられた。

引用文献

- 高橋敦・田中義史（1996）北町遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定。「北町遺跡・田ノ保遺跡」：347-355，北橋村教育委員会。
 植田弥生（2000）愛宕山遺跡の第4号住居址出土炭化材の樹種同定。「愛宕山遺跡」：64-73，群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 山田昌久（1993）日本列島における木質出土遺跡文献集成—用材からみた人間・植物関係史。「植生史研究特別第1号」242p，日本植生史学会。

第6章 科学分析

表1 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の樹種同定結果(1)

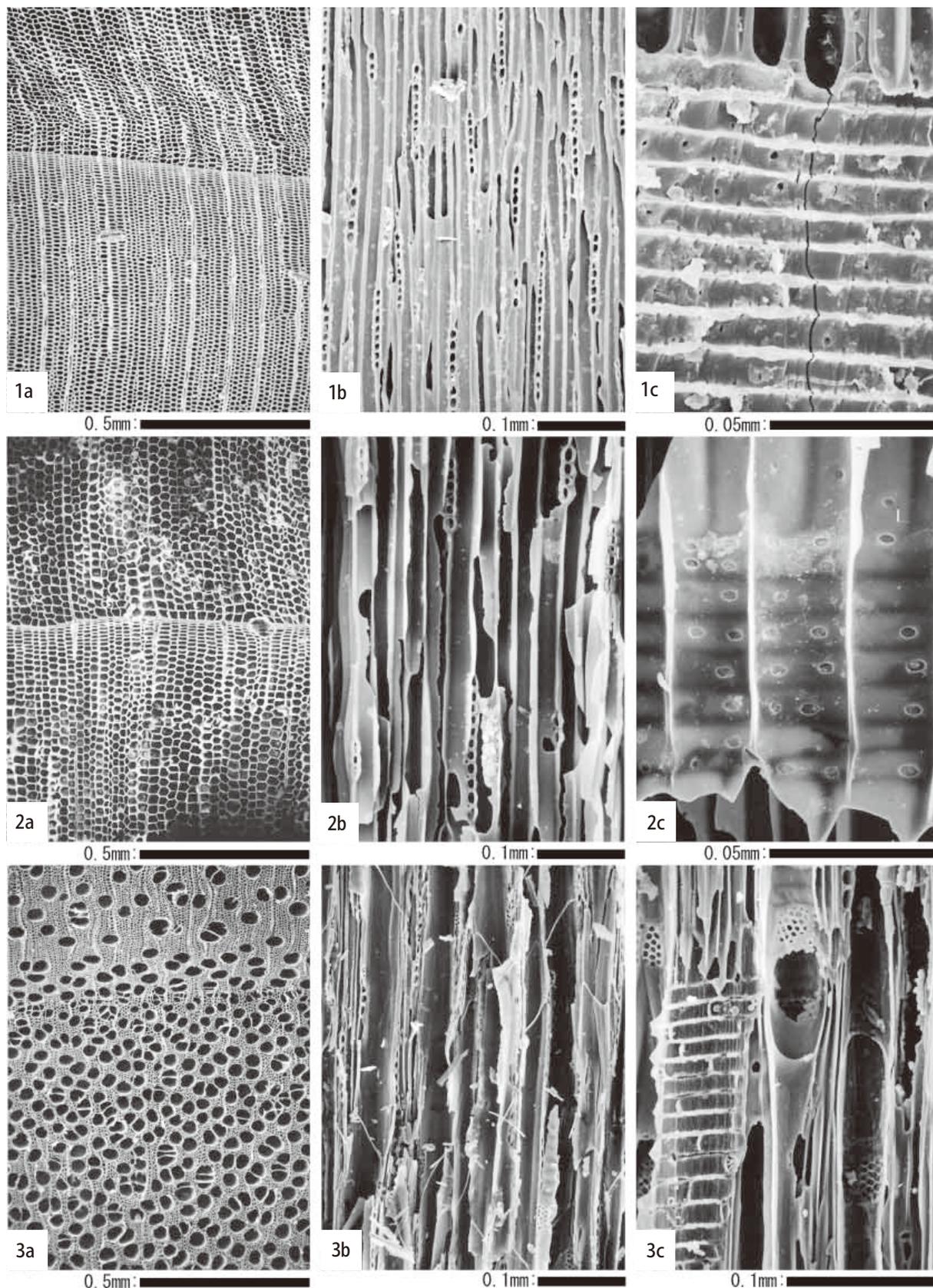
番号	樹種	区	遺構番号	遺構	試料番号	細分	備考
1	サワグルミ	4	10	住居跡	1		
2	シナノキ属	4	10	住居跡	2		
3	シナノキ属	4	10	住居跡	3		
4	ブナ属	4	10	住居跡	4		
5	ブナ属	4	10	住居跡	4	b	
6	クヌギ節	4	10	住居跡	5		
7	同定不能	4	10	住居跡	6		
8	ヤナギ属	4	10	住居跡	8		
9	クリ	4	10	住居跡	9		
10	ブナ属	4	10	住居跡	10		
11	クヌギ節	4	10	住居跡	11		半径1.2cm
12	クヌギ節	4	10	住居跡	12		
13	コナラ節	4	10	住居跡	13		
14	同定不能	4	10	住居跡	14		
15-1	モミ属	4	10	住居跡	15		
15-2	クヌギ節	4	10	住居跡	15		
16	クヌギ節	4	10	住居跡	17		半径1.6cm
17	クヌギ節	4	10	住居跡	18		
18	同定不可	4	10	住居跡	19		
19	クヌギ節	4	10	住居跡	20		
20	ヤナギ属	4	10	住居跡	21		
21	クヌギ節	4	10	住居跡	22		半径2.5cm
22	コナラ節	4	10	住居跡	23		
23	クリ	4	10	住居跡	24		
24-1	コナラ節	4	10	住居跡	25		
24-2	散孔材	4	10	住居跡	25		
25-1	クヌギ節	4	10	住居跡	26		
25-2	ヤナギ属	4	10	住居跡	26		
26	同定不能	4	10	住居跡	27		
27	クヌギ節	4	10	住居跡	27	b	
28	クヌギ節	4	10	住居跡	28		直径2.0cm
29	シナノキ属	4	10	住居跡	30		
30	コナラ節	4	10	住居跡	31		
31	コナラ節	4	10	住居跡	32		
32	コナラ節	4	10	住居跡	33		
33	クリ	4	10	住居跡	36		
34	同定不能	4	10	住居跡	37		
35	コナラ節	4	10	住居跡	37	b	直径2.5cm
36	コナラ節	4	10	住居跡	38		
37	コナラ節	4	10	住居跡	39		
38	同定不可	4	10	住居跡	40		
39	カバノキ属	4	10	住居跡	41		
40	カバノキ属	4	10	住居跡	41	b	
41	カバノキ属	4	10	住居跡	42		
42	コナラ節	4	10	住居跡	43		
43	コナラ節	4	10	住居跡	44		
44	コナラ節	4	10	住居跡	45		
45	同定不能	4	10	住居跡	46		
46	同定不能	4	10	住居跡	47		
47	環孔材A	4	10	住居跡	48		
48	リョウブ	4	10	住居跡	49		半径1.3cm
49	コナラ節	4	10	住居跡	50		
50	クリ	4	10	住居跡	51		
51	コナラ節	4	10	住居跡	52		
52	環孔材A	4	10	住居跡	53		
53	環孔材A	4	10	住居跡	54		
54	トチノキ	4	10	住居跡	55		
55	同定不可	4	10	住居跡	56		
56	同定不能	4	10	住居跡	57		
57	トチノキ	4	10	住居跡	58		
58	カエデ属	4	10	住居跡	59		半径1.0cm
59	モミ属	4	10	住居跡	61		
60	ブナ属	4	10	住居跡	62		
61	ヤナギ属	4	10	住居跡	63		
62	コナラ節	4	10	住居跡	64		
63	クリ	4	10	住居跡	65		
64	コナラ節	4	10	住居跡	66		

表1 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の樹種同定結果(2)

番号	樹種	区	遺構番号	遺構	試料番号	細分	備考
65	コナラ節	4	10	住居跡	67		
66	クリ	4	10	住居跡	68		
67	同定不可	4	10	住居跡	69		
68	コナラ節	4	10	住居跡	70		
69	コナラ節	4	10	住居跡	71		
70	クワ属	4	10	住居跡	73		
71	クヌギ節	4	10	住居跡	74		直径2.0cm
72	コナラ節	4	10	住居跡	75		
73	ススキ属	4	10	住居跡	75	b	
74	カバノキ属	4	10	住居跡	76		
75	クヌギ節	4	10	住居跡	77		
76	散孔材	4	10	住居跡	78		
77	クリ	4	10	住居跡	79		
78	同定不可	4	10	住居跡	80		
79	クヌギ節	4	10	住居跡	81		
80	ススキ属	4	10	住居跡	82		
81	針葉樹	4	10	住居跡A			
82-1	ヤナギ属	4	10	住居跡D			
82-2	ケヤキ	4	10	住居跡D			
82-3	クリ	4	10	住居跡D			
83-1	コナラ節	4	10	住居跡			
83-2	スギ	4	10	住居跡			
84	同定不可	4	10	住居跡			
85	ツツジ科	4	10	住居跡土坑 1			芯部あり、直径0.9cm
86-1	モミ属	4	10	住居跡			
86-2	クワ属	4	10	住居跡			
86-3	散孔材A	4	10	住居跡			
87	サクラ属	4	2	住居跡	1		
88	クワ属	4	2	住居跡	2		
89	カエデ属	4	2	住居跡	3		
90	カエデ属	4	2	住居跡	4		
91-1	ケヤキ	4	2	住居跡	5		
91-2	カエデ属	4	2	住居跡	5		
92	カエデ属	4	2	住居跡	6		
93	散孔材	4	2	住居跡	7		
94	ブナ属	4	2	住居跡	8		
95	カエデ属	4	2	住居跡	9		
96	クリ	4	2	住居跡	10		
97	クヌギ節	4	2	住居跡	11		
98	クヌギ節	4	2	住居跡	12		

表2 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の遺構別樹種構成

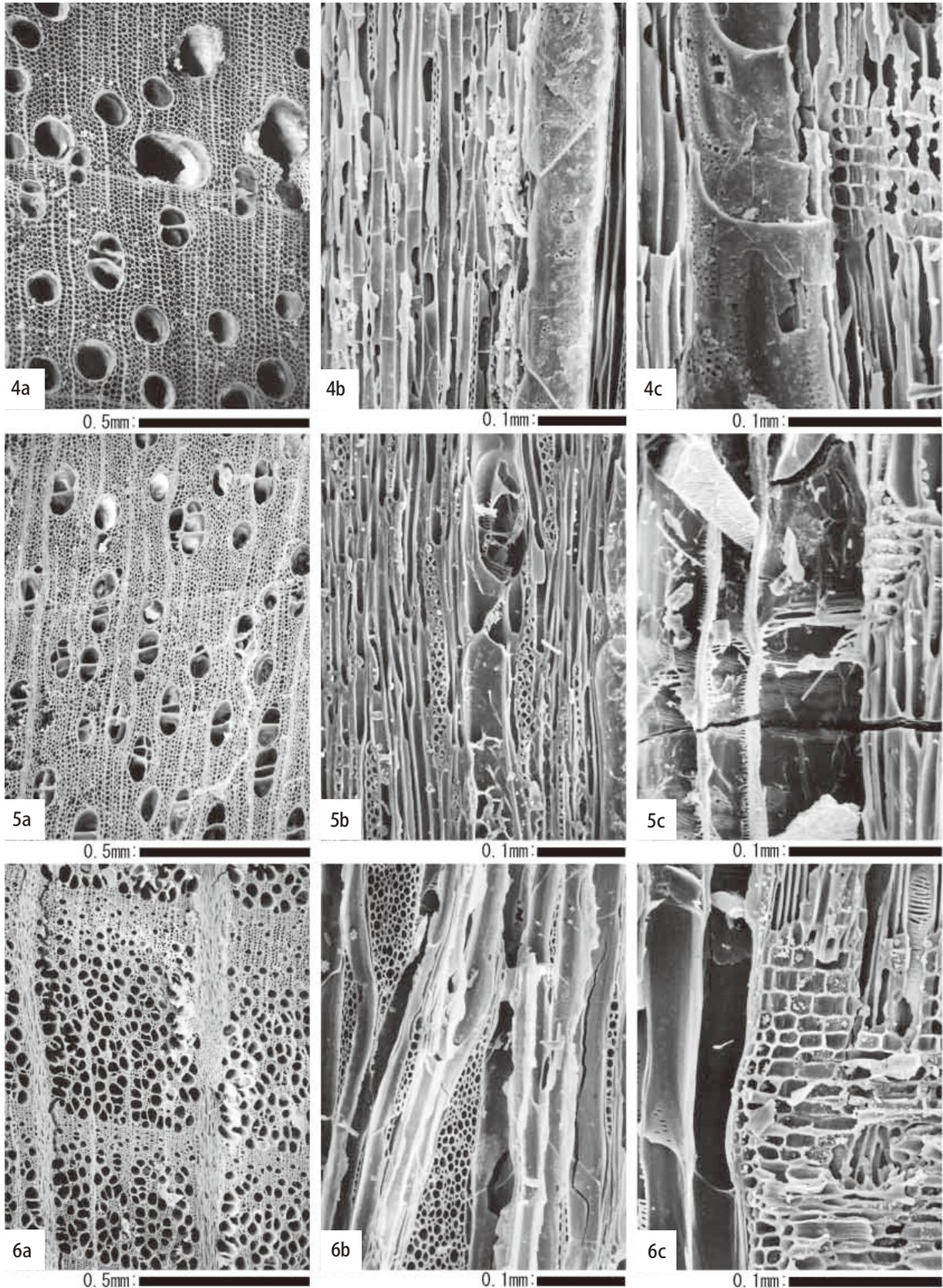
樹種タイプ	樹種	遺構名		合計	(%)
		10号住居跡	2号住居跡		
針葉樹	モミ属	3		3	2.8
	スギ	1		1	0.9
落葉広葉樹	ヤナギ属	5		5	4.7
	サワグルミ	1		1	0.9
	カバノキ属	4		4	3.7
	ブナ属	4	1	5	4.7
	コナラ節	21		21	19.6
	クヌギ節	14	2	16	15.0
	クリ	8	1	9	8.4
	ケヤキ	1	1	2	1.9
	クワ属	2	1	3	2.8
	サクラ属		1	1	0.9
	カエデ属	1	5	6	5.6
	トチノキ	2		2	1.9
	シナノキ属	3		3	2.8
草本	リョウブ	1		1	0.9
	ツツジ科	1		1	0.9
	ススキ属	2		2	1.9
不明	環孔材A	3		3	2.8
	散孔材A	1		1	0.9
	針葉樹	1		1	0.9
	散孔材	2	1	3	2.8
	同定不可	6		6	5.6
	同定不能	7		7	6.5
合計		94	13	107	100.0



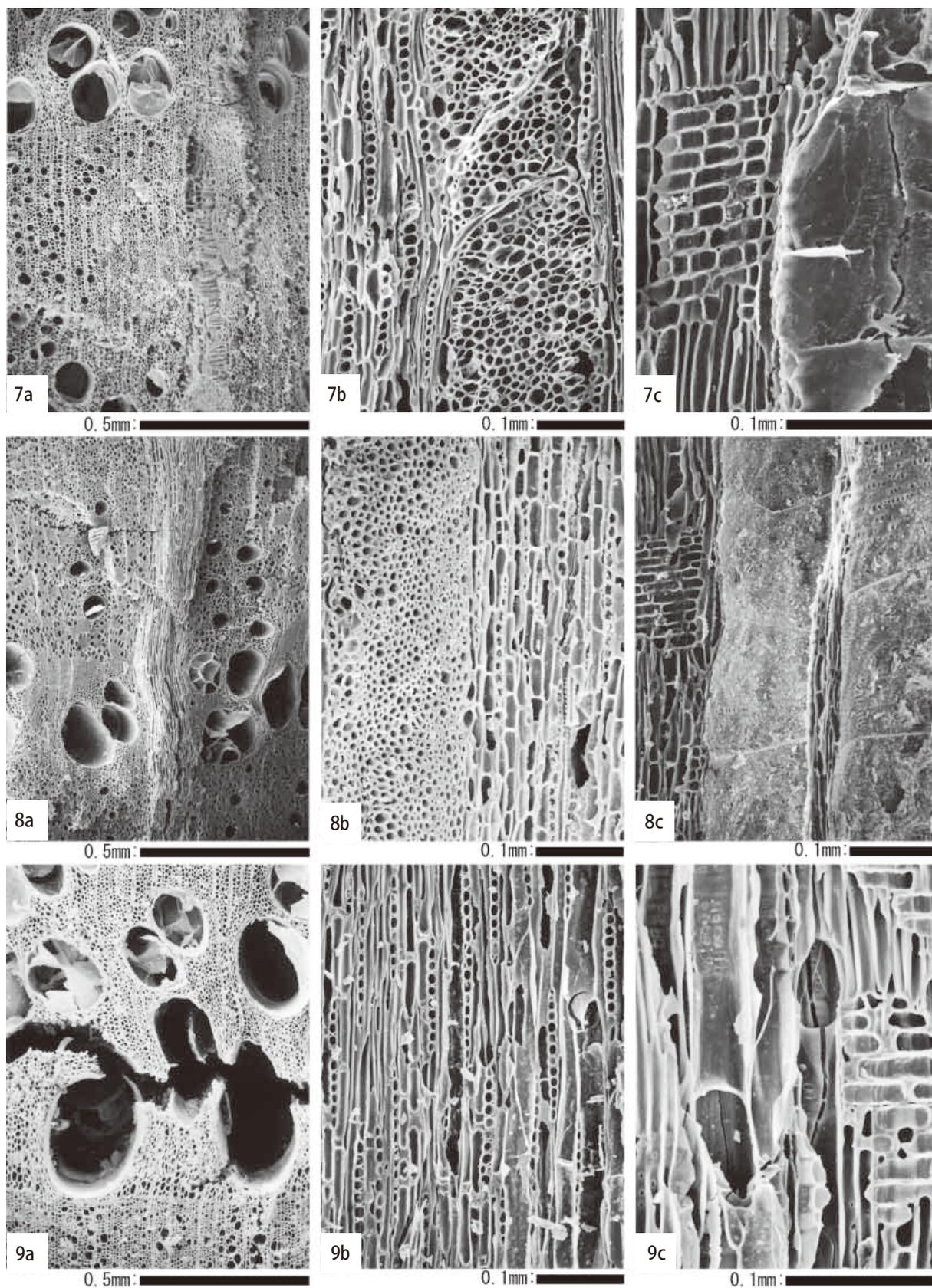
図版1 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

1a-1c: モミ属 (W15) 2a-2c: スギ (W83-2) 3a-3b: ヤナギ属 (W20)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



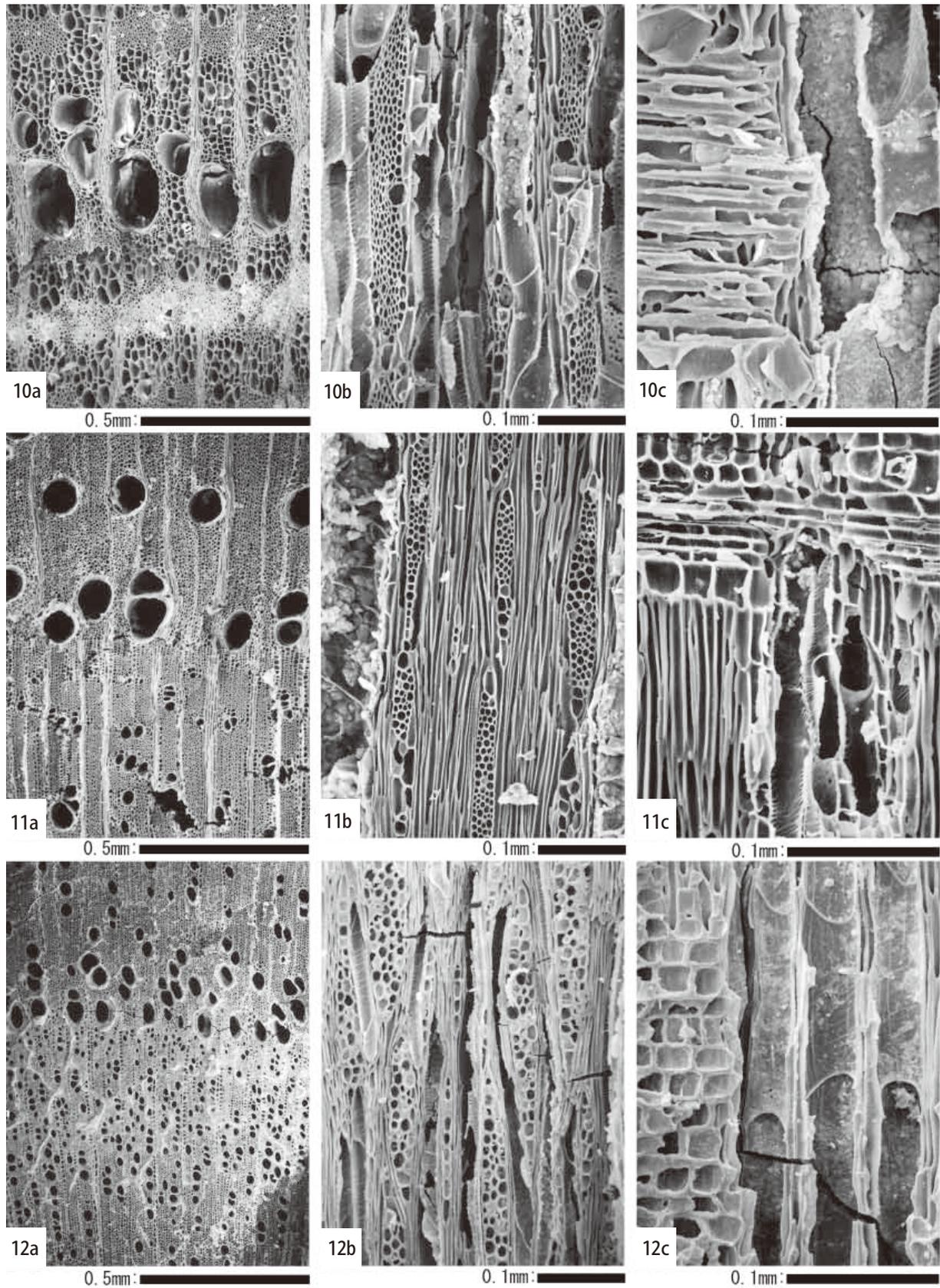
図版2 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真
4a-4c: サワグルミ (W1) 5a-5c: カバノキ属 (W39) 6a-6b: ブナ属 (W4)
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



図版3 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

7a-7c: コナラ節 (W51) 8a-8c: クヌギ (W28) 9a-9b: クリ属 (W50)

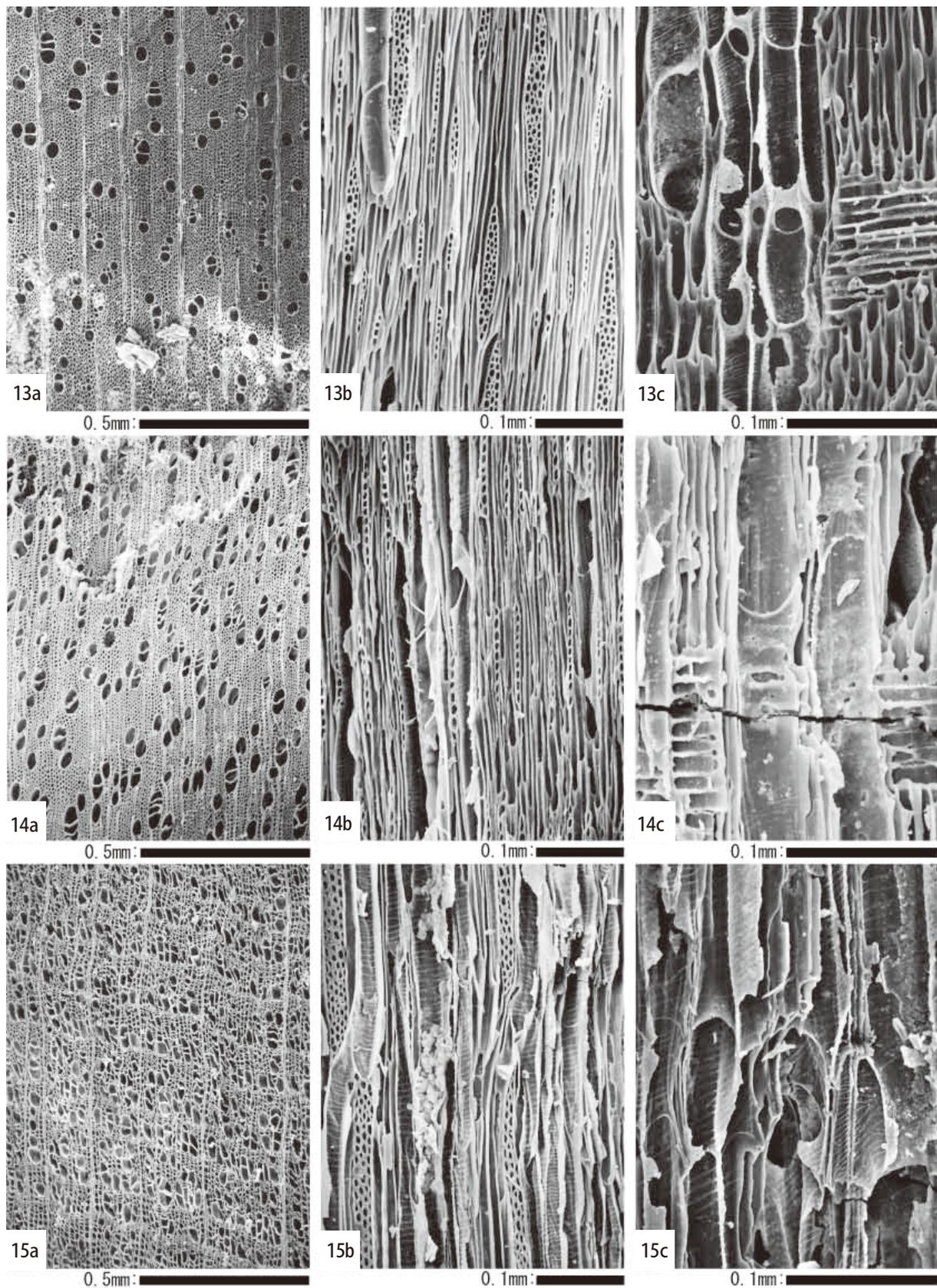
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



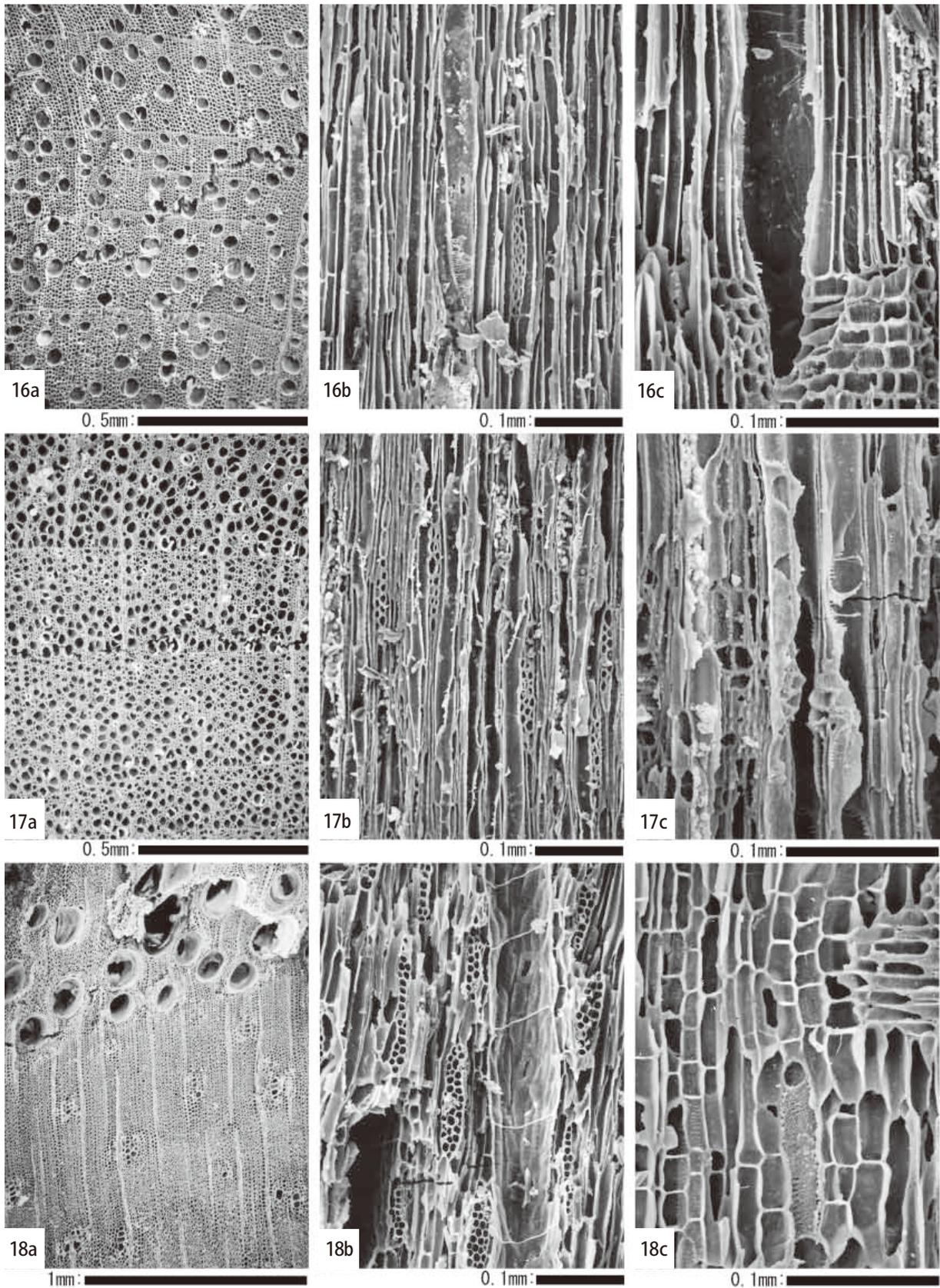
図版4 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

10a-10c: ケヤキ (W82-2) 11a-11c: クワ属 (W86-2) 12a-12b: サクラ属 (W87)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



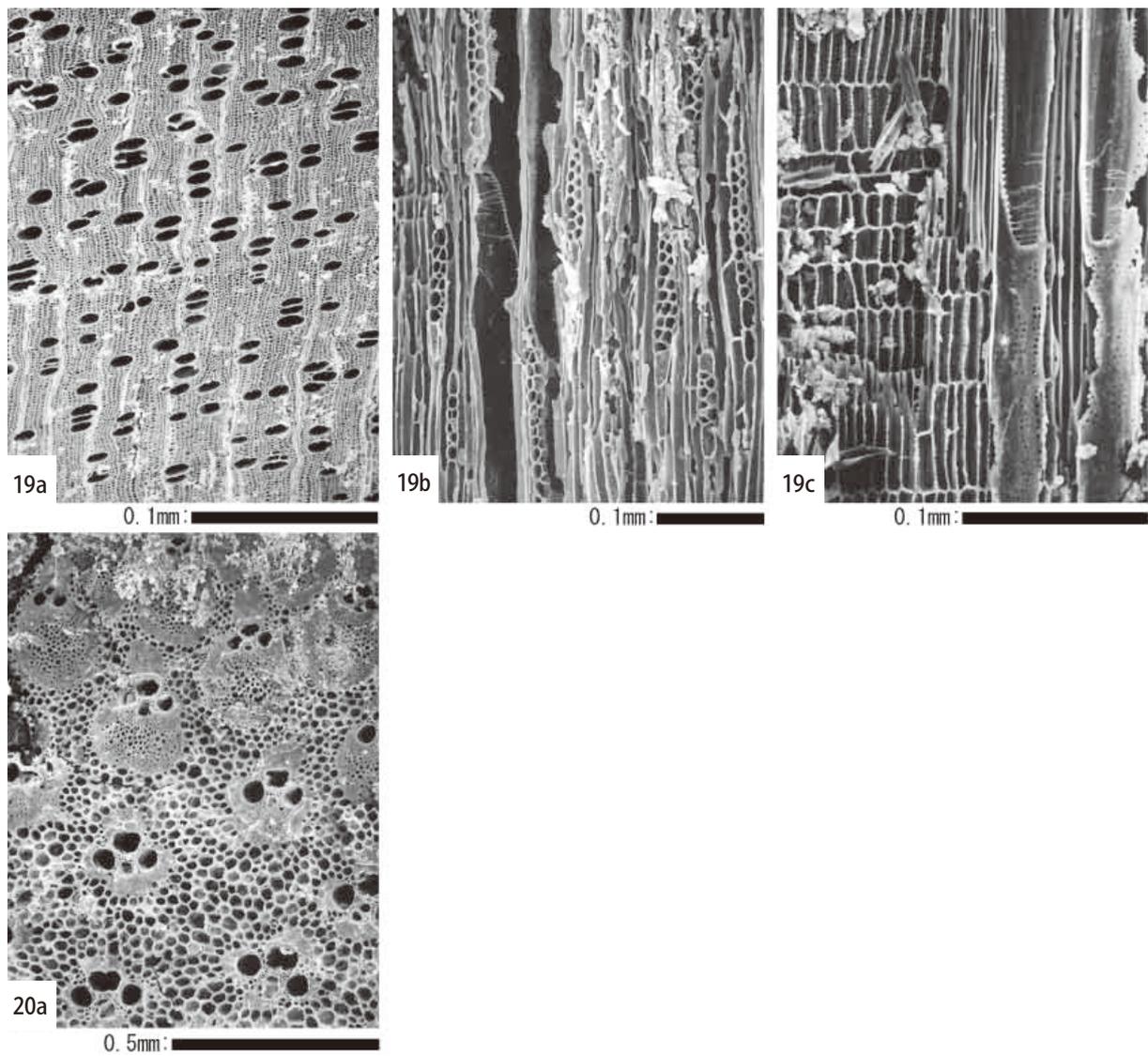
図版5 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真
13a-13c: カエデ属(W90) 14a-14c: トチノキ(W57) 15a-15b: シナノキ属(W2)
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



図版6 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

16a-16c: リョウブ (W48) 17a-17c: ツツジ科 (W85) 18a-18b: 環孔材 A (W47)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



図版7 万蔵寺廻り遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真

19a-19c: 環孔材 A (W86-3) 20a: ススキ属 (W80)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

II 十二廻り遺跡井戸出土材の樹種同定

十二廻り遺跡は、北群馬郡吉岡町大字漆原地内の利根川左岸の低位段丘面に立地する平安時代から中世にかけての遺跡である。ここでは、I-3区の井戸（1号井戸）から出土した1点（参-1）の樹種同定を行った。

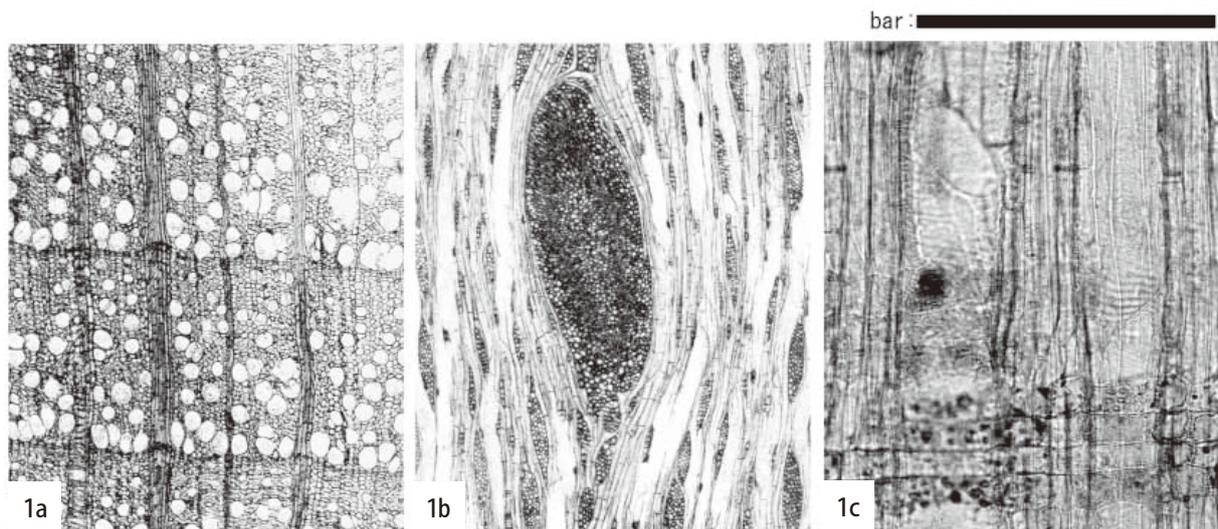
同定の結果、ブナ属であった。その材組織を記載し、3方向（横断面、接線断面、放射断面）の組織写真を提示する。

材組織記載

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版1 1a～1c（参-1）

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は階段数が10～20本の階段穿孔と単穿孔がある。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと同細胞幅が広く背の高い広放射組織があり、道管との壁孔は大きなレンズ状で交互に配置している。

ブナ属は温帯域の極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。材組織からこの2種を識別することはできない。



図版1 十二廻り遺跡出土ブナ属の材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c: ブナ属（参-1）

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar: a=1.0mm b=0.1mm c=0.2mm

第5節 漆器の塗膜分析

桑原田遺跡では水田跡などから漆器が出土しており、その塗膜が漆であるのか、また、使用されている顔料を明らかにするために塗膜分析を株式会社パレオ・ラボに委託した結果は以下のとおりである。

1. はじめに

桑原田遺跡は、北群馬郡吉岡町大字漆原地内に所在するが、調査では江戸時代の水田跡や平安時代の集落が検出され、漆器が出土している。ここでは、この漆器の塗膜薄片を作成し光学顕微鏡による塗膜構造の観察と赤外分光分析による漆の確認、元素分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、木胎部から破片となって剥がれていた漆器塗膜片1試料である(図版1)。漆器塗膜片から、2mm角程度の塗膜部分を採取した後、エポキシ樹脂で包埋し、厚さ30 μ m前後の薄片を作成した。塗膜薄片は、光学顕微鏡を用いて塗膜構造について観察した。元素分析は、作成した薄片についてエネルギー分散型X線マイクロアナライザー(日本電子(株)製JSM-5900LVとJES-2200)を用いた。測定条件は、電圧30kV、分解能3.0nm、Si(Li)検出器、測定時間300秒である。分析は、主な塗膜層について点分析を行った。なお、定量計算は、FP法(ファンダメンタルパラメータ法)で計算した。赤外分光分析用の試料は、典型的な部分において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外線吸収を測定した。

3. 結果および考察

以下に、塗膜薄片の光学顕微鏡観察と元素分析および赤外分光分析の結果について述べる。

表1 漆器塗膜の元素分析結果(EDS分析によるFP法;単位%)

試料No.	分析No.	塗膜層位	C	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	HgO	total
1	1	付着土	17.94	0.33	0.70	3.15	11.58	0.42	0.80	0.30	-	0.47	0.17	64.00	-	99.86
2	2	塗膜層(c1層)	50.32	-	0.13	0.22	2.42	0.07	0.69	0.22	0.08	0.55	0.16	45.12	-	99.98
3	3	黒色付着物(下地層)	73.07	-	0.05	0.75	2.31	0.11	1.86	0.33	0.04	3.14	0.07	18.27	-	100.00

塗膜薄片の光学顕微鏡観察の結果、塗膜はc1層のみであり、黒色を呈する。元素分析では、鉄(FeO)が高いことから赤色顔料はベンガラである(表1)。下地層(b層)は、肉眼的には黒色付着物として観察され、断面観察では炭化粒子と思われる。元素分析では炭素が高い割合を示す。付着土は、断面において赤色を呈し、元素分析では、鉄(FeO)が比較的多く含まれている。図版1~6に、生漆とともに、試料の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)である。

なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。表2には、生漆の吸収位置とその強度を示す。赤外分光分析を行った結果、生漆の成分である吸収ピーク位置(No.7など)に若干の吸収が見られることから、漆と思われる。ただし、吸収No.9付近にゴム質特有の大きな吸収が見られることから、ゴム質の残存度が高く劣化が著しいことを示す。

表2 生漆の赤外線吸収位置とその強度

吸収No.	生漆	
	位置	強度
1	2927.41	73.032
2	2856.06	78.104
3	1714.41	83.819
4	1625.70	86.624
5	1455.99	84.262
6	1351.86	86.076
7	1276.65	83.993
8	1211.08	84.590
9	1091.51	86.644
10	800.31	93.725
11	727.03	93.763

第6節 炭化種実の同定

十二廻り遺跡、阿久津遺跡、万蔵寺廻り遺跡では、住居の竈などから炭化種実が出土している。これらの種実同定を通して、当時の栽培されていた植物を明らかにすることで稲作をはじめとした農耕の実態を把握するために種実同定を株式会社パレオ・ラボに委託した結果は以下のとおりである。

I 阿久津遺跡住居跡竈内から出土した炭化種実

1. はじめに

阿久津遺跡は、群馬県の中央部、北群馬郡吉岡町大字漆原に所在し、榛名山東麓の河岸段丘面（低位面）上に立地する。ここでは、平安時代の栽培・利用植物を明らかにする一端として、住居跡竈内から出土した炭化種実を検討した。

2. 試料と方法

炭化種実の検討は、I区1号住居跡の竈内より出土した1試料（コードS01）について行った。炭化種実は、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により、1.5mm目の篩を用いて水洗選別し、抽出された。炭化種実は、同定可能なものと不明種実とに分け、同定されたものは分類群・部位ごとに区分し、全てスクリュウ瓶に保存した。仕分け・同定・計数・計測は、実体顕微鏡下で行った。検討した試料は、全て（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 出土した炭化種実

同定された分類群数は、草本のみ4分類群であり、イネ炭化胚乳、オオムギ炭化胚乳、オオムギ-コムギ炭化胚乳、マメ科炭化種子であった。また、1個のみ不明炭化種実の微小破片が含まれていた。出土個数は、イネが完形1個、オオムギが完形4個、オオムギ-コムギが完形1個、マメ科が完形1個であった。

4. 形態記載

(1) イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。両面の表面には、縦方向の2本の筋が入り、3等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。表面の一部に種皮が張り付き、胚が残存するので玄米である。長さ5.0mm、幅2.5mm程度。

(2) オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

側面観は楕円形、断面も楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、類三角形の胚がある。なお、オオムギ-コムギとしたものは、状態が悪く、両者を識別し得なかった。

(3) マメ科 Leguminosae 炭化種子

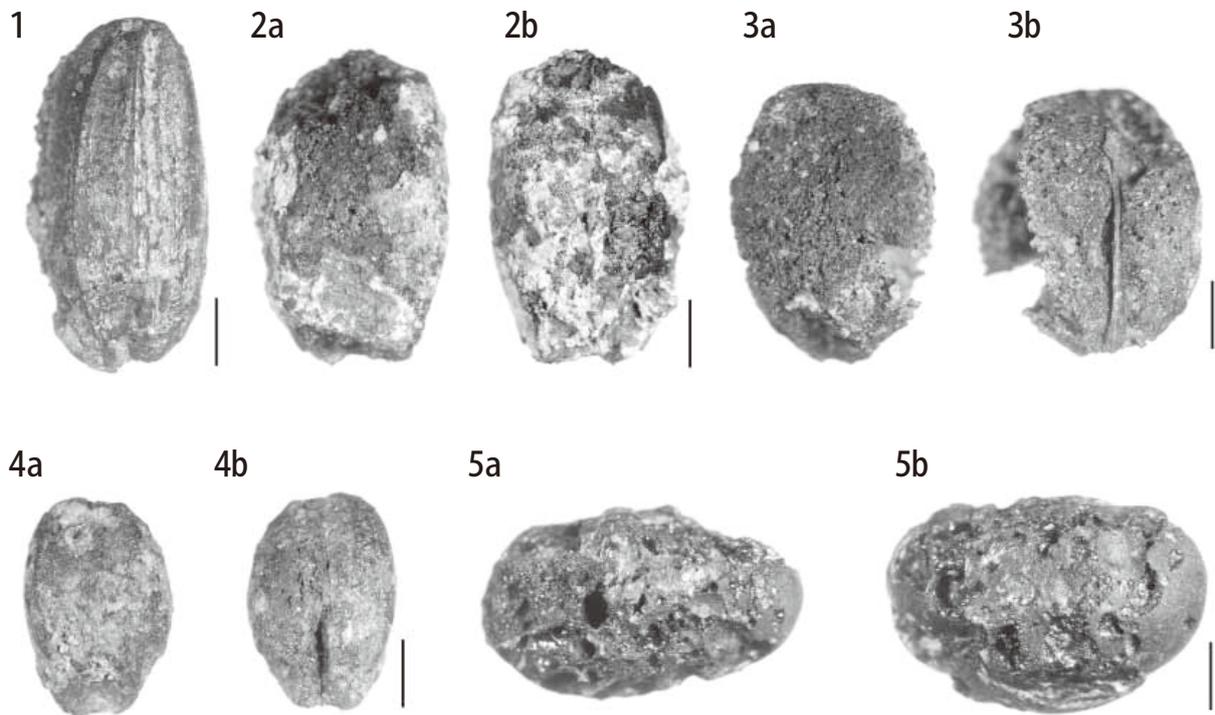
長さ4.4mm、幅3.0mm、厚さ2.6mm程度。臍は確認できない。大きさとしてはササゲ属程度であるが、扁平気味である。

(4) 不明 unknown 炭化種実

種実と思われるが、微細な破片であり、同定には至らなかった。

5. 考察

I区1号住居跡の竈内から出土した炭化種実は、イネ、オオムギ、オオムギ-コムギ、マメ科であった。竈内から出土したことから、調理段階にあったものの一部が散乱した可能性や調理後、焦げたものを竈内に廃棄した可能性などが考えられる。



阿久津遺跡出土の種実（スケールは1mm）

1. イネ、炭化胚乳 2～4. オオムギ、炭化胚乳 5. マメ科、炭化種子

II 十二廻り遺跡の土坑から出土した炭化種実

1. はじめに

十二廻り遺跡は、群馬県の中央部、北群馬郡吉岡町大字漆原に所在し、榛名山東麓の河岸段丘面（高位面）上に立地する。ここでは、平安時代の栽培・利用植物を明らかにする一端として、土坑から出土した炭化種実を検討した。

2. 試料と方法

炭化種実の検討は、I区1号土坑の覆土下層より出土した1試料（コードS71）について行った。炭化種実は、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により、1.5mm目の篩を用いて水洗選別し、抽出された。炭化種実の同定・計数・計測は、実体顕微鏡下で行い、全てスクリュウ瓶に保存した。これらは、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果および若干の考察

同定された分類群は、イネ、*Oryza sativa* Linn.炭化胚乳のみで完形が5個であった。土坑から出土したが、残滓、貯蔵、祭祀などの理由により埋積したことが想定される。なお、5個のうち、状態の比較的良好な4個について計測を行った。その結果、長さ・幅（mm）は、4.2-1.9、4.6-2.4、4.1-2.1、3.4-2.0であった。



十二廻り遺跡出土の種実（スケールは1mm）

1～4. イネ、炭化胚乳

Ⅲ 万蔵寺廻り遺跡から出土した炭化種実

1. はじめに

万蔵寺廻り遺跡は、群馬県の中央部、北群馬郡吉岡町大字漆原に所在し、榛名山東麓の河岸段丘面（高位面）上に立地する。本遺跡では、平安時代（10世紀後半～11世紀前半）の住居跡や土坑などが検出されており、そこから多量の炭化種実が抽出された。ここでは、当時の栽培・利用植物を明らかにする一端として、これらの炭化種実を検討した。

2. 試料と方法

炭化種実は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、住居跡は床面と竈の土壌、土坑は覆土を1.5mm目の篩を用いて水洗選別し、抽出された。これらの炭化種実は、遺構・出土位置ごとに分けられてプラスチックケースに乾燥保存されており、合計158試料（一部試料名重複あり）について検討した。また、V区11号住居跡の一部試料（コードS番号の付いていない試料）は、(株)パレオ・ラボにより水洗洗浄され、筆者が炭化種実の抽出を行った。この試料は、合計130試料検討したうち、86試料に炭化種実が含まれていた。各試料は、炭化種実を主体としていたが、炭化材などもしばしば含み、昆虫や未炭化の不明遺体なども稀に含まれていた。炭化種実は、同定可能なものと不明種実とに分け、同定されたものは、分類群・部位ごとに区分した。更に、イネとマメ類については、計測したものと未計測のものに細分した。炭化種実以外のものは、炭化材、不明炭化物、その他に大別し、これらと炭化種実は全てスクリービンに保存した。仕分け・同定・計数・計測は、実体顕微鏡下で行った。検討した試料は、全て(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

なお、検討した遺構の時期は、10世紀後半を主体としているが、その他のものは、10世紀後半～11世紀前半（Ⅱ区2・4・7・12号住居、Ⅳ区1・2号住居、Ⅴ区7号住居）、11世紀前半（Ⅰ区1号住居、Ⅱ区8・9号住居、Ⅲ区1～3号住居、Ⅳ区6・8号住居、Ⅴ区4・8・9号住居）、不明（Ⅱ区5・6号住居、Ⅳ区5号住居、Ⅴ区4号住居）である。

3. 出土した炭化種実

全試料で同定されたのは、木本がオニグルミ、クルミ属、モモ、ブドウ属、カキノキ属、クサギの6分類群、草本がイネ、オオムギ、コムギ、キビ、ヒエ、アワ、キビ族（キビ-ヒエ-アワ）、イネ科、ホタルイ属、タデ科、アズキの仲間、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科、シソ属、ナス属、ゴマの17分類群である。草本は、一部については複数の部位があり、状態が悪いなどの理由で分類群間をハイフンで結んだものもある。これら炭化種実の各試料からの出土個数を表1（Ⅰ～Ⅳ区）、表2（Ⅴ区）に示し、遺構ごと、および遺構全体の集計個数を表3にまとめた（一部の遺構は竈、土坑などやそれ以外といった地点別にも集計した）。遺構全体で同定されたのは、完形が5436点、半分ないし破片が1834点であった。半分ないし破片を2点で完形1個分に換算すると、合計6353個が同定されたことになり、オオムギ（約33%）、イネ（約26%）、コムギ（約14%）、マメ科（約8%）、ヒエ（約7%）、オオムギ-コムギ（約4%）、アワ・ササゲ属（約2%）の順に多産する。その他は、いずれも1%未満である。以下に、遺構ごとに炭化種実の記載を示す。

(1) 各遺構の炭化種実

[Ⅰ区（1号住居、1号溝）]

- ・ 1号住居：竈からイネとコムギが僅かに得られた。
- ・ 1号溝：ヒエのみが得られた。

[Ⅱ区（1・3・7～9・12号住居）]

- ・ 1号住居：竈前ピットからササゲ属、マメ科が僅かに、竈掘り方からイネ、コムギ、キビ、ササゲ属、マメ科、ナス属が得られ、マメ科が目立った。
- ・ 3号住居：竈からタデ科、マメ科が僅かに得られた。
- ・ 7号住居：竈前ピット掘り方から炭化種実が多産した。アワ、イネ、マメ科、ヒエ、キビ族、コムギ、ヒエ-アワ、オオムギの順に多産し、ブドウ属、アズキの仲間、ササゲ属、ダイズの仲間なども僅かに得られた。キビ族が多産し、中でもアワの多産は特徴的である。竈掘り方からはマメ科のみが1点得られた。
- ・ 8号住居：床からイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、ササゲ属、マメ科、イヌコウジュ属-シソ属、シソ属などが得られ、ムギ類（オオムギ、オオムギ-コムギ、コムギ）、イヌコウジュ属-シソ属、シソ属がやや目立つ。
- ・ 9号住居：竈と土坑1から得られたが、いずれもイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ-アワが少量であった。竈ではアワ、土坑1ではマメ科も少量得られた。
- ・ 12号住居：竈からイネ、キビ族、マメ科が僅かに得られた。

[Ⅲ区（1～3号住居）]

- ・ 1号住居：竈掘り方からイネ、オオムギ、ヒエ、マメ科が僅かに、竈からムギ類のみが得られ、オオムギの方が多かった。
- ・ 2号住居：竈掘り方からオオムギ、マメ科が僅かに、竈からイネ、オオムギ、コムギ、キビ-ヒエ、ササゲ属、マメ科、シソ属が少量得られた。
- ・ 3号住居：竈関連の4試料であるが、いずれも出土量は少量であり、地点による有意な差は見られない。ブドウ属、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、マメ科、シソ属などが得られた。

[Ⅳ区（1～7・9～14号住居、9・35・36・39号土坑）]

- ・ 1号住居：竈掘り方、A、竈の3試料であり、竈でやや多産した。竈掘り方でムギ類が得られない他は概ね共通した組成であり、イネ、オオムギ、コムギ、マメ科のほか、竈ではササゲ属も僅かに得られた。全体としては、ムギ類の多産が特徴的である。
- ・ 2号住居：炭化種実が極めて多産し、遺構全体の約21%を占める出土量である。全体としては、イネが約50%、マメ科、ヒエが15%前後、オオムギが約8%、コムギが約5%、ササゲ属が約3%、シソ属が約1%であり、カキノキ属、クサギ、キビ、アワ、ホタルイ属、アズキの仲間、ダイズの仲間、ナス属などが1%未満である。遺構全体の傾向と概ね類似するが、イネがやや多く、ムギ類がやや少ない。2号住居は、A竈関連、B竈関連、土坑1～3、掘り方関連、これら以外の床面に分けて集計した。A竈関連は、イネ、マメ科の順に多く、オオムギ、コムギ、ヒエ、ササゲ属も比較的目立つ。竈内の産状は、地点による有意な差はなく、概ねイネ、マメ科の順に多い。B竈関連は、イネ、コムギ、オオムギ、マメ科の順に多い。A竈と比較すると、イネが最も多い点で共通であり、出土分類群も全く同じである。イネ以下の出土個数の順位に若干違いがあるが、両竈とも全体の出土個数がさほど多くないことを考慮すれば、有意な差はなく、ほぼ同様な産状と言える。また、B竈内の産状も地点による有意な差はなく、イネが最も多い傾向があり、オオムギ、コムギ、マメ科などが比較的多い。土坑（1号土坑表層、床面部か）は、イネ、コムギ、アズキの仲間、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科が得られ、全体の出土個数はやや少ないが、マメ類が目立つ傾向がある。土坑1、土坑2は、出土個数が少なく、イネ、マメ科が得られ、土坑1ではオオムギ-コムギ、コムギも僅かに得られた。土坑3は、ヒエ、イネの

第6章 科学分析

順に多産し、他地点では出土しないシソ属が比較的目立つ。他に、クサギ、キビ、アワ、ホタルイ属、マメ科、ナス属なども少量得られた。イネが多産するのは他地点と共通であるが、ヒエをはじめとしたキビ族の多産は特異であり、ムギ類、マメ類が非常に少ないのも特徴的である。掘り方関連は、中央部の炭化物集中地点でややまとまって出土し、イネ、マメ科が多く、オオムギ、ヒエ、ササゲ属も少量出土した。竈・土坑・掘り方以外の床面では、イネ、マメ科、オオムギ、コムギの順に多く、ヒエ、ササゲ属も若干目立つ。他に、カキノキ属、キビ、アワ、ダイズの仲間、ナス属も少量得られた。ムギ類については、他地点では概ねコムギの方が若干多い傾向があるのに対し、床面では明らかにオオムギの方が多い。床面内のいずれの地点も概ねイネ、マメ科、オオムギ、コムギの順に多い傾向があるが、北辺中央付近の3Dのみイネは少なく、オオムギが圧倒的に多産する。出土量については、住居中央付近、西・北・南辺の中央付近は比較的多産するのに対して、南西（2B）・北西（3C）・北東（4D）の各隅は少ない。

・3号住居：竈掘り方からイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、アワ、ササゲ属、マメ科、シソ属が少量得られた。全体の出土個数がやや少ないが、イネが少なく、ムギ類、キビ族、マメ類が多い特徴がある。

・4号住居：イネ、オオムギ、コムギが僅かに得られた。

・5号住居：床からイネ、オオムギのみが僅かに得られた。

・6号住居：竈と中央部から得られたが、ササゲ属ないしマメ科が多い。いずれもアズキの仲間が僅かに得られ、竈ではコムギ、中央部ではイネも少量得られた。

・7号住居：竈から多産し、イネ、コムギ、マメ科の順に多く、ヒエ、タデ科、アズキの仲間、ササゲ属も少量得られた。ピット3はイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、アワが僅かに得られた。

・9号住居：掘り方からマメ科のみが僅かに得られた。

・10号住居：炭化種実が比較的多産し、遺構全体の約6%を占める出土量である。全体としては、イネ、コムギ、マメ科、オオムギ・ササゲ属の順に多く、モモ、キビ、ヒエ、アワなどが少量得られた。遺構全体と比較すると、イネの割合が少なく、ムギ類、マメ類の割合が多い。また、ヒエをはじめとしたキビ族の割合が非常に少ない特徴がある。10号住居は、竈関連と竈以外に分けて集計した。竈は、イネ、マメ科、コムギの順に多く、オオムギ、ヒエ、アワ、ササゲ属、ダイズの仲間なども得られた。出土個数が少ないこともあり、竈内の地点による産状に有意な差はないが、概ねイネないしマメ科が多い傾向であり、稀にササゲ属、コムギがやや多い。竈以外の全体では、イネ、コムギ、オオムギ、ササゲ属、マメ科の順に多く、モモ、キビ、ヒエ、アワ、アズキの仲間、ダイズの仲間も得られた。地点別に見ると、竈周辺、住居北東部（D）・骨集中部（D区画相当）はイネが最も多く、南西部（B）はコムギ、北西部（C）はササゲ属が最も多い。分類群の出土個数の順位は、地点により異なり、産状にややばらつきが見られるが、イネ、オオムギ、コムギ、ササゲ属、マメ科のいずれかが比較的多い点は共通である。

・11号住居：全体としてはコムギ、イネ、オオムギがほぼ同程度で多産し、マメ科、ササゲ属、ヒエも比較的目立つ。他に、シソ属なども少量得られた。遺構全体と比較すると、イネの割合が少なく、ムギ類の割合が多い。また、キビ族の割合は非常に少ない。11号住居は、竈関連、貯蔵穴、それ以外に分けて集計した。竈関連は、全体ではオオムギ、コムギ、イネの順に多く、竈前ではイネ、オオムギが同等、竈ではオオムギ、コムギ、イネの順に多い。貯蔵穴は、コムギ、イネ、オオムギの順に多いがあまり有意な差ではない。土坑・竈・貯蔵穴以外は、イネ、コムギ、マメ科の順に多いがあまり有意な差ではない。11号住居内は、地点による産状に違いはなく、まとまりがあると言える。

・12号住居：土坑1から出土した。イネ、コムギ、オオムギ、マメ科の順に多いがあまり有意な差ではない。

- ・13号住居：比較的多産し、遺構全体の約5%を占める。イネが圧倒的に多産し、掘り方中央部で特に多い。竈ではマメ科、コムギ、掘り方中央部ではキビ、コムギ、ヒエがやや目立つ。他に、オオムギ、ササゲ属などが少量得られた。
 - ・14号住居：竈ではイネ、コムギがやや多く、ヒエ、マメ科も得られた。土坑1ではオオムギ、コムギのみが僅かに得られた。
 - ・9号土坑：イネ、コムギ、ヒエ-アワ、シソ属が少量得られた。
 - ・35号土坑：イネ、ヒエのみが少量得られた。
 - ・36号土坑：比較的多産し、遺構全体の約5%を占める。多産する割に分類群数は少なく、イネ、ヒエが圧倒的に多産する。他は、オオムギ、イネ科が僅かに混じる。
 - ・39号土坑：イネ、コムギが若干多く、オオムギ、ヒエ、アズキの仲間、ササゲ属が得られたが、全体の出土量はさほど多くはない。
- [V区（2～13号住居、1号竪穴状遺構、1号谷、84号土坑、）]
- ・2号住居：床ベルトWでやや多産した。オオムギ、イネが目立ち、オオムギ-コムギ、コムギ、アワも少量得られた。
 - ・3号住居：比較的多産し、遺構全体の約5%を占める。オオムギ、コムギがほぼ同等に多産し、特に土坑で多産する。他に、イネ、ヒエ、アワ、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科も少量得られた。
 - ・4号住居：出土量は少なく、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、マメ科が得られた。
 - ・5号住居：各地点の出土量は多くはないが、全体としては、オオムギ、コムギ、イネの順に多く、ブドウ属、ヒエ、アワも少量得られた。
 - ・6号住居：各地点の出土量は多くはないが、全体としては、イネがやや多く、ブドウ属、オオムギ、コムギ、キビ、ヒエ、タデ科、ササゲ属、マメ科、シソ属も少量得られた。
 - ・7号住居：各地点とも比較的多産する。オオムギが最も多産し、イネ、コムギが多い傾向がある。床SWでは、マメ科も多産する。他では、ブドウ属、ヒエ、ササゲ属、ダイズの仲間が得られた。
 - ・8号住居：非常に多産し、遺構全体の約25%を占める。いずれの地点もオオムギが最も多く、イネ、コムギが次いで多い傾向がある。特に床NWでの出土量が多い。他に、キビ、ヒエ、アワ、イネ科、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科、シソ属が少量得られた。
 - ・9号住居：イネ、オオムギ、オオムギ-コムギ、ヒエが僅かに得られた。
 - ・10号住居：各地点の出土量はさほど多くはないが、竈などでは比較的多産する。全体としては、コムギが最も多産し、オオムギ、イネ、オオムギ-コムギの順に多い。他に、キビ、ヒエ、アワ、ホタルイ属、ダイズの仲間、マメ科、シソ属が少量得られた。
 - ・11号住居：本住居は、64分割されて土壌が採取された。南から北に向かってアルファベットのA～Hの8等分、東から西に向かって数字の1～8の8等分であり、各単位はA1～H8のように表記されている。竈は、南東隅のA1、A2、B1、B2、C1、C2にかけて位置する。炭化種実と比較的多産し、遺構全体の約6%を占める。全体としては、コムギが最も多産し、オオムギ、オオムギ-コムギも多産する。その他は、イネが若干目立つ程度であり、オニグルミ、クルミ属、モモ（破片数は多いが完形1個分程度）、ヒエ、アワ、イネ科、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科が少量得られた。各地点の出土量を見ると、床B7で多産し、床A4、竈でやや多いほかは、いずれも数個～10個未満と少ない。また、表3では、ラインごとに集計したが、いずれのラインも概ね30個前後の出土量であり、コムギ、オオムギ、オオムギ-コムギが多産する傾向がある。コムギ、オオムギは、住居

第6章 科学分析

内に満遍なく散らばり、他の分類群は一部地点にのみ散見されるという産状である。このことから、地点による出土量や組成に大きな差異はないと考えられる。

- ・12号住居：掘り方NE、掘り方SEでやや多産した。オオムギ、イネ、コムギの順に多く、ササゲ属、マメ科、シソ属が少量得られた。
- ・13号住居：各地点の出土量は多くはないが、概ねオオムギが多い傾向がある。全体としては、コムギ、イネも比較的多産する。他に、ブドウ属、ヒエ、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科、シソ属も少量得られた。
- ・1号竪穴状遺構：オオムギ、オオムギ-コムギ、マメ科が少量得られた。
- ・1号谷：ゴマがやや多産し、アサが僅かに得られた。
- ・84号土坑：オオムギ-コムギ、コムギが僅かに得られた。

(2) 主要分類群による各遺構の比較

各遺構の主要分類群は、イネ科穀類とマメ類であり、これらの占める割合は、最低の割合でもⅡ区8号住居の約73%である（種実総数の非常に少ない一部の遺構を除く）。ここでは、種実総数に占める主要分類群の割合を算出し（表4）、各遺構の比較を試みた。なお、ムギ類は、オオムギ、オオムギ-コムギ、コムギ、キビ族はキビ、ヒエ、アワとこれらをハイフンで結んだもの、およびキビ族（キビ-ヒエ-アワ）を含むものとした。また、マメ類のうち、アズキの仲間はササゲ属に、ダイズの仲間はマメ科に含めた。各遺構の種実総数は、完形でないもの（半分ないし破片）は、2点で完形1個分として算出した。

[マメ類の多い遺構（タイプA）]

Ⅱ区1号住居とⅣ区6号住居であり、マメ類が圧倒的な過半数である。いずれの遺構もマメ科の方が多い。

[イネ科穀類の多い遺構（タイプB）]

イネ、ムギ類、キビ族の割合により、以下の6つ（タイプB-1～6）に細分される。

タイプB-1（2遺構）：イネの多い遺構であり、Ⅳ区2号住居とⅣ区13号住居が含まれる。前者はほぼ半数、後者は約86%にまで達する。

タイプB-2（14遺構）：ムギ類の多い遺構であり、Ⅰ～Ⅳ区の住居では、Ⅱ区8号住居、Ⅲ区1号住居、Ⅳ区1号住居、Ⅳ区11号住居が含まれ、特にⅣ区1号住居で顕著である。Ⅴ区の住居では、6号住居を除き、全ての住居がこのタイプである。オオムギとコムギの割合は、Ⅰ～Ⅳ区の住居では、ほぼ同等か、さほど有意な差ではない。一方、Ⅴ区の住居では、オオムギの方が多い住居が多く（10棟のうち7棟）、特に8号住居で顕著である。

タイプB-3（1遺構）：キビ族の多い遺構である。Ⅱ区7号住居のみであり、キビ族のみで過半数である。アワが特に多い。

タイプB-4（8遺構）：イネとムギ類がほぼ同等で多い遺構であり、Ⅱ区9号住居、Ⅲ区2号住居、Ⅳ区7号住居、Ⅳ区10号住居、Ⅳ区12号住居、Ⅳ区14号住居、Ⅳ区39号土坑、Ⅴ区6号住居が含まれる。いずれの遺構もイネとムギ類を合わせて過半数である。ただし、Ⅳ区7号住居、Ⅳ区10号住居は、マメ類も比較的多い。

タイプB-5（1遺構）：イネとキビ族（ヒエ）がほぼ同等で多い遺構である。Ⅳ区36号土坑のみであり、両者で約99%を占める。

タイプB-6（2遺構）：ムギ類とキビ族の多い遺構であり、Ⅲ区3号住居、Ⅳ区3号住居が含まれる。いずれの遺構もムギ類とキビ族の両者で過半数である。

以上をまとめると、30遺構のうち、タイプAは2遺構、タイプBは28遺構であった。タイプBのうち、最も

一般的なのがムギ類の多いタイプB-2 (14遺構) であり、イネとムギ類がほぼ同等のタイプB-4 (8遺構) も比較的多い。遺構全体でもムギ類が約半数を占め、イネも1/4を占める。ムギ類ないしイネが多い遺構が多数を占める中で、マメ類の多いタイプA (Ⅱ区1号住居、Ⅳ区6号住居) や明らかにキビ族の多いタイプB-3 (Ⅱ区7号住居)、また、ほぼイネとキビ族のみで占められるタイプB-5 (Ⅳ区36号土坑) は特異な産状を示す遺構と言える。

4. 主な炭化種実の形態記載

(1) モモ *Prunus persica* Batsch 炭化核

Ⅳ区10号住居から出土したものは、完形が1点のみ含まれており、側面観は卵形、上面観は両凸レンズ形。一方の側面には縫合線が発達し、表面には不規則に流れるような溝と穴がある。長さ18.0mm程度。なお、Ⅳ区10号住居Aの破片4点は完形約1個分、Ⅳ区10号住居Bの破片1点は1/2片(半分)程度。Ⅴ区11号住居(D-2)から出土したものは、いずれも破片であり、完形換算で1個分以下と推定される。

(2) カキノキ属 *Diospyros* 炭化種子

Ⅳ区2号住居のみからほぼ完形が2点得られた。1点は長さ9.5mm、幅6.8mm程度、もう1点は長さ8.5mm、幅4.5mm程度。やや小型な種子なので、カキノキ以外に、栽培種のマメガキ、現在本州に自生するトキワガキ(伊豆半島以西)、リュウキュウマメガキ(関東地方以西)の可能性はある。

(3) イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化穎果、炭化胚乳、炭化穎

炭化穎果は稀に得られた。穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。長さ4.8~6.5mm、幅1.9~2.8mm程度。炭化胚乳は、遺構全体としては最も多産し、しいな・未熟果や穎が少し付着したものが稀に混じる。計数は、欠損があってもほぼ3/4以上残存したものは完形扱いとした。側面観・上面観共に楕円形。両面の表面には、縦方向の2本の筋が入り、3等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。炭化胚乳の完形は、遺構全体で1319点出土したが、このうち、498点について長さ、幅を計測し、長幅比を算出して一覧を表5に示した。また、遺構別および遺構全体の集計を表6にまとめ、多産したⅣ区2号住居内土坑3、Ⅳ区13号住居掘り方中央部は遺構とは分けて地点として個別に示した。なお、計測を行わなかったものは、欠損・発泡・焼け膨れ・変形などにより、原形をとどめていなかったものである。

表6を見ると、遺構全体では、長さ2.6~5.8(平均4.4)mm、幅1.3~3.3(平均2.4)mm、長幅比1.2~3.2(平均1.9)mmである。比較的多産した遺構は、Ⅱ区7号住居、Ⅳ区2・10・11・13号住居、Ⅳ区36号土坑、Ⅴ区8号住居であるが、これらの平均は長さ4.3~4.5mm、幅2.3~2.5mm、長幅比1.8~1.9mmの範囲内である。数値が他遺構とかけ離れた遺構はなく、全体的に割とまとまりがあると言える。全体の平均の長幅比が1.9mmであるので、やや細長い傾向があるように思えるが、しいな・未熟果がしばしば混じるためであろう。成熟した胚乳に限定すれば、長さ・幅の平均値はもう少し高くなり、更にまとまりも増すであろう。

(4) オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

側面観は長楕円形ないし紡錘形、断面は楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、類三角形の胚がある。コムギに比べて細長く、幅に対して厚みが薄い傾向がある。長さ4.1~6.3mm、幅1.9~4.3mm程度。稀に穎が少し付着したものが見られた。

(5) コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体に丸っこい傾向がある。長さ2.3

第6章 科学分析

～5.2mm、幅1.5～4.3mm程度。オオムギに比べて大きさにばらつきがあるように思われた。なお、オオムギコムギとしたものは、状態が悪いか破片などの理由により、両者を識別し得なかったものである。

(6) キビ *Panicum miliaceum* Linn. 炭化胚乳

ヒエ、アワに比べて稀であるが、IV区13号住居でやや目立った。側面観は円形ないし卵形で先端が窄まってやや尖り気味となるものもある。断面は片凸レンズ形で厚みがある。胚の長さは胚乳の長さの1/2程度と短い。臍は幅が広いうちわ型。長さ1.6～2.1mm、幅1.3～1.5mm程度。稀に穎が少し付着するものもある。

(7) ヒエ *Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin. 炭化穎果、炭化胚乳

ほぼ完全に穎を被った炭化穎果は、IV区10号住居とIV区11号住居のみで各1点ずつ得られ、長さ2.6mm、幅1.6mm程度。炭化胚乳は、キビ族の中では最も多産し、特にIV区2号住居土坑3、IV区36号土坑ではまとまって出土した。試料によっては穎が少し付着したものも目立つ。側面観は卵形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは胚乳の長さの2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ1.2～2.8mm、幅1.0～1.9mm程度。キビ、アワに比べて大きさにややばらつきがあるように思われ、小型のものはイヌビエの可能性もある。なお、キビ-ヒエとしたものは、状態が悪く両者を識別し得なかった。

(8) アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化穎果、炭化胚乳

ほぼ完全に穎を被った穎果がII区4号住居のみから僅かに得られた。穎の表面には、やや規則的に配列するアワ特有の突起があり、横方向の波状の皺があるように見える。長さ1.5～1.6mm、幅1.2mm程度。炭化胚乳はヒエに次いで多産したが、II区7号住居でまとまって出土するほかは稀である。穎が少し付着したものもしばしばある。小さいが厚みがあり、丸こい傾向がある。側面観は円形に近く、先端が窪むことが多い。胚の長さは胚乳の長さの2/3程度。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の小さな臍がある。長さ1.0～1.3mm、幅0.9～1.3mm程度。キビ、ヒエに比べて大きさにまとまりがあるように思われた。なお、ヒエ-アワとしたものは、状態が悪く、両者を識別し得なかったもの。キビ族としたものは、状態が悪く、キビ、ヒエ、アワのいずれにも当てはめられなかったものである。

(9) イネ科 Gramineae 炭化胚乳

IV区36号土坑から出土した2点は、卵状楕円形で長さ0.9～1.0mm、幅0.3～0.4mm程度。胚の長さは胚乳の長さの1/2程度と短く、臍は不明瞭。V区8号住居（掘り方SE）から出土した1点は、広線形で長さ3.9mm、幅1.3mm程度。胚の長さは極めて短く、うちわ型。V区11号住居(B-2)から出土した1点は、長楕円形で長さ2.1mm、幅0.7mm程度。胚の長さは、0.6mm程度と短く、臍は不明瞭だがうちわ型のように見える。穎が少し張り付いているようである。

(10) タデ科 Polygonaceae 炭化果実

二面の卵形で長さ1.4～2.2mm、幅1.1～1.3mm程度。

(11) ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

ササゲ属の臍は、長さ2～3mm程度の長楕円形であり、一方にやや片寄って位置する。臍の周囲は隆起してざらつく。完形のものにこの臍が確認できるものがあるが、良好に保存されているものは多くはなく、不鮮明ながら残っているものや臍の一部が断片的に残っているものが含まれる。完形でないものは、半分のもの（2つの子葉が割れた1/2片）が大半であり、子葉内面には幼根が収まる細い溝状の窪みと初生葉が収まる比較的広い面積の窪みがある。ササゲ属については、完形84点のうち状態の良い71点について長さ・幅・厚さの計測を行い、その一覧を表7に、集計したものを表8に示した。表8を見ると、全体では長さ3.4～6.3（平均5.0）mm、幅2.3～4.3（平均3.2）mm、厚さ2.2～4.5（平均3.3）mmであり、幅・厚さに比べて、長さのばらつきが

やや大きい。特徴的なのは、幅と厚さがほぼ同程度であるため、丸みを帯びる。

なお、マメ類の分類は、吉崎（1992）により、半割状態で観察できる初生葉と幼根の形態や立ち上がりの角度から、アズキの仲間（アズキ）、リョクトウの仲間（ヤブツルアズキ、クロアズキ、ケツルアズキ）、ダイズの仲間（ツルマメ、ヤブマメ、ダイズ）の3つにグルーピングされている。本遺跡では、IV区2号住居、IV区10号住居などの出土種子の中に初生葉と幼根が保存されているものがあり、これらはいずれも幼根が緩やかに斜めに立ち上がり、初生葉は小さく垂れ下がるので、吉崎によるアズキの仲間と同定された。このアズキの仲間と同定された21点のうち、状態の良い14点について長さ・幅の計測を行い（アズキの仲間と同定できるのは半割状態のもののみなので厚さは計測していない）、表6に一覧を示した。また、集計したものを表7に示したが、長さ3.9～5.8（平均4.9）mm、幅2.3～3.8（幅3.0）mmであった。

(12) マメ科 Leguminosae 炭化種子

マメ科としたものは、イネに次ぐ出土量であり、完形も破片も多産した。しかし、発泡・欠損・焼け膨れ・変形が非常に著しく、状態は悪いものが大半である。破片は、原形をとどめていないので、元の大きさのどれ位の割合を占めるのか不明なものも多い。丸みがあり、ササゲ属の可能性のあるものも稀に含まれるが、大半は扁平でササゲ属とは異なる種（おそらくダイズの仲間か）と推定されるが、臍は残っておらず、幼根部の顕著な膨らみがしばしば確認できる。大きさは大小様々である。マメ科も計測を行ったが（表7、8）、多くが原形をとどめていないため、計測数は完形全体の約40%に過ぎない。比較的状态の良好なものを選んで計測を行ったが、特に幅・厚さは実際の数値とは、ずれているものも多いと予想されるため参考値とされたい。全体では長さ3.1～8.6（平均5.8）mm、幅2.1～6.7（平均4.1）mm、厚さ1.6～5.1（平均3.3）mmである。ばらつきが大きいのは、明らかに大きさの異なる種子が含まれるためであり、厳密な区分はできないが、長さ5.0mmを基準にすると、大タイプは長さ5.0～8.6（平均6.5）mm、幅2.6～6.7（平均4.6）mm、厚さ2.4～5.1（平均3.7）mm、小タイプは長さ3.1～4.8（平均3.9）mm、幅2.1～3.3（平均2.8）mm、厚さ1.6～3.1（平均2.2）mmである。小タイプの方が大タイプよりもまとまりがあるが、いずれも幅に対して厚みが薄いため、ササゲ属のような丸みは帯びず扁平である。

なお、ダイズの仲間としたものは、マメ科と同様な外形をしており、ほぼ中央ないし若干片寄った位置に扁平でやや幅の広い楕円形の臍がある。臍の長さは、大型の種子では2.0～3.0mm程度、小型の種子では1.0mm前後。IV区10号住居から出土した半割状態の3点は、初生葉と幼根は保存されていないが、子葉内面にササゲ属のような窪みが見られず平滑である。これは、ダイズの仲間の幼根と胚軸が狭長で種皮に沿って曲がり、初生葉は小さく、子葉内面に大きく垂れ下がらないためである。ダイズの仲間も5.0mmを基準に大小の2タイプと全体とで計測値を示したが、計測数は少ない（表7・8）。全体では長さ3.1～9.1（平均5.6）mm、幅2.3～6.3（平均4.0）mm、厚さ1.9～4.9（平均3.2）mmであり、大タイプは長さ5.1～9.1（平均6.6）mm、幅3.8～6.3（平均4.7）mm、厚さ3.2～4.9（平均4.0）mm、小タイプは長さ3.1～3.8（平均3.6）mm、幅2.3～3.0（平均2.6）mm、厚さ1.9～2.4（平均2.1）mmである。マメ科と同様、小タイプの方が大タイプよりもまとまりがあり、いずれのタイプも扁平である。

吉崎・椿坂（2001）では、マメ分類の手がかりとしてアズキ、リョクトウなどのササゲ属やダイズの仲間の粒径サイズが示されている。このうち、ツルマメ、雑草ダイズ、ダイズの数値を表7に引用した。出土種子をこれと比較すると、ダイズの仲間、マメ科の小タイプは、概ねツルマメの大きさと同じかやや小さい（特に長さ）。ダイズの仲間、マメ科の大タイプは、長さに関しては、ダイズと同じものが多く、ダイズを上回るものも含む。幅・厚さに関しては、ダイズの仲間の大タイプは、ダイズと同程度のものが多く、マメ科の大タイプは、

第6章 科学分析

ダイズと同程度のものでなく、ツルマメや雑草ダイズ程度のもも目立つ。しかし、マメ科は状態が悪く、特に厚さの値は、発泡・欠損により、過小評価されているものも含むと考えられるため、実際にはダイズと同程度のものが多いと予想される。

以上を総合すると、ダイズの仲間とその可能性のあるマメ科は、大きさの上では概ね小タイプがツルマメに、大タイプがダイズに対比される。しかし、現段階では、マメ類を栽培種と野生種とに識別することはできないため（吉崎・椿坂、2001）、大タイプが栽培ダイズなのか、小タイプが野生種なのか、あるいは栽培種の未熟種子なのかといったことは不明である。

(13) シソ属 *Perilla* 炭化果実

倒卵形で表面にはやや不鮮明ながらも大きな浅い網目紋がある。長さ1.8～2.2mm程度でシソやエゴマの類と思われるが、大きさとしてはエゴマ（2.0mm以上）が多い。なお、長さ1.3～1.6mm程度をイヌコウジュ属-シソ属、*Mosla* and/or *Perilla*としたが、明らかなイヌコウジュ属は含んでおらず、シソを含んでいる可能性がある。

(14) ナス属 *Solanum* 炭化種子

扁平な円形で一端が僅かに窪む。表面には不鮮明ながら微細な浅い網目紋がある。長さ1.3～2.7mm程度で2.0mm台が多い。

(15) ゴマ *Sesamum indicum* Linn. 炭化種子

光沢があり、やや扁平な卵形。表面には微細な網目紋があるが、発泡が著しく不鮮明である。長さ2.2～3.0mm、幅1.3～2.0mm程度。

(16) 不明 unknown 炭化種実、炭化物

これらは、完形か破片かの識別が困難なものも多く含み、計数が困難なため、一覧表中には示していない。不明炭化種実は、多くの試料に含まれており、大半は破片である。状態が悪いが、多くはイネ、ムギ類、マメ類のいずれかと予想され、特にマメ類（マメ科）の破片を多く含むと思われる。不明炭化物としたものは、炭化種実・炭化材の可能性が低いもの、極めて微細で実体の分からないものを含む。

5. 考察

平安時代（10世紀後半～11世紀前半）の住居跡や土坑などから出土した炭化種実を検討した結果、利用されていたのは、栽培植物ないしその可能性があるモモ、カキノキ属、イネ、オオムギ、コムギ、キビ、ヒエ、アワ、アサ、アズキの仲間、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科、シソ属、ゴマと考えられた（ハイフンで結んだものなどは割愛）。このうち、イネ、ムギ類（オオムギ、コムギ）、キビ族（キビ、ヒエ、アワ）といったイネ科穀類とマメ類（アズキの仲間、ササゲ属、ダイズの仲間、マメ科）は、大半の遺構から出土し、これら全体の占める割合は、最も少ないⅡ区5号住居の約73%を除き、いずれの遺構も90%以上であり、40%弱（Ⅳ区1号住居、Ⅴ区3号・7号住居など）がほぼ100%である（表4）。従って、主要分類群、つまり当時の植物食料としての主体になっていたのは、イネ科穀類とマメ類であったと推定できる。遺構全体の出土量としては、ムギ類（オオムギ、オオムギ-コムギ、コムギ）が最も多く、遺構別に見ても、ムギ類の多い遺構が一般的である。産状の特異な遺構としては、Ⅳ区6号住居のようなマメ類の多い遺構があり、また住居跡ではないが、イネとヒエの2種のみで約99%を占めるⅣ区36号土坑は、人による意図的な選択が影響している可能性があり、土坑の性格を考える上で興味深い事実である。

ムギ類、キビ族、マメ類を個別に見ると、ムギ類については、遺構全体としては、オオムギがコムギの2倍

以上を占め、遺構別に見ても多産する遺構については、オオムギがコムギの出土量を上回る遺構が多い。キビ族は、アワの多いⅡ区7号住居、キビの多いⅣ区13号住居を除き、概ねヒエが多い傾向であり、Ⅳ区2号住居、Ⅳ区36号土坑で顕著である。遺構全体として見ても、ヒエの出土量が多い。マメ類は、遺構全体としては、マメ科がアズキの仲間を含むササゲ属の3倍強の出土量である。マメ科は、出土種子の中では特に状態が悪く、その可能性があっても同定には至らなかったものがしばしば含まれる。これを考慮すれば、ササゲ属がマメ科よりも顕著に多い遺構は、少なくとも住居跡では見られない。マメ科は、外形上はダイズの仲間の可能性があるが、ダイズの仲間であるとすれば、出土量や各遺構の傾向を見る限りでは、アズキの仲間を含むササゲ属よりもダイズの仲間の方が一般的であったと思われる。アサ、ゴマは、住居跡からは出土せず、Ⅴ区1号谷（耕作土）のみから出土し、ゴマはややまとまって出土した。このことから、Ⅴ区1号谷でゴマ、アサの栽培が行われていた可能性が考えられる。なお、群馬県利根郡新治村に所在する東峰須川雷電遺跡では、平安時代前期（9世紀）の土坑、住居跡から出土した多量の炭化種実が検討されている（株式会社古環境研究所、2005）。その結果では、草本類の全体としては、コムギが圧倒的に多産し、イネ、オオムギ、アワ、ササゲ属と続き、畑作物が多い特徴が指摘されている。本遺跡と比較すると、ムギ類が多い点は共通であるが、東峰須川雷電遺跡では明らかにコムギが主体であるのに対して、本遺跡ではオオムギもコムギも多産し、全体としてはオオムギの方が多いという相違点が認められる。

上記分類群以外では、オニグルミ、クルミ属、ブドウ属、クサギ、イネ科、ホタルイ属、タデ科、ナス属が得られた。オニグルミ、クルミ属は、利用後の残滓と考えられ、ブドウ属の漿果は、生食などとして利用可能であり、本遺跡のように住居跡から、穀類などと共にしばしば出土する。また、イネ科、タデ科も野生種を何らかの形で利用していた可能性は否定できない。他のものは、種子以外の部位を利用するために住居内に持ち込まれたものに果実・種子が付いていたか、住居の周辺や屋根に生育していたものが焼失し、偶発的に混在した可能性が考えられる。ホタルイ属は、Ⅳ区の住居跡を中心に得られたが、Ⅳ区内にホタルイ属が生育するような湿地的環境の存在が予想される。

以上、本遺跡の利用植物は、イネ科穀類とマメ類が主体であることを見てきた。イネ科穀類とマメ類以外の利用植物も栽培種ないしその可能性が高く、これらの占める割合は極めて高率である。相当量の炭化種実を検討したにも関わらず、利用植物としての野生種（例えば、オニグルミ、コナラ属などの堅果類）は、極めて稀であったことから、植物質食料に占める栽培種の比重が極めて高かったことが伺える。

6. おわりに

本遺跡の平安時代（10世紀後半～11世紀前半）の利用植物は、栽培種ないしその可能性があるものが圧倒的多数を占めていた。主要なものは、イネ、ムギ類、キビ族といったイネ科穀類とアズキの仲間、ダイズの仲間を含むマメ類であり、オニグルミ、モモ、カキノキ属、アサ、シソ属、ゴマなども利用されていたと考えられた。Ⅳ区内などには、ホタルイ属が生育するような湿地的環境の存在が予想された。

引用文献

- 株式会社古環境研究所(2005)種実同定。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第353集, 東峰須川雷電遺跡, 47-50, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 吉崎昌一(1992)古代雑穀の検出。考古学ジャーナルNo.355:2-14。ニュー・サイエンス社。
 吉崎昌一・椿坂恭代(2001)先史時代の豆類について—考古植物学の立場から。豆類時報No.24:1-9。

第6章 科学分析

表1 1～IV区の炭化種実出土一覧表(その1) 数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位	地区	Ⅰ区	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区	
	遺構	1号住居	1号溝1	1号住居	1号住居	3号住居	7号住居	7号住居	8号住居	9号住居	9号住居	12号住居	1号住居
	出土位置	竈		竈前ピット	竈掘り方	竈	竈前ピット掘り方	竈掘り方	床	竈	土坑1	竈	竈掘り方
ブドウ属	炭化種子						2						
イネ	炭化穎果						2						
	炭化胚乳	1(1)			7(1)		48(16)		5(2)	3	3(2)	1	1
オオムギ	炭化胚乳						12(2)		6	2(1)	2		1
オオムギ-コムギ	炭化胚乳								3				
コムギ	炭化胚乳	1			3		19		10	3	1		
キビ	炭化胚乳				1								
キビ-ヒエ	炭化胚乳							1					
ヒエ	炭化胚乳		1				27		3				1
ヒエ-アワ	炭化胚乳						16			1	1		
アワ	炭化穎果						4						
	炭化胚乳						84			1			
キビ族	炭化胚乳						25					1	
ホタルイ属	炭化果実						1						
タデ科	炭化果実					1(2)							
アズキの仲間	炭化種子						(2)						
ササゲ属	炭化種子			(2)	(6)		1(5)		1(6)				
ダイズの仲間	炭化種子						1						
マメ科	炭化種子			3	19(11)	2(1)	16(32)	1	1		2(3)	2(3)	3(1)
イヌコウジュ属-シソ属	炭化果実								5				
シソ属	炭化果実								7				
ナス属	炭化種子				2								

分類群・部位	地区	Ⅲ区	Ⅲ区	Ⅲ区	Ⅲ区	Ⅲ区	Ⅲ区	Ⅲ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区
	遺構	1号住居	2号住居	2号住居	3号住居	3号住居	3号住居	3号住居	5号住居	1号住居	1号住居	1号住居	2号住居
	出土位置	竈	竈掘り方	竈	竈	竈No.3	竈掘り方	竈No.2	床	竈掘り方	A	竈	1
	備考												竈周辺
ブドウ属	炭化種子					1							
イネ	炭化胚乳			4(1)		1	2(4)	1	2	3	2	8	21(3)
オオムギ	炭化胚乳	7	2	2(1)	1		1(1)		(3)		4(1)	23(3)	3
オオムギ-コムギ	炭化胚乳	1		(1)	1		(1)				3		
コムギ	炭化胚乳	4		2	3	1	2				1	28	3
キビ-ヒエ	炭化胚乳			1		1							
ヒエ	炭化胚乳						4	6					3
タデ科	炭化果実				1								
ササゲ属	炭化種子			1								(1)	(2)
マメ科	炭化種子		1	1(1)				1		2(5)	(2)	2(3)	3(7)
シソ属	炭化果実			1			1						

分類群・部位	地区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区
	遺構	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居
	出土位置	2A	2B	2C	2D	3A	3B	3C	3D	4A	4B	4C	4D
	備考	南壁中央付近	住居南西隅	西辺中央近く	住居中央近く	住居中央近く	西辺中央近く	住居北西隅	北辺中央付近	竈左手	住居中央近く	北辺中央付近	北東隅
カキノキ属	炭化種子	1							1				
イネ	炭化穎果						1						
	炭化胚乳	68(27)	2	22(2)	34(3)	39(13)	38(8)	3	5	80(18)	53(8)	9(3)	18(8)
オオムギ	炭化胚乳	13(1)		2(1)	6(1)	11	2(1)		42(4)	1			
コムギ	炭化胚乳	9	4	2	2	2	1		8	1	8	2	1
キビ	炭化胚乳				1								
キビ-ヒエ	炭化胚乳						1						
ヒエ	炭化胚乳	1		4						1	1		1
ヒエ-アワ	炭化胚乳					1			3				
アワ	炭化胚乳					1							
キビ族	炭化胚乳	1											
ササゲ属	炭化種子	(20)	(1)	1(4)					(3)		(1)	1	
ダイズの仲間	炭化種子	2							1				
マメ科	炭化種子	35(35)	2(1)	7(5)	21(18)	3(9)	6(4)	1(1)	8(9)	1	4(7)	1(6)	1
ナス属	炭化種子	3											

分類群・部位	地区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区	Ⅳ区
	遺構	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居	2号住居
	出土位置	A竈	A竈C-C'	A竈B部	A竈前	A竈C部	B竈	B竈前土坑	B竈B-B'	B竈C部	土坑	土坑1	土坑2
	備考		A竈の本体部分	A竈前近く		竈燃焼部左側		竈前のピット状の穴	B竈前近く	竈燃焼部左側	1号土坑表層、床面部?	2号住居内土坑1	
イネ	炭化胚乳	2	11(3)	5(1)	2(1)	6	5(2)	3(2)	5(1)	4(4)	1	1	2(2)
オオムギ	炭化胚乳		2	3		1	4	1		3			
オオムギ-コムギ	炭化胚乳											1	
コムギ	炭化胚乳		2	2	4	1	5	5		1	3	1	
ヒエ	炭化胚乳			1	3		1	1					
アズキの仲間	炭化種子					(1)		(1)			(2)		
ササゲ属	炭化種子	1(1)	1(2)	3(1)	1(2)	(2)	(2)	(6)			3(4)		
ダイズの仲間	炭化種子										1		
マメ科	炭化種子	2(1)	4(3)	4(3)	3	1(1)	(3)	(4)	1	1(3)	2(3)	(1)	(2)
ナス属	炭化種子					1	1						

第6節 炭化種実の同定

表1 1～IV区の炭化種実出土一覧表(その2) 数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位	地区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区
	遺構	2号住居	2号住居	2号住居	3号住居	4号住居	6号住居	6号住居	7号住居	7号住居	9号住居	10号住居	10号住居
	出土位置	土坑3	掘り方	掘り方中央部	竈掘り方		竈	中央部	ビット3	竈	竈掘り方	A	A
備考			床面に密着した炭化物集中									竈周辺	竈周辺
モモ	炭化核												(4)
クサギ	炭化核	1											
イネ	炭化穎果	2(1)										1	
	炭化胚乳	100(49)	1	10(7)	1	1		3(1)	1	14(6)		26(5)	
オオムギ	炭化胚乳	(2)		2	3	1			1			15(1)	
コムギ	炭化胚乳	2			4	1	2		1	10		25	
キビ	炭化胚乳	7											
キビ-ヒエ	炭化胚乳	8(1)											
ヒエ	炭化胚乳	164		1	1				1	1		2	
ヒエ-アワ	炭化胚乳	2								1			
アワ	炭化胚乳	7			3				1				
キビ族	炭化胚乳	6(1)			2							1	
ホタルイ属	炭化果実	5											
タデ科	炭化果実									1			
アズキの仲間	炭化種子						(2)	(1)		(2)			
ササゲ属	炭化種子			2(2)	1(2)		10(5)	5(1)		(3)		(1)	
ダイズの仲間	炭化種子											(3)	
マメ科	炭化種子	(3)		9(7)	2(2)		(9)	11(24)		7(5)	2	11(10)	
イヌコウジュ属-シソ属	炭化果実	2(1)											
シソ属	炭化果実	14			1								
ナス属	炭化種子	1											

分類群・部位	地区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区
	遺構	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居
	出土位置	B	B	C	D	竈土器内土上層	竈	竈掘り方	竈前ビット	竈A	土坑1	骨集中部	
備考		住居南西部	住居北西部	住居北東部(骨集中区画)								D区画に相当	
モモ	炭化核	(1)											
イネ	炭化穎果			1									
	炭化胚乳		3(3)	7	8(2)	1	4(2)	18(4)	11(1)	4(1)	3(1)	14(6)	3(1)
オオムギ	炭化胚乳		11(2)	1	2	2		4				2	3
コムギ	炭化胚乳		22	10	2	1		6		3		1	2
キビ	炭化胚乳		2										
キビ-ヒエ	炭化胚乳							2	1				
ヒエ	炭化穎果								1				
	炭化胚乳		1		2	3		1					
アワ	炭化胚乳						1						1
ホタルイ属	炭化果実		1										
アズキの仲間	炭化種子			(5)									(1)
ササゲ属	炭化種子		4(4)	14(13)	3		5(4)	(1)			1(3)		1(3)
ダイズの仲間	炭化種子				1			1		2	2		
マメ科	炭化種子				2(1)		2(6)	6(5)	10(6)		5	2(3)	(2)

分類群・部位	地区	IV区	IV区										
	遺構	10号住居	10号住居	11号住居	12号住居	13号住居	13号住居						
	出土位置		(貯蔵穴)		竈前	竈	A	貯蔵穴	竈右	土坑1	竈	掘り方中央部	竈
備考		竈右手部											
モモ	炭化核	1											
イネ	炭化穎果												2
	炭化胚乳		2	2(1)	7	13(5)	1	6(2)	11(1)	10(3)	26(6)	166(159)	8(1)
	炭化穎											(1)	
オオムギ	炭化胚乳		1	2	7	27(3)	(1)	6(1)	4	6	1		
コムギ	炭化胚乳			4	1	26(1)	4	11	4	8	5	4	8
キビ	炭化胚乳											13	
キビ-ヒエ	炭化胚乳					2							
ヒエ	炭化穎果							1					
	炭化胚乳			1		3			2	1	1	4	2
ホタルイ属	炭化果実							1				1	
ササゲ属	炭化種子			1	3(2)			(3)	4(6)	(3)	1(4)	1	
マメ科	炭化種子		2	1	1	4(2)	1	2	5(9)	4(1)	10	1	4(1)
イヌコウジュ属-シソ属	炭化果実							1					
シソ属	炭化果実					2							

分類群・部位	地区	IV区	IV区	IV区	IV区	IV区
	遺構	14号住居	9号土坑	35号土坑	36号土坑	39号土坑
	出土位置	土坑1				
備考		歯出土				
イネ	炭化胚乳		1	5	97(159)	7(2)
オオムギ	炭化胚乳	1			1	2
コムギ	炭化胚乳	1	4			6
ヒエ	炭化胚乳			1	129(7)	1
ヒエ-アワ	炭化胚乳		1			
イネ科	炭化胚乳				2	
アズキの仲間	炭化種子					(2)
ササゲ属	炭化種子					1(5)
マメ科	炭化種子			2		
シソ属	炭化果実		1			

第6章 科学分析

表2 V区の炭化種実出土一覧表(その1) 数字は個数、0内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位	コード	S02	S03	S04	S05	S06	S07	S08	S09	S10	S11	S12	S13
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	2号住居	2号住居	2号住居	3号住居	3号住居	3号住居	3号住居	3号住居	4号住居	4号住居	4号住居	4号住居
	出土位置	竈	掘り方SW	床ベルトW	床NW	床ベルトS	掘り方NE	掘り方ベルトW	土坑	竈	床NE	床SE	床SW
イネ	炭化胚乳	1	1	8(1)		1(1)	2		8(5)		(1)		
オオムギ	炭化胚乳	4	2	19(9)	4	4(1)	8(2)	3(2)	119(23)	(1)	1		
オオムギ-コムギ	炭化胚乳			1(6)			3(1)		14(20)				
コムギ	炭化胚乳	1		3	3	5	7	3	90				1
ヒエ	炭化胚乳								1			1	
アワ	炭化胚乳			1	1				1				
ササゲ属	炭化種子								1(1)				
ダイズの仲間	炭化種子							1	2(1)				
マメ科	炭化種子					1	(2)	(1)			1		1

分類群・部位	コード	S14	S15	S16	S17	S18	S19	S20	S21	S22	S23	S24	S25
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	4号住居	5号住居	5号住居	5号住居	5号住居	5号住居	6号住居	6号住居	6号住居	6号住居	6号住居	7号住居
	出土位置	床ベルトE	床NE	床NW	床SE	床SW	竈	床NE	床NW	床SE	床SW	竈掘り方	床NE
ブドウ属	炭化種子			1								1	
イネ	炭化胚乳		3	(1)	1	2	5	2	9(3)		2	(1)	4
オオムギ	炭化胚乳	4	1	(1)	11(2)	3	11(1)	3			2	1	10(1)
オオムギ-コムギ	炭化胚乳						(4)					1(1)	2
コムギ	炭化胚乳	7	2		4	1	12			2	2	4	3
キビ	炭化胚乳											1	
ヒエ	炭化胚乳		1		1	1	1		2	1	2		2
アワ	炭化胚乳				1	3	1						
タデ科	炭化果実											1	
ササゲ属	炭化種子								2(2)			1(1)	(1)
マメ科	炭化種子									1		(2)	1
シソ属	炭化果実								1			1	

分類群・部位	コード	S26	S27	S28	S29	S30	S31	S32	S33	S34	S35	S36	S37
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	7号住居	7号住居	7号住居	8号住居	8号住居	8号住居	8号住居	8号住居	8号住居	8号住居	9号住居	9号住居
	出土位置	床NW	床SE	床SW	床SW	竈	掘り方SE	掘り方NE	床NW	床SE	掘り方NE	床NE	床E
ブドウ属	炭化種子	1	1										
イネ	炭化胚乳	12(2)	4(1)	13(10)	3(1)		13(1)	4	21(3)	15(5)	2		
オオムギ	炭化胚乳	20(3)	46(7)	37(13)	56(15)	9(2)	48(8)	5(1)	971(285)	62(25)	1	1	1
オオムギ-コムギ	炭化胚乳	5	2(7)	(8)	6(3)		3(7)		19(65)	(4)	1		
コムギ	炭化胚乳	10	8	16	7	1	20	4	48	17			
キビ	炭化胚乳					1							
ヒエ	炭化胚乳	1	3	6		1(1)	3		4	4	1		
アワ	炭化胚乳							1	2				
イネ科	炭化胚乳						1						
ササゲ属	炭化種子	1(2)	(3)		(1)		(3)	5(3)	1(1)				
ダイズの仲間	炭化種子			1		1		5	1				
マメ科	炭化種子		2(1)	14(27)	(1)		1(3)	(1)	3(5)	1(1)			
シソ属	炭化果実				1		1		4	1			

分類群・部位	コード	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49
	地区	V区											
	遺構	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	10号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居
	出土位置	床NE	床NW	床SE	床SW	竈	土坑	床A4	床A8	床B1	掘り方B4	床B7	床B8
イネ	炭化胚乳			1(3)	5(1)	12(4)	2					2	
オオムギ	炭化胚乳	2(1)	2	6	2	15(5)	9(1)	9(1)				5(2)	
オオムギ-コムギ	炭化胚乳		1(1)	1(2)	(2)	11(1)	2				1	4(3)	
コムギ	炭化胚乳	6	2	9	6	39	9	5	2	3		32	5
キビ	炭化胚乳					1							
ヒエ	炭化胚乳		2			4							
アワ	炭化胚乳				1	1							
ホタルイ属	炭化果実					1							
ササゲ属	炭化種子											(1)	
ダイズの仲間	炭化種子		1										
マメ科	炭化種子			(2)		2(1)	1(1)						
シソ属	炭化果実	(1)											

分類群・部位	コード	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57				
	地区	V区											
	遺構	11号住居											
	出土位置	掘り方C4	床C7	掘り方E6	床E8	掘り方G5	床H4	床H6	床H8	A-2	A-3	A-3	掘り方3-A
クルミ属	炭化核												(1)
イネ	炭化胚乳												(1)
オオムギ	炭化胚乳	2	2	2	1		1		1	2	1	(1)	1
オオムギ-コムギ	炭化胚乳	(1)			2	1					1(2)		3
コムギ	炭化胚乳	1	3		2		1				1	1	1
アワ	炭化胚乳												1
ダイズの仲間	炭化種子		1										

分類群・部位	コード												
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居
	出土位置	掘り方4-A	A-5	A-6	A-6	A-6	A-7	A-7	B-2	B-2	掘り方3-B	掘り方B4	B-5
オニグルミ	炭化核										(1)		
イネ	炭化胚乳		(1)								1(3)		
オオムギ	炭化胚乳	1			1			1					1
オオムギ-コムギ	炭化胚乳	1			2	4(4)		2	1	(2)	(2)	1	
コムギ	炭化胚乳	3	1	1	1		4		1(1)	1	2	3	2(1)
ヒエ	炭化胚乳						1				1		
アワ	炭化胚乳										1		
イネ科	炭化胚乳								1				
ササゲ属	炭化種子										(1)		
ダイズの仲間	炭化種子	1(1)											
マメ科	炭化種子						(1)				(1)		

表2 V区の炭化種実出土一覧表(その2) 数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位	コード												
	地区	V区	V区										
	遺構	11号住居	11号住居										
	出土位置	5-B	B-6	B-6	C-1	C-3	C-3	C-5	C5	C-6	C-8	掘り方 8-C	D-1
イネ	炭化胚乳		1	(1)					1(1)				
オオムギ	炭化胚乳			1		1(1)		1	1		3		1
オオムギーコムギ	炭化胚乳		(2)	(2)	(1)	1(1)	2(1)	2	1		(1)		2(2)
コムギ	炭化胚乳		2	1	2	4	1		1		1		5
ヒエ	炭化胚乳		1										

分類群・部位	コード												
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居
	出土位置	掘り方 1-D	D-2	掘り方 2-D	D-4	D-4	掘り方 D4	D-5	5-D	D-6	掘り方 8-D	掘り方 1-E	掘り方 E-2
モモ	炭化核		(12)	(38)									
オオムギ	炭化胚乳					1	3(1)	1(1)		1		2	2
オオムギーコムギ	炭化胚乳	1		1	3	(1)	(1)	(3)			1	3(1)	
コムギ	炭化胚乳	1	1		1	1	1	1		3	1	4	
ササゲ属	炭化種子							(1)					

分類群・部位	コード												
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居
	出土位置	E-4	E-5	E-5	掘り方 E-5	E-6	E-7	E-7	F-1	掘り方 1-F	F-2	掘り方 2-F	F-3
イネ	炭化胚乳	1											
オオムギ	炭化胚乳		1	(1)	1	1	1				2(1)	(1)	
オオムギーコムギ	炭化胚乳			(1)	1	(2)	1		1(1)		1(1)	1(1)	
コムギ	炭化胚乳				1	2	1		1		5		3

分類群・部位	コード												
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居
	出土位置	掘り方 3-F	F-4	F-5	掘り方 6-F	F7	掘り方 7-F	F8	G-2	G2	G4	G-4	掘り方 G-4
モモ	炭化核									(1)			
イネ	炭化胚乳		(1)			1							
オオムギ	炭化胚乳				1							2	
オオムギーコムギ	炭化胚乳		1	2				1	2	1	1	1(1)	1
コムギ	炭化胚乳				2	2	3		2	2	4	1	1
マメ科	炭化種子								1				

分類群・部位	コード												
	地区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区	V区
	遺構	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居	11号住居
	出土位置	掘り方 4-G	G-5	G5	G-6	掘り方 6-G	掘り方 7-G	G-8	G8	掘り方 8-G	H-1	掘り方 1-H	H2
イネ	炭化胚乳	1			(1)	1							
オオムギ	炭化胚乳		3				1			2	(1)		2
オオムギーコムギ	炭化胚乳				(1)	(2)	1		1	1			(1)
コムギ	炭化胚乳		2				2	1		2	1		2

分類群・部位	コード											S58	S59
	地区	V区	V区	V区									
	遺構	11号住居	12号住居	12号住居									
	出土位置	H-3	竈	竈	竈	竈	竈	竈	竈	竈	竈 掘り方	竈 掘り方	竈掘り方 掘り方NE
イネ	炭化胚乳				(1)				(1)			1	5
オオムギ	炭化胚乳	1		2		(1)				2			11
オオムギーコムギ	炭化胚乳	1		1(3)	(1)	1(1)		(1)		1(1)	1	1	
コムギ	炭化胚乳		2	4	1	1			1				5
ササゲ属	炭化種子				1							1	
マメ科	炭化種子										1	(2)	
シソ属	炭化果実											1	

分類群・部位	コード	S60	S61	S62	S63	S64	S65	S66	S67	S68	S69	S70
	地区	V区	V区	V区								
	遺構	12号住居	12号住居	13号住居	13号住居	13号住居	13号住居	13号住居	13号住居	1号竈穴状 遺構	1号谷	86号土坑
	出土位置	掘り方SE	床下土坑	床NE	床NW	床SE	床SW	竈	土坑	掘り方	耕作土	覆土下層
ブドウ属	炭化種子			2								
イネ	炭化胚乳	7(1)	1	3		1	2	7				
オオムギ	炭化胚乳	8(4)		5	2(1)	5(1)	2(1)	15(2)	6	5(1)		
オオムギーコムギ	炭化胚乳			(1)			1		1	1(2)		2
コムギ	炭化胚乳	2		1	5		4	8	1			1
ヒエ	炭化胚乳			1				1	1			
アサ	炭化種子										1	
ササゲ属	炭化種子	1					1					
ダイズの仲間	炭化種子					1	(1)					
マメ科	炭化種子	(2)					(1)			(1)		
シソ属	炭化果実	1		1				3				
ゴマ	炭化種子										22	

第6章 科学分析

表4 各遺構の主要分類群の占める割合(その1) 各遺構の()内は種実総数

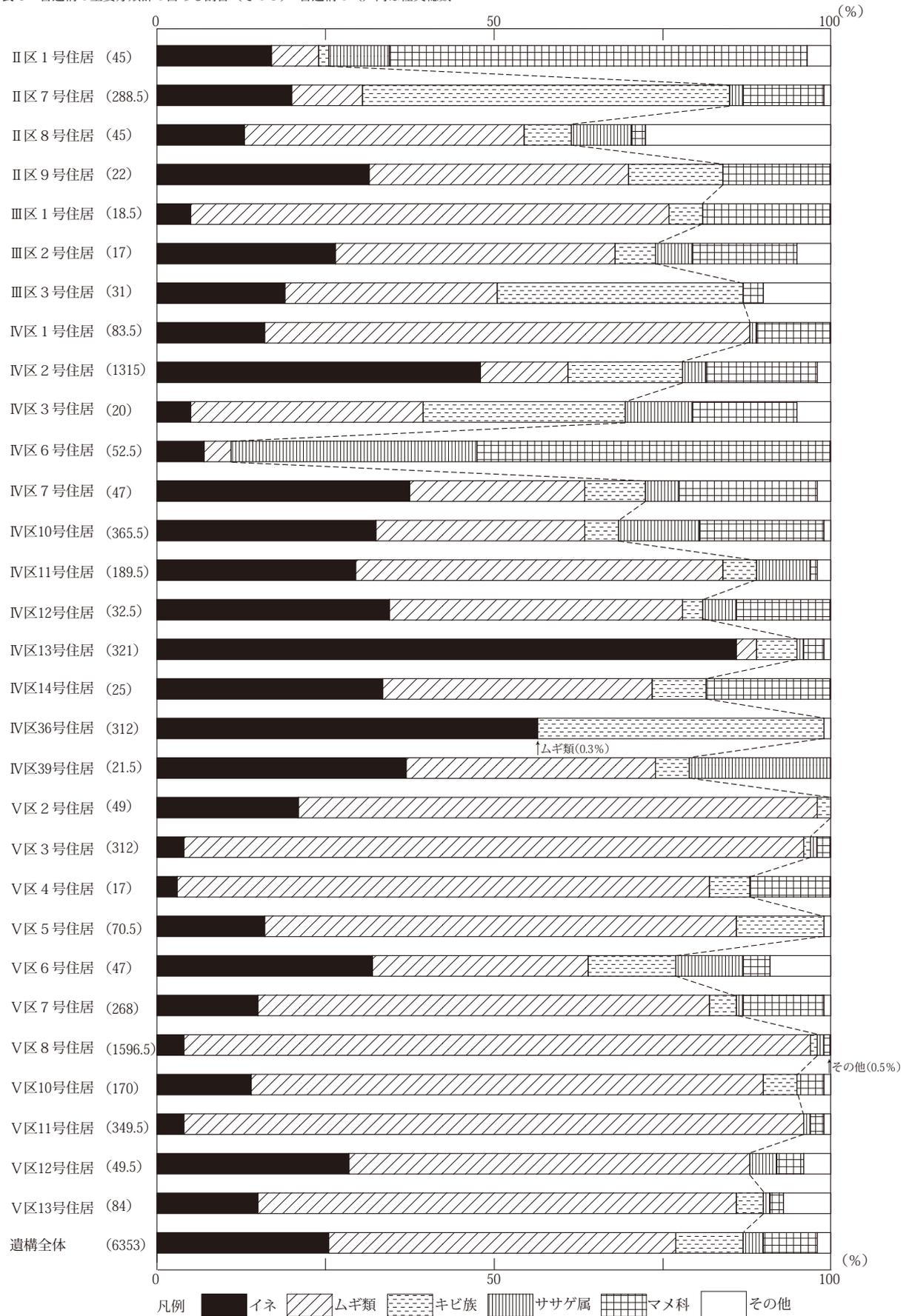
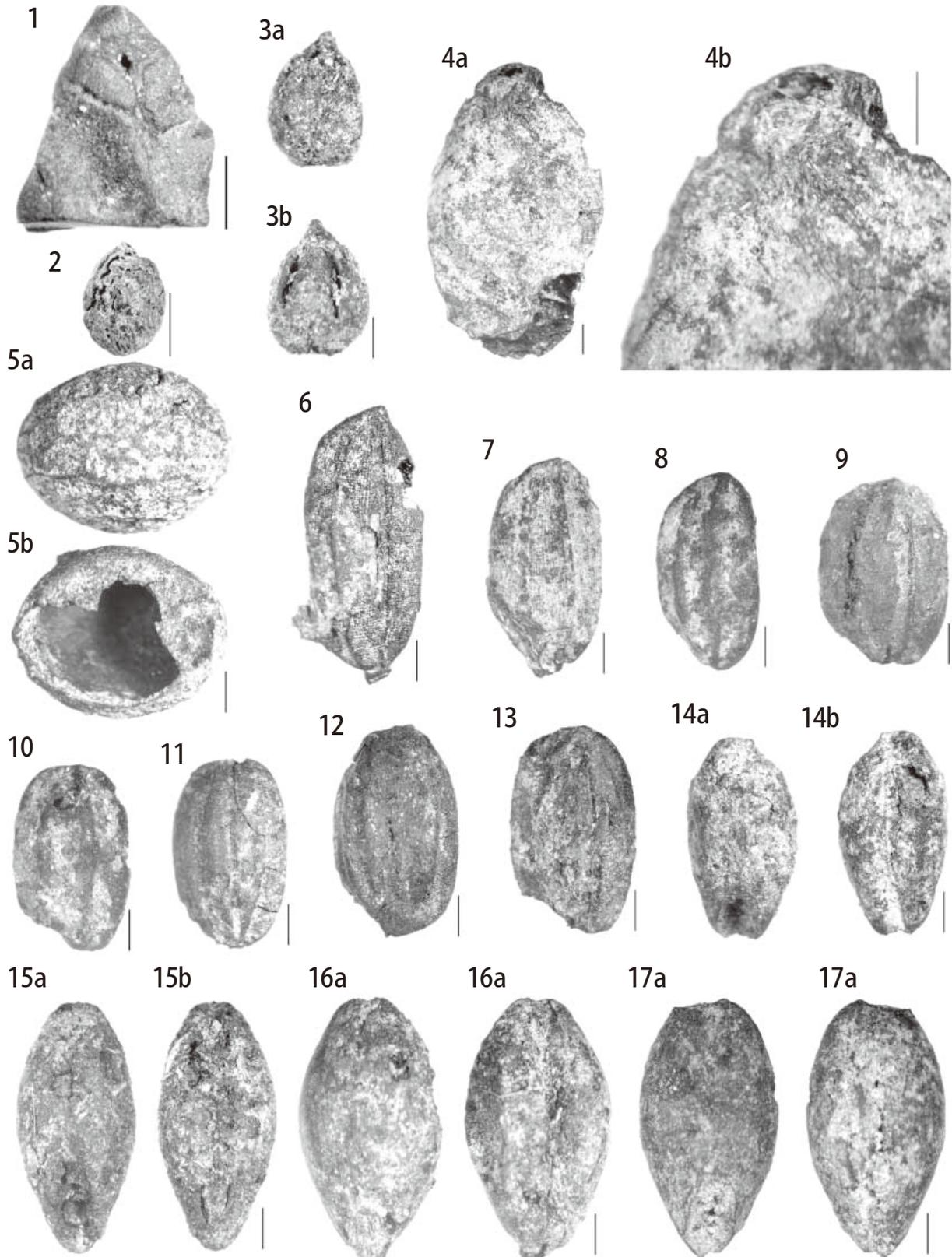


表6 遺構別イネ炭化率乳計測値集計

地区	遺構	地点数	計測 個体数	長さ						幅						長幅比					
				最大(mm)	平均(mm)	最頻値(mm)	標準偏差	最小(mm)	最大(mm)	平均(mm)	最頻値(mm)	標準偏差	最小	最大	平均	最頻値	標準偏差				
II区	1号住居	1	3	3.7	4.8	4.3	0.6	1.6	2.4	2.1	—	0.4	1.9	2.3	2.1	—	0.2				
	7号住居	1	33	3.2	5.2	4.3	0.5	1.3	3.0	2.3	2.3	0.4	1.4	2.5	1.9	1.9	0.3				
	8号住居	1	3	4.2	4.5	4.4	0.2	2.4	2.6	2.5	—	0.1	1.7	1.8	1.8	—	0.04				
	9号住居	1	3	4.2	4.7	4.6	0.4	2.0	2.8	2.4	—	0.4	1.8	2.1	1.9	—	0.2				
	1号住居	1	1	4.8	4.8	4.8	—	2.6	2.6	2.6	2.6	—	1.8	1.8	1.8	1.8	—	—			
	2号住居	1	3	4.2	5.1	4.6	0.5	1.9	2.8	2.4	—	0.5	1.6	2.2	2.0	—	0.3				
	3号住居	2	3	3.8	4.5	4.2	0.4	1.8	2.6	2.2	—	0.4	1.7	2.1	1.9	—	0.2				
	1号住居	3	7	3.3	5.3	4.3	0.7	2.0	2.9	2.6	2.8	2.8	0.3	1.4	2.0	1.7	—	0.2			
	2号住居土坑3	1	38	2.6	5.2	4.2	0.6	1.3	2.8	2.2	2.3	2.3	0.3	1.5	2.9	1.9	2.0	0.3			
III区	2号住居	23	174	2.6	5.8	4.5	0.5	1.3	3.1	2.4	2.3	0.3	1.4	2.9	1.8	1.9	0.2				
	3号住居	1	1	4.1	4.1	4.1	—	1.4	1.4	1.4	1.4	—	2.9	2.9	2.9	—	—				
	7号住居	1	7	3.9	4.8	4.3	0.3	2.1	3.0	2.4	2.2	0.3	1.4	2.2	1.8	—	0.2				
	10号住居	9	37	3.4	5.2	4.5	0.4	2.0	3.2	2.5	2.3	0.3	1.4	2.3	1.8	2.0	0.3				
	11号住居	5	22	3.2	5.7	4.4	0.5	2.1	3.0	2.4	2.3	0.2	1.4	2.6	1.8	2.0	0.2				
	12号住居	1	6	3.0	4.8	4.1	0.7	2.5	3.3	2.8	2.6	0.3	1.2	1.8	1.5	—	0.2				
	13号住居掘り方中央部	1	70	3.2	5.2	4.3	0.4	1.3	3.2	2.4	2.3	0.5	1.3	2.8	1.9	1.9	0.4				
	13号住居	2	81	3.2	5.2	4.3	0.4	1.3	3.2	2.4	2.3	0.5	1.3	2.8	1.9	1.9	0.3				
	14号住居	1	3	3.3	5.2	4.4	1.0	2.0	3.0	2.6	—	0.6	1.6	1.9	1.7	—	0.2				
	9号土坑	1	1	4.3	4.3	4.3	—	2.8	2.8	2.8	2.8	—	1.5	1.5	1.5	—	—				
	36号土坑	1	47	3.5	5.1	4.4	0.4	1.9	2.7	2.3	2.3	0.2	1.6	2.2	1.9	1.9	0.1				
	39号土坑	1	5	4.1	5.0	4.3	0.4	2.2	2.6	2.4	2.3	0.2	1.6	2.2	1.8	—	0.2				
	2号住居	1	2	4.0	5.2	4.6	0.8	2.2	2.3	2.3	—	0.1	1.7	2.4	2.1	—	0.5				
V区	3号住居	1	1	3.6	3.6	3.6	—	2.6	2.6	2.6	—	—	1.4	1.4	1.4	—	—				
	5号住居	4	4	4.1	4.4	4.3	0.1	2.1	2.3	2.2	2.2	0.1	1.9	2.2	2.0	2.0	0.1				
	6号住居	2	6	4.3	5.1	4.6	0.3	1.7	2.9	2.5	2.5	0.4	1.7	2.5	1.9	1.7	0.3				
	7号住居	4	14	3.5	4.9	4.3	0.4	1.8	2.8	2.3	2.6	0.4	1.6	2.4	1.9	2.2	0.3				
	8号住居	5	23	3.5	5.1	4.4	0.4	1.3	3.0	2.5	2.5	0.4	1.4	3.2	1.8	1.8	0.4				
	10号住居	2	3	4.3	4.7	4.6	0.2	2.5	2.7	2.6	—	0.1	1.7	1.8	1.7	1.7	0.1				
	11号住居	1	1	4.3	4.3	4.3	—	2.3	2.3	2.3	—	—	1.9	1.9	1.9	—	—				
	12号住居	1	1	4.8	4.8	4.8	—	2.5	2.5	2.5	—	—	1.9	1.9	1.9	—	—				
	13号住居	2	3	4.3	4.8	4.5	0.3	1.8	3.0	2.5	—	0.6	1.5	2.4	1.9	—	0.5				
	遺構全体		80	498	2.6	5.8	4.4	0.4	1.3	3.3	2.4	2.3	0.4	1.2	3.2	1.9	1.9	0.3			

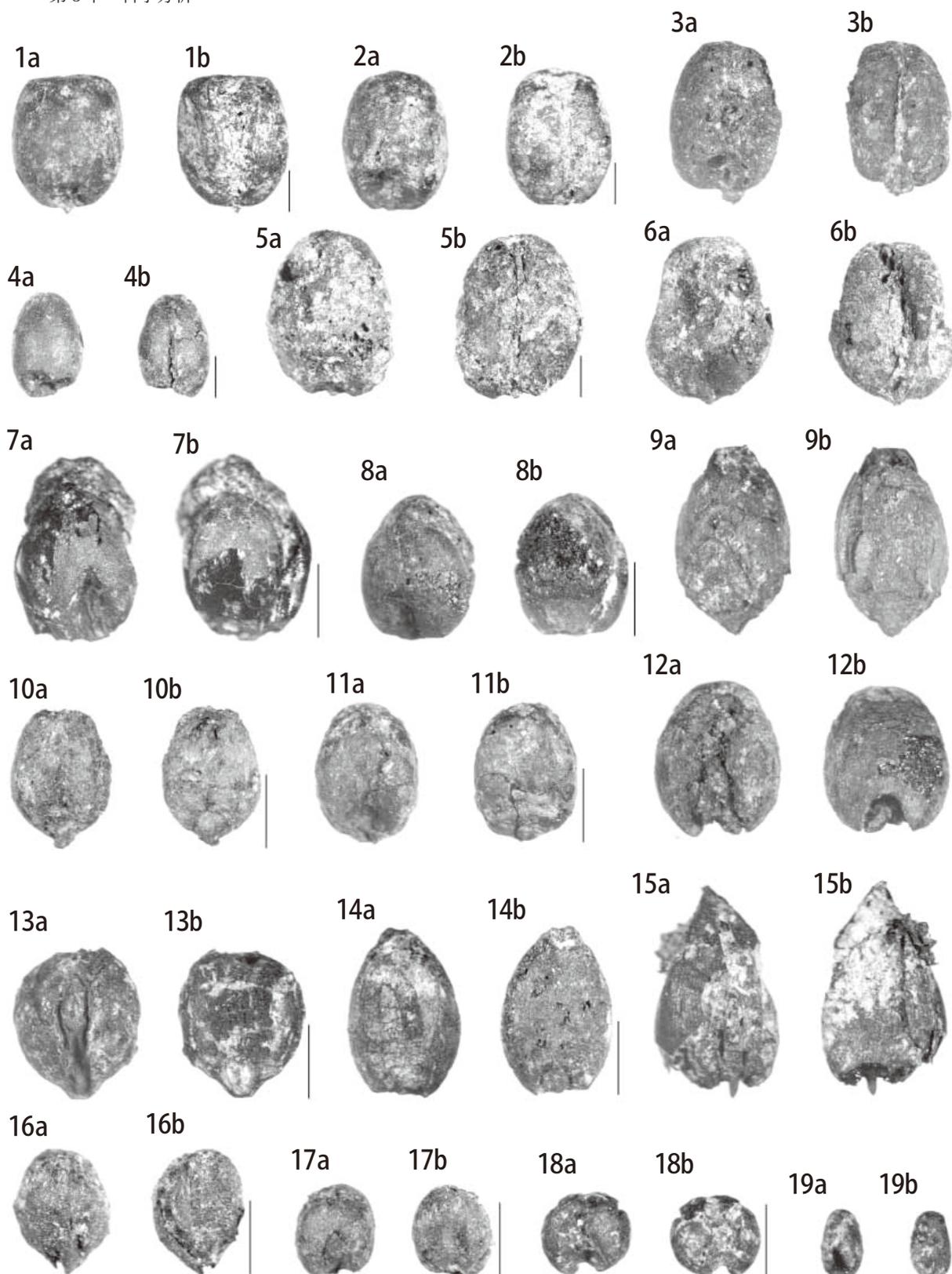
表8 マメ類計測値比較一覧(吉崎・椿坂(2001)を引用して作成)

分類群	個体数		長さ					幅					厚さ				
	最小(mm)	最大(mm)	平均(mm)	最頻値(mm)	標準偏差	最小(mm)	最大(mm)	平均(mm)	最頻値(mm)	標準偏差	最小(mm)	最大(mm)	平均(mm)	最頻値(mm)	標準偏差		
アズキの仲間	3.9	5.8	4.9	5.0	0.6	2.3	3.8	3.0	2.3	0.6	—	—	—	—	—		
ササガ属	—	6.3	5.0	5.2	0.7	2.3	4.3	3.2	3.3	0.5	2.2	4.5	3.3	3.2	0.5		
ダイズの仲間	3.1	3.8	3.6	3.8	0.4	2.3	3.0	2.6	—	0.3	1.9	2.4	2.1	2.1	0.2		
大豆	5.1	9.1	6.6	—	1.2	3.8	6.3	4.7	5.5	0.8	3.2	4.9	4.0	3.9	0.5		
合計	3.1	9.1	5.6	3.8	1.8	2.3	6.3	4.0	5.5	1.2	1.9	4.9	3.2	3.9	1.0		
マメ科	3.1	4.8	3.9	3.8	0.5	2.1	3.3	2.8	3.3	0.4	1.6	3.1	2.2	2.2	0.4		
小ダイズ	5.0	8.6	6.5	6.3	0.9	2.6	6.7	4.6	4.3	0.8	2.4	5.1	3.7	3.3	0.6		
大ダイズ	3.1	8.6	5.8	6.3	1.4	2.1	6.7	4.1	4.3	1.1	1.6	5.1	3.3	3.3	0.8		
合計	3.7	5.2	—	—	—	2.4	3.5	—	—	—	1.7	3.3	—	—	—		
ソルマメ	—	—	—	—	—	4.2	4.7	—	—	—	3.1	3.7	—	—	—		
雑豆ダイズ	5.0	5.4	—	—	—	4.2	4.7	—	—	—	3.1	3.7	—	—	—		
ダイズ	4.5	7.6	—	—	—	4.3	8.4	—	—	—	3.0	7.3	—	—	—		



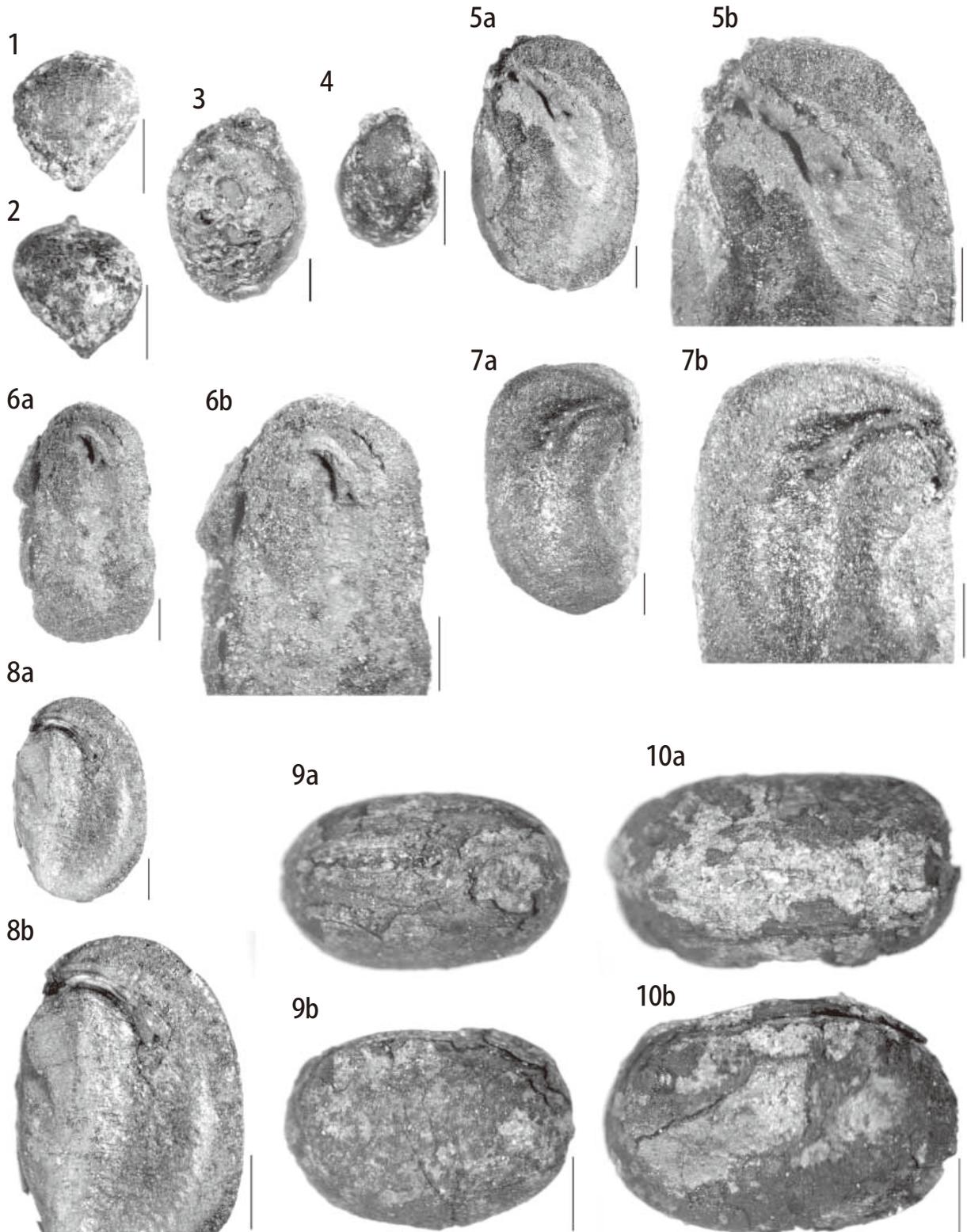
図版1 出土した炭化種実 (スケールは2が1 cm、1、3～16が1 mm)

1. オニグルミ、炭化核 2. モモ、炭化核 3. ブドウ属、炭化種子 4. カキノキ属、炭化種子 5. クサギ、炭化核 6, 7. イネ、炭化穎果 8～13. イネ、炭化胚乳 14～17. オオムギ、炭化胚乳 (1: V区 11号住居掘り方3-B 2: IV区 10号住居 3, 13, 15: II区 7号住居竈前ピット掘り方 4, 10: IV区 2号住居 2A 5, 7, 8: IV区 2号住居土坑3 6, 12: IV区 13号住居掘り方中央部 9, 14: IV区 10号住居 A 11: IV区 36号土坑 6: IV区 11号住居竈 17: IV区 11号住居貯蔵穴)



図版2 出土した炭化種実 (スケールは1 mm)

1～6. コムギ、炭化胚乳 7、8. キビ、炭化胚乳 (7は穎付着) 9～15. ヒエ、炭化胚乳 (9、15は穎付着)
 16. アワ、炭化穎果 17、18. アワ、炭化胚乳 19. イネ科、炭化胚乳 (1: IV区11号住居竈 2: IV区10号住居A 3: IV区39号土坑 4: IV区10号住居C 5: IV区13号住居竈 6、9、10、16、17: II区7号住居竈前ピット掘り方 7、8: IV区13号住居掘り方中央部 11、18、19: IV区36号土坑 12: IV区2号住居B竈 13～15: IV区2号住居土坑3)

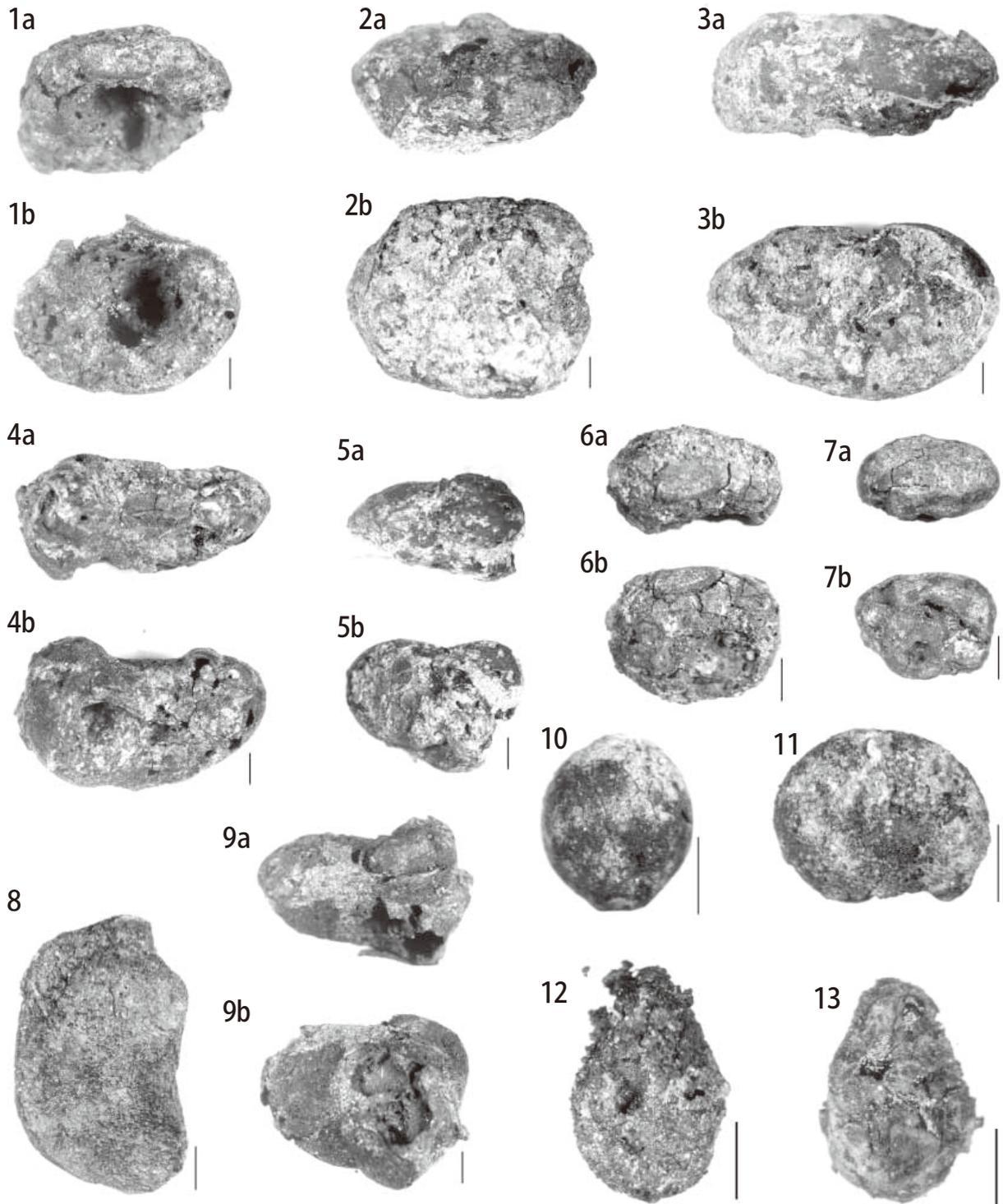


図版3 出土した炭化種実 (スケールは1mm)

1、2. ホタルイ属、炭化果実 3. アサ、炭化種子 4. タデ属、炭化果実 5～8. アズキの仲間、炭化種子 (子葉内面)

9、10. ササゲ属、炭化種子 (aは上面観、bは側面観)

(1、6、7: II区7号住居竈前ピット掘り方 2: IV区2号住居土坑 3: V区1号谷 4: II区3号住居竈 5: IV区2号住居土坑 8～10: IV区10号住居C)



図版4 出土した炭化種実（スケールは1mm）

1～8. ダイズの仲間、炭化種子（aは上面観、bは側面観、8は子葉内面） 9. マメ科、炭化種子（aは上面観、bは側面観） 10. シソ属、炭化果実 11. ナス属、炭化種子 12、13. ゴマ、炭化種子（1、9：Ⅱ区7号住居竈前ピット掘り方 2：Ⅳ区2号住居3D 3、11：Ⅳ区2号住居2A 4：Ⅳ区2号住居土坑 5：Ⅳ区10号住居土坑1 6：Ⅳ区10号住居竈掘り方 7：Ⅳ区10号住居D 8：Ⅳ区10号住居A 10：Ⅳ区2号住居土坑3 12、13. 5区1号谷）

第7節 人骨・獣歯骨同定

十二廻り遺跡、阿久津遺跡、桑原田遺跡、中町遺跡、万蔵寺廻り遺跡の調査において、獣歯骨及び人骨が出土しており、その同定について宮崎重雄氏に委託した結果は以下のとおりである。

I 万蔵寺廻り遺跡

(1) V区1号井戸1号人骨

保存状態は余り良くなく、残存している頭蓋冠片、下顎骨片、鎖骨片、中足骨片などの他は細片である。

1. 頭蓋骨

①脳頭蓋：脳頭蓋の内側を充填した土塊が鋳型をなして、比較的よく保存されている。土塊鋳型の現状での最大前後径は約11cmである。脳頭蓋は一部が土塊の鋳型に付着しているだけで、他は剥離している。剥離骨片は5片あり、1片に羊歯状でなく曲線状になっている縫合線が観察される。前頭骨頬骨縫合付近の眼窩上縁部の骨片も確認される。

②下顎骨：左第1小白歯から第2大白歯付近までの下顎骨が残存する。第1小白歯、第2小白歯、第1大白歯の歯槽だけが観察される。第2大白歯は脱落し、歯槽も閉鎖したようである。第3大白歯のようすは不明である。

③歯：残存する歯は以下のようである。

- a. 右上顎第1切歯：舌面溝は2型で深く、切縁近心半に象牙質が線状に露出している。
- b. 左下顎第1小白歯：舌側咬頭では象牙質が半月状に大きく露出している。舌側咬頭には象牙質の露出なく、エナメル質のみ咬耗を受けている。
- c. 左下顎第2小白歯：舌側咬頭では象牙質が半月状に大きく露出している。舌側咬頭には象牙質の露出なく、エナメル質のみ咬耗を受けている。近心・遠心両隣接面にわずかに齶蝕がある。Blackの分類はU字形である。
- d. 右上顎第2小白歯：遠心隣接面に象牙質に達しない齶蝕がある。Blackの分類はU字形である。
- e. 右上顎第2大白歯：ほぼ咬合面全面に咬耗が及ぶが象牙質の露出はない。近心歯頸部に象牙質に達する長径4mmの齶蝕がある。
- f. 左上顎第2又は第3大白歯：咬耗は広い範囲に及ぶが象牙質の露出はない。
- g. 右下顎第1大白歯：5咬頭からなる。近心舌側第5咬頭に点状に象牙質が露出している。近心隣接面に象牙質には達しない齶蝕がある。
- h. 左下顎第2大白歯：第5咬頭が痕跡的に存在する。近心2咬頭が帯状の象牙質でつながっている。
- i. 下顎第3大白歯：左右不明、近心咬頭に点状の象牙質が露出する。

この他に右上顎白歯片、下顎切歯片と思われる歯片がある。

2. 鎖骨：左右の骨片が存在する。中央垂直径10.4mm、中央矢状径12.7mm、中央周47.0mmを計測する。

3. 距骨：左距骨で最大長は48.0mmである。

第6章 科学分析

その他、腓骨片などが観察される。

4. 推定年齢

歯の咬耗度、歯の欠損状況、頭蓋冠の縫合線の癒合度などから判断して、年齢は熟年期～老年期であろう。

5. 性別の推定

鋳型から推定される頭蓋冠の大きさ、歯の大きさなどから女性の可能性の方が高い。

6. 病歴

左下顎第2小臼歯、右上顎第2小臼歯、右上顎第2大臼歯、右上顎第1大臼歯に齲蝕がみられる。

(2) V区1号井戸2号人骨

第1表 万歳寺廻り遺跡V区1号井戸1号人骨

	RL ¹	LP ₁	LP ₂	RP ²	RM ²	LM ² or M ³	RM ₂	LM ₂	M ₃
歯冠長	8.2	6.3	6.3	6.7	9.5	8.4	11.2	10.8	10.0
歯冠幅	5.5+	7.6	7.9	7.8	11.0	8.6	10.0	10.4	9.3
歯冠高	11.0	7.9	5.3	6.4	5.9	5.0	6.2	5.7	6.7

単位：mm

註：右上顎第1切歯 (RI¹)、左下顎第1小臼歯 (LP₁)、左下顎第2小臼歯 (LP₂)、右上顎第2小臼歯 (RP²)、右上顎第2大臼歯 (RM²)、左下顎第2又は第3大臼歯 (LM² or M³)、左下顎第2大臼歯 (LM₂)、下顎第3大臼歯 (M₃)。

1. 埋存姿勢

頭部を北にし、頭を西に向けた横臥屈葬姿勢である。

2. 頭蓋骨

比較的保存良好なのは、頭頂骨片、下顎骨および上肢骨、下肢骨である。

①頭蓋冠：比較的大きな破片で残っている。頭頂孔付近の矢状縫合とラムダ縫合が観察される。矢状縫合は、外面では1/3程度に癒合がおこり、内面では全体的に渡って縫合が生じている。後頭隆起、上項線の発達は比較的良好、乳様突起も大きめである。

②下顎骨：左右とも下顎枝を欠く。存在する歯は右が第3大臼歯、左が第2切歯、犬歯、第2小臼歯、第2大臼歯である。この他右犬歯、右第1小臼歯、右第2小臼歯の歯槽、左第3後臼歯の非常に浅い歯槽があるが、いずれも歯そのものは見当たらない。右の、第2大臼歯、第1大臼歯、第2切歯、第1切歯、左の、第1切歯、第1小臼歯、第1大臼歯の計7本は歯槽が閉塞し、生前にすでにこれらの歯が脱落していたことを示している。

a. 右第3大臼歯：5咬頭からなり、舌側2咬頭で象牙質が露出している。

b. 左第2切歯：咬耗著しく、咬耗面が唇側・舌側の2段になっていて、その段差は5.6mmに達し、エナメ

ル質は唇側縁に少し残るだけで、舌側半では象牙質が全面に露出し、中央部に歯髓腔が空いている。

- c. 左犬歯：咬合面には周囲を除き全面象牙質が露出している。
- d. 左第2小白歯：咬合面には周囲を除き全面象牙質が露出している。頬側に象牙質までは到らない齲蝕がある。
- e. 左第2大白歯：咬耗が咬合面の全面に及び、近心2咬頭で象牙質が露出している。頬側歯頸部に直径3mmほどの齲蝕がある。

3. 脊柱

脊柱も数片残存する。有効な計測値が得られたのは軸椎の腹側垂直径のみで、34.0mmである。

4. 上肢

左上腕骨、左右の鎖骨、橈骨片、基節骨片等が観察される。上腕骨では三角筋粗面の発達が比較的良い。左上腕骨の骨体部は緑青のより変色している。

5. 下肢

左右の大腿骨、脛骨、腓骨片、中足骨片が確認される。大腿骨では粗線の発達はよく、内側唇、外側唇が明瞭である。腓骨ではヒラメ筋線の発達が比較的良い。

6. 推定年齢

歯の咬耗度、歯の欠損状況、頭蓋冠の縫合線の癒合度などから判断して、老年期に到っていると思われる。

7. 性別の推定

後頭隆起・上項線・乳様突起などの発達度、各部位の計測地などから判断して、男性の可能性が高い。

8. 病歴

左下顎第2切歯、左下顎第2小白歯、左下顎第2大白歯に齲蝕がみられる。特に、左下顎第2切歯では齲蝕が歯髓腔に到る齲蝕第4度に達している。

第2表 万歳寺廻り遺跡V区1号井戸2号人骨

下顎歯計測値

	左第2切歯	左犬歯	左第2小白歯	左第2後臼歯	左第3後臼歯	右第3後臼歯
歯冠長	4.5+	7.1	6.4	12.3	10.8	9.5
歯冠幅	6.7+	8.2	7.0	11.3	10.5	9.5
歯冠高	17.5 (含歯根)	6.0+	7.2+	5.9	5.2	5.7

第6章 科学分析

下顎骨計測値

下顎角幅	前下顎幅	下顎長	オトガイ高	下顎体高 (オトガイ孔)	下顎体高 (M2)	下顎体厚 (オトガイ孔)	下顎体厚 (M2)	歯列弓幅	下顎歯列弓長	臼歯列長
102.0+	49.2	73.0+	31.8	34.4	33.5	12.5	17.4	69.0	48.0	39.8

右鎖骨計測値

中央垂直径	中央最大径	中央矢状径	中央最小径	中央周
10.6	10.6	13.4	13.2	37.0

左上顎骨計測値

中央最大径	三角筋粗面位最大径	中央最小径	三角筋粗面位最大径	中央横径	中央矢状径	骨体最小周	中央周
22.0	22.7	20.3	21.4	21.0	20.7	68.0	68.0

右橈骨計測値

骨体横径	骨体矢状径	骨体中央矢状径
16.8	11.7	12.0

右大腿骨計測値

骨体中央矢状径	骨体中央横径	内側・外側唇間幅
31.1	27.4	7.7

左脛骨計測値

中央最大矢状径	栄養孔最大径	栄養孔下最大径	中央横径	栄養孔横径	栄養孔下横径	骨体中央周	栄養孔位周	骨体最小周
32.0	37.0	36.4	23.6	21.3	22.1	86.0	100.0	81.0

各表の単位はmm

(3) IV区10号住居出土焼骨

A (1)：焼骨の微細骨10数片で、焼骨特有の亀裂が明瞭に確認される。人骨の可能性はある。

A (2)：焼骨の細骨片2片で、人骨の可能性もある。

B：焼骨の微細骨片10数片で、人骨の可能性はある。

C21：肢骨の焼骨細片である。人骨の可能性はある。

C24：数10片から成る焼骨微細片である。人骨の可能性はある。

D：焼骨の微細骨片10数片で、人骨の可能性はある。

10号住骨集中部：1片の小骨片、保存最大長3.0mmである。人骨の可能性はある。

土坑：ヒトの右下顎小白歯で、歯冠近遠心径5.6mm、頬舌径5.0mmを計測する。象牙質が点状に露出し、壮年期のものである。女性の可能性はある。

骨：100数10片の焼骨細片で、肢骨片など含む。長骨片には人骨に特有の長軸方向に走る筋が見られることで人骨と判断される。

- (4) IV区3号溝：ウシの臼歯片で、歯冠高が26.7mmと低く、これよりやや歯冠高の高い歯片もあり、2本分の歯片から成る。壮令牛である。
- (5) IV区7号溝：シカの角の焼骨である。保存最大長24.0mm。他に種不明の骨片が1片。
- (6) 3号東部：ウマの左上顎第2後臼歯で、歯冠高は67.0mmあり、幼令馬である。下顎臼歯片があり、doubleknot頂2.7mm、歯冠高44.8mmである。

第3表 万蔵寺廻り遺跡IV区計測表

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	原錐幅	咬合面の傾斜	中附錐幅
左上顎第2後臼歯	26.3	24.6	67.0	14.2	75°	3.5

単位：mm

左上腕骨



左脛骨



右脛骨



左大腿骨



右大腿骨



脳頭蓋



下顎骨



IV区3号溝

0 1:3 10cm

II 阿久津遺跡

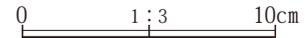
- (1) VI区G・11、14号水田畦断割部：ウマの左下顎第2後臼歯で、8才前後の壮令馬である。
- (2) 動物骨でなし。
- (3) III区確認面：ウマの下顎第3前臼歯で、4～5才の幼令馬である。
- (4) I区用水路北部張り出し：動物骨でなし。
- (5) I区用水路泥流底部右下：ウマの右下顎第1後臼歯で、歯冠高が47.4mmあり、8才程度の壮令馬と推定される。この他に馬歯片1片あり。
- (6) ラベルなし：ウマの可能性のある肢骨片。

第4表 阿久津遺跡II区計測表

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	咬合面の傾斜	下後錐谷長	下内錐谷長	下内錐幅
左下顎第2後臼歯	23.2	13.7	50.1	75°	7.5	8.8	
?下顎第3前臼歯	28.8	15.7	59.0	92°	9.8	14.7	6.2
右下顎第1後臼歯	24.6	14.3	47.4	82°	8.3	8.7	4.8



VI区11・14号水田 畦



III 桑原田遺跡

- (1) III区東2号溝骨102：ウマの左上顎第3後臼歯である。歯冠高が31.5mmと低く、老令馬である。
- (2) III区P-101：ウマの左上顎第2後臼歯である。歯冠高は55.0mmで各咬頭に咬耗が及んでいるが、咬耗が開始されたばかりで、幼令馬である。

第5表 桑原田遺跡III区計測表

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	原錐幅	咬合面の傾斜	中附錐幅
左上顎第3後臼歯	24.1	21.5	31.5	14.6	65°	3.5
左上顎第3前臼歯	24.5	18.4+	55.0	12.3	65°	

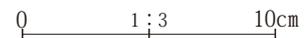
各表の単位はmm



III区東2号溝 骨102



III区P-101



IV 十二廻り遺跡

- (1) I-3区、1号井戸：イノシシの左上腕骨。大きさは現代イノシシ並みで、骨体最小前後径が26.0mmである。
- (2) 北側東：タヌキの頭蓋骨で、現代ものである。
- (3) I-1区：カキの貝殻片。
- (4) I-1区：数10片の焼骨の細骨片で、亀裂を生じ、灰黒色をしている。700～800度の火熱が加えられたと思われる。種名は特定できず。

V 中町遺跡

- (1) I区2号水田P泥流中：ウマの右下顎第2後臼歯で、歯冠高が62.6mmあり、幼令馬から成馬になりかかった5～6才のウマである。
- (2) II区2号溝・砂礫層：ウマの左上顎第1後臼歯で、歯冠高は53.3mmあり、幼令馬～成馬になりかかった5～6才のウマである。
- (3) II区1号トレンチ：左上顎第3後臼歯で、歯冠高は58.2mmあり、7才前後の若い牡令馬である。

第6表 中町遺跡V区計測表

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	咬合面の傾斜	下後錐谷長	下内錐谷長	下内錐幅
右下顎第2後臼歯	24.0	13.6	62.6	78°	7.8	?	?

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	原錐幅	咬合面の傾斜	中附錐幅
左上顎第1後臼歯	?	2.02	53	13.1	?	3.2
左上顎第3後臼歯	26.5+	15.5+	58.2	?	104°	?

各表の単位はmm



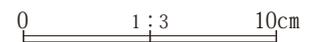
I区2号水田



II区2号溝



II区1号トレンチ



主な参考文献

馬場悠男 (1991) 「人体計測法—II 人骨計測法」 『人類学講座、別巻1』、雄山閣出版
 西中川駿・松元光春 (1991) 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究—特に在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較—」 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』、平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書、164-188
 野村晋一 (1986) 「概説馬学」、新日本教育図書
 瀬田希茂・吉野峰生 (1990) 「白骨死体の鑑定」、令文社

第7章 考察

第1節 万蔵寺廻り遺跡出土土器の編年的位置づけ

1. はじめに

今回、前橋渋川バイパス関連遺跡群の調査によって、万蔵寺廻り遺跡を中心に平安時代中期の集落跡が確認された。集落跡からは44棟の竪穴住居、土坑などが見つかっており、住居内からは土器を中心に金属製品、木製品などが出土している。集落で使われていた土器は、須恵器と灰釉陶器が主だったもので、これに土釜と呼ばれる土師質の甕が加わる。ここでは土器に主眼を置き、分類を行って前橋渋川バイパス関連遺跡群の古代集落における土器編年を試みたい。

2. 土器の形式分類

(1) 須恵器坏 轆轤で成・整形され、高台が付かないものを須恵器坏とする。底部切り離し技法は全て回転糸切り離しであり、体部外面はほとんどが無調整、酸化焰焼成が大部分を占める。分類の主軸としたのは、底径と口径の比率、器高、器形である。

坏A I 坏の中では最も口径、器高が大きい。器壁はやや厚く、口縁部は外反し口唇部がやや肥厚する。万蔵寺廻り遺跡IV区10住-22のみである。

坏A II 器形はIとほぼ同じだが、Iに比べて器高が低く、口径も小さくなる。万蔵寺廻り遺跡IV区10号住から5個体出土しており、代表的な遺物となる。

坏A III 器形はII類とほぼ同じだが、内面に黒色処理を施し棒状工具などによって研磨する。万蔵寺廻り遺跡IV区10住-23とV区2住-1の2個体のみである。

坏A IV 底径：口径の比率はI～III類と同様だが、器高が低くなる。万蔵寺廻り遺跡IV区13住-5とV区3住-1の2個体のみ。

坏B I 口径に対して底径が小さくなる。また、底径に対し器高が高い。体部はやや鋭角に立ち上がり、

口縁部は外反する。口唇部は肥厚する。万蔵寺廻り遺跡II区3住-1を代表に9個体を数える。

坏B II 底径と口径の比率や法量はI類とほぼ同じだが、口縁部が外反しない点と底部回転糸切り離した後、篋調整を施す点が特徴である。

坏C I 器高はAIV類とほぼ同じであるが、著しく小口径化する。体部はB類よりも直立に近く、口唇部は肥厚する。万蔵寺廻り遺跡V区11住-3のみ。

坏C II 口径と器高が小さくなる。底径と口径の比率はA類と比較的近く、特に器形上の特徴はAIV類と共通点が多い。IV区に集中する傾向がある。万蔵寺廻り遺跡IV区10住-1を代表とする。

坏C III 体部の立ち上がり直線的で、胎土は軟質、焼成が悪い。万蔵寺廻り遺跡II区8住-1を代表的とする。

坏D I 器高はさらに低くなり、皿に近い器形となる。口縁部が外反するものはほとんど無く、焼成の悪いものが多い。万蔵寺廻り遺跡II区1住-1を代表とする。

坏D II 器形の特徴はI類と共通するが、器壁に厚みを持つ。胎土には粗砂、鉾物粒が多い。III区2住-13を代表的な遺物とする。

坏D III 皿に近い器形で、胎土は粗粒だが焼成が良い。万蔵寺廻り遺跡III区2住-11を代表とする。

坏E I 口径は10cmに満たないものがほとんどで、底径と口径の比率も広がる。体部は外反しながら鋭角に立ち上がり、体部と底部の境界がより明確になる。口唇部が強く肥厚するのが特徴で、焼成は並から良。代表的な遺物にIII区2住-9がある。

坏E II I類に比べて器壁が薄く、焼成が悪い。口唇部の外反はE Iよりも強い。器壁が薄くなり、全体的に粗雑さが目立つ。万蔵寺廻り遺跡III区2住-6を代表的な遺物とする。

坏E III 器形の特徴はE I、IIと共通するが、底部が高台状に突出する。胎土には粗砂、鉾物粒が多く含まれる。万蔵寺廻り遺跡IV区1住-3のみである。

坏EⅣ 焼成が良く、胎土も精緻である。底部は高台状に突出しているが、Ⅲに比べて底径が小さい。内外面ともに丁寧な撫でが施される。Ⅲ、もしくは坏を思わせる。万蔵寺廻り遺跡Ⅲ区2住-3、10の2個体が確認される。

(2) 須恵器碗 轆轤で成・整形され、高台が付くものを碗とした。底部切り離し技法は全て回転糸切り離しであり、切り離し後は無調整で高台を貼付する。全て酸化焰焼成で、坏と同じく体部外面に調整は見られない。分類は器形と高台を主軸とする。

碗A Ⅳ区14住-1のみ確認されている。口唇部は外反し、体部外面は無調整である。高台は断面方形で、若干ハの字状に開く。

碗B 足高高台碗。器高が高く、体部は下半がやや張り出し鋭角気味に立ち上がる。口唇部は僅かに外反する。高台は強く外反しながら「ハ」の字状に開く。A類と異なる点は、高台と底部の厚さである。また、体部下半の張り出しは見られず、直線的な立ち上がりを持つものも見られる。

碗C 内黒土器。体部は下半が張り出し、丸みを持つ。口唇部は僅かに外反する。内面は黒色処理を施し、棒または篋状工具によって内面全体を研磨する。Ⅳ区10住-24を含め3個体があり、うち2個体はⅣ区10住から出土している。

碗D 内黒土器ではないが、内面に研磨痕を持つ碗。内面の研磨以外にも高台の形状が他の碗と異なり、直線的に下降し、断面形状は三角形に近い。Ⅱ区3住-5のみである。

碗E 小型の碗で、Ⅱ区8住-2とⅢ区2住-8の2個体のみである。全体的に丁寧なつくりで、高台は「ハ」の字状に開く。

(3) 須恵器鉢 轆轤で成・整形され、口径に対して器高の高い、高台の付かないものを鉢とした。底部切り離し技法は糸切り離し、体部外面は無調整、酸化焰焼成である。

鉢A Ⅳ区10住-9～15の7個体をA類とした。体部は丸みを帯びて上方へと立ち上がり、体部最大幅は上位に位置する。口縁部は外反する。Ⅳ区10号住居以外からは出土していない。

鉢B 口径と底径にほとんど差が無く、体部最大幅は中央に位置する。口縁部は外反する。Ⅳ区4住-1、Ⅴ区11住-1の2個体が出土している。

(4) 羽釜 A～Eまで5分類した。還元焰焼成の羽釜は見られず、全て酸化焰焼成である。分類の主軸としたのは口縁部、罎の特徴、器形、胴部外面の調整である。

羽釜A 胴部最大幅は上位に位置し、口縁部は内傾、口唇部は多くが僅かに外反する。罎の先端はやや上向きであり、丁寧につくられる。胴部外面の調整は、上半は轆轤目が明瞭に残り、下半のみ縦もしくは斜め方向の篋削りが施される。Ⅴ区6住-4を代表的な遺物とする。

羽釜B 胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は内傾するが、外反はしない。罎の先端は上向き、もしくは水平に付けられる。胴部外面の調整は、罎直下から縦もしくは斜め方向の篋削りが施される。罎直下には部分的に横方向の篋削りも施される。口縁部の長さにはばらつきが見られ、Ⅴ区8住-2のように短いものも見られる。Ⅱ区7住-3には口縁部外面にも横方向の篋削りが施される。Ⅳ区10住-37を代表とする。

羽釜C 胴部最大幅は上位もしくは中位に位置する。口縁部と罎は短い。罎の断面は三角形に近く、つくりは粗雑になる。胴部外面の調整は上位には轆轤目が明瞭に残り、中位から斜めもしくは横方向の篋削りが施される。Ⅳ区9住-2に代表される。

羽釜D 胴部最大幅は上位に位置する。口縁部は長く直線的で、僅かに内傾する。罎は断面三角形で短く、先端はほぼ水平である。胴部外面の調整は罎直下では横、以下では縦方向に篋削りが施される。全体的に残存状態が悪く、胴部下位まで残る個体は出土していない。Ⅳ区8住-3に代表される。

羽釜E 小型の羽釜。口縁部は長く、大きく内傾する。罎は短く、先端は上向きに付けられる。器高は通常の羽釜の半分ほどで、体部は大きく丸みを持つ。体部外面の調整は罎直下から縦、部分的に横方向の篋削りが施される。Ⅳ区10住-38のみ確認されている。

第7章 考察

(5) 土釜 A～Dまでの4つに分類した。土師質で成形に轆轤を用いない甕形の土器を土釜とした。分類の主軸としたのは、器形、口縁部の特徴、胴部外面の調整である。

土釜A 口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部に面取りがされ、端部を平坦に仕上げたものも見られる。胴部最大幅は上位もしくは中位に位置する。胴部外面は口縁部直下から縦もしくは斜め方向、下半からは横方向の篋削りが施される。万蔵寺廻り遺跡IV区10住-30を代表とする。

土釜B 口縁部は緩やかに「く」の字状に外反する。頸部の括れは弱く、口縁部の器壁が薄い。胴部外面には口縁部直下から胴部下端まで縦もしくは斜め方向の篋削りが施される。万蔵寺廻り遺跡V区8住-1と11住-4の2個体が認められる。

土釜C 口縁部は「く」の字状に外反する。胴部外面は縦もしくは斜め方向の篋削りが施される。万蔵寺廻り遺跡Ⅲ区1住-2に代表される。

土釜D 口縁部は非常に短く、僅かに外反、もしくは直立する。胴部最大幅は中位に位置し、胴部外面の調整は口縁部直下と胴部下半には横方向、胴部上位には縦方向の篋削りが施される。Ⅲ区3住-1を代表とする。

土釜E 口縁部がほぼ退化し、僅かに直立する。胴部最大幅は上位もしくは中位に位置する。胴部外面の調整は、上半に縦、下半に斜めか横方向の篋削りを施す。万蔵寺廻り遺跡IV区10住-33を代表とする。

(6) 足高高台皿 埴に近似するが、埴のように体部に深みはなく、坏Dに高台を付けたような器形を持つ。器壁に厚みがあり、小振りで酸化焰焼成。万蔵寺廻り遺跡IV区10住-27のみ確認されている。

(7) 須恵器壺 軟質で酸化焰焼成。胴部最大幅は中位に位置する。残存状態が悪く全形は捉えにくい。口縁部は肥厚し、外反する。万蔵寺廻り遺跡IV区7住-2のみ確認されている。

(8) 甕 甕は全体的に残存状態が著しく悪い。全形を捉えられる資料は無く、口縁部か底部の形態によって甕と判断した。甕には大きく二形態が見られ、土師器に見られる甕に類似した形態と、羽釜形があ

る。万蔵寺廻り遺跡において確認された甕はほぼ羽釜形で、IV区10住-36を代表とする。羽釜形甕の口縁部は、羽釜に比べて長く直立し、罅には穿孔が見られるものもある。羽釜形甕底部はIV区11住-10のみ確認されており、裾部は大きく外反する。甕に似た形態はIV区1住-7のみである。最大幅は上位に位置し、口縁部は短く、強く外反する。胴部外面には縦もしくは斜め方向の篋削りを施す。

3. 土器編年と時期区分

以上、住居から出土した主要な土器の分類を試みたが、出土量も多く形態変化の捉え易い須恵器環の変化を編年の基軸とした。これに埴、鉢、羽釜、土釜など共伴関係にある土器の変化も加え、編年図を作成している。集落の画期は大きく3期に区分した。

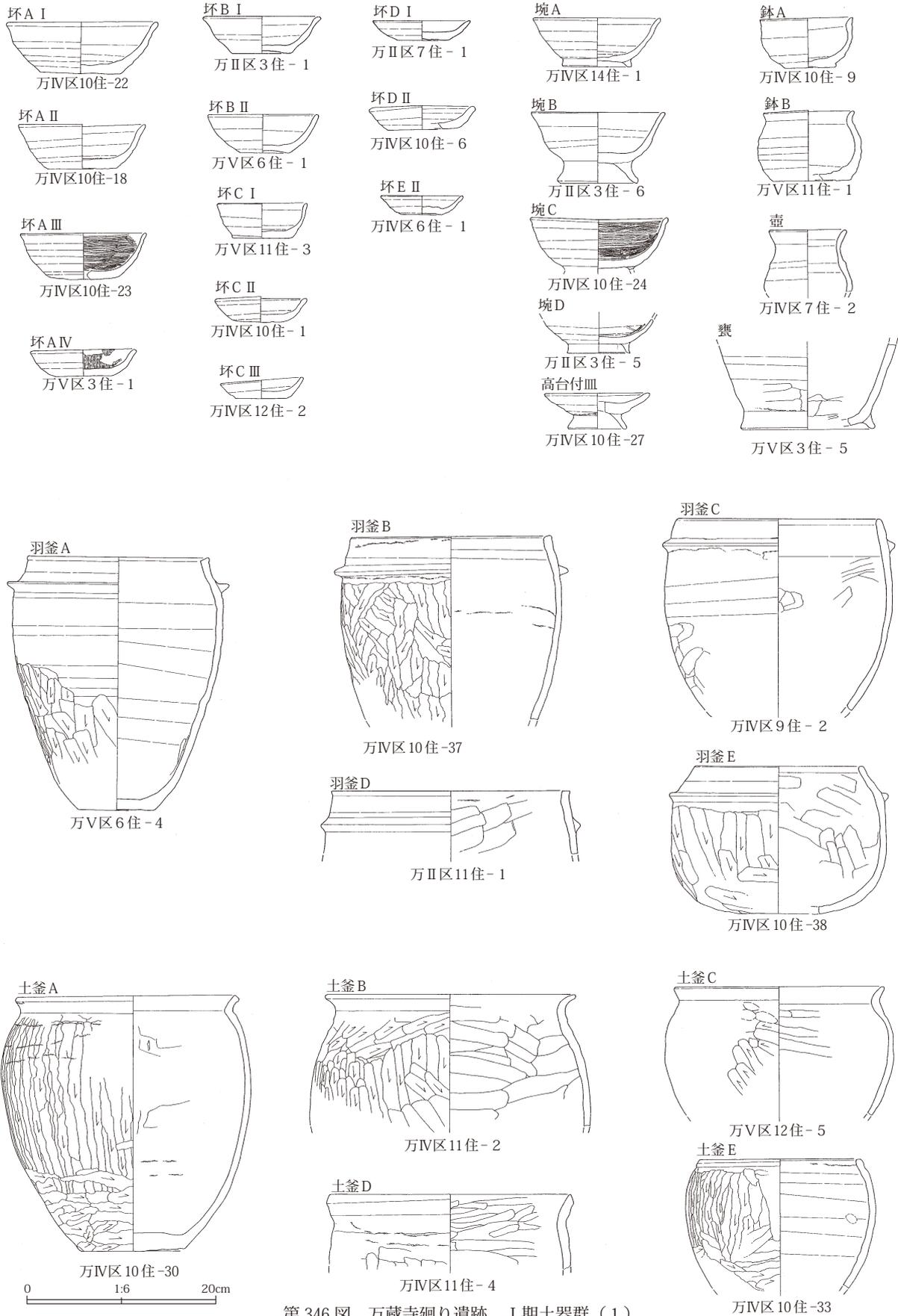
I期 竪穴住居は23棟が確認されている。確認された集落の半数以上を占めており、出土遺物も多い。器種構成は、須恵器環、埴、鉢、甕、羽釜、甕、灰釉陶器の埴、皿、長頸壺、土師質土器の土釜からなる。また、わずかに須恵器壺、甕、足高高台皿が見られる。I期における竪穴住居の中には土器が良好な状態で残っているものが何棟もあり、中でもIV区10号住居、13号住居は供膳、煮沸ともに土器の残存状態が良く、器種構成を把握しやすい。集落内で出土した供膳具としての土器は、いずれも軟質で酸化焰焼成である。須恵器環で多く使われているのはAⅡ、B、CⅡであり、坏AとBが共伴することは無い。I期の住居では坏AとC・D、もしくは坏BとC・Dのように、一般的な大きさの坏と小型坏という組み合わせが見取れる。このことはI期中で坏AとBの間に時間的変遷を想定させる。坏に加え、個体数は少ないが埴A～E類がある。埴はI期以降は極端に減少し、足高高台埴はI期でほぼ消滅する。坏と埴には内黒土器もあり、坏AⅢと埴Dがこれに当たる。坏AⅢは2個体、埴Dは3個体しか出土しておらず、この内坏AⅢ1個体と埴D2個体がIV区10号住居からの出土となる。埴と近似する器形として足高高台皿があり、内黒埴と共に10号住居から出土している。鉢については、A類は3期を通じてIV区

10号住居における7個体しか出土しておらず、10号住居以外で集落を構成する遺構からは破片すら見つからない。鉢BはI期ではV区11住の1個体のみである。鉢Bは胴部に張りがあり、小型の甕胴部をさらに縮めたような器形である。これに対し鉢Aは、丸みのある体部と鋭く外傾する口唇部に特徴がある。坏Bを小口径化し体部を深くしたような器形で、鉢AとBを対比すると、鉢Aは供膳具としての特徴が強く現れているように思われる。周辺遺跡からの出土例も無く、一般的な住居における供膳具とは、若干異なる土器の可能性もある。供膳具に対し、煮沸具としての土器には羽釜、甑、土釜の3形態が見られる。全て酸化焰焼成であり、I期の住居における煮沸具の出土状況を見ると、両煮沸具は同時期に併用されていたと思われる。I期における羽釜はAからCが使われており、特にAが最も多く使われている。羽釜AはII期以降の住居からは見つからない。羽釜EはIV区10号住居から1個体のみ見ついているが、10号住居では土釜と大小の羽釜、甑が用いられていたことになり、平安時代中期の住居における煮沸具の組み合わせの一例として注目される。使われる羽釜はAとBがほとんどである。口唇部の処理や整形に回転轆轤を用いるなど丁寧に作られた羽釜Aに対し、Bは鏝直下から篋削りによって整形する。口唇部の処理や鏝の貼付についてもやや粗雑化の傾向が見られる。共伴関係では羽釜A、Bとも同じ住居で使われている例もあり、時期差はあまり見られない。I期で使われる土師質の土釜には様々な形態があるようで、分類したA～Eまで全ての形態が使われている。最も多く使われるのは大型で「く」の字状の口縁部を持つ土釜Aである。土釜はAからEへと口縁部が短く、外反が無くなる傾向があり、土釜Eでは口縁部がほぼ退化してしまっている。I期の中で土釜の時間的な形態変化がある可能性もあるが、IV区10号住居では土釜AとB、Eが共伴しており、形態変化にそれほど時期差があるとは考えにくい。羽釜においても小型羽釜があるように、I期で使われた煮沸具には、用途により使い分けや組み合

わせがあったと考えられる。I期の煮沸具には羽釜、土釜の他に甑が見ついている。甑は出土個体数が少なく、全体的に残存状態が悪いため全形を捉えることが難しい。I期で使われている甑は多くは羽釜形のもので、内傾する羽釜の口縁部に対し、甑の口縁部は直立する。IV区10号住居からは羽釜形甑の他、羽釜形ではない従来から存在する土師質の甑が1個体出土しており、煮沸具においても複数の種類が同時期に使われていたことが考えられる。甑と組合わさる煮沸具は羽釜、土釜のどちらか、あるいは両方と思われる。以上の土器に加え、I期には灰釉陶器が23棟中9棟から計8個体見ついている。これらを前橋文化財研究所の三浦京子氏に観察をお願いしたところ、全て虎溪山1号窯式期であるとの御教示を頂いた。土坑から出土したものも加えると24個体だが、いずれも虎溪山1号窯式期である。

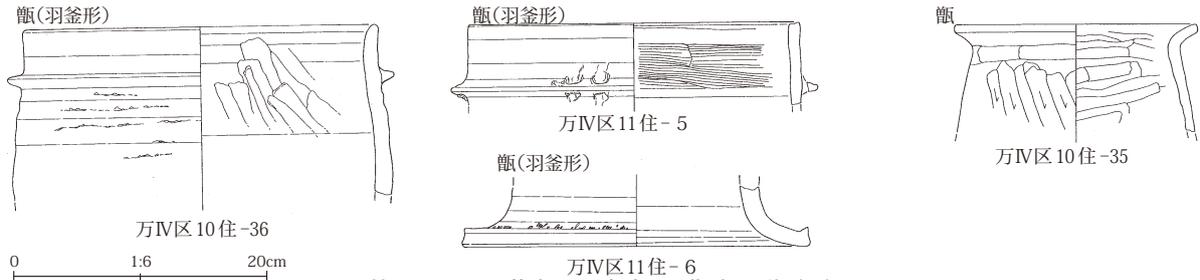
II期 竪穴住居8棟が確認されている。II期で使われている土器の器種構成は、須恵器坏、碗、皿、鉢、羽釜、土釜、灰釉陶器碗、皿である。須恵器坏は坏A、B、D～Fが使われている。II期の住居はI期と比較して遺物の残存状態が悪い。I期において供膳具の主体を占めていた須恵器坏A、Bは破片しか残っていない。これに対し、小型坏の割合が高くなる傾向が見られる。小型坏はI期においても使われていたが、II期では形態に若干変化が見られ、より器高が低く皿に近い形態となる坏Eが見られる。須恵器碗はIV区1号住居から碗B IIが出土している。足高高台碗としたが、I期に見られる足高高台碗よりも体部が短い特徴が見られる。須恵器鉢はBの破片のみが確認されている。煮沸具はI期と同様に羽釜、甑と土釜が使われている。羽釜Aが見られなくなり、主に鏝の突出が弱いB、C、Dが使われる。甑は1個体のみ確認されているが羽釜形ではなく、古墳時代に見られる土師器甑に似た器形が使われている。土釜の残存状態は悪いが、土釜Aが使われており、時間的な形態変化はほとんど見られない。II期においても虎溪山1号窯式期の灰釉陶器碗、皿が共伴するが、須恵器坏、羽釜、甑に若干の形態変化が見られる点や、IV区2号住居に主軸方位の異なる竈が2

第1節 万蔵寺廻り遺跡出土土器の編年的位置づけ



第346図 万蔵寺廻り遺跡 I期土器群(1)

第7章 考察



第347図 万蔵寺廻り遺跡 I期土器群(2)

基作られている点などから、I期とは若干の時期差があると考えたい。

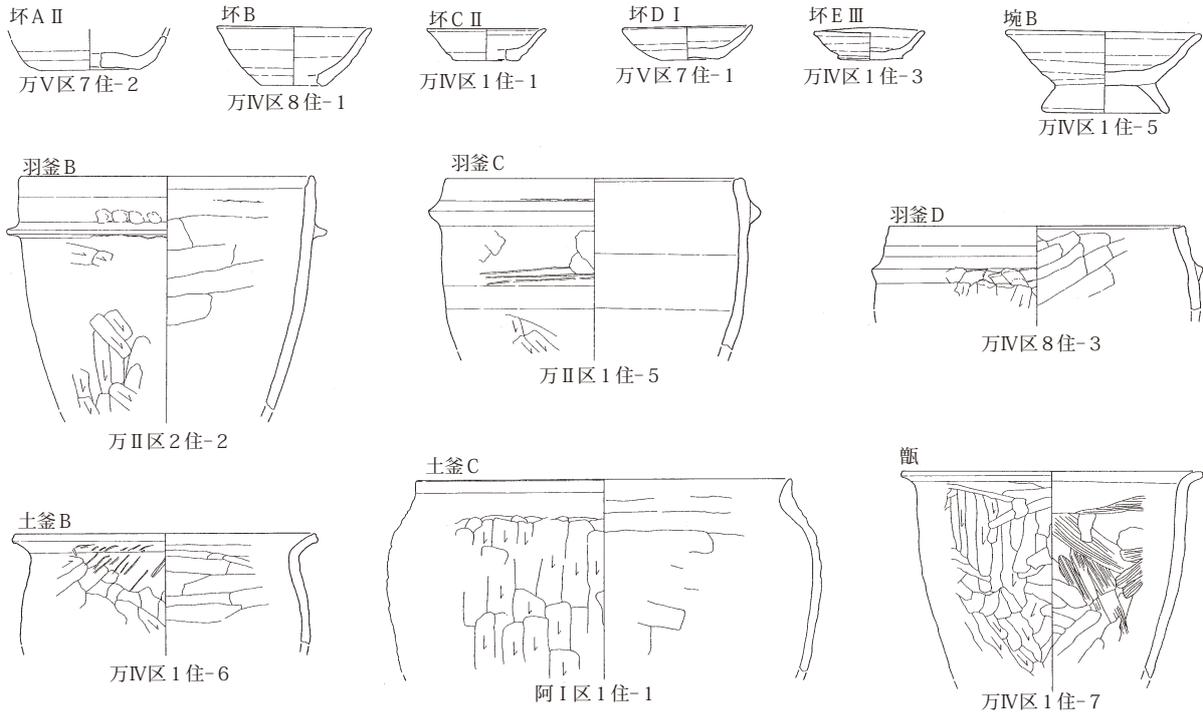
Ⅲ期 竪穴住居10棟が確認されている。Ⅲ期の器種構成は、須恵器坏、埴、羽釜、土釜からなる。須恵器坏は今まで供膳具の主体であった坏A、Bが完全に姿を消し、坏E、Fを主体とする小型坏のみとなっている。Ⅲ期の住居では、全体的に出土遺物の残存状態が悪く、出土量も少ない傾向がある。こうした中でⅢ区2号住居における小型坏20個体の出土は特筆されるが、2号住居は遺構自体の残存状態が悪く、多数の土坑に切られていることから住居に伴う遺物であるか疑問がある。もっとも、住居に伴わない遺物だとしても他の住居で使われている坏E I、F I・IIが主体を占めているため、同時期に使われていた遺物と判断した。須恵器埴はI期、II期で使われた足高台埴は姿を消し、小型坏に高台を付けたような形態の小型埴が見られる。II区8号住居とⅢ区2号住居における1個体の計2個体が確認されているが、坏と同様にⅢ期における供膳具の小型化を示している。羽釜はB、C、Dが使われている。甗は見つからないが、共伴する土釜はB、Cが使われている。Ⅲ期では灰釉陶器は見つからない。

4. 各期の年代観

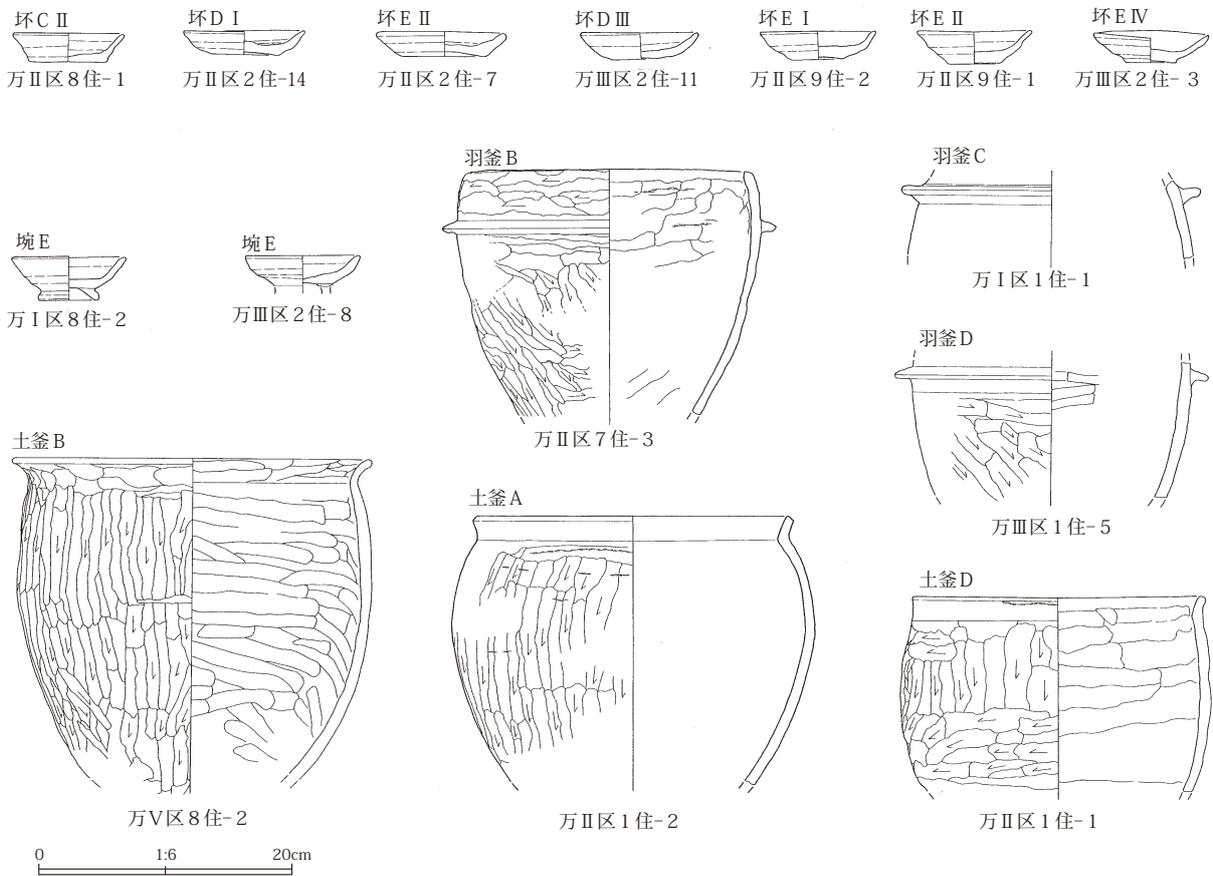
万蔵寺廻り遺跡からは直接実年代を決定する資料が見つからない。竪穴住居から見つかった灰釉陶器が年代決定の数少ない手がかりといえるが、生産地と消費地で年代が一致するとは限らない。そのため決定的資料とはなり得ないが、灰釉陶器の年代(註1)と周辺遺跡で出土した資料とを比較検討することで年代推定を試みたい。本遺跡の集落で使わ

れていた供膳具は、全て軟質で酸化焰焼成の須恵器である(註2)。供膳具を代表する須恵器坏A、BとC～Eの小型坏、埴であるが、坏A、BはII期でほぼ消滅する。これは足高台埴である埴A、Bと鉢についても同様である。煮沸具では羽釜AがI期で盛んに使われ、II期では完全に姿を消す。本遺跡の灰釉陶器も同様で、II期以降には見られないことから坏A、Bの変遷とほぼ一致すると考えられる。I期、II期の住居に共伴する虎溪山1号窯式期の灰釉陶器は10世紀後半に位置づけられている(註3)。虎溪山1号窯式期の前段階である大原2号窯式期や、次段階に当たる丸石2号窯式期の製品は全く見られず、万蔵寺廻り遺跡の集落に灰釉陶器が搬入されたのは虎溪山1号窯式期からであり、11世紀代になってからは丸石2号窯式期の製品は搬入されなかったと考えられる。また、本遺跡の南西約3kmの地点に位置する清里・陣場遺跡で平安時代中期の集落が見つかっており、その中で集落を6期に区分している(註4)。この内、第4～6期土器群中に、本遺跡で使われている土器の類似資料が見られる。6区分中第4期が10世紀後半に位置づけられているが、本遺跡IV区10号住居で出土した坏A、足高台埴、羽釜Aが見られる。また、共伴する灰釉陶器も虎溪山1号窯式期で本遺跡と一致している。以上、灰釉陶器の年代と周辺遺跡における対比から、万蔵寺廻り遺跡I期は10世紀後半に位置づけられる。II期にも虎溪山1号窯式期の灰釉陶器が使われているが、共伴する土器に変化が見られ、I期の特質である坏A、Bが急速に減少している。小型坏の割合が増加する点、羽釜Aが消滅する点などの特質も見られ、I期とは若干の時間差があると仮定し、10世紀後半から11世紀にかけてと位置づけたい。Ⅲ期では

第1節 万蔵寺廻り遺跡出土土器の編年の位置づけ

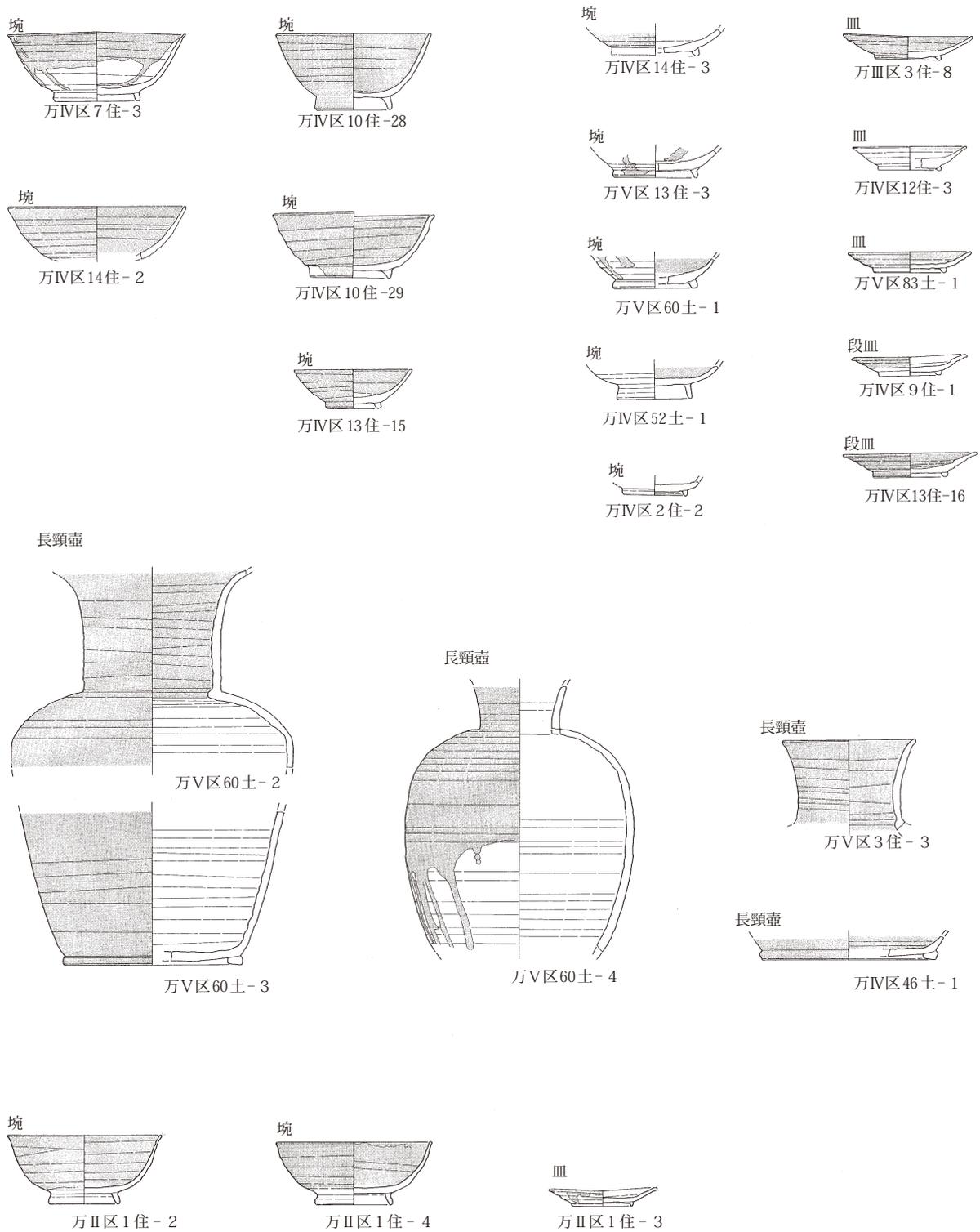


第348図 万蔵寺廻り遺跡 II期土器群



第349図 万蔵寺廻り遺跡 III期土器群

第7章 考察



0 1:6 20cm

第350図 万蔵寺廻り遺跡 出土灰釉陶器

灰釉陶器、大型の坏、碗、鉢、羽釜Aは完全に姿を消し、供膳具としての土器は坏、碗ともに小型化が進み、ほぼ小型坏で占められる。灰釉陶器が共伴しないため周辺遺跡の類似資料を参考にすると、万蔵寺廻り遺跡の北約3kmに位置する有馬条里遺跡では、灰釉陶器と周辺遺跡との比較から、本遺跡の須恵器坏C、Eに相当する小型坏を11世紀中葉に位置づけている(註5)。また、前記の清里・陣場遺跡では、万蔵寺廻り遺跡における小型坏C、Eが11世紀中頃の第6期土器群に位置づけられている。万蔵寺廻り遺跡から南に約1kmの地点に位置する沼南遺跡(註6)では、10世紀前半から11世紀にかけての集落が見つかっている。沼南遺跡における土器の器種構成と変遷を見ると、供膳具は須恵器坏、碗が10世紀後半で減少し11世紀代では小型坏が供膳具の主体となる。煮沸具については本遺跡と同様、羽釜、甑、土釜が併用されているが、10世紀後半から11世紀にかけて羽釜が急速に減少する。土釜については万蔵寺廻り遺跡と同様、様々な形態が見られるが10世紀後半になってから僅かに出現し、11世紀代になってから増加するという特質が見られる。11世紀代に供膳具の主体となる小型坏は、本遺跡では須恵器坏C～Eに当たる。万蔵寺廻り遺跡の周辺に分布する3遺跡の類似資料を見ると、Ⅲ期の供膳具である小型坏D、Eは周辺遺跡においても11世紀代になってから増加し、反対に従来の須恵器坏は10世紀後半の段階でほぼ消滅している。灰釉陶器の集落への搬入量が激減する点も共通しており、Ⅰ期とⅡ期に連続する年代区分として、Ⅲ期は11世紀前半に位置づけ、11世紀後半には至らないと考えられる。

4. おわりに

以上をまとめると、万蔵寺廻り遺跡の土器編年に基づく年代観は、Ⅰ期を10世紀後半、Ⅱ期を10世紀後半～11世紀前半、Ⅲ期を11世紀前半から中葉までと位置づけている。Ⅰ期以降の年代区分に関しては、出土資料も乏しく周辺遺跡の類似資料に頼らざるを得ず、結果としてやや不明確な点があったように思う。特に11世紀以降の遺跡は事例が少なく、遺

物についても今後の資料充実が期待される。遺跡全体の出土土器を概観すると、Ⅰ期まで小型坏と共伴していた従来の須恵器坏が、Ⅲ期以降に消滅してしまうのが示唆的であった。Ⅱ、Ⅲ期は全体的に遺物の残存状態が悪く、Ⅰ期と比較すれば住居の器種構成は貧弱なものである。土器の減少、須恵器坏の消滅と小型坏の増加、灰釉陶器の衰退といったⅢ期の特質は、周辺遺跡における平安時代中期集落の様相と、ある程度共通するものである。供膳具の器種構成の変質は、須恵器坏などの土器製品から木製品を主体とする供膳具へを端的に示しているなどの可能性が考えられる。未だ事例の少ない現時点よりも今後資料の増加を待ってから総体的に判断するべきだろう。最後に本稿作成にあたり、坂口一氏、洞口正史氏、三浦京子氏に多大なる御教示、御鞭撻を得た。末尾ながら記して感謝申し上げます。

註

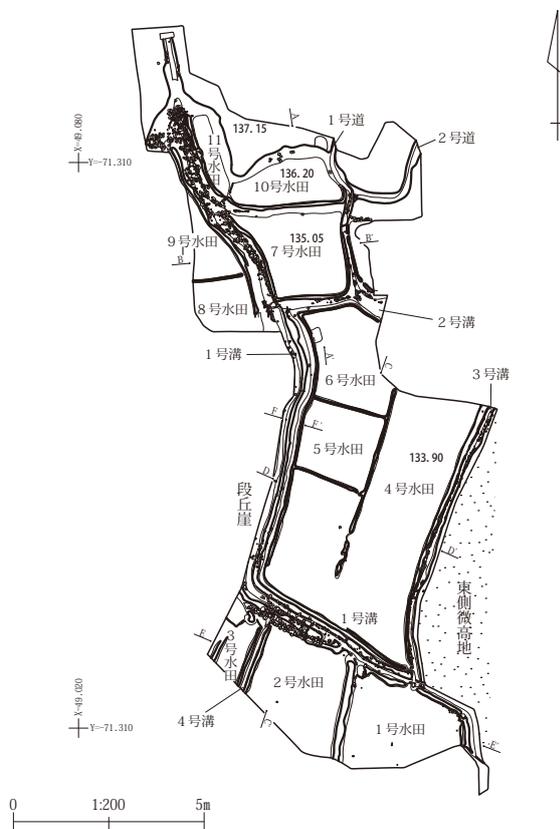
- (1) 前述のように三浦京子氏に御教示頂いた。
- (2) 轆轤成形で軟質胎土、酸化焙焼による土師質土器と呼ばれる器種は、系譜上は須恵器であると判断し、須恵器に統一した。本遺跡で出土した須恵器坏、碗の殆どが、これに該当する。
- (3) 檜崎彰一『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会 1981
- (4) 中沢悟「出土土器の分類と編年」『清里・陣場遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (5) 綿貫綾子「有馬条里遺跡沖田地区における総括と考察」『有馬条里遺跡沖田地区』群馬県渋川市教育委員会教育課 1983
- (6) 松村和男「平安時代の集落変遷について」『沼南遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999

参考文献

1. 坂口一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』第24号 群馬県史編さん委員会 198
2. 齊藤孝正「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会 1981
3. 齊藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』第211号 1982
4. 三浦京子「群馬県における平安時代後期の土器様相-灰釉陶器を中心にして-」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
5. 綿貫邦男・神谷佳明・桜岡正信「群馬県における灰釉陶器の様相について(1)」『研究紀要』9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992

第2節 阿久津遺跡Ⅰ区に見られる利根川の堤防について

本報告書に報告されている遺跡群は、利根川によって形成された低地部から最下位の段丘面にかけて立地している。このうち低地部では近世以来、水田耕作を中心とした生業が営まれてきたのであるが、天明3（1783）年の旧暦7月8日に発生した「浅間焼け」と称される浅間山の大噴火に伴って利根川支流の吾妻（あがつま）川に発生した泥流が噴火から4時間程経過した正午近くに利根本流沿いの本遺跡にまで達している。このうち段丘面上には万蔵寺遺跡Ⅵ区の土層断面観察によって到達しなかったことは確認されている（225頁参照）ものの、低地部の耕作面は全くこれに被覆されて姿を消してしまっていたのである。この泥流層の層厚は大半の区域にあっては1.5～2.0mを測るものであったが、最南端の阿久津遺跡Ⅰ区（以下「阿久津Ⅰ区」とする）は層厚4m程を測るものであった。



第351図 阿久津遺跡Ⅰ区概要

この層厚の違いは阿久津Ⅰ区の過半が北側の阿久津遺跡Ⅱ区以北の区域により一段低くなっていたためであったが、見方を変えれば、このことは阿久津Ⅰ区が浅間焼け発生時の利根川の高さにより近い標高にあり、より近い位置にあったことを示すものである。

阿久津Ⅰ区の遺構の詳細は先に報告されている（171～181頁）ので繰り返さないが、北側の阿久津遺跡Ⅱ区寄りには本遺跡群の他の低地部と同様の直近の段丘面に対して近似した高さに在り、2段の棚田状の水田面を経て、南側の低位面に降りていた。その低位面の東西両側は共に南流する水路によって画され、更にこの水路から分岐する中小の水路群が敷設されるなどして、その間に水田面が並んでいた。

さて、東西を画する水路のうち西側の水路－1号溝は現在の用水の前身と見られる水路で、高位部では裏込を伴わない高さ80cm程の石組で壁面を保護しており、低位水田部の西側は比高1.2mの段丘崖になっていた。

一方、東側の水路（3号溝）は一部に低い石組を伴う小規模の水路で、その東側は後世の攪乱もあって全体を確認できた訳ではないが、水田面に対して比高差1メートル以下の高まりとなっていた。此の一角に耕作の痕跡は認められず、礫が散布する地表面（以下「東側微高地」と呼ぶ）となっていた（図351）。東側微高地は地山に砂を含んで泥流の剥離、表出が難しかったため断ずることはできないが、植物の生育した痕跡はあまり認められなかったものの、東側微高地の地表面は今日の利根川の河原のうち流れから若干離れた箇所似た状態にあり、恐らく多少の草の生える荒地のような状態であったと想定される。また植物の痕跡があまり見られなかったことから除草の施されていた可能性も考慮される。また東側微高地は利根川と水田地との関係からすれば、両者を画する低い堤防様の土地であってもと認識されるのである。

近世の治水の普請には甲州流、関東流（伊奈流）、紀州流の3種があったとされる。このうち甲州流は

様々な種類の堤防の組み合わせによって流水の制御を重視したもの、関東流は低い堤防で通常の洪水は制御するが、大洪水の時は堤防裏の遊水池に水を越えさせて更なる洪水を抑えるというもので、紀州流は18世紀前半の享保年間に大成した工法で、河川を直線的にし、堅固な堤防とこれを保護する護岸や水制工で流水を制御するというものであった(1)。このうち利根川ではその名が示すように関東流(伊奈流)が多用されている。遊水池と見られる構造は群馬県庁(前橋城)北の群ドーム付近や佐波郡玉村町東部の矢場川付近に見られ、前者は明治18年測図の陸軍迅速図を見ると堤防の一部も記載されているのが確認される。

さて地元住民の話によると、阿久津遺跡の東側は戦後直ぐまでは調査区の東側まで耕地が伸びていたそうであるが、昭和22(1947)年のカスリン台風で崩落したと言うことである。そしてカスリン台風による被害が発生するまで阿久津 I 区周辺の利根川寄りには「霞堤」があった、或いは呼ばれていたということである。陸軍迅速図(図352)を見ると本遺跡付近の利根川は岸寄りに岸に並走する南北方向の堤防が設けられ、その東を主流が流れ、その西側には主流に平行する分流が流されていて、地元で伝わる「霞堤」は、本来不連続にして遊水池に過剰な流水を流す堤防である霞堤と構造は異なるが、この堤防を指した可能性がある。

このように明治年間には堤防の制御による治水を整えているのであるが、これは近世まで遡るものと思われる。霞堤は甲州流に用いられた堤防の一種であるが、上述の堤防が直線的な施工が施されていることから紀州流の影響による施工と考えられる。一方、利根川の治水は前橋城の本丸の一部崩落によって18世紀半ばには転封してきた松平氏が川越えに本拠を移さざるを得ない状態であったように、近世中期までは整っていなかった。しかし近世後期にはこれを制御するに至っているため、吉岡町漆原付近に在った上記堤防は近世後期までは遡れるものと思慮される。それでは浅間焼けの発生した天明3年まで



第352図 明治時代の本遺跡付近の利根川流路
『第一軍管地方二万分一迅速測図原図覆刻版』
「群馬県上野国西群馬軍金子駅」使用

に施工されていたものなのであろうか。

ここで考慮されるのが、阿久津 I 区の東側微高地である。上述のように東側微高地は他の区域より一段低くなっている、即ち利根川の水位により近い阿久津 I 区低位部の東側に在って耕作地ではなく、且つ耕作地、即ち水田面に対してその高さも低い。このような位置と形状から東側堤防は関東流の施工による堤防であった、或いはその機能を有していた自然地形であり、阿久津遺跡低位部の水田は堤防裏の湧水としての機能も持っていたものと思慮されるのである。従って天明3年当時に於いて阿久津遺跡付近の治水普請は関東流によっており、その後、浅間焼け野出入り祐被害を経て、改めて紀州流の施工により治水が成ったものと判断されるのである。或いは「霞堤」の呼称はこの時の記憶として残されていた可能性も考えられるのである。

阿久津 I 区の水田地は上記のように遊水池となっていたものと思慮されるのであるが、この遊水池は浅間焼けの圧倒的な量の泥流の前には無力であり、本来想定されていた東或いは南側からの泥流流入に対応する間もなく、稲の状態から本遺跡群各調査区を流下した泥流が北側から流れ込むように阿久津 I 区を押し包んだのである。この泥流到来によって埋没した阿久津 I 区東側微高地、即ち堤防は、浅間焼けの3年後に発生した天明6(1786)年の洪水発生時には姿もなく全く用をなさなかったのである。

第3節 阿久津遺跡Ⅵ区の土坑群について

221頁に述べたように阿久津遺跡Ⅵ区では水田面に連続する長さ3m、幅2m、深さ1m程を測る大型の土坑8基が発見された。これらの土坑は調査時点より、浅間焼け後の掘削ではないかという指摘をたびたび受けたのであるが、土坑群上位の堆積層はAs-A泥流層土であった。つまり同位置の泥流除去は建設機械によって行い当該区域の掘削時には私自身が立ち会って観察したのであるが、掘削時に認められたのは表土を除いて上位から下位に至るまで常にプライマリーな泥流層であり、後世の掘削を示す状態は全く認められなかったのである。尤も当該区域の浅間焼けに伴う泥流は1.8mの厚さが有って且つ硬質で発掘調査時の10cm以下の掘削、除去作業ですら困難な状態であったのであり、人力での掘削はかなり困難な作業であることを付記しておきたい。また各土坑共にAs-A泥流層土で被覆されていて新旧関係は存在しなかった。特に最も川上に当たる1号土坑の上流側壁面下には径の大きな礫が溜まるように堆積していた。これは泥流が大小の礫や岩を巻き込んで流下し、重い礫や岩が泥流底面を転がるように流下し、最初に到達した掘り下げ箇所落ちて堆積した結果生み出されたものであり、土坑群が浅間焼け発生時に口を開けていた証左となるものである。

また222頁の水田詳細図5に示したように7号溝中にも長さ215cm、幅112cm、深さ24cmを測る土坑状の掘り込みが縦列に掘削されているのが確認されている（1～8号土坑と区別するため、以下「7号溝中の土坑」と記す）。これらの土坑も掘削時の観察から泥流到達時には開口していたものである。

以上のように本土坑群、或いは7号溝中の土坑は浅間焼け当時開口した状態にあり、且つ本土坑群各土坑に新旧関係は認められなかったのである。即ちこうした土坑を掘削している最中に少なくとも隣接区域では水田耕作を行っているのであるが、これらは水田耕作に全く無用のものであり、深い掘り込みは

寧ろ水田耕作には邪魔となるものであり、当然のこと乍収穫量の減少を意味するものである。また7号溝中の土坑も水路にとって何の意味もなく、不要の掘削である。それでは何故大型土坑を掘削し、或いは溝中に土坑を掘削し且つ放置してあったのであろうか。

1～8号土坑の掘削形態は利根郡みなかみ町（旧月夜野町）の藪田東遺跡や伊勢崎市の波志江西宿遺跡の粘土採掘坑を想起させるものである。両遺跡の粘土採掘坑はその名が示すように須恵器作製の粘土を採掘する目的で掘削されたと判断されるものである。阿久津遺跡Ⅵ区1号土坑には鋤先痕が残されており、同遺跡同区1～8号土坑が形態的に土壌採取目的で掘削されたものと判断されるものであるが、その土壌は細かいシルト質であって陶器作製には全く使用できない。

そこで想起されるのが左官、土間築造、竈（へっつい）の造作等への土壌としての使用である。本土坑群の土壌は細かいシルト質で粘性には優れないが、排水性はある程度見られる。しかし左官では現在でも結合材や上塗り仕上げ材としての土壌の使用が知られるが、粘土が主体である。竈への使用も粘質土が中心となる。土間も同様である。従ってこれらの使用には向いていないように思われるのである。従って現時点でその使用方法を明らかにすることはできないのであるが、粒径が細かいことを考慮すれば、左官作業に於いて糊を接合剤として珪藻土の代替品として使用された可能性が考えられるのではないかと思うのである。

一方7号溝中の土坑の掘削は何を目的としているのであろうか。土壌の獲得という点では小規模であり、あまり効果的ではない。水路の中に掘削していることから何か特定の目的が在ったようにも思われるが、現状に於いて掘削意図を特定することができなかった。

第4節 天明3年以前の耕作について

本遺跡群低地部の遺構は天明3（1783）年旧暦7月8日に埋没した耕作面である。それ以前の状態については、既に273頁に記し248・250図に図示したように、桑原田遺跡Ⅲ区（以下「桑原田Ⅲ区」とする）に於いて例外的に確認した。桑原田遺跡Ⅲ区1号溝は桑原田遺跡Ⅱ区2号溝、同Ⅰ区2号溝、阿久津遺跡Ⅴ区3号溝、同Ⅳ区1号溝、Ⅰ区1号溝へと続くと判断される本遺跡群の主要水路で、現在の用水路の前身となるものである。この水路は所々で石組みを伴うものであるが、桑原田Ⅲ区に於いて天明3年の浅間焼けの時点では石組を伴う水路であったことが確認された。石組みの水路は砂礫（250図－17層）で埋没し、後に壁が土壌（250図－16層）で覆われ石組を伴わない水路として作り直され、更に砂礫（250図－14層）で埋没している。特に当初の石組みを伴う水路については小規模の土砂の流入であれば復旧されていたものと思慮されることから、埋没過程で復旧困難な状態に陥ったことが考慮されるのである。この状態を生んだ原因としては元禄12（1699）年の大暴風雨と寛保2（1742）年の大水害が考えられる。特に後者は「寛保洪水記録」によると「榛名山ノ麓ヨリ前橋、伊勢崎、福島番所在〃所〃押流シ、烏、神流川、利根、荒川一ツニ成リテ流レタリ」とあり（2）、その流勢の凄さが窺われるのであるが、恐らくはこれによって17層が流入し、その被害の大きさから石組みを伴う状態は放棄されたものと思慮されるのである。

また石組みを伴う時期の水田面についてはやはり同洪水での土砂の流入が有り、実質的に耕土のかさ上げが為されることになり、248図に示した土層断面観察によって18・20層上面である可能性が考慮される。

尚、この水田が開削された時期は特定できなかったが、近世段階、少なくとも寛保2（1742）年以前にはこれらの耕地は整備されており、天明3年の浅間

焼けで埋没するまでこれらの耕作区画が踏襲されていたのである。

註

- (1) 前橋市史編さん委員会「前橋市史 第3巻」1975 970・971頁
- (2) 原典は日本土木学会「明治以前日本土木史」1936ということであるが、本書ではこれを引用した広桃用水史編さん委員会「広桃用水」（1994）9頁に拠った。

参考文献

- 高橋昌己「左官」2005 井上書院
山田幸一「ものと人間の文化史45壁」1981 法政大学出版